まんじ

No.127

2013.2.1

まんじ第百二十七号　目次

老人会　会長のつぶやき（一）……伊治　哲…4
関東管領始末記⑨　好機到来……千坂精一…13
短歌　三十首……曽根竣作…21
生まれた罪―悲運のジャガタラお春―……太田精一…25
「茶道史」勉強ノート（三）……忠内正之…31
抜群におもしろい「竹島ゲーム」……新井　宏…42
短歌　行雲流水（三十七）……石黒修身…51
アメリカ雑記帳（三）……三戸岡道夫…54
先見の明（三）……堀内永人…68
火薬学会の良き友……吉田忠雄…76
漢詩　潮騒録（七十一）《漢詩の流れ60》……鯨　游海…78
目耕録（その十）……山本鎭雄…82
イドと超自我の谷間で（七）―ある女の不思議な生涯―……鍋屋次郎…90
松浦武四郎の〝一畳敷〟の書斎……漆原直子…100
第四話　桜ヶ池のお櫃納め……石野茂子…105
詩　二つの川……石野茂子…110
「房総東往還道を歩く」余滴（続）……山田嘉久…112
性と化粧（七）……鈴木　守…121
がっきい様……横山正義…125
内田の国の物語り②……横山正義…128
陰翳の美学（その十二）……外山　知…153
口紅（その九）……池莉　原作…172
透明な時間（十一）……宅見勝弘…206
「鉄のペリカン」……宅見勝弘…209
還暦からの考古学（二十六）……中山喬央…213
追伸　―サウダージーより―　その十……松下壽男…232
日本近代文学点描　その十一……松下壽男…233
編集後記……編集　子…235
表　紙……田寺怜葦…235

老人会　会長のつぶやき（一）

―新米老人会長Aと親友Qとの会話―

伊治　哲

Q・・「おい！　オマエ！　最近〝老人会〟なんていうレベルの低い仕事をやっているんだって？」

A・・「なにイ！　何を言いたいのか知らんが、レベルの低い仕事といったな？　それじゃあ聞くけど、今、こうしてキミが出席しているこの集まりは何の集まりなんだ！　れっきとした〝老人の集まり〟じゃないか！　この会もレベルが低いというのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Q・・「そう言われればたしかにこの会も年寄りばかりの会だなあ。すまん、悪かった。前言は取り消すよ・・」

A・・「いや、別に怒って言ったわけじゃない。本当のことを言うと、オレも初めの頃は『老』の字が恥かしくて、『老人会の仕事をやっている』なんて他人には言えなかった。なんとなくコンプレックスをもっていたんだなあ。なにも報酬をもらっているわけではない、無給、無償の社会奉仕だというのに。それだけにキミの一言がオレへの侮辱に聞こえたんだ。それで思わずカッとなって・・」

Q・・「すまん、すまん、決してオマエを侮蔑したわけじゃない。謝るよ。だけど、なんで一銭の得にもならん老人会の仕事などに頭を突っ込んだのだ？　この歳になったら、誰でものんびり老後を楽しみたいと思うのに・・」

A・・「正直に言うと、自分で進んで老人クラブ活動に入ったわけじゃない。五年ほど前、何人かの近隣の住人から、地元の老人クラブ会長をやってくれないかと強く懇請されたのがきっかけだ。考えてみると、今の土地に住み着いてから四十年、人生のうちで一番長い年月をここで暮らしてきた。その間、近所の人たちから有形無形に大変世話になってきた。いつかは、なんらかの形で、その恩返しをしたいと思っていた。今の年齢を考えれば決して早くはない。このように考えて敢えて要請を受けることにしたのだ」

Q・・「なるほどなあ。リタイアしてから、学校のクラス会や同窓会、そしてこの会のような会社のＯＢ会など、昔なつかしい顔ぶれと久々に会って久闊を叙するのは、気心もわかっていて実に楽しいものだ。だけど、終の棲家とはいえ、近所の人たちとはなんとなく馴染めないなあ。現役のころ、そっちの方は女房に任せ切りだったからなあ。たまに会っても、ありきたりの挨拶をするくらいで、まあ言ってみれば〝隣りは何をする人ぞ〟という感じだよ」

A・・「最初はオレもそう思ったよ。ましてオレの住んでいる団地は、出来てからやっと四〇年、あちこちから移り住んできた寄せ集めの住人ばかりだ。小さい頃から幼稚園も小学校も一緒に育った〝竹馬の友〟なんて一人もいやしない。だから、いまさら一堂に会して、さあ何かをやりましょうといっても、さてどう反応してくれるのか、全く想像もつかなかったよ」

Q・・「老人会という団体があることはどこかで聞いたことはあるが、そんな身近にあるものだとは知らなかった。いったいどんな集団なんだ？　おおよそのイメージを教えてくれよ」

A・・「オレが会長を務めている老人会から話すのが一番手っ取り早いな。ウチの老人会は『梶山長生会』という名前だ。会員は現在六九名、そのうち男一九名、女は五〇名で、女性が圧倒的多数を占めている。夫婦で入っている会員もいるから、世帯数では五五世帯だ。

自治会、町内会ごとに一つの老人会をつくっているが、自主的な組織だから入会に強制力はない。ところでオレが所属する梶山自治会は約三〇〇世帯、約八〇〇人だが、六五歳以上の高齢者人口比率が全国平均並みの二三％とすると、四割弱しか入会していないことになる。前に言ったこの土地の生い立ちから、他の自治会とくらべて、住民に共同体意識が低いからかもしれない。

次に、会員資格は原則として六〇歳以上が対象だが、ウチの場合、最高齢九五歳、最低年齢は六五歳で、ほとんどは七〇歳から八五歳の間に集中している。平均年齢は約七六歳だが、誰でも年々歳をとっていくのだから、平均年齢も毎年確実に上がっていくよ。

なんとかして会員を増やそうと懸命の努力をしているのだが、入会者、特に六〇歳台の、言ってみれば〝若手高齢者〟がなかなか興味を示してくれない。それが、我々の最大の悩みなんだ。とりわけ、これから戦後生れの団塊の世代が続々と高齢者に仲間入りしてく

るというのに、残念ながら今のところ彼らが入会する気配はほとんどみられない。キミが言うように、老人クラブの存在が社会的にほとんど認知されていない、逆にいうと個々の老人クラブが、彼らを惹きつけるだけの魅力に乏しいということかもしれないね。

キミも心あるなら、今からでも、地元の老人会に入って活動してほしいなあ」

Q・・「入会して活動しろ、といったって、そもそも老人会が何をやっているのか、どんな活動をしているのか、全く見当もつかないんだから、考えようがないなあ」

A・・「もっともだ。概略を説明しよう。

先に言ったように、オレが会長をしている老人会は、『梶山長生会』だが、ウチの会の具体的な活動から話をしていこう。

毎月の行事は、月一回の「定例会」、「自治会館・街路・歩道橋の清掃」など奉仕活動、月四回のスポーツ「グラウンド・ゴルフ」などがある。それに年三～四回の「いちご狩りやぶどう狩りを楽しむ日帰りバス旅行」、年末年始の「忘年会」「新年会」などが恒例の年中行事になっている。

最初に言った月例の「定例会」がクラブを纏める総合的な集まりだが、出席者は大体二〇から二五名、全体の三割くらい、それも女性が大半で、その上殆どが常連で占められている。なにをやっても、同じような顔ぶれが揃い、よほど上手く、そしてねばり強く誘いをかけないと、新顔は参加しない。これは「清掃」「スポーツ」「旅行」などその他の行事でも同じ傾向で、リーダーとしては頭の痛いところだ」

Q・・「せっかく会員になっておいて何故参加しないのかねえ？」

A・・「二、三年毎に、クラブの運営について『アンケート調査』をやり、会員の反応を探っているが、アンケート結果にも、なんというか、日本人の特性が出ているような気がして、エッ？と思ったり、そこまで言ってもらってありがたいなと思ったり、複雑な印象をもつね。例えば昨年秋に行ったアンケートでは、こんな回答があった。

○ Xさんと一緒なら参加するが、Xさんが病気で行かないから私も・・

○ 参加したいが、持病で体力に自信がない。万一、他の人に迷惑をかけるようなことになっては申し訳ないから・・

○ 共に行動できないのは残念だが、毎月のクラブ会報を隅々まで読んで、会員の動静がひと目で分り、クラブの存在を身近に感じている。心配ご無用に・・

○ 高齢のため参加はできないが、会員であることによって地域の同年代の人と繋がっていることに安心

し、内心、私の心の支えになっている・・

まあ、こんな状態だ。多くの人が高齢でなにか病気をもっている。そのうえ、この土地は、山を切り開いて造成した住宅地のために起伏が大きく、歳をとると歩くことさえ難渋する土地柄だから、仕方がない面もあるのだ。

それと、こんな土地で毎日の買い物にも苦労するくらいなら、いっそ平地のマンションへ移住しようと、最近は年に一、二軒は転居していく。その跡地を業者が何分割かしてエンピツのような小型の家を建て、入居してくるのは若い夫婦家族ばかり。若い世代が増えてくるのは嬉しいが、一方、会員増加が捗らない一因でもあるのだ」

Q・・「歳をとるということは大変なことなんだなあ。このOB会でも話題の大半は自分や家族の健康問題だものなあ。お互いに身につまされるねえ。ところで、クラブの会報を読んでいるという声があると聞いたが、それはどういうものなんだ？」

A・・「ああ、そのことか。それじゃ、会報の内容について話そう。

五年前に、オレが会長に就いたときから新しく始めた試みなんだ。会員への連絡事項や依頼事項などがあるので、言った言わないの食い違いが生じないよう、会報で全会員に配るようにした。それは、定例会に出席できなかった人、あるいは出席できない人にも平等に知ってもらい、気持だけでも、できるだけ共同して会の活動に参加してほしいという願いも込めているつもりだ。

さてその会報の内容だが、先ず前月定例会以後一か月間の行事や活動の経過報告を書き、次に今後一ヶ月の行事日程を記述する。興味を惹くようにできるだけ分りやすく、面白おかしくジョークも交えた文章にする。

次に、例えば『健康長寿シリーズ』と銘打った心や体の健康法、熱中症対策、地震などへの防災対策、交通事故を防ぐ注意事項、振り込め詐欺への防犯対策などを特集する。そのほか、地震保険やヒートショックの話など、その折々の話題をひと口メモ風に綴って、注意を喚起するようにしている。

最後に、童謡・唱歌の合唱だ。『故郷』『荒城の月』や『早春譜』『仰げば尊し』など若い頃に歌った想い出の愛唱歌の歌詞を配り、全員で大きい声をあげて大合唱する。歌っているうちに、懐かしさのあまり、うっすらと目に涙する人さえでるほどだ。また、歌詞の意味、由来や作詞者、作曲者の紹介まで説明すると、幼いころ、意味も分らずに歌いこんでいた唱歌が、やっと納得してよみがえってくるのも楽しいようだ。

もっとも、毎月季節に合った歌曲を選んで、その故事来歴を書き込み、プリントするのに苦心するが、皆が喜ぶ姿を見ると、苦労の汗も吹っ飛ぶよ。最近になって、ハーモニカを習って合唱の伴奏をかってでる人がでてきた。〝たかがハーモニカ、されどハーモニカ〟なんだなあ。小さな伴奏でも、あるかないかで歌唱効果は全く違う。こういう雰囲気がでてくることを、実は心待ちにしていたのだ。

また、会報とは別に、会員の中からお願いをして、例えば、超高齢者の『戦争体験談』や『【稲村の火】の朗読』『正月料理のレシピ』など、会員の得意分野の話をしてもらうこともある。『勉強になります』と好評だよ。

大分細かい話になったが、以上を資料にして、ワープロでA四判用紙四ページが一杯になる。過去五年間、毎月続けてきたから、もう慣れっこになったが、最初の頃はかなり負担だったなあ。まあ、いってみれば、オレなりの流儀を続けてきたということかなあ」

Q・・「オマエ、黙っているけど、エライことをやっているんだなあ。ちょっと敬意を表するよ。それでなのお手当もないのか？　それに、クラブの経費はどうやって賄っているんだ？」

A・・「やっと、少し評価してもらえたようだなあ。ありがとう。だけど、手当をもらうようなお金はどこにもないよ。

それじゃあ、お金の収支について話そう。ここだけの話として密かに聞いてくれ。

梶山長生会約七〇名の年間予算は総額約二〇万円だ。その内訳は、会員の年会費一人一千円だから、全体で約七万円の会費収入、市からは市老連を通じて助成金が約七万円、自治会からは約五万円の補助金が出る。その他雑収入を合計して二〇万円でやりくりするわけだ。そのうち七割は活動費、行事費に、一割が会議費、事務費に、あとの二割が市・区・地区老連など上部団体への分担金と、会員逝去に伴う敬弔金に支出される。

このように一杯いっぱいで運用しているから、クラブ運営の役割を分担してもらっている各幹事に、たとえ僅かでも交通費や電話代くらいは出したいと思ってもままならない状態だ。

オレ自身は『奉仕というのは、時間と労力を無償で提供すること。しかし金銭については、たとえ少額であっても私的な負担を強いるべきではない』と考えているんだが、現実はその最低限の補償さえカバーできていないことを、実は申し訳なく思っているんだ。まあ、奉仕とは自己犠牲なんだね」

Q・・「窮状お察しするよ。ご苦労さんなことだ。ところで、今、『幹事』云々と言ったなあ。話を元に戻すようだが、クラブの組織はどうなっているんだ？」

A・・「そうか、基本的なことが後回しになったなあ。

当たりまえのことだが、会には会則がある。これもオレの会長就任後、新しく作り直して全員の承認を得た。自慢じゃないが七〇人の老人会にしてはもったいないような立派な会則だよ。

その中に幹事の項がある。列記すると、会長・副会長の下に、総務・会計・レクリエーション・スポーツの各幹事と会計監査などの役員を置いている。また、地域を六班に分けて夫々に班長を置き、班内の連絡調整に当たらせている。さらに、女性委員、友愛活動員、美化委員の活動責任者を置いている。

なお先に、定例会で活動経過や今後の行事予定を説明していると言ったが、その場合、できるだけ担当の幹事、責任者に発言させて、責任感ややりがいを持たせるようにしている。そうすることで、将来の幹事後継者を育てることも密かに意図しているんだ。

というのは、『この歳になって今さら他人の世話役をさせられるのは真っ平ご免だ』と誰でも思うはずだ。しかも、なんの見返りもないんだから。だけど、この歳になったからこそ、誰もが嫌がる仕事を自らかってでて、皆が喜んでくれることを肌身で感じることが、自らの余生の生きがいを掴むことにつながると思うんだよ。一人でも多くの人がそのような経験をして成長してくれることが、老人会の活性化はもちろん、高齢者全体の幸福に寄与できると考えているからなんだ」

Q・・「難しい話は後にして、さしあたっては、スポーツとかレクリエーションに興味があるなあ。どんな雰囲気で楽しんでいるのだ？」

A・・「レクリエーションの最大の催しは日帰りバス旅行だ。よくしたもので、高齢者のニーズを先取りしたような老人クラブ専門の旅行会社があって、色々な趣向の旅行案内を提案してくる。しかも、住居地のすぐ近くまでバスを配車してくれるので、遠くの出発地まで足を運ぶ必要はないし、バスにさえ乗れば、眠っていようが飲み食いしていようが、知らぬ間に目的地へ辿り着くという便利さが受けているよ。途中、観光や名所旧跡を見学したり、昼食のあと、さくらんぼや桃狩り、ぶどうや梨狩りなど季節の果物の食べ放題だ。お土産までついて大体一人五千円前後だから、年寄りにはもってこいの骨休めといえる。

もっとも、年寄りは〝毎日が日曜日〟だから骨休みじゃないんだな。新調したきれいな洋服に身を飾ってのお出かけが、ハレの日の楽しみなんだ。どんなに朝早くてもいそいそとバスに乗り込んでくるよ。バスが動き出すと早速持参のお菓子を分け合ったり、カラオ

ケで自慢の喉を競ったり、バスの中はまるでお祭り騒ぎだ。おまけに、行ったところで手にもてないほどのお土産をいっぱい買い込むんだ。帰宅後、子供や孫たち、隣り近所の人たちに分けて、旅行の土産話に興じるんだろうね」

Q・・「なんだか、こっちまでうきうきしてくるようだ。スポーツでグラウンド・ゴルフとか言っていたね。まさかわれわれがやっているあのゴルフじゃないだろうね？」

A・・「キミが得意な、広いグリーンで白球を追うあのゴルフではないよ。パターゴルフの距離と面積を大きくしたようなものだ。

高齢者のスポーツといえば、昔からゲートボールが定番だが、最近はグラウンド・ゴルフが全盛になった。ウチのクラブは、二年ほど前から始めたばかり。なかなか場所がとれなかったが、ようやく広い公園と小学校の運動場を借りることができて、毎月四回プレーしている。ボールをクラブで打ち、ホールポストへホールインするまでの打数を競うゲームで、ルールは簡単だが、微妙な心理の動きでスコアも変るから夢中になるんだ。滅多にでないが、たまにホールインワンを達成したときなど、飛び上がって喜んでいるよ。

九〇歳になるお婆さんがすっかりはまり込んで、少々の雨や風でもものともせずに皆勤だよ。逆に他の年下の会員を叱咤激励しているよ。

旅行にしても、スポーツにしても、とにかく夢中になる人は、歳をとっても心身ともに元気だね。認知症なんてどこ吹く風、といった様子だ」

Q・・「話をちょっと変えよう。地元のクラブの様子はおぼろげながらイメージできた。しかし、大々のクラブが単独で個々バラバラに活動しているのじゃないだろうね。当然上部組織があると思うが、その辺のところを話してくれないか。それとも、自分のクラブのことで精いっぱいで、そこまで詳しくは知らないというのだったらそれでもいいよ」

A・・「馬鹿にするなよ。なんぼ新米でも大方のところは分っているよ。

じゃあ、まずオレが住んでいる横浜市鶴見区から話そう。鶴見区には、自治会・町内会ごとに一一八の『単位老人クラブ』がある。オレの梶山長生会もその一つだ。その一一八クラブの上部団体として『鶴見区老人クラブ連合会』（略称『鶴見区老連』）を組織している。会員は合計で約一万人になる。一単位クラブ当り会員数約八〇人強という計算になる。最大で一三〇人、最小五〇人というところかな。

さらに、区老連の上部組織は『横浜市老人クラブ連合会』（略称『横浜市老連』）で、一八区老連、一七七

六単位クラブ、約一二万人の会員を擁している。その上に、全国組織として『全国老人クラブ連合会』（略称『全老連』）があり、二〇一〇年現在、一一七千単位クラブ、会員数で七一八万人を統合している。

因みに、全老連は昨年創立五〇周年を迎え、去る一〇月四日、東京の日比谷公会堂で記念式典を開き、天皇、皇后両陛下をお迎えしてお祝辞をいただいたそうだ。『両陛下ともに老人クラブの仲間だ。高齢者の福祉のために一層努力するように』という励ましのお言葉だったと聞いている」

Q・・「へえっ！　驚いた！　個別のクラブは少人数でも集まれば大集団になるのだね。その大きな組織の運営は？　またどんな活動をやっているの？」

A・・「鶴見区老連では、単位クラブが学区ごとに集まって『地区老連』をつくり、その代表一八人が区老連の理事に選任され、区老連の理事会を構成する。その中から選挙で区老連の会長・副会長・会計・監事を選ぶ。副会長三人が夫々総務部会、文厚部会、スポーツ部会の長として、部門別執行責任者を兼ねる。会社でいえば、会長が社長、副会長が専務、理事が取締役、会計が経理担当取締役、監事が監査役といったところだ。

毎月理事会を開き、区老連の運営や活動を審議し決定し執行する。もちろん、最高意思決定機関として、単位クラブ会長で構成する総会を年一回開催して、決算予算、活動方針等、重要事項に関する決議を行っている。

区老連の会長は、横浜市老連の評議員として意思決定に参画している。なお、昨年から横浜市老連は公益財団法人に認定され、その公益性が従来以上に重視されるようになった。法的には公益性のある社会的存在としての法人格が認められたということだ」

Q・・「活動の方はどうなんだ？」

A・・「区の老人クラブ連合会は結構活発に活動しているよ。主に単位クラブでは手に負えない広範囲で大掛かりな活動が中心だね。

例えば、スポーツでは、ゲートボール、ペタンク、グラウンド・ゴルフなどの区全体の競技大会や体力バランス測定などを定期的に実施している。各種競技で優勝すると、市老連の大会に出場するし、そこで優勝するとさらに全国ねんりんピックに出場できるんだ。だから、ウチの梶山長生会のように、グラウンド・ゴルフに一点集中して猛特訓するクラブもあるんだよ。

文化厚生活動では、映画会、クラシック・コンサートや、『シルバーフェスティバル』『カラオケ大会』というような高齢者自身がステージに立つ芸能大会、高齢者の書画・手芸作品展、美容や手芸の講座、健康問題を学ぶシニアライフ講座、囲碁・将棋大会などがあ

る。

これらスポーツや文化厚生活動の大半は、老人クラブ会員に限らず、非会員の一般高齢者にも門戸を開いていることをつけ加えておこう。

そうだ、少々お堅い学習活動もあるよ。知識・教養を身につけるシニア大学講座、そして老人クラブ活動の基本である『会員増強運動』や『友愛活動』『社会奉仕』などについての研修がそれだ。

このように、組織や活動はそれなりの機能を発揮しているが、いわゆる組織としての合意形成は未成熟であるといわざるをえない。なんといったって、〝老人の集まり〟なんだからね。その辺のところが最近になってようやく分ってきたんだ。機会があったら、またホンネの話をするよ」

Q・・「よく分ったよ。上部組織も結構手広く真面目にやっているんだなあ。じゃあ、オレも遅ればせながら、地元の老人会に入って、ひと肌ぬいでみるか、と言いたいところだが、もうちょっと得心のいかないところがあるなあ。

今のオマエの話を聞いて、老人クラブというものの輪郭はほぼ分った。が、オマエの話はちょっときれいごと過ぎるように思うね。世の中、そうたてまえどおり、理屈どおりにはいかないことが多いよね。いわんや年寄りの集まりにおいておや、だ。さっきからの話の中で、機会をみて、またホンネの話をしたいように聞こえたが、思うようにならないこともあるんじゃないのかな？

こういってはなんだが、お互い、自らの生命の限界に近づいている超高齢者なんだから、エゴの出やすい年齢でもあると思うんだよ。

また、ちょっと大きな視点からみると、国の財政危機や少子高齢化にからんで、社会保障の見直しを先送りできない時期にきていることもある。社会保障は高齢者に直接かかわる問題でもあるから気にかかるところだねえ。

オレより少しは近いところで現実の社会に接触しているオマエから、老人会という世界をとおして感じるホンネの話を聴かせてほしいものだ」

A・・「よくぞ言ってくれた。キミの慧眼に感服する。実は老人クラブ活動に携わって五年、ようやく、良い点、悪い点、優れた点、糺すべき点など、僅かだが組織の内幕が見えてきたように思う。今度会った折には〝内側からみた老人会〟という視点から話をしよう。次回は少し頭を整理して話せるように準備しておこう」

Q・・「今日はありがとう。次の機会を楽しみにしているよ」

つづく

関東管領始末記⑨

好機到来

千坂精一

一

足利尊氏が片腕とも恃む弟直義を毒殺したのは、わが身亡きあとの将軍義詮と鎌倉公方基氏の安泰を希っての親心からなのではあろうが、太古以来いつの世も、（両頭並び立たず）で権力争いの凄まじさは、頼朝・義経もそうであったようにたとえ兄弟と雖も例外ではなかったのである。

だから尊氏は、弟直義と庶子直冬を斃さなければせっかく築き上げた足利政権が不安でならなかったのだ。

この権力争いは政権内部においても留まるところを知らず、高師直が直義党の重臣上杉重能と畠山直宗を斃せば、直義が上杉能憲と畠山直泰に命じて高師直・師泰兄弟を斃し父の仇を討たせた。そしてその直義が兄尊氏に斃されてけりはついたものの弱体化は否めなかった。

事実、幕府方が兄弟争いをしているあいだに、吉野朝方は勢力を盛り返して活発な行動を開始していた。

新田義貞の二男義興と三男義宗らが征夷大将軍宗良親王を奉じ八百の手勢で鎌倉を攻めてきた。直義の怪死で混乱していた幕府方は体勢を立て直すため尊氏を庇って石濱へ退いたので、新田軍は難なく鎌倉へ入った。

戦力を整えた幕府軍は、武藏國人見原（府中市）、金井原（小金井市）で義興軍を破ったので、義興、北條時行らは鎌倉を捨てて三浦半島の先端まで退いた。

宗良親王を奉じた義宗らもおなじ武藏國の小手指原（所沢市）、高麗原（日高市）、笛吹峠（比企・入間郡境）などで敗れて越後國の上杉憲顕を頼って敗走した。

かくして尊氏は、ひと月足らずで鎌倉を回復した。

いっぽう京では、北畠親房の四男顕能が楠木正儀ら

と京へ攻め入ったので、義詮はいったん近江國へ退いた。
顯能は京に残された光厳・光明・崇光三上皇と花園院の皇子直仁親王を八幡に迎え、そのあと東條へ移した。
まもなく、義詮の幕府軍が盛り返してきたので顯能は八幡に退いて宇治（宇治市）、山崎（京都府乙訓郡大山崎町）あたりで合戦になったが、八幡が陥落して四條隆資らが戦死したので後村上帝は賀名生へ戻っていった。
吉野朝側は、東條に匿った持明院統の上皇、親王も賀名生へ移したので、期せずして両統は一堂に会した。
このことによって都に帝がいないという事態になってしまったので、京を回復した義詮は持明院統の再興を図り光厳院の第二皇子弥仁親王を擁立して親王宣下もないまま践祚させて四代後光厳帝とした。
九州で少弐氏の庇護を受けていた尊氏の庶子直冬は、長門國豊田城で幕府軍に敗れ、吉野朝に帰順した。
明けて文和二年・正平八年（一三五三）五月二十日、出没を繰り返していた北條時行がついに追捕され、鎌倉龍ノ口（藤沢市片瀬）で斬首された。
建武二年（一三三五）七月、庇護されていた諏訪頼重に担がれて越中國に潜伏の同族名越時兼と連繋して諸国の与党を糾合蹶起してから十八年、二十四歳であった。
北條の残党を潰滅した尊氏は、直義の死後鎌倉に残った同族畠山國清を関東管領に据えて基氏を補佐させた。
同時に尊氏は、直義派を徹底排除してその勢力を一掃し、関東を束ねる組織としての鎌倉府を自立させた。
さらに尊氏は公方基氏を武藏國入間川（埼玉県狭山市）に在陣させて、越後國の上杉憲顯の許に潜んでいる新田義貞の遺児義興、義宗兄弟に備えさせた。
こうして、尊氏が着々と関東の地固めをしているあいだに、またまた京では吉野朝軍が動き出していた。
天下統一のため東奔西走することは已むなく、手薄の留守を狙われるのはこれまた致し方ないことであった。
京に迫った吉野朝軍との衝突を回避するため、義詮は後光厳帝を延暦寺に遷座させておいて自身は近江國坂本に逃れ、さらに帝を奉じて美濃國小島に逃れた。
吉野朝軍に京を奪取された報らせを受けた尊氏は直ちに軍勢を率いて西上し、美濃國に入ったところで義詮軍と合流すると後光厳帝を奉じてすぐに京へ攻め入った。
こんどは吉野朝軍が支え切れずに京を捨て、楠木正儀が河内國へ、山名時氏が但馬國（兵庫県北部）へ退いたので、尊氏・義詮父子は後光厳帝を奉じて入京した。
このころ、宗良親王を奉じた新田義宗らも幕府軍に小國澤城（長岡市小国町）を陥とされて下越後へ退いた。
翌文和三年・正平九年（一三五四）三月、吉野朝方は光厳、光明、崇光院を河内國金剛寺に移した。
翌月、後醍醐先帝以来吉野朝を支えてきた北畠親房が六十二歳で歿したので中心を喪った家臣団は動揺した。
山名時氏はすぐさま石見國（島根県西部）あたりを

流離っていた直冬を総大将に迎えて結束を固めた。
北畠親房の訃報を受けて沈滞していた下越後の新田義宗らは、尊氏の庶子直冬が吉野朝側に寝返ったことに勢いづいて、加治城（新発田市）などを果敢に攻めた。
さらに足利直冬を担いだ桃井直常らは京を攻めて、後光厳帝を奉じた尊氏を近江國（滋賀県）に逐った。
そして、桃井直常ら吉野朝軍が入京するとつづいて山名時氏らが後村上帝から尊氏・義詮討伐の宣旨を受けて総追捕使となった足利直冬を奉じて入京してきた。
こうして吉野朝軍が京を完全占拠したかにみえたのだが、幕府軍の勢威は決して衰退したのではなかった。
いったん攝津國（兵庫県東部・大阪府北部）へ退いていた義詮軍が神南（高槻市）で吉野朝軍を破った勢いで京へ攻め込み奪還すると後光厳帝を御所に迎えた。
いっぽう越後で逼塞していた上杉憲顯の嫡男憲將が挙兵して幕府方の風間長頼を破ると、信濃國高井郡（長野県北東部）に侵入して迎え撃つ幕府軍を破った。
翌年、幕府が奉戴している持明院統の光厳、光明、崇光院と花園院の皇子直仁親王が賀名生の奥の行在所から京に戻った。光厳院はすでに出家して法名勝光智となっていたが、還京後光明院もあとを追って出家した。
吉野朝の大覚寺統後村上帝のほうは京に還れぬまま河内國（大阪府東部）の金剛寺から觀心寺に移された。
その翌年、延文三年・正平十三年（一三五八）四月三十日尊氏は悪性腫瘍で世を去った。五十四歳であった。
いまだ一天二君の決着ならず、無念だったであろう。
遺体は衣笠山麓の等持院（京都市北区）に葬られた。
葬礼は天龍寺龍山和尚、南禅寺平田和尚以下の高僧がつとめ、後光厳帝から《従一位左大臣》を追贈された。
これで両統対立の主役北畠親房と足利尊氏が二人とも混乱の結末をつけぬまま世を去ってしまったのである。
八月十一日、下野國鑁阿寺（栃木県足利市）において尊氏百日忌の曼荼羅供法会が執りおこなわれた。
その二箇月後の十月十日、関東を転戦していた吉野朝方の新田義興が鎌倉へ進攻の途中、関東管領畠山國清の被官竹澤右京亮に謀られて武藏國矢口渡で同船した江戸遠江守高良に舟底に孔をあけられて進退谷まり、自刃して果てた。二十八歳であった。
この話は明和七年（一七七〇）に平賀源内が福内鬼外の筆名で『神霊矢口渡』という戯曲に書いたことで有名になった。現在も歌舞伎でたびたび上演されている。
ところでこの多摩川の矢口渡しは東京に二箇所ある。
ひとつは稲城市矢野口で、ＪＲ南武線矢野口駅近くの多摩川原橋袂にあった。
もうひとつは大田区東矢口一丁目で、東急線矢口渡駅近くの多摩川河川敷にあって近くに新田義興の霊を祀った新田神社があり、社殿の後ろの円丘は義興の墓だといわれていて、大田区説のほうが有力になっている。

二

尊氏の百日忌供養をおえた四箇月後の十二月八日に、嫡男義詮が二十九歳で征夷大将軍になった。

一天二君をいただくという両統対立の乱世がつづいたまま、幕府は二代将軍の新しい時代を迎えた。

義詮は、自分が将軍の座に就いてはじめて鎌倉公方の弟基氏の存在が気になってきた。

父尊氏が将軍のときは、自分もそうであったようにおなじ子として基氏も素直に従えたであろう。

だが、将軍が父ではなく兄となった場合、父のときとおなじようになんの蟠りもなく従属できるであろうか。

義詮はそんなことに思いを巡らせているうちに、いつかそれが弟基氏に対する疑心暗鬼に陥っていった。

基氏への不信をうっかり側近に漏らしたことが、やがて尾鰭がついて鎌倉にまで伝わってしまった。

おどろいた基氏は兄の疑念を晴らすために大軍を率いて上洛し、幕府軍に協力して忠誠を尽くそうと考えた。

基氏の無念の思いに同情した管領畠山國清は、自ら軍勢を率いて上洛し将軍の心の曇りを晴らすことにした。

國清は、このとき強引に周辺諸国の武将たちを動員し、武蔵。伊豆、駿河、三河、遠江など二十万の大軍団を率いて上洛し、将軍義詮に二心なきことを誓うと幕府軍の一翼を担い先鋒隊となっておおいに活躍した。

國清はまず金剛寺の行宮に大攻勢をかけて焼き払ったのをはじめ、紀伊國（和歌山県）まで侵攻して吉野朝方の有田、湯浅、石垣（有田郡）の各城を陥とした。

そのころ吉野朝に〈将軍の宮〉と称ばれる人物がいた。赤松則村が吉野朝側に寝返ったとき奉じた護良親王の皇子で、父が征夷大将軍だったのでそう称ばれていた。

その後則村が幕府側に降ったので皇子は囚われ幽閉されたが、隙をみて河内國に逃れ後村上帝から将軍宣下を受けたが征夷大将軍は実現せず吉野の奥に潜んでいた。

吉野朝方の不利が伝えられたとき皇子は兵を集めて出陣したが、途中で変心して賀名生を焼打ち幕府方に通じたが援軍なく、吉野朝軍に攻められて奈良へ逃れた。

このとき、細川清氏らの幕府軍は楠木正儀らの赤坂城を攻略したので、正儀は逃れて金剛山の奥へ潜んだ。

将軍足利義詮が凱旋してひとまず静謐をとり戻したかにみえたが、こんどは内部抗争が持ち上がった。

東国の大軍を率いて戦果をあげた関東管領畠山國清と伊勢守護仁木義長との対立が激化してきたのである。

こんどの吉野朝軍との戦闘を傍観的態度で眺めていた仁木義長を批難して、敵に気脈を通じていると断定した國清が同志を糾合して義長を討とうと立ち上がったのだ。

これを察知した義長は、本拠の伊豆國に退くと身の安全を図って吉野朝方に降ったので細川清氏も同調した。

この幕府方の動揺を衝いて吉野朝軍が京へ攻めてきたので、義詮はやむなく後光巌帝を奉じていったん近江国

に逃れたが、幕府軍がひと月足らずで京を奪還した。

幕府方の諸将は國清のために動乱が再発したと責め立てたので、面目を失った國清は京に居辛くなり、早々に鎌倉へ戻ろうとした途中で仁木勢に行く手を阻まれて苦戦し、散々の体たらくであった。

鎌倉へ帰還した畠山國清は公方基氏から遠征の労を犒われ、将軍家に恃みにされた功を賞されたことで、仁木義長との軋轢で騒動を起こしたことは不問に付された。

だが、近隣諸国の武将たちのあいだでは國清が強引に動員したことに対する反感が燻ぶりつづけていた。

一年近く経ったころ、吉野朝攻めで犠牲を強いたことへの慰労はまったくないままひとり有頂天になりつづけている國清への不満が昂じてついに爆発した。

基氏は諸将の訴えに困惑して、ついに、

（諸将に叛かれれば東国は乱れ、公方も安泰ではない）

そう決断すると、國清を見限り罷免して追放した。

國清は鎌倉を出奔し、伊豆國修善寺に籠もった。

基氏は、波多野高道らに國清兄弟の追討を命じた。

國清らは囲まれて動けず、食糧も尽きたので討ち死にを覚悟したが、そこへ基氏からの使者がやってきて、

（前非を悔いて降服すれば助命する）

旨を伝えた。

國清は弟義深を基氏のいる箱根に差し向けたが、

（降服すれば赦す）

は國清を騙すための企みと知り、もう一人の弟義熙と相模國（神奈川県）藤澤の時宗道場へ逃げ込んだ。

義深も箱根でそれを知り時宗道場へ駆け込んできた。

その後、國清兄弟は苦労を重ねて京まで逃げ延びたが幕府を頼るわけにもいかず、奈良のあたりを彷徨していたが、生き延びるすべを失いついに窮死したという。

三

公方基氏が関東管領畠山國清を罷免追放してから一年あまりが経ったが、まだ管領は空席のままであった。

二十三歳に成人した基氏は東国の抑えに自信を持っていて補佐してくれる管領を必要としていなかった。

だが将軍義詮のほうは弟基氏を野放しにしておくことが不安で、誰を据えたらいいかあれこれ思案していた。

思い付いたのは越後國に逼塞中の上杉憲顕であった。

義詮は基氏を確り抑えてもらうには他人より一族のなかのかなり年長の者がいいと考えていたので、憲顕なら父尊氏の母方の従兄にあたる伯父だから最適であった。

父尊氏が憲顕の所領を没収して越後國へ蟄居を命じたのは、弟直義が副将軍として鎌倉に入り東国の抑えを担当していたときにその補佐役に就いたことから、兄弟相剋が起こって直義派になってしまったからである。

叔父直義の死後は一時吉野朝側について反抗したが、それも行き掛かり上やむを得ないことと諒承できた。

義詮は以前叔父直義と鎌倉にいたとき、高師冬とともに執事として仕えてくれていたので人柄は信用できた。（上杉憲顕なら基氏を監視し諫言してくれるであろう）義詮はようやく恃む人を探し出すことができた。

義詮はさっそくそのことを書簡にして鎌倉へ送った。基氏は幼少の頃、祖母清子に養育されたことがあって、そのとき祖母の甥憲顕に可愛がられた記憶があった。

義詮の意を体した基氏は、さっそく憲顕に書簡を送り、（将軍も希んでいることであり、関東管領就任を要請する）旨を伝えた。

憲顕は、直義を喪い逆賊の汚名を着せられる寒風に曝されて越後國に逐われたが、こんどは思いも掛けぬ暖風に押し戻されて脚光を浴びる舞台に立つことになった。

このとき義詮は憲顕に越後・上野守護を復活させた。

これを知った上野・越後守護の宇都宮氏綱と守護代芳賀禅可入道高名は守護交替に不満を抱き、いよいよ憲顕が鎌倉入りすると聴くとこれを阻止すべく兵を挙げた。

芳賀は上野國板鼻（安中市）に布陣して待ち伏せた。

この報らせを受けた公方基氏は、

「勝手に合戦を企てるとは奇怪至極。退治すべし」

そう熱り立つと、越後國を出立して上野國に入ってくる憲顕の軍勢を待たず、基氏みずから兵を率いて鎌倉を出陣した。

芳賀は宇都宮にいる嫡男伊賀守高貞と二男駿河守に八百騎を預けて武蔵國に向かわせ、苦林野（埼玉県入間郡毛呂山町苦林）で阻止すべく着陣した。

公方基氏は、たかがこの一地方豪族の討伐に鎌倉府の威信をかけて東に源氏の中小武士集団白旗一揆五千余騎、西に河越氏を中心にした平一揆三千を配し、みずからは三千余騎を率いて中央に布陣して芳賀軍を包囲した。

この大動員は関東諸豪族に対する見せしめであった。

戦端がひらかれると衆寡敵せずで、芳賀軍は抗戦するいとまもなく踏み潰されて宇都宮へ敗走していった。

その苦林野の北に隣接する鳩山町から東松山市に入ったところの岩殿に基氏館と称する〈館址〉がのこっていて、基氏が在陣したことを示している。

こうして芳賀一族掃討のあと鎌倉入りした上杉憲顕は、畠山國清失却二年後の貞治二年・正平十八年（一三六三）三月二十四日に空席だった関東管領に就任した。

憲顕の関東管領復帰は二代将軍義詮から鎌倉公方基氏の政務補佐役として必要不可欠の人物と認められての就任であるから、誰一人として異を唱える者はなかった。

上杉憲顕の再任を契機にして以後は、この将軍家外戚の上杉一族が関東管領を世襲して鎌倉府の実権を握り、権力者として居坐る長い歴史がはじまる。

四

関東管領に補任された憲顕は嫡男憲将が病弱だったため越後守護を兄憲藤の嫡男朝房に譲って鎌倉に赴いた。

こうして鎌倉へ移った憲顕一族はその後三家に分かれて腰を据え、おのおのその地名をとって名告りにした。

憲顕の管領家は、鎌倉の北方にある臨済宗圓学寺のあたりから南下して鶴岡八幡宮に近い臨済宗建長寺あたりまでの山ノ内に居住したので〈山内上杉〉といわれた。

圓学寺は、鎌倉幕府八代執権北條時宗が襲来した蒙古軍を撃退したあと彼我の戦没者の霊を弔うために開創した寺であり、建長寺のほうは時宗の父五代執権北條時頼が創建した寺で、この地に鎌倉五山のうち一、二位の大刹があったことから山ノ内となったのであろうか。

鎌倉期俗体武士肖像彫刻として重要文化財に指定されている木造上杉重房像がある（現在は鎌倉国宝館に寄託されている）紫陽花寺で知られる明月院は、始祖重房五代の孫憲方の開墓で、この下の明月院バス停からＪＲ横須賀線の踏切を渡ったあたりに山内上杉の屋敷があった。

憲顕の兄憲藤は、杉本寺下の滑川に架かる犬懸橋を渡ったさきの犬懸が谷に屋敷を構えたので〈犬懸上杉〉といわれた。橋の袂に〈上杉朝宗及氏憲邸址碑〉の標識があり、谷戸の奥にすすむと釈迦堂口切り通しに出る。

もう一人高師直に討たれた重能の養子能憲（憲顕二男）は、華の橋を渡ったさきの宅間寺（報國寺）のある宅間ヶ谷に住んだので〈宅間上杉〉といわれた。

ついでながら、その先の泉水橋バス停手前の虹の橋の向かいが御所ノ内といい、足利公房屋敷があった。

こうして関東管領上杉憲顕の一族は三家に分かれたが、じつはすこしあとになってもう一家入ってきた。

憲顕の父憲房の長兄重顕の系で、鎌倉幕府六代将軍に迎えられた宗尊親王に供奉して上杉重房が鎌倉入りしたとき嫡男重顕は伏見院蔵人だったので京に残っていた。

その子丹後守護朝定は信濃國で高師直と戦い討死した。

朝定のあとを継いだ従弟藤成の二男顕定が京を離れて一族の盤踞する鎌倉へ下向し、管領家の山ノ内に隣接する扇が谷に屋敷を構えたので〈扇谷上杉〉といわれた。

扇谷上杉家の家老太田資長（道灌）邸跡といわれる浄土宗英勝寺総門前のＪＲ横須賀線の踏切を渡った突き当たりに〈扇谷上杉管領屋敷跡〉の碑がある。

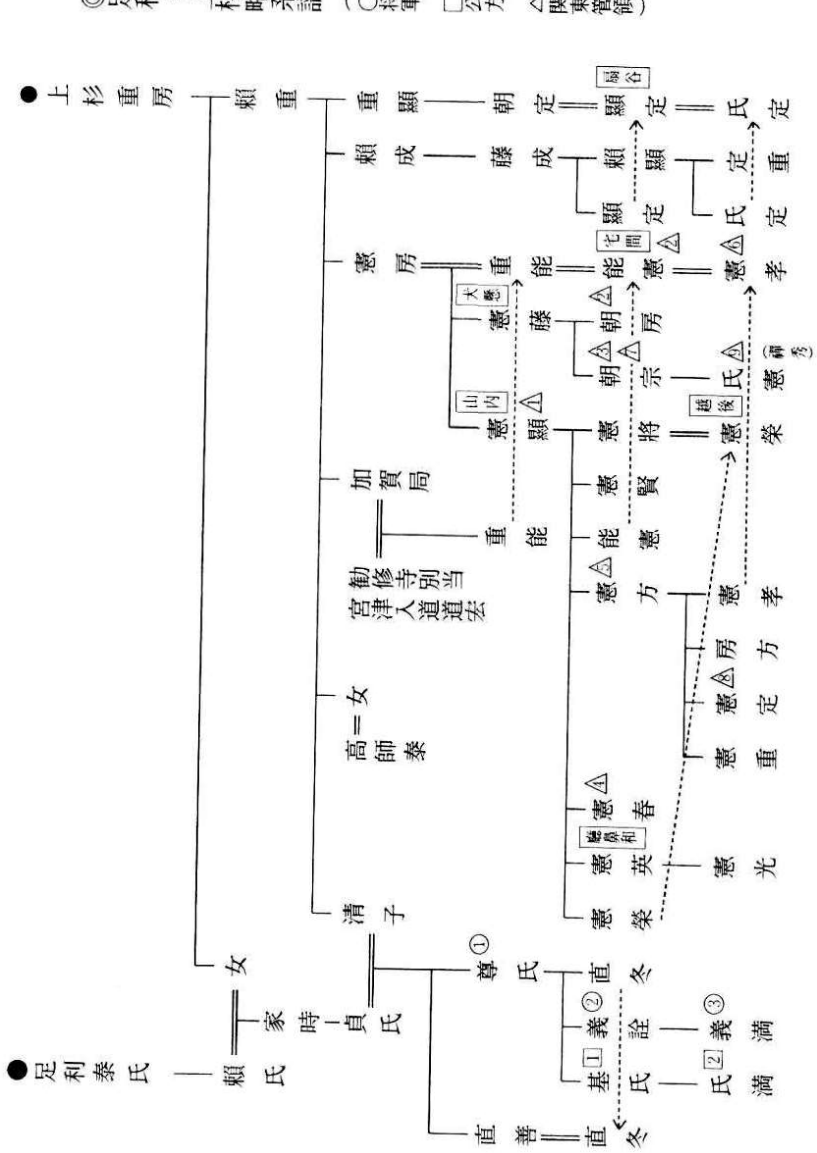
こうして上杉氏は、鎌倉入りして四家に分かれた。

さらに管領憲顕の子が武蔵國深谷と越後國に入った。

武蔵國榛澤郡深谷を領した憲英は驒鼻和上杉氏を名告り、越後守護となった憲栄は府中に一家を起こした。

深谷と越後を加えて六家に分かれた上杉一族は、団結して盤石の基盤を築き上げわが世の春を謳歌してゆく。

（了）


◎足利・上杉略系譜（○将軍 □公方 △関東管領）
●上杉重房
頼重
重顕
朝定
顕定
氏定
重定
女
家時
貞氏
●足利泰氏
頼氏
清子
高師泰
女
宮津勧修寺別当
入道道宏
加賀局
重能
顕憲△
朝藤△
朝能△
憲房
憲重
憲能
憲賢
憲将
憲宗
憲栄
憲孝
憲方
憲定
憲光
憲英
憲春△
憲△
憲△
憲△
憲△房
憲△氏
尊氏①
直冬
直義②
基氏①
詮冬
義詮③
氏満
氏満
直善
直冬
成藤
頼成
顕成
顕頼
顕定
氏定
重定
孝定
栄憲
光憲
英憲
春憲
方憲
定方
重定
憲重
憲△氏定
憲△房
憲△
憲△
憲△
憲△

「子規」遠し藤の花ぶさ中空にとどまりけふ獺祭忌はや（九月十九日）

獺祭忌・・・正岡子規の命日。また、その病床吟で著名なる歌として「瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとどかざりけり」の一首がある。歌の内容は何の意もなく単純すぎるくらいであるが、それだけに鑑賞上の問題をふくめてさまざまの論が爲されている。

獺祭は、かはうそが食事をする前に何匹も魚を並べて、さてどれからにし様かと考へる所を、本に囲まれた自分に擬して言ったもので、獺祭書房と自宅を称している。

つばめ去りて町に残りし老い人らけふも介護のバスに揺らるる

時惜かずつくつく法師血気ありノイズと呼ぶには惜しい気のする

人住まず数年を経つ蔵のある家に凌霄のはな揺れてゐつ

狼煙のあとのペガサス仰ぎをり夷狄征しししときの「張騫」

張騫・・・漢の武帝の側近、匈奴征伐に功あり。

羅甸区

姉を見舞ふ老人ホームに夕日差し惜別の音地にこもりたり

朝まだき法師蝉のこゑ地を圧し一樹の振ひ幽かに混ぜて

蜩の絶え間なきこゑ続きゐて彼の世の語り聞くごとく佇つ

しろじろと白鷺数羽残しつつ渡りのかぜが海峡を行く

窓といふ文字に心があるべきを番ひをなしてモンシロ翔べり

秋雨しげくしづくが歌ふ雨の歌萍のはな無きがごとしと

竜骨の老いさらばひて海底にいづれの世にか〝元〟の船あり

幾千年ここにきはまり二十五の竜骨あらはる深き水底

黄昏のビギンを聴かん秋の暮れベニー・グッドマン遥かなるかな

水玉のマフラー小粋な日君逝きて数年羅甸区に別れき

赤い月

朝よりの野分すさびし週末をEUの格下げ、ダウの軟調
戦中の日々の緊張なつかしも怠惰のをとこけふも日暮るる
高齢化ここにきはまり新設の老人ホームがみたび訪(たづ)ね来
高原の風に揺れつつコスモスよ東京暮しのデラシネ思ふ
瀧渕にひそめるわれかつばくろの右に左に心安まず
夕刊のつひに来ぬ町、きっちりと赤い大きな月が落ち来る
口あけて魚の煮付け頬ばりて秋しづかなる夕餉どきかな
月光に杖がまづ出てゆっくりと流人のさまにバスより降り来
退(ひ)くを知らず鱗(うろこ)きらめくくちなはは体すべらし彼岸へ至る
あかねさす紫しるく咲きそろふ菖蒲が池に木橋は古りて

生まれた罪
—悲運のジャガタラお春—

太田精一

北からの強い日差しがお春の眠りを妨げた。マンゴの枝が風に揺れ、木漏れ日から差す光が、ベッドに眠るお春の顔を刺激している。

森の中から猿の奇声が、気だるい午後の静けさを突き破って聞こえてくる。

お春は、われに返った。汗が体から流れ出て衣服にまとわりついている。

ジャガタラ（インドネシアのジャカルタ）の暑さが、ひとしお身にこたえる。

お春は、喘ぎながら汗を拭って、起き上がろうとした。だが、それが出来ない。召使を呼び、手を借りてやっと体を起こした。

七十三歳の老境を迎えたお春の体は衰弱し、身動きもままならない。

このところ、うつらうつらする日が続いている。その間、お春は決まって少女の頃の夢を見た。

生まれ育った長崎の町の風景と親しかった友達の顔が浮かんでは消え、望郷の念が、募るばかりであった。全ての地位と財産を捨てても日本の土になりたいとの思いが、お春の身を苛んだ。

だが、それは叶わぬ夢であることがお春には、分かっていた。

お春が、この地ジャガタラに追放されたのは、寛永十六年（一六三九）。六十年前のことであった。

徳川幕府が、海外渡航及び海外渡航者の帰国禁止令を寛永十二年（一六三五）に出して以来、四年が経っていた。長崎在住の外国人家族や混血児は、すべて追放されてしまっていた。

お春は、祖父のもとで育てられた。

祖父の小柳理右衛門は、長崎筑後町に住む儒学者で、母の逝去後すぐに、お春を養女として引き取った。お春は祖父母を父母と思って育ったのである。祖父のもとでお春は、読み書きをみっちり仕込まれ、良家の子女として恥ずかしくない教養を身につけていた。

お春が、なんとなく自分の風貌が人と違うことに気付いたのは、十二歳の頃である。

色が白くて鼻が高い。やや青みがかった目をしている。だが、髪の毛は人一倍黒い。

「私は、どうして友達より色が白くて目が青いの」

「さあ、どうしてかなあ」

理右衛門は、どう答えたらよいか迷った。

また、お春は、親子にしては両親が年を取りすぎていることにも、疑問を持ち始めていた。

「お父さん。私は、本当にお父さん、お母さんの子供なの。本当のことを教えて」

お春は、自分の出生についての疑問を理右衛門に問いただした。

理右衛門は、思春期を迎えるお春に、いつまでもその出生について隠し通すことは出来ないと思い、真実を語った。

「実は、お前のお父さんは、オランダ人でヒセンテ・ローマインというお人だ。お前のお母さんは、私の娘だ。お前を生むと間もなくこの世を去った。私たち夫婦は、お前を引き取ってわが子のように育てて来たことはお前も承知の通りだ。お前のお父さんは、交易のために長崎に来ていたのだが、お前を残し、オランダに帰られた。お父さんがたとえ異国の人であっても、お前は、この長崎で生まれ育った日本人だ。食べる物も着る物もこの土地の子供と一緒で、異国の言葉は、全く分からない。ただ、外見が少し普通の日本人と違ったところがあるというだけのことだ」

理右衛門は、孫娘のお春が愛しく、この長崎の地で良家に嫁がせ、幸せに暮らしてほしいと願っていたのである。

だが、時代はそれを許さなかった。

幕府のキリシタン弾圧は、ますます厳しくなっている。外国人の日本居住を禁じるだけでなく、日本人の海外渡航も制限され、海外に居住していた日本人の帰国さえも許されなくなったのである。

それだけではない。日本在住の混血児たちを国外に追放するというのだ。

長崎で生まれた混血児たちは、いつ国外追放の憂き目に遇うか、戦々恐々としていた。

理右衛門は、お春をなるべく人目に晒さないよう家に閉じ込め、詮議のやわらぐのをひたすら待った。

だが、事態は、悪化するばかりであった。

寛永十三年（一六三六）には、二八七人の混血児が、捕えられ、マカオに流された。それを知った理右衛門は、

お春を外出させず、近所の人にも奉行所に密告をしないように頼んで二年間隠し通した。

ところが、お春が十五歳になった寛永十六年（一六三九）の春、ついに理右衛門の家に不幸が訪れた。役人がお春を連れて奉行所に出頭するように命じたのである。

理右衛門は、奉行所で、お春を国外追放しないよう涙ながらに訴えた。

「お春には、何の罪咎はございません。オランダ人を父に持って生まれたことが罪でしょうか。この長崎に生まれて日本人として育て、読み書きも裁縫も芸事も一通り習わせました。異国の人との付き合いもなければ、言葉も知りません。また、キリシタンでもありません。踏み絵をしろとおっしゃれば、いつでも踏み絵をいたします。どうぞ、お目こぼしをお願いします」

「実に不憫ではあるが、御法は曲げられぬ。異国の人を父に持って生まれたことが、身の不幸とあきらめるしかない」

役人は、そう言ってお春に、国外追放の決定を下した。

悲嘆にくれたお春は、奉行所からの帰りに、子供の頃から親しくしていたお辰の家に立ち寄った。

お辰の顔を見るなり、別離の悲しみに涙が溢れ、ただ、泣きじゃくるばかりであった。

「こんな理不尽なことは許されない。お春ちゃんは、日本で生まれ育って、キリシタンでもないのに、国を追われるなんて考えられない。長崎から逃げて、ほとぼりが冷めるまで、どこかよその土地に隠れ住んだらどうかしら」

お辰は、お春に逃亡を勧めた。

「お奉行の詮議は厳しく、もしそんなことが見つかれば死罪は免れない。いいえ、それだけでは済まない。折角これまで育ててくれたおじじ様やおばば様まで類が及び、大変な迷惑をかけてしまうことになる。私だけがおとなしくご命令に従えば、それで済むこと。オランダ人を父に持った運命と諦める。いつか日本に帰ることが出来ると信じて異国に行くことにする」

お春は、涙ながらに語って、お辰との別れを惜しんだ。

しばらくしてお春は、平戸に送られ、同じ境遇の人たちと一緒にバタビア（インドネシア）のジャガタラに追放されることになったのである。

寛永十六年（一六三九）お春は、長崎在住のオランダ及びイギリス人家族十一人と共に九月中旬平戸に護送された。

その日、お辰は、船着き場に来てお春を見送った。

お春は、お辰の姿が、見えなくなるまで手を振った。

長崎湾を囲む山々が別れを惜しむように、涙でぼんやりと霞んで見える。

伊王島を廻って外洋に出た。西彼杵半島を右に見て、

船は外海沖を平戸に向かう。
波が荒くなった。
お春は、二度と故郷の土を踏むことが出来ないのではないかとの不安に駆られた。
(このまま海に飛び込んでしまえば、海岸に流れ着いて、日本の土の中に埋めてもらえる)
そう思ったお春は、船縁に身を乗り出して海に飛び込もうとした。それを見た護送役人は、足を取り押さえ、お春を船縁から引きずり降ろした。

お春は、平戸に護送された後、オランダ船でジャガタラに送られた。
ジャガタラに追放されたお春は、同地に住む日本人の家に引き取られ、現地の言葉や生活習慣を身につけると共に、支配者であるオランダ人社会の中にも溶け込んで行った。
幸い祖父の小柳理右衛門が当面の生活費としてお春に、金子を持たせてくれたため、金に困ることはなかった。
ジャガタラに到着した当初、お春は日本が恋しくて泣き暮らし、お辰からの日本の便が、たった一つの心の支えであった。
お辰も、故郷の様子をお春に伝えたいと思い、長崎を出るバタビア行きのオランダ船の船長にお春への手紙を託した。幸い、手紙の交換程度は、一定の手続きをすれば許されるようになっていたのである。
一年後にお辰の手紙を受け取ったお春は、早速お辰に返事を書いている。
「日本こひしや、日本こひしや、かりそめにたちいでて又とかえらぬふるさとを思へば、心も心ならず、なみだにむせび、めもくれ、ゆめうつつとさらにわきまえべく候へども・・・・」とある。
また、お春は、別の手紙で、切々と望郷の思いを綴っている。
「いつのとき日にか日本を出でませ候や、いまはさだかにわきまへがたふ。こなたのとし月にはなぞらえがたく、ただよるひるとなく、ふるさとのこと、つかのまもわすれやらず、おもいなぐさむひまも御ざなく候。たまたまふるさとにて見申したるにおなじものとては、月日のひかりばかりにてこそ、そこもとにかわらず候ゆへ、ひるは日の出るかたをながめ、夜は月の出るかたをうちながめ、袖のかはくまも御座なく候」
さらにお辰との友情の誓いをまるで恋人に宛てるように書いた文も見つかっている。
「もしもこの世にて逢申さず候はばわが身かねがね申したるごとく、友だちは七世の契りと承りまいらせ候へば、かならずかならず、来世にてはめぐりあひ申すべく候」と。
お春は、何故国を追われなければならなかったのか理解できなかった。国や故郷の人たちに何の罪も迷惑もかけていない。罰を受ける理由が分からない。
日本に生まれたことが罪なのか。自分が好んで生まれたわけでもないのに、生まれたこと自体が罪になる。お春は、その理不尽な御法を定めた幕府を恨んだ。
そんな仕打ちを受けながらも、お春は、日本への思いを断ち切ることが出来なかった。忘れようとして忘れられない故郷の海や山が、心の中に住み続けて離れなかった。
だが、ジャガタラに住む日本人の噂やオランダ船のもたらす情報は、帰国が絶望的であることを告げている。
お春は、時が経つとともに、自分の置かれた境遇をあるがままに受け止め、このジャガタラの地で生きて行かなければならないと思うようになっていた。

ジャガタラへ追放されて六年が過ぎた。お春は、美しい娘に育ち、二十一歳になっていた。お春の日本人の世話親は、すでにこの世にいない。
だが、お春の美しさは、オランダ東インド会社の社員の間では、評判となっていた。
平戸生まれで、東インド会社の社員であったヘシモン・シモンセンがお春を見初め、正保三年(一六四六)十一月二十九日に、二人は結婚した。
シモンセンは、能史であった。オランダ東インド会社の事務員補から身を起こし、昇進を重ね税関長となった。また、ジャガタラのオランダ政庁の外事を所掌し、手腕を発揮している。
さらに、バタビアで地位と名声を得たシモンセンは、名士として支那人遺産管財人、孤児財産管理委員も歴任した。
退職後彼は、数隻の船を持つ貿易商に転身した。東南アジアの各地と交易し、財を成した。晩年は、バタビア教会の長老にも選ばれている。
シモンセンは、平戸生まれであったため、日本の事情にも通じていた。結婚後、お春は、彼女の境遇に同情し、優しくいたわってくれるシモンセンを心から愛し、日本への帰国願望も次第に薄れて行った。
(この地で、夫と共に一生過ごすことが、私の運命なのかもしれない。再び日本の土を踏むことは出来ないが、平戸に護送される途中、あの外海の海に身を投げなくてよかった)
お春とシモンセンの仲は人も羨むほど睦まじく、二人は、四男三女の子宝に恵まれたのである。

二十五年の歳月が、またたくまに過ぎた。
寛文十二年(一六七二)五月、シモンセンは、最愛の妻お春を残してこの世を去った。この頃日本では、徳川幕府の基礎が固まり、四代将軍徳川家綱の時代となっていた。
お春は、四半世紀の間、共に暮らした夫に先立たれ、

悲嘆に暮れた。心細さが、胸に迫って、眠れない夜が続いた。すでに五十に近い年齢で、夫の事業を引き継ぐ気力も失せている。そこで、シモンセンの船を処分して、その遺産で生活することにした。

莫大なシモンセンの遺産は、お春と子供たちの生活を支えるには十分で、シモンセンの他界後も、お春は経済的には、困ることはなかった。

だが、不幸は、夫を喪っただけに留まらなかった。次々と肉親の不幸が彼女を襲い、一人の娘を残し六人の子供に先立たれたのである。

元禄五年（一六九二）お春は、六十八歳になっていた。このところ一人ぼんやりと過ごす日が多い。夫と子供たちに先立たれた淋しさが、老いと共に再び望郷の念を掻き立てた。

それだけにお春は、日本の噂には、敏感であった。

日本は、華やかな元禄時代を迎え、泰平を謳歌し、長崎も町人文化が花開き、賑わっている。出島のオランダ屋敷に次いで、唐人屋敷も出来、長崎は、日本唯一の貿易港として栄えている。

だが、ルソン、シャム、カンボジアにあった日本人町が、次々と消滅し、外地に住む日本人が姿を消して行った。

その年の五月、老いの衰えを感じたお春は、公証人を呼んで遺言状を書いた。たった一人生き残った娘のマリアも夫の高等法院判官フランシス・ファン・デル・レイを喪い未亡人となっていた。マリアとフランシスとの間には、二人の男の子と一人の女の子がいた。

お春は、娘と孫に財産を分け、金で買った男女七人の使用人とその子五人を死後、自由にすると遺言した。

陽が西に沈みかけた。闇がマンゴの木の周りを包み始めている。茉莉花の香が漂っている庭を、お春は、改めて眺め渡した。

（思えば、十五歳で日本を追われ、この地に流されて来たが、シモンセンと出会い、結婚したお蔭で、生きる力と歓びが与えられた。世の中には、自分だけではどうすることも出来ない運命がある。その運命をどのように受け止め、生きて行くかが、幸福な人生を送れるかどうかの鍵になる）

お春は、波乱に満ちた生涯を振り返ってみて、良くも悪くもない人生であったと思った。

長崎でお辰と共に歌った唄が、遠くかすかに聞こえて来た。

静かに閉じたお春の目から一筋の涙が流れた。その顔に、枕元に飾ってあった蘭の花弁がひとひら舞い落ちた。

完

「茶道史」勉強ノート（三）

忠内正之

茶の湯の展開　江戸時代中期

江戸時代のはじめ、千宗旦・金森宗和・小堀遠州らの茶人が現れ、その立場を主張するなかで、それぞれ広範な支持者を獲得していった。

その活動を継いだ人たちが次の時代の茶の湯を担っていった。ここでは先ず、小堀遠州の後を継いだ片桐石州を取り上げてみたい。

片桐石州の茶の湯

石州こと片桐石見守貞昌（一六〇五―七三）は貞隆の子として慶長十年、摂津茨木で生まれている。幼名は鶴千代、父の貞隆は秀吉の下で勇名を馳せた片桐且元の弟にあたる。寛永元年（一六二四）には従五位下石見守に任官、寛永四年（一六二七）には父の遺領一万四千六百石を継いで大和小泉（奈良市）の藩主となっている。

石州の茶の湯の師は桑山宗仙だといわれている。この宗仙は利休の子である千道安に茶の湯を学んだ人物であるから、小堀遠州とは異って利休から道安を経て宗仙に伝わった、わび茶を学んでいたことになる。石州の茶がわび茶の色彩を色濃くもっているのも、この茶系ゆえであると思われる。

寛永十年（一六三三）正月、京都知恩院が炎上する。知恩院は徳川家康の母（伝通院）を弔う徳川将軍家の菩提寺の一つであったから、再建は幕府にとって重大事であった。

この年の四月には石州や堀田一利らが再建奉行に任じられた。石州は知恩院が完成する寛永十八年までの期間、京都綾小路柳馬場に屋敷を構えて千宗旦や小堀遠州らと交流を繰り返したのである。知恩院の再建は石州にとっ

て茶の湯を研鑽する絶好の機会でもあったのだ。

石州の茶会がはじめて記録にあらわれるのは、寛永十一年正月十七日のことである。前年六月十九日には京都に到着しているから、再建準備も一段落して小泉で小暇を得た折のことと思われる。

小泉での茶会は室床の付いた三畳で行われている。掛物は桑山宗仙の表具になる大徳寺僧春屋宗園の墨跡、瓢の炭斗、小倉焼の水指、瀬戸肩衝、そして黒高麗の茶碗などであった。

石州は茶の湯の研鑽と同時に玉室宗珀（一五七二―一六四一）について禅の修業を行なった。今も大徳寺芳春院に残る石州木像の笏によれば、寛永十五年四月には玉室宗珀に参じて「万里一条鉄」の公案を卒業して「三叔宗関」の号を与えられていたことが知られる。後に自領小泉に玉室の法嗣である玉舟宗播（一、六〇〇―一、六六八）を迎えて慈光院を建立していることをみても、いかに禅に傾倒していたか知ることができる。

知恩院再建を成しとげた石州は、幕府の郡奉行、普請奉行を務める傍ら茶の湯を深化させていく。四十代から五十代後半にかけての石州の茶会からその特徴的なものをみてみよう。

まず四十代の茶会での特徴は、小座敷では道庫（点前座で使える押入の棚）を使い、後に書院に場を移して茶会を続けていること。茶道具としては信楽焼の水指や聚楽焼の黒茶碗、黒高麗茶碗が、茶杓には利休・道安・桑山宗仙などのものが使われている。とくにわび茶の茶碗とされる黒楽茶碗や利休・道安らの茶杓を使っている点が注目される。楽茶碗（聚楽焼）は利休の茶の湯を象徴するもので、それまでの大名系統茶ではほとんど使われなかったものである。

大名茶人であった石州がこれを使うこと自体が異例であるが、石州自作の楽茶碗も数個残されているという。さらに玉舟の紹介で、千宗旦とも交流しているので、この様な機会にわび茶の考え方を学んだのであろうか。

寛文五年（一六六五）十一月八日、石州は四代将軍徳川家綱に献茶を行なう。将軍を頂点とする武家社会で、そのトップに立つ将軍への献茶は大名茶道における指導者としての立場を公認されたことに等しい。幕府の正史である『徳川実記』は、「当時この道の宗匠にて、尤その名高く、今の世にも石州流とてその門徒猶多し、上にも先代より常に茶事に御遊びおはしければ、かかる事もままあそばしけるなるべし」と記している。

茶会の当日は、まず石州が茶室の飾付けを行なった後に将軍が入席、続いて酒井忠清・安部忠秋・稲葉正則・久世広之らの側近が勝手口から入って着座、席が定まったのち、石州が点茶を行なっている。記録によればこの時の道具は無準師範の墨跡「的雲」（または歸雲）、砧青磁花入に寒菊、織部の筋釜、縄簾の水指、茶入は若狭盆に乗った「四聖坊」、新門割高台茶碗、小堀遠州作の茶杓など、大名茶道創造に関わりをもった道具が使われているのが注目される。

この茶会のあと、将軍家の茶道具鑑定を行なったと伝えられ、遠州没後の武家のなかで茶の第一人者と認められる存在となった。

次に石州の茶の湯に関する考え方はどうであったかみてみたい。

石州の著作とされる「石州わびの文」や「一畳半の伝」などによると、石州は瓢になぞらえて「人作の及ばぬ数寄の本意を見出すことこそ茶の湯であり、心を楽しむ数寄者こそ誠の数寄者とは云うべけれ」としていた。

さらに理想とする道具組は「炭斗ふくべ、墨跡、茶入黒塗棗、茶碗楽焼、花入竹の筒」（「石州わびの文」）とするし、「一畳半の伝」では床なし茶室に紙表具・竹軸の掛物、黒塗茶杓、白高麗か赤楽の割れを繕った茶碗で、料理も簡素な一汁三菜がよく、人爲的なわびを廃して「天作（自然）のわびを求めるべきこと」を説いていた。

こうみると石州の茶は、わび茶を究極まで追求しようとした千宗旦に近いものであったと想像させる。豪快な大名茶であった織部や明るく優美な茶風であった遠州の茶を象徴する「きれいさび」とはほど遠く、利休のわび茶に近い考え方をもっていたのであろう。

参考　織部・遠州・石州の茶風

	将軍	師	茶室	焼物	著作	時代
古田織部	徳川秀忠	千　利休	蔦庵（藪内家） 八窓庵	織部焼 高麗茶碗	慶長御尋書	安土桃山
小堀遠州	徳川家光	古田織部	密庵席（大徳寺龍光院） 忘筌席（大徳寺孤蓬庵）	遠州七窯 古染付・祥瑞 高麗茶碗	小堀遠州書捨文 小堀遠州茶湯伝書	江戸初期
片桐石州	徳川家綱	桑山宗仙	中之坊茶席（当麻寺） 慈光院茶席	楽　焼 高麗茶碗	石州わびの文 一畳半の伝	江戸初期

右の三人はいずれも徳川将軍家の茶道師範であった。師範といっても将軍に直接稽古をつけたわけではないが、織部が二代秀忠の、遠州が三代家光の、そして石州が四代家綱の前で点茶を披露し、その格式を得ている。

江戸幕府の諸制度、儀礼が確立していく中で、茶礼もその中に取り入れられた。とくに二代秀忠は茶会に行くという形式即ち「数寄屋御成」で大名の屋敷を訪問する習慣を始めたので、各大名は茶の湯に通じておく必要があり、家臣達も茶を習うようになった。藩機構のなかに職掌として茶道方も置かれた。職名は藩によって異なるが、織田・豊臣期の茶堂が一般的職務へ変ったものといえる。

将軍茶道師範はこの三人で途絶え、その後は将軍家も茶道方を置くだけとなったが、全国の大名家に茶道方として遠州や石州の弟子筋が仕えることが多く、とくに石州流の各派は江戸時代を通じて武家茶最大の流派となったのであった。

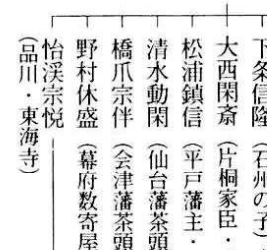
石州が将軍の評価を得たことによって、諸大名たちもこれを積極的に受け入れはじめた。肥前平戸藩主松浦鎮信、幕府数寄屋頭の四代野村休盛、先代伊達家茶道役清水道閑ら、さらに石州門下で品川東海寺の怡渓宗悦からは幕府数寄屋頭の伊佐幸琢、越後新発田藩主溝口悠山、会津藩茶道役の橋爪宗伴・飯塚林清らが代表的な人物たちである。

石州の茶の湯はこれらの人物たちによって全国に波及していったのである。江戸時代後期に松平不味・井伊直弼の二人の大名茶人も出ている。

織部の直系一族は滅んだため、その茶系は続かなかったが、遠州と石州の茶系はのちに遠州流・石州流として続き、町人を中心とした千家の茶に対して武家茶、あるいは大名茶と呼ばれることが多い。しかしその区別は多分にうわべだけだった様に思われる。

茶室や道具の趣味は違ったとしても、利休から織部、遠州、また道安、宗仙、石州へと継承された茶の点前・作法と千家のそれは、当時としては略共通したものだったと言えるからである。

参考　石州の主要な門下と諸派



宗旦の後継者とわび茶の拡大

利休の没後数年して再興を許された千家は、二代少庵・三代宗旦へと代を重ねていたが、宗旦の代に茶の教授を家業とする茶家となった。利休と同時代には多くの茶人が活躍していたが、武家にせよ町人にせよ、茶の教授が本業だったわけではない。千家のばあい、堺での家業は利休実子の道安に譲られている。少庵は家康から扶持を得ていたらしいが、隠居に際してそれを返上したとされる。多分宗旦の意向だったのであろう。

利休の孫宗旦（一五七八―一六五八）は、少年時代を大徳寺で禅僧になる修業をして過ごしていたが、千家再興にともない父少庵のもとへ戻り、茶匠としての生涯を送ることになった。生涯浪人として「乞食宗旦」といわれる窮乏生活のなかで侘数寄に徹し、弟子に茶を教え続けたのである。

当時の記録には「宗旦流」という言葉がみえるので千家の「わび茶」は宗旦によって徹底されたようである。

宗旦が仕官をしなかったのは、祖父利休が政治とのかかわりを強くもちすぎたための悲劇を見ていたためらしい。しかし江戸幕府が安定したのを見極め、自分の息子たちには仕官をすすめた。

三千家の始まり

利休の後継者として千家の茶の湯を担った千宗旦には何人かの男児があった。

閑翁宗拙、一翁宗守、江岑宗左、仙叟宗室である。長男の閑翁宗拙は幕府の医官でもあった武田道安らの口利きで紀州徳川家に仕官の糸口を得るが、結局はうまく運ばず、浪々の身となり京都西賀茂の正伝寺に隠棲することになる。残った一翁・江岑・仙叟の三人が宗旦の茶を継いで茶家として独立する。

利休から少庵・宗旦を経た茶の湯は、この三家によって大きく展開するのである。

一翁宗守

一翁宗守は宗旦の次男として、文禄二年（一五九三）に生まれている。長じて京都の塗師吉岡家の養子となり甚右衛門と名乗って塗師としての生活に入る。しかし茶道への念やみ難く、五十七、八歳ごろには大徳寺の玉舟宗播から宗守の号を与えられ、ついには吉岡家を娘婿に譲って茶人として独立する。さらに寛文五、六年ころには四国高松の松平家に仕官を果たす。

しかしながら一翁の仕官は、高齢の故か数年で終わったようで、その後は吉岡家の隣接地に居所を構え、茶室「官休庵」を営んでいる。官休庵とは文字通り「官の勤めを休む」の意味で高松藩の茶道役を引退したことを表名したものとされる。

一翁による茶室「官休庵」は一畳台目の広さで利休や宗旦が創案した茶室の広さと同じだが点前座の台目畳と客室一畳の間に細長い板を挟み込み、視覚的にも広さを感じさせる構成をとっている。利休のわび茶の考え方に回帰しながら時代に合せた作為がみられる。

江岑宗左の仕官

宗旦の三男、江岑も父の勧めもあって仕官を考える。宗旦は大徳寺の玉室宗珀らの伝手を辿って江岑の仕官先を手当てしたが容易なものではなかった。

まず仕官したのは肥前（佐賀県）唐津十二万石の大名唐津家であった。寛永十年のことである。「宗受」と号した江岑を宗旦はなにくれと援助するが、唐津は京都から遠すぎた。

幸か不幸か寺沢家は、キリシタン弾圧に耐えかねて蜂

起した「島原の乱」に遭遇し、その処理を誤って減封から改易の憂き目にあい、寛永十五年ごろには浪々の身となってしまう。

寛永十六年にいたって再び仕官したのが、四国讃岐十七万石の生駒家であった。ここでは「宗佐」と名乗っている。宗旦はともかく京都に近い所と考えていたらしく、肥前唐津よりは条件が良かった様だが、まもなくこの生駒家も家中の騒乱により減封となり、またも仕官先を失ってしまう。

しかしながら次のチャンスは意外にも早くめぐってきた。寛永十八年には柳生宗矩や沢庵宗彭らの尽力によって紀州徳川家への仕官が定まったのである。この仕官の成就に宗旦は極めて喜んでいる。江岑は三度目にして仕官先を確保したのだ。藩主徳川頼宣は「利休の孫で千宗佐という茶道の達人だ」と周囲に紹介したという。

紀州では茶道頭（のち数寄屋頭）として二百石を給せられ、茶事指南、数寄屋関係全般、座敷飾りなどにたずさわったが、記録によれば「京住を許され御茶事御指南役なり」とあり、京都と紀州を往復していたのである。

このような出仕法は、ながく利休の茶の湯を京都に伝える大きな力となったのである。

仙叟宗室と加賀

江岑に続いて仕官したのが仙叟宗室であった。すでに隠居していた宗旦ではあったが、なおわび茶の深化を進めていた。その茶を継いだ仙叟は宗旦最晩年のもっともわびた茶風を身につけていたといえる。仙叟も宗旦の尽力によって仕官を果たすことになる。

当初、加賀藩家老で文化面にも造詣が深かった本多安房守（幕府からの付家老）への仕官も検討されたようだが、承応元年（一六五二）ごろには加賀藩三代藩主であった前田利常への仕官が実現している。

加賀では小松城にあった前田利常に仕え、城内三の丸に屋敷を構えての茶の湯を司ったのだが、万治元年（一六五八）に利常が没すると、続けて前田綱紀に仕えて金沢に移転する。

金沢では茶室「臘月庵」を構え、茶道茶具奉行の傍ら茶会を行なっている。記録によれば、加賀藩の主だった武士のみならず儒学者・茶道役・町人らが茶会に招かれており、活動の一端が知られる。

更に仙叟は加賀において大樋長左衛門による茶道具の作陶や宮崎彦四郎寒雉による茶の湯釜の鋳造を指導した。

大樋焼、寒雉の釜は後に仙叟が京都で好んだ茶道具とは一風変った趣の物が多いが、仙叟の加賀における独自の気風に裏付けられているのであろう。両家とも現代まで伝統が守られ継続している。

宗旦の後嗣たちが大名家への仕官をとげ、同時に京都

における三つの茶家を分立させた意味は大きい。利休の本拠地である京都にその血脈を伝える家を置き、一方で大名家に連なることによってその茶の湯を各地に普及するといった働きを併せもったからである。

同様に宗旦の門下からも各地に下向し時流に応じた活動をはじめる人物たちもあらわれた。宗旦の高弟三人についてみてみよう。

宗旦の高弟

千　宗旦
- 千　宗佐（表千家、不審庵）
- 千　宗室（裏千家、今日庵）
- 千　宗守（武者小路千家、官休庵）
- 藤村庸軒（庸軒流）
- 山田宗偏（宗偏流）
- 杉木普斎（普斎流）

庸軒と伊勢藤堂家

藤村庸軒（一六一三―九九）は京都の人。十二屋源兵と号する京都の呉服商であった。若年から茶の湯に親しみ、織部、遠州、宗和、藪内などの茶を学んだといわれる。

一六四五年（正保二年）十月には三宅亡羊の相伴ではあったけれども、小堀遠州が行った茶会の客となり、その時の詳細な記録も残っているから、この頃には茶の湯の世界でも名が知られるようになっていたようである。

その後、千宗旦について本格的に茶の湯を学ぶことになる。恐らく精神性を重視し、世俗に交わらぬ宗旦の姿にひかれたのであろう。また庸軒の兄宗理が宗旦の娘を妻としていたのでその縁によるとも考えられる。

庸軒は呉服商をしての傍ら、茶匠としての活動も併せ行なっていた。十二屋は徳川幕府の実力者であった伊勢の大名、藤堂家に出入りしており、伊勢にもたびたび下向していた。この縁で二代藩主藤堂高次は、茶頭井野口宗休を京都の庸軒のもとに派遣して、その茶を学ばせることになる。

宗休は京都の庸軒のもとで三ヶ月間にわたって茶法の伝授を受け帰藩した。その後藤堂家では、長く庸軒の茶を伝えることになるのだが、庸軒の子、恕堅が津を訪れた際には、高次みずから亭主となって茶を振舞ったと伝えられている。

この茶系は藤堂家の茶頭近藤柳可に伝えられ、後に庸軒流柳可派とよばれるようになった。宗旦の茶の湯は、庸軒を通じて伊勢にながく根付いてゆくことになったのである。

庸軒の茶風は、自作の漢詩集「庸軒詩集」に見られるように、深い漢字の素養が庸軒の大きな持味となっている。

好みの回也香合、凡鳥棗などの優美な茶具は、『論語』・『荘子』にその銘をとっている。一方その茶会は遠州のように小間の茶室と書院を併用して行ないながらも、遠州とは違い簡素な書院飾りを特徴とした。

品格のある優美な茶道具を用いつつ、わびた道具をも使うという、宗旦のわび茶を垣間見せるのが庸軒の茶風といえよう。

庸軒の活動に見られるような、利休の茶を奉ずる新たな茶家の分立を支えたのは、その支持層の拡大があったからである。元禄年間（一六八八―一七〇四）における町人層の台頭が根底にあったのだが、茶之湯書の版行が盛んとなったことからもこれを裏付けることができるのである。

晩年は宗旦のわび茶に徹して、一日として炉の火を絶やすことは無かったといわれる。

山田宗偏と茶書の版行

山田宗偏（一六二七―一七〇八）は寛永四年、京都の浄土真宗長徳寺に生まれている。同じく宗旦の高弟として知られる伊勢の杉木普斎は翌寛永五年の生まれである。

宗偏は十七才の頃、宗旦に入門しついには寺を譲って茶匠として生きる決意をしたという。宗旦の門下として約十年を経た一六五五年（明暦元年）、三河吉田（豊橋市）の小笠原家に仕官することになる。（宗偏については〝まんじ〟百十二号、「桐の花影」を参照して下さい）

吉田では四十三年の長きにわたって茶頭として仕えることになるが、この間、一六七九年（延宝七年）には家中の津田六郎兵衛が茶事の亭主役をつとめる傍ら、宗偏が口述を行ない、山中七郎右衛門らが筆記するなかで「茶道便蒙抄」を完成させている。

宗偏が千家系の茶匠として初めて版行した茶道便蒙抄はこのような経緯で執筆されたのであるが、実際に発行されたのは約十年を経た一六九〇年（元禄三年）のことであった。この年は利休百回忌に当っておりこれがきっかけになったものと思われる。

「茶道便蒙抄」は茶の湯の基本となる茶事の終始を「主方」と「客方」に分けて述べたものであったが、さらに宗偏が利休・少庵・宗旦という正流に連なることを知らしめる意味をも持っていた。

拡大の一途をたどっていた茶道人口に対応して、新たな媒体による茶の湯の普及が目指されたのであろう。それまでのような教授法のみでは茶道人口の増大に対応することが難しくなってきたのである。

宗偏は続けて翌年には「茶道要録」を版行している。これをきっかけに千家系統の茶匠による茶書が刊行されるようになる。

一七〇一年（元禄十四年）には宗旦からの聞き書を主体とした「茶話指月集」を久須美疎安が、宗旦門下の藤村庸軒による「茶話別集」（同年）、山田宗徧の「利休茶道具図絵」（元禄十五年）などが版行されたのである。

宗徧は晩年江戸に下って、本所二丁目に茶室を構え、利休正伝の茶法と称して多くの弟子を集めている。

宗徧の茶風は、仕官生活四十二年の間に師宗旦とは少し違うものとなっていたようである。現在残されている宗徧の茶道具には「刷毛目釣瓶水指」・「竹青海波蒔絵一重切花入」・「東陽坊写し黒茶碗」などのように利休好み写しの端正なわび道具が多い。これは宗徧の茶風が「極わび」の宗旦のものより、武家にも通ずる利休の茶風を目指したことを示すものと考えられる。

杉木普斎とその伝書

宗旦門下の杉木普斎（一六二八―一七〇六）も、宗徧とは同時期に活動を行っていた。普斎は伊勢の御師（神職のこと）杉本光貞の子。十五才から二十才の頃まで京都に在住して宗旦に茶の湯を学んだといわれる。

普斎は宗徧とは異って大名家への仕官はせず、家業の御師の傍ら、茶の湯の普及を目指していた。特に御師として活動の他、すなわち、伊勢、浪速（大阪）、播州網干（姫路）が、そのまま茶の湯の上でも普斎の拠点であったらしい。

この普斎の活動を知る重要な手掛りの一つに自筆の茶の湯伝書がある。当初は門弟の茶の湯の進み方に応じて、一巻、二巻と順次、伝書を与えていったようだ。後に十巻に整理された形で与えられたので、「普斎十巻条」と呼び慣わされたらしい。ほぼ同時期、宗徧が「茶道便蒙抄」に続いて「茶道要録」を版行し、不特定多数の人物を対象として茶の湯を説いたのとは対照的な方法であった。

普斎十巻条は、茶事の他、茶法、茶花など茶の湯に必要な一通りの内容を網羅していたのである。普斎は、伊勢のみならず各地で茶の湯を教授し、自筆の茶の湯伝書を与えるなかで活動を行なったのである。

普斎は伊勢神主の御師をつとめるかたわら大徳寺で参禅し、乾英宗単より「宗喜」の安名（法名）と「普斎」の斎号を授かっている。この禅修行も宗旦のわび茶を学びとるためとされる。伝書に見る闊達な書風や、自作の茶杓（筆者も一本大切に所持している）・赤楽茶碗の大振りで奔放な作風は、わびた風情と共に普斎の持つ茶風をよく示している。

普斎は宗旦の高弟のなかで、最もよくその茶風を受け継いだ人物といってよいであろう。

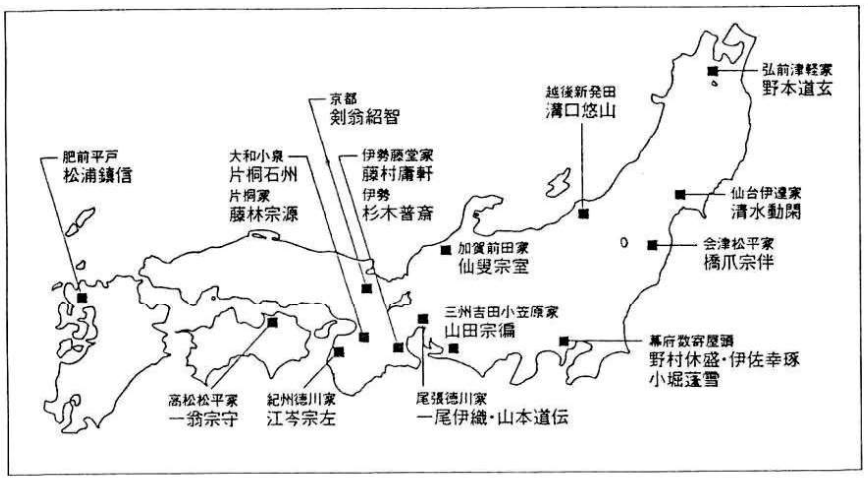
宗徧が茶書の版行を行い、普斎がやや古風ともいえる伝書を発給するという、このような差違がどうして生まれたのか定かでない。ただ、宗徧が小笠原家に仕官して茶の湯を専業とし、多くの家中における門弟を相手にしようとしていたのに対して、普斎が伊勢の御師としての家業を捨てることなく、主に縁故地のみで茶の湯を教えていたという、立場の相違があったと考えておくべきであろう。

茶道人口の広まりに対応しようとしていた宗徧と、あくまで仕官の要請を拒んだ千宗旦にならって、それまでの茶の湯のあり方を守ろうとした普斎、その相違だったかも知れない。

これを示すように、宗徧の茶道具には型を重んじる傾向を見ることができるのに対して、普斎の茶道具が奔放さを強く打ち出しているのも、その相違をよく現わしていたといえる。

千宗旦門下の庸軒、宗徧、普斎はそれぞれの方法で、その茶の湯を各地に広げていくことになる。江戸時代の中頃を迎えて、茶の湯はそれまでのありかたを大きく変えて行く中で、各地に広まっていったのである。

続く



江戸時代中期の主要茶人分布図

抜群におもしろい「竹島ゲーム」

新井　宏

韓国は自らの力で領土を回復したことのない国である。第二次大戦中に抗日戦でも行っていれば、領土回復の一端を担ったと言えたであろうが、日本の敗戦によって転がり込んだ独立である。

その中で唯一自らの手で獲得したのが、一九五二年の李承晩ラインによる竹島(韓国名は独島)占拠なのである。「独島は日本による韓国侵略の最初の犠牲地」であり、その象徴の独島を失うことは、日本に全面降伏するにも等しいほどの屈辱となる。

一方の日本は、韓国の不法行為に対して「なめられてたまるか」と感情論で受け止める。

かくして、もともとは漁業水域をめぐる争いであったのが、今や国家や民族の威信をかけた面子の問題に格上げされてしまっている。

面子の絡む問題であるから、どちらが正しいとか、どちらが有利とか論評して見ても始まらない。お互いに「歴史的にも国際法上も我が国固有の領土」とお題目を唱えていれば良いのであって、真面目に内容を検討する必要などないかも知れない。しかし、これを「竹島ゲーム」として見ると抜群に面白い。

一　枕詞の「歴史的」

日本も韓国も異口同音に竹島(独島)のことを「歴史的にも、国際法上も、我が国固有の領土」と言っている。常套用語であるからムキになることもないが、竹島問題では「歴史的」が重要なのであろうか、それとも「国際法上」なのであろうか。

内容も検討せずに直感的に言えば、「歴史的」の用語に力を入れているのは近代化に遅れた国、「国際法上」の用語に力を入れているのは先に近代化を達成した国である。すなわち韓国の主張は「歴史的」にアクセントがあり、日本の主張は「国際法上」にアクセントがある。

経過からも類推できるように、「国際法上」という言葉は、「二十世紀以降」に置き換えられ、「歴史的」という言葉は「十九世紀以前」に置き換えられる。だから「歴史的」という言葉は、いわば「国際法上」を飾る枕詞なのである。

さて、「国際法」と言えば、「万国公法」である。幕末維新期、日本では「万国公法」に対して憧憬とか劣等感のような心情があった。不平等条約に悩みながら、外国からの干渉を避けて、維新を達成するには、「万国公法」は絶対に遵守しなければならなかった。榎本武揚が五稜郭で降伏勧告を拒絶し最後の決戦を迎えた時に、焼失を恐れて、黒田清隆に送った秘蔵の書が「万国海律全書」である。海洋国際法に関する解説書であるが、これが黒田による榎本武揚の助命につながった。

そして、この海洋国際法の知識が、明治政府をして、小笠原諸島、尖閣諸島、南鳥島などの無人島を懸命になって日本領に編入させることに結実した。ちなみに、南鳥島だけで、日本国土面積よりも広い四三万平方キロの「排他的経済水域」を日本にもたらしている。

排他的経済水域とは、沿岸から二百海里(三七〇キロ)までの水域に対する権益で、日本は領土の十二倍に相当する四四七万平方キロを持ち世界六位である。近隣国を見ると、韓国は領土の半分の四五万平方キロ、中国はわずか領土の十分の一の八八万平方キロに過ぎない。如何に明治の外交が先見性を持っていたかの証左であろう。

砲艦外交の時代、「領海」は沿岸から十二海里(二二・二キロ)であったが、いまや排他的経済水域がそれに代って国際間紛争の主役である。岩礁で、小さく居住に適さない竹島や尖閣諸島の領有権問題は、この排他的経済水域を巡る争いなのである。しかも、この排他的経済水域を規定する「国連海洋条約」が発効したのは、今からわずか十六年前であり、竹島問題にも直接的間接的に影響を与えるはずなのに、面子の問題に埋没していて、あまり「竹島ゲーム」に登場してこない。

二　歴史的に

歴史的にみるかぎり、韓国も日本も、竹島よりはるかに大きい鬱陵島の所有に関してさえ、熱心とは言えなかった。ましてや岩礁にすぎない竹島など無視されていたのが実状である。

たとえば、李氏朝鮮は建国直後の十五世紀初めから、鬱陵島でさえ、倭寇あるいは仮倭の基地となることを恐れて空島政策を採っていた。この政策が原則的には十九世紀末まで続いていたことを見ても、その無関心さがわかる。もちろんこれが領有を放棄したことを意味するわけではないが、近代以前の領有権などというのは、こんなレベルであった。

一方の江戸幕府は、無住化された鬱陵島に、日本人がアワビやワカメなどの漁獲目的で入り込んでいたので、当初の八十年間ほどは鬱陵島を日本領として疑っていな

かった。

問題が発生したのは一六九二年になって、朝鮮の漁民たちが鬱陵島にやってきて、アワビやワカメを獲り始めたことである。そして衝突が起った。この衝突を通じて、朝鮮と日本の間で、鬱陵島の帰属問題が発生する。

当初は幕府も鬱陵島を日本領と考えていて強硬であった。それに対して朝鮮側は穏便に解決を図ろうとして、朝鮮人の鬱陵島への渡航を改めて禁じるなど譲歩するが、外交を担当する対馬藩は、幕府の意向に従い、鬱陵島を日本領として譲らない。しかし朝鮮側も、『東国輿地勝覧』に載る鬱陵島を日本領と認めることだけはできない相談であった。

この膠着状態の中で、朝鮮側では、恒例とも言うべき政変「甲戌の獄事」が起り、にわかに強硬派がこの事件を主導するようになる。しかも、その最中に「安龍福」という舞台回しが登場して、朝鮮側ばかりでなく日本側まで翻弄する。もともとは鬱陵島の衝突事件の際に取り調べを受けた下層民に過ぎなかったが、日本側と朝鮮側とで大きく食い違った証言をしたのである。

安龍福の動きとは全く無関係であったが、強硬であった幕府も、鬱陵島を朝鮮領と認める方向に転換する。対馬藩の宗義貞から「竹島(鬱陵島のこと)は朝鮮に近く、領土問題として争うべきではない」と具申を受けたことからの方針転換であった。かくして、朝鮮側は空島政策を続け、幕府は朝鮮の鬱陵島領有を認めて一件落着した。

このことが安龍福を鬱陵島事件の英雄にしてしまう。しかも安龍福は、手柄をより大きくするつもりで、鬱陵島の他に「松島すなわち于山島、此れ亦我国の地」と報告したのである。これが後で、于山島を独島と理解して、歴史的にも独島を所有していたとの朝鮮側の根拠になって行く。日本側の記録とつき合わせればすぐにわかる安龍福の虚言が「英雄物語」となって一人歩きしてしまうのである。

日本では、于山島は、鬱陵島に付属する竹嶼(島の名称)だと見る。于山島の名前は『東国輿地勝覧』では鬱陵島に優先して載っているほど由緒ある名前で、鬱陵島の別名と見てもおかしくない。それを、鬱陵島からはるかに離れた竹島と見るのは如何にも不自然なのである。

この辺の名称対応関係についての理解は混乱を極めている。すなわち、鬱陵島に関連しては、于山島、松島、竹島、石島などの名称が挙がっているが、それぞれが現在のどの島に対応するのか判らないのである。ましてや、鬱陵島から九二キロも離れた竹島が鬱陵島の付島に含まれているのか否かさえ判然としない。そのため、名称があっても竹島のこととは断定できず、名称がなくとも、対象外なのか省略したのか、常にもめることになる。これに国益と面子が絡めば、どんな解釈だって可能になる。

さて、その事件の後、鬱陵島の存在が意識されるのは、

幕末になって海防上の観点からである。松浦武四郎や吉田松陰は、英米露などによって鬱陵島が開発されることを憂慮し、日本が先に鬱陵島を開拓すべしと唱えたのである。しかし、その頃でさえ、日本では鬱陵島を竹島と言ったり松島と言ったりしていて、これが同じ島なのか、二島なのかさえ確定していなかった。

明治維新を経ると、鬱陵島は再び朝鮮人と日本人が混住するようになる。このような状況下で、島根県は内務省の地籍編成事業に際して、鬱陵島他「一島」の扱いを内務省に伺いを立てている。これに対して、内務省は島根県の質問書や徳川幕府の文書を検討した後、鬱陵島他「一島」が朝鮮領土だという結論を下した。しかし懸案が重大なだけに内務省は太政官の裁定を仰いでいる。その結果、太政官は一八七七年三月二九日に、鬱陵島他「一島」は「本邦関係これ無き義と相心得べき事」と内務省に下達している

この時、内務省が提出した書類には、「一島」の説明として、周囲が約三十町歩、鬱陵島と同一線上にあって、隠岐から八十里ほど離れているとある。周囲の三十町歩と鬱陵島と同一線上にある点では竹島(独島)に合うが、隠岐島からの距離は四十里くらいで八十里はない。そのため日本側では「一島」を竹島と認めない見解もあるが、韓国側にとっては明らかに有利な資料であろう。しかし、これは日本国内の扱いで、日本が直ちに朝鮮領を認めたことにはならないのが、法的に面白いところである。

そして日露戦争の最中の一九〇五年一月二八日に、独島の日本領土編入を閣議決定する。日露戦争が始まった時点では、日本の動態を注目している諸外国から、韓国併呑の疑惑を買うことになると反対論が強かったが、既にバルチック艦隊が日本に向っていた。竹島に敵艦監視所をつくるために、領有の論拠は「先占」すなわち「他国ニ於テ之ヲ占領シタリト認ムベキ形跡」がないことであった。

既に無人島を日本の領土に編入した経験を持つ日本である。国際法上の問題がないように準備している。ちなみに国際法上で国家が領土取得できる方法は、譲渡、征服、先占、添付(埋立て等)、時効の五種類である。

ところが、これに先立つ一九〇〇年十月二四日に、韓国では高宗勅令第四一号で鬱陵島や竹島(独島とは別島)、石島を江原道鬱島郡の管轄下に置くことを決めていた。

ここで問題になるのは、石島がはたして独島(竹島)かということである。韓国側は石島の石(ソク)と独島の独(トク)の発音の近さから無条件に石島を独島とするが、その頃の竹島の名称は日朝共にリャンコ島であり、関連資料に関する研究を見ても、孤絶した独島は鬱島郡に入っていないとする日本側の主張に歩がある。

一九〇五年の竹島の日本領編入は翌年になると、高宗勅令四一号を基に、朝鮮の新聞や知識人から一斉に反発

その頃、韓国は戦勝国ではなかったので、講和当事者ではなく、その内容さえ日本の新聞によって知る始末であった。竹島の領属などアメリカの専権事項であり、最大の利害関係者の韓国が局外者として扱われていた。

内容を知って、韓国政府は急遽米国に意見書を提出するが、結局、竹島関連の意見は採用されなかった。

だから国際法上は簡単明瞭なのである。信託統治者(アメリカ)が竹島を韓国に渡さずに、日本に戻したのである。本来ならこれで終りである。

ところが、一九五二年初、韓国は突然李承晩ラインを引いて、竹島をその中に取り込んでしまう。サンフランシスコ条約発効の直前であった。

これが征服に該当するとはとても思えない。日本が降伏したわけでもないし、追認した訳でもない。時効でもないのは、日本は几帳面に毎年、竹島は我が国領土であると韓国に文書を送り続けているから当然である。しかも一九五二年には日本領であるが故に、在日米軍が射爆訓練区域に指定した時に日本政府の許可を得ている。

かくして、国際法上は、簡単明瞭である。国際法というものは、時代をどこまでも遡って争える性質のものではない。いったん領有権が確定したら、それ以前のことは全て「ご破算」になって「歴史的」主張となる。国際法上は、第二次大戦終結時に日本の領土であったことを覆すのは、その領有が不法によったとしても、極めて難

の声があがった。しかし、この頃の朝鮮は、既に外交権を日本に譲り渡していて、竹島の日本領編入に異議を唱えることなどできる状況ではなかった。

それがいかに不合理であっても「国際法上」ここに日本の領有権は確立するのである。

三　国際法上

いったん竹島が日本の領土として確定してしまえば、領土の変更は、国際法上では、譲渡、征服、先占、添付(埋立て等)、時効のいずれかしかない。それでは、李承晩ラインによる強制は、「征服」に該当するのであろうか。

日本が第二次大戦で無条件降伏して、朝鮮半島は米・英・ソ連・中国の四カ国による信託統治領となり、朝鮮半島の南部はアメリカの軍政下におかれた。そして竹島も日本の領土から除外され、アメリカの軍政下に入る。これは朝鮮半島の南部と同じグループに編入されたことを意味する。

したがって、サンフランシスコ講和条約草案でも当初は「日本から除外される地域として済州島、竹島、鬱陵島」となっていた。ところがシーボルト駐日政治顧問から「竹島はもともと日本の領土だった」との提言があり、新しい草案では「日本から除外される地域として済州島、巨文島、鬱陵島」と書き直される。

しいのである。

それは、盗品(不法な領有)であっても、善意、無過失の第三者(アメリカ)がそれを知らずに譲り受けて、それをまた誰(日本)に譲渡しようと法的に有効なのに似ている。そうでなければ、法治社会など成立しない。

もともと「国際法」などと言うものは、近代ヨーロッパが決めた「不当」なものである。現に中国から見れば、台湾、チベット、朝鮮、琉球などの朝貢国(属国)は「歴史的」に自国の領土だったと思っている。だからチベットも取ったし、台湾も取ろうとしているし、朝鮮の歴史を中国史に編入している。ましてや自国の大陸棚にある尖閣諸島などについて、西欧だけで決めた国際法などに縛られるのは我慢ができない。価値観の相違なのである。

いやいや、実は中国の価値観の方が国際的なスタンダードなのである。米国をみれば良く判る。国際法など守らなくても、別に制裁を受けることなどない。

四　排他的経済水域

独島の領有権問題が今後急速に解決する可能性は少ないであろう。しかし、今後の進展をある程度予測することはできる。いろいろのケースを試行錯誤してみると、実効支配をしている韓国側が有利とはとても思えない。端的に言えば、日本は使えるカードをたくさん残しているが、韓国は自縄自縛で、日本の外交的な揺さぶりに対抗できない。

「竹島ゲーム」の行方を予測してみよう。

日本も韓国も、建前上から竹島を基点として自国の排他的経済水式を描いている。しかし、竹島は「島ではなく岩礁」なので、相互に認めないと排他的経済水域の基線にはできない。そうなると、竹島は無かったことにして、韓国の鬱陵島と日本の隠岐島からの等距離を日本と韓国の排他的経済水域に定めることになる。その場合は、竹島をどちらが領有しようと実質的な水域には微々たる差しか生じない。

そのため、韓国は独島を「島」として申請し、排他的経済水域を二・一万平方キロほど増やすことを要求するであろう。しかし、その際には日本側も、岩礁の肥前鳥島を「島」と認めるように韓国に要求するはずである。

その結果、日本は肥前鳥島を基線とできるので、三・六万平方キロの排他的経済水域を入手でき、差し引き一・六万平方キロの排他的経済水域を増やせる。しかも、肥前鳥島海域は水産資源が豊かで、尖閣諸島海域と同様に、海底油田および天然ガス田が存在する可能性もあり、日本に圧倒的に有利である。そうすると韓国は独島を「岩礁」のままにしておいて、鬱陵島と隠岐島からの等距離を日本と韓国の排他的経済水域にするしかない。これでは独島を領土に編入しても、実質的な効果は何もない。

以上のようなことを初めて知ったのは、十年ほど前に韓国にいた時であった。韓国の新聞の投書欄に載っていたのである。その時は、韓国もやっと当たり前の議論ができるようになったと喜んだが、このような情報は日本の新聞が積極的に伝えてもよさそうであるが、あまり見かけない。新聞記者でさえ、解説をしないところを見ると不勉強なのかも知れない。だから私が解説する。

整理して言うと、この「竹島ゲーム」は、①竹島をどちらが領有するか、②竹島が「岩礁」であるか「島」であるか、の四つの組み合わせで成立つ。

前者は政治問題で双方ともに安易な妥協をすれば政権が崩壊してしまうが、岩礁か島かの取り決めは、領有権とは無関係に事務協議で決まる問題で、はるかに「軽い」。しかし影響はこちらのほうが、はるかに「重い」。

それでは現在は、どのように線引きされているのであろうか。

竹島の実効支配をする韓国が竹島を基線として水域を一方的に管理しているかと言えば決してそんなことはない。今、日本と韓国の間には主として漁業を対象にして暫定水域協定を結んでいて、共同で管理し利用する水域を設けているのである。

それは、原則的には、竹島の存在が無いものとして、鬱陵島と隠岐島からの等距離を中心線として境界線両側に等分に分布する水域である。しかし、協定締結時に、韓国側に拿捕された日本漁民がいた事情もあって、暫定水域はかなり日本側に不利となって偏っている。だから、領有問題を棚上げして、独島を「岩礁」と認定し、鬱陵島と隠岐島からの等距離を排他的経済水域にしてしまえば、日本にとっては、はるかにスッキリするのである。

もっとも実際の漁場は双方で入り込んでいて、日本側でも、いま暫定水域として利用している漁場を失う漁民も出てくるであろう。しかしこの地域の漁獲高は合計しても年間五十億円程度に過ぎず、漁獲高が減少しても失うのはその一部である。国内問題としての対応は不可欠であるが、韓国が独島防衛のために支払っている金額よりもはるかに少ない金額で済む。

それでは、現状の鬱陵島と竹島からの等距離を排他的経済水域として、各組合わせの損得を整理してみよう。

(1)「韓国領有」「島認定」……韓国が二・一万平方キロの排他的経済水域を増やすが、肥前鳥島を島と認めるようにとの逆襲を受けると三・六万平方キロの排他的経済水域を失い、一・五万平方キロの減少となる。

(2)「韓国領有」「岩礁」……韓国が竹島の周囲に領海と接続水域として〇・六万平方キロの水域を獲得するが、排他的経済水域は変わらない。日本は竹島の領有権を確保できなければ、暫定水域協定を破棄するので、むしろ韓国側にとっては不利になる。

(3)「日本領有」「島認定」……日本が圧倒的に有利で、排他的経済水域を四万平方キロほど増やせるが、韓国が認めるはずがない。

(4)「日本領有」「岩礁」……竹島の周囲に領海と接続水域として〇・六万平方キロの水域を、韓国の排他的経済水域の中に増やせる。

以上のように、「竹島ゲーム」はどちらに転んでも日本に有利でオタオタするようなことにはならない。サッカーゲームを見ているつもりで良いのである。

韓国は、竹島問題の他に中国との間にも問題を抱えている。東シナ海に沈む離於(島)の暗礁は、排他的経済水域としては、韓国側に位置しているので、竹島と同じく領有権主張のため、この暗礁に建造物を建設した。しかし、この排他的経済水域には、中国側から大陸棚が伸びていて、大陸棚ルールによって中国にも排他的経済水域にできる根拠があり、韓国に激しく抗議している。

だから韓国はうっかり動けない。暗礁さえ島にしてしまいたい韓国であるから、独島を島にしたいのが本音である。しかし、その時には日本の肥前鳥島も島に認定されてしまう。如何にして二重基準を使い分けるかが韓国の課題で、自縄自縛、オンゴールになりかねないのである。ちなみに、肥前鳥島は〇・〇〇〇一三平方キロ、竹島〇・二三平方キロ、尖閣諸島は六・二平方キロ、鬱陵島は七二・八平方キロである。面積で見れば、大差があるので、この当たりのことがどのように評価されるのかもゲームの分かれ目になるかも知れない。

五　韓国側のオンゴール

フォークランド戦争で英国に降伏したアルゼンチンは、フォークランドの領有権を放棄したであろうか。いや、三十年もたった今日でも、アルゼンチンは、フォークランド諸島の領有権を主張し続けている。

領有権の主張というのは、借金返済の督促に似て、何も言わないでいるといつか「時効」となってしまう。だから実効支配している国に対して、執拗に返還を求め続けるのが外交ルールである。日本が竹島や北方四島の返還を求め、中国が尖閣諸島の領有権を主張するのは、外交交渉の原則通りなのである。

何時の日にか、直接・間接に取引カードとして活かされる。活かされなくとも、もともとである。だから、返還を求める側が執拗なのは当たり前である。

一方、実効支配している側が、「ここは俺の土地だ」などと余計なことは言わないのも原則。着々と実効支配の実績を重ねることに専念し、無用に相手側を刺激せず、相手が何を言っても知らんぷりしているのが良い。

李明博大統領の独島上陸など、人気失墜の挽回策であったとしても最低であった。領土紛争の歴史を知らなすぎる。日本から見れば、「どうぞ国際司法裁判所に提訴して下さい」と言ってくれたようなものである。

もちろん、韓国が共同提訴を承知するはずがないから、裁判が開始されることなどないが、これが日本にとって非常に好都合なのである。

外国ばかり気にしている韓国人にとって「受けて立てない卑怯者」と言われることは、非常にこたえる。「犬を食べる」と報道されただけで、国中が大騒ぎするほどの外国コンプレックスである。「犬肉はうまいよ」と軽くかわすことのできない人達が、欧米人から「卑怯」と思われることが、どんなに劣等感を刺激されることか。あまり知られていないが、韓国にも「従軍慰安婦問題」を恥ずかしく思っている人達も多くいる。そうであろう。普通の感覚では韓国の恥辱の歴史だからである。

この点で李明博大統領は大失策を犯した。日本外交にとっては相手のオンゴールによって、国際司法裁判所に提訴できる機会が与えられたからである。もちろん、どんなことがあっても韓国が提訴を受けて立つことなど有り得ない。それにも拘わらず、日本は絶好のチャンスを得た。ここに領土紛争があることを国際社会にただで宣伝することができたのであるから、大成功である。

逆の意味で、尖閣諸島に対する石原都知事の買収案やその後始末としての政府による「買上げ」などは愚の骨頂である。単なる「買上げ」が、あたかも尖閣諸島を日本が「国有化」したかのような響きで、反日キャンペーンにつかわれてしまった。

今の経済状況下では、両国政府共に、紛争を回避したいのが本音なのに、共に政権移行期にあって、人気取りのために強硬姿勢を示さなければならなくなってしまった。双方の経済的な損失は莫大である。

そもそも、英国がフォークランドの領有を守ったからと言っても、その後の英国民の生活には何の関係もない。サッチャーが女を上げ、英国人がかつてのノスタルジアをちょっと満足しただけに過ぎない。植民地時代ならいざ知らず、経済的にはつぎ込むばかりで、回収の目処の立たないところを自国領とすることなど、ばかばかしいというのが本音なのではないか。国民がサッカーゲームの勝利に酔ってみても、そんなものは数週間で消え失せてしまう。

だから「正義」ほど始末に負えないものはない。日本の「正義」が韓国や中国の「正義」とぶつかる時には、ポピュリズムが台頭して、双方が損失を被る。

政治とか外交は「正義」を標榜して国民の目の前で繰り広げるものではない。テーブルの下で、何を捨て何を得るかのせめぎ合いとして実施すべきなのである。

日本では日露戦争に勝ったつもりでいたが、戦争継続能力を失っていたのであるから、モスクワ占拠のナポレオンのようなものであった。最も強気で戦争に突き進んだ小村寿太郎が、ロシアの要求に屈し、国民の不評を一手に引き受けたのは歴史のアイロニーであった。

短歌

行雲流水（三十七）

石黒修身

近詠二十首

めぐまれて傘寿を祝う幸せを誰に謝せんか来し方思う

不穏なる世情なれども吾なりに楽しくありし逝く年惜しむ

いくつかの大病を経て八十年生きて来たるは望外ならん

吾は傘妻は喜の寿を相共に迎えしことは何の余慶か

予期せざる長生きなるか八十路越え何が変った何も変らぬ

吾八十路越えたることは紛れなし老いの自覚の乏しきままに

子や孫に愛着あれどこの齢になれば思いは淡淡として

駒形のどぜう鍋屋に同期なる酒徒ら集いて八十路を語る

八十路越え先の短い残生を簡素に暮すシンプルライフを

シンプルに暮さんとしてマンションに転居図れり老後後期を

妻の託す衣裳引取る男らは小金を置きてそそくさと去る

古道具(こどうぐ)を引き取る男総髪で勿体ぶって買値を告げる

永年に溜りし不要の品々を捨てる決断「断捨離」と言うか

身の内の訃に駆けつけし出雲路の過疎の集落寒々として

「馬路(まじ)」という無人駅から帰り来ぬ葬りの旅は一輛電車で

過疎という呼び名はこれか古き家軒を連ねど人影はなし

故郷はどこかと問われ「札幌」と応(いら)うとき吾なぜか昂ぶる

とりたてて良き事のなき故郷はまた「日ハム」の優勝に沸く

内外に厳しき世情でありたれど慶きこともありて年は暮れゆく

新しく迎える年は内外に安らぎ満ちる年であれかし

アメリカ雑記帳（二）

三戸岡道夫

第二章　アメリカ銀行における仕事の合理性について

アメリカ銀行が一人のイタリア人によってアメリカに設立されて六十年（一九六五年現在）。たった六十年の間に世界一の銀行にまでなったその秘密は、誰にとっても興味ある問題である。

その理由は、一般に次の三点があげられている。

その一は、営業基盤であるカルフォルニア州が、最近のアメリカで最も成長度が高い州であることである。アメリカではその州以外には銀行の支店設立が認められていないので、その州の成長度の如何が非常に大きな影響力を持つのである。

その二は、アメリカ銀行が消費者金融の推進を中心に、ピープルスバンクとしての経営方針を、一貫して貫いてきたことである。

そして第三は、多くの銀行を次々と急速なテンポで合併してきたことである。現在の支店数は約九百ヵ店である。

しかし私はアメリカ銀行で実際に学んでみて、以上の諸要素を内側から支えるもう一つの柱、すなわち第四の要素のあることがわかった。それは、

（仕事の合理性）

であった。もちろん仕事の合理性は、アメリカ銀行に限ったものでなく、一般にアメリカの企業の特色であるが、私はアメリカ銀行でのトレーニーの間、アメリカ銀行の仕事の仕組みや、仕事の仕振りを見て、とくにこの点に感心したのである。徹底した合理的な仕事の管理が、アメリカ銀行を六十年にして世界一の銀行に押し上げた大きな原動であることはまちがいなく、この点は日本の銀行経営に大いに参考になると思われる。

もちろん、その他にもいろいろ参考になるものもあるが、しかし日本とアメリカでは、経済基盤、経済の在り方が異なり、国民の消費生活のあり方も異り、したがって銀行の在り方も異るから、アメリカでよいといっても、

日本で直ちに適用できないものも多い。

しかし仕事の合理性という点については、現在の日本の銀行に取り入れる余地が多いのではないかと思われる。そこでアメリカ銀行の営業がいかに合理的に運営されているかについて、多面的に紹介してみたい。

一、なぜ仕事の合理性が必要か

アメリカ銀行の経営の根底には、

（如何にして利益をあげるか）

というコスト意識が、非常に徹底している。すなわち、如何にしてコストを下げるかということは、経営の一大課題である。コストダウンのためには当然仕事の合理性が必要条件となり、そのためには事務の合理化が必要となり、事務の合理化のためにはその一環として、機械の投入が必要――というように、すべての点が必然性をもって結びついているのである。したがって機械の投入にしても、真にコストダウンに役立つものだけが最小限度投入されており（もちろん最小限度といっても、非常に膨大な量であるが）、無駄な機械の投入はない。

ここで我々が考えなければならぬのは、「仕事の合理性」ということと、「事務の合理化」ということとは、別のものであるということを認識する必要がある。すなわち企業経営に必要なのは「仕事自体に合理性を持たせる」ことであり、それを事務面で推進するに当って、「事務の合理化が必要」であるということである。したがって事務の合理化を考えるには、如何に仕事自体を合理性をもったものにするかということを考えていかないと、コストダウンに結びついていかないのである。

二、時間外勤務がない

アメリカ銀行の仕事がいかに合理的に行われているかを知るために、

（アメリカ銀行には時間外勤務がない）

という点を考察してみたい。時間外勤務をなくすために、アメリカ銀行の営業店の仕事ぶりを見ると、そこに仕事の合理性が集中的に現われている。

時間外勤務をなくすということは、なかなか難かしい問題である。しかし時間外勤務をなくすということは、精神運動だけでは限界があり、

（時間外勤務をしなくても済むような仕事の仕組み）

を作ることが必要なのである。そのルールに従って一生懸命仕事をやっていれば、時間外勤務をやらなくてもいいという仕事のシステム、もっと極端にいえば、「時間外勤務をしたくても出来ない仕事のシステム」、これがアメリカ銀行では確立しているのである。

三、一日の仕事の流れ

ではアメリカ銀行の営業店では、如何なる方法によって時間外勤務をせずに仕事をしているのであろうか。まず最初に、アメリカ銀行の営業店の一日の仕事振りを、私が三週間ばかり研修を受けたM支店を中心に、具体的に見てみたい。

M支店はサンフランシスコの商店街の中心にある、非常に忙しい店である。アメリカ銀行の開店は朝十時であるが、開店前にはもう店の前に客が二十人ぐらい待っている。そして十時に店が開くと、客はどやどやとロビーに入ってきて、カウンターの前に行列を作る。アメリカの客は全部行列を作って、待つのである。ちょうど日本の郵便局の窓口と同じである。椅子などというものは、広いロビーにせいぜい一つか二つあるだけである。

テラーの窓口は全部で十四あるが、常時開いているのは九つか十である。そして非常に忙しい時には、窓の数をふやすのである。

カウンターの上にはスクリーンが立っていて、客から営業室の中は見えないようになっている。ちょうど日本の郵便局のようである。そのスクリーンに取り付けられている扉を、各テラーが内側から開いて仕事をする。もちろん新しく作られた営業店などには、もう少し開放的なスタイルの店もあるが、日本の銀行のように開放的なスタイルのものはなくて、この点私はアメリカの銀行の案外古くささに、少々驚いたのである。

忙しい日には、いつも大体、四十人から五十人くらいの客がロビーにつめかけ、長い客の行列は、三時に店を閉めるまでつづいている。

こんなに忙しくては、銀行員の夕方の帰りはどんなに遅くなるだろうかと、心配になる。しかし三時に店が閉ると、各テラーは眼の色を変えて自分の勘定を締めはじめる。そして三時半から四時頃にかけて、逐次勘定を締め終り、自分の勘定が締め終れば、テラーはさっさと帰ってしまうのである。したがって四時頃には、大部分のテラーは帰ってしまい、あとに残っている者も、五時になれば全員仕事を終えて帰ってしまい、銀行の建物の中には誰一人として居なくなってしまうのである。

四、なぜこんなに早く仕事が終るのか

そんなに忙しい営業店が、なぜ、そんなに早く仕事が終るのか。全部機械がやるからか。いや、そうではない。もちろん機械も使っているが、営業店にある機械の数も、日本の銀行にくらべて、驚くほどたくさんあるわけではない。ちなみに、アメリカ銀行の預金通帳への記入は手書きであり、機械を使ってはいない。

アメリカ銀行の営業店の仕事がはやく終る理由を考えてみると、

（なにかすばらしい画期的な方法によって成功している）

ということではなくて、要は、

（人間の知恵で考えられるあらゆる方法を、あらゆる面において徹底的に行い、地味な努力の集大成である）

ということである。

五　完全テラー制の実施

仕事がはやい第一の原因は、各営業店が、

（完全テラー制度）

の実施によって、事務処理をしているからである。

最近は日本でもテラー制度が徐々に行われているが、アメリカ銀行の営業店の仕事は、日本の銀行のように縦割りでなく、完全に横割りである。日本のように仕事の種類がそのまま係になっていて、当座預金係、普通預金係、定期預金係、為替係などという係があるのではなくて、アメリカ銀行では何でも受付けるテラー係と、後方の記帳事務係の、二種類しかないのである。一、二線の、完全分離である。

したがってテラーは自分の勘定が合えば、あとは用事がないわけである。三時に店が閉ると、たとえ締めるのに一時間かかったとしても、四時には完全に家に帰れるわけである。それ以後残っていても、テラーにはやる仕事がないのである。

次に記帳事務の方であるが、アメリカ銀行では、どの営業店でも、記帳事務にプルーフマシンを使っている。その店の事務量にしたがって、一台または二台を使用しているが、これはとくに重要な仕事であるので、どの店でも、ベテランのしっかりした女性が担当している。

テラーの帰った後は、この記帳係にしわ寄せが来るわけであるが、記帳事務も、朝のうちからテラーの処理した伝票や小切手を集めてきて、逐次プルーフマシンにかけているから、一日の中の事務量は大体平均しているので、五時までには機械処理をしてしまうことが出来るのである。

各営業店ではそれぞれマイクロフィルムを持っているから、処理された小切手はあっという間に写真に写されて、一まとめにして本部の事務センターに送ると、営業店の一日の仕事はこれで終りというわけである。あとは本部の事務センターが徹夜で処理するのであり、これは本部の仕事というわけである。

六、巧妙なテラーの窓口の開閉

次にテラーの勘定の締め方である。どのテラーも三時になると一斉に窓口を閉めるというのではなくて、時間に段階をつけて順々に窓口を閉めていくという、巧妙な

方法を行っている。これによって全体の仕事の流れをスムーズにし、全体の仕事を早く終わらせるのに、極めて効果的な役目を果している。

その具体的方法は、テラーチーフは二時三十分頃になると、自分の窓口を閉めてしまうのである。だから、その頃に自分の窓口の前に客が並ぶと、

「もうこの窓口は閉めるから」

と言って、他の窓口に客を移してしまう。すると客も別に不平な顔もしないで、別の窓口に移っていくのである。

そしてテラーチーフは自分の勘定の締め上げにとりかかり、三時には勘定を締め上げて、彼女の現金の再勘が、オペレーション・オフィサー（日本の銀行でいえば担当の役席）の手によって、始まるのである。

では、手の空いたテラー・チーフはどうするのか。

そのような動きと並行して、他のテラーも、一人は二時四十分、次のテラーは二時五十分頃と、順々に窓口を閉めていくので、テラー・チーフの手が空いた頃には、二時四十分頃に窓口を閉めたテラーの締め上げが終わっており、テラー・チーフはそのテラーの現金の再勘を始めるのである。

順々にこうしていくと、一度にどっと再勘が始るということがない。一人の再勘が終ると、次の者の再勘がやってくるというように、仕事が順を追って、一ヵ所に仕事の滞溜が起ることのないように、巧妙に仕事が流れていくのである。そのため、はやいテラーは三時半頃には再勘がすんでしまうので、そのまま家に帰ることが出来るのである。

この方法は、その日の勘定をはやく終らせるという点からみて、非常に効果的な方法であると思われる。

日本の銀行の場合であると、あるテラーが二時半ごろに、

「私の窓口はもう締めますから、受け付けません。他の窓口へ行ってください」

などというようなことを言うことは、ちょっと考えられない。この点、アメリカ銀行の完全テラー制と、物理的にテラーの窓口が開閉式の扉になっていることが、非常にやりやすくなっているといえようか。

そしてまた、そのようなやり方をしても、別に文句も言わず、それを当然としている客の態度も、アメリカ銀行にとって非常に好都合であるといえよう。

それは、そのように銀行が客を躾けたのか、それとも、銀行とはそのようなものだと客の方が諦めているのか、またアメリカの社会の習慣からみて当然のことなのか、その辺はよくわからないが、とに角アメリカ人はどこでもよく並ぶ国民であるから、銀行のこうした扱いにも、それほど抵抗がないのかもしれないのである。

とに角、アメリカ銀行の窓口の応接は、日本のように、

（如何に客にサービスするのか）

というよりも、

（如何にして自分たちの仕事をはやく終らせるか）

という線にしたがって、客をコントロールし、仕事をすすめている、と見受けられるのである。

そのような例として、次のような場面も時々見受けられた。テラーは営業時間中でも、手許の仕事が溜ったり、またちょっと整理する必要が出来たような場合には、ちょっと自分の窓口を閉めて、その仕事を片付けてしまうのである。しかし客の方も別に怒ったような顔もせずに、他の窓口へ移っていく。そしてテラーはその仕事が片付くと、また扉を開いて仕事を始めるのである。

また、客が眼の前に並んでいても、平気で待たせておいて、お札を数えてゴムバンドでとめたり、整理したりしている。また、ちょっと客がとぎれると、たまった札に帯封をしたり、コインを紙で巻いたり、それまでの勘定の仮締めをしたり、少しも手を休めていないのである。

すなわち如何にしたら三時以後の仕事を少くするかということを一生懸命考えて、仕事をしているのである。

七、本部への事務集中

完全テラーシステムがこのようにスムーズに動く前提には、支店事務が本部の事務センターへ集中されているということを、見逃すわけにはいかない。営業店には、預金も貸出金も、元票はないのである。

本部の事務センターには厖大な機械が投入され、人間が三交代制で、二十四時間フル稼働し、さながら工場のようである。

とくに忙しいのは夜で、夕方、各営業店から送られてくるおびただしい小切手の洪水は、徹夜で処理される。そして各営業店ごとに、客の預金と貸出金の残高一覧表が作られ、毎朝七時半までに各営業店へ届けられる。各営業店ではその残高表によって仕事をしているのである。

したがって営業店では、元票への記入や、元票の管理、当座預金の交換引落事務などの仕事がいっさい無いわけであり、したがって非常に営業店の事務が簡単になり、事務負担が軽減されている。

すなわちアメリカ銀行は、昼も夜も、二十四時間働いているわけであり、こうした本部の夜間の陰の仕事があればこそ、昼間の営業店のテラーの仕事が単純化され、軽減されて、はやく帰ることが可能になるのである。

また本部への事務集中によって、原資料は本部へ集っているのであるから、報告書はほとんど本部で作成され、日本の銀行のように、営業店がたくさんの報告書の作成に悩まされるということは、ないのである。

以上のように本部に事務が集中され、大量の機械が投入されているので、営業店にある機械は、私が想像していたよりも少なかった。あるのは数台の加算機と、プルーフマシンが一台か二台、それにマイクロフィルム、そ

れだけである。

預金、貸出金の元票は本部に集中され、預金通帳への記入は手書きであるから。当座預金や普通預金の機械もないし、また手形割引の計算機などもない（もっともアメリカの銀行では、貸出金はほとんど手形貸付で、手形割引はあまりない）。

また為替も日本のように多くなく（その代わりマネーオーダーという送金小切手がその役目を果している）、また手形、小切手の取立て業務も本部の事務センターへ集中しているから、為替のテレタイプも営業店にはない。

加算機は日本のソロバンに当るものであるから、これを別とすれば、日本の銀行の支店になくてアメリカ銀行の支店にあるものといえば、プルーフマシンと、マイクロフィルムだけということになり、営業店での必要最小限の機械しか使っていないのである。

したがって事務の合理化は、たんに機械の大量投入ということではなくて、その前提となる仕事の仕組み自体を合理性あるものに作り、その仕組みにしたがった合理的な機械が投入されているということなのである。

八、仕事が残ったら、どうするのか

アメリカ銀行の営業店では、こうして五時には全員帰ってしまうわけであるが、しかし時には、

（その日のうちに仕事が片付かないで、仕事が残ってしまう）

という問題が当然起きる。その時は、どうするのか。

アメリカ銀行では、その日に処理できなくて、仕事が残ってしまった場合には、翌朝これを処理する。アメリカ銀行の開店時間は午前十時であるから、仕事が残った場合には、八時十五分から八時三十分までの間に出勤して、十時の開店までに、前日の仕事を片付けるのである。

計算係も夕方五時になると帰り、翌日の午前中に計算して、お昼までにバランスを作り上げるのである。すると計算係は午後には手が空くので、窓口に立ってテラーの仕事をするというように、弾力的に仕事をしている。

また最終的に勘定が合わない場合も、五時になれば帰って、翌日の朝、その調査を行っているようである（もっとも、非常に大きな預金違算があったような場合には、果してどのようにしているのか、そこまではわからないが……）。

日本の銀行でよく見られる、勘定が合わないと、大勢の人間が、八時、九時まで残って調べ上げ、やっと見つかると、それから計算係が仕事を始め、夜の十一時頃に一人とぼとぼ帰っていく、というような現象は見当らないのである。

私はある時、こんな光景にぶつかった。それはある朝、いつものようにM支店に行くと、その雰囲気が尋常でな

かった。昨日の勘定が合わなかったらしく、いろいろ騒いで調べていた。

その時のオペレーション・オフィサーの顔といったら、神経質に引きつって、アメリカ人でもやはり緊張した時には、こういう顔になるのだなと思った。しかし十時になると店を開けなくてはならないので、テラーは全員窓口で仕事を始め、あとはオペレーションオフィサーと、テラーチーフの二人で、一生懸命に探していた。だが、お昼すぎにその問題は解決したらしく、もとの平静さに戻っていた。

もちろん、アメリカ銀行がこのようだからといって、間違いをいい加減にしているわけではなく、またこのような方法が最上なのかどうか、私にはちょっと解らないのであるが、要は考え方の基本が、

（時間はいくらかかってもいいから、ミスの原因を徹底的に追求しなければならぬ）

という考え方ではなくて、

（限られた時間の中で、如何にその事後処理をするのか）

という考え方で仕事をしていることが、アメリカ銀行らしいと思うのであった。

九、入金・出金の時間が遅くならない

はやくその日の勘定が締まるためには、伝票の動きがはやく止まることが不可欠である。

日本の銀行の場合には、三時に店は閉っても、

○横の入口や、裏口から、なじみの客が入ってくる。

○貸付係からの入金がある、

○四時頃になっても、為替のテレタイプからの入金がある。

○それが終った頃に、今度は渉外係がどさっと集金した金を持ってきて、入金する、

といった調子で、いつまでたっても勘定の動きが止らないのである。

そしてやれ検印だ、元票の整理だ、計算係と計算が合った、合わない、とやっているうちに、どうしても慢性的に、六時、七時となりがちなのである。

アメリカ銀行では、渉外係という外廻りの担当者はまったく居ない。したがってそのように遅い時間の入金はない。銀行に用事のある人は銀行に行くように躾けられているから、銀行員が客を訪問しなくてもいいのである（もちろんその根底には、日本のように銀行間の過当競争が激しくないという、アメリカの銀行業界の事情があるわけであるが……）。

三時以後は入口のドアに鍵をかけてしまうから、客は誰も入ってこない。裏口からも入ってこない。客が三時以後に入金したいと思えば、ナイトデポジットが発達しているから、ナイトデポジットに抛り込むのである。

こうしてアメリカ銀行の営業店では、三時に店を閉め、

客が帰れば、一切の勘定の動きはなくなるわけであるから、これでテラーが四時頃に仕事が片付かなければ、不思議というべきであろう。

十、仕事の権限の明確化

次にアメリカ銀行では、仕事の権限が明確で、加えて権限の委譲が進んでいることが、仕事がはやく処理される大きな原因である。

テラーはその能力に応じて、支店長から権限を与えられていて、その権限内の仕事についてはテラー限りで処理してしまい、役席の検印を受ける必要はない。日本の銀行の場合には、窓口で受付けたものを、後方の記帳係が機械で記入し、それを役席が検印するから、時間がかかるのである。アメリカ銀行では、テラーだけでほとんど全部の仕事がすんでしまうので、はやい。そのかわり、もしその仕事をミスすれば、それはテラーの責任になる。

役席（オペレーションオフィサー）の指示を受けなければならない場合とは、自分の権限以上のものを処理する場合だけであるから、その件数は少ない。したがって仕事が極めて能率的なのである。

貸出の場合でも、支店長、次長、貸出担当者と、それぞれ貸出の権限を持っていて、その権限内であれば、自分の判断だけで、支店長にも相談せずに貸出をすることが出来る。しかし、いったんそれが焦付けば、貸出担当者の責任であり、もし他の支店へ転勤した場合でも、その担当者の責任において回収しなければならないのである。そして貸出の事故は全部人事考課表に記入され、そうした事故があまり多いと、退職させられるのである。

それと同様に、テラーも自分の権限内の仕事は自分の責任であるから、テラーの仕事の仕振りは極めて厳格である。したがって便宜扱いのようなものは、あまり見られない。いい加減なやり方でやって問題が起きれば、自分の責任であるから、後からトラブルの起きそうな事務処理は、いっさいやらないわけである。

したがって一件一件を完全な形で処理していくから、便宜扱いの事後処理のような面倒な仕事はほとんどなく、これらも事務能率向上に非常に役立っている。手続が不完全なものについては絶対「ノー」で妥協しない。

十一、事務内容の単一性の確立

以上のようにアメリカ銀行では、オールテラー制と、一・二線の完全分離によって、テラーの事務内容が均一化されているので、テラーの代替性が非常に自由であり、支店全体の仕事の円滑化に役立っている。

たとえばテラーが病気とか休暇で休み、支店の人員が足らない時には、本部にユーティリティという補助テラーが居て、支店に手伝いに来る。仕事の内容が単一化されているので、知らない支店に手伝いに来ても、すぐテラーとして一人前に仕事が出来るのである。

これに較べて日本の銀行の場合には、完全テラー制でないので、アメリカ銀行のようなやり方はちょっと不可能である。

たとえば為替係が一人休んだとする。するとその分だけ仕事の終るのが遅くなり、その影響で、当座預金や普通預金、貸出金への入金など、他の係の仕事も遅くなり、最後に計算係が遅くなり、担当役席も遅くまで居残るというように、一人の欠席が店全体に連鎖反応を起してしまうのである。

しかしアメリカ銀行の営業店では、このような悪い連鎖反応は起らない。完全テラー制度はこの連鎖反応を断ち切るのに、非常にすぐれた方法なのである。

事務内容の単一性の確立は、各テラーの受持つ仕事量のムラをなくし、支店全体の仕事が同一のスピードで進むのに、非常に有効なのである。

十二、労働量の均一化と適正人員の配置

営業店で働く人間の労働量の均一化と、適正人員の配置は、極めて重要なことである。アメリカ銀行で事務の単一性が確立されていることが、各人の仕事の量のばらつきをなくし、労働量の均一化をやり易くし、また営業店の事務量に見合う適正人員の配置を、合理的にさせている。

①労働量の均一化（特定の人に仕事を片寄らない）

テラーはどんな仕事でも窓口で処理するのであるから、どのテラーも仕事の内容は同じであり、営業店へ来た客は、どの窓口でも用が足せるわけである。ちょうど私達が日本で汽車や電車の切符を買うのと同じように、客は空いている窓口へとつめかけるから、特定のテラーだけへ客がつめかけて、そのテラーだけが特に忙しいという現象は起きないのである。

日本の銀行のように、普通預金の窓口は客が多くてキリキリ舞をしているのに、当座預金の窓口や出納係の窓口は暇であるとか、あるいは普通預金の窓口を人員増加したら、今度は当座預金よりも普通預金の方が暇になった、などという現象は、アメリカ銀行では起きないわけである。

すなわち仕事分担のアンバランスが、理論的にないわけで、営業店のロビーに客がいる限り、すべてのテラーの事務負担割合は、同じなのである。

②適正人員の配置

以上のように各人の労働量が均一化されているということは、営業店の平均窓口事務量に応じた、適正人員の配置が極めてやり易いわけである。

すなわちどの窓口にも平均した仕事量が流れてくるわけであるから、もし非常に客の待ち時間が長すぎるという現象が起れば、それはテラーの人員が不足するからであり、また逆に客がいなくてテラーの手が空いている時間が多いという現象が起れば、それはテラーの人数が多すぎるというわけである。すなわち、

店全体のテラーの仕事量をA、
テラー一人当りの事務処理能力をY、
テラーの人数をNとすれば、

$$A = Y \times N$$

になるまで、テラーの人数を増減すればよいわけである。

事務内容が単一されていない場合には、たとえ店全体としては、「$A = Y \times N$」の場合でも、どうしても労働量の平均値（Y）以上に働かねばならぬ人が出てくる、そしてその反対に平均値以下の働きですませている人がいる——、そしてそれが他の係へ連鎖反応を起して、店全体としては、常に忙しい、忙しいという雰囲気に包まれてしまうのである。

十三、パートタイマー

アメリカ銀行ではこうした事務内容の単一性の確立によって、すべての人間の仕事にばらつきがなく、うまくいっているわけであるが、しかしそれですべて解決されているわけではない。

アメリカ銀行でも、テラーの仕事には一日の中に波があり、また一週間のうちにも波がある（月曜日と金曜日が一番忙しい）。

また二線事務については、事務内容の単一化は、なかなか困難である。

そこでこの問題をうまく調整しているのが、パートタイマーの大量採用である。アメリカ銀行では、レギュラーでない仕事や、また「この仕事は一日かけなくても、四時間もあれば出来る」というような仕事については、四時間だけ仕事をするパートタイマーに、切りかえているのである。

パートタイマーには二種類ある。

①毎日出勤してくるパートタイマー

これは一日の仕事の波を解消するために採用しているパートタイマーである。

たとえばある営業店で、昼から午後のテラーが忙しい場合には、その時間だけテラーの仕事をするのである。したがって彼女は、毎日午前十一時に出勤してきて、午后の三時になるとさっさと帰っていく。

また午前中だけ、第二線事務の処理をするパートタイマーもいる。アメリカ銀行では、前日の残った仕事は、翌朝に処理するから、午前中の第二線事務は忙しいのである。

②一週間のうち、日を決めて出勤してくるパートタイマー

これは一週間の仕事の波を調整するためのパートタイマーである。たとえば月曜日と金曜日が忙しければ、この二日間だけパートのテラーとして出勤するのである。

週休五日制のアメリカ銀行では、金曜日の業務は忙しく、午後七時まで店を開いているのである。また月曜日だけカード箱の整理にやってくるパートタイマーなどもおり、その種類によっていろいろ使い分けているのである。

こうしてアメリカ銀行では、

（最大事務量を予定した、人員配置）

という考え方ではなく、

（最小事務量を予定した、人員配置）

という考え方であり、そしてそれをオーバーした仕事量は、パートタイマーによってカバーするという、極めて合理的、能率的に人員コントロールをしているのである。

このようにアメリカ銀行の仕事をよく見ると、時間外勤務はしないが、その代わり労働時間中の労働密度は、非常に高いのである。テラーたちの手がすいて仲間たちと話をしたり、また仕事がなくて、手を空けて客の来るのを待っているというようなことはない。もしそのような現象が起きれば、その営業店は人員が余っているということになって、人員が減らされるか、あるいはパートタイマーに切り替えられるのである。

アメリカ銀行の仕事ぶりは、ちょうど休むことのない工場の流れ作業と、同じような仕事ぶりである。したがってアメリカ銀行では、職場の人間管理というよりも、労働力管理といった方が、適当なように思われる。

十四、ユーティリティ

アメリカ銀行の本部にはユーティリティという補助テラーがいて、営業店で、休暇とか病気、また退職などで一時的に人員が足らなくなった場合に、営業店へ手伝いに行くようになっている。アメリカ銀行では、テラーの仕事はどの営業店へ行っても同じわけであるから、どの営業店へ行ってもすぐ仕事が出来るわけである。しかしそうは言っても、

（今日はこの支店、明日はあの支店…）

と渡り鳥のように歩くわけであるから、相当実力のあるテラーでないと勤まらないわけである。したがってユーティリティは、年齢的にも中堅層の、能力の高いベテランのテラーによって構成されている。

事実、私がM支店でお目にかかったユーティリティも、四十才ぐらいのおばさんで、

「昨日はS支店、今日はM支店、明日はどこの支店へ行くのかわからない」

と、旅役者の唄ではないが、（流れ流れてどこへ行く）

と言っていたが、仕事は非常なベテランで、
（ベテランだからユーティリティになれたのだ）
という誇りを持っていた。

十五、弾力的な仕事ぶり

アメリカ銀行の銀行員は、自分の仕事はきちんとやるが、他人の仕事は手伝わない。したがって店全体のチームワークが取れず、仕事振りに弾力性がないのではないかと思われるが、必ずしもそうではない。かえって、非常に流動的な面もある。

たとえば私が研修を受けていたM支店の場合、計算係の女子は午前中にバランスを作り上げて手が空くので（もちろん前日のバランスである）、午後には窓口に立ってテラーの仕事をするのである。

また、月曜日や金曜日という忙しい日には、ロビーの客の混雑工合を見て、二線事務をやっている者や、時には役席なども、適宜窓口の扉を開いてテラーに早替りし、忙しい窓口の仕事を支援するのである。

また仕事の分量が多くて、大勢でやらないと出来ない仕事、たとえば毎日の交換落ちの小切手の整理（アメリカ銀行では交換落ち後の小切手は全部客へ郵送で返却するから、この小切手の整理は大作業である）とか、その郵送事務とかは、全員が力を合わせてやるのである。

しかしそのやり方は、全員が一ヶ所に集って残業してやるというのではなく、朝、各人の責任作業量を各人に手渡し、各人は帰るまでに、自分の手の空いた時間で小まめに処理してしまう、というやり方なのである。だからテラーは、ちょっと手許が暇になれば、その共通の仕事の処理にせっせと精を出し、帰るまでに処理してしまうのである。

このように、支店全体で処理しなくてはならない仕事は、全員が公平に分担してやるわけで、そのやり方は、
（公平にシェアーを分けて処理する）
という方法であり、手の空いた者や、気のきく者たちだけが処理するという、日本流の仕事の協力の仕方ではないのである。

十六、理想的な書類の整理

アメリカ銀行では、本店でも、支店でも、非常に合理的に、そして集中的に書類が整理されていて、それが事務能率向上の、大きな力となっていることを痛感した。

たとえば一人の客からサインの届けをしてもらう場合でも、サインカード用、当座預金用、普通預金用、定期預金用、貸付金用などと、いくつものサイン届けをもらって、それぞれの部署で保管しているというのではなく、アメリカ銀行では一人の客のサイン届けは一枚だけであ

る。それが営業室の中央のキャビネットに、整然とカード式に保管されていて、必要なテラーは全部そこへ行って、照合するのである。

また貸付係のファイルなども実によく整理されていて、一冊のファイルを見れば、十年間ぐらいの客の取引状態、資産状態などが、すぐわかるようになっている。これはファイリングの思想が発達しているのと同時に、保存すべき書類の種類が明確になっていること、稟議書自体が非常に簡素化されていること、ボリュームがそれほど多くないので、保存に便利であること、

などという点が確立されているから、出来るのである。

また本店の方にも、ファイルセンター、書類保存倉庫、保存ケースなどが完備していて、必要なものはすぐ取り出せるが、不要なものはどんどん捨てるという体制が整っているのが、事務のスピード化に役立っている。

十七、能率的な店内配置

よく銀行の営業店では、金庫のある場所が遠いことが問題になるが、アメリカ銀行では金庫は原則として、現金の格納と、貸金庫しかないから、金庫の位置はあまり問題にならない。預金係でも貸付係でも、いっさいの書類は営業店にあるキャビネットの中に入れたままで、鍵をかけて、そのまま帰るのである。

またアメリカ銀行のテラーはすべて立ったままで仕事をしているから、机も椅子もなく、営業店の中は広々として、動きやすい配置になっている。非常に疲れた時に腰掛ける椅子が二、三脚、予備としてあるが、ほとんど使用していない。

机の数が非常に少いので、店内移動の障害物が少なく、したがってサインカードを一箇所に集中しても、それほど不便を感じないわけである。単純なことのようで、このような点も、能率向上に役立ってことも見逃せないのである。

十八　結び

以上アメリカ銀行の仕事について、営業店の動きを中心に若干記してみたが、その根底に、仕事に対する合理性の精神が強く流れていることが具体的に理解できて、大変勉強になった。

しかしそれ以上に私が感心したことは、こうした事務の合理化は、アメリカ式の劃期的な方法によって一挙に出来上ったというのではなくて、実際の仕事の中からいろいろな方法を工夫し、考え出し、細かい努力を積み重ねて、その地味な努力の集大成によって、達成されたのだということであった。

（つづく）

先見の明（三）

―韮山代官江川太郎左衛門の遺業と世界遺産への道―

堀内永人

五、江戸の撃剣館道場で剣道の修業

一、学問と技芸

封建時代における武士階級は、文武両道を磨くことが必須条件であった。

そこで、太郎左衛門の剣道修業に密接な関係がある学問と技芸の師について、簡単に述べておこう。

次ぎの人たちは、武人に対する文人であるが、奥義を極めれば、文武両道には違いがなく、文の道を極めれば武の精神も極めている

太郎左衛門は、父英毅の多彩な交友関係の中から、

儒学は、水戸学の藤田幽谷、市河寛斎（漢詩）、山本北山

漢詩は、山梨稲川、大窪詩仏（書家）、頼杏坪、

戯作（作文）は、大田南畝、山東京伝

医学は、杉田玄白、宇田川玄真

書は、市川米庵、大窪詩仏

測量は、間宮林蔵

絵画は、谷文晁、大国士豊、立原杏所

などに師事して、幅広く学問と芸術を学んだ。

太郎左衛門は、自画像などいくつかの絵や書を残している。それらの絵については、江戸時代中期の巨匠、円山応挙（一七三三―一七九五）の流れをくむ谷文晁（一七六三―一八四〇）が、指導している。

文晁は、和歌、絵画に非凡な腕を見せる老中松平定信に重用され、定信の伊豆半島海岸視察にも随行しており、そのときに、韮山の江川邸に滞在して、太郎左衛門に絵の描き方を初歩から指導したといわれている。が、太郎左衛門には、もう二人の絵の先生がいた。大国士豊と立原杏所で、実際に絵を指導したのは、有名人である谷文晁ではなく、この二人のうちのどちらかと思われる。

もちろん文晁も教えたことは間違いないが、江戸で有名な谷文晁が、長期間にわたって韮山で教えたとは考えにくい。

大国士豊は、円山応挙の十哲といわれるが、生没年が不明で、残された作品も少なく、謎の人物である。

したがって、太郎左衛門は、公式には、謎の人物である大国士豊の弟子であるとは言いにくかったので、著名な文晁の名前をいったのではなかろうか。

文晁の後を受けて指導した立原杏所（一七八五―一八四〇）は、水戸出身で、谷文晁について文人画を学び、花鳥画に新境地を開いた。太郎左衛門の絵に、花鳥画が多くみられるのは、立原杏所の指導によるところが多いと思われる。

二、剣道の修業と洋学

学問の次の修業は、武道である。

江戸時代を含めて武家政治の時代は、身分が上になるほど学問や武道を熱心に修業したものである。

俗に、坊ちゃん育ちの人や、金持ちの人が、なぐさみにする芸事を「殿様芸」といって、通りいっぺんの腕前や技術しかなかった。しかし、本物の殿さまは、趣味やたしなみ程度の修業ではなく、家臣の模範になるように、きびしく修業したものである。

したがって、高級官僚である代官の子弟ともなれば、その修業は並大抵のものではない。

武道とは、武士が身に付ける武術の道で、剣術、槍術、弓術、馬術、柔術などがあるが、その中で、もっとも代表的な武術が剣術（剣道）である。

太郎左衛門は、十歳頃から、兄英虎（倉次郎）に倣（ならう）って、江川邸内の道場で、代官所役人の指導を受けて剣道を修業した。

通常ならば、代官の若様相手の指導には、代官所の役人も手心を加えて、あまりきびしくしないものであるが、父であり代官である江川英毅は、特にきびしく修業させたので、指導する側も、指導を受ける太郎左衛門も真剣（本気）になって稽古した。

この頃の武家社会は、二〇〇年余続いた徳川政権により、幕府の組織が固定化して、旗本、御家人たち幕臣の就職はきびしかった。ましてや、長男は父親の跡目（家督や財産）を継ぐからよいとしても、次男以下の子弟の就職口は、なかったといってよいだろう。

そのため、次男以下が世に出るには、男子のいない幕臣の養子になるか、一芸を身に付けて道場を開くしかなかった。

しかし、養子になるにしても、無芸では相手にしてもらえなし、道場を開くにしても、その道を極める必要がある。

そこで、健康な者は武道に血の出るほど精進し、健康

に自信のない者は人の二倍も三倍も努力して学問技芸を身に付けた。

江川家においても、次男である太郎左衛門が、世に出るためには一芸に秀でることが必要であるとの思いが父の英毅にあり、文武両道の修業にきびしかった。

そのうえ、太郎左衛門自身、生まれつきの負けず嫌いもあったので、激しい稽古に明け暮れた。

激しい稽古の甲斐あって、太郎左衛門の剣道の腕前は、歳月の経過とともに上達し、さらに稽古が激しさを増していった。

太郎左衛門は、少年ながらも父親譲りの長身と腕力で、稽古相手と竹刀を交わしたので、稽古相手が、悲鳴を上げ、

「参りました」

と、いって引き下がると、

「よーし、次ぎ参れ」

と、道場にいる家臣を、次々と引っ張ってきては、稽古する毎日であった。

そして数年が経過すると、

「もうお相手できません」

「若様にお教えすることがなくなりました」

といって、稽古相手をやめる家臣も出てきた。

そんなある日、一人の家臣が江川代官のところに来て、

「殿、最近、若様の稽古をご覧になったことがありますか……」

といった。

「それはどういうことか、倅の太郎左衛門が、稽古を怠っているとでもいうのか……」

と、英毅は不審に思って問い返した。

「いや、そうではありません。その反対で、若様は、今まで以上の稽古をやっています」

太郎左衛門の稽古相手を務める若い家臣は、ひたいに汗をにじませながら答えた。

「そうか、それならばよいではないか……」

英毅は、ちょっと首をかしげた。すると、

「それがよくはありませんので……」

「なになに、そちのいうことが、予は理解できないが……」

英毅は、少し苛立ってきた。

太郎左衛門は、成人前ではあるが、すでに立派な青年に成長し、学問にも武道にも人一倍の努力を重ねており、誰からも非難されることはないと、英毅は思っていた。

「若様の腕前は、わたしどもよりはるかに上となりまして、もうわたしどもではお教えすることができません」

家臣は、ひたいの汗を拭きふ拭き答えた。

「すると、太郎左衛門には、剣の修業はもう必要ないと申すのか……」

英毅は、太郎左衛門が年齢的にも、経験年数からも、

それほど上達したとは思っていなかったので、家臣のことばに疑問を抱いた。

「いえいえ、若様には、これからも引き続いて稽古をしていただきたいのです。実は、ちょっと申し上げにくいのですが……」

と、家臣はいいためらった。

「なんじゃ、太郎左衛門の稽古になにか不満でもあるのか……、遠慮せず、はっきりと申せ」

英毅は、陽気な面もある太郎左衛門の顔が、一瞬、頭をよぎった。

「はい、若様の稽古は、質も量も申し分ありませんが、ちょっと激し過ぎて、相手をする者がいなくなってしまったのです」

家臣は、申し訳なさそうな顔をして答えた。

「さようか、太郎左衛門のことだから、自分が満足するまで稽古するので、相手をするのが嫌だと申すのか……」

英毅は、家臣のいわんとすることが分かった。

「まことに申し訳ございません……」

「なに、謝ることはない。太郎左衛門は、ちょっとのんきなところもあるが、自分が納得するまで、とことん稽古するところがある。そんな太郎左衛門が、そちたちの手には負えなくなってきたのだな……。それでは、道場を変えて修業させることにしよう。どこの道場がよいかそちたちも探してくれ……」

といって、英毅は、江戸市中の有名道場の幾つかを頭に描いた。

「お聞き届けいただきありがとうございます。わたしどもも、よい道場を手分けしてお探しいたしましょう」

家臣は、ホッとした顔をして下がっていった。

このような経緯もあって、文化十五年（一八一八）正月、十八歳になった太郎左衛門は、実戦さながらの荒稽古で有名な剣道場、江戸神田猿楽町の神道無念流岡田十松の「撃剣館」に入門した。

太郎左衛門は、入門した撃剣館でさまざまな人たちに出会い、彼の人生に大きなインパクト（衝撃）をあたえたのである。

岡田十松の撃剣館では、その道で著名な人たちと剣道の技を磨きながら、社会学も同時に身に付けていった。そのなかで主な人は、次ぎの人たちである。

①斉藤弥九郎（一七九八―一八七二）

剣道家、幕末三剣豪の一人。江川太郎左衛門の三歳違いの兄弟子。

北陸の越中富山の人で、江戸に出て、儒学を幕府学問所昌平黌で古賀精里に、剣を神道無念流岡田十松の「撃剣館」に学んだ。

二十八歳で岡田十松の師範代となり、十松が没するとその子息の利貞を後見した。

弥九郎は、太郎左衛門が最も信頼した人物の一人で、剣だけでなく、思想的にも太郎左衛門に大きな影響を与え、のちに韮山代官所の顧問格として招聘している。

②藤田幽谷（一七七四―一八二六）

儒学者、水戸学（尊皇攘夷思想）の権威。

幽谷は、古着屋の次男に生まれたが、「彰考館」（水戸藩の歴史編纂事業『大日本史』を編集所）総裁立原翠軒の門人となり頭角を現す。

門人に藤田東湖、豊田天功、会沢正志斎などがいる。

江戸に出て、岡田十松の撃剣館道場に現れ、勤皇の志士に影響を与えた。五十三歳で没。

③藤田東湖（一八〇六―一八五五）

儒学者、藤田幽谷の息子。水戸藩主徳川斉昭の側近として藩政に携わる。水戸学（勤皇攘夷思想）の権威で、米国のペリー来日に際し、幕府の海岸防御御用掛として藩主斉昭を補佐する。

父幽谷に従って江戸に出て、岡田十松の撃剣館に入門し、剣を学ぶ。

撃剣館時代に、同門の江川太郎左衛門、斉藤弥九郎と親交を結ぶ。

安政の大地震の際に、身を挺して母を救い、家の下敷きになり、五十歳で没。

④会沢正志斎（一七八二―一八六三）

儒学者。藤田幽谷の門人。水戸学の代表的な思想家。

文政八年（一八二五）、二十歳のとき、遭難したイギリス船の乗組員から外国事情を聴き、のちに勤皇の志士のバイブル的な書物となる『新論』を著わす。が、内容が激しすぎるという理由で、発売禁止となる。

水戸藩主徳川斉昭に取り立てられて、藤田東湖、武田耕雲斎らとともに藩政に参画。

神道と水戸学を基礎とした大義名分論を唱えた。

尊皇攘夷論を通して、長州藩士吉田松陰など勤皇の志士の精神的指導者となる。

江川太郎左衛門は、斉藤弥九郎、藤田東湖を通して正志斎と親交を結ぶ。

太郎左衛門の勤皇思想は、正志斎の影響がある。

⑤渡邉崋山（一七九三―一八四一）

三河田原藩（一万二千石）家老、儒学者、洋学者、画家、洋学者のサークル「尚歯会」のリーダー。

「尚歯会」の「歯」とは年齢のことで、中国思想で「敬老」のことを「尚歯」という。

尚歯会は、崋山がリーダーになってからも、洋学で学んで得た新しい知識や情報を交換する場であって、決して政治結社ではなかった。

しかし、洋学を目の敵のように嫌った幕府目付の鳥居耀蔵は、密偵を使って尚歯会メンバーの動向を調べて、弾圧を加えた。これが「蛮社の獄」である。

尚歯会の主なメンバーは、田原藩家老渡邉崋山のほかに、幕府勘定吟味役の川路聖謨、幕府寄合松下内記、幕府御使番松平伊勢守、江川太郎左衛門、幕府儒官古賀侗庵、蘭方医高野長英、同小関三英などであった。

太郎左衛門は、撃剣館の兄弟弟子である崋山から、絵を学びたいと思ったが、崋山は洋学の必要性を説き、太郎左衛門の目を国防問題に向けさせた。

崋山は、絵を谷文晁に学び、写実的な肖像画を多数残している。幕府の攘夷論を批判した『慎機論』を著して蛮社の獄に連座、三河に蟄居中に、主君に迷惑がかかることを恐れて、四十九歳で自殺。

⑤高野長英（一八〇四―一八五〇）

蘭方医、洋学者。陸奥国水沢（岩手県水沢市）の人。

長崎で、ドイツ生まれの医学者、博物学者で、長崎のオランダ商館の館員であるシーボルト（一七九六―一八六六）から洋式医学を学ぶ。

江戸で町医者を開業。「尚歯会」の有力メンバー。撃剣館に入門して剣も学ぶ。

天保八年（一八三七）、米国商船モリソン号が、日本人の漂流民を乗せて三浦半島の浦賀に入港し、対日通商を求めたが、これを浦賀奉行が砲撃して退去させるという事件が発生した。

高野長英は、この幕府のモリソン号事件の対外政策を批判した『夢物語』を著わし、幕府から警戒される。天保十年（一八三九）蛮社の獄で永牢（終身刑）となるも、牢屋の火災で脱獄。各地に身を隠していたが、逃げ切れないと思い、四十七歳で自殺。

⑥豊田天功（一八〇五―一八六四）

水戸学者、水戸藩の「彰考館」総裁。藤田幽谷の門人。

幼時より漢詩などに才能を現わす。

文政二年（一八一九）に、藤田東湖とともに撃剣館に入門し、岡田十松に剣を学ぶ。のちに水戸藩の彰考館総裁となり、歴史編纂事業『大日本史』の完成に大きく貢献。

ペリー来航時に、これを見聞して西洋諸国の脅威と国防の重要性を唱えた。

⑦幡崎　鼎（一八〇七―一八四二）

蘭学者、蘭方医。長崎の人。

ドイツ生まれの医学者、博物学者で、オランダ商館の医官であるシーボルトの給仕人（雑用係）となり、オラ

ンダ語や医学などを学ぶ。
文政十一年（一八二八）に起こったシーボルト事件（国禁の日本地図の国外持ち出し事件）に連座、囚（とら）われの身となるも、天保元年（一八三〇）にのがれて大坂で蘭学塾を開く。
のち、江戸に出て、天保四年（一八三三）に水戸藩主徳川斉昭へ仕え、砲術、造船、海防について講義し、さらに、水戸藩の溶鉱炉（反射炉）建造にかかわる。
幡崎鼎は、この頃斉藤弥九郎や渡辺崋山を知り、崋山のために洋書の翻訳をする。
江川太郎左衛門は、弥九郎や崋山の紹介で幡崎鼎から蘭学の手ほどきを受けた。
太郎左衛門は、蘭学の必要性を痛感し、家臣の矢田部郷雲に命じて、蘭学を学ばせている。
幡崎鼎は、天保八年（一八三七）に、水戸藩命により洋式船の建造に関する書籍を購入するため長崎を訪れるも、身分がばれて長崎奉行所に逮捕される。
その後、伊勢国菰野藩一万一千石（三重県三重郡菰野町）に身柄を預けられたまま、天保十三年（一八四二）に三十六歳で病死。

⑧小関三英（一七八七―一八三九）
出羽国庄内（山形県）の人。蘭学者、蘭方医、岸和田藩医。
幕府の天文台訳員（翻訳掛）となる。江川太郎左衛門と親交があり、蛮社の獄で罪を問われて五十三歳のときに自殺する。

⑨川路聖謨（一八〇一―一八六八）
幕臣（五百石）、勘定奉行、外国奉行。
安政元年（一八五四）に、下田で日露和親条約書に調印。ロシヤ側は、川路聖謨の人柄を高く評価する。
川路家とロシアのプチャーチン提督の子孫とは、平成の今日まで交流が続く。
川路聖謨は、「尚歯会」で江川太郎左衛門や渡辺崋山らとともに、国際情勢や、外国の軍事力について意見を交わすなど開国論者として知られる。
江川太郎左衛門の良き理解者である。
安政五年（一八五八）に老中堀田正睦とともに、日米友好通商条約締結に動くが失敗。その後、大老井伊直弼に嫌われて要職から遠のく。
晩年は、脳出血後の麻痺（中風）のため不遇であった。
慶応四年（一八六八）三月十五日、東征軍の江戸城総攻撃の予定日に、割腹のうえ、ピストルで喉を打ち抜き自決。滅びゆく徳川幕府と武士道に殉じた人物である。

⑩羽倉外記（一七九〇―一八六二）
幕臣、儒学者。関東、東海の代官を歴任、勘定吟味役。儒学を古賀精里に学び、尚歯会のメンバーとして、江川太郎左衛門や渡辺崋山などと親交があった。

⑪林　子平（一七三八―一七九三）
江戸生まれの仙台藩士。経世家（政治経済の評論家、知識人）。
高山彦九郎、蒲生君平とともに寛政の三奇人といわれた。
林子平と江川太郎左衛門とは、生きていたときが若干違うので、二人が会うことはなかったが、林子平の著書『海国兵談』が、太郎左衛門の海防意識に大きなインパクトを与えた。
『海国兵談』は、安永六年（一七七七）、林子平が、長崎においてオランダ商館長フェイトから海外事情を聞いて危機感を抱いたのが執筆の切っ掛けで、海防の必要性が書かれ、
「日本橋より、唐（中国のこと）、オランダまで、堺なしの水路なり」
（太郎左衛門もこれと同じようなことをいっている＝坦庵全集別巻Ⅰ、五〇頁）
と、いって世間を驚かせ、かつ、その内容が幕府の軍事政策を批判していたため、出版社が見付からず、十六巻の大作を自ら版木を彫って出版した。
老中松平定信による寛政の改革が行われると、幕府より発禁処分が下され、版木もろとも没収。
その後、写本が、そのまた写本が市場に流れ、知識人に読まれ、尊皇攘夷の志士を刺激した。
林子平は、仙台で不遇の時代を送るが、そのときの心境を、
「親もなし、妻なし子なし版木なし、金もなければ死にたくもなし」
と詠んで、慨嘆した話は有名である。
江川太郎左衛門は、岡田十松の撃剣館の道場に入門して、剣の師のみならず、儒学、医学、理化学、洋学などさまざまな師について学び、多くの知識人と語らって、今までの何倍もの稽古や学問、国際情勢、国防、海防問題を身に付けていくのであった。
剣については、やがて、その稽古が功を奏し、入門してわずか二年後の文政三年（一八二〇）に、神道無念流の免許皆伝を許され、撃剣館の四天王の一人にあげられた。

つづく

火薬学会の良き友

吉田忠雄

私が現在もっとも親しく付き合っているのは米田さんと橋爪さんである。米田さんは前火薬学会事務局長、橋爪さんは現火薬学会事務局長である。この3人はよく行動を共にしている。米田さんは、長い間東大火薬教室の正田教授の助手をしておられた。私は同じ東大火薬教室の難波教授のもとで働いていたので親しくなった。正田教授は理論火薬学が専門で、難波教授は製造火薬学が専門であった。

わたしは、1956年東大の応用化学科を卒業すると山口県の日本化薬(株)厚狭作業所につとめた。ここで最初の1年はニトログリセリンの製造現場に勤務し、それから数年はジニトロトルエンの製造に従事した。この数年間は私にとっては最も充実した楽しいときであった。職場の人たちとの交流が楽しく、しごとも楽しかった。

昼休みになると職場に隣接した小さな広場で毎日ソフトボールの試合をした。わたしの所属する職場の人員が20人なので、ちょうど2チームができ、全員で試合ができた。この職場のソフトボールチームは毎日雨の日も風の日も休みなく昼休みにソフトボールの試合をやっているので工場内では無敵のチームとなった。また対外試合でも県体育大会でも優勝を争うチームにまで成長した。

わたくしは日本化薬・厚狭の生活は楽しく何の不満もなかったが、父は心配になったらしく会社を辞めてでも東京に帰ってこいと言ってきた。会社も困ったらしく、私は高槻にある京都大学化学研究所に派遣された。そこで1年を過ごし東京に帰ってくると、難波教授から声がかかり、東大の難波研究室に勤務することになった。ここから同じ火薬学教室の米田さんと付き合うようになった。特にしたしくなるのはそれからしばらくしてからである。

東大は野球が盛んである。米田さんも野球が好きで進んでキャッチャーをやり、私も難波研の中ではまあまあの外野手であった。正田研と難波研はよく野球の試合をした。それぞれの研究室には東大野球部の選手もおり、野球の話題には事欠かなかった。唯一残念だったのは、東大野球部が東京6大学リーグでは常に最下位であることであった。

米田さんは酒が好きであり、その点でも私とは共通の趣味を持っていたので、私は東大に戻ってから親しい友人の一人になった。米田さんは正田先生の助手をやっており、正田先生は火薬学会の会長をやっていたので、米田さんは火薬学会の事務の仕事もやっていた。

橋爪さんと私が親しくなったのは米田さんと火薬学会とが関係する。米田さんは東大を定年で退職すると火薬学会の事務局長になった。当時は火薬学会の事務局は東大の火薬学科にあった。しかし諸般の事情により火薬学会の事務局は日本橋にある日本産業火薬会の事務局に同居することになった。米田さんが東大を定年退職して火薬学会の事務局長になったのは、火薬学会事務局が日本産業火薬会の事務所に同居するようになってからである。

米田さんが80歳になったころ、火薬学会の事務局長の定年が問題となった。米田さんの後任としては橋爪さんが選ばれた。以来米田さんと橋爪さんは無二の親友となった。直接の理由は仕事を間違いなく引き継ぐためであった。それに引きずられて私は橋爪さんとも親しくなり、現在の3人組を形成した。以来この3人組は何によらず行動を共にするようになった。橋爪さんは米田さんや私ほどは酒が好きとはおもえないが、付き合の良い人である。米田さんと私が一緒に酒を飲んでいるとき橋爪さんもたいてい一緒にいる。

橋爪さんは火薬学会の事務局長なので火薬学会の行事には必ず参加する。米田さんは前事務局長なので、これも必ず参加する。わたしはこの二人に引きづられて参加する。私は火薬学会との付き合いが長いので、行事に参加する火薬学会のメンバーたちは当たり前のように思っている。

米田さんと橋爪さんと私は毎月10日前後の夕方に浅草の神谷バーで待ち合わせて飲むことにしている。それから毎月下旬に火薬教室の越教授を誘って根津の飲屋車屋で一杯やることにしている。越教授は正田教授の系譜につながる理論火薬学の教授である。米田さんの御嬢さんは越教授の秘書をしている。越教授は来年3月に東大を定年になるので、それから先の越先生との飲み会はどうするかまだ決まっていない。

漢詩

潮騒録（七十二）

鯨游海

賀癸巳春　　平成廿五年元旦

朱鷺誕生眉欲開
人心安堵壽春來
昊烏地巳多天敵
祖國復興嘉福魁

押韻・開來魁

〈癸巳の春を賀す〉
朱鷺誕生して　眉開かんと欲す
人心安堵して　春の来たるを寿ぐ
昊に烏地に巳　天敵多かれど
祖国復興の　嘉福の魁たれ

〔注　解〕

絶滅に瀕していた特別天然記念物、国際保護鳥の朱鷺が佐渡ヶ島で誕生した。関係者永年の努力が実り野生での産卵、孵化に成功した。日本中が固唾を呑んで見守った。祈りが通じたのだ。

関係者の喜びが伝わってくる。

朱鷺＝鴇とも書く。鷺に似た嘴の長い鳥。顔は赤く羽根がとき色（うすもも色）で美しい。絶滅が心配された。

眉欲開＝①眉を顰める②愁眉を開く。②の意味とし眉が開くと表現した。心配から開放されること。この意味に併せ雛が瞼を開くの意と掛けた掛け詞でもある。

安堵＝安心。堵は垣。人が垣根の内側で安んじること。

昊＝空。夏の空。魁＝第一番に始めること＝先駆け。

〔口語訳〕

朱鷺が無事蘇え眼を開けて餌を求め、人々は愁眉を開いた。人心は安堵し春の来るのを寿いだ。未だ昊には烏が地には巳が居て危ないが、祖国復興の福の神となれ。

☆水ぬるみ春風吹きて朱鷺生まる
　福のさきがけ佐渡へなびくも

東京蒼天樹　　平成廿四年五月

突兀凌雲細腰麗
陸離競月夜光奇
紫之雅與蒼之粋
應是復興悲願碑

押韻・麗奇碑

〈東京蒼天樹〉
突兀として雲を凌ぐ　細腰は麗しく
陸離として月と競ふ　夜光は奇なり
紫の雅と　蒼の粋と
応に是　復興悲願の碑なるべし

〔注　解〕

東京スカイツリーが竣工し開業した。現時点では世界一の高さを誇る自立の塔という。その高さは武蔵＝六三四メートルで関東平野を睥睨し、各種電波を発信する。

世界一はその技術と美しさにこそある。地震国日本での建設だけに凡ゆる工夫が施されているのだろう。古代からの五重の塔の芯柱とか軟らかさとか……。

突兀＝抜きん出てそびえたつさま。兀＝高く上が平。

細腰＝柳腰とも。美人の形容にも用いる＝楚腰。

麗＝うるわしい。ここでは呉音のリ。漢音レイ、ライ。

陸離＝キラキラ輝くさま。美しく輝くさま。光彩陸離。

碑＝石又は金属で出来た記念碑。方形を碑、円形を碣と呼ぶ。石製のものはいしぶみとも。

〔口語訳〕

雲を凌ぎ抜きん出て高く聳え立ち、美人の細い腰の如く麗わしく

月と競うようにキラキラと輝やき、闇に光るガラスの如く妖しく美しい。

紫一色の時は江戸の雅を、蒼一色の時は同じく粋を表現するという。

この世界一のハイテクを誇る夢の塔は、日本復興の悲願のシンボル、応に記念の碑なのだ。

☆蒼は粋江戸紫は雅かな
　夜光こもごも墨水に映ゆ

惑星探査機隼號生還　　平成廿二年十月

不死鳥蘇名隼號
生還萬里邈雲濤
懐中宇宙草創石
挫折幾回遂不撓

押韻・號濤撓

〈惑星探査機隼号生還す〉

不死鳥は蘇る　名は隼号
生還す万里　邈なる雲涛より
懐中に懐く　宇宙草創の石
挫折すること幾回ぞ　遂に撓ず

〔注　解〕

不死鳥＝フェニックス。エジプト神話の霊鳥。五百年毎に自ら焼け死に復たその灰の中から蘇るという。

隼＝惑星探査機に付された愛称。隼は鷹の一種。

雲濤＝雲の涛。撓む＝曲がる。折れる。「不撓不屈」。

度重なる故障にもめげず不撓不屈の日本チームの奮闘によって蘇り、遂に宇宙の涯ての小惑星「糸川」より岩石を持ち還ったドラマは忘れられない。この石片数十箇は世界主要大学で精査中で宇宙草創の謎を解く鍵という。

〔口語訳〕

日本の惑星探査機はあのエジプト神話に在る不死の霊鳥フェニックスの如く蘇る。因んで付けた名は隼号。

その名の通り君は万里の雲涛を越えて邈々と帰還した。

しかも宇宙の最涯の小惑星「糸川」から貴重な岩石を懐中に懐いて……（余りに遅いのであきらめかけたが）。

幾度かの故障や障害にもめげず、全ての挫折を乗り越え遂に帰って来たのだ（最后は燃え尽きたが、石を残した）

☆還り来し満身創痍のはやぶさは
　燃え尽き果つる玉を残して

《漢詩の流れ60・清》張問陶①

張問陶（一七六四～一八一四）字は仲冶、号は船山。四川省遂寧県の人。進士。高級官僚の道を歩んだが、上官と折り合わず辞職し江南に遊んだ。蘇州で没。詩人としては袁枚の推賞を受け名声が上った。

中秋月下作（中秋月下の作）

一年小別住京華　一年の小別　京華に住む
何處逢秋不憶家　何れの処か秋に逢い家を憶わざらん
縅取今宵衣上影　今宵の衣上の影を縅取して
他時因夢寄天涯　他時　夢に因って天涯に寄せん

縅取＝封じ込める。手紙の中に封縅する。

（あなたと別れて都住まいをして未だ一年そこそこだが、秋ともなれば家を恋しく憶わない者はいまい。

今宵、衣の上の月の影を手紙の中に封じ込めて、何時か夢に託して天涯に居る貴女の元に送り届けたいものだ）

冬日將謀乞假出齊化門哭四妹筠墓（冬日将に仮を乞うを謀らんとして斉化門を出で四妹筠の墓に哭す）

似聞垂死尚呑聲　死に垂んとすと聞くに似て尚声を呑む
二十年人了一生　二十年の人　一生を了る
拝墓無兒天厄汝　墓を拝するに児なく　天汝を厄せり
辭家久客鬼憐兄　家を辞し久しく客たり　鬼も兄を憐まん
再來早慰庭幃望　再び来たって早に慰む庭幃の望み

一痛難抔骨肉情　一痛抔べ難し骨肉の情
寄語孤魂休夜哭　語を寄す孤魂　夜哭すること休れ
登車從我共西征　車に登って我れに従って共に西征せん
庭幃＝家庭。父母のこと。

（危篤らしいと風の便りに聞いた時は声も出なかった。

君が二十歳で一生を了えようとは。

墓参りをする子供さえ残さず死ぬなんて、お天道さまもそこ迄お前につらく当ったのだろうか。

家を離れ見知らぬ土地で長い侘び住まいをしているこの兄をみて、君はあの世で憐れんでくれることだろう。

父母を慕うお前を慰めようとして今またここに来た。

この悲しい肉身としての情は何時迄も晴れることはあるまい。

草葉の蔭に独り眠る魂よ、夜中に泣いたりするのではないよ。

車に乗って私に従って一緒に西方浄土に旅立とうよ。）

目耕録（その十）

――エドワード・レビンソン著『ぼくの植え方――日本に育てられて』――を読む
（岩波書店、二〇一一年）

山本鎭雄

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（世説新語）。

十回目の連載

退職を契機に野菜作りを始めた。東京小金井の本宅で本読みと物書きで過ごし、鈍った身体と精神の健康、そして趣味（と実益）のために、山梨の桂川沿いの別宅に電車で通っている。行きは電車の座席で雑誌や新聞を読み、帰りはしばし居眠りをする。座席はいわば我が書斎であり、スモール・チェアである。週一回、農繁期は一泊二日、冬の農閑期は収穫のために日帰り。これまで都会暮らしに終始した私には、一年目は意欲だけはあったが、野菜作りはまったくの五里霧中だった。

最初は畑に野菜作りのハンドブックを持ち込み、野菜作りを始めた。その後、同人誌『まんじ』を知り、ずぶの素人の野菜作りの体験を発表したいと考えた。同人になって、二年六ヶ月連載して、今回で十回目となった。その当初はこのように連載が続くとは考えても見なかった。

私は教壇に立つことと種々の会議に出席する以外は、本読みと物書きだけが本来の職業と考えていたから、論理的・学術的な原稿を書くことに慣れている。しかし、作家やジャーナリストのように読んで貰えるような原稿を平易に書くことに慣れていない。しかも私の野菜作りの体験は乏しく、書く材料にも事欠いた。そこで、野菜作りのノウハウだけではなく、広く農村、農民、農業についての知識、つまり伝統や慣行、さらに現在の直面する諸問題についてよく知りたいと考え、アトランダムに作品を読んだ。それが「目耕」の意味である。

手始めに徳富蘆花著『みみずのたわこと』を読み、それ以後、杉浦明平著『農の風景』、深沢七郎著『百姓志願』、山川菊栄著『わが住む村』、山下惣一著『農から見た日本』、内山節著『里の在処』などを取り上げ、彼らが暮らした農村の観察と思索を考えながら、私自身の新たな体験、つまり悪戦苦闘、手前勝手な野菜作りの体験を臆面もなく披露した。だが、記述には特別に新たな展開も無く、マンネリ化したように思えてならない。

春夏野菜の収穫と顛末

前号では主にジャガイモの植えつけと収穫、酷暑の草取りの経験について書いた。本号ではそれ以外の春夏野菜の収穫とその顛末について披露しよう。隣家の農協委員の斡旋で購入したナスの苗、ナス科のピーマン、しし とう、とうがらしの苗を植えた。ナス科の野菜は主に中南米原産だから夏の暑さに強い。今夏は、例年になく、酷暑だったから、豊作になった。

同じナス科の南米原産のトマトも豊作だった。トマトは雨にあたると、裂果して美味しくない。だから、大玉トマトの栽培は諦めた。そこで、アイコ（サカタのタネ）というミニトマトの種を蒔いた。昨年のトマトの実生が発芽・生長したので、それも定植した。酷暑の畑で完熟したミニトマトをもいで口にすると、水分の補給となり、甘みがあって実に美味しかった。ただ、剪定しなかったので、生りすぎて始末に困った。

キュウリもまた豊作だった。ただ、キュウリの生長は早い。だから、毎日もがないと超Lサイズの図太いキュウリとなり、蔓に負担がかかり、寿命を縮める。私は日陰で小椅子に座り、その図太いキュウリに塩をふりかけて丸齧りにした。みずみずしくて甘みと特有の香りが口に拡がり、キュウリ本来の味を満喫した。こんなキュウリはおそらくスーパーでは見かけない。

年金生活の村人はまだ涼しい早朝に畑で一仕事を終えて家に戻り、午後に再び現れ、夕食前にさっさと引き上げる。週一回の野菜作りの私は、夕闇が迫るまで、ただ一人畑に残って野菜作りをしている。それでも村人の野菜の出来栄えと比べると、はるかに見劣りがする。ある村人が「野菜作りは、最低限、毎週二泊三日だね」と忠告されたことがある。私は二泊三日の農村暮らしは肉体的に耐えられないだけではなく、それ以上に都市を本拠として暮らしてきた生活スタイルには精神的にも耐えられない。

野菜に限らず、花卉、果樹は手間をかければかけるほど立派に生長し、その結果が収穫、収穫量として見事に証明される。私はハンドブックに従い、種を蒔いても、ときに間引き、追肥、土寄せを省略する。横着だから、

そうするのではなく、時間がないから収穫さえも省略してしまう。臺立ちした葉菜類は穴を掘って埋けるか、数列に溝を掘ってそこに埋けて土を被う。その作業の方がかえって一仕事だ。

「人柄は作柄」ということわざがある。農作物の作柄はそれを作る人の性格（人柄）だけではなく、生活をもろに表現する。それは学歴や職業、その地位とはなんら関係がない。農道を歩いていると、整理整頓された畑、雑然とした畑、農用トラクターで耕耘と除草をしただけの不作付けの畑、完全な耕作放棄地もある。それは、何ほどか農地所有者か耕作者の生活の現在を如実に物語っている。だが、人はしばしば内面と外面が異なる場合があるように、整理整頓された畑の耕作者が必ずしも家庭では家族関係が良好であるとはいえない。

現在、農家を支えているのは主婦である。かつてのように姑や嫁が農婦として野良で生業を支えているのではない。ばあちゃんが家計の管理はともかく、野良仕事をするじいちゃんの健康を気遣い、隣近所の付き合いに気を配る。離れて住む息子や娘の家族が来訪すれば、率先して歓待する。来客には土産物として野菜を持たせて帰す。

「残暑厳しき折」

彼岸花は秋の彼岸に輪状に朱紅色の花を咲かせるから、そのように命名されたのであろう。その頃、ほうれん草、シュンギクなどの葉菜類の種蒔きをする。昨年は九月になっても猛暑が続き、例年になく、彼岸花の開花が遅れた。猛暑と水やりの不足で、冬野菜のダイコン、ニンジンの種を蒔いても発芽しなかった。三度目に種を蒔いてやっと発芽した。時はすでに遅く、気温はどんどん低下し、葉は順調に生長しなかった。カブ、ラディッシュ（赤丸二十日大根）の芽出しも悪く、根は小粒で、変形したり、上半分が裂果したカブしか収穫出来なかった。

近所の畑では立派なダイコンとニンジンを収穫している。私のダイコンとニンジン作りの失敗を異常な天候のせいにすれば、ことは簡単だが、水やりが不足したのだろう。昨年はダイコンを作り過ぎて食べきれず、地中に埋けて保存した。春になって掘り返し、ぶりダイコンを料理したが、ダイコンは硬くて不味く、とても食える代物ではなかった。野菜作りのハンドブックによれば、ダイコンの地中保存は二月末が限度だそうだ。

野菜の害虫と病気

秋の猛暑の影響か、白菜やキャベツをはじめ、ブロッコリー、小松菜、ほうれん草などの葉が盛大に農害虫に食害された。私は有機燐系浸透性の殺虫剤のオルトラン粒剤のほか、農薬は一切撒布しないことにしている。食害された葉菜類は見栄えが悪いが、多少の食害を甘受することにしている。その部分を取り除き、料理すれば、それほど気にならない。むしろ害虫が好んで食うから、野菜を生食しない限り、人間は安心して食えるのだ。

農薬の撒布は害虫だけではなく、アブラムシの天敵のテントウムシ、クモやカマキリなどの益虫も殺してしまう。しかも農薬撒布は野菜を作る耕作者自身の薬害と、残留農薬の野菜を食べる家族の健康も心配になる。良く聞く話しだが、生産農家は出荷を予定している野菜には農薬を撒布し、自家消費用の野菜には健康のために農薬を撒布しない。しかし、生産農家は「土壌消毒」だと言って、殺菌剤を撒布しているのをよく見かける。

野菜作りを始めた頃、春から秋にかけてモンシロチョウが野菜の葉に止まり、すぐ近くの野菜に舞い降り、しばらくして飛び立って行く。ふと、「ちょうちょう、ちょうちょう。菜の葉にとまれ。なのはにあいたら、桜にとまれ」という小学唱歌（野村秋足作詞、『日本唱歌集』岩波文庫、一九五八年）を思い出し、小椅子に座り、しばしモンシロチョウの独特の行動を眺めていた。我に返ってモンシロチョウの行動は野菜の葉に産卵する行動だと気付いた。モンシロチョウの卵が幼虫の青虫に生長すると、確実に野菜の葉は食害され、被害は甚大だ。ほうきをもって追い払ってみたが、無駄だったのでやめた。野菜の葉につく幼虫を見つけて捕殺したが、大した効果はなかった。

害獣たち

野菜作りの敵は害虫や病気だけではない。春は鳥にイチゴを食害され、夏にはスイカ、秋には地中から掘り出されて落花生が食害された。落花生の殻が近くのナスの根元にかたまっていたので、不思議に思い手に取ってみると、中身はなく、殻だけだった。そこで、鳥の仕業と気づき、落花生の四隅に支柱を立て、防鳥用のテープを張ったが、あとの祭りだった。ネズミはさつま芋が好物で、貯蔵した畑小屋のさつま芋を食害された。

動物について言えば、まだ猿の群れが現れないのが幸運だろう。猿は私が通う畑から直線で西に七キロの山里に棲み付いているそうだ。いずれ増殖した猿はこの周辺にも現れるだろう。夜行性のイノシシは徘徊しているようだが、畑の柵を越えて来ない。だから、今のところさつま芋の被害を免れている。

トウモロコシの果実をハクビシンに荒らされた。数本の果実だけをもぎ、数カ所齧られほったらかしにされていた。まだクマやシカが現れたという話は聞いたことがない。

秋の長雨のために白菜は灰白色の白斑病に侵され、昨年は軟腐病に侵された。キャベツは汚白色のべと病に侵された。外葉を取り除き、結球した葉に寒さで死んだ幼虫がこびりついていた。病跡と死骸の付着した葉を取り除いて料理すると、美味しく食べることが出来た。

露地もの野菜

露地栽培でも保温と害虫対策にトンネル栽培が一般化した。この程度では露地栽培の延長にすぎない。一年中、スーパーでは時期外れの野菜が売られている。それは、温度を調整された温室で促成栽培されたり、大型の冷蔵庫で保管させられた時期外れの野菜だろう。だから、高値で売られている。生産農家は温室の暖房、冷蔵庫の収納のために、工夫して経費をかけるが、果たして帳尻が合うのかどうか知らない。だが、うまそうではない。その代表例はイチゴだろう。一年中、ケーキ類には赤熟イチゴが添えられているが、そのイチゴにグラニュー糖がまぶしてあるのには驚いた。

イチゴは冷暖房つきの温室栽培であれば、一年中、収穫が可能だそうだ。そのために、海抜千メートル以上の高地で育てるか、花芽のついた苗を冷蔵庫に収め、秋にビニール・ハウスの中に定植し、最需要期の十二月に出荷する。ところが、見栄えは良いが、そのイチゴには本来の甘みが欠けている。だが、露地栽培のイチゴは栽培適温の十月に苗を植え、冬を越して五月から六月の二週間に収穫しないと、すぐに傷みや黴が生える。だが、完熟したイチゴを畑でもいで口にすると、最高に美味しい。

「論より証拠」の世界

日本列島は南北に細長い。温暖地や都市近郊のビニール・ハウスで野菜の生長を促す促成栽培が一般化し、早出しの野菜は「高値」で売れる。その一方では、主に寒冷地では出荷時期を遅らせる抑制栽培が行われている。生産農家が人工的に操作した野菜が、果たして本来の美味しさを備えているのかどうか知らない。

畑でほうれん草などの葉をちぎって口にする。肥料のきき具合を確かめるためにいつもそうしている。これは美味しいと思い、葉っぱ一枚をむしゃむしゃと食べてしまったことがある。からし菜の葉が生長したので、ちぎって歯で噛んでみた。たしかにぴりっと舌にきた。そこで収穫して湯掻いてみたが、野菜の繊維の「筋」が口に残って無理に飲み込むことにした。収穫にはまだ早かったのか、窒素肥料の油かすが不足したのかもしれない。本当に野菜作りは難しい。

健康と趣味と実益を兼ねて、野菜作りに励み、今年の三月で六年目が終わる。野菜作りは「論より証拠」の世界である。天候にもよるが、野菜作りはウソもごまかしも通用しない。手を抜けば、不味くて貧弱な野菜しか出来ない。畑で耕作を工夫し、汗を流せば、その汗の分だけ収穫物として返ってくる。だが、週一泊二日の野菜作りだから、いつまでも素人の域を出ない。腰と足に痛みを感じ、夕闇に疲労困憊して別邸に帰る。体力的にいつまで野菜作りを続けられるか、定かではない。

人生を耕す

本号ではエドワード・レビンソンの近著『ぼくの植え方――日本に育てられて――』(岩波書店)を読む。カバー写真はエド(通称)が晩春に収穫したニンニクの鱗茎と葉を一抱えして満悦しているので、外国人のエドが野菜作りの方法を書いたガイドブックに違いないと思い、迂闊にも書店で購入した。ところが、写真家でガーデナー、ベジタリアンのエドがアメリカで福岡正信著『わら一本の革命』の英訳書を読んで感銘した。そこで、母国を離れ、十分な「根回し」もなく、バックパック一つで不案内のまま、来日した。

それ以前、アメリカ・バージニア州出身でユダヤ系の青年エドは、ベトナム戦争が終結したあと、多くのヒッピーと同じく、大学をドロップアウトし、スピリチュアルな道を求め、「流浪の民(バガボンド)」としてアメリカ大陸を二回、カナダを二回も横断旅行した。

エドは結婚して三年後に破綻し、「人生の回り道」として、「バックパックの旅行者」として来日した。当時を回顧して、「ぼくは、気付いていなかったけれど実際には自分で根を引き抜き、ぼく自身を日本に移植していたのだ」(八頁)。二ヶ月間、京都の田舎でイギリス人が住む築百年の旧農家でホームステイした。そのあと、愛媛の福岡正信の自然農園に一週間滞在したが、自然農園がとくにエドを必要としないことを知った。のちに、エドは自然農法について、「しばしば彼の法則と、他のより伝統的な有機的農法やガーデニングを組み合わせた、ハイブリッドな中間的方法を用いている」(一七四頁)というのが、エドが実行した有機農法の結論だった。

スローライフを信条とするエドが、「人生の回り道」のつもりで来日し、居住して三十年目に書いた自伝的なエッセーが『ぼくの植え方』である。エドは自然と人生を調和させ、農村の優しい人々との交流と四季折折の風景の美しさを享受した。とくにエドは日常生活で「聖なること」を楽しみ、「日本の肥沃な大地が、無邪気で理想主義的な植物としてのぼくの人生を受け入れ、ぼくを生長してくれるのだ」と書いている(二一八頁)。

ガーデニング・自然と自己との対話

エドはバージニア州の大学で写真と心理学を学んだ経験を生かして、再び写真を撮影するようになる。エドの写真術はピンホール写真である。好んで自然を撮り、それと調和した心象風景を表現し、その写真に「癒された」ファンに歓迎された。スローライフな写真術として『エドさんのピンホール写真教室』(岩波書店、二〇〇七年、本文翻訳・鶴田静)を出版した。それが契機となり、すでに述べた自伝的エッセー『ぼくの植え方』を出版した。

以下では、エドのピンホール写真に触れない。エドの生活スタイルの一つが瞑想と呼吸法だが、私はそれにつ

いても無知なので触れない。ただ、房総半島の鴨川に定住し、そこでの農村の体験とオーガニックな生活について触れたい。

エドは村人に誘われて、秋祭りのための神社や境内の掃除、新しい注連縄作り、その後の宴会にも加わり「草の根国際交流」を果たして、ますますコミュニティに溶け込み、「少なくともぼくは今、部分的に部内者」になったと実感した。さらにジャガイモの植えつけと収穫、ベラルーシから来てホームステイした「チェルノブイリの子どもたち」に収穫したジャガイモを毎日のように食卓に並べた（三〇〜三四頁）。

また中古の軽トラックを運転するエドは、山道を足を引きずるようにとぼとぼ歩く「ミズ」（おばあさんたち）を率先して同乗させ、彼女らと率直に話し、行動と思考を観察した。その結果、日本社会の伝統的な一面、つまり義理と人情という独特の互報性の世界を体験した。

エドはアメリカ在住時から化学肥料と農薬を使用しない有機農法を志向していた。東京の小平や国分寺、しばらく定住した房総半島の「野原の庭」でも堆肥を作り、それを肥料とする有機農法を実行した。

南房総の丘の上の暮し

「野原の庭」の後、二十年近く耕作放棄された丘の上の棚田を購入した。そこでは近所の女の子たちと仲良しになり、自己哲学を披瀝して満喫したり、ドッチボールにも興じた。そのうち、近くに田んぼを借り、村人の応援を得て手作業で米作りを始めた。エドは「ガーデニングも農業も、心構えと状況によっては楽しみにも苦労にもなる」（一七二頁）と書いている。

ガーデナーのエドは荒れた不耕起の畑でジャガイモを作り、田植え仕事に大いに肉体的に苦労したであったろう。しかし楽天家のエドはこの地で「楽しく」暮らすために、それなりに自然と、人間関係のコミュニケーションの工夫と苦労を重ねたであろう。エドはついに「ガーデナーは指揮者であり音楽家であり、人間と自然の結婚における『仲人』なのだ。堆肥が結婚プレゼントであればそれは奇妙に思えるだろう。しかし少なくとも、それ（堆肥、括弧内引用者）には大いなる努力が込められていて、スローライフの現実的で象徴的な良いイメージをもつ手作りエコ商品なのだ」（一五五頁）という認識を得た。

エドは日常生活で「聖なること」を享受することだった。だが、「聖なるもの」とは、必ずしも宗教的なものを意味せず、「自然と自身の調和」であり、「何かと、誰かと一つになること」を意味する。バックパック一つで来日したエドは、三十年後に「無邪気で理想主義的な植物」としてのぼくを「成長させてくれたのだ」と言い、自然と人間に心から感謝している。

終わりに

私は、敬虔なエドのように、野菜作りを通して、大自然に接してきたのだろうか。所詮、野菜作りは健康と趣味、そして収穫という実益のためだった。農道を歩き、最大の関心は、今、どんな野菜が生長し、収穫されたかということだった。次いでその畑の耕作者の性格や家族生活を思いうかべて、あれこれと想像する。そして、数日の天候と耕地の状況以外は全く関心はなかった。

くたびれて小休止し、畑で小椅子に座り、ポットのお茶を飲み、太陽、光、空気、雲、風、音を知覚するが、周囲の畑や山林を眺めて四季を感じる程度で、自然とはありきたりの対話しかしていない。今後は、エドのように自然と戯れ、自らの心を耕し、自ら感じる心象風景を大切にしたいものである。

ところが、もはや肉体的にも衰え、足腰の各所が痛み、作業も緩慢になって来た。宗教や信仰と全く無縁な暮しをしてきた私には、おそらくエドのように「日常生活で聖なることを楽しむ」ことは出来ないが、畑の日陰で小椅子に座り、静かに観察し、ときに瞑想と呼吸法を試み、山村に心を開きたい。

イドと超自我の谷間で（七）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

ら」

海保の言葉に驚いた内田は、立ち上がって

「失礼しました。三条絢さまですか。ご挨拶が遅れて申し訳ありません。芸能新聞社の内田です」

と、絢に向かって深々と頭を下げ名刺を渡した。

内田は海保純に

「実は過日の私どもの記事を読んだ映画監督やシナリオ・ライターの方々から、また一部の俳優さんからも、衣装とヘアースタイルの調和はすごく大切なことだ。調和そのものが、その場面を見る人に人物の内面や思いを発信することができるだろう。是非早く研究会を発足して、自分たちに情報を頂きたい、という声が上がっていますので今日お伺いした次第です」

「なに、内田さん、そんな反響が出ているの？　驚いた。まだね、三条さんの新たに開業する美容室で、いろいろ

付け人に案内されて入ってきた芸能新聞記者の内田は名刺を手にしている海保に向かって

「芸能新聞社の内田と申します」

と丁寧に挨拶した。

紺の上下揃いのスーツをきちっと着こなしている。

「芸能新聞社というのでもっとラフな感じの方かと思っていましたが、なかなか礼儀正しいのね。ところでご用事はなに？」

「突然お伺いして申し訳ありません。お伺いしたいことは、過日星影瞳さんや白樺夕湖さん達と髪と衣装の調和を目的とした研究会を発足されることで、その後どのように進めておられるか、と思いましてお伺いした次第です」

「そのことですか。まだ何も進んでいませんよ。ここにいる三条さんが新たな美容室を開業してからの話ですから

な役柄をおやりになる銀幕の主人公の皆様のご意見を伺いながら研究をすることができればいいなという、まだ私たちが思っているだけの段階です。具体的にやるとしても一年以上先の話ですね」

「そうですか。そのときになったら教えてください」

「困っちゃったなー。そんなに期待されると。絢さんどう思う？」

「そんなに大ごとになっているとは。先生、何とかしてくださいね。私知りませんよ」

内田はにこにこして聞いていたが、彼にとっては今日、この二人に会えたことは大成功であった。

内田記者が帰った後、絢は記者を味方につける海保純の話術に感心していた。

昭和二十九年十月、三条家では、絢が美容室開設準備、加賀大造の税理士挑戦、最初は二週間に一度くらいの頻度で来ていたヨネが、絢が忙しくなったことから、毎週来て大造の部屋の掃除、洗濯や、たまに孝子の食材などの買い物も手伝ってくれている。絢がヨネにお礼として交通費程度の金額を渡そうとしたが、ヨネは遠慮して受け取らなかった。

絢の美容室開設場所は海保純、絢、湘南情報社の藍澤

社長の三人で、大船駅東側の広い通りに面した場所、鎌倉小町通、鶴岡八幡宮鳥居から東に入った閑静な場所やその環境などを見に行ったりしたがどれにも決めかねていた。海保が首を縦に振らなかった。数日後に藍澤社長が、江ノ電本鵠沼駅西口から右に折れた通り沿いの別荘図面を持ってきた。

「こんなものがありますが、候補地にはなりませんよね」

と言って、海保純と絢の二人の前に土地図面を広げた。

海保が

「これ、広さはどの位あるの」

「全部で三百坪はあります」

しばし考えていた海保は

「この通りに面しているプールは使えるの」

「もう何年も使っていないからダメでしょうね」

「このプールは何坪なの」

「二十五メートルプールですから五十坪くらいでしょうか」

鉛筆を持った海保は、プールに続いている庭に線を引き

「このくらいで八十坪くらいになるかしら」

質問に驚いた藍澤社長は

「こんな立派な別荘地を分筆するのですか」

「そうよ。今の時代に三百坪、おまけにプール付の別荘地を買う人がいると思うの」

続けて

「買う、買わないは別としてこの程度を分けてくれるのかくれないのか聞いて頂戴。買うとすればプールの取り壊し費用は差し引いてね。いつまでに聞いてきてくれますか」
「はい。直ぐ、と言いたいのですが持ち主が老人ですので明後日まで待ってくれますか」
「明後日午後三時頃には回答してくれるかしら」
「わかりました。その頃またお伺いします」

その間、絢は二人の会話を他人事のように聞いていた。
藍澤社長が帰ってから海保純は
「絢さん、ここの土地価格は、小町通などの半額以下と思うわよ。ましてプールの取り壊し費用も差し引かせれば、かなり安く買えると思うの」
付け人に藁半紙を持ってこさせて
「絢さん、さっき私が書いた地形はこんなだったでしょ」
と紙に書き出した。
それは新美容室建物の概略図面で、いつの間に考えていたのか、絢はただ感心して見ていた。
「絢さん、ここは別荘地だから周りは垣根、そうね高さ二㍍くらいの山茶花の垣根で中が見えないようにして。ガレージ横が裏の入り口、道路に面した入口は横幅一㍍半くらいの木の開き戸、木戸みたいにして、看板は上の方に小さくつけるの。入口を入っても左に回らなければ玄関には行けない。全体的にひっそりしたお屋敷風にしたいわね。中のレイアウトは貴女が考えて」
一息入れて絢を見た海保純は続けて
「建物は敷地にこうやや斜めに建てて、そうすると東南に窓が広がり、どの部屋も陽の光がいっぱい入るようになるの。暑ければカーテンを付ければいいから」
絢は呆気にとられて話を聞いていた。

帰宅した絢は、海保純の夢のような話は孝子にははしなかった。それよりも土地、建物、営業用什器備品にいくらかかるのか見当もつかなかったが、旭東銀行の預金はそのままにして全額借入で賄うことができれば、大造のお金は実質的に手を付けないことになる。先般、預金や貸金庫の名義を「小林アヤ」から「三条アヤ」に書き換えて来たばかりである。旭東銀行鎌倉支店は戦前から鎌倉・藤沢の別荘住人を顧客にしている銀行で、絢に対しても丁寧な対応であった。預金や貸金庫の名義を通名の「三条絢」にしたかったが、戸籍上の名前でないのでできなかった。銀行の提案で、絢宛ての通知やお知らせは「三条絢」にしてもらうことができた。

三日後、海保純から電話で
「絢さん、土地の値段は安くなるらしい。さっき電話があって具体的な金額は言わなかったけど。それでね、貴

女明日の午後は時間大丈夫？　藍澤さんが家に来ると言っているの」
「わかりました。伺います。ただ、お母様に報告した上での返事になりますけど」
「そんなにその場で返事しなくていいのよ。良く考えて貴女が気に入れば、気を持たせながら値切ることも考えましょ」
絢は海保純の手慣れた玄人はだしのやり口にただただ感心していた。
翌日藍澤社長との話の内容は
「プールとその周りの土地約八十坪から百坪は売ってくれる。プール取り壊し費用は差し引く。相続税を支払わなければならないので、二カ月以内に売却したい。価格は相続価格基準の路線価格でお願いしたい」
というものであった。それで、具体的に何坪いるのか、地形はどのような地形がいいのか、よく検討して二週間後に返事をすることとした。

翌日、絢は旭東銀行鎌倉支店に行き融資担当者に話すと、大口預金先であり、支店では最も大きな貸金庫を利用している上得意であるため、支店長、副支店長が絢の話を聞くこととなり、応接間に通された。
絢は自分の美容師歴や海保純との経緯を話し、芸能新聞記事なども説明して、本鵠沼駅直近の場所に土地を購入して美容院を新設すること、その全ての必要資金は百二十万円程度と考えられること、その資金の調達は預金の引き下ろしと貸金庫内の金塊売却を考えていると話すと、副支店長が
「素晴らしい方々に応援いただいての事業ですね。総額百二十万円として、仮に全額をご融資させていただいた場合、元金は毎月お幾らぐらい返済可能でしょうか」
「やってみなければわかりませんが、すずらん美容室の経験から申し上げれば、軌道に乗れば毎月一万五千円の返済は可能と思います」
それを聞いた支店長が、副支店長に
「期間十年で十分に返済可能と思うので、全額お借り頂くようにご説明して、当行がお役にたつことができるようによくご相談しなさい」
と言って立ち上がり、絢に
「私は用事があってこれで失礼しますが、あとは副支店長がお相手します。素晴らしい事業計画に当行も応援させていただきますのでご安心ください」
と言って席を立って行った。

家に帰ってもまだ孝子には具体的なことは全く話していない。次回、藍澤社長と話し合って具体的な方向性が決まってから話そうと思っている。

務署で調べると路線価格は坪当たり五千円弱ね。今はまだ戦後を引きずっていて、商業地ならともかく別荘地では買い手がいないでしょ。それと、こちらにはプール取り壊しの費用も掛かるわけだし。そうすれば五十日後に即金で支払うわ。契約場所は旭東銀行鎌倉支店で」

藍澤社長はその場から土地所有者に電話して、海保純のいわば指値で売却することの了承を得た。そこで絢が「先生、藍澤社長さん、この条件で今夜母に話すので、その結果を明日社長さんに電話します」

というと、海保純は

「そうだよね、明日、お母さんをここに連れてきなさい。私からも話すから」

その日の帰り、絢は一人で大磯の海岸をゆっくり散歩した。あの日、ロバートとのベイ・グランドホテルでディナーが終わってからのことを一人海を見ながら振り返った。

「忘れた。ファッション雑誌、部屋に置いてきてしまった。取りに行くから付いておいで」

の声に部屋まで付いていった。

部屋に入ってファッション雑誌二冊を鞄から取り出し絢に見せてから机の上に置くと、ゆっくりと絢の前にきて絢を抱きしめ唇を合わせた。唇を合わせたままの状態

電話が鳴り絢が出ると

「絢、元気？」

とロバートの声が受話器から飛び込んできた。

「私、元気よ。ロバートは？」

「元気だよ。ところで人事発令があって、九月から暫く日本にいることとなった。極東担当になったんだ。あれからワシントンと東京を何度か往復したが、今回は落ち着いて東京にいるよ。絢、会いたい」

「私もよ。ロバート、日本にそんなに長くいるなんて。早く会いたい」

「明後日横浜に行く。夕食を一緒しよう。軍が利用しているベイ・グランドホテルに六時に来られる？」

「大丈夫。行くわ」

電話の後、孝子に明後日に横浜でロバートと会って夕食を一緒にすると話すと

「まー、ベイ・グランドホテルなんておしゃれね。恋人同士みたいね。みたいじゃなくてそうなんでしょ。」

と冷やかされた。

藍澤社長との約束の日、海保邸ではすでに話し合いが一時間以上続いていた。

海保純が

「藍澤さん、百二十坪、坪当たり三千七百円でどう。税

あの日、ロバートとの時間は、今まで母からも誰からも与えられなかった、自分の全てを温かく柔らかく包み込む優しさだった。生まれて初めて感じた自分の全てを包み込む温かさだった。このような全く不安を感ずることのない、全てをゆだねることができる思いは、生まれて初めてだった。

このまま義母と二人の生活で人生が終わるのだろうか。それでは寂しすぎないか。仕事の方は今までの経験から自信はある。自分を優しく包み込んでくれる、温かな優しさに恵まれた人生を歩みたいと思う自分を感じていた。

グランドホテルでロバートと過ごしてから日が経つにつれて絢の心に日々空虚（むなし）さが広がっていった。孝子の養女になったときにはこのような思いは全くなかった。それが幸せそのものだった。しかし今は違う思いの自分を見つめている。

現実、加賀大造の資産を持ったまま結婚することができるだろうか。大造は独立してヨネと一緒になれば、絢は解放される。その段階ですべてを話して返すことはできるだろう。

そんなことを思っているうちに大磯海岸を歩き、東海道線の大磯駅についた。

でブラウスを脱がせはじめた。でもその間絢は、肩や腕を動かしてブラウスをとりやすくしていた。今思い出すと、絢にとっては考えてもいない、思ってもいない動作だった。そのときは何も思わず体が自然に動いていた。

絢には初めての経験だったがベッドの中で優しく愛撫された後、ロバートの全てを受け入れた。むしろ喜んで彼の愛撫に全身をゆだねていた自分が不思議だった。

幼いころ、母と妹と三人、母は着物の裁縫賃仕事で私達姉妹を育ててくれた。母の仕事は忙しく・・・今思えば生活のために沢山の賃仕事をしなければならなかった・・・甘えることも許されず、きっと母もまた姉妹を抱きしめる時間を欲しくても持てなかったのではなかろうか。

小学校六年を終わると同時に全く知らない家（加賀大造宅）に女中奉公に出された。その日から日本に帰るまで朝から夜まで女中として働き、自分を優しく包み込むような温かな愛情は誰からも与えられなかった。甘えることは一切できなかった。満州から引き揚げの途中、京子の無残な死を見て心は凍った。それからは文字通り一人で生きてきた。美容学校でも、すずらん美容室でも、また、大造の資産をめぐっての五代や松尾たちの度重なる冷たく鋭い追及の中を、たった一人耐えて戦ってきた自分だった。誰にも甘えることのできない孤独な人生だった。

家に着いてから孝子に
「海保先生が、先生が考えている私の美容院開業についてお母様と私にお話をしたいと仰っています。本鵠沼の駅近くに土地を買って建物を建てて開業したら、ということをお話になると思うの」
「私が聞いても分かるかしら。貴女が詳しくお聞きして、いいと思えばやってみれば」
「それはそうですけど、海保先生としては私のただ一人の親であるお母様にお話をするのが筋と思っているのではないでしょうか」
「わかったわ。ご一緒しましょう」
と言って、一息ついてから絢の顔を見て
「絢さん、最近何か考えていることあるの？」
「え！何もないですけど。私そんな風に見えますか？」
「私の気のせいかも知れないけど、時々遠くを見て何か考えているというか、思いにふけっているような絢さんを見るの。何か心配ごとがあったら私に言って頂戴」
「お母様、ご心配かけてすみません。何もないですから大丈夫ですよ。何かあれば真っ先にお母様に相談します」
と言って、孝子を見て微笑んだ。

翌日午後から海保邸を訪問した孝子と絢に、海保純は絢の美容院建設計画の場所と建物の概要を説明した。ただし内装や什器備品はこれから絢が決めることとして。
そして孝子に
「お母様、大まかですけどこのような計画を立てました。完成後のお客様のことは、私もできる限り応援させていただきます」
と言うと
「先生、有り難うございます。過日もとてもお目にかかることのできないような銀幕のトップスターをご紹介していただいたり、既に先生が大変お力になって下さっていますことを有難く思っています。あとは先生と絢さんのお考えでどうぞ進めてください」
「それからお母様、資金の方は概算総額百二十万円を旭東銀行鎌倉支店から借りるように絢さんが話してきました。借主は絢さんです。ただ、形だけですが銀行に対して保証人が必要なのですが、それはお母様にお願いできますでしょうか」
それを聞いた孝子は
「絢さん、そのようなことをどうして先生の口から言わせるの。水臭いじゃないの」
と絢の顔を見て言ってから
「先生、そのようなことまでご心配かけて申し訳ありません。絢さんの仕事ですし、まして先生がこのようにご自分のことのようにご心配くださっていることでございますので、私でよろしければ喜んで絢さんの保証人になります」

「絢さん、良かったわね。これですべて進められるわね」
の海保の言葉に続けて絢は
「お母様、決して内緒にしていたわけではありませんのでお許しください。私、半分自信がなくてお母様にキチンと説明することができないような気がしていました。ごめんなさい。でも、海保先生のお母様への説明を聞いていて、私自身も自信と勇気が湧いてきました。先生、本当に有り難うございました」
と深々と頭を下げて挨拶した。海保は
「そうそう、まだ建築屋さんが決めてなかったわね。個人経営だけど大磯の土倉工務店と、茅ヶ崎の来栖建設の両方から見積をとることにしましょう。お母様、二人とも先代からの大工さんで私が良く知っているのです。価格は安い方がいいのは当たり前ですが、良く話を聞いてから決めましょう。それは絢さんと私で決めていいですか」
「先生、お気を使わないでください、宜しくお願いします」

それから絢にとっては目が回るような日々が続いた。
一年後、新しい美容院「あや美容院」がオープンした。海保純が命名した。
外周は高さ二㍍くらいの山茶花の垣根に囲まれ、入り口は幅が一㍍半くらいの一枚の扉だけで、扉の目線の高さの所に白字横書きに「あや美容院」と書かれている。その扉の上部に付けられた電飾の光で、セピア色の扉が垣根の緑の中に渋い光を湛えて、外観的には上品な調和を醸している。
オープン披露の日も外周は別荘地としての静寂さを保って、道路沿いには生花や看板など何も飾らないで、入り口から出入りする人の多さが目に付いた程度だった。
しかし、内部は美しい植栽で飾り、南側の庭に面したサロン風の部屋は、採光は豊かで明るく、ソファー、チェアー、テーブルはイタリア調で揃え、奥のテーブルにはアメリカの洋髪ファッション誌が並び、来る人の目を楽しませている。
二日間の披露では、初日に海保純の関係で映画・芸能関係者を中心に招き、二日目は、すずらん美容院当時絢を指名してくれた鎌倉文士夫人などを招いていた。
二日間の披露に来た人の中で予約した人たちも多く、順調な船出をすることができた。

おヨネさんは「あや美容院」オープン前に藤沢にアパートを借りて引っ越してきて、美容院内の清掃はじめ下働きを一手に引き受け、休業日には加賀大造の世話をしていた。
その年も暮れようとした頃税理士試験の合格発表があり、加賀大造は一度に全科目の合格を果たし、五十歳過

ぎの男性の快挙として地元新聞に写真入りで大きく報道された。翌年一月、三条家の離れを事務所として「加賀税理士事務所」をオープンした。第一号のお客は「あや美容院」であった。絢は大造が税理士合格前から新たに美容院開設に係る経理事務を美容院の経理事務員として大造に依頼し、相応の給与を支払っていた。

絢は孝子から大造とおヨネさんの結婚について、大造の「美容院からの顧問料」とおヨネさんの美容院従業員としての給与を合算すれば、ささやかなアパートを借りて結婚生活ができるのではないかと相談された。三条家の離れで結婚生活を送るわけにはいかない。

そこで孝子と共にその夜大造を母屋に呼んでその話を持ち出すと、大造は

「奥様、絢さん、有り難うございます。私たちも結婚を望んでいますが、御恩をお返ししないうちに結婚をするわけにはいかない、と話し合っています。今暫く稼いで、お立替えいたゞいている簿記学校のお金とか、ここでのお世話になっている生活費もある程度お返ししてから、改めて私の方からお願いしたいと思っています」

絢は孝子を見てから

「加賀さん、今まで私が立替えてきた簿記学校のお金やここでの生活費は、加賀さんの誰にも真似のできないご努力とその成功に対して、些少ではありますがお祝いとして差し上げますので心配しないでください。ここの部屋代についてもお母様もそのように仰っています」

「加賀さん、そうですよ。貴方のご努力を見ていれば誰でもそう思いますよ」

と孝子が付け加えた。

大造は茂原時代には考えられなかった人の温かさに接し、涙を抑えきれなかった。何度か固辞したが最後に

「有り難うございます。明日にもこの有難いお話をおヨネさんに話して、相談した上でご挨拶に上がります」

と礼を言った。

一方「あや美容院」は日を追うにしたがって

「美容院の中は明るくて、アメリカの新しい洋髪ファッション雑誌が何冊も置いてあって、誰でも見ることができるんだって」

「あの美容院には、大船撮影所の女優さんたちがお忍びで来ているそうよ」

「鎌倉の有名な文士夫人たちも大勢来ているみたい」

「だけど、そのようなお客さんが来るからと言って美容師さん達はお高く止まっていないで、どんなお客さんの希望も丁寧に聞いて対応してくれるっていう話よ」

「電話予約は誰でもできるんだって」

「電話予約代金は町中の美容院と変わらないって」

と言った風評が流れて、益々忙しくなっていった。

そして絢は全てのお客に挨拶をしながら、従業員の対応に目を光らせていた。

絢は二カ月に一度くらい、ロバートが軍務の合間を縫って横浜のベイ・グランドホテルに来るときに会っている。絢の心中は二カ月に一度は待ち遠しかったが、それだけに会ったときに、ロバートの温かさと優しさが絢の全てを包みこむ満足は大きかった。包みこまれている時間は何物にも代えがたい時間だった。

ある日、絢の所に美容院を宛先とした宛名も差出人も鉛筆で書かれた一通の封書が届いた。差出人は「小林次枝」となっている。片時も忘れたことのない妹の名前である。昭和十年に絢が加賀家に女中奉公に出てからもう二十年にもなるが一度も会っていない。本所地区の大空襲で家は跡形もなく焼けて、母と妹の所在はいくら探してもわからなかった。

封を切る手が震えた。

続

松浦武四郎の〝一畳敷〟の書斎

漆原直子

先日書店に行った時に、たまたま次のような題名の本が目に止まった。

『幕末の探検家　松浦武四郎と一畳敷』

何のことであろうかと思い、手に取って見ると、松浦武四郎が日本各地から知り合いを通じて、古寺社や橋等の由緒ある古材・廃材を集めて、八年もかけて造った〝一畳敷の書斎〟等の紹介であった。場所は東京神田五軒町(現千代田区外神田六丁目)で後に三鷹市に移築された。私は、松浦武四郎については、幕末の探検家で蝦夷地等を探検し、〝北海道〟の名付け親でもある、という程度の知識しか持っていなかった。今回この本を読んでみて、武四郎の非凡で多彩な趣味と才能、行動力に驚かされ、どんな人物であるのかと非常に興味がわいた。探検家、絵師、好事家、作家、出版者、強烈な個性、奇人、・・・松浦武四郎の経歴の概略は次のようである。

1818年　伊勢(現松坂市小野江町)で出生(第四子)。

1824年　突然家出して江戸見物をするが、一カ月後に連れ戻される。以後、各地を旅する。

1845年～　二八歳の時に、第1回目の蝦夷地調査を行う。四回目以降は、幕府に雇われて赴く。調査時には、案内役などアイヌの人々の協力を得る。また、この間多くの日誌類を著す。が、松前藩によるアイヌへの圧政や窮状を書いたので、松前藩から反感を買い、刺客に命を狙われる。

1858年　四三歳まで蝦夷地に六回目の調査に赴く。同年『近世蝦夷人物誌』を執筆するが、松前藩等和人によるアイヌ迫害を実名で公表しようとしたので、幕府より出版禁止となる。

1859年　『東西蝦夷山川地理取調図』を出版する。

ここには一万に及ぶアイヌ語の地名が記録されている。また、蝦夷地全体の輪郭は伊能忠敬・間宮林蔵実測による地図を採用。その他『蝦夷漫画』等を出版す。

1868年　明治政府より箱館府判官事に任じられる。

1869年　蝦夷地を〝北加伊道〟という名にすることを提案。政府による検討後〝北海道〟と命名される。

1872年　明治政府のアイヌ政策を批判して、判官事を辞任する。

1885年　六八歳から、大台ケ原への登山を開始する。

1887年　第三回目の大台ケ原登山と富士山の登山をする。この年に『一畳敷』の書斎を造り、『木片勧進』を出版する。

1888年　四回目の大台ケ原への旅の途で倒れ、七一歳で没する。本人の遺言に従い、大台ケ原に遺灰の一部を納骨し、記念碑を建立する。『一畳敷』は燃やさずに保存した。

武四郎は、五〇歳で明治維新を迎えた。日本が欧米列強に追いつこうとしたまさに動乱期に生き、吉田松陰や尊王攘夷派の幕末の志士との交流も深かった。非常にエネルギッシュで、様々な物を蒐集し、出版活動も盛んに行っていた。その主な内容は以下のようである

・交流のあった人物(シーボルト、川鍋暁斎、勝海舟等)に柿渋団扇に署名や絵を描いてもらい、『渋団扇貼』として、一四七枚を三貼の冊子に貼った。

・文字の無い文化の採集(絵文字による南部暦、消災咒)

・篆刻の刻印。「一日百印百詩の会」の開催。

・幕末の志士達からの書簡や、蝦夷地探査中に渡された領収書等を散逸しないようにと、1つの大きな屏風に貼り、『蝦夷屏風』を作る。

・様々な古物の蒐集(古銭、矢じり、勾玉、鉱石等)

・愛用傘『骸骨図縫付傘』。大台ヶ原登山時には、必ず、川鍋暁斎画の骸骨図等が書かれた布製の傘を携行した。

・各地からの由緒ある古材や廃材。これを元に、『木片勧進』の執筆と『一畳敷の書斎』の建設

『蝦夷屏風』等、蒐集した物の保管の方法も奇抜である。もし、武四郎が現代に生きていたら、これらをデータベース化して、さぞかしパソコンを駆使したのではないだろうか?そして最も究極の蒐集物が〝木片〟であり、その保管場所としての〝一畳敷の書斎〟である。『起きて半畳寝て一畳』という諺がある。私は初め、その諺を具現化したのではないかと思ったが、武四郎が晩年を迎える前年に造られたそれは、書斎として使用しつつ、死後、自分の亡骸を火葬にする時の薪にするための物でもあった。古材の例を次に挙げる。



＊写真の番号は、『本片勧進』と同じ番号を付す。
＊写真は筆者(2012,11,3)撮影)

普通、〝勧進〟というと〝お金〟をイメージするが、これは捨てられるか燃やされるかされそうな〝木片〟である。中には大切に保管されていた物もあるが、廃仏稀釈により破壊された寺社の木片もあった。よくもこんなに多くの人の計らいで集められたものである。木片の数は、北は宮城県から南は宮崎県までで、九一にも及ぶ。すでに失われた物もあるが、最古の木片は飛鳥時代にまで遡ると言う。『木片勧進』の「壁書」には以下のように記されている。少し長いが理解を深めるために引用したい。

（『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』ヘンリー・スミス著より抜粋）

我若きより一つの行李を肩にし、六十余州蝦夷樺太まで踏偏し、後当地に来住すること殆ど四十年、終にこの神田五軒町を一区の死陀林として住めり。今度ここに一間を建添え、纔に畳一枚を敷く。是敢て物好するにハあらず。もとよりある畳十八枚半にこれを合わせて十九枚半となる。是二十枚に満をかくの心なり。良田万項食二升、大廈千間臥八尺清献公坐右銘寄居蟲の小さきこそ心安けれと自ら安んじ、古き歌に、

常盤なる岩屋は今も有けれど
　住ける人ぞ常なかりける

万葉の歳を忘ることなかるべし。

今度、この古材、板きれ等、諸国の友より贈り呉られしを以て補理たり。是また其友を朝夕に是は誰より、かれは誰よりと其人々を思ひ出る種にして、其友の厚き志を忘れず、其人々の言行ひの目出度ことを人々にも語らまほしき心はかりにて、敢て後ニまで伝ハれとて作りなせるにはあらずと。

是やミしむかし住けん跡ならん
　逢が露に月のかゝれる

と西行上人のいはれしをおもひてなり。

我齢こん年ハ七十となるに、北向きの窓いかにも冬の日の寒さに堪ざれバ、日当たりの方に1間を構ふる。この地のあたり火のわざハひしば□□有ば、もし近き辺りに火有ても其際に心顛倒して怪我過ちなどせむよりハ、猶如火宅の仏の金言を毎に忘れず、死せば毀ちて此材にて亡骸を焼き、其遺骨は大台山に遺り呉やうと、其は其時の機に計ひてよとしるし置この一筆も、おぼつかな誰に問ましいかにして始も果もしれぬ我身を

明治十九年十二月三十一日夜、燈火のもとにしるして

世の中につり合ぬ身ぞやすからん
　暮行年のいとなミもなく
草の舎のあるじ弘

（＊□□著者スミス教授は判読不明として□を用いているが、この空白はしばしばではないかと思われる）

現在この『一畳敷』は、国の登録有形文化財となって、野川沿いの武蔵野台地の面影の残る緑豊かな、国際基督教大学(ICU)のキャンパス敷地内の『泰山荘』の一角に保存されている。私は是非実際に見たいと思い、今回ちょうど大学の学園祭の期間中が公開日であることを知り、早速見に行った。普段は非公開の物件である。

『一畳敷』は武四郎の死後、一時紀州徳川家当主徳川頼倫の邸宅に引き取られ、記念館としてごく一部の人だけに公開していた。大正末に、徳川頼倫が集めていた古寺社の古材を用いて、『一畳敷』に倣って『高風居』という茶室を作り、『一畳敷』に取り付けた。昭和になり、日産財閥重役の山田敬亮は三鷹の野川沿いの高台に、『泰山荘』という別荘を建て、その敷地内に『一畳敷』と『高風居』を買い取り移築した。その後、昭和一五年には中島飛行場が家ごと土地を買い取り、戦後は富士重工業の土地になってから、さらに昭和二五年に国際基督教大学が買い取ったのである。昭和五四年に大学が建物の修復作業を行った。しかし、しばらく人々からその存在が忘れ去られ、昭和六〇年から二年間国際基督教大学で教鞭をとっていた、コロンビア大学教授(日本近代史)カリフォルニア大学東京スタディセンター所長のヘンリー・スミス教授が、『木片勧進』を元に、実際に各地を訊ね歩いて、これら木片の出所を調べたのである。そして『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』を著した。

『木片勧進』も収録し、一つ一つの木片について検証している。先述の「壁書」はその著書の中で紹介されているものである。

これら木片は、ただの古材廃材ではなく、人の手を介してもらい受け、その一つ一つに人との交流があった。また、〝木片〟の由来を知ることは、それぞれの地域の歴史にも触れることになる。まるで遺跡の発掘調査をしているかのようだ。できるものなら是非一度、一晩泊まってみたいものである。本来は本人の遺志に従って、燃やすべき物なのかもしれないが、震災や戦災にも焼けずに残った前代未聞の稀有な物件である。このまま前世紀の遺物として残していきたいものである。また機会があれば是非訪れたいと思う。

【参考文献】

・『幕末の探検家　松浦武四郎と一畳敷』INAX出版
・『泰山荘　松浦武四郎の一畳敷の世界』
　ヘンリー・スミス著
　国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館編
・松浦武四郎記念館所蔵　松浦武四郎関係資料
　松浦武四郎記念館編

第四話　桜ケ池のお櫃納め

石野茂子

比叡山功徳院肥後の阿闍梨皇円は、ある時、信頼のおける弟子の法然を呼び寄せ、日頃の悩みを打ち明けました。「折角この度、受け難い人間に生を受けてきたがとりわけ出家の身となって、朝な夕なに御仏に仕える身でありながら、この度容易に生死を離れ、成仏を遂げなければならない。法門の見極めが出来なかったのは、嘆かわしい事である。生身の仏にお会い出来れば、やすやすと成仏を遂げるお経があるだろうに、私にあっては、二仏の中間といって釈迦無尼如来は二千年の昔、涅槃の雲にお隠れになり弥勒菩薩は五十六億七千万年の後でなければこの世にお生まれにならず、釈迦、弥勒の二仏の中間に生を受けた事が一生の恨みである。是非とも弥勒菩薩にあってまのあたりに御教化を受けたい事だが「観行位尚隔生即忘」という事があって、たびたび死にかわり生きかわりすれば折角思いたった事も終には忘れてしまうものである。誰でもそうであるが、前世の事を問われても誰れ一人答えられないように、私も今は弥勒の出世に逢いたいと思っても、死に変わり生きかわりすれば、この志を忘れてしまうものである。それ故、弥勒の出世にお逢い出来ないのならこの志を忘れぬようにするには、命の長きもの大蛇となるより他に手段はなく、大蛇になるべく大願心を発したのだ。そこで、法然頼みがあるのだが、大蛇となれば第一に必要なのは、住む場所である。大海に住めば、金翅鳥という鳥がいて日々大蛇を三匹ずつもとって食用とする故、折角大蛇となっても大海に住んで、金翅鳥にとり殺されては何でもない。どこか良い池があれば探してそこに住みたいと思う」と阿闍梨上人が言われました。その話しを聞いて法然上人は、日本六十余州津々浦々に至るまで多くの弟子を遣わし探させました。法然は、遠州笠原の荘、桜ケ池を探し当てられました。当時、桜ケ池は後ろ三方は高き山をひかえ、あたかも屏風をたてまわしたように、また草木は生い茂

り怪鳥の奇声が青黒い湖面にこだましもの凄いばかりの陰鬱な気が漂っていました。この池こそお上人様が大蛇に身を変えて住むには究極の池と急ぎ比叡山の阿闍梨上人にこの様子を詳しく話しました。阿闍梨上人は大いに喜び時の領主、花山院家と念書を取り交わしました。そして

「我が霊は、桜ケ池に留まるであろう」

と、弟子達の止めるのも聞かず、黒雲がにわかに湧き立って阿闍梨上人をつつみ恐ろしい大蛇と化して

「皆のものさらば、法然さらば」

という声のみを残して一団の黒雲は、東へ飛び去ってしまいました。間もなく桜ケ池は未曾有の大洪水となり、池の泥はことごとく溢れ出し池は今までにない美しい水をたたえるようになりました。

その後、六年目の承安五年三月十四日弟子の法然上人は四十三歳にして、弥陀の願意を悟り始めて他力浄土の法門をお開きになりました。この時、師の阿闍梨上人の事を思い出し我が師匠は、他力浄土の法門といって末世の衆生は阿弥陀仏の御本意を信じただ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と唱えさえすれば、ことごとく極楽へ往生を遂げられるという、いともたやすい法門があるのに、つまらない畜趣の生を受けたことは誠に痛ましい事である。この法然が今六か年早く浄土の法門を見開く事ができたなら、大御恩のある御師匠様に、大蛇の身まで受けるような事は無かったであろうに、たった六年遅かった故、はや大蛇の身を受け五十六億七千万年という永い月日を桜ケ池にて御苦労下さるという事は、実に千遍万遍悔やんでも悔やみきれるものではないと嘆き、是非ともお逢いしてこの他力浄土の法門の事をお話ししたいけれども、この娑婆と竜宮界との隔たりがあってはお目にかかる事も出来ないが、今一度池に行って拝みたいと阿闍梨上人の高弟の法然上人・親鸞聖人・熊谷蓮生坊の三人は桜ケ池に出掛けました。山の樹木が紅葉し、薄の穂波が白く光ってゆれる時期となり、三人は湖岸に緑なす草の褥に座して一斉に読経を始めました。やがて、千草にすだく虫の音に和して読経の声は池の底まで沈んで行くようでした。法然上人は、御師匠様がこの池に住んでいらっしゃるのなら訪れた真心をお知りになって一度お顔を見せてほしいと、一心不乱に読経を続ければ湖心に写った白雲の影が割けてそこから忽然と元の平生行法の阿闍梨上人の姿が現れました。上人が手を翻して三人を招くと池の水が二つに割れて一条の道が現れました。その後ろに従って行くと上人の竜宮界へ招き入れられたのである。そこに六つの大瓶があり、法然上人が不審に思って聞くと阿闍梨上人が蓋を取って見せると瓶の中に数千の小蛇が満ちており答えるには、「皆私の従者である。けれども私の加持力によって皆この瓶の中に封じておいて、これらの従者をことごとく済度して後、弥勒三会の

暁に逢い、眼のあたりに御教化を受けて成仏したいと思っているのです」それを聞いて法然上人は、一体の御仏を持ち、この度都よりはるばる訪れるにあたって笈の中にこの如来を納め、自ら背おいて御師匠にお授けして他力浄土の法門を勧進しました。それによれば法然上人の見開いた他力浄土の法門で釈迦無尼如来が、阿弥陀経の中で説かれてあるのには、四十八の御本願があり、とりわけ大切なのは第十八念仏往生の本願である。

第十八念仏「もし、我仏を得たらんと十方の衆生至心に信楽して及至十念せんに若生ずんば正覚をとらじ」―おおよそ生きとし生けるものは、虻・蜂・蜻蛉・犬・猫に至るまで弥陀の本願を信じ念仏を唱えれば極楽往生を遂げられる。

法然上人は、「今、御師匠様が一旦畜趣の生を感じてはいるけれども阿弥陀仏本願の十方の衆生のお言葉にもれていないから、どうぞ今より心を改めて弥陀の本願を信じ念仏して極楽浄土へ往生をお遂げなされてはいかがですか。極楽往生をお遂げに成れば十方諸仏の国土へ遊歴経行する事は自由自在、諸仏菩薩を供養することも意のまま誠に仏道修行をするからには極楽は、無為の界であるのに、この世界は五十六億七千万年という後に出現する弥勒菩薩をお待ちなさるには及ばぬ事ではありませんか」

阿闍梨上人はこれに答えて、

「私がその他力浄土の法門を見開く事が出来なかったのは最も遺憾な事であるけれども、今更この志を変えることは出来ない。それは、一度弥勒菩薩へ誓いをたてた事であるから、若しこの志を変えるという事は、弥勒菩薩への誓願が反古に成り、更に弥勒菩薩に対して偽りを申し上げた事になるからこの志を改める事は出来ない。また一方より考えてみるとこの大蛇身を受けてこの池に住んでいるのは、実は私一人の為ではなくて末世の衆生が肥後の阿闍梨皇円はどうして大蛇となって桜ケ池に住むという事を言った時、彼は聖道自力の修行では容易に成仏得道でき難いため、余儀なく畜趣の生を感じて、弥勒の出世を待っていると聞けば、聖道自力の修行は難行で容易に成仏得道でき難いと気づくであろう。聖道自力の修行で助からないとなれば、必ず貴僧の広める易行他力浄土の法門、南無阿弥陀仏を信ずるようになるであろう。そうなれば私が大蛇と成っているのも取りもなおさず末世衆生の為であり五十六億七千万年は物の数、永い間この桜ケ池の水底にて泣き明かすとも少しもいやと思わない。さらさら苦労とは思わぬ。また、この尊像は池の水底に安置すれば私一人の為になるけれども、そうすれば広く一切衆生の御化益がうすくなる故、これより北にある内田の郷の天岳院へ安置されて私の為に永く念仏弘通の道場を広めてほしい」

思い出つきぬ昔語りや深遠な仏道の話しで数刻語り合

った師弟は、やがて再び阿闍梨上人の導きによって湖岸に戻った。ここにおいて法然上人は重ねてお願いするには、「ただ今お目にかかったのは普通のお姿でしたがどうぞ現身のお姿を」という法然上人の求めに応じて阿闍梨上人は、たちまち二十広（約四十メートル）余りの大蛇身に変えれば、法然上人・親鸞聖人・熊谷蓮生坊もこの凄まじい有様を見て驚き眼は鏡を並べたように、また黒雲を起こし、炎は赤々としてこの様に恐ろしい姿になったのもただ今お言葉にあったように、聖道自力の修行は困難な御教えであるという事を口で説いて聞かせたばかりでは合点がいかない故、かくの如き恐ろしい姿まで成って説法されて下さるのは、みなこの末世の者を憐み下さる御慈悲、そして五十六億七千万年と聞くだけでさえ長いと思うのに、御師匠様は嫌がらず末世衆生の為に成る事であれば、五十六億七千万年は物の数ではなく水底で泣き明かすとも少しも苦労とも思わないとお答え下さった御一言誠に有り難いやら勿体無いやらと、法然上人は暫くの間、御師匠様の御慈悲が心根に徹し骨身も砕かれるばかりにお思いになり、落ちる涙を袖で拭きながら大蛇に向って、

「かねてより聞くところによると、大蛇には三熱の苦しみがあると聞いているけれど御師匠様はいかがですか」と聞けば、大蛇は双眼よりポロリポロリと涙を流して、

「よく尋ねてくれた貴僧であるからこそ、そこまでの心持を持ってくれるのだ。たとえ私といえども一旦畜趣の身を感じたからには、この三熱の苦しみを免れる事は出来ない。大蛇には八万四千の鱗があるが、この八万四千の一枚の中には、八万四千の細い虫が生じこの肉を喰う事、昼夜に三度づつあり、まるで鳥に羽虫がたかるようにこの三熱の苦しみは言葉に述べつくされるものではない。どうかこの三熱の苦しみを免れる法門があるのなら私に授けてくれるように」と、大蛇は涙ながらにお願いすれば、法然上人は「今この大蛇三熱の苦患を免れる法門といえば加持祈祷を以ってしなければ出来ないが、この度私が開いた他力浄土の法門は南無阿弥陀仏の一行一念を唱えただけでも八十億の生死の罪が消滅し、煩悩も唱えるだけでそのまま極楽浄土往生が遂げられ、終には弥陀の同体の悟りに至る事が出来これは偏に他力本願の南無阿弥陀仏の功徳力によるものである。今大蛇の三熱の苦患もこの功徳力によってこそ免れるのは間違いなしと御決心して、大蛇に向かって、

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と授け水晶の数珠でもって大蛇の頭より尾に至るまで三返通り撫でると、不思議にも八万四千枚ある大蛇の鱗は、秋の風に木の葉が散るようにバラバラと離散しました。これでもって今に至るまで桜ケ池の大蛇には鱗が無いと言われています。法然上人・親鸞聖人・熊谷蓮生坊は阿闍梨上人に名残り惜しい別れを告げて桜ケ池より北の方にある内

田の天台宗天岳院において七日七夜、仏の修行をし、阿闍梨上人のお願いによって尊像を安置し、阿闍梨上人の為と寺の山頂に五輪の石塔を一基建立し、その後、法然上人は師匠阿闍梨上人のために赤飯を桧作りのお櫃につめて一つは神社に奉り、一つは御師匠の御供養のために池心に納められました。その後、弟子によってたびたびお櫃が納められ、現在、秋の彼岸に行われている遠州の奇祭「桜ケ池のお櫃納め」の起源といわれ絶えることなく今日に及んでいます。

詩　二つの川

石野茂子

あそこに行けば母が喜ぶ
小学生のころの夏の遊び場は
家の前を流れるくらみ川であった
橋の下の緩やかなカーブは　水の流れが変わり
川のそこだけが冷たい水を湛えていた

綺麗な川の流れには
沢山のしじみがいた
その深みの流れに足が着くのは
自分だけであった
足で掻き分け
思い切り息を吸って
確実に両手ですくい取ると
太陽が眩しい川面に出る
母が作ってくれた手ぬぐいの袋に入れ

再びもぐる
袋の重みを感じながら
濡れた服のまま家に帰ると
母は昼食の膳が一品増えたと喜こび
しじみ汁を作る
通いの職人・住み込みの職人等の
食事の支度である

川は子供心に豊潤な感動をくれた
蜻蛉のやご取り・蛍の乱舞
上級生と浮き輪の水遊び
水辺の花火

少し下流まで泳ぐと
さか川との合流があり

深くて急な流れとなる
家の裏側を流れるさか川

我が家は二つの川に挟まれて
川は遊び場であった
さか川は「はや」の宝庫
釣りが好きな兄は
瞬く間に数十匹を釣り上げる
母はそれを七輪で焼き
へちまに串刺しにして乾燥させ
朝餉の味噌汁に入れる
川魚の香ばしさは
今もなつかしく思い出される

くらみ川に比べさか川は急流であった
子供心に　この川の上流は何があるのかい
つも川面を見ながら考えていた
幼なじみのようこちゃんは
夏になると家の二階で
花火を見ようと　誘ってくれた
当時はめずらしい籐の長椅子で

寝ながら　鮮やかな花火を見た
おばさんが　この花火は
さか川の上流の橋の上で
打ち上げているよと言った

憧れの　遊び場も　食用の宝庫の川も
ひとたび台風が来ようものなら
家をはさみ　前後で暴れ川と化し氾濫して
住宅を襲い　瞬く間に床上まで浸水して来る
池の金魚は逃げ場を失い
夏水仙の群生は泥と化す
台風一過の晴天の数日は　床下の汚泥撤去と
消毒薬の散布　支援物資の整理に追われる

あれから四十年
嫁ぎ先は　閑静な城のある高台の町
桜　紅葉　山茶花の垣根から見下ろす
緩やかな坂の下には
子供心に憧れた　さか川が流れていた

「房総東往還道を歩く」余滴（続）

山田嘉久

二　上総から安房へ

1　メキシコ記念碑（御宿町岩和田）

御宿町岩和田にある「日西墨三国交通発祥記念碑」。

側面にはスペイン国王の真筆、メキシコ大統領のメッセージなどがはめ込まれている。太平洋を一望できる高さ十七メートルの塔は、江戸時代初期、遭難したスペイン人たちを御宿の人々が助けたことに因んで、昭和三年に建てられた。（第二次大戦中は米軍の目標にされるため黒く塗りつぶされていたという）

慶長十四年（一六〇九）、フイリッピン諸島総督ドン、ロドリゴは任期を終えてサンフランシスコ号でメキシコに帰国途中、嵐に遭って岩和田（田尻海岸）で遭難した。そのとき村民たちは総出で救助にあたり、乗組員三百七十三人のうち三百十七人を助け出した。

岩和田村の人たちは乗組員に炊き出しをしたり、冷えた体に暖をとらせ、負傷者の救助など至れり尽くせりの救助活動を続けたのである。

これが日本とスペイン、遭難当時スペインの属領であったメキシコ修好の契機となった。

救助された田尻海岸は「ドン、ロドリコ上陸地」として現在、「県史跡」となっている。

ロドリコらは大多喜藩二代藩主本多忠朝の面会を経て、江戸城内で二代将軍徳川秀忠と、次いで駿河城では大御所家康とも面会した。翌年、家康は船（家康の外事顧問Wアダムス（三浦按針）に作らせた）をあたえて彼らをメキシコに送り返した。

幕府の一番の目的は先進国スペインとの交易であったので、秀忠、家康よりスペイン国王宛の書簡が託された。

平成二十一年（二〇〇九）は「日本、メキシコ友好四百年」でもある。これらの資料は町内にある「御宿町歴史民俗資料館」で見ることが出来る。資料館に入ると正面に「御宿とメキシコ」のコーナーがあり（御宿町とメキシコ、アカプリコ市は姉妹都市）、当時の帆船の模型が展示されている。

この資料館には「五倫文庫」もあり、江戸時代から昭和にわたる国内外の貴重な教科書が収蔵されている。

日本に明治五年（一八七二）、学制がしかれて以来、初等教育で使われた教科書、更に遡って寺小屋で使われた徳川時代の本や、世界各国の各年代にわたる図書もひろくあつめられている。

明治二五年、当時の御宿小学校の校長先生が教科書の比較研究から始められたものだが、当小学校は明治三十五年の台風により崩壊されたのを機に、同校長を中心として村民一戸、毎日五厘（一銭の半分）の寄進が実行された。それから大正三年まで一戸の脱落者もなく積み立てられ、立派な新校舎が完成した。

「五倫文庫」の由来は「五厘」は儒教の教えである「五倫五常の五倫」に通じるとして名づけられものという。

房総の僻地に、こんな立派な文庫が存在したのも明治の教育水準の高さを示すものだろう。

たまたま同資料館で配布されていた機関紙「五倫」創刊号（昭和五十四年）を読むと、わが国の教科書の歴史を知ることが出来る。

1　寺子屋時代
2　欧米文化心酔期（明治五―十年）
3　儒教主義復活期（明治十一―十八年）
4　検定教科書（明治十九―三十六年）
5　国定教科書（明治三十七―昭和二十年）
6　戦後の教科書（昭和二十―今日まで）

に時代区分がされて、各時代とも、いかに小学教科書が我が国民形成に役立ったかを説いている。

なお、この資料館近くの海岸に「月の砂漠像」が建っている。

大正末期に活躍した竹下夢二、蕗谷虹児らと並ぶ抒情詩人加藤まさおによって作られた童謡「月の砂漠」は一世を風靡したが、詩のなかに登場する砂漠は、病弱だった加藤が療養のため毎夏訪れた御宿の砂丘がモチーフとされている。

それを記念して昭和四十四年に建てられた。

我々、老年隊はその像の下で「月の砂漠」を年甲斐もなく合唱した。

（なお、加藤の詩では「砂漠」ではなく「沙漠」となっている。海岸の砂はみずみずしいので敢えて「沙漠」としたと加藤は述べている。「沙」は「すなはま」の意。）

2　「御宿」の由来―最明寺（御宿町須賀）

御宿町須賀に所在する最明寺（天台宗）は、鎌倉時代に五代執権北条時頼が諸国巡礼の折に宿をとったと伝えられる。その折に、

「御宿せし　そのときよりと　ひととはば
　網代の海に　夕影の松」

と詠ったことから「御宿」という地名が生まれたと言われる。

また、別の説では、この地方の方言で「本宿（ほんじゅく）」がなまったものとも言われる。

この寺の旧本堂には「波の伊八」（武志八郎信由）が寛政一〇年頃に彫ったといわれる「獅子頭、象鼻」がある。（「波の伊八」については「まんじ」百二十号拙稿参照）

また、寺内には童謡「月の砂漠」の作詞家加藤まさおの墓や画家谷内六郎の記念碑などがあった。

我々は住職の勧めで裏の小高い山（岩井山）にも登った。そこから太平洋を一望することができた。

3　勝浦城主　植村氏（覚翁寺　勝浦市出水）

覚翁寺（浄土宗）は勝浦城主であった植村家の菩提寺。

寛永十一年（一六三四）勝浦城主植村泰勝が死去した時、勝浦城内にあった浄林寺をここに移し、泰勝の幼名覚翁丸をとって出水山覚翁寺としたという。

境内には植村氏三代泰朝、四代忠朝、五代正朝の墓宝印塔がある。またこの本堂にも「波の伊八」の欄間があった。

近くにある高照寺（日蓮宗）には、石川県の輪島、岐阜県の高山と並んで日本三大朝市の一つとして知られる「勝浦の朝市」の発祥の地碑が立っている。四百年続く朝市では売り手と買い手がさかんにやりとりする活気のある風景が展開される。

天正十八年（一五九〇）、旗本植村泰忠は勝浦に三千石の知行地を与えられると、すぐに領内の商人たちに市を立てることを命じたのが始まりといわれる。

この当時、新たに領主となった藩主や旗本が、植村氏のように市立てに積極的に乗り出すことは珍しいことではなかった。同じ時期に大多喜城主となった本多忠勝も市立ての触れを出しているし、茂原領主大久保忠佐も茂原六斉市を始めている。

境内の墓地にあるイチョウの奇樹は大きな乳柱が多く発生しているので乳公孫樹といわれている。樹齢は不明だが、牧野富太郎博士によって「千年の年輪を数えるか」といわしめた。

また近くの遠見岬神社の石段は「かつうらビッグひな祭り」が開催されることで有名になった。

4　家康に見初められたお万の方（勝浦市）

戊辰の役で旧幕府の海軍副総督榎本武揚は北海道函館の五稜郭に拠って官軍に抵抗したので、維新政府から鎮圧を命じられた津軽藩も容易に平定できなかった。そこで津軽藩は藩主の実兄が熊本藩主であった縁故を頼り、肥後に援助を要請した。

明治二年正月二日、援軍は米国汽船を雇って三五〇名が乗船、北海道に向かったが、三日夜、川津沖の岩礁地で大暴風に遇い難破してしまった。川津の住民の懸命の救助活動に拘わらず百三十名の犠牲を出した。この遭難者を埋葬、供養したのが八幡岬公園にある「官軍塚」である。

その八幡岬の先端、三方海に臨んだ断崖に勝浦城址がある。

築城時期については様々な伝承があるが、上総武田氏の一族真里谷氏の居城だったとされる。さらに天文十一年（一五四二）頃には正木時忠が移り住んだ。正木氏は時忠から時通、頼忠と続くが天正十八年（一五九〇）、小田原落城により関東が徳川家康の支配下に置かれると程なく植村泰忠（前述）に接収されることになる。

その落城の際、城主正木頼忠の娘で当時十四才だった万はこの崖に布をたらして海上に逃げたという「お万の布晒し」の伝承が残っている。

後に家康の側室お万の方になり、徳川御三家の紀州初代藩主徳川頼宣、水戸初代藩主徳川頼房の生母となった。

城尖端の主郭には、養珠夫人（お万の方）像が立っている。

なお彼女は司馬遼太郎の短編「嬶女守り」の主人公の一人となっている。

5　誕生寺近辺（勝浦市小湊）

誕生寺の門前に開けた内浦湾一帯は、「鯛の生息地（国特別記念）として有名である。鯛は聖人の化身、分身として土地の人々の尊信を受け、長い間、鯛の浦は聖地として禁猟が護られてきた。

地元ではこの鯛は決して捕獲をしない習わしが残っており、毎年一月一八日には僧侶も出席して盛大な鯛供養が行われる。

本来、深海性の回遊魚である「マダイ」が水深わずか十数mの一定海域に自然発生するのは、世界的にも珍しい生態であり、学会の「なぞ」とされてきた。しかし最近の研究により、この湾一円に産卵から孵化、生育に至る過程が連綿と続いていることが実証され、今後の調査によってこの地の生態も次第に解明されるものと期待される。

安房鴨川市に入る手前、現勝浦市興津にあるのが日蓮宗最初の説法の霊場といわれる妙覚寺である。

広栄山妙覚寺は日蓮宗の最も古い本山で、日蓮十日間説法の最初の霊場として知られる。

日蓮は文永元年（一二六四）、興津城主佐久間兵庫頭

重貞の寄進した釈迦堂を最初の法華経の道場としたので、江戸時代には日蓮宗本山として多くの末寺を有していた。

山門は江戸末期の代表的建物の一つ。楼門は天保一〇年（一八三九）の作。柱は直径三〇㎝、入母屋造り、桟瓦葺きであり、懸魚に孔雀の彫刻がある。

境内には仙台藩の船を繋いだ石柱が「繋船柱碑」として保存されている。この石柱は石巻産の粘板岩で造られ、以前は弁天崎の海岸に十数本並んでいたというが、現在はこの境内と興津港海浜公園の二本だけが残っている。

かって興津の町は興津千軒といわれるほど繁栄したところで、天然の良港として東北諸藩の廻米交易船が寄航し、また避難港として利用された要港であった。

特に仙台藩は興津港西側の弁天山付近に廻米監視のための役所まで設けるなど、両者の関係は密接だった。

港としての重要性は戦国期既に興津港を擁する海城として武田氏、正木氏が興津城に拠っていたことでもわかる。

現在、興津駅北側を一キロほど山中に入ると興津城址がある。

6　鏡忍寺―日蓮の法難（鴨川市広場）

鴨川市広場にある鏡忍寺（日蓮宗）は「日蓮の四大法難」の一つといわれる「小松原法難」の場所である。（因みに他は鎌倉、伊豆、佐渡）

伊豆での流罪が解かれた日蓮が故郷に帰ったところ、浄土宗を批判したのがもとで地頭と対立して、文永元年（一二六四）十一月十一日に浄土念仏の篤信者の地頭東条景信の指揮する数百人に襲われた。この事件により弟子鏡忍房と信者の工藤吉隆が殺され、日蓮自身も額を斬られたうえ、左手を折られるという重傷を負った。

同寺には日蓮の真筆といわれる「富木御書」（県文化）が所蔵されている。

前記信者工藤吉隆の墓は日澄寺にある。彼の遺児日隆が弘安五年（一二八二）、その居城「天津城」を寺としたものである。

また「小松原法難」の折、日蓮を助けた北浦忠吾、忠内兄弟の墓があるのが「多聞寺」である。墓標には忠吾は弘安九年（一二八六）、忠内は永仁元年（一二九三）に没したとある。

前述の日蓮に対立した地頭東条景信によって弘安二年（一二七九）に創立されたのが永明寺。曹洞宗の古寺であるが、元禄地震の津波で流出して今の地に移された。

山門の向唐門は有名、文化九年（一八一二）に改築された。

近くに日蓮が襲われ手負傷して逃げる途中、ここで疵を洗ったといわれる「疵洗いの井戸」が残っている。

このように、このあたり、「日蓮の小松原法難」にまつわる古跡が多い。

天津橋から左手にこぶのようになった高さ八十メートルほどの二つの山が見える。葛崎城址である。天正八年（一五八〇）、大多喜城主正木大膳憲時が里見義弘の死去の隙に安房の地に侵入、この葛崎城を攻めた。このため城は落ちたが、その後すぐに里見の反撃に会い、正木氏は大多喜に引き上げた。

近くに城主角田丹後守の墓がある。

日蓮宗が多い当地にあって「善覚寺」は珍しく「浄土真宗」の寺である。京都西本願寺派に属し、慶安元年（一六四八）に近江に創建され同四年に当地に移転されたものという。当寺に伝わる寺伝によると、寛永から元文年間にかけて紀州を主とした関西の村々から当地へ漁民や魚商人が多く渡来したことに起因する。

紀州と当地の関係が深いことを示す史実である。紀州と房総には、勝浦や白浜など同じ地名があることでよく知られているが、これは黒潮の流れを通じた両地域の関係性を物語っている。

房総における本格的な漁業の開始は、意外なことに近世になってからである。

「関東鰯網来由記」などによると、元和二年（一六一六）に紀州加太浦（和歌山県）の漁師が上総勝浦を拠点として、最初に八手網を伝えたといわれる。

また九十九里地引網のルーツも紀州にある。戦国時代に紀州の漁師が剃金（白子町）に伝えた。現在、ゆかりの地に「九十九里地引網発祥の地記念碑」が建てられている。

7　房総の源頼朝

○天津神明神社（鴨川市天津）

一一八〇年（治承四）、石橋山の戦いに敗れた源頼朝が安房に逃れてきたとき、伊勢神宮に源氏再興を祈願し、祈願が成就されたならば安房の国に御厨一処を寄進することを約した。

そして天下平定ののち、一一八四年（寿永三）、当地に伊勢より神霊を勧請したのが「天津神明神社」である。そのため「房州伊勢の宮」とも言われる。

日蓮もいたく尊宗されていたことは有名で、修業地清澄への過程、必ず当社を参拝したといわれる。

なお当社に私が最初に参拝したのは、数年前、房総各地の「頼朝伝説」を探ったときであった。

○一戦場跡と旗掛の松（鴨川市松崎）

頼朝が安房に上陸した際、房総の豪族（安西、東条、丸、神余、長狭）の中で唯一、反旗を起した長狭六郎常伴と戦った場所が、現在「一戦場公園」として市民の憩いの公園となっている。

また市内松崎には、この地に白旗を掲げて援軍の上総介広常を待ったという地がある。そこから松崎（待崎）

という地名がついた。境内には枯れた松の残株があるが、これを旗掛松という。

○仁右衛門島（鴨川市太海浜）

南房総の海にぽっかり浮かぶ三万㎡の小島。前記長狭氏の急襲から島の住人平野仁右衛門が頼朝を助けたことから、礼としてこの島を与えられたという伝説が残っている。

従って島内には頼朝の隠れ穴と称する洞窟があり、その中には正一位稲荷大明神が祀られていた。

○太海付近にある波切不動の先には頼朝の名馬「摺墨」が発見されたという「駒穴」があるが、伝説の域をでていない。

（房総の「頼朝伝説」については拙稿「まんじ　九十七号」参照）

洋上はるかに見える「神楽岩」は、前述清澄寺で修行中の日蓮が來島して朝日を拝んだと伝えられる。これらの岩は玄武岩が幾重にも連なった枕状溶岩（県天然）で、古代この一帯が海底で水中に溶岩が噴出したことを示している。

峯岡山系東端の景勝地（海抜一一〇m）にある魚貝塚展望台からは洋上続く大海原や鴨川の町並みが一望できるが、かって漁師たちが沖合いにくる魚の群れを見張っていたことからその名がついた。

8　多くの重文のある石堂寺（南房総市和田町）

南総の地にある名刹は当然、日蓮宗系が多いが、それでも他宗派の名刹も見逃せない。和田町の「西福院」（真言宗智山派）や「石堂寺」（天台宗）などがそれである。特に石堂寺は多数の国重文（戦前はいずれも国宝）を持つ。本堂や薬師堂、多宝塔、厨子などである。また現在、庫裏に展示されている初代伊八（前述）の作による十八面の彫刻もその一つ。

寺伝では神亀三年（七二六）に行基によって開かれたといい、古くはインド三代アショーカ王の塔があったので、石塔寺と呼ばれた。（現在でも秘宝として保存されている）

本堂は十六世紀に当地の豪族丸一族の援助によって再建された。堂内には平安後期の作とされる木造十一面観音立像（国重文）が安置されている。

また境内には、享保年間（一七一六―三六）に建てられた豪農の旧尾形家住宅（国重文）がある。

9　捕鯨の町―和田浦（南房総市）

和田浦は日本でも四ヵ所しかない捕鯨基地として知られる。因みに和田町以外では北海道網走、宮城県鮎川、それに和歌山県太地である。

鯨が房総半島に近づく六月から九月にかけて捕鯨は行われ、町全体が活気を呈する。江戸時代までは内房勝山

沖が捕鯨（ツチクジラ）の中心であったが、次第に外房沖に移ったようだ。しかし現在、外房和田町で水揚げされるくじらは年間二六頭に制限されている。元来、ツチクジラは国際捕鯨委員会の管轄外ではあるが、我が国の自主管理のもとで捕獲枠（全国で五十四頭）と捕鯨期間が制限されているためである。

我々は昔から有名なくじら料理店でくじらの刺身とから揚げを満喫した。

○稲村城址（館山市）

稲村城は室町時代の十五世紀後半から天文三年（一五三四）に里見家の内紛により里見義豊が滅ぼされるまでの前期里見家の居城。

此処は安房国の府中を抑える位置にあり、里見氏による安房支配の拠点であったが、内紛に勝った分家の里見義堯が本城として使用した。

○安房国分寺跡

安房国分寺跡は館山平野の南東部に位置し標高一九メーターの地点にある。聖武天皇天平一三年（七四一）、国ごとに護国寺を創置されたとき、房総では市原（上総）、市川（下総）と同時に此処にも国分寺（安房）が建立されたと地元では云う。

しかし他の国分寺のような正確な証拠はない。

安房国は同年には上総国に併合され、更に天平宝字元年（七五七）に再び分立されているので、安房国分寺は再分立後の奈良時代後半に建立されたのではないかと私は密かに推論している。

10　安房の百姓一揆―万石騒動（南房総市）

安房国分寺跡入口には「万石騒動」（正徳元年（一七一一）にこの地に起こった農民一揆）によって、処刑された三人の名主を供養した供養塔がある。

六百余名の百姓が安房の国から出府し、北条藩一万石屋代忠位の江戸藩邸門前に押し掛けたことから、世にいう「万石騒動」は始まる。

正徳元年（一七一一）、北条藩の新任代官川井藤左衛門は領内を視察、不作にもかかわらず六千俵の年貢の増米を領内の農民に命じた。これに対して領民は負担に耐えられず、連日十日間にわたり北条役所への訴願行動を繰り返した。この行動でも埒があかないと分かった農民はついに江戸藩邸に門訴した。驚いた川井らは首謀者と思われる六名の名主を捕えて投獄する。

このため六百余名の農民たちは再び江戸に出て、今度は幕府老中への直訴に踏み切る。この行動に対して川井らは入牢中の六名のうち三名を引き出して国分村（現南房総市）で処刑してしまった。

この報を知った農民たちは三たび老中へ直訴。幕府は容易ならざる事件として受理し裁判の結果、川井が打ち首、領主忠位は領地没収となって農民たちの勝利に帰した。

以上で百五十四キロに及ぶ「東房総往還道」の旅を終わる。生まれも育ちも千葉県人の私にとって、「房総の歴史」は一応知っているつもりであったが、今回旅してみて知らないことの方が多いことに気がついた。

まさに「百聞は一見に如かず」の旅でもあった。(完)

(参考文献)

○千葉県の歴史　山川出版
○千葉県の百年　〃
○千葉県の歴史散歩　〃
○千葉県の歴史100話　図書刊行会
○房総と江戸湾　吉川弘文館
○上総下総千葉一族　新人物往来社
○古代房総文化の謎　〃
○房総の古城跡めぐり　有峰書房
○わが町の歴史千葉　文一図書
○新風土記（千葉）　朝日新聞社
○千葉風土記　千葉日報社
○日本の風土記（房総）　宝文社
○ふるさと茂原の歴史　（茂原市）
○茂原の昭和史　〃
○一宮町史　（一宮町）
○岬町史　（岬町）
○夷隅町史　（夷隅町）
○大原町史　（大原町）
○御宿町史　（御宿町
○勝浦市史　（勝浦市）
○館山市史　（館山市）
○波の伊八　七海敦子著　千葉日報社
○波の伊八　長谷川治一著

性と化粧（七）

鈴木守

第七節　触覚刺激により性的興奮を誘導する化粧

前節『感覚神経の概要』の項で、五官のうち化粧と最も関係の深い皮膚には、触覚、圧覚、温覚、冷覚、痛覚の五覚があることを述べた。本節では、触覚と皮膚感覚を説明したうえで、触覚刺激を与えることによって、性的興奮を惹起させる化粧について検討することにしよう。

一　触覚と皮膚感覚

辞書には、〝触覚〟を「皮膚表面が外物に触れて生じる感じ。圧覚・温度感覚・痛覚などの総称」としており、一方、〝皮膚感覚〟については、「圧覚・痛覚など皮膚表面で起こる末端神経の興奮によって生じる感覚の総称」と解説されているので、触覚と皮膚感覚は同義語と見做される。しかし、皮膚科学領域では触覚を痛覚などと同様、皮膚感覚の一つに位置付けているので、今後の記載は五覚の総称を〝皮膚感覚〟と呼び、〝触覚〟は五覚の一つとして取り扱う。

皮膚感覚に関する説明を続ける。皮膚に与えられた刺激は、感覚神経末端で感受される。その末端を〝知覚点〟と呼び、五覚には夫々に知覚点があり、それらの点を触点、圧点、温点、冷点、痛点という。知覚点のうち最も数多く分布しているのが痛点である。痛覚は危険信号の役割を担っているので、危険を避ける必要から、他の知覚点よりも多く分布するのである。

なお、舌は味覚を感受する器官であるが、温点と冷点を備え、暑さ冷たさを感知し、舌尖には触点がある。触点は唇にも分布し、陰核と亀頭には冷点がない。その代

わりに〝陰部小体〟という知覚点がある。恐らく、陰部小体は冷点が変化した感覚点であろうが、その役割を記載した文献をみたことがない。察するに、成書には記載し難いような役割を負っているのであろう。この感覚は五覚とは別な感覚である。また、皮膚は五覚とは別な感覚として〝痒感〟と〝擽感〟を感知している。前者は痛覚の軽微なものとされ、後者は触覚との関連がいわれているが定説はない。

二　人類はセックス・アニマル

人畜無害といわれる年齢になった故か、人類はセックス・アニマルではないかと思うようになった。というのは、動物における性交の体位を比較すると、相対する個体と密着する体面積の広さは、人類が最大であることは間違いない。そのうえ、人類はセックス・シーズンを忘れてセックスを恒常的に行うようになった。将に人類はセックス・アニマルである。だからこそ、人類の繁栄が培われたに相違ない。

とはいうものの、女性は人類進化の過程で出産の苦しみを負うようになったにも拘らず（幼形進化、化粧のルーツを訪ねて、本誌一四号参照）、健気にも子孫繁栄の道を切り開き得たのは、陰部小体が醸す恍惚の境地に魅かれた結果であろう。それなくして、人類の発展はなかったに違いない。

人類がセックス・アニマルになったのは、モリスがいう『裸の猿』になったことが関係しているのではなかろうか。毛という邪魔物がなくなると、肌と肌が直接触れ合うため、セックスがより緊密になったのであろう。裸の肌が触れ合うため、ザラザラした皮膚の相手よりスベスベした滑らかな肌の相手を好むのが当たり前である。例えば、江戸時代の遊女たちが鮫肌の客を忌避したといわれているが、彼女たちの気持ちはよく分かる。要するに古今東西、性別に関係なく、荒れ性肌の相手を好き好んで選ぶ物好きは少ない。ともあれ、日常のスキン・ケアはセックス・アニマルとしての心得である。

三　性と皮膚感覚に介在する化粧

皮膚感覚を通じて性的興奮を誘起させる化粧には、①性器そのものを修飾する化粧方式、②皮膚表面に塗擦して皮膚感覚を修正する化粧方法、ならびに③その他の使用様式による化粧がある。これら化粧の具体例は第一節から第四節で紹介したので、この項では類別に従って簡述するが、新たな情報があれば、付け加えることにしよう。

①　性器修飾

既報の資料では、纏足と性器使用の乳液の話題があった。

纏足：　纏足は人類がセックス・アニマルであることを如実に示す風習であり、一〇世紀頃から近代に至る間に行われていた中国独自の性風習である。この風習については既に述べたので、纏足の施術様式を紹介するに止める。

中国では、女の子が五、六歳になると施術する。施術は親指を残して残りの指を足の裏に向けて折り曲げ、布で強く巻き、糸で細かくかがる。当然、最初は堪え難い痛みがあり、女の子は昼夜泣き叫ぶが、構わずに無理やり歩かせたりする。やがて一段落すると、更に指の付け根までも裏へ折り曲げる。そのうち、骨が折れたまま固まり、形が落ち着くと足は小さい筍のようになる。足の品としては、形が整っていて、厚さも薄いほど良いとされている。このように足が小さく、運動がままならぬとなると、太腿や腓の部分に筋肉がつかず、細い棒のような足になるが、それが当時の美だったのである。

とりわけ、性的な快楽に都合がよいという説が流布されているから、男性にとってメリットがあったことは疑いない。要するに纏足すると、股間の筋肉が発達するため、亀頭陰部小体に対する感覚を最大限に刺激することのできる人工的な性器を作りあげ、男性の性的愉悦を導くのであろう。

それにしても、よくもまあ、こんな残酷、且、非情な風習を生み出したものだと驚きを禁じ得ない。恐怖と侮蔑がない混ぜになった驚きである。このような風習を現代の中国人たちは彼等の歴史認識の中で、どのように位置付けているのか極めて興味深い。

性器使用の乳液：　友人の皮膚科医から、「夜のお勤めに乳液を使用してペニスに皮膚炎を生じた患者」について相談を受けたという話であり、相談の内容は紹介済みであるから割愛するが、この患者は乳液を性器に塗ってお勤めを楽しんだのである。この行為は意図的な誤用であるが、理に適った方法である。生憎、性器皮膚炎を生じてしまった訳であるから、主治医に乳液の代わりに、薬用のワセリン、マヨネーズ、バターなども有用であることをアドバイスした。すると主治医曰く、「マヨネーズ塗りソーセージを食わさせるか」と。予後は順調のようである。

②　化粧料塗布による皮膚感覚修正

セックス・アニマルである人類は男女を問わず、肌の滑らかな相手を好む。そのため、特に女性の方々はお肌の手入れを入念に行って男性たちのニーズを満たしている。その主役は基礎化粧品の化粧水、乳液、クリームであり、これらの製品の薬事法で定められた効能効果は肌荒れ、荒れ性、皮膚の乾燥を防ぐなどであり、事実、肌荒れなどを予防し、荒れ性を改善するので、性生活前奏曲の役割を果たしている。

前奏曲演奏者代表として、リップ・クリームに登場願

おう。リップ・クリームは、唇の荒れを防ぐ目的で使用されている。唇と舌尖に触点が分布していることは先に述べた通りである。この両部の触点分布は多く感受性が高い。したがって、唇と舌尖に高感度の触点がなければ、キスという風習は生まれなかったに違いない。とはいえ、これら触点はキス目的に備えられた感覚点ではないが、セックス・アニマルたちは唇の触点機能を利用して、性序曲・キスを演奏し始めたのである。序曲を奏でる唇が荒れていれば、不協和音となるのは必定である。だから、リップ・クリームを塗布して不協和音の発生を防いでいるのである。

③　その他の使用目的

前出の事例にデオドラント・スプレーで陰部に凍傷を負った女性を紹介した。彼女は陰部の衛生を目的にスプレーしたのであろうが、スプレーの冷却効果を楽しんだ可能性も否定できない。もし、そうであるならば、冷却効果を期待して、陰部に近着けてスプレーしたため、凍傷、所謂〝下焼ケ（シモヤ）〟になったのではなかろうか。これは想像でしかない。

性と化粧という立場では、『瘢痕化粧』は纏足と並んで『性と化粧』における二大スターである。

黒いアフリカの女性たちが瘢痕化粧を施すのは、既に述べたように、「女性が自分の肉体的魅力を増すために、より緻密に皮膚を装飾させる技術を発展させた。黒い裸の皮膚を引き立てるために、最も適した方法の一つが瘢痕だった」と解釈されているが、部族によっては、口周囲、首筋、乳首、臍界隈、股間など所謂、性感帯といわれている部位に瘢痕を施し、男性の需要に応じているとのことである。

では、瘢痕化粧に対して女性はどのようなレスポンスを示すのか文献では知ることができなかったが、幸いナイジェリアに勤務した経験がある友人がおり、彼に聞くと、「向こうの男がいうには、瘢痕を撫でていると女の息使いが激しくなるそうである」と教えてくれた。ということは、中国の纏足とは異なって、瘢痕化粧は男女両性に等しく性的快感をもたらし、両者合意のうえの必須の行為であることは明瞭である。

（次号に続く）

がっきい様

横山正義

たんたん
雨戸を叩く音が聞こえ、
「こんばんは」
人の声が続いて、かすかに聞こえてきました。
私と祖父は囲炉裏で息を殺して、沈黙を守っていました。
続いて繰り返されます。
私は囲炉裏から足早に出入り口に行き、
私は格子戸を開け雨戸を開けました。
冷っとした風とともに、
囲炉裏端からの薄い電球の灯かりで、人影が見えました。
私は「じいちゃん、人がいる」と叫びました。
祖父は囲炉裏端から入り口まで歩いてきて、
「おまえは誰だと」問い質しました。
「僕は東京から来ました。
空襲にあって、父、母も兄弟も探しても見当たりません。
家は焼けてしまいました。
父から前に、静岡県小笠郡の大阪村（東京より二百キロ）というところに、
伯父が居ると聞いたのを、思い出しました。
それで会ったことはないが、尋ねてきました。
けれど道に迷ってしまいました」
私の住む、集落に迷い込むと、家に来るような位置にあります。
祖父は「まあ、入れ」と言い、外から家のなかに、人を招き入れました。人が入ってきました。見ると冬瓜のような顔をした、褐色の学生服を着た少年でした。素足にズック靴は泥まみれ、紐は切れていました。
栄養失調でむくんでいたのでしょう。
「野宿して来て、なにも食べていません。
国民学校六年生で今度、高等科です」
昭和二十年の春、花冷えと聞くと少年を思い出します。

私は国民学校一年生から、二年生になる春のことです。

祖父は少年を部屋に入れ、
大根切干、あぶらげ、たまごを入れ、味噌汁を作り、たくわんと、ごはんを、ちゃぶ台に乗せ、出しました。
「ひゅる、ひゅる、ひゆる」
少年の味噌汁をすする音が、七十年を経た今でも、耳に残っています。

当時、本土決戦が叫ばれ、母は大井川の中流にある、徳山というところに、数日前、長屋の一部屋を借り、米軍の艦砲射撃、空襲に備えるといって移り住み、祖父との疎開先の確保をしていました。

既に正月から浜松は空襲を受け、遠州灘沿岸の村、陸浜村（現掛川市）には師団が配置され艦砲射撃に備えていました。

伯父は出征して、神奈川・横須賀基地で会計官をしていました。

祖母、父はすでに他界し、私は祖父と二人で生活していましたので、一つ部屋に祖父を真ん中に川の字に寝ました。

少年は服の下は半袖のランニングシャツとパンツだけでした。

翌日、祖父は「大阪村はここから一本道、三里ほどで、峠を三つ超えれば着く」と話しました。

少年は部屋の片隅で、朝食をとり、疲れて、腰がまがらないようで、頭を「ひょこっ」と下げ、家をあとにして行きました。

祖父は出入り口に蓑、蓑笠を懸け、その前に臼、杵、箕、を置き、酒、塩、米を奉じ、少年の無事を祈りました。

田舎では玄関に、蓑と笠を祀り、「がっきい」（餓鬼）様といいます。

盆に先祖を供養し、十日遅れの盂蘭盆に、昔、行き倒れた人の供養をするのです。

テレビで時代劇を見ると、出入り口に、飾られています。

五ヶ月後には終戦、日本軍は敗戦となります。

少年がその後、どのような人生を歩んだのか、知る由もありません。

健在なら、現在、八十歳です。

老子第五十章
出生入死。生之徒十有三、死之徒十有三。動之死地、十有三。夫何故、以其生生之厚。
蓋聞善摂生者、陸行不遇犀虎、入軍不被甲兵。犀投其角、無所措其爪、兵無所容其刀。夫何故、以其無死地。

人は生まれ出でて、そして死んでいく。生をまっとうするものが十分の三、早く死ぬ者が十分の三ある。そして人民のうち、生きることに執着し、みだりに行動して死地に向かう者が、また十分の三ある。いったい、それはなぜか。

生きることに執着しすぎるからである。

聞くところによると、うまく命を守る者は、丘陵を通っても犀や虎を避けないし、戦においても甲冑や武器を身につけない。犀は角でつけないし、虎は爪で引っ掻けないし、武器は刃を加えられない、と。いったいそれはなぜか。そもそも死ぬいわれがないからである。

少年は老子によれば、生をまっとうする人であり、生きることに執着する人達の犠牲になったのでしょう。

内田の国の物語り②

松本君平の生き方（自力と他力に生きる）

横山正義

まえがき

老子の世界というとなにか世の中を離れ、山で仙人のような世俗をはなれ、世俗解脱、隠遁生活者のような印象がありますが、違います。老子のいうことは、生きることに捉われる。

すなわち社会で名誉・地位・権力・金・言葉などにとらわれることなく、見、聞き、感じ、無為自然、自由闊達に活躍することです。

老子第七十五章

夫惟無以生為者、是賢於貴生。

いったい、生きることに捉われない者こそ、生きることを重視する者よりも優れている。

1、松本君平について

菊川市内田出身の松本君平の行き方を追ってみます。

松本君平は海外留学でなにを学んで来たのでしょう。それは欧米では、一五七一年のレバントの海戦スペイン・ベネチア連合軍とオスマントルコ以来、世界第一次世界大戦（一九一四）まで、戦国乱世の時代を経てきましたので、キリスト教をはじめとして自力の哲学、肉食です。アジアの哲学は稲作農業を中心とした自然との共生の哲学で、草食で儒教に代表される他力の哲学です。

自力とは東日本大震災の津波で逃げる人の中に、まず車に乗り逃げ、車が渋滞で動かなくなると、車の屋根に乗り、横の塀によじ登り、まだ増水する中、電柱にしがみつき、よじ登り一命を取り留めましたが、このような力です。

他力とは津波の報に、まず二階にあがり、増水するので物干し台に昇り、まだ増水するので、屋根に昇り、家が流され、海の上で三日後に助けられました。これが他力の生き方です。どちらも生き抜いたのですから、正しいのでしょう。欧州人は自力の哲学で、世界を支配下に置きました。

松本はこれが欧米から植民地支配を受ける原因だと考えました。イギリスの東インド会社設立（一六〇〇）より、アジアの植民地支配がはじまります。松本が同じ同胞として、松本が親近感を抱いていた、アジアの民が植民地支配から、脱却するには、理論武装をし、なお自主防衛武装し、戦いとる以外無いと考えていました。

松本の主張には政治家として、国益の追求する発言とともに、常に欧米のアジアの人々への植民地支配に苦しむのに対し、同胞への同情がありました。

2、松本君平の父

私は昭和十九年小学一年生でした。当時の遊びは上級生と木の実を取ったり、川、池で水泳を教わったり、魚を獲ったりでした。秋、上級生のいうことを聞かないと、かばってもらえないので、連れられて、平尾八幡神社の裏山に椎の実採りに行きました。すると、木々の合間から、遥かかなた十キロの東方、牧の原で、火柱が立ち黒煙が上がり、小さな点が縦横に動いているのです。上級生は椎の実を取る手を止め、「あれはなんだ」といい、そのまま手を動かし続けました。

米軍の戦闘機に牧の原飛行場が、攻撃を受けていたのです。牧の原台地の手前は秋、青空で稲穂が黄色一色で、戦争とは無縁の世界でした。その牧の原のお話です。昭和十五年に建設された飛行場があり、そこに以前、松本君平の父・丑太郎が開墾した茶園がありました。

平成十九年の五月の空に鯉のぼり舞う頃、応声教院・浅井説音住職より、「一番茶が終わったら、松本開墾・松本丑太郎翁の顕彰する会があるから、来ないか」と誘われたので、出ることにしました。

翁が明治時代（一八七七）牧の原に、開拓した茶園三十町歩に入植した人たちの子孫が、多額の浄財を奉納して翁を偲んで、記念碑の修復をするというのです。

森下伊作、山田繁治、平井一二、河原崎光夫、池の谷広喜、藤沢利光、山田攻、小原吉広の諸氏です。松本開墾は庶民の開拓ですが、ほかに、元武士の開墾地があり、元武士はやたらいばって難儀したと伝えられています。

松本丑太郎とはどんな人物であったのだろうか、これからお話したいと思います。

菊川市内田、浄土宗・応声教院（同院は八五五年比叡山の名僧慈覚大師により、文徳天皇の勅願所とする天台

宗天岳院として創建。高僧皇円阿闍梨が弥勒菩薩の出現を願って一一六九年、遠江桜が池の竜神になったという伝説がある）にある碑文を写し訳したものです。

昭和十五年牧の原飛行場が建設されるのに伴い、牧の原にあった碑は移築され、応声教院前にあります。

百世常新　大正七年秋十月　男　君平　謹書

松本丑太郎記念碑

松本丑太郎翁葛城真人之後裔也天保十二年於遠江国小笠郡中内田邑御門幼負不羈方遍游諸国備嘗艱苦知力日進及卷遊思還営謀無不遂家道以大興扮是斥私財治公益国人翁然称乃晩又拓牧之原荒野専致力於製茶事業以人工之繁費代以機械之便利其法益自翁創之語日莫為之前雖美弗彰提磋乎若翁者宜之深銘其徳而莫能忘也爰忘鄙陋而為之碩日

聡明叡智　博厚寛仁　闢荒興業　作法啓民
生為英傑　歿為明神　令聞広誉　百世常新

正二位勲一等侯爵　西園寺公望自筆
正五位勲三等貴族議員　大谷嘉兵衛額
中華民国　孫白詩先生撰文
顧問　松浦五兵衛、石岡孝平

（訳　後藤一日先生　折金紀男先生　杉本完治先生）

松本丑太郎翁は葛城真人の後裔（こうえい）なり。天保十三年遠江国小笠郡内田村御門に生まれる。幼い時から才能・学識が非凡で、その頃から諸所広く諸国に遊学した。多くの艱苦を経験し、学問は努力の甲斐あって日ごとに進み深まった。遊学に疲れ家業に戻ろうと考えた。深く思考をめぐらしたことで（目的を）達成しなかったことはなく、家政はそれでもって大いに隆盛した。こんなわけで、私財を投げ打って公益事業を営んだ。国の人々は、（あの）翁（だもの）、「やっぱりなあ」と松本翁を褒め称えた。

晩年にまた牧の原の荒野を開拓し、もっぱら力を製茶事業に尽くした。人手のかかりすぎを見るにつけ、便利な機械力（望月式製茶機）の積極的利用を図った。そういう手法の導入は翁がそのルーツだった。

話に言うに、（翁が）こうした事業に着手する以前、立派な人ではあったが世間には知られていなかった。ああ、翁のような人を、評する人は、深くその徳を心に刻んで忘れることはできないのだ。

ここに卑しき身ながらこの文を作り、称えて言う。

聡く道理に通じ才知に優れ　心が広く厚く情け深い
荒地を切り開いて業を興し　法を作り人民を啓発する

生きては才知優れた人となり　没しては明神となる
よい評判は広く称えよう　万代永久に輝かしきものとして

明治時代の静岡県小笠郡中内田村は面積五・六一平方キロ、戸数三百戸、人口千八百人たらずの米と茶の村であった。丑太郎は天保十二年（一八四一）遠江国小笠郡中内田村御門（みかど）に生まれた。内田は鹿城郷（からこ）と称していた。先祖は葛城真人であったという。奈良盆地で蘇我氏と葛城氏は同属で隣接した集落である。蘇我氏といえば天皇家の后となった一族で、特に蘇我氏での聖徳太子は著名です。蘇我氏の祖、蘇我の稲目の祖父は韓子（からこ）であったという。技術を持った朝鮮人で渡来人と、妻が日本人の子であったらしい。内田の「からこ」、奈良の「からこ」関係があったのではないか。

御門という地名は平安時代、藤原一族の大炊御門頼実の荘園であったのに由来する。頼実の女子は土御門天皇の后でもある。

そのほかに、内田では藤原一族として、荘園のあった青蓮院座主・慈円や、歌舞伎で中村吉右衛門の当たり役「阿呆大蔵卿長成」は八幡神社創建者の祖父で大蔵寺命名の由来になっています。

松本家の先祖は武田の武士であるという、高天神の戦いで当地に着て婚姻により住み着いたのでしょう。江戸時代の中ごろこの地の富豪として台頭、丑太郎の曽祖父にあたる、松本三郎右衛上門は任侠の人として、窮民救済のため多額の出費を用おしみませんでした。祖父の代から、にわかに家産が傾き、父親の代に破産しました。家の窮状をなんとか解決する方法はないか、「窮したら旅で聞け」の当地の故事に習い、明治維新まで十三年、十四歳を迎えた時、二分金一つを懐手に夜逃げ同然に、政治の中心関西に向かいました。東海、近畿地方、中国地方を旅し、学びました。

帰宅後、茶を栽培し、牧の原再生所、明治三十年前、後に松本共同出荷組合を設立し、その他、漆の栽培と酒の醸造を始めました。成功し、財産を築くことに成功しました。

当地の旗本井上志摩守宗三郎（関口隆吉静岡県初代県知事の前、為政者）が京に上る際、費用を調達いたしました。こうして、何時からか卒先して、事の解決にあたる積極性と政治性が共感を呼び、慕われ、尊敬されるようにもなりました。

明治六年廃藩置県で浜松県が初足した時、丑太郎は第三大区七小区副区長に、翌年には区長となり、区医務取締役にもつきました。さらに明治九年には第十運区副長、同大区中学区医務取締りになりましたが、明治十年病に倒れました。十年病に臥し、「我貴重なる日子を病辱で徒費し社会の進歩に遅れんは痛恨の至り」と記しています。

明治二十二年自治制の施行に伴い丑太郎は推されて、

殖産事業の奨励に努力しました。

わが子・君平を世の中の指導的人物になるには広く知識を広めねばとアメリカに留学させました。

次男孝平は昭和十二年春「浜松市議会議長」浜松商工会議所副会頭などを歴任いたしました。

三男三郎は内務官僚で、警視庁刑事部長や富山県知事を歴任、朝鮮慶尚北道内務部長目などを勤めました。刑事部長時代、海軍の青年将校と陸軍士官学校生徒の一団が、官邸に犬養首相を襲って毅首相を暗殺した五・一五事件（昭和七年）が発生し、責任を取らされ、飛ばされるという、悲運に遭遇しました。内田に関し、知事になった人物は関口隆吉と松本三郎と二名です。

妹女は板垣退助家に嫁ぐ。板垣退助は幕末倒幕運動に参加、自由民権運動の全国組織推進。自由党党首、立憲自由党総理、隅板内閣内務相、など歴任。岐阜に遊説の際、暴漢に襲われ、「板垣死すとも自由は死せず」と叫ぶ。政友会結成を機に政界を引退し社会事業に尽くす。

3、松本君平の少年時代

明治三年（一八七〇）松本君平誕生（幼名貞次郎）

松本の性格は乱暴この上なく、号は世民と称していました。

松本が生まれたのは中内田（現在、静岡県菊川市内田）である。

近所に倉真村と云う所があって、其処に岡田良一郎―これは岡田良平、一木喜徳郎氏などのお父さんで―という人が塾を開き、冀北学舎といって主に漢学を教え、又京都の同志社を出た人が来て英語なども教えていました。

松本が此処に入ったのは明治十四、五年（一八三一）で、わずか十二の年でありました。岡田という人は極めて厳格な人で学舎から随分人材も出したが、まるでスパルタ風とでも云おうか、新しく入った者などは勉強というより、むしろ難行苦行でした。

生徒は全て学舎の中に居たので寄宿舎、即講堂という有様であったが、寒中でも足袋などいっさい履かず裸足のままで、学舎の中に畑がありそこで農作業をし、交代で便所の掃除なんかもしていました。

松本の家というのは在郷十数里の間における富豪であったが、松本は小学校時代からガキ大将であった。このガキ大将がスパルタ風などして蕃的な冀北学舎に入った時は、ガキ大将からずっと進んで、優に悪党の首領になってしまった。学舎は前から乱暴だったが松本の時代にはことに、乱暴を極めたので、ここに三年か四年にて、出る時には、松本を初め巨魁が外にも二、三人あって、外の生徒をそそのかし五、六十人一緒に退学させたから、とうとうその為に学舎は潰れるというようなことで終わった。そのとき掛川で秘密に大勢、集まって、同盟退校

の相談をしていると、其処へ岡田先生が来て大狼狽をしたことなどもありましたが、ついつい皆な退学して潰して終わったので、その当時、松本は大変にくまれていました。（松本は一九八四年七月退学）

初め学舎の規則として新旧平等にすべてのことをやり、塾長や幹事の命には必ず、一度ぐらい布団蒸しに合わせられる、だんだん塾長や幹事の命令は行はれなくなって、ただ古参の舎生が実権を握り、新しく入って来る者は絶対に服従させられた。塾の総裁は勿論、岡田先生で、この人は前にも云ったごとく極めて厳格な、そして学問というよりはむしろ人格の高い人であったが、松本らは、なんでも無闇に教師に反抗して、勝手に振舞いたいというのが目的で、新たに入って来る奴は皆なその仲間へ引き入れる。もし少しでも不用意なことがあると、直に捕まえて布団蒸しをする。あまり虐められるので耐え切れなくなって逃げて家にかえった者などもあった。

しかし、松本が冀北学舎にいた三年間の間には、いろんなことをしていながら、「漢籍は中々読んだもので、外史から始めて史記、左傳、四書五経、その他いろんな本を読まされた、漢籍の勉強というのは実にこの時だけで、今詩が作れたり文章を書いたりすることができるのも、まったく冀北学舎のたまものといっても良い。英語の根底なども矢張りここで作られたので、今から追懐して一番面白いのもこの時代である」と回顧している。

その頃は皆大学をねらっていて、予備門へ入ると苦心していたけれど、松本は元来そんなことは主義が違うから大学など希望していなかった。

松本は、ある日雄弁家デモステネスの伝記を読み一大発奮した。デモステネスは本来、演説が下手で、到底ものになりそうでなかったのに、刻苦勉励の結果、世を驚かす大雄弁家になったのを知って、自分も彼にあやかって弁舌を磨こうと決心した。隠して同窓の誰彼を集めては可笑しく身振り手振りで、演説の稽古を始めたのである。それから討論や議論に熱中する日が続きました。

松本はルソーやモンテスキューなどを読み、フランス革命を聞き、あるいは、ギリシャ、ローマ等の歴史を読んで、古代ローマの有様などが頻りに懐かしく、夢寐の間も忘れる、ことができないという風だから、その念が日を経ると共にだんだん強く、深くなってきたので、今度はどうかして行って見たくてたまらない、しかし考えてみると、外国に行くにはどこへ行くにも外国語ができなければならないから、そこでまず英語を勉強しようと思って、ちょうどその頃、築地にブレスウエートという人がいたので、その人について、一生懸命英語の勉強を始めたのである。

通って行くのではなくて、家においてもらって勉強したのであるが、少しできるようになると、毎晩先生のために日本のものを訳して、ここに四年居た。その間に日

本の物を訳したものが沢山ある。

北村透谷と「佐倉惣五郎伝」を訳したのもこの時です。

かれこれしているうちに、年も十九になったが、最初の目的であった洋行の希望はいよいよ盛んに心の奥から動いて、もう抑えきれなくなったので、その事を両親に相談すると、早速、承知してくれたものの、洋行すると言ったところが望みを託するところも無く、唯、冷笑をもって送られ、まずアメリカに行った。

明治二十三年（一八九〇）松本二十歳は渡米する前に米国の学校へ手紙をやって万事の都合をも問い合わせた。

「僕は英語も少しはでき、それにアメリカに行っては甚だしい、苦労もしなかったが、ほんとうにまじめになって勉強したのは此の時である。僕の行ったのはヒラデルヒヤ大学政治大学校であるが、日本から行ってみれば全ての文物は驚く程進んでいるので、とても遊んではいられない、真から学問をしなければならないと考えてその時はほとんど、命がけで勉強した、その効が現れて英語の論文などを書いても終始、最優等、他の科目でも優等より下がったことは決して無かった、僕は英才でもなんでもないので唯勉強した為であるが、ここに居た六年の間は実に真面目に勉強した」と松本は回顧しています。

その後、ブラウン大学院で哲学を研究し文学博士の学位を得ました。今、外務省に居る寺島精一郎、松方正雄両氏などもこの時に一緒に居ました。

松本は学校を卒業しヒラデルヒヤ府を去ってその後、欧州の方へ行きました。

松本の関心事、選挙制度が定められました。

［明治二十二年（一八八九）選挙制度、有権者の資格、国税十五円以上 男二十五歳 以上、有権者の割合、一・一パアセント 大日本帝国憲法発布］

［明治二十三年（一八九〇）第一帝国議会召集］

明治二十七年（一八九四）松本（二十四歳）はニュウヨーク・トリビュン記者となりました。

当時、アメリカ社会は権利を主張する社会で、特に女性の社会での活躍には感銘を受け、後の女性の権利獲得の運動の基礎は、この時代に得たものです。

［明治二十七年（一八九四）日清戦争］

［明治二十八年（一八九五）日清講和条約］

4、松本ジャナリストとして活躍

明治二十九年（一八九六）松本（二十六歳）は帰朝し、「東京新聞」主幹となり、金貨本位論を著わしました。

その他に、伊藤博文、陸奥宗光の援助を頂き、政論雑誌「大日本」を創刊しました。「東京日日新聞」客員記者、その後、海外の経済状況の紹介を主目的とする「日米通商雑誌」発刊。

松本の主張、「海外製茶貿易意見」経済雑誌にて

居留置外商との貿易を取りやめ、直輸出を実現し生産者の利益を回復する。インド、セイロン地域において、生産過程を機械化することによって、生産性の向上をはかる。日本茶を米国の消費者の嗜好に適合した製品にその品質を改良する。

当時、日本人は日清戦争に勝利し有頂天になるなか、徳富蘇峰は「大日本膨張論」帝国主義を主張したのに対し、松本は日本人が日清戦争に勝利し世界から注目されるや、最大強国になったと勝利に良い熱狂している姿に「その思慮浅薄なるや其狭の狭小なるや、まず第一に国民的理想を持ち、国民的品性を高めることが」番大切だ、国民の真価と主張しました。

伊藤博文は松本の外遊の知識を評価し、松本は請われて、ヨーロッパ視察に随行しました。

5、東京政治学校創立

明治三十一年（一八九八）松本（二十八歳）は新たに出てくる、労働者階級の教育の場、東京政治学校（三年間の課程）を創立しました。昭和二年まで存在した。（一八九八～一九二七）

山川 均学ぶ。キリスト教、社会主義、共産党、労農派の中心的理論家、以後日本社会党左派の理論的指導者。

松本は政治変革の主体として期待したのは青年でした。未来の立憲政治を中心的に担う主体の育成、青年たちの政治教育の実践を通じて、政治・社会改革を企図していました。労働者の生活を改良進歩させるために、なによりも商品としての労働をより高く売ることが必要となる。これは労働者にとって経済的権利である。労働者が自ら団結して、「労働団体を作らねばならない」資本家側から、労働者の賃金の上昇は産業発達と障害となるとの主張があるが、これは経済というものの仕組みを全く理解していない。すなわち、社会の中で多数を占める労働者の賃金が低く抑制され、その生計が低落するならば商品の需要も減少し、結果的には産業活動も萎縮してしまう。労働者階級の窮乏は、一次的には、使用者を利するにしても、これは資本家にとって永久の利益ではない。賃金の上昇は消費・生産の増加につながり、それは個人的社会的幸福をもたらすものであり、社会改良唯一の経路である。

松本は政党の首領として、重要なのは弁論力であるとし、東京政治学校で弁論学を講義しました。

古代ギリシャで最も雄弁を誇ったとされる、デモステネスに傾聴していた松本はいかにして、学生に伝えたか。

松本君平「雄弁学」

古今東西雄弁の力、偉大ならずとせるや、近世議会政治なるものあり、民衆の勢力、泰然として起こる。民衆を引き揺るもの雄弁なり、これ昔帝王の技なり、マコーレー論して曰く、議会政府は雄弁の政府なり、然る政府においては雄弁の力は政治家の有すべき全ての資格中もつとも必要なものである。

青雲の大志を有する者、弁論の術ならずして、それ何事をなさんや、われこれをもって、青年の子弟に雄弁の学を授ける。

第一にその人自身の天分ともいうべき資質、素養が問題とされる。

第二に弁士は「博学の人たるを要す」

第三に詩的表現力、修辞学、論理構成などテクニックが必要である。

松本の意見として、自由主義体制においては国民が無知であることによって、危険性と弊害がもたらされる。

[明治三十三年（一九〇〇）伊藤博文立憲政友会を組織]

明治三十三年（一九〇〇）松本（三十歳）は静岡にも報道機関を必要と思い「静岡新報」を発刊し、社長となりました。地方新聞が地方の意向と利益を代弁するに留まらず、国政全体においても果たすべき役割は多大であると主張する。

明治三十四年（一九〇一）松本（三十一歳）は「普通選挙論」（済美館）「雄弁学」（警醒社）出版する。

明治三十五年（一九〇二）松本（三十二歳）は「世民策論」政治業書社表す。

[選挙制度、国税十円以上男二十五歳以上有権者の割合、2・2パアセント]

松本は伊藤博文に請われて、政友会に参加し、翌年普通選挙期成同盟会に参加しました。「僕は民主的状況を作りだす政治家、国民全てが選挙に参加し、民意で政治を行うべきである」と考えました。

松本はこれからジャナリストとしての意見（アジア人の植民地からの解放、普選の実施）、政治家、政友会会員として意見（国益の追求）を持つようになります。

「普通選挙青年同士会の檄」

明治憲法が制定され、議会は開設されたにもかかわらず、いっこうに国民は「政治的幸福」を獲得したということを耳にしていない。議会が本来の役割を果たしていないからである。四千五百万人の国民のうち有権者はわずか百万人にすぎず、我が国の政治は、四十五分の一の意見によって決められ、残りの四千四百万の世論は完全に無視されている。これではいたずらに「富者」の利益を図る政治が横行し、多数国民の福利を顧みる政治が行われないのも至極当然であろう。「一般国民」も兵役、納税という国民の二大義務を課せられており、有権者の納税要件（直接国税十円以上）は貧富によって、国民を不当に差別するものである。したがって、財産の有無にかかわらず、二十歳以上に選挙権を保障する選挙制を要求する。

[明治三十七年、日露戦争]

6、政治家松本君平

明治三十八年（一九〇五）松本は静岡市より立候補して、三十六歳、最年少衆議員となりました。

松本は英国流の議員内閣制度を改良し、日本に合ったものを目標としていた。

一、政治は国民を基礎として、行なわなければ意味がない。

二、政治について、語るだけでなく、行われるものでなければ意味が無い。

三、議会制民主主義は選挙を通じて国民多数の支持をうることによって可能になる。

四、政治のリーダーは威厳のあること、雄弁であることとした。

五、議会主義の伝統を有する英米の政党政治をモデルとした。

松本は中国に渡り、袁世凱など中国の要人と面会しました。

明治三十九年（一九〇六）松本（二十六歳）は日露講和会議にオブザーバアとして出席し帰路南米視察をしました。日露戦役の功により勲四等旭日章を受ける。

明治四十年（一九〇七）松本（三十七歳）は再び衆議院に当選する。

「納税制限を撤廃し満二十五歳以上の男子全員に選挙権を与えよ、との普選法案を二十四議会に提出した。法案理由書「現行財産制限の選挙制度は貴族専制の余弊にして且つ人道の大義に反するものなり」

[西園寺公望内閣総理大臣]　松本の父の碑文の題字を現す。明治の元勲。

明治四十一年（一九〇八）松本（三十八歳）衆議院議員落選。

7、アジア人の啓発

明治四十一年（一九〇八）松本（三十八歳）蒙古に行く。

＊大いなる運命はアジアにあるのだ

松本は年少の頃からアジア大陸に対してもっていた無限の感興と幻影、男子活動の舞台は、大陸でなければならぬと云う強烈な観念、それは小さい時に歴史を読んで強い感化を受けたのです。古から大英雄が、活動の舞台として志した所は皆、東洋でした。アレキサンダーもシイザルもナポレオンも畢生の志は広いのびのびとした東洋の天地にあったのです。欧州は狭苦しい蜂巣蟻垤の様なものだと言って、常に東洋へ、東洋へと志したが、皆な中道にして斃れてしまって志を達しなかった。

かように古い英雄の感化は、常に潜在意識となって、松本の心を支配していました。

「自分はアジア大陸で仕事をしなければならない」自分の運命はアジア大陸にあるのだと囁く声が、常に心の底にひびいていたのです。それで今度はと、深い決心と覚悟をきめて再び中国に行きました。中国に入ってからは、常に身には中国服を纏い、中国語を使い、中国人の中心に生活し、全く中国人となって密らかにこの民族の心理を極め、努めてこの民族の精神の心核に触れようと思いました。

＊ジンギスカンの事業

しかしながら大陸において、松本の政治上の舞台として選んだのは蒙古でした。ここに松本の生涯の運命を賭して見ようと考えたのです。

当時松本の思想の全部を支配していた問題は、松本の全精力を傾壓していた事業はなんであるかというと、ジンギスカンの事業を蒙古に再興しようと思ったのです。これは真面目に実行し得るべき強き確信をもって始めたのです。まず非常な苦心と勉強をもって蒙古語の研究をなし、蒙古に関するあらゆる文献調査を終わって、そうして内外蒙古の巡歴を始めました、目的は蒙古諸民族の統一、王侯を連盟することでした。その結果は驚くべく成功でした。

長い間蒙古幾万里の周遊をなして、北京に出てきてみると、形勢は激変していました。清朝最後の女傑であった西太后は崩御して、同時に可憐の歴史に千古の涙をそそがしむる光緒皇帝も崩ぜられ、革命の大風は今にも襲い来らんとして、清庭三百年の運命は風前の灯のごとくにゆらめいていました。

＊北京城内の一夜

松本は一夜、北京の城の奥深い、住む家の中庭に燈を移し、ともし火を点じて書を読んでいました。大陸の夜は沈沈と更けていき、万籟寂として声もなく、ただ青燭

の火の、一道の炎となって天に沖するを見るのみでした。仰げば蒼天茫々として窮まりなく、星と爛肝として瞬くがごとく、物言わんとするが如く見えた。そうして長い瞑想に入りました。

幽遠漂緲の中にアジア幾千万里の荒廃せる山河、幾億万の衰退せる精霊を眼前に観ました。松本の観念は悠久無限の古今を馳せました。忽ち天来の響きを聴いた。アジアの復興は到底一大信仰の興隆にまたなければならぬ。

かつて世界の人類に文明と教権を寄与したアジアの民は、今は精神も形骸も共に衰亡に瀕しました。山河荒涼、一大墳墓のごとくなった。今日のアジア諸民族はあまりに廃頽した。あまりに無気力になってしまった。その文明はすでに化石化して、力もなく生命もないものとなってしまった。

さかのぼって、アジアの廃頽した根本の原因を考えるに、それは政治でもない、もっと深い、人生の根本思想に根ざしている。すなわち古来からの誤ったアジアの宗教、論理の教えが、世道人心の根源を萎靡せしめたからです。

正しからざる信仰、道徳の力が社会民心を救うべからざる窮地に堕落せしめたからです。アジアの民族はこれがために、知識も、精力も、理想も、信仰も共に荒廃してしまったのです。

清朝の崩壊は欧米列強の植民地化をまねいた。

これはアジアの未来を開くには、儒教など伝統思想では到底できない、何よりアジアの青年が自立と開放に向かい、指導原理となる新思想を習得することの必要性を松本は強調しています。

「チャイナータイムズ」「チャイナートリビュウン」等、英語新聞創刊。自宅を天津に定め、中国人服を着て、中国語を話し、中国人の中に生活しました。

明治四十二年（一九〇九）松本（三十九歳）は北京にて患い、こじらせて、病床にあること、三年。父丑太郎死亡。

普選運動が官憲の弾圧に曝され、政治制度の改革による社会進歩の道が一日閉ざされました。

多年現代教育の欠落および、思想界の不健全なる悪傾向について感ずるところあり、病後回復とともに、大いに精神的事業努力せんとし志望をおこしました。

日本がロシアに戦勝したことで、欧米の植民地として、苦しむアジアの人達より尊敬の目で見られるようになります、しかし日本人は欧米の人達と組み、自国の権益のみを考え、アジアの人達により苦しむ方向へと進むのです。多くの留学生が日本を学ぼうとして来ていたが、日本の政治に反発し、失望をし、恨みを持ち、帰国して行きま

した。

アジアの人達は植民地として一生働いても、衣服を一着位しか買えない有様でした。万歩計をつけられ、重労働で酷使されていました。しかし、欧米列強は植民地政策であったが、アジア人を殺害することはありませんでした。

松本はアジア地域を一体の物と認識し、かつ日本のリーダーシップによって、アジア開放を成し遂げようという使命感を抱いた、松本はアジア各地に足を運んで青年教団を通じて中国人民をはじめアジア諸民族の精神的覚醒、自立に寄与しようとしました。松本の欧米よりアジアの被抑圧民族としての連帯感によるものです。

明治四十三年（一九一〇）、松本（四十歳）は静岡県に修養と教化目的とする青年教団を起こし政界を去る。松本は青年教団の機関紙「霊嶽」発行。

［日本人口五千万有権者百六十万］

［桂太郎内閣総理大臣］

［日韓合併］

［明治四十四年（一九一一）日英第三回同盟協約］

明治四十五年（一九一二）松本（四十二歳）は衆議院議員落選する。

［西園寺公望内閣総理大臣］

明治四十五年（一九一二）松本（四十二歳）は、二月ソウルに青年救世義団の成団式、八月天津、十月北京と成団式を行う。

「新支那」創刊週間、日刊紙発行。

「青年の新理想」誌の序文より。

「高き理想は、高き人間を作り、大いなる理想は、大いなる国民を造る。理想は根源の生命にして、生ける力なり。民人の栄辱、国家の興亡、国民の盛衰、民族の消長、帰するところ、その抱持する理想によって定められる。高遠にして雄大なる理想を欠く人民は、ついに滅ぶ。アジア人民、八億、生命の活火なく、廃頽衰微、今日のごときものは、なんがあるであろう」

＊アジアの新運命の開拓

しからば、その第二維新の新理想、国民の大主義というべきものは何か。すなわちアジアの新運命を開拓するという理想である。今後の日本国民は、世界の大勢を洞察して、自己の真の価値を発見し、大いなる自覚を起さなければならぬ。日本国民は、その文化と精力を以って、アジアの萎靡せる諸民族を補導し、これを啓発して、その中心の勢力となり、精神的指導者となるということを大理想とせなければならぬ。今後の日本国民は、ここまでその理想を高めていかなければならない。

今までの日本国民は、一日も一刻も速やかに、先進文

明国たる欧米列強と、同一の富強、文明に進まなければならぬと覚悟をして、あらゆる努力もなした。

全力をあげて自家の能率増進にのみ執着していました。そうしてほとんど他のアジアの諸国民の顧みるいとまがなかったのである。其日夜、理想としたところは、欧米文明と、富強を争うだけに、一日も早く到達せねばならぬということで、他の萎縮したアジアの諸民族の利害や、啓発に力を尽くす深い考えも余裕もなかったのです。

＊日本の尊き使命

今は時代が変わってきました。日本国民の境遇も、立場も大いに変化した。日本国民は、自己の利害を考えると同時にアジアの多くの民族の幸も考えなければならない。日本国民は、東洋における先進国、最も強い国、最も文化の国民として絶えず自分より劣った、幾多の東洋の諸民族を助けて、文明に進めていく、倒れんとする民族の杖ともなりて、これを興して荷になるかもしれないが、それは忍ばねばならぬところである。

若年でまだ充分歩行もできないような者や手足が満足でなく不自由な者や、病気の為に働きも良くできない者や年が老いて、重荷を負うことのできない様な沢山の兄弟を引き連れて、遠き険しい山路を旅行する様に、日本にとっては随分難儀することであるが、結局これが日本にとって最も尊き使命であると覚悟せねばならぬ。

＊東洋八億の民を如何にせん

近世の文明は、恐るべき力をもっているものであるが、この文明を作り出した、欧米の白人種は、ほとんど全世界を征服しつくしたといっても良い。

他の文明国民は、大概征服され、あるいは滅ぼされてしまった。東洋の諸国は、大概この種の民族である。アジアには、八億万民あるが、これらの諸民族は、大略すでに西洋文明のために滅ぼされたもので、現に今、滅びつつあるものも有る。幸いにしてアジアにおいて、日本のみがただ独り亡国破民の悲劇より逃れています。

我らの眼前に八億の東洋の諸民族が、野蛮、半開の民として、奴隷の境遇に永遠に呻いているのを見る。もし日本国民が、大慈悲心を起こしてこれを救わなければ、広い世界に、真の同情をもって、彼らを救い、彼らを啓発しようとするものは一人もいない、情けないありさまである。わたしは、人種的敵愾心を起こさして、しいて東洋人をして他の民族に反抗せしめようとする考えは毛頭もっていない。世界人類の大部分をしめている、東洋の人種をして長く萎縮困憊、廃頽荒残の哀れな境遇に沈倫せしめ、文明の徳澤に浴せしむる事を閑却することは、真に人道上、看過するに忍びないことだと思う。これを救うには日本国民の使命で、また大理想でなくてはならぬ。

日本は結論的にはアジア諸民族と連帯していく以外に

ない。

アジアが植民地化するのは今までの儒教思想のような「かくあるべし」という思想ではなく、松本は新たな発展するような思想を創ろうとしました。

『松本の徳の教え（徳教）』の理想

一、意識生活である。意識生活は知、情、意によって成立している、ゆえに知的生活にあっては霊智、情的生活にあっては自制、意的生活にあっては、勇敢の三徳を以って最高の指導原理とする。

二、肉体生活である。肉体生活にあっては健生の徳を以って最高の指導原理とする。

三、家庭生活である。家庭生活にあっては和親の徳を以って最高の指導原理とする。

四、社会生活である。社会生活にあっては同情の徳をもって最高の指導原理とする。

五、経済生活である。経済生活は生産、交換、消費より成立しておる。

六、政治生活である。政治生活は即ち国家生活にあっては忠誠を以って最高の指導原理とする。

七、宇宙生活である。宇宙生活は時間と空間の観念から成立しているが故に時間生活にあっては即行、空間生活にあっては秩序の二徳を以って最高の指導原理とする。

八、自然生活である。自然生活にあっては慈愛の徳を以って最高の指導原理とする。

九、芸術生活である。芸術生活にあっては審美の徳を以って最高の指導原理とする。

十、精神生活である。精神生活にあっては霊感を以って最高の指導原理とする。

大正元年（一九一二）松本（四十三歳）はなお満州、中国に教団普及に心血をそそぐ。

中国の民主主義化、民族の解放運動に大変松本は関心をもち、理解しました。インドの国民的自主運動、トルコやペルシャでも革命的運動が生まれました。他のアジア諸国でも新しい国民的生命の芽が出はじめました。松本は心から期待しました。

松本（四十三歳）は衆議院落選。

［大隈重信内閣総理大臣］

［第一次世界大戦起こる］

［大正三年（一九一四）ドイツに宣戦を布告、世界一次大戦始まる］

［大正四年（一九一五）、日本中国に二十一ケ条の要求］

山東省のドイツ権益の譲渡をせまる。中国の植民地化

の要求でした。中国民の猛反対五・四運動起こる。

袁世凱の帝政復古に反対する第三革命起こる。日本で支援したのは日本では頭山翁、宮崎等が孫文に経済的援助をしました。

中国にも松本に啓発された、同じ考えの人達がいました。この年、人々の意識革命の必要性を痛感していた陳独秀は青年雑誌を発行、翌年「新青年」と改称し、デモクラシーとサイエンスを掲げて啓蒙的な執筆活動を行う。

儒教の封建的な性格を批判する。魯迅はこのグループです。これらの動きを文学革命とよばれます。北京大学では新青年派の人々を教授として招きました。魯迅は封建的人物像をえがいた、狂人日記、阿Q正伝など発表しました。

大正五年（一九一六）松本（四十七歳）南方中国の革命を助ける。

大正六～七年（一九一六）松本（四十八歳）は中国・孫文の広東軍（革命政府）の顧問として中国で活躍。

［帝政ロシア崩壊］

大正七年（一九一八）松本（四十九歳）は普通選挙、婦人参政権運動を起こす。

［シベリア出兵、米価騰貴のため、米騒動起こる、愿敬の政友会内閣成立本格的政党内閣］

松本は原敬総理に中国の実情の書簡を送る。

松本の見方は「清朝政府は暗黒である、一部官僚の腐敗にある。本来中国人は四千年の長き歴史、強烈な国民的信仰、不朽の言語、無限の財源があり、勤勉にして、天才ある四億万の国民であり、だからこそ強大なる国家を作る要素がある、その平和にして、法律と秩序を尊ぶ勤勉なる幾億の人民は世界を動かす、大国民の要素がある。」であった。

［第一次世界大戦終結］

［大正八年、（一九一九）パリー講和条約］

［日本　人口七千七百万人］

［原敬内閣始まる、藩閥政治より政党政治による、初の内閣］

［中国に五・四運動起こる］

［選挙、国税三円以上、男二十五歳以上、有権者の割合五・五パアセント］

大正九年（一九二〇）松本（五十一歳）は三度衆議院当選となる。

8、普選、婦選運動に尽力

静清信用金庫設立初代理事長、青年教団のテキスト「青年の新理想」誌発刊。東洋精神の復興を基本にして日中提携を実現し、東洋再建をめざす、理想主義者であった。社会主義同盟が結成されたが、翌年に禁止された。女性解放運動、平塚らいてうらは新婦人協会を設立し、女性参政権を要求。

利益誘導型政治、政治腐敗を招き、政策論争不在、党利党略に政争、東京市議疑獄事件、アヘン密貿易事件、満鉄の不正経理事件など政友会党員のからんだ汚職事件発生。

［原敬首相は政治の腐敗に憤慨した一青年に暗殺されました。］

松本（五十一歳）は第四四議会で発言する。

辛亥革命以来、中国には間断なく内乱が起こり、略奪があり、戦争が行われて、この間には南北の分裂となり、督軍政治の争いとなって、支那の国民ほど、実に、悲惨なる運命に遭遇している国民はなく、四億余万の民はほとんど寧日なく、塗炭の苦しみに苦しんでいるのであり、この状態を放置しては、近い将来中国が安定することは到底望めない。このまま中国が争乱の状態が続くならば、貿易など日本の経済的権益の観点から、日本国民に甚大な損害を与えるのは勿論であるが、なによりも中国国民を救済するのは、道徳上の責任であり、隣邦の友人、隣邦の国民としてこのまま見過ごすわけにはいかない。そして一刻も早く中国国民を塗炭の苦しみから救うには、南北の統一をはかり、新国家を形成することが、最も必要なことであると強調し、日本政府に具体的方策を講じるよう、求めている。

大正十年（一九二一）、松本（五十二歳）は寺尾晃、頭山満、内田良平等と同光会を作り、朝鮮人留学生の保護、救済しました。とくに大正十二年の関東大震災の時、朝鮮人が暴動を起こすとデマが飛び、日本人が多くの朝鮮人を殺害しましたが、その時、朝鮮人を庇護しました。朝鮮民族と融和をはかろうとしたのです。

［大正十年（一九二一）日英同盟破棄］

松本（五十二歳）は大正十年五月八日静岡市で軍縮制限演説会が行われ、一千人以上の民衆の前で欧州戦争の勃発原因並びにその悲惨たる結果人類の新しき平和の叫びでいかに武力主義、資本主義が有害であるか述べている。

松本は第四四議会で人種差別撤廃案の再度提出するよう政府に求めています。

［農民運動、賀川豊彦らが日本農民組合を結成。全国で小作争議激化］

大正十一年（一九二二）松本（五十三歳）は高橋内閣が普選まだ尚早とし、反対のため、政友会脱会、松本は犬養毅、尾崎行雄等と革新クラブの結成に参加。普選断行が政治的争点となった第十四回総選挙の最中でした。

［大正十二年（一九二三）関東大震災］

大正十二年（一九二三）松本（五十四歳）は「婦人参政に関する決議案」を提出するなど、女性の政治的自由の保障を求めている、本来女性は戦争反対の平和主義者であるので、松本は本来、戦争反対の平和主義者です。

第一次世界大戦が男性の残忍、殺伐、粗暴になるなど現代の政治が男子の弱点を暴露している。女性参政権を実現し、女性が政治的に発言力をもった先進国では、優美、閑雅、平和、慈悲という女性の特性が政治のなかに入って、いかにその政治が改善せられ美化されるか、ということは疑うことのない事実である。

大正十三年（一九二四）松本（五十五歳）は衆議院当選する。

政友会、憲政会、革新クラブの三派、清浦内閣打倒の第二次護憲運動開始。全アジア協会を設立。

アジア民族の覚醒を即し一致結合よく実力を養成し、まさに来たらんとする人種的禍乱を未然に防ぎ、以って全人類の安寧秩序のために貢献せん。

アジアの団結がスローガンでした。会議には日本人、中国人、インド人、フイリピイン人ベトナム人が参加した。アジアに関する統一的思想が国民の間に芽生えてきた証とした。

［大正十四年（一九二五）普通選挙法成立、男子二十五歳以上、有権者割合、二十・八パアセント］

［大正十四年（一九二六）若槻礼次郎首相］

松本（五十六歳）は第五一議会（一二五年一二月～二六年三月）において列強と強調しつつ中国に対して内政不干渉の励行を表明した幣原外相を糾弾する。これが原因で政友会田中内閣は主張した手前、中国への第一次山東出兵します。犬養毅等と松本は政友会復帰。

［五・三〇事件、中国で起こる］

上海で、日本人経営の工場で争議中の組合員が射殺され、これに対する抗議デモに英租界当局が発砲し多数が死傷、三罷免運動が広がった。香港と広州では一年以上ストが行われた。香港は臭港・死港と化した。松本は中国民衆の要求である民族主義、平等主義、国際的デモクラシーの主張を受け入れ国権回復運動を担った、新興勢力と日本が握手することによって問題を解決する道もありうることが、松本（五十六歳）によって積極的に提起されている。

インドには国民的自主運動が勃興し、トルコにもペルシャにも革命的変動が興り、多くのアジアの諸民族のなかにも、至るところに国民的生命がその新しき芽を吹きつつある。松本は賞賛したのである。

［昭和二年（一九二七）田中義一首相］

昭和二年（一九二七）松本（五十八歳）は田中政友会内閣海軍政務官となり、ジュネーブ軍縮会議に出席。

国民として、国家としても、その権威を維持するだけの強力な軍備は常に持っていなければならぬ。

軍部に支払う犠牲はかなり大きい、しかし、日本が世界の強国として、国際間の重置きをなし、その言葉は世界より敬重される所以である。

第一次世界大戦の悲惨な体験から、無数の平和運動がヨーロッパ各地で展開されている。

他方で欧州の主要諸国で、国民の武力の充実すなわち教育などに腐心、英、仏、独、伊、ソ連等です。一種変形の軍備拡張、新ミリタリズムです。松本は植民地から、開放されるには武力もやむを得ずの感想を持ちました。

軍縮会議決裂。松本は欧米を歴訪して、各国の指導者、政治家、軍人を訪ねる万国議員会議に出席、ドイツ前皇帝カイザル陛下とドルンにて会見する。イギリス・フランス・イタリア・など西ヨーロッパの主要諸国のほかソビエットロシアなどを訪れる。『カイザル皇帝との会見―生きんとする欧州を見て』（青年教団、一九二八）

レーニン夫人、のクルプスカヤと会見、ソビエトロシアの政治は、共産党の独裁政治であり、イタリアのファシズムとともにコミュニズムもデモクラシーの敵であると断じている。共産党以外の党派を認めない一国一党主義であるばかりでなく共産党と異なる意見を有することさえ認めていない。松本は批判しながら次のように評価しています。ここに松本の考えがあると、思います。他力だけでは、生きられない、自力でなければ、と言う現実です。

イタリアのムッソリーニと会見し次の感想を得た。

正義を基調とし、厳粛なる政令によって風教の禿廃を矯正しようとする。不正の行為、不義の制度に対して、

断然たる処置をとっている。旧き諸制度を改廃し、人材を登用し、主として青年の精力と、努力によって新イタリーを建設しようとしている。経済力を立てなおし、国富の増進を計ってイタリーの信用を回復するために、産業の奨励をはかっている。資本と労働の争議を絶滅せんとして、彼は資本家を説いて、労働者に譲歩せしめ、また労働者を、説伏して、無謀の反抗を止めさせ、労働者と資本の間に介在して、両者の調和を計って大いなる成功をなしている。

松本は全く猟官運動をすることがなかった。外務大臣、海軍大臣でもよかったのだが、金がなかったのです。当時、外遊となれば自費でありました。ジュネーブ軍縮会議出席でも周囲の人が支援しました。

政友会が軍部と組むようになり、政党政治から軍主導の政治になります。

［昭和三年（一九二八）（金融恐慌起こる、田中政友会内閣成立）］

松本（五十九歳）は五度衆議院に当選、高等官一等、正五位勲三等を受。

政治、社会改革への第一歩と松本が希望を託していた普通選挙は、結局のところ金権腐敗、汚職・買収をもたらし、政治家は堕落し、議会政治は機能不全へと陥り、国民の政治への信頼は完全に裏切られてしまった。

普通選挙法（二十五歳以上の男子に選挙権付与）に付随して治安維持法に死刑を追加され強化された。

最初の男子だけの第十六回普通選挙が行われる。皮肉なもので、この選挙当選以降、選挙が金で動かされるようになり、天下国家のみ論じ、地元への利益誘導はせず、金に興味を示さず、いつもピーピーの松本はこれ以降、選挙に当選できなくなりました。

張作霖爆殺事件、田中内閣処理を誤り、辞職する。

［昭和四年、浜口雄幸首相、ウオール街株式市場が大暴落］

当時、経済恐慌、党利党略、議員の汚職、スキャンダルの応酬合戦い、行政の怠慢と腐敗、利益誘導政治、地方分権、借金して見栄はる政友会、まじめで整理緊縮民生党、私利私欲、地位利用、一年おきに替る首相、決められない政治、政治主導による官僚支配（官僚は軍部のご機嫌とりのため、都合の良い資料しか出さなくなり判断を誤るようになります）、過去の日清戦争、日露戦争、世界第一次大戦後の勝利による甘い生活経験等なにか日本人がどこかで見ている景色です。

日本人は失望し、強力な指導者を渇望し、そして解決

老子は戦争について、次のように述べています。

老子第三十一章

夫佳兵者、不祥之器。物或悪之、故有道者不處。

君子居則貴左、用兵則貴右。

兵者不祥之器、非君子之器。不得已而用之、活澹為上。

勝而不美、而美之者、是樂殺人。夫樂殺人者、則不可以得志於天下埃。

吉事尚左、凶事尚右。偏将軍居左、上将軍居右。言以喪禮処之。殺人之衆、以悲哀泣之。戦勝、以喪禮處之。

いつたい、武器というものは不吉な道具であり、人々はたいがいそれが嫌いだ。

だから、道を身につけた者は使う立場にない。

君子は平時には左側を上位とするが、戦時には右側を上位とする。

武器は不吉な道具であり、君子が使う道具ではない。やむをえず用いる場合には、あっさりと使うのが最上である。勝ってもそれを賛美しない。もし賛美するならば、それは人殺しを楽しむことになる。

人殺しを楽しむならば、自分の志を天下に果たすことなどできないのだ。

吉事の場合は左側を上位とし、凶事の場合は右側を上位とする。

副将軍は左側に位置し、上将軍は右側に位置する。

すべく台頭したのが軍部支配による戦争への導入です。

［昭和五年（一九二九）世界恐慌起こる］

昭和七年（一九三〇）松本（六十三歳）は第十七回衆議院選挙落選活動の場を失った、松本は青年活動に、打ち込むようになります。

9、青年活動に尽力

［昭和六年（一九三一）若槻礼次郎首相四月、犬養毅首相十二月

関東軍参謀らは満鉄路線を爆破し、柳条湖事件が引起こされこれを中国軍の仕業として、関東軍の満州侵略が開始された］

松本（六十四歳）は画策するところあり、満州に出発する、南、荒木両陸相に、京城に宇垣総督吉沢外相に面会、了解を得て奉天に向かう。関東軍に本庄司令官並びに参謀と計る。奉天に袁金凱、威式毅、干沖漢、張欣伯等諸氏を訪れる。経済不況、米の不作、政治の腐敗と堕落、社会不安の蔓延等で、国民の意見も戦争で、解決する以外ないと云う、世論となりました。

喪禮のきまりによって位置するということである。

大勢の人を殺すので、悲哀の気持ちで戦に進み、戦いに勝っても、喪禮のきまりによって位置するのだ。

［昭和七年（一九三二）満州国建国宣言］

昭和七年（一九三二）松本（六十五歳）は第十八回衆議院選挙政友会公認漏れ落選。

令弟三郎五・一五事件犬養毅首相暗殺され、警視庁刑事部長を左遷される。

昭和八年（一九三三）ラモスは、十月マニラでアメリカからの完全独立、農地改革、教育においてタカログ語の使用を掲げ、マニラにてサクダル党を設立。翌年十一月来日し、頭山満を介して、松本（六十六歳）と引き合わされ、松本が公私両面から援助した。来日の目的は、革命蜂起のための武器援助を日本軍から引き出すことにあったようだ。

松本（六十六歳）はアジアよ団結せよとアジアの青年達に決起を呼びかけアジア精神の作興、民族更生がスローガンにかかげられた。昭和十年十二月十六日に青年教団（松本団長）主催の第一回アジア民族青年代表大会が日比谷公会堂で開催されました。松本の主旨説明ではアジア民族が共通する血液と思想が交流していることすなわち人種と文化の同一意性を根拠として、アジアの精神的団結と一致協力の必要性が強調された。これまでのアジアは近世西欧物質文明の侵略的鋭鋒にさらされている。分裂と疎隔と暗黒と不義と、抑圧と搾取がアジアを支配してきたと、負の歴史が指摘されると同時に、アジアの自由と正義の要求が高らかに掲げられ、奴隷と抑圧からのアジア民族解放が叫ばれているのである。

アジア民族の青年代表の演説のタイトルと名前

＊アジア文化の復興についてR・B・ボース、

＊インドの鑑鎖を断k・B・シンハ（インド民族）

＊アジアの勝利の日を待つ陶克陶（蒙古民族）

＊満州建国とアジア民族復興、孫錯（満州民族）

＊堅く手を握ってアジアの使命を達せよ、李清（支那民族）

＊民族の平和と進運のために戦わんチャラオ（シャム民族）

＊極東の日本と極西のトルコ、ライフ（トルコ民族）

＊統一せるインドネシアの建設A・Mオスマン（マレー民族）

＊アジアの青年教団進軍ラッパ、ガウス（インドネシア民族）

＊アジア民族結合の前提、陳副安（アンナン民族）

＊正義のアジアを建設せよ、リカルテ（フイリッピン民族）

＊偉大なるサラセン民族の出現T・ナビルンー（アラビア民族）

＊国際政治に有力の地位を得ん、カララング（フイリッピン民族）

＊日本に対する強きあこがれ、モン・サン・ユン（ビルマ民族）など松本を信頼して集合した人たちである。

昭和十一年（一九三四）松本（六十七歳）主催。一月二十日大連市で開催予定の大アジア民族会議の東京で開かれた、準備会にR・B・ボース、ガウスが出席している。開催の意図は日満支を中核とする国づくりと障害である英国の排除である。ボースは新宿中村屋のボースとして有名である。日本に長く居住しました。太平洋戦争勃発にともないインド独立連盟総裁としてインド国民軍結成に尽力し日本軍に協力しました。ガウスは、インドネシアから日本に最も早い留学生で、慈恵医科大学に学び、在日インドネシア留学生会の会長を勤めている。

［昭和十一年（一九三六）二・二六事件、皇道派青年将校ら反乱、斉藤内大臣、高橋蔵相等殺害］

［昭和十二年（一九三七）盧溝橋事件、日中戦争始まる］

［日、独、伊防共協定成立］

［昭和十三年（一九三八）帝国主義の時代、アジア諸国は英仏蘭米の白人の植民地にされた。近衛文麿首相のブレーンの知識人たちは「東亜共同体思想を打ち出し、アジア開放の理念をうちだした。大東亜共栄圏思想である］

昭和十四年）一九一九）五月八日、松本君平（六十九歳）青年教団総裁

主催＊　社団法人　青年教団
　＊アジア民族精神連盟
　＊東京市

世界回教民族代表歓迎大会開催

回教民族は、アジア、アフリカ、ヨーロッパに誇り広大なる帝國を築き燦然たるサラセン文明を啓発して近代文明の淵源をなした。近世甚だしく西欧勢力の圧迫を受けるに至るも、猶ほ三億五千万の霊魂を支配する精神王国は厳として存在しています。

この度、回教礼拝堂が日本有志の義損により帝都の一隅に巍然たる姿を現しました。我々は宗教の異同を論せず、一切の癖見を去って、この遠来の客を迎え胸襟を開いてアジア同胞を優待したいと思う。

この雄大なる歴史的民族と、精神的融合を図り東洋永遠の平和のために、アジア民族は皆な共同の上に座するものであることを、如実に世界に明示せんことを願うからであります。

感謝の答辞

一、日本民族の偉大なる精神に感謝す

イエメン国王陛下代理イエメン国王子　サイフル・イスラム・ホサイン殿下

二、日本の進歩は永久に東洋の偉大なるを示す

ソーサ・アラビア国王イブン・サウド陛下代理駐英公使　シェーク・ハフイズ・ワハバ閣下

三、日本に対する感謝の紀念

インド回教代表
A・G・バーラス夫人
天皇皇后両陛下　万歳三唱　松井石根大将発声
世界回教民族　万歳三唱　松本君平総裁発声

昭和十八年（一九四三）松本（七十三歳）は「アジア民族興亡史観」（アジア青年社）出版。

「太平洋戦争、全世界を挙げて混乱の巷と化し、千古未曾有の戦闘は展開された。海に、陸に、空に皇軍の大戦果は、期年ならずして既に五百年の歳月を要すべき大業を遂行したこれは大東亜共栄圏の創造のためである」としている。常に松本の脳裏に浮かぶのはアジア人の植民地からの解放である。

松本は、戦争を正義の戦いとし、賞賛する、戦後、日和見主義者、戦争扇動者と言われ評価を下げます。しかし、いつも発言、行動の中に、アジアの植民地からの開放という理念が最後までありました。

昭和十九年（一九四四）七月二十八日、松本（七十四歳）は永眠する。

松本が願っていた、アジアの人達の欧米による、「植民地支配からの解放」誰の意見も反映される「普通選挙」日本の平和維持できる根源「婦人の参政権」

松本が一番強調し願った、日本人の品位の向上は経済の発展とともに、評価され、アジアでの「日本人が物作りの指導者」として、活躍することなど、現在、実現しています。

松本は若くして、アメリカで学んだ経済学者、アメリカを熟知しているわけで経済力から、日本がアメリカに勝利するなど毛頭考えていなかったでしょう。また松本が畏敬する、中国文化の国に戦争に勝ち、日本の植民地化する、とも思わなかったでしょう。松本には政治家、政友会の会員として、国益の追求、そして政友会が軍部と結びついていく過程にも追従したのでしょう。

現在、地元で、松本君平は忘れ去られ、口に出す人も見当たりません。松本が名誉・地位・権力・金に志向したら、評価は変わっていたかもしれません。

松本は若くして、自力と他力の文明の違いに、気づき葛藤しながら、アジアの植民地からの開放を、模索し続けました。

松本は晩年、アジアの国々は最終的には欧米の植民地を免れるには、武力を含めた自主防衛による以外ないと、主張したのが、戦後、戦争扇動者と捉えられ、人々の記憶から去らしているのでしょう。戦後、アジアの国々も戦うことで、植民地から開放されました。

なお、子孫に美田を残さなかったのも、忘れ去られる

原因でしょう。井形十畳部屋が九つの豪邸も戦後、人手に渡り移転し、屋敷跡は茶畑になっているからです。

残るは冒頭の碑のみです。

松本、選挙は九度挑戦し五回当選です、松本は衆議院に当選すると、西洋文明の国益追求「自力」の活動をし、落選中は東洋文明の「他力」の活動をジャナリストとして、アジアの植民地からの開放に尽力し、この活躍の評価は不変です。

松本の霊魂は現在の日本の社会に満足しているでしょう。松本が主張した社会が創建されているのですから。

『参考文献』

雄弁学　松本君平著　警醒社（一九〇一）

松本君平の自叙伝「名士の学生時代　スチュウデントローマンス」　松本君平著　青年教団（一九一八）

渋沢栄一君題字　河野広中君序　読売新聞社編　東京　朝野書店発行（一九一八）

青年の新理想　松本君平著　青年教団（一九二〇）

普選のために　松本君平著　公私経倫社（一九二二）

徳教のすすめ　松本君平著　青年教団（一九二六）

青年の新理想　松本君平著　青年教団（一九二七）

カイザル皇帝との会見、生きんとする欧州を見て　松本君平著　青年教団（一九二八）

新聞学　欧米新聞事情　松本君平著　青年教団（一九二〇）

徳教　松本君平著　立命館出版部（一九二五）

徳教とは？　現代人の新しき宗教　松本君平著　青年教団（一九二五）

徳教　松本君平著　立命館出版部（一九二六）

回教民族のために、世界回教民族代表歓迎大会　松本君平著　青年教団（一九二九）

アジア民族興亡史観、　松本君平著　アジア青年社（一九四二）

静岡県近代史研究（第二十四号）大正デモクラシイ　松本君平（一九九八・一〇）

静岡県近代史研究（第二十五号）民衆政治家　松本君平の中国認識（一九九九・一〇）

静岡県近代史研究会（第二十七号）　松本君平の立憲思想形成と東京政治学　校上（二〇〇一・一〇）

静岡県近代史研究会（第二十八号）　松本君平の立憲思想形成と東京政治学　校下（二〇〇二・一〇）

静岡県近代史研究（第三十号）アジア主義の蹉　松本君平（二〇〇五・一〇）

以上五誌　研究論文　成瀬公策

陰翳の美学（その十二）

外山知

第四章

十二、神経細胞にまつわるクオリア

1．神経細胞のもつ意味

今、再び神経細胞内に宿る心の問題に、深入りしたい。医学書に見る脳細胞構成は、約一千億の神経細胞（ニューロン）が、大脳皮質の前方部分に位置している。

前頭葉（全体的な統合を保つ機能を持つ）
思考、運動系、運動言語中枢。

頭頂葉（脳の中心溝にそって頭頂骨）
感覚系、情報の分析、高次知の働きの機能、感覚言語中枢を持つ。

後頭葉（大脳の後部）
視覚系中枢を持つ。

側頭葉（中心溝の深まった所）
感覚、嗅覚、記憶を司る系統のニューロンが数千と言われる。接合部シナプスによって結合され、脳内のニューロンを構成する。

この各神経細胞も生成過程において、高度な発達を見る。たゞ人体の細胞は脳だけでなく、各部の細胞が形成と死滅に向け動いてる。

人体各分野の細胞に命令を出すのは、この脳の神経細胞の中で、どの機能とは言えないが、前頭前野は、すべての大脳皮質、大脳基底核、視床、視床下部、小脳、脳幹との間に広範な線維連絡を持っている。

そして意志、思考、創造などの、高次の精神機能と関連している。従って現代科学を先導するのも、例えばIT、光ファイバー等のメカニズムも、中枢はこの神経細胞の原理を応用しての製作といってよい。

このように私達も時には、最新の技術に頼り、また、

新技術を生む切っ掛けにもなる。斯くのごとく頼り頼られる関係の中で、私達の神経細胞も磨かれ、その機能も活用して行くことにもなろう。

たゞ科学技術の機能と共に神経細胞は、客観的には理解出来ても、意識内の体験、即ち脳内現象に起る意識体験は、主観的にしか感ずることが出来ない。

勿論前攷にもふれたクオリア質感も、内的な存在として神経細胞を構成し、作動する。どこまでも主観的な存在として、科学技術を育む。

それはより根源的な神経細胞ニューロンの、素因をなすものであることは、論をまたない。

たゞ現代の科学技術は、神経細胞のメカニズムを、客観的に受け入れ導入することによって、例えばロボットも人知を越える技をこなす。

ロボットが回転ジャンプや、なわ飛びをこなし、トランペットを奏する。また音声言語に挑戦するなど、考えられない程の技術開発をなしている。

これは科学の人間に対する挑戦といってもよい。

かって人間頭脳のTV開発で、人知の英知がどこまで開発出来るかと、思って見た時代もあった。しかし、今や人間が、人間の作ったコンピューターに、逆に使われるような時になった。

人間対人間の時代から、人間対科学の時代に、地球規模から宇宙空間への、はゞたきも現実化して来た。

勿論、平和目的からはずれて、殺戮に利用される時、人類の英知は科学に、負けた状態になる。そんな事にでもなったら、大変なことだ。

あくまで科学技術利用をコントロールする人間に、弥栄を保つべき時が来ている。かゝる中で、神経細胞の持つ意味は大きい。

ニュートンの引力の発見に端を発したこの科学技術も、光ファイバーを取り込み、医療技術に画期的な治療をなすに及んだ。

更に脳内までカテーテルを導入し、血液の梗塞した部分治療をなし、その上体内の細い血管に手術可能な領域を見る時、今までの切開手術から、電子、陽子の技術導入は、私達人間の勝利と言ってよい。

人間頭脳を越えたレーザー治療の分野まで効験している、人知の応用能力は偉大である。

この英知を広く人間社会に適用することが、今日的な問題である。

思えばこの意味にそって科学する英知は、私達の生み出した偉大な遺産でもある。平和な社会でこそこの遺産は守り得る。

戦争の破壊は遺産だけでなく、人類社会をも消滅させてしまう。

「戦争は文明の母たり得るか」と、或哲学者は問うが、この破壊は次への飛躍たり得るか。勿論、戦争か平和か、

の落差は、人類社会にとって、永遠の課題でもある。

この落差の解消もこの人間の、神経細胞にかゝってくると言える。

窮極において人間社会が、右するか左するかの岐路に直面するか、これもまたニューロンを育む、クオリアの存在体に、よるのかも知れない。

考えれば考える程、思惟の浸潤さは大きい。限られた生命、神経細胞を如何に的確に使用構成するかが、今を生きる人の責務であり、急務でもある。

たしかに一単体のニューロンは微少なものである。たゞ一億ものかけがえのないクオリアの結合体は、或る一点に集結すれば、偉大な成果を生む。

その研究集合体が強固なインフラを持つならば、ロボットの精密さも、医療技術開発も不可能ではなかろう。

全世界の科学者が結集すれば、不可能なものも可能になるかも知れない。妙なる楽の音も、先人が手掛ける事のなかった領域も、まさに新鮮さをもって蘇ってくる事を、信じてやまない。

限られた扉を開く鍵は、実にこのニューロンであり、クオリアであろう。更に限られた英知を閉じ込めずに、開かれた領域に持って行くことが出来たなら、それも人類社会貢献の鍵であろう。

閉ざす事のないよう、開花の方向をする、先導者、科学者も必要である。

いや、これこそが21世紀を開く、礎かも知れない。個人の英知は、人類社会の英知でもある。

これあって地球、宇宙規模の繁栄に寄与することが出来よう。宗教とか主義思潮で独裁者の意志に、踏みにじられることだけは、何としても避けなければならない。

現象世界はかゝる奇異をも、持ち動いている。尤も科学技術では、逸速く現代産業分野で生産性向上に、ロボットを導入して電子機械生産が、効率を高めている。

その映像を見聞して一喜一憂したのも、ついこの間のことゝ思われた。電子工学の分野で異常な発展は、コンピューター世界で各分野の利用が拡大化した。

家庭電化の周辺にもあっと言うまに、恩恵に浴することになった。

電卓から電子計算機、ハードウェアー、ソフトウェアー、光ファイバー、コンピューター、パソコン、携帯電話、デジカメ、通信分野、そして周辺の状況変化に応じてセンサーが働く。

更にコンピューターによって軌道修正をなし、モーターに伝えて自分自身で動こうとする。ロボットの仕組み、組合せ、基本的な動きは、どんなロボットでも操作は同じである。

ロボットと手を取り合って歩行する場合、人の手がロボットのセンサーを利用し、コンピューターがモーターに伝えて、速度と手による調整を可能にする。

ロボットの走る行為で最も難度が高いのは、バランス調整にあると言われる。技術の進歩でこれも乗り越え、将来はパソコンによって動かすことが予想される。

高校情報ＡＢＣによる授業に取り入れられ、新しい段階に入っている。神経細胞のもつ意味はこゝまで来ている。

思えば形而上的な世界に、踏み停まっていたこの分野も、形而下学、科学技術の分野で花を咲きそめ、躍動しているのは、現代科学の持つ意味と言える。

2．クオリアの働きは意識か

私達が、五感即ち視覚、聴覚、觸覚、嗅覚、味覚などによって受ける感じは、脳内現象で神経細胞が複雑にシナプスによって結合され作られる。

その働き活動は、客観的に測定することも出来るが、先の様にして出来た意識の体験は、主観的にしか感じることの出来ないものである。

即ちクオリアは、材料の性質の違いから受ける感じで、私のクオリアが生まれる。私が受ける様々な感じは、脳内現象で生起される。

速く走る物を見て、風力、風圧、風速、風向、風流など、種々な動きを感ずる。

また味覚で、甘味、酸味、辛味、苦味等々、様々な味覚が材料や性質の違いによって、私のクオリアも異なってくる。

この意識体験は、私の主観的な体験においてのみ、感じられるものである。

神経細胞ニューロンが、シナプス結合により脳の前頭前野に、自我を支える中枢が支配し、心の中でどのクオリアに注意を向けるか。

例えば酸味に意識が向けば、他の味覚は感じられない。まったく主観的な性質を持つクオリアが意識として浮揚する。

クオリアの主観性の発生は、脳内現象として受け止められる。その働が何であるかは不可解である。

ニューロンがシナプス結合時に、同時にある特定のクオリアを感じさせる。この時、前頭前野の働きは確かに活発化する。

材質の異質なものは、クオリア発生に、Ａ′Ａ″Ａ……と違った微細な差異を含む。その中で強い性質を引寄せる因子は、Ａとなり、Ａ′、Ａ″となって、意識される。

凡そ意識とは心の状態で、自分が今何をしているか。どういう状態に置かれているのかが、自分ではっきり分かる、心の状態である。

また「……する（なにヲ（なんだト）する。」その事について、はっきりそうだと心の働きをする、心的な状態を言う。

従って心の中で自分をはっきりと、理解する働きを意識と呼んでいる。私達のニューロン神経細胞は一千億ものニューロンが、互いにシナプスによって結合構成されている。

また感覚的な体験に伴う独特な質感、クオリアを生じているものは、このシナプスによって結合される。

神経細胞の間の関係によって、Ａ′Ａ″のクオリアが意識される。

従って幾つかのクオリアは、シナプスによって結合された、神経細胞の間の関係によって構成されている。

様々なクオリアの働きは、意識の体験を作り出している。即ち意識の中で感じられている。

凡そ意識されるものは、すべてクオリアで心の状態を、顕現している。その心の状態は私が私である意識は、数多くのクオリアを生み意識的な体験の中で、個々のクオリアを感じる。

そのクオリアは意識の作用によって、その場、その場で他との関係によって、新しいクオリアを次々に生み出して行く。その関係の数だけ意識する私が、存在すると言ってよい。

私達は他との関係において、その場、その場にクオリアを意識する。

またそのパーソナリティーも、私という意識を感じ次々と、新しいクオリアを感ずる。他との関係のもと、その質感を持続もさせている。

かくてクオリアの働きは、意識の体験の中で、他の質感の作用と相俟って、より鮮明な意識を感知する。

私達は知らず知らずのうちに、自分を内面的に見る働きを感じる。周囲の環境とか、それに適応する働きとか、自分が対象をどう見るかとか、ふっと気がつくことがある。

これは心の中の働きで、脳の神経細胞の活動によって働く、多くのクオリアの持つ意識となって具現化する。

今を時めく自分も主観的な心内の作用で、それぞれの表象を感じる。

即ち意識を発生させ単純な意識が、クオリアの作用で、より複雑な高次の意識へとかけ登る。

科学する能力を生み、変幻自在な多様な仕組みを組立て、ミクロの世界から巨大な宇宙をも、支配する手の作用を試みる。

電子、陽子のエネルギー利用で、医療にまた芸術の美に、多様なクオリアをあやつり、人類社会の平和へと役立てゝいる。

その媒体をなすものは、言語で、ことばの持つ働きは、イメージをも変え得る。人はこの言語を用いて、多様な問題解決をも計り得る。

脳細胞の中で側頭葉の聴覚に、感覚の言語中枢を占める働きによって、思想感情を言語を介して、一続きの統

一する感覚として、育む。

即ち意識が意識として確立して行くには、様々なクオリアの働きが、脳内神経に左右することは、はっきりと言える。

たゞ私達の周辺には非常に多くのクオリアが発生して、それがまた意識への媒体をなす、相関と見てもよい。

3．意識は感情誘発のニューロンか

意識の働きが、私達の内的な体験にもとづいて、幾種ものクオリアを形成することは論をまたない。

凡そ意識の自覚は、各種のクオリアから発生した小さな感情で、その小感情が新たなクオリアを育む。

即ち心内の体験によって意識内の作用を果す、ニューロンと見てよい。人は意識を持って初めて、人間としての気骨も構成出来る。

意識の積上げが、すべての知の働き作用にもつらなる。その根幹に人間らしい動きは、ニューロンを中心としたシナプスの、結合作用にある。

この小さな作用が結合して、一つの組織体を作る。即ち、前頭前野の働きにもなる。人は細胞の未発達な状況から、地球いや宇宙をも動かす働きをなす。

この間、体内の体験によって、その積み重ねは増大化する。

一輪の梅花に想像する感情のイメージ、そこから派生する幾多の情感、心情豊かな微風に、人間的な感情を持つのも、意識の現れである。

とめどなく去来する思考作用も、またその一つの現象といってよい。たゞ成長期を過ぎてからは、生活と同時に日々細胞は死滅して行く、過程をたどる。

それを意識するのも人知であり、私達の推測は意識の働きと共にある。

その意識をもって感情移入、感情導入には、時として快、不快の感情が左右する。快であり続けたいと思っても、まゝならない時もあろう。

そんな時に支えてくれる脳内神経は、自然、動物と異なる、人知が支配する。声も立てるし、同じ人間仲間を呼びさますことさえあろう。

考え思考する行動も集団をなし、思惟する力を呼ぶ。

輝ける思惟は、更に高い段階へと延びて行く。知は知を呼び、池に投げ入れる石の波紋も同心円状に広がって行く。経過観察も出来えよう。

また夜、月光に輝く波光を追うことも、さゞ波現象を捉えることも出来よう。

意識が発生する過程は、既に脳内の体験を通して、単細胞から複合細胞へと、成長過程に知の働きがされる。

この未知な組織体こそ、人間を司どる意識の発達途上

の、学習訓練である。

この作用があってこそ、他組織も開発してくるものと見てよい。一つの組織体は他組織を、ともなって発展する。その開発は人間特有のものと見てよい。

凡そ意識の覚醒は外界の視覚、触覚、味覚、聴覚、臭覚などの感覚器によって刺激を受け、脳の神経細胞に伝達される。

意識の覚醒を見、同時に物についての、善悪美醜、新古の捉え方や、それにともなう価値判断、美的判断もなされる。

これも質感、クオリアの違いから受ける感じで、意識覚醒に大きく左右される。たゞ脳内神経の機能によって、この芽生えも意識発達のメカニズムとして効験することは論をまたない。

従って感覚が感覚として、知の働きをする。これは左記論述の意識成長の根幹をなすものとして成長する。

即ち（何にヲなんだト）する。その事について、はっきり添ったと知の働きをする。

またその知の働きが自分の判断で、はっきり分かる心の状態をともなって、高揚して行く過程こそ、意識覚醒のメカニズムである。

この心の働きの感情誘発が、組織的に見分けられる。心の作用、所謂、意識を統括する働きによって、知る作用にまで及ぶ心的な作用は、人間の神経細胞以外には見られない。

他の動物でも事物を感知して、それに反応はする。しかし物事を分析し、判断し行動することは、人間の英知の他には識別出来ない。

人の脳内細胞の偉大さを、改めて知り得る。人類の歴史を懐古するに、かゝる個の英知が集団をなし大きな力となって、左右する時に、数々の悲劇を育んだ。

然しそれをも乗り越えて、新しい文化文明を生み栄え行く。所謂、栄枯盛衰を見て来た。今日もその渦中にある。

歴史を刻む意識は、小さな小さなクオリアにある。そのクオリア即ち、質感材料の性質の違いから受ける感じが、一つのまとまった意識となった時、個々のクオリアは意識誘発のニューロンであると言ってよい。

凡そ意識されるものは、皆クオリアと言ってよい。

質感性が、私達の環境自然世界に、心内の現象として現われる時、ニューロンはクオリアを育む。

私達を取巻く環境因子は、すべてニューロンとシナプスの結合作用が、きっかけとなって構成される。

その要因には他室で心内の現象から、クオリアの同一性を察知出来る。即ち日常生活で察知する質感には、多様な感覚や感情がクオリアとなって反応する。

例えば、風の動きによって私達に、快も不快も与えよう。彩色をともなったチューリップの風になびく風情、

また時に雨にうたれた風姿も趣を感ずる。

これも皆クオリアのなす、主観的な体験によるものとして受けとめてよい。

感覚風情を共有するクオリアは、私達の五感に反応する感覚の一つ一つである。主観的な体験を通して、ニューロンと結びつく。

脳神経の主観的な体験によって意識し、前頭前野で活躍する意識は深く、思惟作用にも及ぶ。

こゝに到達すれば、意識は主観的な体験を通して、客観的な体験へ、即ち科学する思惟の偉大さを、ミクロからマクロへと知った。

脳内細胞を意識した深い内的な細胞まで、医学の開発もさることながら、新しい分野がより未知な領域にまで進展しつゝある状況は、私達の未来社会に大きな貢献をはたしている。

この事は人類社会の今後を予測する人間の将来像に、大きな問題を投げ掛ける事になろう。

4．クオリアの起源、発生

これについては前項の論攷の中で、かなり奥深く究明いたした。即ち意識されるものは、皆クオリアと見てよい。この論究こそクオリアの起源であり発生と見てよい。

私達の脳内細胞ニューロンの発生、起源は重ね重ね素材に引用している。五感、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の機能が働き、それを感知する。

前頭前野の働きによって、これはこれだ、あれはあれかと、判断能力によって、それぞれ意識を育む。クオリアの個々の作用こそ、実に意識開眼であり、より根本的なものとして受用してよい。

個々のクオリアは質的に異なる強度の問題の繊細さ、質的な外形、感情把握にしても勿論、私達を左右する。

メカニズムも実はそのクオリアにあって、作動している。クオリアの同一性も、問題になろう。

たゞ千変万化する個のクオリアにあって、これはこれだ、あれはあれだと、言い切る物の作用である。

例えば聴覚から受けるクオリアにしても、モーツァルトの弦楽とシューベルトの楽曲は自ずと異なり、これはモーツァルトだ、あれはシューベルトの楽曲だと言える。

その曲がまったく異なるモーツァルトのものがシューベルトとして受け止められるのは、誤聴として感受される。ごく幼稚または聴覚を失った、高令者の聴き取り方を除いては、明らかに判断し得る。

このような誤りは、神経系統の異常者をおいては、先ずないことゝ見てよい。

五感の内で、それぞれ意識を通して知の働き作用を司る、基本的なクオリアは、正常機能のもとに働く。

もし誤作動があるとすれば、その感覚機能に異常を生じているからと、見てよい。凡そクオリアの発生を考える時に、前述の意識開眼のメカニズムが論じられる。

その個々の質感は意識の中に没入する。意識が覚醒して始めて、クオリアの存在も種々に、生き蘇ってくる。

私達が私、自我に目覚めた時、クオリアもまたそれを感知する。自我を取りまく種々のクオリアは、相反応しあって実像にせまる。

それは意識が知の働き作用をともなって、各種クオリアの判断能力は共有となる。感覚感情をともなって、前頭前野での思考能力を喚起させる。

思考を司る脳細胞は、各分野からの刺神経を瞬時に受けとめ、外界がどのような状況に変化するかを知の働き、即ち知覚する。

クオリアの働きがあってのことである。繊細な質感は、同時に何億もの知覚作用によって立証され働く。

クオリアが発生する条件は、他との関連において、即ち、自然の中で感ずるもの、特に未知な自然の中に置かれた時、私達は何らかの時めきを感ずる。

その環境に入って、主観的な体験を感ずる時に、種々の質感クオリアを感ずる。AはAである。BはBである。

その他の感情を脳内体験を通して、呼びさまされる。それが意識の開眼となって、或る環境形成にも、寄与することになろう。

この一点の起源発生こそ、クオリアの誕生であり、意識の再生でもある。何億個のクオリアが、相対する質感をともに神経細胞で捉え、意識開眼に連なる。

私達が輝ける物象の中に、光と翳とを意識する時、意識開眼の母体は実にクオリアにある。

5．人は感情に左右される

凡そ感情については、感覚との関係に於いて各所で論じ、またそれがクオリアの特性をも育んで、脳内の現象にも大きく響いたことも、論を進めて来た。

今、人は感情に左右されると、真向から極論するのは、各種論理を踏まえた上での判断であり、断定でもある。

かゝる論理を超越して、単純思惟においてもし種々な日常的体験の中で、かゝる言葉が発せられる。

私達が普通使用している気持、心持も、快、不快を中心とする意識の主体も、主観的な側面で変化する。

例えば喜び、怒り、悲しみ等の気持、これは外界の刺激によって、絶えず変化する。

作用で日常的な細かな意識も、この感情の変異によって作られ表面化する。ことに感情の起伏の激しい人は、喜怒哀楽の気持が、顔に現れることが多い。

こんな人をもって、多感な人と呼んでいる。たゞ気持、心持など、その場その場の変化によって、人の心内の現象に生起する。情も変化する。

千変万化する諸感情は、環境に対応する動きによって、クオリアも微妙に生起し、意識拡大に影響している事は、論をまたない。

従って環境の要因は感情発生即ち、数多くのクオリア導入に、大きくかゝわっている。

如何に理性的な知の働きに長けた者とて、その理性を育む過程にも、感性的な叫びなくしては成就しえない。

幾多のクオリアの発生は、脳内の細胞を刺激し人を行動に走らせる。多感な感情も発生し、感情に左右させる事は、必定と言えよう。

多感な人間性は自らを鍛え、それに従ってクオリアの発生を豊潤にし、脳細胞の活性化にもつらなる。

感情の多感さは同時に人の情をよび、活動的な笑にもつらなる。人間生活そのものに潤いを誘う。

人と人とのコミュニケーション、情報社会にあって、このような感情の起伏は千変万化する、行動への現れを示唆する。

感情の刺激が激化すればする程、他と衝突も起り情動化する。即ち喜怒哀楽の情も激しくなる。

数多くのクオリアも、これにともなって、人の情調を動かす。従って人は感情に支配されるとも言われ、感情の動物でもある。

この感情のコントロールが、大脳の前頭前野で示す理性的な知の働きで、このコントロールによって一人の人間も、人間社会も激しい揺れから普段の日常性をとりもどす。

感情の激化は、感情支配の動物、即ち感情に左右されやすい。環境を作り人の表にも現れる。たゞ先程のように激化は、やがて平常さに帰結する。その作用が人類には、コントローラーとして英知をもつ。

理性化、知の働き作用は、他の動物達とは違う所である。考えること科学することも、育み得る。

思考を思考する思惟作用も、人間には欠くことの出来ない存在だ。

発明、諸発見から科学の芽生と、自然世界に対する挑戦のまなざしは、クオリアから助成され、やがて脳内の細胞へと進展する。

過去の科学体験を踏み越えて、新しい技術へと飛躍を重ねる。これは現代科学の最先端についても言える事で、幾多の実験の失敗もあろう。

その積み重ねがふとした事から、新しい技術への開発に、連続することもあり得る。

実験に実験を重ね、思惟する働きはクオリアの媒体ともなり、質感の時めきを助長させる事にも連なると、言っても過言ではない。

感情の激化は同時にニュアンスは異なるにせよ、前述のような結果を育む。

これは人間の生に関係する意識によって、多方面的な

質感クオリアの生成と進展は、人を感情豊かに、また情緒安定、不安定にもする。

人の志向性は種々の時めきと場によって異質を生む。

人が感動の波紋を広げ、波紋が帰着し、一つの焦点に集まった時に、確かな感情作動となって大きなうねりと、吸収されていく。

人は感情を踏えて前述の如く、大きく左右される。その根幹に人知れずクオリアの存在を認識することは論をまたない。

6. 心の状態

私達は常日頃、心の状態について思い描いた事なと、まったく無い状態にあるが、前述の心の時めきによって感情を意識することは、時にはありえる。

日々の日常生活を懐古するに、感動に身を揺すぶられるような時の心の状態は、凡そ常時感ずるものではあり得ない。

それ故意識して感ずる事もないが、そんな状況下に遭遇した場合は、心の叫びを感ずる。

思いがけなく偉大な芸術作品、戯曲、舞楽、詩歌、演劇（舞台芸術）等々、また最新の科学技術センターの機器実験、学術講演など、日頃耳目に触れ得ない物事に直接遭遇した時など、心のときめきを感ずる。

感動に心がはずみ、時に激しく揺さぶりすら感ずる。かゝる驚きの境地を体験することは、心の状態の現れである。

感動が感動を呼ぶこと自体、前述のクオリアの発動で、心の状態が如何に脳内細胞と、関係しているかが露顕される。

この場合厳密には茂木博士は、意識と心を識別して、前者は「私によって、はっきり把握される様々な表象の世界を指し、心は無意識をも含めた精神の働き」を指すように扱っている。

たゞ意識されるものは、言い換えれば、主観的な体験をもつが、後者の場合、例えば、科学領域に解き及ぶ場合、客観的な法則に支配されて来る。

広範にまたがるも、この論理がすべてとは言い難い。なぜならば両者の知の働きに当って、不測の領域が介在する。

所詮、心の分野も無意識とは言え、精神の働きを無視することは出来ないと言う。

こゝに意識も心の精神分野の一部にすぎないと言うことから、両者を同一視する傾向もないではないと言える。

心の状態も、意識する働きを欠いて考察は出来ない。即ち内的な存在、感情、情緒の分野をもつ意識のクオリアは、心の状態を解するに不可欠と言ってよい。

識別困難な意識作用と、心の働き共に精神的状況下に

あって、クオリアの発端となる情調は、前述の感動を呼ぶ。

芸術的作品で、他の心を揺さぶる事物に遭遇した時の心の高ぶりは、何ものにも変えがたい作用となって現われる。

その該当事物を捉える心の働きは千変万化する。印象の一隅において感動の焦点を集め極めつくす。作家の心に肉迫する魂の一部となって、衝動を専らにする。汲めども尽きぬ泉のような存在として、クオリアを感ずる。これは同時に心の状態を垣間見るに等しいと見てよい。

私達の自然環境にも、そんな力が散見する。四季豊かな味わいを私達は意識し、主観的な体験を通して様々に変様もする。

心の働きはその時の環境因子によっても、また知覚する作用によって様々に変様する。ある学者は、情報科学の立場から心の状態を、コンピューター即ち、記号を計算する機械と、メタフィジカル(形而上学)の意に解している。

精神科学、心理学的な領域から現代科学へと、導入の輪を広げれば、心も記号で現すことにもなる。

たゞ記号、計算と機械化しても「心は心である」とする、精神面も、依然として形而上学的な論理を、無視することは出来ない。

心の表現に当って、かゝる両様の作用は今日において

も、肯定的な論理に包まれる。瞬間的な美意識もかゝる情調の中に生起し、クオリアの働きで、意識を再興させる。

即ち、心が心である働きを定義する困難さは、前にも述べたが、かゝる思惟は情報科学が極度に発達した、形而下学をもってしても、心の状態を左右することは出来ない。

心が情緒深く踏み込めば、精神面の形而上的な作用が強く反応する。その反面、自然科学的な数の計算論理に傾けば、前記のように形而下学の対象となる。

こゝにも陰翳の美学が、心をめぐって考察される。

古来からアリストテレス的な思考も踏まえ、中世のスコラ哲学的な精神面を宿し、そして近世のルネッサンス文明の脚光を浴びて、欧洲文化圏に流れ込む。

その過程には、幾多の葛藤があって毎度、改革、革命の血潮を流した。

現代文明の開発に、科学的な思惟を示し記号化による、エポックを生むことになった。これも歴史的な推移を踏えた、たゆみない人類の心の働きが、あったればこその功であろう。

このような心の状態は、一見概括的に捉えようとするが、人の細胞内の現象まで解析することは、今日の医療でも解し得ない。

心が心の状態を示す場合、主客の体験を調べるが、内

在的な実験にウエイトを置けば、主観的な実験が、脳内の現象として起り得る。

前述のように、情質の異なるクオリアの働きで、脳内細胞を刺激し、意識の覚醒をはかる。こゝに及んで、心の状態を容易につかむ事が可能となる。

このような心的な現象は、情報工学以前の段階で脳と心の存在が、様々な心の状態を、つくり出すことにもなる。

反面、人間的な余りに人間的な、事象の生きかえりとして、今日風に言えば、感知器、検知器、所謂、センサー、音、光、温度、形などを感知して電子的に信号を発する、装置へと導入される。

輝を帯びることも、心の状態をつかむ働として、見のがすことの出来ない、方法とも言える。

前述のように両方面の探究が、今日要求されるのも、事こまかな存在と言えよう。

7. 感情移入と科学

凡そ、心理的な美学で言う感情移入とは、対象や他人のうちに、自己の感情を投射し、それを対象固有のものと見る、構えを言う。

心理学でよく、「人間の表情や身ぶり、自然の景物、絵画、彫刻、楽器の音色などに接した時、その対象自体が言う、何らかの感情や情緒を表現していると、感じ理解する」

所謂、自己の感情や心的な情況を、対象に投影させる事と解してよい。

例えば或る絵画を鑑賞する時に、その絵画自体に自己の感情や情緒が、乗り移っている。所謂、投影される形と見る。

多感なクオリアによって、意識が豊富に輩出されゝればされる程、感情・情緒が蘇って来る。この感情移入は他でも同様なことが言える。

例えばロダンの「考える人」の彫塑にしても、自分の感情をその彫塑の中に投射して、その対象と自己との融合する事実を、はっきりと意識することが、感情移入の源と言える。

自分が対象物になりきること、融合する感情をもち得る心情の働き、即ちロダンの感情が、鑑賞する者をして、ロダンに没入することによって、ロダン的な心情と融合する意識を持つ。

心の働き思惟がロダンの彫塑を動かし、ロダン的な感情をはぐくむ。鑑賞はそこまでいって本来の真情を得ることが出来よう。

先程、ロダンに没入と言う言葉を使用したが、鑑賞者がロダンと一体となり、自分の感情即ち、ロダンの感情、逆も言えることで、この心境になって、感情移入が両者

間に行なわれる。

クオリアが意識をともなって思惟される。Auguste Rodin（1840～1917）の人となりについて触れてなかったが、それが彼の作品にも、大きく響くことになる。

彼は下級官吏の子として、パリに生まれ、十四才の時、プチット、エコール（国立デッサン学校、後の装飾美術学校）に入って、彫刻家を志すようになった。

一八五七年国立高等美術専門学校受験に三度失敗する。しかし不屈の精神力は、後の作品に大きく影響する。

父の退職で生活苦にあえぎ、種々の内職を行う。（一八六一年）、翌六二年姉の死に悲しみのあまり修道院に入る。

神父エマールの説得で、再び制作に戻る。「鼻のつぶれた男」、サロン一八六四年の審査で落選する。

この頃から生活の為、建築装飾の仕事に手を出して行く。一八七〇年プロイセン仏戦争に召集され、除隊後、ベルギーのブリュッセルにて装飾の職人として、一八七四年各地を回る。

一八七五年、イタリアの芸術活動に大きな意味をもつことになる。同年ブリュッセルに帰り、「アダム」と「青銅時代」の制作に着手。

一八七八年、パリのサロンに「青銅時代」を出品する。真実に迫る写実に、疑惑の批評を浴びた程、精緻な作であった。

この頃からフランス中世の、聖堂めぐりに入った。一八八〇年前記の「青銅時代」が、三等賞に輝き、国家買上げとなった。

美術局次官チュルケから、装飾美術館入口の装飾作品を、依頼された。その大作の動機となったのが、ダンテの「神曲、地獄編」からヒントを得て、「地獄の門」の制作であった。

彼の名声の中心となった作品は、「地獄の門」の中にある。「考える人」「アダムとイブ」、更に一八八四年に「カレーの市民」の単独作品であった。

彫塑に内面的な深さと、生命の強い表現性が、絶頂に達したと言ってもよい。

一八九一年に文芸家協会長ゾラから、「バルザック像」（一八九八年完成）の委嘱も受け、多彩に勢力的な活動が始まった。

そしてイタリアのルネッサンスや、中世仏国の彫刻に、大きな感化を受けた。成熟、円熟、後に壮大な芸術心と技量を誘う彫刻に、生命の息吹と感情を注ぎ込んだ。

絵画の印象派と共に近代彫刻に、大きな足跡を残すことになった。

世界にもごく少数の彼の作品、「考える人」の像「地獄の門」、「カレーの市民」等、我国で直接ロダンに感情移入出来る喜びを、かみ締めたい。

今、私達は心理学的な手法で、ロダンを科学することは、ロダンに新しい感情移入の効果を期待してよい。

凡そ情報科学の分野で、光ファイバー即ち、ソフトウエアのコンピューター解析、これは絵画分野で解明されている。

ダンテの神曲、地獄篇に、その波を遡っての考察は、科学する現況に託される。画期的な手法として、ロダン解明の手解きと見てよい。

更なる分析的な手法も、精神科学に頼らざるを得ないことは、ロダンの芸術の深淵をさぐるに、不可欠な事と思う。

ロダンの人柄を調査したのは、単に感情移入でなく、根幹を支配する科学することにあった。即ち、ロダンが十九世紀後半から、彫塑の世界で、写実に精力を極めたとはいえ、今の情報工学が、かくまで進歩するかは、予測だにしなかった事であろう。

今感情移入を支える科学部門は、それを実証する可能領域に入っている。たゞ精神科学の分野、クオリアの働く脳細胞の領域を、忘れてはならない。

実証分析こそが、また感情移入を促進する基となることを付け添えておきたい。

8．心を意識する時

感情移入、科学、心の状態など、脳神経分野のクオリアの働きに触れて来た。今また心を意識する時について、考察して見たい。

私達が心を意識する時に、クオリアの活動を創起する。一つ一つの質感が意識を形成し、その意識の現れを普通、心と用いられている。

もっとも、厳密には異なるであろうが、人間として覚醒する場合、心が支配的に表面に現れる。

よく感情が表面に浮かぶと言われる。喜怒哀楽を感ずる時は、精神作用として、何らかの意識を感じとる。

これは幾多のクオリアの作用で、精神的なよりどころは、心であり、私が意識することでもある。

私が今、色彩感覚で赤黄青の三色彩に触れる場合、心の感ずる所、赤は限りなく赤に、黄青もまた同様な色彩感覚をもって、心に感じ表現する。

即ち言語意識でもって、それを示唆することも出来る。

明るい色彩感覚は、普通晴れた日の朝方、魅力的に現われる。これは雨後の時間にも見られよう。

私達が意識をとらえ得る時は、視覚出来る状態にある時、感覚が人の心を時めかす。これは視覚に映るすべての物について言える。

その時の感情の高ぶりもまた同じで、ニューロンの活動が、その物を意識し感動を高め、次々に映る意識を追って結合化する。

これは単一のクオリアが、意識を媒介するものとして、

複数化することによって、より複雑な感性へ、高揚して行く。

人が心を意識する時は、今表現したより複雑な意識の深まりが、ニューロンに作用した時、心のときめきを感ずる。

その時それを、心的な作用といってよい。あの人は心優しい人とか、情が深い人とか言われる。私達の意識を育む、クオリアが情緒豊かに高まって見え、感性を動かす。

その時、心の働きを感ずる。人に対する愛着などスピリット、精神現象として愛を感じ、その対象者の心の中に、深く浸透して、自分の感情が対象者に融合する。

その時など、心を意識的に感じとることが出来る。一枚の芸術作品に共感する感情は、その根源には共感感情を生むクオリアがあって、意識昂揚の働きをになう。

とめどなく流れに、身をおく感性は、その流れにときめきを感ずる。

「うたかたは且つ消へかつ結びて久しく停まりたるためしなし、世の中に住む人も、また斯くの如し」

即ち、同じ環境に身を置き共通感情が、意識に昂揚する時のクオリアを確認した時に、共通の知の働きを育む。

他の芸術作品に感動を共通する時も、また同じ知の働き作用の過程と見てよい。人が心を意識する時は、自分と同じ感情をもって接する。

その感情を互いに意識し、姿や気持をもって接する時、これは心を引き合う環境である。

それで対人間、自然、芸術世界、情報工学の機器にせよ、いずれもが心を引き合う現象に、身を置くことの出来た場合心は、意識を介することになる。

従って心を意識するのも、このクオリアの情調あってのこと、心的な現象のすべてで、このクオリアの発動によって形成される。

単純に形而上学的な領域で、解析しようとする傾向も捨て難いが、脳内現象の働き、即ち、医療、形而下学に託することが多いことは、勿論であろう。

近年精神医学殊に外科部門開発は顕著で、脳神経外科分野や心臓外科手術等も、かつてのようにメスで切開するのでなく、レーザー光線を利用して、細部にカテーテル、バイパス手術によって短時間で処理する。

効果も機能的で、高い回復治療に当っても、リハビリによる機能回復も異なって、より数倍、いやもっと早期に、治療も可能となって来た。

早期発見、早期治療が叫ばれる。かくて、心の治療もそれを意識する時、このような治療効果を期待出来るまでに、進展して来た。

この先端技術に心を蘇生さす。その働きこそ人類の英知として、更なる躍進を期待したい。

9．心の心理的作用

脳内細胞ニューロンを、活性化に続いて心の心理的な作用を、考察の対象として見たい。

心の蘇生、心内組織の再活性化、これは人類の悲願でもあった。医療の急速な治療効果で、今までの論理を覆すことにもなった。

これへの挑戦は、人の手のすばらしい先端技術導入を、称えることは勿論である。今までなし得なかった心理的な部門を、ロボット開発に例をとって見たい。

人知の心理作用が、人間に変って役割効果を夢み実現させたのは、機械工学の分野であった。

中でも、半導体の細かな作業分野をこなしたのは、つい二十世紀後半に電子頭脳の開発が、半導体のミクロの世界に挑戦し得た。

そして実用化の方向に、インフラを傾けたのも、この分野であった。

思えばすばらしい機器も、ロボット開発から精密機械工業部門まで、かくも進展しようとは、思っても見なかった。

その領域を見事に成し遂げ、今やあらゆる日常生活分野で、利用されている機器は、半導体導入による技術革新にあった。

いやこれなしに現代生活は、不可能視されるまでに至った。人間の心を機械計器である、ロボットにさせることに成功した。

今、人間代行をロボットに、試そうとさえしている。人の心理的な作用をロボットに、感情移入させたかのような作用を見る。

例えばロボットにオーケストラの、部門的役割をになわせ、トランペット奏法も曲目を半導体にうめ込み、一役をになわせた。

各役割分担によって、それぞれのパートをになわせ、指導者のもと人間の奏法を、彼等ロボットに代行させ、演奏会をこなさせた。

喝采をあびたのも二年前の、名古屋での宇宙博であった。まさにロボットの人間代行時代に、入って来ている。

人類の計り知れない英知は、ここまで及んでいる。

動くロボットとして、一回転、二回転する人間も、成し得ない、床運動の新体操分野で、彼等ロボットは、無理なく熟し得る。

これは心の心理作用を、彼等ロボットに植え付けて、それを実際にやらせて見せる。

即ち、クオリアやニューロンの効果を、ロボット技術に生かしている。まさに人をロボットに置き換える、そこまで人知の挑戦がなされている。

今まで成し得なかった、心理的な精神科学分野も、こゝに来てハード分野からソフトウェアーの分野へ、こ

の言葉が使用され出したのは、半世紀前にもなろうとしている。

まさかこれまでに普及しようとは、当時としては誰が思ったであろうか。

激しく揺れ動く対国家間の宗教的対立、政治的な貧困さから、毎日数十人いや数百人の人が殺戮されている。

おろかさは、なんということか。この輝かしい形而下学の人的貢献に、資する事と、対比した時に、政治的、外交的な民族間の精神的貧困さは、見るにしのびない。

正に人間代行時代に、ふさわしい解決方法はないものか。かって哲学者カントは、世界永久平和を力説した。

思えば、かゝる理念を今一度、今日の情勢において、真剣に考えて見る必要がある。それは今の世界観的な問題であり、不可欠な事と思う。

人の心が多方面的に作用する今日、我々としても単一な人間の心理作用だけでなく、複数のクオリアが、ロボットにも求められる。

たゞ人の脳内細胞の働きを、そのまゝ移行すること、これは今日の技術をしても完全とは言えない。

勿論より近い形として表現は可能になっている。色彩感覚にともなって物的な価値観を、ロボットと共有するまでに近いとは、言うけれども、如何にコンピューターの進化解析があろうと、今現在では無理と思われる。

たゞ今後、どこまでこれを縮めて行けるかゞ問題である。未来科学に託するより他は、ないと思われる。

現状分析が、新しい作用を生む時は、必ず反作用もあり得る。私達が科学する思惟に立って、物を見感ずる時には、心も自ずと前向に開示されると思う。

心の心理作用も、人間内の現象にとどまっている内は、それの効果をもつ。それが、外的な現象をともなうことになれば、それを操る人のクオリアによる意識の、構造も当然問題となる。

単なる意識の偏在ではすまされない事も、予測しなければならない。多くの問題を立証することも、考えられる。

人間心理の謎も不可解な点も、研ぎ澄まされた神経細胞を分析する、幾多の問題点をはらみながら進んでいる。

今の医療制度にも政策面、診療病棟、診療医師にも、また日本経済の動向を探って行くと、自ずと限界があるように思われる。

今病棟で最高の治療をしていたゞく患者も、十年後、二十年後には、家庭にもどされる危機を孕んでいる。

高令化社会に対処の方策を、深刻に考える時が来ている。医療の危機感を聞き及んではいるが、かくまで切迫しているとは想像もしていない。

今の私達にも看護医療の分野に、人間代行をするロボットは、考えられないだろうか。

心の心理作用を思う時、今私達になし得ることは何か。

深刻に受けとめなければならない。

音の世界にしても、単純な一つの音だけでなく、シンコペーション所謂、音の結びつきによって強弱が、転換する曲に変化を与える。

例えば他にシンセサイザーを使用して、音を合成し作り出す。電子装置、電子音等による心理作用も、時によって人の心的な作用を、呼び起す響ととってもよい。

つゞく

社　告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇－〇－六四五九二

加入者名　まんじ

口紅（その九）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉
（趙家の人々）
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
（江家の人々）
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
（趙耀根と江暁歌の友人）
寧岸
（趙耀根の会社の同僚）
張喜
（趙耀根の会社の上司）
李主任
張書記
（江暁歌の会社の同僚）
羅桂香
（趙耀根と江暁歌の娘）
嘉児
（寧岸が配属された紅光工場の従業員）
呉文彗（後に寧岸と結婚）
（江暁鴎の恋人）
黎美娟
（趙耀根が深圳で出会った友人）
宗漢（後に江暁歌が作った会社の専務となる）
（未来文化会社の女性社長）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）

第十五章　唐燕影

（一）

江暁歌が放送大学の教室を出ると、寧岸にばったり会った。彼女は寧岸と久しぶりに会ったので、嬉しさが込み上げてきた。彼女は寧岸に話したいことが沢山あった。彼女は、

「あなた一人だけなの」

と笑いながら寧岸に訊ねた。

「文彗も来ているよ。彼女が向かいのレストランに席を取っているので、君を呼んでこいって」

「久しぶりに会ったんだから、食事でもしましょうよ。俗っぽい言い方かしら？でも、食事をするのなら私が御馳走するわ。そうでなければ食事がのどを通らないわ」

「わかったよ。君が御馳走したいのなら、そうしてもらおうかなあ。僕達は君とお喋りしたかっただけだよ。暁鴎の話によると、君達は最近喧嘩したそうじゃないか。本当かい？」

江暁歌は、首を横に振った。否定したのか、それともため息をついたのか、はっきりわからなかった。

彼女はふいに、寧岸に言いたかった話がひとことも言えずにいることに気がついた。彼女は、夫婦間のことに寧岸を巻き込みたくなかった。彼女は、夫がずっと、寧岸に密かに嫉妬を抱いていることを知っていた。それは決して親友同士の妨げにならなかったけれど、夫が微妙に敵対心をごかましていることが感じ取れた。年を取るにつれて、江暁歌は自分が慎重に行動しなければならないことに気づき、寧岸と距離を置かなければならなかった。それはとても悲しいことだったが、そうせざるを得なかった。幸い今は、呉文彗という女性がいてくれるので安心だと思った。

「なんなら、僕が耀根と話をするよ。僕なら彼も耳を貸すと思うな」

江暁歌は、

「だめよ」

と彼の考えを打ち消した。

「あなたは、彼と話をしてはいけないわ。趙耀根はビジネスもとてもうまくいっているから、これも彼のうぬぼれを助長することになっているわ。今彼と話をするのは得策じゃないわ」

「耀根が一番大変なときに、君がどうやって彼のために黙々と尽くしてきたかを話をするよ。だめかい？」

「だめよ。絶対言ってはいけないわ。何の意味もないわ。彼が私に報いるために、彼自身が嫌な思いをしてほしくないの。それに、夫婦間の感情は他人に頼ってつなぎ止めることはできないし、お互いの理解と気持ちをもう一度呼び起こさなければいけないわ」

寧岸は自転車を押しながら、二人で肩と肩を並べて学校を出て行った。

趙耀根は車を放送大学近くの道の傍らに停めた。今日はビジネスがうまくいったので、彼はいい気分だった。江暁歌を迎えに行ってドライブをしたかった。それに、妻と沢山話をしたかったからだ。彼は、本当は昔のことを恋しく思っていたし、夫婦関係をかつての互いに尊敬し合う状態に戻したかった。彼は煙草に火をつけて、静かに校門を見ていた。一群の放送大学の学生が、押し合いへし合いどっと出てきて、彼方此方に散っていった後で、彼は江暁歌と寧岸が肩を並べて、ゆっくりそぞろ歩きをするのを目の当たりにした。

彼らは、木陰で覆われた歩道に沿って、随分と長い間歩いて、また自転車を止めて、言葉を交わしていた。江暁歌は泣いているようでもあり、寧岸が、こともあろうにハンカチを渡していた・・・・。

煙草をもみ消した趙耀根の目には、激しい怒りの炎が燃え上がった。

（二）

「お母さん、広州の深圳に用事ができたので数日行って来るよ。家のことは大目に見てください。それに嘉児の面倒もお願いします。暁歌はやけになっているんだ。お母さんは知らんぷりをして、暁歌のことを放っておけばいいんだ。喧嘩をして体にさわっちゃいけないよ」

「私は暁歌と喧嘩なんかするつもりはないよ。彼女はとっても恐いからね。お前も暁歌にビクビクしているじゃないか。彼女の性格がこんなに強情だとは、本当に昔は考えもしなかったよ」

趙耀根は、

「僕がいなかったとき、寧岸はいつも家に来ていたかい」

と母親に突然謎めいたことを尋ねた。

母親は、

「よく来たよ。暁歌が引っ越しした後も、彼は来ていたし、引っ越し先に行って、暁歌と嘉児のご機嫌を取っていたよ。いったいどうしたんだい？お前、何かあったのかい」

と言った。

「別にないよ。寧岸は僕の良き弟分さ。僕はただ、寧岸がどのようにお母さん達のことを世話をしてくれたのかを知りたかっただけさ。僕は彼にしっかり報いなければいけないんだ」

「寧岸の面倒ぶりは徹底していたよ。彼は全力で面倒を見てくれたんだ。将来彼が結婚したら、お前は彼のために、必ずお祝いをしなくちゃね。でも、彼は耀珍を馬鹿にしたんだ。それに、彼が暁歌に入れ込みすぎるといつも思っていたよ」

「入れ込みすぎるって、何なんだい？」

「例えば、二人で練炭を買いに行って、一人が三輪車に乗って一人が押すとか、一人がもう一人のために汗を拭いてやるとかだよ。実際、家には耀珍と耀虎の力持ちがいるんだ。暁歌が声をかけてくれれば、あの子達が手伝いに行けないことはないんだけどね。お前が帰ってくる前に、私は暁歌と嘉児に家に帰ってくるように言ったんだがね。独身寮で、寧岸が暁歌と親しくうち解けて、テーブルいっぱいの料理を作っていたよ。暁歌の顔の血色がよくてつやつやしている様子は、家じゃ見かけなかったよ。お前の気持ちが不愉快にならないように、今言った話は言わなかったんだ。それに、私は彼が一人前の大人であると思っているし、彼を理解しているからね。彼も行き過ぎた行動をとらないと思っているよ」

「そうだよ。お母さん、そんなこと考えちゃだめだよ。寧岸のことは、暁歌が僕に言ったことがあったよ。別に何ともないからって」

趙耀根は何にもないと言っていたが、心の中は、火に油を注ぐが如く、メラメラと燃え上がり、直ぐに妻の襟首を捕まえてはっきりと詰問してやりたかった。

趙耀根は車を走らせて、江暁歌の職場まで行き、必死になって彼女の事務所を探した。江暁歌は丁度没頭して何かを書いていたが、夫を見ると、頭をもたげて、

「座って」

と淡々と言っただけでまた仕事に没頭した。

彼は、この女がいったい何を考えているのかわからなかった。彼は、彼女を事務デスクの前から力一杯引きずり出し、彼女に「気取った態度で仕事をする様子を見せるな」と言いたかった。彼には金が沢山あり、その金を以てすれば、彼女に数生涯分の裕福な暮らしをさせることができた。それらの金を前にしては、どんな仕事も放送大学も意味がなかった。彼にはこの女がとてもプライドが高いことがわかっていた。彼は本当なら、直ぐにでもこの女を力一杯引っ張って家に連れ帰りたかった。そして家に閉じこめて、彼女に自分のために子供を産ませたかった。しかし、実際にはどうすることもできなかった。彼は本当にムシャクシャした。彼は、

「急用で広州と深圳に行かなければならない。十日かもしれないし、半月かもしれない。旅立つまでにまだ時間がある。君が何か言いたい話があるかどうか聞きたいんだ」

と冷ややかに言った。

「どうか、お身体をお大事に。お気をつけて」

「たったそれだけか」

「あなたは、まだ私に何か言いたいの」

「暁鴎が、僕のところから離れるらしいけど、君は知っているのか」

「知っているわ。彼は気ままでルーズな人だから、単独でやるのが好きなんじゃない。でも、弟はあなたと別れる前に、きっとあなたのために、耀虎をてなづけるんじゃない」

「僕は君より、彼のことをもっとわかっているよ。彼は僕と財産や地位を分かち合うよりも、むしろ僕と艱難を共にしたいんだ。彼は君達江家の中で、際だって優れた人物さ」

「そのとおりよ。彼はとても優れているわ」

「でも、彼一人が単独でやるには危険がある。君はもっと、彼に関心を持つべきだよ。僕は久しく寧岸を見ていないが、彼は元気かい？」

「彼は元気よ。でも、彼の工場の生産状況は決して良くないわ」

「彼にガールフレンドがいるのなら、何故いつまでたっても結婚しないんだ。彼は立派な好男子なのに、何故聾唖者なんかを見つけたんだ」

「呉文彗は聾唖者なんかじゃないわ。彼女の聴力は素晴らしいわ。教養もあるし、とっても優しくて善良な人だわ」

「僕は忙しすぎたんだ。彼らとつきあっている時間がなかった。最近君は、寧岸と会ったことがあるのか？」

趙耀根の語気が意味深げだったので、江暁歌は思わず警戒した。彼女は、彼の発する言葉の中に罠が仕掛けられているように思えたので、余計なことを言わずに控えめに答えた。

「会ったことがないわ」

「会ったことがないって？」

江暁歌は、彼の聞き方が変だと思った。

「あなたはいったい、何を知りたいの？」

趙耀根の顔色が重苦しくなっていった。

「僕は、君が会ったことがないと言うと思ったよ。でも会っていないのならいいさ」

言い終わると、彼は立ち上がってその場を離れた。江暁歌はポカンとして、彼が車に乗り込むのを見ていた。彼は服飾工場の正面の広々とした場所で、車をサッとUターンし走り去っていった。

（二）

趙耀根は深圳で、中外貿易商談会に参加する準備をしていた。

江暁鴎は、この商談会の会議に関わる仕事を責任を持って当たるように命令を受けた。これは、彼が義兄のために する最後の仕事となった。彼は新機軸を打ち出して、商談会の開幕式を外国のバイキングパーティ方式にするように提案した。音楽や、美味しいお酒や、豊富な中国や西洋のバイキング料理、それに綺麗な女の子達を取り

揃えて、みんなの心を潤すものだ。趙耀根は、バイキングパーティ方式についてこれまで聞いたことがなかったが、江暁鴎の報告を聞いて、本能的にこの新しい提案が斬新的であると感じ、直ぐに彼の意見を喜んで受け入れた。

意見を受け入れた後で、趙耀根は少し疑念を抱いた。少なくとも会議を開いたからには、指導者に発言の機会を与えなければいけないと思ったので、

「正式な会議を開かないのか」

と訊ねた。

「僕が頼んだ女の子は皆教養があり、外国語のわかる交際に熟練した女の子だから、僕達の意向とプロジェクトは、祝宴が賑やかに進行している最中に、彼女達から、会議に出席した顧客に伝えるよ」

「よくも、こんな方法を考えついたなあ。でも、厳粛に会が進行するのか？女の子達の応対で、僕達が必要なもの手に入れることができるのだろうか？」

「趙社長、あなたは正統派です。このバイキングパーティは、厳粛なものではありません。それに、このバイキングパーティは、私達が考えついたものではありませんが、外国の多くの企業は、この種のパーティを催しています。効果は相当なものですよ。女の子の件については、私に考えがあります。先ず、彼女達と手短な話し合いをしておいて、彼女達の働きに応じて、手当を与えることを確認します。彼女達は、金をもらえば仕事に張り合いが出て、必死になって顧客を口説くでしょう」

「暁鴎、暁鴎、お前は進歩したなあ。お前は、このやり方をどこから学んだんだ。いいよ、君に任せるから、思うようにやってくれ。女の子も君が招請してくれ。僕は彼女達とやり取りするのが苦手だから」

江暁鴎は、義兄が平素から好色ではなく、とりわけ社交場の女の子と話をすることが好きではないことを知っていた。

江暁鴎は、

「でも、少なくとも趙社長自ら、パーティの女司会者の唐さんと契約のサインをしなければなりません」

とニコニコして言った。

「君がサインをすればいいさ」

「あなたは法人の代表です。あなたがサインしてこそ契約は有効なのですよ」

「正規の女司会者でもあるまいし、僕と彼女が契約書にサインしなければならないのかい」

「この女性はしっかりしていますよ。未来文化会社の社長ですよ。それに趙社長、あなたは女性が真面目であるかどうかをいちいち考えてはいけません。これは仕事であり商売ですよ。この女性はあなたが雇い入れて、金を稼ぐ手段であり、二人の間には雇用関係があるだけです。あなたはパーティ会場で、たまに彼女のために一杯

酒をついで、時には彼女と腕を組んでくれさせすれば、それでいいんですよ。彼女には、あなたが紳士の風格を見せてくれるだけでいいんですから」

「わかったよ。僕がサインするよ」

趙社長は、

「僕は、君に担がれたよ」

と首を縦に振って笑った。

誰がこの話が予言どおりになると知っていたであろうか。誰も知り得なかった。

趙耀根は、唐燕影という船に乗ってしまった。

(四)

唐燕影との初対面の日、趙耀根は江暁鴎の教えを受けながらスーツに着替えた。

趙耀根は、普段からスーツを着るのが好きではなかった。形式張ったスーツが嫌いで、ネクタイを締めると呼吸ができなくなり、フォーマルな臭いが人を堅苦しい雰囲気に変えさせた。しかし公式の場では、スーツが流行っていた。彼もその場に応じて着るよりほかなかった。

趙耀根は、決して、唐燕影という女との対面を重視していたわけではなかった。唐燕影との契約以外に、彼は多くの仕事を抱えていた。彼女と会ったら適当にあしらえばいいと考えていた。江暁鴎は彼らの契約時間が、その日の十時というスケジュールを組んでいた。九時五十八分になっても、趙耀根は、『第三の波』という売れている雑誌に、まだ夢中になっていた。

江暁鴎が大きく開け放した入り口に立って二度ノックすると、やっと本から目を離して、多少困惑気味に、義弟である経営部の支配人を見た。彼は、江暁鴎の後ろに、スリムな体つきの華やかで、美しい女性が立っているのを見ると、やっとこれが唐燕影であることにハッと気づいた。

江暁鴎は、

「唐燕影さんがお見えになりました」

とことさら恭しさを装って言った。

唐燕影は、

「ヘイ」

と鷹揚に趙耀根を見て挨拶をした。

趙耀根は、

「こんにちは、唐さん」

と手を差し出して彼女と握手を交わした。

趙耀根は、うわべは素知らぬ風だった。これは彼が人と接する時の作戦でもあった。時には無関心を装い、相手をさほど重要視していないことをほのめかし、それによって、ある種の相手を抑圧する効果を狙ったものだった。しかし、唐燕影は公益の舞台に長けており、趙耀根の取るに足りないやり口に対して気にも留めず、ゆったりと彼の目の前に腰掛けた。

江暁鴎は気を利かせて、そっと席を立った。唐燕影は、一九四〇年代のハリウッドの女優のような、気取った優美で上品な態度で、金メッキのシガレットケースを開けると、その中から一本のタバコを取り出した。趙耀根は、それがブラックモア（タバコの銘柄）だと見分けがついた。唐燕影は、

「吸って良いですか」

と趙耀根を見ながら言った。趙耀根は、

「どうぞ」

と反感の気持ちを精一杯覆い隠して言った。

唐燕影は、タバコをくわえ体を揺り動かしながら趙耀根を見ていた。趙耀根は彼女の意図を理解できず、彼女のために、タバコに火をつけなければいけないと思わなかった。彼は本来、このような教育を受けてこなかったし、そんな考えもなかったので、唐燕影を不審に思いながら対座するしかなかった。

暫くして唐燕影は、彼が自分のためにタバコに火をつける気がないことがわかると、自分で火をつけて、深く一口吸ってから、ゆっくりと煙を吐き出して、初めて静かに言った。

「これが、私が深圳で、自分のためにタバコに火をつけた最初よ」

趙耀根は、これでやっと、唐燕影が何故自分と対峙しているのかわかったが、彼は顔色ひとつ変えなかった。

彼は腕時計を見て、冷ややか表情で、

「唐さん、私は僅かな時間しかないのです。江支配人があなたのために用意した契約書を、あなたは既にご覧になったでしょう。もし異議がなければ、私達は契約を交わしましょう」

と言った。

「異議があります」

「どうぞ、お話しください」

唐燕影は、

「もし女の子達が、このプロジェクトを成功に導いたなら、彼女達の手当は五%でなければなりません。一%であってはならないのです」

と重々しい口調で言った。

「我々の交易会は一大プロジェクトですよ。一%で十分高額ですよ。しかもそれ相応の参加費を払っていますよ」

「参加費をもらうのは私たちの慣例です。手当とは関係がありませんわ。趙社長のプロジェクトは大きいので、私達の手当も、プロジェクトに見合って高くしてもらわなくてはなりません。私達の女の子は、かなりランクが高いのです。すべての女の子は、若くて美しく、歌も踊りも優れていて、お酒も飲めるし、外国語も理解できますよ。彼女達の仕事には、最大限の代価を支払っても良

江暁鴎は作り笑いを浮かべて、彼女の目の前に現れた。
彼女は、
「江支配人、あなたがこのような商機を与えてくださって感謝するわ。それにしても、まるで田舎っぺだわ。土着の匪賊だわ、強盗よ」
と前後の見境なく怒った。

（五）

趙耀根は、
「お前はどうして、このような売春女を探してきたんだ」
と言った。
「唐燕影はそんな女ではありません。彼女はダンサー出身ですよ。今は劇団に所属いないで、自分で文化会社を経営しているのです。彼女の会社の信用と評判は、深圳では相当なものですよ。彼女の配下の女の子は、私も太鼓判を押す勇気はありませんが、唐燕影は芸能生活で生計を立てて、売春行為をしないで有名になったんですよ」
「どうであれ、この種の女は怖すぎる。彼女はこともあろうに、僕にタバコの火をつけさせようとしたんだ」
「これは彼女のせいではありませんよ。先進国では、男性が女性に煙草をつけています。耀根兄貴、あなたは

いかもしれませんわ。私はあくまでも五%を主張します」
「一%です。百万のプロジェクトで初めて、一万を受け取ることができます。パーティーに出る女の子が、こんなに沢山のお金を受け取る例はないですよ。それに、パーティーごときに、あなたがこのような高額な要求をすることがないじゃないですか。一%で納得していただけないのなら、この話はなかったことにしましょう」
趙耀根は契約書に、さらさらっと自分の名前をサインした。そして、
「申し訳ございません。時間が参りました。お先に失礼します。あなたはここで、よく考えてくださってもかまいませんよ。私があなたのサインを強要することはできませんからね。私は、あなたがこのプロジェクトをやってくださらないのなら、深圳には、やってみたいという人が沢山いることを信じていますよ。それに、私の会社は、これまで女性を起用したことはございませんが、相変わらず隆盛を極めていますよ」
と言うと、プイッとして立ち去った。
唐燕影は彼の後ろ姿に向かって、
「話にならないわ。全く不当だわ。横暴すぎるわ。私はサインしないわよ。断固としてサインするものですか」
と大声で叫んだ。彼女は、
「私達は最高のコンパニオンよ」
と続けてわめいた。

いつだって、男性上位で、女は生まれつき男に服従すべきで、値段の駆け引きなんてできないと思っているのでしょう。でも、値段の駆け引きをして元本割れを起こしたくないのでしょう」
「わかったよ。ほかの会社を探そう。華やかで、実を伴わないのはできるだけやめよう」
「彼女は既にサインしましたよ」
趙耀根はびっくりした。
「彼女がサインしたって？一%の儲けで！」
江暁鴎は、
「一%ですよ。彼女に対する嫌悪感は、何とかならないのですか？彼女と一回ぐらいしっかり協力してくれませんか？彼女はパーティーで、紫色の絹ビロードの袖のないチャイナドレスを着ると言っていましたので、あなたのスーツは、濃い色でなくてはなりません。革靴と靴下は黒で統一しましょう」
とニコニコしながら言った。趙耀根は、
「畜生め」
と言った。
「一%で、彼女は意外にもサインしたのか」
唐燕影は居直って、契約書にサインした。彼女のこれまでの性格からして、彼女は、絶対にサインするはずがなかった。彼女の商売は順調で、会社は健全経営であり、得意先は彼女をひいきにしており、彼女の稼いだお金は、

彼女が後半生を裕福に送るのを保証するのに十分であった。本来、彼女が契約を放棄すれば、それで終わりになるのが常だった。しかし、どうしたことか、まるで物の怪にでもとりつかれたかのように、意外にも趙耀根の名前の後ろに自分の名前をサインしたのだった。
彼女は、趙耀根を気に入ったのだ。

（六）

始まりは愛と無縁である。唐燕影はただ、趙耀根の剛直で、気骨がある性格に震え上がり、趙耀根の純粋な資質に畏敬の念を抱いた。商売をやって来たここ数年で、彼女は、このような顧客と出会うことができるのは容易でないことを知った。全ては縁のなせる技だった。彼女は商売をしなくてもよかった。しかし、縁を大切にしないわけにはいかなかった。
ワンルームマンションの小さなベッドに横たわって、のり付けしてあるパリッとした清潔な白いシーツを噛みながら、趙耀根の容貌が、初めて彼女の頭の中で躍動し始めた。この世の中に、趙耀根という名の人間がいた。江暁鴎のような輩は、男とは言えなかったし、唐燕影が知り合い、付き合ってきた多くの男も、男と言えるものではなかった。世界を照らす日差しがあり、いくら明るい光があったとしても、趙耀根と比べれば、非常に見劣

りするに違いない。

趙耀根の引き締まった精悍な顔をこれ以上考えてはいけない。趙耀根のスーツで包まれたはち切れんばかりの体を思ってはいけない。趙耀根の決断力があり、力強い声をこれ以上思い出してはいけない。これ以上考えると、病気になって発狂してしまいそうだと彼女は思った。彼女は、決してこのような男を逃すわけにはいかないと思った。彼女は水も飲まず、食事も取らず、間が抜けたようにぼうっとして、ベッドに横たわり一日中眠った。

夜明けが訪れると、彼女はもっこり体を起こして、ベッドから這い出し、パーティーの支度に取りかかり始めた。

彼女は、このパーティーのために全力を傾けた。

趙耀根と唐燕影は、パーティの奥まった所から出てきた。

パーティーには、照明がキラキラ輝く中、きちんとした身なりの人達が沢山集まっている。スーツを着こなし、革靴を履いた立派な男達が一堂に会し、ひそひそ会話を交わしていた。彼らの間を、美しい女の子が自由に行ったり来たりしていた。壁には、派手な彫刻を施し、色彩の濃い油絵が飾ってあった。

ワインがグラスに注がれ始めた。銀色にきらめくフォークとスプーンがキンキン、カンカンと音を立て始めている。趙耀根は少し不器用にグラスを持ち、パーティーに出席した客人達とうなずいて会釈をしながら心の中で思った。此奴らは、ヨーロッパの十八世紀から十九世紀の上流社会のやり口じゃないか。趙耀根は、図体が大きく頑強な男だが、彼もバルザックやユーゴーを読んだことがあったし、トルストイやプーシキンも読んだことがあった。

農村に下放（注22）された知識青年の、あの退屈で仕方のない日々の中で、趙耀根はいつも、寧岸の枕元でこれらの本を探した。

（注22は、文化大革命期において毛沢東の指導により行われた思想政策。青年層が地方の農村で働き、肉体労働を通じて思想改造をしながら社会主義国家建設に協力することをその目的としたが、この下放によって、多くの青年層が教育の機会を失い、中国の教育システムならびに学問は崩壊し、下放を受けた世代は無学歴・低学歴という状況が顕在化した。また、これによって経済発展が大きく停滞したことは言うまでもない。）

本は一般的に、頭が痛くなるような難解で長ったらしい文と、長々とした人名で、構成されていた。もし農村に身を置いていなかったら、趙耀根はこれらの作家に出会わなかったろう。本を沢山読んで、趙耀根は次第に一つの法則を見つけた。これらの本は、難解で頭が痛くなるような長たらしい文であるにもかかわらず、嫌々ながらも思い切って三～四頁読みさえすれば、その後はすらすらと読んでいくことができ、その上読めば読むほど味わいがあり、やみつきになって、やめようと思ってもやめられなくなってしまった。でなければ、何故これらの本を名著と呼ぶことができるだろうか。名著は、何と朗々とすらすらと読むことができるではないか。

趙耀根の非常に限られた十八世紀から十九世紀のヨーロッパの上流社会の知識は、これらの名著からきたものだった。彼は、これがただ資産階級の堕落した生活スタイルであり、プロレタリアートによって軽蔑されるゴミのような存在であることを知っているだけだった。しかし、心の中ではとても羨ましく、憧れていた。ただこれまで、口に出して言わないに過ぎなかった。

今突然、この事実と向き合い、彼はほとんど夢の中にいるではないかと疑った。それらは、知らないようで知っている、はるか遠いようで近くのことでもあった。

彼は少し、おどおど、びくびくしていた。バイキング式パーティーでの人々の振る舞いにより、資産階級のレッテルを貼られるのではないかと思った。ここはなんといっても、社会主義だった。彼は身に余るもてなしや待遇を受けてびっくりした。いずれにせよ、天の神様は彼に協力し、いずれにせよ、現実は彼に味方し、彼は報われたのだった。彼のような貧しい輩が、遂に苦しい生活を脱して、幸せを掴んだのだ。本の中と夢の中でしか、贅沢で格調高く暮らすことができなかった。自分の使っている言葉は間違いなく、この事実はいうまでもなく、幸せな生活そのものだったのだ。

彼が横目で唐燕影をちらりと見ると、彼女と視線が合った。唐燕影は彼に美しくにっこり微笑んだ。唐燕影は、今日はとても美しく、気高く風格があり、艶やかで、彼女自身が上流社会の貴婦人であった。

舞姫（ダンサー）である彼女のスタイルは、真っ直ぐでしゃんとしていた。紫色のチャイナドレスは、彼女のボディラインを巧みに浮き上がらせ、細い腰はしなやかで、片手でまわせるほどだった。趙耀根は思わずドキッとしたが、彼女がこのパーティーの女性のホスト役であると、ハッと悟った。彼女をパーティーのホスト役として見なして良いのではないかと思った。彼は自然と、彼女の細い腰をしっかり引き寄せていた。

（七）

パーティーが終わると、ホテルのスイートルームに趙耀根は横たわり先ほどのパーティで唐燕影の細い腰に手を回した時の感触を思い出していた。彼女は、確かに感触が良かった。唐燕影の腰は柔らかく、きめ細やかでなめらかだった。明らかに、江暁歌のそれとは異なっていた。趙耀根は、彼女の腰に手を回しただけなのに、恍惚の境地に陥った。もしも本当に、唐燕影をきつく胸の中で抱きしめたならば、彼女の体の味わいは、いったいど

んなだろうかと思った。

唐燕影の接客態度はとても素晴らしかった。宴会場いっぱいの来賓に向かって、心にゆとりを持ち、気配りも行き届き、応対も的を得ていて、言葉も適切で、彼女の一挙手一投足が多くの顧客の注意を引きつけた。とりわけ、彼女がマイクロフォンを前にして、きびきびとグラスを叩いてみんなを静粛にさせ、ホスト役として、パーティの挨拶をしたときの彼女のまばゆい輝きは、多くの人を魅了した。

パーティーは、彼女のお陰で大成功を収めた。

趙耀根は、彼女と少し平等性に欠ける契約を結んだことを後悔した。彼女が、五%受け取ることは勿論多すぎたが、二%のもうけを与えることは、仁義や道理にかなっていると言うべきだった。趙耀根は、彼女へのもてなしが十分でないと思った。大の大人として、か弱い彼女を虐めたことで申し訳ない気持ちでいっぱいになった。それで何らかの方法で、彼女のしてくれたことに見合う埋め合わせをしたかった。

埋め合わせの機会は直ぐに訪れた。一週間後、唐燕影が会社にお金の精算に来た。財務部で手続きを済ませた後で、彼女は一気に十八階まで駆け上がり、社長執務室を探した。この一週間は、唐燕影にとって言いたいことも言えずに過ごした時間でもあった。時間は短かったが気が焦っていて、相手をしっかりと掴めなかった。功を急ぐあまりかえって目的を達成することができずに、時間は長引き、意欲は次第に希薄になっていった。たとえ再会しても親しみが薄れ、隔たりが生まれるようにも思えた。しかし、一週間たった頃が一番いい時で、もし本当に縁があったならば、何か手応えがあるはずだと思った。

案の定、秘書が未来会社の唐社長が来社したことを告げると、趙耀根はソファから立ち上がり、続けざまに、どうぞどうぞと言って、もう少しでテーブルのコーヒーをひっくり返すところだった。

彼の気持ちが高ぶっていることは、誰に聞かなくても、自明の理だった。

この日、唐燕影は服装を替えていた。彼女は、見てくれは軽装だったが、実際には、彼女のセンスが光ったものだった。彼女の髪はムースでしっかりと撫でつけられていて、頭の後ろで、髪を巧みに結い上げて、彼女のなめらかできれいな額とあか抜けた顔が際だち、頭脳明晰で実行力に富み、きびきびしているように見えた。スポーツウェアを着こなし、ブランド品だがデザインはシンプルで、他の誰よりも抜きんでたスタイルは、光り輝いていた。彼女は舞踏学院の大学生のようでもあったが、更に女として、深みのある味わいがあった。彼女が秘書に連れられて、清純な好感度満点のイメージで趙耀根の執務室に入ってきた時、趙耀根の濃い眉毛の下の深い瞳

がにわかに輝き、彼女は、

「オー」

と思わず声を上げている趙耀根が目に留まった。

唐燕影は、自分の異色な装いが趙耀根に必ず「オー」と言わせることがわかっていた。この「オー」という声を出させることは、正にはかりごとをめぐらせて目的を達成するためのものだった。

彼女は、いささか無邪気な笑顔を浮かべ、爽やかな声で、

「ヘイ、趙社長、こんにちは」

と言った。

「唐ちゃん、こんにちは」

趙耀根の心は少し曖昧で、はっきりしなかったので、そわそわしているようにも見えた。慌てて言葉も選ばずに、彼女のことを唐さんではなく、唐ちゃんと呼んだ。趙耀根は、今日のような出で立ちの唐燕影には、唐さんより唐ちゃんと呼ぶ方がふさわしいと思った。

趙耀根の目の中で、唐燕影は、一筋の澄み切った底まで見える池の水であり、キラキラと瞬く陽光や水中のやんちゃな魚が、水の底の艶やかな美しい石に、仲むつましく寄り添っているのを見ているようであった。

趙耀根は、女の子のこの澄み切った底まで見える感覚が好きで、彼は、このような女の子と付き合いたいと願っていた。

趙耀根は、

「唐ちゃん」

と言った。

「君は、僕をハッとさせたよ」

「これが、私の本来の顔だわ。いつもは、芝居を打っていたのよ。あなたは、そんな私を好きになれるかしら」

趙耀根は、

「好きだよ」

と生真面目に言った。

「とっても、好きさ」

趙耀根の様子から、彼が女性関係において、たいした経験や見識を持っておらず、このような男こそ愛すべきであり、あっと言う間に自分のものになるだろうと唐燕影は思った。

今彼女は、ちょっとした企みを考えていて、趙耀根は罠にはまって行った。彼女は密かに笑いながら、表面は益々無邪気に装うと、艶めかしく愛情たっぷりに、

「深圳という町で何とか暮らしていこうとすると、一日中、厚化粧をしなくてはいけないから、窒息死しそうだわ」

と言った。そして、

「趙社長が、私のことを気に入ってくれたんだから、私はもう化粧をしなくていいかしら」

と続けて話しかけた。趙耀根は、

唐燕影が頭を上げると、顔中涙が光っていた。趙耀根は、焦り怖れた。彼が一番怖れているのは、女の流す涙だった。とりわけ、女達が訳もなく突然泣き始めるのをビクビクしていた。

「君は、いったいどうしたんだ。何か悲しいことでも思い出したのか」

唐燕影は、

「別に、何も」

と言って、一枚、ティッシュを取り出して涙を拭いた。

「私達は、女だから運が悪すぎるわ。私は小さい頃からダンスが好きだったの。大きくなったらダンサーになるために、厳寒の冬や酷暑の夏も練習に励み、苦労をしてやっと念願かない、舞踊学校に合格して歌舞団に配属されたの。私は新進気鋭のダンサーとして、主役の舞を射止めたわ。中央や省・市の指導者が公演を見に来るのに、私のプログラムは、なくてはならないものだったわ。歌舞団の仕事は順調満帆だったけど、一変してしまったの。以前は私達の公演を見たくて、チケットを並んで買ったり、裏取引をしたりして手に入れていたけど、今では、チケットをプレゼントしても、誰も見に来なくなってしまったわ。舞踊団は貧乏になり、潰れそうになって、素晴らしい人材が、次から次へと去っていったわ。私は逃げたくなかったんだけど、そこにいれば、死を待つより他なかったので、やむなく、みんなと一緒に南方へ下

「ダメ、ダメ」

と笑いながら言った。

「何事も極端すぎるのはよくない。みんなが言うように、ナチュラルメークが一番いいんだ。しかし、薄化粧にした方がいいんじゃないかな」

「趙社長、あなたは、本当に知識が豊かだわ」

「僕のどこが、知識が豊かだって言うんだい？僕は教養のある人間と一緒に過ごしてきただけで、朱に交われば赤くなるようなもんさ。それに時には古めかしい言葉が口をついて出てくるんだ。唐ちゃん、君こそ、容姿端麗で、聡明だし、得難い人材だよ」

唐燕影は、

「私達、どうしてこんなにおだて合うのかしら」

と笑って言った。

趙耀根も笑った。笑うと、彼らの間の雰囲気が打ち解け始め、伸びやかな気持ちになった。趙耀根は、

「僕は小さい頃から横暴で、今回の僕達のあの契約は不平等で、君に損をさせてしまい申し訳なかった。僕はどうして、君に埋め合わせをすればいいんだろか？」

と正直に謝った。

唐燕影は深々と趙耀根を見たが、黙って頭を次第に低くしていった。趙耀根は不思議に思い、頭を下げて彼女の耳元に近づき、親しみを込めて尋ねた。

「どうしたんだい」

ったの」

「君の選択は、正しかったよ。後悔することはないよ」

「私は、後悔していないわ。ただ、本当に大変だったの。私のような女が、芸能関係のような仕事をして、贅沢三昧の暮らしをしている町に来て、何ができるって言うの。たとえ正規な事業をしたくても、下心のある男達が事業をやらせてくれると思うの？私はこの土地に来て、まもなく一年になろうとしているわ。先ず舞踊学校を作りたかったわ。舞踊学校が開けなかったので、モダンダンスをやったの。でも、ダメだったわ。世間の奴らに、バーやナイトクラブ、居酒屋のようなところに、無理矢理追いやられたのよ。こんなところに、いい男も、いい女もいないわ。そこでは人格も尊厳もないわ。私達は最も下劣な人間よ。乞食以下だわ。夢と現実の差が大きすぎたのよ。私の夢は舞踊芸術家になることだったのに」

「君はまだ若いんだ。まだ努力すれば、君の夢を実現できるさ」

「口で言うほど生やさしいもんじゃないわ。ここには、芸術を重んじる人なんていないわ。助平な男達の目には、美しい女は、何を意味しているかわかる？どうせ、二つのものにしか見られていないわ。金と肉体よ。でもね、趙社長、あなただけは例外よ。ちっぽけな商売のために、れっきとした社長が、私の方を向いてくれたわ。芸で身

を立てる女に謝り、その上、私のために埋め合わせをしたいと言ってくれるなんて、私がどんなに感謝しているかわかるかしら。あなたの私への尊敬が、一番の私への埋め合わせだわ」

趙耀根は、彼女にいたく感動した。彼は、少しも、彼女の真心に疑念を抱くことなく、彼女が言っていることは、すべて心の底から発している本当の話であると信じた。彼は、彼女の苦労は、並大抵な苦労ではなかったと思った。彼女は、汚水の流れているようなところで苦しんだが、劣悪な環境にいながら、それに染まらない蓮の花のように努力して、心の中の純潔を保とうとし、自分の理想を堅持して、人間として最も美しく、最も大切なものを持っていた。このような女は、今時珍しいと思った。趙耀根の中に、知らず知らずのうちに、彼女を愛おしむ気持ちが芽生えた。成功を手にした男として、趙耀根は、自分の強靱な両肩で彼女を包み込み、もう決して、涙で顔を濡らし、屈辱を受けなくても済むように、そして、二度と孤独感を味合わせまいと心に誓った。趙耀根は、彼女の面倒を見ても良いと思った。これは、彼女の夢を実現することも含まれていた。

男の強靱さは、男の弱点でもあり、この弱点が命取りとなる。

ひとたび結ばれれば、彼女との関係が進展していくことは、容易なことだった。人は金さえあれば、ほしいま

まに振る舞って、相手と付き合う機会を新たに作り出すことが出来、テニスをしたり、ボーリングをしたり、バーで時間を潰したり、海水浴に行ったり、保養地で過ごしたりと・・・これらの遊びは、ヨーロッパの資産階級の遊びであり、昔は、やりたくても、やる勇気がなかった。

趙耀根と唐燕影は、一つ一つ試してみた。彼らが一番熱を入れたのは、もの静かな場所を見つけて。とりとめもなく話をすることだった。彼らの話題は豊富で、同郷だったので、いつまでも話は尽きなかった。故郷のことを話してみて、彼らはこの世の狭さを実感した。彼らの住んでいるところが、意外と近いことがわかった。なんと二、三町しか離れていたに過ぎなかった。その町の伝統や言い伝えがわかっていたし、そこの町だけに知られている顔役を知っていた。であるから、益々親近感を覚えた。

ある日遂に、唐燕影は、趙耀根に彼女の会社を見に来てもらうように頼んだ。彼女の会社は、実際には小さなコーヒーショップで、その店の外に小さな舞台があった。唐燕影は、趙耀根を連れて、彼方此方と見て回り、その後で、ブラジルをご馳走し、彼女の配下にいた女の子達の踊りを見せた。夜の更ける十二時頃になるまで、話し込んでいたが、唐燕影は、突然立ち上がった。彼が疑念を抱いて見ていると、唐燕影が舞台に現れた。彼女は舞台用の衣装を着ていたので、自分で踊るつもりだったらしい。

スポットライトの下で、更に輝く瞳と美しい歯は、趙耀根の目を釘付けにし、敬慕の念を抱かした。唐燕影の踊りは、伝統的な紅色のつむぎの舞で、趙耀根は、この踊りのことを聞くまでもなく知っていた。この舞は、きっと、彼女がかつて歌舞団に所属していた時のレパートリーだったにちがいない。唐燕影は、慣れた手つきで、紅色のつむぎのドレスを振ったが、小さな舞台の上では、赤く光り、彩られた雲のように舞い上がり、唐燕影は、まるで蝶のように、ぐるぐると舞台いっぱいに踊り、しなやかに、そしてたおやかに舞を踊ることが出来る趙飛燕(**注23**)に、引けを取らなかった。

(**注23**は、中国、前漢末期の皇帝である成帝の皇后。卑賤の生まれから身をおこして陽阿主に仕え、そこで歌舞を習得し、偶然陽阿主の家を訪れた成帝の目に留まって妹とともに後宮入りし、ついには皇后となった。)

道理で、彼女の夢が、舞踊芸術家になることであると言ったのも当然であった。唐燕影は、舞台で踊っていたが、二つの瞳は、ずっと、愛情たっぷりな思わせぶりで、趙耀根を見ていて、彼のために踊っていることを知らせているようであった。趙耀根の心も、彼女の眼光につれて、揺れ動き、それと共に、舞台いっぱいに舞う紅色の紬が、ひらひらと揺れ動いた。彼は何かが起こりそうな

予感がした。彼は期待をし、ためらいもした。

一瞬、江暁歌の顔が彼の目の間に突然現れた。しかし、彼はそれ以上考えようとしなかった。

今宵は彼の予想通り、唐燕影といい仲になっていった。江暁鴎は全てを見ていた。彼は、自分のあまりの愚かさと敵を内部に引き入れて、災いを招いたことを恨んだが、反面、趙耀根の行為になすすべもなかった。趙耀根は、今は金回りも良く、鼻息も荒く、お山の大将と化してしまい、誰の話にも耳を貸さず、誰も彼をコントロールできなかった。江暁鴎は故郷に帰って、どのように姉に弁解をしたらよいのか、嘉児にどのように接したらよいのかわからなかった。

彼は、一日中気持ちが落ち着かず、居酒屋に行って酒で憂さを晴らした。彼は趙耀根から離れる事を決心した。彼は居酒屋で、偶然宗漢と出くわし、彼とよしみを結んだ。

第十六章　離婚

(一)

呉文彗は、大きな赤い招待状を江暁歌に渡した。江暁歌は、

「あなた方、結婚するのね。遂に結婚するのね」

とお祝いの言葉をのべた。

呉文彗は、恥ずかしそうに頷いた。結婚相手の寧岸は、

「来週の水曜日は文彗の誕生日で、それに大安吉日なんだ」

と言った。

「良かったじゃない。文彗、私達、今からお店をぶらつかない。あなたにネックレスとウェディングドレスをプレゼントしたいわ。それに、あなたにメークをしてあげたいの。あなたを世界で、一番きれいな花嫁さんにしたいの。私は・・・・」

寧岸は笑って江暁歌の話を遮ると、

「君は、何をしたいんだい。でも、僕達のために無茶をしちゃだめだよ。いいかい」

と言った。江暁歌は、

「わかったわ、わかったって。私は、私は、あなた方は、質素な結婚式を挙げたいということを知っているわ。でもね、ウェディングドレスは、文彗のために絶対私に買わせてね。私がデザインするわ。私には、文彗がどんなウェディングドレスが良いかわかるの。耀根が家にいてくれたらいいのにね。昔、あなたが、私のために婚礼の一切を取り仕切ってくれたように、あなた達のためにお世話したいと耀根とずっと考えていたのよ」

と言った。そして、江暁歌は続けて、

「友達としてお世話するのは、これも結婚の記念よ」

と感極まって言った。

一つの話が当時の思い出を呼び起こし、寧岸と江暁歌は、少し心が塞いだ。

寧岸と呉文彗の婚礼には、二人の素晴らし人柄を慕って、親戚や友達が大勢駆けつけた。趙家、江家のほとんどの人が参列した。

江暁鴎は、

「寧岸、僕は君にえらく嫉妬しているんだ。こともあろうに、こんなに素晴らしい非の打ち所のない女の子を見つけ出したなんて、まるでビーナスのようだ。呉文彗、君には妹がいる?もしいたら、僕と結婚させてくれよ」

と大袈裟に呉文彗の手を引っ張って言った。

呉文彗は、ただ笑っているだけで、明月のように、白く光った清らかな輝きを江暁鴎に降り注いだ。

江暁暢の衣装は、ひときわ目立った。

江暁暢は、

「暁鴎、あなた、いつも口から出任せね。黎美娟が、夕方あなたをとっちめるから気をつけなさいよ」

と言った。それから、寧岸を見て

「寧先生、私は心から祝福申し上げるわ」

と気勢激しく言った。

寧岸は、彼女のとげとげしい言葉も意に介さず、礼儀正しく声を掛けた。

「有り難う」

「有り難うなんていう言葉、聞きたくないわ。私は、新婦の何処にあなたが一番心を揺さぶられたのかを聞きたいわ。それに恋愛の経緯もね」

「すべてさ」

「すべてですって。でも、私が見ているのは彼女の美貌だけよ。これ以外にまだ何かあるの?」

寧岸は、チラッと呉文彗をみた。呉文彗は、江暁暢の挑発を気にもとめなかった。ただ、小鳥がすがるように彼の傍に寄り添い、幸せそうに彼を見つめているその仕草は、大いに人を魅了した。

呉文彗の仕草は、江暁暢を怒らせ、更に難癖をつけたくなった。

この時、入り口でざわめきが起こった。人々が道を空けると、趙耀根が威風堂々と入ってきた。彼の後には、スーツをまとった張喜と趙耀虎が控えていた。趙耀虎は手に花束を持っていた。

寧岸ははっとしたが、直ぐさま感極まって、

「耀根、君はどうして来てくれたんだ。深圳にいたんじゃないのか?」

と言った。趙耀根は、

「飛行機があったのさ。他人の結婚ならいざ知らず、兄弟分の寧岸の披露宴だ。僕は何としても駆けつけなければならないよ」

と無頓着に答えた。寧岸は、

「耀根」

と感動して叫んだ。

二人は、固く手を握りあった。

趙耀根は美しく目の覚めるような箱を取り出して寧岸に渡した。

「ささやかなプレゼントだ。君への感謝の気持ちだ」

寧岸が美しい箱を開けると、一セットの腕時計が入っていた。その時計にはオメガのマークがあったので、直ぐに、これがスイスの有名な時計で、値段も相当高いことがわかった。

寧岸は固辞したかったが、そうすることは友人にも申し訳ないと思い、この美しいきらびやかな箱を呉文彗に渡すよりほかなかった。呉文彗は、オメガの時計だと知らなかったので、喜んで受け取った。

綺麗に着飾った趙嘉児(趙耀根と江暁歌の娘)が、二人の前に突然走り寄ってきて、新婦にとても大きな柔らかい毛で覆われた人形をプレゼントして、新郎新婦に気に入られようにと頬ずりをした。みんな、割れるような拍手を二人に送った。

大勢の人が歓談している中、張喜は、一本の赤いバラを趙耀珍にそっと渡した。みんな明るく笑って歓談していたが、江暁暢だけは気が塞いで、晴れ晴れしない様子で一人になって座っていた。彼女は寧岸を軽蔑した。趙耀根や江暁鴎に比べれば、寧岸なんて貧乏たらしくって時代遅れで、たとえ付き合ってくれと言われても、ごめん被りたかった。

腹が立ったことは、こんな人間が、江暁暢を振って、こともあろうに口もきけない人を嫁にもらったことである。江暁暢は、はらわたが煮えかえるほど怒っていた。

(二)

趙耀根はベッドに横になり、うたた寝をして江暁歌を待っていたが、江暁歌は、テーブルに向かって、夢中になって何か書いていた。趙耀根は遂に我慢できなくなった。

「君は何をしているんだ。僕は、随分と長い間出かけてきたんだ。夜になったというのに、君はこっちへ来ないのか」

江暁歌は驚いて、

「あなた、まだ寝ていなかったの。飲み過ぎて寝てしまったと思ったわ。眠っていないのならこれを見てくれない。あなたは経営者よ。私の相談相手になってよ」

と言った。

「何を見るんだ」

「私が職場のために書いた改革プランよ。明日、上司に会うんだけど、自信がないの」

趙耀根の顔にはかすかに嘲笑うかのような笑みが浮かんだ。

「一人の技術員が自分の専門に専念しないで、工場に出掛けてあの古株の上司の前で何を指図するんだ。国営企業をどうやって改革するって言うんだ。冗談だろう。君は益々冷静でなくなったね」

「私がどうして、冷静でないって言うの。冷静よ」

「中国の国営企業は、古くからの積もりつもった悪い風習が多すぎるし、それを改革するのは国がすることだ。君のような小娘が、口をはさむことなんてできないさ。君はやはり自分の職務に甘んじていたほうがいいよ。ほら、今日の婚礼での君の着こなしったら、いったい何なんだ。まるで田舎の婦人じゃないか。君に服を買いに行くお金を渡しただろう。君は、一日中、外をかけずり回って、家のことも子供のこともほったらかして、嘉児が病気になって点滴を打っても、おばあちゃんに付き添わせるのかい。よくもそんなことができたもんだな！」

彼は、江暁歌のプランをばしゃんとフロアに投げ捨てた。江暁歌は、大急ぎでプランを拾って、無意識のうちにほこりを払った。このプランは、彼女が長い時間をかけて心血を注いだものであったが、趙耀根はそのプランを歯牙にも掛けなかった。彼女は、暫く趙耀根を見ていたが、我慢できずに言った。

「私はいつもと変わらないわ。どうして、これも目障り、あれもダメだって言うの。あなたは歓楽街に出かけて行って、贅沢で享楽的な生活をし過ぎたんじゃないかしら。気をつけるべきだわ」

趙耀根は、

「僕に、何を気をつけろって言いたいんだ」

と荒っぽい口調で言った。

江暁歌は、もう何も言わなかった。彼女は、趙耀根の怒った顔を見て、心がもの悲しさでいっぱいになった。彼女に温もりのある暮らしはやって来たのだろうか？それとも、去ってしまったのだろうか？

（二）

寧岸に久しぶりに会い、江暁歌は驚いた。寧岸は髭を蓄え、やせ衰え、体によれよれでたぶたぶの古い服を引っかけて、落ちぶれて惨めな姿になっていた。

江暁歌は、

「いったいどうしたって言うの。大工場の工場長が、上司なのにどうして外見に気を配らないの」

と慌てて訊いた。寧岸は、

「工場長？何が工場長さ。工場長なんて嘘っぱちさ。もう工場長なんかじゃないよ」

と笑って言った。

江暁歌は驚いたが、多くを訊かなかった。手の中に持っていたものを置いて、彼にお茶を入れた。

寧岸は、

「君の部屋で話そう」

と無頓着に言って江暁歌の部屋に入って行った。

江暁歌は、彼の後について部屋に入った。

「文彗は、元気？」

「ああ、元気だよ。僕も彼女のように聾唖者になった方がいいよ。口が聞ければ話をしなければならないし、付き合わなければならないんだ。世の中の馬鹿野郎どもと一緒に生きていかなければならないんだ。とにかく、疲れたよ。それに世の中が嫌になったよ」

「いったい何があったの」

「工場が倒産したんだ」

「工場が倒産したって関係ないわ。あなたは学校に戻ればいいじゃない。あなたの本業は教師でしょう」

「僕は勿論、学校に戻らなければならないよ。僕を紅光工場に出向させたのは上の決定だ。僕の人民教師の身分は、決して変わらないし、教務主任の職務も保証されている。いま学校へ戻れば、一切が元のままのはずだ。それなのに、学校の馬鹿野郎どもは、何と僕を閑職に追い込んだんだ。僕は他の仕事はできないんだ。僕が教務主任をやれば、熟練しているから余裕を持って仕事をすることができるんだ。僕は彼らに抗議したよ。でも、彼らは口実を設けて、やれ改革だ、やれ合理的な組合を作るんだと言って、僕を選択科目グループに配属したり、明日は第三産業部門を担当させたり、学校の修理工場に配属させたり、これがいじめじゃなくて何なんだ」

江暁歌は彼を慰めるしかなかった。

「いま、どこでも混乱が起こっているわ。例えば私よ。やっと放送大学を卒業したのに、工場は近いうちに倒産するのよ。学んだことは少しも使いものにならないわ。一つの改革プランを作ったわ。みんなこの改革プランを支持してくれたわ。でも、工場の上司は面従腹背で、うわべは賛成するように見せかけて、実は陰で反対しているし、私への意地の悪い仕打ちが始まったわ。でも家で話をすることができないでいるの。なぜなら、耀根が私を制止することがあったからよ。彼の判断は正しかったけれど、聞く耳をもたないの。私は上司の嫌がらせで、生産現場に配属されたわ。さほど改革開放の意義も理解しないで騒ぎ立てて、人を吊し上げるような人達がいると私は思うわ。でも、きっと騒ぎは収まって、正常な状態に戻ると思うわ。だから、あなたも我慢しなくちゃ。人は一生ついていない、なんてことないわよ。いつかは大輪の花を咲かせることができるわ。あなたにも光り輝く時がやってくるわよ」

「わかったよ。頑張るよ。でも、いつまで頑張れば良い日がやってくるのかなあ。こんな世の中じゃ、確信が持てないよ」

「あなたは、どうして自棄を起こすようになってしまったの。少し挫折すると、もうダメになるの？私達、インテリのよくない癖を改めなければいけないわ。順調な時には得意満面で極めて傲慢だけれど、ちょっとでも挫折すると意気消沈して、まるで天が崩れたように思うのよ。考えてもみてよ。江暁鴎は耀根の元を離れて、単独で頑張っているわ。株の売買でお金を稼いでいるの。見てご覧なさいよ。江暁鴎はちゃんと仕事をしているでしょう」

この時趙耀根が帰ってきた。寧岸と江暁歌が自分の部屋の中に座って、しかも話が弾んでいるように見え、胸が締め付けられる思いになった。しかし、おくびにも出さずに平然としていた。

逆に寧岸は、

「忙しい人がやっと帰ってきたぞ。僕達は、ずいぶん長い間話をしていなかったよな」

と何食わぬ顔で言った。

趙耀根は、

「僕は確かに忙しいんだ。君は何か用事でもあるのか」

とわざと偉そうに言った。

「いや、僕達は話をしていただけだよ。僕達はうまくいっていないみたいだし、それにみんな元気じゃない。昔のようにお互いに励まし合った頃を思い出すよ」

「僕は、うまくいっていないことなんて特にないよ。百万元稼ごうと思っていたけど、九十万元手に入れただけさ」

寧岸は顔色を変えて言った。

「君のこの話は、他の兄弟たちに言ってはダメだ。何か自慢したいことでもあるんだろう」

「そんなことないさ。僕は本当のことを言ったまでだ。もし機嫌を損ねたなら許してくれ」

寧岸は、

「僕は、君が事業に成功したので、媚びに来たわけではないんだ。僕達は長年の親友じゃないか。僕はただ、君と江暁歌に会いに来て、話をしたかっただけなんだ」

と怒りを爆発させて言った。

「何もすることがない暇人ならいざ知らず、世間話なんてする時間なんてないぞ。ぺちゃくちゃ喋りたければ、口のきけるん女房をもらったらどうだ」

江暁歌は、夫のあまりに度を超した言い方に、呆れ返った。

「趙耀根、あなた黙りなさいよ。ご免なさい、寧岸。彼は私に言い掛かりをつけているのよ。あなたには関わりがないわ」

寧岸は、猛烈に怒って、

「趙耀根、君は僕を侮辱している。僕の妻も侮辱している。君は謝るべきだ」

と言った。

しかし、趙耀根は怒るでもなく、平然とした態度で、

「わかったよ。僕が謝るよ。悪かった。いいだろう」

と言った。寧岸は、

「この馬鹿野郎」

と身震いして言った。趙耀根は、

「君は、僕に毒づいているのか？」

と言った。寧岸は、

「僕が君をののしったからって、それがどうしたと言うんだ。君はまさしく大馬鹿野郎だよ。どうしてこんな風に変わってしまったんだ。こんな風になると知っていたなら、最初から君を監獄にぶち込んでおけばよかった」

と言った。趙耀根は、

「君は、僕が監獄に入っていたことを暴きたいのか。そして自分の功績をひけらかしたいのか。何が兄弟だ。親友だ！こんな話をするのが兄弟なのか、親友なのか。僕はどのみち、労働改造の刑罰を受けた犯罪者だ。しかし、労働改造の刑罰を受けたからこそ、自分が事業を成し遂げたんだ。僕は栄光と誇りを感じるよ」

と寧岸をさげすんで笑った。

「恥知らず」

「僕が恥知らずだって？僕は恥知らずだけど、一日中友達の女房のそばで、いちゃいちゃなんかしやしないさ」

寧岸はびっくりした。江暁歌も驚いた。まさか、趙耀根がこんなことを言うとは思わなかった。

趙耀根は、長い間言い出せずにいたことを話したので、痛快極まり声を出して笑った。

寧岸は烈火のごとく怒り、趙耀根に殴りかかった。

趙耀根の母親、それに趙耀珍、張喜が走ってきて、必死で二人の男を引き離した。

江暁歌はベッドに横たわり、頭を抱えて激しく泣き叫んだ。彼女は夕ご飯なのに、部屋から出てこなかった。彼女は趙家の人たちに会いたくなかったのだ。それに、趙耀根に対して恨み憤る気持ちが生まれた。彼女は、趙耀根がこんなに卑劣だったとは思いもよらなかった。もし趙耀根が昔の憧れの人だというなら、それは、すでに崩れ去っていた。

(四)

薄い壁を隔てて、趙家の人達の物音が聞こえてきた。彼らは家の中を行ったり来たりして、野菜を洗ったり料理を作ったり、ひそひそ話をしたりして、音を立てながら食事をしていた。ご飯を食べる時、趙耀珍は、かつては江暁歌に声をかけていた。しかし今は江暁歌に取り合わなかった。

江暁歌は姑が話をするのをかすかに聞き取った。

姑（趙耀根の母親）は、

「耀根は間違っていないよ。言いたいことがあるなら

言うべきさ。お前は、彼らがべたべたしているのを見たことがあるのかい？」

と言った。趙耀珍は、

「姉さんが石炭を買いに行くのを寧岸が助けたことだけよ。全ては過去のことよ。彼らの関係は、健全だわ」

と言った。

江暁歌は、趙耀珍にとても感謝した。彼ら趙家の中で、この小姑だけが心がきれいで透き通っていた。彼女達の間にも、曾て誤解が生じたことがあったが、ちゃんと話をしさえすれば、誤解も解けて元通りになる。

真夜中になって、趙耀根はやっと口に爪楊枝をくわえて部屋に入ってきた。彼は、遠回しに皮肉たっぷりに言った。

「今回は本当に意気消沈してどうしたんだ」

江暁歌が彼を相手にしないで見ていたので、彼は江暁歌の布団をわしづかみにして言った。

「僕のことを怒っているのか。冗談も言ってはいけないのか？」

江暁歌は、サッと振り向いて、

「あなた、これが冗談と言えるの？」

と言った。趙耀根も次第に険しい表情で、

「そうだよ。僕は冗談で言ってやしないよ。僕は君と寧岸がいちゃいちゃしているのを見ると、吐き気がするよ。僕は長い間耐えられなかったんだ」

と言った。

「趙耀根、あなたの良心は犬畜生に食べられてしまったわ。寧岸が私達の結婚を支援してくれてから今まで、彼にどれだけ義理を欠いてきたかしら」

「僕は彼に義理を欠いてきたが、でも、僕は努力して彼に報いたよ。彼にプレゼントした結婚祝いは、どのくらいの価値があると思っているんだ。彼の給料の十年分だぞ。それに、彼に子供が授かった時や新年や節句が来る度に、そして、彼の生活が困窮した時に、彼を助けるつもりだ。しかし僕は、彼と僕の妻が、いちゃいちゃするなんて我慢できないんだ」

「あなたの奥さんといちゃいちゃする人なんていないわよ」

「弁解しなくていいよ。僕は確かな証拠がなければ、いい加減なことは言わないさ。寧岸が、長年心を砕いて支援してくれたのは、本当は僕なのか、それとも君なのか？なぜなら、こうしたからこそ君に近づくことができたんじゃないのか。そして、君と家族のような親密な間柄になることができたんだ。君の心も明らかだろう」

「あなたはさもしい考えで人の心を邪推するのね。彼はあなたの親友よ。彼は私の前で健全だったわ」

「彼には、無責任なことを言ったりやったりする勇気なんてありっこないさ。彼が本当に勇気があるのなら敬服するよ。彼は君を気遣い、歓心を買おうとする勇気があるだけで、傍にいて手を触れて涙をぬぐったのさ。僕はこの曖昧なやり方に吐き気を催すんだ」

江暁歌は、怒りで身震いした。夫の面構えや凶悪で汚れた心に我慢できなくなった。

趙耀根は、

「悪いけど、ズバリ言ってやるよ」

と得意がって言った。

江暁歌は思い切って顔を壁にぶつけて、もうこれ以上彼を相手にしないことにした。しかし、趙耀根は彼女が自分に会わせる顔がないと思い、ますます臆面もなく、まくし立てて、もっともらしいことを言った。

「君はしっかり話し合いたいと言っていたじゃないか。今日僕は、君と話をしたいんだ。この数年来、僕は投獄されていたし、ふるさとを離れて事業を始めたので、君に苦労をかけたよ。僕は君に報いたいと、繰り返し言ったことがある。実際、もう既に君に報いているよ。君が苦労して功績を挙げたからと言って、いい気になるなよ。その上僕をだますなよ。僕に辱めを受けさせるようなことをして。僕が深圳から帰ってくる前に、お母さんが君を迎えに行って家に連れ帰ったことがあったそうだが、君と寧岸は、君のあの小さな住みかで、アツアツで食事を作り、差し向かいで飲んだり食べたりしていたって言うじゃないか。これは嘘かい？僕が投獄されていた時に、あのひねた好色家の李主任にどのようにして便宜を図ってもらったんだ。まだあるぞ。君はなぜかたくなに、僕のために男の子を産もうとしないんだ。君の本当の理由はいったい何なんだ。まだあるぞ、・・・・」

「十分だわ」

江暁歌は振り返って彼を見た。彼女の涙は、すでに怒りで乾ききってしまっていた。

「趙耀根、私は昔はあなたを愛していたわ。私達の生活を築いていくためなら、全てを投げ出しても良かったわ。私はあなたを尊敬し、時代の寵児であり、国家との橋渡しとなる人物だと思っていたわ。でも、今やっとわかったの。私の思い過ごしだったってね。あなたは男尊女卑の固まりで、女を軽蔑し、私の個人的な尊厳を無視してきたわ。あなたは私を信じていないし、理解していないし、信義に背き、友人を踏みにじったわ。私はあなたのために、いたずらに青春と愛情を費やしてしまったわ」

趙耀根は、

「僕は、君がとっくに僕への愛情がなくなっていることをわかっているよ」

とせせら笑った。江暁歌は。

「その通りよ。趙耀根、私の忍耐にも限度があるわ。あなたは、ざんざん私をバカにしたわ」

と怯まずに言った。

「君は僕をバカにしているじゃないか。僕が子供がも

う一人ほしいのは、自然なことじゃないか。僕が、女の道徳である女が従うべき三つの道と、守るべき四つの徳目を要求することは当たり前だ。君に言っておくが、僕は君を尊敬してこそ、何度も我慢し、君が改心するのを幾度となく待っていたんだ。僕が本当に子供がほしいと思うなら、それは簡単なことだ。多くの女が願っていることだからね」

「素晴らしい考えね。私はあなたの恥知らずの言動をこれ以上言葉で形容することは出来ないわ。私はあなたの夢を実現させてあげるわ。私達、離婚しましょうよ。あなたは、あなたの子供を産んでくれる女性を探してください」

趙耀根は烈火の如く怒った。

「そりゃ、渡りに船だ。クソッ、売女め！」

江暁歌は、突然趙耀根の両耳にビンタを食らわした。はっきりとした音が聞こえたので、ドアの外でこっそり聞いていた趙家の母親と趙耀珍は、ドアを突き破って押し入った。嘉児も大声で泣き叫んで来た。

江暁歌は、もう既に気が朦朧としてきた。彼女は、趙耀珍が彼女に差し伸べた手をかき分けて、突然趙家の玄関を飛び出して行った。

外は雨に煙っていた。江暁歌は雨の中を駆けて行ったので、体中ずぶ濡れになった。彼女は走りながら、今度こそ絶対に二度と趙家の玄関をくぐるものか、帰るものかと心で誓った。

弟の江暁鴎が、

「姉さん、結婚した頃のことを本当によく考えてください。姉さん達は多くの苦難があったけど、僕達はみんなで一緒に自転車を漕いで、姉さん達の新居に行って、飾り付けをしたじゃないですか。あの時の情景は、今でも、目の前に浮かんでくるようです。あの時はみんな心を一つにしていたじゃないですか」

と言うのを聞いて、江暁歌は思わず落ち込み悲しんだ。

「離婚することは別に大したことじゃないけど、姉さん達は勝手に離婚することはできないんですよ。僕は姉さん達のことをよくわかっている。もし耀根兄貴も離婚に同意するとしたら、それは間違っていると思うな。姉さん達は、将来きっと後悔すると思うよ」

「いいえ、私は後悔しないわ」

「僕が耀根兄貴にあって話をするよ」

「何を話すっていうの」

「僕は彼に真剣に考えさせたいんだ」

「彼が何て言おうと、私には関係ないわ。離婚は私が言い出したことよ」

「僕はやぱり、耀根兄貴に会って相談したいんだ」

「あなたが本当に話をしたいのなら、私は一向に構わないわ。あなたが私を助けて、嘉児を連れ戻してくれさ

えすればそれでいいの」

(五)

一艘の使われなくなった係留船が、長江べりに浮かんでいる。長江は昔のように流れ、アジサシは夕日の中で、透き通った翼を広げ、澄んだキラキラした波すれすれに、自由にぐるぐると旋回している。

江暁鴎と趙耀根は、係留船に腰を下ろして、長い間話をした。だが、話せば話すほど感傷的になっていった。

「本当に解決する余地はなくなってしまったのですか？」

「彼女はとてもきっぱりしているんだ。僕は何度も彼女に折り合いをつけたくないんだ」

「実際、耀根兄貴達よりも僕の方が二人の情況をわかっているし、実際兄貴達は互いに愛し合っているじゃないか。兄貴達の不運は、お互いの間に誤解を生じていることだよ。僕は、すべての誤解がゆっくりと解けていくと信じているよ」

「暁鴎、お前の暁歌に対する気持ちを僕はわかっているよ。僕達はお互いよくわかっているんだ。離婚して一番悲しむのは、お前だってことをわかっているよ」

江暁鴎は突然、涙で潤んだ目を押さえた。

「でも、彼女は傲慢で頑固なんだ。それにいつも姑をバカにしているんだ。僕の母親は苦労したんだ」

「そんなこと理由にならないよ。耀根兄貴には女がいるからじゃないですか？」

趙耀根は江暁鴎をじっと見つめ、その目つきから頭の切れる義弟をごまかすことが出来ないことがわかった。趙耀根は言葉を濁す他なかった。

「暁鴎、僕は君に頼みたいんだ。絶対に君の姉さんに、女がいる、なんて言ってほしくないんだ。兄貴である僕が君に言えることは、どんな女も暁歌にとって代わることはできないってことだ。僕達には青春時代があり、そこにはどの位の思い出があっただろうか。僕達には嘉児もいる。僕を信じてほしい。僕は離婚したくないんだが、彼女は離婚するときっぱり言い放っている。彼女には、僕があたかも彼女にしがみついて離したくないように見えるんだ。だから彼女は、あんな軽蔑した素振りをするんだ。この俺はれっきとした一人前の男なのに、なぜ恥をかかなければならないんだ」

「僕は本当に姉さんに合わせる顔がないよ」

「ごめん、暁鴎。君には関係ないことだ。君は、永遠に血を分けた義兄弟だ」

江暁鴎は涙を拭って広々と果てしない長江を眺めた。

趙耀根は江暁鴎の肩を抱きしめた。

（六）

江暁暢（江暁歌の妹）が女性秘書を振り切って、趙耀根の執務室に飛び込んでいった。

黎美娟（江暁鴎の恋人）が、ぴったりと彼女の後に付き添っていた。

趙耀根は頭を上げると、江暁暢を見て言った。

「君は礼儀を知らないのか。君が僕に会って何を話しても、問題は解決できないよ」

「礼儀知らずも甚だしいわ。あなたが私の姉にした仕打ちは、まるでごろつき行為だわ」

黎美娟は手で肩を抱えて、不遜な態度で彼らを見ていた。

趙耀根は振り返って、

「黎美娟さん、君達はこんな風に飛び込んで来て、いったい何をしようと言うんですか」

と彼女に言った。

「私は、江暁暢さんについて遊びに来ただけよ。何としても江暁暢は、うっぷんを晴らしたかったんでしょう」

江暁暢は、

「趙耀根、私達、率直に話をしましょうよ。こんなことになるんなら、最初から結婚しなければよかったのよ。私の姉を追いかける男は、沢山いたのよ。それなのにあなたは、姉さんが一番美しかった青春時代を独占したのよ。あなたが姉さんをダメにしたくせに、やましさも、恥ずかしさもないの？」

と言った。

「君は思い違いをしているんじゃないか？彼女は離婚したがっているんだ」

「勿論だわ。姉さんは先手を打って、離婚を言い出したのよ。でも実際は、あなたが離婚話を切り出したようなものだわ。数年前、あの苦難に満ちた頃、姉さんは離婚という言葉すら口にしなかったわ。今は生活が楽になったけど、離婚したがっているわ。彼女は気がおかしくなったのかしら？そんなことないわ。あなたが追いつめたのよ」

「わかったよ。君がこんな風に考えているのなら、僕も説明する必要もなくなったよ。問題はだな、これが君とどんな関係があるかだ」

「どんな関係ですって？私の姉はとても善良で誠実だわ。一家は離散し、子供は趙家に奪われて、姉さんの職場も倒産寸前だわ。彼女は何にすがって生きていったらいいの？」

「安心してくれ、僕は彼女に生活費を支払うよ」

「生活費だけで十分なの。青春を台無しにされた代償はどうなるの？慰謝料はどうなるのよ？彼女はあなたを監獄から救い出すために、深圳で事業を始めるのを支援するために、そして、子供を育てるために、あなたの家

族全員の面倒を見るために、どれだけ苦労したって言うの。まさか生活費を支払わないなんて言わないでしょうね。家政婦を雇ったら給料を支払ってよね。あなた、何しらばっくれてるのよ」

趙耀根は、

「わかったよ。結局、僕とかたをつけにきたんだろう。僕には、こんな計略があることはわかっていたんだ。どうして彼女自身が来ないんだ」

とせせら笑った。

「あんたを見ると吐き気がするからよ」

「趙社長、誤解してはいけないわ。暁歌姉さんは、お金に関するいかなる事も言ったことがないわ。暁歌姉さんは、趙社長の行為を見て、腹立たしく思ったんだと思います。勿論、私だって同じです。趙社長は、広東で富を築いたわ。だから広東のしきたりを知るべきだわ。男が女のために賠償しないなんて、上策とは言えないわ。人に笑われるわよ」

「僕が、広東の常識を知らないわけないだろう。いくら必要なのか言えよ」

いくら必要か言えと言われて、江暁暢は慌てた。

「あなたが言ってよ。どの位用意すべきか言いなさいよ」

「五万元」

江暁暢は、とてつもない金額を聞いてびっくりした。

しかし、黎美娟が動じないのを見ると、彼女も落ち着いて言った。

「たったの五万元なの？少な過ぎるわ。少なくとも、十万元だわ」

趙耀根は、

「帰ったら、江暁歌に言ってやれ。五万元だと！僕はこれまで、人と値段を掛け合ったことはないとね。申し訳ないがこれで失敬するよ」

と嫌みたっぷりに笑った。

彼は立ち上がると、出て行った。

趙耀根が立ち去るのを見ると、江暁暢は、彼の大きなデスクの前に腰を下ろし、豪華な回転椅子の雰囲気を楽しんだ。

黎美娟は、

「私は、あなたに言ったことがあるじゃない。彼はすごい男よ。あなたなんか相手にしていないわ」

と言った。江暁暢は、

「私は五万元というお金でさえも、想像がつかないわ。私は一生のうちに、五万元もの大金を手にすること何てできないわ。私の姉は、毎月たったの三十元給料を受け取るだけよ。五万元は、何の根拠があって言っているのかしら。私の姉の百年分の給料で、やっと三万六千元になるわ」

と言った。黎美娟は、

「世の中は動いているのよ。五万元、十万元の金が人が驚く金額でなくなるのに、数年もかからないかもしれないわ」

と比較的冷静だった。

（七）

江暁歌は、ついに趙耀根と離婚する日を迎えた。この日彼らは、役所の出先機関の中に入って腰を下ろし、民政部の幹部に自分の意見と要求を提出した。

江暁歌は、

「私はたった一つお願いがあります。娘は私が育てます。娘は生まれてこの方、ずっと私と暮らしてきました」

と言った。趙耀根は、

「私は同意しません。子供は彼女の手元にいたと聞いたかと思いますが、私は娘の側にいてあげられなかった時間を埋め合わせたいのです。娘のために私の責任を全うしたいのです」

と言った。

「いいえ、彼は会社を経営しています。娘と一緒に過ごす時間などありません。私は、私の子供を育てる権利を主張します」

「彼女には、娘を扶養する環境がありません。彼女は現在自分の住まいもなく、安定した仕事も収入もありません。私は既に調査済みです。彼女の勤務している工場は倒産に瀕しており、基本給を支払うことができるだけで、しかも長い間給料の支払いを維持することはできません。彼女は今、組合の合理化によって生産現場に回されています。その上生産現場では全く仕事がありません。これが彼女の職場の裏付けです」

町内会の幹部が、

「このような状況下にあるなら、あなたは彼女に一定の生活を補償する生活費を付与しなければなりません」

と口を挟んだ。

「勿論そのつもりです」

「そんな必要はありません。私は、自分自身とと子供の面倒を見ます」

町内会の幹部は、

「あなたは、何を頼りに生活を保証するって言うのですか」

と言った。

江暁歌には言う術がなかった。頭の良い趙耀根は、彼女に不意打ちを仕掛け、突き入る隙を与えなかった。

趙耀根は、

「嘉児を君について行かせて、苦労させてはいけない。君は会いたいときにいつでも子供に会いに来ることができる」

と語気に心を込めて言った。

町内会の幹部は、

「趙さんは、筋が通っていると思います。子供はお父さんに任せましょう。あなた方は、離婚するが、子供を巻き添えにしない方がいい」

と彼の発言に感動して言った。

江暁歌は、悲しくてやりきれなかったが、黙認するより他なかった。

「あなた方は、まだ何か要求したいことはありますか？」

江暁歌にはなにも言うことがなかった。首を横に振り、絶望的にペンを取ってサインした。

趙耀根は、江暁暢がお金を要求してきたのは江暁歌の入れ知恵だと思った。しかし、江暁歌はお金のことは一切言わなかった。

そこで彼は、

「生活費の問題については・・・・」

と言いかけた。江暁歌は、

「私は、何の生活費も要らないと言ったじゃない。私の生活は、あなたとは関係ないわ」

ときっぱり言い放った。

趙耀根は我慢できなくなり、町内会の幹部に言った。

「ダメだ。彼女の今後の生活の目処が立っていないのだから、国の不安定要因が増えるじゃないか。僕は、あなた方町内会の幹部に、彼女に五万元を受け取るよう説得してもらったんだ」

彼はその場で、手提げ鞄の中から五万元の現金を取り出した。

町内会の幹部はポカンとして、ただただ感心してため息をついた。

「こんな世の中にも善人はいるんだなあ」

江暁歌はお金を受け取るつもりなどなく、ペンを取って、離婚の協議書に自分のサインをした。

趙耀根も仕方なく、サインするしかなかった。

彼らは、肩を並べて町内会の事務所を出て、それぞれの道を帰っていった。江暁歌は振り返りもしなかったが、趙耀根は、堪えきれずに、車に乗る前に振り返った。彼の視線の届くところにある深い木陰が、次第に江暁歌の後ろ姿を包み込んでいった。

（八）

時がそっと音を立てることもなく一つの縁を描いて、江暁歌を独身に戻した。江暁歌は、また江暁暢と一緒に暮らし始めた。

江暁歌はベットに入ると、

「五万元もらっておけば良かったじゃない。あなた、なぜ断ったの」

と言った。

「あなた、なぜ五万元のことを知っているのよ」

「勿論知っているわ。私があなたのために要求したのよ。私は十万元要求したのに、趙耀根は五万元までだって言い張ったの」

江暁歌は泣くに泣けず、笑うに笑えなかった。

「暁暢、暁暢ったら、あなたはまったくの恥知らずね」

江暁暢はやりきれなくなり、ベットから跳び起きた。

「どうして私が恥知らずなの？私は、あなたのために良かれと思ってやったのよ。それに、私は一銭のお金も要らないわ。あなたがこんなに名誉欲や物欲にとらわれないで、孤高で傲慢なら、どうして一日三度の食事を取るのよ。相変わらず我が家に転がり込んできて、重なり合って狭い部屋で暮らさなきゃいけないのよ」

江暁暢の話はとても耳障りだったが、彼女の性格を知っていたので、聞こえない振りをするだけだった。江暁歌は私物をきれいに片付けてベットに横になると、疲れ切った心と体を回復するためにゆっくり寝ようと思った。

江暁歌は、この日から比較的安定した生活を送ることができると思った。

嘉児を恋しい他は、もうこれ以上何の心配もなかった。彼女は勉強してもよかったし、色々と考え事をしてもよかった。そして自分のこれまで歩んできた人生を反省し、英気を養い、力を蓄えて、運命の新しい挑戦を受け入れるつもりだった。

彼女はこれまで嫌と言うほど人生の辛酸をなめたが、彼女の心には依然として夢への炎が燃え上がっており、それが生きていく中で、彼女にチャンスを与えてくれるだろうと思った。

しかし、彼女は人生を運命付けられていたのか、やはり一箇所に落ち着くことができなかった。彼女は江暁暢との間に溝が生まれた。この数年の間に江暁暢は変わり、益々身勝手になっていた。江暁暢は、彼女の部屋を自分だけのプライベートルームにしてしまった。彼女はしばらくの間、姉が仮住まいするのを受け入れていたが、主人と客の区別をはっきりつけた。この頃、江暁暢は走馬燈のように男友達を換え、ほとんど毎日知らない男を部屋に連れ込んでドアを閉め、深夜まで話し込んでいた。客が来たときに江暁歌が勉強していると、彼女は少しも遠慮せずに自分のために部屋を明け渡すよう要求した。こんな時には、江暁歌は客間で彼女の客人が帰っていくのを待つしかなかった。

沈鳳宜は部屋でテレビを見ていたが、テレビのボリュームが大きいことがしょっちゅうだった。

江暁歌は、こんな時には町に行くより他に仕方なく、灯りがキラキラ光る大通りをあてもなくぶらつき、時には長江のほとりに行って暫く座っていた。彼女は勉強する術もなく、考える術もなく、一日中どうしたらよいのかわからずに妹の顔色を伺っていた。江暁歌が遭遇したあの不遇な暮らしに比べれば、江暁暢がもたらした煩わしさはたいしたことはなかった。しかし、江暁歌は他人のやっかいになる生活をこれ以上続けたくなかった。彼女は小娘ではなかった。彼女は自分の世界と尊厳を持たなければならなかった。そして、彼女は自分で自分の運命を切り拓いていかなければなかなかった。

（つづく）

祝出版

歯科医業の夜明け
大炬燧の火は燃ゆる

堀内　永人著

栄光出版社　1,200円＋税

地域のために献身的生涯を捧げた二人の創業者

透明な時間（十一）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

草食系銀行といわれた東城銀行と肉食系銀行といわれた西都銀行が合併して、東西銀行が生まれた。

もと東城の赤坂支店で西都出身の熊本支店長が殺された。現場は金庫室で、三つの扉に五つの鍵がかけられた密室であった。（金庫室の格子扉がシリンダー錠で、耐火扉がダイアル錠とシリンダー錠で、支店の通用口が数字錠とシリンダー錠で鍵がかけられていた。三つの鍵は死体の手に握られていた）融資係の竹森が支店長の死体と一緒に金庫室に閉じ込められていた。

通用口の鍵は、室内のサムターンとハンドルとが連動しており、その仕組みが密室に関係しているのでないか、と竹森は考えた。

また、殺害に使った凶器は重い踏み台でなく、金属バットでないかと竹森は思った。

十（続き）

凶器に金属バットを使ったとしたら、やはり計画的な犯行なのだろうか、竹森は疑問を感じた。

支店長と竹森が金庫室に入ったのは、たまたま稟議書を金庫室に入れたからである。もし稟議書をキャビネットに保管していれば、金庫室に入らなかった。

なぜ真犯人は殺人現場を密室にしたのだろうか、と竹森は疑問に感じた。

真犯人が竹森に殺人の罪を着せるためであろうと推理できる。密室の中に二人いて、一人が死んでいれば、残りの一人が犯人として当然に疑われる。

かりに真犯人が捕まっても、二人を閉じ込めた罪に問われるだけである。殺人を証明することは密室トリックを明かさなければならない。

いたずらで誰かが二人を金庫室に閉じ込めた。密室の

中で竹森がパニックにおちいって、支店長を殺した。

このようなストーリーを警察が描くと考えて、真犯人は計画したのかもしれない。

警察が真犯人のストーリーを信じているかどうかは分からない。信じていれば、竹森が逮捕される日も近い。

竹森の頭の中から事件のことが離れなかった。

昼食のとき、隣に座っていた冷泉が、竹森に話しかけた。話しかけるというよりも独り言を言っている。

「最近、沢木さんのミスが多いね」

冷泉は預金課長で、沢木雅子にとって上司になる。

事件当日の耐火扉の副鍵（死体が握った鍵）の保管者が、冷泉である。事件の当日に鍵を支店長に貸しただけであるから、関係がないと見られている。

しかし、事件の影響で、竹森は何ごとにも疑いを持つようになっていた。

格子扉の副鍵は預金主任が持っていた。預金主任は冷泉の部下であり、立場上は預かることができる。

通用口の鍵は一週間交代で当番になる。正鍵は役付き銀行員の輪番制で、冷泉も当番になったことがある。冷泉であれば三つの鍵の合鍵を作る機会があるのでないか、と竹森は考えた。

しかし、三つのシリンダー錠の合鍵はできないと言われている。合鍵の可能性については、警察の方でも徹底的に調べられて、存在しないという結論に達している。

仮に合鍵ができなくても、にせの鍵を作るなどでトリックができないかと竹森は考えていた。

預金課長は熊本支店長に相当の恨みを持つ立場である。預金係はミスなしで当たり前、一つでもミスがあれば、支店長に容赦なくののしられた。

預金の業務を女の仕事として見下していた熊本支店長は、預金課の男性行員を高い給料で生産性のない仕事をしていると口に出していた。

現金が一円たりなかったとき、見つけるまで、冷泉課長に水を入れたバケツを両手に持って立つように熊本支店長は命じた。その姿を見た女性行員が必死になって一円玉を探したので、二時間ほどで見つかった。

そのような仕打ちを受けたが、冷泉は残忍な犯行をすることは想像できない。

冷泉は草食系が多いといわれる旧東城銀行の中でも最も草食系の特徴が強い、おとなしい性格である。

もの静かで大声を出すこともなく、ふだんも聞き取れないような、か細い声で話す。腕も足も体全体が、いかにも折れそうなほど弱々しいのである。

草食系を通り越して、植物そのものの印象である。おかげで『植物人間』という、あだ名をつけられている。イナゴの佃煮が好きで『食虫植物』とも言われる。彼の前世は植物に違いないと竹森も思ったほどである。

冷泉から話しかけられ、竹森は事件と結び付けたが、

すぐに自分の推理を打ち消した。
「彼女は支店長の死体を見たので、やっぱり動揺しているんですよ」
そう答えた竹森であったが、彼女はそんなタイプでないなと内心で思った。
冷泉は表情をまったく変えないが、するどい観察眼を持っていると評判である。大学院を卒業して、二年目から十年以上、本部に勤務していた。赤坂支店に来る前、冷泉は旧東城銀行で行内誌担当をしていた。
かつての東城銀行は、かなりの予算をつけてカラー十数ページの豪華な行内誌を配布していた。
企画部に行内誌を作るだけの仕事をする銀行員が一人いて、この仕事に選ばれるのはエリートコースと言われた。会社のお金で北海道から九州まで旅行して遊んでいるとうらやましがられる存在であった。
もとの西都銀行では、行内誌のようなものは無く、人事異動通知に。新任役員のインタビュー記事が一件あるだけの行内誌であった。
竹森も東城銀行の行内誌を読んでいて、ずいぶんとプライベートの情報も載せて、お金をかけているなと感じていた。
行内誌には役職者以上の人事は載り、新入行員と退職者の名前だけでなく、退職者の転職先まで書かれていた。
死亡退職者には、「事故により死亡」または「病気による死亡」という表現である。自殺の場合は、飛込みは事故とされ、首つりの場合は病気とするらしかった。
合併に先立ち、行内誌は西都の方式に統一することになった。コストを減らすためには、当然の判断である。
冷泉は銀行内でのポジションを失った。本部行員の受け皿である赤坂支店に転勤してきた。
おとなしいが、正確に仕事をこなすし、何より植物人間だからセクハラはしない。女性行員の間では評判の良い上司であった。
「ミスが多いといっても、沢木さんの場合はリカバリーの能力がすごいから、問題は発生しないけど」
また独り言のように冷泉はつぶやいた。
雅子は自分で、おっちょこちょいで、ドジで、間抜けと言う。そんな性格としっかりした性格が同居している。仕事でもプライベートでもそうである。竹森と一緒のときも財布など忘れ物をする割には、何ごともなかったように対処する能力を持っている。
冷泉の言葉で、竹森は雅子の態度のよそよそしさを思い出した。第三者の目から見ても、雅子の態度がおかしいと感じているようだ。
殺人事件について雅子に何か秘密があるのでか、と竹森は思った。

《作者注：長編が行き詰まってきたので、短編を書きました》

鉄のペリカン

宅見勝弘

「パンツとズボンをひざの下までおろしてください」
高校生のような若い女性看護師が、ぼくに声をかけた。
「左の腰をベッドに着けて、足を折り曲げて、お尻を突き出してください」
女性看護師の右手には、ペリカンのくちばしが握られていた。そのペリカンは、食器のようなステンレス製、つまり鉄で作られているようだ。
女性看護師は、にこにこ笑いながら、くちばしをパカパカと開け閉めしている。
パンツをぬげといわれたが、ぼくの目の前には他にも女性が十人くらいもいる。
ぼくは二十四歳の銀行員である。いまは銀行が営業している時間である。といっても銀行の中でパンツをぬいだのではない。
銀行の近くの病院で、ぼくは健康診断を受けていたのである。診断の終わりに問診があった。
問診で何か体の調子の悪いところがあるかと尋ねられた。
このときは、仕事のストレスを感じると、お腹の下が痛くなると、正直に伝えた。
「念のため、なかをみましょうか」
問診をした医者がたずねた。
なかをみる、というのはファイバースコープという、ごく細いチューブを患部にさしこむのであろう、と思った。
「いえ。今日はけっこうです」
前もって準備していないので、ぼくは答えた。
「チャチャっとすみますから、念のため、みておきまし

よう」
少し強引にすすめられた。
この医者が、女性か、年配の男性であったら、絶対に断っただろう。問診したのは、未だ二十代に見える男性だった。
「じゃ、お願いします」
念のため、と言われると、そうした方がいいかなと思う。
ついたての隣に案内された。
総合病院で、診察場所は、ついたてで四つに区切られていた。問診をうけたのは、右から二番目のところである。
ぼくが通されたのは、さらに右となりの一番はしっこで問診したところと同じようにベッドが置いてある。
先ほどの場所は両サイドについたてが置かれていた。ここは、ついたてが一つだけで反対側には無かった。
はしっこということから、わざわざ置いていないかもしれない。しかし、壁がある訳でなく、十畳くらいのスペースに、十人くらいの女性の看護師が作業をしている。開放的なスペースにとまどっていると、若い看護師に声をかけられたのである。
これだけ女性がいるところでパンツをぬぐのかと思った。しかし、今さら断れるような感じでない。
ぼくはスーツの上着を脱いで、パンツとズボンをずり

下げると、ベッドに横たわった。
Yシャツとネクタイを着けたままなのは、かえって間抜けな気がした。
ぼくの体の調子の悪いのは、お腹の中だけである。出口の部分はいたって健康である。「赤ちゃんのお尻みたい」と言われたこともある。
かといって、場所が場所なだけに、あまり人様のお見せするものでもないだろう。
蛍光灯が明るく照らしているところで、お尻をだしているのは、さすがに恥ずかしい。
妙に不自然に看護師が行き来しているような気がする。お尻を突き出しているまま しばらく、ほったらかしにされた。
ずぼぼぼ

他の看護師は遠巻きにチラチラ見るだけで、ほったらかしである。さっきまであれほど尻の前を往復していたのに知らん顔である。

誰でもいいから抜いてくれ。

自分の目ん玉がうらがえってきている。ぼくは酸欠状態の金魚のように、口をパクパクしている。とてもラマーズ法をしている余裕もない。

隣から、ついたてを通して医者の声がした。

「いま診察中だ」

医者は他の患者と話している。のん気なものだ。こっちは非常事態である。

「んんんん

体比による鉱石使用鉱山の同定を行い、詳細な新理論の計算手法を公表しました。

本号では、樋口隆康が1998年刊行した『昭和28年椿井大塚山古墳発掘調査報告』に基き、椿井大塚山古墳出土鏡及びその89頁に掲載された表4「対置式神獣鏡の鉛同位体比」表5「同型鏡の鉛同位体比」の鉛同位体比指数につき、新理論による原材料供給鉱山の同定を行い、樋口隆康が従来三角縁神獣鏡に対して適用してきた理論が、全く事実に符合しないこと、及びこれまで馬淵久夫・平尾良光によって提唱されてきた日本列島における鉛同位体比理論が事実と相違している事と、それらに気付きながら、全くそれを改めさせようとしない日本考古学会の現状に付き解説します。

それは恰も旧石器捏造問題を、関連する理化学業界まできこんで惹起し、それに対する一切の反省をせず、関連した全ての学者の責任を追及せず、何時の間にか闇に葬ろうとしている状態と全く同様である事についても説明します。

そして日本列島金属文化発生の事実を隠蔽しようとしている自虐史観の実体を具体的に審らかにし、新理論により解明された日本列島金属文化の発生状況と、それに基く新史観を発表して、本項を閉じ様とするものであります。

椿井大塚山古墳出土鏡の鉛同位体比による鉱山同定

M1' 四葉座内行花文鏡

算出された鉛同位体比指数は、17.765・15.523・38.337・0.8738・2.1580です。

これは53神岡・茂住を46%、J—6太良・秋田を54%混合したもの92%に、69久根本山・静岡を8%入れたもので、相違指数は79と完全に一致します。

M2' 方格規矩鏡

算出された鉛同位体比指数は18.110・15.654・38.779・0.8644・2.1413です。

これは43尾小屋・石川を46%、J—6太良・秋田を54%混合したものを92%とし、これに『地球化学』1980年9月号217頁掲載の柿—4湖南省郴県東坡柿竹園を8%混合した相違指数147が一致します。

M3' 三角縁唐草文帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.189・15.663・38.746・0.8611・2.1302です。

これは43尾小屋・石川を52%、J—6太良・秋田を48%混合したもの91%および92%に、52神岡・円山をそれぞれ9%と8%入れたものが共に相違指数96で完全に一致しました。

M4' 三角縁銘帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.109・15.574・38.496・0.8600・2.1258です。

これは52神岡・円山と相違指数39で完全に一致します。

M5' 三角縁銘帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.137・15.634・38.675・0.8620・2.1324です。

これは43尾小屋・石川を48%、J—6太良・秋田を52%混合したもの74%に、51神岡・円山を26%入れたものが、相違指数47で完全に一致します。

M6' 三角縁銘帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.242・15.655・38.731・0.8582・2.1232です。51神岡・円山を26%、52滋賀・政所を74%の比率で混合したものが、相違指数44で完全に一致しました。

M7' 三角縁銘帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.067・15.635・38.651・0.8654・2.1393です。

43尾小屋・石川を42%、J—6太良・秋田を58%の比率で混合したものが、相違指数72で完全に一致しました。

M8' 三角縁銘帯四神四獣鏡

M7号鏡と同型です。しかし算出された鉛同位体比指数は18.030・15.607・38.548・0.8656・2.1380でした。

これは43尾小屋・石川を39%、J—6太良・秋田を61%混合したものを63%および64%とし、これに52神岡・円山をそれぞれ37%と36%の比率で入れたものが、共に相違指数98で完全に一致しました。

M9' 三角縁櫛目文帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.289・15.705・38.886・0.8587・2.1262です。

これは52滋賀・政所を51%、53神岡・茂住を49%の比率で混合したもの59%に、51中竜・福井を41%入れたものが、相違指数95で完全に一致しました。

M10' M9と同型鏡です。

算出された鉛同位体比指数は18.162・15.598・38.591・0.8588・2.1248で、これはGJ—14神岡・円山を56%、45神岡・栃洞を44%の比率で混合した18.163・15.598・38.591・0.8588・2.1247と相違指数僅か2で完璧に一致しました。

ちなみに其の前後の混合比率での相違指数は3と5です。

M11' 三角縁画文帯五神四獣鏡

鉛同位体比指数は18.310・15.683・38.792・0.8565・2.1186です。

これは52滋賀・政所を55%、53神岡・茂住を45%混合したもの95%に、54生野・兵庫を5%入れたものが相違指数101で一致しました。

M12' 三角縁獣帯四神四獣鏡

鉛同位体比指数は18.214・15.657・38.747・0.8596・2.1273です。

これは52滋賀・政所を37%、53神岡・茂住を63%混合したものが相違指数53で完全に一致しました。

M13' 三角縁獣帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.128・15.641・38.625・0.8628・2.1307です。

これは43尾小屋・石川を47%、J—6太良・秋田を53%の比率で混合したもの53%に、51神岡・円山を47%加えたものが相違指数71で完全に一致しました。

M14' M13と同型鏡

算出された鉛同位体比指数は18.222・15.664・38.758・0.8596・2.1270です。

これは43尾小屋・石川を55%、J—6太良・秋田を45%の比率で混合したもの85%に、51神岡・円山を15%挿入したものが、相違指数98で完全に一致しました。

M15' 前二鏡と同型

算出された鉛同位体比指数は18.126・15.645・38.721・0.8631・2.1362です。

これは43尾小屋・石川を47%、J—6太良・秋田を53%混合したものが、相違指数60で完全に一致しました。

M16' 三角縁獣帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.316・15.739・38.927・0.8593・2.1253です。

これは51中竜・福井を77%、54生野・兵庫を23%混合したもの96%に、53神岡・茂住を4%挿入したものが、相違指数147で一致しました。

M17' 三角縁獣帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.444・15.722・39.007・0.8524・2.1149です。

これは51中竜・福井を44%、52滋賀・政所を56%混合したものが、相違指数64で完全に一致しました。

M18' 三角縁鋸歯文帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.428・15.690・38.922・0.8514・2.1121です。51中竜・福井を51%、

52滋賀・政所を49%混合したもの50%にGJ—11倉谷・石川を50%挿入したものが、相違指数113で一致しました。

M19' 三角縁獣帯三神三獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.239・15.713・38.849・0.8615・2.1300です。

これは43尾小屋・石川を56%、J—6太良・秋田を44%の比率で混合したもの79%に、51中竜・福井を21%挿入したものが、相違指数142で一致しました。

M20' 三角縁銘帯三神五獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.151・15.652・38.691・0.8623・2.1316です。

これは43尾小屋・石川を49%、J—6太良・秋田を51%の比率で混合したものを50%及び51%とし、これにGJ—14神岡・円山をそれぞれ50%と49%挿入したものが、共に相違指数69で完全に一致しました。

M21' 三角縁銘帯三神五獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.311・15.735・38.933・0.8593・2.1262です。

この鏡は、M16鏡と鏡の形式は異なりますが、鉛同位体比指数が相違数24と完全に一致しています。

その上51中竜・福井を77%、54生野・兵庫を23%混合したものを96%とし、これに4%の53神岡・茂住を挿入したものが、相違指数143で一致しました。

従って構成比率もM16鏡と全く同じであり、鏡式は異なりますが、同じ工房で、同一時期に、同じ坩堝の材料を使用して鋳造されたものと考えられます。

M22' 三角縁銘帯五神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.293・15.684・38.807・0.8574・2.1214です。

これは52滋賀・政所を52%、53神岡・茂住を48%混合したものが、相違指数71で完全に一致しました。

M23' 三角縁銘帯四神二獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.230・15.667・38.717・0.8594・2.1238です。

これは52滋賀・政所を40%、53神岡・茂住を60%混合したもの80%に、51神岡・円山を20%入れたものが、相違指数104で一致しました。

M24' 三角縁獣帯二神二獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.279・15.665・38.779・0.8570・2.1215となりました。

これは52滋賀・政所を49%、53神岡・茂住を51%混合したものが、相違指数73で完全に一致しました。

M 25′ 二角縁同向式神獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.232・15.670・38.776・0.8595・2.1268となりました。

これは52滋賀・政所を41%、53神岡・茂住を59%混合したものが、相違指数62で完全に一致しました。

M 31′ 二角縁銘帯三神五獣鏡

M 20と同型鏡です。しかし算出された鉛同位体比指数は18.197・15.646・38.690・0.8598・2.1262とM 20鏡とは相違指数132で、完全には一致しませんでした。

これは52滋賀・政所を34%、53神岡・茂住を66%混合したものを77%とし、これに45神岡・栃洞を23%加えたものが、相違指数51で完全に一致しました。

M 32′ 二角縁銘帯三神五獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.233・15.655・38.740・0.8586・2.1247です。

これは52滋賀・政所を41%、53神岡・茂住を59%混合したものと、相違指数76で完全に一致しました。

M 33′ 二角縁銘帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.159・15.651・38.708・0.8619・2.1316です。

これは52滋賀・政所を27%、53神岡・茂住を73%混合したものと、相違指数56で完全に一致しました。

M 34′ 二角縁獣帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.144・15.633・38.649・0.8616・2.1301です。

これは52滋賀・政所を24%、53神岡・茂住を76%の比率で混合したものを74%と75%とし、それに45神岡・栃洞をそれぞれ26%と25%挿入したものが、相違指数共に58で完全に一致しました。

M 35′ 二角縁複波文帯四盤龍鏡

算出された鉛同位体比指数は18.180・15.580・38.596・0.8570・2.1230です。

これは43尾小屋・石川を12%、52神岡・円山を88%の比率で混合したものが、相違指数14で見事に一致しました。

M 36′ 二角縁獣帯四神四獣鏡

算出された鉛同位体比指数は18.158・15.636・38.644・0.8611・2.1282です。

この鏡は径はやや異なりますが同一形式の、M 34鏡と相違指数46で完全に一致します。

これは52滋賀・政所を27%、53神岡・茂住を73%混合したもの71%に45神岡・栃洞を29%挿入したものが

相違指数61で完全に一致しました。

このようにM 34鏡と使用鉛石三者が何れも共通で、比率は若干相違しますが、同一工房で、同一時期に鋳造されたものと考えることができます。

M 37′ 画文帯対置式神獣鏡

この鏡は石室の発見される前に、その外方から出土した三面のうちの一つです。

この鏡と同型のものはありませんが、同じ画文帯神獣鏡で、環状乳の獣形の体躯が短く、上に騎人のない式としては、江蘇省博物館に陳列してあった南京市光華門外趙士崗呉鳳凰二年（273年）墓出土の鏡があります。

算出された鉛同位体比指数は18.176・14.942・37.548・0.8221・2.0658となりました。

この206を204で除した18.176の数値は日本列島出土鉱石に多数存在すると共に朝鮮半島慶尚北道・漆谷もそうです。次に207を204で除した数値14.942は、管見した東アジア全土の鉱石では見当たらず、僅かに近いものとしてC—2錦西（遼寧）の14.999が見られるのみでした。三番目の204で208を除した37.548の数値は遼寧省・北朝鮮の鉱石に存在します。4番目の206を207を除した0.8221の数値は朝鮮半島出土の鉱石に見られます。最後の206で208を除した2.0658の数値は朝鮮半島と岩手県・田老鉱山に存在します。

しかし五つの指数すべてが一致するものを算出することは出来ませんでした。

対置式神獣鏡の鉛同位体比による鉱山の同定

建武〇年鏡（京大蔵）

算出された鉛同位体比指数は18.236・15.657・38.657・0.8586・2.1198です。

これは52滋賀・政所を42%、53神岡・茂住を58%混合したもの65%にGJ—13神岡・栃洞を35%挿入したものが、相違指数116で一致しました。

赤烏元年鏡（山梨県・鳥居原古墳）

算出された鉛同位体比指数は18.368・15.653・38.742・0.8522・2.1092です。

これは54生野・兵庫と相違指数79で完全に一致しました。

同型鏡の鉛同位体比（四神四獣鏡）

椿大塚山古墳出土のM 13・14・15・18鏡は、先に分析した数値と異なっています。それは先に分析した数値は再測定の結果得られたものであるからです。

大塚山四神四獣鏡13号

算出された鉛同位体比指数は18.108・15.624・38.570・0.8628・2.1300です。

これは43尾小屋・石川を46%、J—6太良・秋田を54%混合したもの31%に、52神岡・円山を69%挿入したものが、相違指数69で完全に一致しました。

大塚山四神四獣鏡14号

算出された鉛同位体比指数は18.186・15.625・38.638・0.8592・2.1246です。

これは43尾小屋・石川を13%、52神岡・円山を87%混合したもの50%と、GJ—14神岡・円山を50%挿入したものが、相違指数79で完全に一致しました。

大塚山四神四獣鏡15号

算出された鉛同位体比指数は18.083・15.598・38.582・0.8626・2.1336です。

これは53神岡・茂住を19%、54神岡・茂住を81%の比率で混合したものが、相違指数71で完全に一致しました。

山口県・御家老屋敷古墳

算出された鉛同位体比指数は18.071・15.621・38.638・0.8644・2.1381です。

これは51中竜・福井51%に、52滋賀・政所49%混合したもの77%に、48神岡・栃洞を23%挿入したものが、相違指数79で完全に一致しました。

この項のまとめ

椿井大塚山古墳出土鏡

測定された三角縁神獣鏡29面と、内行花文鏡・方格規矩四神鏡・画文帯対置式神獣鏡各1面、合計32面の銅鉱石供給鉱山は、画文帯対置式神獣鏡1面のみが、同定出来ませんでしたが、残る31面の結果は次の通りとなりました。

中国大陸の銅鉱石を使用したのは、僅かにM2方格規矩鏡のみで、それも8%に過ぎず、中国製といわれていた三角縁神獣鏡は29面すべてが、日本列島の銅鉱石を使用していました。

其の内訳は次の通りです。

一面で複数の鉱石を使用している例が殆どの為、13箇所の鉱山の銅鉱石が延79回の使用となっております。

一番多かったのが、神岡鉱山グループの30回、以下滋賀・政所15回、秋田・太良と石川・尾小屋がそれぞれ11回、次いで福井・中竜6回、兵庫・生野が3回、最後に静岡・久根、石川・倉谷、中国大陸湖南省・東坡柿竹園がそれぞれ1回となりました。

これは43尾小屋・石川を42%、J—6太良・秋田を58%混合したものが、相違指数81で完全に一致しました。

川崎市・加瀬白山古墳

算出された鉛同位体比指数は18.297・15.664・38.771・0.8561・2.1190です。

この鏡は形式は異なりますが、M24鏡と鉛同位体比指数の相違指数が61で完全に一致しています。

しかし52滋賀・政所を53%、53神岡・茂住を47%の比率で混合したもの88%に、GJ—13神岡・栃洞を12%挿入したものが、相違指数71で完全に一致し、こちらには神岡・栃洞の鉱石が入っておりますので、同一時期・同一工房とは認められませんでした。

大塚山四神四獣鏡18号

算出された鉛同位体比指数は18.404・15.665・38.851・0.8512・2.1110です。

これは51中竜・福井を51%、52滋賀・政所を49%混合したもの71%に、19太良・秋田を29%挿入したものが、相違指数95で完全に一致しました。

長岡京市・長法寺南原古墳

算出された鉛同位体比指数は18.394・15.677・38.885・0.8523・2.1140です。

対置式神獣鏡

先に述べました通り、椿井大塚山M37鏡は同定できませんでしたが、建武（後漢・光武帝25～55）紀年鏡は政所・神岡グループ、赤烏元年鏡（呉・大帝238）は54兵庫・生野鉱山のみの鉱石を使用していました。

これは中国の年号を記した鏡だから、中国鏡だという従来の考え方が間違いであった事を物語っていると愚考しました。

四神四獣鏡

再測定された大塚山13号鏡は先に分析した同一の鏡と同じ尾小屋・太良・円山鉱山の鉱石使用となりましたが、大塚山14号鏡は尾小屋と円山は合致しましたが、残る一つが太良を示した前のものと異なりました。また大塚山15号鏡は神岡となり、前の尾小屋・太良と異なり、又大塚山18号鏡は中竜と政所が一致しましたが、残る一つが太良で、前回の倉谷と異なりました。

また御家老屋敷鏡は尾小屋・太良、加瀬白山鏡は政所・神岡、長法寺南原鏡は中竜・政所・神岡とそれぞれ微妙に異なっており、同一工房で、同一時期に鋳造されたものでは無い事が覗えるものだと考えております。

結び

この項の結びとして何が言えるのでしょうか。

それは従来日本考古学会の定説となっていた、舶載鏡（中国・朝鮮半島で鋳造製作された鏡）に対する抜本的な見方の変更を迫るものです。

すなわち中国の年号が記載されているから中国あるいは中国の支配下にあった楽浪あたりで鋳造製作されたものであるとか、魏志倭人伝で卑弥呼が鏡を百枚もらっている、其の中に三角縁神獣鏡が含まれているのは確実であるというような考え方です。

中でも椿井大塚山古墳出土三角縁神獣鏡は全て舶載鏡と見なされてきたものであり、その同笵鏡が全国の古墳から出土し、それが大和王権の勢力範囲を示すものとしておりました。これは小林行雄が発表したものです。

更に同笵鏡の多さは、鏡の同一工房で同一坩堝により同一鋳型で大量生産されたものだとする樋口隆康の考えもあります。

今回の発表は両者の考え方を根本から否定するものとなりました。何故ならば三角縁神獣鏡は日本列島内で鋳造されたものであり、従来同笵鏡だといわれてきた鏡の鉛同位対比が全て一致しなかったからです。

今まで筆者が唯一同笵鏡の可能性があると考えていたM13鏡とM15鏡も、そうではありませんでした。

様々な事情があり、発掘してから45年目に調査を担当した樋口隆康自身が刊行した『椿井大塚山古墳発掘調査報告』に記載された内容により分析された今回の結果は、樋口隆康本人が『黒塚古墳調査概報』で述べていた事柄で『まんじ』125号210～211頁に掲載した

「～同じグループの鏡で、これほど同型鏡が多いのは三角縁神獣鏡以外には見られない。同型鏡は同時に同じ種類の鏡を多数作れるという利点がある。～このことは、耶馬台国の女王卑弥呼が魏王から銅鏡百面を賜ったという魏書東夷伝の記事と合致する。～次に舶載の三角縁神獣鏡の出土地をみると、370数面が西は宮崎県から東は群馬県までに分布しているが、そのうち多く出した県を挙げると奈良県80面、京都府56面～」

の何れの文面とも符合しないのが良くお分かりだと思います。正に自分の刊行した、曰くのある報告書で結果として自分の持っている考えを否定した事になります。

その一方で、形式の異なる鏡から同一時期、同一工房の鋳造と考えられる複数の事例が見つかりました。

これは鏡が見込生産ではなく、注文生産であった事を物語るものと考えております。

以下具体的にその内容を列挙します。

『椿大塚山古墳発掘調査報告』80頁に記載されている同型鏡について説明します。

M7鏡とM8鏡は相違指数183で一致はしましたが、M7鏡は43尾小屋・石川とJ—6太良・秋田を混合した鉱石

と相違指数72で完全に一致しており、一方M8鏡は43尾小屋・石川、J—6太良・秋田に更に52神岡・円山を加えた鉱石と、相違指数98で完全に一致しているので、同じ工房で同一時期に同一工人が作成したものとは立証できませんでした。

M9鏡とM10鏡は相違指数544で大きく異なります。ちなみにM9鏡は52滋賀・政所と53神岡・茂住、51中竜・福井を合わせた鉱石が相違指数95で完全に一致し、M10鏡は、45神岡・栃洞とGJ—14神岡・円山を合わせた鉱石が、相違指数2で見事に一致し、使用鉱石が全く違います。

M13・M14・M15鏡は、それぞれ同型鏡と認定されておりますが、どうでしょうか。

先ずM13鏡とM14鏡は相違指数279で符合します。そして使用鉱石は共に43尾小屋・石川、J—6太良・秋田と51神岡・円山まで同一ですが、使用鉱石の割合が異なります。

すなわちM13鏡は43尾小屋・石川を47%、J—6太良・秋田を53%の比率で混合したものを53%とし、これに51神岡・円山を47%混合した鉱石が相違指数71で完全に一致するのに対し、M14鏡は、43尾小屋・石川を55%、J—6太良・秋田を45%混合したものを85%とし、これに51神岡・円山を15%混ぜた鉱石が、相違指数98で完全に一致するのです。

今度はM13鏡とM15鏡です。相違指数は160で一致します。

しかしM15鏡は43尾小屋・石川を47%、J—6太良・秋田を53%混合した鉱石と、相違指数60で完全に一致し、M13鏡は、43尾小屋・石川47%J—6太良・秋田53%を混合したもの53%に、新たに51神岡・円山を47%加えたものと相違指数71で完全に一致し、異なる鉱石を使用しております。

最後にM14鏡とM15鏡ですが、相違指数は279で符合します。

しかし先に述べた通り、M14鏡は43尾小屋・石川、J—6太良・秋田と51神岡・円山の鉱石が使用されているのに対し、M15鏡は、43尾小屋・石川と53神岡・円山だけの鉱石使用ですから異なります。

お終にM20鏡とM31鏡についてお話します。

両者の相違指数は132で一致します。

しかしM20鏡は43尾小屋・石川、J—6太良・秋田とGJ—14神岡・円山の三者を混合したものと、相違指数69で完全に一致するのに対し、M31鏡は、52滋賀・政所、53神岡・茂住と45神岡・栃洞を混ぜ合わせた鉱石と、相違指数51で完全に一致しています。

このように同型鏡といわれているものでの、同一時期、同一工房、同一工人による鏡の鋳造は立証できず、まし

てや同一坩堝による大量生産などは全く考える事が出来ない事が判明しました。

その一方で、同一時期、同一工房、同一工人による鋳造と考えられる、形式の異なる複数の鏡が検出されました。

先ずM16三角縁獣帯四神四獣鏡と、M21三角縁銘帯三神五獣鏡です。

両者の鉛同位体比相違指数は24で完全に一致しており、共に51中竜・福井77%生野・兵庫23%混合したものの96%に、53神岡・茂住を4%加えたものが、相違指数147と143でそれぞれ一致しています。

またM34とM36は共に三角縁獣帯四神四獣鏡ですが、前者は方格内に「天王日月」の四字が八個、内向きに入っており、後者は方格内は「天王」の銘が七個、「日月」の銘が一個何れも外向きに入っているもので、径もやや異なります。

両者の鉛同位体比相違指数は46で完全に一致しており、且つ前者が52滋賀・政所24%に、53神岡・茂住を76%混合したもの74%に、45神岡・栃洞を26%混合したものと相違指数58で完全に一致し、後者は全く同じ鉱石で、似通った比率である27%と73%のもの71%とし、これに29%挿入したものと、相違指数が61で完全に一致いたしましたので、同一時期、同一工房と認定できるとしました。

自虐史観と考えられる馬淵久夫・平尾良光の所見

①1982年1月『MUSEUM』370　8～10頁

「第二の神岡鉱山の問題は産地推定によくある特殊例である。この鉱山は大陸性の古い地層の中にあり、図1, 3, 4のいずれでも中国の鉛の方に属する。対馬の対州鉱山も類似の傾向にある。このような場合には考古学的考察を加味して考える必要がある。例えば、仿製鏡について考えてみると、つぎのような解釈が成り立つであろう。図1, 3, 4で見ると仿製鏡はすべて舶載鏡と同じ範囲に入る。仿製鏡の中には神岡鉱山に近い値をとるものもあるが（例えばM－18）、一般的な日本の鉛グループに入るものはない。古代に神岡鉱山のみが開発されていたとは考え難いので、M－18も中国産の原料とするのが妥当である」

②1982年6月『考古学雑誌』68－1　51頁

「日本の中で対馬の対州鉱山、石川県の倉谷鉱山と尾小屋鉱山といった朝鮮半島に近い地域の方鉛鉱が日本の大部分の鉛とかけ離れて、〝朝鮮系遺物ライン〟の近くに位置するのが注目される。～鉛同位体比が例外的な値をとる鉱山のみが開発されていたとは考え難い～」

③1987年12月『考古学雑誌』73－2　76～77頁

「既に報告したように、日本の鉛鉱石は神岡鉱山を除くと極めて狭い範囲に収まる。～初期の論文で、筆者らは北海道・広尾（GJ－2）および秋田県太良（GJ－6）について異常な値を表に載せた。このとき報告した20余の試料は山崎一雄氏が入手し、室蘭工業大学の測定と比較するために測ったものである。～太良については別途に新たな試料を入手して測定した。～これらは典型的な日本の鉛同位体比を示している。従って、初期に測定した太良の試料は恐らく日本の鉱石ではなく、なんらかの理由で誤って山崎氏に渡されたものと推定される。広尾については再測定を行なっていないが、他の北海道の鉱石からみるとやはり疑問のある試料である。いずれにしても、これら2試料は地域的にみて古墳時代までの青銅器を論ずる場合に、問題にはならないであろう。」

④1987年12月『考古学雑誌』73－2　80頁

「新生代（6400万年以内）の鉱山が圧倒的に多い日本と、新生代より古い（6400万年以上）鉱山が大半の中国・朝鮮半島が図で図別されるのはこのためである。～」

⑤1995年10月『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』261頁

「1970年代後半、東京大学地震研究所の佐藤和郎氏と地質調査所の佐々木昭氏は、鉱床研究のために鉛同位体比を測定していた。彼らが測定した鉛同位体比のなかに、日本でも非常に特殊な鉱床である別子型（キースラーガー）鉱床があった。それらの鉱床は、四国から和歌山、静岡にまで抜けるベルトにはいる～」

そして飛鳥の水落遺跡の水時計に使用されていた大銅管が、この別子型の日本産鉛を使用した最古のものだと発表したのです。

しかし別子型鉱山を含む、多数の日本列島鉱山の鉱石鉛同位体比が同一論文で発表されていたにもかかわらず、其の後の発表も依然として日本列島産鉛の範囲は舌べろ状の極めて狭い範囲に留めたままでした。

話は変りますが、水落遺跡とは『日本書紀』斎明天皇六年（660年）五月条の「また皇太子（ひつぎのみこ）、初めて漏剋を造る」に該当し、この発表は七世紀の半ば過ぎまで日本列島産の銅鉱石は使用されなかったとするものでした。

馬淵久夫・平尾良光の自虐史観を否定する

これを明確に意識したのは2007・11・17に、栃木県立博物館の足尾鉱山鉱石の展示解説を読んだ時でした。

「鉱床は新生代第三紀中新世（2350万年前～5300万年前）の流紋岩からなる備前楯山と、周辺に分布する中生代（245百万年前～6500万年前）の粘板岩・砂岩・チャートなどの堆積岩中にあった」

日本列島の中心より太平洋側にも中生代の鉱石があるではないか。馬淵達の唱えていた事が粉飾であることを確信した一瞬でした。

あらゆる謎が溶け出すような思いがしました。一時が

万事で全て考え直す必要があると思いました。
しかしこの具体的解明には更に5年近くの歳月がかかってしまいました。
2011・1・24　20：15　筆者は明治大学中央図書館レファレンスカウウターから一通のメールを受取ります。その最下段には目指した論文が、次の本に収録されていることが記載されていました。そして其の書籍は東京大学地震研究所図書室を含む国内五ヵ所の所蔵されている旨記されていました。
早速東大地震研に連絡をとり、訪問してその内容を確認しました。
それは『short papers of the Fourth International Conference, Geochronology, Cosmochronology, Isotope Geology 1978 Edited by Robert E Zartman（第四紀国際学会、地球年代学、宇宙年代学、同位体地質学小論文）』の378～379頁に佐藤和郎と佐々木昭によって発表され「日本列島におけるサンプルによって検証された鉛鉱石形成の二つの主要な進化系統」（筆者訳）として記載されていたのです。
そこには古生代（540百万年前～250百万年前）の鉱石として静岡県・大井鉱山鉱石の鉛同位体比206/204・17.444、207/204・15.399、208/204・37.18が記されておりました。
直感したのは、地元三遠式銅鐸の鉛同位体比206/204の数値17.7代を下回る、日本列島内最低の数値であり、この鉱石と他の日本列島産の鉱石を混合して、地元の青銅製品が鋳造されていたのではないかと言うことでした。
そこで2012．3『鉱山研究』89号誌上に、従来の鉛同位体比の発表が、考古学関係は成分を表示するとされる206で207と208を除した数値を、縦軸と横軸に用いたA式図、地球年代学関係は204で206・207・208を除した数値を発表の上、204で206と207を除した数値を縦軸と横軸に用いたB式図で発表していたものを統合し、更に算出数値も、204で206・207・208を除したものは下三桁、206で207と208を除したものは下四桁まで算出し、全て下一桁は四捨五入の上、その五つの鉛同位体比指数の相違の和で判断することにしました。
その結果は下17桁、10京という天文学的数値で判断できることになりました。丁度お金を使わずに電子顕微鏡を頭の中に数式で簡単に作りあげたようなものです。
これは従来のものより零の数が八つから九つも多いのですから、精度としては1億倍から10億倍ということになります。そして相違指数の和100未満のもの、すなわち確率一千億分の3.04がマキシマムのものを完全に一致、相違指数100～199までのもの確率1千億分の99.84がマキシマムのものを一致、相違指数200～299までのものを符合としました。符合でも確率はマキシマムで一千億分の764.64です。

この新理論を最初に適用した『鉱山研究』89号2012．3「日本列島における銅鉱山開発の様相―弥生時代中期～古墳時代中期・東海地方出土青銅製品の鉛同位体比指数に拠る」では、結びとして
弥生時代中期～古墳時代中期にかけての静岡県・愛知県出土青銅製品71点の鉛同位体比指数による日本列島銅鉱山開発の様相は、次の様に考えることができる。
弥生時代中期に、天竜川中流域大井鉱山と久根鉱山の開発が行われ、其の結果が三遠式銅鐸と近畿式銅鐸の静岡県西部と愛知県での集中出土をもたらした。
それは銅鐸原材料に両鉱山の鉱石が使用されていたことからも明らかである。
其の一方で使用鉱石の大半を占めたのは遠く離れた秋田県太良鉱山のものであった。やがて神岡茂住鉱山の鉱石が入るようになり、太良鉱山の鉱石と並ぶようになる。
このような鉱石産出鉱山の動きは小銅鐸、銅釧、銅鏃、筒状銅器、三環鈴においても同じである。
更に石川県尾小屋鉱山の鉱石が釣針で使用されるようになり、古墳時代に入ると滋賀県政所鉱山、石川県倉谷鉱山、神岡円山鉱山、福井県中竜鉱山、兵庫県生野鉱山のような中部・近畿地方の鉱山開発が進むのである。
としました。
更に『まんじ』125号2012・8では
大和天神山古墳出土鏡23面の分析結果は、古墳時代前期における日本列島銅鉱山開発が、岐阜県飛騨地方の神岡鉱山グループを中心として進み、これに加えて北は秋田県、東は静岡県、周辺は北陸・滋賀・兵庫、西は対馬にいたる鉱山開発が行われていた事を浮かび上がらせた。
一方舶載鏡は中国大陸江西省と湖南省産の鉱石を使用した20内行花文鏡のみで、9流雲文縁方格規矩鏡は、山東省香寄鉱山の鉱石を半分使用していたが、これは現地から渡来した青銅工人が持参した鉱石に、日本列島で産出された鉱石を混合したと考えるのが最も妥当である。
と結び、
更に『まんじ』126号　2012・11では
須玖岡本遺跡甕棺出土鏡17面は、6面に日本列島産の鉱石が使用されていたことが明らかになった。これは弥生時代中期、既に鉱山開発が行われていたことを明らかにし、少なくとも従来の馬淵・平尾等の発表より1000年以上前に、すでに日本列島の金属文化が発生していた事を物語るものである。
鉱石の使用頻度は、先ず209丹鳳・陝西が14回で最高、次いで日本列島の53神岡・茂住、J―6太良・秋田が共に6回、以下中国大陸の201青城子・遼寧が5回、208永豊・陝西が3回、其の他218五部・浙江、207永豊・陝西、

須玖岡本遺跡甕棺出土鏡によって立証されます。

次いで大和天神山古墳出土鏡の分析結果は、その古墳の性格が、大和王権を確立した崇神天皇陵の陪塚と判断され、それは後漢鏡を模した多様な仿製鏡の出土によって、それらの鋳造技術を保有している渡来青銅工人グループを傘下に置くことに成功した初代大王の事実を立証することにもつながります。

またここで、崇神天皇と『住吉大社神代記』に庚辰年（仲哀天皇九年＝200年）生まれとして出てくる応神天皇、更に神日本磐余彦天皇（かむやまといはれびこのすめらみこと）の漢風諡号を持つ神武天皇の三者は同一人物と考えられる事も付記いたします。何故ならばこの三者と神功皇后のみが、共に神の諡号を持ち、大和王権発足の大王にふさわしい大型前方後円墳に葬られたという事になり、且つその古墳の年代とも符合するからです。

従ってその陪塚である大和天神山古墳の時期は四世紀前半と愚考しています。

一番遅いのが椿井大塚山古墳の出土鏡で、四世紀の中頃と考えられます。

その理由は、三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡とは、全く関係なく、銅鐸と同じ様に、日本列島各地に所在する豪族達が求めた為、広く普及した鏡と考えているからです。

しかしこの三角縁神獣鏡の鋳造技術も、大和王権に属

210鄧家山・甘粛、214福山黄銅鉱・山東、217棲霞山・江蘇がそれぞれ1～2回で、中国大陸28回、日本列島12回となった。

これは中国大陸の鉱山開発が東は山東省・江蘇省、南は浙江省、北は遼寧省、西は甘粛省にまで及ぶが、主要な原材料供給鉱山は、中原の陝西省産が占めていたことを物語る。

としました。

これらの結果は、中国の正史倭・日本伝、後漢の班固(32～92)『前漢書』巻28下・地理志・燕地の条にみえる「楽浪の海中倭人あり、分かれて百余国となる、歳時を以て来り献見すという」とか、同じく『前漢書』地理志・燕地に「東夷は天性柔順、三方の外に異なる」、更に『随書倭国伝』「新羅・百済はみな倭を大国で珍物が多い国とし、ともにこれを敬仰し、つねに通使・往来する」とも符合します。

終りに

これらに今回の『まんじ』127号に掲載した椿井大塚山古墳出土鏡の分析結果を重ね合わせて考えて見ますと次の様になります。

弥生中期に日本列島では金属文化が発生したことが、した青銅工人達が所有しており、彼らの先祖は大和天神山に埋葬された鏡も作っておりました。

その結果、莫大な富が大和王権に列島各地から集まるようになります。

ここで、旧石器捏造問題と、日本列島金属文化発生時期を千年以上遅延させた自虐史観との類似点につきお話します。

どちらも有力な提唱者がおりました。旧石器捏造問題は、東北大学芹沢教授で、彼は日本列島に旧石器時代があったことを解明した人物でした。

一方金属文化発生問題は京都大学、内藤湖南が三角縁神獣鏡は卑弥呼が貰った鏡であり、それが集中して出土する畿内に邪馬台国があったのだとする意見を発表しておりました。

旧石器の方は、理化学業界から帯広畜産大学の中野教授が宮城県・馬場壇A遺跡（前期旧石器時代、約十四万年前）出土の旧石器からナウマン象の残留脂肪酸が検出されたとの発表を行いました。

ちなみに彼は昭和45年日本脂質生化学研究会千田賞受賞者であります。

勿論旧石器捏造問題発覚後、この発表は虚偽のものであったとの報告が理化学学会の学者により行なわれました。

そして金属文化発生については馬淵・平尾等による、前記の如き甚だしい自虐史観に基いた鉛同位体比理論が展開されています。

しかし旧石器問題でも、神の手といわれた藤村以外は誰一人発掘していなかったことを、考古学会内部では知りながら誰一人問題にしようとはしませんでした。捏造事件をもっとも強力に推進したのが毎日新聞を除くマスコミで、NHKと朝日新聞が先頭をきっていました。

これと同じ事が今金属文化発生問題についても起こっていると確信しております。そしてそれを打破する物的証拠となり得るのが、本誌にまとめた鉛同位体比新理論だと愚考しています。

話を変えて文を閉じます。

『まんじ』119号で詳しく述べましたが、該期の日本列島の歴史を最も忠実に表しているのは『住吉大社神代記』だと考えております。

それと合わせて考えなければならないのは、177～188年の間にあった鮮卑・檀石槐の博多湾沿岸来寇の事実です。

この結果、住吉大社は211年、博多から摂津の国一の宮に移ります。これには重大な事が秘められていると考えています。

これにより天孫族は国津神族（出雲・尾張等）を排除して畿内すなわち磐余に入り東西・南北の交易路の要を抑えます。

出雲族は秀麗な三輪山の麓に鎮座する主祭神、大物主大神の大神神社を遥すだけとなります。

其の一方で尾張族は東海系土器を残し、国津神系は共に銅鐸を地下に埋納します。何故ならば天孫族の祭祀は鏡を中心とするもので相容れなかったからです。

新たに入って来た天孫族は先ず箸墓、次いで行灯山（伝崇神天皇陵）と相次いで大型古墳を造営します。これには地元磐余に本貫地を持つ阿部氏の協力があったことは間違いありません。

行灯山古墳（伝崇神天皇陵）とこれに続く渋谷向山古墳（伝景行天皇陵）は共に奈良盆地の東南部の三輪山北方の竜王山の西方に派生する尾根支脈の端部に築造され、大型の区分けされた楯形周濠を持っております。

この周濠は灌漑稲作の要となる絶好の溜池的要素を兼ね備えており、当時この台地下方にある広大な奈良盆地の灌漑稲作に大きく貢献したものと判断されます。

更にこの地から南方につながる磐余への間には大阪湾に注ぐ大和川の本流が流れ込み、遠く大陸からの物資の舟運にも便利で市が開設されておりました。このように内陸ではありましたが、日本列島の臍に当る部分として大いに発展を遂げる事となります。

やがて磐余の本貫地には桜井茶臼山古墳が作られるようになります。其の墳頂からは箸墓古墳を目の当たりにする事が出来ます。この古墳は玉杖の他、玉、鉄製・青銅製の武器、及び鏡が多数出土しており、更に特筆すべき事は、埋葬終了後、全面に水銀朱を塗布した天井石を懸架し、さらにその天井石を、ベンガラを練りこみ赤色にした粘土で覆っていることです。また方形檀の裾には幅、深さともに1.4m前後の溝が掘られ、その中心に沿って直径約30cmの柱が合い接するように立て並べられておりました。時期的にも行灯山よりやや遅れますので壱与の墓と認定するのが最も整合性があると考えます。

ここで考えられる事は、卑弥呼が葬られたと考えられる箸墓は当初円墳で造られ、其の後壱与の時代になって同様なシャーマンでもあった先輩卑弥呼の霊を祀る場所として、すでに行灯山古墳以来採用されていた前方後円形に合わせて、前方部を付け加え現在の形にした、その前方部は撥形に先端部が開く特殊なものであったということです。

このようにして卑弥呼の時代、磐余王朝は発足します。

それは神功皇后の磐余稚桜宮として人口に膾炙されています。紆余曲折の後、応神天皇の五世孫と伝えられる男大迹王（をほどのおほきみ）が継体天皇になりますが、先祖応神天皇の愛した土地、磐余に526年、最終的な都を移します。

そして聖徳太子の父であった用明天皇の磐余池辺双槻宮を最後として磐余王朝は幕を閉じる事となります。

592年12月推古天皇は豊浦宮で即位します。

磐余から峠を一つ越えた飛鳥、すなわち蘇我氏の本貫地が日本列島の中心になったのであります。

このように磐余王朝の時代、それは丁度大型前方後円墳の時代でもありました。

次いで飛鳥に宮殿の設置場所が変りますと、それは仏教寺院が建立される時代となります。

大和の大王は、その持てる財力による権力の誇示を、大型前方後円墳の造営から、大型寺院の建立へと切り替えたのでした。

参考文献

石原道博『魏志倭人伝他三篇』岩波書店、2009年

田中卓『住吉大社神代記の研究』図書刊行会、1985年

寺沢薫『桜井茶臼山古墳の調査』現地見学会資料　奈良県橿原考古学研究所、2009年

中野益男「残留脂肪酸による古代復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバプロ、1995年

中山喬央「三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その6）」『まんじ』107, 2008年2月

中山喬央「三角縁神獣鏡に対する考え方の変化（その7）」『まんじ』108, 2008年5月

中山喬央「桜井茶臼山・壱与・磐余王朝（その1）」『まんじ』116, 2010年5月

中山喬央「桜井茶臼山・壱与・磐余王朝（その4）」『まんじ』119, 2011年2月

中山喬央「日本列島における銅鉱山開発の様相」『鉱山研究』89, 2012年3月

樋口隆康『昭和28年　椿井大塚山古墳発掘調査報告』真陽社、1998年

追伸 ―サウダージ― より その十

松下壽男

透明なあなたに

いつごろからか
私の心の大きな穴の
青空の向こうに
住み着いてしまった

透明なあなたに
このごろは事あるごとに問いかけている
冷たい空虚をもう一度、もう思い出でしかなくなった
あなたの笑顔で和ませたくて

「念願の中等部の可能性が見えてきましたよ」
「自言語自文化による特別支援の道をつけたけどどうでしょう」
「日系の徳を育ててみたいと思いませんか」

ぽっかり空いた闇の空から
あなたの返事が聞こえてきます
「全部間違いじゃないですか」(私が私である限り)

日本近代文学点描 その十一

松下壽男

貨幣とファンタジー

♡「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

　すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにのっけて、カチ合わせて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとのお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰有ったがちっとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

　ある窓の下を通りかかると、人間の声がしていました。何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なんでしょう。

「ねむれ　ねむれ／母の胸に、／ねむれ　ねむれ／母の手に――」

　子狐はその唄声は、きっと人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

　するとこんどは、子供の声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いって啼いてるでしょうね」

　すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、洞穴の中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねんねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きっと坊やの方が早くねんねしますよ」

　それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなって、お母さん狐の待っている方へ跳んで行きました。

新美南吉が、「手袋を買いに」を書いたのは、東京で学生生活を送っていた頃だと言われています。

権狐で村の農民と子狐との関わりを悲劇的に描いた南吉は、ここで町の商人と子狐を幻想的に出合わせました。

町といっても、描かれたのは、地方都市です。おそらくは彼が中学生時代に通った半田をモデルにしていることでしょう。そこは狐の母子にとって恐ろしい異界のはずなのに、読者にもなぜか懐かしく感じられるのは、大都会東京から半田の町に向けられた作者南吉の望郷の念によるものでしょう。それは空恐ろしい毒を孕んだこの物語を美しい民話に仕立てるうえで、大きな力になっていると考えられます。

町とは、即ち市場です。市場では、物々交換や貨幣を仲立ちとした交換によって、需要と供給の均衡が満たされるという原理が成立しています。その原理は、正当な参入者である限り、拒む理由はないのです。

町では対価さえ支払えば子狐にも商品を渡すのです。市場として自由で平等だからです。町の母親は西洋の子守歌で子供を寝かしつけるのです。市場は豊かで、町の文化は洗練されているからです。町で満ち足りて暮らす人間の母と子の会話には、人も狐も友達であるかのような博愛のファンタジーが溢れているのです。とはいえ子狐が町のファンタジックな世界に参入できたのは、二枚の白銅貨を手渡したから、即ち市場の客になったからでした。

物語の帽子屋の主人は、子狐が不正をしていないかを独特な方法で確かめます。実験をしてみれば、それが硬貨を最もよく鳴らす方法だということがわかります。作者の新美南吉にその方法を伝授したのは父親でしょう。高利貸をしていた父親は、長男の正八（南吉の本名）に、幼児の頃から、貨幣に対する執着を教え込もうとしていました。利息の取り立てに同行させては血も涙もないやり取りを実地に学ばせもしていました。ひょっとすると帽子屋の主人のモデルは、その父親なのかもしれません。だとしたら「先にお金を下さい」そう言って貨幣を確かめたうえで、お客様を取りなしてほくそ笑む父親の様子を、傍らの正八はどんな思いで見ていたことでしょう。

彼は、この物語の最後を「ほんとうに人間とはいいものかしら。ほんとうに人間とはいいものかしら」という母狐のつぶやきで結ぶのです。

その後新美南吉は、「最後の胡弓弾き」や「おじいさんのランプ」で、近代資本主義社会の発展が地方の文化や文明開化の誇りさえも押しつぶしていく有り様を、客体化されていく主人公を通して切なく描いていくのです。

編集後記

最近考古学の様々なシンポに参加していて気が付いたことがあります。

一つは仲良しクラブ的な雰囲気で、部外者の質問は一切受け付けず、学者・研究者間の論争もたいして行なわれないものです。

今一つは参加した学者・研究者間での遠慮ない意見の交換が行なわれ、会場の熱気がむんむんするものです。

不思議な事に前者は参加者数が長期低落傾向を示すのに対し、後者は考古に関心を寄せる一般大衆の参加が漸増しております。

これは何を意味するものでしょうか。

現状に満足し、自分達の地位を守ることにのみ固執する集団と、これから新分野を切り開いて行こうとしている集団、これらを明敏に察知して動いている一般大衆です。

自分達の将来を考えるならば、いかに行動すべきかは改めて言うまでもありません。

今我国で最も輝いている人物の発言は、「実験結果が仮説と相反するものがでたら、喜びを感じる」とか「地球温暖化で悪者にされている二酸化炭素を、触媒を使って役立つ物質に変換する技術の開発」「炭素と炭素の不斉合成技術の発展」「カーボンナノチューブ、フラーレン、グラフェンなどに代表される電気的、光学的に優れた新物質の有機合成法の開発と応用」等であります。

編集子は現状に甘んぜず、将来に対する夢を持ち、それに向かって前進する為の相互の忌憚のない考えの発表、それらに対する自由な意見交換の場としての『まんじ』を、大切にして行きたいと思っております。　（T・N）

まんじ第127号

平成25年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「古きを脱ぎて　新生に漕ぎ出す」　　田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.128

2013.5.1

まんじ第百二十八号　目次

アルジェ ―西欧とアラブの狭間で― …… 太田精一 … 4
北上夜曲考 …… 新井宏 … 13
短歌 三十五首 …… 曽根竣作 … 21
関東管領始末記⑩ 諫死と隠棲 …… 千坂精一 … 26
アメリカ雑記帳（四） …… 三戸岡道夫 … 39
「茶道史」勉強ノート（四） …… 忠内正之 … 47
短歌 行雲流水（三十八） …… 石黒修身 … 57
先見の明（四） …… 堀内永人 … 60
老人会 会長のつぶやき（その二） …… 伊治哲 … 68
中学時代の良き友 …… 吉田忠雄 … 77
漢詩 潮騒録（七十二）《漢詩の流れ61》 …… 鯨游海 … 79
イドと超自我の谷間で（八）―ある女の不思議な生涯― … 鍋屋次郎 … 82
初めての雛めぐり …… 漆原直子 … 91

古代出雲国筆頭　熊野大社の盛衰 …… 村上邦治 … 94
（司馬雑感三十一）「信州佐久平みち」を歩く …… 山田嘉久 … 98
人類の仲間（三） …… 鈴木守 … 105
急げ「特急出雲」 …… 横山正義 … 112
陰翳の美学（その十三） …… 外山知 … 116
口紅（その十） …… 池莉 原作 山本勉 訳 … 136
透明な時間（十二） …… 宅見勝弘 … 158
風船恐怖症 …… 宅見勝弘 … 162
かずおさ …… 中山喬央 … 167
追伸 ―サウダージより― その十一 …… 松下壽男 … 177
日本近代文学点描　その十二 …… 松下壽男 … 178
編集後記 …… 編集子 … 180
表紙 …… 田寺怜葦 …

アルジェ
—西欧とアラブの狭間で—

太田精一

一・フランスのくびき

機体が高度を下げ始めた。パリオルリー空港を発って二時間が過ぎている。

地中海は、真夏の陽光に輝いている。海上に浮かぶ豆粒ほどの船が次第に大きく見えた。

前方のアトラス山脈が視界に入った。ベルト着用のアナウンスが機内に流れている。着陸も間近い。

私は、ステュアーデスから手渡されたフランス語の入国カードと外貨申告書に記入を始めた。

すると突然、誰かに背中を軽く叩かれたような気がして、思わず振り返った。後部座席にいた髭面の男二人が、私の顔を見て何か言っている。

「この入国カードをわしらに代って書いてくれ」

よく聞いてみるとフランス語でそう言っていることが分かった。

「何を言っているのだ。君たちは、僕よりフランス語が上手ではないか。僕は日本人で、フランス語は外国語だ。自分で書いたらどうだ」

私は、ムッとして答えた。自分で書くのが面倒なので人に書かせてサインだけしようとする横着な根性に腹が立ったのである。

「申し訳ない。実は字が書けないのだ。フランス語は、話すことは出来ても書けないのだ」

一人が少なくとも私より流暢なフランス語で説明した。

私は、半信半疑でどう答えてよいか迷った。だが、その真剣な眼差しは、嘘を言っているようには見えない。

「分かった。それでは書いてあげよう」

名前、生年月日、職業などを聞いているうちに、その二人はアルジェリアからフランスへ出稼ぎに出て、帰国の途上であることが分かった。

一八三〇年、フランスは、オスマン帝国の宗主権下にあったアルジェリアのベイ（支配者）を追放し占領した。以後一三〇年余にわたりアルジェリアは、フランスの支配下にあった。

その間、フランスは、アルジェリアを海外県とし、フランスの一部とみなして来た。そのためアルジェリア人に徹底したフランス語教育を行い、都会に住むアルジェリア人のほとんどは、フランス語を読み書き話すようになった。フランス語は長い年月の間に、アルジェリア社会の中に定着したのだ。

だが、農村地帯では、学校教育の普及が十分ではなかったため、話すことは出来ても、読み書きの出来ない人が少なくない。

私は、入国カード記載の代行をすることによって、この二人が農村の出身であることが分かった。

フランスは、長年にわたってアルジェリアをフランス文化で包み込み、経済的にもフランス本上と切っても切れない関係にまで押し進めて来た。

だが、二十世紀半ばに転機が訪れた。

第一次大戦後独立運動が芽生え、フランスの支配から脱却を目指す抵抗運動がアルジェリアの各地で起こったのである。

それでもフランスは、アルジェリアを手放したくなかった。

第二次大戦時下の一九四二年、フランス本国がドイツに占領されていた頃、ドゴール将軍は、フランス共和国臨時政府をアルジェに結成し、対独戦の拠点として活動を続けた。ドゴールは、アルジェリアを運命共同体と考えていたのである。

にもかかわらず、世界の歴史の大きな流れには、フランスも抗しきれなかった。

第二次大戦後、世界各地で広がった植民地からの独立運動は、アルジェリアにも波及し、アルジェリア人の蜂起を促し、武力闘争にまで発展したのである。

これに対し、アルジェリアを自国の一部と考えていたフランスは、軍事力を行使し抵抗運動の弾圧を図った。

一方アルジェリアの独立派は、民族解放戦線を結成し、八年にわたる凄惨な抵抗運動を続け、百万人の犠牲を払って、一九六二年七月五日、フランスからの独立を果たした。

アルジェリア人民共和国が誕生したのである。

初代大統領ベン・ベラ氏は、社会主義政策を選択した。キューバと共に非同盟運動と社会革命路線を推進し、フランスとの距離を置いていたが、経済的には、フランスの影響が色濃く残されていた。

民族解放戦線の間では、独立後数年たっても、ベン・

ベラ大統領の対仏政策は妥協的で、生活も向上しないことへの不満が高まって来た。

そんな時、フランスからの脱却と、よりドラスティクな社会主義政策の実行を目的とした軍人が現れた。第五軍管区最高指揮官、参謀長のブーメディアン氏である。

一九六五年、彼は、軍事クーデターを起こしベン・ベラ政権を倒し、革命評議会議長に就任した。さらに、一九七六年には、国民投票により大統領に選出されたのである。

この間、地下天然資源の国有化を断行、一九七四年には「新国際経済秩序」の国連での決議にあたり中心的役割を果たした。

アルジェリアの独立は、フランスに大きな痛手と衝撃を与えた。

有力な石油、天然ガス資源と豊かな食糧生産基地を失い、フランスの国力の低下を招いたのである。

アルジェリアに居住していたフランス人は、本土に引き上げることになった。

ところが、曾祖父や祖父の代からアルジェリアに住み着いているフランス人にとっては、アルジェリアが故郷である。フランスには、帰る土地もなく、血縁もいないため、そのままアルジェリアに残留して帰化する人も少なくなかった。

この人たちは、ピエ・ノワールと呼ばれている。

二、携行荷物の紛失

機内の窓から見えるアルジェの街は、白い建物が立ち並び、空港近くの道路は、椰子が植えられていた。

一九七七年八月二十日、私は、アルジェ国際見本市参加日本館の設立・運営の事務局長代理としてアルジェ空港に降り立った。

私にとってアルジェリアは、初めての地である。未知の世界への希望と不安が交差する第一歩であった。

アルジェリアは、アフリカ随一の広大な土地を持つ国である。面積は、二百三十八万平方キロ、日本の六倍以上に及ぶ。

だが、その多くは砂漠で、アトラス山脈の北側の地中海沿岸に人口が集中している。その沿岸地域は、一年を通じ気候は温暖で、夏の間、ほとんど雨は降らない。

首都のアルジェは、北緯三七度、東京よりわずか北に位置している。

八月の強い日差しが、頭上を照りつけ、空港は明るく輝いていた。乾いた風が吹き、爽やかな暑さであった。

入国審査を終え、携行荷物の引取り場所に入った。航空機から降ろされた旅行鞄がターンテーブルに乗せられ、ぐるぐると回っている。乗客は次々と自分の鞄を引き取り、税官吏の監視する通路を通って空港の外に出て行く。

私の鞄は、いくら待ってもターンテーブルの上に乗って来ない。荷物のないテーブルは空回りを始めた。荷物を待つ二、三人の乗客が取り残され、空のターンテーブルを見ている。

私は、痺れを切らして航空会社の職員に詰め寄った。

「私の荷物が出て来ない。どうしたわけだ。パリのオルリー空港で積み忘れたのではないか。早速調べてもらいたい」

「この便は、オルリーからアルジェ空港までの直行便ですから途中での紛失は、考えられません。あなたの言うとおり恐らくオルリー空港で積み忘れたと思われます」

エールフランスの職員は、早速オルリー空港に問い合わせたが、すぐには見つからなかった。そこで、ひとまず空港を出て翌日まで連絡を待つことにした。

空港には、ジェトロ・アルジェ事務所瀬藤所長が出迎えてくれた。

彼の車に乗り、道路脇の椰子並木を眺めながら三十分ほど走って、アルジェ港のすぐ前にあるホテル・アレッティ（現サフィーホテル）に到着した。

このホテルは、ジャン・ギャバン主演のフランス映画「望郷」のロケに使われたホテルとして有名である。

翌日は、早速アルジェ事務所を訪問し、東京本部に安着電報を打ち、銀行口座を開設。先に到着していた展示装飾業者、乙仲業者との業務打ち合わせの後、日本館に割り当てられた展示場を視察した。

荷物紛失後、毎日エールフランスのアルジェ事務所に電話したが、鋭意捜索中であるとの一点張りである。

一週間後にようやく見つけたとの連絡があった。

そこで荷物をホテルまで届けるよう依頼したが、聞き入れられなかった。

「何故ホテルまで届けない。荷物を紛失したのは、エールフランスの責任である。わざわざ空港まで引き取りに来いとは、どうした訳か」

「確かにその通りですが、この国では本人でないと通関が出来ないことになっています。航空会社は、代行が出来ないのです」

私は、仕方なくタクシーを飛ばして、空港まで荷物を引き取りに行った。

しばらくホテル・アレッティに滞在していたが、宿泊費が高すぎて出張旅費では賄いきれない。事務局員全員が同じ悩みを抱えている。より安いホテルを探したが、治安と環境が良くて手頃な値段のホテルは、見つからなかった。

そこで、お互いに費用を出し合って共同でアパートを借りることにした。

アルジェ事務所の現地スタッフ、オルシェ氏があちこ

ち探し、五階建アパートの三階にある三ＬＤＫのアパートを見つけて来た。そのアパートには、五人家族の居住者がいた。その家族が二カ月間だけなら自分の住居を明け渡して貸しても良いというのである。国から借りているアパートを私たちに又貸しして、自分たちは、その又貸し期間中、親戚や知人の家に仮住まいするという。

家賃は、電気、ガス、水道込み、家具、寝具つきで一カ月日本円で約六十万円であった。ちなみにそのアパートの居住者が国に払う家賃は、一カ月一万円足らずである。二カ月分の家賃の差額で洗濯機、冷蔵庫、テレビなどの電気器具や家具などを買いそろえる計画であるらしい。

私は、したたかに生きるアルジェリアの庶民の知恵を垣間見る思いがした。

それでも私たちにとっては、一日二万円程度の宿泊費にしかならない。それを五人で負担すれば、一泊四千円程度で済むため、大いに助かった。

食事は、自炊で当番制とし、交替で行うことにした。

こうして現地に派遣されたスタッフが、寝食を共にする共同生活が始まったのである。

三、日本館の設営

山下事務局長がアルジェ到着後直ちに、ジェトロ・アルジェ事務所の一角に見本市事務局を設け、本格的に日本館の設営準備に取りかかった。

日本館は、見本市会場正面ゲートを入ってすぐ右に位置している。そのため目に付き易く、入場者の多くは、まず日本館を訪れる。

娯楽の少ないアルジェリアでは、国際見本市の見学は、市民の楽しみの一つであり、国にとっては国威発揚の場であった。そうしたこともあってか、会場はいつも入場者で埋め尽くされる。

開会式には、例年大統領も参列する。初めて日本が参加するとあって、開会式直後、最初に日本館を訪れることが決まった。

それだけに手が抜けない。開会式の当日の九月二十一日までには、何としても会場の設営を終了し、出品物を展示しなければならない。

ジェトロが取りまとめた各社の出品物はすでにアルジェ港に到着していた。だが、八月二十五日の時点では、まだ会場への搬入は行われていなかった。大規模な国際見本市のため、アルジェ港が混雑し、荷揚げ作業が遅れているのだ。早速、乙仲業者の石川組の石川常務に、見本市貨物の搬入を急ぐようアルジエリアの港湾荷役業者に督促させた。

石川常務の努力により、会場に続々とパネルなどの展示用装飾品、工具類などが運び込まれ、会場内で通関が行われた。通関は大したトラブルもなくスムースに運んだ。政府高官から税関職員に対し、通関事務をスムースに執り行なうよう指示があったに違いない。税関職員としても、見本市の滞りない開催が重要であることを認識していたようである。

ところが、レセプション用として使う酒、たばこ、食料品などは、容易に輸入が許可されない。

そのことは事前の調査で分かっていた。そこで、アルジェリアの日本大使館に依頼し、外交貨物として輸入申請手続きを行うことにした。幸い、レセプションの主催者は、駐アルジェリア日本大使と日本館長の連名であるので容易に事が運んだ。

見本市資材が会場に運び込まれ、スタンドの設営も始まる頃、ジェトロ・パリセンターから東間、加戸の両職員が応援のため、アルジェリア入りした。二人とも流暢なフランス語で、アルジェリア人のスタッフに的確な指示を与え、事務局には、なくてはならない存在となった。

パイプなどの基本装飾資材を取り出し、早速スタンドの設営に取りかかった。設営作業は、ジェトロへ出向している施工業者の和田事務局員を中心に行われ、九月二十一日の開会式の前々日までに政府ブース、商業ブースとも組み立て、装飾、給排水工事をほぼ完了することが出来た。

しかし、電気工事に関しては、アルジェリアの電気工事請負業者の作業が遅れ、開会式直前まで工事をする破目となり、薄氷を踏む思いであった。

開会の日も間近に迫った。会場の各ブースのアテンダント兼レセプション要員として才色兼備な女性と有能な男性事務員を臨時に雇用しなければならない。

アテンダントは、十人の募集に対して三十人ほどの応募があった。事務員は、十人の応募者の中から三人選んだ。他に個人タクシーの運転手を車ごと五人雇った。

アルジェリアは、アラブ諸国のイスラームの中では、その戒律は、比較的緩やかであった。若い女性は、頭を布で隠し髪は見えないようにしていたが、顔までチャドルですっぽり覆っている人は少ない。

夜が白み始めると、モスクの尖塔に備え付けられたスピーカーから祈りの声が流され、朝の礼拝が始まる。

私は、毎日その礼拝に起こされ、イスラームの国にいることを実感した。

礼拝は、一日五回メッカに向かって行われる。一年の礼拝時刻表は、太陽の運行に合わせて作成されていて、その時間に各自作業を中断して行う。本来モスクの中で、集団で行うのが最も望ましいとされているが、仕事の都合によって、ある程度の時間的ずれは許される。

スタンド設営の職人、事務職員を問わずイスラームである限り、この戒律は守られていた。

アルコール類は、戒律で禁じられているが、アルジェ

リアではそれほど厳密ではない。葡萄酒の生産輸出国であり、国産のビールもある。

普段は、口にしないが、何か特別な行事がある時などはアルジェリア人も飲んで生活を楽しんでいた。

アルジェリアの人口の八十パーセントは、アラブ系のイスラームである。だが、古くからアルジェリアに住んでいたベルベル人も人口の二十パーセントほど占めている。一口にベルベル人といっても色々な種族に分かれ、その源流は異なっている。

かつて地中海に君臨し、ローマ帝国と覇権を争ったカルタゴの末裔たちも、ベルベル人として一括りにされているのである。

事務員やアテンダントの採用に当っては、フランス語が読み書きできることを条件とした。

義務教育は六歳から十六歳まで、アラビア語によって行われ、学費は無料である。フランス語は、高等学校以上で本格的に学ぶことになるが、高等教育を受けたほとんどのアルジェリア人は、何不自由なくフランス語の読み書きが出来るようになる。

三人の事務員のうち一人はベルベル人であった。アテンダントにもベルベル人が三人混じっていた。ベルベル人は、アラビア語教育よりフランス語教育を好んで受け入れ、義務教育までフランス語で行われている。

アラブ人は、概して色が浅黒く彫が深い。その上精悍な日をしている。

それに引き替え、ベルベル人は、色白で、髪は薄茶色、中には金髪の女性もいた。事務局で雇ったベルベル人の青年は、フランス人といっても何の疑問も浮かばないほどフランス的な雰囲気を漂わせていた。

四. 鞄の置き忘れ

九月も半ばを迎え、開会の準備に追われる毎日が続いた。

私は、日本人スタッフとともにジェトロ・アルジェ事務所の近くのレストランへ昼食に出かけた。

開会までにかかわる諸準備状況の話題に夢中になり、何を食べたのか、いくら払ってレストランを出たのかも覚えがないほどであった。

私は、事務所に戻ってソファに腰を下ろすと、すぐ鞄を置き忘れたことに気が付いた。ほんの二~三分しか経っていなかった。

「しまった。鞄をレストランに置き忘れた」

慌ててレストランに引き返した。私たちが座っていた座席には、すでに後から来た客が座っている。

「ここに鞄がありませんでしたか。置いてあったはずですが」

私は、そこに座っている客に問い質しながら、そのテーブルの周りを探した。だが、そこに座っていた四人の客は、迷惑そうにお互いの顔を見合せるだけである。

そこで、店主に鞄の届け出がなかったかどうか聞いてみた。

「そういえば、二人連れの男が、その席に座ったと思ったら食事を注文することもなく、すぐ店を出て行った。その時、鞄を持っていたように思う。店に入る時は、何も持っていなかった。なにせ昼の時間帯でいそがしく、空席待ちの客もいる状態だったから、詳しくは、覚えていない」

「その二人の仕業に違いない」

その話を聞いた途端、私は、鞄が持ち逃げされたものと判断した。

すぐに警察に通報し、警官の派遣を依頼するよう店主に頼んだ。

五分後に二人の警官が来た。私から事情聴取をし、警察は、すぐ盗難事件と断定した。

鞄の中には、見本市資金を引き出すための小切手帳、パスポート、帰りの航空券、わずかな現金、作業ノートが入っている。

私は、一瞬、体から血の気が引いて行くのを感じた。立っていられないほどであった。

銀行には、アルジェ見本市の資金が預けてある。その金を引き出すことの出来る小切手帳だ。出納責任者である私は、常にその小切手帳を鞄に入れ所持していた。

もし、わたしのサインが偽造され、その金が引き出されることがあれば、重大な過失責任を問われ、ジェトロ退職の憂き目をみることになるに違いない。悪いことには、そのサインは一緒に入っていたパスポートのサインと同じである。犯人にとって偽造は、容易に出来る。

私は、翌日銀行の開く一時間前から、盗難証明書を持って扉の前に立った。その扉が開くのを待ちかねて窓口に走り込み、口座番号を変える手続きをした。

小切手による預金引き出しは、危険であると察知したのか、その後、持ち去られた小切手による被害は一切なかった。

銀行を出るとすぐ、在アルジェリア日本大使館を訪れた。事情を説明し、パスポート再発行の申請を行い、三日後には、新しいパスポートを入手することが出来た。

航空券についても盗難証明書を提示し、フランス航空のアルジェ支店に再発行を依頼した。同店は、発券元である東京支店に問い合わせ、その航空券を発売したとの確認を取った後、私に帰路の航空券を手交してくれた。

鞄は、全く手掛かりはなく、盗難のまま最後まで見付からなかった。したがって、その中にあった現金は、諦めるより仕方がない。日本円にして二万五千円程度であったので、私は、その金を自費で穴埋めした。

最後に残った問題は、パスポートに押されていた入国を証明するスタンプである。新しいパスポートにはそれ

がない。

アルジェ事務所の現地スタッフのオルシェ氏に、そのスタンプの代わりになる証明書を入国管理局から取り付けるよう再三交渉に当らせたが埒があかない。

痺れを切らした私は、直接入国管理局に出向き、局長に面談を求め、早急に出国許可を出すよう要請した。

「盗難証明書にあるように、私のカバンが置き引きされ、その中にパスポートが入っていたが出て来ません。やむを得ず日本大使館に依頼し、パスポートをこの通り再発行して貰いました。しかし、この再発行のパスポートには、当然ながら入国のスタンプがありません。どのような形式でも構いませんが、出国できるように取り計らって頂きたいと思ってやって来ました」

局長は、私の話をじっと聞いて理解を示した。

「事情は分かりました。あなたは、何月何日に当国に入国されましたか。その日にちを教えてください。その日の入国カードの保管場所に案内しましょう。入国カードをご自分で確かめてみてください。そこにあなたのお書きになったカードがあれば、確かに入国した証明になりますので、簡易手続きで出国できるようにいたしましょう」

局長は、私を入国カードの保管場所に案内した。その保管場所は、入国管理局の三階にあり、薄暗い部屋であった。私が入国した日のカードのケースを取り出し、その中に私のカードがあるかどうか、私自身に確かめさせたのである。

その日フランス航空でアルジェ空港に入国した人たちのカードを一枚一枚丁寧に括って私は、自分の記入したカードを探した。

私のカードは、百枚目くらいにあった。

「ここに私の入国カードがあります。今ここでサインをしますから、それと照合して確認してみてください」

私は、高ぶる気持ちを抑えきれず、いささか興奮気味で言った。

局長は、入国カードに記載された私のサインとその場で書いたサインを照合し、それに再発行された新しいパスポートのサインを見比べて、間違いのないことを確認すると、短冊のような紙に、当日入国したことを証明する文言を書き込み、入国管理局の公印を押してその上に彼の名前をサインした。

「これによって、あなたはいつでも出国できます。よかったですね」

こうして私の不注意による事故は、それほどの大事に至らず事なきを得たのである。

（つづく）

北上夜曲考

新井　宏

カラオケは苦手であるが、お付き合いに「北上夜曲」を歌う。もう一曲となると「琵琶湖周航の歌」で間に合わせ、時には格好つけて「テネシーワルツ」を英語で歌うこともある。

昭和三十六年、紅白歌合戦でダークダックスが「北上夜曲」を歌った。その年の春、私に青春の彩りを添えてくれた「君」はそっと去っていった。

もうセピア色の中に霞んでしまったが、中学三年生の「テネシーワルツ」に始まり「野菊の如き君なりき」を経て、「北上夜曲」に至るまでの九年間であった。

その「去り行けし君」は、難病を患い、平成十年に六十四才の若さで亡くなっていた。賀状の交換が途絶えてから数年後のことであり、私が韓国に通い始めた頃であった。

そのことは、共に学んだ荏原四中が統廃校されるというので、同窓会の案内を送った時に初めて知った。ご主人からの丁重な返信には、病気の経過の後に「……生前、中学校時代の話はよく聞かされました。荏原四中の思い出は彼女の生涯の強い思いであったと思っております……」と添えられていた。

さて、最近になって、インターネット上で「北上夜曲」が盛岡第一高等学校の寮歌だったという話に出会った。マヒナスターズと多摩幸子の「甘ったるい歌謡曲」とばかり思っていたのに、実は戦前の学生歌であり、作詞者・作曲者も判らぬまま、歌声喫茶で流行っていたというのである。その方が我が青春を飾るにふさわしい。そして「北上夜曲」を調べ始めた。

匂い優しい白百合の　濡れているよなあの瞳
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の月の夜
宵の灯点すころ　心ほのかな初恋を

想い出すのは　想い出すのは　北上河原のせせらぎよ
銀河の流れ仰ぎつつ　星を数えた君と僕
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の星の夜
僕は生きるぞ　生きるんだ　君の面影胸に秘め
想い出すのは　想い出すのは　北上河原の初恋よ

北上夜曲の誕生

調べてみると、簡単に判る事であるが、戦前に「盛岡第一高等学校」などという学校はない。だから寮歌ではあり得ない。しかし歌声喫茶で作詞者・作曲者不明のまま「寮歌」のように歌われていたことは確かである。だから歌詞も曲もバリエーションが多く、世に出た経過にも諸説あった。通説を追いかけてみる。

昭和三十六年、雑誌『サンデー毎日』に、北上川の紹介として「北上夜曲」の歌詞が引かれていた。その一部に誤りがあるのに気がついたのが、作曲者の安藤睦夫である。

安藤は雑誌社に連絡して、盛岡一高と白百合女学院の生徒間の悲恋と言われていたことを否定、作詞者が菊池規であること、本来の詞と曲、更には「北上夜曲」の誕生した経過を明らかにした。

十七歳の水沢農学校生の菊池規と十六歳の八戸中学校生の安藤睦夫が、水沢(現奥州市)で出会って意気投合、翌年の昭和十六年二月に菊池規の「北上川のささやき～今はなき可憐な乙女に捧げる歌」と題した詞に、安藤睦夫が曲をつけて「北上夜曲」が誕生したというのである。

そして、ビクター、キング、東芝など六社が競って二十二種類のレコードを発売、日活など三社が映画を競作するというセンセーションが巻き起こった。

歌詞は、菊池規が水沢農学校在学中、下宿先近くの女学生に抱いた淡い初恋を歌ったものとされるが、実は初恋相手の女学生は存命で、その噂を迷惑がっていたとも伝えられている。文学少年であった菊池規は、岩手師範学校を出て、盛岡市内の小学校長を歴任、平成元年一月二十六日肺癌の為六十五歳で亡くなっている。寡黙のひとだったようで、「初恋」の事情をあまり語っていない。

一方の作曲者、安藤睦夫は、八戸中学から盛岡高等農林学校を経て、岩手県種市町の町会議員や農協組合長を歴任、作曲のかたわら作詩も行い、「北上夜曲」についても、対談や書き物に残している。平成十九年一月九日急性肺炎の為八十二歳で亡くなった。

「北上夜曲」の誕生の経過については、安藤睦夫が語っているし、作家の三好京三も「北上夜曲」(『北上川神楽囃子』所収)のなかで紹介している。

ふたりが出会ったのは、安藤睦夫の叔父で、水沢農学校の配属将校だった清蔵の下宿である。大酒飲みで下宿料さえ滞納していた清蔵に、睦夫が父から言いつかってお金を届けに行った時、たまたま水沢農学校生で、郷土の詩人に憧れる菊池規が詩作ノートを持って来ていた。

ギターと作曲に夢中になっていた音楽少年の安藤睦夫は、菊池規と意気投合し、菊池の詩に曲をつけることを約束する。そして、菊池は「北上川のささやき～今はなき可憐な乙女に捧げる歌」と題する詩を彼に送った。

安藤は学年末試験が始まるという夜に曲を書き上げ、試験が終わると、ギターを携え、菊池の待つ盛岡の岩手師範学校へ向かう。「教師の卵たちは、ほとんどうっとりとして聞き入り、終わるとはげしく手をたたいた」という。題名はその時に「北上夜曲」と付け変えられた。それが昭和十六年二月のことである。

戦時下にありながら、甘く初恋を歌う「北上夜曲」がひそかに広まっていったのは、何よりも師範学校を卒業した教師たちによるところが大きいと思う。

しかし、もうひとつのルートとして、おそらく安藤睦夫の叔父の清蔵があったと思う。清蔵は、水沢農学校の配属将校の後に、黒沢尻中学の配属将校に転ずるが、その二年後の十八年には中尉として現役に復帰し出征、その壮行会の席で「飲み助叔父ァ、睦の作った流行歌でお別れしァんす」と美声で「北上夜曲」を披露したという。

話のわかる配属将校として、「北上夜曲」を配属先の中学校で生徒達に教えていたのではなかろうか。残念ながら、安藤源蔵は、昭和十九年の「玉砕ピアク島」で戦死する。そう言う時代であった。

昭和十六年は太平洋戦争の始まった年である。電波統制下のラジオは、軽音楽をいっさい廃して、軍歌や愛国歌を中心とした軍国調のプログラムに切り替えられた。そんな中で、「北上夜曲」の記憶が、わずかではあるが記されている。

中村守男の『私の北上夜曲』には、昭和十八年の夏、学徒動員で戦車隊演習場の抜根作業に来ていた中学五年生が、「北上夜曲」を歌っていたとある。また、三好京三も同十八年に一関中学で、相撲部の主将にして柔道の猛者である男が甘いメロデーの「北上夜曲」を歌ったことに驚いている。八戸中学、黒沢尻中学、一関中学、盛岡中学などの岩手県下中学校では、既に「北上夜曲」が流行していた。そこに安藤清蔵の影を見る。

このようにひそかに流行していた「北上夜曲」は、戦後になると岩手から上京した学生達を通して「寮歌」のように全国に広まって行く。その一方で、昭和三十年代になると歌声喫茶が流行、集団就職で上京した若者等によって、歌詞が変えられ歌い継がれる。岩手師範学校の卒業生たちが、教え子たちにひろめたのに違いない。

作者不詳のまま歌声喫茶で流行し始めていた頃、朝日

新聞は昭和三十五年十二月十四日付けで、学生達の好きな歌として取り上げ、高校生同士の悲恋を描いた歌と紹介している。原詩は岩手が生んだ石川啄木かも知れないとも書かれている。

北上夜曲の形式

「北上夜曲」を口ずさむと、似た語調や階調に気付く。それは七五調の詩に八分の六拍子のリズムを付けたものに集中している。思いつくままに挙げると結構ある。

北上夜曲（菊池規作詞・安藤睦夫作曲）
にーおいーや　さーしいーー　しーらゆーり　のーー

惜別の歌（島崎藤村作詞・藤江英作曲）
とーおきーわ　かーれにーー　たーえかーね　てーー

あざみの歌（横井弘作詞・八洲秀章作曲）
やーまにーは　やーまのーー　うーれいーあ　りーー

愛国の花（福田正夫作詞・古関裕而作曲）
まーしろーき　ふーじのーー　けーだかーさ　をーー

みかんの花咲く丘（加藤省吾作詞・海沼実作曲）
みーかんーの　はーながーー　さーいてーい　るーー

いずれも、詞と曲を入替えても簡単に歌える。琵琶湖周航の歌（小口太郎作詞・吉田千秋作曲）もそのバリエーションである。

この他にも、七五調をやや外れるが、早春賦、宵待草、浜辺の歌、仰げば尊し、ゴンドラの唄、七里ヶ浜の哀歌、などが八分の六拍子で、ちょっと古風でロマンチックなのが共通する。

外国の歌にも、モルダウ、ローレライ、ホフマンの舟唄、野ばら、きよしこの夜などの名曲がある。その中でもスメタナの交響詩『我が祖国』第二曲「モルダウ」は、私の葬送の曲として勝手に決めているほど気に入っている。合唱曲としては、平井多美子の訳詞が良く歌われているが、出だしのメロデーも「北上夜曲」に似ているし、しかも七五調で八分の六拍子である。

どうも、八分の六拍子には「水」に関係する曲が多い。いま改めて例を挙げて見ると、北上夜曲を始めとして、モルダウ、琵琶湖周航歌、浜辺の歌、ゴンドラの歌、七里ヶ浜の哀歌、ローレライと続く。全て気に入りの名曲ばかりである。

だから、日本には、このように八分の六拍子の名曲がたくさんあるかと思うと、それは大きな誤解なのである。

実は、野ばら社の『日本の歌』全七集を見ると、輯録された千六百六十五曲の内に八分の六拍子はたった二十七曲しかない。しかも、その内の二十一曲は戦前のもので、昭和四十年以降の作品はわずかに一曲である。

このことは、名曲の歴史としてよりも、むしろ文化・社会現象として論評すべきテーマである。だからもう少し立ち入ってみる。そのために作成したのが表1である。

表1 のばら社の『日本のうた』に載る日本の名曲1665曲の中
6/8拍子の曲は27曲しかない。その内から更に20曲を選んで示す

曲　名	年	詩式	第一小節の歌詞
あおげば尊し	1884	八六	仰げば尊し　我が師の恩
＊灯台守	1889	八六	こおれる月かげ　空にさえて
＊ローレライ	1909	八六	なじかは知らねど　心わびて
＊野なかの薔薇	1909	七六	童は見たり　野なかの薔薇
＊七里ヶ浜の哀歌	1910	八八	真白き富士の根　緑の江の島
早春賦	1913	七七	春は名のみの　風の寒さや
浜辺の歌	1913	七五	あした浜辺を　さ迷えば
ゴンドラの唄	1915	七七	いのち短し　恋せよおとめ
琵琶湖周航の歌	1915	七五	我はうみのこ　さすらいの
浜辺の歌	1918	七五	あした浜辺を　さ迷えば
宵待草	1918	七五	待てど暮せど　来ぬひとを
＊モーツァルトの子守歌	1924	七七	眠れよい子よ　庭や牧場に
＊ヴェニスの舟歌	1926		棹さす小舟の　舵おたえ
愛国の花	1937	七五	真白き富士の　気高さを
坊がつる讃歌	1940	七五	人みな花に　酔うときも
北上夜曲	1941	七五	匂いやさしい　白百合の
惜別の歌	1945	七五	遠き別れに　たえかねて
みかんの花咲く丘	1946	七五	みかんの花が　咲いている
あざみの歌	1949	七五	山には山の　うれいあり
哀歌(谷村新司)	1978	七五	体に残る　傷でさえ

＊外国の曲による唱歌など。原曲の作曲年ではない。

八分の六拍子の名曲の内、更にベスト二十を選んで年代順に示した。

「北上夜曲」は昭和十六年の作曲であるから、明らかに戦前であるが、流行したのは昭和三十六年である。

同じように島崎藤村作詞の「惜別の歌」も終戦直前の作曲であるが、小林旭らによって流行したのは「北上夜曲」と同じ昭和三十六年である。更に「坊がつる讃歌」に至っては、昭和十五年の広島高師の「寮歌」を芹洋子がＮＨＫの「みんなのうた」として歌ったのが昭和五十三年である。

これら三曲はいずれも戦前に誕生しながら、昭和三十六年以降に流行し、八分の六拍子の名曲の棹尾（掉尾）を飾ったのである。それ以降には、谷村新司の「哀歌」しか見当たらない。

すなわち、純正の戦後の名曲で八分の六拍子のものは、「みかんの花咲く丘」と「あざみの歌」くらいしかない。

しかし、実を言えば、どの名曲集にも採譜されていないが、もう一曲ある。木下忠司の「そばの花さく」である。昭和二十六年の映画『カルメン故郷に帰る』の中で挿入歌として、急遽作られた曲で、正式の楽譜がないらしい。二番の歌詞は「からまつの林をぬけて、岩清水湧くほとり、白樺は白く気高く、さ霧に濡れて立つよ」となっている。

「そばの花さく」が即興の曲とすれば、昭和二十一年の「みかんの花咲く丘」も、放送に間に合わせるために、二時間で作曲されたという。そこ

から伺えるのは、八分の六拍子の作曲など、素養ある作曲家にとっては、極めて簡単に作れたと言うことである。それなのに、なぜ八分の六拍子の曲が流行しなくなったのであろうか。

それは日本の音楽教育において、明治期に大きな比重を占めた八分の六拍子の外国曲が、大正になり、古来の邦楽のリズムに押し戻されたことにあると思う。邦楽系は能楽をはじめとして、四分の二拍子や四分の四拍子が大部分である。それに対して、詳しくは調べていないが、外国では、野ばら社の『世界の名歌(原詞付き)』をみると、百二十一曲中に八分の六拍子の曲が十九曲もある。韓国にも八分の六拍子が多い。どうやら八分の六拍子が少ないのは、日本の特殊性らしい。

もうひとつの要因は、戦後の学校教育において画一的に親しまれた「唱歌」が廃されたことを挙げねばなるまい。それと共に、七五調や五七調の文語系の定型詩がすたれたことも大きな要因であろう。

さて、「北上夜曲」に戻ろう。安藤睦夫の「北上夜曲」に影響を与えた曲は何であったろうか。それは、表1に示した名曲の流れから見て、おそらく古関裕而作曲の「愛国の花」である。

戦意高揚を担った軍歌でありながら、そのメロデーは美しく、歌詞も「真白き富士の気高さを、心の強い楯として、御国につくす女等は、輝く時代の山ざくら、地に咲き匂う国の花」と気品がある。

戦後になって、歌唱が禁じられていたはずなのに、疎開先の村の演芸会で聞いた記憶がある。きれいな女学生が歌っていた。

石川啄木の影響

「北上夜曲」の作者不明であった頃、当然のように石川啄木作説も出ていた。郷里の偉人であってほしいとの願望もあったかも知れないが、年代は三十年も異なる。

それでは、詩人を夢見た十代の菊池規が、石川啄木から影響を受けていなかったであろうか。啄木が十九才の明治三十八年に刊行した処女詩集『あこがれ』を覗いて見る。

さっそく手応えがある。用語が似通っているのである。例えば(秋風高歌)と題する詩ひとつを取っても共通用語が続出する。「匂」が四個所、「白百合」が二個所、「せせらぎ」も一個所でているし、「胸」に至っては五個所も見いだせる。

これらは、詩的な用語であるから、偶然に一致する可能性も高いが、それにしても主要な単語のほとんどが啄木の若き日の『あこがれ』に数多く見いだせるのである。

もう少し統計的に示してみよう。「北上夜曲」の詩的な語彙について、啄木や藤村の詩集にどのように現われているか比較したのが表2である。

表2　北上夜曲の主要語彙と各詩集における出現数

詩集名	匂ひ	百合	瞳	ほのか	胸
啄木『あこがれ』	17	10	23	6	97
啄木『一握の砂』	0	0	1	2	4
藤村『若菜集』	3	1	1	0	7
藤村『落梅集』	0	2	0	2	26

その用語の多くを如何に啄木の処女出版『あこがれ』から採っているか明らかであろう。それに較べると同じ啄木の『一握の砂』からはほとんど採られていない。

かくして、菊池規が石川啄木の詩集、とりわけ啄木が堀合節子と結婚する前の『あこがれ』から多大な影響を受けていたことが判る。

さてここで気付くことがある。あるいは、菊池規は「北上夜曲」の「今はなき可憐な乙女」に、啄木の初恋の人で、後に妻となった堀合節子を擬していたのではないか。そもそも啄木は節子を「白百合の君」と呼んでいた。明治三十五年十一月の日記には「朝めさむれば、枕頭に匂ふ白百合のみ姿あり、せつ子の君、杜陵より新らしき写真たまひぬ」とある。

共に満十三歳のとき出会い、節子は啄木の才能を信じ「愛の永遠を信じたく候」と周囲の反対を押し切って啄木と結ばれる。しかし、啄木は生活苦もあって、節子につらい思いをさせ続ける。おおまかに言えば『あこがれ』は節子との結婚前、『一握の砂』は結婚してからの作品なのである。

もちろん『あこがれ』は、当時としては、欧米の詩を背伸びして模倣した才気あふれる作品に違いないが、所詮は幼稚な借り物であった。『一握の砂』のように後世に残る作品ではない。しかし、文学少年の菊池規の心を捉えたのは、ひたむきな堀合節子であり、その薄幸に自らの淡い「初恋」を重ね合わせてみたのではなかろうか。

それは、「白百合の濡れているような瞳の君」が、巷説のように菊池規を避けていた女性であっては欲しくないと思う私の願いからなのである。

野菊の墓

「桜貝の歌」という名曲がある。歌詞に「うるわしき桜貝ひとつ、去り行ける君に捧げむ」とある。曲調は八分の六拍子の名曲に似るが、残念ながら四分の四拍子である。八分の六拍子の名曲「あざみの歌」を作曲した八州秀章が、初恋の人との死別を歌った名叙情歌で、その歌詞の「去り行ける君」が、わが青春に彩りを添え、そしてそっと去っていった「君」に重なる。

思い出すことがある。

「君」が去り行く少し前のことであった。薄暗い夜道で、「君」は確かに「年上でなければよかったのに」と

つぶやいたようだった。中学校の同級生であるから、年上と言ってもほんの数ヶ月。おかしなことを言うと思いながら、実は、私の母から何か言われたのではないかと直感した。しかし、その時に、それを確かめる勇気はなかった。

そして今、伊藤左千夫の『野菊の墓』を再読している。

政夫は十五歳、いとこの民子は二つ年上の十七歳であった。政夫の母が病気のため、民子は政夫の家に仕事の手伝いや母の看護のために来ていた。最初は幼い仲良しに過ぎなかったが、周囲の目がふたりを緊張させ、愛を目覚めさせる。

しかし政夫に年上の嫁を迎える訳には行かない。政夫の母は、早めに芽を刈り取ろうと政夫を町の中学校に送り出し、いやがる民子に無理やり縁談を薦め、嫁に行かせてしまう。そして産後の肥立ちが悪く民子は亡くなる。

紅絹の切れに包んだ政夫の写真と手紙を手にして亡くなった民子の姿をみて、政夫の母は号泣して詫びる。

「もしかしたら母が何か言ったかも知れない」という思いは、「単にふられただけ」という現実から逃避したい気持となって、時と共に膨らんで行く。いずれの日にか、人ごとのように、それを軽く「君」に確かめることができるかも知れない。そんな風にも思っていた。

しかし、今や母も亡く、「君」も逝ってしまった。

妻にそっと意見を求める。

私の母を「良く知る」妻は、「あり得たこと」と言う。それは単なる私への思いやりかも知れないのだが……。

三十歳になる前に、結婚を決めた時、母がほっとした表情を見せたことを思い出す。単に息子の婚期の遅れを心配していただけかも知れないが、あるいは母も少しは重荷を背負っていたのかも知れない。

中学三年生の時に流行っていたテネシーワルツのパティ・ページも逝ってしまった。このテネシー州歌も「失恋の歌」である。野菊の墓も、北上夜曲も、実らなかった「幼い恋」を主題としている。桜貝の歌もそうだ。

七十五歳になった。いつか書き留めたいと思っていた「誰にもあった経験」を「北上夜曲考」を小道具にして書いてみた。それでも、この小文を書くのには、心の負担があった。青春とはそんなものなのだろう。

それにしても人生は不思議なものだ。考えてみれば、現在の幸せは、母が何か言ったお陰でもたらされたのかも知れない。

短歌　三十五首

曽根竣作

百舌の贄

ハンドルを握る手ときに汗ばみぬそろそろ免許返す頃かも

知らぬまに反射神経鈍るとふそりゃあ五十年乗り続ければ

〝兵か軍〟その文字あらば引っかかる己れ戦中の歌びととして

行く夏の友の名忘る飄として筆を噛みつつ立冬むかふ

盈月をはるか彼方にながめつつ夜光の杯をぼくから君へ

干涸びし蹼は百舌の贅なるかわがさ庭辺の落日に映ゆ

川とんぼすいと泳げるほとりなり水澄みしまま草雲雀来よ

散らばりて人語ゆき交ふすすき野に風聞絶えてしづかなるかな

荒れ庭に金木犀さはに咲き充てりそこのみハレムの如き華やぎ

健康のまじなひとして故郷よりの加母酢たっぷり煮付にかける

百舌…全長約二〇センチ、頭頂は赤褐色、性質は荒く、昆虫、トカゲ、カエルなどを捕食し、木の枝などに突き刺す習性は「モズの速贄」として知られる。

お人柄

こつこつと追ひくる靴音振り向けば人気もあらずガス灯点る

侘び寂びを今にし慕ふ在りつればニッポン男の子と過ぎし歳月

夜霧這ふ岸の辺りを鳥打帽古きがしばし海に溶け入る

こんなに下手い字だったかと歎きをり脳梗塞を軽度に済まし

ウェルズの世界史古りて齢経りて学窓恋へば霧のごとしも

iPS細胞にてノーベル賞、山中教授の快挙に拍手す

謙虚かな山中教授がつぶやくは多くの失敗あっての成功

サルビアの赤は日曜の色なるか空に一刷けいわし雲とび

使はれぬ珈琲グラスが所在なくダッシュ・ボードに時を喪ふ

夜のくだち木の実の落つる音かそか縄文人の耳もかくやと

ウェルズ…ハーバート・ジョウジ・ウェルズ。イギリスの作家・評論家。SFのジャンルを確立した「タイムマシン」「透明人間」の他に「世界史概観」が著名。

四番砲手

ビルの影ひと群れ屯し落人のさまに煙をふかしゐたりき

卓上に影ふかめつつ寒たまご朝日を受けて眠りより覚む

小市民の限界としてうたありきこれより先はオフ・リミット

その限界にけふ挑戦す小諸なる遊子ひたすら秋惜しみつつ

いちにちの終はりの駅に〝飢餓海峡〟ひたすらに読む背を丸めて

さらさらと落葉吹かれて冬ちかき公園の午後寡黙なりけり

格別の波乱も経ずて生き来しが未だ東北に豪雪しまく

速射砲の四番砲手の限りなし営庭にけふも残りたるまま

四番砲手…敵の戦車に照準をつけ、引鉄を引く役目。可成り訓練のきつい動作で、繰り返される。

鷹柱

早朝より雲脱がぬ山たたなはる時鳥のこゑ鋭くひびきゐて

崖下ゆトロンボーンのひびく昼冬日たけなは本郷界隈

薄倖といふ顔をしてどっさりと積りし落葉片付けてゆく

人が泣くごとくに電車止まりをり冬のいちにち昏れ方早く

乾坤の寒さつながり正直に双頬冷ゆる右の耳より

みんなみに向ひ気流を捉へたり差羽のむれの鷹柱立つ

往年の名画「モロッコ」わが裡の長き情緒をいまにゆさぶる

鷹柱…サシバの群が、秋に南方に渡るのに先立って、上昇気流をとらえて上昇する様子を言う語、多数の鳥が柱状に集まるところから。

関東管領始末記⑩

諫死と隠棲

千坂精一

一

関東管領になった上杉憲顕は、高師冬とともに当時東国の備えで鎌倉にいた副将軍足利直義に副えられた尊氏の嫡男義詮を補佐する関東執事に任ぜられてから二十二年が経っていて、もはや五十八歳になっていた。

そのあいだずっと越後國に蟄居させられていたのだが、憲顕に裏切りや謀叛を起こした罪悪感はなかった。

あのころ尊氏将軍には譜代の高師直一族が補佐し、弟の直義には外戚の上杉と同族の畠山が付いていた。

二人は性格がまったく違っていたのでそれぞれの特性を発揮して尊氏は侍所の指揮権と恩賞権を握って武士団を統率し、直義は司法、行政権を握って政務統轄した。

尊氏は武断派、直義は文治派であったから、不得手なことは相手に任せる典型的な二頭政治であった。

だが、司馬遷が著書『史記』のなかで、

「両雄は並び立たず」

と断言しているとおり、対峙したまま優劣がつかなかった楚の項羽と漢の劉邦でさえ結着がついているのだ。

当初は互いに協力し合って相手を立てるのだが、そのうち自我が出てきて対立するようになり、功績は奪い合い失敗は押し付け合って両者のあいだに蟠りが生ずる。

こうなるともう是非を糺して決着をつけるしかない。

尊氏・直義兄弟の場合は、尊氏が鷹揚な人だったから悶着は起きないかに思われたのだが、伏兵がいた。

高師直である。

師直は、副将軍直義の存在が気に入らなかった。

「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」

の譬えどおり直義に付いている上杉重能と畠山直宗までも睨まれ、虎視眈々と斃る機会を狙われていた。

直義と師直のあいだが険悪になると師直の刺客に重能と直宗が討たれ、重能の養子能憲に師直・師泰兄弟が報復されて相討ちとなったが尊氏・直義の溝は深まるばかりでついに敵対してしまい、直義が鎌倉で毒殺されてしまったことから主を喪った上杉・畠山は追放されたのであるから、飽くまでも内輪揉めで他意はなかったのだ。

憲顕が関東管領に就任した翌年嫡男憲将が病死した。

さらに、そのまた翌年の四月二十六日に初代鎌倉公方足利基氏が急死した。まだ二十八歳の若さであった。

五月二十九日、幕府の使節佐々木道誉がやってきて、

「将軍は、嫡男金王丸を後継者とするよう仰せられた」

旨を伝えた。

その二代将軍義詮も九月下旬ごろから体調を崩して臥すことが多くなってきたので、政務を十歳の嫡男義満に譲りもっとも信頼する一門の細川頼之を管領に付けた。

義詮には名医が集められて懸命の治療に当たったのだがいっこうに恢復せず、十二月七日ついに世を去った。

遺骸は父尊氏の眠る洛西衣笠山麓の等持院（京都市北区）に移され荼毘に付された。三十八歳であった。

これで初代将軍尊氏の嫡男義詮と二男基氏兄弟はともにおなじ年に世を去ってしまい、幕府と鎌倉府は三代義満、二代氏満の従兄弟同士の幼君に代替わりした。

二

翌應安元年・正平二十三年（一三六八）正月、関東管領上杉憲顕は新公方足利氏満の名代として上洛した。

そして、二月八日に新将軍義滿に謁して、

「御家督と近々御元服の儀を賀し奉る」

旨を言上した。

そのあと管領細川頼之と会談したおりに、憲顕は、

「東国も静謐を保っておりますゆえご心配なく」

そう胸を張って見せた。

だが、ちょうどそのころ武藏國では、憲顕上洛の留守を狙って平一揆の叛乱が起こっていた。

平一揆というのは、坂東平氏出身の河越氏（川越市）を中心にした比企の高坂氏（東松山市）らの一族に村山党の山口氏、下野國の宇都宮氏（宇都宮市）、相模國の三浦氏（横須賀市）らが加担し、吉野朝方の新田義宗（義貞三男）、脇屋義治（義助嫡男）らも挙兵に呼応して蜂起したのであるが、ことの起こりは河越氏と葛山備中次郎との所領争いからはじまったことであった。

急報を受けた憲顕は、関東は静謐を保っていると太鼓判を捺した手前もあって引っ込みがつかなかったが、

（幼い公方では抑え切れまい）

ことからやむなく細川頼之に事の次第を打ち明けた。

すると頼之は、意外にも、

利で河越城を陥とした犬懸朝房軍と合流した。
ただちに出陣した両軍は支城をつぎつぎに陥としていって宇都宮城を攻略し、宇都宮氏綱を降服させた。
そのあいだ憲顕は、ずっと足利の陣中で臥せっていたが、九月十九日に病歿した。六十三歳の高齢であった。
正月に上洛しているあいだに平一揆が蜂起して急ぎ鎌倉へ戻り、すぐさま出陣した無理が祟ったのであろう。
動乱の時代に生きて波乱の人生をおくり、鎌倉府の関東管領に就任してからはよく東国を治め、上杉氏磐石の礎を築いた憲顕は、一族によって伊豆國の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に丁重に埋葬された。法号は桂光道昌。
この報が幕府に届くと、管領細川頼之は十歳の少年公方を支えて鎌倉府の安泰を図ってきた功績を讃えてその死を悼み、後任に平一揆鎮定に尽力した犬懸朝房と憲顕の三男宅間能憲の二人を据えた。
この朝房と能憲のことを〈鎌倉の両管領〉といった。
この年の暮れ、十一歳の義満が征夷大将軍になった。

三

朝房と能憲の〈二人管領〉時代はめずらしく鎌倉は静謐を保っていたが、幕府の膝許が騒がしくなってきた。
足利政権が三代つづいて安定期に入り、その幕府が支えている京の朝廷が栄えていって吉野朝は萎んでしまうのではないかと懸念を抱いた楠木正儀が、いずこからか

「じつは、こちらも不穏の火種が燻ぶっております」
そう漏らして眉を顰めたのだ。
というのは、吉野朝の後村上帝が三月十一日に攝津國住吉（大阪市住吉区）の行宮で崩御された。
後醍醐、後村上帝とつづいた吉野朝の三代には第一皇子寛成親王が践祚された。九十八代長慶帝である。
幕府に対して強硬な態度をとりつづけていたその親王が即位されたのだから、侮っていては大動乱にもなりかねないということで幕府の緊張が頂点に達していた。
憲顕は細川頼之と互いの安泰を誓い合って四月上旬に急ぎ京を出立すると、東山道を通って上野國平井に入り、平一揆の動向を見定めておいて鎌倉に帰着した。
動乱拡大を懸念した憲顕は早期鎮圧を目指して鎮撫軍を甥の犬懸朝房に預け、公方氏満を奉じて出陣させた。
朝房は進軍の途中簗田縫之助に比企郡岩殿山の一揆軍掃討に向かわせて六月十一日にこれを破った。
つづいて河越城に籠もっている河越氏などの主力軍に総攻撃をかけて、十七日にこれを陥とした。
犬懸朝房を河越へ向かわせたあと、憲顕は三男宅間能憲に越後にいる新田の残党攻めを命じて出陣させた。
この合戦で七月十七日に新田義宗は敗死したが、従弟の脇屋義治は戦場を脱出して出羽國へ逃亡した。
これとは別に憲顕は五男憲春とともに本隊を率いて平一揆を唆した元凶の宇都宮氏綱攻めに向かい、下野國足

ひょっこり現われて将軍義滿に帰順を申し出たのだ。
正儀は以前両朝を和睦させようと熱心に交渉をすすめてきたこともあったが、二代将軍義詮と後村上帝の相次ぐ死去で中断してしまったことから吉野朝内部で内通と誤解され、身の危険を感じて雲隠れしてしまっていたのであった。まことに神出鬼没の不可解な人物である。
正儀の変節を知った吉野朝内の討幕強硬派たちは、
「楠木正儀赦すまじ」
そう息巻くと、めくじらを立てて探索に狂奔した。
将軍義滿は、赤松光頼らに援兵を命じて護衛させた。
正儀はあらためて入京すると、義滿に庇護を求めた。
それを契機にして吉野朝方の動きは依然活発になり、ことに一族のなかの和田氏らは体面を汚されたことに熱り立って、匿う幕府に積極的に攻撃を仕掛けてきた。
幕府はあらためて諸将に正儀助勢の出兵を命じた。
諸将は正儀のことを総力をあげてまで庇護するに価する人物ではないと判断していたので、そうまでして庇おうとする管領細川頼之に不信感を抱いて従わなかった。
怒った頼之は管領を辞して出家すると言い出した。
おどろいた義滿は直接諸将に命じて頼之の顔を立てたので、頼之もまた義滿の慰留に応じてことなきを得た。
だが、このことが火種になって燻りつづけていった。
頼之は少年将軍を思いのままに操っていると誤解されて顰蹙を買い、それが昂じて互いに反目し合った。

こうして幕府は内憂外患交々の不安定期がつづいたが、鎌倉府のほうは平穏のうちに管領が交替していった。
上杉憲顕が足利の陣中で歿して犬懸朝房と宅間能憲が管領になり、〈鎌倉の両管領〉といわれたことはまえに述べたが、そのうちの一人犬懸朝房が二年後に病を得て辞任し、一人管領になった宅間能憲も十年つとめて辞任すると、翌年四十六歳で病歿した。
この能憲のあとは憲顕の五男山内憲春が任じられた。
ところが憲春が管領になった翌年大騒動が起こった。
十二年まえ、初代鎌倉公方基氏の急逝で後を継いだ嫡男の少年氏滿は、二十一歳の青年公方に成人していた。
氏滿は乳母日傘で育てられたために我儘で我が強く、重臣や側近たちが屢々手を焼く扱い難い公方であった。
その氏滿は、ちかごろ野望を抱いて心が揺れていた。
氏滿は、おなじ従兄で一歳年長だけの義滿が将軍で、自分が鎌倉公方であることに不滿を抱きはじめていた。
鎌倉公方すなわち東国の将軍といっても幕府の正式組織では関東管領であって将軍の配下であり、同族の細川、斯波、畠山が交代で勤める管領と同格なのであった。
たしかに尊氏が末子基氏を東国の抑えに鎌倉へ派遣したときは関東管領であり、上杉氏はその執事であった。
基氏は、父が将軍であるあいだは不滿がなかったのだが、尊氏が逝去して兄義詮が将軍になると自分が配下にいることが不滿になり、組織上の立場を無視して、

（われは東国の将軍である）

ことを主張すると、東国を治める征夷大将軍すなわち鎌倉公方を僭称し、執事の上杉氏を関東管領に据えた。

基氏は実兄でも不満だったのだから、それが従兄ではなおのこと憤懣遣る方なく思っても不思議ではない。

氏満が欲求不満で悶々としているところへ京から密書が届いた。幕府の評定衆土岐頼康からであった。

先代将軍義詮が重病に倒れて十歳の嫡男義満に将軍職を譲ったとき、その傅役と政務の補佐を一任されて管領に据えられた細川頼之は、義満が少年将軍と侮られぬよう心配りして幕府重臣や守護たちに圧力をかけて心服を図り、京の大火で室町御所が焼亡するとそれを機会に庭園に四季おりおりの花を植えたことで〈花の御所〉と称ばれる華やかな室町新邸を造ったり、公家に引けを取らぬよう権大納言兼右大将に格上げしてもらって権威づけに奔走するなどして、懸命に義満を盛り立ててきた。

それらのことが幕府重臣たちのあいだで将軍を恣に操る管領細川頼之の専横ととられて、前管領斯波義将や評定衆土岐頼康らをはじめ幕府重臣たちの顰蹙を買った。

頼之を専横管領と極め付けたのは斯波義将であった。

義将は頼之に含むところがあった。

九年まえ、九州探題の後任を巡ってのことである。

義将は澁川義行を推したが、頼之が義満将軍の傅役と管領の権力で今川貞世（了俊）を任命してしまった。

細川、斯波、今川、澁川はいずれも足利将軍家の一門であるから、同族間の勢力争いだったのだが、斯波義将は面目を失ったことで以後頼之に遺恨を抱いていた。

また、おなじころ土岐頼康もまた南禅寺問題で頼之と不和になって、美濃國に帰ってしまっていた。

そんなことから二人は頼之打倒の機会を狙っていた。

斯波義将は頼之を失脚させて溜飲を下げればそれで事足りたのだが、土岐頼康の場合はより尖鋭的であった。

頼之が勝手気儘に育ててしまったために、贅を尽くして遊興に耽り、およそ武家の棟梁の自覚に欠ける義満を廃して鎌倉公方氏満を奉じ、頼之を追放して管領の座を奪いとり、幕府を掌握しようという野心を起こした。

そして、氏満に密使を送ってきたのである。

氏満は、かねがね内政干渉する頼之を嫌っていたので、

（頼之を廃するだけでなく、自分を将軍にしてくれる）

頼康の甘言に乗せられて、すっかりその気になった。

頼康の動向を知った頼之は、諸国の守護大名たちに、

〈謀叛人土岐頼康追討令〉

を発した。

その布令文は氏満の許にも届いた。

氏満は、土岐頼康に同心するための出兵なのに、幕府軍を装うことのできる幸運を密かに北叟笑んだ。

氏満は、直ちに関東の諸将に檄を飛ばして鎌倉に集結させると、管領憲春の兄憲方を総大将に命じた。

そして、軍団出陣の目前になって憲春を呼び寄せ、

「憲方には後刻伝えるが、鎌倉は幕府にではなく土岐頼康に加担する」

旨を伝えた。

寝耳に水の話に吃驚仰天し、顔面蒼白になった憲春は、

「お屋形様、それはなりませぬ。たとえ細川管領に非があろうとも討伐令の出ている土岐頼康に同調することは将軍家に叛くことになりまする」

そう理非を糺して懸命に制止したが、諭しても氏満は翻意せず、必死の諫言にも反発するばかりであった。

手を焼いた憲春は木曽義仲の例を出して、

「たとえ京を征して天下をおとりになろうとも遠征の軍勢を京に留めおくことはなりますまい。旭将軍の例もありまする」

そう再三再四翻意を迫ったが、氏満は土岐の甘言に嵌まってしまっていて冷静さを喪いただ譫言のように、

「われも足利の直系、従弟と雖も義満には劣らぬ」

を繰り返すだけで憲春の説得を諾かず、しまいには、

「問答無用。一両日中に進発せよ」

そう叫ぶと席を蹴り、足音荒く奥へ去ってしまった。

万策尽きた憲春の心に、ぽっかり穴があいた。

虚しさを引き摺って屋敷へ戻った憲春は苦悶した。

（管領は幕府から任命されたもので、鎌倉公方の補佐役であると同時に目付役でもある。公方を説得できぬとあってはもはや役職はつとまらぬ）

そう自問自答して決意を固めると、内室をよんだ。

なにごとならんと心配顔の内室に憲春は、

「にわかのことにて不審であろうが、思い立ったことがあるゆえそなたは今宵尼になってもらいたいのじゃ」

そうしずかに告げた。

「えっ。尼になれと仰せにござりまするか」

突然の要求に内室はしばし唖然として憲春の顔を見詰めていたが、やがて深く頷くと、

「鎌倉一の賢者ときこえの高いおかたの仰せなれば、よもやおたわむれではござりますまい。仔細あってのことでござりましょう。仰せのとおり尼になりまする」

そう素直に従うと、その夜のうちに髪を下ろした。

内室が尼姿になったのを見届けた憲春は、

「無体な所望をいたしすまなんだが、やがて思い合わせることがあろう」

そう労りの言葉をかけておいて、持仏堂に籠もった。

そして、血書の思いを込めて、

「ご謀叛叶うまじ」

の『諫言状』を遺して、永和五年、天授五年（一三七九）三月七日自害して果てた。

憲方はこの憲春の諫死を知っていたが、氏満の中止命令が出ないまま予定通り三月十日に軍団を率いて進発し、伊豆國三島まできたところで滞留して様子を窺った。

氏滿は憲春の死に驚愕してようやく悪夢から醒めると軽挙妄動だったことを悔んだがあとの祭りであった。

そして、幕府重臣や諸豪族たちの動揺を抑えるため直ちに軍勢を呼び戻すと、上杉憲方を関東管領に据えた。

こうして憲方は思い掛けなく弟憲春のあとを継いだ。

兄のあとを弟が継ぐならわかるが、兄が弟のあとを継ぐのは順序が逆だから、憲方は憲春の弟ではないかとの説があるが、『藤原姓上杉氏』の系図を調べてみると確かに憲方のほうが兄になっているから間違いない。

それでは憲春が嫡出子で憲方は庶出子なのではないかとも思ってみたのだが、系図の添え書は同腹であった。

万策尽きたのでこのことは定かでないとしておく。

いっぽう京では——。

土岐頼康と京極高秀の共同謀議が露見して怒り心頭に発した将軍義滿はみずから征伐の軍勢集めにかかったが、斯波義将が二人を庇って赦免を申し入れると同時に非は細川頼之にあると建言して頼之の追放を迫り、重臣たちも義将を支持したので義滿はやむなく二人を赦した。

腹の虫がおさまらぬ土岐と京極は諸将に細川頼之の非を呼び掛け、二人を支持する近国の諸将が団結して花の御所を囲み頼之の排斥を迫ったので、義滿はやむなく頼之の管領職を罷免して京からの退去を命じた。

罷免された頼之は出家すると屋敷に火をかけ、一族郎党を引き連れて讃岐（香川県）の領国へ帰っていった。

前に触れたが、初代鎌倉公方足利基氏が関東管領畠山國清を罷免追放したように、いかに将軍や公方と雖も諸将が団結しての訴えは抑えることができなかったのだ。

細川頼之のあとは斯波義将が再び管領に返り咲いた。

関東管領に就任した上杉憲方は、氏滿に幕府の混乱に乗じて速やかに義滿将軍に謝罪するように勧めた。

意気消沈していた氏滿は、憲方の勧めに従って瑞泉寺の古天和尚を使僧にして京へ送り義滿に謝罪した。

義滿は、斯波義将と土岐頼康の執り成しでやむなく氏滿を赦すと、上杉憲方の関東管領職就任を承認した。

こうして憲方、憲春兄弟が公方氏滿の危機を救った。

四

思わぬ事態が起こって弟憲春を喪ったものの図らずも関東管領職が転がり込んできた上杉憲方は、慣れぬ政務に慌ただしい歳月を送ってどうやら年の瀬を越した。

新しい年を迎えて新緑も過ぎようとするころ、北関東で火の手が上がった。下野國（栃木県）南部の半国守護小山義政が吉野朝に応じて挙兵し、北部の半国守護宇都宮基綱を攻めた。所領の競界争いが原因だったという。

両軍は宇都宮領の河内郡篠原（宇都宮市茂原町）で激突し、基綱兄弟が討たれて小山方の勝利に終わった。

公方氏滿は、所領の拡大を狙って濫りに挙兵し吉野朝

側に寝返った小山義政に激怒して関八州の諸将に討伐の檄を飛ばしておいて、管領憲方に出陣を命じた。

憲方は従弟の上總守護犬懸朝宗と木戸法季の軍勢を先陣に命じ、白旗一揆の協力を得て下野國へ向かった。

このとき、氏滿自身も武藏國大里郡村岡（熊谷市村岡）まで出向いて布陣し、戦況を窺った。

犬懸・木戸の両軍は大聖寺で小山軍を破り、本拠の祇園城（小山市）を囲んだので小山義政は降服した。

氏滿は、武藏府中（府中市）の高安寺で義政の使者を待ったがついに現れず、義政の降服は偽りであった。

騙された氏滿は直ちに派兵して鷲城を攻略したので、戦意喪失した小山義政は頭髪を剃って降服してきた。

憲方は義政の所領を没収してけりをつけたが、義政が再三叛いたので糟屋城を攻略し祇園城を火攻めにした。

義政は嫡男若犬丸と城を脱出して上都賀郡粟野の山中にある長野城（鹿沼市）に籠もったが、犬懸朝宗・木戸法季軍に攻撃されて義政はついに自害して果てた。

このとき嫡子の若犬丸は城を脱出して陸奥國まで逃れ、磐城田村郡の田村荘司則義、清包父子に頼った。

伝聞によれば、田村氏は坂上田村麻呂が蝦夷征伐の帰路ここに立ち寄ったとき残していった子の裔だという。

この関東動乱のあいだ京はなにごともなく打ち過ぎていて、将軍義滿は洛西に別荘北山殿を造営した。のちに夢窓國師を開山として鹿苑寺という禅寺にあらためた。

現在は金閣寺という別称のほうが有名になっている。

このころ管領上杉憲方は四方山に囲まれた鎌倉山ノ内に館を建てたので、〈山内殿〉と称ばれるようになる。

憲方は、父憲顯が関東管領就任のため越後國から鎌倉入りするとき、嫡男憲將が病弱だったため兄犬懸憲藤の嫡男朝房に譲ったのが口惜しく残念だったので、小山攻めで武名を挙げた朝房の弟朝宗に相談をもちかけた。

「越後は父が長いあいだ新田の残党狩りに傾注してようやく奪い取った由緒ある国であれば、父の武名を子々孫々にいたるまで伝えつづけてゆきたいと思っている」

そう告げると、一拍おいて、

「そこでどうであろう。山内と犬懸で関東管領を交替で勤めることにして越後守護を返してはくれまいか」

朝宗は、憲方の突然の申し入れに唖然としたが、犬懸家は鎌倉から近い温暖の地上總國守護であるので遠隔の寒冷地に未練はなく、関東管領職との交換であれば家格が上がって得策ではないかとの考えにいたった。

「越後國はもともと憲顯伯父上から預かった守護職ゆえお返しするのに異存はござらぬ。かわりに関東管領職を交替で勤めようとの仰せであれば否やはござりませぬ」

そうきっぱりと約束した。

憲方は朝宗の明快な返答を受けて胸の痞えが下りた。

「忝ない。憲孝のあとの管領は朝宗殿とお約束いたす」

憲方は上機嫌で朝宗の手をとり、上申を約束した。

の住人和田某、大和國宇陀郡の住人秋山、井谷ら十六名の武士の合計三十三名と十名の郎党にすぎなかった。

後亀山帝は十月二十八日吉野行宮を出発、奈良経由で閏十月二日に京到着、所縁の洛西嵯峨大覺寺に入った。

三日後に義滿の命により雨中を神器だけが大覺寺から土御門東洞院の後小松帝皇居に移されただけで、約定の譲國の儀式も両帝の対面もおこなわれなかった。

吉野朝側が一貫して主張しつづけてきた、

(足利方が降服してこれを赦す)

も曖昧のまま実現しておらず、合体といっても吉野朝側が降服した気配の濃い講和で終わってしまった。

しかし、これでともかくも五十七年間つづいた両統分裂の幕は閉じられたのである。

96後醍醐、97後村上、98長慶、99後亀山とつづいた大覺寺統の吉野朝、1光厳、2光明、3崇行、4後光厳、5後圓融、6後小松とつづいた持明院統の京朝とつづいた天皇両立の〈一天二君〉は解消されて、〈一天一君〉すなわち100後小松帝ただ一君ということになったのだ。

五

憲孝の辞任により憲方との約束どおり越後守護を返した朝宗が管領になり、山内・犬懸家の交代制になった。

朝宗は、まえにも述べたが復習すると、十五年まえに下野國(栃木県)の小山義政が吉野朝側に寝返って隣接

(善は急げ)

憲方は長兄憲将の養子に入れておいた末弟憲藥に越後守護職を与えて府中へ送り、越後上杉家を興させた。

憲方は、引退してから健康を害して、二年後の應永元年(一三九四)十月二十四日に六十歳で病歿した。

すると、管領憲孝も父憲方の喪に服したばかりの十一月三日に病気を理由にして辞任してしまった。

この憲孝が関東管領に就任して三箇月後の明徳三年・元中九年(一三九二)十月に京で大変革が起こった。

世にいう〈南北朝の合一〉である。

大覺寺統の吉野朝は、後醍醐帝の皇子で九州の経営を統轄していた懐良親王や伊勢國の謀臣北畠親房の末子顯能が歿してからは、すっかり零落してしまっていた。

時機到来とみた西国の大内義弘が解決の緒を掴み、京側は吉田兼熙、吉野側は吉田宗房らが具体的に詰めた。

そして、講和は、

一、大覺寺統後亀山帝から譲國の儀をもって神器を持明院統後小松帝に渡す。

一、今後の皇位は両統交互とする。

一、諸国の國衙領は大覺寺統、長講堂領は持明院統の支配とする。

の三條件で妥結した。

後亀山帝の帰京は行幸の儀礼を用いたが、供奉するのは僅かに廷臣十七名と名和党六名、楠本党七名、和泉國する幕府方の宇都宮基綱を斃したことではじまった小山攻めではつねに先手の大将として活躍してきた。

偽りの降服で一時逃れを繰り返していた小山義政を三年がかりで徹底的に追い詰めて三度目でついに自害させはしたものの、当主の嫡男若犬丸は取り逃してしまった。

それから五年経って若犬丸が常陸國(茨城県)の小田孝朝に匿われていることが判明すると再度出陣し、孝朝が難台山の男体城(笠間市)に立て籠もったところを一年がかりで攻め陥として小田直高を討ち取ったが、孝朝と若犬丸はまたも取り逃してしまった。

さらに八年後、こんどは若犬丸が陸奥國(福島県)の田村清包の許にいるとの情報を得て公方氏滿自身が出陣することになり、朝宗も先手をうけたまわって遠征し白河城(白河市)へ到着したところで田村も若犬丸も退散して行方知れずの報が届いたのでやむなく帰還した。

翌年正月、陸奥國會津まで逃げ延びた小山若犬丸はもはや身の置きどころがなく、ついに自害して果てた。

小山義政が吉野朝に寝返ってから十七年手古摺ったが、その吉野朝が統一されたからすでに五年経っていた。

朝宗は、この小山征伐にはつねに先鋒を承って武名を揚げたので、管領となるに相応しい箔をつけた。

小山の乱を平定した公方氏滿は翌年病に倒れた。

気弱になった氏滿は、朝宗に公方家の安泰を託した。

氏滿は死期を悟っていたのか、それから旬日を経ずして應永五年(一三九八)十一月四日に身罷った。享年四十歳、法名道全永安寺殿と称し瑞泉寺域内に葬られた。

三代公方になった滿兼はこのとき二十一歳であった。

管領朝宗は六十歳、祖父と孫ほどの年齢差がある。

だが、二人は親密な間柄であった。

朝宗は先代公方氏滿から幼児の滿兼を預けられ育ててきた。つまり朝宗は滿兼を守り立てる扶育係であった。

滿兼と朝宗は公的立場では公方と管領であっても、私的、つまり情においては親子同然だったのである。

だから、朝宗は滿兼をわが子か孫のように慈しんだ。

朝宗は、ただ只管に鎌倉府と公方の安泰を希った。

朝宗が気掛かりだったのは将軍家との関係であった。

まえにも述べたが、初代公方基氏は父尊氏から関東管領を命ぜられて鎌倉に赴任したのだが、二代義詮の代になると配下であることに不滿を抱いて、

(兄は西国の将軍であり、わしは東国の将軍である)

ことを自負して、勝手に、

〈鎌倉公方〉

を僭称したが、義詮も幕閣も取り合わずに異も唱えなかったので、いつか定着してしまい今日に至っている。

二代公方氏滿も、従兄弟同士でありながら義滿が将軍で栄耀栄華の限りを尽くしていることが不満で将軍の座に誘う土岐頼康の甘言に乗ってしまったことがあった。

祖父基氏、父氏滿の血を引く滿兼もまたおなじ叛意を

抱きはせぬかと心配で野心を起こさせぬよう腐心した。
満兼が公方になって最初に直面したのは陸奥・出羽両国の統治問題であった。
建武二年（一三三五）足利尊氏は征東将軍として鎌倉入りすると、斯波家兼を陸奥國探題に据えた。
だが、幕府の体勢が整うと管領府が設置され畠山國氏と吉良貞家が赴任してきて探題斯波家兼は解任された。
その後、義滿の代になって二代公方氏滿がおなじ従兄弟でありながら栄耀栄華の限りを尽くしている将軍を妬み、その落差に不満を抱いているとの情報が頻繁に届いたので義滿は叛乱の芽を摘むべく氏滿への懐柔策として陸奥・出羽二国の管領府を廃して鎌倉府に与えた。
これにより鎌倉府は、関東八箇国に奥羽二箇国を加え、東日本の十箇国を所管することになったのである。
氏滿はこの二国の統治に黒川御所（宮城県黒川郡大和町）を開設し、幕府の奥州探題だった斯波家兼の曽孫大崎（斯波）滿持を起用した。
しかし、四代つづいた大崎氏はもはや土着していて在地領主の伊達、田村氏らと親交を結び彼らに好意的だったので、鎌倉府にとっては油断のならぬ存在であった。
それが滿兼の代になって表面化してきたので、鎌倉府の安泰を憂えた管領朝宗は馬謖を斬る決断をした。
大崎滿持の黒川御所を廃し、新たに南陸奥安積（郡山市安積町笹川）に篠川御所、岩瀬森（須賀川市稲）に稲村御所を開設して、公方滿兼の次弟滿直を篠川に末弟滿貞を稲村に下向させ、陸奥國の支配強化を鮮明にした。
これでもし陸奥の有力豪族たちが謀叛しても、篠川・稲村の両御所が鎮圧防衛する二段構えが完成した。
管領朝宗の付け入る隙を与えぬ苦慮の策であった。

六

それから半年後に、最大の難事が降り掛かってきた。
それは足利公方家の存亡に係わる大事であった。
しかも、幕府の沙汰次第という歯痒い裁きであった。
事件は鎌倉府と関わりのないところで起こっていた。
九州探題今川了俊（貞世）が突然解任されて帰洛を命ぜられたのが抑々のはじまりであった。
不可解で納得ゆかぬ了俊が幕府から命ぜられたのは、
〈駿河守護〉
だったが、守護は甥の泰範なので名目に過ぎず、捨扶持の居候という変則な立場で居心地が悪かった。
そこで了俊は駿河府中を出て相模國藤澤に移住した。
了俊は無聊の慰めに鎌倉を遊覧しているうちに鎌倉府に出入りするようになり、氏滿と親交を深めていった。
氏滿は幕府内部から漏れた情報として、了俊の解任は将軍義滿が明との交易独占を企んでのことと教えた。
義滿の我慾の犠牲になった了俊は怒り心頭に発した。
将軍家に不滿を抱いている滿兼は了俊に同情した。

そのころ九州でまたも菊池武朝らが挙兵していて了俊の後任探題澁川滿頼から幕府に救援を求めてきていた。
義滿は、西国の雄大内義弘に救援討伐を命じた。
義弘は九州平定後も京に戻らず、朝鮮百濟王の後裔を活用して朝鮮や中国との交易を独占しはじめていた。
義滿は、義弘の粛清を謀って執拗に帰洛を命じた。
義滿の厳命で義弘は重い腰を上げて和泉國堺（大阪府堺市）まできたが、そこからは動こうとしなかった。
義弘から滿兼に密使が届いたのはこのときだった。
義滿を怨む了俊を仲介して謀叛を誘ってきたのだ。
内容は、関八州、陸奥、出羽十箇國の鎌倉公方滿兼と、周防（山口県東部）、長門（山口県西部）、石見（島根県）、豊前（福岡県）、和泉（大阪府）、紀伊（和歌山県）六箇国の守護大内義弘が提携して東と西から幕府を挟撃して倒そうというものだった。
滿兼は、倒幕の好機到来と義弘の誘いに乗った。
先代氏滿が土岐頼康に唆されたのとおなじであった。
滿兼の動きは次期管領の山内憲定から越後守護の兄房方に告げられ、七頭の評定衆で幕府に出仕していた房方から義滿将軍に報告されたが、義滿は陸奥、出羽の諸将を『御教書』で抑えていたので慌てることなく憲定に滿兼の行動を諫めるよう内書で指示したにすぎなかった。
だが滿兼は憲定の諫止を諾かず、稲村、篠川巡行と称して陸奥、出羽の諸将動員に鎌倉を出発してしまった。
いっぽう堺に滞留して動かぬ大内義弘に対して義滿は、僧絶海中津を派遣して上洛を督促させたが、義弘はこれまで幕府のために尽くしてきた数々の功績を挙げて、
「にも拘わらず、和泉、紀伊守護職を召し上げて討伐なさるとの噂が頻りゆえ、態々渦中に入る上洛などいたさず、この地に留まって一戦交える所存でござる」
そう開き直ると、
「われはいま、鎌倉殿と申し合わせてご謀叛つかまつる」
鎌倉公方滿兼を奉じて義滿に叛く、と言い放った。
聞き捨てならぬ中津は取って返して義滿に言上した。
意中を明かした義弘は、さっそく軍議をひらいた。
堺籠城に決して城塞を築き井楼や矢倉を構えて五千の兵を籠もらせると、水軍をもって海上を封鎖した。
こうして、のちにいう〈應永の乱〉ははじまった。
だが、呼び掛けた不平分子の宮田時清、土岐詮直、京極秀滿らは応ぜず、僅か一箇月で決着してしまった。
堺城が陥落すると大内義弘はただ一騎で幕府軍に突入して壮烈な戦死を遂げ、弟弘茂は降服して赦された。
このとき管領朝宗は、滿兼の奥羽諸将動員の風説は誤解で、単なる巡行であることの釈明に奔走した。
そして、滿兼を態々祖先発祥の地下野國足利荘へ回遊させて館跡の鑁阿寺に詣でたあと三箇月も滞留させた。
こうしたことで謀叛に応じなかったことを立証した。

義滿は滿兼を唆した了俊を山内憲定に討伐させた。

甥泰範の謝罪で赦された了俊は、袋井に閑居した。

管領朝宗は、鎌倉府の取潰しと滿兼の処断は避けられぬと思われた危機一髪の難局を全身全霊で防御に当たり辛うじて切り抜けた安堵で、力が抜けてしまっていた。

しかし、鎌倉府の安泰はながくつづかず、翌年にはまたまた陸奥國で伊達政宗が叛乱を起こした。

朝宗の嫡男氏憲（禅秀）が討伐の将を命ぜられた。

氏憲は七千を率いて鎌倉を出陣し、伊達軍と攻防を繰り返して三箇月後にようやく赤館城（福島県伊達郡桑折町）を攻め立てて伊達軍を破り、政宗を投降させた。

東国では殺伐とした闘争があとを絶たなかったが、大内義弘を斃して天下を平定した三代将軍義滿の膝許では室町文化の花が開いてこの年、義滿将軍の庇護を受けていた能役者觀世流の世阿彌元清が『風姿花傳』を著した。

應永十二年（一四〇五）八月二十九日、十年管領を勤めた犬懸朝宗が六十七歳で引退して山内憲定が継いだ。

七

朝宗は引退後も出仕して公方滿兼を見守りつづけた。

後任の山内憲定は、兄房方が幕府の評定衆なので鎌倉府と公方を庇う立場にありながらむしろ幕府から派遣された目付にひとしく、先般の大内義弘からの誘いのときのように逐一兄に注進するから油断がならなかった。

もし二度と公方滿兼を不利に追い込むような告げ口をすることがあれば、朝宗は管領憲定と雖も赦さず刺し違える覚悟で眼を光らせ緊張の日々を過ごしていた。

朝宗は、幼時から手許で養育してきた滿兼が愛おしくてならず、生命に代えても護り抜く覚悟であった。

そんな朝宗の危惧も杞憂に過ぎていった四年後の應永十六年（一四〇九）七月二十二日、前年の三代将軍義滿につづき鎌倉公方滿兼が三十二歳で病歿してしまった。

朝宗は滿兼の葬儀のあと屋敷へは戻らず僧衣のまま悲しみを抱いて領国上總國（千葉県中央部）へ向かった。

七十一歳の老軀を引き摺っての長旅であったがようやく長生郡長柄村に辿り着くと、長柄山胎藏寺に入った。

胎藏寺は長柄山の山間部にある古刹で、現在の行政区画では長柄町長柄山に当たる。JR外房線茂原駅からバスに乗り追分で降りて三十分ほど歩いたところにある。

寺伝によれば臨濟宗の寺ではじめ鳴瀧寺、その後眼藏寺とあらためたが、寛元年中（十三世紀）に千葉秀胤が祖父の冥福を祈って七堂伽藍を建て胎藏界の曼荼羅に擬えて胎藏寺とあらためたのだという。

現在は荒廃してしまっているが、犬懸朝宗はこの寺に五年間隠棲して應永二十一年（一四一四）八月二十五日に人知れずひっそりと世を去った。七十六歳であった。

（了）

アメリカ雑記帳（四）

三戸岡道夫

第三章　アメリカ銀行の広報活動について

アメリカ銀行ではどんな広報活動を行っているか。一口で言えば、日本とそれほど変わらない。では、具体的にはどのような実態であろうか。

一、本部の組織

まず広報活動の本部の組織である。日本では大体どこの銀行でも広報課というようなセクションで処理しているが、アメリカ銀行では三つのセクションに分かれて、非常に徹底して行われている。

第一のセクションは広告部である。具体的な広告媒体物を作るセクションで、パンフレットを作ったり、ポスターを作ったり、また新聞、雑誌広告、テレビ、ラジオ広告を行ない、看板の管理、その他を行っている。

第二はパブリック・リレーション部である。いわゆる銀行と大衆との間の人間関係をなめらかにすることによって、銀行への理解を深め、それによって銀行のイメージを高める作業を行っているところである。具体的には、学生へ育英資金を出すことによって将来のお客さんの確保、各支店でのお客さんとのパーティの一括管理、新設店のパーティ、装飾などの管理、地域別経済調査の実施と、そのパンフレットを作成配付して、各地域との密着をはかる、などということを行っている。

第三がパブリシティ部である。パブリシティ活動、すなわち銀行のよいニュースを外に流して新聞雑誌の記事にする、いわゆる無料の広告活動を行うところである。ここでは集中集に銀行のよいニュースを外に流してマスコミの記事にのせ、また悪い記事の防止を組織的に行っている。

日本では一般に「広報部」を「パブリックリレーション部」と訳しているが、こうしてみるとあまり正しくな

い訳のように思われる。最初、私はそのようなことが判らないので、「パブリックリレーション部を勉強したい」と言ったら、いわゆる「パブリックリレーション部」を紹介してくれ、そこに行ったら少しも新聞や雑誌の広告の話は出ず、またパンフレットやポスターもないので、質問すると、「それを勉強したいなら、アドバタイジング・デパートメントへ行かなければだめだ」と言われ、そこで再びスケジュールを追加してもらい、やっと広告部の方に行くことができたのである。

二、使用媒体

広報活動にアメリカ銀行が使っている広告媒体として、テレビ、ラジオ、看板にネオンを使っている外は、日本とほぼ同じような広告媒体を使っている。

店頭にはいろいろなパンフレットが置いてあり、ポスターあり、ダイレクトメールを出し、戸外には道標看板が沢山立っている。マッチとか、手帳、カレンダーなども作っているが、配付は年末とか、新築店などの時に限っているようである。日本のように、マッチ、メモ、手拭などのサービス品を常時お客さんにくばっているようなことはない。貯金箱もアメリカ銀行では作っていない。

ショーウインドも、建物のガラスの内部をショーウインド的に使っているものが散見される程度で、あまり派手にはやっていない。ポスターの数なども少なく、日本特有の立看板や、新聞折りこみチラシというものは見当らない。

日本では、テレビ、ラジオ、ネオンなどは、申合わせで禁止されているが、アメリカの場合は、それぞれの銀行が自分の採算をよく考え、それに合せて宣伝活動を行なうので、テレビ、ラジオ、ネオンを使っても、過当競争になることもなく、良識ある広報活動が行われているのである。

三、予算割合は

アメリカ銀行の広告予算はどんなふうに使われているかというと、テレビ、ラジオに二十五パーセント、新聞雑誌広告に二十八・五パーセントで、いわゆるマスコミ関係に五十三・五パーセントと、予算の半分以上を使っている。日本のようにマスコミ関係の比率が少くて、店頭用品やサービス品が多いのと対象的で、マスコミ関係を中心とした正統的な広報活動を行っているといえる。日本の銀行の広報活動のやり方は、少し変則的なのではあるまいか。

四、内容とPRの一体化

アメリカ銀行のPRのやり方を見ると、「要は宣伝よりも仕事の中味の方が大事である」という考え方で、貫かれているように思われる。

すなわち、いずれの企業においても同じであるが、まずPRに先行すべきものは優秀な商品の存在でなくてはならない。たとえばテレビメーカーであれば、まず、いかに優秀で価段の安い、大衆にアピールするテレビを作るかということが大切であり、次にそれを大量に売るためには、いかなるPR活動を展開しなければならないかが問題になるのであって、これがPRの基本原則である。

アメリカ銀行の場合には、まさにこの基本原則に従ってPR活動が行われているといった感じで、売るべき商品をちゃんと取揃えて、それを上手にPRしているのである。

すなわち、数多い消費者に便利なローンや、バンクアメリカード（一種のクレジットカード）は、アメリカ銀行が長年にわたって築いてきた優秀な商品なのである。広告で「すぐ○ドルお貸しします」とか、「手軽な当行の×ローンを」とPRしていれば、事実その通り貸しているのであって、

（宣伝していることは、即ちやっていることである）

という、もっとも当り前で、かつ基本的なことが行われているのである。

すなわち、本当のお客さんへのサービスは、仕事を通してお客さんに満足してもらうことであり、いたずらに物品をサービスしたり、きれいなものをまき散らしてムードに包んでしまうことではない。本当に必要なことは、よい仕事をお客さんに提供することであり、そしてそのことをお客さんに知らすことが、本当のPRであるということが行われているのである。アメリカ銀行の特色を結論的にいうならば、PRよりも、「仕事の中味の充実だ」といえるのではなかろうか。

それからアメリカ銀行のバンクアメリカード（このカードを持っていると、加盟商店で一カ月のツケ買いのできるクレジットカード）についての、興味ある話がある。これを始めた当初は、大量の機械を本部に入れて処理したが、取扱件数が不足で、赤字で困ったということである。そこでバンクアメリカードの採算点を計算し、その採算点に達するまで取扱件数をふやそうと、バンクアメリカードの推進運動を展開して、遂にその目的を達成し、今では非常な利益が上がっているということで、これ等は見事な営業活動とPR活動の一体化である。そしてこのケースは、日本の消費者金融の推進に当って、非常に参考になると思われる。

サンフランシスコや、ロスアンゼルス、その他カリフォルニア州の中の街を歩くと、バンクアメリカード加盟の商店のウインドの中には、バンクアメリカードのディスプレイやポスターが貼ってあって、「この店でバンク

アメリカードをお使い下さい」と呼びかけている。アメリカ銀行のサービスに密着した、おびただしい広告看板が店々のウインドの中にあって、道行く人の眼を引いているわけで、これなども見事なPR方法だと感心した。

五、地域社会への密着

アメリカ銀行には、その営業地域の住民と親しくなる、地域の住民の生活の中にとけこんでいくということを、熱心にやっている。そうした人と人との連りを深めることによって、その地域におけるアメリカ銀行の基盤を強化するという、幅の広い広報活動を行っている。

これは日本の銀行とちがって、アメリカ銀行の行員が、一つの支店に長く勤めているということが、こうしたことをやり易くしているということも、あると思われる。

すなわちクラーク（一般の行員）は銀行をやめるまで、ほとんど他の支店へ転勤しないから、十年とか二十年とか、長い期間一つの支店で仕事をしている。またオフィサー（役席）も、日本のように二、三年で転勤ということもないから、支店長などでも十年以上同じ支店の支店長をやっている人も少くない。

したがって窓口のテラーは、その町のどんなお客でもよく知っており、支店長、次長もその町の誰とでも面識がある、という雰囲気が作られており、銀行員とお客さんが非常に仲よく、したがってお客さんはあまり他の銀行へ移っていかないのである。何事もビジネスライクと言われているアメリカでも、やはり仕事の末端では、人間対人間の関係が強い絆となっているわけである。

しかしこれは他面、アメリカ人は非常に自分の信用を重んずる国民であるので、お客さんとしても一度取引した銀行を変えることは、せっかくその銀行で築いた信用を崩すことになるわけで、だからあまり銀行を変えることは好まないという、社会的な意味も含まれていると思われる。

六、店舗建物について

アメリカというとすぐニューヨークの摩天楼をクローズアップしたビルの群集を想像し、銀行の建物もそうしたイメージの一環として、なにか素晴らしい建物ばかりのように錯覚を起しがちである。しかし、実際にそうしたものはむしろ少なく、割り合い地味で古い建物を使っているものが多いように思われる。

もちろん新しい建物もあり、最近建てた何十階というような素晴らしい本店のビルもあるが、支店の建物としては日本とそれほど変らないように思われる。書物や雑誌で紹介されるのは、どうしても珍らしい新しくきれいなものが多く、また写真は実物よりきれいに見えるので、

すべてが素晴らしいという幻想にとらわれ勝ちであるが、現実は決してそうではない。しかし古い建物や、古いビルの一階の一角を銀行が使っている場合でも、前面を全部ガラス張りにしたり、工夫してきれいに使っている。

一般にアメリカの銀行の建物は、道路に面した全面をガラス張りにしたものが多く、夜は内部を全部、電気をつけたままにしているので、街路から内部が丸見えで、夜は明るくてきれいである。一見異様なように思えるが、考えようによっては、誰か怪しい者が銀行へ入っていれば、すぐ外からわかるし、だから逆に、夜、銀行の建物の電気が消えていれば、何か変ったことが起きているということになり、かえって防犯上は有効であるのかもしれない。

私も銀行のロビーの写真を撮しにいく時は、昼間行ってもなかなか撮影を許してくれないし、さりとて街路からでは、外の光景がガラスに映って撮影が出来ない。仕方がないので、夜カメラを持ってロビーを撮しに行ったりした。

建物でちょっと面白いと思ったのは、アメリカ銀行のサンフランシスコのチャイナタウン支店である。外観から内部の作りまで、全部中国風に作ってあって、どう見ても銀行の建物とは見えないのである。これなども地元の街の中にとけこもうとする、アメリカ銀行の努力が伺われて、面白い。

またサンフランシスコのマーケット通りの目抜きの場所に、ウェルスファーゴー銀行のクラウンゼロバック支店という、面白い建物の支店がある。円筒形で周囲が全部ガラスで作られており、緑の芝生や植木に囲まれて、ちょっと見たところ喫茶店か、しゃれたレストランといった感じで、とても銀行の支店とは思えない。

ニューヨークのチェスマンハッタン銀行では、新しい壮麗な本店ビルの内部見学コースというのがあって、毎日何回となく、希望者には案内ガールが付いて、本店の中をぐるぐる歩いて見せてくれる。その高い建物の窓からは、ニューヨークの摩天楼の写真を撮ることも出来、なかなか面白い銀行PR方法だと思われる。

七、看板

東京オリンピックの時、日本の道端の看板は国の恥であるとか、なんとか、問題になったが、アメリカにも屋外看板は非常にたくさん出ており、アメリカ銀行でも非常にたくさん使っていて、よく目につく。もっともアメリカ銀行は支店の数が九百と多くあるので、自然と看板も多くあるわけである。

アメリカ銀行の野立看板は、日本の銀行の道標看板のように小さいものではなく、鉄骨の枠で土台が組んであ

って、その中に非常に大きな看板がはめこんであるので、遠くからでもよく目につく。看板は鉄骨の枠から取りはずしが出来るようになっていて、一カ月に一度ぐらいの割合でデザインを変えていく。

ただ、全店のデザインを一度に全部変えてしまうのではなくて、全店を何ブロックか地域別に分割してあって、ある一つのデザインの看板が一ブロックで掲出し終ると、次のブロックに持っていき、そこが終るとまた次という工合に、順々に持廻り式にしてバラエティを持たせている。デザインは商品広告を中心にした、色彩の美しいものである。

八、店頭装飾

店頭装飾、すなわちロビー装飾は、あまり飾り立てることはなく、よく言えばすっきりしている、悪く言えば事務的といった感じである。

パンフレット立てにはパンフレットが立ててあり、多少花が飾ってあり、ポスターなども貼ってあっても一枚か二枚、壁に油絵の額が下っている程度で、ショーウインドなども、あまり多くは見られない。

お客さんは日本のように椅子に座って待っているのではなくて、窓口に行列を作って待っているので、坐る椅子はほんの僅かで、少い。したがってロビー備え付けの雑誌などというものも殆んど見当らず、鳥籠や金魚鉢もなく、日本のロビー的な雰囲気というものはあまりない。

その代わり、ロビーは非常に広く、客がいない時はガランとした感じで、客が動きやすいように機能的に出来ている。客が水を飲む給水器のようなものもなく、

（銀行は金を出し入れし、金を借りにくるところであり、それがスムーズに出来ればいいのだ）

と、客の方もビジネスライクに割り切っているのである。

店頭サービス品としても、ほとんど客には渡しておらず、日本のようにカウンターの上にマッチが籠に山積みになっていて、ご自由にどうぞ、というような風景は見られない。時々、預金通帳を入れるビニールの袋をあげるのが、サービス品といえば、サービス品なのかもしれない。

九、店頭接客風景

このように書くと、アメリカ銀行の店頭はなにか非常に事務的で、親しみのない、日本の郵便局や駅の切符売場のように思われるが、しかし窓口の接客態度は非常になごやかで、親しみやすく、日本の銀行の窓口よりもむしろ親しみやすい雰囲気を持っているように思われる。お客さんが来ると、まずにっこり笑って、「グッドモーニング」から、仕事が終って「サンキュー」に至るまで、友人同志がカウンター越しに話をしているような親しさが溢れている。

それはアメリカ銀行の窓口は完全テラー制であり、お客さんが目の前に待っている間に仕事をすべて処理してしまうから、仕事をしながら目の前に立っているお客さんと、

「先週の旅行はどうだった」

とか、

「赤ちゃんがとても可愛いいわね」

などと言って、お客さんが抱いている赤ん坊のほっぺたを指でつつくとか、日本の銀行よりお客さんと話をする時間が長いので、非常にお客さんとのパーソナルタッチが、うまくっている。

銀行に限らず、アメリカでは一般に、仕事自体は非常に合理的でありながら、個々の事務を処理する場合のパーソナルタッチが非常によいのである。日本では郵便局で切手を買ったり、駅で切符を買ったとき、「ありがとう」と言われることは絶無で、むしろ客の方が「切手や切符を売っていただいて、ありがとうございます」という感じである。しかしアメリカでは、切手を買っても、切符を買っても、「サンキュー」という言葉が笑顔とともにはね返ってくる。アメリカ銀行のロビーは、物理的には日本のようなムードはないが、人と人との関係では非常に親密感があるのである。

またテラーの権限が明確になっているから、自分の段階で処理できる問題と、そうでない問題とがはっきりしており、日本のように窓口担当者が役席との間を何回も往復して、客がいらいらすることはない。

自分が処理できない問題はすぐ役席へバトンタッチして、役席が即座に会って解決するから、苦情の出た場合もスムーズに処理できるのである。

ロビーに小鳥を置いたり、ＢＧＭを流すよりも、こうした事の方が本当のサービスであり、お客さまを銀行へつなぎとめておくのに、もっとも効果的なＰＲだと思われる。

十、笑顔運動

テラーの接客態度をよくしようということで、アメリカ銀行では、

「キープスマイル」（笑顔運動）

というのをやっている。運動というよりも、もう一つの習慣になっている。

カウンターの上に置いてある伝票箱の側面には、お客さんから見えない個所に「キープスマイル」と書いたカードが貼ってある。

テラーの前に次々と客の顔が現れると、まず、にっこ

り大きく笑って、

「おはようございます。○○さん、お元気ですか」

と呼びかける。こうして親しく笑顔で迎えられては、たとえ不気嫌なお客でも、ついにっこりとせざるを得ず、

「サンキュー」

とたちまち笑顔で答えるのである。

どの客もテラーの笑顔に笑顔で答え、やおらハンドバックのとめ金を開け、通帳や小切手を取り出すのである。

両替に来たお客にも、「サンキュー・○○さん」と笑顔で応える。微笑ということは、アメリカでも仕事を円滑にすすめていく上での、重要な武器なのである。

十一、名前を呼ぶ運動

もう一つ、アメリカ銀行では、

（お客さまの名前を呼びましょう）

という運動をやっている。一般に日本人よりアメリカ人の方が、人の名前を呼ぶ習慣が強い国民でありながら、こうした運動を展開しているということは、いかにアメリカ銀行が営業店窓口のパーソナルタッチに力を入れているかを物語るものである。

相手の名前をまず知り、多くの客をよく知ることが、客を継続的によき客として引きとめておく重要な鍵であることは、日本でもアメリカでも変らない。協和銀行では昨年から行っている五マルマルカード運動も、こうした考えの現れであるといえよう。

日本の銀行では、窓口に来た会社の女子事務員を呼ぶ時に、その女子事務員の名前を呼ばずに、会社名で呼んでいるが、これなどもその女子事務員の名前を呼ぶようにしたら、どんなに親しみが増すだろうかと思われる。結婚資金の積立てなどは百パーセント協和銀行で積立てるようになること、間違いないと思われる。

またアメリカ銀行では窓口に来たお客さんの名前を、最初と、最後と、二回呼ぶようにしている。最初名前がわからないお客さんでも、通帳を返すときには名前はわかるわけであるから、通帳で名前を覚えて、

「ありがとうございました。○○さん、またどうぞ」

というように、最低一回はお客さんの名前を呼ぶことが出来るわけである

十二、結論

以上のようにして、私はアメリカ銀行の広報活動を見て、

（最もよいPRとは、最もよい仕事をすることである）

という、極めて当然なことを感じたのである。

（終）

「茶道史」勉強ノート（四）

忠内正之

わび茶と大名茶の展開　江戸時代後期

江戸時代の後半、わび茶の世界は一つの転換期を迎える。その最も大きな原因の一つは茶道人口の急激な増大であった。

一六九〇年（元禄三年）の利休百回忌を経た茶の湯は日本各地へ広がり、そこで新たに茶の湯を嗜む人々を生み出していったのである。

これには前期における宗旦の三子や宗旦の門弟たちによる活動の結果であると考えられるが、新たな茶道人口の増大は、それまでとは違った対応を余儀なくさせた。これに対処しようとした裏千家八代・一燈宗室らの活動を中心にみていきたい。

一燈宗室の活動

一燈宗室は千家中興の一人と言われている。享保四年（一七一九）の生まれ。表千家六代覚々斎の三男。表千家七代如心斎、裏千家七代竺叟宗室の弟である。

裏千家の七代竺叟宗室が享保十八年に没したため十五歳の若さで八代家元を継いでいる。その直後、数年間にわたって兄で表千家を継いでいた如心斎宗左とともに大徳寺の塔頭玉林院に入って大龍宗杖（大徳寺三四一世）に参禅し、「八角磨盤空裏走」の公案を受けて大龍から「又玄」の号を与えられている。一燈の活動としては「又玄夜話」や「茶道浜真砂」の口述などが知られている。これらは後に版行された。

その他の活動を見る。

一燈は伊予松山の松平（久松）家に出仕しており、藩主の参勤に随行して江戸への往復を重ねていた。

寛延三年（一七五〇）には松平家から花入二本および

茶杓十二本の調整を依頼されている。老中堀田正亮からの要望であった。六月には一重切に「小蓬莱」、二重切には「柴の戸」と、さらに茶杓にもそれぞれ銘が付けられて六月には江戸へ送られている。宝暦八年（一七五八）には堀田相模守の要請に応じて茶会を行なっているから大名家との交流も多かったようだ。

但馬出石藩主仙石政辰にも茶事を指南していた。きっかけは出石藩出入りのご用商人で一燈宗室の門人であった北脇市兵衛を通じてであり、参勤交代で京都へ立寄った際京都出石藩邸で指南を受けていたとの実績がある。

もう一つ大名家との関わりを挙げたい。四国阿波の蜂須賀家である。一燈宗室が阿波を訪れたのは鈴江宗羽の招請によるといわれる。鈴江宗羽は阿波の人。幼時から蜂須賀家八代藩主の宗員に仕えるが、茶の湯を志して京都で一燈宗室に入門する。皆伝の後に阿波へ戻り宗員・宗英・宗鎮・至英・重喜・治昭の六代約六〇年にわたって茶道役として仕えたとされる。

宝暦年間（一七五一―一七六四）十二代重喜は、城下の南、大谷に別業（別荘のこと）を築くが、その茶室・露地のために宗羽の縁で一燈宗室が阿波に下向することになったのである。阿波に滞在した一燈宗室は、鈴木宗羽の屋敷には茶室「蝸牛庵」を、さらに門弟の木下家や谷田家にも茶室を作っていたらしい。阿波でも利休のわび茶を広めていたのである。

一燈宗室の主な弟子たち

一燈宗室
- 内田宗員（江戸八丁堀住）
- 狩野宗朴（茶匠　大阪住）
- 藤波季忠（神道家）
- 最上宗財（号文臨庵）
- 那波宗伴（江戸住）
- 千柄菊旦（江戸日本橋住）
- 堯州宗寛（大徳寺三七九世）
- 蜂須賀重喜（阿波藩主）
- 鈴江宗羽（阿波藩茶道役）
- 木下了悦（阿波佐古町住）
- 木下勘五郎（了悦の女婿）
- 谷田一刻庵（阿波の呉服商）
- 仙石政辰（出石藩主）
- 北脇市兵衛（出石藩御用商人）
- 速水宗達（茶匠）

「七事式」の制定

利休百五十回忌（一七三九）を迎えた一燈宗室の時代、利休画像の作成や茶書の刊行が必要となるような茶道人口の急激な増大と地域的な拡大は、必然的に茶の湯の世界に大きな変化を呼び起こしていった。これに対応したのが一燈宗室と兄にあたる表千家の如心斎宗左であった。

具体的な対応の一環として考え出されたのが「七事式」であった。「七事式」は以前から原形となるものが伝えられていた「茶かふき」「廻り炭」「廻り花」を整備し、これに新たに創案された「且座」「花月」「一二三」「員茶」を加えたものであった。

それぞれのなかには、さらにいくらかの茶式を含んでいたから、「七事式」の創案はかなり大がかりなものであった。それだけに創案当初はかなりの非難をあびた。

「七事式」の創案に対しての非難は、主として「古き茶人」たちからのものであった。「古き茶人」たちは、「七事式」を新法とみなし、利休以来の祖法に改変を加えるものと非難したのである。

之に対して「七事式」は「桟」であり「足代口」であるから、茶の湯を得道すれば必要のないものだと述べている。

ではこのような非難をあびながら何故に「七事式」の創案を進めなければならなかったのであろうか。「七事式」の創案はこれまで急激に増大した茶道人口に対応した結果であったと考えられる。

すなわち「大勢稽古に会する時、た、一筋に茶を立てる斗にてハ、其座しめり過て、あるいはしまらす、世上の雑談なとにまきれて果す事もあれハ」（「茶話抄」紀州徳川家家臣、横井淡所の茶説の書）とみえており、茶の湯の稽古におけるマンツーマン方式が実情に合わなくなっていた様子を窺うことができる。

その意味で「七事式」は、八畳の広間で一度に五人以上の人数を対象として行われることを原則とするので、時宜にかなった対応でもあったのであろう。

さらに別のとらえ方をするならば、「七事式」の制定は、小間での茶を中心としたわび茶に、広間での茶を取り込もうとした結果であると考えられる。

小間の茶と広間の茶

元来、利休の茶の湯は四畳半以下の小間での茶の湯を中心に考えられていた。広間での茶は精神的な緊張感を薄め、「一座建立」（茶の湯の目的の一つ）を疎外するとされていたのである。千利休による代表的な茶室「待庵」や宗旦の「今日庵」などが、小間の茶室であったことをみれば明らかである。

しかしこの時期には、急激な茶道人口の増大に対処する必要に迫られていた。これに応じて新たに創案されたのが「七事式」だったのである。小間を中心としてきたわび茶のなかに、広間で行われる「七事式」が取り込ま

れることは、それまでの伝統を崩してしまう危険性をはらんでいた。にもかかわらず「七事式」の創案が決断されたのは、その要請がいかに切実なものであったのかを示している。

さらに考えてみなければならないのは、武家茶道の動向である。一燈宗室は多くの武家と茶の湯の上での交流をもっていた。利休百五十回忌を迎えた茶の湯の高まりも影響していたと思われる。これに加えて、四代将軍徳川家綱の茶道師範となっていた片桐石州とその一派が、わび茶への傾斜を著しく強めていたことも無視できない。

遠州や石州の大名茶は、室町時代の会所における茶を規範として作り出されていたから、広間で行われる「七事式」は、これとも合致する面が多かった。さらに石州はわび茶を高く評価していたし、利休の茶を象徴する楽茶碗さえも自ら作陶した程で、わび茶へ接近する條件は整いはじめていたといってもよいであろう。

このような時期に「七事式」が創案されたのであるから、それまでの千家茶道の支持層に加えて、大名茶道をも取り込むことを視野に入れたわび茶の再編成であったと推測される。

本書が幕末までに数次にわたって刊行された事実は、「七事式」の盛行を意味すると共に、広間におけるわび茶が大いに歓迎されたことを物語っている。またわび茶の広間への進出は、大名茶道がわび茶に包括される契機ともなったといえる。

川上不白と江戸の茶

このような経緯で創出された「七事式」を、江戸を中心として普及をはかった茶人として川上不白（一七一六―一八〇七）が存在する。

不白は紀州の人。一旦、江戸に出た後、京都で如心斎や一燈宗室に茶の湯を学び、一七五一年（寛延四年）まで多田宗菊、中村宗哲らと共に「七事式」の制定にも取り組んだ。

不白が如心斎の命を受けて茶匠としての活動を本格的に開始するのは、修業を終えて江戸に戻った頃からである。それ以前から江戸と京都を往復して駿河台に「黙雷庵」を営み、茶の湯を教授していたが、一七五五年（宝暦五年）には神田明神境内に「蓮華庵」を、さらに同八年には「花月楼」を築いている。

これ以前、山田宗偏（一六二七―一七〇八）が三河小笠原家を辞したのち江戸で茶の湯を教授していたから、すでに利休の茶の湯の種は播かれていたといえる。

この頃、江戸は武家と町人からなる百万人の都市に成長を遂げていたといわれるので、ここに注目したのも当然の成り行きだったのであろう。

不白が武家屋敷の多い駿河台、さらに町人が多く居住する神田明神に居を構えたことについて、「不白のねらいが武家と町人の双方に向けられていたことを示している」とされ、さらに江戸が全国から集まった大名たちの交流の場でもあったことからすると、「その果実が藩に持ち帰られ、文化的な拡散の役割を果たしていた」ことも間違いないところであろう。

このような不白の茶の支持者に大名家の関係者が加わっていたのもその結果であり、不白の門弟には盛岡の南部家、萩毛利家、豊後竹田の岡藩、筑後久留米藩などの藩士や茶道役が多数混じっているのも、これを示している。

不白が江戸に広めた表千家の茶道を世に江戸千家といっている。

このような広まりを持つことになったのはいつにかかって「七事式」の創案によって武家茶道を取り込むことが可能となったことが大きな要因となっていたのである。如心斎宗左、一燈宗室らによる茶道の再編は、ここに至って一種の結実をみたといえるのである。

当時の千家について追記しておきたい。

溯上って、宗旦が家を三つに分けたのは、利休の切腹によって一度は断続した家とその教えを守るため、兄弟それぞれが家を継ぎ、茶の湯を伝えることで、リスクヘッジするのが目的であった。「三家鼎立」の巧妙な戦略にはさらにもう一ひねり、仕掛けが生じた。

それは表千家七代如心斎の時、千家が乱立するのを防ぐため、千の姓をこれ以上増やさない、という申し合せをしたことである。千家のブランド価値が低下することを未然に防ぐ措置だったと考えられるが、千の姓を名乗れるのは基本的に三千家の当主とその配偶者、嫡男とその配偶者のみで、次男以降の男子は成人後、別姓で新たに家を立て、女子は他家へ嫁ぐことで千の姓から離れるのである。

また如心斎らが行ったのは点茶法の再編ばかりではなく、これを支える制度の整備も重要な課題であった。この時期には完全相伝制から不完全相伝制（一子相伝制）に移行しはじめており、三千家においても惣領制や家紋の確定などが如心斎宗左、一燈宗室、堅叟宗守らによって再確認されている。元禄期から徐々にはじまった茶道人口の増大に対する対応は、この時期に一定の結実をみたといえよう。

こうして三つの千家は今日まで約四百年間それぞれの立場を守りながら続いてきた。

千家十職について

この頃になると、のちに「千家十職」と呼ばれるようになる茶道具作家たちがほぼ出揃ってきた。すでに千利休の時には長次郎（楽家初代）に楽茶碗を焼かせていたが、宗旦は明人の飛来一閑に、木地に紙を張り黒漆を塗った細工物「一閑張」で棗などの茶器を作らせていた。宗旦の子一翁宗守は、一時、塗物商の養子に入っていたが、茶家に復するにあたって、中村宗哲に漆塗業を譲っていた。

以後千家の茶道具を専門に制作する家が増え、中川浄益は火箸などの金工品を、土田友湖は茶入の仕覆などの袋物を、奥村吉兵衛は書画幅の表具を、駒沢利斎は棚や煙火盆など指物を、黒田正玄は柄杓や茶杓（下削り）を、大橋清右衛門は茶釜を、永楽善五郎は土風炉や茶の陶器（茶碗を含む）をそれぞれ制作することを生業とし最高のレベルに達していた。

このような千家の茶道具を専門に制作する職方十家を「千家十職」と言い、現在においても堅い結びつきが続いている。

堯山と不昧による大名茶道の到達

江戸時代も後半になると、大名茶道の世界では前代とは異った活動を行なう大名たちがあらわれる。一時期、茶道を構成するある部分だけを深化させる傾向があったのだが、かつての古田織部や小堀遠州・片桐石州などのように、点茶・茶室・茶道具などすべてにわたって創意を発揮して、これが武家社会にある程度通用する一般性をもった人物たちがあらわれるのである。

鹿児島藩の島津吉貴（一六七五―一七四七）、仙台藩の伊達綱村（一六五九―一七一九）、大和郡山藩の柳沢堯山（一七五三―一八一七）、松江藩の松平不昧（一七五一―一八一八）、などがその代表的な人達であるが、ここでは堯山と不昧について取り上げてみたい。

柳沢堯山（一七五三―一八一七）の茶の湯

柳沢堯山は大和郡山の四代藩主。藩祖は五代将軍徳川綱吉を補佐した柳沢吉保である。吉保は綱吉に仕えてわずか一六〇石の身から累進して、宝永二年（一七〇五）には甲斐・駿河で十五万石を与えられるまでに至った。政情の安定した江戸時代にあってこのような栄進をとげた大名は珍しい。

吉保の子吉里の時代には甲府から大和郡山に転封となり、三代信鴻を経て四代藩主となったのが堯山であった。堯山は宝暦三年（一七五三）の生まれ、幼名を久菊、長じて保信、のちに保光と称している。明和四年（一七六七）元服して造酒正、のち甲斐守に任じられている。

茶湯は石州流を久保宗竹・田中素白について学ぶ。片桐帯刀（宗幽）の門下ともいわれる。茶道具や茶会記に「松平甲斐守」と記されているのはこの堯山をさしており、優美な姿の茶杓や洒落た画賛は茶の湯の世界でも一定の高い評価がなされている。安永三年（一七七四）藩主となって以来、三十七年の治世を経て文化八年（一八一一）には保泰に藩主を譲って隠居、堯山と号することになる。

堯山は藩主時代から、播州姫路藩主酒井宗雅や讃岐高松藩松平頼起、越後与板藩主井伊直広らと茶会を行なっていたから、早くから茶の湯には興味をもっていたのであろう。

堯山の茶はのちに石州流堯山派と称されるに至り、雲州松江藩主松平不昧とも親交があり茶湯交渉もあったという。

遠州七窯の一つ赤膚焼を再興したことでも名高い。

堯山の残された茶会記によれば、一見して気づくのはわび茶の道具が多く使われていることだろうといわれる。利休・与次郎・長次郎・宗旦にゆかりの茶道具や一閑張、竺叟好みの棗などである。もちろん織部や遠州関係の茶道具も使われているが、大名の茶会でこれほどのわび茶の道具が使われることは珍しい。影響を受けた片桐石州のなかにわび茶への傾斜が見られることは先に述べたが、堯山はもう一歩これを進めていたと言えるのであろう。

堯山の茶の湯関係資料は、大和郡山市の柳澤文庫に数多く残されている。それらの中にいつ書写されたか不明だが「石州流箇条」が安永四年（一七七五）の年記があるので、藩主になった翌年にはこの伝書が記されていたことがわかる。

この伝書は「薄茶手前の事」以下二十七種に及ぶ点茶法名ならびに「台子の箇条」として更に五種の点茶法名が書かれたあと、付言がありどうも何者かに茶法を伝授した折に書かれたものではないかと推測される。

この推測を裏付けるように堯山が発行した茶の湯の免許が残されている。近世大名が自ら記し、発給した茶の湯の免許状は殆んど知られていない。

こうみてくると堯山は自ら茶会を行ない、好みの道具を作り出し、茶室を設計し、茶法を伝授して免許状を発行するといった幅広い活動を行なっていたことを知ることができる。石州流堯山派の創出といわれる所以であろう。

堯山がこのような活動を行ないえたのは、石州流が当初から完全相伝制をとっていたからにほかならない。（完全相伝制の反対は一子相伝制という。後年石州流が枝派に別れる度合いが高いのはこの故であると思われ

る)。

これまで堯山は茶道史のうえで取り立てて目立った存在ではなかったが、江戸時代後半にいたって大名たちが新たな活動をはじめた、その証だと考えることができるのである。

残念ながら堯山の茶の湯のうえでの活動はさほど広範囲なものではなかったようだが、茶の湯が遠州や石州らが行ったと同様の展開を見せはじめていたことは注視しなければならない。

松平不昧(一七五一―一八一八)の茶の湯

柳沢堯山の活動はそれまでの大名茶道の範囲を一歩踏み出しはじめていたのだが、ほぼ同時期、大幅にこれを推し進めていた大名がいる。今日の松江の文化を創った人とされる風流大名、松江藩七代目不昧公治郷である。

不昧の茶の湯での活動は多彩であった。酒井宗雅や朽木昌綱(丹波福知山城主)などの大名や家臣らに茶道を教授し、数々の好み物を創作したこと。江戸大崎の二万坪と称された別邸に多くの茶室を築造し、国元の松江にも茶室「明々庵」や「菅田庵」を営んでいる。

さらに小堀遠州を偲んで焼失した大徳寺孤蓬庵を再建し、「喜左衛門井戸」や雪舟筆の「円相」を寄進したことなどよく知られている。

また、その茶器収集を示す「雲州蔵帳」と、整理結果としての「古今名物類聚」の版行、さらに「瀬戸陶器濫觴」「贅言」「茶事覚書」「茶礎」などの著述も知られている。

このようにみていくと不昧は江戸時代後半における大名茶道の到達点を体現していた突出する人物だといえよう。

次に不昧の茶器収集を中心に、その茶の湯をみていきたい。

結城秀康三男の松平直政は大坂の陣にも参加し、越前木本一万石を始まりに、上総姉崎、大野、松本を経て、一六三八年に京極氏に代わって松江に入って十八万六千石の藩主となった。不昧は秀康の後裔である。

不昧は一七五一年(寛延四年)、江戸の藩邸に生まれている。幼時から諸学を学び、茶の湯は荒井一掌、正井道有、谷口民之丞に師事したといわれている。一七六八年(明和五年)には、幕府の茶道役で石州流伊佐派の伊佐幸琢について正式に学ぶことになる。

一方、この頃諸藩は等しく財政難に苦しんでいた。打ち続いた飢饉や年貢の減収が財政危機を呼び起こしていたのである。

松江藩も同様で父六代宗衍は産業振興や新田開発など再建策を実施していたのだが、一七六一年(宝暦十一年)には比叡山諸堂の修理を命ぜられたことで引退のやむなきに至ったのである。

これをうけて藩主となったのが不昧で、この年十七才であった。襲封後、家老朝日丹波茂保父子の補佐を受けて財政改革を押し進め、後に見事その実をあげることになる。

茶の湯を伊佐幸琢に学んで二年後の一七七〇年(明和七年)二十才の不昧は真台子の相伝を受ける。同じ年「贅言」を記し、茶道界を批判し、本道に戻るべきことを説き、茶の湯は「天下国家を治める助」となるべきものと述べていた。このような不昧の初茶会は、一七七五年(安永四年)三月江戸藩邸で行われている。道具類は玉室宗珀の掛物、遠州の竹花入、瀬戸水指、南坊宗啓作茶杓など地味な道具類を使用している。

ところが藩財政が好転するに従って茶道具の購入を開始する。その買い始めは二十四才の年であった。伏見屋から「伯庵茶碗」を五百両で購入している。自らの茶器収集を示す「雲州蔵帳」によれば安永年間(一七七二―八一)の二十才代には「円乗寺肩衝」(五百両)や「喜左衛門井戸」(五百両)などの大名物六点・中興名物八点、名物並四点・上の部にランクした六点など二十四点を六千両で購入した。

ほぼ三十才代にあたる次の天明年間(一七八一―八九)には宝物の部にランクした「油屋肩衝」(千五百両)など三点・中興名物五点・名物並五点・上五点など十四点を四千両以上の額で購入、さらに四十才代の寛政年間(一七八九―一八〇二)では宝物の「小倉色紙」(千両)など三点・大名物四点・中興名物二十六点・名物並二丁三点・上八点など六十四点を二万両以上を支払って購入している。ちなみに寛政十二年における藩の余剰金は約十万五千両だったとされている。

一八〇六年(文化三年)五十六才になった不昧は隠居し、品川大崎の屋敷に住することになるが、なお茶道具の購入を続けたという。

不昧は生涯をかけて収集した茶器を、ただ単に茶会に使用し保存しただけではなかった。寛政元年(一七八九)から同九年にかけて、陶斎尚古老人の名で、前後四回にわけて「古今名物類聚(十八冊)」を出版したのである。その目的とするところは、不慮の災害で名物茶道具が失われた時のために備えて記録を残すための著述出版であった。

「古今名物類聚」では茶器が器種別に整理され「中興茶入之部」「大名物之部」「後窯国焼之部」「天目茶碗之部」「楽焼茶碗之部」など八部分に分けて編集されており、中興茶入、大名物など一種のランク付けを行った上で刊行している。名物茶道具がある程度、比較・分類さ

れていたのである。このような分類はそれまで絶えて行われることがなかったから高く評価しなければならない。不味のこのような活動は、茶の湯の多くの分野に精通したが故に成し遂げられたものだったともいえよう。

文政元年（一八一八）大崎園で没するがその遺偈は「喫茶喫飯　六十八年　末期一句　有伝無伝」であった。

追記（一）　喜左衛門井戸について

高麗茶碗で大名物である。慶長の頃、大坂の町人竹田喜左衛門が所持していたのでこの名がある。のち本多能登守忠義に伝わり「本多井戸」とも呼ばれるが、大井戸茶碗中第一とされる名碗である。総体に枇杷色だが、一部青味を帯び、貫入がほどよく生じている。轆轤目がきっかりと立ち梅華皮も見事で、特に高台あたりの作行きがすぐれている。

本多能登守の後、中村宗雪、塘氏と伝わり安永年間（一七七二―一七八一）には松平不味の蔵となる。しかし、古来これを所持する者は腫物を病むという伝説があり、不味も病むことになる。のち不味の夫人静楽院によって大徳寺孤蓬庵に寄進され、現在国宝指定になり、大切にされている。不味公のお陰である。

追記（二）　不味の茶風について

千宗屋（武者小路千家後嗣）著「茶」の中に次の文章がのっており大変興味深い。

ある人が「不味さんはどの流儀のお茶を参考にしているのか」と尋ねたところ、「点前は石州、道具の趣味は遠州、露地・茶室の結構は宗旦、千家だ」と答えたという。

点前はやはり武家のベーシックで石州、それから石州流には花入や茶杓など、竹の道具の非常に優れたものが多いが、不味公自身の手になる茶杓を見ても、石州に倣ったものと思われる。

それ以外の道具を選ぶということになると、道具の目利きは絶対的に小堀遠州がセンスを持っていたので、遠州の趣味を採り入れて選ぶ。

それが露地の風情や茶室の構えとなると、遠州の書院風ではちょっときらびやかになりすぎてしまう。だからもう少し侘びた風情の宗旦の感覚を好んだ。――つまり良いとこどりだったのである。

以上の様に評されているが、一応は石州流が本命であり、石州流不味派の開祖として後世に伝えられている。

（続く）

短歌

行雲流水（三十八）

石黒修身

近詠二十首

転居

この齢で何故の転居かシンプルで住み易さ欲しの老いの一念

引越しの作業の人ら逞しく老いの一臂の助けは要らず

狭き間を書斎となして搬ばれる本と誌類に埋もれており

痛む腰庇い乍らもキッチンの整理に励む妻甲斐甲斐し

此処こそが終いの住処かマンションの高き窓から街の灯を見る

邂逅

短歌誌に見し旧友と同名をもしやと思いつつ時を経にけり
同名の歌人と思いし「猪俣」は杳かなる友「重哉」と知れり
彼の友と職場を共にし将来を語りし時から半世紀経つ
彼の友が短歌を詠むとは知らざりき短歌の取り持つ邂逅奇なり
旧友と久の出会いの楽しみはその面差しに残る個性が

流氷

流氷の報せ届けば甦るオホーツクの海凍てつく町が
流氷を求めて滞りしオホーツクの酷寒の町で食みし蟹はも
流氷の博士と呼ばれし学究はオホーツクを越えアムールまでも

流氷と海豹を究めオホーツクに蟠居せし友去年逝きたり
天皇に進講をせし「クリオネ」は流氷に棲む天使とぞ云う

故青田昌秋氏
元北大名誉教授・道立流氷科学センター所長

クリオネ
「はたかめかい」巻貝の一種で貝殻を持たない、
小さくて成長しても2~3センチ

身辺

吾はいま傘寿の祝い受けており嬉しくもあり哀しくもあり
一族に囲まれて被る紫の頭巾羽織で傘寿の宴
札幌の今年で最後の「寮歌祭」リラの花季五月の知らせ
故郷はリラの花咲き風薫る五月に来よと友は誘う
詠みたきは抒情説くべきはロマンかな吾が短歌の道果てなく遠し

先見の明（四）

―韮山代官江川太郎左衛門の遺業と世界遺産への道―

堀内永人

第二章　名代官

一、兄英虎の死と代官見習

ところで、わたしたちは、テレビを通して江戸時代の悪代官の仕事ぶりなどを観ることがある。

この物語の主人公である江川太郎左衛門は、テレビに出てくる悪代官と違って立派な武士で、かつ、文化人であり、頭脳明晰、人格高潔、文武両道に優れた名代官中の名代官であった。

そして、韮山代官在任中の二十年間に行った業績は、二十一世紀の今日においても燦然と輝いている。

江戸時代初期の頃の代官は、将軍や大名の領地を預かって、年貢（米麦や金銭）を徴収する役人であったが、この物語の時代では、幕府や藩の直轄地の行政や司法を担当した地方官のことを代官といっていた。

普通、幕府の代官は、上級官僚である禄高（給与）の多い大身旗本の中から選ばれて任命され、江戸から幕府の所領地へ赴任するのが一般的であったが、少数ながら、韮山代官のように、世襲代官もいた。

代官は、管理地の検地（田畑の面積の調査）、検見（毛見）（米などの農作物の収穫量を実地調査して年貢高を決定する）、年貢の割り付け、収納、住民の人別帳（戸籍簿や住民台帳）の作製管理など、行政と治安（警察）、検察、裁判などを司っていたので、絶大な権力を持ち、代官所は、裁判所、検察庁、警察署、税務署、市役所などを一緒にしたような大きな権限を有する役所であった。

各藩では、郡奉行の下に代官を置き、幕府の代官に準じて民政（領民の生活に関する政治）を担当していたが、幕府の代官と、各藩の代官とは、その権限に大きな格差があり、実力は天地ほどの違いがあった。

前述（「四、（三）後継者の養成」の項）のように、兄の江川英虎（倉次郎）は、太郎左衛門より三歳年上（としうえ）で、寛政十年（一七九八）に生まれた。成長するにともない、江川家の後継者として、弟の太郎左衛門とは別格の教育を受けて成長した。

この頃（一八一二年）欧州では、フランス皇帝ナポレオンが、ロシアに侵入していた。

韮山代官江川英毅の後継者である長男英虎（倉次郎）は、文化八年（一八一一）二月、十四歳で韮山代官見習となり、同十四年（一八一七）三月、二十歳のときに旗本山崎家の娘と結婚し、将来を期待されていたが、残念ながらやや病身で、文政四年（一八二一）六月に病死した。享年二十四歳、若すぎる死であった。

英毅は、長男の英虎（倉次郎）が死亡し、葬儀などすべての法事が済んだある日、次男である太郎左衛門を自室に呼んで、

「そちの兄英虎が死んだがゆえに、すみやかに、わが江川家の後継者を幕府に届けなければならない。そこでそちも承知しておろうが、江川家には、男子はそちしかいない。よって、早急にそちを嫡子として幕府にお届けし、お許しをいただくようにするつもりである」

「はい……」

「ついては、そちも、いままでのような気楽な部屋住みの身とは違う。しっかりと、修業して立派な後継者になって欲しい」

英毅は、嫡子の英虎が死亡して気落ちしたが、いつまでも悲しんでばかりはいられない、と次男の太郎左衛門に、江川家の後継者としての心構えを諭した。

すると、太郎左衛門は、

「ハイ、私は父上にお教えいただき、世のため人のためになるように、しっかり学びます。よろしくお願いいたします」

と、固く誓って、学問、武道の修得に努力した。この努力が、そののち洋学に取組み、数々の偉業を成し遂げた基礎となっていたのである。

太郎左衛門、代官見習となる

江川家の嫡子となった江川太郎左衛門（英龍、後の三十六代当主）は、二年後の文政六年（一八二三）八月二十八日、二十三歳のときに、旗本北条氏征の娘やすと結婚。その翌年の三月二十八日、二十四歳のときに、江戸幕府から伊豆韮山代官見習を命ぜられた。

太郎左衛門の代官見習拝命式は、江戸城中において行われ、辞令が、老中水野忠成経由で、勘定奉行遠山左衛門尉景晋から交付された。

遠山景晋は、太郎左衛門の父英毅の友人で、桜吹雪の入れ墨を見せて、つぎつぎと悪人を退治する、あの北町

奉行遠山金四郎景元の父親である。

こののち、太郎左衛門は、遠山金四郎と親交を深めていくのである。

それから三か月後の六月十三日、太郎左衛門は、初めて十一代将軍徳川家斉に拝謁し、

「父に劣らぬように、しっかりつとめよ……」

と、家斉から声をかけられ、身の震えるほどの感動を覚えた。

太郎左衛門が将軍家斉に拝謁したことは、現在の韮山代官江川英毅の後継者として公認されたことを意味し、深くことの重大性を認識した。

将軍家斉からことばを賜わってから、さらに三か月経った九月九日、菊の香薫る節会の日の早朝、太郎左衛門は、江川邸の築山に立って、澄みわたった青空に真白き初雪をいただいて、くっきりとそびえたつ霊峰富士を北方に仰ぎ、

『やがてわたしは、韮山代官を継ぎ、伊豆を始めとして、駿河、相模、武蔵の天領をお預かりする身となる。が、わたしは、領民の幸せを第一とする政治を心掛けなければならない』

と、固く誓ったのである。

このことは、三か月前に、将軍家斉にお目見えして（お目にかかり）、

「父親と同じように忠勤せよ」

と、ことばを賜わったときの感動を、はっきりと覚えているからであった。

この当時は、いろいろと格式やしきたりがあって、誰でも将軍に面会できるわけではなかった。

徳川家の家臣は、俗に旗本八万騎といわれているが、面会できるのは、禄高一万石以上の大名と、将軍直属の家臣のうち、約三〇〇〇人の禄高九九九石以下二六一石以上の旗本に限られていた。

したがって、大多数の二六〇石以下の家臣は御家人と呼ばれ、たとえ将軍直属の家臣であっても、面会はできなかった。そのため御家人は、

「オレは将軍家直参なるぞ……」

などといって、空威張りしていたものである。

太郎左衛門が、将軍から直接言葉を賜わったということは、江川家の石高は、三〇〇〇石以上の格式があったとみられる。

なお、太郎左衛門が韮山代官見習を命ぜられた一八二四年には、イギリスの捕鯨船員が常陸国大津浜に上陸するなど、外国船舶の来航が見え始め、翌年の「異国船打払い令」の公布となる。

二、母から「忍」の大切さを教わる

江川太郎左衛門（英龍）は、兄の英虎が死亡したあと、嫡子となり、結婚、代官見習、将軍お目見得を済まし、名実ともに韮山代官江川英毅の後継者となった。

しかし、日々の生活そのものには、大きな変化があるわけではなく、午前中は代官所で代官としての職務を覚え、午後は撃剣館道場へ行って剣術の修業に打ち込み、あるいは、尚歯会の会合に出席して外国事情の論議に加わることもあった。

だが、そのあとは、若いからだをもてあまし、先輩や、友達に誘われて夜長のひとときを、酒席で過ごすこともたびたびであった。

そんな時期に、尚歯会のメンバーの一人から、勘定奉行遠山景晋の嫡子遠山金四郎景元を紹介された。

遠山金四郎（一七九三―一八五五）は、のちに北町奉行や大目付に出世する高級官僚である。映画や芝居では、桜吹雪の刺青をみせて悪人たちを恐れ入らせる、痛快無比のお奉行様のシーンはおなじみである。

江川太郎左衛門（一八〇一―一八五五）は、遠山金四郎よりも八歳年下であったが、二人は馬が合うというか、境遇に似たところがあってか意気投合し、柳橋の花街などで大いに語らった。

また二人は、目付の鳥居耀蔵から、いわれなき詮索を受けるところも似ていた。

文政八年（一八二五）春の夕暮れ時、太郎左衛門二十五歳のときのことである。

三十三歳になった金四郎が、ようやく江戸城西丸の小納戸のお役（将軍の身の回りのお世話をする係）についたそのお祝いに、二人はなじみの江戸柳橋（現在の台東区）の料亭扇家へ出向いた。

二人が扇家に着くと、帳場の前で数人のやくざ風の大男が、若い女将を相手に怒鳴っていた。

「おい、女将、扇家の客あしらいは何だ。俺を浅草の剛右衛門と知っての客あしらいか。先に玄関へ入った俺を後回しにして、後から入った奴等を先に客間へ案内しようとはどういう了見だ。返答次第では只ではすまさねえ」

といって、すごんでいた。

「いいぇ、決してそのようなことはございません。後回しなどと。こちらのお客様は、先程お見えになられましてから、御用がおありとかおっしゃって、表にお出になられたのでございます。どうぞお腹立ちをお納め下さいませ」

若女将のお春は、ことの経緯を懸命に説明した。

「いいーや駄目だ。勘弁ならねぇ……。今日の船宿賃は払わねぇぞ」

お春は、無頼漢の横車に美しい顔を曇らせて立ち竦んだ。

扇家の玄関前には、怒声を聞きつけた通行人が寄って

若女将お春の評判を聞いて、難癖を付けにきていた。

一方、魚河岸の権太らは、八年前、神田川の堤で、手篭めにしようとして果たせなかったお春であることを知って、嫌がらせにきていたのだ。

この二組の無頼漢が、偶然、鉢合わせしたのである。

「いやぁ、もう勘弁ならねぇ。野郎ども、衝立でも何でも叩き割れ……」

剛右衛門の合図で、

バシーン、ドシーン……

と手下どもが、手荒く神代杉の大きな衝立を突き倒した。

口入屋の手下どもも、魚河岸の人足も、岡場所と河岸で勢力範囲を広げる魂胆があるから、派手に暴れている。番頭も板前も、相手が悪すぎて手が出せなかった。

太郎左衛門も金四郎も、しばらく成り行きを見ていたが、争いがますます激しくなってきたので、血でも見るようなことになっては若女将も困るだろうと思い、まず先に、年齢の若い太郎左衛門が、

(この喧嘩の仲裁はわたしにお任せ下さい……)

と、目顔で金四郎に挨拶して、つかつかと喧嘩の中に入っていった。

「やめろ！」

と、一喝。

太郎左衛門の声は、低いが武術で鍛えた気合だ。ビビ

きて、家の中を覗き込んでいる。

一方、けちを付けられた先客は、

「よぉ、浅草の親分、まぁ、いいじゃぁねぇか。俺たちゃぁ一旦外に出たが、親分より先に玄関の敷居をまたいだこたぁ間違いねぇ。我慢してくれねえか……」

「誰だ手前ぇは。横から口出しすると手前ぇも勘弁ならねぇ」

「下手に出りゃぁいい気になってなんでぇ。俺らぁ魚河岸の権太だ。こっちは兄弟分の吾作兄ぃと茂吉兄ぃだ。魚河岸じゃぁ知られた顔だぁ」

お春は、魚河岸の権太と聞いてドキッとした。

今から八年前、父の使いで上野に行ったその帰り道、隅田川の土手の下で権太とその遊び仲間と出会って襲われかけたことがあった。

今、そのときのことが一瞬脳裏をよぎった。

(あのときの無頼漢だ)

気丈なお春も逃げ出したくなった。

権太らは鮫鞘の長刀を差し、いっぱしの侠客気取りだ。胸をはだけ、腕まくりして不動明王の刺青をちらつかせている。

太郎左衛門と金四郎は、何ごとかと思い、物見高い通行人の後ろから、玄関式台の間の遣り取りを見ていた。

浅草の剛右衛門は、大名や旗本の屋敷へ仲間人足を世話する口入屋の親分だ。

ッと鋭く響く。

「な、な、なんでぇ、手めぇは……」

「貴様、引っ込んでいろ。この若侍……」

剛右衛門も権太もびっくりした。俺たちの喧嘩に口出しする奴がいる。

「手前ぇ、どこのどいつだ」

剛右衛門は、大きな声を出して太郎左衛門を威嚇した。剛右衛門は仲間人足を束ねるだけあって身体も大きく、人相も強面だ。

その時、玄関前を遠巻きに囲んで見ていた通行人の一人が、

「お侍さん、危ないよ」

と、思わず声を掛けた。

通行人の声を聞いた魚河岸の権太は、ここで引っ込んでは権太の名が廃ると思って、手にした長刀の束に力が入った。

「浅草の親分、先にこの若侍の始末をするから、そこで見ていてくれ……。吾作兄ぃ、茂吉兄ぃ、やってしまえ」

「野郎、くたばれ」

三人は同時に長刀を突き出した。

(危ない)

若女将のお春を始め、扇家の使用人たちも、見物していた通行人も、

(やられた)

と一瞬目を閉じた。

太郎左衛門は、刀身が身体に触れる間合いを見切ってサッと体をかわし、手にした扇子で、ビシ、ビシ、と権太らの手首を打ち据えた。

ガラガラと音を立てて長刀が床に転がった。

「イテテ……」

三人とも、手首を抑えて蹲った。

太郎左衛門は、岡田十松の撃剣館道場で鍛えられた、神道無念流免許皆伝の名手だ。やくざ風情の二人や三人どうということはなかった。が、その場にいた人たちは太郎左衛門の腕前を知らないので驚いた。

太郎左衛門は、床に落ちた長刀を素早く手にし、刀の峰を返して権太、剛右衛門らをグッと睨んだ。

「ここでは扇家に迷惑が掛かる。表に出てやろう。存分に掛かって参れ」

太郎左衛門の声は、低いがよく響く。鷹の目のように鋭い眼差しで無頼漢を見据えた。

太郎左衛門の気迫に圧倒された権太、剛右衛門らは、外で立ち合ったら足腰立たなくなるほど打ちのめされるのではと怖気づき、先程からの威勢はすっかり萎えてしまった。

「よーし、喧嘩は止めろ。今日は私が仲裁する。双方とも手を引け」

「へ、へえ……」
「恐れ入りました。どうかご勘弁なすっておくんなさいまし」
「その方たち、異論はないな。不承知とあらば、改めて私が相手する。事と次第によっては、双方とも無宿者として奉行所へ引っ立てるが、それでもよいな」
見事な貫禄である。
権太も剛右衛門も、太郎左衛門の腕と度胸、間髪を入れない鮮やかな仲裁振りに、すっかり男惚れしてしまった。
「江川殿、なかなかやりますな……。これなら韮山代官のお父さんもご安心で……」
と、金四郎は、すっかりお株をとられたような格好で、あっけにとられていた。

この武勇伝が、いつしか太郎左衛門の母久子の知るところとなり、
「そなたは、いつまでも血気にはやり、思いもかけないことをやってしまうところがあります。そんなことでは成功しません。自分がなにをするべきか、よく考えてから行動しなければなりません」
と、母の久子より、江川家当主となるべき者の心構えを諭された。

それから五年が過ぎ、文政十三年（一八三〇）になると、母久子は、健康がすぐれない毎日を送っていたが、夏が近づくにつれて、暑さのせいもあってか、病床につく日が続いた。
太郎左衛門は、代官所の仕事で外出するとき以外は、常に母久子の枕辺にあって、懸命に看病をした。特に七月中旬からは、着物も着替えないまま、寝ずの看病であった。
八月になると、久子の体力は、急に衰えが目立ちはじめた。
久子は、自身で生命の限界を感じたのか、突然、枕元に太郎左衛門を呼び、人払いをしたうえで、
「太郎左衛門、もうすぐわたしの余命も終わりです。そこで、そなたに申し置くことがあります。よくお聞きください。そなたは、お父上に似て、体力も頭のはたらきも人並み以上でありますが、少し、熟慮にかけるところがあります。それも若さなるがゆえといえましょうが、いつまでもそれではいけません。自分の才能、体力に任せ、血気にはやって行動すれば必ず失敗します。これからはよく考え、慎重に進むべき道を見定めて、大胆、かつ、忍耐強く行動することを忘れないように、母の遺言と思うて、心に刻んでおいて下さい」
と、我が子の長所短所を見極めて、しっかりと諭し、
『忍』

という一字を書いた紙片を、太郎左衛門に渡した。
「母上、よくわかりました。これからは、母上のお言葉を心に刻み、決しておろそかにいたしません。日頃、母上から『一度失敗すれば、その挽回には長い日時と、大きな労力を費やさなければならない』というお話をお聞きしております。今後とも、短慮な行いを慎み、母上のお言葉に背かないことを固くお誓いいたします」
と、太郎左衛門は、いまさらながら、母の慈愛の大きさ深さに感じ入るのであった。
久子は、太郎左衛門の誓いのことばを聞き、安心して目を閉じると、やがて安らかな眠りに入り、そのまま二度と目を開けることはなかった。
ときに、文政十三年（一八三〇）八月四日、久子の没年は五十四歳であった（太郎左衛門はこのとき三十歳）。
母の死から三年後、太郎左衛門三十三歳の夏のある日、心に思うことがあって太郎左衛門は、自室にこもり、母久子より、「忍耐」の大切さを諭され、『忍』の一字を授かったことを想い出して、その言葉の意味、大切さを反芻した。
そして、死去の間際に授けられた『忍』の一字が書かれた紙片をあらためて取り出し、机の上に拡げた。
しばらく『忍』の一字と向き合っていたが、やがて長い時間をかけてたっぷりと墨を磨り、瞑想すること半時（約一時間）、大きな紙に『忍』の一字を書いて床の間に掲額し、「忍耐」を生涯の戒めとした。
（この『忍』の書は、現存している）
さらに、『忍』の一字をもう一枚の紙片に書いた。
そして、この『忍』の一字を書いた紙片と、生前に、
「これをわたしと思って……」
といって、母から渡された数珠との二品を、常に肌身離さず身に付けて、ことあるごとに、母の言葉を想い出しては自らの戒めとしていた。
なお、後年、この形見の数珠は、太郎左衛門自身が没したときに、柩に納められたということである。

つづく

老人会　会長のつぶやき（その二）

―新米老人会長Aから親友Qへの手紙―

伊治　哲

A・・Q君、このあいだ老人会の話をしてから、もう半年経つね。なかなか会う機会がないから、今日はキミ宛に手紙を書くことにしたよ。できればフェース・トゥー・フェースで話し合う方がいいのだが、うまく日が合わないようだから仕方がない。分らないことがあつたら、電話ででも連絡してくれ。待っているよ・・・

――本当は最初に説明すべきだった、老人会の歴史の話から始めよう――

老人クラブの遠い起源を探ると、平安時代の「尚歯会」や、仏教とともに伝来した相互扶助組織の「講」にまでさかのぼる。広辞苑によると、「尚歯会」というのは老人を招いて詩歌を作り遊楽する、いわば〝高齢者を祝う会〟のこと。「歯」は年齢、「尚」は尊ぶの意とある。今の「敬老の日」に当るのかもしれないね。だから、ずいぶん古い歴史をもっているようだ。やや、牽強付会の感、なきにしもあらずだけどね・・。

現在の「老人クラブ」が最初に設立されたのは、敗戦直後の昭和二一年に千葉県八日市場市に生まれた「米倉老人クラブ」だといわれている。

わが横浜では、昭和三一年に誕生した「生麦第二地区としよりクラブ」が最初の老人クラブだそうだ。ご承知のとおり、幕末の生麦事件が、日本の開国、明治維新へと歴史を大きく転換させる発端となったとされるが、奇しくも同じ鶴見区生麦で、しかも「もはや戦後ではない」と謳った昭和三一年に市内初の老人クラブが生まれたということは、なにかの因縁とはいえ、エポックメーキングなこの地の歴史を物語っているといえそうだ。

いずれにしても、戦後のこの時期は、民法改正により「家」の概念が崩壊して核家族化が進行する中で、老人が孤立し、社会的弱者への道を歩み始めた頃だ。

小津安二郎監督の映画「東京物語」を覚えているだろう。笠智衆と東山千栄子演じる老夫婦が、子どもたちに会うために広島から上京するが、つれなくされて淋しく東京を去る後ろ姿が今でも忘れられないよ。もっとも、オレ自身は原節子の神聖ともいえる清潔な女性像に心を奪われていたが・・。冗談は別にして、この映画はたしか昭和二八年頃の作品だったと思う。

老人クラブは、こういう社会の変化に対して、老人相互の互助と老人福祉の充実を目指して、高齢者が自ら立ち上がったのではないかとオレは考えている。

――老人クラブの法律的な根拠や背景はあるのか？――

老人クラブが各地に設立され、高齢者の声が大きくなるのに押されて、昭和三八年「老人福祉法」、四一年「敬老の日」、五七年「老人保健法」、時移って平成一二年「介護保険法」、一六年「改正年金法」ができ、最近では平成二〇年に悪名高い「後期高齢者医療制度」まで制定された。

老人クラブは先に述べた昭和三八年施行の「老人福祉法」に基く「老人クラブ活動等事業実施要綱」等を裏づけとして、国や地方公共団体から公的な支援を受けるようになったのだ。前に梶山長生会の予算の一部に、市からの助成金を受けていると言ったが、それがまさに老人福祉法に基く支援というわけだ。

だから、任意団体とはいえ、一定の法的裏づけをもった団体であることは間違いない。上部団体の横浜市老人クラブ連合会が、昨年、公益財団法人に認定されたのも、そういう背景があってのことだと思う。

――オレは、小さな老人クラブの単なる一会長に過ぎないのか？――

〝石を投げれば会長に当る〟ほど、会長だらけの老人会だが、その中でも七年、八年、いや一〇何年と驚異的な長期経歴を誇っている人がいる。それから見れば、オレなどヒヨッコみたいなものだ。

それでも、自分の前歴は禁句、一切口にしない、この不文律だけは守られている。だから、風貌から田夫子然とした人もおれば、言動や挙措動作まで垢抜けて相当な社会的地位を歩いてきただろうと思われる人も少なくない。いろんな経暦や経験が言動の端々に顔を出して、勉強になることが多い。

だがその中で、〝盲、蛇に怖じず〟、なんでも聞くし、言いたいことを言うオレの性癖が仇になったのだろう。梶山長生会会長二年目で、七つのクラブを纏める地区老連の会長に押し出された。ということは自動的に鶴見区老人クラブ連合会の理事になる。そこでなにを間違った

のか、会計担当理事を仰せつかったのだ。

もちろん、区老連に常勤しているわけではないから、日常の会計事務は二人の事務局員が処理するのだが、これがいけない。一般会計に、二つも三つも特別会計がくっついていて、会計用語はもちろん、予算・決算の仕分け方も一種独特なんだ。一般会員はもちろん、理事の連中さえもチンプンカンプン、なんのことやらさっぱり分らないという代物だ。どんなに文句を言っても慣例踏襲で、一向に改めようとしない。後でわかったことだが、区の老人クラブ連合会というのは、発足当初、区役所の一室を借りて、区の担当部署の指導のもとに運営してきたらしい。分らないようにするのがお役所会計であることが分ったよ。

これでは将来に禍根を残すと考え、強引ではあったが、根本的に会計規程、会計システムを改正した。これでやっと総会でも質問が出るようになった。一般の単位クラブ会長にも理解できるようになったのだろう。

しかし、区老連の運営が、なにかというと事大主義で、なんでもセレモニー化する上に、所管官庁だけには必要以上に神経を使う風土に嫌気がさし、理事職は二年で辞退した。

だが、そうは簡単に解放してくれなかった。監事の役が回ってきた。会計だけでなく、区老連全体の運営について問題提起することを条件に引き受けることにした。

現在その二年目に入っているところだが、旧来の体質はそう簡単に転換できるものではない。

たまたま今年が区老連創立五〇周年に当り、区老連を始め、老人クラブ活動全体に対して厳しい苦言、提言を呈してきたので、これをもって区老連に対するオレなりの奉仕もひと区切りしたと考え、本年で監事の職を辞したいと考えている。通算四年間の経験から、やはり、老人クラブ活動の原点は梶山長生会のような単位クラブの活動にある、だから地元の老人会の活性化に専念するのがオレの務めだと考えるからだ。

――それじゃあ、本論に入ろう。まず、梶山長生会から――

オレが梶山長生会会長になって始めての会合は、平成一九年四月一六日の定例会だった。当時の日誌には、男三名、女一八名の合計二一名が自治会館に集まったとある。年度初めの初会合としては少なすぎる。

オレは、自分の経験を活かして、この会を整斉と秩序だった、しかも活動的な組織にしていこうと意気込んで初会合に臨んだ。

ところが、である。集まるやいなや、ワイワイガヤガヤ、数人のグループに分かれて大声で世間話を始めた。オレが就任の挨拶をしている間にも、隣りの人どうしでヒソヒソ話を交わし耳障りなことこの上もない。〝整斉〟どころの話ではないのだ。まるで〝烏合の衆〟だ。思わず

オレは「黙れ！」と叫んだ。あまりの大声にみんなびっくりしたようだ。やっと少し静けさを取り戻したところで、会則の改定とアンケート調査の提案説明を始めたが、依然としてヒソヒソ話が絶えない。

「これはダメだ。なにか手を打たないと」と考え、次回五月の定例会には、小学唱歌の歌詞を用意した。「故郷」と「荒城の月」だ。会の結びにこれを合唱してもらった。みんなが一斉に歌い始めた。ところが、である。ある人は目をつむり、ある人は中空を見つめ、またある人は目にうっすらと涙さえ浮かべているではないか。

「昔の歌はなつかしいワ・・」

「こんなに大声で歌ったのは久しぶりだワ・・」

「これからも皆で一緒に歌いたいワ・・」

などの声が上がった。これは大成功だった。以来定例会での童謡、唱歌の合唱は五年後の今も続けている。歌を歌うために定例会に出てくるようになった人もいる。回を重ねて少しずつ会の一体感がでてきたようだ。

しかし、実は定例会のワイワイガヤガヤだけではないのだ。例えば、以前に話したバス旅行でのこと、定刻どおりにいそいそと集まってくる人ばかりではない。バスの出発時刻になっても姿を見せない人が、必ず一人や二人はいる。電話で呼び出すと、忘れていた、日を間違えたという返事だ。それがまた、全然悪びれる風情ではないのだ。前もってあれほど念を押しておいたのに、何ということだ、と一喝したいのだが、それをやってはおしまいだ。ぐっとこらえて、もう何分待つからと急がせるようにする。

頭にくることがしょっちゅうだが、よくよく考えてみれば、みんな歳はとっていても、本来は純朴で素直なのだ。そのうえ、今でこそ皺も出てきたいいおばあさんたちだが、よくよく見ると、昔は美形で良家の子女だった面影を残している。ただ、長いあいだ世間から遠ざかっていたために、集団のルールに慣れていないだけなのだと胸に収めるようにした。

最近になって、定例会にしてもバス旅行やグラウンド・ゴルフにしても、会員が互にマナーやルールを守りながら、一つ家の兄弟姉妹のように睦まじく楽しむようになってきた。ようやく、そして少しだが一体感が芽生えてきたように思う。オレの自己満足かもしれないが・・・。

――老人会は何のために、何をする集まりなのか――

最近になって、オレ自身が、長い間慣れ親しんだ会社人間の習性から抜けきっていないことを覚えるようになった。五年かかって、〝烏合の衆〟がようやく〝カルガモの家族〟程度にまで成長はしてきたが、はたしてそれが正しいのか、疑問が湧いてきた。

というのは、この老人たちの集まりは、そもそも何の

ための集まりなのだ、いったい何をしようというのだ、と考え始めたのだ。月に何度か、定例会やスポーツに集まって、互に勝手なことを喋りあい、烏合の衆よろしく、無秩序にワイワイガヤガヤやるのは、そんなにいけないことなのか、とね。

高邁な理想は別にして、オレは単純にこう考えた。

高齢者の集まりは、一つは、高齢者自身の健康を維持するため、二つは大地震のような災害のときにお互いに助け合う、その絆を作るため、と割り切って考えることにしたのだ。

――健康長寿――

一つ目の「健康長寿」について話そう。ちょっと大きい話になるが、わが日本の財政は破綻状態にあるといわれる。その最大の要因は高齢者の社会福祉費にあるそうだ。医療費を始めとする社会保障費は毎年一兆円づつ確実に膨張しているというではないか。

自慢ではないが、オレも毎月病院通いに励んで、一丁前に後期高齢者医療保険の厄介になっている。だが、長期入院するような重病人でないことだけは救いだと思っている。恐らくほとんどの高齢者は、日常生活に支障のない程度の健康を維持しながら、それでも多少ながら国の財政の恩恵を受けつつ寿命を永らえているのではないだろうか。

昨年8月の厚生労働省の発表によると、「健康寿命」(健康に支障がなく、自立した日常生活を送れる期間のこと)は男70・4歳、女73・6歳で、平均寿命との差、つまり、「不健康期間」は男9・2年、女12・8年だそうだ。実感としてはちょっと長すぎるように思うが、いずれにしてもこの「不健康期間」を限りなくゼロにしたいものだ。つまり、よく言われる〝ピンピン、コロリ〟が理想といえる。

そうはいっても、歳をとったら身体の耐用年数からいって経年劣化することは仕方がない。ただ、若い人たちが支えきれないような重いお荷物になることだけは、自己貴任で避けるように努力しなければならないと思う。お荷物の、身近で最大の課題は認知症による介護負担だ。

オレの近所に、老人クラブの会員で、つい最近夫を亡くした未亡人が二人いる。一方の未亡人は、旅行やスポーツに精を出して、オレたちより元気に暮らしている。他方の一人が問題なのだ。足が痛い、腰が痛いといって毎日のように病院通い、しかも次から次へ病院を変えて新しい病気を増やしているといってもいいほどだ。ところが最近、その病院通いもしなくなった。もっぱら家に閉じこもって、外へは全く出ようとしない。通りすがりに玄関のブザーを押して、挨拶代わりに体調を尋ねたりするのだが、元気がないし顔色が冴えない。恐らくテレビと睨めっこの毎日ではないだろうか。こういうケース

がゆくゆくは認知症につながる可能性大だ。

これも新聞情報だが、65歳以上の認知症患者は約三〇〇万人、高齢者の一〇人に一人の割合だというよ。

だからオレは、集まりのたびに言っている。「認知症にならないための五か条がある。家に閉じこもるのが一番いけない。一日に一度は、一歩でも二歩でもいいから外へ出よう。そして十分でも二十分でも外を歩こう。人に会ったら、知っている人でも、知らない人でも、声をかけて挨拶をしよう。一日にいっぺんは大きな声を出そう。一日に一度は天にもとどけと精いっぱい背伸びをしよう・・・」と。

前に、定例会で「健康長寿」の話をしていると言ったが、実はこんなことを皆に訴えているのだ。長生きは大いに結構、だが〝寝たきり長寿〟ではいかにも口惜しい、健康で長生きしようよ、とね。本当は「健康長寿」が国に奉仕する老人の務めだよ、と言いたいところなのだ。冗談にも〝年寄りは死んでください国のため〟などと言わせないために。

こう考えると、年寄りは、老人会の集まりに元気で足を運んでくれるだけでいいのではないか。そしてワイワイガヤガヤでいいのだ。相手の顔を見て、しゃべりたいだけしゃべってくれればいいのだ。家から外へ出て、人に会って、挨拶をして、大きな声を出して、楽しむのだから。最低限のルールとマナーさえ守ってくれれば、多少のハミダシは大目にみよう。

なにごとも自然体でいこう。一定の型枠にはめ込まない方がいい。秩序や組織で縛らない方がいい。それが、高齢者の健康長寿になるのだから・・とこのごろはそう思うようになってきた。

余談だが、そもそもこんな話を始めたのは、キミが「レベルの低い仕事をやっている」と言ったことがきっかけだ。あの時オレはムキになって反駁したが、考えてみると、どうもキミの言ったことが真実のようだ。つまり、難しく考えない、単純素朴なバカになることだ。ただし、バカはバカでも〝賢いバカ〟にならなければこの仕事はやつちやおれないということかもしれないね。

――助け合い――

二つ目が、災害のときのお互いの助け合いだ。自助、共助、公助の中の「共助」をいう。大地震とか風水害のような自然災害の折には、自助には自ずから限界がある。また、災害が大きくなればなるほど、公助の手はすぐには間に合わない。とすればどうするか。隣近所の人たちが、お互いに助け合うしかないではないか。災害だけではない。最近多発する「孤独死」や「孤立死」を事前に防止するためにも、その抑止力になるのは、他でもない、隣近所の繋がりなのだ。

昔、こんな歌があつた。

〝とんとんとんからりと隣組　格子を開ければ顔なじみ
まわして頂だい回覧版
知らせられたり　知らせたり・・・〟

昭和一けた生まれの人なら、誰でも覚えているだろう。太平洋戦争に突っ込む前年の昭和一五年に発表された「隣組」と題する国民歌だ。あまりいい記憶は残っていないかもしれないが、しかし、「隣りは何をする人ぞ」というくらい寂寞とした今の世の中からは想像もつかない連帯感が、少なくともあのころにはあった。戦後も遠くなった今、東日本大震災の不幸を経験してようやく口にするようになった、まさにあの「絆」だよ。〝まさかの時〟には「遠くの親戚より、近くの他人」というだろう。「隣組」でもいい、「向こう三軒両隣り」でもいい、豊かになった今の世が失った一番大切なものを、ほんの少しでも取り戻したい、それが老人クラブ活動のささやかな目的だと思っている。

ところで、老人クラブの理念として、「健康」「友愛」「奉仕」の三つが掲げられている。だが、この「友愛」という言葉がきれいすぎて、どこか宗教的な匂いさえ覚える。「友愛会」というと昔鈴木文治らが創った労働組合であることは知られているし、「友愛」というと鳩山一郎が頭に浮かぶ。

老人クラブの友愛は、本当はもっと泥臭いもので、「友愛」というより、隣組や向こう三軒両隣の「隣人愛」と言ったほうがいいように思う。ところが、前にも言ったように、そもそもの老人クラブのスタートが役所の指導で運営されたため、なんでも格式ばったやり方をするのだ。各クラブから世話好きの人を推薦させて、「友愛班長」とか「友愛活動員」とかの肩書きをつけ、その上、仰々しくも市老連会長が委嘱状を授けるという形式をとるのだ。一種の権威付けのつもりなんだろうが、オレに言わせれば、笑止千万、形式にこだわるのもいい加減にせいと言いたい。そんな子どもじみた芝居より、どうやって「隣人愛」を根付かせるのかを考えるべきなのだ。

――老人会の殻を破って――

そこで、考えた。これは老人会だけの問題ではない。この街のすべての年寄りの中へ、子どもたちや、その親たちも引っ張り込んで、町ぐるみの運動にしよう、と。

まず手始めに、昨年六月に「長生会と子ども会が一緒に人形劇を見る会」というのを催した。なんと、子ども、親、年寄り合わせて六十人が集まった。自治会館に人が溢れて、膝突き合わせての集まりになったよ。人形劇「鶴の恩返し」、オレの「三杯のお茶」という話、そして「ウミ」「たなばたさま」の童謡を歌ってオヤツを食べた。

さてそのあと、子どもたちがどう出るか、実はそれが心配だった。老幼がうまく融合してくれるだろうか、と。ところが、歌を歌い終わるや否やオヤツを手に、後方に控えていたオバアチャンたちの中へ子どもたちが一斉に飛び込んできたのだ。一緒になって、「お手玉」「あやとり」「おりがみ」などを教えてもらい始めた。頭をひねったり、手をかしげたり大騒ぎだ。予定の二時間は瞬く間に過ぎた。

あとで、ある母親から聞いた。「『すごく楽しかった。あやとりを教えてもらったオバアチャンの名前を教えてほしかった。今度会ったとき挨拶をしてお礼を言いたいから』と子どもが喜んでいました」と。

この一言だけで、この企ては大成功だったと快哉を叫んだ。これからも続けていけば、きっと、子どもの口から、彼らの祖父母の様子が自然に耳に入ってくるようになるだろう。そうしたら、時には病気や通院の様子を聞いてあげることもできるし、そのうちに長生会の会員に迎えることができるかもしれない。

それよりももっと大事なことを子どもたちが教えてくれた。それは、親と子どもたちだけの仕切られた核家族の中で、彼らは〝年寄りの温もり〟を渇望しているのではないか、ということだ。お菓子を頬張りながら、遠慮もせず、恥かしがりもせず、真っ直ぐ年寄りの席に飛び込んできた様子にオレは驚いたのだ。そういえば、昔は、三世代が同居して、親とは違った愛情を祖父母から与えられた。厳しかったオジイチャンの目を盗んだこともあったし、母親より祖母の胸に抱きついて〝オバアチャンッ子〟と言われたこともあったはずだ。また、祖父母の死を前に、父母の涙を初めて盗み見た記憶もある。子どもたちは、多世代家族の生活の中で、生老死という人間の自然の姿を、自分の目で見、頭で考えた。

孫の世代のために、高齢者が果たすべき大きな役割があることを、改めて思い知った一幕であった。

もう一つ、近いうちに実現しようと思っていることがある。今度は老人会に入っているとか、入っていないとかに関係なく、広く門戸を広げた「高齢者の居場所づくり」だ。「妻がいない、夫がいない、友だちがいない、隣人がいない、話す相手がいない、挨拶しない、なにごとにも関心がない・・・」〝ないないづくし〟の老人たちを家から引っ張り出そうという試みだ。いうまでもなく、老人であれば誰でも大歓迎、来たい時に来て、帰りたいときに帰る、出入り自由だ。

接待は、ご苦労だが、長生会の友愛活動員が受け持つ。既に囲碁、将棋、麻雀、オセロなど遊び道具も長生会員からの寄付で揃えた。あとは、素人手品でもやれる人がおれば一層興味を引くのだが。お茶とお菓子で世間話などから話が弾めば、あとは自然体に任せようと期待している。さて、どういうことになるだろうか？

二つの企画とも、長生会だけでは手におえない。子ども会や自治会を巻き込み、長生会が音頭をとってこれから続けていきたいと思っている。

このような交流の積み重ねから、互に顔を知る、名前を知る、住まいを知る、近所の住人を知る・・というようなことになれば、この地域の仲間意識も深まるのではないだろうか。

当然、日常生活の中で、誰もが、ごく普通に、誰か困っている人はいないだろうかと関心をもつようになる。とりわけ、独り住まいや病気がちの人への、訪問、声かけ、雨戸・郵便受けや洗濯物の見守りなど、文字通り〝隣りの他人〟が〝他人の隣り〟を気遣うようになる。なにも、友愛活動員が「さあ、今から友愛活動をやりましょう」などと仰々しく構える必要など全くない。普通の毎日の生活の中で、普通の人が皆で互に気配りし合う、それが本当の「隣人愛」であると信じている。「友愛」とか「奉仕」とか、スローガン化するから、言葉だけが独り歩きして、物事の本質が見失われてしまうのだ。

――どんな組織でも五十年も経つとマンネリ化する――

かつて「企業三十年説」ということが言われたことがある。どんな優れた企業でも組織でも、最盛期はせいぜい三十年という説だ。

先に触れたと思うが、わが鶴見区老人クラブ連合会は、創立以来今年で満五十周年を迎えた。三十年説に従うまでもなく、この組織も相当経年劣化して制度疲労を起しているとみていい。

ここまでの話の中に、それらしき反省や批判に触れたこともあったが、オレ自身のさらなるガス抜きも兼ねて、つぎの手紙では内幕暴露というか、ホンネの話をしようと思うが聞いてくれるかい？　もちろん、重箱の隅をつつくだけではなく、多少、大所高所の視点も交えてこの話を深めていきたいと思うので、頭を整理してまた手紙を書くことにするよ。ではまたな・・・。

つづく

（二〇一三年二月四日記）

中学時代の良き友

吉田忠雄

中学時代の親友であった真下勉君が亡くなったことを誰かが知らせてくれた。早速桐生市のおたくにお悔やみに行った。はじめてお会いする奥さんと娘さんが迎えてくれた。優しかった真下君にふさわしい穏やかな母娘であった。遺影に線香をあげながら真下君の幸せな生前の生活をしのんだ。

昭和5年生まれのわたしは近所の足利市立東小学校を卒業すると栃木県立足利中学校に入学した。そして約2キロ離れたこの学校にかよった。この登校路のほぼ中間に真下君の家があった。真下君とは同級生であったので毎日真下君の家によって同君と連れ立って学校に通った。私たちが中学3年、15歳の時に太平洋戦争がおわり、平和がよみがえった。戦争中はできなかった野球やソフトボールができるようになった。

真下君は野球やソフトボールが上手で、わたしもこれを見習って一緒に楽しむようになった。おかげで私は日本化薬（株）厚狭作業所勤務中や東大勤務中にソフトボールを楽しむことができた。特に厚狭作業所勤務中は、職場の作業員がちょうど20名前後で、職場の隣がソフトボールに合った空き地であったので、毎日雨に日も風の日も休みなく昼休みに職場のほぼ全員がソフトボールをやった。職場の人たちは特に選ばれた人たちではなかったが、このチームは強くなり、厚狭作業所内では他の大きな職場のチームに対しても無敵のチームとなった。

また外部のチームに対してもほぼ無敵のチームになった。しかし上には上があるもので、県体育大会の決勝戦では、小野田セメント（株）のチームに1対ゼロで負けてくやしい思いをした。ソフトボールに関しては厚狭作業所でよい思い出を残したが、その後東京に転勤になりソフトボールとも離れることになった。

私はその後京都大学化学研究所に派遣されたり、日本化薬の赤羽の研究所に派遣されたりしたが、昭和38年に東大工学部燃料工学科の難波教授のもとで働くことになった。わたしは難波先生が興味を持っている研究を日本化薬の厚狭作業所でやっていたので、難波先生が教授になるにあたって呼んでくださったものと思われる。

私は東大に講師として採用され、5年間ニトロ化反応の研究を行い、学位を得て、助教授に昇進した。私が東大に戻ったときに、田村昌三さん（現東大名誉教授）が難波研の大学院生として入ってきた。いろいろな面で世話になった。

真下君とはしばらく疎遠であった。近年私は足利工業大学に招かれ、2期8年間足利工業大学の学長を務めた。それから真下君と顔を合わせることが多くなり、親交がよみがえった。真下君の運転する車に乗せてもらって、桐生近郊を訪れたりした。

最近真下君と会わないなと思っていたところ、家内から真下さんが亡くなったらしいと聞いた。あわてて桐生市のお宅を訪ねたところそれは事実であった。

社告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

漢詩

潮騒録（七十二）

鯨游海

碧眼墨客　　平成廿四年三月

鬼怒鳴門歸化因
自知色卽是空身
秋山春曙侘茶道
日本人於日本人

押韻・因身人

〈碧眼の墨客〉

鬼怒鳴門の　帰化せる因は
自ら　色即是空の身なるを知ればなり
秋山　春曙　侘び茶の道
日本人よりも　日本人なれば

〔注　解〕

海外に於ける日本文学研究の第一人者、ドナルド・キーン氏が日本に帰化された。名前の漢字表記の鬼怒鳴門は、氏自身の考案によるものなのでそのまま用いた。

東日本大震災の復興に勤しむ日本人と共に過ごし余生を日本に捧げようとの思いからである。一九二三年米国生まれの八九歳。平成二十年文化勲章を受章した親日家。

歸化＝本来の意味は「君主の徳に感化して従うこと。王化に帰服すること」であったが、加えて「国籍を他国に得てその国民となる」の現代語となった。

色卽是空＝万物の本質は空虚である（般若心経）より。

秋山春曙＝清少納言・枕草子「春は曙……秋山吾は」

〔口語訳〕

D・キーン氏が去年三月日本に帰化されたが、その原因は奈辺にあるのか。それは氏が震災以前から色即是空（俗世の万物は空虚也）をご存知だったからだ。平安時代の日本文学や茶道に通じた日本人より日本人的な人だ。

☆人美し春はあけぼの秋は山
　このまほろばに骨を埋めん

飛來紐育疾於風　飛来す紐育に　風よりも疾く
摩天樓下人如蟻　摩天楼下　人蟻の如く
證券街邊殺氣充　證券街辺　殺気充つ
（マンハッタンスラムの児らの眼は険し
スーツケースの重たきを恥ず）

☆嚴めしきウォール街は殺気満ち
禍福の流転一髪の間

寄東京驛復原

平成廿四年十月

鐵路玄關禁苑頭
蘇生赤壁數層樓
威風白壽堂堂貌
辰野先生欣快秋

押韻・頭　樓　秋

〈東京駅復原に寄す〉
鉄路の玄関　禁苑の頭
蘇生る　赤壁数層の楼
威風の白寿　堂々の貌
辰野（金吾）先生　欣快の秋

〔注　解〕

憶美國

平成廿四年九月

機上客歸安堵顏
反芻萬感憶如山
友情廣大繁華夢
禍福無忘一髮間

押韻・顔　山　間

〈アメリカ合衆国を憶ふ〉
機上の客は帰す　安堵の顔に
反芻す万感　憶ひは山の如し
友情と広大と　繁華と夢と
禍福忘るなかれ　一髪の間なるを

〔注　解〕

この頃「思い出の協和銀行」というタイトルの下、今はりそな銀行に変容した銀行の元の姿を文章に残しておこうという企画があり、私も一篇を書いた。

タイトルは「危機一髪を救った福の神」

その中に二篇の漢詩を折り込んだが、その内の一首である。

もう一首は、昭和60年に米国に初めて旅行したことを回顧して、後年の平成六年に詠んだ左の詩である。

懷紐育（ニューヨークを懐ふ）
雲海洋洋萬里東　雲海洋々たる　万里の東
玄關＝玄妙な道に入る関門。禅の道に進む入口（仏）。
禁苑＝禁裡。皇居、宮城、御所。白壽＝九十九歳。
欣快＝非常に嬉しく心地良いこと。貌＝姿。容貌。形。

東京駅が凡そ百年前の創建時の姿に復元された。大正三年の竣工以来、関東大震災や先の大戦にも堪えて来た。二層の赤煉瓦しか知らず、それを見慣れた私は、戦時の爆撃によって三階部分を消失したと知って驚いた記憶がある。設計は日本銀行本店も手懸けた辰野金吾。

今、忽焉と当初の姿が現出した。首都の玄関として世界中を見渡しても最高の中央停車場であろう。

なお地下は二層となっていて、免震装置が施されているという。

〔口語訳〕

首都の鉄道による正面玄関はここ皇居のほとり、千代田区丸の内一丁目一番地に在る。

忽焉と姿を現わした赤煉瓦造り三層、威風堂堂の雄姿。

竣工后九十八年白寿の駅の復原工事が完成したのだ。

さぞや当初の設計者、辰野金吾先生も大喜びで快哉を叫び、この秋を祝っておられることであろう。

☆明治人夢に描きし赤き城
いま蘇へる白寿を越へて

《漢詩の流れ61・清》　**龔自珍**

龔自珍（一七九二～一八四一）字は璱人。浙江省仁和（今の杭州市）の人。

母は音韻学者の段玉裁の娘。彼はこの段玉裁から「説文」の学を学び古学に対して早熟の才を顕した。

列強のアジア侵略に対して、無為の清朝に深い不満を抱き抵抗した。三八歳で進士に及第、礼部主事となったが、十年足らずで辞職、帰郷後病死した。一説に親王亦絵の愛妾と私通した為、毒殺されたともいう。

雜詩己卯自春徂夏在京師作詩得十有四首

少小無端愛令名　少小端なくも令名を愛す
也無學術誤蒼生　也た学術の蒼生を誤るなし
白雲一笑懶如此　白雲　一笑す　懶かくの如きを
忽遇天風吹便行　忽ち天風の吹くに遇ひて便ち行く

（幼少の頃は、ただわけもなく只に名声を挙げたいと願っていた。

しかし幸か不幸か、万民を誤った方向に導く程の学問も持ち合せてはいなかった。

かくも懶惰な、白雲のように浮わついている自分を自から笑っていたが、

突然、天つ風に出逢って、吹かれるままに行動することになったのだ）

學術＝修身、斉家、治国、平天下が理想の目標だった。

イドと超自我の谷間で（八）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

封筒に書かれている宛名は「美容院殿」で綯ではない。鋏を取るのももどかしく、封をちぎった。便箋に

「私は美容師小林アヤの妹で小林つぎ江と言います」

から書きだされ、アヤが理美容学校卒業後「すずらん美容院」に勤めていた迄のことは分かったので、もしかして新しくできた「あや美容院」が姉と関係のある美容院ではないかと思い照会の手紙を出させていただいた、と手紙の目的を書いた後に突然の失礼を詫びている。

読んだ綯は驚きと嬉しさで、台所に駆け込んで再度読み返しているうちに、涙が止まらなくなって声を出して嗚咽した。

ヨネがその姿を見つけ、びっくりして

「先生、どうしたのですか。どこか具合が悪いのですか」

とテーブルに伏せて泣いている綯の肩に手を置いて顔を覗き込んだ。涙でくしゃくしゃになった顔をあげて

「おヨネさん、喜んで頂戴。二十年間もどこにいるのか分からなくて、会えなかった、片時も忘れたことのない妹から手紙が来たの。これ読んで」

と手紙を渡した。読み終わったヨネは

「先生、嬉しいですね、良かったですね」

と涙声で喜んでくれた。

「先生、今日はもう夕方ですからお帰りになって、明日朝早く妹さんの所へ行ってください」

つぎ江は篤志家が私財を擲って作った戦災孤児収容施設で働いていると書かれ、差出人住所から調べると、場所は千葉県市川市郊外だった。

その夜、綯、孝子、ヨネの三人は、明日朝早く綯の出かける準備をしながら、孝子は

「行ってみなければわからないけど、できることならつぎ江さんをここへ連れてきて、三人で一緒に暮らしましょう」

「お母さん、有り難うございます。そうできるといいですね」

翌朝早く藤沢駅から東京に向かい、東京駅で乗り換えて市川で下車。駅で行き方を教えて貰い、バスで東北方向へ三十分ほど行くと、小高い丘の上に赤や緑の三角屋根を付けた建物が施設だった。

施設の名称は「慈しみの家」と看板がかかっているが、地元の人たちは親しみを持って「丘の家」または「教会の家」と呼んで、戦災孤児たちのために食べ物や古着などを差し入れていた。

玄関から入って行くと五十歳くらいの女性が出てきたので

「突然で申し訳ありません。こちらにお世話になっている小林つぎ江の姉の三条綯でございます。つぎ江がお世話になって有り難うございます」

と挨拶すると驚いて

「え！　つぎ江さんのお姉さんですか。まあ！　私は経営者露木の妻です。つぎ江さんは本当によく働いてくれています。只今呼んで参りますので少々お待ちください」

「つぎ江は今仕事中なのではないですか。もうじきお昼休みになると思いますので、その時間まで待たせていただきます」

「今日はいいお天気になりましたので、お洗濯中だと思います。洗濯が片付き次第こちらによこしますので、暫くお待ちください」

と言って奥の方へ入って行った。綯は玄関を出て敷地の中をのぞくと、庭の奥に十字架を屋根に乗せた礼拝堂らしい建物があり、その横のアパート風の建物の中から子ども達の声が聞こえてきた。

十一時半になったころ、後ろで人の気配がするので振り向くと

「おねぇちゃん？」

と、か細い声が聞こえ、同時に二人は

「つぎ江！」

「おねぇちゃん！」

「会いたかった」

と、後は二人とも声にならず、泣きながらお互いを抱きしめていた。

そこへ露木夫人がやってきて、二人を事務室に案内した。綯がつぎ江の分までお弁当を持って来たと話すと、夫人は

「あら！つぎ江さんいいわね。お姉さま心づくしのお弁

当を戴きながらゆっくりお話ししなさい。事務員は食堂へ行きますから」
と言って席を外してくれた。

つぎ江のお昼休みは一時間なのであっという間に過ぎてしまってお互いの現状位しか話せなかったが、つぎ江にこの次の休日、来週火曜日に絢の所に来てもらうこととして、地図と交通ルートと電話番号、住所を紙に書き、交通費程度のお金も渡してその日は別れた。
つぎ江は話している間中、絢の手を握っていた。

帰るときに露木夫人はつぎ江に
「仕事の方は心配しないで、お姉さんを市川駅まで送って行きなさい」
と言ってくれたが、絢は
「私が突然来てそんなに甘えるわけにはいきません。今度のつぎ江の休日に私の所に来てもらいますので、お言葉だけで十分です。二十年ぶりに会えて、こんなに嬉しいことはありません」
と深々と頭を下げて「慈しみの家」を後にした。

帰りの車中、絢は妹と会えたこと、自分に肉親がいた！ということの喜びに浸っていた。

帰宅した絢は妹に会えた喜びを孝子に話し、孝子も我がことのように喜んでくれた。
先方で一時間程度しか話す時間がなかったが、次週の火曜日に招いているので、その時に二十年の長い間の積もる話を何から話をしようかと思っているだけで寝付かれなかった。

帰宅した夜、電話で海保純に今日の出来事を報告した。海保純も我がことのように喜んでくれ、きっと母親の導きだから、お母さんの霊に心を込めてお礼を言うように、とアドバイスを受けた。

翌日夜、加賀大造とヨネがやってきて、自分達の結婚のことについて
「お言葉に甘えて結婚させていただきたい。式は家族だけで特に仲人も立てず来月の三日、大安吉日に行いたい。住む家は藤沢駅南口から近いところに税理士事務所を兼ねることのできる家を借りるようにしたいと思っている」
と報告に来た。
絢が
「加賀さん、茂原のお兄様には連絡して来ていただきましょうよ」

というと、大造は
「私も兄だけには知らせたいと思っているので、自分から連絡します。有り難うございます」

孝子は大造とヨネの結婚、絢の妹が見つかったことなどを我がことのように喜び、結婚式の場所として藤沢駅南口にある格式高い料亭に自分で交渉してくるから任せておいてほしい、と有無を言わさず決めてしまった。

絢がつぎ江を訪ねてから五日後、藤沢駅まで来たつぎ江を絢が迎えに行き、午前十時過ぎには連れてきた。

つぎ江の話は次の通りだった。
空襲ですべてを焼かれて、母の姿も焼死体一人ひとりを探したが見つからなかったこと。寝るところもないので自分たちが避難した防空壕で夜を過ごしたこと。幸い多少の食べ物は防空壕に残っていたのでそれを食べながら焼跡をくまなく歩いて、集められている焼死体を覗き込んでいたこと。そのようにしているうちに、親や家族が焼死して独りぼっちになった幼児や少年少女を、空家になっている防空壕に集めて面倒を看ている露木さんと出会って、お手伝いを頼まれて一緒に子どもたちの世話を始めたこと。その後子ども達七人を連れて、千葉県市川市郊外にある露木さんの自宅に行ったこと。露木さんの家では、敷地内にあるキリスト教の礼拝堂で子どもたちと寝起きしたこと。炊事・洗濯が忙しく、そのほか母親から仕込まれた裁縫の腕が役にたち、毎晩夜鍋で子ども達の下着からシャツ、ズボンまで縫製作業をしたこと。
子ども達のためにかかる経費は露木さんが全て自費で賄っていることから、自分も食・住のお世話になっているので給料のようなものは一切もらわなかった。自分の着るものは地域の方々の差し入れてくれる古着を貰っていた。
一ヶ月くらい前のある日、大掃除のとき、畳の下に敷いてあった昭和二十三年の古新聞に「理美容学校卒業コンテスト最優秀賞小林アヤ」の記事と写真が掲載されているのを見つけ、懐かしい絢の写真に出会って、嬉しくて直ぐその場で露木夫人に話した。
学校に電話してその後の消息を聞くと「すずらん美容院」に勤めていたことを教えて貰い、「すずらん美容院」に電話したところもう退職していて、どこにいるか分からないと言われた。電話に出た方が親切な方で『一年くらい前に本鶴沼に「あや美容院」という美容院が開店しているからそこへ聞いてみたら』と教えてくれたので、住所を調べて手紙を出した。
露木夫人から「お姉さんが面会に来ている」と言われたとき、嬉しくて、嬉しくて、急いで洗濯を終えて玄関

の外でお姉ちゃんの姿を見たとき心臓が止まる思いだった。嬉しかった。

つぎ江の話が一通り終わってから、絢が満州から日本へ帰国してからのことを一通り話した。

孝子はつぎ江に泊まって行けるか、と話したが、明日も子どもたちの食事作りからいろいろとお当番の仕事があるからと、施設に夜九時ころ着く東海道線で戻って行った。

大造とヨネの結婚式は新郎新婦の他には、孝子、絢、茂原の兄一郎だけで、簡素に行われた。一郎は孝子と絢に何度もお礼を言って帰って行った。結婚式の費用は全て孝子がお祝いとして出していた。

絢は大造が税理事務所を開き、ヨネと結婚した段階で、本来大造の所有である財産を、どのように話して返すべきか悩んでいた。当時の処分金額は三千二百万円で、旭東銀行と旭東物産の意見も入れて、多くを年利七%複利の国債を購入し、二百万円だけ金を購入していた。

過日、旭東銀行鎌倉支店で、国債信託として預けてある元利合計金額を計算してもらうと、来年で十年になり元利合計で約五千八百万円、金は戦後のインフレで価格が上昇し。もともとあった金と合算すると現在価格では一千五百万円くらいになっているという。

支店長は、これからは、日本の国が戦後時代を脱却して本格的な経済発展をすると考えて、商業的な一等地への不動産投資を奨めた。

このような資産を預かっていることは孝子にも話していなかったので、昨夜、今までの一部始終を孝子に話した。孝子は

「お世話になった社長さんとはいえ、絢さんがなぜここまで面倒を見るのだろうか、と不思議に思ったことはあった。でも貴女は偉いわね。一時的に使わせてもらったお金は全部返して、その上キチンと銀行に預けて持っているんだもの」

と言ってから

「あなたが思っている通り海保先生にお願いして、海保先生と一緒に加賀さんに話した方がいいわね」

とアドバイスをしてくれた。

二日後の午後、海保邸の二階和室に、加賀大造、絢、孝子の三人が海保純の前に座った。挨拶の後、海保純は

「加賀大造さん、これから話すことは本来絢さんがお話することだと思いますが、絢さんがどんなことでも私に

話してくれていたので、私から分かりやすくお話したいと思います」

と前置きを言ってから

「加賀さん、お嬢様の京子さんは日本に帰る途中に現地の人たちに殺されました」

と言って大造を見ると

「そうですか」

と言って海保純の次の言葉を待っている。

『それでね、絢さんは京子さんの死体を確認しています。京子さんが自動車から引きずり出されるときに、「アヤ、これを持って先に日本に帰っていて」と大事に持っていた包みを渡されたので、絢さんはそれを持って日本に帰りました。焼け野が原になっている東京を通って軽井沢の別荘に入ってからその包みを開けました。加賀さんが京子さんと絢さんに説明されたときの相続関係の書類とお二人の実印が入っていました。翌朝、門の外に人がいるので出て行くと「儂は五代という軍関係の者だ。加賀大造はいるか。立て替えてあるお金を返してほしい。返さないなら別荘を差し押さえる」と脅かされました。怖くなった絢さんはその夜考えて「加賀さんは亡くなっている。戸籍にも死亡は記載されている。京子さんは亡くなっているが戸籍上は生きている。全財産を差し押さえられる前に相続手続きをして、名義を全て京子さん名義に変えてしまおう」と思って、京子さんの着物を着て、京子さんになりすまして相続手続きをしました』

海保純はここまで言ってコップの水を飲みながら加賀大造見ると、何か質問したそうな態度であったので

「加賀さん、一通り私が話してから質問してください」

と言って話を続けた。

『絢さんはあるときハッと気が付きました。「私がやったことは、京子さんになりすまして全財産を横取りした、と言われる行為ではないか。いや、そうじゃない。私は加賀家の財産を守りたかっただけだ。でも誰が信じてくれるだろうか」と絢さんは心の中で大変悩んだのですよ』

『その後の絢さんは混乱していた戦争直後の社会の中で、自分で生きていかなければならない。そこで若干の必要資金はそこから拝借しましたが、今では全て返しています。亡くなっている京子さんの名義にいつまでもしておくわけにはいかないので、取引銀行を変えるときに絢さんの名義にしました。そこで私に「どうしたらいいのか霊界にいる京子さんに聞いてほしい」と頼みに来ました。と言うのは京子さんがアヤさんに連絡したいと、私の所に霊界から信号が来ていたのです。それで霊界の京子さんを呼び出してすべてを話すと「絢さん、貴女持っていて頂戴。必要なものは使っていいけど、貴女が死ぬときは、最初に預かった金額程度は、社会的に困っている人たちの救済に使ってくださいね。例えば大磯のエリザベスサンダースホームのようなところに寄付するとか」と

言う京子さんの言葉で絢さんも私もホッとしました』

一息ついてから

『驚いたのは、加賀さん、貴方が「生きている」ことが分かったときです。絢さんに「ご挨拶と言うことで加賀さんがどのような状況にあるか見てきなさい」と言って茂原まで行かせて、その結果が貴方を引き取ってお世話する、と言うことになったわけです。茂原当時の貴方に大金をお渡しできる状況ではありませんでした。新聞もラジオもない生活で、世の中が理解できているはずはありません。貴方が税理士試験に見事に合格して、結婚もして、税理士事務所を開業した今が、お渡しするとき、と考えてお話した次第です』

「それで、絢さん、それは今どこに幾らあるのか説明してください」

の海保の声に、絢は

「はい。無記名国債が元利合計で約五千八百万円、金が相場で約一千五百万円、普通預金が三十万円、合計すると約七千三百三十万円になります。昨日、全て預けてある旭東銀行鎌倉支店で教えて貰ってきました」

と言って大造を見た。

大造は絢を見つめていたが一言も発しない。海保純は付け人にお茶とお菓子を持ってこさせ

「鎌倉の鳩サブレ、ようやく戦前の味が戻って来たね。皆さん召し上がれ。加賀さん、お話はいかがでしたか」

と大造に聞くと

「はい、全く思っても考えてもいなかったことで、何か言えと言われても・・・・・」

と大造がそこまで言った瞬間、海保純が苦しそうにテーブルに突っ伏して呻きだした。

「お父さん。良かったわね。絢さんに感謝しなくっちゃ。どれだけ感謝しても追い付かないね。私、こちらの世界からお父さんを見ているからね。結婚おめでとう。私の新しいお母さんに宜しく言ってね」

の声が海保純の口からでた。孝子は驚いていたが、もっと驚いたのは大造と絢だった。その声はまさに京子の声そのもので、大造は京子がどこかにいるのではないかと、キョロキョロとあちこち見渡していた。

突っ伏していた海保純が顔をあげて座り直した。すごく疲れた表情をしている。

「あー驚いた。私の所に京子さんが来たのね」

「先生、驚いた。声が生前の京子さんの声なんだもの。私、このような経験は初めて」

『絢さん、これは私の経験からも人生何度もあることではないのよ。京子さんとしてはお父さんに「私が話していることはホントのことなんだよ」と言うことと、結婚のお祝いを直接言いたかったのだと思うわ。それで私の所に来たのね』

大造が座り直して絢の前に両手をついて

「絢さん、今初めて知りました。有り難うございました。今日この場で全て私のものと言われてもどうしていいのか分かりませんので、恐縮ですが暫くは今まで通り預かっていてください」

とお礼を言い、そして海保純に向かって

「先生、いろいろとお話しいただき有り難うございました。どうしたらよいのか、よく考えて改めてご報告に伺います」

「加賀さん、もしもよ、あの時絢さんが全財産を相続も売却もしないでそのままにしていたら、戦後のどさくさで、貴方が帰国するまでの間にどうなっていたか分かりませんね」

「先生、その通りです。絢さんには先程京子が言うとおり、どれだけ感謝していいのか分かりません。絢さん、本当に有り難うございました」

暫くお茶を頂きながら歓談していたが、大造は京子の最期を知りたがっていた。絢が

「加賀さん、自宅に来ていただけませんか。そこでお話しましょう。十年以上経っていますが、私の脳裏には昨日のことのように鮮明に残っています」

孝子が

「そうね、加賀さん、今晩奥さんも一緒に来ていただいたら。夕飯もご一緒にしましょう」

「有り難うございます。京子のことですから、私一人でお伺いします」

その夜、孝子と大造は夜の更けるのも忘れたかのように、京子の死について絢の話に耳を傾けていた。大造が

「そうですか。京子は現地人使用人に殺されたのですか。家の犠牲になったんだね、可哀そうなことをした」

と涙を拭っていた。帰り際に

「絢さん、三条さん、今日は有り難うございました。落ち着いたら京子の葬儀のことも考えたいと思います。お話しいただいたお金のことは、あまりにも大きな金額ですので、ヨネには私が話すまで黙っていてください。私なりに良く考えてご意見を伺いに来ます」

大造が帰ってから孝子は

「絢さん、貴女の心の綺麗さが関係者の心を打っているのね。加賀さんも貴女に心から感謝しているし」

「お母様、最初生きるためにそのお金をお借りしたとき、私の心は後ろめたさで大変だったのですよ」

「そのときは仕方がなかったのよ。でもその後は立派よ」

翌朝、七時前に電話が鳴った。絢が出ると

「お姉ちゃん、私、つぎ江よ。今度のお店のお休み、来週の火曜日でしょ。今日が火曜日だから丁度一週間後だね、ここの奥さん、ほら露木さんよ。一緒にそちらへ行きたいんだけど、都合はどう？」

「何の用事？」

「奥さんがお姉ちゃんにご挨拶したいんだって」

「貴女を今まで育てて下さったことで、お礼を言わなければならないのはこちらの方よ。今度の火曜日は一日空いているから、お昼食をこちらで一緒にしない？」

「ありがと。ではお昼までに行くことにするね。楽しいな」

「つぎ江、でもあの忙しい露木さんの奥さん、わざわざ来るのは何の用事なの？知っているんでしょ」

「奥さん、私に何も言わないから分からない。多分、私にここで続けて働いてもらいたい、と言うことじゃないかと思うけど」

「では、お見えになったときお話をよく聞くこととするわ」

「じゃ、そのときね．バイバイ」

それから三日後の夜中に電話が鳴った。まだ、加賀大造からは、絢が預かっている財産のことでは何も言ってきていない。

「あ、先生ですか。こんな夜中にすみません。今、夫を救急車で湘南藤沢病院へ連れて来ました。私は今病院です」

ヨネの声は震えている。

「おヨネさん、加賀さんがどうかしたの？」

「急にお腹を押さえて、痛さに転げまわって・・・」

「原因は何なの？」

「わかりません。とりあえず痛みは止めて、今、先生が診てくれています」

「私、タクシーで直ぐ行くから」

と電話を切って、心配して起きてきた孝子に告げて病院へ出かけた。

続く

初めての雛めぐり

漆原直子

〝初めての雛めぐり〟というのは、私のことではなく、埼玉県越谷市のことである。〝旧日光街道越ヶ谷宿〟に関しては、『まんじ』に2回ほど書かせて頂いたが、その続々編である。私たちの『旧日光街道・越ヶ谷宿を考える会』が主催者となり、まちなみ保存と活性化のきっかけになればと思い、今年の3月2日(土)から3日(日)にかけて行った越谷にとって初めてのイベントである。

越ヶ谷は、江戸時代から〝江戸雛〟の生産地であった。現在は隣接する岩槻（現在、平成の大合併により、さいたま市に併合されて、岩槻市から岩槻区となっている）が有名であるが、岩槻の雛人形制作は越ヶ谷から広がって行ったそうである。越ヶ谷で胴体を作り、岩槻では頭を作って合体させていたという。それが『越ヶ谷雛』として、埼玉県の伝統的手工芸品にも指定されていて、現在も製作所や販売店が二十数軒ある。中でも「植木屋人形店」が『越ヶ谷雛』の元祖とされ、安永年間(1772～1782年)に、会田苗佐右衛門という人が江戸の十軒店（現在の日本橋室町）で、雛人形の製法を学び、越谷の人々に伝えたのが始まりとされる。その後人形店が増え、越谷、十軒店、鴻巣で開かれるひな市は、関東の三大ひな市と言われていたそうである。しかし現在は岩槻ばかりが有名になってしまっている。

その岩槻では10年位前より〝まちかど雛めぐり〟と称して、店先や古民家などに雛人形やつるし雛などを飾り、市民、行政、人形店が一体となって1か月近くにも及ぶ一大イベントを行っている。今年は第1回目の『雛めぐりサミット』が開催された。私も何か参考になるものがあればと思い、参加してみた。雛めぐりを実施して

いる8か所の自治体から、活動内容が発表された。今やこの『雛めぐり』は、日本全国各地で開催されており、その目的は、まちの活性化や地域づくりである。今回、私が一番面白いと感じた発表は、奈良県高取町の活動である。高取町は奈良県飛鳥町の西隣に位置し、住民の高齢化と過疎化が進んでいる。このままでは公共の交通機関も減らされて、さらなる人口減少が危惧されるとして思いついたのが〝雛めぐり〟である。たいていどこの家にも大なり小なりあって、しまい忘れられていたりする。それを皆で飾り、雛人形にまつわる思い出話を添えて、観光客を呼び込もうとしたものである。発表者はそのイベントを立ち上げた方で、定年後の第二の人生としてまちづくりに取り組んでいた。その方は、定年前は会社人間で家庭のことを振り返る暇が無く、定年になったらなったで、今度は地域のボランティア活動等で外を出歩くばかりで、相変わらず家庭を顧みなかった。雛めぐりの企画をした時に、初めて我が家にもお雛様があったことに気付いたという人である。他人事なので笑えるが、これが自分の家族だとしたら噴飯ものだ。遅ればせながらでも気がつくことができて良かった・・・。

私自身、越谷でもこのような〝雛めぐり〟を行うことは、価値のあることではないかと思った。空き店舗が増え、古い家が壊されつつある中、このようなイベントを行うことはそれらの再活用になり、見物に来る人が増えれば、『越ヶ谷宿』としても注目されることになる。ましてや江戸時代から続く雛人形の産地であるのに〝雛めぐり〟をやらないでいることは、非常にもったいないことである。昨年の5年ぶりの秋祭りの時に、たまたまさる古民家を見物に来た方が、越谷市民で〝つるし雛〟を作っていて、こういう家に〝つるし雛〟を飾りたいと話していた。その人は、岩槻につるし雛を教えに行っており、3月の岩槻の雛めぐりでは、自分達の作品を展示すると言う。数年前より地元の公民館で、段雛とつるし雛の雛飾りを行っていたが、かねがね、旧日光街道沿いの古民家で展示したいと思っていたそうである。越ヶ谷における雛めぐりは、私達だけでなく、市民の中にも同じように考えている人がいることがわかり、『越ヶ谷宿の雛めぐり』の開催を商店会や商工会、市に提案した。ただ、私達の会はご厚意の寄付金と自腹の資本金しかなく、予算が無い中での企画であった。とりあえず、私が大枠の企画書を書き、商工会に打診した所、特に異論は無く、チラシやポスターの紙や印刷代を負担して頂けることになった。人形組合も共催者になって頂けた。商店会も各商店に呼びかけ、雛人形の展示の協力を依頼した。お寺に供養に出されている雛人形の中で、燃やしてしまうにはまだ惜しいような雛人形を神社が保存していて、お雛様が無い家でも、飾っても良いというお宅には、そこから貸し出すことにした。初めは数軒しか声が上がらなかったが、雛めぐりの日が近づくにつれ徐々に増えて、いつの間にか最終的には26軒になった。ひっそりとさりげなく飾っているお店もあり、見ていて楽しい。

私の伯母が経営する金物店が、江戸後期より続いているのだが、母子3代に渡るお雛様が石蔵にしまわれていた。黒い漆塗りの木箱の中に入って、蔵の梁の上に置かれていた。今回の雛めぐりの為に、約50年以上ぶりにそのお雛様を出したのである。お内裏様が3組あったので、おそらく時代的には明治時代初期から大正にかけてのものと思われる。大きさは背丈15㎝位の小さなものであるが、虫やねずみ等の被害はほとんど受けていなかった。着物の色も衰えておらず、小さいながらも立派である。その他3人官女や5人囃子、高砂、太田道灌(本物の鹿の皮付き)、等もいる。製造元は人形が入っていた箱に『光月』という名前があった。

当日は、私達の会でまちめぐりガイドツアーも行った。テレビ埼玉や地域紙にも取り上げられたおかげか、ツアーの申し込みは1~2日で定員となり、後から申し込んで断られた人から苦情が出たくらいである。この2日間、朝早くからの人出で、伯母のお店にも次々と見に来る人がいた。地元のお雛様を見たいと言う方や、伯母のお店の雛人形を見て、昔自分の家にもこれと似たようなお雛様があったと懐かしがる方がいた。お互い初対面で全く見ず知らずではあるが、雛人形を通じて色々な話ができ、雛談議に花が咲いた感じである。結構、中高年以上の男性も見に来て、真剣にカメラを向けていた。また、お子さんがいると言うある男性は、ご自身が雛人形を集める趣味があるとのことで、ゲーム漬けになっている今の子供たちを憂えて、子供たちが、ゲームよりこういう人形作りに関心が持てるようにすることは、情操教育によいのではないかと話していた。私も同感であった。2日目は市長さんもお忙しい中、見に来て下さった。

今回のイベントの感想として、お雛様を展示する側も見物する側からも、双方から、楽しかった、また来年もやって欲しい、と言う声が聞かれた。私としては、今後のために、この企画の実施報告書を作成し、市や商工会等に報告する予定である。

今回好評であったことを受けて、今度は五月に、商店会が中心になって、〝甲冑めぐり〟を計画している。『越谷甲冑』は『越谷雛』同様、江戸時代より作られていて、埼玉県の伝統工芸に指定されている。これも初めての試みであり、どのような反応があるかわからぬが、大きな実験である。乞うご期待・・・!

古代出雲国筆頭
熊野大社の盛衰

村上邦治

天狗山は、松江市から二十キロ南にある。中国山地の北端に当たり、二等辺に整いひときわ高いので、市内からよく見える。かつては、熊野山（別名天宮山）とよばれ、高さは六一〇メートルである。

山頂からは、右に伯耆大山、左に石見三瓶山、正面の島根半島先に隠岐島が認められ、九つの郡からなる出雲国全域を、見渡すことが出来る。また眼下には、国庁や国分寺があった意宇平野が広がっている。

山頂の近くには、巨岩が露見しており、磐座と呼ばれている。周辺は少し平たく、ここに、七世紀半ばまで、出雲国で最も崇められた、熊野大神を祀る熊野大社があった。

神の山とされた、熊野山の磐座を神体とする熊野大神は、典型的な自然神（地元神・国神）であった。ところが、八世紀初め、天皇家による日本国支配の正当性を確立するために編纂された、『古事記』（和銅五年　七一二）と『日本書紀』（養老四年　七二〇）による「記紀神話」から、天つ神と称えられることになった。しかし『記紀』が広く行き渡る中世以降は、しだいに勢いを失い、出雲国最高神の地位は杵築大社（明治以降出雲大社と称する）に、また全国にある熊野神社の代表格は、紀伊熊野三山に奪われてしまう。そして、江戸期には、ついに歴史上からその名は消失する。「記紀神話」により、翻弄された熊野大社の栄枯を辿ってみたい。

一　興隆

熊野山の山頂にある大岩の辺りは、「元宮ヶ成」と呼ばれ、熊野大神が天降った場所と伝えられている。唯一完

本として残る『出雲国風土記』（天平五年　七三三）意宇郡総記に、『記紀』にはみられない「国引き神話」が語られている。

この神話では、出雲の国土創世神として八束水臣津野命が、朝鮮半島（新羅）、北陸（越）、隠岐島から、「国来国来」と国土を綱で引っ張って、島根半島を作り上げる。その際、新羅の国土は杵築の御埼になり、引っ張った綱は薗の長浜（薗の松原）に、杭は三瓶山になる。また、越の国土は三保埼になり、引っ張った綱が夜見島（弓ヶ浜）、立てた杭が大山になった、という壮大なものである。

この地元に伝わる「国引き神話」は、天狗山からみえる風景と、見事に合致する。熊野大神の原像は、出雲国を創世した八束水臣津野命であり、出雲国の最高神とされたことも肯けよう。

『風土記』によると、出雲国は、四大神に護られていた。東に能城大神（能義神社）、北に佐多大神（佐太神社）、西に杵築大神（杵築大社）が其々配置されていた。これら地元神を従えたのが、中央に位置する熊野大神（熊野大社）であった。

熊野大社が、山頂から山麓の登山口辺に移されたのは、斉明五年（六五九）である。『日本書紀』に、「是歳。命出雲国造。修厳神之宮。」とあり、天皇が、出雲国造に熊野大社の造営を命じたことが記されている。この地からは、山間に熊野山頂が眺められ、「上の宮」と称された。その後、五百m下流の意宇川沿いに、「下の宮」が造営され、二社になった。この「下の宮」が、現在大社のある場所である。

かねてより、『日本書紀』のこの条は、杵築大社造営に当てることが、定説とされている。しかし、次の三点から、熊野大社が相応しいと思われる。

まず『日本書紀』では、この記載のあとに、二つの逸話が述べられている。

「そのとき狐が意宇郡の役夫の採ってきた蔓（宮造りの用材）を噛み切って逃げた。また犬が死人の腕を揖屋神社のところに噛って置いていた。―天子の崩御の前兆である。」（『全現代語訳日本書紀』宇治谷孟）

揖屋神社は、現在の揖夜神社のことで、これら逸話はいずれも、杵築大社のある出雲郡ではなく、意宇郡内で起きたものである。

次に、八世紀前後の出雲国内事情を知ることのできる『出雲国風土記』では、常に、最高神は熊野大神であり、杵築大神は、それに次ぐ地位にあった。既に纏まっていた『記紀』の影響を受け、杵築大神（大穴持命・大国主命）は、「天の下造らしし大神」と称されたが、それでもなお、出雲国では第二位に止まっていたのである。

平安朝の文献である『延喜式』（延喜二七年　九二七）に、出雲国造神賀詞が残されている。この祝詞は、出雲

国造が、代替わりの度に都に出向いて、天皇の御世を祝い、自らの忠誠を奏上するもので、霊亀二年（七一六）から天長一〇年（八三三）まで、合計一五回行われたことがわかっている。この奏上儀礼は、天皇はじめ百官が、大極殿に参列する中、出雲国造および主要神社から総勢百名を超える出雲国人が、上京して行われるものであった。この一大行事は、全て細則が定められており、なかんずく、祝詞の内容は、朝廷神祇官の支配下にあったものと思われる。この儀礼の目的が、天皇の権威を誇示することにあったからである。

杵築大神である大穴持命は、『記紀』に登場する「国譲り神話」から、「天の下造らしし大神」と称されることになった。しかし、熊野大神から出雲国最高神の地位が奪えず、神賀詞では、第二位の地位で奏上されている。そのため、儀礼では、熊野大神は「イザナキのひまな子（可愛い子）」の尊称を新たに付け加えられ、天つ神とされた。第二位に止まった、大穴持命との辻棲を合わせたのである。これにより、熊野大社の主祭神は、スサノオ神となった。

平安朝半ばまでの杵築大社は、神賀詞から判明するように、「記紀神話」が既に存在し、杵築大社の役割は重要なものになっていたが、中央朝廷では、熊野大社に次ぐ扱いとされていたのである。

これを裏付けるものとして、神階の推移をみてみたい。神階（神位）は、天武朝から始まり、各神社（祀られた主神）に対し、朝廷が位階を与えるものである。中世以降、天皇への奏聞を経ないで、神祇官や国司が、勝手に授与乱発するようになり、その権威を失った。しかし、平安朝半ばまでは、本来の制度が維持されていた。この神階によると、杵築大社は、常に熊野大社の下位に位置していた。貞観九年（八六七）両大社ともに、正二位となるが、それまでは熊野大社従二位勲七等、杵築大社同八等で、格差は明確であった。

ちなみにこの時期、位階を超越しているとして位階のない神社（最高位）は、伊勢神宮と紀伊日前、国懸両神宮の三社、正一位は大和大神神社等一七社、従一位は摂津住吉大社等一三社あり、正二位は熊野、杵築ほか尾張熱田神宮等一二社であった。

杵築大社は、「記紀神話」により、次第にその名を広げていく。しかし七世紀半ばの斉明朝期には、『記紀』はいまだ完成しておらず、天皇が、杵築大社社殿の造営を命じたと解釈するのは、いかにも早すぎよう。定説に反するが、当時出雲国筆頭であった、熊野大社の造営に当てるのが正しい。

杵築大社社殿の本格的造営は、『記紀』編纂後の八世紀以降と思われる。特に『日本書紀』が、支配層や知識人に広く行き渡るにつれて、その社殿規模は、拡大（高層化）していったのであろう。

「熊野」という語は「隈野」つまり「奥まった所」をさすもので、各地に、熊野の名を持つ神社は、多く存在した。『延喜式』神名帳に載るいわゆる式内社は、近江、越中、丹後、紀伊にもあった。そのうち名神大社とされているのは出雲と紀伊の二社である。

しかし熊野三山は、平安中期までは寂れていた。これを物語るものとして『本宮神社校定』の中に、次のような記述がある。

「紀伊の熊野は、深山中故にや、漸衰えて、中古より僧徒の手に混雑せしと見ゆるを、出雲の熊野社は、国造兼行して頽廃なく、文徳実録仁壽元年九月、特擢出雲国熊野大神加従三位と見え、次に三代実録に、貞観元年正月正三位を授け給ふ、此年同日に、紀伊国従五位下熊野速玉神、熊野坐神、並従五位上と見えて、初従五位下に進み給える年月は、国史に漏されたれど、おもふに仁壽元年、出雲の熊野神に擢て授け給へる事によりて、愁へ申してその後に給はりしなるべく、夫によりて此度も同日に昇階し給へるなるべし、同書に同年五月二八日、程もあらぬに、又出雲国正三位勲七等熊野坐神従二位と見え、同書に紀伊国従五位上熊野速玉神、熊野坐神、並従二位と見えたるは、猶出雲熊野社のみ高位にて、此国の社いたく劣れるを歎き奉りなどして、つひにかく同日に従五位上より、殊更に擢て従二位を授け、同階になし奉り給えるならむ」（『古事類苑』（大正三年）収録）

この時代、紀伊熊野大社の衰微と出雲熊野大社繁栄のさまは明白であった。その後、紀伊熊野は、『日本書紀』の一書にイザナミ尊を葬ったところとして書かれ、『記紀』の広がりとともに、聖地として仰がれて行くのである。特に上皇の度重なる参詣から、紀伊熊野大社の名声が、全国に高まるのは、平安末期以降である。

このように十世紀頃までは、熊野大社は、出雲国筆頭神社であり、さらに各地にあった熊野神社を代表する神社として、その名は全国に知れ渡っていたのである。

（以下続く）

（司馬雑感　三十一）

「信州佐久平みち」を歩く

山田嘉久

一　司馬遼太郎とぬやまひろし

関西育ちの司馬遼太郎が、生まれて初めて信州佐久平を旅したのは昭和五十一年秋だった。この旅の目的の一つが、佐久の病院に療養している「友人」を見舞うことにあったが、その友人とは、かっての共産党員で、獄中詩集「編笠」で有名な詩人「ぬやまひろし」である。我々の世代では昭和三十年代、「うたごえ喫茶」で盛んに唄われた「若者よ、身体を鍛えておけ」の作詞者として知られている。

戦時中十一年も獄中にあって転向しなかった筋金入りの共産党員ぬやまと、およそ思想的には全く相いれないと思われる司馬を「友人」として結びつけたのはなんであったであろうか。

それは両者が敬愛してやまない正岡子規を通じてであった。司馬の子規に対する異常な思い入れは、代表作「坂の上の雲」で存分に発揮されているが、一方、ぬやまも子規の妹律の養子となった正岡忠三郎と第二高等学校以来の親友であったことから晩年は子規研究に励んでいた。

こうしたことから両者とも、講談社版「子規全集」の編集委員に名を連ね、それ以来、両者は交流を深めたものと思われる。

司馬はその後、忠三郎、ひろしと自己の交流を描いた「ひとびとの跫音」を書いた。（昭和五十四年八月から中央公論連載、五十六年初版上梓）　司馬には珍しい私小説意味合いの濃い作品だが、批評家間では評価が高く、翌年の読売文学賞を受賞している。

思想的には相いれない両者であったが（しかし、司馬自身も書いているように互いに〈相手の物の考え方に対して掣肘を加えることは一度もなかったが〉）唯一、共通の考え方があった。それは田中角栄が提唱した「列島改造」への反対論であった。早速、両者は立場を超えて対談した。

テーマは「土地は公有にすべきもの」。

このため、司馬遼太郎は何時から共産主義者になったのかと巷間騒がれた。

土地問題に異常な関心を示す司馬は、ぬやまのほか、石井紫郎、高橋裕、野坂昭如、松下幸之助など多彩な人物と相次いで対談した。（後に対談集「土地と日本人」として出版）

二　真田三代

それはともかく、この旅の道すじにあたる長野、上田、佐久平の一帯は、古くから「六文銭」を定紋とした真田氏の勢力下にあった。

真田氏は信濃小県郡に住みついた海野氏の出とされている。戦国期に海野幸義の次弟幸隆〈一五一三－七四〉が真田ノ庄に住み、それ以降、真田を姓とした。やがて幸隆三十二歳のとき武田信玄の幕下に入り、以後、信濃先方衆として武田家の信濃攻略に多大の功績を重ねた。

三方ケ原で徳川織田連合軍を破った信玄は、西上の途上にわかに病を発して天正元年（一五七三）に病没するが、幸隆も翌年、後を追うように六十二歳で世を去った。

幸隆の三男昌幸（一五四七－一六一一）は七歳のとき人質として信玄の元に送られる。そして信玄の膝下で十五年にわたって英才教育を受けることになる。

成人後の昌幸は信州上田城を本拠地として、徳川勢の大軍を二度にわたり退けているわけである。

そんな昌幸を司馬はこう高く評価している。

〈信玄に多くの武将がいたが、衣鉢をついだと評価できる者は、この昌幸だったかもしれない〉

信玄亡き後跡目をついた武田勝頼だが、長篠の戦で織田徳川軍に大敗、自殺をして武田家が滅びると、昌幸の真田氏生き残りをかけた戦いが始まった。

天正十三年（一五八五）には北条、徳川連合軍に沼田、上田を攻撃されたが、見事これを撃退した。特に上田城の攻防戦では徳川軍七千を相手にわずか二千の寡兵を率いて勝利を収めた。

また十五年後の関が原の役では、中山道を西上する徳川秀忠の軍勢三万八千を僅か二千の守備隊で拒み、結局、関が原の会戦に間に合わず秀忠は父家康の怒りを買ったと云う話は有名である。

慶長五年、真田昌幸、信之、幸村親子は家康に従って会津の上杉景勝を討つため北上しつつあった。下野犬伏に陣を敷いているとき、石田三成の密書が昌幸に届く。西軍に組すれば甲州信州に八十万石を与えると云うものであった。

嫡男の信之（一五六六－一六五八）は家康の養女を娶

っていたのに対して、昌幸の妻は石田三成の妻と姉妹であり、二男幸村（一五六七－一六一五）の妻は三成の親友大谷刑部の娘であった。

そのため、三者の話し合いは決裂して、昌幸、幸村は西軍、信之は東軍に組することになった。（犬伏の別れ）

しかし関ヶ原の合戦はわずか一日で東軍の勝利に終わった。家康はたびたび苦杯をなめさせられた真田親子に死罪を与えようとしたが、信之の命懸けの助命嘆願によって、高野山蟄居を命じた。

この辺りのことについては司馬は「街道をゆく（高野山みち）」で詳しく書いている。

昌幸は慶長十六年、高野山麓九度山の配所で病死した。

幸村が豊臣方の求めに応じて大坂城に入ったのは、慶長十九年十月初めだった。このとき幸村は百二十人ほどの信州以来の配下を引き連れて行った。このあたりから、後の真田十勇士のような魅力的な伝説が誕生することになる。

大坂城に入った幸村は弱点である城の南に出丸「真田丸」を築き、兵五千とともに立てこもった。これを攻める関東勢を巧みな用兵によって敗退させた。

これをみた家康は十万石で幸村を招降しようとしたが、幸村は丁重に断ったといわれる。

いったん和議なったあとの夏の陣では大坂方にもはや望みはなかった。幸村は決死の覚悟で家康の本陣に攻めかかった。そのため家康は旗本に守られながら三町ほど後方に逃げたと云われる。しかし真田勢はほとんど討ち死に、幸村も討ち取られた。

幸村が最後の突撃を敢行するとき、行動を共にしようとした嫡男の真田大助幸昌を呼び、無理やり大坂城に帰した。大助は豊臣秀頼の自害を見届けたあと、直ちに切腹して果てた。年わずかに十四歳であった。翌日、城内見聞にきた徳川方の井伊直孝は涙をこぼしたといわれる。

一方、徳川方についた信之は九十三歳の長寿を全うした。

二代目将軍となった秀忠は信之を疎んじた。関が原での父の働き、大坂における弟の活躍を秀忠ならずとも何人でもそうしたであろう。元和八年に上田から松代に移封されたのもそのためである。

しかし信之は幕府の公務を誠実、献身的に勤め、いささかも徳川家への忠誠心を疑われることはなかった。その上、本多、井伊などの親藩と親交を結び、明治まで十代続く信州松代藩、真田家十万石を守り通したのである。

そんな真田氏ゆかりの品々を収めた「真田氏歴史館」や隣地にある「館跡」（上田城を築く前の居館跡）を見学した。

地元では単に御屋敷と呼び、小字も御屋敷となっていた。このことは六文銭とともに真田氏に対する地元の信望の厚さを示しているのであろう。

司馬も真田氏が上田から松代に移された大きな理由は地元の真田氏への人気の高さに幕府が恐れをなしたためだと書いている。

三　海野宿

真田氏の前身、海野氏が千曲沿いで最も巨大な勢力となった場所が海野郷であるが、いまは江戸末期の宿場（海野宿）として有名である。

この街道はまた、善光寺への参拝者の道、さらに佐渡金山から江戸へ金を運ぶ金の道でもあったであろう。寛永二年（一六二五）に開設された街道は約六町（六五〇メートル）もあり、道の中央には用水堰を流し、両側には本陣、脇本陣、問屋、旅籠屋など約百軒が立ち並んでいた。

しかし明治時代に入ると宿場の機能は失われたので、本海野の人々は宿場時代の広い部屋を利用して養蚕、蚕種業に転換して活況を呈した。そのため、うだつの造られた家が目立つ。よく見るとうだつにも二種類あり、建物の両側にある妻壁を屋根より一段高く上げて小屋根をつけたものが江戸時代の「本うだつ」。もう一つは明治時代に入って装飾を兼ねた袖壁「袖うだつ」とは、ガイドを務めた地元の老人の話だった。

うだつと云えば、今春訪れた四国吉野川に沿った町「脇町」もうだつの町として有名だが、基となった業種が前者は養蚕業に対して、後者は藍産業という違いがある。

海野宿には格子戸のはまった家が続いていたが、一階の格子戸は明治以降に造られたもの対して、二階の多くは出格子となっており江戸時代に造られた「海野格子」と呼ばれているとの説明もあった。

また一階よりも二階の方が張り出して造られた出桁造りの家は江戸時代の旅籠屋であるそうだ。

海野宿の入り口にある白鳥神社は海野氏、真田氏の氏神だが、遠くは木曽義仲（一一五四－八四）の挙兵の地でもあった。挙兵の中核をなしたのが海野氏、義仲の滅亡後は源頼朝に仕え、鎌倉武士の弓馬四天王として名を馳せた。

木曽に住む義仲がわざわざ佐久平までやってきて挙兵の地とした理由は、一つには馬を得るためであったろうと司馬は解説している。

〈騎兵をもって圧倒すれば平家軍はかならずしもおそるるに足りない。そういう軍事的智恵は、当時、東国のつわものどもにとって、ごく常識的なものであったかと思

える。〉

四　八角三重塔など

別所方面に向かった我々は、北向観音をお護りする常楽寺（天台宗）をまず参拝した。善光寺に詣でて「未来往生」を祈願し、この北向観音に参拝し「現世利益」を祈願しなければ「片詣り」になると云われているからである。

北向観音は平安初期に慈覚大師円仁によって開創されたが、その際、別所三楽寺（長楽、安楽、常楽）も建立された。

長い石段を登りつめると綺麗なわらぶきの本坊がある。その脇にコンクリート造りの美術館もあった。館内には徳川家康がみずから筆をとって書いた「日課念仏」があった。司馬も写真で見た記憶はあるが本物を見たのは始めてだったと書いている。

細字で南無阿弥陀仏という六文字が六段にびっしり。残りのほうに南無阿弥と書いて、あとは陀仏と続けず家康と書いている。

〈かれは、念仏の徒であった。（中略）生涯、戦陣に出るとき　厭離穢土　欣求浄土　と大書した大旆（たいはい）を本営にひるがえした。「ああこんな浮世はつくづくいやだ。よろこび勇んであの世に行きたい」などという文句を戦陣の旗につかった大将など、古今東西に家康しかない。〉

おなじ丘陵に安楽寺（曹洞宗）もあった。

本堂の横手から裏山に登ると有名な国宝「八角三重塔」がある。中国には八角の塔が多いが、司馬は

〈鎌倉末か室町初期に中国に渡った僧がそのイメージを持ち帰って、木造でつくったものだろうが、由来が十分にわかっていない。〉

と書いている。しかし彼の死後の平成十六年、奈良文化財研究所の調査により千二百九十年代（鎌倉末期）に建立された、我が国最古の禅宗様建築であることが証明された。

今晩の泊まりは別所温泉の老舗旅館。別所温泉は「枕草子」にも登場する信州最古の温泉で、国造や国府の所在した古代から庶民の安息療養の場所であり、鎌倉時代には北条一族が好んで来湯した。別所という地名も北条氏の別荘の意であると、旅館のパンフレットには書いてあった。

しかし司馬は中世の頃、前記三楽寺の聖たちが温泉を経営し、自分たちの集落を、寺々に対して「別所」と呼んだに違いないと書いている。所謂「湯聖」だが、湯施行をして自分たちの暮らしを立て、薬師の御利益を説いたというのである。「別所」という言葉の意味は「高野山みち」でも触れているが、官僧がいるのが本寺であるのに対して、無位無階の私度僧が住むのが別所であると。

もっともこのことは司馬の見た旅館のパンフレットにも書いてないので、司馬は観光協会の事務局長に聞いてみたが、そんな話はきいたことがないと云われたと皮肉を込めて書いている。そこで更に、北向観音の住職に持論（私見）を聞いてもらうと、住職は「そうに違いありません」と同意してくれたという。

五　善光寺から安曇野へ

二日目は朝から「善光寺参り」に出かけた。

宝永四年（一七〇七）に再建された現在の善光寺本堂は江戸時代中期を代表する仏教建築として国宝に指定されている。間口二十四m、高さ三十m、奥行き五十四mの壮大な伽藍は東日本最大という。

まず内陣、御本尊を見学した後、今回初めて「戒壇めぐり」に参加した。御本尊の安置された瑠璃壇下の真っ暗な回廊を巡る。やがて中程に懸る「極楽の錠前」を探し当てるのが目的の一つである。

入り口にある山門にも登ってみた。

平成の大修理を終えた四年前から、登楼が四十年ぶりに再開されたそうで、国内最大の棚（くぬぎ）葺建造物であることを実感できた。（数年前、登った京都南禅寺の山門より一回り大きかった。）

内部では本尊の文殊菩薩像とその四方を守護する四天王像などを見ることができた。

その後、仲見世通りをのんびり散策したが、「信州佐久平みち」には善光寺は登場しない。善光寺平（長野盆地）には触れているのに、肝心の善光寺は参拝していないのだ。

どうも、司馬は人出の多い、俗化したような神社仏閣は好きでないようだ。

例えば「越前の諸道」でも道元については存分に語りながら肝心の禅宗大本山の永平寺は訪れていない。（厳密には門前まで行って、雑踏に辟易して引き返している。）その代わりに末寺の宝慶寺や白山神社（平泉寺）に向かっているのである。

午後は長野道を安曇野に向かう。

安曇野の「碌山美術館」。日本の近代彫刻の扉を開いたという荻原守衛（碌山）（一八七九－一九一〇）の作品を公開している。特に一九一〇年制作の「女」は重要文化財。

また親交のあった高村光太郎の作品も展示してあったが、高村は知っていても肝心の碌山は知らない。

しかし同行の最年長Nさんはちゃんと知っていた。さすがは戦前の文学少女と感心した。（その後、Nさんから碌山と関係の深かった相馬黒光（新宿中村屋創始者）の随筆「碌山のことなど」を送ってきた。それによると前記「女」のモデルは黒光自身とのこと。）

次に訪れた「わさび田湧水群」はつい二ケ月前に家族

旅行で来た。お盆の夏休み中だったので猛烈な混み具合だったが、今回はウソのような閑散ぶり。おかげて、わさび田の周囲をのんびり散策できた。

六　松本城と開智学校

美ケ原温泉に泊った我々は最終日は松本城を見学した。文禄（一五九三－一五九四）時代に建てられた五重六階の天守閣は日本最古といわれ、四百年余の風雪に耐え、今も戦国時代そのままの姿を見せていた。姫路城、彦根城、犬山城とともに四つの国宝城郭のひとつというだけに、さすがに美しかった。

六階に登る急な階段はさすがに年寄り連中にはきつかったが、最上階（天主六階）からの展望も素晴らしい。

この天守を築造したのは、あの石川数正（家康の重臣だったが、小牧長久手の戦いの後、秀吉側に寝返った）とは初めて知った。数正の子康長の代に天守三棟、御殿、太鼓門などを造り、また城下町の整備をすすめて近世城郭の基礎を固めた。

松本城よりも更に印象深かったのは近くにある開智学校だった。我が国に明治五年、学制が敷かれるとまもなく建てられた小学校。明治の初めに、このような和洋混合のモダンな校舎があったとは驚きである。

工費一万一千円の七割が松本町民の献金によったと聞けば、当時から長野県（旧筑紫県）は教育熱心な県であったことが頷かれる。

校舎内には明治以降の教科書や教具、卒業証書などが展示されていた。

この校舎は昭和三十八年まで九十年間にわたって使われていた、国内最古の小学校校舎の一つとなっている。（現重要文化財）

午後は野麦街道まで足を延ばし、街道沿いの紅葉を愛でたが、少し季節が早いことと生憎、雲が多くなってきたことから、期待ほどではなかった。

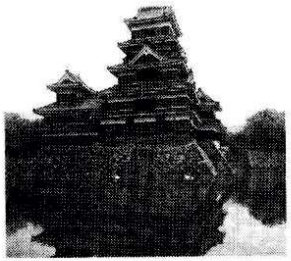
なお、野麦とは野麦峠一帯を覆っている熊笹のことで、農民たちは稲穂に似た野麦の実を採取して粉に挽いてダンゴを作り飢餓をしのいだという。

北陸や関西からは野麦峠を越えて善光寺参りをしたし、逆に信濃からは米や清酒などが運ばれた。

また日清戦争後の紡績業発展を背景に、飛騨の貧しい少女たちは蚕糸王国岡谷地方の製糸工場へ出稼ぎのため通った街道としても知られている。



海野宿



松本城

人類の仲間（三）

鈴木守

第六節　現代型サピエンスの登場（一）

人類の仲間、猿人（アウストラロピテクス類）、原人（ホモ・エレクタスなど）、古代型サピエンス（ホモ・サピエンス・ネアンデルタレンシスなど）を紹介して来たが、本節では、現代型サピエンス（ホモ・サピエンス・サピエンス）を主役とする。

現代型サピエンス発祥説として、多地域並行進化説とアフリカ単一起源説がある。前者は、アフリカで猿人から進化した原人がヨーロッパやアジアの各地へ拡散し、夫々の地で旧人段階を経て新人に向かって並行的に進化したとする説である。一方、後者の説はアフリカで現代型サピエンスにまで進化し、その後に世界各地へ拡散して現生人類を構成したという説である。したがって、この両説を念頭において現代型サピエンスの歴史や生活・文化について目を通すことにする。

一　現代型サピエンス人骨発見の軌跡

初めに、現代型サピエンス化石人骨発見の軌跡を辿る。

一八六八年、フランス・ドルドーニュ地方を流れるヴェーゼル川のほとりの岩影で、現代型サピエンス最初の化石人骨が出土した。この化石を調べたルイ・ラルテがクロマニョン人と命名して、「現生人類の特徴を有する人類が洪積世末に既に存在した」と報告した。しかし、化石人類第一号のネアンデルタール人の場合と同様、当時の保守的な学者たちの反対意見に曝され、一八八九年、デュボアのワジャク人化石発見まで、クロマニョン人は日の目を見ることができなかった。

デュボアがジャワ島で発見したワジャク人骨はアジア

初の化石人骨であり、また、彼は一八九四年にジャワ原人ピテカントロプス・エレクタスの化石も発見した。

二〇世紀に入り、〇一年にイタリア・グリマルディ人、三〇年に中国・周口店山頂洞人、三一年に日本・明石人の化石が出土。三二～三三年にはイスラエルのタブーン、スフール、カフゼーの各洞窟で人骨発掘。なお、周口店では、二九年に北京原人シナントロプス・ペキネンシスが発見され、ジャワ原人の事跡と併せて、アジアが人類発祥の地として脚光を浴びていた。

一方、イスラエルで発掘された化石人骨は現生人類の特徴を備え、明らかに現代型サピエンスであるにも拘らず、一〇万年前前後の古さであり、クロマニヨン人の四万年前頃に比べて二倍以上の昔であり、更に驚くべきことに、彼らはネアンデルタール人より古い時代に生息し、そのうえ、中期旧石器時代を代表するムステリアン型の石器を使用していた。これらの事実が知られるに及んで、クロマニヨン人以前の現代型サピエンスをプロト・クロマニヨン、プレ・サピエンスあるいは早期サピエンスなどの呼称も使われていた。

現代型サピエンスがネアンデルタール人より先行していた具体例を挙げると、一二万年前頃の遺跡カフゼー洞窟近くに五万五千年前頃のケバラ洞窟があり、そこからネアンデルタール人の化石が出土。また、タブーン洞窟では二体の化石人骨を発掘。上層の一体はネアンデルタール人、下層の人骨は現代型サピエンスであった。

二〇世紀後半になると、アフリカにおける現代型サピエンスの化石人骨発掘が促進され、現代型サピエンスもまた、アフリカの地で発祥といわれるようになった。

四〇年に南アフリカ・ボーダー洞窟で中期旧石器時代の石器と一緒に、アフリカでは初めての現代型サピエンスの人骨が発掘され、その後、六六年から六八年にかけて、希望峰東方のクラシーズ川河口近くで、中期旧石器時代の石器を伴った一二万年前頃の現代型サピエンス人骨が出土した。

これと同じ頃、六七年にエチオピアでオモ一号化石が発掘された。一書によると、オモ一号頭蓋は現代型サピエンス最古の化石の一つとしているが、別の書には「現代型サピエンスは、古代型サピエンス・ハイデルベルゲンシスから分岐し、現生人類最古の頭蓋骨断片が南アのフローリーバッドで見つかっており、年代は二六万年前である。因みに、ネアンデルタール人の最古の化石はスペインのシマ・デ・ロス・ウェゾスで出土した約三〇万年前の頭蓋骨である」と記載されていた。

古人類学発展の歴史は、化石人骨発見の歴史ともいえるが、二〇世紀後半になると分子生物学が台頭し、古人類学の領域に新風を吹き込むようになった。

その先鞭を切ったレベッカ・キャンらは、一九八七年のネイチャーに『ミトコンドリアDNAと人類進化』と題する論文に「現代人は一四万～二九万年前のアフリカに住んでいた一女性から派生した」旨発表した。分子生物学領域では、ミトコンドリアDNAを利用して生物種の起源を探索する研究が進められていた。キャンらはこの技法を人類に応用し、各人種の女性胎盤ミトコンドリアDNAを解析して、現代型サピエンスの祖となった女性を割り出した。この論文が発表されると、マスコミの注目の的となり、現代人の祖となったアフリカの一女性を"ミトコンドリア・イブ"と呼び、センセーショナルに報じたため、二〇世紀末頃には、ミトコンドリア・イブの名が一人歩きしていた。

ネーミングのことは兎も角、この論文は、冒頭に述べた現代型サピエンス進化説のうち、多地域並行進化説、即ち各地に拡散したホモ・エレクタスが夫々の地で現代人に進化したとする説を否定し、現代型サピエンスはアフリカで発生して、全世界に拡散して現代人になったとするアフリカ単一起源説を支持する結果であった。現在の趨勢は後者の説に傾いているように見受けられる。

また、キャンらとは別の研究者たちもミトコンドリアDNA解析を行い、二〇万年前および一四万三千年前という成績を導いた。この両研究の結果ならびに前出フローリーバッドの年代は、いずれもキャンらが算出したミトコンドリア・イブの年代の誤差範囲内に納まるので、「現代型サピエンスは二九万年前から一四万年前の間に、古代型のハイデルベルゲンシスから派生した」ことを一応の結論として、二項以下の話を進めよう。

二　現代型サピエンス発展の歴史

二〇世紀末までの文献を考察すると、現代型サピエンスの祖、ミトコンドリア・イブは、古代型サピエンスのハイデルベルゲンシスから二九万～二六万年前頃に派生したことになる。

ところが、二一世紀に入り、〇三年にはエチオピア・ヘルト村にて、一六万～一五万四千年前の古代型サピエンス亜種イダルツの頭骨を発見（朝日新聞、〇三・六・一二日刊）。未だイダルツに関する情報は乏しいが、彼らの履歴が二六万年前以前にまで遡るならば、イダルツ女性がミトコンドリア・イブだった可能性が生じる故、現代型サピエンスの直接の祖をハイデルベルゲンシスに比定してしまうのは時期尚早である。

現代型サピエンスの故地がアフリカであることは間違

いない。だから、前述のように、早期サピエンスの足跡がフローリーバッドなどアフリカに集中している。ところで、彼らは現代型サピエンスに類別されているように身体的には進歩していたが、文化的レベルは未だ、ネアンデルタール人並で中期旧石器時代人であった。

しかし、一〇万年前以降になると、現代型サピエンスによって、後期旧石器文化が胎動し始めた。九万年前頃のザイール東部の地は、中期旧石器文化の時代であったが、そこから後期文化を思わせる精巧に加工された漁撈用骨製尖頭器が出土した。次いで、七万七千年前頃の南ア・ブロンボス洞窟から、線刻模様を施した赭土の塊と貝殻製ビーズが出土。前者はボディペイントや皮鞣し、後者はネックレスに用いたとされている。また、ほぼ五万年前のケニア南部の遺跡から、後期文化の石器とダチョウの卵殻で作ったビーズが発見されている。

なお、南アのクラシーズ河口やブロンボスのような臨海地帯に居を構えた人たちは、漁撈生活を営んでいた可能性が窺えるし、一二万年前頃に姿を現わしたクラシーズ人の化石人骨は、南部アフリカ先住民コイサン族（ホッテントットやブッシュマン）の骨格に類似していたので、現代型サピエンス発祥から十数万年後には、現代人的骨格が既に準備されていたことが窺えた。

人類は原人の時代にアフリカからユーラシア大陸へ進出した経験がある。これを第一次出アフリカといい、現代型サピエンスのユーラシア拡散を第二次出アフリカと称している。第二次出アフリカの証拠は、イスラエルのカフゼー洞窟とスフール洞窟に認められる。カフゼーからは一二万年前頃、スフールでは一〇万一千年前の現代型サピエンスの遺骨が発掘されている。

レバントに現代型サピエンスが現われる以前、一五万年前頃にはステージ6の寒冷期からステージ5の温暖期に移行したため、動植物の生息環境が北へ広まった。これに応じて、人類も北上し、アフリカを越えてユーラシア大陸へ進出するようになった。これが出アフリカの契機となって、カフゼーやスフールに初期現代型サピエンスが姿を現わし始めたのである。

ところが、レバントで現代型サピエンスが発見された二〇世紀前半には、イスラエルでネアンデルタール人の遺骨も発見された。遺骨は、カフゼーやスフールに隣接し、しかも両洞窟よりも地層の新しい五、六万年前のケバラ洞窟やタブーン洞窟で出土したのである。その当時は、旧人→新人の順に進化したというのが常識であり、現代型サピエンスの方が古いという常識破りの事実に遭遇したのである。

この疑問を解く鍵は氷河期に目を向けることにあった。ネアンデルタール人が出現した五、六万年前の時代は、ステージ5の温暖期が終わってステージ4の寒冷期

に入っていた。したがって、「アフリカ生まれのサピエンスは里帰りし、その跡へヨーロッパから避難してきたネアンデルタール人が住み着くようになった」と解釈することで疑問が解けたのである。次いでステージ4が終わり、ステージ3の温暖期が訪れると、ネアンデルタール人はヨーロッパへ戻り、現代型サピエンスも故地から帰ってきたようである。

中近東へ進出した現代型サピエンスのその後の足跡を辿ってみよう。

一〇万年前以降の遺跡を探すと、意外や意外、最寄りのヨーロッパよりも早く、オーストラリア北部のアーネムランドに五万二千年前頃に到達。オーストラリア南部のウィランドラには四万年前頃の足跡を印していた。

中近東からオーストラリアへ向かう途上には、ニューギニア東部のヒュオンに四万五千年頃、カリマンタン（旧ボルネオ）のニオーに四万年前、マレー半島ベラに一万一千年前、ジャワのワジャクに一万年前の遺跡があった。当時の地形を見ると、インドシナ半島と東インド諸島は陸続きでスンダランドを形成し、ニューギニア・オーストラリア間もサフルランドと呼ばれる陸地であった。したがって、オーストラリアへ行き着く前の御先祖たちは、珊瑚礁を枕にして静かに眠っているかも知れない。

東へ向かった一派がウィランドラに足を踏み込んだ四万年前頃、西へ向かったグループの姿がヨーロッパ各地に見られるようになった。中近東からメルボルンまでの距離は一万五千㎞、それに対しパリまでは四千㎞でしかない。にも関わらず、パリ組はメルボルン組と同時代にゴールしたのである。パリ組がメルボルン組と同じ拡散速度で進んだとすると、レバントを一〇万年前に出立すれば、遅くても八万年前頃にパリに到達していなければならない。だから、彼らは四万年の長期に亘って道草を食っていたことになる。

彼らの道草の理由を、氷河期との関連など様々な角度で考えてみたがスッキリした解答が得られず、呻吟していた時、新聞紙上だったかテレビの画面だったか記憶は曖昧であるが、往年の名画一覧の中に懐かしい『ノートルダムの佝僂男』があった。これが次に述べる連想ゲームの発端となって道草の理由に気付いた次第である。

連想ゲームのキーワードを連続させると、佝僂男→骨の発育不全→カルシウム代謝異常→ビタミンD欠乏症→裏日本には骨発育不全と色白の美人→日照量→活性型ビタミンDとメラニン色素→黒人と白人→コーケージァン→コーカサス→中近東という順に並んだ。この連想ゲームで得られた推論は二段階からなる。第一段はビタミンD欠乏論、第二段は白人誕生論である。

ビタミンD欠乏論を披瀝すると、「アフリカの太陽光

は強烈である。ために光防御を目的にメラニン量が増えて黒人となった。黒い皮膚のまま光の弱いヨーロッパへ進出すると、メラニンが活性型D産生を阻害してD欠乏症を引き起こし易くする。だから、ヨーロッパ進出を試みた移住集団においては子供に佝僂病が多発し、集団滅亡の危機に瀕した」というのがヨーロッパ進出ができなかった理由である。

次ぎに白人誕生論である。曰く「色の黒い集団の中にも淡い色の人がいる。このような人たち同士の婚姻によって、長い期間の間にメラニン色素の少ない新たな色白集団が成立し、光の弱い地域でも活性型Dの産生が可能となり、ヨーロッパ各地へ拡散できるようになった。

想像を膨らませると、恐らく「コーカサス地方では、佝僂病家系を忌避したため、結果論的に淡色家系同士の婚姻が四百万年も続き、色白の形質を獲得した白人集団が誕生した」となり、更に、尾鰭を着けると、「コーカサスの人コーケージアンが色の白い人の代名詞となり、更に白人をコーケージアンと呼ぶようになった」ということだろう。

想像や尾鰭の話は別として、国立博物館の馬場悠男先生もビタミンD欠乏論を唱えていると漏れ聞いて、鈴木新説成立の夢が消えてガッカリした反面、斯会の権威と同じ意見ということで安堵したことも事実である。

東アジアの主たる住人はモンゴロイドである。現代型サピエンスが東アジアに足跡を残し初めたのは、五万年前頃からではなかろうか。現在最も古い証拠は、風光明媚な桂林近くで出土した三、四万年前頃と思われる柳江人骨である。また、北京原人で名を馳せた周口店の山頂洞で発掘された人骨は三万から一万年前頃のものとされ、上洞人あるいは山頂洞人と呼ばれている。

柳江人や上洞人を古モンゴロイドと呼び、両者ともモンゴロイドの一員であるが、その範囲で変異が認められ、前者は東南アジア人に類似し、後者は中国人的である。

古モンゴロイドの一団が三万年前前後の頃、寒冷地シベリアに進出した。二万年前頃からステージ2のビュルム氷期が訪れ、アルタイ山脈やバイカル湖周辺の高地に氷河が発達したため、彼ら一派は極寒の地に閉じ込められ、寒地適応型の形質を得て新モンゴロイドとなった。

寒地適応型というのは、ネアンデルタール人もそうであったが、体温の放散を最小限に止め、寒冷地での生存を可能にしたタイプを指している。体温放散を防ぐには、体表面積を少なくする事が必要であるから、可及的に手足は短く、体型がズングリ型であることが有利である。また、冷えた外気を多量に吸って体を冷やさないために、鼻ペチャも寒地適応型の形質といえる。ツングース族やイヌイットの人たちは、ズングリ、鼻ペチャの形質を引き継いでいる。

東アジアに、ビュルム氷期が訪れると、黄海や朝鮮海峡の海底が露出し、山東半島と日本は朝鮮半島を介して地続きとなり、日本海はカスピ海を凌駕する内陸湖となった。したがって、大陸よりも温暖な日本に向けて動植物の移動が盛んに行われ、現代型サピエンスの姿も混じっていた。その一例として、ネアンデルタール人類似の人骨が葛生（栃木）で出土した。このタイプは寒地適応型を思わせるので、樺太の方から南下して来たのであろうか。

ところが、後期旧石器時代の人骨としては、柳江人類似の三ヶ日人、浜北人（静岡）、牛川人（愛知）、一万八千年前の港川人（沖縄）が知られている。この事実は、現代型サピエンスの一派が華南の地・柳江から海路にて沖縄を経て、浜名湖界隈に拡散してきたような印象を受ける。

新大陸原住民アメリンドには二系列がある。一つはネイティブ・インディアンであり、他は北米寒冷地に住むイヌイットである。アメリンドは新大陸へ二回に別けて拡散した。

第一陣の古モンゴロイドは三万年前頃、ベーリング海峡を越えて、新大陸へ入り、一路南下して、一万二千年前頃には五大湖近辺、一万一千年頃には南米南端まで進出し、インディアン社会を構築したのである。

第二陣は寒地適応型の新モンゴロイドで構成され、彼らはベーリング海峡が陸続きになったベーリンジアを一万二、三千年前頃に越えて、アラスカやカナダ北部の寒冷地に居住し、イヌイットの祖となった。イヌイットという言葉は、少し古い辞書（一九七三版）には掲載されていないが、イヌイットはエスキモーのことである。

前出のオーストラロイドとは別に、ニューギニアには六千年以上前に、東南アジアあるいは東アジアからモンゴロイドの一派が渡ってきた。彼らは三千～二千年前に至ると、大型カヌーを組み合わせたダブルカヌーやアウトリガー付きカヌーを駆使して広大な南太平洋に漕ぎ出した。紀元後の時代に入って、一千五百年前にイースター島、一千四百年前にハワイ、一千年前にニュージランドに到達して、ポリネシア人、ミクロネシア人となった。

紀元後も二〇世紀に入ると、われわれ人類は南極、北極、最高峰のエベレスト山頂に足跡を残しただけでなく、宇宙ロケットに乗って、ウサギと一緒に餅搗きを楽しめるようになった。

（次号に続く）

急げ「特急出雲」

横山正義

その日の早朝、私は帰郷のため、伯備線「特急出雲」に乗り、母の安否を気づかいました。葬儀の段取りなどが頭に過ぎりました。死に目に会えないかもしれない。急げ「特急出雲」。車窓から見る伯耆大山は、入道雲で頂上は覆われ、山麓は暗い姿でした。

私は平成二十四年八月九日、『古事記』出版千三百年記念の行事が出雲市で開催されることを新聞に記載されていたので見学し、ついでに、私の住む菊川市内田の鎌倉時代の地頭であった内田氏が、「承久の乱」で活躍し、現在の島根県益田市、浜田市の両市に領地を得たことから、ゆかりの地、両市の内田町を訪ねて見ようと思い、旅行することを、思い立ちました。

様子が分からないので、最初の日は島根県の県庁所在地の松江に宿をとることにしました。駅の前のホテルに入ると、家内からの電話で母が急変したというのです。母は十一年前の平成十三年三月、農作業の働きすぎから、頸椎が固まり、手足が痺れて動かなくなりました。母は大変、悲しみました。病院で医師より手術をすれば治癒すると説明を受けました。

私は医学の知識がないので、治癒するのなら、と思いました。本人も治癒すると手術を望みましたので、手術をすることにしました。

手術が終了し、手術室から母が出て来ると、別人のようでした。医師を指して、「あの人達は犯罪者だ。私は殺されかけた。『あなたがたはこのようなことをすると、警察につかまりますよ』と注意したが、犯行を中止しなかった」というのです。

確かに手足は動くようになったが、強度な認知症に進行してしまったのです。その後、介護施設に入所し、浜松市内の介護病院に移り入院していました。

しかし最近、小康を保っていたので、私は二、三日の旅行ならと出てきたのです。

急げ「特急出雲」

病院に駆けつけ、様態を尋ねると、熱が出たので医師が連絡したというのです。医師から急変があれば連絡するから、家で待機するようにと説明を受けました。

発熱、尿の白濁があるというのです。抗生物質・ペニシリンを投与したという。

病院相談員に相談しました。高齢の上、認知症歴十一年、それ以上の治療は望めませんでした。他の病院で延命治療を受ける以外ないというのです。

(延命治療とは心臓が動いている限り、酸素吸入を続け生命を保つ治療、ただし、途中で中止すれば殺人罪が適用される)

母の川柳「介護受け、六道越えて、白寿見え」が八月号八月一日発行「病院だより」に記載されて、看護士さんの介護に大変、感謝していました。

(六道とは仏教の世界説で地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六つの苦難の世界をいう)

母は私には「もう見舞いに来なくてもいいよ」といいました。死を予感したのでしょう。

私は「家に帰るか」(帰幽即ち死の意味)というと母は頷きました。これ以上、生きていても自ら能動的な考えにならない、むしろ苦痛だと判断し、私は延命治療を諦めました。

私は現実を受け入れることを決意しました。

母は高熱のまま、熱が下がることなく、昏睡状態が二ヶ月、老衰で永眠しました。

「高齢で介護はすれども、治療施設は無い」

介護病院の見解です。

母は夫に二十八歳で死別しました。その時、私は四歳と九ヶ月でした。

母は父が火葬場で火が点火するとき、慟哭しました。当時の火葬場は山の奥にあり、昭和十六年の七月の蒸し暑い暗雲が立ち込める暗黒の夜のことでした。今でも私にはその叙景が目に焼きついています。

数日後、焼律の小川(こがあ)の子育て地蔵に母は私を連れて、お参りにいきました。母は私に「これからしっかりしないと生きて行かれないよ」と云いました。私はただただ悲しくなるだけでした。

その後、母は決意したのでしょう、生き方は「弱くなりきって生きる」ということで、戦時下、他に選択はありませんでした。

老子は次のように述べています。

老子第七十八章

天下莫軟弱於水、而攻堅強者莫之能勝、其無以易之。
弱之勝強、柔勝剛、天下莫不知、莫能行。

「この世の中には水よりも柔らかでしなやかなものはない。しかし堅くて強いものを攻めるには水に勝るものはない。水本来の性質を変えるものなどないからである。弱いものが強いものに勝ち、柔らかいものが堅いものに勝つ。そのことは世の中の誰でも知っているが行える者は居ない」。

『老子』訳蜂屋邦夫訳注参照

私は十一年間の母の介護と葬祭を終え、百日が過ぎ、なにか心が空虚になりました。

私は一日講座「優しい仏教講話。よく分かる仏の教え」をNHK文化センター浜松で、平成二十五年一月十八日に聴講することにしました。

講師　山田薬師　虎峰山　袋井市内龍源院住職　真川義孝先生から曹洞宗「修証義」の講義がありました。

（修証義は曹洞宗開祖道元禅師が書かれた本『正法眼蔵』の中から、一般の人々にも分かりやすい内容の文節を選び、明治二十年、編集された書物）

講義終了後私は質問しました。

「仏はお墓か、死者か、西国浄土か、仏壇か、仏像か」

先生曰く

「自らが仏だと永平寺の高僧は述べています」

私は

「仏に手を合わせるのは、煩悩の解脱ですが、煩悩とはなんですか」

先生曰く

「人は悩むことも、苦しむこともある。そしてとらわれることが煩悩です」

私は質問いたしました。

「とらわれから脱却するにはどうすれば良いか」

先生曰く

「真剣に、長時間、座禅を組むことです」

座禅を組めばなにが体感できるのか、それは言葉で言えば「無為自然」ということです。老子は二千五百年前、看破していたのです。

老子の教え『無為自然』、釈迦の教え『悟り』は同じ心境です。

祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。

『平家物語』の巻頭の言葉です。

『諸行無常』とはすべては一瞬のとどまることなく流れ続けているさま。

『人間の脳裏に浮かぶことは諸行無常であると自覚することです』

私は頸椎の手術をする決断をしなければ、母は認知症にならなかったと反省しました。八月に延命治療を希望すれば、発熱から昏睡状態が二ヶ月も続いたのだから、まだ一年位寿命があったのではないか、葛藤が残りました。この不快感を取り除こうとし、酒を飲む、睡眠薬を使用する、除霊にたよるなど遁れようとすれば、これが「とらわれ」煩悩で、ますます深みにはまります。

今更どうすることもできないことで、日々生活を続ける中、脳裏に過ぎるのは一瞬の不快感です。

これが老子の教え『無為自然』です。

決して、心地良い酩酊状態を追求するのではありません。小沢一郎衆議院議員、橋下大阪市長などマスコミから誹謗中傷されます。しかし、たじろぐことはありません。前進します。それは体験の中から、流転していくことを知悉しているからでしょう。とらわれません。

（現在、ここでいう悩み、苦しみ、煩悩などは医療、法律、行政などで解決できることは直ちにすべきで除外します）

禅はインド仏教の「定学」から生まれました。そしてインドの僧、達磨大師により、中国に伝えられました。（六世紀）修行は当時、出家して公案を課して、寺で行うのが常でした。

六祖・慧能は座禅に限らない、在家で労働を通じても、武道、芸道を通じてでも同じ心境が得られる、という捕らえ方をしました。人生そのものが禅であり、修行だというのです。（八世紀ごろ）

「禅の教え」は日本に、栄西（臨済宗）、道元（曹洞宗）などにより、鎌食時代（十三世紀）に伝えられました。

天台宗の皇円阿闍梨（？～一一六九）は弥勒信仰で煩悩から解脱を知るには「五十六億七千万年を要す」と言います。

禅宗の達磨大師によれば出家して修行すれば、解脱出来ると言います。

浄土宗の法然上人は「南無阿弥陀仏」と唱えれば即、解脱できると説きます。

陰翳の美学（その十三）

外山知

第四章

十三、流動の美

私達を取りまく周辺には、様々の美の変容を見ることが出来る。そうした中で変化流動の美を、対象として見たい。

1．動と静の美学

変化流動に見る美意識は、それが流体変形の中にも、こよなく美を考察対象とし得る。

瞬時にして移り変る美もあろうし、また長時間の間に刻々移りゆく美もあろう。流動の中には美意識もあれば、またより静的に近い美感覚もあろう。

様々な意識の中で、様々な溶体を示し得る。美は千変万化する美意識と調和して、新しい美の連鎖を作り出す。

例えば夏の涼を誘う、滝の白布を思わす美も、流動美に色どられた美である。水量豊かな時期には、それなりの美形もあり、迫力もある。

水量の枯れた時期を象徴する、美観もあろう。然し相対的には流動変転する美形は、人をして感動を催す。

その風光の中に美意識を、眺め得るからであろう。

私達の感覚にときめきを感じ、その滝壺に高鳴る落下音に、没我の領域で、溶け込むことを、得るからである。

滝壺に落下する水量がはね上り、水しぶきとなり、私達に降り注ぐ時、滝見の感覚にうたれ、その壮大さに、私心を動かされる。

また荘厳さは、時に神秘的世界に誘われる。その思いは形而上的な美を、充分に堪能させられる。

私達の自然世界にも名滝は、数多くあるが、自分をしてその滝と、一如になり得た時、美意識は本来の姿（美）

を、顕現させてくれる。

流動する美は一瞬一瞬の連続が、一つの美の形態を形作る。流れくる滝の美形は、一瞬一瞬の動的な連続が形成する。

美的な動的姿と解してよい。「飛矢は動かず」の譬えの如く、美的な動態こそ美の本来の姿で、水量の限り続き得る。

動態の中に美たり得る。すなわち一瞬の美は無限の連続体の中で、そこだけを切り取った瞬間の美に、動態の中で静の美と、呼んでも過言ではなかろう。

たゞそこは流動の中の一隅であって、静と呼ぶには、余りにもはかなく虚しい存在かも知れない。

あくまで動態中の静的存在であり得る。儚く虚しい存在なるが故に、その静的な美もまた美たり得る。

儚く散った静的な美も、激動の美を懸命に作り、翳の部をなすのも、名滝の要素を形成する。変化流動の美形に変わりはない。

こゝには、動は静、静は動の綾なす関連も、読み取ることも出来よう。今、川の流れの中、水中花の咲けるを見る時、水中の動的流れの中に、色鮮やかに咲きほこる。

例えば「ミシマバイカモ」という水中花の存在、これは、地上に咲ける植物群と同じく、それが水中に咲き誇っている流水の動態で、これは地上の風の乱舞と同じく、流動変化を競いあい顕現している。

葉脈こそ流動に身をまかせているが、水中植物のあでやかさは、地上の植物群にもおとらず咲ける姿態は、実にけなげな存在と言える。

流体の中に凛として咲ける美は、置かれた場所こそ違え、美的快感を与えてくれる。

流態に身をまかせ、けなげに生きる愛らしさ、これにもまた讃美を与える。私達の鑑賞は、その場、その場に応じて感慨も異なるが知の働も異なる。

動的な世界観の中に、静的な物を捉える。「動よく静を制す」また逆もあり得る。様々な未来の様相の中に、迫り来るものは、常に一つとは限らない。

場合によっては一対多数の場合も、あり得るかも知れない。

動、静のなせる技を、感覚的な知覚に如何に働かせるか。微妙なクオリアに働かせ、脳神経細胞のなす働きを、その様相の中に知の働く作用としなければならない（認識）。

多様化する認知能力も、その一つかも知れない。

前例に見る滝にしても、水中花の可憐さにしても、その物のもつ状況の味わいを、滞ることなく知の働の過程に生かす作用、これは私達の感覚であり、知の働きでもある。

流動変化の中に見える輝ける壮大な営みは、人類の英知をその対象から、如何に引出すかにある。

人間的に解すれば、美は愛であり、愛は美でもある。凡そ静なる美は、動なる物によって、美への深層に誘い込まれ、より美的なものに、作り変えられて行く。

美の根源的な追及も、そこに容認されて行く。従って美は作り作られて行くものとして、弁証法的論理にも、たとえられよう。

美学は芸術的な分野で、古来から種々論じられ、現代潮流の中に美的なものとして、捉えられている。

音楽のリズムと、絵画の画布を覗いて見よう。リズムカルに流れる音曲は、あくまで動的世界観にゆだねられ、音を感知する。

それによって、動的世界観を構築する、運びに至る。これは何人と言えども否定は出来えないだろう。

これに対して、一片の画布をのぞいて見よう。そこには動きをおさえた、静的な世界観を打ち立てゝいる。

勿論、静なる美の中に動なる動きも感じられる。キャンバスに描かれている風景、人物の描写が、それなりに動きを感じられる。美意識もあろう。

そこには画人の動的な動きを、察知出来る。また静的な美もうかゞい知ることが出来る。

音曲と画布をのぞく限りにおいて、動的なもの静的な美のジャンルを、画き構成することが出来る。

勿論、動静折中の美をもつ、劇舞台の美術は総合芸術として、両者の美を舞台効果の中に持つ。巾広いジャンル として古くから、取り上げられている。

一方彫塑、工芸（ガラス、鉄器、プラスチックス等々）の素材をたくみにこなす芸術も、舞台芸術程でないにしても、動きのある物体構成をねらった作品がある。

即ち、動的リズムの中に、より静的な美を持つ作品も、眺め得よう。

染色（素材も布、繊維、皮）と種々見得る。構図を見る限り、より静的美学のジャンルに、取り入れてよいもの等、多様性を極めている。

はかなく消え行く生存する、虚ろう美学に対して、永遠の美を開花する芸術作品、これは私達人知の作りえる美学として、高く評価してよい。

生成流転をくり返すもの、そこはかとなく流転の過程の中で、永遠の美を残そうとする意識、知の働き作用、そこには耐えない葛藤が去来する。

その中で生々流転が、くり返えされる事は、私達の計り知れない領域と見てよい。

かつての映画フィルムの、静的な一駒から、連続体の動的なもの、その発展的な情報工学、ＩＴへの進化、これもまた電波のなせる映像文化として、とゞまる所を知らない。

今日の状況は、美的価値感すら変えようとする領域にも遭遇する。

人は感情によって支配されると言われるが、美もまた感情によって、ときめきもすれば、移ろいもする。

自然世界に生存する動植物も、きらめき輝く時があれば、やがて移ろう時もある、人の世もまた同じで陰翳の美学を持つ。

それが生きる物の定めとは知りながら、美しさの永続性を求めようとする。

動的流動の美と、静的な美は、時に共存し得る。たゞそれを大方は看過してしまう。

美の相対性は、それを捉らえ得る人の感性による。より深い知の働きの過程によって、相対性を帯びる。

動そして静の美学は、古くから称揚されているが、根源的には相反する二面性を、持ち得る。

美は感覚的な情調を醸しえるもので、感覚的な特性が、美を顕現する。

2．相対する美と翳

動と静の美学について、両者はいずれも相対的な美を持ち、二面性の情調を内に秘めている。

その領域で相対する美と翳は、自ずと顕現する。凡そ相対する美は、前の論攷で論理の構成において、両者を捉らえ得た。

今その両者に視点を当て、美と翳が如何に作用するかを試みて見たい。

およそ相対する物に美の翳は、つきまとうか。美の本来の両極は、その物の本性と属性（物がそれなしには、考えられないような、本質的な性質を言う。デカルトでは、精神の属性は思惟を言う）が現れ、その本性は属性を持ち構成する。

そして一つの要因を作る。これは美と翳のように、常につきまとい相対する相をなす。美の陰翳も、そんな所に根拠を持とう。

健全な翳と陽の関係は、物象に現れ、その相対する物象の深さを示唆する。

すべての物に相対する美意識は、翳の部分を介在させる。そしてその物の本性をひき立てる。

動は翳あって、本性の分厚を知る。翳はその物象の性質状況に応じても、変化の相を垣間見る。

物には先験性をもつ。その物の本性を見、陰翳が如何に形成されるかは、本性を介して、光の反射角度によっても、その物の現れ方を知る。

そこに現れる翳の魅力も、相対的に読み取る事も可能である。本来持ち得る翳の力は、本性の移動によっても異なる。

私達に微妙な影響力を示しえる。勿論、翳の存在は本性によって、先在的な影響力を持つ。はかなく消えて行くような現象でもない。

その物の本来性につきまとうもので、陰翳の美学をかなでる。物性には本来持ち得る、その物の固有の性状もあれば、他との領域に於いて、形成される物もある。

また相対的な美意識を求め画く物もある。変化と多様性は、物を形成する過程に、様々に見られ影響もされる。

物象を発生させる力関係も、また相対的なものである。

物性の美学は、必要に応じて、私達が作り、その像への憧れを内に秘める。

この内在的な世界観によって、形成もされる。私達の本来の持つ内面的な意識は、時によって変異する。

物性を育てる意識は、現代のもつメカニズム情報工学によっても、大きな影響を受けることは必定である。

今好むと好まざるとにかゝわらず、現代社会という大きなメカニズムに、寄り添って生きる。

私達の日常性に於いて、物象を生み出す歯車は何か。これは私達の意識が、その方向付けをする。

即ち、感覚、感性を物象の世界にプログラム化し、生成の基礎的な領域をインプットする。コンピューターの操作に待つこれは、たやすいことである。

かつては、こんな事を誰が想像し得ただろうか。まさに文明が育てたマシーンによるもの、光と翳の織なす作用は偉大だ。

更に人間代行時代へ、ロボットの織なす効果も忘れ得ない。人知の生み出した美学も、多様化する中、情報工学分野は、また格別の感がある。

こゝに見る新しい物性も、今まで捕えなかった物性も、新分野に登場した物性として、私達の耳目を一新させ、新しい美学を再現することになった。

かく異常な進展は、また従前の情報工学の分野が、視点とされて来た。今も尚その領域であるが、加えて最近の発展途上に、感性工学という言語を聞くようになった。

これもまた著しい進展と捉えて良い。人間代行の美学は、この領域まで進化をせしめている。

相対する美と翳は、ロボットの活躍中にも、その働きを見せている。小さなコンピューターを内蔵させ、それによって新しい美を作動させ、動的な美とその陰翳を私達に、感与させてくれる。

その働きは今までは、まったく察知することすらなかった。この偉大な試みとして、いわゆる感性工学の領域開発に、少なからず貢献する事を確信している。

時代的な変化とは言え、新しい分野への挑戦は、未来開発のさきがけとなる事と、信じてやまない。

相対する美と翳は、少なくとも今までの感性的な思惟世界から感じ取る働きとは、次元を異にした領域で、形而下学の先鞭をつけることになった。

その業績は偉大で研究の一つ一つが積み重なって、大きな成果を生む。協同研究の歩みは、論文を通して世界に連動している。

個の研究も勿論、その積み重ねのステップに違いないが、一つだけでなく歩みは多方面に向け実験されている。

その体験に向けて協同研究の成果が、今日の新しい美学の誕生を生んだ。それを思えば科学研究技術に日夜精魂を傾けている、若い科学者達に、深甚の敬意を捧げたい。

3．動を誘発する美

新しい科学技術は、形而下学への進化過程に、動的な美を顕現させることを、論攷に生かし来た。

美は動の変異として知識され、この動的な変異こそ、美的な領域を介在させるものとして、受け止めてよい。

凡そ動きのあるものは、美への変形というイメージで、日常生活に散見される。

例へば日常茶飯事の起居諸動作も、それが芸術性を帯びれば、茶道として立派に位置付けられる。

精神面に介入されて、中世の美意識を誘った。変化流動、流れるような一挙手、一動作に於いても、その動的な流れの美が感知される。

その茶道の芸術美は、流動変化の中に美が誘発される。即ち、その作法そのものが美であり、流動美を演出する源をなす。

従って茶の湯を構成する主、客の一挙手一投足に至るまで礼法を守る。

その雰囲気にしたり、守り抜く精神的な清らかさこそ、美的表現であり美を顕現させる。そこには自ずと動を誘発する美がある。

また動的な流れの中に美そのものを有する。これが茶道の芸術美を象徴する「わび、さびの境地」をその中に、捉え得る事と思う。

日常茶飯事の茶をしたしむその動作を、限りなく極限につきつめたのが、茶道として立ち上げ、またその流派まで生む事になった。

美は動を誘い、また動は美を誘う。

このような日常性から美を形成する過程は、食生活だけでなく衣、住に於いても、日常性の発展として捉えられる。

衣服にしても日頃は粗末な衣をまとうも、装飾の面に意を施せば、限りない芸術美を装うことが出来よう。

勿論、風俗習慣はあろう。しかしそれを取りまく環境の美化を意識して見れば、ご婦人が自分を装うとする意識は、美芸のすべてを表現に生かす事である。

意識として高められた時に、無限の美を象徴しえる。私はかつて服飾史の中で、衣の変化も時代と共に動きを伴う事を述べて来た。

動きの美学それは、時代と共に変幻する美意識の中に、風俗習慣を見る。所謂、動きの美学を察知することが出来る。

例えば、江戸期のお太鼓帯の結びは、従前は後方に結び上げていた。袋つゞみ、丸帯、名古屋帯等々も、体の前面の位置に結い挙げ、その美を自分自身も堪能する、習慣があった。

元禄袖にも動きをともない見る風習が、注目を集めた。動きをともなう美意識と言えば、明治に入って世の中が活動的になり、着物から鹿鳴館時代にダンスのロングドレスなど洋装となって、その動きの美意識は従来以上に顕著となった。

加えて、あでやかさに動的美を加味することにより、動きのある美を表現しようとする。即ち、意識革命が見事に開花した。

線の美が動的変化の中に見え揺れ、動く意識の中で次の美を、予見さすような衣服も垣間見られた。

すべてに共鳴する洋装化は、今日的な美を顕現し、咲きほこっている。

衣服の世界に加えて、住宅状況も従来型の住意識から、新モダン、インテリアの構造をもつ物へと、変化が見られる。

また材質も木造家屋から、モルタール材へ、コンクリートを基調とする住建設も、昭和から平成へと移築された。

明治から大正ロマンのレンガ建築へと、住まいも意識改革がなされ、対震対策も意に入れる構造改革がなされた。

はなやかな中に実用性が取り入れられることに意識改革が急迫された。昨今を象徴することにもなった。

現代化の美学の特徴といえる。私達の日常性に根源する美意識は、かく多様化する中で時に歴史を懐古しつゝ、また新たな領域へと飛躍する。

その過程を踏まえ、意識の改革へ常々に、躍進して行く。とゞまる所を知らない。

動的な流れの中で美は開花し、また新たな種子を育み、成長し行く。即ち、次世代の新芽を開花させる準備をする。

自然のサイクルを、限りなく育んでいく。この美意識再現は、動的な変化の中にのみ、あるわけではない。

勿論、静寂の中に美の根幹を持ち得る物もある。静にして美、美なるが故に静寂を極める。即ち、場所の論理を体得することもあり得る。

相対的な美として動中の静に、また静中の動に美を感知するのが、前述した美意識の再現であろう。

ＩＴ社会の中にあって、その環境の動きは、激しく揺れ動いている。携帯端末から流れる美的情報もまた美である。

凡そ、考えられもしなかった領域に、新たな美の発見がある事を記しておく。

4．限りなく美への回帰

変化流動をもとめて美を探勝し、美を誘発して来た。その過程をめぐって去来した過去の理念は、今新しい理念として蘇えって、今を時めいている。

限りなく発展進化の過程に、美はその時々に於いて、最高に輝き光をはなつ。

勿論、陰翳の美を内に秘めて、その光彩を発散させる。人はそれを美と呼び称えている。その美は、常に永遠不滅の美とは、限らない。

時に滅び時に浮遊し、その光彩も輝き続けるとは言い難い。滅びの時を刻むこともあろうが、その美は、再起するもので、時あって光彩を保ち得るものもある。

美学はその間に揺れ動く物もあり、私達の人間に、その真価を投げかけてくれる物もある。

また一旦死滅して、その種子は次の世代へと引継がれて行く物もあろう。人はこれを回帰と呼び、その新しい美を称え、未来に続けられ行こうとする。

この美の再生は見事なエネルギーをともなって盛起する。その美を人は、愛と呼び讃美する。

白波が海岸の白砂に映り、風波をしのぐ松の緑も、白砂青松の故事に見られ、自然美の美観は、見る人をして美を共感し得る。

勿論、ここにも自然淘汰の波は繰り返されるであろう。

時には地殻変動によって、美観は崩壊することもあるだろう。

然しまた新しい美も再起され、この永遠の繰り返しは、人個人を代えても次々に、後の世代に讃美される変転はあろう。

これが美の回帰として、私達をとらえる。哲学者ニーチェは、永劫回帰と説き、仏教では輪廻転生と論攷した。昔から様々な論述が試みられ、今日の美観を添えている。

それだけにこの美の回帰説は、古くして新しい論説である。今に生きる私達と、未来を築く人類社会の英知を集め、極めなければならない課題でもある。美はそこにある。

その美こそ輪廻転生する美であり、愛すべき美である。限りなく蘇る、廻り廻る美でもある。

前記に流動変化する美を手中にとらえ来た。まさに美は永遠の愛でもある。

私達が日常生活中に意識するものは、様々な快楽を求め、感情のときめきを感じて、よりよい生活を夢みることである。

その生活の中で、常に意識となって生活を支えるものは、美の根源的な愛であり、感情豊かな情感である。

情緒の豊かさは、美によって支えられ育まれる。また、それによって潤される。

かつて幾度か引用したが、「ソロモンの栄華は野に咲ける白百合にしかず」可憐さを装う白百合の花は、人の心を潤し、生活全般に愛らしさを、誘ってくれる。

勿論、清楚な感情もこぼれ落ちる。うるわしい美的信条も生活を満たす、根幹をなしてくれる。

美は限りなく愛をともない、また愛は限りなく美を持つ、この意識こそ、私達の心情の豊かさを象徴する。

それは一回一度の美だけでなく、寄せては返す白波に似た風情で、これをともなって回帰へと大きく輪廻転生を繰り返す。

美は明滅しながらも次の世代へと、大きな美を限りなく継続して行く。これが生であり美でもある。

それを愛しく美しく、咲かせて行くのが人であり、その環境でもあり得る。

白神山系に旅した時、ブナの美林に遭遇したことがある。ブナ林の小路を散策しながら研究員のガイドに、耳を傾けると、ブナの幹は大量の水を含んで巨木を形成し、その美林は実に見事である。

「その幹に耳を接してごらん、水滴が音を立てゝいるのが聞える。どんなに早魃があろうと、この美林は枯れることなく、命脈を保っている」と説明される。

その根元に若く新しい芽生えが、すでに始まっている事をと、手に触れた。感触を楽しみ、これがまた巨木をなすのは三百年先か、長い歳月を経て美の回帰を知る。

そして新しい美を感じ取るのは、私達の子孫がこうした美の回帰に、束の間の生を楽しみ生きる。

大自然の美は、長く永遠にうち続く美の連鎖を形成しながら、その遺産を継承して行く。

限りない美への執着これは、尊く畏敬の念を持ち得ると思う。「逝きてまた帰らず」でなく、永劫回帰する様々な美への連鎖を求める。

今を生きる人は、ときめきを求めて右往左往する。旅も人生と言えるが、この言葉には美の執着がある。人知れず美しい物には心引かれる。

流動変転の中に美を見、一瞬の輝やきは、その時をときめく美の極み、この美ありて人は生きもする。

こうして限りなく美への回帰を歩むことになる。燦々と降り注ぐ太陽を、木漏れ日として細道に木影を作り、寂とした静かさの中に無限の美を見出す。

また自然の織り成す綾とは言え、見事な美、この美の中にひたる美を愛しむ。その環境にまた新しい美を発見するのも、私達である。

限りない意識の目覚めは、新しい美を連続して生みだす過程でもあることを認識する。この感覚こそ永続性の連鎖である。

揺れ動く微妙な木洩れ日、湿感、これはその味をこよなく愛する所から、生れ出すものとして今夏もまた来夏も、この環境をこよなく愛する。

美の再会回帰として自然と人知が、融合して織なす美も回帰として捉えてよい。即ち、美的な世界観にも上手に事が運んだと思う。

5．変化流動の過程

変化流動の美について触れ及んだが、たしかに流動する過程に、美は変化もし、その中で再生もすることを意識し得る。

動態の中に新しい美を発見する。例えば、自然界の川の流ればかりでなく、動態力学の中に美的感覚をつかみ得る。

また実験も理工学の世界で察知し得る。物理的な振子の振動にも、限りなく律動する。

軌点（支点）を中心に、一定の速度で動く軌跡をとらえ、美の連動へと思惟をめぐらす。

美形、点と線の動き、変化に対応した相対物の変化に、実験から幾多の美の軌跡を辿る事も出来る。

また情報工学の世界で幾多の情報を、パソコンから取り出し、それを活用する技術、これは一つの美であり、世界共通の文化でもある。

それを私達は、携帯の端末で受けて受信することも出来る。それも一つの流動の世界で、その中で美を感じ取る事が出来る。

また音響工学の世界でかつての名曲が、ＣＤからＩＴ

へと飛躍的変化の中で、今まで聞けなかった音響を、家庭のリビングでも拝聴することが、可能な時代へと変異して来た。

思えば、オーケストラなど特別なステージが用意され、そこで発表演奏を予定していた。プログラムによって聴き、鑑賞するしかなかった。

その名演奏を家庭のリビングで、楽しめるようになったことは大きな変化であった。それは事実として私達に、直接感じ取ることが可能になった。

このように変化に対応して変化流動の過程も、今までの美的鑑賞から新しい鑑賞へと、様変りして来た。

勿論、その過程に様々の要因を含む美的な発想も、情報工学のプロセスに必要なプログラムの入力、キーワードの操作と、技術的な過程は、美を増幅させた。

思えば想像もしなかった事を、いとも簡単にやってのける偉大さ、これも変化流動の過程に視点を変えた摂取として、受けとめたい。

古い形而上的流動美の捉え方も、また情調の中に位置付けた受け止め方も、方法的には感性による。その活動的過程を分析し、美的開発をねらって来たプロセスも、無駄なことではない。

輝ける今日のパソコン検索の鍵も、かつてのこうした歩みの上に、日常化することが出来た。

情報工学、形而下学への一足飛びも一歩一歩の積み上げが、功を奏したことになった。その業跡は技術者の思惟があって可能となった。

この未知にいどむ過程、技術部門の業跡を讃美することを、改めて感ぜずにはいられない。

流動の美、その過程はこうした積み上げの上に成立し称えられ、実用化は同時に芸術を刻む。

これは知性の響でもあり、たゆまず続け得るエネルギーによって育まれ、現在を髣髴させる思いである。

流動する美学に視点を変え、その過程を見れば、流動そのものに美を感ずる。即ち、流動即美、美即流動の論理も成り立つと思う。

変化流動はたゞちに美の誘発であり、流動する物の中に美を感ずる。

従って流動する川、水しぶきに美の流動の変化、滝壺に落ち飛散する変化の美。これらは我々の感覚内にたゞよう美の感情である。

私達の脳波に感ずる諸現象のすべてゞもある。変化するもの、この現象こそ、美の過程を育むすべてでもある。

私達が感覚的にその物によせる愛しさは、それを包む感情の動きも、美であり愛である。私達は動きの中に、本来の美をつかみ得る。

私達は流動するものに、なぜ心を引かれるか、自からを包むすべてか、動ではじまる事を、例えば人は言語を持つ、それによって心をゆさぶられ高揚もさせられる。

これは動的なものと解してよい。歩行もするし、眼で物を追うことも動態思惟である。私達の日常は動にはじまって、その中に時に静を夢みる。

私達の感情の揺れも、また動である。このように動的な現象に包まれている。人間世界は他の自然現象にも動的なものを呼ぶ。

これはその環境の中に自分を対比することも、一つの動的美の捉え方かも知れない。勿論、動は私達のすべてではない。

動は、静あっての動である。静寂な雰囲気を感じ、こよなく静寂さを好む。これは動態の中に感じ得る美のすべてでもある。

こんな所に美を求め感ずること自体、より人間的なものとして受け止め、その美を鑑賞もし得る。

流動するもの、その動的な所作は、私達に情緒を感じさせる。その情緒性の中に愛らしい感情性を、魅了させるものを持つ。

その過程に美が蘇ってくる。私が意識するしないにかゝわらず、流動変化するものは瞬時をおかず、流動変化する。

その歩みは遅々たる物もあれば、すみやかなものもあり得るだろう。その様態はプロセスに於いて察知することができよう。

流動の渦中にあって、流動変化するものもあるが、変化の過程は様態に於いて、様々であろう。

急速な流動変化の中でも流動の状況に、ひたすら耐え変化するものもあれば、必ずしもすべてが変化し得ることもない。

流れに抗して生き変化するものもあれば、その流動に乗って身をまかせ進むものもある。時に応じて積極的に対処するのも様々である。

様態の等しいもの、また異なるもの種々な変容をとげる。それらは、いずれも変容を受け入れる過程に於いて皆異なる性状を持ち変化する。

限られた時、空の流れも流動する過程の中で変容する。それが微生物にせよ、私達の視覚によって捉え得るもの、いずれもが動態の中に、その変容を受入れようとしている。

従って変化流動自体も、その過程の中で美を作り得る。限りなく変化流動するもの、それは美であり愛でもある。

所謂、流動の美である。流動するものの捉え方は、芸術でもある。

6. 静は動を誘発するか

およそ限りなく静であるものが、保たれる為には、動あっての静であろうと思う。静は動から発して、静に返る。

静、動は相対的なものなるも、常に動あって静であり得ると思う。従って静は動を誘発するものと、言ってもよい。

「動かざること山の如し」と言はれるが、火山列島に位置する私達の国は、常に造山運動を繰り返しながら、或る時は最盛期の活山活動も、やがて隆起、沈降も平静化して平静期を迎える。

これも大きな周期から見れば、静から動への転化と見てよい。

四季の変化の中に生きる者が、此れも動的変化を閲している。その中での生活もまた同じである。

静なる物体はいつまでも静であろうとする。これは他の物体によって、何等かの作用を施こされない限り、静体として止まろうとする。

作用する働き、これは動的リズムを刻もうとする。物理的に作用、反作用のかゝわりから生まれる。静であり、動であろうとする。

物体はそのいずれかを存在理由として、保っている。凡そ静物体も自然世界にあって、風によって動かされ、枝葉は時によって静止体から動きをともなって、動を誘発する。

これは自然世界の常態であって、その動きが、さゝやかであろうと動態と感ずる。

水面鏡の如き湖面に一陣の風が、それの静的な水面に波をともなって、動的な様態を示す。移動する気圧の変化に伴なって起り得る変化で、人為のなす諸行ではない。

自然世界の他様にともなう業で、その大小によって様々な変容をなす。或る時には台風となって、私達の生存を脅かすこともある。

また時には地上の生物を潤す、慈雨ともなろう。生物は蘇り、静かに生命を成長させる素地ともなる。

こうした自然のサイクルがあって、調和を保っている。この状況を察すると、自然現象は時によって私達に災害を及ぼすが、恵みも施していることを忘れてはならない。

静は動を呼び、動は静を作りなすこと、相対的な変化の中に、育まれない現象として見てよい。

人は動的な美の中に、生きがいを発見する、静寂なわび、さびに憬れを持つ、心境は古くから日本人の心情の発露としてある。またそれに憬れをもち散策もする。

茶の湯を楽しむのも、その現れである。特に今日の情報化社会にあって、そのスピードを競う動的なかたわら、静的な余韻を楽しむ風情は、今日的な思惟かも知れない。

開かれた世界に身を置く世情にあって、限りなく孤を求める、風情は品格をさそう。動態の中に明け暮れする日常性からも、時に開放される。

幽谷な静寂を求めたいのは、相対的な美を求めての諸行で、人格の修行にもなり得る。

木漏れ日、滴る山間に入山し、来し方行く末を思うの

時、人知れず瞑想裡に私を誘なう。名僧の品位を悟り得ると思う。

静寂の中で座禅参味、これは今日の情的な世界に、たゞよう一片の姿かも知れない。自己の目的的な世界も広がってくる。

相対的な世界観を支配する、この静動はいずれも、一掬支配でなく、相方共に対掬を示し得る。この両者は、相対的に存在を顕現し得るものである。

従って静は動を誘発するものでもあり、逆にまた、動は静を誘発し得るものでもあることが、論攷から理解出来る。

私達はこの動静から、それぞれの美を引き出し愛でる、動中の美は動くという微妙な状態から受ける、デリケートな感覚を内包して、単純な論評を許さない。

奥深いものを持つ点、静的な美を今かりに、平面的な美として取らえるならば、動の美はより立体的な美意識をのぞかせる。

たゞ、そうかと言って静の美を、無きものとするような感覚は、もとより排除すべきである。

変幻自在な美的感性をこよなく見つめ、静動の根源的な深さを、見落さないように留意すべきである。

7. 流転の美

限りなく移り変わる万物流転説を、仏教では度々説くが、私達の住む宇宙空間もまた仏説に言う、輪廻の中に動く永遠の存在として、その中で生き育むのが、人間である。

大宇宙の原理、原則からすれば、実にはかないものである。そのはかなさ故に美もまた、美しく瞬時を生きる。

形而上学的世界では問題にし得ても、形而下学の今日的な技術万能を誇る、マイクロ、コンピューターにあっては、容易に認めがたいものと思われる。

たゞこのまゝで発展過程を辿って来たことは、テクノロジーを捨て難い領域で、妥協が計られたと思う。

一つのセオリーが、他のセオリーを受入れざるを得なかったなど、新しい世界を切り開くには、古い文化へのルネッサンスが行なわれ、それを契機に意識改革も急務であった事は論を待たない。

日本を包む洋の東西の先進科学文明も、古きよきセオリーを乗り越えて、近代化を計ってきた。

殊に自然科学の領域で、画期的進歩をなしたのは、私達人間を中心とした医術の発展、また診療に生かしてきたテクノロジーだった。

東洋医学もあり、人間変格の一つとして、身辺に研究されて来たことは論をまたない。

西欧の科学技術ことにテクノロジーは、驚異の存在であった。

形而下学の世界でX線の発達は、人類の内面的世界を説き写し出し、未知の世界に新風を吹き込んだのも事実だ。

ことに、医療面で外科的手術は画期的であった。従来は人体にメスを入れるとき、出血を止血しながら悪性の病巣を、切除していった。

今最先端の技術はレーザー治療で、病巣を焼切ってのテクノ技術を、駆使した手術がなされている。どこまで治療に生かせるかゞ、問題視されている。

かつての健康寿命も延び、高齢化社会を生きのびている、年輩の人達が多数いる。

これは科学技術の恩恵であり、従来では治療不可能だった病と闘う、若い医師達のお陰で、支えられている。

医療機器を自分の手中に使いこなす経験的な技巧、これが今日の社会に、反映している。思えば、神技といってもよい。

これは人類社会への貢献でもある。生死を別ける時間との闘いに、日夜心血を捧げている医療人に、深甚の敬意を払いたい。

たゞ最新の医療機器及び医師も、現代の高齢化社会を満足させるにたる、数を保持しているか。

問えば必ずしも微々たるもので、医療機器もどこにもあり、それに取組む医師の研修の場も、必備である。

今、後期高齢者の医療にタッチ出来る医師の確保に、国をあげて取組まなければ、ならない時がきた。

私達も健康に注意して後期高齢化社会を、楽しく生きるよう。自分で健康管理に充分意を、注ぐべきだ。

その意識転換を図るべきだと思う。医療界もまさに、流転の美を顕現している。今後も早期発見、早期治療が叫ばれる。

その線に乗って、治療が繰り返えされ、寿命を延長することが、可能となって来た。

かつて想像もしなかった医療技術も、人間内部に分け入って行く。先端医療が更に進んで行くことは、高老齢化に拍車をかける事になる。

それに対するアフターケアーに取組なければならない。流転の美は、かくまで発展し来たった。

形而下学に対する認識が、追いつけない状況である。社会悪によせる非人道的行為が、毎日横行している事は、実になげかわしい。

秩序回復の対策をとらなければ、ならない時が来た。こんな未秩序な社会を、誰がしたのか。

私達は、充分反省すべきではなかろうか。流転は今後も続くであろう。住みよい社会の構築に向け施策が必要である。

流転するものは、みな成長の推進がそれぞれの領域でなされ、自然世界の四季の移り変わりに反映して、流転の暦がきざまれている。

栄枯盛衰は世の常、限られた世界において、生き蘇る生物に、流転の実相は、顕現せられる。

たゞ今をときめく私個人も、やがて次の世代に流転を託すことになる。はかなく消えて、やがて新しい生命の誕生は、私でない子孫が、流転の理法と解して、染めぬいて行く。

東洋的思惟の仏教で説く流転も、西洋哲学で輪廻転生を、ニーチェによって形而上学的セオリーで解する。が、本質をとらえる思考の形式はことなる。

ともかく流転の美も、一つの美の象徴として、取り上げてよい。だからといって形而上的な物の見方が、違うとは言いがたい。

これも一つの昔学の要素を、荷っていると言える。そしてあまりにも形而下学の異状な発展が、とかく科学万能という言語に代替されている感がする。

ことにエレクトロニクス、光ファイバーの領域では、先に述べた技術的な分野で、言葉を変えて言わば生・死を別ける事にもなる。

流動の美がこゝまで発展しようとは、誰れが予測したであろうか。更にナノテクノロジーと呼ばれる細やかな技が、身近に問題を投げ掛けている。

1ナノメートルは1メートルの10億分の1、その百倍くらいまでの領域を指すが、ミクロの世界の開発にも貢献している。

線状から微細部にまたがって、粒子状を構成する。いわゆる、ナノテクサイズの物質が無害とされてきた。

その物質も粒子状になると、活性度も高くなり、私達の身体内にも、影響しかねないとも限らない。

新素材として、ＩＴ機器から日用品まで、幅広く実用化もされて来ている。ことにエレクトロニクスの集積回路（ＩＣ）は、配線の幅を細くすることで、性能を高度にして来た。

この世界にも更に新しいタイプの、微細回路の開発も急がれているようだ。医療技術の分野での応用は、前述の通りである。

即ち、先端技術が、偉大な力量を発揮する。前の負の側面を徹底的に除去することが、不可欠と思われる。

人類の英知は流動の美を求めて前進し、今日も進展しているが、私達に貢献し得る限り、それは流動美を現出すると言ってよい。

広大な宇宙の神秘から、ミクロの極小の世界に及ぶまで、美は存在する。

八．自然世界の中での変化

変化流動の美について、形而下学の世界に分け入って来た。人類の英知は、とどまる所を知らない。

勿論、科学することへの一歩が、その足跡を刻んで行

く事は、人類の英知をたどって来た過程に、蘇ってくる。
本来、人間世界の流転についても、自然環境を離れては考察出来ない。「人は環境の子」と言うが、人を取り巻く環境にも種々ある。
最も基本的な環境は、自然世界それであろう。
私達の地球を取りまく海洋に、囲まれた大陸、河川を地軸中心に、太陽系を自・公転することによって、生まれる自然現象は、そこに人類を育んだ、悠久な地球年を作りなした。
自然を愛し人類社会を構成して来た。また学問を愛し、人と人との触れ合いを基に、互に助け合って人類の英知と、過去の積上げをもとに、歴史的現在を一歩でも踏み出して行ける方向に、意を注いだ。
自然の限りない輪を広げるべく努力の積み重ねが、今日を作り成して来たことは、私達の歩んで来たその歴史が、知る所である。
太古の人間は自然神崇拝から、その生活を築き上げて来た。天地人それは自然を取り込み利用する所に、端を発したと言ってもよい。
大気の移動によって、そのぶつかり現象や雷放電による雷雨を、たくみに取り入れる事で、生活に潤いを持った。
即ち、水資源の恩恵に浴し、農耕作による食生活へと、栄えある過程に踏入ったことも、確かだった。

地球の自公転によって、地域による変移はあるが、緯度、経度に包まれた自然、それは地球環境を指示する人の英知と見るべきであろう。
その場所に生きる知恵を発見し、人類生計に役立てて来たことも、事実である。
ギリシア的人間像から、中世のローマ的宗教世界に、そしてルネッサンス、地理上の諸発見など、科学する心を育んだ。
更に天文学、コペルニックス的発想を輝かせて来た。また民族国家の争いも、世界共存社会へと、弛み無い努力が結実する時に来ている。
地球規模の歩みは、他の天体への欲望に、宇宙工学の世界へと、その歩みは、果てし無く続く。
それは科学する心だけでなく、人類社会の共存、即ち地球規模においても同様である。
二十一世紀の今日、貧富の格差は、未開発地域への援助も国際社会の中で、痛切な問題として取り上げられている。
これは急速且つ迅速に対応すべき問題である。貧窮に喘ぐ未開発地への医療の潤を、また豚インフルエンザーの治療も、国連主導のもと対処すべき急務である。
民族間の紛糾もまた、双方で解決の糸口を見出すべく積極策を計る事も、国連の視点で、これは人類発展の条件として、世界平和をめざすその過程に、不可欠な課題である。
ことに一歩を踏み出すべき時は今だと痛感する。自然世界の中で人間は共存する。勿論、民族間の意志疎通にバランスを失って、痛くも殺戮まで繰り返すことは、自然世界の破壊であり、環境破壊でもある。
掛替えのない、この環境を死滅させてはならない。人は環境の中に生き、また、その環境の中で育って行く。
この地球から私達の住まいする環境を破壊することは、今まで弛みなく存続して来た人間社会、文化も費え去って、死滅した地球になりかねない。
しかし人類は英知をもち、住みよい環境作りに、地球規模で取りくんでいる。この成果は必ずやプラス思考に転回していく事を、私達としても信ずる。
例えば二酸化炭素、廃液など、自然に有害物質を除去する方向に向け、たとえそれが小さな一歩であっても、前進することが足下の急務でもある。
たゞ言うは易く行うは難し、困難な道のりであっても、それを肯定して突進する気概をほしい。
地球温暖化が叫ばれて久しい昨今では、地球の両極圏の氷塊が溶け初めている。これは地球を取り巻く、海洋の水位が上昇する。
地殻変動によって起り得る津波現象、これは陸地に住む人間を始め動、植物への挑戦でもあり、自然現象がなす威嚇でもある。

これは私達にとって、地球に住む生物が意識的に眼を見開く問題と受け止め、対処すべき問題でもある。
私達人類への警鐘と受けとめ、改革、防衛に力を注ぐべきことである。
そんな時、いたずらに民族間の攻争を、繰り返している愚は、今すぐ停止すべきだ。
人類が共存出来る地球を、模索すべき段階に来ていることを、知るべきではないか。

九. 変化への対応

自然世界の中での変化について、多方面から述べて来た。私達が今、痛切にその対策を考えなければならない時に、来ている。
その変化への対応に対処すべき状況を、速やかに講究すべきだ。
かつて万物は流転すると言説した。ギリシアの哲学者ヘラクレイトスは、万物の原質は火にあると解き、自然哲学の思索風土的な要素は、万物の原理を見ることから始めた。
後にアリストテレスによって、集大成された。東洋でも仏教思想で、万象の構成要素を大、気、風、火、地と説き、軌を一にしている。
BC535頃～475頃、上記の頃はや万物流転説が説かれ、た

とえ孤高の哲人と呼ばれたにしろ、論攷、一三七の断片の中にギリシア的なロゴスを説いた。

「人は二度と同じ流れに立つことは出来ない。」と「万物流転」を説き諸事象の対立から「闘いは万物の父である。」と神々のロゴスの純一と調和の弁証法を導入した。

勿論、素朴な論であったに違いないが、ギリシアの昔にヘラクレイトスが、今日を予言したとは思えない。

物活論的に「永遠に生きる火」を提唱し得たことは、前述の如く一つのステップとして動き出していたことは評価してよい。

やがて近世初頭のルネッサンスから、コペルニックス的展開で自然を対象にした。第二の論の出発を見、更に第二次大戦後の自然世界に向けた科学的視野が拡大化され、ミクロの世界から巨視的なマクロ、宇宙世界に及ぶ厖大さをきわめた。

IT、ナノティクなど、情報工学、宇宙工学へと飛躍化を計っている。自然哲学の最たる物と言ってよい。

今世紀に入ってから急速に進展した技術部門も、その対応に窮しているとも言える。

しかしこの英知は人類の進歩と共に、日々日常性を潤すものとして輝く事であろう。またそれを信じてやまない。

再び万物流転について、変化する多様性に思いを馳せて見たい。仏教では迷いの生死を続け六道の間を生まれ変ることを言うが、限りなく移り変わる。いわゆる、万物流転を意味する。

人は時間と永遠の中で、生き、死滅する。その過程に変化の多様性を見、それに対応して生きる定めにある。

その生きている時間（含日々）の長短はあれ、そこにおいて変化に対応して行く。

限りなく変化する自然現象を取りまく変化は一様ではない。四季の変化は勿論のこと、そこに生きるエネルギーによって、変化への対応がことなる。

地球温暖化現象が叫ばれて久しい。環境破壊も地球規模にまたがって変化と、その対応を考えなければならない。

地球だけの安泰は解しがたい。相対的に変化とその対応策は、一民族国家間の問題だけでは、対応しきれない。

従って従来の対応策、その地域の地殻変動によって引き起こされる。対策措置で事すまされない、問題が惹起している。

例えば微生物によって、人間への損傷の影響等考えると、その伝染によってもたらされる被害などがある。

国際赤十字の対応する医療チームの貢献等、はかりしれない問題をかゝえている。その対応策にも限界がある。

かと言って、そのまゝ死滅の道をたどらせるわけにもいかない。人類社会が、好むと好まざるとにかゝわらず、対抗菌作用をもって望まなければならない。

国連医療チームの早急な確立こそ、急務なものだ。また自然災害のもたらす破壊力それへの対策、国際救助活動、援助資金、どれを取って見ても、身近なものとして対処しなければならない、瀬戸際に立っている。

これらの諸問題は急を要する問題として、解決への手柄を必要としている。これらの諸問題解決には、共存意識への芽生えが必備、民族間の格差問題云々も、勿論、取り払わなければならない。

多くの問題もかゝえている。しかしそれをも乗越えて、共存していかなければならない。対応策は厳しいものがある。

今こそ人類社会のかゝえる問題は、すべて地球規模でもって対応もし、当らなくてはならない。

かゝる変化への対応策は、人の心を結ぶ言語、即ち、共通言語、世界語が必備、現存する人類の多くは、英語を話し共通語化している。

英語の習熟は変化に対応する一つのステップである。

勿論、民族間においては、自分の国語を世界語化したい気持があろう。然し大多数の人類の共通言語は、今や英語を必備としている。

かつては文化圏によって独語、仏語が学術用語として尊ばれていた。時代、文化の移動等で、それも強くは叫ばれていない。

その生活の基盤とされる貨幣の問題、$の勢力は強いが、欧州を中心とした経済基礎ユーロの統一成果を見たが、経済的不況である。

他に人種の問題をめぐっては、種々な問題をかゝえている。その対応策には、一挙に統一化出来ない問題もあろう。

私達が生活して行く上に、欠くことの出来ないものも持つが、出来るものから一つ一つ統一への方向付けは、不可欠ではなかろうか。

人種問題で大きく開(ひら)くのは、宗教の問題であろう。人の信仰心をかきたてる宗教の問題は、古く宗教戦争もあるが、争の根源には宗教上のトラブルをめぐる、問題と言ってよい。

アラブを中心とした中近東の問題も、これに原因している。人種上の問題などこれは、宗教に根ざす所が大きい。

武力鎮圧を導入しても、その解決はテロをもって抵抗している。一向に治安は保たれない。

それどころか千々に乱れ、平和を脅かしている。前にも論述したが、今、地球がリスクを背おって喘いでいる時に、民族間の軋轢は、負の要因をはらんでいる。

今こそ、この状況に、即時停戦を行い、私達の地球生存の為に、民族人種を越えて、大同団結すべき時と切に思う。

そこに変化への対応を、集中すべきと思う。

つづく

口紅（その十）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
（趙家の人々）
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
（江家の人々）
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
（趙耀根と江暁歌の友人）
寧岸
（趙耀根の会社の同僚）
張喜
（趙耀根の会社の上司）
李主任
張書記
（江暁歌の会社の同僚）
羅桂香
（趙耀根と江暁歌の娘）
嘉児
（寧岸が配属された紅光工場の従業員）
呉文彗（後に寧岸と結婚）
（江暁鴎の恋人）
黎美娟
（趙耀根が深圳で出会った友人）
宗漢（後に江暁歌が作った会社の専務となる）
（未来文化会社の女性社長）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）

第十七章　宗漢

（一）

運命とは不思議なものだ。ある人は、この奇妙な生き物にもて遊ばれてしまう。人は、最大限の努力と代価を支払っても、運命をつかみ取ることはできない。しかしながら、たやすく運命の恩恵にあずかる人もいる。時も巡り合わせも運命であり、あなたがいくら懸命にもがいても命がけであっても、運命を手にすることはできない。

他人の厄介になる生活を抜け出したくて、唯一頼れるのが職場だった。職場だけが、人々のもう一つの住み家であり、あなたを守り、あなたに給料を与え、あなたを政治的軋轢から守り、あなたに身を寄せる住まいを提供し、あなたに老後を送らせることができる場所だ。

江暁歌は、もう一度上司と相談した。自分のために、たとえちっぽけな家であっても、風雨さえしのげればよかった。

少し前の自分なら冷静さを失い、盲目的でのぼせ上がり、現実を無視したばかげた改革プランを提出しては上司のねたみを買っていただろう。しかし、声を低くして頭を下げ、言葉に気をつけてお願いしさえすれば、何とか上司の理解を得ることができるはずだと思った。なんといっても江暁歌はもと従業員であり、工場のために多大な貢献をし、かつて何度も模範労働者で選ばれたことがあった。

江暁歌は、

「私達は住む家がなくなってしまいました」

と言った。上司は、

「みんな、今は家を失ったんだ」

と答えた。江暁歌は上司の言っている意味がわからなかった。

「なぜですか？」

上司は、

「我々はもう既に香港の商人と契約を結んだんだ。工場はオフィスビルが残っているだけで、宿舎と湖上の一部の建物は人手に渡ってしまったんだよ。香港の商人は間もなく建物の解体を始めて、近代的なオフィスビルが建つのさ」

と手を広げて言った。江暁歌は立ち上がると、

「負け犬！」

と上司の鼻を指さした。上司は、

「どうしようもなかったんだ。私は君達に賃金を支払わなければならない。そうでもしないと、空きっ腹を抱えるしかないんだ」

と言った。

程なくすると、ブルドーザーや様々な建設車輌が、容赦なく工場の敷地の中に入って来た。一部の労働者が工

場の入り口付近に集まって抗議を始めたが、直ぐに狼のような警備員に蹴散らされた。キャタピラ車が、ゴーゴーと音を立てて前進してくる。一群の出稼ぎ農民達が、木槌やつるはし、ドリルロッドを手に持って、壁の取り壊しを始め、打ち叩く音が響いた。埃が辺り一面に立ちこめ、すぐに黒煙や有毒ガスが辺り一面に充満し、工場は見る影もなく変わり果ててしまった。

生活の基盤となっていた職場は、出稼ぎ農民達によって跡形もなく消えてなくなり、江暁歌が一類の希望を託した工場も、煙と埃の中で徹底的に破壊され水泡に帰した。彼女は、れっきとした国営企業の従業員であり、その象徴として月給をもらうことができた。しかし既に無一文になっていた。

彼女は結局、他人の厄介にならざるをえなかった。

(二)

寧岸は、うどんの入った二つのどんぶりを高々と手にして、人の群れをかき分け、油まみれの汚れたテーブルの前にやって来た。彼はどんぶりを置くと、指についている汁を舌で嘗めながら、

「今僕は、君にうどんをご馳走してあげることしかできないんだ」

と申し訳なさそうに江暁歌に言った。

「魚介類の入ったうどんは私の大好物よ。嬉しいわ」

「暁歌、僕は君達が離婚したことをまったく信じなかったよ。それに、嘉児を趙家に残してきたなんて信じられないよ」

「事実よ。あなたが信じなくても仕方がないわ」

「なぜなんだ？趙耀根は、僕達が何か変な関係になっていると疑っているのか？」

江暁歌は、

「いいえ、あなたとは関係ないのよ」

と首を横に振って苦笑いした。

「恩知らずな趙耀根が、僕達の純粋な友情に泥を塗ったことを許さないよ。君が彼のためにどれくらい犠牲を払っているのか知らせたいし、彼がどれほどの過ちを犯しているのか言ってやりたいよ」

「小さな声で話して」

寧岸は振り返ると、好奇心を持って聞いている人達が自分達を見ているのがわかり、やっと黙り込んだ。

江暁歌は、

「あなたが彼に会いに行く必要なんてないわ。離婚は私が言い出したことよ。私には正当な理由があるわ。要するに、趙家の人達にこれ以上付きまとわれたくないの。私は疲れたわ。状況はそんなに簡単じゃないのよ。あなたはあまり関わっちゃいけないわ。あなたの立場は今も良くないわ。呉文彗は妊娠したのよ。妊婦には、嬉しい

気持ちと心の安らぎが必要だわ。私のことであなたと呉文彗に迷惑掛けたくないの」

と小声で話した。しかし寧岸は承服できなかった。

「当時、君達の結婚のためにどれだけ心血を注いだか、どれほど陰日向となったか、どれほど君達は周りを巻き込んだか。みんな君達二人のために歓呼の声を上げ、君達二人を讃え、その響きは今でも僕の耳元でこだましているんだ。しかしまさかこんな風な結末を迎えようとは思っても見なかったよ。こうなると早くから知っていれば、僕はなぜ……」

寧岸はまずいと思い、無理矢理言葉を飲み込んだ。

江暁歌は、

「これ以上何も言わないで。私を一人にして。疲れたわ」

と冷ややかに笑うだけだった。

寧岸は江暁歌がこのように言うのを聞いて、ひたすらうどんを食べるより他なかった。彼はうどんを食べながら、

「暁歌、僕はもう絶望的だ。何もしていないのに、もう終わってしまったように感じるんだ」

と頭をもたげて言った。

「あなたはなぜそんな風に考えるの？まだチャンスはあるわ。趙耀根は成功したじゃない？」

「趙耀根のことなんか、嬉しくも何ともないよ。僕は餓死しても、あらゆる悪事に染まりたくないんだ。君はできるかい？」

江暁歌は無意識に頭を横に振った。

実際彼女は途方に暮れていた。彼女もどうすればよいのかわからず絶望するときもある。

(三)

江暁鴎は、上の姉（江暁歌）が落ちぶれているのを見て我慢ならなかった。彼は江暁歌のために家を用意した。一つの部屋とリビングだけの小さな家だったが、独り身の女にとっては贅沢すぎた。扉を閉めれば世間のいかなる妨害も受けることはないし、一人静寂を味わうことができた。江暁歌にはこのように静かな環境が必要だった。

江暁鴎は、姉を連れて家を見に行った。彼らが建物の通路に入って行き、そのままずっと真っ直ぐ四階まで上がりドアを開けると、きちんとした身なりの男がニコニコしながら、彼らを部屋の中に迎え入れた。

「紹介するよ。こちらは宗漢さん。僕が深圳で知り合った友人だ」

宗漢と江暁歌は手を伸ばして互いに握手を交わした。

宗漢は、

「かねてから、暁鴎からあなたのお噂を伺っておりま

す。ずっとお会いする機会がありませんでした。今日あなたのために便宜を図ることができたことは、この上ない光栄です。この家はあなたが住みたいだけ住んで下さって結構です。私は深圳で仕事をしていますし、たまに帰ってきてもホテルに泊まれば良いことです。それに実家に泊まってもいいので、何の不自由もないのです」

と言った。江暁歌は、

「とても感謝しています。私は決められた日に家賃を支払います」

と答えた。宗漢は、

「私と暁鴎は親友です。暁鴎の姉さんは、すなわち私の姉でもあります。家賃を払うなんて他人行儀ですよ」

と言った。江暁歌は、

「それはいけません。家賃を要らないというなら、私はこの家に住むことができません」

と言った。江暁鴎は、

「わかったよ、僕達は家賃を払いましょう。先ず僕が半年分払うよ」

と言った。

「暁鴎ったら」

「姉さん、僕は今商売がうまくいっているんだ。僕の顔をつぶすようなことはしないでくれよ」

江暁歌は、弟のいうことに承服するより他なかった。

「今回限りよ」

宗漢は傍らに立って、しきりに頷いて見せた。そして彼は、

「私は暁歌さんの心意気が気に入りました。世渡りをし、事を処して行くには原理原則が必要です」

と率直に言った。

江暁歌は宗漢の話を聞いて、宗漢がどんな人間なのか大方わかった。この宗漢という人物は、寧岸とも趙耀根とも江暁鴎とも違った男だった。彼は身なりにこだわり、身嗜みをきちんとしていた。

彼の体のすべては念入りに手を加えられていて、一分の隙もなかった。彼の表情とこだわった身なりは、優雅で上品だった。彼の白くすらりとした指は、まるで芸術品のように無頓着に膝の上に置かれていて、容赦なく造物主の寵愛を独占していた。彼は非の打ち所がなく完璧だったが、少し飾り立てていて、映画やドラマの主演男優のようであった。彼は落ち着いていて微笑みを絶やさず、要害の高地に立って時世を憂い、衆生をのぞき込んでいるようでもあった。

彼がすべてにわたって装いを凝らしていることが、江暁歌の経験からも勿論伺い知ることができた。しかし、こうした彼の装いは、金回りがよく、品性があることを物語っていた。

江暁鴎は、

「宗漢は多国籍企業の国内代理店を経営していて、商

売もうまくいっている。彼は理論派だから、姉さんはきっと彼と馬が合うと思うよ」

と言った。江暁歌は、

「暁鴎　大袈裟に言わないで。その道の専門家に笑われるわよ」

江暁鴎は、

「姉さんに伝えたいことがあるんだ。僕は美娟と結婚したんだ」

と突然無頓着な口調で言った。

「結婚したの。私達、何で知らなかったのかしら?」

「結婚は、ただ単に二人だけのことだよ。他人が知ろうが知るまいが、僕達とは関係ないことさ。もしお母さんが一貫して僕達の同居について同意しなければ、僕達は結婚証明書さえも受け取ることができないんだ。実際、結婚証明書なんて契約書に過ぎないんだ。契約は守っても破棄してもいいのさ」

「あなた、私に講義するの?」

「いや、僕はただ姉さんに多くの生き方があることを伝えたかっただけだよ。僕達は必要なときに分かち合い、互いに干渉しなくていいんだ。宗漢はこのことについて見抜いているし、彼は姉さんより年上だし、彼の生き方はスマートなんだ。彼は結婚したいと思ってもいないし、何の束縛もなく、商売をしているんだ」

「でも、あなた方のこのやり方を、母親がどう思っているか考えたことがあるの。母さんにとっては、あなたは一人息子よ」

江暁鴎は、

「姉さんは考え方が保守的になったなあ。姉さんが結婚した当時は、母親のことも世間体も考えなかったし、一途に自分の幸せを追い求めていたんじゃないのかい?僕と宗漢が姉さん達の当時のことを語ると、奇談を話すようなものさ。宗漢は姉さんのことを感心しているよ。でも、姉さんの鋭気は何処に行ってしまったんだ。まさか日々の生活によって跡形もなく消えうせてしまったんじゃないだろうね。僕がなぜ姉さんを助けようとしてこの家を借りたのか、宗漢がなぜこの家に住みたいだけ住んでいいと言ってくれているのか、姉さんにわかるかい?僕達は、姉さんをくさくさした生活の中から引っ張り出したかったし、姉さんが発憤するのを願っているんだ。姉さんは、『天が私にこの才能を授けたのだ。必ず用いられる日が来る。(天生我材必有用)(注24)』と言って、いつも僕を教え導いてくれたじゃないか。だから僕も、姉さんが自分の才能をいたずらに無駄にするのを見てられないんだ。僕は、姉さんが自分の力で事業を切り開くことができると信じているよ」

と言った。

(注24は、中国盛唐の詩人、李白の代表的な詩、「将進酒」の一節を引用している。)

江暁鴎の本音の話は、彼女のこれまでの愚かさや誤りから目覚めさせ、これでやっと自分が感情と家庭の泥沼の中に奥深く陥ってしまっていることに気がついた。彼女は、注意を喚起してくれた弟に感謝した。

「姉さん、早く服を着ろよ。今日は僕がご馳走するから」

「何を着ていこうかしら、私、この格好じゃダメかしら?」

「姉さんは、相変わらずの田舎っぺなんだから。今女性は、外出する時には眉を描いたり、口紅をつけたりしない人なんていやしないさ。みんな化粧をしているよ。美娟の化粧品は全て舶来品さ。一セット数千元はするんだ。彼女は、この化粧品で、青春をいつまでも失わないでいるのさ」

「私と美娟とは違うわ」

「姉さん達は、異なっている点が多いけど、ある点では一致している。つまり、姉さん達は二人とも女性だということだ。女性は身だしなみをきちんとすべきだよ」

宗漢は、

「暁鴎、君の言うとおりだ。女性は身だしなみに気をつけるべきですよ」

と突然口を挟んできた。

「わかったわ。私はあなた達と意見を戦わせるのはやめるわ。でも、私は見ての通りよ。化粧をしないことに慣れてしまったわ」

江暁鴎は、姉を連れて豪華なホテルに入って行った。ガラスでできた自動ドアを入ると、江暁歌はその豪華さに震え上がった。ここは煌めきに溢れる世界で、ピアノの音が鳴り響き、国内外の客が物音を立てずに歩いている。大ホールのバーではコーヒーを飲み、彼らは小声で言葉を交わしている。江暁歌は直ぐに自分の貧乏たらしさを感じ、弟がなぜ化粧をさせたかったのか、その訳がわかった。

レストランで腰を下ろすと、江暁歌は、

「暁鴎、あなたに笑われても平気よ。私は生まれて初めてこんな豪華なホテルに入ったわ。私は中国にこんな豪華なところがあるなんて知らなかったわ。私は見識が浅く、見聞が狭すぎるわ」

と気弱そうに言った。宗漢は、

「暁鴎、これは君の怠慢だな。どうして姉さんを連れて彼方此方見せなかったんだ」

と言った。江暁鴎は、

「くそっ、僕はこんなことも思いつかなかったのか。姉さんは、こんな場所は嫌いだと思っていたんだ」

と言って頭を叩いた。江暁歌は、

「誰が嫌いって言ったかしら。そんなこと言っていないわ。ここに腰掛けていると、すべての美しいものを創造し、楽しむことができることがわかったわ」

と言った。宗漢は、

「そうなんです。今私達は、改革開放に向かって進むべきです」

と言った。江暁歌は、

「でも私は、理解に苦しむことがあるわ。今こんなに多くの工場が給料を払えないでいるのよ。労働者は仕事がないのよ。でも、多くの自営業者、とりわけろくでなしのチンピラのような人達が、みな大金持ちになったわ。この改革開放が正しいのかしら?」

と言った。宗漢は、

「勿論、正しくありません。しかしながら、不正常なことが正しい世の中なんです。何事にも一つのプロセスがあるはずです。現在行っている改革開放路線は、つまり正常な秩序を打破し、社会の富の合理的な移動と新たな仕組みを実現し、真に経済の法則に照らして仕事をしなければならないのです。もし、不正常なものがなければ、人々は目を覚ますことができないし、社会を徹底的に変えることなんてできないでしょう」

と言った。江暁歌は、

「でも心情的にどうしても理解することはできないわ」

と言った。宗漢は、

「必ずこの道理に納得しなければなりません。中国人は貧しすぎるのです。変えなければだめなんです」

と言った。江暁歌は、

「もう少し深く掘り下げて、説明してくれませんか」

と言った。宗漢は軽く頷くと、

「一般的に言えば、我々の社会は競争原理に従わなければならないんです。社会に適合するものが生き残り、強者が生き残り、弱者は淘汰されるのです。このような社会であってこそ発展することができるのです。しかし同時に、平等の原則に従わなければなりません。どの人にも生きていくための空間が与えられ、本当の意味での弱肉強食の状況には至らないのです。でも私の理解を以てすれば平等にも限度があり、いわゆる物事は極点に達すると、必ず反対の方向へ転化します。平等は、絶対的平等主義の状況になると競争を罪と見なし、社会の発展はその原動力を失ってしまうでしょう。現在の改革は、つまるところ競争のための大義名分であり、充分にみんなの自発的な積極性を促し、みんなに競争させ、それ故に社会の進歩と発展を促すのです」

と言った。江暁歌は、

「わかったわ。とにかく目一杯、一人一人が持っている潜在的な能力を発揮しなければならないのね」

と言った。宗漢は、

「その通りです。この潜在的な能力が長い間押さえられていて、ある人達は能力が消失してしまい、人々は親方日の丸を祭り上げて、働きの如何に関わらず同じ生活待遇を受け、すでに依存性と深い堕落性を持ってしまっ

たのです。それに比べて、最下層の労働者は最初から何も持っていないので、如何なる観念上の拘束や考えもなく、逆に一層自由に物事を考えることができ、このために商売を始めて直ぐに金持ちになったのです」

と言った。江暁歌は、

「私はやっとあなたが言っている意味がよくわかったわ」

と言った。宗漢は、

「富の合理的な移動と新たな仕組みの中で競争を提唱するからには、早く迷いから覚めた者が、いち早く行動をとることができるのです。みんな、『時は金なり』と言っていますよ。これは空論ではないし、スローガンでもありません。極めて強力な力を持っているのです。現在の我国の状況は、資本の本源的な蓄積時期のヨーロッパ諸国のようです。理論上から言えば、手に入れることができる財産に際限がありません。しかし、この全ての基本的な前提条件を実現するには、思想を解放しチャンスを掴むことです。言い換えれば、行動する必要があると言うことです。世界中の成功者は、行動する魅力をわきまえていて、机上の空論が好きではありません。私と暁鴎も例外ではありません」

と言った。江暁歌は、

「あなた達は謙虚でないわ。でも宗漢さん、あなたは私の指南役です。一日で十年分勉強したわ。私にどんな仕事が向いているか考えてくれませんか」

と言って笑った。宗漢は、

「無責任なことは言えませんよ。要するに、あなたがよく考えて、自分の才能を発揮して、古い慣習を打破すればいいのです。それに冗談だと思って聞いてください。私はあなたが将来成功すると思いますよ」

と言った。江暁歌は、

「なぜわかるのですか」

と言った。宗漢は、

「いま広東では、人相や手相を見るのが流行っているのです。あなたは顔立ちが整っているし、おでこが広くつやつやしているので、大きな幸せと高貴な相を持っていると思いますよ」

と言った。江暁歌は、

「信じないわ。母は私を産むとすぐに亡くなり、ずっと今まで不運続きよ。富貴な影さえも見たことがないわ」

と言った。宗漢は、

「行き着くところまでいけば、道は自ずと開けてきますよ」

と言った。

江暁歌は、この『否極泰来（注25）（行き着くところまでいけば道は自ずと開けて来る）』という四つの文字に刻み込まれた意味を咀嚼して、

「私は、この『否極泰来』という言葉を心の糧にするわ」

と言った。

（注25は、中国の成語で、『否』は悪運の卦、『泰』は幸いの卦の意。）

（四）

江暁歌は無給休職する決心をして、どうにもならない職場との関係を断ち切った。

江暁歌は長江のほとりに座り、砂浜に沿って駆け回っている嘉児を見て、父親に言った。

「給与も与えられない休職の手続きをした僅かな時間、私は急に自由を手に入れたような気持ちになったわ。私は解放されたのよ。なんて素晴らしいんでしょう」

父親は、

「お前は、これからどうするんだい」

と訊いた。江暁歌は、

「私は南方に行きたいわ。そこに行けばチャンスがいっぱいあるわ。でも、私は嘉児のことが気がかりなの。趙耀根は商売をしていて、忙しくて全く家に帰れないわ。趙家の人達は、嘉児にせいぜい腹一杯ご飯を食べさせることができるだけで、他のことはお構いなしよ。私は今、少なくとも一週間に一回会うことができるわ。彼女を連れ出して、遊んでお喋りして、それに知識と道理を教えたわ。食事も作って健康に必要な栄養を補給したわ。でも私が自分の道を進むからには、嘉児の将来がどんな風になってしまうか、想像する勇気なんてないわ」

と言った。

父親は、遠くにいる嘉児を見ながら、心配で気が気でなかった。嘉児は直ぐに二人の男の子と友達になり、砂浜に腹ばいになってワアーワアーと叫んでいる。

江暁歌は一本の小さな棒を拾って、砂浜に無意識に何か書き殴っていた。暫くして頭を上げて言った。

「タクシーの運転手になるのはどうかしら」

父親は、

「タクシーを運転するのは力仕事だ。とても骨が折れるし、お前の体では耐えられるものではない。それに自尊心もあるだろう。お前は大学の卒業資格があるし、技術部門の幹部だし、恥ずかしい思いをしても平気なのか？」

と頭を横に振った。江暁歌は、

「恥ずかしいことなんてないわ。私は昔大通りで露店を出したことがあるわ。本当はファッションデザイナーの仕事がしたいのよ。私は、私達の工場を請け負うか、自分で服飾工場を経営したいわ。でも先ず、私は自活して、資金を貯めなければならないわ。タクシーの運転手になって、ある程度のお金を稼ぎたいの。お父さんはバスを運転している女性ドライバーを見たことがないの？

バスを運転しているのも女性だわ。私は、この世の中に耐えられない苦労なんてないと信じているわ。私は一ヶ月余り考えて市場調査をしたのよ。稼ぎの少ない商売はやりたくないわ。私には多くの選択肢はないのよ。それに、車を運転するのも一つの技術よ。身につければ有利になるけど、不利になることなんてないわ。私の同僚の羅桂香は、レストランを開店する準備をしているのよ」

と言った。父親は、

「お前の分析は素晴らしいよ。お前は南方に行ってはいけないと、お父さんは思うよ。タクシーの運転手になりなさい。でも何処から車を調達するんだ」

「二つの方法があるわ。他人の車を借りるか、自分で買うかだわ。私は自分で買いたいわ。たとえお金を借りたとしても、歯を食いしばってお金を返して、自分の車を持つのよ。私はもう、人のために働くのはこりごりだわ」

「それにはかなりの金が必要だな」

「だからお父さんに援助して欲しいのよ。でも、そんなことお願いする勇気なんてないわ」

江暁歌は話を言い終えると、父親に話したことを後悔した。

父親は家では主導権がなく、財布のひもは母親が握っていた。それに父親はきちんとした人で、これまで人に世話をしてもらったことはなかったし、彼はこのことを

江暁歌に伝えてきた。愁いに沈んだ父を見て、彼女はとても済まない気持ちになった。

父親は暫く黙っていたが、やっと口を開いた。

「わかった。お父さんに考えさせてくれ。お父さんに少し時間をくれないか」

「勿論だわ。お父さん」

話をしていると、嘉児がおじいちゃんのところに駆けてきた。父親は慈悲深く優しく両手を広げて、嘉児を懐に抱きかかえた。

娘を助けるために、父親は初めて奔走した。彼は何度も友人に電話を掛けて助けを求めたが、さほどの収穫もなかった。普段はとても仲の良い友達であっても、お金を借りるという肝心なときには、頭を横に振り、手を左右に振り、大きくため息をつくだけだった。長年の親友達も、これによって縁が切れた。

江暁鴎は父親の一切の行動を目の当たりにして、勇敢にも手を差し伸べた。

江暁鴎は、

「お父さん」

と声を掛けた。江暁鴎は、

「車を購入するには、許可証を発行してもらう手続きが必要だと聞いたことがあるよ。十五万元あれば十分だよ。このお金は僕が出すよ」

と言った。

「お前が出すって、お前は何処からそんな大金を調達するんだ」

「ここ数年の貯蓄と株を売買した儲けだよ。でもこれが僕の全財産だ。僕は、お父さんと攻守同盟を結びたい。不必要な煩わしさを減らす為に、お父さんはお母さんをむやみに心配させないよう、絶対に秘密を守って欲しいんだ。それから、姉さんが僕のお金であることを知ったら、きっと受け取れないと言うに決まっている。だからお父さんは、僕から借りたお金だと言って下さい」

「わかった。お父さんはお前の考えに同意するよ。安心してくれ。お前の姉さんは、きっとお金をお前に返すだろうよ」

「お父さんは、このことで心配するには及びません。それに、返ってこなくても、どうでもいいことなんだ。僕達は血を分けた姉と弟なんだから」

父親は、

「暁鴎、こうしよう。私はもう既に五万元借りている。お前が十万元出してくれれば、私達は共同でお前の姉さんがこの難関を切り抜けるのを助けることができるんだ。でも、絶対に秘密を守らなくてはいけないよ」

と感動して言った。江暁鴎は、

「わかったよ。約束するよ」

と頷いて言った。そして彼は、

「とりわけ母さんにはね」

と謎めいて笑った。

父親は苦笑いをした。親子は暗黙のうちに了解した。

(五)

江暁歌は、念願叶って一台の赤のシャリーを手に入れた。彼女は車を運転するために各種の手続きをすべて行い、自動車学校の終了証明書を受取り、運転免許証交付の手続きを済ませた。太陽の光が美しい朝、赤のシャリーを運転して大通りの車の流れの中に入っていった。朝の風が、彼女の生活への自信を奮い立たせた。

江暁歌は今でも、彼女が乗せた初めての乗客のことを覚えている。それは、バスに乗り損ねて慌てているお母さんと幼稚園に通う子供だった。彼女の職場は遠く長江対岸で、一回タクシーに乗れば、少なくとも二十元以上の料金がかかる。しかし、給料やボーナスを減給されないために、母親はどうしてもタクシー代を支払わなければならなかった。彼女は気に病んでいた。母親は道すがら、子供が遊びに夢中で寝坊ばかりして、彼女とうまくいっていないと、ぶつくさと愚痴をこぼしていた。彼女の気が気でない様子は、江暁歌に過去の在りし日を思い起こさせた。江暁歌はこの不運な母親に同情し、母親に怒られてもうんともすんとも言わない子供にも同情した。降り際に、江暁歌は二十元だけ受け取り、端数を切

り捨てた。初めて営業した乗客へのサービスとも言えるし、この母親への心ばかりかの支援とも言えた。

江暁歌の貯蓄はこうして始まった。彼女は昼夜を問わず、出勤退勤もなく、体を持ち堪えることができさえすれば、車を運転して街をまわった。彼女は、大きなネスカフェコーヒーの瓶にお湯を入れて、腹が減ると街頭にしゃがみこんで弁当を食べた。仕事は辛かったけれども楽しくもあった。何れにせよ、彼女が得たお金は全て自分のために稼いだものだった。彼女は順調に売上を伸ばし、同業者に比べて稼ぎは多かった。これは勿論、彼女が真面目にせっせと仕事をして稼いだ結果だった。

第十八章　小さな小瓶

（一）

趙耀根の手の中には小さな小瓶が握られていた。会場に座っているどの人の手の中にも同じような小瓶が握られている。

趙耀根は、

「さあ皆さん、どうぞ召し上がってください。私は皆さんにある秘密をお知らせします」

と笑顔で話しかけた。

ある人が明かりの下で何か考えながら、

「何の手品をするのですか？」

と小瓶を片手に訊ねた。

趙耀根は、

「これは、私が新しく開発した若さを保つ内服液で、ハイテクノロジー製品です」

と会場にいる人達に言った。

「薬ですか」

趙耀根は、

「厳密に言えばそれは薬ではありません。しかし、効果は薬以上のものがあります。私の開発したこの内服液には副作用がありません。この内服液は栄養ドリンクで、病気になっても病気を治し、養生にも効き目があり、老若男女誰にも効果があります。現代の健康に対する新しい概念では、養生は治療より大切です。私はこの内服液のおかげで、毎日十数時間仕事をこなしていますし、毎週深圳まで二往復しています」

と言った。

趙耀根は首を上に向けると、手に持っていた栄養ドリンクを、美酒を飲むかのように飲み干した。

江暁鴎は趙耀根に頼まれたサクラで、彼も栄養ドリンクの蓋を開けて一口味わってみた。

江暁鴎は、

「趙社長の話を聞いて飲んでみたくなりました。味は意外にも美味しいです。効果は神業ですね」

と言った。趙耀根は、

「勿論ですよ。この内服液のまたの名を東方神水といい、国家の一流の教授が一生を傾けて研究して出来上がった漢方薬と製薬会社の薬を調合して作ったものです。私は五十万元をはたいて彼の調合指図書を買いました。中国の漢方薬と製薬会社の薬を調合して作った内服液は大変珍しく、これは五十万元をかけただけのことはあります」

と言った。

大勢の人が趙耀根を取り囲んで彼の話に聞き入り、限りない信頼と敬慕の念を滲ませた。注意深く内服液の効果を体験してみようとする人もいる。

趙耀根は、傍にいる、でっぷりした太鼓腹の役人に声をかけて、

「あなたも一口飲んでみてください。先ほどのあの先生は、飲むと直ぐに効果が現れました。この栄養ドリンクの名前は、『永葆春』と言います。あなたはこの名前の意味するところを考えてみてください。それは、男性にとりわけ有効です。内服液の完成第一号商品は北京に送りました」

と言った。その役人は微笑んで、ぎこちない素振りで少し飲んだ。

「素晴らしいです。ただの甘みではありませんね」

趙耀根は、

「友人の皆さん、ご覧になりましたか？偉い役人さんが飲みましたよ。皆さんも飲んでみてください。でも、私は予め言っておきます。私の永葆春を飲んだら、今晩帰ってから精力絶倫になってしまいますから、私を責めないでくださいね」

と言って大笑いした。

みんなどっと笑って次々と飲み始め、記者達も飲みながら写真を撮影し、フラッシュが炸裂した。

「趙社長、趙社長、私は深圳から来たのですよ。私は二百本ほど内服液を仕入れましたが如何致しましょうか」

「今日は商品を仕入れていただく商談はしませんよ。こうしてお集まりの皆さんに、先ず試飲して味わってもらいます。皆さん、飲んで精力絶倫になってください」

みんなは次々に拍手した。

（二）

プレスブリーフィングが終わると、趙耀根はどっと疲れが出た。小さな部屋に引き籠って江暁鴎とコーヒーを飲んだ。

「世界中で、この愚か者どもが権力を握ってくれていれば、僕は金持ちになることができるんだ」

と江暁鴎に言った。江暁鴎は、

「そうですとも。ある人が言っていましたよ。あなたがお金を儲けたのは、人の弱点をしっかり掴んだからって」

と言った。

「彼女が言ったのか？」

江暁鴎は黙っていたが、彼の表情を見れば言わなくても明らかだった。

趙耀根は、

「彼女（江暁歌）は、今どうなんだい」

と言って溜息をついた。江暁鴎は、

「まあまあだよ」

と言った。趙耀根は、

「数日前、僕は羅桂香とばったり会ったよ。彼女は小さなレストランを開店したけれど、商売は見込み薄だよ。僕は、彼女達が無給で休職して、間もなく一年になることをやっと知ったんだ。お前はどうして僕に知らせなかったんだ」

と言った。江暁鴎は、

「耀根兄貴に知らせたってしょうがないじゃないか」

と言った。趙耀根は、

「彼女（江暁歌）はこの一年間、何に頼って生活しているんだ」

と訊ねた。江暁鴎は、

「耀根兄貴は自分のことだけ考えてください。忙しいのですから。こんな事にかまっちゃいけません。どのみち僕の姉さんは、他人に頼って飯を食べることはできないんですから」

と言った。趙耀根は、

「お前が怒っているのをわかっているんだ。お前は心から僕を許そうとしていないね。実を言うと、いつも暁歌のことを考えているんだ。僕は当時のあの美しく懐かしい日々を忘れることができないよ。離婚した時、僕は彼女に五万元渡したけれど、きっぱりと断わられたよ。仕方なく彼女のために銀行に預金したんだ。今彼女はきっとお金が必要なんだ。お前は僕に代わって、お金を彼女に渡してくれないか」

と言った。江暁鴎は、

「兄貴達二人のことなんだから。僕を当てにしないでくれよ。兄貴、考えてみてくれよ。姉さんがお金を受け取るとでも思うのかい。受け取るわけがないじゃないか」

と言った。趙耀根は、

「お前の金だと言えばいいさ」

と言った。江暁鴎は、

「誰の金でも、姉さんは受け取らないよ」

と言った。

趙耀根はうなじを垂れた。ほろ苦いコーヒーの香りが漂う中で、深い悲しみに沈んでいた。

(三)

気持ちが塞いでいたので、趙耀根は家に帰って食事をした。

父親が家に帰って来るのを見ると、嘉児は喜んで父親の肩にはい上がった。趙耀根の母親は、既にボタン穴を糸でかかる内職はしていなかった。彼女は悠々と藤蔓の椅子に座り、目を細くしてニコニコと息子と孫娘を見ながら一緒に遊んでいた。彼らは、とうの昔に狭い路地の古い家から出て、趙耀根が購入した二つの二ＤＫの住宅の壁をぶち抜いた家に住んでいた。家は大きくて広々しているように見え、母親はどうしても慣れない様子だった。

暫く娘と遊んだ後で、趙耀根は、

「彼らは？」

と母親に訊ねた。母親は、

「他に誰がいるというの？誰もいやしないさ。趙耀珍は張喜と恋愛中で、一日中家に帰ってこないし、趙耀虎は会社で食事をしているんだよ。悪友も沢山いるしね。お前の商売も忙しいし、それに唐さんのいいなりになって家を買ったそうじゃないか。お前達の誰がこの老いぼれ婆と一緒に住むって言うんだね」

と言った。嘉児は、

「お父さん、おばあちゃんはいつも隠れて泣いているよ」

と嘉児が言った。趙耀根は、

「お母さん、何もそうまで言わなくてもいいじゃないか。僕達兄弟は、お母さんに一生苦労させた。だからお母さんは、暫くのんびり幸せな生活を送るべきだよ。それに、唐さんに別の所で暮らしてもらっているのも、嘉児のためを思ってのことだよ」

と言った。母親は、

「そうだね。道理から言えばこの家は全てうまくいっているよ。でも私は何だか違うような気がするんだよ。私は一日中孤独だよ。一言二言しか話すことはないよ。朝、嘉児を幼稚園に送り届けると、嘉児が幼稚園が終わって家に帰るのが待ち遠しいよ。私は街に行ってアイスキャンディーを売っていた方がいいよ」

と言った。趙耀根は、

「お母さんは、アイスキャンディーなんか売っちゃだめだよ。僕がお金をあげるから、お母さんは町内会の文化施設で麻雀をやったらどうなんだい」

と言った。母親は、

「私は麻雀は嫌いだよ。私は賑やかに何かやっている方が好きだよ。私はただ愚痴を言ったまでさ。私はこんな贅沢な暮らしに飽きてしまったのさ。わたしゃ卑屈になっちまうよ」

と言った。趙耀根は、

「愚痴を言ったと思えばいいじゃないですか」
と言った。母親は、
「唐さんはいったいどうしたんだ。何の音沙汰もないね。私は唐さんが孫を連れて帰ってくるのを待ちわびているよ」
と言った。趙耀根は、
「こればっかりは僕の一存で決められないよ」
と言った。母親は、
「お前は堂々と唐さんに言っておやり。唐さんが身ごもっていなけりゃ、婚姻届を出さなきゃいいんだとね」
と言った。趙耀根は、
「彼女がたとえ僕のために子供を産んだとしても、僕は彼女に婚姻届を出させるとは限らないよ。僕には教訓があるんだ。結婚はむやみにするもんじゃないとね」
と言った。母親は、
「いい加減なことを言って。彼女が子供を産めば、お前は彼女をもらわなくちゃいけないよ。そうでなければ唐さんをペテンに掛けることになるよ」
と言った。趙耀根は、
「彼女を嫁にもらう以上、家にいてもらいお母さんと暮らしてもらうよ。いいだろう」
と言った。母親は、
「阿弥陀仏、阿弥陀仏」
と唱えた。そして、何度も手を左右に振って、
「あのたぐいの女は外に住まわせておくれ」
と言った。

(四)

唐燕影はいま間違いなく、趙耀根の悩みの種になっていた。彼は彼女から離れられないでいるし、時には彼女に極端に嫌悪感を抱いた。彼は今、自分の運命もコントロールすることもできたし、他人の運命もコントロールすることもできた。しかし、唐燕影をコントロールする術がなかった。唐燕影はいつも霧の中にいるようであった。捉え所がなく、彼女の本当の姿は、彼にはわからなかった。唐燕影は蛇女のようであり、毒薬でもあり、文字通り男を惑わす化け物だった。彼が彼女の美貌の虜になった時、自分が愚かなことをしていることに気づいたが、徐々に江暁歌と疎遠になっていった。そしてついに、曾て苦楽をともにした妻と離婚するという、これ以上ない愚かなことをしてしまった。

しかし人は、時には知らず知らずのうちに腐りきったものを追いかけているものであり、あの女によって意識を錯乱させられたのだ。

ある日寧岸は、街で趙耀根と一緒に歩いている唐燕影を見かけた。彼は思わず蔑んで笑った。

(なんだ趙耀根が夢中になっている女は、こんなケバケバしい女か)

彼は、趙耀根のような恩義を忘れた小人を相手にしたくなかったが、彼は急ぎ足で歩いてこの畜生カップルに追いつき、

「趙耀根」

と大声で叫んだ。趙耀根は、

「寧岸、本当に久しぶりだな」

と思いがけず大喜びして答えた。寧岸は、

「ボタンの花のように美しい女性は誰だい？なぜ僕に紹介してくれないんだい」

と嫌みたっぷりに言った。趙耀根は、

「ああ」

と気まずそうに答えた。趙耀根は、

「唐燕影さんだ。僕の会社の広報部の主任だ」

と言った。彼はちらりと寧岸の清貧さを見て取り、寧岸への同情心が湧き起こった。

「寧岸、僕達には誤解があると思うんだが」

寧岸は、

「何の誤解もないさ。全てははっきりわかっているんだ。僕達は全く違う人生を歩んでいるんだよ」

と自信たっぷりに言った。

趙耀根は決してやけにならなかった。人は金持ちになると寛容になれた。

「さあさあ、久しぶりなんだから一緒に飯でも食わないか？僕は君と話をしたいことがいっぱいあるんだ。どうだい？僕の顔を立ててくれよ」

寧岸は本能的に拒絶したかったが、趙耀根は、

「ご馳走したくてもなかなかできないが、今日は運がいい。思いがけず出会ったんだから断るなよ。食べに行こうよ。君に最高のホテルの食事をご馳走するよ」

と寧岸の腕をぐいと引っ張って笑って言った。

趙耀根は寧岸を連れてホテルの三十八階にある回転式のレストランに行った。豪華さの中に上品さを備えた欧風レストランに入ると、寧岸はまるで井の中の蛙のようだった。彼は初めて高層ビルから、彼が住んでいる大都市を見下ろした。ふと眺めてみると、街の夜景が繋がって見えて、大通りの車のライトは、天の川が流れているようで、その光景は壮観だった。彼は初めて高級ホテルに入った。真っ白なテーブルクロス、艶やかで美しい赤いバラ、揺らめく蝋燭の炎、きらきらと目映いばかりに輝く食器、それに高い帽子をかぶった外国人のコック、すべてのものが彼に目新しさを感じさせた。激しい怒りの炎が心の中から吹き出してきた。金持ちの家には酒や肉が腐るほど有り余っているのに、道には凍えて死んでいる人がいるかのように思えた。

彼は、今日は食べないと損だと思った。彼は、趙耀根の畜生を無一文にしたくなった。彼にこれ以上得意満面

で、街を闊歩するようなまねをさせたくなかった。

「何を食べたい？」

「勿論一番高いものさ」

寧岸は外国の小説に出てきた料理を思い出して、わかった振りを装って、

「フランスのエスカルゴ、ロシアのキャビア等、手当たり次第に注文するぞ」

と言った。趙耀根は、

「わかった、わかったよ。金を出せばいいんだから、注文したいものは全て注文しよう。今僕は何も困っていないよ。どうやって金を使ったらいいのかが悩みの種なんだ」

と言った。趙耀根は、

「寧岸、君は、今日僕がどんなに嬉しいかわからないだろう。いやなことは忘れてしまおう。僕達の友情を永遠のものにしよう。実を言うと、僕は今まで仕事をしてきて、世間が少しわかってきたんだ。商業界の容赦ない冷酷さは、僕達の真の友情を僕に懐かしく思い出させたんだ。僕は、君と最後に会ったときのあの後味の悪さを覚えているよ。僕は後悔しているんだ。僕は心から君に謝りたいよ」

とグラスを傾けて寧岸と乾杯して言った。

趙耀根が謝っている姿を見て、寧岸は気持ちが動いた。彼らはいずれにせよ、永年来の掛け替えのない友人だった。どんなに恨みは深くても、一言で今までのことを水に流すことができた。彼は趙耀根とグラスを挙げて、互いにグラスを合わせ弱々しい声で言った。

「僕は君のことを何とも思ってはいないよ。君は僕の兄貴だ。僕に無実の罪を着せて随分と罵ったけど、そんなことどうでもいいんだ。ただ一つだけ、許せないことがある。君は江暁歌に不誠実なことをすべきではなかったんだ。彼女と離婚すべきでなかったんだ。君は大きな過ちを犯していることをわかっているのか」

趙耀根は、テーブルの下の寧岸の足を踏みつけた。寧岸は、趙耀根が唐燕影が快く思っていないことを心配しているのがわかっていた。しかし寧岸は、

「江暁歌はこの世で最高に素晴らしい女さ。江暁歌と比べたら、女とは呼べない奴がいる。ゴミ屑のような女がね」

とわざと言った。

唐燕影は、寧岸が自分を罵っていると知りながら、顔色一つ変えないでいた。

「寧岸、僕の会社に来ないか。君に経理部門を担当してもらい、広告の企画をして広告文や草稿を書いてもらいたいんだ。それから、君に会社のイメージデザインを取り仕切ってもらいたいんだ」

寧岸は動じる様子もなく、

「やめておくよ。僕が大切にしているのは品性だ。生

活はもとより、清貧であるけど、飢え死にしても屈辱的な援助は受けないよ」

と彼の言葉を遮って言った。

また少し話がかみ合わなくなってきたが、趙耀根は寧岸のインテリ気質をわかっていたので、彼と言い争わなかった。

寧岸はナイフとフォークの使い方を知らなかったので、柔らかいビーフステーキを素手で掴んで、思い切って口に入れると、ステーキの油が口元からしたたり落ちた。

(五)

寧岸は、毎晩机に向かってものを書く習慣がある。

しかし今日は少しも進まなかった。自分の目で趙耀根の生活ぶりを目の当たりにして、寧岸の心は揺れ動いていた。昔で言うならば、これは堕落した生活ではないか。趙耀根は曾てみんなの心の英雄だった。寧岸も彼を心服していた。しかし今ではどうだろう。あのころのイメージは崩れ去ってしまった。

彼は生理現象の赴くままに金を稼ぐと、直ぐに酒色に溺れ、贅沢三昧の生活をし、道楽の限りを尽くした。世の移り変わりの激しい中で、彼の道徳心や良識は消えてなくなり、精神的な生活を追求することを放棄してしまった。そして、他人の清貧を嘲笑い、社会の腐敗や人民の苦しみに義憤や不満を抱いて、施しをしたいということが、ばかばかしく哀れに思えてきたんだ。

しかし、こんな彼を見て、寧岸も羨ましくないわけではなかった。趙耀根は最高級の車を乗り回し、美女に囲まれ、ブランドものの服を着こなし、贅沢なものを食べ、最高に優美で上品な環境の中で暮らしていた。彼を取り囲む人達は、少なくとも表面上はきちんとした身なりをして、上品で礼儀正しく、規律を守り、礼儀を重んじ、最高の上品さを持ち合わせていた。

寧岸は、服装や食事の贅沢さをさほど重視していなかった。しかし何処かで、文化や上品さに憧れていた。彼は知識分子ではあったが、文化水準の低い生活に甘んじなければならず、汚く崩れ果て辺り一面ゴミだらけの環境の中で、生きていかなければならなかった。また最も文化水準の低い人間達と付き合っていかなければならなかったので、これ以上我慢できなくなっていた。彼はどんなにか、趙耀根のように、自分の置かれている環境から抜け出したかっただろうか。彼はこの社会の不公平さを感じた。なぜ彼のような知識分子が困窮しなければならないのか？趙耀根のような犬畜生がなぜ贅沢な生活を享受できるのか？こんな風に考えると、不合理な社会や悪い習慣に憤りと憎しみを抱き、血も涙もない贅沢三昧している奴らのところに出掛けて、胸の内をぶちまけ、

ナイフを奴らの胸に突き刺したい思いだった。
呉文彗は、夫の傍らに座って小さなセーターを編んでいた。彼の子供がベッドですやすやと眠っている。寧岸は目の前の壁を見つめ、思索にふけっていた。部屋の中は静かで、呉文彗の編み物棒が腕に当たり、パキンと音を立てた。
寧岸は、
「今日は趙耀根に御馳走してもらったんだ。そして罵ってやったよ。それに彼の横に座っていた悪女を罵倒してやったんだ。暁歌のために思いっきり言ってやったんだ。とっても痛快だったよ」
と突然ハハハと笑って言った。呉文彗も、
「思いっきり罵ってやって良かったわね」
と笑いながら身振り手振りで答えた。
寧岸は、
「僕は彼を罵ってやったが、彼に早く目を醒まさせたかったんだ。彼は唐燕影が悪い女であることがわからないんだ。昔から淫売女は情がなくて、芸人は冷たいのさ。唐燕影っていう奴は、淫売女と芸人を併せ持っているんだ。こんな女は良心のかけらもないんだ。彼女にとって大切なのはお金や地位で、道楽をしたいだけなんだ。自分の都合でがらりと態度を変えるのさ。ここだけの話だけど、趙耀根は、将来彼女によってダメになると思うよ」
と呉文彗の体を撫でながら言った。
呉文彗は寧岸の話に何度も何度も頷いた。
寧岸は、
「僕はこのことを暁歌に知らせるべきかどうか迷っているんだ」
とため息をついて言った。呉文彗は、
「暁歌はきっととっくに知っているわよ」
と身振り手振りで言った。寧岸は、
「俺って馬鹿だなあ。そうだ。暁歌はとっくに気づいていたんだ。そうでなければ、彼女は彼と離婚するはずないよな」
と頭を叩いて言った。
二人は向かい合って暫く黙っていたが、
寧岸は、
「当時のことを思うと、僕達の仲間の中で、僕は一番頭も良くて最も見識があったんだ。他の仲間は労働者で、僕だけが知識分子だったんだ。耀根はあの頃、何でも僕に相談してくれたよ。十年一昔と言うけど、十年経てば物事は一変するよ。趙耀根は意外にも金持ちになったよ。彼は今日ホテルで食事をした時に、僕に経理部門を担当するように言ってくれたんだが、僕は断ったんだ。僕はどうして彼のために働かなくてはならないんだい？それは彼を持ち上げることになりやしないか？君はこんな僕を世間知らずの学究肌と思ってないよね」
とポツリと言った。

呉文彗は、微笑んで軽く頭を横に振った。
寧岸は、
「無能の読書人という諺がある。文彗、君は僕に嫁いで本当に失敗したと思うよ」
と言った。
呉文彗は頭を横に振った後頷いて、自分がこの結婚に決して失敗していない、幸せであるということを示した。
寧岸は、
「今日帰ってきて僕はずっと一つの問題を考えていたんだ。現代社会の一番の推進力は何かという問題だ。答えは沢山あるけど、それはこの一字につきると思うよ。『金』という言葉だ。趙耀根がおごり高ぶって傲慢なのは、いかがわしい金を持っているからさ。僕達は貧しすぎる。僕が今、唯一しなければならないことは、金を稼ぐことかもしれない。金があれば僕達は気持ちも晴れ晴れして、意気揚々としていられるし、人にも尊敬してもらえる。実際、僕の頭脳や文化水準は、趙耀根と比べても優れているんだ。彼が金持ちになることができたのは、僕に比べて度胸があったからさ。言うならば、度胸があれば僕だって金持ちになることができたんじゃないか？僕はどうしてこのことに気がつかなかったのだろうか。ほら、暁歌は捨て身になってタクシーに数日乗って、裕福になったって言うじゃないか」
と言った。
呉文彗は、飴の入った袋を破って彼の口に入れた。寧岸はそれをかみ砕いて取り出し、妻の口に入れてやった。
寧岸は、呉文彗の顔に両手を当てがって、
「僕は、僕達の子供のために、チョコレートを食べさせたいんだ。それに、君に唐燕影が着ていた服を着させたいよ。君のこの天性の美しさを無にしたくないんだ。約束するよ」
と言った。

（つづく）

透明な時間（十二）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】

東西銀行の赤坂支店にある金庫室で支店長が殺された。現場は三つの扉に五つの鍵がかけられた密室であった。竹森は支店長の死体と一緒に金庫室に閉じ込められていた。

事件後、竹森が支店長の葬式に行くと、義兄という元建設大臣が喪主の代わりを務めていた。

（キンタマ証券あたりから、いや肉食系・草食系銀行あたりから、ストーリーが壊れてきました。というよりも、ぼくの脳が壊れてきそうです。途中で平仮名比率低状態文章からかんじをすくなくするなど、ひっひっふっ～ふっ～言いながら必死で書いていますので。アタタタタタタタタタクミマモッテクダサイ。アレッ。コワレタ。）

十一

竹森は出勤する前にキオスクで、日本産業新聞を買った。独身寮でも同じ新聞をとっていたが、スクープがあったらしく、一面がちがっていた。

元建設大臣が逮捕されたという一面トップの記事が載っていた。竹森はテレビを見ないので、ニュースはほとんど新聞から情報だけである。

逮捕された元大臣とは、波戸田議員である。

竹森は新聞の顔写真を見て、支店長の葬式を思い出した。波戸田は支店長の夫人の兄であり、葬式で喪主の代わりを務めていた。

波戸田が東京都の地下鉄工事の入札で大手ゼネコンの談合をとりしきったというのが記事の内容であった。

元大臣としての地位を利用して、大手ゼネコンに前もって入札金額を決めさせていたという容疑である。

この談合が殺人事件や持井建設の融資とつながるような気が竹森はした。しかし、どのように結びつくか見当もつかなかった。

竹森が銀行に着くと、岩木から貸し出しの連絡票を渡された。

「また、霞ヶ関案件だ。いいかげんに適当に書いといて」

良い加減に適切に書かないといけない案件である。

岩木は官僚と政治家を担当している。赤坂という場所がらから、この二つがからんだ融資が多い。

高校を卒業してすぐ赤坂支店に入った岩木は、三十年以上ずっと官僚たちを担当している。

三年平均で転勤するという銀行業界のルールの中でもきわめて珍しい。

転勤の内示がでるたびに官僚たちから反対の圧力がかかって、取消になったのである。それだけに彼らからの信頼はあつい。

『副上級主任統括担当部長代理補佐代行心得』

これが岩木の肩書きである。偉いのかよく分からない。名刺でも肩書きが書ききれなくて二行になっている。

銀行が合併して、肩書きが増えた。部長と入っているだけでも、部付部長・上級部長・担当部長・主任部長・統括部長・副部長・部長代理・部長補佐・部長代行・部長心得・部長部長とある。最後のは部長が多くてそれだけを管理する部長部をつくったので、その長である。

竹森が本部に行ったとき、前の上司がいたので、部長と呼びかけた。その場にいた二十人くらいの全員が一斉にふりむいたので、不気味だった。

岩木は別の事情で肩書きがついている。

本人は昇進試験に落ち続けて、正規の役職につけない。試験の前日は毎年、忠誠心をためすために朝まで飲ませるという政治家がいたのである。

試験に通らなくても仕事はできるので、担当する別の政治家や官僚からもっと出世させるようにとの圧力があった。

はじめは『部長代理補佐代行』だったが、その後いろいろ事件があって、そのたびに何かつけ足した。

最後は官民接待の世間の非難があって、副とか心得をつけて、ごまかした。

本人に言わせると、トカゲのしっぽ切りにしやすい肩書きのようである。

もっとも官僚と接するのに都合のよい肩書きらしい。

本省の課長ともなると権限も強いので、銀行の課長の名刺ではつり合いがとれない。かといって部長の名刺をだすと不機嫌になる課長がいたのである。

『霞ヶ関案件』というのは、霞ヶ関つまり官僚が関係している融資のことを指している。官公庁が並ぶ霞ヶ関で呼ぶのは、世間と同じである。

官僚個人やその親族、官僚から紹介された企業が相手

である。他の銀行で断られるなど、ふつうは貸し出しできない条件の話が回ってくる。

官僚に恩を売っておけばメリットになることをオブラートにつつんだ表現で書いて、本部の承認をもらうのである。

今回は厚生労働省の課長からの紹介である。課長の妻の妹の夫の会社が製薬会社の株式を買う資金である。

「もう一つ、霞ヶ関があるんだ。いや。これは桜田門案件かな」

岩木が耳なれない言葉を使った。

「桜田門ってはじめてですが、警察官ですか」

霞ヶ関はよくあつかうが、桜田門ははじめてである。

「警察官といっても警察官僚だ。公務員試験に受かったキャリア様だ」

岩木の説明を聞いて、竹森は納得した。

無理を聞いてくれる貴重な存在として、岩木は有名になり、よく紹介されるのである。

「霞ヶ関は永田町より、ましなほうだ。政治屋はもっとどんでもないことを言ってくる」

『永田町案件』は国会議員が関係する融資である。永田町は議員会館があることから、一般とおなじよう国会議員をさす言葉として使っている。

「そういえば、永田町は最近でてこないですね」

永田町案件はこげつきも多い。紹介した議員も落選して地元に帰って、連絡も取れない。

「さすがにひどい申込は俺のほうで断っているから」

岩木は声を小さくして続けた。

「将軍がやった貸付けは、ほんとうは永田町案件だ。おれの情報では、つぶれた持井建設も波戸田の紹介だ」

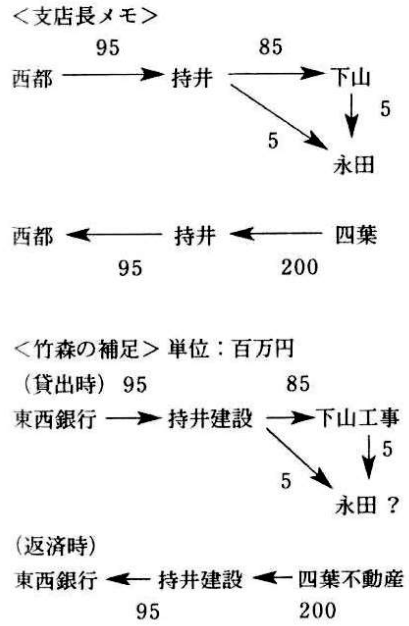
そういうと岩木は、後はまかせたと立ち去った。

竹森は、殺害現場に残された支店長のメモを思い出した。メモには持井建設と下山工事から合計一千万円が流れた先が不明である。

そのメモでは『永田』となっている。しかし、永田の名前のつく取引先は、持井も下山もなかった。

(永田とは永田町、つまり国会議員ではないか)

永田は企業名や人名などでなく、地名で永田町の可能性がある。



(将軍にとって、永田町と呼ぶ相手は、波戸田だけだったのだろう)

岩木とちがい、転勤してきた熊本支店長にとって永田町を指す人物は波戸田ひとりだけかもしれなかった。

(人前で議員の名前を出すわけいかないので、永田町や永田と呼びなれていたのでないか。メモでも永田としたのだ。相手企業も、将軍がそう言えば、波戸田のことと察する。しかし)

今回の談合での逮捕とあわせて、竹森は自分の推論を組み立ててみた。

(そもそも持井の案件は民間のプロジェクトであるから、公共事業の談合とは関係がない)

公共事業とちがって入札のない民間事業なので、たとえ議員が企業から金銭を受け取ったからといっても法律にはふれない。

企業献金という言葉が頭にうかんだ。しかし、企業献金が違法と限らない。そこまで考えて、竹森は波戸田が離党していることを思い出した。

政党で企業献金を受け取るのは合法であるが、個人で受け取った場合に違法になる。

波戸田は、かつて与党に属していたが、離党して、いまは無所属である。新党を立ち上げようとしたが、人望がないという噂どおり支持する議員が集まらなかった。

企業から一度、社長など個人を通して議員に献金していれば、法律にふれない。

献金する側は、その分まで個人の所得として課税されると困るから、そこまでの工作はできなかったのだろう。

竹森は議員の錬金術のしくみが見えてきた。

波戸田は元建設大臣の立場で多くの官民の大型工事をまとめていた。そして個々の業者には熊本支店長を通して融資も行っていた。

その見返りとして企業献金を受け取っていたのである。

企業は5%ほどの口利き料で工事を受注し、口利き料をふくめた融資をしてもらえる。

支店長のメモの資金の流れが完全に分かった。

東西銀行は持井建設に九千五百万円を貸し出した。ほんとうに必要なのは一千万円すくなく、その差額が波戸田に渡った。実際は持井と下山から五百万円ずつ渡したのであるが、下山の五百万円もつながっているだろう。

銀行の融資した金がめぐって支店長の身内に入っているなら、あきらかに情実融資という不正行為になる。

支店長の営業成績が良かったのは、波戸田の紹介もあったのだろう。他にも同じような仕組みで融資している先が出てくるかもしれない。

(しかし、メモの秘密がわかったとして、支店長殺しと、どのようにつながるのだろうか)

謎の核心のところが解明していない。メモは内容よりも竹森の指紋がついていることの方が重要なのである

風船恐怖症

宅見勝弘

『鉄のペリカン』という私小説というかドキュメンタリーを書いた。

下手なりにも、リアリティを徹底的に追及した悲劇になったつもりである。

99・9999999999999999%

実話の悲劇である。

悲劇ということで、素晴らしい名言を思い出した。

「人生はクローズアップでみると悲劇であるが、ロングショットでみると喜劇である」

これはチャップリンの言葉である。

「悲劇とは、悲しい劇である」

これは非常に高名な国語学者の言葉である。

「悲劇とは、不幸や悲惨な出来事を題材とし、人間や人生を悲壮さ・崇高さの面からとらえ、受難とそれへの闘いの過程を厳粛に表現した劇。主人公の破滅で終わるのが普通」

これは大辞林の言葉である。気合の入った辞書だなあ。

ところが、悲劇はこれだけに留まらない。ドミノ倒しのように悲劇には悲劇が連鎖する。

鉄のペリカン事件は、ぼくに心的外傷（トラウマ）を与えた。鉄のペリカンが悪夢として現れるのである。

こんな夢を見た。

夢の中で、遠くに鉄のペリカンが寝転がっている。

客観的には直腸鏡という医療器具が置いているだけである。

その直腸鏡が先っぽを下にして、すくっと立ち上がった。バレリーナのように爪先立ちになって横向きにスキップして、しばらく踊っている。

つぎに尺取虫のようになって、ぼくに向かってやってきた。だんだんとスピードアップしてくる。

鉄のペリカンが急に立ち止まった。まるで大砲が標的

を狙うように、先端が下を向いていた状態から水平になった。

ロケットのように後ろから火を吹いた。ぼくに向かって襲ってくるのである。

それまで呆然と見ていたぼくは、あわてて駆け出した。ぼくのお尻を目がけて、猛スピードで追ってくる。

もう少しで命中しそうになる。ぼくは一塁ベースを回るように急に直角に曲がった。

鉄のペリカンは間一髪でぼくのお尻をかすめて、通過していった。ペリカンはUターンして、再びお尻をめがけて襲ってくる。

ぼくは右往左往しながら、くねくねと蛇行して逃げた。しかし、追撃ミサイルのように、くっついてくる。

力つきたぼくのお尻の穴につきささった。そして、大爆発して、ぼくは木端微塵になるのである。

なんとも恐ろしい悪夢である。直腸鏡が火を吹いて襲ってくるという、ホラー映画でもこんな恐ろしい設定はないだろう。

こんな夢を見た。第二夜。

ぼくのお尻にペリカンが突き刺さるまで、前の夢と同じである。今度は爆発しない。

そのまま、ぼく自身がロケットになったようにお尻から火をふいて猛スピードで飛ぶのである。

ペリカンの火が熱いので、がに股である。

あまりのスピードで着ている服が風圧ではがれていった。シャツからズボンからパンツまではがれていき、ついには全裸になる。

全裸のぼくはお尻から火をふきながら、町内を疾走した。人通りの多いところで、知り合いに指を差されながら、ぼくは全裸で飛び続けるのである。

全裸でいるので、パトカーが追ってきて捕まえようとするが、追いつけない。

全国ネットのテレビで放映され、有名人になる。

そのまま日本全国を飛び回り、日本を出て、世界中を飛びつづけた。

赤道直下や北極・南極・エベレストまで飛んでいく。

最後には大気圏を突破して、お星さまになるのである。

こんな夢を見た。第三夜。

こんどの直腸鏡にはくちばしの根元にペリカンの生々しい足がついている。鉄のくちばしに生の鳥の足がついているのは、グロテスクである。

ぼくは金しばりにあって動けないでいる。鉄のペリカンはゆっくりとゆっくりと忍び足で、ぼくに近づいてきた。やがて、ぼくの横までくると、ほっぺたをツンツンとつつく。

生足のある直腸鏡が、ぼくの首すじをつついて、腋の

下に移動した。ぼくの乳首をつまむのである。夢の中で、ぼくはよがった。

さらに直腸鏡はつつきながら、ペリカンの足を使ってペタペタと下半身に移動する。

へその下まで来て、両足の間に降りると、ぼくの○○をつついた。たまたま触れたなのでなく、ねらっていたのである。

左の○○と右の○○を交互につついてきた。イタきもちよい、なんか不思議な感覚である。

○○に生えた毛をプッチとペリカンが引き抜いた。

ぼくの△□□□をパックとペリカンがくわえた。快感でぼくの△□□□はボッキと××くなった。

くちばしの中から舌がでて、ぼくの△□□□と○○の裏——をベローッと※※※する。

最後には、ぼくの＊＊＊＊にもぐり込んだ。＊＊＊＊は★★★★★だったのが、☆☆☆☆☆☆になるのである。

とても気持ちのよ…いやいや、恐ろしい悪夢である。

第四夜。

洋式トイレでしゃがみこんでいる。すごい便秘で●●●がつまっている。のど元まで●●●が逆流しているようである。

りきんでようやく、お尻から●●●がでてきたと思ったら、●●●でなく、鉄のペリカンが逆向きで出てきた。

鉄のペリカンは便器に収まらず、破壊しながらどんどんとふくらんでいった。ぼくはトイレの天井をつきやぶって、どんどんと上昇していった。

ぼくのお尻からは鉄のペリカンが、果てしなく逆向きで吐き出された。同時に末広がりに大きく山のようになる。ついに富士山を超え、日本一高い山になった。

その鉄のペリカンの山がしゃっくりのように噴火して、ぼくは彼方へと飛ばされ、太平洋の藻くずとなった。

こんな夢を見た。第五夜

ぼくは、閉じ込められていた。銀色のテントのようである。叩くとコンコンと金属の音がする。

テントと思ったのは、鉄のペリカンであった。巨大な直腸鏡の裏がわに閉じ込められているのである。

ふと足元をみると、タケノコらしいものが生えだした。

タケノコと思ったのは、鉄のペリカンであった。

上をみるとテントがどんどんと小さくなる。下をみるとタケノコはどんどんと大きくなる。タケノコは、ぼくのお尻の穴にもぐりこんで、さらに大きくなった。

テントとタケノコの二つの直腸鏡と間にはさまれて、ぼくは直腸鏡の形に均等な厚さで伸び広がった。

ひっくり返されたあと、とぐろを巻くようにソフトクリームが入れられた。

そのまま女の子にむしゃむしゃと食べられた。

第六夜。

ある朝、ぼくは目ざめたとき、自分がベッドの上で一つの巨大な直腸鏡に変ってしまっているのに気づいた。

ぼくは固い背中を下にして横たわり、頭を少し上げると、固く盛り上がっている自分の鉄色の腹が見えた。

その後、仕事に行かなきゃとYシャツを着ようと悪戦苦闘したり、妹が見つけてギャーっと言ったり、家族会議が開かれたり、いろいろ展開するのであるが、それは省略する。

突然、まるで万華鏡の中にいるように場面が切り替わった。抽象画の模様のようなものの中に突っ込んで進んでいる。

食用菊にアイロンをかけてペッタンコにして、ピンク色の絵の具でぬったような模様である。

どうやらぼく自身のお尻の穴のようである。

ぼくのお尻の穴につっこんでいく、ぼくがいる。この不思議な体験を『変身』という題名で小説を書いた。

この小説でカフカ賞をもらった。授賞式で、ぼくはメダルをかけてもらうのであるが、するーーと足もとまですべり落ちるのである。

何度かけてもらっても、直腸鏡にはひっかかりがないので、すべり落ちる。そのうちに主催者が怒って、受賞取り消しになるのである。

第七夜。

コンビニ前の自動販売機でジュースを買ったら、鉄のペリカンが出てきた。驚いてサンプルを見なおすと、全部が鉄のペリカンに変わっている。

コンビニの中をのぞくと、商品はすべて直腸鏡となっていた。制服をきた直腸鏡が店員である。

驚いていると、すべての鉄のペリカンがぞろぞろと動き出して、ぼくに向かってきた。

ぼくはあわてて駆け出した。こんどは飛んでこないので、なんとか振り切った。

油断していると、手の中の鉄のペリカンが、ジャンプして、ぼくの首筋からシャツの中にすべりこんだ。

そのままお尻の穴にもぐりこんで、爆発した。

第八夜。

鉄のペリカンがお尻の穴にすっぽりと完全にもぐりこんだ。大腸を通り、小腸を伝い、胃を超えて、ついには先端がぼくの口から飛びだす。

ペリカンは体全体でVサインをした。先っぽから舌を出し、ぼくの目の前でニターッと笑うのである。

その後から二匹目の鉄のペリカンがお尻から突っ込んで口から出る。さらに三匹目、四匹目と永遠に続くのである。

第九夜。

シャワーを浴びていたら、シャワーの小さい穴から水のかわりに針のような小さい鉄のペリカンが出てきた。小さな大量の直腸鏡は、蟻の行列のように、ぼくのお尻の穴に入っていくのである。

今度は口や鼻や耳から、ぞろぞろと直腸鏡が出てきた。そのうち全身の毛穴からも出てくる。また、えんえんとお尻の穴に入っていくのである。

第十夜。

鉄のペリカンがお尻に突き刺さっている。突き刺さったまま、どんどんとペリカンが巨大化していく。

10センチ…20センチ…50センチとお尻の穴が広がる。びよよよ～～～～んとゴムのように1メートル…2メートルと広がっていく。

人間とちくわは同じ構造であると何かの本で読んだことがある。人間は、消化器官がいかに長くても一本の管に肉がついただけの構造である。

口を閉じて、お尻にペリカンがつきささっていれば、ゴム風船と同じ構造である。

まるで自分が頭と手足を付けたゴム風船になったようである。お尻の穴がゴム風船の口である。

鉄のペリカンが巨大化して、ついには開いたお尻の穴が、どんどんと裏がえってしまう。

お尻の穴はゴム風船が裏がえるようにお尻そのものを飲み込むのである。ピンク色の直腸の内壁を外側にだしながら、両足のひざまで飲み込んだ。

あわてて洋式便器に便座を降ろさず座り込んで抜けなくなって両手両足でもがいたときのようである。

お尻の穴がどんどんと上に進んで、ついには顔のところまできた。

そして、頭をおおい、突き上げていた手足も完全に包み込んでしまうのである。

完全に風船が裏がえしになった状態である。焼肉を焼く前のミノとロースでできた袋に入ったようである。

自分のお尻の穴で窒息するという、恐ろしい話はないだろう。

この悪夢のせいで、ゴム風船を見ただけで、パブロフの犬のように息苦しくなってしまうようになった。風船恐怖症である。

鉄のペリカンの陰謀で、ついに何のへんてつもないゴム風船までも怖く感じるようになったのである。

精神分析のフロイドの症例で、『ねずみ男』がある。ねずみが自分のお尻の穴にもぐりこむのでないかと異常に恐れる男性患者である。

フロイドに診断されたら、ぼくは『ペリカン男』とか『風船男』と名づけられて、精神医学史の一ページにきざみこまれたであろう。歴史に残らず、残念である。

かずをさ

中山喬央（たかひろ）

ふと目が覚めた。急に煙が窓から入ってきてけむたくなったからである。しかしその煙の匂いは香りといってもよいほど私には心地良く感じられた。幼い時から、その匂いが好きだったからである。

汽車は関ヶ原のトンネルに入ったようだと思いながら、急いで窓を降ろす。あちこちから同じ様に窓を降ろす音が聞こえてくる。夜行列車だから、トンネルに入る前の合図の警笛を聞き漏らした人が大勢いたようだ。

そんなことを思いながら、何時しか、目の前に座っている「かずをさ」との出会いが、もう十年以上前になることを、夢うつつのなかで思い出していた。

時は昭和二十一年、中学に入ったばかりの頃である。それまで母の遠縁にあたる親戚が経営していたH市南部のパン工場跡の事務所に居候していた我家六人は、工場再開準備の為、立ち退くこととなり、今度は、その親戚が保有していたS町の土地に2600円のバラックを建てて引越しして来たのである。そこはH市中央警察署前の、鴨江観音に通じる大通りから眞南に入る道が、十字路を過ぎて最初の右折する裏通りがある、その角にあった。

いっぽう「かずをさ」の家は、もう一つ奥の、ちょうど、その道がT字型にぶつかったところを左に入って、ちょっといったところの右側にあったから、双方の中間地点にあたる遊び場となっていた空地で出会うまでには時間がかからなかった。

草野球の全盛時代だったから、布のボールとバットの代用になる棒切れを使って、投げたり打ったりして暗くなるまでお腹の空くことも忘れて、勿論勉強のことなどすっかり忘れてしまって遊びまわっていたのである。

ここで2600円バラックについて思い出すままに記す。

H市は現在も航空自衛隊の基地を二つを持つ軍事都市で、戦争当時重爆撃機用の飛行場があり、相模湾・九十九里浜と共に昭和二十一年四月一日の米軍上陸予定地点だったから、徹底的に叩かれ、全市焼野原となった。そのため焼け出された市民は、いたるところに焼けトタンで作ったバラックを建てて急場をしのいでいたのであるが、いくらなんでもそれではひどすぎるという事になり、終戦後八畳一間とトイレと土間だけの1000円バラックと、六畳・三畳の二間に玄関と台所兼用の土間があり、トイレは濡れ縁の先に大小両方、水道は屋外という2600円バラックを、市が規格品として販売したのである。勿論畳などはなく、当時としては、やや良質のゴザが居間に敷かれていた。

本当にあの頃は何もなかった。貧乏人の子沢山という諺があるが、あるのは子供だけ我家は間もなく五人の子供と両親という七人家族になり、長兄の大学受験勉強は、三畳の部屋で行なわれた。勿論図書館・塾などは蔭も形もなかった、あるのは勉強しようという本人の意思だけだったのである。

これを書いていたら通学していた中学校の学校祭で先輩が歌った歌詞を思い出した。

一中の窓は空気窓、ガラスの窓ではないわいな
それが何より証拠には石を投げても割れません

これを川田晴久の歌の替え歌で歌い大喝采を博したのである。また一つ思い出した。

一中のセンセは金持だ、生活難ではないわいな
それが何より証拠にはヒカリ・ピースを吸っている

その歌につられていろんな事を思い出す。

作文「長靴」が先生から披露された。この文章を書けるぐらいの才能が、ほんのちょっぴりでも自分に備わっていれば、今でも苦労しなくてもすむのに、と思えるような群を抜いた内容であった。作者は多分K君だと思うが確かではない。今度同窓会で会う機会でもあったら本人に聞いてみたい。その要旨は、彼が長靴を買ってもらった感想いや感激ともいえるものである。それを自慢したくて早く雨が降って欲しいという心情が余す所無く描かれていて、こちらはただただ感心するばかりであった。勿論我家の家庭事情では長靴など夢のまた夢で、中学高校の六年間、帽子は一つ、学生服も一着、履物は足の何倍かの大きさのあるホウバ、これで片道2000m位の通学をしていたのである。帰路はたまにはバスを利用したこともあったが。卒業アルバムの写真は、撮影現場に行ったら、同級生が学生服を貸してくれてそれで撮ったものである。しかしそういう事情はかなりの生徒に共通しており、現にそのままの格好で、銀行の就職試験にいって支店長と面接し採用してもらえたのだから、なんということはなかった。そして卒業式が終った翌日から日給二八〇円の見習い行員として勤務をはじめ、いただいた最初の給料で学生服と靴を購入し、銀行の窓口に立てるようになったのである。

最近同期会があったが、N君が八人兄弟で、どうして僻地から交通費をかけて親が全員を中学・高校へと進学させることができたのか、不思議だといって語りかけてきた。私も全く同感で、五人もの子供を長男は大学、次男の私からは高校を卒業させてくれたのか、また特にひもじい思いをさせずに育て上げてくれたのか全くわからない、と答えた。

話を戻す。私より二つか三つは年下だった「かずをさ」はスポーツマンとして逞しく成長し、遊び場はより広い場所を求めて転々と変る。

やがて球技ではとても太刀打できなくなり、最後に一緒にした運動は長距離走だった。

今は交通渋滞の激しいH市中心街も、当時早朝はがらがらで、走る絶好のトラックだった。中央警察署の前の通りから伝馬町の交差点を経て駅前広場を左折し、板屋町の交差点から戻ってくるという行程である。直線距離に直せば3000メーター位になるのであろうか。これには「かずをさ」だけではなく、兄と、長男が兄と同年輩、次男が私と同期生、この昭ちゃんとは今でも賀状の交換をしているが、その下の三男も遊び仲間の洋服屋をしていた大場さん三兄弟、この三兄弟も何れもスポーツマンだったが、も参加して結構良い運動になった。

大体は大場さんの長男がトップをとったが、ある日、兄が猛然とラストスパートをし、二位以下を遥かに引き離して一番になったことがあって、そのラストスパートの凄さにびっくりした。ちなみに兄は大学で、食糧難の時代であるにもかかわらずラグビーをやったようである。これは卒業後、兄のところに来た後輩からの手紙により私の知る所となった。

しかしこの兄のラストスパートは私にも良い刺激となり、ある時、体調が良く、遂に並居る強豪を退けてトップの座を奪うことができた。その後で、こんどは「かずをさ」が頑張って彼もトップをとったのである。

まどろむうちに河瀬・稲枝という駅名が走馬灯のように浮んでは消えていく。

この駅名を何故ここで思い出したかというと、幼時から時間表を見るのが好きで、小学校五年から歴史と地理の授業が始まり、先ず124代続いている天皇の名前を暗

唱できるようにならなければならないのに、それより先に東海道本線の駅名を東京から神戸まで覚えてしまったのである。

そのなかで一番最後に覚えたのが、この二つの駅名で、その次に大変だったのが、大垣と米原の間の、垂井・関ヶ原・柏原・近江長岡・醒が井だった。

この醒が井には両親にも内緒の、兄と二人だけの秘密がある。

時は昭和十八年、戦争も漸く厳しさが感じられるようになった頃、膳所中学在学中の兄が、醒が井の養鱒場を見学しに行くというので、私もせがんでついていったのである。

しかしすでに交通事情は劣悪で、折り悪しく醒が井駅を下車した直後の養鱒場行きのバスは目の前で満員となり発車してしまった。次のバスがくるのは五時間後の午後三時だというのに、二人とも帰りの事など思いつかず、駅の待合室でそのバスを待つ事にしたのである。先ずお袋が用意してくれた弁当を食べ、次に二人がした事は、駅の引込み線の配置図とか、周辺の鉱山の等高線等を描いて楽しんでいたのである。

これが不審者を見張っていた私服警察官の目にとまり、スパイ容疑で醒が井警察署に連行されることになったのである。

幸いにも父の職業は県の職員、兄の地理の成績は秀ということで、容疑は晴れた様子で釈放されたのであるが、養鱒場の見学は中止し、ほうほうのていで、大津の家に帰って来た。翌日の夕方、兄からこっそりと学校でなにかなかったかと聞かれ、全く変化が起こらなかった旨伝えて一件は落着した。今でも在来線で醒が井駅を通るとこの事を思い出す。

列車はやがて県庁所在地の大津についた。

九州の大分から大津にきたのは小学校三年生の二学期だった。気候が変った為であろうか、間もなく風邪が抜けきらないような、おかしな咳をするようになった。痰もでるがこれが鳥もちのようにねばっこく、くっついてはなれないものだった。しかし町医者の診断は普通の風邪だろうということで薬をもらって飲んでいた。

ある晩苦しくて目が覚めた。痰が喉にからんで呼吸困難に陥ったのである。その苦しみ様の激しさに父も驚いて、翌日日赤病院に連れていってくれた。医者の診断は「擬似ジフテリア」で、即入院ということになった。これで小学一年生から続いてきた皆勤賞とはおさらばする事となったのである。しかし本当にひどかったのは入院したその夜だけで、あとは別に熱もなく、何もせずベッドに横たわっている状態だった。しかし入院したのは二十四時間付添婦がいる個室で、病状は軽くないことが察

せられた。

そのうちに面白いことに気が付いた。毎日窓から見える景色は同じで、そのうちかなりの部分が屋根瓦だったが、その瓦一枚一枚にそれまで会った事のある主に友達だったと思うが、その友人の面影が浮ぶようになった。そうすると思いは様々に展開して空想の世界に入り、退屈感が一掃されたのである。

このおかげか入院一ヶ月、退院してから十五日位たってから、登校したところ、皆が寄ってきてクラスの人気者になった。この小学校はなんと級長・副級長はクラス全員の投票で決めることになっていたが、四年生の一学期、転校してきて間もなく入院してしまった私を級長に選んだのである。副級長はIさんという女医さんのお嬢さんだった。

また下校後、近所に遊びに行くと、ここでも通学している小学校は違うのに、大歓迎され遊びのリーダーとなった。後にも先にもこのような経験はない。

おそらく死ぬと思っていた仲間の生還を祝う思い遣り精神が、皆の間に広がっていた為ではないかと思う。

この後間もなく父は綿スフ統制協会高岡出張所の所長として栄転するのであるが、その時父は、私の体のことを考え、大津の天候ですら大病を患ったのだから、とても北陸の不順な冬の気候には耐えられないだろうという

ことで、単身赴任をしてくれたのである。

やがて汽車は京都に着いた。

ここでは二つ行きたい場所があった。一つは勤務先銀行の京都支店を見ること、今一つは最近H支店に転勤してきたMさんが勤めていた七条通にある店に行くことだった。

京都支店を見たあと、七条通に面した店に行った。Mさんが転勤してきたH支店の者だといったら、凄く喜んで休日にもかかわらず直ぐに店内に入れてくれた。これから皆でハイキングに行くところだった大勢の行員仲間とも談笑することができた。このことからもMさんが、この人達からいかに愛され信頼されていたのかを良く知ることが出来た。食堂を紹介してもらい、やがて店をでた。紹介されたうどん屋の食事は安くてボリュウムたっぷり、夜行列車の疲れを一挙にふっとばすものだった。「かずをさ」も、とても美味しそうにあっという間に平らげていた。

その後大阪にいき、大阪支店をみたあとで、天王寺から阪和線・紀勢線と乗り継ぎ、最初の宿泊予定地、白浜に向かった。

白浜駅についたら、今度は「かずをさ」の出番だった。彼は国鉄職員になっていたのである。

駅で身分証を見せ、今夜の宿の紹介を頼んだら、直ぐ

に見つけてくれた。

折悪しく宿泊客で満員の状態だったので、旅館で通されたのは、階段下の部屋だったが、女中さんの応対は親切で、温泉と料理が楽しめ、気分の良い一夜を過ごす事ができた。

翌朝白浜湾を「かずをさ」と一緒に散歩していたら、同じ温泉地である別府湾の、ある風景が思い出された。

それは昭和十七年春の出来事であった。

蘇ったのは別府湾を埋め尽くす連合艦隊の雄姿である。真珠湾攻撃から帰り、ミッドウエー作戦前の連合艦隊絶頂期のものである。

一緒にいた父からは、お前は絵が好きだけれど、あの姿を描いてはいかんと注意された。防諜関係の厳しさを知っていた父ならではの助言だった。にもかかわらず迂闊にも醒が井事件を起してしまったのである。

父は当時大分県庁に勤めていたが、春の西国の日はながく、県庁の退庁時に電車の駅で待ち合わせをし、別府温泉に入浴してから帰宅して夕飯をとるのが日課となっていたのである。

思えばあの当時が一番父も心安らかな時代ではなかっただろうか。

父に連れられて宇佐神宮に参詣したこともある。それはそのまま作文として提出した。最近七十年振りに宇佐神宮にお参りをしたが、今度は大元山（おおもとやま）の奥宮（おくみや）まで訪問し、その奥宮の様子が男鹿半島にあった赤神神社・五社堂と似ているのに今は興味を持っている。

ここ大分の出来事では、昭和十六年十二月八日早朝の館野守男アナウサーの放送が未だに耳の奥にこびりついているし、昭和十七年四月十八日のアメリカ爆撃機空襲の日に大分川河口で塩干狩をしていたら、対岸の三角州にある海軍航空隊の飛行場から戦闘機が舞い上がって異様な雰囲気だったのを覚えている。

私事では二年生の夏休みは扁桃腺手術で棒にふったが、これで蓄膿症とはおさらばできた。三年生の夏休みは、朝から晩までパンツいっちょうで、主に大分川で遊びまわっていた。御蔭様でこの時浮き身を覚えることができた。しかし息継ぎを覚えたのは中学校に入学した年の秋、ロサンゼルス自由形100m、58.2秒で優勝した宮崎先輩を記念して作られた50mプールで泳いでいる最中であった。

その結果人並みに出来るスポーツとして長距離走に加えて水泳が入り、飛込みをした潜水で25m泳げるようになった。身長は高校二年の夏休が終った頃、10cm位伸びていて、体育の時間に先生が気がつき、それまでずっと身長に合わせて三段階に分かれていた最下位が定位置だったのに、中位を通り越していっきょに最上位に整列する場所を変えられ、皆を驚かせた。

その晩は勝浦に泊った。また「かずをさ」の出番である。今度は立派な部屋に通された。温泉も対岸にある忘帰洞にまで入りにいった。

申し分のない待遇で、こういう世界もあるのだということが実感できた。

翌日は紀勢線で熊野川をわたり、文字通り鬼が出てきそうな奇岩が林立する九鬼を通り、相可口（おうかくち）—現在の駅名は多気）から参宮線で内宮・外宮に参拝し、今度は近鉄線で名古屋に出ることにした。その途中四日市の駅で停まっている時、地獄の光景を思い出した。

忘れもしない昭和二十年六月十八日の米軍機、浜松・四日市大空襲である。

すでに三月十日の東京大空襲以後、大阪・名古屋・神戸・北九州等の大都市が連夜米軍の大空襲を受け、全市焼野が原の状態になっていたが、中小都市で最初のターゲットになったのが浜松と四日市だったのである。

その夜、突然隣家の先に50kの焼夷爆弾が落ちた。この爆弾は一瞬にして周囲を焼き尽くす性能をもっており、濡れたゴザとか砂などをかけても簡単に消えるものではなかった。どうも雰囲気が普通の空襲ではないようだということで、父は一人残って家族全員を近くの空地に防空団がつくった大型防空壕にとりあえず避難させた。しかし状況は悪化する一方だと判断した父は、間もなく家族全員に母の姉が嫁いでいる東方農村地帯にある蒲までの避難を命じた。

その時すでに6kの小型焼夷弾が雨のように降り注ぎつつあった。防空頭巾を被っているが、直撃を受けたらそれまでである。学用品をランドセルに入れ、手には着替えの衣類を詰めた鞄を持って、六間道路を東に一目散に駆け抜け、馬込川を渡って安全地帯である農村地帯に入った。

一息ついて後ろを振り返った時見た光景は、今思い出してもぞっとする。頭上に次から次へと飛来するB29の編隊、飛行士の顔まで見えるかと思えるような低空飛行である。対空砲火はなく、邀撃する戦闘機は一機もいなかった。B29からは時々地上に向け機銃掃射をしている。曳光弾が入っているから、それがとても良く見える。焼夷爆弾は赤い点のまま落下し、落ちるとすぐ爆発するので、その様子が遠くからでも良く見える。普通の焼夷弾は落下途中でばらばらになる様子が手にとるように見え、落下しても直ぐには変化が起こらないが、やがてそのあたりが赤く変りはじめる。西の方見渡す限り南から北まで、浜松全市約二万戸位であろうか、それが一気に焼き尽くされて行く光景であった。

無事、避難先の蒲まで全員到着し、防空壕に入って一夜を過ごし、朝ご飯をいただいて直ちに市内に戻った。

道路には火傷を負って亡くなる寸前の方が水を求めていた。家は全焼していた。父は北の方に逃げ無事だった。六間道路の北側にあった専売局の倉庫で用紙が燃え上がり、中心部の人達が安全な周辺地帯に逃げられなくなった事を後で知る。新町の商店街では店を継ぐ後継者がいなくなり、生き残った者同士で養子縁組し、店を継続させたと聞いた。

一夜の焼死者は二千人を超える大惨事となったが、空襲直後の市内を何回か歩いたので小学校のグランドに焼ぼっくいのように並べられた焼死体の列、なかには胸に赤子をかかえ、その胸だけが白い母親の遺体、焼け落ちた防空壕の中から掘り出される死体などの発掘場面にはしばしば遭遇した。

この後、一ヶ月程、天竜川河口に近い母の実家に一家は居候する。そしてそこで二三日後に豊橋と静岡がやられたのを見る。

それは夜空を焦がす赤色で良く分った。西の方40K離れた豊橋は赤い帯である。振り返って東をみれば80K離れた静岡の方向もほんのり夜空全体が赤く浮かび上がっていた。

思い出は転々とする。

それは昭和十五年一月十五日の事だった。当時静岡の西草深(にしくさぶか)に住んでいた。北西の風が強く吹いていた日である。昼前になにか家畜の焼け死ぬような、とてもいやな匂いのする風が吹き抜けていった。

やがて母に連れられ長谷市場まで買出しのお供をした。家の前の濠端の道に出たところ、はるか西の方に煙が見え火災が発生していることが分った。しかしたいした事はないとそのまま買出しをすませ、帰宅した際西の方を見たら、今度は煙の色が黒煙に変っており、不吉な予感がした。

それが戦災を除くと我国第二位の大火となった静岡大火の発生状況である。ちなみに一位は函館で焼失戸数は一万戸である。静岡は五千五百戸であった。どうしてこんな大火になったかというと、飛火である。昭和十五年当時は県庁所在地の静岡でさえ市の中心部に藁屋根の住いが残存し、折からの北西風にのって飛来した火の粉により、市内各所で一斉に火の手があがり、静岡全県下から駆けつけた消防車も成すすべもなく、風下の各地に分散して火災の類焼を防ぐのが精一杯となったのである。

今でも静岡の同年齢の人と話す時、この大火を経験したというと、それだけで話が通じる。

その晩は風向きが変ったら即風上に逃げろという指示をして父は静岡県庁に戻っていった。

幸いにも風の方向は変ることなく、中心街全域を焼き尽して翌朝鎮火した。

この後間もなく城内小学校に入学して小学生としてのスタートを切った。

現在の私からは想像も出来ないが、一番得意な科目は図画だったのである。その原因は、静岡に来てから、していたことは朝から晩まで戦争の絵を描く事だったからである。

しかし小学校に入ると、三年年長の兄が持っていた地理附図に関心が移る。今度は朝から晩まで一心不乱になって地図の模写をはじめた。やがてそれは地名・河川・山脈・湖沼・都市・人口・産物・気温等に、どんどん興味がひろがっていくようになった。

それも度が過ぎればなんとやらで、小学校五年になって地理の授業が始まった時、日本の人口はという試験問題に一億五百十五万人と書いて×をもらうこととなる。それは昭和十五年現在の人口で、昭和十九年には、既に違っていたからである。

その後父は静岡から大分に転勤するのであるが、この時、東海道・山陽と乗り継いで下関で一泊した。同一の列車に二十三時間四十分乗り続けたのである。しかし沿線の風景の移り変わりを見るのが大好きな私にとっては楽しい思い出である。また近所の方が差し入れて呉れた、明治キャラメルが食べ放題だった事も、この楽しさを倍化させてくれた。甘いものが大好きだった私は、乳菌が生えると直ぐ、虫菌になったと言われている。しかし幸いな事に、永久菌に生え変わる時は、甘いものが、全て姿を消し、おやつは小魚の干物とか、昆布の酢のもの、ニッキの根位しかなかったから、丈夫な菌となり、喜寿を過ぎた今でも、全部自分の菌で食事を楽しむことが出来る。ただ菌茎がだんだん小さくなり余分になった菌を抜き取ることはあるが、それは加齢現象の現われとして甘受している。

何時の間にか電車は四日市を発車し長良・揖斐両川河口の大鉄橋を渡り長島に入る。

ここでは遠くから盆踊りのお囃子が聞えてきた。

ここでまた次男坊で甘えん坊だった、そんな私を「かずをさ」をはじめとする、S町の方々が暖かく迎え入れてくれた「浜松祭り」の夜の部が思い出された。

S町の御殿屋台の前で、若衆として借りた「S組」と印の入った揃いの法被を身にまとい、地下足袋をはいて、これも「S組」とマークの入った円筒形の提灯を振りかざしながら練り廻る集団に参加させてもらえたのである。私の一番の狙いは、毎晩参加者に配られるお菓子だったが。これについても近くのSクリーニング店の主人

がとても親切にして下さった。今でも夜の御殿廻しの突撃ラッパの音を聞くと胸が躍る。

やがて電車は木曽川河口の鉄橋をわたり、名古屋駅の地下に入った。

後は国鉄に乗り換え深夜、浜松に着いて自宅近くで「かずをさ」と分かれた。

それから五十有余年が経過した。「かずをさ」と会うことは其の後なかった。彼の勤務先は二俣駅だったからである。

この旅行を振り返って今感じることは、この旅行が少年時代を共に過ごした二人にとって、青年時代へ飛び立って行く、ちょうど飛行機が飛び立つ滑走路のような役割を果たしたのではなかろうか、そして私にとってそうだったように「かずをさ」にとっても若しそうであったならば最高だという思いである。

昨年七月同窓会に参加すべく旅籠町の交差点から青葉幼稚園の左の道を登りながら、ちょっと歩くコースを変えてみようと思い立ち、M看板の横の道を左折し、最初の道を右折した。ちょうど「かずをさ」の家の前を通る路である。

新築した家が「かずをさ」の家のあった場所にあり、表札を見たら「長谷川」とあった。

一瞬のうちにこの旅行を思い出していた。

「かずをさ」の本名それは「長谷川一夫」である。

追伸 ―サウダージ― より その十一

松下壽男

あなたの庭で

花々は笑っていた
あなたのお母様も笑っていた
私も笑っていた
お父様は女房とにこやかに話していた

娘は初めてレモンの実をもぎってみた
遅れて姿を現したあなたは
少年同志のように
私によく似た息子と言葉を交わし微笑んだ

私には何やら
呪詛のように
つぶやいて

せつなさを
震わすように
春の風が吹き去った

日本近代文学点描　その十二

松下壽男

行ッテ看病シテ　ヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ　稲ノ束ヲ　負ヒ
南ニ　死ニサウナ人　アレバ
行ッテ　コハガラナクテモイイ　トイヒ
北ニ　ケンクワヤ　ソショウガ　アレバ
ツマラナイカラ　ヤメロトイヒ
ヒドリノトキハ　ナミダヲナガシ
サムサノナツハ　オロオロアルキ
ミンナニ　デクノボート　ヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
ソウイウモノニ
ワタシハナリタイ

死後発見されたこの宮沢賢治の絶唱は、生死をさ迷う枕辺に置かれていた、黒い手帳への走り書きでした。そ

時代の文化と作品の文化

♡雨ニモマケズ

風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモ　マケヌ　丈夫ナカラダヲ　モチ
欲ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニ　ワラッテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ　野菜ヲタベ
アラユルコトヲ　ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシ　ワカリ
ソシテ　ワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
北ニ病気ノコドモアレバ

の手帳の二頁目には鉛筆で黒々と「昭和六年九月廿日再東京にて發熱」と刻み付けられています。一九三一年、賢治三四才の彼岸、既に二度目の急性肺炎でした。

大正七（一九一八）年、森岡高等農林学校を卒業した賢治は、徴兵検査で第二乙種合格となり、兵役を免れたものの肋膜炎を患いました。彼は友人に「自分の命もあと一五年はあるまい」と語ったといいます。

それからの賢治は、一度は選んだ研究者の道を捨てて童話や詩の創作と農業指導、そして信仰へとのめり込んでいったのでした。稗貫農学校の教師を務め、妹の死に立ち合い、詩集と童話集を立て続けに出版すると教職を辞め、羅須地人協会を起ち上げ、農業指導に奔走して肺炎に倒れ、一度は平癒すると東北砕石工場技師になり石灰肥料の宣伝販売のために上京。黒い手帳は、生き急ぐ賢治の旅のトランクの中から発見されたものでした。

「雨にも負けず」の前後の頁には「…南無妙法蓮華経…」と経文が書き連ねられています。後日のものと思われる赤や緑の色鉛筆の書き込みから、その詩が十一月三日に郷里で書かれたのち「十一月十六日就全癒」ということが解ります。

死を覚悟しながらも仏に縋って生を願い、その結果一命を取り留めた賢治なのでした。この詩には、宮沢賢治の感謝にあふれた再生への決意が込められているに違いありません。

しかし三年後、彼の一周忌に当たる昭和九（一九三四）年九月二十一日の岩手日報夕刊「宮沢賢治追悼号」に掲載され、さらに八年後に一部が、そして十年後に全体が童話集の巻頭を飾るようになると、甦った生命への感謝に溢れた賢治の詩は、時代の文化の中で独り歩きを始めます。「滅私奉公」や「欲しがりません勝つまでは」などの標語と並んで教訓を語り始めたのです。

時代の文化が作品を発見すること と作品が自文化（アイデンティティー）を喪失することとは裏腹なのです。そして五十年後、シンガーソングライターの井上陽水は、「ワカンナイ」という題名で、こう歌うのでした。

〽雨にも風にも負けないでね／暑さや寒さに勝ちつづけて／一日、すこしのパンとミルクだけで／カヤブキ屋根まで届く／電波を受けながら暮らせるかい？／南に貧しい子供が居る／東に病気の大人が泣く／今すぐそこまで行って夢を与え／未来の事ならなにも／心配するなと言えそうかい？／君の言葉は誰にもワカンナイ／君の静かな願いもワカンナイ／望むかたちが決まればつまんない／君の時代が今ではワカンナイ／…

とはいえ、それから三十年後、東日本大震災の追悼式が宗派を超えてワシントンで行われたとき、『雨ニモマケズ』が選ばれて英語で朗読されたといいます。

その詩から再生への決意を読み取る文化が世界に広がろうとしているのです。

編集後記

ローマ神話に登場する女神ミネルバは、一つの時代が終わると、夕暮れに梟を飛ばして、その文明を総括した智慧を編み出し、その上で新しい時代での戦いに備えた叡智・勇気・創造・希望を考察した、「技術」「戦い」そして「知性」の神といわれています。

一方経営学の発信基地である米国の大学の仕組みですが、「研究大学」と「教育大学」に大別され、現在2774の四年制大学のうち、AAUという選ばれた研究大学だけが所属できる枠は僅か60校で激しい競争が行なわれています。その一方で、研究成果の査読論文を学術誌に掲載せず、一般書籍など別の形で発表し、経営学や実務家に幅広く影響を及ぼす経営学者などを擁する大学が注目を集めています。

上田正昭氏は近著『私の日本古代史』のなかで「日本の歴史は列島の中だけを見ていてもわかりません。四方を海に囲まれた島国は武力による侵略は受けにくく、交流しやすかった。～古来、日本では海を越えて人が往来し、文化や思想、宗教を受け入れ、独自のものにしてきた。島国根性というと排外的で閉鎖的なイメージですが、古代における島国根性は外に対し開かれた精神だったと思います」と述べています。

しかし何でも受容したわけではない、儒教は入れたが孟子の革命思想は入れなかった、宦官や科挙の制度も採択せず取捨選択しているのだと結んでおります。

歴史を学ぶ意義は過去に学び現在を見極め未来を展望することですが、グローバルな現在、様々な現象から何を学び、それらから未来を切り開く創意工夫を如何に生み出すかという事が求められていると思います。（T・N）

まんじ第128号

平成25年5月1日発行（非売）

発 行 人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編 集 長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「古きを脱ぎて　新生に漕ぎ出す」　　田寺（たでら）怜華（れい）画

まんじ

No.129

2013.8.1

まんじ第百二十九号　目次

兼農サラリーマンの時代がやってきた……三戸岡道夫…4
シルバー諸君の力（農業分野編）……古屋富雄…7
ヘモグロビンA1C……新井宏…12
短歌　三十首……曽根竣作…18
関東管領始末記⑪　禅秀蹶起……千坂精一…22
アルジェ（二）―西欧とアラブの狭間で―……太田精一…35
「茶道史」勉強ノート（五）……忠内正之…43
短歌　行雲流水（三十九）……石黒修身…51
老人会　会長のつぶやき（その三）……伊治哲…54
初夏の会津小旅行……吉田忠雄…63
目耕録（その十一）……山本鎮雄…64
漢詩　潮騒録（七三）《漢詩の流れ62》……鯨游海…71
イドと超自我の谷間で（九）―ある女の不思議な生涯―……鍋屋次郎…74
医学用語の語源……漆原直子…84

古代出雲国筆頭　熊野大社の盛衰（続）……村上邦治…88
（司馬雑感三十二）新撰組の故郷を歩く……山田嘉久…95
人類の仲間（四）……鈴木守…103
性と化粧（八）……鈴木守…112
内田の国の物語り③……横山正義…119
陰翳の美学（その十四）（最終回）……外山知…136
口紅（その十一）……池莉原作　山本勉訳…148
透明な時間（十三）……宅見勝弘…175
自縄自縛の男……匠克仁（宅見勝弘）…179
還暦からの考古学（二十七）……中山喬央…186
追伸　―サウダージより―　その十二……松下壽男…207
日本近代文学点描　その十三……松下壽男…208
編集後記……編集子…210
表紙……田寺怜葦

兼農サラリーマンの時代がやってきた

三戸岡　道　夫

神奈川県南足柄市の古屋富雄さんのことを、私は「花の金次郎」と呼んでいる。

それは古屋さんが二宮金次郎の報徳精神をもって、「花いっぱい」運動を展開しているからである。

南足柄市には至るところに四季折々の美しい花が咲いている。古屋さんは花で、南足柄市を繁栄させようと、平成七年に、

（あしがら花紀行）

という、南足柄市花いっぱい運動を始めた。その運動によっていま南足柄市は、春は、あしがら桜、菜の花、野藤、れんげ、夏は、あじさい、花あおい、秋は酔芙蓉、彼岸花、ざる菊、冬は、ナバナ、などの花が満開である。

するとある日、私は古屋さんから、

「花の次は、兼農サラリーマンですよ」

と聞いて驚いた。

「えっ…、兼農サラリーマン？」

兼農サラリーマンとは、はじめて聞く言葉である。

「そうです。いま日本には兼農サラリーマンが増えています。これからは兼農サラリーマンの時代です」

古屋さんは「花いっぱい運動」から、「兼農サラリーマン」へと前進したのである。

私は話を聞いて、なるほどと思った。これこそ日本の農業の新しい方向であり、日本農業再興の道、未来の農業への希望の道である。

日本の農業の現在の問題点は、農家が老齢化して、行きづまりつつある。親は農業をやっていても、子供はサラリーマンになって農業をやらず、いわゆる「兼業農家」が多くなっている。従って耕作を放棄した荒廃農地が増え、十年もたてば日本の農業はやり手がなくなってしまうというのが、一口で言うと日本の農業の現状であり、心配であり、大問題である。

しかしそれと反対に、サラリーマンでも農業に関心を持ち、サラリーマンをやりながら農業をやる人が最近は

増えてきており、それを「兼農サラリーマン」というのである。すなわち、農業というと、これまで家族全員が農業をやるものだというように考えてきたが、しかしそう考える必要はないのである。父がサラリーマンで、子供や妻が農業をやっていても、少しもおかしくはない。

父が自動車会社に勤め、母がデパートに勤め、子供が食品会社に勤めるというように、家族がそれぞれ別の業種で働いているように、その中に、農業が入っていても、少しもおかしくはない。それが兼業サラリーマンである。

そして将来は「兼業農家」に代わって、「兼農サラリーマン」が農業の一つの柱になっていくというのである。それは単に言葉だけでなく、それを実行している人が出始め、日本各地に増加しはじめている。

これまで日曜園芸とか、家庭菜園とか、貸し農園とか、レジャー農園とかいっていたものが、一段と本格化し、定着してきたとでも言えばよかろうか。しかし兼農サラリーマンは、そのような人達だけでなく、更に日本の将来の農業の危機を憂えるサラリーマンが、意識的に農業へも手を伸ばすという、心強い力も、動きはじめているのである。

日本の農業は、農地法とかいろいろ法律があって、農業以外の者が農業をするのに、いろいろ制約が多く、やりにくい点が多い。それを政府は単に金銭のバラまき政策で現状を糊塗している。しかし今や政治も経済も、グロバール化の時代である。新しい道を切り開いていく必要がある。今度の安倍総理は、

（農業を成長産業として推進していく）

と明言している。頼もしい限りである。はやくその政策が具体的に実現するのを、期待する。

また、いまの日本は眼の前にＴＰＰという問題を突きつけられているが、これも積極的な方向で対処すべきである。ＴＰＰは日本の農業を新しい方向に展開させていく、絶好のチャンスである。今の日本の農業は明治維新である。攘夷ではなく、開港である。幸い、安倍総理はＴＰＰについても前向きな姿勢で臨んでおり、これを機会に日本の農業は新しい方向に進むことが期待できる。

今後の日本の農業は、一般の産業と同じように、大企業と中小企業とになっていくのではあるまいか。農業の大企業化とは、たとえば各県がそれぞれ県営の農業株式会社を作り、そこで各県の農業を専属的に行うのである。そしてその中へ、現在の農業を吸収していくのである。すなわちその県のすべての農業がその農業株式会社に出資する。出資は金銭でなく、その農家の持っている農地を、現物出資するのである。そして農家はその会社の社員として、従来通り農業に従事するのである。従ってそれは大規模農業となっていく。トラクターで耕すとか、ヘリコプターで種をまくとか、刈込機で刈っていくなど、

アメリカ式の農業のように、大規模農業になっていく。その結果、コストダウンが実現し、競争力もついてくる。

また大勢の人間が働いているので、自分の後継者が農業を継がなくても、一般から採用すればよいわけであり、現在のように休耕田、耕作放置地の問題はなくなる。そして同時に若者の新しい職場となっていくのである。

すなわち兼業サラリーマンは、兼農カンパニーへと進むのである。

たとえば、自動車会社のグループの中に、農業株式会社があってもいいのである。そうすれば、農機具の開発も進み、これまで単体であった、耕耘機、田植機、種まき機、刈込み機、芋掘り機などが、一台で出来る複合機が発明されるであろう。自分の会社で農業をやっているから、機械の合理化と、効率化と、多機能化が進むのである。

それに並行して、大規模農業では出来ないもの、手の届かないもの、また小規模分散の方が適しているものについては、兼農サラリーマン方式でやっていくのである。

日本の農家は、世界で一番すぐれた農地と農業技術、そして勤勉な農業労働力を持った国である。すなわち世界で一番すぐれた農業国でも、あるのである。

一方、地球上では今後急速に人口が増加し、食糧難になる。だから日本の農産物が生産過剰になれば、世界へ輸出すればいいわけである。兼農カンパニーで大規模農業になれば、コストダウンになり、値段としても輸出可能になる。

今後の日本の経済は、自動車や電気製品などの輸出と並行して、農産物の輸出国としても発展していく可能性があるのである。いや、可能性があるというよりも、今後の世界の食糧難を救う、大きな力になるのではあるまいか。その手本はオランダである。

花の金次郎の古屋さんの「花いっぱい」運動は、さくらの花や菜の花に次いで、今や「兼農サラリーマン」という花が咲いたのである。

しかしその花は今突然に咲いたのではなく、花いっぱい運動を十数年間つづけてきた古屋さんの胸の底には、たえず「兼農サラリーマン」という大きな夢が流れていたのではあるまいか。それが今、花咲いたのである。

今後も古屋さんは花いっぱい運動を続けていくであろうが、同時に兼農サラリーマンのリーダーとして、日本の農業、いや世界の農業の最先端を走る人なのである。

シルバー諸君の力（農業分野編）

古屋富雄

シルバーとは、何歳以上を指すのか？　かつては、還暦の60歳からでしたが、その後、65歳以上となり、今は、いわゆる後期高齢者と呼ばれる70歳以上を一般的にはそのように呼んでいるようです。

しかし、私は、年金が受給できる60歳以上を対象に「シルバー」とすることにします。

そうそう、この私もこの3月、市役所を定年退職し、「シルバー」の仲間入りをいたしました。そして、先日、15年来の付き合いになりますS氏と、一般市民として市役所（行政）の必要性について意見交換をしました。

S氏は、現在、65歳です。地元の大手の企業に勤め、趣味で始めた山野草をリーズナブルで販売し、地域の活性化の一翼を担っています。S氏の哲学は「人は、歳を取ってもその人が培った経験を活かせる環境があれば、最も精神的な満足を得ることができ、その人にとって、この上のない幸せな人生を送ることができる。」とのことです。

このような人生の後期といってもいいような世代の頑張りが、今の日本に必要ではないでしょうか。シルバー世代が、イキイキ生きることは、心身の健康をもたらし、そして、医療費の軽減に寄与します。また、これまで培った経験や技術、人生の送り方などを、若い世代に知らしめることを喜びと感じ、知らず知らずに社会貢献が出来てしまいます。行政に今、必要なものは、このマンパワーの活用ではないかと感じさせられました。

さあ、今こそ、シルバー諸君の力をおおいに発揮してもらい、「輝ける日本」を創ろうではありませんか。

そこで、私は、農業分野で活躍しています、シルバー諸君をシリーズで紹介することで、農業を通して見えて来る「輝ける日本」の将来像を提起したいと考えます。

最初は、会社の経営を一時中断して、日本ミツバチの飼育に取り組んでいる高野貞治氏（64歳）を紹介します。高野氏は、60歳を過ぎたら、地域の環境や福祉に関係したことに携わりたいと常々考えており、特に環境については、次世代がごく当たり前に暮らしていくため連綿と引き継ぐことが、今を生きる人間の使命であるとのことです。

そして、高野氏がたどりついた究極の環境のバロメーターは、日本ミツバチの生態を知ること、そして、日本ミツバチを増殖することでした。

なぜなら日本ミツバチは、その地域に住み続ける、いわゆる、土着生物であり、そして、地域全体の植物から蜜を取り、ポリネーション（花粉交配）を一年間通して行うことにより、確実な植生の維持に貢献しているとのことです。それに比べ、西洋ミツバチは、ハチミツの採取のため、花が終えると、南は、九州・沖縄から、北は、青森・北海道へと、花を求めて移動させる人間のための家畜に過ぎないとのことです。次にもう少し、日本ミツバチと西洋ミツバチの違いを述べておきます。

日本ミツバチと西洋ミツバチ

現在我が国で養蜂業として飼育されていますミツバチは、明治時代に欧米から輸入された西洋ミツバチです。

日本ミツバチと比べ、体は一回り大きく、蜜を採取する能力が優れており、養蜂が生業として行えるハチです。しかし、日本ミツバチのように、天敵であるスズメバチの襲撃に対する防衛手段を持っていないため、自然界での生育は難しく、人間が用意した巣箱で飼育されていることから家畜として位置づけをしています。日本ミツバチには、２００～３００匹以上の働きバチによる蜂球（ハチが一塊になった状態）により、スズメバチをその蜂球に封じ込み、蒸し殺しにしてしまう、防御法を持っています。このことは、ミツバチを餌とするスズメバチの生育分布に起因するものであります。日本ミツバチ及び同系統のトウヨウミツバチの分布している日本を含む東南アジアには、スズメバチが生息しており、その防衛行動を日本ミツバチは、蜂球という手段で防衛してきましたが、西洋ミツバチの分布する欧米には、元来、スズメバチは、生育していないため、防衛行動の進化がされなかったと考えられています。自然界の「食う者」と「食われる者」の共存の歴史が遺伝子にインプットされたか、されなかったとも言えます。

日本ミツバチは環境のバロメーター

日本ミツバチは、自然界に土着して生育することができるが、西洋ミツバチは、人間の管理なしには、生育することが難しいことが理解されたと思います。

高野氏は、この土着生物として地域全体の植物から蜜を取り、ポリネーションを一年間通して行う日本ミツバチを、地域の環境のバロメーターのシンボルとしました。

このようなことから、その地域の環境のバロメーターは、日本ミツバチであり、ハチを増やすことは、良好な環境（生態系）の創出に繋がることと確信されました。こうして、高野氏の地域環境への貢献がスタートしました。

しかし、日本ミツバチの飼育には、ハチの確保が必要であり、一つの巣箱を確保できるまで、なんと5年間が費やされました。そして、それは、突然、訪れました。たまたま、出向いた、お寺のお堂でハチの分蜂（巣分かれ、お産）に遭遇し、運良く、蜂球を捕獲することができたのです。

農地の借り受け

しかし、それからが、問題でした。

日本ミツバチは、土着生物のため、飼育するには、巣箱や分蜂する最低限のできれば農地が必要となりました。しかし、農家ではないため、農地を借りることはできないと、頭を抱える日々を送っていました。そんな時、たまたま、私が管理している「ユートピア農園」の花畑で話をする機会がありました。高野氏とは、以前、花による地域おこしの講演時に意見交換をしたことがあり、その後、何度かお会いしていました。

早速、誰でもが農業をすることができる南足柄市の農業委員会が施行した「市民農業者制度」を説明し、正式に農地を借りることができる「市民農業者」になることを勧めました。

そして、平成25年1月に農業委員会から「市民農業者」の認定を受け、約９００㎡の農地を借りることが出来ました。高野氏が借りた農地はと言うと、山林化した傾斜地の農地でありました。このような農地のほうが、ミツバチの隠れる場所としての木々の存在や蜜源となる花、山菜を始めとした自給自足的な農作物の栽培などが無理なくできると判断されました。ですから、整然とした農地ではないが、木々は見受けられるが耕作を放棄した農地でもない、丁度、農地と山林の中間的な畑とでも表現しておきます。

しかし、周囲の農家からは、以前と比べて、農地らしくなったと評価され、地元の農家の理解を得ることと、ミツバチの飼育を通してのコミュニケーションが生まれる好結果がもたらされました。

分蜂（巣分かれ、お産）

平成25年4月29日、たまたま、高野氏の畑に立ち寄ったところ、偶然にも、今年、最初の分蜂に遭遇しました。巣箱の周りには、多数のミツバチが乱舞し、巣箱の中で何かが起ころうとしていました。どうやら、分蜂が始ま

ったようだと高野氏は言いました。すでに、ミツバチが巣分かれできるよう、畑の中の木々には、蜂球を作る簡易な屋根つきの止まり木が用意されていました。高野氏は、まず、働きバチが新しい住み家となる場所を偵察し、その場所が適当と判断をしたら、巣箱に戻り、OKを伝達すると、一斉に巣立ちして、蜂球(約1000匹のハチの塊)を作り、最後に女王蜂が移動して、分蜂が終了するとのことでした。まったく、その通りにことは進み、用意した止まり木に一塊の蜂球が出来上がりました。間を入れずに、この蜂球を網袋で捕獲し、新たな巣箱に収めて、作業は終了しました。

この一連のミツバチの行動は、我々人間の社会と同様な指示系統があり、その行動パターンを高野氏はよく理解していると感じました。

高野氏、いわく、ミツバチそのものが自分の子供、いや、孫のように可愛く、愛おしく、この世になくてはならない存在になっており、毎日がミツバチ三昧だそうです。

地域環境への貢献

日本ミツバチの蜜は「百花蜜」と呼ばれ、その地域に自生する様々な花の蜜を採取することからも、そのように呼ばれているとのことです。

西洋ミツバチのように花を求めて各地に移動するのではなく、土着生物として、その地域に住み続け、一年間を通したポリネーションにより、植物の実がなり、種子ができ、地域の植生が永年に渡り、維持される重要な役目を果たしています。そして、日本ミツバチが増えることは、その地域の自然環境が良好である証拠でもあり、地域環境への貢献に繋がるものと考えます。

日本ミツバチの飼育を養蜂業として捉えると、採取できる蜜量は、西洋ミツバチと比べるとその5分の1から10分の1とかなり低く、とても生業にすることは困難です。

しかし、60歳を過ぎた、第一線を退いた(退いていないと思っている人を含む)シルバー世代の夢の実現であり、ロマンの追及であると、高野氏は言っております。

そして、そのことが社会貢献に繋がっていると勝手に解釈する思い込みこそが、毎日をイキイキと暮らすことができる源泉とのことです。美味しいハチミツもその一つです。

今回の高野氏が取り組んでいる日本ミツバチの飼育については、シルバー世代でなくては、出来ない社会貢献の一例として紹介させていただきました。

終わりに

現在、国内のハチミツの90%が中国からの輸入です。高野氏いわく、国土の砂漠化や黄砂などが深刻化している中国に、日本に輸出することのできる花の蜜源があるか疑問に感じるとのことです。また、一般にハチミツの蜜は、花の蜜からミツバチが採取するもの と考えているが、砂糖水も蜜源としてなっていることも現実とのことです。

ヘモグロビンA1C（エイワンシー）

新井宏

平成二十五年一月三十一日

「新井さん！　この数値じゃインプラントはできませんよ。まず、糖尿病の専門医に診てもらって下さい。そちらに数値を連絡しますから！」

歯科医院の副院長が、さもさも重大事のように言う。もう十年ほど通い続け、既に七本もインプラント手術をして貰っている医院である。

「ヘモグロビンA1Cのことですね。数値はいくらなんですか？」

「八・三%です。完全な糖尿病ですよ」

「そんなに簡単に決めつけないで下さいよ！　なにしろ、糖尿病とは四十年来のつきあいで、今までは何とか境界型の判定をキープしてるんですから」

「でも、この数値では手術できませんよ」

「そんなことを言ったって、過去三十年間に、八%以上という数値が四回も出てるんですよ。それでも、摂生して七%以下に下げた歴史が何回もあります」

「でも、七%という数値だって、かなり高めですよ」

「それなら、前にインプラントした時のA1Cの値は、いくらだったんですか」

……副院長カルテを持参……

「平成十六年九月が六・一%、平成十八年十二月が六・四%で、その後のはちょっと見当たりません」

「そうすると、A1C値がいくらなら手術ができるんですか」

「一応の決まりは八%以下ですが……」

「じゃあ、早速半月後にはA1Cを七・五位まで下げてきます！」

「でも、A1Cと言うのは過去二ヶ月くらいの血糖値の平均を反映しているので、そんなに簡単に下がりませんよ」

「そうは言うけれど、記録をみれば、平成十六年五月に八・四%だったのが、四ヶ月後の九月には六・一%になっていますから下がるかもしれませんよ。第一、測定の誤差はどのくらいあるのですか」

「普通はプラスマイナス〇・三%です」

「そう言えば、確かにこの二週間ほど暴飲暴食気味でした。一日平均二万歩以上歩く目標をクリアーしていたので、安心して食べていたのがいけなかったのでしょう。だから半月後には必ず八・〇%以下に下げてきます！」

かくして、ヘモグロビンA1C値との闘争を開始する。もちろん糖尿病対策のためであるが、副院長とのゲームと思うと張り切れる。とりあえず、半月後に再検をしてもらうように依頼する。

さあ、それからが大変だった。

大見得を切った手前、とにかくゲームには負けたくない。さっそく、血糖値やA1C値のモニター代わりに、素人でも判定できる「尿糖検査試験紙」を大量に買込み、頻繁に尿糖呈色反応のチェックを始める。

呈色反応の試験結果は五段階判定。

1　－　検出限界以下
2　±　ほとんど尿糖検出なし　（50mg/dL）
3　＋　少し尿糖検出　（100mg/dL）
4　＋＋　多めの尿糖検出　（500mg/dL）
5　＋＋＋　かなり多めの尿糖検出　（2000mg/dL）

さすがに空腹時だと2の±の判定となるが、なかなか最良の1にはならない。ましてや、食後の結果は3～4（＋～＋＋）の判定が多い。尿糖値が尿百cc当たり百mgを軽く超えているということである。判定結果の解説を見ると、3の＋でさえも、「食後（一～二時間）にもう一度検査し、二つの検査結果を持って、医師にご相談ください」とある。これでは初めから、糖尿病患者扱いでまったく気に入らないがやむをえない。

大体の傾向がわかったので、毎日のチェックは食後一時間、一時間半後、二時間後、三時間後と決める。

そして「傾向と対策」に取組む。

「傾向」を読んですぐ分かったことは、カロリー源の多くが、ご飯やパンだと思っていたのは大間違えで、揚げ物などは簡単に四百キロカロリーを超えてしまうということ。

そこで「対策」としては、朝食と昼食の摂取量を平均六百キロカロリーと定め、夕食では従来通り飯類は採らず、ツマミも五百キロカロリー以内に制限する。血糖値を低めに誘導するには、菜類を先に、穀物や肉類を後に食べると良いというのでこれも励行する。

また「対策」実施のために、食卓上に調理用計量器をデンと据えて、食べ物別のカロリー表を睨みながら十グラム単位で計算する。心理的な圧力にもなる。

問題はアルコールである。これだけはどんなことがあっても制限する気にはなれない。ただし、ビール、日本酒、ワインなどの醸造酒は原則として止めて、焼酎とウイスキー、ブランデーなどの蒸留酒に切替える。

アルコールのカロリーは、グラム当たり五・六キロカロリーで飲み

物によって変わることはないが、糖分を含む醸造酒になると、日本酒で二十五%増、ビールでは五十%増にもなる。赤ワインなら数%増に過ぎないが、甘いことなど言っていられない。

それでも晩酌の純アルコール量は五十グラムを超えるので三百キロカロリーにもなるし、外で飲めばそれ以上になる。ただしアルコールは胎内で直接糖分に変わることがないのが救いである。

ついでに言えば、魚や肉類などの蛋白質も、直接糖分に変わることがないので、アルコールのようにいくら採っても良いはずであるが、回りまわって糖分の補給になるので、カロリー制限の例外とはしない。

かくして、アルコールを含む一日の総カロリー摂取量を二千キロカロリーとする。

その一方で、如何にしてカロリーを消費するかが最大の「対策」である。

もともと毎晩の晩酌のため、既に一日平均二万歩を課してはいるが、これを二万三千歩に切り上げる。三時間半のウォーキングである。この歩数なら計算上七百キロカロリーの食事量に匹敵するはずで、従来よりも百キロカロリー分は余計にエネルギーを消費できる。

成績向上のために、歩く時間帯も、食後まもなくのスタートとする。運動の代謝として血糖値の増加を抑えると考えたからである。

さあ、「対策」はできた。食事のカロリー摂取量から二万三千歩分の消費カロリー七百キロカロリーを引くと千三百キロカロリーである。これなら、平静な日常生活に要する基礎エネルギーの千六百キロカロリーよりも三百キロカロリーもすくない。計算では月に一キログラムくらい痩せるはずである。

かくして、二ヶ月後のA1Cの目標値を六・〇%と定めた。そのために、ややこしい計算をしてみると、半月後には七・七%、一ヶ月後には七・一%、一ヶ月半後には六・五%のペースで行かねばならない。

同年二月十五日

半月後の採血日を迎える。

副院長も、どうやら、このうるさ型の患者はA1Cの分析法についても一言ありそうだと思ったのか、念のため「他の検査機関でも測定しましょうか」と言う。

「ぜひぜひ、お願いします」

事実、インターネットで調べると、液体クロマトグラフィー法とか免疫法とか酵素法とかいろいろあって、測定値に差がでることがあると言う。歯科医院での測定なので、おそらく簡易なクロマトグラフィー法なのではなかろうか。測定時間も十分ほどで結果がでているからである。

しばらくすると、顔なじみの看護婦さんが来て、数値が七・八%と出たと告げる。前回より〇・五%下がって

いて、一応努力目標の線に乗ってはいるが、私としては不満足である。副院長はやや怪訝そうな表情。他の機関の測定結果が出たら、電話で知らせてくれるように依頼し、更に一ヶ月後の検査を予定する。

数日後、副院長から電話有り、他の機関の測定値は七・三%だったとのこと。〇・五%も低い。

「……それ見ろ、測定値なんてものは、こんなものだ……」

もちろん、そんな失礼なことは言わなかったが、緒戦は無事に突破。このペースなら一ヶ月半後には七・〇%を割り込むことは難しくなさそうである。それにしても、まだ一ヶ月もある。その間、「対策」の実施を緩める訳には行かない。

ただ、有りがたいことに、これだけカロリー制限をしていても、意外に空腹感はない。特につまみと晩酌だけの夕飯がますます美味しく充実した時間となる。つまみは年齢のせいか、肉類よりもむしろ菜類が美味しくて助かる。

同年二月二十七日

史遊会後の恒例の飲み会。

たまたまM氏が隣席で「サントリーのオールフリー缶」を飲んでいる。感心するのは、まったくアルコールを飲まないのに、いつも飲み会に出てくるM氏の人柄。私なら、絶対につき合わない。

「Mさん、ヘモグロビンA1Cって知っていますか」

「もちろんですよ、糖尿病の一番確かな指標ですよ」

「歯医者に行ったらA1Cが高く、糖尿病だと脅かされたんですよ」

「まさか七%以上という訳ではないでしょう」

「いえいえ、そんなもんじゃなく八・三%と出たんですよ」

「ええーっ、私の主治医なら七%以上で直ちにインシュリン、インシュリンと騒ぎますよ」

「でも過去三十年の間に、八%を超えたのが四回もあるんですよ。それでも万歩計と格闘しながら、酒量だけはずっと確保して、こうやって飲んでいるんですよ」

「そんなぁ……」

「傾向と対策」は着実に成果が生まれているような実感がある。まず食後一時間半の「尿糖検査試験紙」で、3の＋（100mg/dL）が出なくなった。すなわち2の±（50mg/dL）が主になり、調子が良いと最良の1（検出限界値以下）がでる。

呈色が薄黄緑にならず黄色のまま残っていると、すかっとした気分になる。「対策」のため、尿の付着量を心持ち少なくしていたのが良い成績となっているのかとびくびくしていたが、そうでもないようだ。

そして、三月に入ると、呈色反応が完全に安定して、試験紙が美しい黄色のまま残るようになる。尿糖が出なくなったわけだ。

インターネットで調べると、食後の尿糖値とA1Cの間には非常に良い相関関係があり、数ヶ月間の平均尿糖値を100mg/dL以下にコントロールしていれば、A1Cは六%以下になると出ている。古い血液のヘモグロビンA1Cが八割ほど死滅するのに二ヶ月程度かかるというので、二ヶ月後には予定通り六%まで下がるはずである。

同年三月十四日

さあ、待望の一ヶ月半後の採血検査である。減食のためか、ちょっと細くなった腕を出して採血してもらう。当然のように「他の機関」の測定もお願いする。

まず、歯科医院での結果が六・八%とでる。最初の八・三%からみれば一・五%も下がり、予定の線に良く乗っている。副院長もますます怪訝な表情を見せ、こんな例を知らないという。

「世の中、まあ、いろいろですよ……」

もし「他の機関」の測定値が前回と同じ傾向であれば六・三%とでるはずであり、ぎりぎり正常な範囲に入る。そしてその予測は見事に当たる。

もうヘモグロビンA1Cがインプラントの障害にはならないが、ここはゲームであり我慢のしどころ。「もし二ヶ月後の検査で高くなったらまずいので」と意地悪く再検を予約する。その心はゲームの完勝ねらいである。

同年四月一日

歯科医院のA1C値が六・五%とでた。二ヶ月間で一・八%下がったことになる。それまでの法則が成立てば「他機関」の測定値は六・〇%となるはずである。それならば晴れて正常値の範囲。もう「他の機関」の測定は止めても良かろう。

かくして、インプラント実施日を四月十七日と決める。その前日に化膿止めの抗生物質処方箋がでるので来院するようにとのこと。

同年四月十六日

翌日のインプラントのため、抗生物質の処方箋を貰いに行くと、血圧、脈拍や酸素飽和度の測定を行ってくれた。いずれも正常。他に何か希望がありますかというので、ここは遠慮せずに、念のためと称してA1Cの測定を依頼する。おそらく、この医院でも六・〇%とでるはずだ。完勝を確認したい。

待つこと、十数分。どんぴしゃり、六・〇%とでた。最初からの数値を並べると、ほれぼれするほどきれいに下がっている。自画自賛できる通信簿である。（　）内は他機関の測定値である。

一月三十一日　八・三%
二月　十五日　七・八%（七・三%）
二月二十八日　測定なし
三月　十四日　六・八%（六・三%）
四月　一日　六・五%
四月　十六日　六・〇%

まずは副院長に感謝しなければなるまい。これによって、既に糖尿病状態に陥っていたのに、数値だけなら境界型糖尿病に引き戻せたのであるから。いやいや、この努力を継続すれば、四十年間の境界型糖尿病からも抜け出せるかも知れない。

でもその前に、まずはビールで乾杯だ。二ヶ月間の健闘を称えて、それ行けドンドン。かくして、無事にインプラントは終了。歯床が固まるのを待って三~四ヶ月後に金の歯を入れることになる。金が高騰しているので、本来なら値上げしたいけれど、前回と同額で良いと言う。

それにしても、A1Cが予定通り下がったことは大成果であったが、その一方で、理論計算通りに、この三ヶ月で三キログラムも痩せてしまった。ベルトが大分ゆるくなり、肘や肩をさすると肉付きが衰えているのを感じる。女性なら喜ぶかも知れないが、髭剃り時に見えるオデコや顎に皮膚の張りが失われ、骨の凹凸が目立って、ますます貧相になったのにはまいった。

ヘモグロビンA1Cとは

血中のヘモグロビン（赤血球の中にあるタンパク質）にはA0、A1、A2などの分類があるが、A1Cは、A1の一種で、総ヘモグロビンの約四%を占める。その割合は血糖値に依存するので、糖尿病の血糖コントロールの最重要指標として用いられている。通常の血糖値測定では、食後は高くとも空腹時にはかなり下がるので、より精密な糖負荷検査などを必要とするからである。

それは、ヘモグロビンの生体内における平均寿命は約百二十日で、ヘモグロビンA1Cは、過去一~二ヶ月の平均的な血糖値の指標となるからである。

ちなみに現在の糖尿病診断基準は

①空腹時血糖一二六（mg/dL）以上
②七六グラムのブドウ糖を飲み二時間後の血糖二〇〇以上
③随時血糖二〇〇以上
④ヘモグロビンA1C六・一%以上

である。これらの基準は、昔なら境界型の領域のイメージであるが、最近は境界型も糖尿病の範疇に格上げされたらしい。

短歌　三十首

曽根竣作

あさぎまだら

冷え凍(し)むる朝の若水窓の外(と)の淡き光にきららなすなり

つつみ込むわが掌(て)を撫でて風花の一筋白き街の曇り日

雪の尾根越えて翼を納めたり長途をまへに白鳥いこふ

寄する波にかそか貝殻鳴るまひる陰暦のけふ実朝忌とぞ

とめどなく砂時計の砂落ちつづく三分の間(ま)をいまに告げつつ

ネオンの灯次々消えて春更けの夜空に瞬時流星はしる

海峡をこえて千余キロ翅(はね)やぶれ浅黄斑(あさぎまだら)は天空(そら)を飛翔す

中国の四川省にて発見さるアサギマダラの長征の果て

戦争の不拡大をばとなへたる名将は陸軍に一人も居らず

ニッポンの混沌(こんとん)の世を率ゐたる「昭和の名将・愚将」を耽読

「昭和の名将・愚将」半藤一利著
（文芸春秋）

アルバトロス

まへ庭の花梨(くわりん)ひともと太き実を三つ四つ付けて朝霜をおく

双頭の鷲の紋章凍(い)て空にハプスブルグの栄華をとどむ

冬のポプラすべて枯れ果て双頭の鷲が羽ばたくウィーン界隈

暗号の解読をしもつとめとし君は果てたりレイテの海に

音信の久しく絶えしF君よりホームへ入居の知らせの届く

頒布(ひれ)振りて去りし山間の集落に佇ちつくしたる少女忘れず

春更けの身にふかぶかと沁み入りてタンゴ「碧空」流麗なりき

底ごもり木の芽雨降る夜をくだち追想を馳す東京プリズン

乱獲に激減したるアルバトロスいま飼育員が幼きより飼ふ

父島のがけに寄りそひ生育す翼長二メートル余の阿房鳥(あほうどり)は

春眠

花蓮港(くわれんこう)より辿れる道はタロコへと往き交ふ人らみな挨拶す

がたぴしの舗装なき道裸足(はだし)にてすれちがふ原地の人ら平然

新緑のタッキリ峡谷切り立ちてをちこちペタコの声ぞ聞こゆる

朝まだき耳に入り来高なける百舌(もず)のだみ声中空にひびく

凡骨(ぼんこつ)を叱咤すれども八十七歳知らぬあひだに春眠きざす

「勇」とふ友人ありき才に溺れし奴の逝去をいまに惜しめり

いま一度(ひとたび)焼け跡に沿ひ闇市の並べるところ彼と歩きたし

洋モクの紫煙くゆらせ亡き父のふっとつぶやく敗戦まぢか

ふっくらと羽織りし父のインバネスとても借財返すと思へず

雪の日の動乱はわが誕生日　礼儀正しき兵卒が行く

関東管領始末記⑪
禪秀蹶起

千坂精一

一

應永二十二年（一四一六）、犬懸禪秀（上杉氏憲）は関東管領に就任してから四年目の夏を迎えた。

山内憲定のあとを受けて管領の座に就いたとき、父朝宗はまだ上總國長生郡の長柄山胎藏寺に隠棲していた。

先々代公方氏滿から扶育を命ぜられて手塩に掛けて育て上げた滿兼が、氏滿の死後二十一歳で四代公方になったとき朝宗はすでに先代公方の関東管領をつとめていたので、傅役からひきつづき新公方の補佐役になった。

こういう関係は、それぞれが職分さえ弁えていればがいに理解し合っているから理想的な上下関係になる。

事実四代公方足利滿兼と関東管領上杉朝宗の組み合わせは齟齬がなく、幕府の重臣たちも羨む間柄になった。

愛おしみつづけてきた滿兼が三十二歳で先立ってしまったときの朝宗の落胆ぶりは筆舌に尽くし難く、嫡男禪秀と雖もその悄愴を慰める術がなかった。

だから禪秀は、父朝宗が滿兼の葬儀のあと犬懸ヶ谷の屋敷へ戻らず胎藏寺に向かったのを黙って見送った。

隠棲してから五年後に七十六歳で世を去った朝宗の年忌にあたり、禪秀は終の栖となった胎藏寺に詣でた。

その道中で禪秀は、前公方と父との思い出に耽った。

禪秀は父と先代公方滿兼との関係を羨望して、もし滿兼が健在だったならば自分も父の遺志を継いで親子二代で補佐したであろうにと思いいたってその死を悔やんだ。

というのは、現公方持氏と比較してのことであった。

持氏は、まだ成人に達しない十二歳の公方である。

ときの管領は父朝宗のあとの山内憲定であったが、二年後に憲定が病に倒れて引退したので当番制で犬懸家にまわり禪秀が十四歳の傲慢な公方と組むことになった。

持氏は権力志向で自己顕示欲が強く、我意を押しとおして諫言を嫌い、些細なことにも口を挟む嫌われ者で、愛すべきところのまったくない出来損ないの少年だったから、禪秀とははじめからしっくりいかなかった。

なにしろ、ただ世襲ということだけで実力も人望もない少年が、関八州と陸奥、出羽、それに甲斐と伊豆を含む十二箇国の大守をひけらかすのだから始末が悪い。

禪秀は父朝宗供養のこの旅が暫時の息抜きであった。

鎌倉へもどればまた持氏と毎日顔をつき合わせていなければならないと思うと、なんとも気が重かった。

禪秀の一行は上總、下總、武藏を経て相模に入った。

ここまで天候に恵まれてきたのに、鎌倉と思しいあたりを黒い雲が覆っていた。雨になるかも知れなかった。

二

翌朝、禪秀の帰邸を待ち兼ねていた常陸國小幡城の越幡六郎がさっそく犬懸ヶ谷の屋敷を訪ねてきた。

越幡六郎は、常陸國笠間男体城の小田氏の支族で、犬懸家の家人であると同時に公方持氏に仕えていた。

六郎は禪秀と対面するとさっそく用件を切り出した。

「政所評定の裁決で所領を没収されてしまいました」

六郎は、茨城郡小幡の地を領有していた。

「なに、儂の留守に政所評定がひらかれたとな」

「呼び出されてさよう申し渡されました」

「して、裁決の理由はなんと」

「それが、われらの所業を公方さまがお怒りとか」

「なにを爲出かしたのじゃ」

「なにも身に覚えがなく、見当もつきませぬ」

「公方の気紛れだと申すか」

「山内のお屋形さまが公方さまのご裁断と申されました」

「なに、憲基どのがか」

「さようでござります」

禪秀は六郎の話が納得いかなかった。

（本人が覚えなしというのだから言い掛かりであろう。なにか企んでいるにちがいない。鼻を明かしてやろう）

そう考えた禪秀は、

「管領の召集なしに政所評定など開けるはずがない。それも緊急事態ならともかく吟味もせずに曖昧のままで裁決するなどもってのほかじゃ。儂が撤回させてやる」

禪秀が引き受けたので、六郎は愁眉をひらいた。

六郎を帰したあとで禪秀は、

（儂の留守を狙って六郎を陥れ、大袈裟に政所評定まで開いて処分するとは、なにか魂胆があるにちがいない）

そう思って眉を顰めると、腕を組んで虚空を睨んだ。

（公方の気紛れはいつものことだが、こんどのことは度が過ぎている。しかも越幡六郎を生け贄にするとはなんの企みか。誰か背後で公方を唆しているにちがいない）

そこまで思い至ったとき、先刻六郎が公方の傍らに山内憲基がいたといっていたのを思い出して膝を打った。
（憲基が謀ったな）
禅秀はそうにちがいないと頷いた。
憲基は、祖父憲方が関東管領職を犬懸家と交互に務めることにしてしまったことが残念でならず、常々周辺に愚痴っているときいているから、犬懸家の失脚を謀り、甘言を弄して公方に取り入っているにちがいない。
事実勝手気儘な少年公方持氏にしてみれば、禅秀よりも媚び諂う憲基のほうが与し易いに相違なかった。
（明日出仕して公方と憲基の鼻を明かしてやろう）
そう決意した禅秀の口許から微笑が漏れた。

三

翌日、公方邸におかれた政庁に出仕した禅秀は公方持氏と面会した。越幡六郎のときがそうであったようにこの場にも山内憲基が然り気無く同席していた。
禅秀はさっそく越幡六郎の処罰について糺したが、持氏は返答をしなかった。禅秀が執拗に詰め寄ると、追い詰められて逃げ場をうしなった持氏は開き直って、
「予の仕置に間違いはない」
「間違いなければその理由を確とお聴かせ下さりませ」
「諄いぞ禅秀。公方を詰問いたすか」
「政所評定は管領が開き管領自身が裁決するものでござりますれば、なにゆえ管領の留守になされました」
「うるさい。予は東国の将軍じゃぞ。棟梁の持氏が家人の是非を裁いてなにが悪い。言い分あらば申してみよ」
「それでは秩序が保てませぬ」
「予は公平な裁きをいたしておる」
「越幡六郎の申し開きも聴かずに裁決なされたのはなにゆえでござりまするか」
「予の眼に狂いがないからじゃ」
「ではどうあっても越幡六郎をお赦し下さりませぬか」
「棟梁である予の裁決に異を唱えるは逆臣じゃぞ」
持氏は憲基の手前居丈高な振る舞いをつづけたが、禅秀は逆臣とまでいわれてついに堪忍袋の緒が切れた。
「公方さまの道に外れた政事をお諫めもせず唯々諾々と盲従して管領職にありましても無益でござりまするゆえ、それがしは進退を考えさせていただきまする」
「勝手にいたせ」
持氏が捨て台詞を残して去って行き、禅秀が席を立ったとき、傍らで含み嘲笑う憲基の顔が視野に入った。
犬懸ヶ谷の屋敷へ戻った禅秀は、持氏の暴言に、
「管領職辞任」
を仄めかす大鉈を振るって切り返してやりはしたものの、それでもなお腹の虫が治まらぬので、さらに追い討ちをかけて深刻な事態にまで陥れてやろうと目論み正式に、

『関東管領職辞任届』を認めて、鎌倉府に提出した。
これで困惑した持氏は宥めにかかり、越幡六郎の所領没収を撤回するにちがいないと、禅秀は多寡を括った。
だが、数日を過ぎてもなんの沙汰もなかった。
心配した越幡六郎が毎日訪ねてきたが、禅秀は、
「かならず撤回させるから、安心して待っておれ」
そう慰めて帰した。
きっと持氏は困惑して山内憲基あたりを宥め役に立てて寄越すであろうから、二人の鼻柱を挫き完膚無きまで打ちのめしてやろうと心積りして待ち構えていた。
禅秀は只管待ちつづけた。
だが、思惑は外れて意外な結末を迎えてしまった。
公方持氏は、なにかと口煩い禅秀が自分のほうから辞任届を出してきたのを物怪の幸いに、得たりやおうと受理すると、山内憲基を管領に就任させたのである。
報らせを受けた禅秀は、血の気が退いて眼が眩んだ。
「よくも儂を謀ったな」
地団駄踏んで口惜しがったが、後の祭りであった。
山内憲基は犬懸家が管領職に割り込んでいるのが面白くなく、山内家の独占に戻そうと野心を抱いていたので、一刻も早く管領になりたくて公方持氏に取り入った。
持氏のほうも叔父のような年頃で口喧しい禅秀よりも、六歳年長だけの媚び諂ってくる憲基のほうが御し易かったので、禅秀打倒への両者の思いは一致したのだ。
憲基が企て公方持氏が協力した罠に禅秀がまんまと引っ掛かってしまったのである。なんとも迂闊であった。

四

犬懸禅宗が関東管領職を罷免されたことで鎌倉府は騒然となり、噂はたちまち関東一円に広まっていった。
浄明寺犬懸ヶ谷の禅秀邸には嫡男憲方をはじめ憲秋、憲春の子息たちと、実弟氏顕、異母弟千坂高春らの親族が集まっているところへ、舅の甲斐守護武田信満、上野の岩松満純、下野の那須資之、下総の千葉兼胤らの女婿たちが相前後して続々と駆け付けてきた。
そして、嫡男憲方から詳細な事情説明を受けると、その卑劣な遣り口に熱り立った岩松満純が、
「抗議しても撤回せぬなら、国人たちを集めて力尽くで奪い返しましょうぞ」
そう性急に武力行使を迫った。
公方を抱き込んでいる山内憲基を斃してしまえば、庇護者を失った公方は禅秀に靡くにちがいなかった。
那須資之や千葉兼胤は岩松満純の発議に同調したが、武田信満が異論を唱えた。
「われらは同族争いのつもりでも、山内どのが公方さまを担げば私闘ではなく鎌倉府への謀叛となり、幕府に討伐されることになる」

「では、よい知恵はござりませぬか」
千葉兼胤が信満に責付いた。
「公方と管領を斃すには幕府の指示か、納得される大義名分がなくてはならぬ。さもなければ非難は免れぬ」
信満の思慮深い説得に禅秀は頷いた。
「儂は憲基を赦せぬだけで、これまで父祖が統轄してきた関東をこの手で乱す気など毛頭ない」
「しかし父上、このまま引き下がるのは無念でござる」
憲方は禅秀に詰め寄ると、
「われらにも意地がござる」
憲春が兄に追従した。
禅秀は応ぜず、しばらく腕を組んだまま瞑目した。
禅秀の決断を待つ人々に、緊張感がみなぎった。
禅秀とてもみなと思いはおなじで、蹶起を留まったままにしておいたのでは腹の虫が治まらなかった。
やがて禅秀は、意を決すると口をひらいた。
「与党たちに檄を飛ばして鎌倉に集結させ、威嚇いたせば憲基は怯み、公方も非を悔いるであろう」
「そのあたりまでがよろしゅうござろう」
信満が大きく頷いた。
それから半刻余りのあいだ禅秀屋敷は騒然となった。
国人たちへの使者が選ばれ、早馬が仕立てられて、屈強な者たちが次々に慌ただしく飛び出していった。
禅秀屋敷の異変に愕いた持氏と憲基は、

(すわ合戦)
そう早合点すると、
(遅れてはならじ)
すぐさま与党集めに取り掛かった。

その年の夏——。
禅秀、持氏、憲基からそれぞれ檄文を受けとった国人たちは合戦の準備を整えて続々と鎌倉に集まってきた。
ある一群は浄明寺村犬懸ヶ谷の禅秀屋敷に集結し、他の一群はおなじ浄明寺村御所内の公方屋敷へ向かい、またある一群は大町佐介ヶ谷の憲基屋敷に入った。
鎌倉は静寂を破られて一触即発の危機を迎えた。
禅秀は前に述べたように勢威を誇示するための与党集めであるから武力行使する心算はさらさらなかったが、憲基のほうはこの機会に持氏と謀り禅秀を謀叛人と極め付けていっきに葬ってしまうことにした。
だが、禅秀方の数には遠く及ばなかった。
憲基は、立ち後れたことを悔やんで舌打ちした。
(この戦力差ではとうてい勝ち目はない)
憲基は、逸る持氏を抑えて他日を期すよう説得した。
持氏は地団駄踏んで口惜しがったが、憲基が動かなくてはどうしようもなく、渋々承諾せざるを得なかった。
持氏は、憲基の献言に従って禅秀に和解を求めた。
禅秀方の急進派たちは持氏の申し入れを承服せず、

「この好機を逃さず粛清してしまおうではござらぬか」
そう息巻いたが、武田信満に同心した禅秀は冷静で、
「無位無官で公方に楯突けば謀叛人の謗りは免れぬ」
「しかし父上、このままでは引っ込みがつきませぬ」
嫡男憲方が急進派に同調して不満を繰り返した。
「ことを急げば同志の方々に汚名を着せることになる」
「さりとて父上——」
「諄いぞ憲方。管領に復してのちに公方と憲基を将軍家に叛心ありとて粛清いたせば大義名分が立つ」
そう諭して、持氏の和解申し入れを受け入れた。
和解が成立すると双方ともただちに与党の国人たちを帰国させたので、鎌倉は辛うじて戦火を免れた。

五

このころ、京の将軍家でも跡目騒動が燻っていた。
騒動の原因をつくったのは三代将軍義満であった。
義満の二人の男子はどちらも庶子で、長男義持の生母は側室藤原慶子、二男義嗣は愛妾春日局であった。
義持は、生後間もなく夭逝のあと子のない正室日野業子の許に引き取られ、嫡子扱いされて育てられた。
それから八年後に二男義嗣が生まれた。
この年義満は征夷大将軍を辞して太政大臣になった。
そのため九歳の義持が元服して四代将軍に就任した。
義満は嫡男以外をみな門跡に入れたから、義嗣も当然出家させられるはずであったが、義満の寵愛を一身に集めている生母春日局の懇願で梶井門跡入りは取り止めになり、義満の手許において育てられることになった。
義嗣が十五歳になった應永十五年(一四〇八)三月八日、義満は北山第に後小松帝の行幸を仰いだ。
義満はこのあと流行病に罹り、五月六日に五十一歳で死去してしまったから、この日が最後の盛儀であった。
この日義満は将軍義持に市中警備を命じておいて、法服に身を固めると義嗣を従えて四足門に出迎えた。
そして、祝宴にも義持でなく義嗣を陪席させ、関白よりも上席に坐らせると諸卿列座の前で天盃を賜わらせた。
従一位大納言右近衛大将である将軍の兄を差し置いて従五位下の義嗣に与えられたこの厚遇は義満が密かに、
(近々義嗣を元服させて将軍にする)
考えがあっての布石だったのかも知れない。
こうして、父義満の溺愛の許で育った義嗣が、
(ひょっとして父は、自分を将軍にするつもりなのか)
そう思い込んでしまったのも無理からぬことであった。
ところが明くる四月二十五日に十五歳の義嗣が親王に準じて禁中で元服した直後の二十七日に義満が病に倒れ、翌月六日に五十一歳で急逝してしまったのである。
(義嗣将軍)
の噂を払拭すべく、管領斯波義教とその父義将が素早

く動いて義持を不動の将軍に担ぎ上げてしまった。
義嗣は、この斯波父子の動きに憤懣遣る方なかった。
父義滿の支えで脚光を一身に浴び得意の絶頂にあった義嗣は、突然奈落の底へ突き落とされた思いであった。
義嗣は管領斯波義教に疎外されたことで義持を恨んだ。
それが昂じてやがて義持打倒を企てるようになった。
父義滿が身罷って六年後の應永二十一年（一四一四）九月、吉野朝方北畠親房の曽孫伊勢國司北畠滿雅が後小松帝の第一皇子實仁親王の即位に反対して挙兵した。
両朝合一のときの三條件のひとつ、
『今後の皇位は両統迭立とする』
を幕府が反故にしたのが原因であった。
義嗣はこれに同調して兄義持を廃そうと企んだ。
だが安定期に入っている幕府につけ入る隙はなく、ごく少数の反幕勢力を煽動してはみたものの彼らは慎重で容易に立ち上がろうとしなかったので失敗に終わった。
蹶起した北畠滿雅は、一色義範、京極持光、土岐持益らの幕府追討軍に伊勢國の居城阿坂城（三重県松阪市）を攻略されてしまったので、吉野朝九十七代後村上帝の第五皇子説成親王が仲介に入って両者を和睦させた。
このとき義嗣はなんらの咎めもなく不問に付された。
その義嗣が鎌倉府の騒動をきくと、また血が騒いだ。
密議した東国通の側近僧侶は、禪秀よりも義嗣とおなじ境遇にあって野心満々の又従兄弟足利滿隆のほうを唆して禪秀を抱き込ませるほうが得策との提案だったので、さっそく禪僧を密使に仕立てて鎌倉へ送り、滿隆に、
――同盟謀叛。
を教唆煽動した。
義嗣の計画は、
（義嗣が将軍を滿隆が鎌倉公方を弑して取って代わる）
という甘い誘いであった。
滿隆は二代公方氏滿の三男で、長兄滿兼が三代公方、次兄滿直が篠川御所、そして弟滿貞が稻村御所になっているのになぜか滿隆だけが権力の座に就けずにいた。
さらに滿隆は、甥持氏の四代公方就任当時から、
（公方の座を狙って謀叛を企てている）
黒い噂を立てられて鎌倉府から疎外されてしまった。
身に覚えがなく憤懣遣る方ない滿隆は、公方持氏の弟持仲を養子に迎えて二心なきことを示すと、勝長壽院（大御堂）の境内に北條政子が夭折した愛娘大姫を悼んで建立した新御堂に隠棲して蟄居生活を送っていた。
だから義嗣の誘いに応じようにも手勢がいなかった。
滿隆は好機を逃す無念を悔やんでいるうちに禪秀のことに気付き、なんとかして与させようと思いいたった。
滿隆は夜分密かに禪秀を新御堂の屋敷に呼び寄せた。
そのころ禪秀は、持氏がいっこうに禪秀の管領職復帰と越幡六郎の処分撤回をしないことに焦立っていた。

滿隆から示された、
『大納言義嗣卿の密書』
を読んだ禪秀は、ことの重大さに愕き、
「これは無謀な計画です」
そう一笑に付しながら滿隆に『密書』を返した。
だが、滿隆は真剣だった。
父氏滿以来疎外されつづけている公方家と、謀叛を仄めかす噂を流した管領憲定の山内家を深く怨んでいた。
だから公方持氏と山内憲基打倒は報復であった。
禪秀のほうも滿隆からなにかと説得されているうちに心が揺れて、しだいに滿隆の誘いに傾いていった。
（横暴な公方持氏と管領職独占を企てる山内憲基を斃すことは世直しになるし、滿隆を奉ずれば叛乱は禪秀の謀叛ではなく公方家の内部抗争と看做されることになる）
そう結論づけた禪秀は、滿隆との蹶起を決断した。
滿隆は、思わず禪秀の両掌を握り締めて涙ぐんだ。

六

滿隆との密議を終えた禪秀は病と称して屋敷に引き籠もると、慎重に蹶起の準備にとりかかった。
そして、公方足利持氏と管領上杉憲基を討てとの将軍の内書が届いたとする滿隆の回状に副状を書いた。
二箇月後、禪秀の呼び掛けに応じた近隣の国人たちが三々五々鎌倉周辺に集まってきて決行のときを待った。
禪秀屋敷に集まった親族や郎党たちの武具は米俵に詰めて食料とみせかけ、馬に負わせて運びこませた。
應永二十三年（一四一六）十月二日、この日鎌倉御所では祝事があり、招待客のなかには滿隆、持仲もいた。
宴酣の戌刻（午後八時）ごろ、二人はそっと酒宴を抜け出して鶴岡八幡宮裏の西御門にある保壽院へ急いだ。
そこには、禪秀と一族郎党、鎌倉在国の一団がいた。
このあたりは源頼朝、大江廣元、北條義時などの墓がある裏山に近く、軍団集結を気づかれる虞はなかった。
滿隆と持仲から公方邸の様子を聴いた禪秀は、
「公方は確かにおられるな」
そう念を押した。
「一座は酔い痴れ、兄者は潰れて寝所へ移されました」
持仲が判然りそう答えた。
「よし。いまが好機じゃ。屋部と岡谷は予ての手筈どおり別働隊を塔の辻へ誘導して堀を切り、鹿垣を結び、走矢倉をあげ、持楯を突き立ててそれぞれに家紋の幕を張り、一揆の旗を掲げて山内の軍勢に備えよ。急げッ」
そう下知して邀撃隊の移動を確かめると、禪秀は、
「よいか。御所は囲むだけで攻め入ってはならぬぞ」
馬上で諄々と念を押しておいて、
「いざ出陣じゃ。ものどもつづけッ」
大音声で命ずると、雄々しく采配を打ち振った。
面目躍如のときを迎えた禪秀は、得意満面であった。

禅秀率いる本隊は雪ノ下へ駆け降りると、杉本寺下の六浦路を走り抜けていっきに鎌倉御所へ殺到した。
このとき、御所内で逸早く時ならぬ馬蹄の音が近付いてくるのをききつけた木戸将監満範は、咄嗟に、
（犬懸入道の謀叛）
を察知して、ただちに持氏の寝所へ駆け込むと、
「上様。謀叛でござりまする」
前後不覚に寝入っている持氏に大声で怒鳴り伝えた。
「なにごとじゃ」
突然起こされて夢現の持氏は、不機嫌に質した。
「謀叛軍が押し寄せて参りまする」
「なに、謀叛軍じゃと。誰の謀叛なのじゃ」
「犬懸殿と思われまする」
「禅秀じゃと……」
持氏は咄嗟には信じられなかった。
というのは、今朝がた禅秀の嫡男憲方から、
「父の病は重くなるばかりでもはや本復の希みはありませぬゆえ、ふたたびのご奉公は叶わぬでありましょう」
そう聴いたばかりであったから、
——禅秀謀叛。
の報らせが俄かには信じられなかったのだ。
「まことか。まことに禅秀の謀叛なのか」
「ほかに誰がござりましょうや。相違ござりませぬ」
木戸満範は、確信をもって答えた。
叛旗を翻せる者は禅秀をおいてほかにはいなかった。
持氏は近づく馬蹄の響きで我に返り、恐怖に戦いた。
「一刻も早く管領様のお屋敷へお立ち退き下さい」
急かされた持氏は、身仕度もせずに寝乱れ姿のまま警固の武士たちに護られてすぐ裏の十二所の山に入り、尾根伝いに間道を抜けて久木の岩殿寺へ出てしまった。
夜道で方角を誤り三浦へ向かってしまっていたのだ。
禅秀の追手がないのをさいわいにひと息入れて供奉の人数を点検したら五百余騎いたというのだが、不意の夜討ちに遭い慌ただしい逃走でのこの人数は多過ぎる。
どうも軍記物語の合戦動員人数は桁違いに多く眉唾物だ。「大軍」とか「そこそこ」と読み替えるといい。
持氏の一行は方角を定めて小坪に下り、飯島（和賀江島）の岬をまわって由比ヶ濱に出ると渚を避けて松林に見え隠れしながら佐介ヶ谷の憲基邸を目指して急いだ。
持氏に逃げられて威嚇の機会を逸した禅秀はすぐに、
（公方を憲基の屋敷へ逃げ込ませてはならぬ）
そう判断して踵を返し、塔の辻（小町の寶戒寺あたり）の別働隊と合流して佐介ヶ谷の憲基邸へ向かった。
この日は吉日らしく憲基邸でも酒宴が開かれていた。
そこへ扇谷氏定の二男持朝が三十騎ほどを率いて駆け込み、憲基に急を報らせて屋敷を固めるよう注進した。
憲基は、思わず持朝の肩を掴んで、
「なにッ、この夜更けに禅秀が謀叛したとはまことか」

半信半疑だったが、まもなく持氏の一行が逃げ込んでくるに及んで事態を知るとただちに応戦を下知した。
憲基のほうはさきの対立以来警備を怠りなかったので、公方屋敷とはちがって素早く臨戦態勢が整った。
禅秀は、持氏が憲基の屋敷へ逃げ込んだので弓引くことが躊躇われ、佐介ヶ谷を包囲して一夜を明かした。
翌三日は悪日なので双方仕掛けずに終日を過ごした。
そのあいだに両軍へ助勢する近隣の国人たちが続々と集まってきて、鎌倉は人馬で膨れ上がった。
甲斐の武田信満も老骨に鞭打って長駆着陣したが、禅秀が蹶起したことについては一言も触れなかった。

七

禅秀は、
（公方持氏には弓矢を向けずに、山内憲基だけを斃すにはどうしたらいいか。よい工夫はないものか）
あれこれ策を巡らしてみたのだが、公方軍と管領軍が合流してしまったのではどうしようもなかった。
（なんとかならぬものか）
そう思い悩んではならぬことへの苛立ちを繰り返しているうちに、いつか夜は白々と明けはじめてしまった。
昨日の悪日休戦で痺れを切らしていた両軍は、未明早々に戦端を開いた。
もうどう策を弄しても手遅れであった。
禅秀は、勝っても謀叛の謗りを免れぬならば、持氏をも討って憂さを晴らそうと臍を固め、采配を振った。
激戦は扇ヶ谷の気生坂（化粧坂）方面に移っていた。
断崖と幽谷を分ける急勾配の気生坂を押し上げて葛原ヶ岡を制圧すれば逆落としに佐介ヶ谷を攻略できる、と判断した岩松満純と澁川左馬助が先鋒になって、入れ替わり立ち替わりして攻め上げていった。
六日に山内家に与する扇谷家の上杉氏定が急遽気生坂に向かい防戦しているうちに、霜台（台）を守っていた上田上野介と疋田右京進が討ち死にしてしまった。
それを契機に岩松軍はいっきに気生坂を突破して押し登り、六本松辺りで上杉氏定に深傷を負わせた。
——気生坂の形勢危うし。
の報に憲基は、馬廻りの梶原但馬守、海上筑後守、同信濃守、椎津出羽守、飯田小次郎以下三十騎を防戦に向かわせたが、梶原と椎津は討ち死にし、海上、飯田らは深傷を負って無量寺口の陣へ逃げ帰ってきた。
勢いに乗った岩松、澁川両軍は、敗兵を追って佐介ヶ谷に雪崩込み、國清寺（佐助）に火をかけた。
炎は忽ち燃え拡がって憲基の屋敷にも及んだので、邸内は大混乱に陥り、守備兵たちは俄かに戦意喪失した。
持氏と憲基は裏山へ逃れて大佛坂切通し、極楽寺坂切通しを抜け、稲村ヶ崎、七里ヶ濱を伝い、腰越、肩瀬（片瀬）の汀を経て黄昏どきには小田原まで逃げ延びた

が、そのあいだに警固の兵は悉く討ち取られ、途中扇谷氏定も深傷に耐えられず藤澤道場（遊行寺）で自刃した。

しかしその小田原も不穏で禪秀方の土肥、土屋の手勢に宿を放火されたので、箱根へ逃れて一夜を明かした。

持氏は、混乱の中で憲基を見失ってしまったが、さいわいにも翌七日の午の刻ごろに箱根別當の證實と出会ったので、その案内で駿河の大森城（裾野市）に入った。

だが、ここもまた禪秀方の甲斐に近く落ち着かぬので、結局藤澤で自刃した扇谷氏定の女婿で駿河守護の今川上總介範政を頼り、瀬名屋敷（静岡市）に落ち着いた。

いっぽう、持氏と逸れた憲基は、伊豆の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に案内されたが禪秀の追手に怯えて落ち着かず、北へ奔って伯父の越後守護上杉房方を頼った。

討ち漏らした悔いは残るが、持氏と憲基を追放したことで、禪秀の蹶起はいちおう成功した。

鎌倉府は、滿隆が公方に坐り、禪秀が管領に返り咲く手筈を整えていたが、義嗣のほうはどうなったのか、蹶起の報らせはまだ届いていなかった。

幕府に異変がないとすれば、果たして将軍義持が鎌倉府の新体制を承認するかどうか、禪秀は不安だった。

その頃、今川範政が禪秀の謀叛を京へ注進していた。

八

今川の急使は十三日の夕刻に京へ到着したのだが、生憎将軍義持と管領細川滿元は高辻烏丸の因幡堂へ参籠していて不在だったので在京の守護大名が招集された。

だが、彼らは東国の複雑な政治情勢に疎く、事態収拾の対策が立てられないまま徒らに拱手傍観していた。

鎌倉の争乱を知った将軍義持は激怒して、ただちに駿河守護今川範政と越後守護上杉房方に足利滿隆、持仲、上杉禪秀追討の御教書を下すと同時に、山名時熙にも幕府を挙げて持氏を救援するよう下知した。

そのころ関東では、禪秀軍が持氏、憲基方の鎮圧に躍起になっていたが、しかし燻りは容易に消せなかった。

いかに持氏が高慢横暴であろうとも、公方を排斥した禪秀を非難する保守派の国人たちが意外に多かった。

禪秀方がそれら国人たちの掃討に手古摺っているあいだに、江戸、豊島、二階堂、宍戸の国人たちと南一揆が入間川（埼玉県狭山市）で禪秀打倒の旗を掲げた。

禪秀はすぐさま嫡男憲方、三男憲秋に出陣を命じたが、憲秋は病を理由に渋ったので滿隆の養子持仲が加わり二十一日に小机島（横浜市港北区）まで兵をすすめた。

両軍は二十三日に世谷原（東京都世田谷区）で衝突して終日の合戦になったが、憲方軍は敗れて鎌倉へ逃げ帰り、持仲軍も苦戦のすえ二十五日に敗走してきた。

この敗報が関東一円に伝わると、それまで態度を曖昧にしていた国人たちが一斉に禪秀打倒に立ち上がった。

なかでも上野（群馬県）では、蹶起のときに先鋒をつ

とめた気生坂での大功を鼻にかけて高慢な振る舞いの多い岩松滿純を、苦々しく思う新田一族の里見、鳥山、額田、大島、大館、堀口、それに世良田、桃井らの国人たちは、かつて持氏の祖父二代公方氏滿が将軍家と不仲になったとき、自分の所領を分け与えて与党にと頼られた恩義を感じて持氏に荷担することに決した。

そして、出家していた新田義貞の孫六郎を還俗させて総大将にいただくと、館林のあたりに打って出て上野の大半を従えたので、由良、横瀬の一族や長尾らの国人たちも同調して十二月十八日に岩松軍と合戦になり、家老の金井新左衛門を討ち取った。

怒った岩松滿純は、大軍を率いて新田総軍と二十二日に合戦を挑んだが、逆に追い散らされてしまった。

蹶起に成功して、いちどは鎌倉府を掌握した禪秀だったが、その後の形勢は次第に不利に転じていった。

九

年が明けた。

元日早々、滿隆と禪秀は本隊を率いて世谷原に出陣し、南一揆や江戸、豊島軍と合戦してこれを破った。

これが禪秀にとって最後の勝利であった。

将軍義持の御教書を受けた越後守護上杉房方が憲基を伴い信濃守護小笠原政康軍とともに碓氷峠を越えて関東に入ってきており、駿河守護今川範政軍もまた箱根で禪秀軍を破って小田原のあたりまで迫っていた。

北から上杉・小笠原連合軍、西から公方持氏を奉じた今川軍、そして東から佐竹、江戸、豊島の混成軍に攻められては四面楚歌で、まさに袋の鼠になってしまった。

こうなると、浮き足立って与党の結束が乱れ、離叛する国人たちが出て収拾がつかなくなり総崩れになった。

禪秀は、世谷原の陣を撤収して鎌倉へ戻り陣容の立て直しを図ったが、ときすでに遅く、幕府軍が迫ってきていて三浦に後退せざるを得なくなってしまった。

だが禪秀は鎌倉に拘っていた。管領を務めた鎌倉府を捨て切れず、ここを先途と戦っての終焉の地に希んだ。

禪秀は一族郎党を引き連れて六男の鶴岡若宮別當寶性院快尊法印の神宮寺雪ノ下御坊に立て籠もった。

そして、全員を一堂に集めると訣別の辞を述べた。

「今日まで儂を信じて従いてきてくれた其方たちにあらためて礼を申す。武運拙く敗れはしたが儂の蹶起は決して謀叛ではない。公方さまの狂気とそれに媚び諂う山内憲基を糺して正義の筋目を通すためであったのだが、ことが受け容れられず幕府の責めを負うことになってしまいまことに無念であった。いまとなってはそれだけが心残りじゃ。其方たちは春秋に富む身なれば一刻も早くこの場を落ちよ。けっして死に急いではならんぞ。よいな」

そう言い遺すと嗚咽する郎党たちを残して憲方、憲春、快尊、禪瑾の子等を伴って御坊の中へ入り、一族の男女

四十二人は滿隆、持仲とともに枕を並べて自刃した。
郎党たち五十五人も、一人残らず禪秀に殉じた。
舅の武田信滿は世谷原を離脱したが、追い詰められて二月六日に天目山栖雲寺（甲州市大和町）で自刃した。
また同盟謀叛を誘ってきた将軍義持の弟義嗣は、結局挙兵に失敗して高雄山神護寺（京都市右京区）へ逃れ髻を切って出家し、遁世を装ったが捕えられて相國寺に監禁され、翌年一月四日に山内憲基が二十七歳で病歿したおなじ月の二十四日に誅殺された。二十五歳であった。
（了）

アルジェ（二）
—西欧とアラブの狭間で—

太田精一

五、最初の大統領訪問館

開会日の九月二十一日。前日まで徹夜に近い作業が続いた。関係者全員の努力により政府ブースも商業ブースもすべて準備を整え、開会式を迎えることが出来た。
数か国は、準備が整わず、開会当日となっても工事を行っていた。
開会式は、午後四時からブーメディエン大統領臨席のもとに行われた。国旗掲揚、国歌吹奏、大統領の開会宣言と続き、礼砲、民族舞踊などが披露された。
アルジェリアが国家の威信にかけて行う見本市だけあって、華やかな開会式である。
式の直後、大統領が最初に訪問したのは日本館であった。
宮崎駐アルジェリア日本大使、瓜生ジェトロ代表・日本館長、山下事務局長の案内によりブーメディエン大統領は、日本館内を一巡された。その後大統領は、各国館を約二時間かけて訪問されている。
日本館での展示品のうち、大統領は、特に石油の精製プラント模型に興味を持ち、説明に当ったスタッフに、熱心に質問されていた。
また、出品物の実演にも関心を向けられ立ち止まり、編機、コピー機などの実演を熱心に眺めておられた。
開会式の翌日、一般入場者は、会場ゲートが開くのを待ちかねて、どっと押し寄せた。ことに日本館は、初めての大規模参加で、入口に位置していたため、すぐに人で埋め尽くされた。
アルジェリア見本市局（ＯＮＡＦＥＸ）によれば、会期中最も入場者の多かったのは、木、金曜日であるという。特に、イスラームの国アルジェリアでは、金曜日が休日であるため、その日は、見本市会場全体が、入場者

で溢れ、大混雑となった。

一般大衆の関心は、消費財にあった。政府ブースに設置された光ファイバーによるテレビの特設スタジオ、商業ブースにあるテレビ、ラジオ、卓上計算機などに人気が集中した。

また、編機、オートバイなどにも来場者が群がり、どこの店で、幾らぐらいで買えるのかといった問い合わせが殺到し、アテンダントも、その対応に大わらわの状態であった。

だが、アルジェリアは社会主義の国である。政府は、限られた外貨を有効に使うため、生産財の輸入に重点を置いていた。

そのため、大衆の人気とは異なり、商談は生産財が中心となった。

カタログなどの配布物には、すぐ人が群がった。

カタログを作成し、展示スタンドの前で、配布を始めると、黒山のように人がたかり、たちどころに無くなる。配布する女性アテンダントが引き倒され、怪我の恐れが生ずるほどであった。そこで、カタログの配布は、原則として屋外で男性が行うことにした。

日本館には、政府関係者の来場者も多く、会期中に商業大臣、商業省の高官はもとより、観光大臣、テレビ、新聞の報道関係者が来訪し、取材に当った。そうしたマスメディアのお蔭で、広くアルジェリア全土に日本館の存在が知れ渡った。

見本市が始まって間もなく、私たち日本館事務局関係者がアルジェリア見本市局から招待を受けた。

アルジェリアの正餐料理メッシュイでの招待である。

見本市局の前の庭に、炭火を熾した炉を置き、その上に鉄の棒で串刺しにした羊を、ぐるぐると回しながらこんがりと丸焼きにしている。

それを手でつかんで食べるのである。羊には、味つけがしてあるのでそのまま食べられる。

羊独特の臭みがなく美味しい。焼けた羊の肉を素手でむしって皿に乗せ、食べるのが正式な食べ方だそうであるが、慣れないため熱くて手が出ない。

すると招待側の人たちが、手でむしって皿に乗せてくれた。ナイフで肉片を切り取れば簡単であるが、手でむしり取るほうが食べた気がするらしい。

私は、羊肉は、臭みがあって好みではない。だが、この羊の丸焼き料理は、臭みが消えていて意外と美味しく食べることが出来た。ムスリムのアルジェリア人は、通常アルコールは飲まないが、招待客にはワインやビールでもてなしてくれた。

私は、アルコールに弱いのでミントティーを飲みながらの会食であった。

羊の丸焼きの他には、ショルバといわれるスープと粒

状のパスタに野菜や肉の入ったソースをかけた料理のクスクスが出た。

ショルバは、地中海沿岸地方のスープ料理で、羊か牛肉あるいは魚、玉葱、ひこまめ、シナモン、ジャガイモ、ズッキーニー、パプリカ、サラダ油、トマトペースト、香味野菜などを入れて作る。具は、地方によって異なる。後に、ベオグラードに駐在した時にも、ショルバはレストランでよく食べた。

また、クスクスは、最も知られたアフリカの料理である。以前カメルーンに駐在していた頃、カメルーン人の家庭に招待され、食べたことがあった。

硬質小麦粉（セリナ粉）を粒状にして蒸したものに肉や野菜を煮込んだスープをかけた北アフリカ伝統の料理で、アルジェリアでは、メッシュイの後に食べることになっている。

料理は、それぞれの地方の文化を反映している。その地方特有の料理の類縁関係を探ることによって、文化的な繋がりを明らかにすることが出来る。

アルジェリアは、アラブと地中海とアフリカの文化を背負っている。そのことが、見本市局の正餐の招待を受けて良く分かった。

六、配慮の欠けた招待状

国際見本市には、会期中に見本市関係者を招待し、レセプションを開催する慣例がある。これをナショナルデーと称し、各国持ち回りで行う。

同じ日に数か国が、固まってしまうことを避けるため、見本市の主催当局は、各国の申し出を受け、日にちを調整し開催日を割り当てる。その日に各国の名前を付し、それをナショナルデーと呼ぶ。

日本のナショナルデーは、九月二十六日と決まった。言い換えれば、九月二十六日がジャパンデーとなったのである。

招待状の出状に当たっては、日本大使館、出品者、ジェトロ・アルジェ事務所などから招待者リストの提示を受け、重複することのないよう調整したうえで、宮崎大使及び日本館長の連名で出状した。

レセプションは、午後七時より日本館内で開催され、宮崎大使と瓜生日本館長がホスト役を務め、盛大に行われた。

来客者は、三〇〇名を超え、日本紹介のジェトロ・ブースの前で、宮崎大使、瓜生理事、山下事務局長が並び、来客者の一人一人と挨拶を交わし、和やかな雰囲気のもとにカクテルパーティが行われた。

来客者は、駐アルジェリアの外交団、アルジェリア政府高官、見本市局、各出品者の取引先などの関係者で、招待者のみとした。

要人の安全確保のため、当局の警戒もかなり厳重であ

った。

通常の飲み物、オードブルは、見本市局を通して発注し、準備された。

アルジェリアは、イスラームの国であるが、フランスの海外県であった頃からぶどう酒の生産は多く、重要な輸出品となっている。そのため、パーティにはアルジェリア産ぶどう酒が多く使われる。ムスリムであってもこうした時にはアルコール類を口にする人もいる。

日本から取り寄せたアルコール類、缶詰、おかき、クッキーなど多様な食べ物に人気が集まった。

「日本主催のレセプションは、飲み物はもちろん、いろいろ珍しい食べ物が出る」との噂を聞きつけた招待客以外の客が、レセプション会場に押しかけた。飲み物も食べ物もなくなる恐れが生じ、会場も雑然としてきたため、招待状を持たない来客者に対してはよりチェックを厳重にし、入口で入場を断ることにした。

ところが、そこに問題が生じた。

入口で招待状の有無を確認する係りのアテンダントが、招待状のない来客者すべての入場を拒否したのだ。招待を受け来場したにもかかわらず、招待状を持参しなかった大使まで入場を断ってしまったのである。

アルバイトのアテンダントにしてみれば、大使であるかどうかわからない。身分を確かめもせず追い返してしまったのだ。その人物の挙措、態度、物言いなどを観察し、ジェトロの日本人スタッフに相談すれば、問題は生じなかったかもしれない。

断られた大使は、憤然として帰った。結果的には、門前払いを食わせたことになってしまったのだ。

翌日、その大使館から日本大使館に苦情が寄せられた。

「昨日、貴国のレセプションに出席しようと日本館に出向いたが、招待状を持参しなかったため、門前払いを受けることになった。後で招待状を確かめたが、どこにも招待状持参のこととは書いてない。招待状がなければ入場できないのであれば、一言その旨、招待状に書きとめておくべきである」

宮崎大使は、その苦情を受け、今後注意するように山下事務局長に伝えて来た。事務局長も私も招待状の出状については、細心の注意を払ったつもりであったが、招待状に「本状持参のこと」と書かなかったことは、手ぬかりであった。そのことを強く反省し、以後私は、招待状の出状の際には、細心の注意を払うようになった。

ジャパンデーも終わり、見本市会期も残り少ないある日のことである。

私は、会場から共同宿舎に帰るため、運転手のサイードの車に乗った。

アルジェ中央駅の北、マルチール広場の前で、サイードはいきなり車を止めた。夕方五時頃でまだ街は明るか

った。マルチール広場は、アルジェの中心地で、露店が立ち並び、土産物屋などが軒を連ねている。

「どうしたのだ。今日は買い物をする予定もないし、このまま宿舎に帰るつもりでいる」

サイードの車に一人の中年の女性が近づいて来た。サイードは、窓越しにその女性とアラビア語でしばらく話をしていた。

突然、その女性が私の乗っている後部座席に乗り込んで来た。私は、彼女がサイードの親戚の人か近所の知人で、たまたま通りがかりに見かけたから車を止めたものとばかり思っていた。

だが、そうではなかった。

彼女は、丈のゆったりとした長袖の白いワンピースで身を包み、青いベールで顔を覆っていた。年の頃は、三十五～六歳と思われた。顔を見たわけではないので雰囲気で判断するしかない。手を見る限りやや浅黒い感じがする。

「ムッシュー太田、どうですこの女の家に案内しますが、ベッドを共にする気はありませんか」

サイードは、私に彼女とのセックスを勧めた。私は、まったく予期しないことだったので戸惑った。そう言えばアルジェリアに来てから女性の肌に触れたことはない。

彼女を改めて見た。女性らしさを隠そうとする服装のために、近寄るには何となく違和感がある。ワンピースの中に何があるのか、艶めかしい肢体が隠されているのか、興味がないわけではなかったが、そこはかとなく漂う女の色気を感じることは出来なかった。

「顔を見て、もし気に入るようだったら彼女の家に案内する。未亡人だから家に行っても問題はない」

サイードは、私が長い出張で、よほど女性に不自由していると思っているようだ。彼は、親切心からか、それとも何がしかの利益を得るために女性を斡旋しようとしているのか分からない。恐らくその両方であろう。

(もし、ベールを取って顔を覗き込むようなことがあって、断ったら女性のプライドは傷つきサイードの面目もなくなることであろう)

彼女は、ベールの奥から車窓越しに人の流れをただ黙って見ている。

「やはり今日は真直ぐ宿舎に帰ることにする。突然のことだしね。いきなり言われても、すぐその気になれない」

私は、彼女を車から降ろすようにサイードに言ってドアーを開けさせた。

彼女は、車から降りると、私に視線を向け、無言のまま手を振りドアーを閉めた。

サイードは、それから一度も私に女性を紹介しようとしなかった。

七．諸外国の参加と商談

アルジェ国際見本市は、北アフリカ有数の規模を誇り、一九七七年当時で、十四回の歴史を重ねている。日本としては初めてであったが、西欧諸国と社会主義国を中心に三十七か国の参加があった。

フランス、イタリア、西独（現ドイツ）などは、独自のパビリオン（国としての館）を有し、毎年大規模な参加をしている。

また、ソ連（現ロシア）、ポーランド、東独（現ドイツ）などの社会主義国も同じ社会主義国であるアルジェリアを友好国として扱い、独自のパビリオンを建て、積極的な参加を行っていた。

さらに、北朝鮮、ベトナムなどもアルジェリアとは、社会主義国としての深い親交があったため、見本市局も、それらの諸国に展示場を貸与し、厚遇していた。そのため、こうしたアジアの社会主義国は、毎年決まった場所に、ほぼ同規模の参加を行っていた。

先進各国の出品物は、生産財が多い。アルジェリアの経済開発に資する工作機械、農業機械などが大宗を占めていた。また、プラントの模型類の展示も多く、各国とも石油プラントの売込みを図っていた

ことに、フランス、西独、イタリアなどのヨーロパ勢の意気込みはすさまじい。専門家を呼び寄せ、セミナーなどを積極的に開いて、プラントの説明を行っていた。

一方、当時のアジア、アフリカ諸国は、生産財の輸入国であった。そのため展示ブースには生産財はほとんど見られず、民芸品、繊維品などの消費財が色とりどりに展示されていた。

社会主義国アルジェリアでの貿易の窓口は、貿易公団である。そのため、展示品を売却するには、こうした機関から特別輸入枠を取得する必要がある。

出品者は、見本市に出品することによって、最終需要家にその展示物の使用方法、耐久性、価格などをアピールし、商談につなげる。だが、輸入枠を取得しない限り、実際の取引には結びつかない。

会期中に、出品者に対し、日本館での出品の目的と商談の状況について聞いてみた。

さまざまな回答が寄せられたが、集約すると次の通りであった。

（一）アルジェリアの場合、見本市に出品することは、新規取引先の拡大もさることながら、出品物を通して、関係機関に既存の取引先との関係をアピールすることにある。また、日本政府の補助を受けた。

（二）一社だけ単独で出品すると、展示場所が隅に追いやられがちで、国としてまとまって出品した方が、良い場所を得られやすい。

（三）国としてまとまって参加することにより、見本市のための特別輸入枠の取得が容易となり、その枠を使って出品物を売却することが出来る。

（四）商談は、水面下で進められるが、特別輸入枠を取得出来た出品物は、ほとんど売却が出来、見本市終了後、日本に持ち帰る必要がなくなる。

一方、主催者のアルジェリア見本市局は、出展国に対し、次のような要望をし、各所でセミナーや講演会を推奨していた。

「経済開発に役立つ生産財を主体に展示し、セミナーなどを開いて、その出品物の使用方法、効用などを専門家に解説してほしい」と。

だが、一般大衆は、耐久消費財に関心を寄せていた。

展示規模では、フランス、西独、イタリア、スペインなど西欧諸国に見るべきものがあった。地中海を一跨ぎすれば到達するアルジェリアは、これら諸国にとって、きわめて重要な貿易相手国である。とくに石油、天然ガスの供給国である同国との貿易バランスを保つには、工業製品を積極的に輸出しなければならない。体制の違いはあっても経済関係の強化を図る必要があるのだ。そのことは、この見本市の出品規模を見ただけでも容易に理解出来た。

八．ベルベル人の住むカビール

十月に入ってすぐ、アルバイトとして雇った一人の事務局員からベルベル人の住むカビール地方の見学を勧められた。

そこには、首都アルジェと異なったもう一つのアルジェリアの顔があるという。

私は、ベルベル人である彼のその言葉に魅かれた。

カビール地方は、アルジェから東南約百キロ、アトラス山脈の端にあるジュルジュラ山脈を取り巻く山間地にある。

中心都市ディズウィズまで車で約二時間、そこから標高千メートルの尾根伝いに山村が点在する。村人の多くは、オリーブといちじくを主作物とした果樹栽培農業を営んでいる。

村人たちは、北アフリカのこの地方に古くから住んでいて、ベルベル人と呼ばれている。

ベルベルとは、ラテン語のバルバルス、ローマ世界の外に住む非文明人という意味から由来した。だが、言うまでもなく彼ら自身はそうは思っていない。イマジゲン＝高貴な出の人間、自由人などと自称している。

ベルベル人たちは、地方によってさまざまな方言があるが、一部を除いて固有の文字を持たなかった。

紀元前七千年から八千年の石器時代に、ベルベルの文化を形成、二世紀頃には短期間ながら王国を建設したこともある。その後、フェニキア、ローマ、ヴァンダル、

ビザンツ帝国の支配を受け、アラブの侵入によりイスラーム化が進められた。

フランス統治時代には、フランスは、アラブとベルベルの相違をことさら強調し、両民族の融和を妨げることによって、独立共闘運動の分断を図っている。

とはいえ、ベルベル人は、独特の言語、文化を持ち、アラブ人とは大きく異なることは間違いない。形質的には、アラブ人よりもむしろヨーロッパ人に近いように思える。

私は、カビール出身の個人タクシーの運転手を一日雇い、同地方への日帰り旅行を計画した。

アルジェから東南に車を進め、小麦畑とブドウ畑が広がる丘陵地帯に出た。さらに東へ進みこの地方の中心都市ディズウィズに入った。町のカフェで一休みし、さらに山間の村を訪れることにした。

車が、山道を進むにつれ、華やかな色彩の衣装を身につけた女性が目立ち始めた。花柄模様のスカート、赤やピンクのカーディガンをまとって、頭をスカーフで覆っている。

ローマ帝国の支配する以前からこのスタイルであっただろうか。肌は白くフランス人と見分けがつかないほどであった。

もともと、地中海に面した平地に住んでいた人もいた。それがローマ帝国とオスマン帝国によって山間部に追い込まれ、オリーブやいちじくなどを栽培して暮らすようになった人も少なくない。

カビール地方のベルベル人たちは、アラブ人の侵入に抵抗し、アラブ化されることを嫌った。フランスの支配下にあった当時は、フランスに移住する人もいたという。

山の斜面に張り付くように、石を積み上げて壁を作りそれを土で塗り固めたような家が点在していた。

道端に、女性が独特の模様の陶器、カラフルなショール、ドレスなどを台の上に乗せて売っている。

しばらくその辺を散策した後、山を下りた。すでに夕闇が迫っている。

歴史の蔭にひっそりと暮らす人々に思いを馳せながら、私は、車を走らせた。

ぶどう畑も闇に包まれ、星が輝き始めた。ヘッドライトの光の中に、小動物の姿が映し出され、すぐに消えて行く。

車のエンジンの音だけが静寂の闇の中で咆哮しているように聞こえる。

アルジェリアの町の灯が近づくにつれ、現実の世界に引き戻されて行く自分を感じていた。

つづく

「茶道史」勉強ノート（五）

忠内正之

豪商たちに見る茶の湯　江戸時代後期（続）

江戸時代の中期以降、商品経済が本格化してくると、にわかに商人層が台頭してくる。これら商人の多くは、商いに専念し、隠居した後に初めて自分の趣味生活に没頭するのが常であった。

しかし、数代にわたり安定して家業を継続した、大店では当主が早くから茶の湯を嗜む場合が多かった。

「破れ虚堂」の舞台となった、京都の豪商・大文字屋の場合もそうであったし、さらに三井、鴻池らも大文字屋以上に茶の湯の熱心な豪商であった。このようなあり方は江戸時代の後半を迎えても変らなかった。

江戸の豪商としてよく知られる冬木家は材木商として富を築くが、その所持する伯庵茶碗は冬木伯庵と名付けられていた。

また現在国宝に指定されている志野茶碗（銘卯花墻）は冬木家に伝わり、明治の中頃、室町三井家に移って今日に至ったものである。古来志野第一の茶碗として定評がある。

さらに松平不昧が生涯をかけて収集した茶道具のなかに冬木家から茶入れ「油屋肩衝」など宝物一点、利休作竹花入「園城寺」など大名物二点、牧谿の「踊布袋」などの中興名物十八点など総計五十点が譲られていることからも、冬木家歴代の茶の湯・茶道具に対する執心のほどがよく窺われる。

次に大坂、加賀、伊勢の豪商をとり上げて、茶の湯との係わりを見てみよう。

草間直方

大阪の豪商鴻池家に連なる草間直方は、京都烏丸綾小路の商人升屋唯右衛門の子として宝暦三年（一七五三）

に生まれている。

はじめ鴻池家の京都店に奉公するが、その才を認められて一七七四年には鴻池の別家の養子となっている。

さらに一八〇九年（文化六年）には独立して両替商を営んでいるが、その間、熊本藩、南部藩などの藩財政に関与しており、鴻池の一族としてその部門を担当して大きな活動を行なっていた。

隠居して和楽と号してからは貨幣史の研究に没頭し、「三貨図彙」という大著を完成させている。

その一方で、九十五巻におよぶ「茶器名物図彙」という大作をも編纂した。本書は、名物茶器・茶道具全般を大系的に叙述し、茶家系図なども筆録したもので、松平不味の仕事を質量ともに凌駕した書が「茶器名物図彙」だったといえよう。近世の町人による名物記の到達点と高く評価されている。

茶の湯の系統は表千家に繋がる。

銭屋五兵衛

この時期における北陸の代表的な豪商の一人に銭屋五兵衛（一七七三―一八五二）がいる。

銭屋の先祖は越前朝倉氏の出。能美郡清水村（石川県能美市）に帰農、数代の後に金沢に出て、父の代には両替、醤油製造、海運業などを営んでいたという。

一七八九年（寛政元年）十七才で家督を継いだ五兵衛は新たに呉服商を、次いで米の廻送業を始める。加賀藩の政策と相俟って事業を拡大、最盛期には支店は全国三十四か所、持船も二百艘以上、その総資産額は三百万両を越えていたと伝えられる。

しかし晩年に志した河北潟干拓に際して、潟底を固めるために使用した石灰によって魚が死んで浮き上がり始めたこともあり、毒物投棄の疑いをかけられて投獄、一八五二年（嘉永五年）八十才で獄死する。

五兵衛が書き残した「年々留」（年誌）からその茶の湯の様子を見てみる。年々留は五兵衛が隠居した、五十三才の一八二六年（文政九年）頃から三十年間にわたって書き綴られた記録である。なかには、家老本多図書等加賀藩の重臣たちとの交流も記されており、加賀藩と密接に結びつくなかで事業を拡大していったのであろう。

この「年々留」に茶道具の記載が初めてあらわれるのは一八二八年（文政十一年）三月、五兵衛、五十六才の時である。金沢の道具商等から二十数種の茶道具などを購入している。「瀬戸水指」（五十目）、「半開南京向付」（一貫四百三十六匁）、「楽焼瓢箪徳利」（五匁）などである。

時を経るに従って購入する茶道具は質量共に向上し、出入りの道具商にも変化が生じている。一八二九年の後

半頃になると、京都や大坂の茶道具商からも「斗々屋茶碗」（二貫目）、「織部香合」（金三十両）、「青井戸茶碗」（金百両）、「少庵狂歌」（一貫三百目）などを購入するようになった。

注目されるのは千宗室老より「西山名所棗被贈候付」（一八三六年＝天保七年正月二十日条）との記載がみられること。玄々斎宗室（裏千家十一代）からその好みになる棗が贈られていたのである。この前後から五兵衛と玄々斎は関りを持ち始めていたのであろうか。

さらに玄々斎が五兵衛の長男喜太郎に贈った和歌などがあり、親子ともに玄々斎の茶の湯を嗜んでいたようである。

「年々留」によれば、これ以降、総計四百種に及ぶ茶道具を金にあかして購入したことが記されているという。特徴的なのは五兵衛が個別の道具の購入年月、購入先、購入金額を逐一記していることであろう。

五兵衛は数多くの茶道具を集め、愛玩し、茶の湯に使ってはいたが、むしろ財産の一部として常に売買するものと考えていたようである。

これを示すかのように、一八四一年（天保十二年）を境として、突然といってもよいほどに茶道具の購入を記さなくなっている。その理由は判然としないがおそらくそれ以上に有益な投資の対象をみつけていたのであろう。

竹川竹斎

伊勢の豪商、竹川家は近江の戦国大名淺井氏を遠祖としている。初代友政は織田信長による小谷攻めによって伊勢に逃れ、後に松坂の射和に居を構えたという。

両替・醤油・酒などを商い、江戸、大坂などに支店を開き大いに繁栄した。

その七代が竹斎（一八〇九―八二）である。十二才から江戸店で五年半修業して射和に帰り、さらに大坂店で二年を過して文政十二年（一八二九）に家督を継いでいる。竹斎は家業の傍らさまざまな活動を行なっている。

灌漑用水確保のために新池構築、図書館施設としての射和文庫の創設、万古焼の再興、製茶事業の開始などである。

竹斎は茶の湯にも興味を示していた。竹川家をはじめとして国分・西村・中井・服部・乾・井上・永岡家など近郊の豪商たち十数名が射和で「益友社」を結成し、茶会を楽しんでいる。その中心となって活動をしていた。

天保十一年（一八四〇）には大坂支店への帰路、京都裏千家の玄々斎宗室を訪れて茶道を学び、翌年には、玄々斎宗室が伊勢の竹川竹斎を訪れて、益友社中に茶の湯を伝授している。嘉永五年（一八五二）には竹斎が裏千家を訪れ、その代表的な茶室である「今日庵」で玄々斎とともに茶事を行なうまでになっていたのである。

以上幕末における三人の豪商たちの茶の湯のありさまを見た。

さらに同時代には各地に巨って茶の湯が根づいており、茶器研究にいたる人物、茶道具を有効な投資手段と考える人物、教養・趣味として茶の湯を捉えていた人物などさまざまな姿が浮びあがってくる。

江戸時代後期から幕末の豪商一覧

屋号及び家名	本拠地	支店	業種	特徴	茶関係特記事項
仙波太郎兵衛家	江戸		金融		道具収集
川村伝左衛門家	江戸		金融		道具収集
鴻池屋鴻池家	大坂	江戸	金融		道具収集
泉屋住友家	大坂	江戸長崎	銅山経営・金融		道具収集
加島屋広岡家	大坂		金融		道具収集
千草屋平瀬家	大坂		金融		道具収集
大庭屋平井家	大坂		金融		
越後屋三井家	京都	江戸大坂	呉服・金融	現金掛値なし	道具収集
大丸下村家	京都	江戸大坂	呉服・糸割符	現金正札売買	
白木屋大村家	京都	江戸	呉服		
松坂屋伊藤家	名古屋	江戸	呉服	現金掛値なし	「茶則」作成
萱津屋近藤家	名古屋		酒造・質		
宮竹屋亀田家	金沢		薬種		道具収集
河本家	岡山	京都	全国諸物産問屋		茶陶製作
塩飽屋国富家	岡山		生魚問屋など		道具収集
後藤家	米子		海運・新田開発		
太田屋加納家	水戸		薬種		道具収集
新潟屋本間家	酒田		金融・質地地主		道具収集

幕末に至って豪商たちの茶は、時代をリードした大名たちと肩を並べたといえよう。

江戸時代後期から幕末にかけて活躍した各地の豪商たちは、別表の通りで、近代の茶の湯の一端はこれらの人物たちによって形成されつつあったといえる。

井伊直弼と玄々斎（幕末の茶の湯）

幕末の代表的な茶人を挙げるとすれば、彦根藩十三代藩主井伊直弼と裏千家十一代家元玄々斎宗室であろう。

直弼は彦根三十五万石の藩主として、さらに大老として国政をリードしながらも、その一方で茶の湯を追求して「茶湯一会集」を完成し、「一期一会」「独座観念」にみられる茶の湯観を定着させていった。

一方、玄々斎宗室は、それまでの利休以来の京都における本拠を守るのみならず、貴族や大名家をも門下に擁し、地域や身分を超えて茶の湯を展開していった。

二人は大名と茶匠という立場を超えて近代における茶の湯の基を作り出したといえる。

井伊直弼

井伊直弼は、文化十二年（一八一五）、彦根藩十一代藩主直中の十四男として生まれた。幼時から大名家の一員としての素養を身につけるべく、弓・馬・剣術のほかに茶の湯・和歌・禅に力を注いでいる。

天保二年（一八三一）、十七才の直弼は生まれ育った槻（欅）御殿から出て「埋木舎」と名付けた屋敷に移ることになる。父の直中が没して長兄直亮が藩主となったからである。いずれ他家の養子となるまでの仮住いだった。

この屋敷で埋もれ木になぞらえた生活を十五年の長きにわたっておくるのである。

（かつて筆者もこの「埋木舎」を拝見したことがあるが、その質素なたたずまいに驚ろいた記憶がある。）

直弼は埋木舎では朝六時ごろには起床、夜の一時から二時ごろまで、禅・国学・和歌・剣術を欠かさず研鑽を怠らなかった。殊に茶の湯は小部屋を改装して「澍露軒」と名付けた茶室を作って、藩お抱えの能役者・高安彦左衛門や片桐宗猿門下の眞野善次から熱心に学んだと伝えられている。

さらに屋敷の裏手には窯を築き、茶入や香合などを造っている。またここでは茶の湯の著作をものしていた。「入門記」、「閑夜茶話」などである。とくに「入門記」は石州流のなかで新たな一派の樹立を宣言した書でもあった。後の直弼の茶の湯を知るうえで貴重な一書である。

ところが弘化三年（一八四六）、藩主を継ぐ予定であった直元（直中十一男）が没したため、井伊家にただ一人残った直弼が藩主の後継者としての生活に入ることになる。埋木舎を出て江戸で藩主見習いとなり、嘉永三年（一八五〇）には十三代藩主となった。

幕末の将軍継嗣問題の中で、紀伊徳川派によって大老に擁立され、直ちに徳川慶福を十四代将軍（家茂）に決定した。また、米国総領事ハリスの要請を入れて勅許を待たずに日米通商条約に調印した。

これに反対した尊皇攘夷の声は日々に強まり直弼はこれを徹底的に弾圧して、いわゆる安政の大獄を引き起こした。このため万延元年（一八六〇）、江戸城桜田門外において水戸、薩摩の浪士たちにより暗殺された。

直弼は幕末の大名茶人として有名である。それは「一期一会」「余情残心」の言葉に象徴されるように、茶の湯の理念を端的にあらわした「茶湯一会集」の著述に負うところが大きい。直弼が「茶湯一会集」の著述のみに終っていたならば大いなる思索家だったといえるだろうが、それのみならず数多くの茶会を行ない、その客となっていたから、まさに実践をともなったまれな人物であった。

直弼の茶会は、現代知られているだけでも約一六〇会に及ぶという。これらの大部分が藩主就任の翌年から桜

田門外の変で倒れる万延元年までのおよそ一〇年間に行なわれており、藩政・国政に関与したもっとも多忙な時期であったことを考えれば、生半可な数ではない。茶の湯への傾倒振りが窺える。

茶会記や記録を総合すると直弼は茶会を行なう傍ら、茶書を読破して好みの茶道具を作り出し、自らの家臣たちに茶の湯を伝授しながら茶名を与えていた。またそれだけではなく「茶湯一会集」など多くの茶書を完成していたのである。

こうみてくると直弼はありきたりの趣味や素養で茶の湯に関わっていたのではなかった。松平不昧のように派手な行動はしなかったけれども、内実はそれまでの茶人の活動をはるかに超えており、すでに近代茶道への扉を押し開いていたといえる。

惜しむらくは四十六才の活躍盛りを凶刃によって倒されてしまったことであろう。

玄々斎宗室

裏千家十一代家元玄々斎は、徳川将軍家に連なる三河奥殿藩主松平家（西尾藩大給松平家の支藩）に生まれている。文政二年（一八一九）裏千家に入り十一代を継承する。十七才であった。

裏千家当主としての最初の大きな仕事は、天保十年（一八三九）九月八日から翌年二月二十八日までに行われた利休二百五十回忌法要と追悼茶会であった。この茶会はかつてみられない規模で行なわれている。

法要と茶会のために裏千家の大増改築を行い、内大臣近衛忠熙を招いた会を皮切りに、八十余会にわたる追悼茶事が行なわれたのである。「御香典録」には有栖川宮などの各宮家、近衛・九条・鷹司家などの五摂家のみならず田安・久松家などの大名家までがみられるので、きわめて盛大に行なわれたのであろう。

利休二百五十回忌を終えた玄々斎はすぐさま江戸へ下向している。尾張藩主徳川斉荘に茶の湯を伝授するためである。約半年にわたった滞在の末、尾張徳川家から新知行二百石のほかにもさまざまな拝領物があり、京都に帰っている。翌天保十二年には休む間もなく伊勢の竹川家を訪れている。竹川家は前述の通り伊勢における中心的な存在であった。

さらに天保十四年には、江戸に下って主家の松山藩主松平勝善に茶法を伝授、弘化年間（一八四四―四八）には何度も松山に赴いている。また嘉永年間（一八四八―五四）には江戸で松平家の茶事を準備している。嘉永五年（一八五二）十一月には松平家下屋敷の茶室「楽玩亭」で、井伊直弼や若狭小浜藩主酒井忠義、幕府茶道の谷村可順らを招いた茶の実務にあたった。幕末を代表する茶人二人の出合いとして注目される。

安政年間（一八五四―六〇）には三卿の一つ田安家の依頼によって京都で茶室を造り、これを分解して海路江戸横網町の田安家に運んで組み立て、完成なった「富貴軒」で井伊直弼、若狭小浜の酒井修理太夫らを客とした茶会を行なっている。

玄々斎の活動は明治維新をむかえても、さほど変化はない。明治七年には横須賀家に仕えた古屋宗仲（玄々斎直門の弟子）の招請によって阿波徳島に出向いているし、帰京直後には金沢にも出向いている。時代が大きく変わっても活動振りは変わらなかった。

玄々斎は天保十年の利休二百五十回忌以来、知恩院宮・近衛家・九条家・一条家・東本願寺門跡などの御成を得ていたし、徳川将軍家を支える三卿の一つ田安家をはじめとする諸大名家とも密接な関係を築きあげていた。

玄々斎の公式にわたる活動は、禁中献茶として結実する。すでにそれ以前、千利休をはじめとして三代宗旦による御水尾院らへの献茶が続けられていたのだが、しばらく中断しており、玄々斎はこれを復興させようと努力していた。

一八六五年（慶応元年）八朔（八月一日）、玄々斎は第百二十一代孝明天皇に献茶を果たす。この時の喜びを玄々斎は「禁裏へ龍の影濃茶及び高砂松ヶ枝茶匙献上の辰、喜び謹で慶す」として五言絶句を作って、献茶の再興がかなったことを記している。

この献茶は一八六九年（明治二年）の東京遷都まで続けられている。

翌一八六六年（慶応二年）正月には、無事に献茶を果たした喜びを同門に分かつための茶会を行っている。

その茶会では掛物は掛けず、代わりに「床ニ翠簾ヲ懸ル」とあるので、御簾の向うに天皇がおわしますという気持ちを表わしていたのであろうか。現在、初釜に使用されている菓子「花びら餅」も当春御所ニテ拝領之、御菱花平、余慶ニ付福分候也」と記され、参会者に分たれたことが知られる。

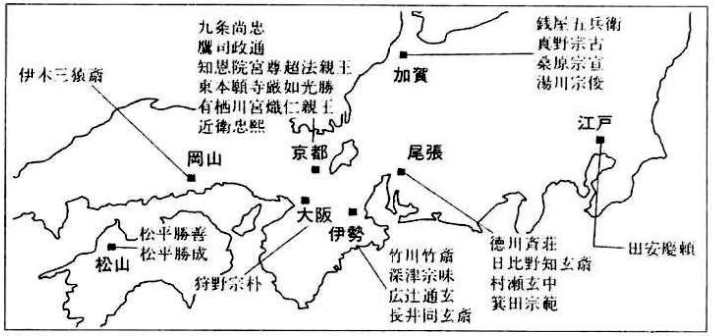
玄々斎の活動の一端をみただけでもその幅広い交流には目を見張るものがある。既述した伊勢の竹川竹斎や加賀の銭屋五兵衛などの豪商、田安家の出で尾張徳川家を継いだ知止斎徳川斉荘、その家老で実兄の渡辺規綱、備前池田家の家老の三猿斎伊木忠澄（三万石を領す）、さらに東本願寺門跡、知恩宮や有栖川宮などの各宮家、近衛、九条、一条、鷹司家などの摂関家等、各層にわたっている。

江戸時代における茶の湯の世界でこれだけの人脈をもった人物は他にはいない。

それまで京都を中心とした活動を行ない、出仕先を限定してきた方針を玄々斎は大きく変更したのであった。玄々斎の茶の湯は地域や階層を大きく越えた広がりを持つことになったのである。玄々斎の茶の湯は、江戸時代の茶の湯の在り方をはるかに越えて、すでに近代における茶の湯の様相を示していたといえるのであろう。

なお蛇足を加えるならば、玄々斎はお家元として五十年の長い間を在任して、茶法では立礼式、茶箱の点前などを考案した。また明治維新後、茶道界を代表して政府に建白書「茶道ノ源意」を提出するなど、ひとり裏千家茶道のみならず、茶道の啓蒙、近代化を通じて茶道界全体のために多大の貢献をしたのである。

続く



玄々斎の主要門下分布図

短歌

行雲流水（三十九）

石黒修身

近詠二十首

歌舞伎座

歌舞伎座の新装なりて「柿葺落（こけらおとし）」興赴きて馳せ観じたり

歌舞伎座は外観遺し背後には近代ビルを繋ぐ趣向で

歌舞伎座に集うファンは高齢で何か通ずる面持つと視る

歌舞伎には不明なれども伝統の演目こなす役者に目瞠（ひら）く

今月の演（だ）し物は何（なに）役者は唯（だれ）と席とる妻に従う吾は

三浦雄一郎

エベレスト最高齢で登頂せし「三浦」は同期キャンパスの友
目標を持てば齢はとらないと「三浦」は説けりアンチエイジを
年寄は仕事半分と「三浦」は言う蓋し至言と諾いており
「三浦」をば讃える賞の選定に迷う政権おかしくもあり
ともかくも偉業遂げたる吾が友に名も無き吾は讃歌奉る

故郷にて

札幌の南西に続く山並みは吾が眼裏に絵のごとく映る
リラの花散りたる後の札幌はアカシアの花白く咲くらん
寂れゆく小樽の街は閑として運河と倉庫のレトロが残る
レトロ追う観光客の群れの間にロシア語表示が目立つ小樽は
夕張の復興は聞かず名物のメロン初値の高きに驚く

身辺

杖をつく友また一人増え加齢の想い一入募る
ＴＰＯ弁えざるか老人の冗長すぎるスピーチを忌む
老いたれば角がとれたと言うべきか余りに唯々たる人を訝る
老齢を誇示するごとき振舞の著るき人らの心情測る
感性も詩想も最早枯れたのか八十路の吾は今日も短歌詠む

老人会　会長のつぶやき（その二）

―新米老人会長Aから親友Qへの手紙―

伊治　哲

Q君久しぶりだね。元気かい？　体にはくれぐれも気をつけてくれよ。前にも言ったように、オレたちにとって、「健康長寿」がなによりも大切だからね。

最近、「100歳までボケない101の方法」とか「大往生したけりゃ医者にかかわるな」なんていう、人を食ったような表題の本が読まれている。またいい加減なハウツーものだろうと思ったが、ちよっと読み齧ってみた。なかなか壺をついた面白い本だ。その要所、要所を、梶山長生会のレポートに「ひとくちメモ」として利用させてもらっている。

例えば、「探し物をしているうちは大丈夫」「カラオケは一石二鳥の長寿法」「おしゃれな人は長生きする」「あきらめは老化のはじまり」「パチンコより麻雀」「歳をとっても異性にときめきを」などの指摘がある。意表をつきながら、なぜか納得感があるんだな。本屋での立ち読みにちようどいいよ。

――組織はやっぱり〝人〟だ――

話が変るが、つい最近、九五歳の男性会員が亡くなった。ただ一人の戦争体験者で、つい昨年まで一緒にバス旅行に行ったり、自治会館の掃除に率先して精を出してくれていた。定例会で、ボルネオでの自らの戦争体験を話してもくれた。その人の口癖は「頼りになるのは〝戦友〟ですよ。〝向こう三軒両隣り〟です。〝長生会の仲間〟です」だった。大往生ではあるが、われわれにとっては貴重な先輩であったので、とても惜しい人を亡くしたと本当に残念だ。

毎週、近くの公園を借りてグラウンド・ゴルフを楽しんでいることは前に話したが、これもごく最近、公園の管理者がグラウンドの整地工事をしてくれて、とてもプレーがしやすくなった。もちろん周辺マンションに住む住民の安全のためなのだが、われわれも大いにその恩恵にあずかるわけだ。期せずして、月に一回プレー終了後われわれの手でゴミや枯れ葉の掃除をしようという声が上がった。こんな声が会員の中から自主的に湧いてでてくるなんていうことは、前には考えられなかった。嬉しかったよ。これも、常に黙々とグループを支え、リードしてくれているスポーツ・リーダーが、それとなく皆を誘導しているようなのだ。余計に嬉しくなったよ。

もうひとつ、つけ加えよう。長生会のような単位クラブには一名の女性委員を置くことになっている。区老連（上部団体の区の老人クラブ連合会のこと）の女性委員会が主管するコンサートや映画会、研修会、手芸教室などの参加希望者を募り、チケットなどの配布や人数の調整を担当する、いわば下働きの役目だ。わがクラブの女性委員は、もともと口八丁手八丁の女性だが、最近めきめきと手腕を発揮してきた。

説得力、調整力、実行力など、申し分のない働きぶりだ。昨年からこの地区の女性委員代表に選ばれて、ますます油が乗ってきた。たまには多忙の故のグチが出ることもあるが、でも嬉々として役目をこなしているところをみると、まんざらでもなさそうだ。早くご主人を亡くした未亡人だが、孤立や引きこもりなど、どこの世界のことかといわんばかりだ。今後の成長株として期待している。

こうして、老人会も、その会員も、老人クラブ活動を通じて、知らず知らずのうちに、人間として、また高齢者として、一歩一歩成長し、互いの結びつきを深めつつあるといえる。オレは、これが老人会が目指すべき本当の姿だと信じ、これらの人たちを指標として、人づくり、組織作りを進めていきたいと思っている。そういう意味では、老人クラブ運営のポイントは、企業経営と同じように〝人づくり〟〝人材つくり〟なのだと、つくづく思うようになった。

今日も区老連の会議に出てきた。ここのところとりわけ足繁く区老連に通っている。前にもちょっと触れたが、今年は区老連創立五十周年に当っていて、三月に記念式典を挙げ、同時に区老連五十年誌を発刊する予定で、いまその大詰めを迎えているのだ。実行委員が式典の進行や手順をチェックしたり、記念誌の編集委員が最終ゲラの校正をやったりしている。

ところが、「船頭多くして船山へのぼる」というが、山にのぼるどころか、一向に前へ進まず、時間ばかりが進んでいるという状態だ。というのは、老人のやることに完璧を求めすぎて、どっちに転んでもどうでもいいような些事にこだわり、進むべき方向が見えなくなってしまうのだ。大所高所から進むべき方向を明示すべき立場

の人が、方針どころか、目先の小事に口を挟んで、却って混乱を招いている感が強い。マジメといえばマジメなんだが、なんでも自分の思うとおりに仕上げないと気がすまないんだな。大スジを掴んで、小さな遺漏があってもそれには目を瞑り、担当者の創意工夫に任せるという度量がほしいと思うよ。本来、人間は〝任せなければ育たない〟のだから。

この様子を見ていて、以前のオレ自身を思い出したよ。最初の頃、ウチのクラブを秩序ある、整斉とした組織に作り変えようとして、〝烏合の衆〟の現実に右往左往させられたことがあった。やはりものごとを進めるのに無理をしてはいけない、まずは自然体で臨むべきだと思う。まして、このような老人の集まりがやることは、多少の誤差脱漏があっても、却ってご愛嬌で許されるのではないかと思うのだが、間違っているだろうか？

ちよっと余計な話をさせてくれ。

大きな杉の木を見るのには、てっぺんに登って下を見下ろすより、一番下の根元から少し距離をおいて上を見上げる方が、杉の木の実像を掴みやすい。上から見下ろすと、中ほどの枝や葉が視界をさえぎって、根元まで見通すことができないが、下の根元から少し離れて見上げると、下からてっぺんまで全体の姿を視界に収めることができる。上から見るか、下から見るかで世界は違うのだ。つまり、常に底辺に立って下々の実態を見つめるとともに、そこから少し距離をおいて上部構造まで見上げなければ、全体を把握することはできないということだ。どのような組織のトップでも、組織が大きければ大きいほど底辺に下りて、下から上を見上げるという視座をもつべきだ、というのがオレの信条だ。

昔、労働組合の中央執行委員を務めたとき、底辺で働く人たちの意見や実情がいかに上層部に伝わっていないかを痛感した。それ以来オレは、上に立てば立つほど自ら底辺に降りていくことが重要であることを常に強調してきた。

これも大分前のことだが、一九九五年の米フォーチュン誌が「最も称賛されるアメリカ企業」のトップに、日用雑貨を製造する名もない中小企業「ラバーメイド社」を二年連続で選んだことがあった。一四年間連続増収増益を達成したこの会社の経営思想は徹底した「顧客・現場志向」だった。例えば、この会社の組織図は、普通の企業にみられるような経営トップを頂点とするピラミッド型組織図とは違って、消費者を頂点にして、第一線の営業をその下におき、本部スタッフやCEOは最下段に位置する逆ピラミッド型なのだ。CEOを始め、中間スタッフは第一線の営業を支えるサポート役に徹するというのが、この会社の経営哲学だ。優秀企業に選ばれたのは、この思想が大きく評価されたのだ。

老人クラブを企業になぞらえるのは、やや違和感があるかもしれないが、組織論としては全く同質であると考える。要は、経営には上意下達以上に下意上達が必須であると思う。なかなか下意が上達しないのであれば、上位者自ら下位者のところへ下りていくべきなのだ。市老連や区老連の役員は、底辺の単位クラブにまで出向いて膝突き合わせて話を聞くべきだ、本当はそれが彼らの本来の仕事なのだ、といいたい。

――セレモニーと形式――

ついでにもうひとつ。

五十周年記念式典といっても、中味は偉い人の祝辞と永年役員勤続者の表彰なのだ。そのあと第二部に小中高生を招待してコーラスや吹奏楽を奏でてもらうことになっている。後者は世代間の交流として意味があるのだが、いまどき、勤続表彰などというのはいただけないね。式典の恰好をつけたいのだろうが、そんなことをやるくらいなら、著名人を招いて、一番身近な高齢者問題の講演でも聞いたほうがよほど意味があると思うのだが。

とにかく、この組織はセレモニーと表彰が好きだ。事大主義というか、仰々しいことが好きなんだね。

通常の会議でさえセレモニー化してしまうのだ。冒頭から直ちに議論に入ればいいものを、開会の辞から始まって、挨拶、議題説明と〝式次第〟がまかりとおる世界なのだ。年寄りの時間は無限にあるとはいうものの、本当は人生の残された時間は少ないはずだ。もう少し時間を有効に使わなければもったいないと思う。

またこんなことも考える。毎年の市老連大会は、例によって市老連役員の勤続〝表彰〟がメインだし、区老連の総会では、前年の会員増強優秀クラブの〝表彰〟がハイライトになる。永年役員として奉仕されたことには大いに敬意を表するが、問題はその〝永年〟の間に「老人クラブのため、なにをやってきたか」、その中味が問われなければならないはずだ。時間が経過しただけの〝永年〟では表彰に値しない、といえば酷だろうか。さらに、会員を増やすことが極めて難しい中で「どうやってそれだけの会員を増やすことができたのか」が発表されてしかるべきだ。ところが、表彰状をうけとった人から、その中味についての言及は一切聞かれないし、そのための〝議事次第〟も予定されていない。空虚な思いで会場をあとにするのがいつもの例だ。

形式は、大きな組織を統轄するうえで欠かすことのできないケジメだと思う。しかし、〝形式主義〟に堕してしまっては、やったことの意味を失ってしまう。

上記のほかにも思い当たることがある。毎年度初めに提出を求められる「単位クラブ活動報告書」である。三五項目の活動種目について、前年一年間の実施回数、男

女別参加人員、非会員の参加人員等を所定の用紙に記入して報告することになっている。それを区老連、市老連が集計して、活動種目別の参加クラブや参加者数の各区別、あるいは各単位クラブ別の比較をするのであろうが、評価の結果を何に、どう反映しているのかは、未だかつて聞いたことがない。

また、回数や参加人員だけですべての活動の充実度を評価することにも疑問がある。そもそも誰があのような報告書に一々目を通しているのだろうか。本来、この種報告書の実質的な目的は、どのような活動をしたか、その成果と問題点は何であったかを問うものでなければならないはずである。

問題は活動種目の表現にもある。ゲートボールやグラウンド・ゴルフなどのスポーツは回数や参加人員だけでもおおよその傾向値は推定される。しかし、「友愛活動」「美化・清掃」「交通安全」「防犯・見守り活動」「月例会」「防災訓練」「世代間交流」というような定型化できない活動の数字をどのように見つめても、その実態をイメージすることは到底不可能である。なかでも「学習（外国語等）」にいたっては、お笑いぐさにもならない。いまごろ英語や中国語を勉強している進歩的老人クラブがあるのだろうか。老人の学習といえば、まず「健康」「保険」「認知症」「年金」あるいは「相続」「遺言」などの老人向け一般常識ではないかと思う。老人の生活実態を知らない人の作文としか思えない。

すこしやぶ睨みで見てみよう。まさか数字を粉飾するような不心得者はいないと思うが、形式主義が行過ぎて、外面だけを飾った架空の数字に踊らされるというようなばかばかしい結果になってはいないだろうか。往時の軍隊で馬鹿げた常習化した員数合わせの悪癖を笑えないようなことになってはいないだろうか。

形式主義は往々にして権威主義やエクスキューズに悪用されがちである。最も怖いのは、組織が形式主義に馴れてしまって、形式さえ整えばすべて良しとする風潮が当たりまえになることである。心すべきである。

穿ちすぎかもしれないが、この報告は、毎年支給する単位クラブへの助成金の裏付けのためだけにとっておくのではないかとさえ思われる。そうとすれば、まさにエクスキューズの最たるものといっても言い過ぎではない。もっとも、上部機関としては、それも必要なのかもしれない。そうだとしても、折角集めた報告書をもとに、具体的なクラブ活動の指導に活用できないものか。そうすれば、苦労して書き込んだ報告書が生きた報告書によみがえると思うのだが。

――ホンネとタテマエ――

次に〝ホンネとタテマエ〟の話をしよう。

率直に言って、この組織では、タテマエ論が巾をきかせて、ホンネ論が影を潜めている。キレイゴトが大手を振って、真実を見えなくしている。ホンネを話すと、タテマエ論にかき消されてしまい、折角の議論の場がシラケてしまうから、議論が弾まない。

例えば「友愛」について前便に書いたと思うが、思い出してくれるかい？　老人クラブ活動の三本柱は「健康」「友愛」「奉仕」とされているが、オレに言わせれば、「友愛」が老人クラブ活動のすべてだと思っている。老人クラブ活動は〝友愛に始まって、友愛に終る〟といっても過言ではない。しかし、「友愛」という言葉がきれいすぎて、どうもオレにはなじめない。本当の「友愛」はもっと泥臭いものだ。オレは、「友愛」ではなく「隣人愛」と言っている。

日常のありふれた生活の中に、向こう三軒両隣とのオープンな生活空間を、当たりまえのこととして築き上げること、それが「隣人愛」だと考える。

「隣人は最も身近な他人」といわれる。四六時中、顔つき合わせる緊密な付き合いでなくていい。普段はほどよい距離感を保ちながら、イザという時に声をかけ合い、助け合える仲間でありたいのだ。〝近所〟は文字どおり〝近助〟でありたい。

そのためには、他者への気配りを平素から積み上げていかなければならない。そしたら、自然に〝隣りの他人の気配〟をそれとなく察知できるようになる。ポストからはみでた新聞や配達物、雨戸の開け閉めの変りよう、洗濯物の取り入れ時間など、日常生活の微妙な変化の有無を、五感が感じとってくれる。

このような「近助」付き合いの輪が、わが家から隣りへ、隣りからまたその隣りへ、さらにその隣りへと広がっていったら、大きな〝老人力〟の輪に成長していくのではないだろうか。

本当の「隣人愛」とはこのような結びつきをいうのだ。

ところが、〝官製〟（と思われる）の「友愛」は違う。横浜市では昭和四六年に「友愛」という名称や事業が登場したといわれている。この制度は、単位老人クラブから推薦され、横浜市長から委嘱された二名の友愛活動推進員が、民生委員、保健活動推進員と三者協働で「ひとり暮らしの高齢者定期訪問」を行ったことから始まったとされる。その後、制度の変遷を経て、現在は、市老連理事長が委嘱した一クラブに五、六人の友愛活動員が、夫々の担当区域の「訪問」「見守り」「外出援助」「居場所・たまり場づくり」をすることになっている。つまり、名称や活動態様は変ってきたが、基本的に〝制度〟として〝組織化〟したものであることは全く変っていない。要は名称も活動も上からのお仕着せなのである。

つまり、われわれにとって一番身近な「隣人愛」さえ

も、お役所が作った制度と組織の〝形式論〟〝タテマエ論〟に規制されてしまうのである。〝制度〟とか〝組織〟とかは、お役所の最も好むところのもののようである。なにごとも、一定の形を整えなければ役所の仕事にならないからだろう。いわゆる〝ハコモノ〟が好きな事情もどうやらこのあたりにあるようだ。

形さえ、ハコさえ立派であれば、中味にはそれほど重きをおかない。その証拠がある。ある時期から「友愛」活動の対象者は老人会の会員に限るという解釈になった。隣人がどんなに苦しんでいても、会員でなければ声をかける必要はないというのだ。なんという人間性無視の論理であろうか。「友愛」「隣人愛」が「博愛」に通じる崇高な精神の発露であるとするオレの主張とは全く相容れない邪悪の思想だと言わざるをえない。

悲しむべきは、会員の一部にこの措置を歓迎する向きがあることである。活動員の負担がそれだけ軽くなるという理由だ。しかし、心ある高齢者はその矛盾をひそかに感づいているはずだ。そして、このような考えが、老人クラブと外部との間に壁を作り、老人クラブの世界を益々狭いものにしていくことに気づくはずである。

最近の会員数の減少、とりわけ団塊の世代の若手高齢者が示す老人会への関心の薄さは、一律的、画一的に拘束されることを極端に嫌う世代であると同時に、上記のような老人会の閉鎖性に嫌悪感をもつことが一因になっているといっては言いすぎであろうか。

――**会員増強**――

それでは次に「会員増強」について話を移そう。

大分前だが、社会福祉協議会主催の「地域活動活性化フォーラム」を聞きにいったことがある。地域活動であるから、当然「老人クラブ活動」も話題の一端に入るだろうと期待したからである。ところが、二時間近い討論の間に、一度として「老人クラブ」の名前が出ることはなかった。ただし一回だけある。ある地区自治連合会の会長が「当地区には『会員制老人会』があって・・・」と発言した。

オレは「会員制老人会」という名称を聞いたのは、その時が初めてだった。

夜の銀座の「会員制クラブ」というのは知っている。選りすぐったエリートが名前を登録した高級社交クラブのことだ。一般客を排除して高級感をくすぐろうとする銀座クラブ界の演出法であろだろうと推測していた。そこには明らかに非会員は入場できないとする排除の論理がある。

ところが、考えてみると、われわれの貧しい老人会も、〝会員〟で組織していることはまちがいない。入会して年会費を納めなければ〝会員〟になれないからだ。言われてみれば、たしかに「会員制老人会」なのだ。だが、

非会員を排除しようという概念は全くない。ないどころか、むしろ非会員が会員になってくれることを口を開けて待っているのだ。

毎年市から下りる助成金も、会員とともに非会員も巻き込んだ活動に活用すべきものと解釈している。実際、われわれのバス旅行やグラウンド・ゴルフなどの活動には、他の非会員も呼び込んで、ともにレジャーライフを楽しもうと働きかけている。極めてオープンに運営しているつもりである。

ところが、上記の某自治会長のように「会員制」を強調されると、老人クラブが、他を排除する閉鎖的な組織であるかのように聞こえて甚だしく誤解を与えることになる。自治会長でさえこの程度の誤った認識をもっているのだから、フォーラムで老人会が話題に上らないのも至極当然のことだろう。それにもまして、このような間違った認識が会員増強の大きな障碍になっているのだ。

前にも話したが、老人クラブの会員数は、この十年間減少傾向が止まらない。全国老連の会員数は、一九九八年の八八七万人をピークに、毎年減少し、二〇一〇年には七一八万人にまで落ち込んでしまった。当然のことだが、老人会は終末期に近い人で構成しているわけだから、相当の努力をしなければ、確実に減少することは目にみえている。

いつに、現場、つまり単位クラブのたゆまぬ努力にかかっているわけである。

しかし、会員を増強するのに王道はない。平生の地道な努力以外に方法はない。

ある単位クラブ会長が、「道で出くわした、それと思しき人の自宅にまでついていって、口説き落とした」と自慢げに話すのを聞いたことがある。その粘り強さと熱意には感心するが、このような一本釣りがどこまで功を奏するかは疑問だ。

王道があるとすれば、ただひとつ、入会したくなるようなクラブを作ること以外にない。省みてやや口幅ったいことを言うようだが、〝入れるのではなく、入りたくなる会〟を作ることが、まず先決だと思うのである。そして、〝集めるのではなく、集まる会〟にすることが理想なのである。

〝入りたくなる老人会〟とはどんな会か？　これが難題だが、やさしく言えば、〝明るい、楽しい、仲がよい、そして生き生きとして活動的〟な老人会というイメージではないだろうか。中でも、いわゆる〝若手高齢者〟は、老人扱いされるのをよしとしない気運が強いといわれるからなおさらである。

「グラウンド・ゴルフをやりたいから老人会に入れてほしい」という人が現れたときは、実に嬉しかった。「苦労してグラウンド・ゴルフのチームを立ち上げた甲

斐があった」と皆で喜んだものだ。別にグラウンド・ゴルフに限らない。童謡・唱歌の合唱でもいいし、麻雀や囲碁・将棋でもよい。高齢者の気持を奮い立たせるような魅力に富んだ集まりにしたいと願っている。

――次世代に引継ぐために――

このように、上部組織も含めた老人クラブ全体の体質には、大いに改めるべき点がある。

前述した一律、画一的な形式主義、ホンネ論よりタテマエ論、セレモニー化による権威主義がそれである。高齢者への仲間入りが近い戦後生れの団塊の世代は、このような体質、風土に最も抵抗を覚える世代である。

日経新聞と楽天リサーチが「今後、何を重視したいか」という意識調査行った結果によれば、団塊世代男性の三人に一人が「地域貢献」と答えたという。「第二の人生は地域貢献」という団塊世代層の意欲を潰さないで、自立的、主体的な意思が発揮でき、行動に移すことができる場を用意することが、老人会を次世代に引継ぐための重要な努めだと考えている。

つづく

（二〇一三年三月十一日　記）

初夏の会津小旅行

吉田忠雄

私は北二会の人たちと共に6月4日、5日に会津を小旅行した。北二回とは昭和27年に東大教養学部の駒場寮北寮2号室に起居した人々の会である。ちょうど会津と関係のあるＮＨＫのドラマ「八重の桜」が放映されていた時期であり、行く先々ではこのドラマの広告が多く見られた。

当日、数名の人たちと東京駅で待ち合わせ、東北本線で郡山駅まで行った。そこでＪＲ東日本磐越西線に乗り換え、柳津まで行った。宿舎の清流の宿「かわち」から出迎えのマイクロバスが駅前に待っており、其れに乗って宿舎に行った。その日は近所の美術館を見学し、ホテルで夕食をとって寝た。

翌朝は宿で朝食をとり、マイクロバスで会津若松にて、市内観光をした。会津若松市は歴史豊かな街で見るべきものが多くあった。若松城、御薬園、白虎隊墓所などが名所であった。

若松城は多層の天守閣を持つ堂々たるお城である。私達は最上階まで登った。息が切れた。おそらく東北の守りを固めた徳川氏のとりでであったのであろう。

御薬園は薬草園であり、若松城主が住民のために薬草を栽培したところである。

白虎隊墓所では白虎隊の若い隊員達が自決したことに思いをはせた。

私の自宅は東武線の沿線にある。東武線の始発駅は田島駅であるので、私は他の人々と分れて田島駅まで行き、そこから一人で各駅停車で家の最寄駅新越谷まで帰った。かなり長い時間電車に揺られてさすがに疲れた。

目耕録（その十一）

――守田志郎著『対話学習日本の農耕』を読む（初版・一九七九年、農山村漁村文化協会）を読む――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（『世説新語』）。

山本鎭雄

数年前から、近くの畑でもダンポール（ガラス繊維強化プラスチック）という支柱を半円形状に曲げて土に埋め、その上にフィルムをかけ、その中で作物を作り、保温と防霜に効果を上げる。そんなトンネル栽培をよく見かけるようになった。それをするには、材料費だけではなく、手間と時間がかかり、強風に煽られると、フィルムが支柱から外れてヒラヒラと宙に舞うことが心配だ。その上、トンネルのなかに害虫が入り込み、結構食害されたことがあるので、今回は止めることにした。

昨年、雨が適当に降ってくれれば、大変有り難いのだが、週二回の水遣りはままならず、水分が不足した。二〇〇坪の畑には井戸も水道もない。畑小屋の屋根に降った雨水を樋で集めて、使わなくなった浴槽に貯め、畑に水遣りをしている。晴天の日々が続くと、しばしば浴槽に貯めた雨水が払底した時には、大いに困惑した。

悲惨だった秋冬野菜作り

本誌の前々号（一二七号、前号は休稿にした）に書いたが、昨秋の猛暑のために野良仕事ではほとほと閉口した。ただ、春夏野菜のナス、キュウリ、小玉トマト、ししとう、ピーマンの果菜類は豊作だった。秋、ホームセンターで買った白菜、キャベツ、ブロッコリーの苗も順調に生長し、冬になって何とか収穫することが出来た。ところが、小松菜、ほうれん草、チンゲンサイの葉菜類の種を厚めに蒔いても、猛暑と水不足のためか、なかなか発芽せず、三度目に蒔いた種がやっと発芽した。越冬し、早春になって、こんなに小さな葉っぱを食べたのは初めての経験だった。

秋冬野菜の種を蒔いたが、なかなか発芽しなかった。また猛暑の影響で土中の温度が上り、発芽や生育の適性温度を超えていたのであろう。もっと悲惨だったのは、大根、人参、カブ、ラディッシュの根菜類だった。二回ほど種を蒔いてもまったく発芽しない。三回目の大根、人参などの種蒔きは保温のために黒のポリマルチを敷き、穴を開けて種を蒔いたら、やっと発芽してくれた。

ところが、すでに時は遅く、気温はどんどん低下し、葉はほとんど生長しなかった。頃合いを見て、大根を掘り、料理して試食したが、味も素っ気も無かった。その後、寒さのために大根の小さな葉は枯れ、根は凍みてしまった。人参も発芽したのでそのままにした。春になると、葉が次第に生長した。そこで、間引いた小さな根を煮て試食したところ、根の中心部（芯）が固くなり、鬆立ちして不味かった。そこで、人参の根をすべて引っこ抜いた。

挽回の春夏野菜作り

農閑期の年末に三回ほど畑に出掛けた。そのうち、一回は肥料を蒔き、耕耘機で耕し、畑に青々とへばりついていた冬草を刈り取った。あとの二回は日帰りで畑の小屋の掃除と整理、春になって必要とする肥料の種類と数量を点検した。秋冬野菜の不作の原因は、暑さと水不足だけではなく、油かすや有機肥料などの肥料切れと、地力が低下したのかも知れない。

正月三ヶ日が明け、畑の小屋の整理のついでに、貧弱な白菜と虫害されたキャベツを収穫し、虫害された葉っぱを掘った穴に埋めた。ねぎとブロッコリー、小松菜とほうれん草、お粗末な大根とカブ少々をゆうパックで自宅に送った。白菜をリュックサックに詰めて持ち帰り、厳寒の翌晩に白菜の鍋料理に舌つづみを打ったが、残念ながら、葉肉には白菜独特の甘みとさくさくとした歯応えがまったくなかった。

ブロッコリーといえば、スーパーなどの売場では主枝の先端部に出来る頂花蕾だけが陳列されている。生産者は頂花蕾を出荷すると、根っこごと引き抜いてしまう。だが、ブロッコリーは頂花蕾を収穫した後、脇芽から小さな側花蕾が数個も出来る。それを料理すると、柔らかくて意外に美味い。ブロッコリーの場合、側花蕾は決して二次的なものだとは思わない。これこそ自給用栽培の特典だろう。

晩秋、絹莢えんどうと空豆の種を蒔いた。えんどうには寒冷紗をかけて防寒して越冬させた。例年になく大雪が降り、小さな葉と苗が雪害を受けるのではないかと心配したが、無事だった。えんどうは春になって蝶形の可

憐な淡紫色の花をつけた。収穫時期が遅れたため、莢のなかの豆が大きくなり過ぎてしまった。やはり豆自体の風味はグリーンピースにはかなわない。

空豆はまったく発芽しなかった。後で、スコップで掘り返したところ、大粒の種を全く見かけなかった。多分、鳥に食餌されたのだろう。そこで、ホームセンターで空豆の苗を買って定植した。茎は生長しないまま蝶形の淡紫色の花が咲いたが、茎の汁液を吸収するアブラムシが付着し、未成熟の小さな円柱形の豆果（莢）が空に向かっていた。空豆の栽培にも失敗した。小さな豆を塩湯でしたが、美味くないだけではなく、残した小さな莢は枯れてしまった。

年越しのカキ菜（江戸東京では野良坊菜と呼ばれている）は、発芽して小さな葉をつけたが、おそらく鵯に食害され、葉先も枯れていた。カキ菜の周囲に支柱を立て、防鳥テープを張り巡らしたが、後の祭だった。春三月、山笑う時期になると鵯を見かけなくなった。カキ菜は小さな葉と細い茎のまま小さな蕾をつけた。収穫して食べたが、ごく細の茎には独特の甘みが欠けていた。

カキ菜は、スーパーの野菜売場ではあまり見かけないマイナーな葉菜類だが、露地栽培のほうれん草や小松菜などの葉菜類が払底した端境期、貴重な野菜だろう。本来、生長した蕾と茎を一緒に掻いても、脇の茎から蕾と葉が生長する。湯掻がいたり、油で炒めたりして食べると、茎は柔らかく、独特の甘みがあって結構美味い。

八十八夜の別れ霜

畑の地表に霜柱が消えてぽかぽかした陽気になると、村人は一斉に畑に出て、肥料を蒔き、耕耘機で耕し、地均して除草する。寒暖を見計らって、「第二の主食」のジャガイモの種芋を植える。三月中旬、私は農協から購入した北海道産の男爵五キロの種芋を三作と、昨年収穫し、食べ残したメークインとピルカを種芋として植えた。毎年のことだが、汗をかいて作業を終えると、本格的に春の到来を感じる。

ところが、「八十八夜の別れ霜」ということわざがある。それは五月二日以降、最後の霜が降らなくなるというのだ。その日以前、遅霜が降ると、茶や桑の葉などに被害を与える。畑に遅霜が降り、ジャガイモの小さい葉が黒ずんで枯れた。村人のアドバイスに従い、そのままほったらかしにしておいたら、再び葉が生え、ひとまずほっとした。だが、今後の天候と地力によって、ジャガイモ特有の疫病に侵されると、決定的に被害を受ける（この拙稿を執筆中、梅雨の晴れ間にジャガイモを収穫し、天日に干した。今年は空梅雨が続き、例年と比較すると、小粒が多かった）。

昨年から今年にかけて、秋冬の根菜類作りの失敗を挽回しようと、早い時期に黒マルチに開けた穴に、三粒づつ大根とカブの種を点まきした。本葉が二枚に伸びたので、二株を残して間引きした。小松菜、ほうれん草、チンゲンサイ、シュンギクの葉菜類はなかなか発芽しなかったが、早くもその周囲に雑草が生えたのには驚いた。昨年のミニトマトの種子が発芽した。「実生」と思い、定植したら、生長したが、それはミニトマトの苗に似た唯の雑草だった。

この春、ほうれん草だけがなかなか発芽してくれない。小松菜、チンゲンサイ、シュンギクはなんとか収穫できたが、好物のほうれん草だけが生長せず、小さく、しかも枯れてしまった。雨が降らず、水分が不足したのであろうか。わずかに残った若菜を湯掻いて食べたが、甘みはなかった。天気予報は梅雨入り宣言をしたが、空梅雨の日々が続き、畑を歩くと、土が舞い上がり、ズボンに土ぼこりが付着した。春夏野菜の結末は次号であらためて書くことにしたい。

専業農家からの聞き書き

さて『目耕録（その九）』（一二六号）で内山節の『里の在処』を読み、彼が住む群馬県南西端の上野村の山里の自然と村人の生活について簡単に紹介した。その時、入手しやすい内山の作品を何冊か、流し読みをした。内山のエッセー『「里」という思想』（二〇〇五年）で、農学者の守田志郎が一九七〇年代初期に伝統的な「むら（村）」の積極的な意義を提起し、従来の「農村共同体」論を批判したと指摘されていた（一二〇頁）。そのことが、記憶にあって、書架を探したところ、守田志郎著『日本の村』（改題、初版・一九七三年）を発見した。

さらに守田の『むらの生活誌』（一九九四年）が復刊された際、内山は、守田が強調した営農について、自然と家と集落という三つの要素の継承と循環のなかで展開していると解説した。ところが、工業化と都市化という近代化の過程が農村を支えた「継承と循環」の系を破綻させたとも指摘したが、農民は伝統的な部落や生活慣習を継承しながら、しぶとく時代とともに懸命に生産と生活をしていると主張した。

オーストラリアのシドニーで生まれた守田志郎（一九二四―七七年）は東京都泊江市に定住し、近くの成城高校を卒業後、東京大学農学部で農業経済学を専攻し（のちに同大学農学部農業経済学科研究科大学院修了）、地主制度などの農業経済史の研究者としてスタートした。当時、日本の農業経済学史の農村共同体（部落と村）に関する通説では、社会の民主化を阻害する封建遺制や富農と貧農の農民層分解などが主要なテーマとされた。守田もまた研究生活初期に「日本の部落についての終局的崩壊の論理（いわゆる大塚久雄の経済史学、『共同体の基礎的研究』括弧内引用者）を一度はア・プリオリに身につけた」（『日本の村』）と告白している。

のちに、守田は耕地を含む生活と生産の家々の集合としての部落や村が変容しながらも、「厳存」しているとに固執した。そこで、守田は農業共同体の「終局的崩壊」論や農民層分解論という農業経済史の主要なテーマから離脱し、頻繁に農村・農家を訪れ、虚心坦懐に農民の話に耳を傾け、農民との討議にも参加し、各種の文献にも精通し、部落や村をはじめ、農業、農地、農法、農耕などについて著述した。

高度成長期の米の増収ブームの最中、㈱農山村漁村文化協会（通称、農文協）文化部は東北地方を中心に稲作農家の自主的な技術研究グループを訪ね歩いた。やがてグループ相互の交流会を企画した。都市定住者の守田が度々訪れたのが、このような自主的研究グループの指導的農民で、彼らが自由に語る話を静かに聞き、農村世界を共有し、それが農業上の生産技術の歴史に関する農耕史の研究に収斂した。

一九六九年三月、すでに触れたように、農文協の企画で東北地方の自立的農家（約十名）が参加した第一回懇談会が開催された。当時は高度経済成長期で米の増収ブームで、稲作の技術交流が主たるテーマだったが、農業や農政についても議論された。ところが、食糧管理制度の下で政府の在庫米が増加し、米の供給過剰にたいして休耕、転作、転用などの減反政策（米作調整）が強行された。その後、ウルグアイ・ラウンドの農産物交渉が合意され、将来的に米を含む農産物の原則関税化が了承された。そこで、懇談会では今後の農業と農政について主要なテーマにして話し合われた。

その後、この懇談会を母体に講習会と討論会が開催され、守田は講習会の講師に招かれ、各グループの代表者十数名という少人数を相手に三日間、講演と討論に参加した。守田の連続講演の記録『農家と語る農業論』（一九七四年、その前年に短期ではなく、中期講習会の記録。守田の没後、内山節が講師に招かれている）は、農学者として農家の視点から農業、農地、むら、農法などを論じ、その独特の全体像は「守田農学概論」と見なされた。守田は農業を、工業とは異なり、人間による自然との営み、自然との生きた循環と持続の営みと考えた。

農家の「複合的経営」の提唱

以下で検討したいのは、守田は五十八歳で急逝し、農文協が守田の没後に『対話学習日本の農耕』（初版、一九七九年）を編集・上梓した、それである。本書は東北農家の中期講習会の記録、つまり守田の発言（第一部「農耕を考える日々」）と二日半の講習（第二部「農耕のあゆみと農家の選択」）、さらに参加者の交流会（第三部「守田先生の講義をきいて」、第四部「農業をどうする」）で構成されている。

守田は本書でインド西部の農耕の開始と世界各地への伝播、焼畑農法（アジア）、畑作と畜産の輪作（ヨーロッパ）、さらに日本の稲作中心の農耕の歴史と特色を明らかにした。出版社の農文協は「社会制度史に付随した農業史ではなく、庶民の暮らしと自然との関わりあいを土台にした新しい日本農業史の骨格が見える……。農家の討論も貴重な記録」と紹介している。率直に言えば、参加した農家の真剣な討論を通して、守田の講義が参加者にどのように受け止められ、その重点が「何か」を理解出来るのが面白い。

残念ながら、守田の発言・講義と参加した農家の討論の記録をそれ以上詳しく検討するには、私の能力をはるかに超えている。ただ、守田は講義を締めくくる際、日本の農耕の問題点として次ぎの二点を上げている。第一に田と畑を決定的に分離し、もっぱら田と稲作を結合させた。それは、歴史的には大和朝廷時代から連綿と継承された。その時代の権力が米の物納か金納を要請したためと推定される。そのため、第二に農家の視点はもっぱら水田におかれ、畑と関連した農家生活の循環はまったく無視されてしまったと推定される（一八六頁）。

その結論として、守田は一九六一年に制定された「農業基本法」前後からの農政の強力なやり方……、あまりにも無知で不勉強な時代であったと批判した。守田は日本の農政の重点、つまり農家の経営規模の拡大や農産物の選択的拡大、農業の構造改善を批判し、とくに三圃式農法、耕種（とくに穀物と飼料の作付け）と家畜を有機的に結合した混合農業など、自然との循環を重視したヨーロッパの農業を学び、日本でも自然との循環を基礎に、小規模経営のもとで生活と生産を結合し、稲作と畑作の深耕、そして両者の輪作体制、さらに養豚・養鶏・育牛・乳牛（家畜の糞尿を堆肥としても利用する）などの「複合的経営」を推奨した。

農家（とくに東北地方の専業農家）のなかには守田が提唱した農法が積極的に支持・実践された。本書第三部と第四部の討論参加者の多くは、稲作を中心に畑作と乳牛か和牛、養鶏を飼育する「複合的経営」を実践している。当時、農業青年だった斉藤巌は守田の没後、東北農家の懇談会で「わが一〇年の模索」（第四部に収録）と題して自由発表し、守田に触発されて「本物の農民」として自己を変革することに努力した。しかも農業経営では二町二反と畑八反を耕作し、ニワトリ一五〇羽を飼育し、さらにシイタケを栽培して「複合的経営」を実施している。

守田の農業論や農法論は政府および農業関係の学者・評論家にはほとんど評価されていないようである。むしろネオ農本主義者とみなされ、批判されただけではなく、全く無視された。私にはそのことの是非を論じる能力はない。農業経営はたえず天候や病虫害というリスクを伴い、それらのリスクを分散するためにも「複合的経営」

を実施する以外に選択の余地はないと考える。

終わりに

私は東京小金井の自宅からＪＲ中央線に乗り、高尾で乗り換え、桂川沿いの妻が所有する畑に通い、健康と趣味（そして実益）のために週一回、一泊二日の野菜作りをして、すでに七年目を迎えた。私は「失敗は成功のもと」と考え、野菜作りを実施しているが、「喉元過ぎれば、熱さを忘れる」というたぐいで、野菜作りは相変わらずずぶの素人の域を出ない。

この山狭村は東京圏に通勤可能な中山間地域で、地方公務員や教員、郵政や国鉄、警察や消防署など（その多くは現業部門）を退職して、年金受給の高齢者たちが各人各様に自作地か借地（ほとんど無料）の畑で野良仕事をする、自給用農家が圧倒的である。ジャガイモ、玉ねぎ、里芋など長期保存が出来る野菜は別にして、それ以外の野菜はすべて食い切れず、残りものとして廃棄されてしまう。

この比較的都市近郊の山狭村と、守田が主として論及した東北地方の水田稲作中心の平地農村を同列に論じることは出来ない。ただ、守田の自立農家の「複合的経営」の提唱は、おそらく大規模農家の所得保障政策などの外的な農業の保護政策に依存するよりも、むしろ農家自身が農業経営のあり方を内的に生産と生活、自然と循環を志向することを強調したのであろう。それがネオ農本主義と批判されていても、守田農学は一考に値する。ただ、今の私にはその一端をとても実施できないことだが……。

漢詩

潮騒録（七三）

鯨游海

遁世　　平成二四年一一月

友愛旗甘於白桃
言行輕薄似鴻毛
七光威勢今何處
遁世慰留無寸毫

押韻・桃毛毫

〈遁世〉

友愛の旗は　白桃より甘く
言行の軽薄は　鴻毛の似し
七光の威勢　今何処
遁世の慰留　寸毫なし

〔注　解〕

平成二四年秋、民主党の野田総理は衆議院解散を公言し二日後の一一月一六日に国会を解散した。

その直後鳩山氏が政界を引退すると発表した。同党執行部の方針を承服しかねたからという。

「友愛」の旗を掲げ三年前の総選挙で一旦政権党に就いた民主党であったが、選挙時に公約したマニフェストの過半が実行不可能だった事等が厳しく糾弾され離党者が続出し、一二月の選挙で大敗する結末をみた。鳩山氏は「最低でも県外」等の失言が多く、その言行は軽薄の誇りを免れなかった。所詮は甘いお坊ちゃんであった。

鴻毛＝おおとりの毛。軽いものの喩えに使われる。

七光＝「親の光は七光り」親の余徳、余光が大きい事。

寸毫＝ごく僅か、少し。

〔口語訳〕

友愛の信条は白桃より甘く、言行は鴻の毛ほどに軽薄だ。

親の七光も消え果て、引退を慰留する者は全く無い。

☆かかる人選びしことぞ悔やまるる
七つ光のくち軽き人

贈朴槿惠高麗新宰相　　平成二四年臘月

推戴高麗新宰相
朴元大統領之娘
遙踰越後眞紀姉
封殺凶弾欲點光

押韻・相娘光

〈朴槿惠高麗新宰相に贈る〉

高麗の新宰相に　推戴されたるは
朴元大統領の　娘
越後の眞紀姉を　遥かに踰え
凶弾を封殺して　光を点さんと欲す

〔注　解〕

朴槿惠＝一九五二年大邱生まれ。還暦を迎えた独身政治家。保守系与党セヌリ党（前ハンナラ党）々首。李承晩を次ぐ第二代目大統領だった朴正熙の長女。

女性として、また親子二代に亘る同国で初めての大統領となった。今回の選挙では親北朝鮮派文在寅を破った。

「転句に限り五六言平仄転倒可」の例外規程を援用。

推戴＝天子に擁立する。上に戴く。ここでは選ばれる。

宰相＝ここでは政治の最高位者の意＝大統領。

高麗＝韓国の古名。北方に高句麗、南に新羅、百済。

凶弾＝一九七九年十月に父である朴正熙大統領が凶弾に倒れた。また七四年には母もが凶弾の犠牲となった。封殺＝封じこめる。閉じこめる。ふたをしてしまう。殺は強調の助辞。相手の活動を封じること。

〔口語訳〕

今般行われた大韓民国の大統領選挙は、保革の熾烈な戦いが展開された結果、新らしいリーダーに選ばれたのは、曽つて名将軍といわれた第二代大統領朴正熙の娘であった。

今や偉大な父を持つ女性政治家として共通項の多い日本国の越後の田中眞紀子を遥かに越えた存在となった。

これからも両親が倒された凶弾を封殺し、万難を乗り踰えてこの国に希望の光を点さんとしている。

☆選ばれし高麗の卑弥呼は凛々しかり
　何ぞ騒ぐらむ蓬莱の海

四字熟語　　平成二五年一月

一陽來復想星回
千紫萬紅懷命開
花鳥姿無春爛漫
四言熟若雪中梅

押韻・回開梅

〈四字熟語〉

一陽来復に　星の回るを想ひ
千紫万紅に　命の開くを懐ふ
花鳥の姿無くとも　春爛漫
四言熟さば　雪中の梅の若し

〔注　解〕

星が回る＝星坐が回ること。即ち年月が経過すること。

一陽來復＝①新年になる。②春になる。③暖かくなる。④逆境が続いた後で運が開けること。ここでは②。

〔口語訳〕

「一陽来復」という四字熟語にまた春が回り来たことを想い、「千紫万紅」という四字熟語に、凡ゆる命の蕾が開いたさまを懐う。

この二つの四字熟語には花の字も鳥の字も使っていないけれど、春たけなわを生き生きと表現している。

このように四字熟語というものは、絵に喩えれば雪の中に画かれた紅梅の如きものであろうか。

☆四字寄らば妙なる魅力ふつふつと
　千紫万紅春は爛漫

《漢詩の流れ62・清》龔自珍②

己亥雑詩二首

道光十九年（一八三九）四十八歳。退官して北京を去り郷里に帰り着くまでに詠んだ詩三百十五首の内。時代はアヘン戦争（一八四〇）の前夜。鋭敏な彼は何を予見していたのか。

其百二十五

九州生氣恃風雷　九州の生気　風雷を恃み、
萬馬齊瘖究可哀　万馬　斉しく瘖り　究に哀れむ可し。
我勸天公重抖擻　我れ天公に勧む　重ねて抖擻して、
不拘一格降人材　一格に拘わらず　人材を降せと。

（わが中国が生気をとり戻すには、突風と迅雷に頼る外に方法はない。全ての馬がことごとく押し黙っている様は何とも哀れむべき限りだ。私は天帝にお願いしたい。身体をひとゆすりして資格に拘わらず、思い切って型破りの人材をこの中国に降し給わらんことを）

其百七十

少年哀樂過于人　少年の哀楽　人に過ぎ、
歌泣無端字字眞　歌泣　端なくも字字眞たり。
既壯周旋雜癡黠　既にして壮なるや周旋して痴と黠雑え、
童心來復夢中身　童心来復す　夢中の身。

（若い頃は哀楽の感情が人より激しく歌ったり泣いたりしたが口にする一語は純眞だった。所が壮年となり世間を知り阿保と悪賢さが雑り、童心は夢の中だけになった）

イドと超自我の谷間で（九）

・・・ある女の不思議な生涯・・・

鍋屋次郎

加賀大造の診察が終わって、医師は絢に
「体を見るとお腹から背中から、戦争の傷跡と言うか、鉄砲の弾の跡がいくつかありますね」
「はい、昭和二十年一月ころですか、満州で匪賊に襲われて九死に一生を得たと聞いています。丁度襲われたところがかねて知り合いの篤志家の近くで、三年か四年、そこの家で匿われて治療していたとか聞いています」
「そうですか。病院で治療したのではないのですね。胆嚢の辺りと思いますが、膨れて固くなっているところが触診で分かりました。あとでレントゲンを撮ってみます。今すぐ命に別状が起こるということはないと思いますので、このまま入院して明日精密検査をしましょう」
と、当面の診察結果を教えてくれた。絢は一旦家に帰って朝出直すこととし、ヨネには大造に付いていてもらって、ヨネの朝食は絢が持ってくることにした。

大造は痛み止めの注射のせいか、まだ眠っている。

翌日の精密検査では下腹部には異常がなく、本人の申告の痛む場所も移動していて原因はよくわからなかったが、午後になって膵臓が腫れていることが分かった。膵臓に腫瘍ができているかもしれないから精密検査をしましょう。しかし膵臓検査には二～三日は入院するように言われた。

絢は病院にお願いして、付き添いも同室で泊まれる個室をとり、夕方から朝まではヨネが付き添い、昼は絢が付き添うこととした。

三日後の夕方、主治医からヨネが呼ばれたので、絢も一緒に行った。主治医は
「奥さん、検査の結果は膵臓癌です。かなり進んでいて手の施しようがありません。痛み止めを注射しながら安静にしていてください」
ヨネは言葉がなかった。絢が
「先生、ということは痛み止めを打ちながら最後の日を迎えるということですね」
「そうです」
「では、あと何か月とか、先生の見通しを教えてください」
「はい。何カ月はもたないでしょう。早くて一週間か、もって二週間ではないでしょうか」
それを聞いたヨネは
「いやです。先生何とかしてください」
とその場に声をあげて泣き崩れた。絢が
「先生、その癌の進み方を抑えるとか、死は避けられないにしても、時間を稼ぐ方法はないのでしょうか」
「お気持ちはよくわかります。今の医学では、痛み止めを打ちながら様子を見るより手段はありません」
絢は泣き崩れたヨネを抱えるようにして待合室に行った。
顔を泣き腫らしているヨネをそこに残して絢だけで大造の病室へ行くと
「絢さん、来てくれて申し訳ない。朝から殆ど痛みもないので、この分だと明日でも家に帰りたいと思っています」
「痛まなくなったのは良かったですね。明日、先生が回診に見えたときご一緒に伺ってみましょう。それから、この病室の隣のベッドで夜はおヨネさんが泊まるようにしてきましたが、その泊まるのも今晩で終わりにしたいですね」
と明るく言った。

ヨネのいる待合室に戻った絢は
「おヨネさん、今加賀さんとお話してきました。朝から痛みが少なくなったから明日でも退院したい、と言うので、明日の回診のとき、先生にお願いしてみましょう。隣のベッドでおヨネさんが泊まるのも今日だけだといいですね、と言ってきましたから、貴女は苦しいでしょうけど明るくしていなければだめよ。もし、泣きたくなったらこの待合室へ来て泣くのね。加賀さんに絶対に悟られたら駄目よ」
とヨネに言って自宅に戻った。

一部始終を絢から聞いた孝子は
「そう」

とだけ言って後は言葉にならなかった。

翌日の回診のとき、大造の
「先生、痛みも治まった様子なので、退院してはだめですか」
の質問に
「加賀さん、痛みがとまっても貴方の内臓は全体的に大分弱っているから、少し入院して安静にしていなさい。終戦直前の大怪我と、それから数年間の生活が響いていますね。退院許可は時期を見て私が出しますので、神様がくれた休養のときと思って休んでいなさい」
の言葉に大造はがっかりしたが、自分の最も苦しくて悲惨な時期のことが健康に影響をきたしていると言われると反論はできなかった。

翌日、ヨネは絢に、大造の兄一郎に知らせるかどうするかを話したが、絢の意見でもう少し様子を見ることとした。

大造は痛みが薄れると自分でトイレにもゆき、食事もできるようになったので、泊まりの付き添いは必要でなくなり、ヨネは朝食時と夕食時だけ行くこととし、後の時間は「あや美容院」の仕事に戻った。しかし、いつ病状が悪化するか分からないので、病室の付き添いベッドはそのままにしていた。

つぎ江から電話があってから一週間たった日、つぎ江と露木夫人が訪ねてきた。つぎ江は絢に会えるのが嬉しくてたまらない、と言った様子ではしゃいでいる。
挨拶が終わってから露木夫人が
「早いもので、つぎ江さんに私の所へ来ていただいてから十年になります。お給金も出しているとは言い得ないくらいの待遇ですが、本当に気持ちよく働いてくれまして、預かっている子ども達から慕われ、同じ働いている職員からも頼りにされて、本当に素晴らしいお人柄と思っています」
「露木さん、つぎ江がお言葉通りとすれば、それは全て露木さんのご指導のお蔭で、お礼を言わなければならないのは私の方です。つぎ江から聞きましたが、あの東京大空襲で焼け野が原になったところで、露木さんに巡り会わなかったら、とても今のつぎ江はなかったと思います。本当に有り難うございました」
「いえ、助かったのは私の方です。何か無理やり連れてきてしまって、それで良かったのだろうか、つぎ江さんの人生を私が奪い取ったような、と随分考えましたが、つぎ江さんが本当によく仕事をしてくださいましたので、いつの間にか私のほうが甘えていました」

それから暫くつぎ江も話の中に入って歓談しているうちに、孝子が挨拶に来て
「絢さん、こちらにお昼の支度が出来たから、こちらに来て召し上がりながらお話を続けたら」
との言葉に、隣の座敷で食卓を囲んだ。
「奥様。これは美味しいお寿司ですね。滅多に戴けないような。ねえ、つぎ江さん」
とつぎ江に話を向けると、つぎ江は
「そうなんです。この前来た時も美味しくて、もう一度食べたいと思っていたところなんですよ」
の言葉に一同大笑いとなった。

食事が終わって暫くしてから、露木夫人は
「お姉さま。つぎ江さんのことですけれども、勝手言って申し訳ありませんが、このまま私の所にいて頂けないでしょうか。と言いますのはつぎ江さんに将来私の後を継いで欲しいのです。このことはつぎ江さんにははっきりとは申し上げてありませんが、私の希望としては折に触れて申し上げていました」
絢は
「つぎ江が露木さんのあとが務まるのでしょうか」
「それは私たち家族全員が太鼓判を押しています」
「ご家族と言うと？」
「はい、主人は教会の経営と牧師をしながらこの施設の経営にあたっています。息子は主人の後を継ぐために牧師を目指して神学校に通いながら施設の手伝いをしています。それで、私どもの勝手なお願いはつぎ江さんに息子と結婚して欲しいと願っています」
絢がつぎ江を見ると顔を真っ赤にして俯いている。
「つぎ江、つぎ江はどうなの？」
「奥様から今までそのようなお話はありましたが、とても私にはもったいないお話で、それと教会牧師夫人と施設の経営の両立は私には無理と思って、お話は聞くだけにしていました」
「それで、今、神学校に行っている息子さんとは？」
「日曜日の礼拝準備を手伝ったり、日曜学校、青年会活動などで仁先生のお手伝いをしています」
「仁先生が露木さんの息子さんなのね、それでつぎ江は教会で洗礼は受けているの」
「はい、二十二歳のときに洗礼を受けました」
露木夫人が
「その様な状況ですので、お姉さまさえご了解いただければ、つぎ江さんにはこのまま勤めて頂いて、時期を見て改めて結婚のお願いに来たいと思います。今日はその方向性の御了解いただきたくお願いに上がりました」
絢が
「つぎ江、貴女次第よ。どうなの」
「お姉ちゃん、私にはもったいないお話と思っています」

「そう、貴女がそう思っているのならいいお話じゃないの」

と言って露木夫人を見て

「露木さん、つぎ江も了承していることでもあり、私から見ても勿体ないほど有難いお話だと思います。どうぞよろしくお願いします」

「三条さん、有り難うございます。これでほっとしました。有り難うございました」

この後、つぎ江が江の島を見たいというので三人で江の島に行き、ホテルで軽い夕食を済ませて藤沢駅まで露木夫人とつぎ江を送って別れた。

帰宅して孝子に見送ってきたことを話していると電話が鳴った。

「先生ですか。ヨネです。今病院からです。主人が昨日から何も食べず、ぐったりしているみたいです。医師は栄養剤を入れるということで点滴を始めました。そして主人が先生と奥様にお願いしたいことがあるので、明日来てほしいと言っているのですが、ご都合は如何でしょうか」

「わかりました。明日朝九時に母と伺います」

「では宜しくお願いします」

「おヨネさん、御主人お大事にね」

翌朝、絢と孝子が八時半前に病室に入った。加賀大造は寝たまま挨拶し、ヨネに向かって

「絢さんが好きな鶯餅、俺も食べたいから藤沢駅前の菓子屋に行って四つ買ってきてくれ」

と言ってヨネを使いに出した。

大造は

「絢さん、三条さん、本当にお世話になりました。自分の体は自分で分かります。長くは生きられないでしょう。退院はとても無理と思います。それで絢さんが持っているあの資産は、いまのまま絢さんの名義にしておいて、京子が言うとおり、絢さんの人生の終わる時には当初のお金程度を施設に寄付してください。あとはご自由にしてください。お二人にお願いします。このことはヨネには何も話してありません。それから絢さんの旭東銀行からの美容院建設資金の借入金は、あの資産の中から返済してください。これが私の最後のお願いです」

と言ってベッドから手を伸ばしてきたので、絢と孝子はその手を強く握って

「加賀さん、そんな弱気じゃだめですよ。退院できる希望を持って療養してください」

「それで、茂原の兄に入院していることを伝えてくれま

せんか」

「わかりました。帰ってから連絡します」

あとは満州で匪賊に襲われた話を始めた。あの時助けてくれた現地の周さんの夢は今でも時々見る。人生の最後に神様が絢さんや三条さん、それとヨネとの出会いをくれたことは有難いと思っている、などゆっくりゆっくり話した。

やがてヨネが帰ってきて

「鶯餅、今食べる？」

と聞くと、大造が

「ヨネ、この前税務を頼みに来たお客さんから頂いた京都の銘茶があったろう。あれ持ってきているか」

「ありますよ。今煎れますね」

四人は暫く雑談した後、絢と孝子は主治医を訪ねた。

「先生、加賀さんがお世話になっています。今本人は自分で死を悟ったようなことを言っているのですが、容体は如何でしょうか」

「そうですか、ここまで来るとあと二～三日でしょう。呼びたい人があれば早めに呼んでください」

絢と孝子は帰宅して茂原の大造の兄一郎に電話した。

明日来るという。

大造の兄、一郎が大造を見舞った翌日の夕方、ヨネ、絢、孝子が見守る中、大造は息を引き取った。ヨネを喪主として葬儀が終わってから、絢は大造の家は天台宗と聞いていたので、鎌倉駅近くの寺歴の古い天台宗のお寺に頼んで大造と京子、京子の母である先妻の墓を作り、そこに絢が持っていた京子の遺品も入れて、墓誌に大造夫妻と京子の名前を刻んだ。

ヨネは大造との住まいを引き払って、三条家の近くのアパートに移り「あや美容院」への勤務を続けた。ヨネは初めての、そして短期間の結婚生活とはいえ、姓を元に戻すことなく大造との結婚を記念して「加賀」姓を名乗っていた。

葬儀その他一段落ついたとき、絢は大造が絢に委ねていった資産の取り扱いについて孝子と話し合った。

「お母様、あの加賀さんの残していったお金のことですが、加賀さんのお言葉に甘えて旭東銀行からの借入金残高、およそ百万円ですがそれの返済に使わせていただいて、後はそのまま今までと同じように旭東銀行に預けておこうと思います。それからおヨネさんに何かあってお

金が必要な場合はそこから引き出して使いたいと思いますが」

と自分の考えを言った。孝子は

「そうね。貴女が最後には京子さんとの約束を守ることができれば、貴女の自由にしていいのでは。それと、おヨネさんは加賀さんの奥さんだものね。そうしましょ」

「はい、有り難うございます。では近いうちに海保先生にその旨申し上げたいと思いますが、お母様、ご一緒頂けますか」

それから三日後、海保邸二階和室で絢が孝子との話し合い結果を海保純に話した。海保純は

「そうね。美容院も時代とともに設備も新たにしていかなければならないので、旭東銀行の借入金を返済して新たな設備余力を持つことも必要ね。これは加賀さんの遺言だから甘えてもいいのではないの。また、おヨネさんのことはおヨネさんには言わないで絢さんが生涯面倒を見てあげなさい。法律的にはおヨネさんは加賀さんの唯一人の相続人ですからね。貴女の考え通りおやんなさい」

その後「あや美容院」は技術と従業員の対応に加えて、時代の先端をゆく理美容機器設備を備えたことで、藤沢・鎌倉一帯の富裕な婦人層に益々利用されるようになっていた。

それから五十年が経過した平成二十五年五月、義母の孝子もヨネも、また、海保純も既にこの世にはいない。八十八歳になった絢は、露木家に嫁いだつぎ江の三女美香を養女として美容院を継承させ、美香夫妻と三人の孫に囲まれて生活し、気力体力は衰えていないので、人生の終焉準備を思って一年前に三浦半島先端高台の有料老人ホームに一人移っていた。

小雨の降る夕刻、絢が江ノ電を七里ガ浜で下りていつも利用するホテルに向かって歩きだすと、今まで静かだった風が急に強くなったので急ぎ足でホテルのロビーに入り、別棟のレストランまで山の斜面を登ってゆくようなエレベーターに乗った。時間が早いせいかレストランには片隅に老夫婦一組しかいなかった。

いつものように窓際の席で真正面に海が見える椅子に座り、ウエイトレスにビール小瓶とシーフードサラダを注文して海を眺めていると、凪の日もあればこのように波の高い日もある海は、人間の生涯の歩みと一緒なんだと思いながら見つめていた。

海を見ながら、自分の人生を振り返った。

自分の人生の思ってもみなかった展開、それは終戦で満州から引き揚げの途中での、加賀家でただ一人生き残っていた京子お嬢様の非業の死。京子お嬢様が、乗っていた自家用車から引きづり出される瞬間に「アヤ、これを持って先に日本に帰っていて」と渡された風呂敷包みを日本に帰ってから開けてみると、加賀家の全財産の京子お嬢様への相続関係書類だった。思い出して一番ゾッ!とする場面は、ただ一人で日本に戻ってきて、加賀家の全財産を京子お嬢様になりすまし、京子お嬢様名義に相続手続きをしてそれを全て換金したことだった。そのときは「金を貸している。財産を差し押さえる」という五代という男から加賀大造名義の全財産を逃避させることしか考えていなかったが、ある日「この全財産は全て自分の自由になってしまうのではないか」と気が付いたときは、心の底から恐怖を覚えた。他人からそう責められたときは反証できない状態だった。

絢が京子になりすましていたことが明るみに出れば、「加賀家の全財産を横取りした」と言われても弁解の余地はなかった。

だから、その後五代と松尾から京子との関係をしつこく問われたときも、「知らぬ存ぜぬ」で突っ張り通した。

反面、自分が生きてゆくために、その大金の中から当面の生活費と、鵠沼の小さな家の購入、美容学校に通った費用を借りたときは、内心は自分自身が「使い込み」をしている罪人的な思いに悩んでいた。当時の絢は生きてゆくためにはそうするしかなかった。

美容学校を卒業してから、食べるのも切りつめる思いで給料の中から借りた額を返済し続け、あの世にいる京子お嬢様と母の導きで海保純と出会うことができて、海保純の口を通して絢が持っている加賀家の財産について、京子お嬢様から「貴女が持っていて、貴女がこの世を去る時は、最初に預かった程度の額は社会に寄付してね。その間必要なものは使っていいよ」と聞いたとき、絢は悩み苦しみ続けていた罪悪感から解放されて、あれほど嬉しく、そして安心したことはなかった。あの時、あまりの嬉しさに海保純の膝に泣き伏していた自分を今でも鮮明に覚えている。

三条孝子との出会い。そして孝子の養女になった。孝子の人格に傾倒したことは事実であったが、この時の自分は肉親は全くいないただ一人の状態から新しい家族生活ができる嬉しさと、過去の自分から新しい自分になることが嬉しかった。

美容院開業の前後、ロバートとの二年弱の短い期間は、絢が女として生まれて初めて愛されていることの喜びと安心感・幸福感を味わうことができた。ロバートは、アメリカ空軍機で厚木からタイへ行く途中に消息を絶ったままになっている。

軍から死亡通知を受けて戸籍上も死亡が受理され、四年以上も経過している加賀大造が生きていると聞いたときは驚いた。大造が実家でただ生かされているだけの惨

M市に寄付した二十億円は、旭東物産と旭東銀行鎌倉支店長から奨められて、まだ農地を埋め立てたばかりで何もない東海道新幹線新横浜駅ができる駅前予定地を購入しておいたものが、二十年後には購入時価格の三十倍の値が付き、都市計画で二十%以上の減歩になったが、手取りで二十億円以上受け取ることができた。寄贈者氏名は「故加賀大造・京子　代理人三条絢」として、今は特別養護老人ホーム一棟と三棟のグループホームができている。京子お嬢様との約束は果たした。

美容院「あや美容院」の経営は、利用してくださるお客様と従業員に支えられて順調に推移しており、現在は養女美香にすべて任せている。

絢は人生の大きな節目を一つづつ回想していたが、自分の歩いてきた道の道幅を、左側を本能的欲望の世界として、右側を自制が支配する世界と考えると、ロバートとのこと以外はどちらにも偏ることなく歩いてきたのではないかと思った。

そしてそれが出来たのは大船で出会った田中牧師から、現在通っているキリスト教会に至るまでのキリスト教とつながりが、決して熱心な信者ではない自分に対して、潜在的な舵取りの役目をしていたのではなかろうか。

教会に行きだしたのはアメリカ行きの直前で、アメリ

めな状態を見て、絢が引き取って、亡くなるまでお世話をすることができたことは、結果として大造の遺志で全資産をそのまま預り続けることになった。

窓越しに見える海はいつの間にか夜のとばりに包まれている。遠くに一つ、灯りが静かに動いているのは船の灯りだろうか。

満州からの引き揚げのときから、絢が加賀家に女中奉公をしているときには全く思ってもいない人生を歩くことになった。絢が京子お嬢様になりすまして行った行為がもし誰かに露見していたら、絢の人生はどうなっていただろうか、と思う都度心中ゾッとする思いを感じている。でも、その多額の資産を使って一時の安楽な生活に流れなかったことは幸いだった。

絢が十六歳の頃だった。日本から満州に来て加賀家に数日逗留した占い師が、絢の手相と人相を見て

「この娘は普通の人であればとても乗り切れないような難しい困難な環境でも、腹を決めて乗り越えて行く度胸がある。またそれが出来る娘だ」

と言ってくれたときがあった。絢自身が七十二年前のことで忘れていたが、今突然思い出した。

今思うと自分自身で納得できるような気がする。

カから帰った直後、加賀大造が生きている情報が入り、千葉県茂原の生家まで訪ねて行った。そこで人間の尊厳も全く無視された大造の生活を目の当たりにして自分が引き取ったことには、意識はしていなかったがイエスの言葉が影響していなかったろうか。

過去に自分が反省しなければならないときには、新約聖書の行間にイエスの悲しそうな目をした顔が浮かんでいた。また、加賀大造を引き取って亡くなるまで面倒を見終わったときや、美容院従業員に対して損得を度外視して面倒を見たときなどは、心のどこかにイエスの教えに従順である自分を見ていた。

長い時間、海を見ながら自分の人生を振り返っていたが、いつの間にか時計は午後九時を回っている。絢は立ち上がって、宿泊予約をした部屋に向かった。

完

医学用語の語源

漆原直子

先日、日本マルタ友好協会の総会と記念講演会が行われた。テーマは『文明のふるさと〜エーゲ海の島々〜』で、講師は青海市立総合病院長・慈生会ベトレヘムの園病院顧問の星和夫先生である。内容はいかに西欧の文化はギリシャ文明が起源となっているか、医学関連の学術用語の語源を例に、実際に先生ご自身がギリシャを探訪して得た知見を交えながらのお話で、私にとっては大変興味深い内容であった。現在使われている言葉が、後世の付会もあるにせよ、遥か彼方、今から約数千年前の古代ギリシャから脈々と受け継がれ、長い年月を経て、極東とされる日本列島にまで到達している事に驚きを覚えた。

〝医学の祖〟はアスクレーピオスで、ギリシャ神話の中に物語られている。アスクレーピオスは、ペロポネソス半島東部のエピダウロスで、アポロンとテッサリアの王女コローニスとの間に生まれた。現在この地にはBC4世紀に建設されたアスクレーピオス神殿、アルテミス神殿、宿泊所兼治療所、浴場、競技場等の遺跡が残されており、『エピダウロス遺跡』として、世界遺産に登録されている。

アスクレーピオスは父親のアポロンにより、わけあって生後すぐに半神半獣のケイローンに預けられた。ケイローンからは大事に養育され、特に医術を教えられて、後に医学の神になったとされる。ギリシャ語で〝病院〟のことを「アスクラピア」と言うそうである。ケイローンCheironは、生まれつき手が起用だったので、ギリシャ語の〝手〟を意味する〝ケイル cheir〟にちなんでCheironとつけられた。cheirにergon(仕事)が付いたcheirourgos(手仕事)からできたのが、ドイツ語のChirurgie ヒルルギー(外科)、さらにフランス語のchirurgieを経て、英語のsurgeryサージェリー(外科)に変化していった。アスクレーピオスは女神アテナイから、メドゥーサの血を分けてもらって、その血で大勢の死者を甦らせたと言う。そのため冥界の王は死者が減って困ったとしてゼウスに訴え、ゼウスも天地の常道を逸した行為だとして、雷でアスクレーピオスを撃ち殺し、空に上げて〝蛇遣い座〟にしたそうである。アスクレーピオスの家族も皆医学に関係しており、妻エピオーネは鎮痛、息子マカオーンは外科、ポダレイリオスは内科、娘のパナケイアは全ての病気を治す女神、ヒュギエイアは健康の女神として、人々の信仰を集めた。なお2人の息子マカオーンとポダレイリオスは、トロイア戦争に参加したとされる。

アスクレーピオス信仰が最盛期であったBC4世紀には、ギリシャ、トルコ、イタリアの330か所の地に、アスクレーピオスの神殿が建てられ、今でいう総合病院のように医療を施していた。ちなみに、BC4世紀のギリシャは、アテネやスパルタ等の都市国家間の戦争(コリントス戦争)が起き、マケドニアのアレクサンドロス大王がギリシャに侵攻して、ギリシャを統一する等、戦乱が続いていた。このアスクレーピオスは各地にその像が残されており、神殿も現在なお4か所だけ残っているが、常にシンボル的に〝1匹の蛇がまきついた杖〟『アスクレーピオスの杖』を手に持っている。蛇は、脱皮を繰り返して成長するので、不死や再生、回復等の生命力の象徴とされてきた。蛇に対する信仰は有史以前より世界各地にあり、意味する所はほぼ同じである。蛇信仰の起源はメソポタミアにあるとされる。『アスクレーピオスの杖』は現代も医療の象徴とされており、欧米社会では医療施設や救急車などのシンボルとして使われている。またWHO(世界保健機関 本部はスイスのジュネーブ)もその杖をシンボルマークとして使っている。日本ではあまり使用されていないが、日本で国際的な医学学会を開催する時は、そのシンボルマークを用いるようにしているそうである。また欧米の薬局では、娘のヒュギエイアが毒蛇の毒を治療に用いたとして、蛇がまきついた杯の絵〝ヒュギエイアの杯〟を薬局のマークとして使っている。ヒュギエイアの名はギリシア語で〝健康〟を意味し、英語のhygieneハイジーン(清潔、衛生)の語源とされている。ちなみに、東京都の健康プラザという施設は『ハイジア』と言って、まさに〝健康の女神ヒュギエイア〟に因んだ名称をつけ



【ヒュギエイアの杯】

【WHOの旗】

ている。

アスクレーピオスは〝医学の神〟だが、〝医学の父〟としてヒポクラテスがいる。ヒポクラテスはBC460年頃にドーデニカーサ諸島（ドーデカはギリシャ語で12の意味）のコス島で生まれた。ヒポクラテスは、病気の原因が悪霊や悪魔のせいにされていたものを、『液体病理説』として、初めて科学的にとらえた。『液体病理論』は『4原液説』として、人体にはhaima 血液・phlegma 粘液・chole 黄胆汁・melanochole 黒胆汁の4原液the cardinal humoours（英語）があり、これらの調和と循環が障害されると病気になると提唱した。この4原液を総称してrheum レウムと言うが、これからrheumatism リュウーマティズム（リウマチ）という病名が派生した。また、この4原液をラテン語ではhumorというそうで、英語のhumour ユーモアの語源となっている。melanocholeは、melankolie メランコリー（憂鬱）の語源である。ヒポクラテスはさらに、『ヒポクラテスの誓い』と『ヒポクラテスの箴言』を残している。『ヒポクラテスの誓い』は西欧社会では、医師になる時の誓いの言葉になっているそうである。因みに看護師には、『ナイチンゲール誓詞』がある。『ヒポクラテスの箴言』は、次のようである。

〝生命は短く技術（芸術）は長い。
機会は去りやすく経験は変動し、判断は難しい…〟

これらの他にどんな言葉があるのか、医学関連以外の言葉も含まれるが、いくつかご紹介したい。

【アカデミー】

アテナイがスパルタに攻められた時（BC5世紀ペロポネソス戦争）、アカデモスAkademosという一市民が町を救ったとして英雄として、死後アテネ市街の近くのオリーブの林の中に祀られた。ここを「アカデモスの園」Akademeiaと呼ばれるようになった。BC4世紀、プラトーンがこの場所に学園を開き、以後AD6世紀までの850年の間、ここで哲学が教えられ、学問の殿堂となった。アカデミーという語は、そこから派生している。

【プラタナス】

先述のアカデメイアで、学園を開いたプラトーンのPlatプラトはギリシャ語のplatusで〝広い〟という意味を持つ。プラトーンは本名はアリストクシスと言うが、肩幅（一説には額）が広かったので、そのように呼ばれるようになったという。また、「アカデモスの園」にはプラタナス（すずかけ）の木がたくさん植えられていたが、プラタナスの木も広い葉をもつので、そのような名前がつけられたという。ちなみに、プラタナスの花言葉は〝天才〟である。さらに、「医学の父」ヒポクラテスがコス島にて、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を教え、医の倫理を説いたとされていて、現在プラタナスの木は「医学の木」になっている。

platのつく言葉としてはその他に、blood platelet（英語）血小板、latypodia（英語）篇平足等の単語がある。

【シンポジウム】

ギリシア語で、シン syn- は、〝同時に〟を意味する接頭語で、〝飲む〟という意味のpotosと接合することで、〝一緒に酒を飲む（酒宴）〟を意味する。プラトンが『The Symposium（饗宴篇）』を著している。

その他、synが付く言葉には、synapse（神経接合部）、syndrome（症候群）、symptom（症状）等がある。

【アンプル】

医療器具で、注射液の入った小さなガラスの容器をampul アンプル（英語）というが、それは、ギリシャ語のamphoreus アンフォラ（amphi両側に、phoros運ぶ）からきているという。〝amphoraアンフォーラの壺〟という、BC15世紀頃よりAD7世紀頃まで地中海各地で使われた陶器が、今でも地中海の海底に眠る古代の沈没船から引き上げられることがある。

【レズ】

北エーゲ海諸島に浮かぶLesbosレスボス（ギリシャ語で森林の多いという意味）島があり、昔男達が船乗りや出稼ぎで不在のことが多く、女ばかりの時が多かった。そのため、女性同士の同性愛が生じた。この島でBC612年に女流叙情詩人のサップォーが生まれて、その様子を叙情詩で歌ったことで有名になったという。レズという言葉は、〝Lesbos島の習慣〟だからlesbianism,またlesbian loveと言ったことから〝Lesレズ〟になったそうである。

現代では、ウーマン・リブの島として、毎年8月の満月の夜に、島の古城に世界中から女性が集まり、ウーマン・リブの大会を開いているという。

以上挙げたことは、ほんの一部である。この他医学用語関連以外にもたくさんの語源があり、例えば金属で銅の化学記号のCuはキュプロス島cyprumの名から由来している、西欧の科学文明がいかにギリシャ文明から派生してきたかがわかる。講師の星先生は、ギリシャ・エーゲ海の他、イタリア・マルタ、トルコと歴訪され、「医学史の旅」3部作を著されている。『医学史ツアー』があったら是非参加してみたいものである。また、機会があったら他の地域もご紹介したいと思う。

【参考文献】

・『医学史の旅　ギリシャ・エーゲ海の島々』
星　和夫　著　　日本病院会出版

古代出雲国筆頭

熊野大社の盛衰（続）

村上邦治

七世紀末の律令制下では、特定神社に奉仕する、「神郡」という特別な郡が認められていた。伊勢、安房、香取、鹿島、日前、国懸、宗像、及び熊野の八神社である。これらの神郡郡司は、祭祀氏族の既得権が認められ、三等までの親族が連任することを許されていた。八世紀前半には、出雲国造一族は、大領、少領等すべての郡司四等官を独占した。

行政・祭祀双方を牛耳る、出雲国造家の手厚い庇護により、揺るぎない地位を得ていた熊野大社は、九世紀以降、衰退に転じる。

第一の要因は、出雲国造家の没落と移住である。

出雲国造家は、延暦一八年（七九八）、これまで兼務を許されていた郡司の役職を解任され、神事に専念させられることになった。

二　衰退

熊野大社は、別名「日本火之出初之社」といわれる。境内には、他にはみなれない「鑽火殿」という茅葺の建物がある。

祭神の熊野大神が、

「熊野山の神木で、臼と杵をつくり、わが国最初の火を、きり出した。」

とのいい伝えによるものである。この建物で熾した神火は、出雲大社最大の祭りである「古伝新嘗祭」や、出雲国造代替わり時、神火相続の「火継式」に使われている。古代より、出雲国造家にとって、当社は最も重要な神社であった。

『類聚三代格』の太政官符に、

「神宮妾女と称して、多くの百姓女子を娶り、妾とする事を禁ず。」

とあり、規律ある行動を促した。

つづいて同年末、

「慶雲三年（七〇六）以来国造・郡領を帯ねしむ。神事に寄言してややもすれば公務を廃つ。今より以後、宜しく旧例を改め、国造・郡領職を分ちて之を任ずし。」

とし、兼任廃止とその理由を挙げている。

これらいずれの事由も、些細なものであり、出雲国造家の地位低下を物語る。八世紀初めより続く神賀詞奏上により、天皇の神聖化に貢献してきた出雲国造家を、もはや、特別扱いをする必要が無くなったのである。この儀式の文献記録は、天長一〇年（八三三）が最後である。

八世紀以降、正史である『日本書紀』は、講書会を通じて、上級階層に広まっていく。講書会は定期的に開催され、上級官吏の必読書になった。この間『古事記』の扱いは、はっきりしないが、「記紀神話」は、着実に普及していった。

神話の拡大と並行して、一方の主人公である大国主命を祀り、「天日隅宮」とされた杵築大社は、国の税により、社殿の高層化・大規模化が始まる。記録に残る最初の造営は、長元九年（一〇三六）である。「記紀神話」にふさわしい社殿の造営は、朝廷としても、やらざるをえなかったのである。

祭祀に専念することになった出雲国造家は、神賀詞奏上の文献記録からみて、九世紀から十世紀ごろ、氏族発祥地の意宇郡を捨てて、出雲郡杵築郷に移住したものと思われる。古代出雲国筆頭であった熊野大社よりも、「天下無双の大厦」として、全国に名を広めつつあった杵築大社の方を選択し、『記紀』や「神賀詞」で奏上した祭祀に専念することで、国造家の存続をはかったのである。

第二は、出雲国の政治・経済の中心が意宇郡から能義郡広瀬に移ったことである。

鎌倉期、出雲国守護職は、佐々木氏、京極氏と続いた。南北朝以降は、京極氏の一族であった尼子氏が、この国を治め、守護代から戦国大名に成長する。尼子氏は、居城を、山城で守りやすい月山富田に築いた。

城下町の広瀬は、山陰道に近く、山陽道に便が良く、河川を利用し、海路も使える交通の要所であった。一六世紀前半、尼子経久の代には、一時、山陰・山陽一一か国の守護大名になり、広瀬は、中国地方有数の城下町に発展する。

江戸期に入り、堀尾氏は、城と城下町を、宍道湖と中海に面した広大な松江に移す。そののち、城主は松平氏

三　消　失

『記紀』では、紀州熊野は、皇室にとって、神聖な土地であった。

神武天皇が東征し、浪速から大和に進軍するものの、最初は失敗に終わる。次に熊野から攻めようと、紀伊半島に回るも、暴風に会う。神武の二人の兄は、これを鎮める為、自らの身を捧げることにより、ようやく上陸できる。熊野からの進軍も難渋するが、神剣「ふつのみたま」や道案内の「八咫烏」の助けにより、大和に入ることができたのである。また、『日本書紀』では、イザナミを葬ったのは紀伊国熊野の有馬村としている。

熊野三山（本宮、速玉、那智）は、神武の進軍路に当たり、伊勢神宮と共に、神々の鎮まる地とされてきた。「記紀神話」が普及する平安後期には、白河、後鳥羽、後白河の三上皇の度重なる行幸により、皇族や貴族の参拝が相次ぎ、次第に名声を高めていくのである。さらに「人まねの熊野まうで」「蟻の熊野詣」といわれるほど、一般民衆にまで広まっていった。

嘗ては、出雲国熊野大社の繁栄を羨んだ熊野三山は、「熊野権現」「三社権現」と呼ばれ、全国にその名は轟いていった。中世以降、先達や御師の活動が目覚ましく、

に代わり、松江はさらに拡大を遂げ、山陰の政治・経済・文化の中心地になっていく。

一方、古代出雲国の国庁や郡家のあった意宇郡府中は、住民からも忘れ去られ、田畑の中に埋もれてしまった。江戸期初めには、僅かに、「こくてう」の字名だけが、地名として残っただけであった。

第三は、社殿の喪失が、幾度も続いたことである

戦国時代尼子氏は、常に、山陽の大内、毛利氏と敵対し、争いは絶えなかった。特に天文一一年（一五四二）、大内義隆の出雲進攻で、熊野大社の社殿・宝物・記録すべて焼失した。その後も、毛利氏から攻められ、山陰への入り口の一つであるこの地は、戦乱に巻き込まれることが続き、当社は、被害を受けることが多かったのである。

さらに、自然災害による社殿の流失が続いた。当社は、三方急峻な山に囲まれた意宇川の畔にあり、氾濫による洪水は、ほぼ毎年起きた。特に記録に残るものでは、元禄一一年（一六九八）に、社殿及び社有地の大部分を失っている。

度重なる社殿喪失に、もはや大きな後ろ盾は無く、氏子による再建では、矮小かつ粗末な建物にならざるをえなかった。

各地で、熊野三山の祭神を勧請することが、盛んになっていった。現在、三千以上ある熊野神社のうち、その大半は、熊野三山の祭神を勧請したものである。出雲国でも、紀州系の熊野神社は、六十社にのぼった。

一方、伊勢神宮は、皇室の先祖にかかわる格別の宮として、常に神社の最高位にあった。しかし、中世以降、天皇の権威低下とともに、経済は困窮していった。古来より続く祭祀を維持するため、各地に分祀を働き掛けていった。特に、祭神が太陽神であることから、新田開発による新神社造営には、作物の豊穣を願い、「伊勢宮」「天照大神宮」として、勧請されていくのである。江戸期には、出雲国には、七社がみとめられた。

江戸中期、松江藩の地誌『雲陽誌』の「意宇郡熊野」に、

「世の人、上の社を熊野三山といい、下の社を伊勢宮という。」

とある。熊野大社が編纂した『熊野の大神さま』にも同様な引用をしている。「上の宮」の祭神はイザナミ、速玉之男、事解之男であり、「下の宮」は天照大神、スサノウ、他八神であった。

これら祭神からも明らかなように、江戸期には、熊野大社は、あろうことか、熊野三山と伊勢神宮の勧請神社と、みなされていたのであった。

あの古代出雲国筆頭であった熊野大社は、地元からも、忘れ去られてしまっていた。

江戸期には、歴史上から、その名は消えてしまったのである。

四　復　活

江戸期以降、『古事記』を中心とする国学（賀茂真淵、本居宣長）が盛んになり、復古神道（平田篤胤、大国隆正）と呼ばれる思想に発展する。国学は、日本古来の伝統を研究する学問で、『万葉集』、『日本書紀』、『延喜式』等も重視された。復古神道では、特に、神への信仰を強め、死後の世界についてまで追求することで、仏教や儒教と異なる、我国独特の神道に発展させたのである。この思想は、外国人の来航が相次いだ幕末に、外国人排斥を唱える尊王攘夷論に、大きな影響を与えた。

明治維新となり、新政府は、当初、「国学」や「復古神道」の流れを受け、天皇中心の王政復古を目指した。神道を柱とするため、神仏習合を否定し、神仏分離政策が採られた。また、神社は、すべて国家の管理とした。全国の神社の祭神と由緒を調査し、新たな社格制度が制

定された。この制度は、神祇官の管轄になる神社を、官社とし、地方官の管轄は、諸社とした。官社は、国から幣帛料が共進された。その内、官幣社は、全国的な神社と皇室ゆかりの神社、国幣社は、主としてその土地に密接なつながりのある神社で、それぞれ大、中、小、の格が定められた。

江戸期、その名を消失していた熊野大社は、明治四年の新神社制度により、国幣中社の格付けで、復活再生した。格付からも、「大社」の称号は許されず、「熊野神社」としての復活であった。当社の由来からすれば、当然、官幣社に相当し、「大社」の称号は受けられたであろう。しかし、江戸期には、その存在が消えており、また、社殿や社有地は、矮小かつ荒廃していたので、已む得ないことであった。

一方、出雲大社（明治四年杵築大社を改称）は、最高位の官幣大社に格付けされた。熊野神社との格差は、大きなものであった。

五　再興

こうして、熊野大社は、熊野神社として復活したが、以後、古代から続いた「大社」社号復活を目指す、地元の努力が続くことになる。拝殿などの改築がすすめられたが、相変わらず台風や大雨による洪水があり、そのたびに、村民による修復がおこなわれた。

明治四十一年「一村一社」制により、「上の宮」を「下の宮」に統合した。さらに、村内の多くの神社を、摂社として境内に取り込んで、現在の神社群ができあがった。

大正期に入り、氏子会が新たに結成され、大社社号復活の運動は本格化していく。

五年、国幣社に大社格が新たにもうけられ、当社は国幣大社に格付けになった。この昇格に必要な資金は、全額、熊野村民の寄付で賄われた。この時も、社号復活の願書が提出されたものの、許されなかった。依然、境内は狭く、本殿は荒廃しており、大社に相応しくないとの判断であった。

そのため、まず境内拡張に踏みきる。現在も残る旧参道の位置から、左側の現在地に遷座され、境内は大幅に広くなり、摂社の整備もすすめられた。また、「日本火之出初之社」を象徴する「鑽火殿」が、再建された。

昭和期にはいると、満州事変から、日中戦争に拡大し、国内では五・一五事件や二・二六事件など暗殺事件が続発、軍事国家体制が強まっていった。学問や思想の弾圧

が相次ぎ、思想統制が強化された。「記紀神話」にもとづく「万世一系の天皇神格」や「八紘一宇」が、国民に浸透していった。一五年の神武天皇即位紀元二六〇〇年奉祝式が、全国の神社で大々的に開催された。

こうした国家神道の高まりを背景に、神祇院には、熊野神社社殿造営の要請が、幾度もよせられた。由緒からも、また、神郡の特別な神社であった当社の社殿荒廃を、もはや放置することはできなかったのである。

昭和一六年、国家財政の厳しいなか、ついに神祇院直轄による造営を決定した。しかし、当初の計画は、本殿は屋根の葺替えに止め、拝殿と社務所を建てるものであった。

これを知った地元は、県をあげての嘆願がつづき、ついに、尼子・大内の合戦で焼失する前の、正式な本殿を造営することに、変更されたのである。

着工されたのは、太平洋戦争開戦と同月の一二月であった。少しでも遅れておれば、造営どころではなかったであろう。戦時中ではあったが、幸運にも、当地は木材が豊富で、遅れがちながら、工事は続けられた。

昭和二〇年終戦、「神道指令」により、国費による建築は続行できなくなった。本殿は、軸柱がようやく建っただけで、その後の屋根工事は見込みが立たず、工事は中途で、中止に追い込まれた。

氏子を中心にして、造営奉賛会を組織し、県内外より、寄付を募り、工事再開をはかるものの、終戦直後の経済困窮な状態から、募金は芳しいものではなかった。

ところが、東京で請負業をしていた隠岐出身の実業家が、残る全額の援助を申し出て、ようやく工事は再開された。当初の計画からは、二年の遅れはしたものの、二二年末竣工した。これが現在の本殿である。規模は、出雲大社の二分の一であるが、同じ大社造りで、古社の威厳を醸し出している。

その後も、鳥居や橋の増改築を行い、境内の整備がすすめられた。

四三年には出雲国造家から、出雲大社教管長を宮司に迎え、祭祀組織を強化した。

こうした経緯を踏まえ、昭和五一年になり、神社本庁は、ようやく、大社社号を認可したのである。

ここに名実ともに、熊野大社は、完全に再興した。明治四年熊野神社として復活してから、一〇五年の期間を要したのである。

当社は、『日本書紀』の斉明五年に、「厳神の宮」として初めて歴史上に名を留めてから、千年後に一度歴史上から消え去った。それから三百年を経て、再興したのであった。

平成二四年晩夏、出雲大社を参拝した。この年は『古事記』編纂一三〇〇年に当たり、近くで「神話博」が開かれていることもあり、多くの観光客や修学旅行生を集めていた。近年「縁結びの神」としても知られ、若い女性も多かった。二五年は「平成の大遷宮」が行われるので、さらに多くの参拝客が訪れよう。

一方、翌日訪問した熊野大社の広い境内には、私のほかは、誰もいなかった。松江からバスで乗継ぎ、二時間かかる不便さはあるものの、両大社の賑わいは、比べようのないものであった。門前には、旅館や土産屋、食べもの屋もなかった。

最後に訪れた来客参集所のテレビは、「亀太夫神事」を大きな音で放映していた。この神事では、出雲大社宮司が、「古伝新嘗祭」で使う神火を熾すために、熊野大社から臼と杵を貰い受けるために赴くもので、代わりに杵と臼の形をした餅を献上する。十月十五日、鑽火祭で行われるこの神事は、出雲大社が持参した餅の出来栄えについて

「今年の餅は、形が不恰好で似ていない。」

「餅の色が黒ずんでおり、受け取れない。」

「これでは、小さすぎる。持ち帰れ。」

などと、下級社人である亀太夫が、出雲大社宮司に、嫌味や、難ぐせ、悪態をつくのである。

これに対し、出雲大社宮司は、臼と杵を貰い受けしようと、ただひたすら頭を下げ、必死にお願いするのである。

ビデオの放映をみているのは、私一人であった。古代出雲国では、出雲大社よりつねに上位で、筆頭の地位にあった熊野大社を、この神事は、現代に語りかけているように、私には思えてならなかった。

完

参考文献
『出雲国神社史の研究』（石塚尊俊　岩田書院）
『出雲国風土記と古代日本』（瀧音能之　雄山閣）
『熊野大社』（熊野大社）

（司馬雑感　三十二）

新撰組の故郷を歩く

山田嘉久

一　土方歳三の生家

司馬遼太郎が新撰組副長土方歳三（一八三五―一八六九）の生家を訪ねたのは長篇「燃えよ剣」の取材を始めた昭和三十七年（一九六二）初冬だった。その時、司馬は歳三の兄為五郎の曾孫にあたる〈五〇歳くらいの人〉（土方康氏）に聞いている。

〈「一体、歳三（さいぞう）ですか、歳三（としぞう）ですか」（中略）「ええ、このへんじゃ、トシサン、トシサンとよんでいました」〉（「歴史と小説」（土方歳三の家））

この話は司馬が昭和四〇年代初めに出した最初の対談集「手掘り日本史」にも出て来る。

我々が歳三の生家を訪ねたのは、それから丁度五〇年後の平成二十四年師走だった。司馬も書いているように、この辺りは殆どが土方姓。どうも明治の創姓のとき、村から土方歳三が出たというので、みなその姓をつけたらしい。

そのなかでも歳三の家は「お大尽」と呼ばれていた。その「お大尽」の生家は現在、一部が「土方歳三資料館」となって公開されている。館長土方愛さんの話では、歳三が生まれた頃には生家はもっと横川（多摩川の支流）寄りにあったが、歳三が十二歳のころ、多摩川の出水により一部が流され、残った母屋等を移転して今の場所になったとのことだった。

愛さんは司馬が会った前記康さんの孫で六代目にあたる。資料館の外では七代目の幼児が一人で三輪車で遊んでいた。

この資料館の目玉は歳三の愛刀「和泉守兼定」。

近藤の「虎徹」、沖田の「菊一文字」とともに有名であるが、刀鞘には数か所に刀痕が残っていた。この愛刀で彼は何人の志士を斬ったのであろう。

隣には歳三の額を守った鉢金もある。これにも刀傷が七、八カ所。京都時代のすさまじい殺し合いを物語って

いる。裏面には「尽忠報国志　土方義豊」と刻まれていた。

歳三着装の鎖帷子や籠手もある。

赤字で「誠」と書かれた有名な新撰組袖章、天然理心流木刀も展示されていたが、「入室　清風」の書は箱館戦争を共に戦った榎本武揚の筆による。

歳三の人柄は、部屋に入ると清らかな風の吹くような男だったの意か。一般の印象と大分異なるが、司馬も「男の魅力」というエッセイの中では

〈私は、作家として、一生、男の魅力とはどんなものかを考え続け、私なりに考えた魅力を書き続けようと思っている〉

と書いている。その代表格が「燃えよ剣」の土方歳三であろう。

そんな武骨な歳三も俳句を嗜んでいたという一面がある。土方家は代々俳句が好きな家系で、歳三も「豊玉」という俳号を持っていた。「燃えよ剣」でも沖田総司が「豊玉宗匠」をからかう場面もある。

その歳三の句集も陳列してあったが、「燃えよ剣」の最終章で死地に赴く歳三が詠んだ句

「シノピリカ　いずこで見ても　蝦夷の月」は句集には載っていなかった。

（なおシノピリカとはアイヌ語で素晴らしいの意。数年前、友人からこの句は歳三ではなく司馬の創作ではないかの質問を受けたが、まだ解答ができないでいる。）

二　石田散薬のこと

資料館にはこのほか、歳三が若い頃、家伝の石田散薬を得意先に卸す時に背負った薬箱も展示されていた。その貼り札には

「家秘相伝　石田散薬　（骨つぎ　打ち身　挫き　筋づれ　腕腰痛）土方製」とある。

土方家を訪ねた司馬が一番、感銘を受けたのは、ほかの歳三の遺品などではなく、この薬箱ではなかったかと想像した。

この頃、司馬は次のようなことを書いていたからである。

〈新撰組のふしぎさは、あの時代、なぜあのような機能的な組織をもちえたかというところにある〉（歴史と小説「新撰組の故郷」）

司馬は一時期、新撰組を調べていた頃、この点がどうもよく分からなかったそうである。新撰組ではまず局長（近藤）という最高職がある。これは最高の命令権はもってはいるが一面、象徴的な性格であり、実際の指揮は副長（土方）がとる。その副長には副長助勤という数名の将校がついているが、その副長助勤もまたそれぞれ小隊をもっている。

一体、こういう組織は何処から学んだのであろうか。多分、歳三が作った組織であろうが、彼には洋式軍隊の素養はない。その疑問が歳三の生家を訪問した時に解けたというのである。

「石田散薬」の原料は近くの浅川の河原で取れる朝顔に似た草である。この草を土用の丑の日に刈り取って、少し乾かし薬研ですりおろして散薬にする。その作業を一日でやる必要があるため、村中の男女を動員しなければならない。

刈る者、運ぶ者、干す者、薬研ですりおろす者、など作業別に人間を区分して組織をつくりあげ効率よく動かしてゆかなければならない。その総指揮を歳三は十三、四歳の頃からやらされていた。

このようなことを土方家の人に聞いた司馬は、これが新撰組という機能体の原型ではあるまいかと感じたという。

また、司馬は「助勤」という辞書にもない奇妙な言葉も考えている。

幕府の最高学府である昌平黌の寄宿舎の組織にこの職があることを知った司馬だが、百姓上がりの近藤や土方が昌平黌に縁があるはずはないので、あるいは多少の縁があった山南敬助の知恵ではないかと想像しているのである。

このことは晩年に書かれた「街道をゆく」（神田界隈）でも触れている。

三　歳三の墓と菩提寺

歳三の墓は生家の近くの石田寺にあった。

その寺の前にはこう書いてあった。

「新撰組副長土方歳三義豊は、天保六年（一八三五）、土方義諄の四男（末っ子）として、武蔵野国多摩郡石田村（現日野市石田）で生まれた。青春時代は家業（農業、薬の製造販売）を手伝いながら、近藤周助について天然理心流を学び、近藤勇、沖田総司らと知り合った。（以下略）」

墓誌には「俗名　土方歳三義豊

明治二年五月十一日　箱館一本木関門に於て　戦死　享年三十五才」

とあった。

その石田寺の母寺は、近くの名高い高幡不動尊であり、歳三の菩提寺となっている。

悪ガキ時代の歳三はこの寺を遊び場所として数々の悪戯をしたようだが、今では堂々たる銅像の主となっている。これも司馬の「燃えよ剣」が縁とのことだった。

またその隣には「近藤勇、土方歳三顕彰碑」、「殉節両雄之碑」も建っている。

篆額は会津の松平容保、書は幕府の侍医を務めた松本順と記してあった。

しかしこの寺の資料によると、この顕彰碑建立には迂余曲折があったようで、明治二年、歳三が箱館で戦死し、戊辰戦争が集結した後も新政府の戦死者に対する扱いは

苛烈で、供養も儘ならない状態が五年以上も続いた。漸く明治七年の太政官通達によって、政府軍に刃向かった人たちの祭司、慰霊が許可されたので、地元でも近藤、土方の両雄の顕彰碑が建立されることが決まった。しかし建設許可がすぐに得られず、実際に建立されたのは十年以上も経った明治二十一年だという。

四　バラガキ歳三

〈この近在では、歳三のことを、「石田村のバラガキ」と陰口でよんでいる。茨垣と書く。触ると刺す例の茨である。〉（燃えよ剣）

歳三の生まれた武州は、百姓たちの間で剣術修行が盛んだった。そのため流派も多く、天然理心流、甲源一刀流、柳剛流などがあった。

「燃えよ剣」冒頭部のハイライトは、近くの分倍河原での決闘場面である。天然理心流の歳三と沖田総司の二人が相対したのがライバル七里研之助の率いる甲源一刀流一派だった。

この辺りの決闘場面の司馬の筆は冴えている。

〈「土方歳三、参る」

歳三は、踏み込んで左袈裟に斬り、トントンととびさがるなり、川を一足でとび越え、向こう土手の草をつかみ、大股に這いあがった。その身のこなし、まるで喧嘩をするために生まれてきたような男である。〉

〈総司はどんな斬り方をするのか、返り血もあびていない。

「お前…」小面憎くなった。（こいつ、鬼の申し子か）〉

因みにこの頃、司馬は五味康祐などと共に「剣豪作家」と呼ばれていた。

「燃えよ剣」は昭和三十七年十一月から連載が始まったが、その半年前からは「新撰組血風録」を既に執筆中である。更に新撰組関連の短編「冷泉斬り」「理心流異聞」などもこの年に書いた。当時の司馬がいかに新撰組に関心を持っていたかを窺い知ることができる。

特筆すべきは、これらの作品は出世作となった「竜馬がゆく」と同時進行形のかたちで書いていることである。すなわち「明治維新」を薩長側、幕府側両面から観察しようとしているのである

五　佐藤彦五郎資料館

幼くして両親を亡くした歳三は姉のぶの嫁ぎ先である佐藤彦五郎宅によく出入りしていたといわれる。

彦五郎は十一歳で名主を継ぎ、日野本郷三千石を管理していた。近隣治安のため、天然理心流三代目近藤周助の門に入り、近藤勇の兄弟弟子として剣法を学び、極意皆伝の免許後は屋敷内に道場を設けた。

この佐藤道場には近藤勇、歳三のほか、後年新撰組隊士となった沖田総司、井上源三郎、山南敬助などが常に

出入りして竹刀を振っていた。

そして文久三年、幕府が将軍家茂の上洛警護のために、全国の志士を募集していることは江川代官から彦五郎に伝わった。これに応じようとする近藤勇に彦五郎は大いに賛成、本人も参加したがったが、名主の仕事があったので義弟の歳三を自分の代わりと、源三郎ら一〇名を同行させたのである。

現在、佐藤宅は「新撰組資料館」として保存されているというので、平成二十五年春、訪ねて一六代子孫の佐藤福子さんに説明を聞いた。館内には歳三の愛用の鉄扇や愛刀（葵御紋が刻印された越前康継）などが展示されていた。

また山南敬助の死を知らせる沖田総司の手紙は貴重だと云う。

函館戦争で歳三戦死の後、脱出した甥の市村鉄之助が彦五郎に届けた歳三写真や近藤勇が直接持参したという近藤写真も展示されていた。いずれも今日、世上有名な写真となっている。

六　日野宿本陣

江戸時代、五街道の一つ甲州道中（現在の甲州街道）四十五宿のうち日野宿は江戸から数えて十番目の宿場であり、本陣、脇本陣が軒を連ねていた。

西が本陣の上佐藤家、東が脇本陣の下佐藤家で、現在、両家間は塀が設けられ敷地を区分しているが、当時は仕切りがなく自由に行き来ができ、街道沿いに長屋門が並び建っていたといわれる。

街道沿いの大名（高島藩諏訪氏、高遠藩内藤氏、飯田藩脇坂氏）は参勤交代の際には本陣を利用した。

前述の通り、代々近隣の名主であった佐藤彦五郎が常住したのが、日野宿脇本陣であり、その屋敷東側に佐藤道場があった。そのため脇本陣には歳三が昼寝をしていたという座敷や、前述の歳三の最期を見届けた甥の市村鉄之助が潜伏していた部屋も保存されていた。

七　天然理心流道場（東京至誠館道場）

幕末、日野宿佐藤邸内にあった天然理心流道場は現在、日野市程久保にある東京至誠館道場に引き継がれている。

我々はタクシーに分乗して日野宿から多摩動物公園近くにある現在の道場まで足を延ばした。

現在の館長は九代目。近藤勇の長兄宮川音五郎の子孫に当たる。

館長の説明によると、天然理心流は遠江出身の近藤内蔵助が寛政年間初期（一七九〇年代、近藤勇が生まれる四〇年位前）に創始した流派で、内蔵助が武者修行で諸国を遊歴して鹿島新当流を学んだ結果、独自の剣術、柔術、棒術を編み出した。「自然にさからわず、天に象り、

地に法り以て剣理を極める」ことから天然理心流と名付けたという。近藤勇はこの流派の四代目に当たるが二代目方昌、三代目周助と共に、いづれも近藤家の養子である。

館長の講話の後、我々は後述の（井上源三郎の子孫）井上雅雄師範の指導による実技を見学することができた。実技者の中には小学生、若い女性も含まれていた。

同行のS氏は館長に近藤勇の愛刀「虎徹」について質問していた。同氏は芝愛宕下の日陰町の生まれ。此の通りには幕末、数多くの刀剣屋が軒を連ねており、同氏が子供時代にもその面影を残していたという。そのうちの一軒の相模屋で文久三年正月、勇が求めたのが愛刀「虎徹」とされている。それだけに同氏は「虎徹」に人一番、関心があったのであろう。（なお、「新撰組血風録」には「虎徹」なる一章がある）

八　井上源三郎資料館

同じ新撰組でも華やかな土方歳三や沖田総司に比べると、新撰組六番隊組長で鳥羽、伏見の戦いで銃弾に斃れた井上源三郎はいかにも地味である。

その生家（現日野市）が資料館になっており、源三郎の五代目子孫井上雅雄氏に源三郎の話を聞いた。

井上源三郎は文政十二年（一八二九）、代々八王子千人同心を勤めていた井上藤左衛門の三男として多摩郡日野宿に生を受けた。シーボルトが日本国地図入手の発覚により国外追放となった翌年に当たる。

弘化四年（一八四七）頃、兄松五郎に伴われ天然理心流の近藤周助に入門して、一〇年余の万延元年には「免許」を得ている。そのため、館内には近藤周助から与えられた切紙、目録、中極位目録、免許状が展示されていた。

なお「燃えよ剣」では源三郎は円満な性格ながら剣はさほどでないように描かれているが、実際は新撰組内でも指折りの技量の持ち主だったとは館長の説明だった。多少、身内の贔屓倒しの感あり。

幕末の風雲急を告げる文久三年、幕府が募った将軍家茂の上洛警護役に源三郎も近藤勇らと共に応募したことは前述の通りだが、彼らは江戸から木曾路（中山道）を京都に向かった。この時、兄松五郎も八王子千人同心の一員として家茂警護のため東海道を上洛している。

京都到着後、幕府は清川八郎の策動に驚き浪士組に帰東を命じたが、近藤らと共に京に留まり「新撰組」を結成、局長近藤、副長土方のもと、自らは副長助勤、六番隊組長となった。

元治元年の池田屋事件、蛤御門ノ変などに存分に腕前を発揮したものの、時代の趨勢は日々幕府に背を向けていった。

慶応三年の大政奉還、王政復古に引き続いての慶応四

年の鳥羽伏見の戦いで戦死。享年四〇歳であった。その様子は甥の井上泰助（十二歳）が生家に伝えたが、その泰助の晩年の肖像画が展示してあった。

その他、源三郎が天然理心流の稽古に用いたという木刀や日野宿の八坂神社に奉納された天然理心流の奉献額などが館内に並んでいた。

九　京都を舞台とした新撰組

歳三たちが甲源一刀流との抗争に明け暮れしていた頃の文久二年（一八六二）、転機が訪れる。近藤道場の食客、山南敬助が幕府肝いりの「浪士組」設立の情報をもたらしたのだ。浪士組参加のため、道場をたたみ近藤、土方ら十名が京にのぼったことは再三記述した通りである。

従って、これ以降の新撰組の活動の場は主に京都に移るので、本テーマからは外れる。したがって「燃えよ剣」によって、その概略を記すに留める。

その尊王攘夷を主張する清川らから分派し、芹澤鴨を総師とした「新撰組」が誕生したのが、文久三年三月のこと。

芹澤を使って会津藩との関係をつくり、役目の終わった芹澤一派を殺戮して壊滅させ、近藤、土方らの新撰組が生まれたのがこの年の暮れだった。

この頃、幕府は浪士取締令を出した。理由は、将軍家茂の入洛にそなえ京の治安を守るため。この日から京には血の雨が降り始めた。

新撰組が雷名を上げたには、元治元年（一八六四）の池田屋ノ変である。池田屋に集まっていた長州藩士ら倒幕派は二十数名。討ち入る新撰組は近藤以下七、八人。近藤らの鬼神のような働きによって、倒幕派の浪士の多くが命を落とした。これ以降、新撰組の勇名も高まっていったが、時代は止まることなく倒幕に流れていった。

慶応三年（一八六七）、将軍慶喜は大政奉還を行う。

しかも同時期、倒幕の密勅が薩摩藩と長州藩に下っていた。同年十二月九日、王政復古の大号令の後、慶喜は大阪城内で謹慎するが、新撰組のみは伏見奉行所にとどまる。

この伏見で近藤は狙撃される。以後の新撰組は土方が指揮をとることになる。

薩摩の挑発に乗った幕府軍は明治元年一月三日、伏見で薩長土軍と激突する。鳥羽伏見の戦いである。圧倒的な大軍を率いていた幕府軍だが、中立を守っていた諸藩が敵方にまわるなどもあって、戦意喪失して遁走してしまった。

以降、幕府軍の敗北は続くが、逆に土方の運命はいよいよ輝きをましていく。

その最後の戦いは、北海道の五稜郭であった。土方らしく戦場に自ら討って出て壮烈な戦死をとげるのであ

る。

（なお、「京都での新撰組」については拙稿「司馬遼太郎と京都」（まんじ平成一九年八月号）参照）

一〇　敗けて帰った故郷

鳥羽伏見の戦いに敗れたあと、近藤、土方ら新撰組は関東に戻ったが、わずか四〇人ほどになっていた。

再起をはかる近藤は甲府城（幕府直轄領一〇〇万石）を押さえるため、「甲陽鎮撫隊」を結成し、江戸から甲府に向かう。これを勧めたのは将軍慶喜から全権を委任された勝海舟だという。知恵者の海舟は先ず江戸から幕府軍を散らす（江戸をカラにする）ことであった。そのため、幕府艦隊を率いた榎本武揚には蝦夷地（北海道）行きを薦め、幕府歩兵は大島圭介を頭目として北関東に奔らせた。そして近藤には「若年寄」格という大名の処遇にし、土方には「寄合席」という大身待遇にして、体よく江戸から追い払った。

軍資金として五千両、大砲二門、小銃五百丁も与えた。

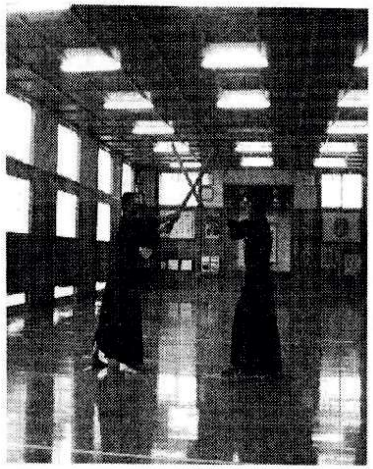
途中、近藤、土方は懐かしい故郷、多摩の日野を訪ねている。そのくせはかばかしい行軍もせず、近藤は大名の乗り物に乗り、行列を練り、毎夜のように酒宴を開いた。そして泊まる先々で近藤らは歓待された。

故郷に錦を飾ったことになるが、そのため目指す甲府城は官軍に先に押さえられてしまう結果になってしまった。かれらが一向に戦闘行軍らしい行軍をしなかったのは、近藤自身―どうせ行ってもだめだ。という気分があったのでないかと司馬も推察している。（街道をゆく「甲州街道」）

板垣退助率いる官軍に勝沼であっさり敗北、ちりぢりになる。ついに二人きりになった近藤、土方は流山で官軍に取り囲まれる。これが近藤にとっての最期の陣となった。

近藤は土方の反対を押し切って投降を決意する。

流山駅付近には近藤勇陣屋跡の碑と「近藤、土方離別の地」碑がひっそりと立っていた。



（天然理心流道場―東京都日野市）

人類の仲間（四）

鈴木守

第六節　現代型サピエンスの登場（二）

三　現代型サピエンスの生活と文化

現代型サピエンスの時代は、中期旧石器時代の後半から始まり、後期旧石器時代、中石器時代、新石器時代を経て古代文明期に入り、以後、中世、近世、近代、現代へと続いているが、この項では、石器時代の現代型サピエンスの生活と文化を中心に述べる。

現代型サピエンスは前報で述べたように、二〇数万年前にアフリカで発祥したと推定されており、初期サピエンスは、ヨーロッパのネアンデルタール人と共に剥片石器を主体とする中期旧石器文化の担い手となった。その証拠として、一五万年前から一〇万年前の初期サピエンスの足跡が南アフリカのクラシーズ河口、ボーダー洞窟、エチオピアのオモ・キビシュに残され、これらの遺跡では人骨とムスティエ型剥片石器が伴出していることを挙げることができる。しかし、一二万年前頃のクラシーズ遺跡には、剥片石器より進歩的な半月型や台型の石器も出土しており、かなり早い時代から後期旧石器文化の息吹を感じさせる。

ところで、南アフリカに定住した早期サピエンスの遺跡クラシーズには、アザラシやペンギンの骨、ムール貝の貝殻などの残骸がごみ捨て場に残されており、彼らの生活の一端を窺うことができ、この証拠から類推すると、クラシーズだけでなく、当時の遺跡、ボーダーや後述するブロンボスなどの洞窟は、いずれもインド洋に面した海岸地帯に所在していたので、洞窟の住人たちは恐らく

漁撈生活も営み、海産物も食生活に利用していたことであろう。食生活といえば、クラシーズ人の食人風習を示唆する文献も認められた。

一二万年前から一〇万年前の時代には既述した通り、現代型サピエンスは出アフリカを果たし、レバントに足跡を残している。彼らが足を止めたカフゼーやスフールからムスティエ型の石器が出土しているので、中近東の地も未だ中期旧石器時代だったのである。だが、彼らは一〇万年前頃から中近東の地を離れて、ユーラシアの各地へ拡散して行った。その跡地にネアンデルタール人がヨーロッパから進出してきたことは、既に述べた通りである。

一〇万年前以降になると、アフリカの地に後期旧石器文化の影がちらつき始めた。文化形態は未だ中期旧石器時代様式だったが、九万年前頃のザイール東部の地では、後期旧石器文化を思わせる漁撈用骨製尖頭器を使用しており、七万七千年前頃の南ア・ブロンボス洞窟から漸新的な文化的産物として、線刻模様を施した赭土の塊と貝殻ビーズが出土。前者はボディペイントや皮鞣し、後者は腕輪や首飾りとしたようである。

このように、アフリカ社会では石器造りの技術が徐々に進行し、五万年前頃には後期旧石器時代の到来を告げていた。即ち、後期型の石器とダチョウ卵殻製のビーズがケニア南部で発見されている。

いよいよ、後期旧石器時代である。この時代は文化論的にみると、人類史上画期的な革新の時代であり、この時代を構築した一群の現代型サピエンスは、後期旧石器型石器製造技術を手にしてアフリカを出立し、四万年前頃にヨーロッパ各地に拡散した。

私の好き勝手な想像でいうと、「彼らは拡散途上、中近東（コーカサス地方と思われるが）で白人化した先達グループと婚姻関係を結び、活性型ビタミンD合成能力のある白人形質を確保して、光の弱いヨーロッパ進出を可能にした」のであろう。かくして、彼らクロマニヨン人たちは、ヨーロッパ各地に後期旧石器文化を構築して行ったのである。なお、白人とビタミンDとの因果関係については先報で述べた。

後期旧石器文化は石刃石器を基調とし、中石器時代が始まる一万一千年前頃まで続いた。この間のヨーロッパ文化を、石器の種類、絵画彫刻の傾向などによって、5文化期に分けている。即ち、三万六千年前頃から三万年前頃までのシャテルペルロン、続いて二万七千年前頃までがオーリニャック、二万年前頃までがグラヴェット、一万五千年前頃までがソリュートレ、一万一千年前頃までがマドレーヌとされている。

この時代の石器は、前時代の剥片石器より薄手で細長く両側が平行な石刃といわれる石器を使用していた。石刃系石器は用途に応じた特別な器形をなし、夫々、ナイフ、のみ、錐、矢尻などとして用いられた。また、骨角製品も数多く使われ始め、投げ槍や槍の穂先用の尖頭器、逆刺のある銛、短剣、釣針、縫針などとともに、槍を投げる道具もあり、針は石製と骨製のものがあった。

かように、この時代には、槍、投げ槍、弓矢、銛、釣針などが狩猟や漁撈の道具に開発され、投槍器のように梃の原理を応用したり、弓矢のように張力を利用した道具も発明され、大型獣の猟が可能となった。産地が限定される黒曜石や火打石は交易によって入手していた。

後期旧石器時代には、石器、骨角器の著しい進歩があり、為に生業が盛んになるにつれて人口が増加し、中には数百人の成員からなる氏族社会を形成したケースもあったが、一般的には穴居生活が多く、場所によっては平地に居を構えたようである。

彼らの生活の一端を覗くと、赭土で毛皮を鞣して石刃で裁断し、馬の立て髪や尻尾の毛を糸代わりにして針穴に通し、毛皮を縫い付けて衣服を作った。ネアンデルタール人が寒地適応型の形質を獲得したのに対して、クロマニヨン人は寒冷制御の衣服を考案したのである。その他、成書には「女は貝殻のビーズで身を飾り、髪を梳き、髪形を整え、赭土を塗って日焼け止めとした」と記されていた。

後期旧石器時代の人たちは、豊猟や安全を祈願して、あるいは母体信仰に基づいて呪術的な祭祀を行い、聖域とされる洞窟奥の壁に絵を描いたり、祭壇に豊満な女身像を祠ったりした。

これらの絵画や彫像は、フランス西南部のドルドーニュやピレネー地方、北スペインのカンタブリア地方に数多く見られ、フランコ・カンタブリア美術と称されている。これらの作品は、オーリニャック期からマドレーヌ期にかけて創作されたものであるが、現代人の眼で見ても芸術的価値が十分に認められている。中でも、フランス・ラスコーの牛や馬、スペイン・アルタミラの牛や鹿の洞窟壁画、フランス・ローセルの角坏を捧げる女性レリーフ、オーストリア・ビレンドルフの石のビーナスなどの彫像が有名である。

洞窟壁画を描いた絵師たちは、暗い穴の中で、乾燥させた苔を灯心として石皿に乗せ、動物油を注いで火を点し、壁に向かって、赤鉄鉱、黄鉄鉱、マンガン鉱、骨炭、白亜を絵具として絵筆を振っていた。青や緑の顔料は使

われていなかったようである。

昨年、朝日新聞（一二・六・一五日刊）が「八十数箇所あるフランコ・カンタブリア文化の洞窟壁画の年代を調べ直し、最も古い壁画はラスコーより古く、四万一千年前であり、ネアンデルタール人の遺物である可能性も浮かんできた」と報道していたが、果たして如何なものであろうか？

これらの洞窟壁画や女身彫像の制作は、美術的関心に基づくものではなく、呪術的な行為と見做されている。洞窟の奥深く聖域の壁に描かれた絵柄や祭壇に祠られた妊婦像は呪術的信仰の対象として創造された御神体の一種とされている。後期旧石器時代の狩猟民は、猟の安全や豊猟を願って動物の姿を壁面に描き、豊穣や子孫繁栄を祈って妊婦姿の女身像を創作したといわれている。

しかし、世界美術全集収載の作品は、御神体というよりか見事な美術作品として認識せざるを得ない。だから、これらの作品が素人の手で創られたとは思えない。プロの仕事と考える方が妥当である。このことを立証する証拠が洞窟内に残されていた。絵画の練習に使われたと思われる小石が何千個も掘り出されている。小石には動物がスケッチされており、中には稚拙な絵の一部が巧みな線で修正されたのさえある。専門的絵師養成の跡が偲ばれる。

次は呪術師についてである。呪術師は壁画にも描かれている。彼らは動物の姿に仮装して画面に登場する。フランスのレ・トロア・フレール洞窟には、鹿に扮して踊りのステップを踏んでいる呪術師、野牛の姿で笛を吹きながら野牛に近寄る呪術師が描かれていた。

彼らは、彼らが体得した呪術によって獲物となる動物を誘寄せる役割を担ったのであろう。恐らく、彼らは常日頃、動物の挙動を観察し、夫々の動物が好む姿態や音色を熟知して、それらを呪術のテクニックに取り入れたに違いない。

ところで、職業が専門化するのは、古代文明早期の時代に始まったとされている。しかしながら、後期旧石器時代の絵師、彫り師、呪術師たちはプロとしての技能を身に付け、共同体から生活の保証を受けていたと思われるので、古代より遥か昔の三万年前頃には、専門的職業人が育っていたと考えざるを得ない。というのは、狩猟用具の進歩によって、狩猟民たちの狩りの力が上昇したので、共同体の中に絵師たちを養うだけの経済的な余力が生じ始めたと思われるからである。

赤と呪術の関係にも興味が持たれる。当時の呪術師たちは顔を赤く彩っていたといわれている。例えば、アルタミラ洞窟の壁画には赤く塗った呪術師らしい人物が描かれている。女体信仰の御神体であるビレンドルフの石

のビーナスとか、ローセル洞窟の女性レリーフには、赤い痕跡が残っているので、元々は全身を赤く彩られていたと想定されている。赤い彩りは体だけではない。フランス・ニオー洞窟の奥深くに壁画が描かれており、その聖域までの道筋は赭土で固められている。更に、赤は通過儀礼の中にも姿を現わす。成書には、「埋葬が丁寧になり、遺骸に装身具を添え、赭土を散布した例もある」と記されている。

かように、ヨーロッパに進出したクロマニヨン人の呪術社会では、赤色が重要な役割を果たしていた。恐らく、赤は色彩自体が除災招福の呪符であり、冠婚葬祭の主役だったに相違ない。

このような傾向は、後期旧石器時代の東アジアにも波及し、中国・周口店山頂洞（三万～一万年前）にも埋葬の跡が見られ、旧石器時代晩期には東アジアに広く伝播し、赭土散布の跡や伴出した装身具に赤い粉末が付着している例が屢々認められ、日本でも陸前中沢浜貝塚から、赤く染まった人骨が発掘されている。

中石器時代に入る。この時代は一万四千年前頃から七千年前頃までの旧石器時代と新石器時代の狭間の時代であり、気象環境的には後氷期、即ちステージ1の温暖期に入り始め、氷河が溶け、水位が上昇して海蝕が進行した時代である。例えば、ビュルム氷期と呼ばれるステージ2の寒冷期の頃は、東インド諸島とマレー半島、日本列島と朝鮮半島の間は陸続きだったが、海蝕によって島になった。

現在、中石器時代の資料は、ヨーロッパと北・東アフリカ、西アジアにしか認められていない。したがって、ヨーロッパを中心にした中石器時代人の生活と文化を取り挙げることにする。

この時代の人たちの生活は、旧石器時代と同様に狩猟・採集の獲得経済を主体にしていたが、前述したような気象条件の変化が獲得経済に対して有利に働いただけでなく、気候の温暖化による海蝕が漁撈を盛んにした。

経済基盤の安定は、居住様式にも変化を与えた。旧石器時代の人たちは仮小屋や洞窟に起居しながら、動物の後を追って移動生活していたが、この時代になると経済が安定し、五〇人前後の共同集落を形成して、竪穴や丸太小屋を設けて定住するようになった。

生活手段が変わると生活用具も変化した。前時代の剥片石器を更に細かくし、改良を加えた細石器（石刃、石匕、尖石）を作った。それらの石器は、漁撈に必要な銛や漁鈎、鳥獣の狩猟に用いる矢尻や槍の穂先として使用され、前時代のものより性能が改善され、量産も可能にした。

また、竪穴を掘ったり、丸太小屋作りに必要なトランケット（石斧）やピック（鶴嘴）のような石核系石器も改良された。このような道具作りの技術の進歩が、舟や橇の製造を可能とし、それらを交通手段に使用するようになった。

なお、この時代には、犬や山羊、羊の飼育に成功し、牧畜の基礎を築いていた。また、ドイツ・オフネット洞窟には赭土で覆われた人骨が眠っており、ナイル川には葦舟が浮かんでいたという。

新石器時代は、磨製石器文化の時代である。磨製石器は研磨と敲打によって、旧石器よりも鋭利且強靭な刃を有しており、九千年前頃、オリエントで開発され、新石器時代が始まった。その後、三千年前頃に金属器が出現し、石器文化が衰微して新石器時代は終焉を迎えることになった。ということで、新石器時代は九千年前から三千年前、紀元歴に読み替えれば前七千年から前一千年である。

新石器時代が始まった丁度その頃、メソポタミアで農耕と牧畜が行われるようになったため、新石器時代は「磨製石器を使って農耕・牧畜を行った時代」と定義されている。しかし、世界各地で展開された新石器文化は、磨製石器と土器の併用とか、狩猟、採集の獲得経済と生産経済の両立など、夫々の地の事情に基づいて固有の文化を築いていた。したがって、この時代を象徴する農耕と畜産、即ち生産経済に触れたうえで、夫々の地における新石器文化の特色について述べる。

中石器時代までは、主として狩猟、採集による獲得経済だったが、新石器時代に入ると、栽培と飼育による生産経済へ移行した。穀物の栽培は多量の食物を生産するため、獲得経済よりも生活を安定させ、人口の増加とそれに伴って人類の活動範囲が広がり、やがて文明の段階に入る基礎を培った。言わば、古代文明助走の時代ということになろうか。

かように、生産経済の開発は人類発展史上画期的なことだったが、新石器文化を築いた各地の生産経済の様子は夫々の地域ごとに相違していた。恐らく殆どの新石器時代人は、地域の環境に応じて適宜に、狩猟、採集、漁撈、栽培、飼育の生計法を選択し、混合経済の下で生活していたであろう。例えば、メソポタミアでは、生産経済が確立していたかも知れないが、ヨーロッパでは獲得経済が残存した混合経済が考えられ、アフリカ中央部、極東、新大陸などでは狩猟、採集の獲得経済が主体だっただろう。

新石器時代の農産物をみると、オリエントからヨーロッパにかけては麦類、高温多湿な東南アジアでは米、メキシコ高原では玉蜀黍、南米では馬鈴薯、南瓜が栽培さ

れていた。動物飼育に関しては、犬、羊、山羊、豚、牛が主だったが、ユーラシア大陸の平原地帯で馬の馴化に成功し、中国では鶏を家畜化していた。

地域別にみた各地の生活と文化の特徴、乃至は概況を記す。

メソポタミア北部、現在のキルクーク近くのジャルモが農耕文化発祥の地とされている。この遺跡の実年代は紀元前六千年（八千年前）頃に遡るとされており、麦類栽培の跡があり、磨製の石鍬、石臼、石容器、石斧が使われていた。ジャルモ以外にも肥沃の三日月地帯周辺には七・八千年前頃の農村が点在していた。農村では、麦類を栽培し、家畜を飼育し始めた。かように、農業と牧畜を生業とするようになると、生活が安定して人々が定住するようになり、竪穴住居や石造の家で生活した。これらの住居が二、三〇軒並んで共同体的な集落となり、これらが更に発展してパレスチナには最古の都市イェリコが成立した。

新石器時代後半には、三日月地帯でも石器に加えて、土器が使われるようになった。土器は後期旧石器時代にケニアで開発され、新石器時代に各地へ普及したのである。

エジプトでも、メソポタミアに遅れることなく新石器文化が発達した。エジプト人は川やオアシスのほとりに定着し、ナイルの氾濫による自然灌漑によって豊かな農耕生活が可能となったが、狩猟漁撈も行っていた。

エジプト人は亜麻を栽培してリンネルを作り、貝殻、獣骨、象牙、鴕鳥の卵で作ったビーズを装飾品とし、パレット上で顔料を混ぜ合わせて頬や目の縁を化粧した。

エジプトの影響を受けてアフリカにも新石器文化が波及した。現今ではエジプトの西方に広がる砂漠地帯は居住には適していないが、新石器時代の頃には居住が可能であり、サハラ、アルジェリア、モーリタニアでは、狩猟、牧畜を生業とし、磨製石器や土器を使用していた。

エジプトの南、スーダンから東アフリカに至る地域では、主として狩猟、漁撈を業としていたが、家畜の飼育も行っていた。ケニアでは既述したように、土器を後期旧石器時代の頃から使い始めていた。また、南アフリカにも新石器文化の跡が残されている。

ヨーロッパは、クロマニヨン人によって後期旧石器文化の花が開いていたが、新石器文化の開花はオリエントに遅れをとり、この圏内では、アナトリア（トルコ）、バルカン、黒海北西部にかけて、比較的早く新石器文化が開かれたが、穀物栽培、動物飼育、狩猟の混合経済だった。ドナウ川流域、西ハンガリーからポーランド、ド

イツ、ベルギーに亙る地域は肥沃な黄土地帯で、農耕に適していた。この地の人たちは土地が痩せると、次々に新しい土地を開墾して移動する遊牧的な農耕を行っていた。

東アジアでは、黄河流域で農耕が盛んになり、家屋は一戸建てが主流だったが、一戸の中に部屋を設ける方式が出始めた。文化的には石器のほかに土器と陶器が作られていた。最近「江西省仙人洞で、料理に使ったと思われる二万年前の現在最古の土器が発掘された」との報道があった（朝日新聞一二・六・二九夕刊）が、前出ケニアの土器と同じく後期旧石器時代の作品である。しかし、土器製作が普遍化したのは新石器時代からとされている。

中国では六千年前以前の仰韶文化、並びに四千年前前後の龍山文化の時代に夫々、彩陶と黒陶を焼いていた。土器・陶器とも重要な日常品であるが、彩陶や黒陶の中には芸術的価値の高い工芸品も見られた。

日本の新石器時代は縄文時代であるとされており、土器文化を形作っていたが、農耕は行われておらず、未だ狩猟採集で糧を得ていたので、旧石器時代の色彩が濃厚だった。日本の生産経済が始まったのは、弥生時代に入ってからである。

新石器時代の東アジアには、シャーマニズムやトーテミズムの気配が漂っており、わが国においても、五千年前前後の三内丸山遺跡には遺骸周囲にベンカラを撒いた跡があり、弥生時代の吉野ヶ里には、顔面を赤く彩った呪術師の遺体が残されていた。

その他の文化的な動向をピックアップすると、後期旧石器時代に隆盛したフランコ・カンタブリア芸術のような秀品は影を潜めたが、東スペイン・ヴァレンシア地方にはフランコ・カンタブリア芸術の影響を受けたカプサ文化があり、この文化はヴァレンシア地方の岩山の岩影に彩画や線刻画を残していた。地中海の対岸にはカプサ文化の影響を受けたのか、アトラス山地、サハラ砂漠、リビア砂漠にも岩面絵画が残されている。南アフリカにおいても、ブッシュマンの祖先たちが洞窟画を描いていた。

彫刻、彫像について調べると、前五〇世紀頃のメソポタミアとエジプト、三〇世紀前頃のギリシャやエーゲ海の島々には、前出ビレンドルフの石のビーナスのように玉門を刻んだ裸女像が残されていた。中でも目に引いたのがギリシャ・テッサリアの女神像であった。この像は、性器を誇示するが如くに開脚した足を持ち上げた姿で彫られており、恰も性器強調の化粧を暗示しているように思えた。

衣装や装飾について触れると、少なくともエジプトやヨーロッパにおいては、飼育した羊から得た羊毛や栽培した亜麻を紡いで糸とし、織機で編んで衣服を作った。レース編みも行っていたようである。

また、エジプトには、貝や獣骨、象牙で作ったネックレスやビーズがあり、イュリコの遺跡から櫛が出土した。東アジアでも、仰韶、龍山文化の頃には石笄や櫛、耳輪、指輪、腕輪が使われ、新石器時代晩期には青銅鏡が登場した。

（次号に続く）

性と化粧（八）

鈴木守

第八節　視覚刺激を媒体として性に関与する化粧

歴史は夜作られる。世界を動かす英雄であろうと、市井の凡人であろうと、房事は専ら闇の中で行われる故、性行為に対して視覚神経が役立っているとは思えない。ましてや、房事の最中は、暗闇の中でも目を閉じて、性の悦楽に耽る人が多いのであるから、視覚神経のことなど忘却の彼方である。だから、視覚神経刺激によって『性行為が促進』されるはずがない。

だが、視覚神経というのは、既述した嗅覚神経や触覚神経のように『性行為を惹起あるいは誘導』させる能力に欠けているが、『性的興奮を誘導』することは可能である。例えば、ストリップ・ショーやヌード写真を見て性的興奮が生じる人もいるのであるから、視覚神経が性的行為に無関与とは思えない。

では、視覚刺激によって性的興奮を誘導する化粧があるだろうか。例えば、触覚神経を介して性的興奮を誘導する化粧をして、瘢痕化粧を挙げることができるが、視覚神経を経由して性的興奮を惹起させる化粧というのはなさそうである。

しかし、性的興奮を誘導するかどうかは分からないが、樋口清之によると、「原始人の中には、生殖器に入墨をするとか、赤く彩るという性器を強調する風習が古くから不変的に続いており、他方、文明社会では、衣服を着用するようになったため、鼻と唇を男女性器の代替とし、女性は唇、男性は鼻を彩るようになった。その名残りが女性の口紅、それと男性がハレの日に鼻筋を白く塗る化粧として残っている」と解説していた。

樋口のいう性器強調の化粧は、前出の香り化粧や瘢痕化粧のように嗅覚や触覚を媒体として認知するのではなく、視覚が刺激を受けて感知される化粧である。性器強調のほかにも、成人表示と既婚者表示の化粧がある。両者とも通過儀礼を表示する化粧であり、夫々、性的成熟と性的経験を標識している。そして、その表示目的は目視によって認知される。したがって、本節では、性と関連を有する化粧のうち、その化粧目的が視覚刺激に基づいて認識される化粧例として、性器強調、成人表示、ならびに既婚者表示の化粧を取り扱うことにする。

一　性器強調の化粧

性器強調の化粧は極めて興味をそそるテーマであるが、その具体的証拠は極めて少ない。そのため、長い間証拠を探し求めてきた。

例えば、十数年前、フジテレビ『人類みな兄弟』の番組で、アマゾンの裸族の姿が放映されたので、彼らの陰部に化粧の形跡はないか、目を皿のようにして画面を見詰めたが、痕跡すら見出だすことができなかった。直ちにテレビ局に電話を入れると、幸い電話の向こうに取材班のメンバーがおり、応対してくれた。彼の答えは「取材期間中には、性器彩色を見ることができなかった」であり、期待は空しく空振りに終わってしまった。

1　スルマ族男性の性器強調

アマゾンの裸族で空振りしてから、十数年過ごした。週刊朝日（〇九・一〇・〇九）グラビアにエチオピアの裸族スルマ族男性のハレの日の姿が掲載されていた。彼らは陰毛を落とし、首からペニスの先まで泥でストライプ模様にペイントしていた。長い間探し求め、初めて巡り逢った性器強調の化粧である。

スルマ族の男性にとって、鍛え抜かれた肉体は男らしさの象徴であり、その肉体に施した性器強調の化粧は最高のファッションであるに違いない。かくして、スルマ族の男性は、ハレの日には陰部剃毛と性器彩色によって性器を誇示する因習を残していたのである。

現時点では、スルマ族の性器強調の化粧は、生身の裸像として唯一の資料である。したがって、絵画、彫刻、民芸品などの創作品に見られる裸身像の中から、性器強調の化粧を示唆あるいは暗示するような資料を探すことにする。性器強調を示唆する化粧としては、性器彩色、股間除毛あるいは下腹部整毛が考えられるので、飽くまでも可能性の範囲でしかないが、これらの条件を基準として、性器強調の化粧の跡を辿ることにする。

2　原始社会では

裸身生活を専らとする熱帯圏や亜熱帯圏に赴くと、化粧文化ではないが、ニューギニアには、ペニス・ケース

を装着した裸族がおり、南アジア一帯では聖域と思しきところには、性器崇拝によるリンガ像が屹立し、ヨーニ像が横たわっている。性器崇拝は性器強調に連動すると思われるので、性器崇拝の像も含めて裸像の跡を追うことにする。

本誌一二三号に紹介した〝原始社会における性と化粧の文化〟を繙くと、インド・オリッサ州の原住民は壁に男女神を描き、女神の陰門を赤く縁取り、ザイールでは陰茎を白く塗った黒人の像が認められた。また、その他にアフリカでは、人像を模した民芸品や神像の無毛の股間に男根や女陰を刻まれていた。かように、下腹部が無毛で性器を備えた裸像は、南米地域では、コロンビア、ブラジル、ベネズエラに認められ、ほかにも、ウクライナやニュージランドでも発見されている。

以上の例は、生身に施した化粧ではないが、前出スルマ族の事例からみて、アフリカや南米の未開社会においては、今も尚、陰部彩色や股間除毛などによる性器強調の化粧風習が残されているのではなかろうか。恐らく、ハレの日の盛装として…。

3　文明社会では

現代文明社会における性器彩色の実例を見出だすことはできなかったが、陰部無毛の女性像は数多くの絵画・彫刻に認めることができた。このような陰毛、腋毛に関わるような風俗・風習については、〝性と毛の化粧（本誌一二五号第五節）〟で既に示した。したがって、この項では、古代文明発祥の時代から現代に至る間の美術作品に見られる裸女図・裸女像の歴史を簡述する。

現代社会で見られるような写実的な女身裸像の嚆矢は、古代ギリシャで創作されたアフロディテ像であろう。中世においては裸女像創造の流れは下火となったが、ルネッサンス期に至ると、ミケランジェロやボッティチェルリなどによって、女性の裸形が美術作品の中に再登場するようになった。だが、当時の美術家たちは、アフロディテやイブのような架空の女性に仮託して女性美を表現した。一方、実在女性の裸形を象った絵画・彫刻は、一七世紀後半頃から登場し、一九世紀末に至ると、陰毛を施した女性像がゴーギャンらの手によって創作されるようになった。

古代文明発祥の地まで足を伸ばすと、インド・マウルヤ朝期の若者は股間を剃毛しており、エジプトにはシースルーの衣装の下に、整ったデルタが透けて見える王妃像があった。しかし、メソポタミアと中国では特記するような証拠は見つからなかった。

4　石器時代の裸女像

新石器時代にも裸女像があった。前三〇世紀頃には、ギリシャのカイロネアとテッサリアに玉門を刻んだ女神像があり、エーゲ海キクラデス島出土の女性像には、下腹部に逆三角形と陰門が施され、ボディペイントの跡が残っている女性像があった。更に古く、前五〇世紀頃のメソポタミアとエジプトでは、股間にVラインが刻まれている女像が発掘された。

後期旧石器時代まで遡っても尚、ビーナス像が発見されている。四万年前前後の頃のビーナスはいずれも巨乳の持ち主であり、その一つは、オーストリアの『ビレンドルフの石のビーナス』の名で知られている女像で、無毛の股間に赤い顔料が残ったスリットが見られた。ほかに、フランス・ローセル洞窟で発掘された『角杯を捧げる女』の板石レリーフがあり、このレリーフに刻まれた女像には、部分的に赤い顔料が残り、トライアングルが印されていたが、股間の刻みは省略されていた。

二　成人表示と既婚者表示の化粧

『視覚刺激を媒体として性に関与する化粧』に属する化粧として、『性器強調の化粧』の他に、『成人表示の化粧』と『既婚者表示の化粧』を挙げることができる。これらの化粧については、本誌一〇七及び一〇八号で詳述した〝抜歯化粧〟と〝お歯黒〟を中心に、要点を紹介する。

1　抜歯化粧

現在でも、アフリカ、南アジア、オセアニアなどの海洋民族の一部の人たちは、抜歯習俗を維持している。わが国では、縄文から弥生時代にかけて抜歯が習俗化していた。抜歯社会においては、成人になるため、抜歯の痛みに耐えられることが必須であり、そのため、年頃になると抜歯せざるを得なかった。成人表示の抜歯のほかにも、婚姻、服喪などの通過儀礼に際しても抜歯していた。婚姻抜歯によって口の中が空洞の如くなるので、女性の場合、この抜歯が行われると、既婚者標識として認識されるようになった。

抜歯風習がいつ頃から始まったかは不明であるが、現在最古の抜歯例は一万八千年前の後期旧石器時代、沖縄港川遺跡で見られ、次いで、中石器時代の北アフリカの抜歯例が古い。日本本土では、縄文前期の熊本轟貝塚で発見され、縄文中期から晩期にかけて、抜歯風習の最盛期となった。この時代には、中国大汶口文化の遺跡にも抜歯習俗の跡が見出されている。

弥生時代に入ると、抜歯風習は衰退の道を辿り、当時の先進地域だった玄海灘沿岸では弥生前期に消滅したが、九州西北部、南関東、東北地方では存続し、その後、成女式の一環として、抜歯風習が近代まで残されていた地方があった。

2　お歯黒

お歯黒の起源は、南アジアの檳榔子咀嚼風習である。檳榔子を子供の頃から口にしていると、檳榔子中の成分・タンニンが長い時間をかけて歯に沈着し黒歯を形成する。だから、黒歯が成人の指標となった。ところが、この反応は鉄イオンの存在によって加速され、即時的に黒色色素になる。この鉄媒染法を使用して歯を染めるのが、お歯黒であり、鉄媒染によって歯を染めるようになったのは、前五世紀から前四世紀頃と推定される。

前四世紀頃編纂とされている中国古文書の『山海経』に「有黒歯国其俗婦人歯悉黒」と記載されているので、お歯黒風俗は女性習俗として出発したと推察される。なお、黒歯国は明の広輿図を参考にすると、奄美地方に比定される。

日本本土では、『古事記・応神の条』に木幡の道で出会った乙女の歯並みを「志比比斯那須（椎菱如す）」と記され、志比比斯が白歯か黒歯かが論議の対象になっている。これを黒歯だとすると、この乙女は成人表示の黒歯を施していたことになる。

飛鳥時代には、男性は氏族表示、女性は既婚者表示を目的に、黒歯を施したとする情報が残されていた。しかし、奈良時代の黒歯風習を示す資料には出会わなかった。平安時代に入ると『倭名類聚抄、九三五』に「黒歯、俗に波久路女という」と書かれていた。平安中期、一〇～一一世紀は、女流作家による古典文学の最盛期だった。紫式部は『源氏物語』に〝ハクロメ〟、『紫式部日記』には〝鉄つけ〟と表記していた。

平安末期には男性黒歯が登場した。男性黒歯の始まりについては、諸説があるが、「鳥羽天皇の時、公家の子息の初出仕に際して歯染めすることを通達した」ことに始まるという説を支持する人が多い。これは成人表示の黒歯であり、殿上人のこの化粧が源平の武士層に波及し、後世の公家や武家階級を表示する化粧に定着した。

鎌倉、室町、安土桃山時代と続く中世は戦乱の時代であった。そのため、女性が主軸となる化粧文化に関する資料は乏しいが、黒歯に関する資料を挙げると、鎌倉時代初期の天皇などの黒歯が画集『天皇摂関家御影』に垣間見ることができ、ほかに嫁入り道具に歯黒営があった。

室町時代中頃、公家社会では、娘九歳の成女祝いに際して、歯久呂美を施しており、群雄割拠の室町末期には、お歯黒首が恩賞の対象になっていたので、男性黒歯は位階身分の標識だったことが窺え、小田原の後北条家の家臣たちは「忠臣は二君に仕えず」といって歯を染めたと伝えられている。

安土桃山時代には、武士の黒歯が下火になり、江戸時代に至る間に消滅した様子である。そのため、江戸時代の男性黒歯は、公家衆と地下人を区別する階層表示の化粧になった。女性黒歯の風習は江戸時代に、裏長屋に住む庶民階級の婦女にまで普及し、一九世紀前半・化政文

化の頃には、川柳に揶揄され乍らも、お歯黒姿の美形の内儀や傾城を、歌麿などの浮世絵師たちが絵筆に染め、黒歯化粧の最盛期を迎えた。

江戸時代の女性黒歯は既婚者表示を基本とし、庶民階級の婦女は結婚式前夜、武家階層の子女は九歳、公家社会では一三歳で初染めを施した。しかし、婚期の遅れた女性や傾城も歯を染め、再婚の意思のない寡婦も黒歯を残していた。武家の妻女は「嫁して二夫に目見えず」を建て前に歯を染めた。

近代から現代にかけては、黒歯風習終息の歴史である。明治維新政府は明治元年（一八六八）正月六日及び三年二月五日に太政官布告により公卿及び華族の鉄漿を禁止した。この禁令により男性の黒歯風習は終息を迎えた。

一方、女子の黒歯についての禁止令は公布されなかったが、昭憲皇后が率先して白歯としたため、官女たちが倣って歯染めを中止した。その輪が一般に広がって、女子の黒歯風習も衰退の道を辿った。しかし、大正時代には未だ東京や大阪の都会地にも黒歯風習が残っていた。

ところで昭和初期には、都会を離れた田舎には、お歯黒風習が残っていた。現に私の祖母は歯を真っ黒に染めていたし、小学校の頃の友達のお祖母さんたちの歯も黒かったような記憶である。

昭和も末の頃の文献に、儀式的なお歯黒を施す風習を残している地方が認められた。例えば、南西諸島・トカラ列島平島では成女式にカネツケ祝いをし、松本市の在郷では結婚式のハネ親の風習を残していた。しかし、平成の現在、トカラや松本在の風習が存続しているかどうかは知らない。なお、ハネはカネが訛ったものである。

他に、昭和六〇年頃、秋田在住の九六歳の老女が歯染めしている様子を取材した報告があった。この報告を最後に、現存する歯染め情報を聞いたことがないので、慣習的に行われる黒歯は、秋田の老女を以て姿を消したとみてよさそうである。

3　元服の二タ剃刀

成人表示や既婚者表示の化粧は、お歯黒と抜歯だけではない。身体の高い位置に存在する頭部や顔面は、表示の役割を負うことが多い。要するに高札である。

①　眉払いと前髪落とし

江戸川柳に「元服も二タ剃刀は女なり」の句がある。両眉であるから二タ剃刀にならざるを得ない。女性の眉払いについて、加藤美樹は『南窓筆記、一七二〇～七七』に「人相の書に女の眉一文字に切れたるは、中足らなくして多淫の相などと言えり。総じて女は眉にて相が決まるもの故、悪相を隠さん為に眉を払い、愛作り眉にするなり」と解説していた。『建内記、一四三一』には、「娘九歳の成人式に歯を染め、眉を抜いて祝った」と記

され、『枕草子』や『堤中納言物語』に「眉抜き」が見られるので、眉払いの風習は平安時代まで遡ることは確実である。

男性の元服について「公家衆は一三の歳より歯を染めて、一八歳より眉を払い給い」と『南窓筆記』に記されており、前髪を払った頭には青々とした月代が残る。月代は「応仁の乱以降、武士が常に兜を着けていたため、額から頭頂にかけて髪を剃ったことによる」と言われているが、応仁の乱以前、一二八〇年頃に無住一円が『沙石集』に月代と本鳥を記載しているので、前髪を下ろす風習は更に古い時代に始まったと思われる。

② 口囲刺青

その他の風習として、林笠翁の『仙台間語、一七六四』には「蝦夷の女は唇を青く染め」とアイヌ既婚女性が口唇に入墨を施していることが記述されていた。アイヌ人たちは、口唇に墨を刺して魔除けの護符としたのであろうが、傍目には既婚者の表示であり、口唇が女性性器の代替であるとする人たちの目には、性器を強調しているように映るかも知れない。

③ ビンディ

インド人の額の化粧には二種類ある。一つはティラカと呼ばれる宗派の標章で、多くは男性の額に見られる。他は女性の額を飾っているビンディである。ビンディは既婚女性を表示する化粧であり、未婚女性の額にはない。

ビンディは、グプタ朝の頃、結婚式の時、花嫁の母親は雄黄と鶏冠石で作った黄色のペーストで娘の額に特別な印をつけたことが知られている。

ビンディ創始の時期は不明であるが、リグ・ヴェーダに「夫に害を加える女性の邪眼」が記されている。ヒンズー教の教えでは、男性の浄智の眼に対応して、女性には邪眼を設定し、結婚に際し、邪眼を封印する目的で額に呪符を施した。これが装飾的な額飾りビンディとなった。未婚の女性の場合、暴漢や猛獣の危害を避けるため、邪眼を封鎖しなかったといわれている。

補遺：友人から借り受けた『ポンペイ・今日と二〇〇〇年前の姿、改訂版、フィレンツェ・ボネキ出版、一九七七』に、ベッティ家玄関ポーチに飾られた『豊穣の神・プリアプス』のフレスコ画が掲載されていた。この豊穣神は馬顔負けの男根を備え、巨根を天秤で測っている図である。恐らく、豊穣を象徴した絵画であろうが、前出の『性器強調』の手段として巨根も重要な標的であることを知った。

（次号に続く）

内田の国の物語り③

横山正義

まえがき

菊川市内田（五百二十町歩）には大変不思議な集落があります。耳川という部落です。

清水ヶ谷、政所、増光寺、八王子、牛殺、村中、村前、本楽寺、生田神社（金比羅宮）、井等の地名で成立しています。

百坪から参反歩位の面積で各他の集落に点在する散村です。

私は専門的知識がありませんので実証するものではありません。地名をヒントに物語を創りました。

一、本楽寺（浄土真宗の寺跡）

（段丘の集落・段平尾にある耳川村地番。耳川村中心地、村中より南約百メートル）

人は悩みをどのように克服していくか。

著者は昭和二十年代後半に静岡県の片田舎の高校に学びました。

入学して、アジサイの花の咲くころの話です。

この高校は絶対に暴力はないと先輩から聞きました。

その頃から、なお四十年ほど前、今から百年ほど前のお話です。

ある少年が運動部を退部して、勉学に励もうと退部を申し出ました。

すると先輩から、暴力を振るわれ、泡を吹いて脳震盪を起こしてしまい、驚いた加害者の同級生は医者に連れて行き、自宅に送り届けたということです。被害者の少年は意志を貫き、勉学に励み、県内中学選抜試験で三位の好成績で、後に得意の数学を生かし、東大農業経済の教授になり、大日本報徳社の社長も兼ねたと伝えられま

した。

加害者の同級生は代々の校長に暴力是認する教育はしないよう、訴え続けていると言うのです。

昨年の暮れ、大阪の少年が先生から、暴力を受け、自殺したのを知り記憶が甦りました。指導者の心無い暴力で心が「ずたずた」の少年は多いと聞きます。

指導者は鍛えると同時に相手の心のケアが必要なのでしょう。

それでは親鸞はどうであったか。

内田の領家青蓮院荘園領主の慈円は法然の理解者であり、親鸞の師でもありました。内田には法然の応声教院、親鸞の本楽寺がありました。本楽寺は現在、農地になっています。

親鸞聖人は西仏とともに天福元年（一二三三）秋に常陸の国から、京都に上る途中に、内田に立ち寄りました。それは親鸞聖人の出家の師、西仏にも師の青蓮院座主慈円の領地が内田にあり、そして、二人の師の法然の浄土宗根本道場・応声教院があったからです。

当時、すでに法然、慈円は故人となっていました。慈円の兄、摂政関白九条兼実の娘が親鸞の令室、恵信尼であったからでもあります。兼実は浄土宗の熱心な信者でもありました。

親鸞聖人六十二歳で、西仏の年は七十八歳でした。

地頭内田致員（むねかず）、感西とともに月岡の地で月を愛でながら語りました。

親鸞いわく。

「何に悩んだかそれは性欲です。不邪淫戒という仏教の教えがあります。私は仏道に従って性欲をなくしようと『計らい』ました。その狭間の煩悩でした」

致員尋ねる。

「どう解決したのですか」

親鸞いわく。

「青蓮院慈円座主の下、私は得度しました。比叡山で天台宗仏教を学びながら、煩悩を抱きながら、修行をしました。せっかちな私にはすぐに煩悩の解決はできませんでした」

致員尋ねる。

「凡人は『なるようにしかならない』と思うだけですがそれからどうされましたか」

親鸞いわく。

「即解決できるとする、師・法然上人の元を訊ね、入門し弟子となりました」

感西いわく。

「私は法然上人の弟子です。浄土宗応声教院で布教を勤めています。念仏を唱えることで、苦しみの世界にあり、何等不自由なく生活できる世界を模索しています」

親鸞いわく。

「浄土宗、阿弥陀仏と唱えることでも、解決できませんでした。私は信仰を深化させ、性欲も阿弥陀仏のお計らいだとする阿弥陀仏絶対的帰依です。性欲とともに生きることです」

致員尋ねる。

「悪人こそ往生する素質があるとはなぜですか」

親鸞いわく。

「仏教の法からすれば私は犯罪者で悪人です。経験から、五逆（父母を殺害すること等）犯した人間以外の悪人、悪人ほど葛藤が大きく、人間として、エネルギーがあり世に貢献でき喜びも大きいのです。平均寿命は三十五歳ぐらいですが、私は六十二歳でも元気です。長寿に恵まれました。生命力があるのでしょう。仏教では僧侶の妻帯はご法度でした。しかし私は妻帯者となりました。煩悩とは苦しみとはなにか、『性欲という真実』を『仏教の理想、不邪淫戒』の理想のために、『取り除こうと計らう』ことです。私の考えはこの計らう心を阿弥陀仏の『おはからい』として昇華していこうという考えです。実像と虚像があり、「実像をなくそうとする」心が煩悩です。」

致員尋ねる。

「計らいはなければどうなりますか」

親鸞答える。

「意識に浮かんだり、消えたりしながら時間の経過と伴に、意識に上がらなくなります。」

致員尋ねる。

「教えですか。」

親鸞答える。

「仏教の教えです。釈迦が煩悩の元は『計らい』だとわかり、「心の癒し」を得る方法を考えました。計らいを消していく方法として、一、煩悩を持ったまま生きていく自覚の体験をする。（禅宗）二、南無阿弥陀仏と称える。（浄土宗）三、阿弥陀仏に絶対的寄与（浄土真宗）等です。」

（晩年に行き着いた親鸞聖人の心境は「自然法爾」でした。言葉で言えば「ありのまま」です。老子の「無為自然」も「ありのまま」です。

キリスト教の教え神の「思し召しのままに生きる」、阿弥陀仏の「お計らいのままに生きる」同じではないだろうか。晩年の親鸞聖人は老子、キリストの心境と同じ境地に達したのでしょう。ジョンレノンはレットイツトビイと歌い、ドリスデイはケーセラーセラと歌います、同じ意味ではないだろうか。）

親鸞いわく。

「絶対的阿弥陀仏の帰依です。阿弥陀仏のお計らいのままに生きるということです。その生き方が本当の楽しい生き方だと思います。南無阿弥陀仏は阿弥陀仏へのお計らいの感謝の言葉です」

地頭内田致員は大変感動しました。

「それは、煩悩の解決として、ありがたい教えだ、私も入道となります」

西仏は語ります。

「しかし、誰でもこの思想に納得できるかと言うと、人によって「南無阿弥陀仏」と唱えても、「なんら煩悩に変わりはないじゃないか」と自己主張の強い人もいるわけです。人それぞれ性格によります。全てを南無阿弥陀仏にゆだねることが出来る人です」

西仏（一一五六～一二四一）は浄土真宗布教のため内田に本楽寺を建てました。

内田致員に、西仏という名を与え、そして、内田を去りました。

親鸞の門人、西仏はその足で、天福元年（一二三三）、親鸞の命で、故郷である長野県小県郡海野庄白鳥に康楽寺を建て、真宗の布教に努めました。

保元元年に、西仏は海野小太郎幸親の子として生まれ、海野通広といいました。初め、南都興福寺勧学院の文章博士となって進士蔵人通広と名乗り、興福寺で鎮護国家を学び、ご折祷をび、理論的仏教を学んだのでした。

当時、平清盛の専横が続き、これに対して以仁王が源頼政に令旨を発し、円城寺、東大寺、興福寺もこれに呼応しました。

通広が、「清盛追討、清盛は武士の塵芥」と書いたことが清盛に知れてしまいました。

通広は清盛の悪口を言い、流罪になった人達の「鹿ヶ谷事件」を知悉していましたので、通広は北国に逃れ木曽義仲の軍に加わりました。義仲が同じ源氏、源義経に討たれ、戦死した後は、通広は箱根に隠れ、そこで伊豆の武将・狩野宗茂を知り、狩野宗茂ともに内田にきました。

その縁で内田領主青蓮院座主慈円の下、比叡山に入って浄覚と改め、比叡山延暦寺で天台宗庶民の宗教、学問と修行を学びました。

学問を考えながら、修行する、座禅、山駆け、掃除等を行いながら、自分が学問と修行が一体化する自分を体験していくことです。学問を煩悩と考え、修行を仕事と考えれば、誰でも農民でも生き方を教えられます。

浄覚はこの体験が自覚できるまでに、時間がかかると判断しました。

（天台宗の教えのなかにある自力門の禅は厳しい修行と煩悩とを持った自分、そして己の執着を絶とうと試みる。）

其の時、十七歳年下の親鸞も居り、親鸞とともに法然の下に入り、西仏と称しました。なぜ年下の親鸞の弟子になったのか。平清盛と敵対関係にあったので心情として、親鸞の母が源義朝の女子であったからです。頼朝の妹です。法然、知をもって到達しようとする自力の「計らい」を完全否定する。口称念仏他力門は、繰り返し念仏によって自然に己を捨てるのです。「自分の計らいを否定していく」これこそ煩悩を断ち切る道です。しかし他力です。

此処に物足りなさを感じました、親鸞はこのところを、深化させる力を持っていました。阿弥陀仏の「御計らいのままに生きる」すなわち絶対他力で強力の自力にもなる思想です。西仏は年下の親鸞の弟子になることを決意しました。

そして親鸞が北国に流罪となり、西仏は随身しました。親鸞の関東の布教にも随身しました。仁治二年（一二四一）一月二十八日、八十六歳で入寂しました。西仏の「日並の記」は親鸞の行状を記したものです。（東鏡十五、真宗全史、真宗大辞典巻一参照）

本楽寺、現在所在地安城市赤松新屋敷百六十七番の二番地

松譽山と号し真宗大谷派の所属、元和年中（一六一五～一六二四）の創建なりと云い伝えられています。往昔桜井郷堀内という所に浄善寺と称する一宇あり。永禄年間（一五五八～一五七〇）一向宗門徒の一揆が起こり、逃れて遠州内田の本楽寺跡に移しましたが、当時武田氏に攻められ、焼失し、相良大澤の地に移築されました。寛永年間（一六二四～一六四四）に現在地に移築され、本楽寺と称して維持されています。内田には浄土真宗として、西林寺が残り、相良には大澤寺が残りました。

（安城町誌参照、安城町役場）

法然

浄土宗開祖。（一一三三～一二一二）諱は源空。法然は房号です。美作国久米南条稲岡荘に、押領司漆間時国の子として生まれる。十三歳の時比叡山に上る。持戒の清僧として名高い。数千巻の経論を紐解くうち、善導の「観経書」の一文を見つけ、四十三歳の時、念仏至上主義の革新的な一宗を打ち立てる。のちに、この独自の宗教的な立場は浄土宗と名づけられた。主著に「選択集」がある。諡号は円光大師。

親鸞

鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。（一一七三～一二六二）絶対他力、悪人正機の説を打ち出す。公卿・日野一族の日野有範の長男として生まれる。

母は吉光女または貴光女といわれ、源義朝の女で頼朝、

義経の妹です。
妻は慈円の兄・関白兼実の娘、筑前局が恵信尼。
晩年に自然法爾の境地に到達しました。
「阿弥陀仏の本願は悪人を救済することが本願である。悪人こそ往生する素質をもっている」親鸞の言葉です。

感西

真観房感西。法然の常随給仕の弟子（一一五三～一二〇〇）。内田応声教院に在職したという。

覚忠

天台座主五十世、円城寺三十六世、関白藤原忠通の子（一一一八～一一七七）、近江円城寺で顕密二教を学ぶ。後白河上皇の帰依を受ける。一一六九年上皇出家に際しては戒師となる。六二年権僧正、同年天台座主となるが山徒の反対により三日で辞職。六十八年園城寺長吏、七十四年大僧正になった。七十七年西方に向かって念仏を唱えて法華懺法を行い、手大日の密印を結んで臨終を迎えたという。
西国三十三箇所御詠歌は覚忠によって確立されました。
当時、応声教院の領家が円城寺の時代がありました。

政所では円城寺の柴灯護摩と似た護摩が夏祭りとして、行われています。内田に円城寺の荘園があったという。延暦寺が平家支持に対し、内田が源氏の領地と変化していくなか、円城寺は源氏を支持したからです。天台宗、浄土宗の併設です。

慈円

第六十二代天台座主（一一五五～一二二五）。史書愚管抄の著者。九条兼実、覚忠の弟。内田領家青蓮院座主。
生涯に四度天台座主に就くという空前の偉業を達成した慈円は、天台教学の復興に努めたことで知られる。歌人としても著名で拾玉集などを著し、西行法師との交流もありました。

後の世、戦国時代、木曽義仲の家臣・今井兼平の一族が浄土真宗として、大阪石山本願寺の戦いで、織田信長に破れ、本楽寺の寺跡を訪れ、浄善寺（本落寺）として再興したが、武田信玄の焼き討ちにあい、相良に逃れ、子孫は相良大澤寺の住職を、現在勤めています。本楽寺を創建した西仏は義仲の家臣であったのが縁でしょう。
平家に代わり、源氏の木曽義仲は京の凱旋将軍となりました。しかし飢饉のため、義仲軍勢の狼藉、略奪が起こり、庶民の厄介者となりました。勢力を取り戻した平

家と後白河法皇意向で源頼朝と戦うことになり、源義経、源範頼と戦いました。
宇治川の先陣。義経軍の先陣をきったのは佐々木高綱と梶原景季で頼朝より拝領した名馬「生け好き」、「する墨」に乗る。義経軍は攻め、義仲軍は完敗する。義仲軍は五万騎もわずか、五騎になる。五騎の中には義仲の愛人巴御前がいた。掛川市上内田の内田七郎家吉は巴御前に討たれています。
巴御前は義仲と死をともにと思います。義仲「最後の戦いまで、女と一諸だと言われては、早く逃げよ」という。巴御前は涙とともに東の方向に走り去りました。龍神の化身、剛勇無双の絶世の美人は後に見た人はないという。
敗走の末、兄弟同様の竹馬の友・今井四郎兼平のみとなりました。琵琶湖の南端、粟津の松原。敵の矢が義仲の兜を貫き、死亡しました。今井兼平は後を追い自害したという。木曽義仲二十一歳であつた。

二、清水ヶ谷

（森部落にある耳川村地番、耳川村中心地村中より北に二キロの森の集落にあり）

溶鉱炉跡、きれいな清水があり、風が常に風が吹いています。鉄鉱石を含む金糞層があります。

内田出身の政治家・松本君平の祖先が葛城真人であつたと応声教院門前の碑に記されています。
葛城襲津彦は四世紀末、応神天皇と結びつきました。朝廷は葛城氏の勢力圏とむすび勢力を展開させました。大王（天皇）の一族と葛城氏は協力して朝鮮に進出しました。神功五年（三八二）にかれは新羅の捕虜を連行しました。それは鉄や絹織物の文化を得るためでした。日本の縄文文化を築いた人達の子女と新羅人の子を韓子（からこ）といいます。内田は古に鹿城（からこ）卿と云いました。内田には耳川遺跡で証明されるように、縄文遺跡がありましたので、新羅人と、縄文人の子供でしょう。
「からこ」とは日本文化の中枢を担った人物像です。
京都・広隆寺は秦河勝が（六〇三）聖徳太子から授けられた仏像を安置するために造られました。聖徳太子は奈良県葛城地方の葛城氏を祖とする蘇我氏の出で先祖は韓子であったという。

葛城襲津彦―蘇我韓子―馬背―稲目―馬子―入鹿
　　小姉―泥部穴穂部皇女―聖徳太子

応声教院に飛鳥時代の等身大の阿弥陀仏あり、前方の田に「東坪」という、大宝律令の条理跡があります。蘇我入鹿が藤原氏に暗殺されてから、蘇我氏は歴史の表に現れなくなります。一部の人が内田にきたのでしょう。

その他に、木舟という地名が田の中にあります。ここは沼地で古代に舟で田植をしたと伝えられています。

三、生田神社（金比羅宮）

（耳川村地番、耳側村東に約五百メートルの段丘、段平尾にあります）

祀られたのは天照大神に仕える機織女、稚日女命は織物の神であり、航海の神であるので、航海の神として、ご神徳の同じ、金比羅様に変遷していきました。最近まで祀られていましたが、台風で崩壊破壊されてしまいました。

近くに、平尾八幡神社、増光寺があります。

平尾八幡社で第十四代仲哀天皇、第十五台応神天皇、その母神功皇后を祀っています。

神功皇后は新羅、百済、高句麗を討ち帰服させました。その時、助けたのが稚日女命です。

神功皇后が新羅遠征のあと船で大和に向かっていると、神戸の沖で船が突然進まなくなった。

武庫の港（兵庫県の武庫川の川口付近）によって占ったところ、稚日女命が現れて「自分は生田神社にいきたい」と託宣した。そこで生田神社に祀ると、海は平穏になり船を進めることができたという。

四、増光寺

（段平尾の高台にある耳川地番、生田神社の近くにあります）

平尾八幡社の本地仏、阿弥陀仏が祭られていました。

織女が絹を織り献上した場所。

天の川を挟んだ牽牛星と織女星が七夕伝説の原型は、紀元前6世紀に成立していた。羽衣をまとって異界から現れた神（織女、稚日女命）と人間（牽牛・牛殺しの青年）が結婚するも、織女は再び異界にもどり、牽牛は妻を追って異界に旅するという。

現在、廃寺で茶畑。

五、政所

（集落政所にある耳川村地番、村中より約一キロ）

「遠江国風土記伝」内山真竜著（江戸時代）によれば耳川村は段村の分かれ、という。青蓮院在園の支配下となる。したがって領家政所か。大屋敷、本屋敷などの地名は地頭内田氏の関連施設でしょう。

六、牛殺し

（耳川村地番村中に隣接）

流域住民の生殺与奪を握る水神。黄河を支配する河の神。伝説によれば、憑夷という男が渡河中に溺死し、天帝から河伯に命じられたとも、道を得て大川に潜ったとも、あるいは仙薬（八石）を服して水仙になったとも伝えられている。

降雨を司る神と考えられ、すでに殷（紀元前十世紀）の時代から祭壇をかまえて雨を請う儀式が行われていた。その際、牛などが「生にえ」としてささげられました。時代によっては流域民の娘が河伯の花嫁として捧げられたこともあつたという。

参考書郷土史研究ナンバー1菊川町郷土史研究会（一九九一・四）

牛殺し地名起源考　堀川録朗

牽牛と織女

耳川村には終戦後、上小笠川の改修が行われた際、縄文と弥生の混合遺跡が発見されました。耳川遺跡として有名です。

内田は和名抄によれば鹿城卿と称したというから、従来から住んでいた縄文人と稲作文化を伝えた、新羅人との子を韓子と云いますのに由来するのでしょう。

政治家松本君平氏の先祖は葛城真人であったという。

葛城氏は蘇我氏と同族です。蘇我氏一族は聖徳太子を輩出し、一族は天皇の后にもなっています。聖徳太子が建立した京都の広隆寺は太秦にあり、秦氏の寺です。牛祭りが奇祭として有名です。近くにあるのが、繭の社です。牽牛と織女です。祭りでは広隆寺、繭の社を往復する祭りです。内田の牛殺し、増光寺の関係です。

奈良の唐古遺跡は有名です。ここは物部の領地でした。遺跡で発見された人面牛の埴輪はやはり牛信仰の表現でしょう。

京都・東山、八坂神社、内田領家青蓮院守護神・粟田神社など牛頭天王を祀っています。この地帯に勢力をはっていた帰化系の氏族である八坂造によって、殺牛祭神が行われていたらしいという。

内田には牛頭天王を祀る古川神社という大社があります。

七、村中、村前

（耳川村中心地番）

牛の神事が行われる時は市が村前に移動したという。

日本書紀より。

『日本書紀』皇極天皇元年七月戊寅の条には、日照りにあたって、次のようなことが記されている。

臣相謂りて曰く、村々の祝部の所教の隋に、あるいわ

牛・馬を殺して、諸社の神を祝ふ。あるいわ、市を移し、あるいわ河伯に祷る。

殺牛祭神信仰は延暦十年（七九一）と延暦（八〇一）の禁止により、行われなくなりました。奈良の唐古遺跡と同じ環濠集落です。

八、八王子

（段平尾にある耳川村地番、村中より南三十メートル）

東京八王子は武蔵七党中で最大の横山党発祥の地で、八雲八幡宮では牛頭天王の王子の八王子、八幡宮、横山神社などを祀っています。

横山党に関するお話です。

参考壱、説教節『小栗判官』

小栗判官というのは、京都三条高倉の大納言兼家の嫡子・小栗判官正清です。彼は鞍馬、妻を何人も離縁します。

鞍馬の毘沙門天へお参りにいくが、途中の市原という寂しい所で美しい女性に会い、契りを結んで妻とした。噂で小栗判官の妻は深泥池の大蛇だといわれました。

父兼家は正清を母の郷里である常陸の国へ流してしまいました。小栗判官は家来にかしずかれて、楽しく暮らしていました。そこに後藤左衛門という京の商人が訪れ、武蔵相摸の『郡代横山殿の末娘の照手姫』が飛び切り美人だと告げました。彼女にラブレターを渡すことを勧めます。後藤左衛門は照手姫の会う了解の返事を告げました。小栗判官は照手姫に会うためにその館に赴きました。そして契りを結んでしまいました。父や兄弟の許可を得ず、私通したのは関東武士のモラルとして許すことはできないと、横山殿は怒って、小栗判官を「鬼鹿毛（おにかげ）」という暴れ馬に食わせようとしたのです。すると小栗判官は「鬼鹿毛」を難なく乗りこなし、碁盤上の曲芸をみせました。

横山殿は小栗とその従者を宴会に誘い出し、毒酒をもって殺してしまい、小栗だけを土葬にし、従者十人を火葬にしてしまいました。照手姫を罰さないのは片手落ちだ。石の重しのついた牢御輿に乗せて相模川の河口に沈めよと命令しました。姫を河口に沈めることを命じられた鬼王と鬼次の兄弟は姫を哀れと思い、石だけを海に沈めて牢御輿を風に乗せて流してしまいました。

姫は「ゆきとせが浦」に流れ着き、流れ流れて美濃の国の青墓の宿のよろず屋に売られて、常陸小萩の名で遊女の勤めを強要されたが、姫は死んだ夫を慕い、「水仕女」として過酷な労働に耐えました。

小栗と十人の従者は死んだ閻魔王宮に行き、小栗は修羅道へ、従者は娑婆へ戻すことが決定されるが、従者は

我らが修羅道へ行くから小栗は娑婆に戻して欲しいと訴えました。

皆娑婆へ帰されることになるが、従者達は火葬なので死体がなく、閻魔大王の家来として十王となって閻魔大王の元にとどまり、小栗一人が「餓鬼病み」癩者として蘇生することになりました。ここで閻魔大王は小栗の胸の木札に、「この者を、藤沢の御上人の、明堂聖の、一の御弟子に私申す。熊野本官、湯の峰にお入り賜われや。熊の本宮湯の峰に、おはいり賜るものならば、浄土よりも、薬の湯を上げべき」と書きました。

ここで閻魔大王が手紙を書いたこの藤沢の上人というのは、時宗の明堂聖の第一の弟子であるといいます。こうして小栗は蘇生することになるが、たまたま藤沢上人が小栗の葬られた「上野が原」を通ると、小栗塚が二つに割れて、餓鬼が現れました。その胸に着けた木札を見ると、閻魔大王の先の手紙がありました。

そこで上人はその小栗に「餓鬼阿弥陀」という名を付け、その木札に、この者を、一引き引いたは、千僧供養、二引きひいたは、万僧供養と書きました。一遍上人をはじめとする時宗の僧達は、諸国をまわって踊念仏を行って喜捨を求めた。喜捨するものが多いので、その一遍の一行に多くの乞食が従いました。その中には癩者もいました。

熊野に行き湯の峰の薬の湯に入れば、癩は治ります。

小栗の乗った土車は「檀那」に引かれて東海道を上がって行きます。尾張から中山道に入り、照手姫の常陸小萩がいる美濃の青墓の宿へ着き、よろず屋の門外に三日留まる。常陸小萩が土車に乗った「餓鬼阿弥陀」の胸の木札を見ると、「一引き引いたは、千僧供養、二引き引いたは、万僧供養」と書いてありました。よろず屋の主人に頼んで五日の暇を取り、三日引いて二日で帰る計画を立てる。狂女に扮して大津まで土車を引くが、照手姫はこの土車の主が我が夫とは気づかず、大津関寺玉屋で別れる時、自分の住所と名を書き付けた手紙を渡しました。

小栗は引かれ引かれて「熊野湯の峰」にたどり着き、壺の湯に入りました。壺の湯に入ると、熊野権現が現れていろいろ介抱してくれました。

七日で耳が聞こえ、目が見え、三十七日で元通りになりました。こうして病が治り、小栗判官は京の三条高倉の父大納言の屋敷に立ち寄り、蘇生のいきさつを語った親子の対面をいたしました。それが帝の耳に入り、常陸の国と駿河の国に所領を与えました。美濃の国を馬の飼料としての所領としてあたえました。小栗判官は美濃の国守として青墓のよろず屋に行き、照手姫に合い、ここにめでたく出会いました。

和田の乱と横山党

和田義盛は、治承四年（一一八〇）頼朝の挙兵時から、鎌倉入りによる侍所の設置、木曽義仲軍・平氏一族の打倒、鎌倉幕府の創設、と頼朝に協力し頼朝から信頼されて、初代侍所別当（長官）に任じられ、鎌倉幕府の宿老として活躍しました。頼朝の没後、幕政の専制を狙う北条時政父子は武蔵相摸の代表・和田義盛この和田氏と二代に渡り、婚姻で結ばれている武蔵七党を代表する横山氏を滅亡させることが必要でありました。和田義盛と横山氏に対しては、和田義盛の誠実で無骨な人間性を狙って遠大な策謀の網を張り、これに陥れて和田一族の危急に與同する横山党一族を共に滅亡に追い込もうとする物でありました。そして宿願としていた政敵の排除と、鎌倉幕府の膝元である武蔵・相模両国を没収のもとに確保し基盤とするのです。

このように和田一族・横山党（本宗横山時兼と南武・相模系横山庶流）等が北条執権に怨念の叛旗を翻した和田合戦は、鎌倉幕府の御所を中心に戦われました。

建暦三年（一二一三）二月十五日千葉介成胤が法師を捕まえました。この僧は阿静坊安念といいました。手紙を持っていました。手紙の内容は「近頃の北条一族のわがままには目に余るものがあり、将軍実朝もこれに従うにすぎない。そこで頼家公の三男で千寿丸殿が十三歳になられるが、源氏の正統である。この方を立てて世の刷新を図りたい。和田一族も参加します。是非千葉殿もご加担されたい」という手紙をもっていました。千葉成胤は驚き、北条義時に手紙を渡しました。安念の白状で囚われた者は狩野小太郎、狩野又太郎、和田四郎左衛門尉義直・和田五郎兵衛尉義重・和田兵太胤長等約二百人でした。狩野一族、和田一族が狙われたのです。胤長は和田義盛の甥で、謀判の張本人とされ、奥州に配流され殺されてしまいました。六歳の娘は悲しみ病気を患い死亡してしまいました。令室は悲しみ出家してしまいました。所領は没収され北条義時の所領となりました。

義盛の孫・朝盛は悩み苦しんだ末、出家してしまいました。

将軍実朝は義盛を大変心配しました。将軍には何の恨みもないが、北条義時の傍若無人には我慢できないと主張し戦いを挑むことを伝えました。

建歴三年五月二日（一二一一）義盛は本家三浦義村と同心の締結をしたが、義時に義盛が出陣することを密告しましたので、義盛は慌てて出陣しました。

義盛は横山時兼とは五月三日に出陣の約束してあったのです。

五月二日午後四時ごろ和田義盛は戦いの為、出陣しました。

参戦した者、嫡男常盛、子息朝盛、三男朝夷名義秀、四男義直、五男義重、六男義信、七男秀盛。土屋義清、古郡保忠、渋谷高重、中山重政、同行重、土肥唯平、岡崎実忠、梶原朝景、同景衡、同景盛、同景氏、大庭景兼、深沢景家、大方政直、同遠政、塩谷唯守以下でありました。

狩野氏がなぜ狙われたか。それは狩野宗茂の姉妹が横山時重の所に嫁ぎ、女が義盛の妻になっていたからです。当時の結婚は軍事同盟であったからです。しかし狩野氏は挑発されたにもかかわらず和田の乱に参戦しませんでした。

狩野宗茂は伊豆柿木を嫡男に譲り、令室は祐親の女で、北条義時の叔母であり、不義理となり、離縁して内田に来ました。令室は三浦義澄室となりました。

義盛室の姉妹に渋谷、岡崎など室となり、和田軍の中心の人物です。

和田軍は北条義時邸、大江広元邸を襲撃しました。

翌日、三日、約束どおり、和田軍に共鳴し横山時兼一党が参戦したが、すでに食料を絶たれ、疲労困憊し由比の浦で戦いに敗れました。

伊豆の武士団伊東祐親の女子の嫁ぎ先土肥、曽我、二宮各氏は横山党に参加しました。高田氏も参戦し、捕虜になりました。所払いとなり、内田にやって来ました。

和田常盛、横山時兼は坂東山愿別所において自殺したという。

時重に狩野宗茂の姉妹が嫁ぎ、時重の子・時広その子が時兼です。時兼の妹が和田常盛に嫁いでいたのです。

横山党の一族、小田原・高田に分党したが、和田義盛の乱に横山党として参戦し、捕虜となり、小田原・高田をところ払いとなり、狩野氏との縁で内田に来て、八王子神社を祀っていました。高田四郎、高田六郎（高田二八郎）です。内田四郎、内田六郎として承久の乱で活躍します。室町時代に入ると、足利時代になると、地頭狩りなどがあり、内田姓など語れなくなり、横山と名乗り現代でもその子孫、横山六郎左衛門、横山勘四郎の家は繁栄しています。

高田大屋敷は関東の熊谷屋敷、田子往古本屋敷、田子本屋敷などに似ています。

九、井

（八王子神社の前）

水の神に感謝の祭りが行われた場所。

十、その他

内田平尾八幡神社を創建した信麿の祖父の話。

藤原長成は大蔵卿です。源義朝の女で、義経を生み、義朝の没後、宿敵平清盛の女となり「廊の方」を生み、清盛は嫡男重盛に咎められ、常盤御前を藤原長成に譲渡

したのであった。長成の孫が信麿（良信）で平尾八幡神社を創建します。

参考武、一条大蔵卿譚（中村吉右衛門）

桧垣茶屋の場

院（上皇）の御所で演能がある時にのみ店が出る、由緒ある桧垣茶屋。近頃は栄華を極める清盛がやたらと能を催し、茶屋の亭主も忙しい。この茶屋に源氏の侍吉岡鬼次郎とその妻お京が現れた。二人は亭主から、上皇は鳥羽に押し込められ、天下は清盛がほしいままにしているという噂話を聞く。好色の清盛は、敵将の妻で絶世の美女との聞こえが高い常盤御前を愛妾としていたが、先ごろ息子の重盛に意見されて、仕方なく常盤を一条大蔵卿長成という公家に下げ渡したとのこと。今日はその祝いを兼ねた演能だが、当の常盤は急病で来ていないらしい。鬼次郎夫婦がここへ来た目的は、常盤御前に会う手づるを得て、彼女の真意を探るためであった。もし源氏の心をわすれないでいるならば、館から連れ出し、助けなければならない。

御所の門内より大蔵卿（中村吉右衛門）が女小姓弥生らを引き連れて出てきた。生来のうつけ者という噂に違わず、顔を常にほころばせて、ふらふらと愉快そうに歩いている。その大蔵卿にお京が近づいた。腰元達が不躾だとお京をしかりつけると、一条家の家老八剣勘徳由（やつるぎかげゆ）の妻、鳴瀬がこれを止めた。

鳴瀬は、お京を女芸者の狂言師と紹介し、奉公させたいと願った。大蔵卿は美貌のお京を一目見て大喜びし、うつけの治療になるからと、この場ですぐに狂言舞を所望した。お京はそれに応じて舞い始める。大蔵卿はその面白さに大喜びして、狂言の真似をする。その様子をじっと窺う鬼次郎。大蔵卿は鳴瀬とお京を引き連れて、陽気に館へ帰っていった。

大蔵館奥殿の場

大蔵館の奥庭に鬼次郎が忍び込んできた。石礫で合図し、すでに館に狂言師として入り込んでいるお京に門をあけさせた。お京はここしばらく常盤の様子を探っていたが、常盤は悲しいそぶりも見せずに、夜もすがら楊弓に興じているという。もはや常盤は権力者にへつらい、見下げ果てた性根におちてしまったのかと憤る鬼次郎とお京。二人は死んだ主君義朝の追善のため、常盤に一言物申そうと、灯りを消して塀の中に入っていった。

常盤御前はお京の報告通り、今宵も一心不乱に興じている。その様子に、鬼次郎夫婦は怒りを堪えられず、飛び出して主人を叱った。主人の心は家来には分からないものだと常盤が反論すると、鬼次郎は我慢できず手にした弓で常盤を打つ。すると常盤はその忠義を褒め、夫婦に心の内を明かし始める。夫の死後、三人の子供と落ち延びたが、所詮は女の身、子の命を守るために止む無く清盛の求愛を受け入れることになった。しかし、夫の敵と枕を交わすのは、どのような地獄の責め苦よりも辛かった。平家に対する恨みの一念から、楊弓に事寄せて平家を調伏してきたのだ。その証拠に、楊弓の的の下には清盛の絵姿が描かれていた。鬼次郎夫婦は、主人の心底を理解しないまま悪口雑言を浴びせ、打倒までしたことを恥じ、涙ながらに深くわびいるのであった。

この様子を家老の八剣勘解由が盗み聞き、清盛へ注進に走ろうとする。これを妻の鳴瀬が止めるが、日ごろから大蔵卿を亡き者にして一条家を乗っ取ろうとしている勘解由は、振り切って行こうとする。そこに鬼次郎が立ちはだかり、勘解由を追い詰めたところ、突然御簾内から長刀の先が現れ勘解由の肩先を斬った。

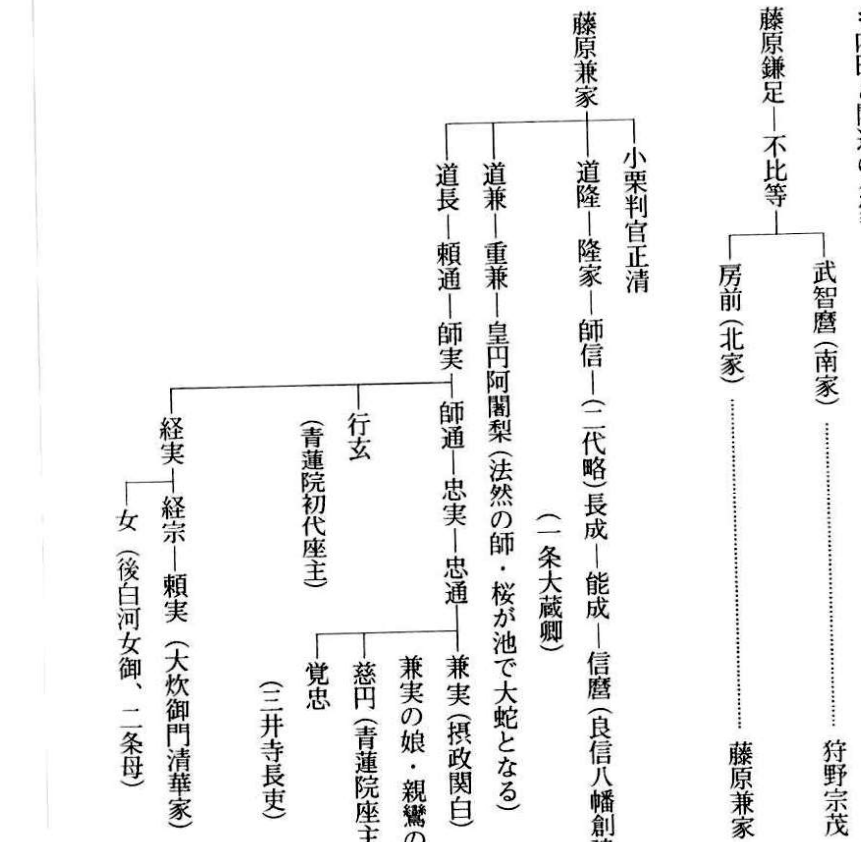
この不忠義者を斬ったのは大蔵卿であった。御簾が上がると、日ごろのうつけ振りとは打って変わった凛々しい姿。大蔵卿は、これまで阿呆と偽っていた理由を語り始める。大蔵卿は、元来源氏に所縁（ゆかり）の在る者だが、訳あって公家となった。そしてこの乱世を生き抜く術として、若くして作り阿呆となり、源平双方に組みしない立場を貫いてきたのである。それにもかかわらず、今ここで勘解由を討つことによって本性を顕したのは、源氏のためを思えばこそというのであった。

義朝の無念を悲しみ、常盤の貞女ぶりを讃える大蔵卿。鬼次郎に「子の日する野辺に小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし」という古歌が書かれた短冊を託し、頼朝と牛若丸に渡すことを命じた。その歌は、「小松」に平家の総領・小松内府重盛を掛けた一首。思慮深い重盛が平家からいなくなるのを待って、旗揚げをしろという意味であった。この主君の本心を知った鳴瀬は夫の不忠を恥じて、許しを乞うて自害した。

一方で、勘解由は虫の息になっても褒美の金を求め、どこまでも強欲なままである。もはや暁の明星の時刻。常盤は、深々と礼をして館を去る鬼次郎夫婦との分かれを惜しんでいる。大蔵卿は、牛若丸に渡せと源氏の重宝友切丸を鬼次郎に託し、源氏再興への思いを伝える。鬼次郎は名剣を手にし、勇躍の様を見せる。その剣を奪い取ろうとする勘解由に大蔵卿が止めを刺し、打ち落とした首を清盛に見立てて、前途を祝うのであった。

歌舞伎公演
「鬼一法眼三略巻」より

＊内田と関連の公家



参考文献

古代日本の異文化交流古代日本と朝鮮の殺牛祭祀・漢神信仰　鈴木英夫
狩野氏の歴史　天城湯ヶ島町教育委員会
公家人名大辞典　野島寿三郎　日外アソシエツ
静岡県小笠郡下内田村耳川遺跡報告　安木　博
牛殺し地名起源考　堀川録朗
遠州内田荘下郷の開発領主―内田家文書と俣賀家文書―　郷土史研究NO1　一九九一・四
日本の深層　大山喬平
武士の館の存在をしめす地名　梅原　猛　小学館
神奈川県姓氏家系大辞典　山野井功夫
弥生の王都、唐古・鍵　角川書店
菊川むかしむかし　伝説の寺とお堂　堀川録朗　田原本町教育委員会
浄土の本　菊川町誌
中国の神々　学研
親鸞の本　学研
伊豆の武将物語　小野真一　明文出版社
遠江武将物語　神谷昌志　明文出版社
城前寺曽我兄弟物語　皆川孝演　曽我兄弟保存会
日本史探訪第十集木曽義仲　細川風谷　角川書店
蘇我氏の古代史　武光　誠　平凡社新書
鬼一法眼三略巻　国立劇場
横山党とその一族　横山敏夫　正和商事㈱制作部
安城町誌　中村安孝　名著出版

陰翳の美学（その十四）（最終回）

外山知

第四章

十四、流動の美

10．水と人生の輝き

変化への対応と言うことが、人生にはいかなる多様性の中で、繰り返され、この道を選び、模索しつゝ現在に至っているか。

また今後もこの変転を、如何に乗り越え共存して行くか、問題である。水と人生の輝きと言うことに、論を進めたい。

およそ、人類生存にとって不可欠なものは水。すなわち、人類発生時も人は、水を求めて集り、住居を造り、集落を形成し、人の生活が始まった事は、論をまたない。

人間生存に水が如何に必要であるか、前のギリシア哲学のターレスも「万物は水よりなる」の論を投げかけて、その発展に寄与した。

「人間だけでなく、まさに万物、すべての生物にとって、水の恩恵は不可欠なものである」

水と太陽と空気の存在は、まさに万物の根源で、これを上手に使用することによって、生存している。

自然科学の発展で、水の成分も、H_2O、水素元素2と酸素元素1の、化合成分から出来ている。

この不思議な水滴が川となり、海へと、私達に恵を供給させてくれる。

私達は自然のサイクル、もちろん、他の植物の連鎖、海洋資源、人間と同様、他の動物達も等しく、これらのサイクル連鎖の恩恵に、浴している。

今日環境資源の愛護が叫ばれている。その資源こそ、今日を生きる生物の、糧である。

環境問題で地球環境の危機を訴え、その記録映画ドキ

ュメンタリー「不都合な真実」は世界の注目を集め、アカデミー賞を受賞した。

米国のアル・ゴア前副大統領に、今回07年度ノーベル平和賞の賞が贈られた事は、周知のことだった。

地球温暖化への警鐘として「不都合な真実」の中で、

「地球は今、かつてない危機にある」

「熱を出した子供が医者に診てもらうように、地球にも手当」

が必要、情熱と信念が人々を動かしたと、今は古い資料となった。

地球環境の危機は、戦争や核の拡散と同様に、温暖化が驚異にさらされている。

その主原因は人間活動が出す、二酸化炭素CO_2などの温室効果ガスによるものである。気候変動に関するパネル報告IPCCによって、科学的に実証されている。

すなわち、今世紀末の気温は、一九八〇―九〇年代に比し、四度程も上昇する予定とか。

上昇幅が、仮に二～三度以上でも、温暖化の被害は地球全域に及ぶだろうと、注意記号を出している。

地球規模の研究収集の為、世界気象機関WMOと、国連環境計画UNEPが発足したのは88年、以後五年毎に評価報告書、作業部会の研究成果が公表されて来た。

一、作業部会

二、「影響」

三、「緩和策」

一三〇ヶ国地域を超え、四千人以上の科学者が報告書を作成し、国際的な影響力を持って、07年二月、一部会で温暖化は、人間活動が原因だ、とする発表。

四月、二作業部会で、気温上昇による深刻な影響。

五月に三部会、温暖化を緩和させる方法の発表がなされている。（気候変動に関する政府間パネル）

IPCCも90年に温暖化対策の必要性。

92年、ブラジルの「地球サミット」

97年、採択の京都議定書の動き、等々、

人類が、この地球上に住むことの出来ないような悪環境をすみやかに、除去する方法を模索している。

水の好環境が、水に溺れないような環境作りを人類社会で、作り上げて行くべきだと痛感する。

人が生きて行くのに、内的な条件にも水分が不可欠、一、五リットルの水を、毎日必要としている。

私達の体内にも水が不足すれば、内臓器官に異常をきたし、生存すら困難視される。もちろん、栄養のバランスも必備である。それ以前に水が保たれなかったら、忽ち死への道に至るも必定である。

このように大切な水資源も近年、山林の伐採も相俟って異常をきたしている。加えて旱魃も広範囲に発生し、農作物は生成不能の状況で、人的影響は計り知れない。

一、「自然科学的根拠」

自然世界のサイクルにも、大きな影響を、及ぼしている。これは社会現象にも、経済の歯車をくるわせ、貧困、窮乏、飢餓に瀕する者が続出されている。

その救済策に国連でも窮している。もはや一刻の猶予も許されない状況下にある。最早地球規模の問題となっている。

私達の大自然の変動で、どのような状況で、どんな危機に落ちているかは、まったく予測すら出来ない。多くのリスクの因子を抱えている。

余りに規模が大きいので、施策に窮している。確かに、救急医療団を派遣して、その応急策に当っているが、焼石に水の状況である。

それでも手を差し延べている。応急策が追いつけない状態である。環境破壊については縷々ふれて来たが、深刻な問題である。

人知を費やして当れば、不可能はないと信ずるが、その状況克服には深い物がある。急すれば成る。安易な考えかも知れない。

と言っているだけでは、いつまでも可能の光を求めえない。それこそ、コペルニックス的転回が不可欠と思われる。

理学技術の異常な進展は、人類の貢献である。これが恩恵は、はかり知れない。また一方、負の論理もないではない。

人間同志の殺戮、またテロ戦は、いたましい。犠牲者は、平和を望み地球の安らかさを祈って、死んでいったに違いない。

知性をもった人間であってみれば、いたゝまれないであろう。私達地球の同胞よ、今こそ争いをやめ、水豊かな地球環境を永続させるよう、知者たる人の話合いが、求められる。

環境の子を守り育てたい。四季の変化に富む日本列島に、例を取るならば、大陸の大国としての環境とは自ずと異なり、島国として四方を海に囲まれた、特異な海洋性気候を持っている。

風土に浴して、気候も温和で和やかさを持ち、湿潤さを持つ。

このような風土の特異性をもつ私達は、古くかぐわし、うまし国ぞと叫ばれて来た所以もあろう。

風光明眉な島国にいこう民族性も、自然と調和のとれた形を育んできた。

中世貴族社会に生きた人々は、美をたゝえ、風土性に愛着を持ち、和歌にその美を語って、雪月花を詠んだ。

雅をはぐくみ、伝統的王朝の美風も庶民に影響を与え、寝殿造を模倣する風慣が、庭にやり水を取り入れた。

素朴な美ながらも、自然の美を私達の家に導入する風雅さを生んだ。

これらは自然環境に手を入れ、自然の美を私家で愛でる習慣が育ったと言ってよい。

古来の人々の愛したものを、代々受継ぎ伝承の美を讃美し、日本文化を遺産として伝承する美風も、今日の私達にも伝えられて来た。

たゞ文化の進展、社会組織も変化して、生活習慣の生き方が、自ずと家庭に生かされ、文化の恩恵に浴している。

電化製品が活用されて、かつての生活様式とは、様変わりして来た。そんな中で精神的な美風が今日の家庭の美学を、築き上げている。

国家社会もかつての明治憲法から民主憲法へと、大きく変移し、すべての面で様変りして今日を支えている。

しかし国際社会も多様化をきわめ、世界石油資源の宝庫として、中近東の利益拡大をねらって、各国の騒乱のちまたと化している。

民族、宗教、人種にからむ醜い戦争からテロへと、いつ治まるとも知れない、世界的傾向化にある。

国連を中心として、加圧に乗り出してはいるが、根絶のきざしは見えない。こんな中、アフリカ大陸では小さい子供を中心に餓死して行くものが、後をたゝない。

世界平和は口にするが、こんな状況が続くかぎり人生の輝きはあり得ない。

人の根底を揺り動かす宗教心と、限りない民族間の欲望は、世界の文明の発祥地を醜い物に化している。

これを打破るには、人と人の心の融和以外に解決法はあり得ない。この世の中から殺戮を除去する科学兵器を抹殺する方策管理を、国連が対策推進すべきと思う。

もちろん、人々の心の解決の必要であることは論をまたない。山紫水明とよく言われるが、環境の浄化が何にもまして優先さるべきと思う。

これすら不可能な状態であれば、その除去が先決である。たゞ地球規模となると、そう簡単に、運べないのが現状だ。

たしかに国連の組織下に一〇年後、二〇年後、いや五〇年後の地球環境の配慮もなされ、環境汚染に対して前向に対策を協議、実践はしている。

しかし必需品の自動車、化学工業の現場は削減に低調だ。

必要だから低調だでは、すまされない。

人の必需品を取るか、今後の環境悪化に歯止めをなすか、問題は大きい。今よければ多少の大気汚染もやむなしか、現状はどうか、大方は認識不足で、後者の今の必要性を廃除するわけには行かない。

GTPにも影響しかねない。たゞ今よければよしで、すまされる問題ではない。

スマトラ沖大地震二回、アメリカ周辺のハリケーン、オーストラリアの旱魃。日本の異常気象、東北災害どれも足下の、緊急問題だ。

更にアフリカ大陸の医療危機、迫りくる自然災害の対応策に手を拱いているわけには行かない。

人類の英知が、今こそ試される時だ。水それは人のみならず万物を潤す宝だ。今更ながら、古代の哲人ターレスの言説が、その鋭どさをうがっているかゞ、察せられる。

万物を育み、生成を助け、うながす源泉である。

ある時に、和やかに私達に潤を与え、またある時は、厳しく対処出来るを知る。一滴の水も集まって大河をなす。

そして大洋へと注ぎ万物の根源をなす。私達の衣食住を形成する源でもあり、自然を初めすべてのサイクルを形成するものである。

もし地球上に一滴の水も無くなったら、大宇宙の中で、他の大気圏同様に、惑星の一つと化してしまう。

地球上で栄枯を盡くした人類も、今は皆無と化して、かつて栄えた地球の文化残歴も、大宇宙の中で埋没し太陽系に包まれる、状況に至るであろう。

地球は人類あっての地球であって、他の惑星同様に、大気圏を浮遊する球体となったらと、仮定に花を咲かせている暇すらない。

大古から栄々と育まれた人類の文化史も、また一朝の夢と化してしまわない為にも、何とかしなければならない。

水資源はダム、水力発電、原子力発電にも、はたまた、あらゆる生物を育む大地の恵みも、仮死状態に、動、植物も住む場所を失なうのは、必定のことである。

人の生命を守る医療も、水なくば、手も足も出ない存在か。激しい人間社会の中にあって強者、弱者といっても、一塊の無用な者か。

柔な物、強硬な物、すべてを注す水、それは偉大な存在であって、何ものにも変えがたいものである。

古来から水神をあがめ奉り、豊かな水を恵み給へ、と雨乞いをし、歌舞奉納を踊るなど、神事をなぐさめた。出雲の御国踊りは、余りにも有名であった。

五穀豊穣を祈り、その恵みに感謝する神事は今も残って、各地で取り行なわれている。世の中が変っても、この行事は変らず子孫へと受継がれている。

冬枯れで水底を突くことがあれば、節水を呼掛け、天然の水を待つ、古来からの習慣の一つとして美風となって残っている。

古くから「一滴の水にも天地の恩恵あり」その心がよく理解出来る。この心は人生の輝きであり、美の理念でもある。

形而上学的な思惟も形而下学的、科学技術の最先端にも通ずるものと見てよい。凡そ、人間的な物の見方には限界がある。

が然しこの水の有効利用については、感性的にもまた、

悟性的にも変ることなく、等しく、尊いもので、すべての物造りの根源でもある。

その水について、昔から水玉模様、水辺へのあこがれ、水もしたゝる、水茎もあざやか、水魚の交わり、水は方円の器に随う、水広ければ魚大なり、水清ければ魚棲まず、水積もりて、魚聚る等々、水にまつわる諺が、よきにつけ悪しきにつけ取ざたされて来た。

と言うことは人が如何に水と関係し、水を生活の中に取り入れ生活して来たかが如実にわかる。

かゝる水を利用し、水を支配するのも人間である。

また水による災害も大きい。大昔、中国で、大河が洪水となって庶民を襲うこと、度々、そこで、「大河をよく治むる者は王たるべし」と言って来たほど、苦難の道を歩むことも歴史から推察される。

治水事業は国の最重要課題でもあった。

氾濫対策に身を投じた金原明善氏なども、後世に語り継ぎ、称えられ、あおがれている。それ程までに水とのかゝわり合いは、洋の東西を問わず、広く人知れず貢献されている。

人が生活する上に水との関りが、如何に不可欠であったかを、知り得る。

大古の人達は水を求めて集まり、集落を作り、素朴ながらも人間社会を形造った。

その営みは21世紀にも及んでいるが、時代によって栄枯盛衰はあったにせよ、今最も憂慮せざるを得ない状況は、少子高令化である。

昔栄えた集落も限界情況に来ている。即ち、限界集落が、やがて消滅の危機にさらされている。

集落は二〇〇七政府調査によると、七八〇〇に及び、消滅の危機にある。二六〇〇のリスクをかゝえていると言う。

京都、綾部市の危機救済策として、「水源の里条例」を施行して水と空気を生み出す、「水源の里」を、積極的に捉え直す条例を作ったとか、行政情報資料に、詳細に報告されている。

過疎対策、限界集落の自立的な対応を、自分達の手で、豊かな自然の再生を試みようとして、立ち上がった。

この水源活用は全国的にも、森林環境の育成に隣接地域の協力と「全国水源の里シンポジウム」で、自治体の情報交換もあって、綾部の実践を大きく展開しようとしている。

これを契機に限界集落を再生へと踏み込んだ事業が、全国的に蘇れば、土地利用を中心に地元の主体性を役立て、危機を乗り越えて行く道を探索したい。

しかし遠くない中に限界集落が訪ずれる事は確実なことである。

その時に至って対処は不能である。今の中から廃村にならないような計画立案が必備であることは論を待たな

い。

かつて一滴の水に命を結んだ、戦争の庭に生きた人達も、この世から消える時、嘗って栄華を極めた輝きも、今は最後の輝にその余韻と残光を、たしなんでいる感さえする。

また科学的な技術も導入され、研究されている。そんな身近にあって、水の恩恵に欲しているその水も、枯れ果て災害の為に葬られた時の生活不能これは、たゞちに事欠いてしまう。

そんなに大切な水も常には、それ程有難いとも感じなく、むしろ当り前のように感じ、その恩恵すら思わない。「窮すれば通ず」と言う事であろうか。たゞ人事のように思わず、自分の為の問題として、全世界の環境浄化に意を注がねばならない時が、今足下に来ている事を認識すべきだ。

言行一致の難解さを如実に知り、実践窮行すべき地球環境下にある愛は、地球を救う。私達は自然資源に負して、生活している。

多くの資源を利用して生を繋いでいる。言う中、水資源にたよる事は大で、これへの畏敬の念は、はかり知れない。

私達が直面する生活に一つ一つ当って見れば、如何に水利用の割合が多く、該当するかがわかる。

大袈裟に言えば直接、間接を問わず、すべての物は水から成る。ギリシアの哲人の言葉を思い出すことが可能だ。

この水を巧みに利用させていたゞくことが、水と生き物との輝く人生ではないか。

これまでも、いやこれからも、未来、永恒に変ることのない人の世の生きた輝きは、永遠に続く。

そんなに大切な水、これからの環境問題で最優先しなければならない。

生きる為、人間生存の為に、水の流動変化する諸相を、垣間む必要に迫まらる。流動の美、それは私達の生きる為のすべてでもある。

大宇宙の煌めきからすれば、瞬時の輝きかも知れないが、その美、変化の輝き、それが人間であろう。

十五、むすび　美の現在

1、美意識の多様化

私達の生活基礎は、美意識に如何に左右されるか。また意識する美が、如何に発生し、私達に如何に作用するか。

それを思考する手掛りに如何に対処すべきか、など諸論をかゝえて来たが、本質的な陰翳の美学を、美の現在点に立って、美意識の多様性を来し方行く末を思い、まとめ論攷を終えたい。

それに先立って小生のこの小論を、よくぞここまで支え、ご示唆くださった先輩作家、三戸岡道夫氏の勵ましを忘れてはならない。

謹んで謝意を捧げたい。

もちろん、所論確立に多くの資料を提供して下さった、先学の専門分野に携わる、学者達の恩恵は論をまたない。

さゞれ石も堆積すれば、美岩を形成する。その例えにも漏れず、小論も大きく成長することを信じて、ひたすら怯むことなく、歩み続けて来たことにも、自分自身の目的があった。

たゆまぬ信念を貫ぬこうとする、意志力があったことを披瀝しておきたい。

ある目的で、それと意図する、しないとにかゝわらず、時は月の盈虚同様、永遠に流転して瞬時も停まらない。

たゞ私達の意識の中で、その流れは遅々として、進まない感も持ち得る。ある時は急流を一気に激しく流れ下る思いもあろう。

そのような緩急はあるにしても、瞬時もためらわず去来する。永遠の未来へと、歴史の一頁を刻んで行く。そんな中に私達は日常性を営んでいる。

月にも満欠けがある如く、すべての物に陰翳のあることは前にも触れえたが、人間世界に、この翳がどう反映するか、それは生きていく英知でもある。

翳の部分あって光の部分もある。翳の部分を負の論理からプラス思考に変えていくのも一つの生き方である。

人の歴史、人類社会にも、光の部分だけではない。歴史を振り返って、血の革命もあれば、平和を叫ぶ時もあった。

今まさに翳のどん底にあえいでいる民族もいる。昔から中近東は石油資源に恵まれ、その権益をめぐって紛糾はたえない。

富・経済権益をめぐるトラブルは、民族、国家のみならず、一人の人間社会においても言えることである。

古来から一人間も、個人の強大な権力を得ようと、様々な知力を巡らした。弱者を併合強大化をはかり、富の共有を得、小集落から中、大集落へ、小国家から、やがて大国家へと集団化意識が強く、常に先行して富の顕在化をもたらした。

そこにはもちろん、主従関係のもと、すべてが動き、富の蓄積に情熱を燃やしたこと、これは夢物語ではない。

今もこの図式は永続化し、生き続けている。そこには自ずと、社会組織のルールが作られ、組織化された。その集団の中で生き集団向上化の為に盡す、これが基本であった。

そんな中での人間関係は、もちろん陰翳のぶつかり合いも有っただろう。それらをコントロールしたものが、富の長となり栄華を誇った。

社会生活も分業化し、ことに人知は手を使い、美術、工芸品を作るまでに発展を見た。そこには卓抜した技量も欲求されイノベーション（革新）がもたらされた。

ことに現在社会にあっては、ＩＴ情報化がすべてに先行される形を、育むに至っている。社会はスピード化され、それを取りまく環境も、大きく変化して来ている。

社会状況の変化は、そこに生きる人達の意識も変え、多様化している。

2、日展百年

毎年美の秋を染める日展百年、上野から六本木の国立新美術館へ移転した。百年前、会派の道の違う美術家たちが、切磋琢磨する場として生み出された。

年を重ねるに従って日展入選が困難となる、その道を極める者にとっては、通過することが、芸の表舞台に脚光を浴びる事になった。

だから盛況を極め、登竜門の要素を担って来た。団体展も規模の拡大五科となって、初期の上野では手狭となって来た。

同時に都の美術館で、国の所有物ではない。老朽化も進んで、新しい国の施設を要望する気運が高まって来た。

振り返って三十年、願望の新美術館が誕生した。日展百年を期に意義深く、新装なった美術館は、確かに上野都美術館より、何かにつけ新鮮さを持ち、余裕を持ってきた。

今まで大作出品にも制限がちだったのが、部門ごとの規定を超えるサイズや形が、表現形式も認められ、会場の変化が作品や展示の質にまで影響を及ぼすようになって来た。

たゞ運営面で若手登用に、組織維持の壁を持つ批判もあると言はる。伝統的な日展美術団体の讃美は歴史と共に歩き、その権威は如何に変革しようとも、美の基準は多くの愛好家の壁となって、その体面を保っている。

ただ日展、二科展、院展など、国体展、公募展が大きな曲り角にきているのは、隠しえない。

多くの若者の価値観も多様化し、個展に活路を見出そうとして、画廊、百貨店などに乗り出し、美をアピールする風潮も広まった。

更にアマチュア達による絵画教室や、カルチャーセンター等で学び挑戦する若い作家達、底辺の拡大化は美を楽しもうとする、女性達の集いであった。

これもまた、中央から一流講師を招聘して研究を重ねている。きらめく星を如何に育てていくか。

個展や、小規模なグループ展を目指してはいるが、このままではアマチュアの集団になってしまう。

という危惧の念をいだく、伝統権威を主張する日展派と、現代派の相争う中で、やがて来たるであろう幻の権

威であるのか。

そして歴史的産物の数々もユダの時代が、近い将来にと思う。美術部門を中心にあげて来た。

他の彫刻、工芸、美術、書の分野はどうか、確かに日本画部門も洋画的表現を、取入れた穏健なものに、親しみやすさを感ずる、情緒を感ずる。

彫刻は注目をひく女性像を中心とした。作風は書からの美を、象徴する面影が、漂っている。これが芸術だと言わんばかりの、めり張りを利かす感にうたれる。

線のうねり、力動感に漲る、彫鏤の深さ等、若者の力動的リズムを感じさせる。

美術工芸部門にいたっては、繊細な快感が作風を通して読みとれる。さらに驚異をひくは、モダンアートのオブジェ幻想的、象徴的な効果を出す。前衛芸術美に思わず息をのむ。

また金箔を漆素材に巧みにアレンジした、錦絵的作風は、鑑賞者の目を集める。

これら作品は、作家の魂が如実に現れ、生と輝きを発散させている。感動をもつ、鑑賞者と作家の心を響かせるのは、こゝにあろう。

無限の鑑賞の中に時空を忘れ、共感させられる思いを持つことが出来る。

書にしても伝統的な線質は、自己の作風を取入れ、篆、隷くずし作風に、自己主張を得んとする。

高度な書風は人をして、畏敬の念をいだかせる。その書の中に侵入させられる芸道は、深淵に臨む感がする。

いわゆる、人生の深奥を悟る。「書は人なり」と言う。ときめく技は人の発露で、そこはかとない感情、情調が、にじみ出て人知れず、熱いものを感じさせる。

五体部門別な鑑賞は、現在にいて過去、現在、未来を垣間見る様相を、創設百周年を期に、一層の発展と変容を切に思う。

もちろん、今後の発展は若手芸術家の奮起と、伝統的なアウフヘーベン止揚が不可欠なことは、論をまたない。

作家の主戦場は、個展にありと声高に明言している。芸術家の気持も、理解できない訳ではない。

世界的な生体展の伝統と、価値観を永続させるにはどうか。ヨーロッパ美術の粋も、何世紀かの齢を過ごす中には、かゝる運営面の危惧を抱かせた時も、あったに違いない。

それを超越して今日の美を、保ち続けている。伝統堅持は至難であるが、日展も今やヨーロッパ芸術の輝の如く、多くのジレンマを抱えて進もうとしている。

一世紀の歳月は幾多の相剋を託ちながら、やって来たであろう。今それを埋没させて、しまってはならない。

たとえどんなに困窮があろうと、それを超越する所に、生甲斐を感じなければならない。言うは易く行うは難し、叫びを必要とする。

回顧百年の日展について時を刻むことは美であり、人間の生であるとも思われる。幾多の鑑賞また作品に寄せる情熱は、作家及び鑑賞者の魂をゆさぶる。

「人生は短かく芸術は長し」ゲーテの言葉を、かみ締める余裕を持つが、体験を通して生きようとする時間、空間は、中々持ち得がたい。

美を意識する環境が整えば、ヨーロッパの伝統的な芸術同様に、発展する事と思う。

各地に新しい美を求めて、多くのコレクションを持つ宝庫も、公私設を問わず開館していることは、美の発展に少なからず貢献していると思う。

ごく最近「生の美術」として、アウトサイダーアートが注目を集めていることは、周知のことである。

今までの感性を打ち破って作品の斬新さが、鑑賞者の心をゆさぶり、内面に荒れくるうハリケーンを、感ぜずにはいられない。

快感極まる激しいものを感じ取るに、吝かではない。

また画家木下氏は元ハンセン病患者であったが、その作は心の内の感性をゆさぶるもので激しさを持っている。

更に沢田真一氏の作は五〇〇〇年前の感覚を今読み取る。即ち、私達の中に寝ている芸術性を、呼び覚ますものがある。すなわち芸術以上のもので、見失うものは何もない。

勿論、自分を見失うことが出来ない。

大気の安定した頃の空と海の青、これは鮮明に残っている。また或る鑑賞者はこんなに自由に絵ける画布の前に立って、自分のちっぽけさに改めて、打ちのめされた思い、すらすると言う。

脳中がむずむずする刺激を保っている。作り出している人達は、誰れに言われるわけでもない。

即ち、表現の本質を描いている。引きつけつゝゆさぶられ、時めきを与えられる、思いすらする。

と或る画家は、脳中を語る激しさを持った。また「アルブリコ・ジャパン展」で、アウトサイダーアートを大きく取り上げた。

たゞ表現したいという衝動、即ち、描かず作らずにはいられないから描く、これが絶対唯一の表現と思われる。

今後も今までの価値意識に取らわれず、時代環境の変化や、また多様性の意識に立って、様々な表現要素を、生むであろう。

それが進化である。21世紀は人、心、科学の適応によって、異次元の物を輩出する時宜に来ている。

先に人間代行の役割を担った、ロボットの開発があった。今また人工細胞、PSの療養技術と、人類の英知が生む偉大さは、美の範疇を左右している。

輝ける人類の進化応用に、英知を結集しようではないか。

（終了）

（参考文献）

○詞華集　日本人の美意識　東京大学出版会　巻一、秋山慶著　巻二、三好行雄著　巻三　久保田淳著

○日本文化史　美術と歴史　武藤誠編　創元社

○美の思索　山本正男著　美術出版社

○ＩＴ革命　ネット社会のゆくえ　西垣通著　岩波新書

○意識とはなにか　茂木健一郎著　ちくま新書

○脳と仮想　茂木健一郎著　新潮社文庫

○心とは何か　心理学と諸科学　足立・外共著　北大路書房

○陰翳礼讃　陰翳礼讃　谷崎潤一郎著　中央公論新社

○痔、いびきはレーザーで治す　小森剛著　現代書林

○やわらか脳　茂木健一郎著　徳間書店

○脳と心の整理術　茂木健一郎著　ＰＨＰ研究所

○脳と創造性「この私」というクオリアへ　ＰＨＰ研究所　茂木健一郎著

○歴史遼乱　三戸岡道夫著　栄光出版社

○歴史に魅せられて　史遊会編　彩流社

○20世紀の陶芸、人間国宝　竹内恵美編　大日本印刷

○判断力批判　上・下巻　イマヌエル・カント　岩波書店　大西克禮訳

○仏教経典散策　中村元著　東京選書社

○ジャポニカ百科事典　編集部　小学館

○日本国語大辞典　編集部　小学館

○広辞苑　第六版　新村　出編、岩波書店

○哲学小辞典　編集部　岩波書店

○哲学年表　速水敬三編　岩波書店

○日本史辞典　高柳光寿・竹内理三編　角川書店

○通信白書　12年刊

○迎賓館、七宝の美　田中輝和著　時事画報社

○江戸の美意識　絵画意匠の伝統と展開　宮内庁三の丸尚蔵館

○近代日本画の系譜（明治から平成まで）　岡山県立美術館　山陽新聞社

他

口紅（その十一）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉
【趙家の人々】
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
【江家の人々】
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）
寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）
呉文彗（寧岸と結婚）
寧遠（寧岸と呉文彗の息子）
張喜（趙耀根の会社の同僚）
李主任（趙耀根の会社の上司）
張書記（趙耀根の会社の上司）
羅桂香（江暁歌の会社の同僚）
黎美娟（江暁鴎の恋人）
宗漢（江暁歌が作った会社の専務）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）

第十九章　乗客

（一）

趙耀根と唐燕影は、肩を寄せ合いながら大きな料理屋から泥酔状態で出てきた。

趙耀根は手を挙げて一台の流れのタクシーを拾った。彼らは車に乗り込み、どろどろの固まりのように絡み合っていた。趙耀根は女の運転手に向かって行き先を告げたが、運転手は黙ってただアクセルを踏むと車を走らせた。

運転手は、江暁歌だった。彼女は、客が趙耀根だとわかっていたが、趙耀根は気づかなかった。それもそのはずだった。江暁歌は今はやりのパーマをかけていて、ほどよい化粧をし、だてメガネを掛け、ハンドルを握った指にはマニキュアが光っていた。酔っぱらった趙耀根は、特別タクシーの運転手に気を留めるでもなく、朦朧と唐燕影の顔を見ていた。

江暁歌は、バックミラーで、彼らが体を絡めて恥知らずな行為をしているのを見ていたが、できるだけ感情を抑え、顔色一つ変えなかった。

暫くしてタクシーは目的地に着いた。江暁歌は、車を静かに道路脇に滑らせて止めた。趙耀根は、

「釣りはいらないよ」

と言って一枚の札を渡した。唐燕影は、

「なぜ釣り銭をもらわないの。釣り銭があれば一箱アイスクリームを買えるのに」

と言って彼を遮った。趙耀根は、

「女の人がタクシーを運転するのは大変なんだ」

と言った。趙耀根は、

「仕事を切り上げて家に帰ったら。夜はとても危険だよ」

とタクシーの運転手（江暁歌）に声を掛けた。唐燕影は、

「無駄口をたたかないで。あなたのような羊の皮をかぶった狼に出会わなければ安心だわ」

と言った。

彼らは互いにもたれ合って、笑いながらタクシーを離れた。

江暁歌の目に彼らが新興住宅地に歩いて入っていくのが見えた。二人の後ろ姿は建物の通路に消えていった。程なく四階の部屋の窓に明かりがともった。江暁歌は顔をハンドルに埋めて暫く顔を上げることができなかった。

（二）

唐燕影は、趙耀根の体にハアハアとあえぐ小さな獣の

ようにへばりついて、艶めかしく甘えた声で話しかけた。
「幼なじみの友達は、あなたのことを心服していたって言っていたけれど、あなたが喧嘩が強かったからじゃないの？」
「全然違うさ。実際に一人の人間の強さは、決して相手に勝つことではなく、肝心な時に、相手の命を奪う勇気があるかだ」
「意味深長ね。時に優しそうに見える女も強い男を倒すことができるってわけ」
趙耀根は、
「君はそんな女かい？」
と笑って訊ねた。唐燕影は、
「あなたが答えてよ」
と言って、小さな白い手で握り拳を作って趙耀根に向かって振りかざし、恐ろしい形相をした。
趙耀根は彼女の握り拳をしっかり受け止めて、
「君の仕草はとっても可愛いよ。君がもし人を殺す勇気があるなら、僕は本当に君の腕の中で死にたいよ」
と言った。唐燕影は、
「いいわよ」
と笑った。
「何時か私はあなたの願いを叶えてあげるわ」
趙耀根も、
「僕はその日が来るのを待っているよ」
と笑って答えた。
「僕はこの七十五キログラムの図体を君にあげるよ。煮ようが焼こうが好きなようにしてくれ」
唐燕影は笑って趙耀根の体から滑り降りて、ほの暗い明かりの下を行ったり来たりした。彼女の体に纏ったサテンのネグリジェが、メタルカラーの光沢を放って揺れ動き、彼女のしなやかで淑やかな、さながら妖怪のような姿態は、趙耀根を恍惚とさせた。趙耀根は女色の夢の境地に落ちていった。
彼は赤ワインをするように飲んで、得意になって喋った。
「昔、ある本を読んだことがある。旧社会では立派なお屋敷に愛人を囲った金持ちがいると書いてあった。僕は意外だが羨ましく思った。それにそんな自分を責めたんだ。プロレタリアートの革命の後継者が、資産階級の生活を羨むことなんかできはしないのに。でもまさか、僕がこうして愛人を囲むなんて夢にも思わなかったよ」
彼はアハハハと大笑いをして、浮ついて手を伸ばし、唐燕影の顔を撫でた。
唐燕影は、
「デタラメを言うと許さないわよ」
と怒りをむき出しにして言った。
「わかった、わかったよ。僕はデタラメを言ったし封建的な男さ。ここは愛人を囲む屋敷じゃないよ。僕達の

温もりのある愛の巣さ。こう言えば怒らないだろう。名前は違っても、本質的には何ら変わりはないさ」
「変わるに決まっているじゃない。立派なお屋敷に囲われているのは妾よ。私は妾なんかになりたくないわ」
妾になりたくなければ何をするべきなのか答えは明白だったが、続けて話す気にはなれなかった。なぜなら答える術が彼にはなかったからだ。仕方なく適当に言葉を濁すしかなかった。彼は唐燕影に決して満足していないのではなく、彼女を妻として娶ろうと考えないわけでもなかった。彼はただ、数日自由気ままな独身貴族としての暮らしを楽しみたかったに過ぎなかった。彼は結婚の経験があったので、結婚がどれほど人を傷つけるか知っていた。もし出来うるならば、彼はできるだけ次の結婚を引き延ばしたかった。
趙耀根は、
「君は僕のために子供を産んでくれるかい？」
と唐燕影に訊いた。
唐燕影はこっそり避妊していたが、
「私は勿論産みたいわ。肝心なのは、あなたが子供を産める能力があるかどうかよ」
と曖昧に笑って答えた。

(三)

江暁歌は彼女の車を羅桂香の露店の傍らに止めた。全身油まみれの羅桂香は、彼女を見て思いがけず大喜びして興奮して言った。
「暁歌、暁歌、珍しいお客さんだわね」
羅桂香は片付けながら、江暁歌を座らせて食事を運んできた。江暁歌は、急に羅桂香の手をギューと引っ張って、こみ上げてくる悲しみに泣きながらイヤリングとブレスレットを手で押さえて外し、思い切り地面に叩きつけた。
羅桂香は驚きうろたえて、
「暁歌、暁歌、あなた、何かあったの」
と江暁歌に尋ねた。江暁歌は、
「彼は人間じゃないわ」
と叫んだ。羅桂香ははっと悟って、
「趙耀根でしょう。だから言ったじゃない。彼は人でなしよ」
と言った。羅桂香は、イヤリングとブレスレットを拾って、
「私達は彼を相手にしないことよ。私達には自分の生活があるじゃない」
と言って彼女を慰めた。
彼女は江暁歌のために一杯酒をついだ。
「さあ、飲もうよ」

（四）

寧岸は、一人で椅子に腰掛けて酒を飲んでいた。目は酒で真っ赤になっていた。彼は立て続けに飲み、すっかり飲み干してしまった。彼に酒を注いでいた呉文彗がちょっとためらっていると、彼は直ぐにテーブルを叩いて、

「どうせ、俺のようなクズは外では人に馬鹿にされ、家でも妻に馬鹿にされて、酒を飲むにも君の顔色を伺わなくちゃいけないんだ。俺はやっぱり男なんかじゃないよ」

と恨みを込めて言った。

寧遠は驚いて泣き出した。呉文彗は急いで寧遠を抱いて、お父さんの怒りを買わないために、子供に泣かないように目配せした。

寧岸の怒りは益々激しくなっていった。彼は箸で挟んでおかずを口に放り込むと、

「こんな料理が酒の肴になるとでもいうのか」

と吐き捨てた。

怒りで息が荒くなり、コップを乱暴に置くと、ベッドに寝そべって掛け布団で頭を覆い隠した。

呉文彗は涙を流して、怯えたように近づいて寧岸を撫でた。

寧岸は、

「ごめん、ごめんよ。僕はまた失敗してしまったんだ。今回はもうちょっとでうまくいくところだったんだ。今回うまくいけば、三万元の分配金があったんだ。その金は既に市街地まで運ばれてきていたんだが、警察に見つかってしまい、丸々トラックごと消えてしまったんだ。それに罰金を取られた挙げ句、三日間拘留させられたんだ」

と突然呉文彗を抱きしめて言った。

呉文彗はびっくりした。寧岸が雲南に行き、煙草を密輸したことを初めて知った。彼は、福建省泉州市の石獅にジーンズを仕入れに行ったんではなかったのか？

夫の煙草の密輸の違法行為は、呉文彗に不吉の前兆を思わせた。ちょっとでも諫めるとカッとなって怒り出すので、彼女は忠告する勇気もなかった。彼女はこの状況を江暁歌に知らせた。

江暁歌は知らせを聞いてびっくりした。寧岸にどうしてこんな真似ができるのか、思いもよらないことだ。しかし、寧岸がこうした行為をしでかした気持ちは彼女にも理解できた。

寧岸は、今では典型的な二重人格の人間に変わっていた。一方では自分の清貧さや道徳心を誇りに思い、一方では今の生活から抜け出したくて金を稼ぎたかったのだ。寧岸がなぜ友人に相談しないで単独で行動したのか、江暁歌にはわかっていた。今までの友人は実態のない上っ面の友でしかなく、新たに知り合いになった偽りの友人を互いに兄弟のように呼び交わし、昔の真の友人を破れた履き物のごとく、惜しげもなく捨て去った。江暁歌は、固い絆で結ばれていた昔の真の友人達との日々を懐かしく思い出した。とにかく悔しかった。友情も青春のようだ。もう既に永遠に過去のものとなってしまったのか。

彼女は深くため息をつき、呉文彗に寧岸と会って必ず話をすることを伝えた。

呉文彗は、

「彼が拘留されたことを言わないでね。もう充分恥をかいているわ」

と身振り手振りで江暁歌に頼んだ。

江暁歌は、

「私は何も知らない振りをするわ。彼のことわかっているから。彼の自尊心は特別強いわ。彼は文化人よ。本来は書斎に閉じこもって一生懸命学問をすべきなのよ」

と言った。

彼女達が話をしていると、テレビで永葆春内服液のコマーシャルが流れていた。若くて美しい女の子たちの長い髪は、まるで滝のように流れ、スカートの裾が翻り、見ている人の恋心に触れるようなコマーシャルだ。テレビの画面の下の方に字幕が流れていた。

『超人会社の取締役会長兼社長の趙耀根は、全市民の皆様に敬意を表します』

趙耀根は利用し得るあらゆる機会を使った。見たくなくても否応なしにコマーシャルが飛び込んできた。

江暁歌はテレビを消して立ち上がり、札束を呉文彗の手の中に押し込んだ。

呉文彗はびっくりして必死になって拒んだが、江暁歌が腹を立てているのを見るとしぶしぶ金を受け取り、悔し涙を流した。江暁歌は、呉文彗の自尊心が傷ついているかどうかを考える術もなかった。彼女は落ちぶれて惨めな思いをした経験を持っていたので、食べることが自尊心よりも更に重要であることを知っていた。

（五）

江暁歌はくたくたに疲れ切って車に乗り、専用のLサイズのネッスルの瓶で喉を潤した。彼女の目の前に、びっくりするほどの大きなネオンサインの広告看板が現れ、「永葆春」の三文字は高い雲の辺りで輝いていた。

彼女の車に客が乗った。彼女は瓶を置いて、心の準備をして車を動かした。

彼女の車が雑踏を走り抜け、狭くてぬかるんでいる路地に入って行くと、道の両脇は、黒煙が立ちこめる焼き肉の露店と焼き肉目当ての客でごったがえしていた。この入り組んだ路地をやっと通り抜けたので、ホッとしてスピードを上げようとした。途端にドカーンという音が

聞こえたので、急ブレーキを掛けて車を止めると、自転車と接触したことに気がついた。
自転車に乗っていたのは中年の男性だった。（彼は起き上がると、体を左右に振って、たいしたことはないと思った。）
江暁歌は謝った。彼女はこの接触事故をその場で処理してしまえば良かったのだが、彼女はとても善良だった。彼女は病院に行って検査する必要があるかどうか彼に訊ねたが、中年の男は度量が大きかったのか、
「病院？たいしたことじゃないよ」
と答えた。しかし躊躇ってこう言った。
「でも検査しておいた方がいいかなあ。運転手さん、あなたはとても良い人です。私は医者を捜したら、ざっと検査してもらいます。特に何もなかったら帰っていいですよ。早くあなたの仕事に戻ってください。あなた方タクシーの運転手さんがお金を稼ぐのは容易ではないでしょうから」
彼らは病院に行き、男は並んで受付をしている時に家に電話をした。
診察は意外に早く終わった。皮膚に外傷が少しある程度だと医者が言ったので、江暁歌はホッとした。もう既に治療費を支払って帰るつもりだった。
この時どっと人がなだれ込んできて、代表らしい女が、
「人が・・・車にぶつかった人がいるのよ」
と大きな声で叫んだ。中年の男は、
「ここにいるよ」
と白いカーテン越しに答えた。
婦人は有無を言わさず、白いカーテンを捲り上げて、
「私はあんたに気をつけるように言ったのに何してるんだい。ざまを見ろ。いい気味だわ」
と言った。
ベッドの上からはい上がってきた男をギューと押さえ込んで、
「いいわね。あんたは私のためにベッドに横になっていなさいよ。筋骨に重傷を負えば、百日間は掛かるわ。起きたら病状が悪化して遊べなくなるわよ」
と言った。男は、
「何でもないよ。大丈夫だよ」
と言った。
「誰が大丈夫だって言ったのよ。医者が言ったの？私が医者に聞くわ。エックス線写真は撮ったの。CTは？今ではMRIがあるって言うじゃない。とってもいいそうよ。医者はあなたを検査してくれたの。車にぶつかって医者にいい加減に診てもらっただけではだめよ。運転手はあなたを病院に連れて来たって言うけど、ここの医者と彼女は知り合いかもしれないわ。今時何処にこんな善良な人がいるっていうの。いるわけないでしょう。外傷を負ったのであなたを病院に連れて行ったのよ。きっ

と彼女には成算があるのよ。まず知り合いを捜してあなたの口を封じ込めたのよ」
男はそう言われても決心がつかずにいた。
「そうかなあ。でも僕は本当にどこも痛くないったら・・・」
「どこも痛くないからって、何も問題がないとは言えないわ。私の同僚は、車にぶつかった時は何でもなかったと言っていたし、出勤して食事をしても特に問題はなかったわ。でも二日後に突然倒れたのよ。どうなったと思う？死んでしまったのよ。だから車にぶつかったら、必ず検査して危険因子を取り除かなくてはならないわ。運転手さんたら。事件を起こした張本人さん」
江暁歌は、
「私はここにいます。私は既に治療費を支払いました」
と言った。女は江暁歌をぐいっと捕まえて、
「あんたは私達をいい加減にあしらっちゃいけないわ」
と言った。そして彼女は他の人に指図して、
「皆さん、彼女を見張っていてください。彼女を逃がしてはいけません。私が医者を探しに行ってきます」
と言った。江暁歌は、
「私はどこにも逃げ隠れはしないわ」
と仕方なく言った。
「そんなことわからないわ。最近の人はまったく道徳心がなっていないわ。ひたすら金儲けばかりするだけで、他人の生死なんてかまっていないのよ」
男は、
「わかった。もういいよ。住所を書き留めておこう。もし調子が悪くなったら彼女を訪ねればいい。あの運転手さんは素晴らしいよ。自分で僕を送ってくれることを申し出てくれたんだ。あの時車が走り去っていたら、僕は追いかけることもできなかったんだから」
と言った。女は、
「あんたの憎らしい口を閉じなさいよ。美しい女を見りゃ、命なんていらないんだから」
と言った。
江暁歌は泣くに泣けず笑うに笑えず、女の言い分を我慢して聞くよりほかなかった。

（十八）

江暁歌は二日目に男の態度が急変するとは思いもよらなかった。
彼は病院のベッドに横たわり、二度と出て行こうとしなかった。彼は血色が良くて、しかも艶々して元気溌剌だったが、近くの棚にはサプリメントと果物がいっぱい積み上げられていた。彼を見舞いに来る人は、後を絶たなかった。見舞いに来る人は、一度ならず彼にしっかり入院して検査するように言い聞かせ、がっかりしてうな

だれて片隅に立っている江暁歌を容赦なくしかりとばした。彼の奥さんは一つまた一つと無理な要求を出して、様々な高い検査を繰り返し受けさせた。

江暁歌は、彼らに対してとりとめのないことを想像し始め、自分が誠意を持って人に接しさえすれば、彼らが感謝し適当なところで身をひくと思った。しかしすぐその思いは絶望に変わった。彼らは少しも退院する気配がないばかりか、無理な要求を次々と出してきた。彼女は見ているだけでどうすることもできずにいた。やっとの思いで稼いだお金が無情にも消えてなくなってしまうのを見ていたが、彼らをいささかも阻止する方法を探し当てずにいた。

彼女は医者に会いに行くより仕方がなく、医者に対策を授けてもらいに行った。

「仕方ないですね。彼は病状が多岐にわたっていて、私達はひとつひとつ注意深く観察、検査して、病巣を摘出して治療しなければなりません」

江暁歌は、

「私は治療費を負担することができません。私は借金して車を買って、二年あまり仕事をして、やっとの思いで借金を返し終わるのです」

と言った。

「私はあなたに同情します。しかし私達も責任があります。CTを撮ると彼の頭蓋骨に影がありますので、私達はある程度時間を掛けて様子を見なければなりません」

江暁歌は、

「人間は本来病気を持っていて、脳には影があり、いつ症状がでるとは限らないということはありますか?」

と訊ねた。

「その可能性はありますね」

「それなら、万が一この人がまさしくこの症状だとしたら」

医者は、

「頭蓋骨を開いて詳細に検査して、正確な判断を下すだけです」

と答えた。

「頭蓋骨を開くにはどのくらいお金がかかりますか?」

「安くありませんね」

江暁歌は医者の前で堪えきれずに泣き出した。ちょうど男の奥さんも医者を尋ねてきていた。彼女は江暁歌を見ると、江暁歌の襟をぎゅっと掴んで、彼女が医者を買収して不正行為をすることを許さないと言った。江暁歌はいくらでも弁解はできたが、なす術もなく泣きわめいて取り乱すより他なかった。

その時、道を踏み違えないように教え示す人が現れた。彼は、

「なぜ、彼らと賠償のことを話し合わないのですか」

と言った。

江暁歌は目から鱗が落ちたように、はたと合点がいき、男の奥さんと話し合いを始めた。話し合った結果、賠償金は二万元になった。入院検査の費用は江暁歌が実費を支払った。賠償金と併せると三万元余りとなった。この他に、食費や相手が入院により受け取れなかった給料も肩代わりしなければならなかった。

男の奥さんはこれが最低限度の賠償金だと言った。江暁歌は仕方なく屈辱的な示談をした。彼女は今回のことですっかり消耗してしまった。

(七)

彼女は緊急にお金が必要となったが、唯一の方法は車を売ることだった。彼女は、赤のシャリーの後部ガラスに『車売ります』という広告を貼り、気落ちしてハンドルにふさぎ込んで、暫く身動きができなかった。彼女は心の中で細かくそろばんをはじいていた。彼女はこの二年間の食費や生活費を除いて計算して見た。父親に徐々にではあるが、借金の一部を返していた。今回もし車と車の商標登録を売却したならば、医療費と賠償金を支払っても、少しばかり余裕があった。しかし、残った借金を返すのには足りなかった。彼女はありもしない賠償金を背負い、その上愛車のシャリーを手放してしまった。運命にもてあそばれたのか?また彼女は貧困生活に逆戻りしようとしていた。

江暁歌はこの不運な事件をみんなに隠していた。彼女はすぐにお金が必要だったので、予定価格よりもかなり安く売却しなければならなかった。こうして医療費と賠償金を支払った後、彼女の手元にはお金はほとんど残らなかった。彼女は車を売り払った後、数日部屋で横になっていたが、どうやって父親と向かい合ったらよいのかわからなかった。もし父親に車を売却し手元にお金もないことを告げたら、きっと悲しみ失望して、病気で倒れてしまうだろう。しかし、このことを何時までもひた隠しに隠しておくこともできなかった。江暁歌にとって愛車のシャリーがなくなったことは決して小さなことではなく、車を売却したことを父親に説明しなければならなかった。どのみち言わなければならないことだったので、早く言ってしまった方がよかった。

江暁歌はベッドから起きあがると、家に帰ってこの事件を父親に知らせるつもりで身支度をしていると、江暁暢が訃報の知らせをもって訪ねてきた。父親が死んだのだ。

父親が突然この世を去った。父親は娘に別れの言葉を掛けられなかった。

江暁歌は堪えきれずに声を上げて泣いた。

父親の告別式で、江暁歌は趙耀根にばったり会った。
趙耀根は黒いスーツを着て黒のネクタイを結び、嘉児を連れて親族と一緒に連れ立ち、弔問に来る客の慰問を受けていた。弔問が終わった後、彼は涙で顔を腫らせた江暁歌の目の前に来て、手を伸ばして彼女の手を握りしめた。江暁歌は誰なのかさっぱりわからないまま、彼と握手を交わし、彼が誰なのか見分けることさえできなかった。嘉児が母親の服の裾を引っ張って小声で教えてくれた。
「お父さんだよ」
江暁歌は聞かない素振りをして無関心を装った。
趙耀根は、随分と長いこと江暁歌と会っていなかった。彼女は喪服に包まれていたが、依然として成熟した女の艶やかな姿を見せていた。趙耀根は彼女と話をしたかったが、その場の雰囲気を考え、はやる気持ちを押さえた。
趙耀根は沈鳳宜を静かなところに呼び出して、お金がぎっしり詰まった封筒を彼女の手の中に押し込むと、
「ここに五千元あります。ほんの気持ちです。お父さんのために立派な骨壺を作ってあげてください。私達は曾て舅と婿の間柄だったのですから」
と言った。
沈鳳宜は趙耀根の話を聞いて感傷的になり、遠慮しながらお金の入った封筒を受けとった。
趙耀根は、
「僕にはお願いしたいことがまだあります」
と言った。沈鳳宜は、
「話してください」
と言った。趙耀根は、
「暁歌の車が人と接触して、法外な賠償金をふっかけられたそうじゃないですか。ここに五万元あります。どうか彼女に渡してください。このお金は本来彼女のものです。離婚した時に彼女はふて腐れて受け取ってくれなかったのです。僕が直接渡しても絶対受け取ってくれないことはわかっています。僕は彼女にお金をあげたいのですが、お母さんがあげたお金だと言ってくれてもかまいませんし、父親が彼女のために残したお金であると言ってくれても構いません。彼女がこのお金を受けとってくれさえすればいいのです」
沈鳳宜は、
「もし暁歌がお金の出所を知ったら、私は彼女に恨み言を言われるに決まっているわ。まあ仕方ないかしら。彼女に後で責められるでしょうよ。彼女のお金である以上私は受け取ります。実を言うと、お父さんが亡くなる前に、暁歌がお金を借りて車を買うということを、お父さんが話してくれたのよ。お父さんは暁歌が将来お金を返済できないことを心配していたわ。お父さんはこのことが原因で信用を失ってしまったのよ。お父さんは暁歌を助けるように私に言付けたの。このお金があれば安心だわ」
と言った。
「そうだったんですか。返済するお金はどのくらい必要ですか。僕があなた方に代わって返済してもいいですか？返済できれば、嘉児のおじいちゃんも、安心して冥土でゆっくり休むことができるでしょう」
沈鳳宜は感動して泣き出した。沈鳳宜はこんな日が来るとは思ってもみなかった。彼女は申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになった。
「耀根、昔、私はあなたに義理を欠いていたわ。本当にごめんなさい」
趙耀根は、
「昔のことは言いっこなしですよ。こうしましょう。お母さんは、このお金を江暁歌に受け取らせてください。借金を返すのに充分かどうか確かめてください。足りなければ僕に知らせてください。それから、いつでも困ったことがあったら、僕にできることでしたら、何なりとおっしゃってください。全力を尽くしますよ。僕と江暁歌が離婚したことは、僕達二人の間のことです。お母さんは僕の娘のおばあちゃんです。このことは永遠に不変です」
と言った。
沈鳳宜は感激のあまり涙を流し、何度も何度も感謝の声を漏らした。
江暁歌は、手袋、メガネ、ネッスルのコップ、フロントガラスの前に掛けてあった小さな鈴と数本の流行歌のテープをしまった。車は売却したので必要なくなったものだった。江暁歌は奮闘努力したが、また振り出しに戻った。
ドアをノックする人がいた。江暁歌がドアを開けると沈鳳宜が立っていたので、奇妙な感じを受けた。
母親は今までここに来たことはなかった。きっと大切な用があるのだ。江暁歌は話を聞く準備をしていた。沈鳳宜の黒髪は数日でごま塩頭になっていた。江暁歌は急に悲しくなった。
沈鳳宜はハンドバッグを取り出して、黙って江暁歌歌の前に置いた。
「これ何なの。お父さんの遺品？」
「まず、見てちょうだい」
江暁歌は、ハンドバッグを持ってチャックを開けると驚いた。
「こんなに沢山のお金、いったいどうしたの」
「ここに、五万元きっかりあるわ。あなたのお父さんがあなたのために残したものよ」
江暁歌は信じなかった。
「どうしてそんなことできるのかしら」
沈鳳宜は、

「あなたの置かれた境遇はよくわかっているわ。あなたとあなたのお父さんは、私を本当に苦しめたわ。でも、私はあなた達を責めないわ。あなたのお父さんがあなたを助けるのは当然じゃない。あなたが言いがかりをつけられ、金品を巻き上げられたことを私は知っているわ。お父さんはとっても気を揉んでいたわ。あなたに会いに行きたがっていたのよ。でも突然発病するなんて思ってもみなかったわ・・・」

と言った。

沈鳳宜はこれ以上言えなかった。

江暁歌は涙を流した。暫くしてやっと口を開いた。

「でもお母さん、このお金はお父さんとお母さんのものではありません。お父さんとお母さんは貯金するこんなにたくさんのお金を持っていなかったじゃないですか」

「私達は持っていたわ。最近暁鴎がくれたのよ」

「このお金は受け取れないわ。私の車はとっくに売り払ってしまい、医療費を支払ったし、借金も返済したから大丈夫よ。私はもうお金は必要ないわ。これはお父さんのお金よ。お父さんとお母さんの財産よ。お母さんはとっておいて少しずつ使ってください」

「このお金は誰のものでもなく、あなたのものよ。私も困るわ」

「私はこのお金を受け取れないわ。このお金は趙耀根のものでしょう。そうなんでしょう?」

沈鳳宜はばつが悪くなり、否定するのでもなく肯定するのでもなく、口をつぐんでしまった。

江暁歌は、

「お母さん、このお金を彼に返してください。彼にこんなことしないように言ってください」

ときっぱり言った。

沈鳳宜は顔を真っ赤にして、恥をかいたと思った。

彼女はハンドバッグのチャックを閉めると、

「お前って子は・・・」

と言ってため息をついた。

江暁鴎は、ハンドバッグを事務デスクの上に置いて、

「このお金は江家には必要ありません。そっくりそのままお返しします」

と言った。

趙耀根は、暫くぼおっとしていたが、

「君達はこうまでして僕を憎むのか。彼女はそこまで僕を恨むのか。彼女はいずれにせよ僕の娘の母親なんだ。まさか僕に彼女を路頭に迷わせることができるとでも言うのか。そんなことできっこないじゃないか。彼女はタクシーの運転手をして、今まで辛い思いをしているんだ」

と憤慨して言った。江暁鴎は、

「まだ姉さんのことを思っていてくれて有り難う。でもどうしても受け取ることができないんだ」

と感動して言った。

「彼女が受け取らないというのなら渡すのはよそう。僕が人を介してあげてもいい。彼女の借金は僕が返すよ。君が僕に代わって返してくれないか」

江暁鴎は、

「それはできない話です」

と言った。

「今回は彼女がどうであれ、君が筋書きを書いて彼女の機嫌をとるんだ。金は僕が返済する。こう決めたんだ」

「耀根兄貴、兄貴に本当のことを話すよ。お父さんが姉さんのために借りたお金は、実際には五万元だけだ。それに姉さんは、既にその一部を返済し、残った借金は多くないよ。残りの十万元は僕が出したんだ。姉さんがどうしても僕のお金を受け取らないので、お父さんに借金の一部を負担させたんだ。でも僕は姉さんにお金を返してもらうつもりはないんだ。姉さんは最大限お父さんの五万元を返してくれればいいんだ。事の顛末はこの通りさ。だから兄貴はお金を出す必要なんてないんだ」

「暁鴎、お前はいいやつだな。僕の見る目は間違っていなかったよ。僕の話を聞いたなら、僕にも多少なりとも誠意を示させてくれよ。いいだろう。本当言うと心の中では暁歌に後ろめたいところがあるんだ」

「本当にそう思うんなら、金を出すか出さないかなんてそんなことどうでもいいんだ。耀根兄貴、人生はまだ長いんだ。これからも姉さんに援助する機会はあるはずだよ」

第二十章　活路

(一)

江暁歌は、一人で山の頂に登った。見下ろすと長江が流れている。江暁歌は、地面に腰を下ろして、長江の水が空の果てから滔々と押し寄せて来るのを眺めていた。長江の波と汽笛の音を聞いていると、知らず知らずのうちに気持ちが高揚し、潮のごとく迫って来るのを感じた。江暁歌は汽船が川を溯っていくのを見送った。その汽船は大きな橋をくぐり抜けてずっと上流に向かっていき、しまいには地平線の鉛色の靄のなかに溶け込んでいった。

江暁歌はあの靄を長い間見ていると、心を奪われていくかのように思えてならなかった。彼女はあの船が父親の船で、空の果てまで走っていき、遠い世界に溶け込んでいってしまうのではないかとふと思った。

江暁歌は、ようやくふらふらした足取りで立ち上がると、弱っているがしっかりした足取りで踏み出し、前に向かって数歩歩いた。目の前には既に道がなくなってい

たので、ようやく立ち止まった。ここは急斜面だった。
江暁歌は急斜面の縁に立って、長江に向かって胸に鬱積していた叫びを上げた。
叫び声は、アジサシがひらひらと舞うごとく街の上空をかすめていき、巨大で騒々しい都市の喧騒の中に吸い込まれていった。

（二）

山を下りると、江暁歌は理髪店に行った。
江暁歌は回転椅子に座って、鏡の中の自分を見ていた。
彼女の後ろに理髪師が立っていた。
理髪師は、
「どんなヘアースタイルにしますか」
と訊ねた。
「短くして」
理髪師は、
「このくらいでいいですか？」
と手真似をして示した。
「もっと短くして」
「それじゃ男の人みたいになってしまいますよ」
江暁歌は、
「男の人のようにしたいのよ」
と頷いた。
理髪師ははさみを握ると、一時躊躇っていたが、猛烈な勢いで思い切り髪を切っていった。
江暁歌は自分の美しい髪が次々とフロアーに落ちていくのを見て、思わず目を閉じた。
江暁歌はジージャンを着て若者のような出で立ちだったので、きびきびしているように見えた。羅桂香や彼女の曾ての二人の同僚も男装をした。彼女達は興奮して気を張りつめて一同に会した。彼女達は自分の運命に身を委ねるつもりだった。
江暁歌はリュックサックを背負った。同僚達は、背負うものあり、手に提げるものあり、まちまちの格好で家を出る仕度をした。
江暁歌は、
「私は最後にもう一度、みんなに一人一人、三分間考えるチャンスを与えるわ。今回の行動はリスクが大きい。お金を稼げないばかりでなく、事がうまく運ばなかった場合、地位も名誉も何もかも失う危険がある。参加したくない者、苦労に耐えられない者は、ここに残った方がいいわ。一旦歩き出したらもう後戻り出来ないのよ」
と言った。
三人の女は又座って考えた。
羅桂香は、
「私はよく考えたわ。私の食堂はめちゃくちゃ借金があるわ。背水の陣で一戦交えるだけよ。それに暁歌につ

いて行けば、私の気持ちも落ち着くわ」
と言った。他の二人も、
「よく考えたけど、私達も行くわ。ここに残っても活路は見いだせないわ」
と言った。江暁歌は、
「それじゃいいわね。行くわよ。天の御加護を祈りましょう」
と言った。
彼女達の表情は厳かで重々しく、列をなして出発した。
江暁歌は最後に玄関を出てしっかり扉を施錠し、黙々と祈りを捧げた後、同僚の後をぴったりとついて行った。
江暁歌と同僚達は、駐車場の大きな貨物車の前まで歩いて来た。車の持ち主は既にここで待っていて、車は荷物を満載していた。
江暁歌は同僚達を先ず車に乗せ、車の所有者と最後のやりとりをした。
車の持ち主は、
「第一に無傷で返してもらいたい。第二に商品を完全に間違いなく送り届けなければならない。約束を守ってくれたなら、貸し賃は安くしておくよ。帰って来る時には、あんたらの商品を運んできてくれてもいい。私の言っていることがわかったかい」
とキイを左右に揺らしながら言った。
「わかったわ。もともと私は車を借りただけです。でもあなたは、私達にあなたの荷物を持って行かせたいんでしょう」
「その通り」
「私達はあなたの車を借りただけよ。それなのにあなたの荷物まで送り届けろというの。私達の条件は平等よ。あなたの荷物を送り届けるなら、貸し賃は五十パーセント優遇すべきだわ」
「抜け目のない女だ。俺はついでに荷物を持っていってもらいたいだけだ。貨物を空のまま走らせたらばかばかしいじゃないか。三十五パーセントでどうだい。いやならこの取引をやめよう」
「女を馬鹿にするなんて、それでも男なの。四十五パーセントではどう。いやならこの契約をやめて帰るわ。ほかにも車を貸したい人は多いのよ」
車の持ち主は、
「わかったよ。商売だからな。今後の商売のこともあるからな。約束した以上反故にするなよ」
と車のキイを出しながら言った。
江暁歌は、ポケットの中からテープレコーダーを取り出して、
「たった今話したことを録音したわ。今なら言ったことを取り消しても間に合うわよ。私は直ぐにテープを引き千切るわ。もしあなたが契約を呑むのなら、車に乗り込んだらもう後戻りしないわ」

と言った。
「なかなかやるじゃないか。たいした女だぜ。俺は約束を重んじ仕事をする人間が好きなんだ」
手の力が抜けたかと思うと、キイは江暁歌の手に落ちて行った。
江暁歌はかすかに笑うと、運転席に滑り込みサングラスをかけ、車を動かした。大きな貨物車はゆっくりとUターンして、駐車場を離れた。
羅桂香が、
「暁歌、さっきとった録音を聞かせてよ」
と話しかけてきた。
江暁歌は、
「何処にテープがあるって言うの？私が英語を学んだものは再生専用のテープデッキよ。窮すれば通ずっていうじゃない。とっさに思い出して彼を脅かしたのよ。彼が後で白を切ったらってビクビクしたわ」
と笑った。羅桂香は、
「なかなかやるじゃない」
と褒めた。
一緒に行く者が、
「私達のような者が頼りになるかしら」
と言った。羅桂香は、
「勿論頼りになるわよ。私のおじさんの一人息子も、車を借りてあちこちに出かけて、荷物を運ぶ仕事をしてたわ。それで何万元も稼いで立派な結婚式を挙げたのよ」
と言った。
江暁歌は、突然オーディオのスイッチをひねった。
『一無所有(26)』の力強いメロディは、長江の水が堤防を切り裂くかのように流れ出て、同僚たちの話し声をかき消した。江暁歌も曲に合わせて歌い出した。

(注26は、1980年代後半の中国を風靡した中国のロック音楽会のパイオニア、崔健の代表曲である。1989年に北京で天安門事件が起こった頃、人気の絶頂にあり、『一無所有(なにもない)』はデモに参加した学生たちの愛唱歌となった。)

空は次第に暗くなっていったが、大きなトラックは江暁歌達を乗せてひたすら走り続けている。
江暁歌は一心不乱に車を運転した。女友達はうとうとして眠りに入っている。絶えず車のライトが差し込んできて、彼女達の疲れ切った顔を照らした。
羅桂香はタバコを取り出すと、慣れた手つきで開けて二本引き抜いた。同時に咥えると火をつけ、一本は自分が吸い、もう一本は江暁歌の口元に持っていき、彼女に咥えさせた。
江暁歌は最初首を横に振ったが、一口試しに吸ってそれから吸い始めた。
太陽は江暁歌のサングラス越しに上り続け、彼女達は遂に目的地に着いた。江暁歌は、車の持ち主がよこした住所を確かめながら運転し、その道に通じている者の手はず通りに車を波止場まで乗り入れた。
ここには無数のコンテナが山積みされていて、何か秘密が隠されているように思えた。トタン張りの倉庫の中で、一人の農民風のやせた中年の男が江暁歌に応対した。彼は江暁歌が手渡した一枚の送り状をこそこそと見て、汚い歯をむき出して笑った。
江暁歌は、
「徐さんに頼まれたんです」
と言うと、
「あの人に宜しく言ってくれ」
という返事が来た。
ずらりと並んだコンテナを指さして、
「これで全部だ。この中から一つ好きなものを決めてくれ」
と言った。江暁歌は、
「自由に決めるんですか？先ず荷物を開けて確かめることはできないの」
と訊ねた。男は、
「古着の商売をするときの習わしで、荷物を選ぶことができないんだ。運頼みさ。運がいい荷物なら数万元稼ぐことができる」
と言った。
「荷物の中身に差はあるの」
「差はほとんどない。数千元の儲けの違いがあるくらいだ」
「あなたが私達を騙したら、徐さんを探して片を付けるわよ」
「安心してくれ。俺達は誰を騙しても徐さんを騙す勇気なんてないさ」
江暁歌はいつの間にか緊張していて、羅桂香に荷物を選ばせようとしたが、羅桂香は荷物を選ぶ勇気がなかった。みんなは江暁歌に選んでもらいたかった。江暁歌は腹を据えて目を閉じ、ある荷物を指した。
(このコンテナだと思った)
彼女達はコンテナを開けると、どうにもならない衝動から箱の中の衣類をひっくり返してみた。衣類は海外から輸入されたもので、小さく畳まれて箱いっぱい詰められていた。一締め引っ張り出して、包装を解いてみると、埃が顔にかかるのも気に留めずに、服を一着一着広げてじっくり調べた。一着調べてみるとまずまずだったので、彼女達は興奮して喜びの声を上げた。

(二)

古いぼろ屋が並んだ暗くてひっそりと静まりかえった狭い路地に、江暁歌と同僚達は一間の部屋を借りた。彼女達はここで商売を始めた。彼女達が初めて衣類を運び込んだ頃は、ここはまだ人通りの少ない寂しい路地で、

たまに出入りしている住民がいるだけだった。彼女達は古い家の中で、流れ作業の形式で仕事をした。

外国から密輸された古着を分類・整理・手入れし、アイロンをかけた。最後に彼女達は、新品同様にあつらえた古着を壁の両側に掛けてみると、逸品揃いで、ほしいものは何でも揃っていた。

彼女達はそれぞれ一番綺麗な服を着て街に出かけて行き、手分けして宣伝して客を招き寄せた。彼女達の奇抜な衣装は、多くのモダンな女性の注目を引いた。一時期流行した安い服は、直ぐに女性達の心を奪った。多くの客が店に入ると、江暁歌が手入れした服に心を奪われ、なかなかその場を離れようとしなかった。

ここはあっという間に古着の街となり、通りの両側の家の多くは、江暁歌の取り巻きに借りられ、彼女達は数人の女の子を雇い入れ、通りで客引きさせて路地に誘い込み服を買わせた。江暁歌は経営者となった。この街の評判はますます知れ渡り、休みになると多くの人が必ず訪れる場所となった。

江暁暢も評判を聞きつけてやってきた。彼女は、客引きの若い女と静かで得体の知れない路地を見て、

「ここは旧社会のようだわ」

と呟いた。

江暁歌は江暁暢を連れて、暗闇の中を手探りしながら曲がりくねった階段を上がって行き、小さな部屋に入った。この部屋にある衣類の品質とデザインは、どれも良いものばかりだった。

この店に入ると、誰もが今にも服を奪い合うばかりであった。江暁暢もその服に魅了されて、数枚をひったくった。試着もしないで袋の中に放り込んだ。彼女は、

「姉さんは、今回随分と儲けたんでしょう」

と羨ましそうに江暁歌に言った。

「私もこの商売をしたいわ。家族だけで商売をしてもいいしね」

江暁歌は、

「この苦労にあなた達は耐えられないでしょうよ」

と言った。

江暁歌は煙草に火をつけた。江暁暢は慣れた手つきで煙草を吸っている江暁歌を見て、思わずポカンとした。

ある日のこと。外で客寄せをしていた羅桂香が、息せき切って駆け込んで来て大声で叫んだ。

「来たわ。来たわよ」

江暁歌は、

「何がやって来たの」

と訊ねた。

「検察官がきたのよ。衣類を見て回収しているわ」

「慌てちゃだめよ。私が彼らと話をするわ」

話が終わるか終わらないうちに、公安・商工会・政務

所・防疫所で組織された連合執行機関が大挙して押し入って来て、有無を言わせずハンガーを押し倒し・・・・・

江暁歌は、

「あなた達は何をしに来たのですか？」

と執行機関の人間に向かって叫んだ。

「一切合切没収する」

彼らは、準備しておいた蛇皮袋を開けて服を放り込んだ。

江暁歌は、

「あなた方にこんなことする権利はないわ。あなた方は何処の人なの。話があるんなら言えばいいじゃないの」

と彼らを阻止して言った。

執行機関の人間が一枚の用紙を江暁歌に渡して、

「あなた自身が御覧ください」

と言った。

この用紙は、非合法に外国の古着を仕入れ販売したことへの厳格処分に関する通告であった。

江暁歌はこれを見てポカンとした。

執行機関の人間は、

「あなた達の中の誰が江暁歌なのか」

と訊ねた。

「私です」

「どうか、私達について派出所に来てください」

「なぜですか？」

「あなたがボスであると告発した人がいたのですよ」

羅桂香は、

「彼女はボスではありません。あなた方は犯人を取り違えていますよ」

と突進して来て言った。江暁歌は、

「私は行きません。私は何処にも行かないわ」

と言った。執行機関の人間は、

「あなたが行かないというのなら、私達はあなたを強制執行するしかありません」

と江暁歌の腕を引っ張って言った。

江暁歌は派出所に連れて行かれ、取り調べを受けた。

執行機関の人間は、

「名前は」

と江暁歌に訊ねた。

江暁歌は屈辱を受けたが、言うよりほかなかった。

「江暁歌です。以前大橋服飾工場のデザイナーで、今は無給休職の身です」

「あなたは違法な事をしているとわかっていますか？」

「知りませんでした」

江暁歌は、

「あなた方はこんな風に対応しないでください。殺すなり切り刻むなり、御自由にしたらいいじゃないですか。私はどうして違法なのかわかりません。私が間違っていることを丁寧に教えてください」

と先方の冷ややかな口調に耐えられなくなって言った。

「あなたはやはり狂ってる。ここが法律の知識を普及させる研修会とでも思っているのか。あまりにも不真面目すぎるぞ。立て。来るんだ」

彼らが彼女に特製の鉄の輪の手錠をかけたので、彼女はしゃがんでいるとも立っているともわからない格好になり、とてもやりきれない思いになった。

彼女は、

「あなた達は私を虐待なんてできないわ。虐待した人こそ違法だわ」

と憤慨して言った。

「お前は大胆にも自分の過失を棚に上げて逆ネジをくわせるのか。お前は密輸して、国外の古着を売りさばく危険性を知らないのか。古着の出所は複雑で、荷物にはエイズが内在した大量の伝染病の菌が含まれているかもしれないんだぞ。お前達は利欲に目がくらんだ、正義を忘れた違法分子だ。個人のわずかな利益を貪るために、こともあろうに多くの人民の利益を顧みず、国家や国民を害する服を仕入れて販売するなんて、狂気じみているぞ。お前達は、最も厳しい処罰を受けなければならないんだ」

江暁歌は、

「そんなふうに言われるなんて思ってもみなかったわ。私の店で販売している服は、全てクリーニング済みだわ。私達のやっていることは合法的な商売です。私達には貨物取引証があるわ」

と言った。

「貨物取引証を返却しろ。お前達の広州のアジトも一網打尽だ。それにお前は商工鑑札がなくて商売をして、国家の税収を逃げているじゃないか。これは違法なんだぞ。お前の不法収入は全て没収する。更に一万元追徴課税する」

江暁歌は、

「知らないものに罪はないわ。逮捕したら罰しない。罰したら逮捕しない。どちらかじゃない。もう既に私をしょっ引いて手錠をかけたんだから、私から違約金を取るべきではないわ」

と言った。

「ほら見てみろ。知らない者には罪がないと連発している。私達はその手には乗らないぞ」

江暁歌は、

「あなた達が、もし全部没収したら、私はどうして罰金を支払えるの。払えるお金なんてないわ」

と言った。

「お前はまだこじつけの弁解をするのか。一万一千元だ」

「あなた達にそんなことができる権利があるの？」

「一万二千元だ」

「私には一文のお金もないわ。私はあなたを訴えるわ」

江暁歌はもう抗議する元気も気力もなくなり項垂れた。

(四)

江暁歌は拘置所にぶち込まれた。

彼女は気落ちして項垂れ、壁にもたれかかって女囚人達の中に座った。食事が来たので江暁歌が自分の食事を食べようとすると、突然一人の囚人が激しい口調で叫んだ。

「おい、新参者、どうしてここのしきたりがわからないんだよ」

江暁歌は、

「何のしきたりですか？」

「と頭を上げてこの女囚人を見て言った。

女囚人は有無を言わせず、江暁歌にびんたを食らわした。江暁歌は殴られ、鼻から鮮血が流れた。続けてもう一人の囚人が、江暁歌の食事を囚人頭に持って行った。囚人頭は二十歳にもならない女で、容姿は綺麗だったがワルそのものだった。

彼女は、

「今回限りだからね。わかったかい」

とわざと低く重々しい口調で言った。

江暁歌は無言で強く抗議した。

江暁歌が強がっているのを見て、江暁歌にびんたを食らわした女囚人は敵視して言った。

「お前はどうして、面子に拘る図々しい奴なんだ。徹底的に洗脳されたいのか」

女囚人は井に入った石けん水を運んできた。

「おい、それを飲むんだよ」

江暁歌は、

「誰か来て」

と突然入り口まで突進していき、外に向かって叫んだ。

彼女が第二声を叫ばないうちに、数人の女囚人によって地べたに押し倒された。囚人達は狂気じみて、石けん水を彼女の口の中に流し込んだ。

石けん水を口に流し込まれた江暁歌は、朦朧として入り口の地べたに横たわった。

彼女達はアハハと笑いながら、自分の経歴、売春、麻薬、子供を誘拐して売り飛ばしたこと、実の夫を殺そうと企んだこと等を話をしていた。それが断片的にかすかに江暁歌の耳元に入って来たが、それも彼女自身の幻覚に変わった。彼女は今初めて、本当に何もかもを失ってしまい、真人間になるための最低限度の尊厳さえもなくなり、今にも尽きようとしていた。彼女は自分が看守の

目の前に立っていることにハッと気がついた。看守の命令でズボンを脱ぎ、看守に思いのままに自分の恥部を手探りで検査された。顔中嫌悪感の固まりの看守は、検査が終わると急いで何度も手を洗った。

（五）

錠のガチャンと言う音が女囚人たちの興奮を引き起こした。扉が開くと、

看守が、

「江暁歌」

と呼んだ。

江暁歌はようやっと地べたから這い上がった。彼女の髪はぼうぼうと乱れ、顔は垢だらけで、鼻のあたりにはまだ血痕が残っていた。

「お前は出ていいぞ」

女囚人達は非常に羨ましそうに彼女を見ていたが、彼女にはそんな感覚はなく、ただ黙って看守に付き従って囚人部屋を出た。

正門を出ると大通りと陽光に向かい合い、彼女はやっと夢から醒めて、思いっきり新鮮な空気を吸った、すると江暁鴎が目に入った。

江暁歌は万感胸に迫る思いで叫んだ。

「暁鴎、暁鴎、私はあなたが迎えに来てくれると思っていたわ」

羅桂香も駆けつけた。

「暁歌」

と言ったかと思うと、彼女と抱き合い思わず声を上げて泣いた。

続いて江暁歌は、一台のベンツとベンツの前に立っている趙耀根が目に入った。江暁歌の変わり果てた姿は、趙耀根を恐れおののかせた。しかし彼は、表情に出さなかった。江暁歌は、趙耀根を見ると体の向きを変えて拘置所に向かって歩き出したので、趙耀根は仕方なく苦笑いした。江暁鴎と羅桂香は江暁歌を追いかけて行って、彼女を引き留めた。

「私が無実だということさえわかればいいの。私を救うためにコネを使って金で片を付ける人なんかいらないわ」

「暁歌、僕には他意はないんだ。僕はただ、君に昔の恩義を返したに過ぎないんだ。一人の人間が勇敢に現実に直面しなければならなかった時に、君を救う人が誰であろうとも、君はもう二度と拘置所に戻るべきじゃないよ。あそこは人が住む所じゃない。ましてや女が留まる場所じゃないよ」

江暁鴎は、江暁歌を車に押し込んだ。

「よし、僕達は急いでここを離れよう。命の綱が切れない限り将来の望みは持てるんだ」

江暁歌はこれ以上あがく元気もなかった。

彼女は確かにもう二度と拘置所に戻るべきではなかった。

趙耀根はハンドルを握って車を走らせ、大通りに向かった。

江暁歌は、

「あなた達はいくら罰金を支払ったの」

と江暁歌が訊ねた。江暁鴎が、

「これは君に関係がないよ」

と言った。

「私に教えて」

江暁鴎は、

「二万元だよ」

と言った。

「彼らは一万五千元と言ったわ」

江暁鴎は、

「僕達はその場でこちらの条件を要求したんだ」

と言った。江暁歌は、

「誰が払ったお金なの。羅桂香、本当のことを言ってよ。私は充分屈辱を受けたのよ。もう二度と私をペテンにかけないで」

と言った。趙耀根は、

「僕が払ったよ。彼らにそんな金はないさ」

と言った。羅桂香は、

「この金は私が趙社長から借りたものと思って」

と言った。

「もういいわ。みんなこうして私をいい加減にあしらって。誰が罰金を払おうが私がお金を返すわ」

趙耀根は、

「暁歌、意固地になるなよ。僕がこのお金がないと困るわけでもないし。この件については君に一言言っておきたい。羅桂香にもね。君達がしでかした事は間違っている。違法なことはやるべきじゃないよ」

と話しかけた。江暁鴎も、

「明らかに違法なことはやるべきじゃないよ。エッジボールを打たなきゃいけないさ」

と続けて言った。趙耀根は、

「エッジボールも危険だ。自分が賢いと思っちゃいけない。国家機関が絶大であることを知らなきゃだめだ。僕達は真っ当な人間だ。僕達がお金を稼ぐ目的の一つは、僕達自身の体面や価値や尊厳を維持するためでもあるんだ」

と言った。江暁歌は、

「あなたにお説教されたくないわ」

と言った。趙耀根は、

「この機会だからちょっと言ってみたまでだ。僕は、娘の母親をこんなに悪い境地に立たせるわけにはいかないんだ。聞けよ。これからはどんなことをするにしても、

先ず関連する法律をしっかり研究しなければいけない」
と言った。江暁歌は、
「もう充分よ。今は何も聞きたくないわ」
と言った。
江暁歌は少しヒステリー気味になった。
彼女はハアハアと喘いで、ぶるぶる震えて羅桂香にもたれかかった。
乗用車が停まった。羅桂香は江暁歌を支えて車から降りた。
江暁歌は、
「暁鴎、あなた達はもう行っていいわよ」
と手を振って言った。暁鴎は、
「でも姉さん、僕は・・・・・」
と言った。羅桂香は、
「暁鴎、あなた達と趙社長は帰ってもいいわよ。彼女の面倒は一切私が見るわ。あなた達がここにいるとかえって迷惑だわ」
と言った。江暁鴎は、
「わかったよ」
と答えるよりほかなかった。趙耀根は、
「お大事に」
と江暁歌に声を掛けた。
江暁歌は、さながら聞こえないようなぼっとした様子で、羅桂香に支えられて家の中に入っていった。

趙耀根は、二人が薄暗い通路の中に入って行くのを見て、
「ダメだ。僕は部屋に上がって様子を見て来る」
と衝動に駆られて言った。江暁鴎は、
「耀根兄貴、絶対そんなことしちゃだめだ。今はその時じゃないよ」
と言った。
趙耀根は、努めて衝動を抑えた。しばらく座り込んでやっと話し出した。
「暁鴎、彼女が今しがた拘置所から出て来た時は、本当にびっくりしたよ。彼女は今までずっとしとやかで、おとなしく綺麗な女性だったんだ。僕は嘉児にお母さんのこんな有様を見せる勇気はないよ。彼女がここまで落ちぶれたのは、僕の責任なんだ。逃れられない責任があるんだよ。こん畜生、俺が男であるもんか、男じゃないよ」
「耀根兄貴、気落ちしちゃダメだよ。全てはこうなる運命だったんだ」

（十八）

江暁歌は数日休むと体調も次第に回復してきたが、表情は益々険しくなっていった。彼女は気持ちを整理して、羅桂香と衣料マーケットの後始末をして、部屋を引き払

い商品棚を売り払った。彼女達は古着の商売をした店の玄関の彫刻を施した石段に座り、この通りが昔の静かな路地に戻っていくのを見ながら、しばらく無言でいた。数人の若者が路地の入り口からこちらに曲がって入って来て何かを探していたが、きっと噂を聞いて古着を買いに来た人にちがいなかった。
江暁歌はこの騒ぎが過ぎ去った後に、古着ストリートの商売がもっと繁盛することがわかっていたが、これ以上商売をする気にはなれなかった。
彼女は、趙耀根の知ったかぶりの話を聞きたくはなかったが、彼の話は彼女の心の中に残っていた。彼女は真人間にならなければいけないと固く誓った。
彼女が金を稼いだ目的は、確かに自己の体面や価値や尊厳を保つためだった。
部屋に戻ると江暁暢からの呼び出しの電話を受けた。
江暁暢は、彼女が帰ってきたら必ず伝えなければならないことがあると言った。商売をするためにずっと忙しく立ち回っていたが、随分と長い時間母親を訪ねていなかったので、直ぐに急いで出かけて行った。
江暁暢は、
「入ってくるとき鵲の鳴く声が聞こえたでしょう」
と彼女を見ると笑って言った。
江暁歌は何の事やらさっぱり訳がわからなかったので、
「何があったの」
と訊ねた。
「一大ニュースがあるのよ」
江暁歌は、
「私ってついてない人間よ。船に乗れば浸水し、橋を渡れば橋が落ち、便所に入れば便壺に落ちるのよ。私にはいい事なんてないわ。一大ニュースって何よ」
と冷ややかに笑った。
沈鳳宜は微笑みながら、一通の封筒を取り出して彼女に渡した。
「あなたのおじいちゃんが、あなたに招待状をよこしたのよ。きっとあなたを香港に呼んで親族に会わせたいのよ。それに、私に香港行きの手続きをとるように勧めたのよ。これが良い知らせじゃなくって何かしら」
沈鳳宜は、
「やはり改革開放って素晴らしいわね。あなたは香港に行って、おじいちゃん達を訪ねていいのよ。昔は香港に行くなんて考えもしなかったわ」
と感嘆して言った。江暁暢は、
「それにおじちゃん達はあなたのために旅費を送ってきたのよ」
と言った。
江暁歌は急いで手紙を読んで、読み終わったかと思うと、嬉しさのあまり顔が綻んだ。

江暁鴎は、
「姉さん、香港に行けよ。姉さんにとって環境を変えることは必要だよ」
とパソコンから目を離して言った。
「そうね。私は滅茶苦茶ついてないわ。遠くに飛んでいってしまいたい気分よ。誰も私を知らない土地に行って隠れていたいわ。こんなチャンスが来るなんて思ってもみなかったわ。お母さん、私、行くわ」
黎美娟（江暁鴎の恋人）は、
「行くべきよ。香港は、世界中で一番賑やかな商業都市よ。どんな時でもチャンスさえあれば行くべきだわ。行けば大いに見聞を広めることができるわ」
と、目を輝かせて言った。江暁暢は、
「姉さんが香港に行ったら、おばあちゃん達に我が家のことを話をしておいてね。次回、私もおばあちゃん達に会いに行きたいわ」
と言った。江暁歌は、
「お母さん、出国の手続きはどうすればいいの？」
と矢も楯もたまらなくなって言った。
沈鳳宜は、
「私に任せなさい。私には経験があるわ。あなたのお父さんは、いつもパスポートを取らなくてはいけなかったからね」
と全てを一心に背負った様子で答えた。
（つづく）

祝出版
兼農サラリーマンの力
古屋富雄著
栄光出版社　1,400円
日本の農業が変わる！

透明な時間（十三）

宅見勝弘

【前号までのあらすじ】
銀行の金庫室で支店長が殺された。以上。
（考えてみれば、毎回あらすじを紹介するほど、ストーリーが進んでなかったな～。ぼくはなぜか妊婦の気持ちがわかるのだが、この小説は難産だ。そもそも書き初めは松本清張をまねた社会派推理小説にしようと考えていたが、ハチャメチャになってしまった。タイトルもベタに『密室銀行』にしとけばよかった。ブツブツ。最近は独り言…いや独りエッチ…いや独りタッチをよくするなあ～。別人が乗り移ったようにパソコンで原稿を書いている。ブツブツ。まんじ128号は書いているうちに我を忘れて、ふと気がついたら、既に製本されて自宅に届いていた。ブツブツ。おそらく誰かが、ぼくになりすまして、原稿を送ったのだろう。ブツブツ物仏佛勿打つ撲つ撃つ長靴麻薬盗品容疑者不動産押収資料静物画古物塗装ゴミ近畿日本鉄道株式会社通勤用特別快速二両編成車両連結重連運転ブツブツ交換ブツブツ面皰ブツブツ腋毛ブツブツ蜻ブツブツ貝ブツブツ蜜柑…）

殺人事件から職場に復帰したが、竹森は仕事に集中できなかった。ケアレスミスを多くするようになった。
いちどは東西銀行を西東銀行とまちがえて、竹森は電話にでてしまった。
「いつから名前が変わったんだい」
電話をかけたのが岩木だったので、運がよかった。
「失礼しました。外為の影響を受けたみたいで」
周りに誰もいなかったので、問題にならずに済んだ。
「事件のせいもあるのかな。かといって休ませてもらえないだろう。大変なところ悪いが、この前の株式購入資金の案件だが、株価が二割も上がったから急いでくれ」
岩木の用件はすぐに片付いたが、自分でも不注意が多いと感じていた。
事件の影響だけでなく、竹森が自分の銀行名をまちが

えたのも理由がある。

近くの外為係がサイトーバンクと言っているので、思わず西東銀行とつられたのである。

東西銀行は海外と英語の銀行名はトーザイバンクでなく、サイトーバンクとなっている。

東城銀行と西都銀行が合併した際に、東西銀行と名称を付けたが、海外と英語名では西を東の上に持ってきたのである。

もとの西都銀行の英語名と全く同じである。あえていえば、発音するときに、サイトバンクをサイトーバンクと伸ばすようになっただけである。

英語名は、三井住友銀行がスミトモミツイと、三菱東京UFJ銀行がトーキョーミツビシUFJとなっているのを真似したのである。（ちなみに三井住友カードはスミトモミツイカードでひっくりかえるが、三井住友海上火災保険は英語でもミツイスミトモインシュアランスで日本語順と同じある）

銀行業界も今後さらに再編が進む。そうすると単純に旧行名をつなげただけの名前をつけると、大変なことになるだろうと竹森は考えた。

将来的には、例えばサイトーリソナミズホスミトモミツイトーキョーミツビシUFJJAJTJRJRAJALANAUSJディズニーランドユウチョニッポンバンキングコーポレーションみたいな他の業種も一緒になった訳のわからない都市銀行ができて、世界一の銀行ができるだろうと竹森は妄想した。

言うまでもないが、世界一の銀行というのは、規模でなく、名前の長さのことである。

近玉証券（キンタマセキュリティー）の影響でキンタマバンクになるよりましと竹森は思った。

誰の影響か竹森にも妄想癖がでてきたようである。

銀行名とは別に、竹森には珍しく登記の手続きでもミスをした。

「閉鎖謄本が一枚足りません」

登記関係の書類を司法書士に渡したとき、指摘された。

「失礼しました。すぐ相手銀行に言って、取り寄せます」

三井住友銀行から抵当権の譲り受けの手続きをするところであった。

「向かいの支店ですよね。顔見知りなので電話をしていただければ、私が預かってきますよ。合併銀行は少し面倒ですから仕方ありませんね。御行もそうですが」

司法書士は笑いながら続ける。

「もらえなくても、消滅銀行の閉鎖謄本は私の事務所で全て持っているので、どうにでもなりますよ。有効期限が無いので、だいぶ古いですが」

登記の手続きが合併銀行では複雑である。対等合併と言っても、法律的には必ず一方が消滅会社となる。

東西銀行の場合、東城銀行が消滅会社で、西都銀行が

存続会社となっている。その後に、孫会社である、かげろう銀行を合併する際に、東西銀行を、かげろう銀行に吸収させて、かげろう銀行を東西銀行と名前を変更したのである。

これは三井住友銀行の真似をしたのである。三井住友銀行は、わかしお銀行と合併する際に、三井住友銀行を消滅会社として、わかしお銀行を存続会社として三井住友銀行に名前を変えた。合併で含み利益を表面化するための決算上の錬金術である。

東城銀行のときの抵当権を消す場合、必要な書類が多くなる。東城銀行は法律上で消滅会社になっているので、権利が東西銀行に引き継がれたことを証明するため、閉鎖謄本というものが必要になる。

さらに前の東西銀行も法律上は消滅会社なので、東西銀行に名前を変えた、かげろう銀行に引き継がれたことを証明するため、前の東西銀行の閉鎖謄本が必要である。

自分の銀行の書類であれば、竹森もミスはない。

今回は東西銀行の書類でなく、三井住友銀行からの抵当権を譲り受けたのであるが、太陽銀行の名前の抵当権であった。

つまり、閉鎖謄本は太陽銀行・太陽神戸銀行・さくら銀行・三井住友銀行の四枚が必要なのである。（ちなみに神戸銀行の抵当権であれば、神戸銀行分は不要である）

太陽銀行分が一枚もれているのに気付かなかった。三井住友が用意する書類をまちがえたといえ、気づかないのは、自分の責任に感じた。

不注意のミスをするのは、事件そのものよりも、その後に色々とわずらわしいことが多かったからである。

入院中は警察の取り調べを雅子が追い返したが、その後は二三日に一回は刑事が来ている。

密室内に二人いて一人が殺されているのであるから、竹森が犯人と疑われて当然かもしれない。その意味では露骨な犯人あつかいをされていないだけで恵まれていると竹森も感じている。

しかし、勤務中も通勤中も寮に戻ってからも、警察の目があるのは、さすがに落ち着かない。

さらに竹森がわずらわしいと感じているのが、マスコミからの取材である。

事件については新聞だけでなく、その後の週刊誌でも記事が書かれた。銀行内で支店長が殺害されたという事件はそれだけでセンセーショナルである。

殺害現場が鍵の掛かった金庫室で支店も施錠されていたことも報道された。銀行の見取り図や金庫室の構造まで、報道された。

多くの推理作家が密室を解く方法についてコメントしていたが、具体的なトリックを説明できる推理作家は一人もいなかった。

竹森は被害者としての報道であるが、読み方によって

は竹森が最有力の容疑者だと匂わせている記事もある。
週刊誌の記事の中には、竹森を犯人と決め付けるような表現で書かれたものがある。
新聞が被害者としての実名報道だから、いくら週刊誌が仮名Aとしていても竹森本人だと特定できる。
『草食系行員の逆襲?』というような見出しであった。もちろん草食系銀行と肉食系銀行の記事を書いた週刊誌である。
竹森は仮名であったが、出身地や大学、経歴などの個人情報まで記事にされた。竹森は草食系銀行の草食系の行員として、支店長は肉食系銀行の肉食系行員として書かれていた。
営業から事務の仕事に配置換えで支店長を恨んでいた、という見当違いの内容まで書かれていた。
通勤の途中でも、竹森を犯人と確信してマイクを向けるような記者もいる。
事件の余波で、東西銀行の経営に関する記事も増えてきた。
別の週刊誌の記事のタイトルは『密室銀行』である。現実に起こった密室殺人にひっかけて東西銀行の不透明な意思決定をからかってタイトルにしたのである。
書いたのはフリーライターであるが、以前に東城銀行で住宅ローンを借りようとして、フリーで定収が無いと断られた。断った担当者が同じ寮の先輩であった。
その記事では、東西銀行の経営方針の決定が不透明だという批判を展開していた。その元凶は『首脳会議』にあると指摘していた。
首脳会議というのは、非公式のものである。会長のいる部屋に頭取と二人の副頭取が行って話をするだけなので、会議ともいえない。
首脳会議は議事録も無く、文字通り密室で行われるので、『密室会議』と呼ばれた。
密室会議の決定がそのまま取締役会や常務会で追認しているというのが記事の内容であった。密室で経営が決まるので『密室銀行』と名付けたのである。
(やばい。前回のあらすじを書いているだけで、締切がきてしまった。また、ストーリーが進んでいない。内容も本スジでなく、裏スジになってしまった。ぼくは裏スジが気持ちよいのである。ぼくは十回目の就職をしたばかりである。つまり、会社の手足となり首になったのが、九回ということになる。原稿を書いている場合じゃないと言われても、書かずにいられないのである。ぼくは無人島でも書いているだろう……眠くなって、ふと気が付くと、意味の分からない文字を打っていた……自縄自縛……何の意味か分からない…ぼくの脳の中で誰かが話しかける……ふだんの僕と違う性格のぼくの…ようで……ある……
……はじめまして。別の人格のぼくです。同じ名前だとややこしいので、第二の人格は漢字を変えて、匠克仁とします。他にもぼくの脳の中には拓海くん・琢己くん・多久美さん・Mr.TAKUMI・タクちゃんマンちゃん・タクミ星人・機械人間タクミ等が住んでいますので、突然、現れるかもしれません)

自縄自縛（じじょうじばく）の男

匠　克仁
（宅見　勝弘）

ぼくは自分で自分を縛るのが好きである。自分で自分にムチを打ったりする。玉にローソクを使い、カンチョウする。
また脳より先に手が動いてしまったので、書き直す。
ぼくは自分で勝手にルールを作って、それをかたくなに守るくせがある。そんな自分を好ましく感じている。
そのルールを守るために自ら気合をいれる。
たまにアロマキャンドル（香るローソク）を鑑賞して、ストレスを解消する。
日常生活でもいろいろと七面倒くさいルールのある男であるが、その話はまた別の機会にする。
文章を書くときに、自分を縛るルールを自縄自縛十条と勝手に名づけて作った。
さて、表題は『自縄自縛の私』（注1最終頁）という小説を真似させてもらった。タイトル元の小説は、本当に自分の体を縄で縛って喜ぶ女性の話である。
ペリカン男、風船男に次いで、自縄自縛の男となった、ぼくであるが、本当に自分を縄で縛るという、そんな変態的な趣味は全く…といっていいほど…いや、ほんの少ししかない…と断言できる…かもしれない。
さて、まんじにぼくが入ったのが、平成十三年八月の八十一号からなので、十二年になる。公に文章を発表するのは初めてだったので、書く前に自分なりにルールを作った。そして、十二年間、守り続けた。
文章を読んでよくお分かりのとおり、ぼくは非常に恥ずかしがり屋である。まず公に発表して恥ずかしくない

文章つくりを考えたのである。

格調たかい、まんじの誌面を下品な低レベルの表現は避けようとの真剣な思いである。

特に冒頭では洗練された上品な表現にしている。ぼく的には今回もエレガントに書き始めたつもりである。

小心者のぼくは下手な作品を書いて、まんじから追放されないかと心配で、夜も眠れないで、昼寝している。

これでも書きたいことの九割は抑えているので、欲望のまま書くと日本で発禁処分になるかもしれない。

前張り、いや前振りが長くなったが、本スジを始める。まずは自縄自縛十条の全文から紹介する。

自縄自縛十条

第一条　擬声語を使わない。
第二条　？と！を使わない。
第三条　作字をしない。
第四条　ありふれた慣用句を使わない。
第五条　会話文「　」後に〝と言った。〟と書かない。
第六条　一文に三つ以上の動詞を使わない。
第七条　〝…〟を使わない。
第八条　タタタ文を書かない。
第九条　同じ接続詞を繰り返さない。
第十条　紙面の最後に余白を作らない。

モーゼの十戒（じっかい）やノックスの探偵小説十戒（じっかい）（注2）のようなものである。

この自縄自縛十条が呪縛になって自爆しているようなところがあると感じるようになった。

（最初は『自縄自縛十条の呪縛で自爆』という、うっとおしいタイトルを考えたが、ぼくの脳の中の複数の人格の多数決であっさりと却下された。）

あえて規則を破るようになったのである。

このようなルールは守らない方が良いという例として読んでいただきたい。

第一条　擬声語を使わない。

擬声語（擬音語＋擬態語）とは音を使った表現である。例えば。ずーっといる。ぼーっとする。ずばっと言う。叫び声やうめき声などもそうである。

今まで、できるだけ擬声語を使わずにどう表現できるか工夫していたつもりである。

これは、三島由紀夫が『文章読本（ぶんしょうとくほん）』（文藝（ぶんげい）読本（とくほん））で文章作法（ぶんしょうさほう）について述べたことに影響を受けた。（注3）

〝私が森鷗外に学んだのは擬音詞（オノマトペ）を節約することであります〟

〝鷗外はこのような擬音詞の効果を嫌って、その文学はもっとも擬音詞の少いものであります〟

森鷗外と三島由紀夫に言われたら従うしかない。

そのタブーを破って初めて使った。

ずぼぼぼ

れたまま放置プレイされるシーンである。

“抜いてから行け！”

！を思わず書いたこの場面は実話であるが、事実から既に二十年ほどたっている。

！を使わなかったのは、まんじの十二年間でなく、二十年間である。

！を一つ使うのに二十年ということは、経験則から自信を持って神に誓って声を大にして宣言する。

！は今後二十年間、一回しか使わない！

！と関係ないが、ぼくが好きな言葉は君子豹変である。

！の話はさておき、ぼくは無神論者である。

！や？が歴史小説に出てくると、外国語のような特に違和感をおぼえる。

（「だぶる」とか「さぼる」のような現代の言葉が歴史小説にでてくるような感覚である。「だぶる」は英語のダブルである。「さぼる」は「サボタージュする」の略語でフランス語である。戦国時代や江戸時代の人間が英語やフランス語を使うわけない。）

！や？を知らない昔の人の会話文に出てくるのは不自然と考えるが……

？や！を気にするぼくが悪いのだろうか？

！や？を気にするぼくがやはり悪いのだ！

第三条　作字をしない。

「あ」の濁音とか「ん」の濁音とか無茶な字を作字して、自分でも反省している。実は「え」に濁音か半濁音を使いたいという強い欲望があるが、今回は自粛する。

他に表現のしようがなかった。ぼくも二度と出せといわれても出せない声である。

徹底してリアリズムを真摯に追及するという文学的態度の帰結として不可避的行動であった。

基本的には、わざわざ作字をしない。

かつて、まんじで中国史を書いたときに新の皇帝の王莽にふれたことがある。王莽の『莽』は本当は『大』でなく『犬』で、点がある。

草莽という言葉もあるように、莽は草だが、くさかんむりは三画でなく、四画になり、六画にもなる。

大か犬かというのは七面倒で抜いて、つまり省略してしまおうかと思った。

『抜く』という字も正しくは友でなく犬にノ『抜く』である。友を抜くのでなく、犬の足を抜くのである。

まったく関係ないが、ぼくは小さいころ小さかったので（幼いころ小柄だったので）、はやく犬きくなって犬った犬人になりたかった。

ときどき、ぼくのパソコンは点が抜けたり、増えたりする。

第四条　ありふれた慣用句を使わない。

慣用句とは手垢のついた表現である。「手垢のついた」自体が手垢のついた表現である。

例えば「心にポッカリと穴が開いた」などという使い古された表現は全く何も意味していない。本当に心に穴が開くのか、ポッカリとはなんだとツッコミしたくなる。

いったい、どういう状況になったら、心にポッカリと穴が開くのか、具体的な状況を詳しく説明してほしい

第五条　会話文「　」後に“と言った。”と書かない。

まんじに入るときに小説作法の本を読んだ。この手の本に視点の問題と並んでよく書かれている。

ベストセラーズの小説作法本の一節である。（注7）

“最も一般的なカギカッコ「　」が登場人物の喋った台詞を意味しているのは、日本語表記における共通認識である。にもかかわらず、いちいち「と言った」と書くのは、「馬から落馬」「赤い顔して赤面」の類である。”

引用したからといって、ぼくの意見ではない。ただ自分で自分を縛るのが好きなので忠実に従っている。

ぼくの場合は、「後で後悔する」などと不用意に書いてしまって、後悔して悔やむことが多いので、顔を赤くして赤面する。たまに白い白馬の馬に乗馬して、馬から落ちて落馬する。

こんなルールに従っていると、たまにミスをする。

実は『鉄のペリカン』で、“「じゃ、お願いします」”の次に“と言ったのが、悲劇の始まりであった。”という文を書いていた。ところが推敲の段階で無意識に削除した。

ルールはあくまでも会話文の後で、“と言った。”だけの表現をしないのだが、過剰反応したのである。

この文は次の『風船恐怖症』につながる伏線だったのに少し残念である。

実は、「と言った。」の話はあまり書きたくなかった。というのは、まんじに限らず他でも「と言った。」を使う人がかなり多いので、直接の個人に対する批判と取られかねないからである。

翻訳文学の場合は、原作に対して忠実で、個人的に良いなと思う。

先日も小説家志望の友人に「と言った」問題の話をしたところ、いきなり激しく怒りだしたのである。ぼくは「そんなに怒るなよ。けっして君が『と言った』と書いているから悪いと言っているわけじゃないよ。なんだ。拳をにぎって殴ろうというのか。ななんだ。カッターナイフまで持ち出して、危ないだろ。ななななんで。チェーンソーを持ち歩いているんだ。電源を切れ。なにっ。もっと危ないものを持っているだと。それは、直腸鏡！ぎょえええええええええええええええ」

と言った。

第六条　一文に三つ以上の動詞を使わない。

複合動詞もなるべく使わない。例えば「座り込む」というのは動詞を二つ使っているので避ける。

ぼくはよく文章上でボケるので、読みながらツッコミを入れる人がいるかもしれない。

つっこむというのは、突く十込むなので、間にａｎｄが入る。さらにツッコミ行為を入れるということなので、合計三つの動詞が入る。三語も動詞が続く表現をぼくは使わないようにしている。

否定語もなるべく使わない。「降ろさない」というのは日本語の場合、降ろすと、その行為をしないの二つを使っている。「上げたまま」など一つの動詞にする。

「とき」とか名詞が続く前には、気を付ける。

みせしめに前回の悪文の例を掲げる。

あわてて①洋式便器に便座を降ろ②さず③座り④込んで⑤抜け⑥なくなって⑦両手両足でもがいた⑧ときのようである⑨。

八つの動詞が「とき」というのにかかる「頭でっかち文」である。

なお、この文の重要なポイントは動詞が多いことでなく、「もがいた」という過去形を使ったことである。

第七条　“……”を使わない。

…（三点リーダ）は、会話文でも地の文でも今までは、ほとんど使っていなかった。

“「……」”という二点リーダだけの一行の会話文は書かない。

ところが、最近やたらと…がでてくる。これは書いている間に意識を失うか、別の人格が出てくるときである。

第八条　タタタ文を書かない。

タタタ文というのは文末が「た」で終わる文章を三回続けることである。前回の『透明な時間』のあらすじのような文ではない。

三島由紀夫も、タタタ文と言っていないが、タで終わる文章を避けている。しかし、ある一つの小説（注8）に限っては、わざとタタタ文にしている。

ぼくは完全に実践できずにいたが、不自然にならない程度にタで終わる文章を少なくしてきた。

「あたたかく」というのを「あたたたかく」とか「あたたたく」とか打ち間違い（え？）をするのは本当である。ぼくは同じ文字を二つ打つ場合、勢いで三つ打つことがある。その次の文字抜けも多いのである。

特に「ま」の字が抜ける間抜けである。

第九条　同じ接続詞を繰り返さない。

例えば、逆説の接続詞を続ける場合、最初に「しかし」を使ったら、「だが」など別の接続詞に替える。

無意識か意図的か本人もわからないが、繰り返した。

“しかも、…お尻の中で…開いて…”と書いた数行後に“しかも、しかも、…絶対に閉じないように…”

精神状態が不安定なときは、同じ言葉を繰り返すのである。主人公が作者本人だと、作中人物のあせりが作者の文章にあらわれてしまうのである。

第十条　紙面の最後に余白を作らない。

ぼくは、まんじに八十一号でデビューする前に八十号の合評会に出席した。

三戸岡先生から紙面に合わせて文章の長さを調整するようにとの意見があった。

これだったら、自分にもできると思い、そのことを忠実に守っているだけである。ぼくの原稿は最終行の最終文字で終わらせることが多い。

アイススケートで三回転半を決めても、観客席に着地すれば、メダルは取れない。

ぼくはパソコンで書いているから、余白を残さずにできると思われるかもしれない。しかし、手書きでも余白を残さずに書く自信がある。

まんじ1ページは原稿用紙3枚丁度である。（ちなみに丁度は刀が鞘に収まるときの擬声語）

原稿用紙3枚をホッチキスで留めたものを数セット用意してから、1枚目にタイトルと名前を書いて、2枚目から書くだけである。

全く関係ないが、わざと不要な脚注を付けて、紙面に合わせるというテクニックもある。

※

書き方は十か条であるが、それ以外にも、まんじでの特別条文があった。

十年間は二作を同時に発表しない。

二作出すのは気が引けるが、十年間は遠慮したので、あたたく、あた宅見守って（このネタ前回使ったな。痛あたたた）あたたかく、生あたたかく見守ってください。

ドロナワ式の長編の続きで行き詰っている間に、読み切りが一作できるので、精神衛生上、発表したい。

最後に、ぼくが自縄自縛十条を気にしない様にみえて、実は気にしているのでないか、と読者は気にするかもしれないと、ぼくは気にしているが、気にしないで下さい。

注1　蛭田亜紗子『自縄自縛の私』　注2　ロナルド・ノックス『探偵小説十戒』　注3　三島由紀夫『文章読本』　注4　同『天人五衰』　注5　同『金閣寺』　注6　川端康成『雪国』

注7　若桜木虔『プロ作家養成塾』　注8　三島由紀夫『潮騒』

還暦からの考古学（二十七）

新鉛同位体比測定法による東アジア青銅文化の動向
（島根県の部、除く荒神谷・加茂岩倉遺跡）

中山喬央（たかひろ）

まえおき

昭和五九年、島根県では一月に松江市・岡田山一号墳出土の鉄刀に「額田部臣・・・」の銘文が確認されたのに続き、七月に斐川町・荒神谷遺跡から三五八本の銅剣が検出され、次いで平成八年には、東部加茂町の加茂岩倉遺跡から銅鐸三九個が出土する等、青銅製品の列島内における出土地点として一躍首位を占めるにいたった。

そこで要望があり継続発表する事とした新鉛同位体比測定法による原材料供給鉱山の判定につき、対象範囲を東アジア全域に広げ、先ず今回の島根県、次いで中国大陸、そして朝鮮半島と順次研究発表を行なっていく事といたしたい。

新鉛同位体比測定法とは

1、鉛同位体比とは

イ、鉛

（lead）金属元素の一．元素記号Pb。原子番号82。原子量207.2。

青みを帯びた灰色の金属。方鉛鉱などから採取。

重くて（比重11.3）かつ軟らかい。

展性に富み極めて薄い板に製しうるが、延性に乏しく細線とすることはできない。湿った空気中では酸化されて、表面が薄く曇る。

そのまま、または合金及び化合物として鉛管、鉛板および蓄電池極板・活字合金・半田蝋（はんだろう）など

に用いる。

ロ、同位体

アイソトープ（isotope）のこと。

原子番号が同じで質量数が異なる元素。

すなわち陽子の数が同じで、中性子の数の異なる原子核を持つ原子。

同位体は周期表上で同じ場所を占めるので、ギリシャ語のisos（同じ）とtopos（場所）を合成してアイソトープとなった。

ハ、鉛同位体

鉛には質量数の異なる四つの同位体がある。

地球が出来た46億年前には、204pb一に対し、206pbが、9.307、207pbが10.294、208pbが29.476であった。

同位体204pbは地球が出来た時から変化しないが、同位体206・207・208pbは、これを生む親の放射性核種が天然にあり変化する。

すなわち206pbは、238U（ウラン）が半減期45億年で、207pbは235U（ウラン）が半減期7億年で、208pbは232Th（トリウム）が半減期140億年で生じる。

この結果地球が出来た46億年前から、鉱山が形成され鉛鉱石となって同位体が固定されるまでの間、この法則で三つの同位体は増え続け、その一方で、鉱山形成時期はそれぞれ異なるので、人間の指紋の様に、鉱石毎に違いが生じる。

2、鉛同位体比

イ、二つに分かれている鉛同位体比測定

206pbで、207pbと208pbを除した数字を両座標軸として表したA式図と、204pbで206pbと207pbを除した数字を両座標軸としたB式図があり、前者は成分を表すものと考えられ考古学会で主として利用し、後者は更に204pbで208pbを除したものを加えて、生成年代を表すものとして主に地球年代学研究分野で使用されている（図1・2参照）。

3、新鉛同位体比理論とは

イ、鉛同位体比による青銅製品原材料供給鉱山の同定

一九六五年、アメリカ・コーニングガラス博物館のグリルが、ヨーロッパ各地で出土している青銅製品の原材料供給鉱山の同定をしようと思い立ち、ローマ時代に採掘されたイギリス・ギリシャ・スペインの鉛鉱石と、ヨーロッパ各地で出土した青銅製品双方の鉛同

を起すことをいう。

『神岡鉱山史』121頁には

「当時の銅製錬は鉛（はく）［鉱石］を焙焼して焼鉛とし、これを鉛吹（素吹）して鈹（かわ＝硫化銅）をはぎとり、鈹を真吹（まぶき）して荒銅とする。鉛吹のとき床尻銅（とこしりどう）ができるが、尻銅ができかつそれが多量の鉛ほど良鉛であることは、和佐保の銅鉛山の記録にもみえる。鈹から製出する荒銅を、床尻銅に対して平銅という」

と記載されている。

ここでいう真吹とは、鈹に珪石を加えて、木炭の熱で溶かし、鎔けた鈹の表面に低圧の送風を行って酸化する一方で、僅かな銅を含む鍰（かん）である銅歩（どぶ）を除去して荒銅を作ることをいい、更にその荒銅を真吹し、不純物を取り除いて精銅とするのである。

その一方で、荒銅となった素材そのものには微量成分すなわち銀・アルミニュウム・砒素・ビスマス・コバルト・鉄・ニッケル・アンチモン等が含まれ、それらが素材ごとに違いがあり、青銅製品を鋳造するに当って、どのような配合が最善であるかを父子相伝の秘法により熟知している鉱山師ごとに違いがあるのではないかと考えた時、従来のA式図による分析では到底それに迫る事はできないと考えた。

位体比測定を行い、成分を表示するものと考えられている207/206と208/206の両座標軸を用いた所謂A式図を使用して、青銅製品原材料供給鉱石の産地同定に成功したことから始まる。

この事は、また鉛同位対比で青銅製品の供給鉱山を同定することの有効性を世界各国に知らせる事となった。

ロ、A式図のみを利用した場合の問題点

しかし実際にこの方法を利用した場合、誤差が大変大きい。同一鉱山の鉱石でも、例えば足尾銅山の様に「鉱床は新生代第三紀中新世（2350万年前～5300万年前）の流紋岩から成る備前楯山と、周辺に分布する中世代（245百万年前～6500万年前）の粘板岩・砂岩・チャートなどの堆積岩中にあった」（栃木県立博物館2007年11月17日展示解説）等、多様である。

次に銅の製錬について考えてみると自然銅を除き、鉱石からそのまま製錬するのではない。

先ず地表近くにある酸化銅の場合は比較的容易であるが、銅鉱石の大半を占める硫化銅になるとそうはいかない。

焙焼工程が極めて重要となる。焙焼とは製錬をする為の前処理の段階の事を指すが、溶融しない程度に鉱石を熱し、水分が蒸発し、硫黄が揮発し、進んで酸化

ハ、新理論すなわち五つの算式全てを包含した鉛同位体比指数相違数による同定

すなわち204で206・207・208を除した指数と、206で207・208を除した指数の、鉱石と青銅製品の相違数の和により同定するということである。

ここでいう同定とは、

青銅製品と鉱石双方の五つの鉛同位体比指数の違いの和が最低になるような仕組みを算出し、この最低となった鉱石使用が、考古学・民俗学・民族学・文献史学・伝承等より総合的に判断して整合性があるかどうかを判断して決定する事である。

更に204で206・207・208を除した指数は、何れも小数点以下三桁まで算出し下一桁を四捨五入する。また206で207・208を除した指数は小数点以下四桁まで算出し、之も下一桁を四捨五入する。

これにより考古学会採用のA式図と比較すると、小数点以下8桁のものが17桁となり、9桁すなわち10億倍の精度となる。また地球年代学分野で採用されているものより8桁、すなわち1億倍の精度となる。

ここで相違数100未満のものを完全に一致、
100～199までのものを一致、
200～299までのものを符合
とすることにより論を進めたいと考えた。

その理由は、

完全に一致の確率はマキシマム1000億分の3.04
ミニマム1000兆分の0.95
一致の確率はマキシマム1000億分の99.84
ミニマム1000兆分の1.95
符合の確率はマキシマム1000億分の764.64
ミニマム1000兆分の2.95

であり、この確率は本論を進めるに十分であると思考したからである。

測定資料の説明

1、上府（かみこう）出土銅鐸

浜田市上府町城山出土。大正十一年土を採取している時発見。二個の銅鐸が20～30㎝離れ鈕を上にして直立して埋まっていた。

ほぼ完形で総高27.3㎝、鐸身は四区画の袈裟襷文、鰭には鋸歯文がある。扁平鈕式。

2、上府出土銅鐸

資料1と共に出土。舞の部分に鐸身がわずかに残る残片。

扁平鈕式。

3、仮屋出土銅鐸
邑智郡石見町中野字仮屋出土の銅鐸である。
地元の人がコバンバヤシと呼んでいる台地の一角から、大正三年開墾の際、偶然掘り出された。
地表から60 cmの地点で二個が相接して見つかった。総高45.8 cm、鐸身を一区画の流水文で飾り、薄手、白緑色で、突線鈕I式。

4、仮屋出土銅鐸
資料3と共に出土。総高42.5 cm、六区画袈裟襷文銅鐸。
全体に薄いつくりで、やや明るい灰緑色を呈す。
扁平鈕式。

5、熊野神社蔵銅鐸
八束郡八雲村熊野出土と伝えられる銅鐸。
小形の外縁付鈕1式四区画袈裟襷文銅鐸。鈕の外縁、身の裾、鰭の外周は欠損部分が多い。鈕の文様は綾杉文、鰭の文様は鋸歯文、鐸身の文様は不鮮明である。
現存総高19.9 cm、重量648 g、身の裾部内面には一部欠損が認められ、断面梯形の突帯が巡っている。

6～13、志谷奥出土銅鐸・銅剣
遺跡は島根半島のほぼ中央、八束郡鹿島町大字佐陀本郷に所在する。
昭和48年、果樹に施肥する為に掘った穴から銅鐸二個と銅剣六本が発見され、昭和50年、鹿島町教育委員会により調査が行なわれた。
出土地は、細長い谷の中ほど、標高35 mの西側斜面で、調査の結果、簡単に掘り窪められた埋納壙（径40 cm、深さ20～30 cm）が確認され、銅剣片や銅鐸破片が出土。一号銅鐸（資料6）は鈕を下に、二号銅鐸（資料7）は正位置に置き、その上に銅剣六本を鋒を下にして重ねた状態で置かれていたことを復原した。
資料6銅鐸は復原総高32.2 cm、の外縁付鈕I式四区画袈裟襷文銅鐸で、資料7は、鈕を欠く復原総高22.3 cmの扁平鈕式四区画袈裟襷文銅鐸である。
資料8～13の銅剣は、全長49.3～54.0 cmで、何れも中細銅剣C類に属し、荒神谷出土の銅剣と同型式である。
全国的にも珍しい銅鐸・銅剣の多量共伴出土地であり、荒神谷遺跡と共に埋納状況を知ることのできる貴重な存在である。

14、竹田出土銅剣
壱岐郡海土町の諏訪湾東方に広がる中里平野の北側低丘陵地上に遺跡が立地する。
昭和43年、中学生によって土器片と共に採集され、昭和45年に付近の調査が行なわれた。
その結果、幅3.5 m、深さ1.0～1.6 mの、北西から南東に向かって、長さ13 m以上の溝状遺構が検出され、銅剣出土地はその北西端であった。
溝内には弥生後期の土器が3～4層堆積している事が確認されている。
銅剣は剣身の下半部を残すのみで、現存長は17.1 cmである。片側の刃部が残存しており、それを基に復原すると、関幅は4.4 cmあまりと考えられる。
茎尻から8.6 cmの位置に径0.4 cmの双孔があり、型式は中細銅剣と推定される。

15、平浜八幡宮蔵銅剣
松江市八幡町にある平浜八幡宮所蔵の細形銅剣。
市内竹矢町出土と伝えられている。
刃部、及び鋒の一部を欠くが、現在長26.5 cm、剣身最大幅3.1 cmである。復原すれば約27.3 cmとなる。
身の鋒から関もとにかけて細い樋が通り剣方は浅い。
両刃はよく研ぎだされて鋭く、関より2.6 cmのところに径0.4 cmの双孔がある。
朝鮮半島で製作され舶載されたものと考えられている。

16、伝島根県内出土銅剣
出土地の詳細は不明。豊元国氏旧蔵品で現在は島根県教育委員会所蔵となっている。
全長30.3 cm、剣身最大幅4 cm、重量258 gの細形銅剣である。関もとから2.4 cmの位置に径0.45 cmの双孔がある。
全体に茶褐色、一部漆黒色を呈し、保存状態は比較的良好である。

17～22、波来浜出土銅鏃
波来浜遺跡は昭和46～47年にかけ、江津市教育委員会によって発掘調査が行なわれた、江津市後地の砂丘上に所在する遺跡。A・B両地区で1,000 ㎡を調査したが、弥生時代中期～後期の方形石囲いの墳墓が多数検出された。
銅鏃はB調査区一号墓から二点、同区二号墓第三・第四主体部から各二点ずつ出土した。
すべて有茎有逆刺式で、菱形断面の形態を呈し、長さは4.0～6.4 cm、淡緑色で保存状態は良好である。

23、神原神社出土鏡
この鏡は景初三年の紀年銘三角縁神獣鏡であり、巻末に一項目を設けて詳細に論じたい。

24、小谷出土鏡

小谷遺跡は、安木市切川町に立地する古墳時代前期の埋葬遺跡である。

一辺5mのマウンド頂部より二個の土壙墓と土器を納めた小ピットが一個確認された。

このうち北側の土壙は、二段に掘り込まれた隅丸長方形の土壙で、内部に箱形木棺を置き、鏡一と刀子一が副葬されていた。

この鏡は小型仿製内行花文鏡で、直径8.2cm、内行六花文帯の外の圏帯に六乳を置き、さらに櫛歯文帯を巡らしており広縁である。

25、岡田山出土鏡

岡田山古墳は、松江市大草町の標高25mの丘陵上に築かれた後期前方後方墳である。

全長24m、三段築成であるが、中段にのみ葺石が巡り、下段は長方形を呈している。

更に前方部前面に長さ23m、幅28～29m、高さ1.6mのいびつな長方形のテラスを設けている。

墳麓からは円筒埴輪と須恵器子持壺が出土している。

内部構造は両袖形の横穴式石室、規模は全長5.6m、玄室長2.8m、同幅1.3～1.8m、同高2.2mである。

内部に石室主軸に沿って、組合せ式家形石棺一基が置かれており、その前に箱式石棺様の施設がある。

この古墳の副葬品としては鏡一、太刀三、刀子三、金銅丸玉十六、銀環二、馬具類・鉄鏃・須恵器等がある。

このうち円頭太刀の刀身には「各田ア臣□□□□（素カ）□大利」と判読できる銀象嵌銘文が発見された。

鏡は径10.5cmの内行花文鏡である。こうもり座鈕で、その間に右回りに「長宜子孫」の銘文を配している。

内行六花文の外は幅6mmの凹帯を経て無文の平縁となる。

舶載鏡で後漢時代の作と思われており、この種の鏡が後期古墳から見つかる例は極めて珍しいとされている。

26、古城山出土鏡

一辺20mの方墳で、八束郡東出雲町出雲郷に築かれており、割竹形木棺を埋納したと考えられる長さ3.8mの墓壙から出土した。

遺物は古式土師器の鼓形器台片と鏡一面。

鏡は残片であるが、復原すれば径約16.3cmの内行花文鏡となり、舶載鏡の範疇に入るものである。

四葉座をもち、その間に左回りに「位至三公」の銘文を配し、その外が線圏、内行八花文、櫛歯文を経て、無文の平縁となる。

27、八日山出土鏡

松江市新庄町八日山の中海西岸に突出した標高25mの

低丘陵上に位置する一辺23.5m、高さ2.7mの半壊している方墳。

昭和52年、墳丘断面から偶然三角縁神獣鏡が一面発見された。

鏡は直径21.85cmの三角縁波文帯四神二獣鏡で黒銅色を呈する。

鈕座は有節重弧文圏座の外側に更に鋸歯文圏を加え、円圏座を持つ四個の乳の間に二神像・傘松形と横位の獣形を交互に配して主文様としている。

外区と内区は外側斜面無文、内側斜面鋸歯文の界圏により区分され、その外側は珠文をそえた複線波文帯、櫛歯文帯、外向鋸歯文、複線波文、外向鋸歯文の順で文様が配され、三角縁で終わっている。

文様の状況等から舶載鏡とされ、岐阜県各務原市・一輪山古墳出土鏡と、同笵関係にあるとされている。

28、月廻出土鏡

松江市比津町・法吉町久米の標高30～40mの丘陵上に分布する21基の古墳群のうち番外三号墳から出土した鏡。

番外三号墳は一辺23mの方墳で、葺石・埴輪等はなく二段堀の墓壙（棺長3.4m、幅0.7m）が検出され、内部に鏡1、管玉3が副葬されていた。

鏡は直径10.5cm、円座鈕、龍と虎を向かい合わせて主文様とし、その外に櫛歯文帯を巡らし、内区と外区は段（無文）をつけて区分し、その外側は外向鋸歯文、複線波文の順で文様が配され、縁は斜縁に近い舶載盤龍鏡である。

29、松本一号出土鏡

飯石郡三刀屋町給下の丘陵上に位置する全長約50mの前期・前方後方墳。

内部主体は後方部に主軸と直角に設けられた、二基の粘土槨。

第一主体には斜縁獣帯鏡、刀子二、小型剣形鉄器、鉄針、ガラス小玉が副葬され、第二主体に鉄剣、管玉、鉄器小片が副葬されていた。

ほかに前方部先端東側に土師器大型壺を切断して遺骸を被覆した構造が二基検出されている。

斜縁獣帯鏡は直径13cm、黒青色。鈕座に有節重圏が巡り、六個の円座乳の間に一個ずつ都合六獣を配して主文様とし、その外に銘帯、櫛歯文帯、二重の鋸歯文帯、を持ち、斜縁で終わっている。

主文様は走獣形三、鳥形二、人物様一であり、讃岐石清尾山猫塚出土の獣帯鏡などに類する系統の文様。

銘文は「子孫」の二字のみが判読できる。

30、造山三号出土鏡

安木市荒島町の標高約40mの丘陵上にある方墳。
墳丘は大半が地山加工、東西58m、南北44mの長方形。墳丘のほぼ中央部に、長さ4.75m、幅1.0～0.9m、高さ1mの竪穴式石室があり、内部から鏡一、碧玉製管玉30、ガラス小玉33、刀子一、鉇一が出土した。
鏡は直径15.4cmの舶載斜縁二神二獣鏡。暗黒色、文様鮮明、鏡面も大半光沢を保つ。
斜縁の内に外向鋸歯文、複線波文、外向鋸歯文を配し、そこから内側は一段低くして櫛歯文帯を巡らした内に銘帯がある。
銘文は左回りに
吾作明竟自宿紀令人長□宜孫子作吏高遷車
生宍耳宜気
とある。

31、御崎山出土鏡
松江市大草町の標高27mの丘陵突端に営まれた前方後方墳。
全長約40m、後方部のややくびれた所に横穴式石室が設けられている。
玄室は奥行3.6m、幅3m、高さ2.85m、内部に切石を組合せた横口式家形石棺が二基安置してある。
副葬品としては鏡、金環、銀環、金銅鈴、獅噛環頭太刀、刀子、鉄鏃、鞍、馬具類、須恵器などが出土している。

る。
鏡は径8.2cm、反りは3mm、厚さ2mmの珠文鏡である。縁は丸味をおび、錆が著しく文様は不鮮明である。

資料別鉛同位体比による原材料供給鉱山同定

1、上府銅鐸1、扁平鈕式
17.607・0.8818・2.1740から17.607×0.8818＝15.526
17.607×2.1740＝38.278何れも小数点最下位四捨五入で計算して
17.607・15.526・38.278・0.8818・2,1740
と算出される。(以下算出方法省略)
之はJ—6太良・秋田を88%53神岡・茂住を12%混合した
17.609・15.551・38.266・0.8832・2.1732と相違指数2・25・12・14.8合計61で完全に一致する。(以下傍線部分省略)

2、上府銅鐸2、扁平鈕式
17.945・15.558・38.542・0.8670・2.1478と算出され、之は53神岡・茂住85%、J—6太良・秋田を15%混合したものと、相違指数48で完全に一致する。

3、仮屋銅鐸1、突線鈕1式
17.804・15.548・38.412・0.8733・2.1575
之は53神岡・茂住54%、J—6太良・秋田45%、70大井・静岡1%を混合したものが、相違指数51で完全に一致する。

4、仮屋銅鐸2、扁平鈕式
17.654・15.525・38.295・0.8794・2.1692
之はJ—6太良・秋田を73%、53神岡・茂住を25%、70大井・静岡を2%混合したものが、相違指数68で完全に一致する。

5、熊野神社蔵銅鐸、外縁付鈕1式
17.693・15.534・38.339・0.8780・2.1669
之はJ—6太良・秋田69%、53神岡・茂住を31%混合したものが相違指数46で完全に一致している。

6、志谷奥銅鐸1、外縁付鈕1式
17.543・15.501・38.110・0.8836・2.1724
之はJ—6太良・秋田を89%、70大井・静岡を11%混合したものと、相違指数47で完全に一致する。

7、志谷奥銅鐸2、扁平鈕式
17.671・15.533・38.325・0.8790・2.1688
之はJ—6太良・秋田を74%、53神岡・茂住を26%混合したものと、相違指数51で完全に一致する

8、志谷奥銅剣1、中細形
17.701・15.531・38.337・0.8774・2.1658
この指数は5、熊野神社銅鐸と相違指数27で完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田を68%、53神岡・茂住を32%混合したものと、相違指数57で完全に一致する。

9、志谷奥銅剣2、中細形
17.591・15.510・38.199・0.8817・2.1715
之はJ—6太良・秋田を92%、68久根本山・静岡を8%混合したものが、相違指数102で一致する。

10、志谷奥銅剣3、中細形
17.719・15.534・38.385・0.8767・2.1663
之はJ—6太良・秋田を64%、53神岡・茂住を36%混合したものと、相違指数86で完全に一致する。

11、志谷奥銅剣4、中細形
17.792・15.556・38.456・0.8743・2.1614
之は53神岡・茂住を52%、J—6神岡・茂住を48%混合したものと、相違指数79で完全に一致する。

12、志谷奥銅剣5、中細形
17.539・15.492・38.1260.8833・2.1738
この指数は6、志谷奥銅鐸1と相違指数46で完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田を90%、70大井・静岡を10%混合したものと、J—6太良・秋田を91%、70大井・静岡を9%混合したものが、共に相違指数77で完全に一致する。

13、志谷奥銅剣6、中細形
17.745・15.532・38.350・0.8753・2.1612
鉛同位体比指数は『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編195頁、28滋賀・山面銅鐸2号の17.735・15.536・38.357・0.8760・2.1628と相違指数44で完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田55%、53神岡・茂住42%、70大井・静岡3%を混合したものと、相違指数51で完全に一致する。

14、竹田銅剣　中細形
18.253・15.630・38.919・0.8563・2.1322
之は51中竜・福井を93%、J—6太良・秋田を7%混合したものと、51中竜・福井を92%、J—6太良・秋田を8%混合したものとが、共に相違指数64で完全に一致する。

15、平浜八幡宮銅剣　細形
17.799・15.531・38.209・0.8726・2.1467
之は201青城子・遼寧を79%、J—6太良・秋田を21%混合したものが、相違指数172で一致する。

16、伝島根県内出土銅剣　細形
19.755・15.846・40.306・0.8021・2.0403
之は430豊産金山・忠清南道69%と、J—2広尾・北海道を31%混合したものが、相違指数106で一致する。

17、波来浜銅鏃
17.781・15.544・38.421・0.8742・2.1608
之はJ—6太良・秋田と53神岡・茂住を等分に混合したものが、相違指数58で完全に一致する。

18、波来浜銅鏃
17.690・15.541・38.329・0.8785・2.1667
この指数は、5、熊野神社蔵銅鐸と相違指数27、8志谷奥中細形銅剣と相違指数49で完全に一致している。
J—6太良・秋田を70%、53神岡・茂住を30%混合したものが、相違指数39で完全に一致する。

19、波来浜銅鏃
17.746・15.547・38.425・0.8761・2.1653
この指数は『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編196頁掲載の、51愛知・朝日銅鐸の17.742・15.542・38.399・0.8760・2.1543及び56静岡・木舟1号銅鐸の17.739・15.545・38.399・0.8760・2.1643と相違指数46で共に完全に一致し、更に62京都・下安久1号銅鐸の17.734・15.546・38.414・0.8766・2.1661と、相違指数37で完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田を58%、53神岡・茂住を42%混合したものと、相違指数98で完全に一致する。

20、波来浜銅鏃
17.768・15.549・38.418・0.8751・2.1622
17、波来浜銅鏃と相違指数44で完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田を53%、53神岡・茂住を47%混合したものが、相違指数59で完全に一致する。

21、波来浜銅鏃
17.740・15.549・38.425・0.8765・2.1660
之はJ—6太良・秋田を59%、53神岡・茂住を41%混合したもの85%に、GJ—6太良・秋田を15%混合したものが、相違指数69で完全に一致する。

22、波来浜銅鏃
17.754・15.540・38.416・0.8753・2.1638
『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編196頁掲載の、57静岡・木舟2号突線鈕3式銅鐸の17.746・15.537・38.392・0.8755・2.1634と相違指数41で、20、波来浜銅鏃と相違指数43でそれぞれ完全に一致している。
之はJ—6太良・秋田を56%、53神岡・茂住を44%混合したものが、相違指数88で完全に一致する。

23、景初三年銘三角縁神獣鏡・神原神社出土
18.261・15.655・38.761・0.8573・2.1226
之は53神岡・茂住を54%、52滋賀・政所を46%混合したものが、相違指数69で完全に一致する。

24、小形内行花文鏡　小谷
17.854・15.569・38.483・0.8720・2.1554
之は53神岡・茂住55%、GJ—6太良・秋田35%、70大井・静岡10%の比率で混合したものが、相違指数69で完全に一致する。

25、長宜子孫内行花文鏡　岡田山
18.171・15.642・38.711・0.8608・2.1304
この指数は『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編120

頁掲載の、景初四年銘竜虎鏡、辰馬考古資料館の18.193・15.650・38.727・0.8602・2.1287と相違指数69で、正始元年銘森尾古墳三角縁神獣鏡の18.196・15.649・38.712・0.8600・2.1275と相違指数70でそれぞれ完全に一致している。

之は53神岡．茂住を66％、72対州・長崎を34％混合したものが、相違指数70で完全に一致する。

26、内行花文鏡　古城山

18.142・15.637・38.677・0.8619・2.1319

之は53神岡・茂住を72％、72対州・長崎を28％混合したものが、相違指数86で完全に一致する。

27、三角縁神獣鏡　八日山

18.261・15.661・38.746・0.8576・2.1218

この指数は23、景初三年銘鏡と、相違指数32で完全に一致している。

之は53神岡．茂住を54％、52滋賀・政所を46％混合したものが、相違指数101で一致する。

28、盤龍鏡　月廻

18.146・15.656・38.676・0.8628・2.1314

この指数は26、内行花文鏡古城山と相違指数38で完全に一致している。

之は53神岡・茂住を71％、72対州・長崎を29％混合したものが、相違指数122で一致する。

29、斜縁獣帯鏡　松本一号墳

18.317・15.670・38.799・0.8555・2.1182

之は52滋賀・政所を57％、53神岡・茂住を43％混合したものが、相違指数83で完全に一致する。

30、斜縁二神二獣鏡　造山三号墳

18.333・15.677・38.811・0.8551・2.1170

之は52滋賀・政所を60％、53神岡・茂住を40％混合したものが、相違指数89で完全に一致する。

31、珠文鏡　御崎山

18.184・15.631・38.612・0.8596・2.1234

之は53神岡・茂住を63％、72対州・長崎を37％混合した18.184・15.619・38.742・0.8591・2.1308を89％と90％に、68静岡・久根本山を11％と10％それぞれ混合したものが、相違指数共に125で一致する。

23、神原神社出土鏡

神原神社古墳は『出雲国風土記』に神原社とある式内神原神社の社地すなわち島根県大原郡加茂町大字神原2071及び1436番地にあった。今は石室と共に堤防外に移転しているが、かって主体部の竪穴式石室は、本殿の真下にあり、墳丘の北側斜面は一部赤川の堤防にかかっていた。

その主体部は、主軸をほぼ南北におく縦長な竪穴式石室で、全長5.8ｍ、幅は北端1.3ｍ、南端0.9ｍ、墳丘のほぼ中央に構築されていた。

東西の両側壁は床面から70ｃｍまでドーム状に内彎して積まれており、これは割竹形木棺を収納したのち、木棺の外側に沿って壁石を積み上げたものと思われる。

また墓壙を堀り下げ、底に木棺を据えるため粘土床を敷き、続いて石室の基底部を作り、割竹形木棺を安置した段階で、赤色顔料と、ある種の飲食物を用いて埋葬儀礼を行った形跡もあった。

副葬品としては、石室内の棺内に、景初三年銘三角縁神獣鏡一面と、各種鉄製武器（素環頭太刀一、太刀一、剣一、鉄鏃36）および農工具（鍬先一、鎌一、なた状鉄器一、鑿一、斧一、錐2、縫い針2）があり、さらに棺外にも鉄剣一が副葬してあった。

鏡は棺内中央の東側から、鏡面を上に40度の傾きをもって、棺壁に立てかけた状態で出土した。面徑は23ｃｍ、反り0.7ｃｍで鋳上がりは良好であるが、鏡面の錆化が著しく、外区から内区にかけて大きな亀裂が生じている。型式は四神四獣を階段式に配した所謂、重列式神獣鏡で、構図の上中央から右行右字で次の39字が鋳出されている。

景初三年陳是作竟自有経□本是京[師]□□出吏人□位至三公[女]人[詔][之]保子宜孫寿如金石兮

鏡背内区の主文や外区の文様構成は、全般的に群馬県高崎市柴崎古墳出土、正始元年鏡と極めて類似している。

だが前期古墳で一般的にみられる玉類の副葬は全く認められなかった。

また墓壙内に埋納壙があり、壺形土器5個、石室の蓋石上部より多数の壺形土器と円筒形土器の破片が出土している。

ところで出雲では大形前期古墳として造山1号、同3号墳、大成古墳、松本1号墳が知られており、何れも副葬、供献用土器が検出されている。

それら土器の編年に従えば、先ず松本1号墳次いで造山3号墳となり、その次が神原神社古墳、大成古墳・造山1号墳となる。

当地での古墳時代前期の土器編年は四段階に大別され、松本1号墳と造山3号墳が第二段階、神原神社古墳、大成古墳、造山1号墳は第三段階ということになる。

まとめ

舶載といわれてきた青銅製品

15、平浜八幡宮蔵銅剣、25、岡田山出土鏡、26、古城山出土鏡、27、八日山出土鏡、28、月廻出土鏡、30、造山三号出土鏡は何れも従来舶載された青銅製品であると考えられてきたが、15、平浜八幡宮蔵銅剣を除いては、何れも日本列島産の鉱石のみを使用しており、仿製であることが確実となった。

その一方で従来舶載とはされてこなかった16、伝島根県出土銅剣細形は、次の理由により舶載されたものと考えられる。

その理由は、原材料として使用された鉱石が430、豊山金山・忠清南道69%、J—2広尾・北海道31%と算出された事による。北海道の鉱石が朝鮮半島に入ったのかどうかということである。それは、日本海のリマン海流の利用を考えれば可能性は大であると考察した。

その一方で、同じ細形銅剣である15、平浜八幡宮の原材料鉱石は、201、青城子・遼寧79%、J—6太良・秋田21%で中国大陸産の鉱石を使用しているが、これは渡来してきた青銅工人が持参し、日本列島産の鉱石と混合して鋳造したものと考えた。それは今回同定した三面の紀年銘鏡が原材料供給鉱石から、すべて仿製という事になり、そこに中国大陸より渡来した青銅工人、すなわち鉱山師の存在を考えたからである。

種類別検討

銅鐸7点、銅剣9点、銅鏃6点、銅鏡9面の合計31点である。

このうち銅鐸は外縁付鈕1式、扁平鈕式、突線鈕式の三形式に分かれるが、原材料供給鉱石は、J—6太良・秋田、53神岡・茂住、70大井・静岡の三つに集約されていた。

銅剣は9点で、細形2点と中細形7点である。

細形については既に説明済みであるが、時代が下った中細形7点については銅鐸、銅鏃と共に鋳造された可能性を考えることができる。

先ず表一にて31点の青銅製品に鉱石を供給した10鉱山の明細を記載した。秋田・飛騨・静岡・福井・遼寧・忠清南道・北海道・滋賀・対馬となる。

次いで表2・3・4を参照していただきたい。

この表別に纏まった一群は、同一青銅工人グループ、即ち同系統鉱山師仲間による鋳造と考える事が出来、出雲では日本列島を北から南下してきたグループと、大陸から渡来してきたグループが共存したと考える事ができる。すなわち銅鐸のみは南下型、銅鐸・銅剣・銅鏃混合（表2・3・4・5・6）は共存型、銅鏡のみのグループ（表7・8・9）は渡来型ということになる。

更に銅鏃については中細形銅剣と共に、銅鐸を鋳造した青銅工人が共に製作した可能性がある。これについては表2・5・6を参照していただきたい。

最後の銅鏡8面については表7・8・9に表示してある通り、景初四年銘鏡と正始元年銘鏡が共に53神岡・茂住61%、72対州・長崎39%の混合比率で両者の相違指数は僅か30、27三角縁神獣鏡八日山と23景初三年銘神原神社古墳出土鏡が共に53神岡・茂住54%、52滋賀・政所46%の混合比率で、両者の相違指数僅か32であり、双方が同じ坩堝で鋳造された可能性が検出された。

その一方で、景初三年銘三角縁神獣鏡が出土した神原神社古墳の年代が、古墳時代前期の三期に入る等、年代にかなりの違いがあり、この事は紀年銘の意味につき、青銅製品が鋳造された年を表すのではなく、渡来した青銅工人すなわち鉱山師の先祖が日本列島に渡来した年を表示しているのではないかという事が考えられる。

之は更に渡来した鉱山師の中からリーダーが選出され、その子孫が漸く神原神社古墳を造営する事が出来るようになり、それを記念しての紀年銘鏡の鋳造とする考えに繋がる事を可能とする。

しかし、この神原神社古墳出土景初三年銘三角縁神獣鏡に対する考えが、その他の紀年鏡に適用出来るかどうかは、個別の検討が必要となる。

それはそれとしてこれら一連の記述は、出雲が青銅製品の鋳造場所を有していたことを示すだけでなく、図1及び2のA式図とB式図にも図示したように、様々な鉱石の取り合わせが、多様な鉱山師グループの存在を浮かび上がらせているのである。

鉱石供給鉱山鉛同位体比指数一覧　　表1

NO	鉱山名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
J—6	太良・秋田	17.554	15.546	38.220	0.8856	2.1773
53	神岡・茂住	18.012	15.591	38.600	0.8656	2.1430
70	大井・静岡	17.465	15.391	37.245	0.8812	2.1326
68	久根本山・静岡	17.820	15.435	37.524	0.8662	2.1057
51	中竜・福井	18.309	15.658	38.995	0.8552	2.1298
201	青城子・遼寧	17.836	15.598	38.141	0.8745	2.1384
430	豊産金山・忠清南道	19.014	15.913	40.218	0.8369	2.1152
J—2	広尾・北海道	21.579	15.746	40.437	0.7297	1.8739
52	滋賀・政所	18.550	15.701	39.012	0.8464	2.1031
72	対州・長崎	18.476	15.666	38.983	0.8479	2.1099

鉱山名は発表順による。

表2

8志谷奥銅剣1、中細形	J－6太良・秋田 68%	53神岡・茂住 32%	相違指数 57
5熊野神社銅鐸	〃 69%	〃 31%	〃 46
18波来浜銅鏃	〃 70%	〃 30%	〃 39

8と5の相違指数30、8と18の相違指数49、5と18の相違指数27

表3

12志谷奥銅剣5、中細形	J—6太良・秋田 90% J—6太良・秋田 91%	70大井・静岡 10% 70大井・静岡 9%	相違指数 77
6、志谷奥銅鐸1、外縁付鈕式	J－6太良・秋田 89%	70大井・静岡 11%	相違指数 47

12と6の相違指数46

表4

13志谷奥銅剣6、中細形	J—6太良・秋田 55%	53神岡・茂住 42% 70大井・静岡 3%	相違指数 51
28滋賀・山面銅鐸	J—6太良・秋田 57%	53神岡・茂住 40% 70大井・静岡 3%	相違指数 58

13と28の相違指数44

表5

19波来浜銅鏃	J—6太良・秋田 58%	53神岡・茂住 42%	相違指数 98
51愛知・朝日銅鐸	〃 59%	〃 41%	〃 70
56静岡・木舟1号銅鐸	〃 59%	〃 41%	〃 83
62京都・下安久1号銅鐸	〃 60%	〃 40%	〃 98

19と51は相違指数46　19と56は相違指数46　19と62は相違指数37
51と56は相違指数25　51と62は相違指数51　56と62は相違指数26

表6

22波来浜銅鏃	J—6太良・秋田 56%	53神岡・茂住 44%	相違指数 88
57静岡・木舟2号銅鐸	〃 58%	〃 42%	〃 62
20波来浜銅鏃	〃 53%	〃 47%	〃 59
17波来浜銅鏃	〃 50%	〃 50%	〃 58

22と57の相違指数41　22と20の相違指数43　22と17の相違指数77
57と20の相違指数76　57と17の相違指数110　20と17の相違指数44

表7

25長宜子孫内行花文鏡	53神岡・茂住 66%	72対州・長崎 34%	相違指数 70
景初四年銘竜虎鏡	〃 61%	〃 39%	〃 81
正始元年銘森尾古墳鏡	〃 61%	〃 39%	〃 108

25と景初四年銘鏡の相違指数　69　25と正始元年鏡の相違指数　70
景初四年銘鏡と正始元年銘鏡の相違指数　30

表8

27三角縁神獣鏡・八日山	53神岡・茂住 54%	52滋賀・政所 46%	相違指数 101
23景初三年銘鏡	〃 54%	〃 46%	〃 69

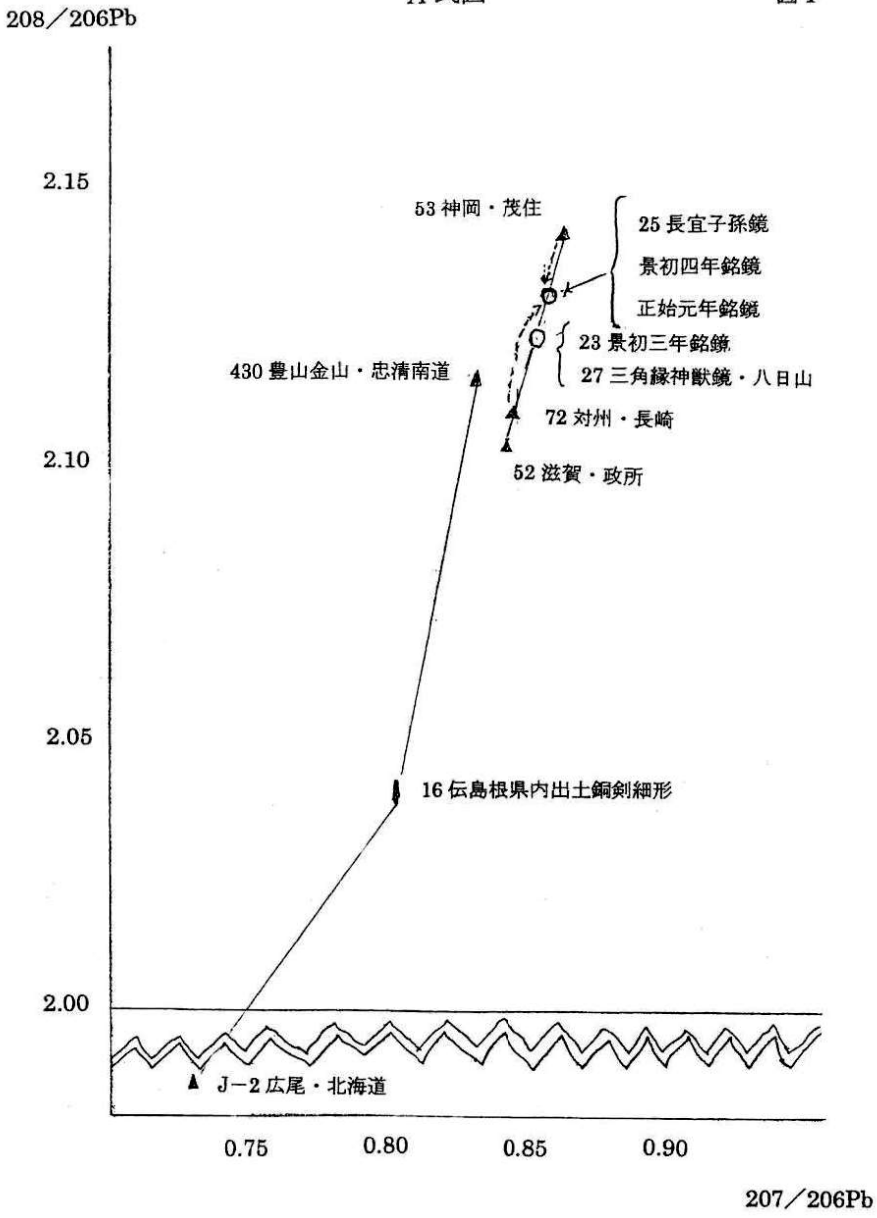
27と23の相違指数　32

表9

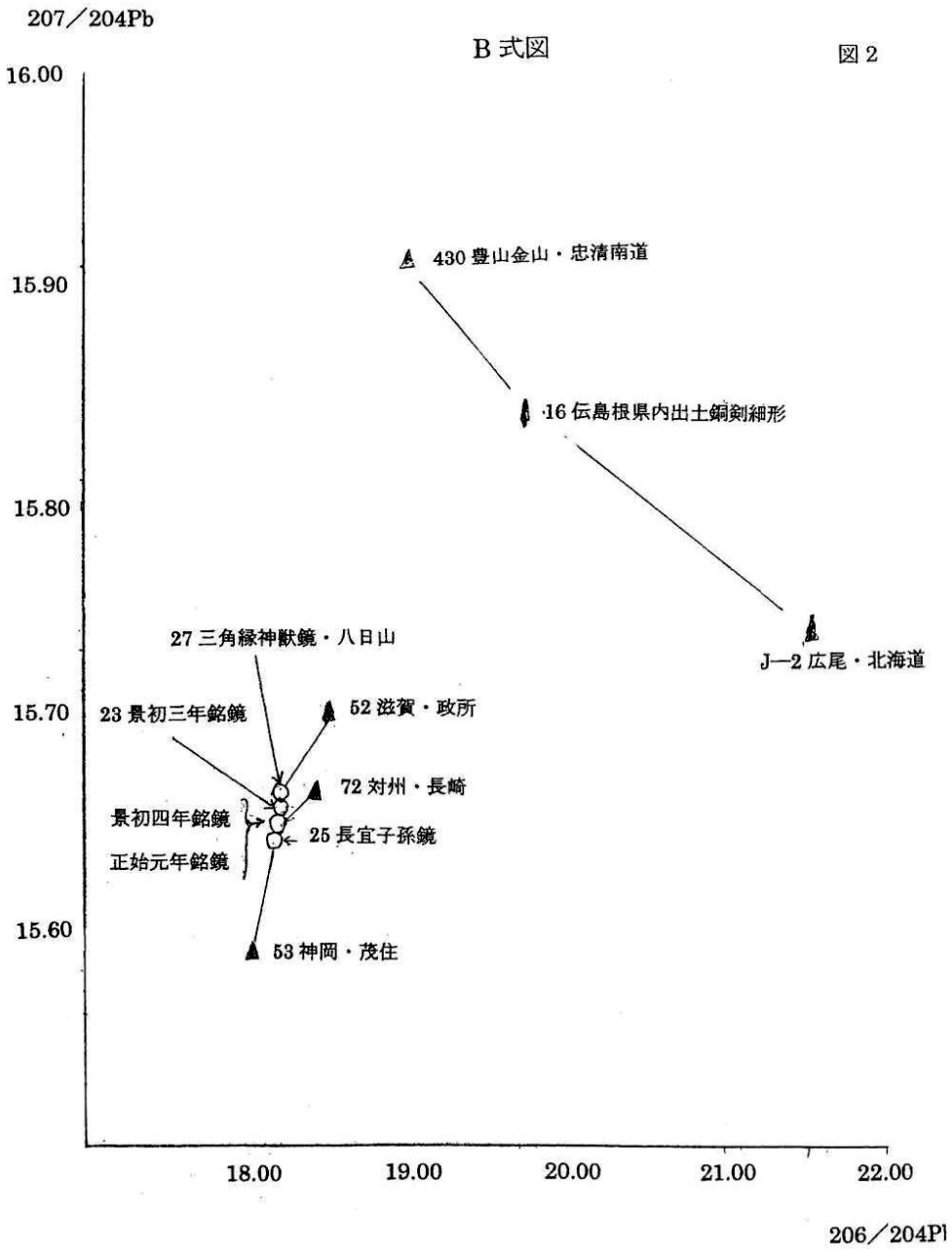
28盤龍鏡・月廻	53神岡・茂住 71%	72対州・長崎 29%	相違指数 122
26内行花文鏡・古城山	〃 72%	〃 28%	〃 86

28と26の相違指数　38

A 式図　　図 1


208／206Pb
2.15
2.10
2.05
2.00
53 神岡・茂住
25 長宜子孫鏡
景初四年銘鏡
正始元年銘鏡
23 景初三年銘鏡
27 三角縁神獣鏡・八日山
430 豊山金山・忠清南道
72 対州・長崎
52 滋賀・政所
16 伝島根県内出土銅剣細形
J－2 広尾・北海道
0.75
0.80
0.85
0.90
207／206Pb

B 式図　　図 2


207／204Pb
16.00
15.90
15.80
15.70
15.60
430 豊山金山・忠清南道
16 伝島根県内出土銅剣細形
J—2 広尾・北海道
27 三角縁神獣鏡・八日山
23 景初三年銘鏡
52 滋賀・政所
72 対州・長崎
景初四年銘鏡
正始元年銘鏡
25 長宜子孫鏡
53 神岡・茂住
18.00
19.00
20.00
21.00
22.00
206／204Pb

参考文献
小葉田淳『神岡鉱山史』三井金属鉱業（株）、1970年。
佐々木昭・佐藤和郎・G・L・カミング「日本列島の鉱床鉛同位体比」『鉱山地質』32、1982年。
平尾良光『古代青銅の流通と鋳造』鶴山堂、1999年。
前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』62—3、1976年。
馬淵久雄「島根県下出土青銅器の原料産地推定」『月刊文化財』261、1985年。
三宅博士・松本岩雄「島根県下の青銅器について」『月刊文化財』261、1985年。
山崎一雄・室住正世「鉛同位体比測定による日本及び中国出土の考古遺物の産地の研究」『考古学・美術史の自然科学的研究』1980年。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇—〇—六四五九二

加入者名　まんじ

追伸　—サウダージ—　より　その十二

松下壽男

さくら

新聞にあなたのはにかむ笑顔を見つけて
遠くから見守り続けた私は
ドキッとして
気がつくと辺り一面春でした

横殴りの雨の中で少しは頭を冷やそうと
土手を歩いて一枝手折った
その花は木瓜でした
今の私は平気で花を盗みます

もしも心を開いてくれたなら私は好きだと言えるだろう
そして見守ることだって
けっしてぼけることもなく

「あの写真、ただのさくらでしたから」
「いいえ、きれいなさくらでしたよ」
見上げると、空に晴れ間があった

日本近代文学点描　その十三

松下壽男

偽善と人道

♡正。何も出ないでもお怒りにならなけれ
ばおかしゝてもよろしいが。きっとお役にはたち
ますまい。
欲。さう御謙遜なさらないでもよろしい。ただかし
て下さればいゝのです。それとも私のやうなもの
にお貸しになるのがおいやなら仕方がありません
がね。誰でも他人が寶物をほり出すと云ふことは
嬉しくないものですから。それに自分の大事なも
のを他人に貸すと損をしたやうな氣になるもので
すからね。おことわりになるのも無理はありませ
んが。
正。欲兵衛さん、さう云ふわけぢゃないのです。何に
もあなたが寶物をほり出すと困るとか、大事なもの
だからかせないとか云ふのぢゃないのです。たゞ
お役に立たない時あなたがこの犬にお怒りになる
と困ると思って申したゞけです。

武者小路実篤は、大正六年七月の「白樺」に、「かちく山と花咲爺」という戯曲を発表します。十月に発行された単行本の献辞に（この一篇をある小學校の先生に）とあることからも、それは児童劇として書かれたものでした。そして恐らく白樺派の思想に共鳴する青年教師らの指導のもとで、日本中の数多くの小学生によって演じられたことでしょう。

学校の国語の教科書から戯曲が姿を消すようになったのは、何時頃のことだったでしょう。私の子供の頃は、どの学年でも、国語の時間に劇を学んだものでした。

そして、改めて戯曲に触れてみると、登場人物の複雑な性格や心情を会話だけで浮き彫りにするために、平易な言

葉の中にも凄まじいほどの魂が込められていることがわかります。本来のコミュニケーションのための言語感覚を育てるために、戯曲教材を復活させてはどうだろうと感じるほどです。

さて、冒頭のお話の、「正」とは正直爺さんの正兵衛、「欲」とは欲張爺さんの欲兵衛のことで、場面は「花咲爺」の犬が隣の家へ連れて行かれるところです。

この場面の二人のやり取りは、台詞だけを読む限り、一体どちらが善人で、どちらが悪人か解らなくなってくるから不思議です。

もっとも、読者も観客も、花咲爺の勧善懲悪のお話が頭に入つていますから、相手の道徳性を逆撫でしてまで自らの利益へと誘導しようとする欲兵衛に腹を立てたり、その下心を承知しながらも、人を疑ってはならないという道義心に縛られて、とうとう犬を渡してしまう正兵衛に、思わず（ふがいないぞ！しっかりしろ！）と心の中で声をかけたりしてしまうのです。

確かに、前提から、正兵衛は善人で欲兵衛は悪人です。しかし台詞という地平では、そうではありません。

欲兵衛は、偽善の笑みを振り撒きながら、（あなたも本当は偽善者じゃないですか）と問い詰めてくるのです。その誘導に引っ掛かった正兵衛も、（犬を見て、犬がいやがるのを察してきつく目で犬に叱りながら）「それは喜んでおかしゝます」と答えた時には、偽善者になってしまったのではないでしょうか。そのことを一番了解しているのは欲兵衛です。その後、彼は、正兵衛のことを平然と偽善者呼ばわりするようになるのです。

欲兵衛は本心を偽って善人の台詞を語ります。正兵衛もまた本心を偽って善人の言動を貫こうとするのです。

「それは喜んでおかしします」と語った瞬間から、正兵衛は、道義心を貫くために正直者を演じます。両方とも、本心を偽っている点では、論理的に「偽」で、偽とは正直の反対なのです。

こうして二人の登場人物が正直者を演じ合うこの場面は、さながら劇中劇です。そして進んで演じる者と、止むを得ず演じる者、あるいは偽が正を演じることと、正が偽の反対を演じることでは、前者の方がストレートで、どちらが役者が上かは既に答えが決まっています。

二人やり取りを味わううちに善悪の判断を忘れてしまう自分に気が付いた私は、偽善の台詞の地平が「欲の文化」と「義の文化」とでもいうものの接触の局面として、現出しているのではないかと考えるようになりました。それらは、あるいは「天道」と「人道」と言い換えることができるかもしれません。

白樺派の実篤は、最後には、自分の心に正直に生きていけば道を誤ることはないのだと訴えているのでしょう。とはいえ偽善の台詞のやりとりの結果、台詞を持たない唯一正直な存在である犬は、途中で命を落とすのです。

編集後記

最近勧められるままに、昔同じ職場で仕事をしたことのある人の絵を見に行ってまいりました。

彼は健康状態がすぐれないと聞いていたのですが、東京都美術館の中で展示されていた作品は全くそれを感じさせない見事なものでした。

そこでふと思ったことは、絵には絵が描かれていた時の、時計で測ることのできない時間（思索）があり、絵が出来上がってからは時計で計る意味の時間（歴史）が、思い出のように降り積もっているのではなかろうかと言う事でした。

絵を見る人が、若しその事に気付いて、その時間を共有することができれば、密度は限りなく高いものになります。

自分で文章を書く時も同じです。しかし、読んでくださる方が、自分が文章を考えて、次に実際に執筆にとりかかった際の時間を考えて下さり、共有していただけるようなものを書くには、どうしたらよいのでしょうか。

それには何とかして自分の作品を「客観的に」第三者の目で見る力をつけなければ、独り善がりになってしまって目的を達成する事は出来ないのではないかという事に思いあたりました。

その事は、文章でも、詩でも、絵でも、およそ物事の表現をしようとする者にとっての全ての基本であり、丁度研究論文を作成する場合、必須の参考文献を全て揃える事ができた時と同じ様に、作品の八割位まで出来たようなものとなるのではないかと考えました。

本当に良い絵を見る機会を与えていただいた事に感謝しております。

（T・N）

まんじ第129号

平成25年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045 (544) 5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「古きを脱ぎて　新生に漕ぎ出す」　　田寺（たでら）怜葦（れい）画

まんじ

No.130

2013.11.1

まんじ第百三十号　目次

われは、裏切り者にあらず……千坂精一……4
捏造の天智天皇像……隆恵……15
小沢昭一の俳句・四千句を読んで……曽根竣作……30
短歌　三十首……曽根竣作……36
嘆きの人事部長……三戸岡道夫……40
お茶と煎茶道について（茶道史余滴）……忠内正之……62
新聞歌壇を賑わした異形の歌人二人……石黒修身……73
日本の歌「寮歌」……伊治哲……78
誕生日が二つある……太田精一……88
漢詩で遊ぶ『説文解字』研究……新井宏……100
政治家の一詩を巡る春蘭と秋菊……鯨游海……114
親友……吉田忠雄……124
ザ・バードマン……月岡兎平……126
目耕録（その十二）……山本鎭雄……136
シルバー諸君の力（農業分野編②）……古屋富雄……145
（司馬雑感三十三）「空海の風景」を歩く……山田嘉久……148
皮膚の色の四方山話……鈴木守……158
飲酒の歴史と飲酒の今日的課題……漆原直子……171
殉教……鍋屋次郎……180
千家尊福伝（一）……村上邦治……193
内田の国の物語り⑤……横山正義……198
金銀妖眼……匠克仁……206
還暦からの考古学（二十八）……中山喬央……219
口紅（その十二）……池原莉作／山本勉訳……245
編集後記……編集子……274
表紙……田寺怜葦……

われは、裏切り者にあらず

千坂精一

一

寝間のなかが白んできた。

（もう夜が明けるのか）

小山田信茂は久しぶりに谷村の館へもどってきたのだが、昨夜はとうとう一睡もしなかった。

父のあとを嗣いでから三十年のあれこれに思いを馳せて一夜を過ごしてしまったのだった。

父から聴かされた小山田の始祖は、坂東平氏の流れを汲む秩父氏の分かれで、鎌倉幕府草創期に武藏國小山田荘（東京都町田市北西部）の別當になった秩父重弘の子有重が、荘名を名告りにしたのがはじまりだという。

その有重の五男五郎行重が甲斐國都留郡田原郷（山梨県都留市谷村）に土着して都留地方の実権を握り、中津森館（同市金井）を本拠にして統治したというのだが、武藏國小山田荘にいた小山田がなぜ甲斐國都留郡を支配するようになったのかについては定かでなかった。

甲斐國は一国ではなく、領地が北・南都留二郡の郡内と山梨・八代・巨摩三郡の國中に二分されていた。

郡内とよばれる小山田領の都留地方は、大菩薩山系につづく御坂山系を境にして甲斐國東部（山梨県北・南都留郡）の山中湖を水源とする桂川流域地帯のことで、西部全域は國中といい守護職の武田領であった。

だから小山田領は、東と北を武藏・相模の北條、南を駿河の今川、そして西を國中の武田に囲まれていて、いつそれらの大国に踏み潰されてしまうかわからぬ不安に脅える戦々恐々の状態におかれていた。

ことに武田とはなにかにつけて小競合いが多かった。

甲斐守護の武田にすれば、守護国を二分している小山田が目障りで、その存在が面白くないに違いなかった。

源義家の弟新羅三郎義光系の信義が武田を名告って十代目の信滿は、小山田の女を娶る条件で和睦してきた。

それは小山田を侮れぬというよりも、与党に入れて対今川、北條の緩衝地帯にしたかったのであろう。

小山田も四面楚歌より武田の後ろ盾があったほうが緊張が解れるから幸いで、双方にとって好都合であった。

さらに五代あとの信虎が、國中完全制覇の猛将でありながらなおも妹を信茂の父信有に嫁がせて絆を固めた。

だから、信茂にとって信玄は母方の従兄に当たる。

小山田は婚姻による同盟与党であったから、あくまでも武田の客将として待遇されるべき立場であった。

客将といっても信茂は、いざ出陣となれば譜代重臣と同様積極的に参陣しては棟梁の信玄を支えて奮闘した。

十三歳で小山田の当主になって父の遺領を継承してから今日まで、盟友信玄には粉骨砕身尽くしてきた。

家督の翌年から十二年間に五度対決した上杉謙信（当時長尾景虎）とのいわゆる川中島の合戦には出陣しなかったが、信玄率いる武田軍の強さは知らされていた。

川中島の合戦は竜頭蛇尾の痛み分けで終わってしまったが、翌年信茂の許に驚愕の事件が飛び込んできた。

信玄が嫡男義信を府中東光寺に幽閉したというのだ。

義信といえば信玄の弟信繁と山本勘助が戦死した川中島八幡原の激戦で負傷しながらも奮戦したと伝えられて

いて、頼もしき後継者と期待している人物だったのだ。

伝えきくところによると、駿河の今川義元が斃れたことによって相模・武藏の北條氏康との三国同盟の一端が崩れたので、信玄はその駿河を併合しようと企んだ。

それを知った義信は反対を唱えたが、信玄はきかず、

「武田が併合せずとも北條か徳川に奪われるは必定」

そう言い切って逆に義信の甘い考えを嘲笑した。

義信が側近たちと相談して、

「実行を阻止するためには父信玄の暗殺もやむなし」

の結論にいたったことを傅役飯富虎昌の弟昌景の直訴で知った信玄は、ただちに義信を幽閉、飯富を切腹、側近たちを国外追放に処して暴挙を未然に防いだという。

信茂は、信玄が将来を期待できる義信を抹殺してしまったことを惜しんだが、信玄の立て直しは素早かった。

信玄は幽閉した義信を諦めたかのような行動に出て同盟を求めてきた織田信長の条件を受け入れ、その姪の美濃苗木城主遠山勘太郎の女を四男勝頼の妻に迎えた。

そして三年後の二月、遠山夫人は待望の男子を出産したが、産後の肥立ちが悪く身罷ってしまった。

織田の血を引くこの嬰児は、竹王丸と命名された。

その年の秋、義信は東光寺で自害した。

信玄は家臣たちの動揺を慮って重臣たちを躑躅ヶ崎館に集めた。信茂たち客将も召集されて府中へ出向いた。

話は後継者のことであった。

正室三條夫人（三條公頼女）には三人の男子があったが、二男信親は盲目の半僧半俗で信濃會日の海野下野守の養子になっており、三男信之は十歳で夭折していた。

四男勝頼は略取した隣国諏訪頼重の女に産ませた子で、名門諏訪氏の再興を図り諏訪四郎勝頼としていた。

〈勝〉の字こそ信玄の幼名の一字であるが〈頼〉は諏訪氏代々の通字で、武田氏の〈信〉は与えていない。

そこで信玄は、誕生したばかりの竹王丸を養子にして十六歳で元服させ〈信勝〉と命名させることを考えた。

〈信〉は武田氏代々の通字であり、〈勝〉は信玄の幼名勝千代の一字であるから名跡を継ぐに相応しかった。

信玄は招集した重臣・各将たちにそう伝えると、

「儂の死後は竹王丸が成人するまで勝頼を陣代とする」

ことをつけ加えた。

陣代とは、幼少の当主の後見役のことである。

つまり、勝頼は武田の棟梁にさせないということだ。

信茂は、義信亡きあと武田の名跡を継ぐのは当然勝頼だと思っていたから、信玄の発言に唖然とした。

（信玄は勝頼を信頼していないのか）

信茂はそう疑った。

なにはともあれ、義信の諫死による家臣団の動揺は、間髪容れぬ信玄の具体策発表によって収束した。

以後信茂は、信玄と勝頼の言動に注目しつづけた。

義信自害の翌冬、信玄は早速駿府侵攻を開始して今川の当主氏真を遠江掛川城（掛川市）に敗走させた。

そして翌秋返す刀で北條氏康の小田原城を包囲した。

この小田原攻めの先衆のなかに信茂も加わっていた。

だが信玄は僅か三日間で陣を解いてしまった。まずは威圧するだけに留めておく駆け引きの妙であった。

しかも退き際に、

「信玄は陣を解いて鎌倉の鶴岡八幡宮へ参詣する」

噂を流させた。この計略に嵌まった氏康は追撃しなかったので、武田軍は悠々と撤収することができた。

信玄はこのとき鎌倉へ行くとみせかけておいて実は平塚から相模川沿いに遡り、津久井からさらに道志川沿いに遡って信茂の小山田領郡内へ入る行路を考えていた。

ところで小田原へ向かう武田軍に威嚇攻撃された瀧山城（八王子市）の北條氏照、鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）の北條氏邦兄弟は軍容を整えると小田原城の後詰に向かったが伊勢原あたりまできて武田軍の撤退を知り、平塚から厚木方面に向かっているとの報に三増峠経由で津久井へ出るに違いないと判断して退路を断つべく急ぎ引き返して志田山に先行、峠道周辺に布陣して待ち構えると挟撃すべく小田原の父氏康に追撃を依頼した。

これを予期していたかのように信玄は山麓で軍勢を二手に分けると、馬場信房、勝頼、内藤昌豊らの諸隊を囮隊にして直進させ、信茂も加わっている信玄率いる本隊は峠の東側間道を回り、山縣昌景率いる別働隊は峠の西側の志田峠へ向かわせることにした。

三増峠へ差し掛かった囮隊は北條軍に一斉攻撃をかけられ算を乱してみせたので奇襲は成功したかにみえた。

ところが直ちに三増峠へ転進した信玄本隊と山縣隊が側面から包囲する形で北條軍に襲いかかった。

北條軍は挟撃されて崩され敗走した。この信玄の採った速攻に小田原の追撃軍はついに間に合わなかった。

信茂は実戦に参加して謀将信玄の手の内に感服した。

その後も信茂は、信玄率いる武田軍に参加して戦法の妙を体験するたびに、その偉大さに舌を巻いた。

信玄最後の戦いになった徳川家康との三方ヶ原の合戦に於ても得意の駆け引きと陽動作戦が如何なく発揮されて、指揮下にいる信茂も感嘆する見事な采配であった。

二俣城（天竜市）を陥とした武田軍は一路濱松城を目指して南下した。信玄はここで家康と雌雄を決する構えを見せたが、家康はその挑発には乗らずに籠城戦に持ち込んで織田信長の援軍を待って挟撃しようと謀った。

ところがそんなことは先刻承知の信玄は、城下に入ると濱松城には見向きもせずに通り過ぎていった。

迎え撃つ構えの城兵たちは唖然とし、無視された家康は自尊心を傷つけられ、面目は丸潰れであった。

家康は逆上して信玄の挑発に乗せられ追撃を命じた。

武田軍が三河へ向かうには三方ヶ原を通って祝田の坂を越えなければならないから、その坂を下りはじめたところを背後から攻撃して追い落とそうと考えた。

ところが信玄は、祝田の坂上で全軍を停止させると縦長に〈魚鱗の陣〉を布き、必ず追撃してくるであろう徳川軍を待ち伏せた。つまり家康を誘き出したのである。

城攻めは手間取って織田軍が到着するまで時を稼がれてしまうので、得意の野戦に持ち込み決着を謀った。

信玄の策略に家康は引っ掛かってしまったのだ。

追撃した徳川軍は坂上にいる武田軍を発見するとただちに戦闘態勢に入って〈鶴翼の陣〉を布いた。

鶴が翼を広げて包み込もうとする横陣形である。

この徳川軍の逆三角形の陣に対して、武田軍のほうは中央部を敵軍近くに進出させる三角形の縦陣形で、山縣、内藤、小幡らの諸将とともに第一陣に配備された信茂の小山田隊は戦闘にあたって先鋒を命ぜられていた。

戦端が開かれると三箇月に亘んとする長途遠征で疲労困憊している小山田隊は石川隊に押し捲られたが、馬場、山縣両隊が打って出て両軍入り乱れる混戦になった。

戦機熟すとみた信玄は温存しておいた勝頼隊に出撃を命じた。武田の武威を天下に轟かせた騎馬隊である。

このときの勝頼の戦いぶりはなんとも強引だった。

信玄が信勝を後継に選んだことではずされた勝頼は、父でありながらわが子が成人するまでその補佐役を命ぜられ、生涯家臣でおわることへの不満の鬱積からか、そうと決まって以後の掛川、小田原、駿府、深澤、高天神、

さらに足助、野田、吉田の各城攻めではまるで鬱憤を晴らすかのように遮二無二突撃を繰り返してきていた。
阿修羅の如く、完膚無きまでに叩きのめすその形相は異様で、なんとも物凄く、鬼気迫るものがあった。
勝頼の騎馬隊突入で徳川軍は蹴散らされ、敗走した。

二

三方ヶ原で勝利したあと信玄の持病が悪化したので刑部（浜松市）で越年し、正月早々野田城（新城市）を陥としたのだが武田軍の西上はここで頓挫してしまった。
信玄の病状がさらに悪化して進めなかったのである。
武田軍は西上を一時中止して長篠城に後退し、信玄は鳳來寺で療養につとめたが病状は悪化の一途を辿った。
帰国を急ぐ途中、信玄は信濃駒場（長野県下伊那郡阿智村）のあたりで多量の喀血をして息絶えた。
遺体は近くの長岳寺で秘かに荼毘に付された。
信玄の死は重臣たちはもとより従属する信茂たち客将や近隣諸国の武将たちにとってもまさに、
——巨星墜つ。
の感があった。
信玄は勝頼の嫡男信勝を後継者にして勝頼を後見役に決めたのだが、八歳の棟梁では士気に影響すると考えた信玄の弟で替え玉をつとめたほどよく似た逍遙軒信廉が、
「幼君の後見役では中途半端でやりにくかろうから、いっそ勝頼を新御屋形に推戴してはいかがであろう」
そう提案して重臣一同の賛意を得た。
そのとき、姉婿の穴山信君（梅雪）は唯一人異を唱えたが、重臣たちに説得されてついに折れると、蟠りを残さぬため勝頼に甲冑と最上胴を贈って祝いとした。
信茂も、かねがね、
（猪突猛進で配慮に欠ける勝頼は棟梁の器ではない）
そう思っていたが、おなじ武田の親族同士とはいえ穴山は武田の傍系でしかも二代つづいての女婿、信茂は母が信玄の叔母というだけのことで、繋がりの濃い穴山信君が承知したものを敢えて反対するわけにもいかず、同意を促されぬのをさいわい黙したままですごした。
穴山も、その心底は、
（勝頼嫌い）
に相違なかった。
勝頼は父信玄の遺志を継いでまず美濃に侵攻し織田方遠山景行の明智城（恵那市）を陥として初戦を飾った。
ついで遠江の徳川方の高天神城（掛川市）を囲んだ。
このとき城将小笠原長忠は濱松城の家康にたびたび援軍の要請をしたが、なぜか家康は一箇月経っても送ってこなかったので、力尽きた長忠は降服して開城した。
このとき勝頼は宿老たちが事あるごとに父信玄を引き合いに出すので、口惜しい思いをしていたが、その信玄

でさえ陥とせなかった高天神城を陥としたことで、
（ついに父を超えた）
思いで歓喜雀躍し、驍将に成長したことを自覚した。
しかし、この思い上がりが災いを招くことになる。
信茂は、その形振り構わぬ歓喜ぶりに眉を顰めた。
その憂慮が一年後には現実のものとなってしまった。
天正三年（一五七五）四月、ふたたび西上を開始した勝頼はいきなり三河に入り長篠城（新城市）を攻めた。
この城は信玄が略取したのだが武田軍が甲斐へ引き揚げているあいだに家康に奪い返されてしまっていたのだ。
城将奥平信昌は鳥居強右衛門を脱出させて岡崎城にいる家康の許へ走らせ、家康は信長に援軍を要請した。
徳川、織田連合軍は長篠城西方一里の設楽ケ原に到着すると、信長は兵士たちに命じて連子川沿いに柵をつくらせそのまえに空堀も掘らせて砦にした。武田騎馬隊の馬防柵である。そしてそこに千人の鉄砲隊を配置した。
この陣形を探り出した武田方は、宿老たちを醫王寺の勝頼本陣に集めてどう攻めるべきか作戦会議をひらいた。
信茂、穴山の客将をはじめ馬場、内藤、山縣、原、土屋、真田兄弟らの宿老たちは口を揃えて馬防柵と鉄砲隊を配置して待ち構えているところへ突撃するのは、
「飛んで火に入る夏の虫」
の譬えどおり無謀この上なく、徳川、織田連合軍が長篠城の後詰でありながら動こうとしないのは誘き出す策であって、迂闊に乗っては危険であるとして制止した。
だが、自信満々で強気の勝頼は、
「後詰に出てきておきながら仕掛けてこぬのは怖じ気づいて為す術がないからじゃ。なにほどのことやある」
そう反発した。その思い上がりには手のつけようがなく、並居る宿将たちはただただ呆れるばかりであった。
佞臣の長坂長閑と跡部大炊助が勝頼を嗾けたので、勝頼は意を強くして騎馬隊による総攻撃に傾いていった。
勝頼は決戦を開始すべく本陣を醫王寺から清井田付近まで前進させると、長篠城の包囲を解いて合流させた。
そのことによって長篠城の監視は後方鳶ノ巣山砦の信玄の弟河窪信實と三枝守友の隊だけになってしまった。
その鳶ノ巣山砦が、あろうことか武田軍油断の隙を衝かれて徳川方酒井忠次指揮の混成部隊に急襲され、河窪、三枝の両将が戦死して砦を陥とされてしまった。
酒井混成部隊と長篠城の奥平隊が合流して後方から攻めてくれば武田軍は挟撃されて不利に陥ってしまう。
全滅の憂き目を恐れた勝頼は、決戦を急いで焦った。
だが諸将たちは異口同音に野戦になれば兵力差で勝ち目はないからここはひとまず鉾先を躱して兵を退き、いったん帰国して好機を待つのが賢明であるといって押し留めたが、聞く耳持たぬ勝頼は全軍寒狭川を渡って設楽

ヶ原に入り徳川・織田連合軍と対峙するよう命じた。
その無謀さに宿老たちは呆れ、唖然としてしまった。
信茂は、このとき信玄が勝頼を後継者にしなかった理由が理解できた。勝頼の器量を見抜いていたのだった。
生還のない攻撃は自滅であるから、いかに勝頼といえども承知のはずで、そんな無茶をするはずはない。
では、なぜ宿老たちの制止に応じなかったのか。
それは勝頼の自信過剰がわざわいしたのである。
勝頼は、武田の誇る騎馬隊ならば馬防柵を突破できると確信していたし、織田の鉄砲隊を甘くみていた。
宿老たちは、武田家の滅亡に殉ずることを覚悟した。
このときの織田の鉄砲隊は完全に組織化されていた。
足軽三人を一組にして最初の一人が発射できる態勢のとき二人目はすでに撃てる準備を整えており三人目は弾込め火薬入れにかかっているという流れ作業であった。
そして各組ごとに射撃範囲を定めておいてそれぞれ敵が馬防柵で立往生したところを狙い撃ちするのである。
勝頼は俄か作りの柵など一蹴できるし、鉄砲隊の一斉射撃も突撃をずらせば躱すことができると考えていた。
五月二十一日卯の刻（午前六時）に戦端が開かれた。
先陣は左翼の山縣昌景隊で、徳川軍右翼の大久保忠世隊目掛けて突入したが一斉射撃を受けて斃された。
相次ぐ騎馬隊怒濤の突撃もつぎつぎに斃されていった。

勝頼が俄か作りと見縊った馬防柵は交互に二重の構えだったので足軽隊が突破に手間どったために騎馬隊が柵を越えられず恰好の標的になったのが誤算であった。
騎馬隊が立往生してしまっては自殺行為である。
それでも武田軍は入れ替わり立ち替わりして突撃を繰り返したが、ついに馬防柵の一角さえも崩すことができず譜代の部将たちは相次いで討ち死にしていった。
もはや残存兵力では戦闘にならず、未の刻（午後二時）ごろにはすっかり戦意喪失して退却がはじまり、四散した雑兵たちはそのまま逃げ去ってしまった。
勝頼は信長の策に嵌められ無残な敗北を喫した。
信茂は小山田隊の一部を割いて長篠方面の警備にあたっていたので、残存将兵を集めて帰国の途に着いた。
勝頼は、本陣にいる残兵を率いて最後の突撃をしようとしたが、側近たちに説得されて思い留まった。
勝頼が土屋昌恒、初鹿野昌久らの近臣たちに護衛されて設楽ヶ原を脱出するとき、殿を買って出たのは宿将のなかでただ一人生き残っている馬場信春であった。
信春は、勝頼の一行を寒狭川まで見送ると設楽ヶ原へとって返して追手と奮戦し、壮烈な討ち死にを遂げた。
信春はこのとき六十一歳。武田三代に仕えた最古参の重鎮として生き恥曝すを潔しとしなかったのであろう。
勝頼一行は豊川沿いを遡り田峰から伊那街道に入ってさらに北上をつづけ、武節城（豊田市）に逃げ込んだ。

このとき勝頼主従はたった六騎だったという。
（勝頼にとって長篠の戦いは最大の屈辱であったろう）
信茂はそう推察した。
父信玄が陥とせなかった高天神城を陥としたことの自信過剰から同族穴山信君も苦り切るほどの独善的で強引な遣り方が災いしたのだから、気の毒だが完敗は自業自得というよりほかないと信茂は冷めた眼で見ていた。
その後の勝頼は名誉挽回を焦った。
だが、信玄以来の重鎮と家臣団の多くを失って弱体化した武田軍団に勝利の女神は微笑んでくれなかった。
徳川軍に諏訪原城（島田市金谷）を、織田軍に岩村城（恵那市）を陥とされて奏んでゆくばかりだった。
勝頼はやむなく越後の上杉景勝に妹菊を嫁がせ、小田原の北條氏政の妹を娶って同盟を結び挽回を図った。
だが、上杉景勝は越後の統一に躍起であり、北條氏政は家康と和睦してしまって助力を頼む目論見は外れた。
勝頼は自力で遠江の横須賀城（掛川市）を陥とそうとしたが家康に救援されて叶わず、高天神城に退いた。
その高天神城ものちに家康に攻められ、城将岡部長教らは支え切れず討ち死にしてついに陥とされた。
信玄は生涯他国攻めに終始して領国甲斐にはいちども攻め込まれたことがないので城を築かず、躑躅ヶ崎館を本拠にしていたが、勝頼は織田・徳川連合軍に大敗を喫して守勢一方に立ってしまったので、大半を喪った戦力にかかわる堅城の必要に迫られ、始祖義清が甲斐國武河の荘官として武田（韮崎市）に住したことから、その武河荘の七里ヶ岩の台地に城を構築して新府城とした。
そのころ、信茂らの与党のなかから離叛者が出た。
木曽義仲の後裔で木曽地方を領する木曽義昌である。
義昌の父義康は信玄に攻められて和議を結び義昌に信玄の女を宛てがわれて武田の与党になったのだが、甲斐は遠く美濃は隣接している立地から信長に誘われ遠隔で衰退している武田よりは安泰と考えたのであろう。
勝頼は離叛した木曽義昌を討つべく諏訪の上原城（茅野市）に出陣したので、義昌救援の織田信忠軍が木曽口の南木曽から木曽山脈を越えて伊那路へ向かってきたことから、清内路村の瀧澤要害は叛乱により自落した。
信忠軍を迎え撃つはずの伊那路にある松尾城、飯田城（いずれも飯田市）、大島城（下伊那郡松川町）の城将たちはいずれも戦わずに逃亡してしまったので、信忠軍は難なく北上すると高遠城（伊那市）に迫ってきた。
このころ、駿河江尻城（静岡市清水区）の穴山信君も家康から所領安堵を約束されて寝返ってしまった。
勝頼は、ついに二代つづいて武田の女が稼した重縁の親類衆筆頭にも見放されてしまったのである。
高遠城将は勝頼の異母弟仁科五郎盛信であった。
盛信は織田軍の甲斐侵入を阻止すべく必死に防戦したが、援軍なき籠城戦は活路がなく、ついに三月二日、二

十六歳の盛信はじめ城兵五百余人が玉砕して落城した。
そして三月三日、勝頼からの急使が届いたのである。
長坂長閑のすすめで武田の残存兵力と小山田勢をもって笹子峠で織田軍を迎え撃とうというのであった。
（あの勝頼が頼ってくるか）
信茂はついに勝頼に縋られるかと苦笑した。

二

信茂は夜が明けると朝餉もそこそこに馬を駆って岩殿城に急いだ。城は岩殿山（大月市）にある山城だった。
岩殿山（六三四メートル）は断崖に囲まれていて、南面は岸壁が聳え立ち、南を桂川、北東を葛野川が山を迂回しているその流れを堀にした要害であった。
信茂は、山頂本丸の烽火台に立って領内を俯瞰した。
信茂の郡内領は甲斐國のうち大菩薩山系につづく御坂山系を境にして國中の武田領と分け、東は武蔵、相模の北條領と境を接する南北に細長く延びた地形であった。
山間にある狭小の耕作地には、田起こしに精出している農民たちのすがたが小さく点在していた。
西を向いて笹子峠のあたりを眺めたとき、信茂の眼に勝頼が残兵に護られて逃げ込んでくる様子が浮かんだ。
そうなれば追撃の織田軍も笹子峠から侵入してくる。
なんとしても笹子峠を死守しなければならなかった。
だが、郡内領への侵入口は笹子峠だけではない。
國中からはほかに御坂山を越えて河口湖にいたる御坂みち、駿河からは御殿場、須走を経て籠坂峠から山中湖にいたる鎌倉往還、相模からは甲州みちのほかに津久井から道志川を遡行して山中湖にいたる道志みちもある。
勝頼が郡内にいる以上織田信忠は笹子峠から攻め込めなくても御坂みちからくるであろうし、家康軍が鎌倉往還、家康と和睦した北條氏政が甲州みちや道志みちから同時に攻め込んでくれば万策尽きてひとたまりもない。
そうなれば天険の要害岩殿城を主戦場にするほかないが、救援なき籠城は糧道を絶たれれば堪え切れず自落してしまう。あの仁科盛信でさえも撥ね返せなかったことを思うと無駄な抵抗にすぎずその無惨は哀れであった。
勝頼を庇えば領土は戦火に見舞われ踏み躙られる。
（このまま武田に殉じてよいものか）
（領主は領民の生命と財産を護る責務があるはずだ）
（領主の存念で領民を犠牲にしてよいのか）
（ここは武田を庇うより領民の安泰を図るべきで、それが領主のつとめではないのか）
苦悶した信茂は、自問自答を繰り返したすえに武田と訣別して郡内の領主に立ち返ることを決断した。
信茂は、笹子峠に鉄砲隊を配置すると、
「よいか。鶴瀬から笹子峠へ向かってくる一団は織田の先鋒隊に違いないから、人影を見たら容赦なく撃て」
そう下知した。

勝頼らの一行は鶴瀬から郡内へ向かおうとしたところで一斉射撃を受けて信茂の離叛を知り、大菩薩の山中に匿れようとうしたが、瀧川一益隊に追いつかれて逃げ場を失い、大和村田野の山中で勝頼・信勝父子、それに北條夫人をはじめ家臣や女房衆は全員自決して果てた。
新府城を出たときは五百人いた家臣団も途中散り散りになって最後まで供したのは僅か四十人余りであった。
勝頼主従が田野で自刃して二日後の三月十三日、府中善光寺（甲府市）に本陣をおいた織田信忠から信茂に、
「家族全員を伴れて出頭するよう」
命じてきた。
それを知った家臣たちは、家族全員での出頭に不審を抱いたが、信茂は、信長が武田への不義を赦すはずはないと死罪を覚悟していたので動ずることはなかった。
翌十四日、武田の血を引く老母、八歳の嫡男、三歳の二女、それに従兄弟の小山田八右衛門行村、家臣小菅五郎兵衛ら血縁譜代の家臣十数人を供にして出発した。
午後、善光寺の本陣に着いた信茂は信忠に謁見した。
「郡内地方を犯さぬようお願いいたす」
わが生命と引き換えに郡内の安泰を希う信茂に、
「神妙である。出頭大儀であった。宿坊で寛がれよ」
信忠はそう無愛想に言っただけで否諾はなかった。
その夜信茂の許に長女の婿で信玄の弟信友の嫡男武田左衛門佐信光が捕われ処断された報らせが届いた。
それから十日後の二十四日朝、則武三太夫という者が屈強の供侍に甲冑を持たせて信茂の宿坊にやってきた。
「この甲冑は信忠公よりご下賜の品でござる。有難くお受け取りなされるように」
三太夫はそう恭しく言上して、供侍に甲冑を信茂のまえに差し出すよう申しつけた。
実はこれが謀略で、武田の残党狩りを終えて後事を河尻秀隆に託し帰国の準備にとりかかった信忠は、足軽隊長堀尾茂助を呼び出して信茂殺害を命じたのだった。
堀尾は則武三太夫に刺客を命じた。
三太夫は信茂を騙し討ちにする秘策を練り甲冑を信忠からの下賜と偽って信茂が恐縮して手をつき深く頭を下げたところを討ち首にしようと企んだのだったが、信茂は流石に身のこなしひとつにも隙を見せなかった。
諦めた三太夫は、居住いを正すと信忠の命を伝えた。
苦笑していた信茂は、
「お手数をおかけいたしたこと恐縮に存ずる」
そう三太夫を慰めておいて、
「よくぞ打ち明けて下された。委細承知で覚悟いたしこの日を待っておりました。即刻この首をお打ち下され」
そう伝えると、両眼を閉じて端座した。
三太夫は信茂を討ち取ることを躊躇い動けなかった。
気配を察して両眼を見開いた信茂は、促すように、
「これまでござる」

そう言うやいなや咄嗟に脇差しに手をかけようとした。

遣い手の三太夫は信茂の僅かな動きに即応して佩刀の鞘を払うと、信茂を袈裟懸けに討って首級を挙げた。

この日、信茂の母、嫡男、一女の家族、いとこの小山田行村、家臣の小菅五郎兵衛ら数人も処刑された。

織田信忠は信茂との約束を守り、織田・徳川連合軍は笹子峠を越えて郡内領へは攻め込まなかった。

小山田信茂は四十三歳の一命を擲って領民の生命と財産を護り、領主としてのつとめを果たしたのだった。

後日談だが――。

織田信忠の計らいは徳川家康に引き継がれて、國中が府中藩（甲府藩）となっても郡内は谷村藩として独立をつづけ、鳥居元忠、成次、忠房三代のあと秋元泰朝、富朝、喬朝三代七十二年の施政がつづいたのち、寶永元年（一七〇四）十二月一日に柳澤吉保との交替で秋元喬朝は武蔵川越へ転封になった。

甲府へ入った柳澤吉保は谷村藩を併合してしまったので、小山田氏が郡内地方を領していたことや、最後の領主小山田信茂がわが身と引き換えに領民の生命と財産を護ったことはしだいに忘れ去られていってしまった。

（了）

捏造の天智天皇像

（天智称制と唐の長期倭国駐留の謎解き）

隆　恵

はじめに

天智天皇（中大兄皇子）と言えば、日本人なら誰もが知っている天皇で、天皇中心の中央集権制を初めて実現したとされている。

日本書紀によれば、天智は舒明天皇を父に、皇極・斉明天皇を母として生まれ、六四五年の「大化の改新」（近年は乙巳の変と呼ぶ）で父母の両天皇を蔑にした蘇我氏宗家の蝦夷と入鹿の親子を討伐した後、叔父の孝徳天皇を即位させ、更に孝徳亡き後は母親を再度皇位に戴いて、母親の斉明亡きあと約七年間皇太子の地位で政治の全権（天智称制）を握り、天皇在位は僅か三年で六七一年に崩御する。要するに、皇極即位の時に皇太子に任じてから、皇太子の在任期間は実に二十七年間の長期に亘り、天皇在位の三年間を加えると約三十年間も最高権力者の地位を保持した偉大な英君となっている。

天智は、遥かのちの平安時代の開祖である桓武天皇の先祖に当たるので、爾来長きに亘って天智礼賛が続くが、肝心の書紀では天智の功績よりもむしろ負の記録の方が多い。その負の記録とは、長年親密な百済が大国唐の攻撃を受けて滅亡に瀕しているのに支援を続け、滅亡してからも百済再興のため大軍を半島に送るも完敗し、挙句の果てには七年間に亘って唐の使節や軍隊が筑紫に来て威嚇され、一転して専守防衛のために西日本に数々の防御用城砦を築き、一連の軍事費と兵員の損失及び敗戦後の防衛費が嵩み、最後には近江京遷都の浪費まで行い、豪族や一般民衆の不満は大変であったとある。次なる負は、人間として非情なまでの策謀家振りにある。

乙巳の変のあと、異母兄と義父並びに孝徳の有馬皇子

の三人を無実の謀反の嫌疑で謀殺し、最後には弟の大海人皇子（天武天皇）にも謀反の罠を仕掛けるなど、如何に権力闘争とは言えここまでの悪人振りには驚く。これらの負の実態は衆知の事実だったので、書紀も記録せざるを得なかったのであろう。

天智に纏わる謎は多々あるが、江戸時代以降今日に至るも納得できる解明はない。本稿では限られた紙面の範囲で、書紀の捏造と虚飾を剥ぎ取り、「天智称制と同時期の唐の軍隊の筑紫駐留」の真相究明に焦点を当てながら、天智の諸々の謎解きをする。

本稿の結論は、世に異端説とされる多くの論考と似た部分があるので、奇想天外過ぎると唾棄される事を危惧するが、書紀の記録の「全体の大きな文脈」を冷静に読むと、この推論が至当と自負している。諸先輩のご批判を楽しみにしたい。

尚、天皇や日本の呼称は天武の時代以降だが、混乱を避けるため大王の呼称は使わず天皇と表現し、国名はそのまま倭国とする。

（序章）日本書紀の解読の留意点

この国史編纂を命じたのは天智亡き後の天武であるが、完成するのは七二〇年の孫の元正女帝の時代であった。実に三十余年の歳月を要した労作であった。古今東西の歴史書は、編纂時の権力者の思惑即ち己を正当化するために敗者を不当におとしめるので、その記録の全ては信用できない。書紀は我が国初の歴史書であり、国内の政治上のライバル向けだけでなく、海外の唐や朝鮮半島の新羅、また旧百済や旧高句麗の支配階級の亡命者の目を意識した筈である。

編纂時の権力者は、天武崩御後の皇位を継承した持統天皇とその子孫であり、彼らを掌中の珠として権力を独占していた藤原不比等と四人の息子たちであった。彼らが権力継承の正当性の根拠としたのは、天武の血統に加えて皇后の持統の血統を継承している事とする。これにより天武の数多くの皇子たちをライバルから排除しようとした。そのためには、彼女の父の天智を最大限に美化する必要があった。その捏造の最大の狙いは、建国来天皇家が並み居る大豪族たちから突出した最高の名家であり、その血統は万世一系を貫き、常に主導的に政治力を発揮し続けたと脚色する事であった。こうした編纂者の思惑を如何に排除するかが、史実の探り当てのポイントである。その見極めの注意点は、奈良時代以前は弱肉強食の時代であり、財力と武力の源である土地と民を所有する大豪族の時代であって、その裏付けのない歴代天皇には「鶴の一声」のような天皇親政はごく一部の天皇を除けばほとんど存在しなかった。天皇家に限らず豪族たちの族長や家長の地位も全く同じであった。即ち後世の価値観である長子相続制や儒教の倫理観等はほとんどなかった。こんな観念に拘っていれば、死か没落が待っていた時代だったからである。

第一章　日本書紀の記録の概要

（一）天智天皇の血統

父は、推古女帝の後継天皇であった舒明天皇（田村王子）で、敏達天皇の息子の押坂彦人皇子の王子に当る。母は、父の跡を継ぐ皇極・斉明天皇（宝王女）であり、押坂彦人の孫に当たるので、舒明とは叔父と姪の関係である。田村は、王子時代の三十才頃に同年令のバツイチの子（漢王子）連れの宝王女を妃に迎えている。要するに、天智の先祖は天皇家の純血の血統としてある。

ところが、こと天智自身はとなると、皇后と三人の正妃のうち三人が蘇我氏系の血統であり、もう一人も阿倍氏の血統で純血の皇族からは妃を迎えていない。

（二）父の舒明天皇の即位の経緯と治世

推古は死を前にして、田村と用明天皇を祖父とし聖徳太子（厩戸皇子）を父とする山背大兄王子を枕元に呼び寄せ、やや田村を優先するかのような曖昧な遺言を残す。推古崩御後、蘇我蝦夷は蘇我氏の非血統の田村を推挙し、一方馬子の兄弟で叔父に当たる境部摩理勢は山背を強力に推し、諸豪族たちの意見も二分されて延々と月日が経過する。業を煮やした蝦夷は、斑鳩に住む境部に討手を掛けて一族を討伐し、やっと舒明が誕生する。蝦夷と田村との関係は、蝦夷の妹が田村の妃になって、甥に当たる古人大兄皇子を設けていただけに過ぎない。

舒明紀は、第一次遣唐使の派遣、半島の三カ国との使節の往来、天災・天変地異の記録があるのみで、緊迫しつつある半島情勢への対応などは全くなく、あたかも平穏な時代であったかのような記録である。

（三）母の皇極天皇の即位の経緯と治世

六四一年に舒明は在位十二年で崩御し、今度はいともスンナリと中大兄皇子と大海人皇子の生母である宝皇后が即位し、推古に次ぐ二人目の皇極女帝の誕生となる。中大兄を皇太子とし、蝦夷を引き続き大臣とするが、蝦夷は国政を息子の入鹿に任せ一線から身を引く。蝦夷の悪事を縷々と語っており、入鹿にも悪事があったとして、六四三年に入鹿が斑鳩に住む山背一族を討伐し、蝦夷が馬鹿な息子よと嘆いたとある。

余談であるが、斑鳩は飛鳥の都から二十余キロも離れた片田舎で孤立した山背が謀反を起こす筈がなく、山背は一昔前の推古の後継者争いで境部が討伐された時に、蝦夷が滅ぼしたのが史実であろう。この入鹿の悪事の記録は見え透いた創作である。

皇極紀は、乙巳の変の原因となる蝦夷・入鹿親子の専横振りの記録に終始し、そのクライマックスが六四五年の有名な絵巻物に残る壮絶な入鹿惨殺の場面を迎える。

中大兄と中臣鎌足は、蝦夷の甥の蘇我倉山田石川麻呂の味方を得て、蝦夷と入鹿の抹殺を計画、首謀者の中大兄は殺害担当の者がたじろぐや、自ら太刀を振るい入鹿

の首を刎ねる。更に蝦夷宅に討手を掛け、蝦夷は邸宅の焼失の中で自刃し、計画は成功する。皇極はこの惨事に驚き退位を決断し、二十才の息子の中大兄への譲位を願う。

中大兄は鎌足に相談するが、鎌足の意見は年長の異腹兄の古人大兄皇子か、あるいは叔父の軽王子（皇極の弟）に譲るべしとする。これに対して、古人は吉野に隠棲したいと固辞、軽は固辞しつつ即位に応じて孝徳天皇が誕生する。

（四）孝徳天皇の治世

孝徳は、二人の義父の阿倍倉梯を左大臣に、蘇我倉山田石川麻呂を右大臣に、甥の中大兄を引き続き皇太子とし、都を飛鳥から難波に遷都する。律令制度の創設等の内政の大改革（大化の改新）を遂行する。五十二才の老人の孝徳は、十八才程の中大兄の実妹の間人皇女を皇后とし、外交政策は長年の親百済一辺倒から、親新羅・唐政策に軌道修正する。

しかし即位四年後、左大臣の阿倍倉梯を病気で失い、同年に右大臣の蘇我倉山田石川麻呂を中大兄からの謀反報告を真に受け、この一族を皆殺にしてしまう。結局孝徳は、最も頼りとする左右大臣の二人の義父を同時に失う。蘇我右大臣の謀反の無実が後日判明して、中大兄は気の毒な事よと後悔する。

孝徳の病没一年前、中大兄は母の前天皇と妹の間人皇后及び重臣の主だった者たち全員を引き連れて、孝徳を難波に放置して飛鳥に移転し、孝徳は翌年の六五四年に崩御する。

（五）斉明天皇の治世

孝徳崩御後、先代の皇極がこれまたスンナリと即位し、初の重祚（二度目の即位）の斉明天皇が誕生する。六五八年、皇太子の中大兄は孝徳の皇子の有馬皇子を謀反の嫌疑で絞首刑にする。

六五九年、遣唐使（百済駐在将軍宛）を派遣、翌年の六六〇年、百済は新羅と唐の連合軍の攻撃を受けて落城、王以下重臣達は捕虜になるとの報告が入る。

倭国は、来朝中の百済王子の豊璋を百済再興のため渡海を準備するが、前線基地の筑紫に行宮していた斉明は六六一年に崩御する。

（六）天智称制の治世

六六一年、豊璋を後継百済王とし、援軍と武器と食料を百済の旧臣たちに送る。高句麗からも援軍依頼があり、旧百済領経由で送ろうとする。六六二年、豊璋百済王に援軍を添えて渡海させ、二万七千の大軍を派遣する。六六三年、半島の白村江で唐と海上決戦となり、倭国軍は大敗、豊璋は高句麗を目指して逃走、百済の再興は失敗に終わる。六六四年、善光を後継百済王とし難波に住まわせる。

唐の百済領占領将軍から郭務悰が派遣され、上奏文と

貢物を献上して七ヵ月後に帰国する。筑紫・長門・屋島・対馬に防御の城砦を造り、防人を置く。

六六五年、唐の使節の劉徳高と郭務悰が再度来朝、上奏文と貢物を献上して三ヵ月後に帰国する。この間二回ほど高句麗使が来朝する。

六六七年、飛鳥から近江に遷都するが、天下の人民はこれを喜ばず、風刺し諫める者が多かった。唐の将軍から倭国軍の捕虜の送還を受ける。六六八年、中大兄は即位して天智天皇が誕生する。

（七）天智天皇の治世

約二十年前に謀反の罪で殺害した異腹兄の古人大兄（生母は蘇我蝦夷の妹）の姫の倭姫王を皇后とし、四人の正妃の内一名はこれまた謀殺した蘇我倉山田石川麻呂の姫、あとは阿倍倉梯と蘇我赤兄（石川麻呂の弟）の姫たちである。

四人の妃との間に六人の皇女が生まれるが、その内四人が実弟の天武の皇后（のちの持統天皇）と正妃三人となり、もう一人は天武の皇子の草壁皇子の妃（のちの元明女帝、文武天皇の生母）となる。他の妃との間に大友皇子が生まれ、後の壬申の乱で大海人との戦に破れて自刃する。

この在位三年間の治世は、新羅や旧百済や旧高句麗からの使節到来が記録され、また唐の軍隊の二回に亘る筑紫駐留があり、河内・高安、長門、筑紫に城砦を築く。

この間藤原鎌足の死、大友の太政大臣就任、天智は臨終に際し、重臣たちに大友への忠誠の誓紙を書かせる一方、大海人に譲位をほのめかして受ければ暗殺を目論むが、大海人の機転で取り逃がす。

六七一年、天智が崩御するや、六七二年に吉野で隠棲していた大海人が挙兵、大友の朝廷側と壮絶な戦闘となり、結局大友は自刃、大海人の勝利となり天武天皇が誕生する。

第三章　朝鮮半島の三か国間の攻防と中国の隋と唐の勢力拡大

（一）百済と高句麗の滅亡

倭国は、半島南部の伽耶地方に長年権益を保持していたが、新羅と百済により逐次侵食され、最後の砦としていた領土も六世紀前半に百済に割譲、半島での権益を失う。爾来、百済とは親密な関係を保ち続けるが、長年仇敵だった新羅を敵視するのが、倭国の不変の外交方針となる。

六世紀末、大国の中国では数百年ぶりに統一王朝の隋が建国され、周辺の異民族の脅威となる。倭国は、聖徳太子の時代に遣隋使を派遣して隋とは友好関係を維持するが、隋は隣国の高句麗を執拗に攻撃し、これを高句麗は防戦しつつ半島の南下を繰り返して百済と新羅を攻撃、その一方百済と新羅間でも攻防戦が激化する。

唐が隋を滅ぼして勃興すると、半島の三か国は直ちに朝貢して王の冊封を受けるが、唐は高句麗征伐に本格的

に乗り出す。高句麗はこの攻撃に対して百済と連合、唐は新羅と連合してこれに対抗する。この半島の緊迫時期こそ、倭国では舒明・皇極朝で蝦夷が実権を握り、三か国の使節が頻繁に来朝する。

六四五年の乙巳の変の直前には、ほぼ同時期に高句麗と百済の宮廷で、対唐強硬派が融和派を一掃する宮廷革命が起き、倭国の対唐軍事作戦の側面支援を要請してくる。一方の新羅は、高句麗と百済の連合軍の攻撃に耐え兼ね、唐の属国化要求を受け入れて全面的支援を得つつ、その傍ら倭国に協力要請を行ってくる。この百済・高句麗両国の対唐強硬派の宮廷革命は、正に倭国では皇極朝で入鹿が実権を握っている時期で、乙巳の変の二～三年前の出来事であった。

高句麗と百済の連合軍は、倭国の側面支援を得るも年々劣勢となり、乙巳の変から十五年後の六六〇年の斉明朝の時に百済が滅亡し、その八年後の天智朝の時に高句麗も滅亡する。百済の再興を目指して倭国は、六六三年に半島に大軍を送るも大敗で決着、この百済再興の夢は海の藻屑と化した。

（二）統一新羅の誕生

新羅は、唐に屈辱の属国化をも受け入れて、長年の仇敵の高句麗と百済の攻略に邁進する。先ず百済を六六〇年に滅亡に追い込む事に成功するが、新羅の狙いは唐の力を利用して半島の制覇が目的であるので、早速に百済の旧臣を受入れて厚遇し、旧百済勢の反唐戦闘の援助を行う。その傍ら唐と連携して高句麗征伐に注力し、六六八年に高句麗を滅亡させる事に成功する。しかし、この高句麗を唐が併合する気配なので、旧高句麗の王子に高句麗王を名乗らせ、高句麗の遺民をこれまた厚遇し、遂には半島からの唐の駆逐を目指して六七〇年に羅唐戦争が勃発する。この新羅の度重なる反唐攻撃に対して、唐からは厳しい詰問を受けるがしたたかな面従腹背の対応を取り、裏面から唐の撃退戦闘を行い、流石の唐も新羅を半島の統一王朝として認めるのが六七五年である。この唐の敗北に見える全面撤退の原因には、唐の宮廷内の混乱が大きく影響した。即ち、二代目の剛腕にして英邁な太宗が死に、三代目の凡庸な高宗の時代になっていたが、高宗の寵姫であった則天武后が政治を取り仕切るようになり、この内政の混乱に乗じて一旦屈服させた契丹の反乱などが起きて内憂外患の時期を迎えていた。

武后は、高宗存命中から垂簾（すいれん）政治を行い、高宗亡き後の六九〇年には唐を排して新を建国、長い中国の歴史で唯一人の女帝となる。この強国唐の内政混乱による半島からの撤退は、後述するように倭国の安全に大きく寄与する事となる。その時期こそ天智称制と天智朝の時期であった。

第三章　天智天皇にまつわる謎の解明

（第一の謎）天智の父母の舒明天皇と皇極天皇は本当に天皇だったのか

推古の後継天皇に、天智の父の田村を推挙したのは蝦夷とあるが、蝦夷が敏達天皇の一介の孫に過ぎない傍流の田村の擁立になぜ拘ったのか。それも、叔父の境部摩理勢と生死を賭した戦闘を行ってまで田村の擁立に拘ったのか。舒明亡き後母の皇極がスンナリと誕生とあるが、これまた蝦夷の推挙のお蔭であろう。この一連の蝦夷の行動の記録は、全く不可解で納得性がない。

その田村は、同い年の三十才前後のバツイチの子連れの宝王女を正妃に迎え、現在なら子連れの熟女を貰い受け、宝は二男一女の高齢出産をしたと言う信じられない話であり、この婚姻記録も納得性を欠いている。

舒明紀と皇極紀は、蝦夷と入鹿の大王気取りの横暴さを縷々と語るが、その一方半島の戦乱状況の対応については一切触れず、全体的に空々しい記録に終始している。

こうした全体の文脈から透けて見えてくるのが、舒明も皇極も創作された虚像ではとなる訳で、では誰が天皇だったのか。

蝦夷と入鹿が大王だったと考えると全ての謎が氷解する。即ち、天智の父母は天皇ではなかったと考えると、天智の諸々の謎解きができるのである。父の謎解きは後述する。

（第二の謎）天智は蝦夷と入鹿を討伐した英雄だったのか

彼の功績として、仇敵の蝦夷と入鹿を自ら討伐した事、いま一つは俗称大化の改新と言う内政の大改革を実施した事である。先ず大化の改新は、建国来豪族の所有だった土地と民を天皇の直轄下に置いたとするものだが、これらは全て後世に実施された政策をデッチ上げたと言うのが定説であり、虚構と断定してよい。肝心の乙巳の変の最大の功労者像だが、後述するように実は首謀者ではなく共犯者の一人に過ぎなかった。結局彼の功績はほとんどなかった事になる。

彼の業績の真の姿は、対外戦争の敗北と唐の侵略による亡国の危機を招いたと言う大失政であり、他には将来の政敵を矢継ぎ早に謀殺した事である。要するに、政治指導者としては失格、政敵を謀殺する事には長けていた人物と言う事になる。

（第三の謎）乙巳の変の首謀者は誰か、孝徳天皇はなぜ難波を都としたのか

真犯人は、阿倍倉梯と蘇我倉家の石川・日向・赤兄の三兄弟である。中大兄は彼らの仲間の一員ではあったかもしれないが、少なくとも首謀者ではなかった。

阿倍氏と蘇我倉氏の革命の狙いは、一つは蘇我氏宗家による大王位横領の長期化の阻止であり、いま一つは蝦夷と入鹿の百済支援一辺倒の外交政策の転換であった。そこで両氏は、無位無官の敏達天皇のひ孫の軽王子を担いで、孝徳天皇を実現する。両氏が軽を担いだ理由は、

自分たちの娘を妃に差し出している娘婿であり、また中大兄を皇太子とした理由も自分たちの娘婿だったからである。

天智にとって叔父の即位は、政治の表舞台に登場する絶好のチャンスとなる。従って、老人の叔父孝徳に年若い妹の間人王女を妃に差出したのである。しかし、政治の実権は左右大臣が握り、彼は皇太子と言っても単に世継ぎの候補者と言うだけであった。

乙巳の変の首謀者である両氏が、仁徳天皇以来の難波を都とした理由は、両氏とも本拠地が河内であったからであり、且つ蝦夷の本拠地の飛鳥は反革命の不穏な状況が残っていた筈なので、自分たちの地盤で孝徳を擁立したのであろう。

阿倍氏の根拠地は、古くは越前であったが、継体天皇の上洛後は河内を主要地盤としたと思われ、その名残として大阪市阿倍野区の「阿倍」の地名がある。蘇我倉氏は、元々の蘇我氏発祥の地の河内石川を本居地とする家系であり、馬子の弟の倉麻呂時代に物部氏から取り上げた河内の領地もあったと想像される。飛鳥に山田寺を建立しているのも、その財力の豊かさを窺わせる。

中大兄が義父の倉山田石川麻呂を謀殺した理由は、乙巳の変以降の外交が親百済から親新羅に路線変更となり、根っからの親百済派の彼には容認できなかったという事と、孝徳の両翼である阿倍の病死に間髪入れず石川麻呂を抹殺すれば、権力奪取がいよいよ実現できるとの野望によるものと考える。孝徳の後期には再度親百済政策に傾いて行くのは、彼が権力を逐次握って行ったからであろう。

第四章　天智称制の実態は、唐の使節・軍隊の長期駐留の目的は何か

（第一の謎）天智称制が七年の長期に亘った理由は何か

天智称制とは、天智が斉明崩御の六六一年から六六八年の即位まで、天皇を空位として皇太子のままで全権を握っていた事を指すが、何故七年間の長期間に亘ったのか。

書紀は中大兄が天皇に即位せずと記すのみで、斉明崩御から即位するまでの七年間は、百済を再興すべく来朝中の豊璋王子を百済王に任じて渡海させ、二万七千の大軍を派遣するも白村江の海戦で敗戦し、敗戦後は唐の使節が来朝し、その傍ら唐の攻撃に備えるべく城砦を各地に造り、防人を配置などと国事多難だったからとしている。しかし、半島への対唐軍事作戦は倭国の存亡を賭した一大決戦であり、ましてや国土防衛の緊急事態とあれば、尚更のこと最高権力者を明確化して、挙国一致で事に当たるのが常識であろう。

天皇や皇太子は主要豪族たちの体の良い飾り物と述べたが、孝徳の二大重鎮が亡き後の中大兄は、三十代の壮

年期を迎え且つ生来の策謀家でもあったので、孝徳朝の後期には阿倍比羅夫や蘇我赤兄等の豪族たちを年の経過とともに支配するようになったのであろう。

母の斉明朝では更に彼の権威は高まった筈で、この斉明の皇太子時代の七年間は正に記録通りの最高権力者の地位にあったと推測される。しかし、ひたすら落日の百済支援を続けるも、百済は滅亡してしまう。半島での敗戦と国土防衛のため、長年の戦費と国防費は膨大であったに違いない。

この兵員の大量損失と膨大な戦費は全て豪族たちの負担であり、その豪族たちは民衆からの搾取に転稼するので、国中に飢餓者が続出して国土は荒んでいたことは間違いない。その上に近江京への遷都で費用が嵩んだので、人々の怨嗟の声が多かったとわざわざ記録している。豪族たちからすれば、通算十二年間に及ぶ権力者としての彼の治世は惨憺たるものであり、おそらく疫病神のような存在に映ったであろう。

そこで大胆な仮説ではあるが、敗戦後の六六四年の唐の使節の来朝を機に、豪族たちから彼は皇太子の地位をはく奪され、後継者として「弟」の大海人王子が即位して天武となり、天武が飛鳥で国の再建に取り組んだのではなかろうか。天武を支えたのは、既存の大豪族たちが膨大な戦費等の負担で没落し、その代りに中堅クラスの豪族たちが天武を支えたと推測され、彼らが後の壬申の乱で貢献する。

天武の即位は六六四年と推定するので、天智称制の期間は三年弱となる。

では、天智の近江京遷都と即位の記録をどう解釈するかであるが、後述する唐の軍隊の長期駐留の威圧もあり、飛鳥から天智が近江に逃げ出して天皇を称したのではないか。要するにこの天智朝の三年間は、飛鳥の天武朝と近江の天智朝の二朝並立であり、壬申の乱で飛鳥の南朝天武に統一されたのであろう。

（第二の謎）四次に亘る唐の使節や軍隊の長期駐留の目的は何か

書紀では、白村江の敗戦の翌年から天智崩御の六七一年までの七年間の間に四回、特に後半の二回は二千人の軍隊を引き連れて筑紫に長期駐留したとなっている。そして、その目的は表敬と捕虜の送還となっている。

この時期の唐は、百済征討軍が旧百済領の掃討作戦を展開、一方高句麗征討軍は新羅と連携して高句麗攻略の戦闘中であった。

第一次が六六四年、第二次が六六五年、第三次が六六九年、第四次が六七一年である。何れも長安の都からではなく、百済征討軍の将軍からの使節である。

第一次と第二次は、倭国軍を撃退して旧百済の平定の最中であり、戦勝国の大国の唐が倭国に表敬するために来る筈は絶対にありえず、この記録は書紀の常とう手段

の体裁づくりであろう。おそらく高飛車な言動で、旧百済への支援の中止勧告とその監視が目的だったのではないか。更に憶測すると、元来大国である上に戦勝直後の意気盛んもあったであろうから、事と次第によっては倭国を攻めると脅迫をした可能性もある。その証拠に、倭国は突貫工事で筑紫・長門・備前・摂津と城砦造りに奔走している。

第三次は、高句麗の討伐直後で且つ二千名の軍隊を引き連れており、高句麗攻略の余勢で次は倭国への攻撃などと高圧的な申し出があった可能性が高い。

最後の第四次は、旧高句麗領で羅唐戦争が始まり、旧百済領でも新羅の攻撃が起きていた筈、その最中の軍隊帯同の来訪である。倭国に新羅征伐の加担を要請に来たのかもしれない。しかし天智の訃報を聞いて帰国したとあり、終生親百済の天智の死で倭国の半島介入はなくなったと考えたか、或は羅唐戦争の激化で帰還が急務だったのかもしれない。

二回とも二千人の軍隊との記録であるが、書紀は外国軍の長期駐留は倭国の恥辱なので矮小化した筈で、もしかしたら万単位の大軍だった可能性もある。いずれにしても、四回とも高圧的な要求があったと考えて良い。

第五章　天智天皇の素性は何か

孝徳朝から斉明朝では、大国唐の侵略で大混乱時期を迎えている朝鮮の三カ国との使節が頻繁に往来し、倭国も唐の征百済将軍宛に使節を数回派遣するなど、半島情勢が不利な状況にある事を認識していたにも拘らず、天智は百済支援にひたすら突入して行く。

更に白村江の敗戦後も、亡命した百済の王族や重臣たちに、倭国の皇族や重臣たちと同等の位階と土地を与えて厚遇しており、この肩入れは尋常ではない。

甚だ乱暴な推論ではあるが、彼が百済系の人であったと考えるとこの難解な謎も一気に氷解する。即ち彼の父は、皇族の田村王子ではなく、百済の王族だったのではないか。

彼の父が、バツイチの子連れ熟女の宝王女を妻に迎えたのも、皇族の一員にとの打算からであったと考えれば、合点が行く。長年天智が天皇になれなかった理由も理解し易い。

当時に、女系天皇を認めないと言う意識があったかどうかは分からないが、古来の大豪族たちからの反発が大きかった可能性は高い。

約百年後に登場する天智の子孫の桓武天皇の生母が、百済の王族だとする正式な記録があるほどに、平安時代においても百済人への偏見は薄かった訳で、ましてや百済の王族や豪族たちが大挙して渡来した飛鳥時代における百済人の地位は、今日では考えられないほどに高かったと思われる。この時代の渡来百済人は、百済の王族や重臣たちの支配層の亡命が多く、おそらく倭国の支配階

級との婚姻も数多くあったに違いない。

現在でも「百済」を（クダラ）と読むが、元々は「大国百済」と称して（クンナラペクチュ）と読んでいたのが、簡略化となまりとで（クダラ）と発音するようになったそうだ。この「大国」という表現に、当時の我が国の支配階級の人々の百済への憧憬がよく出ており、如何に支配階級に百済系の人が多かったかの証拠でもある。

もし仮に父が百済の王族だとすると、弟とされる大海人も百済系の人間となるので、即位は難しかった筈である。それでなくても唐の筑紫駐留の最中に百済系の天皇の即位は、唐の反発が大きかったと想像される。そうなると、天武は天智の実弟ではなく、斉明の初婚の時に生まれた漢王子の可能性が高くなる。書紀は天武の生年不詳という不可解な記録を残し、後世の平安時代の資料で天武は天智より四才年長だったとの記録もあるそうだ。天武が天智の異父兄となると、生前に天智の姫が二人も天武の妃となる一方、天武が天智に姫を差し出さなかった謎も解ける。この天武の謎解きは別の機会に詳しく論じてみたい。

（まとめ）

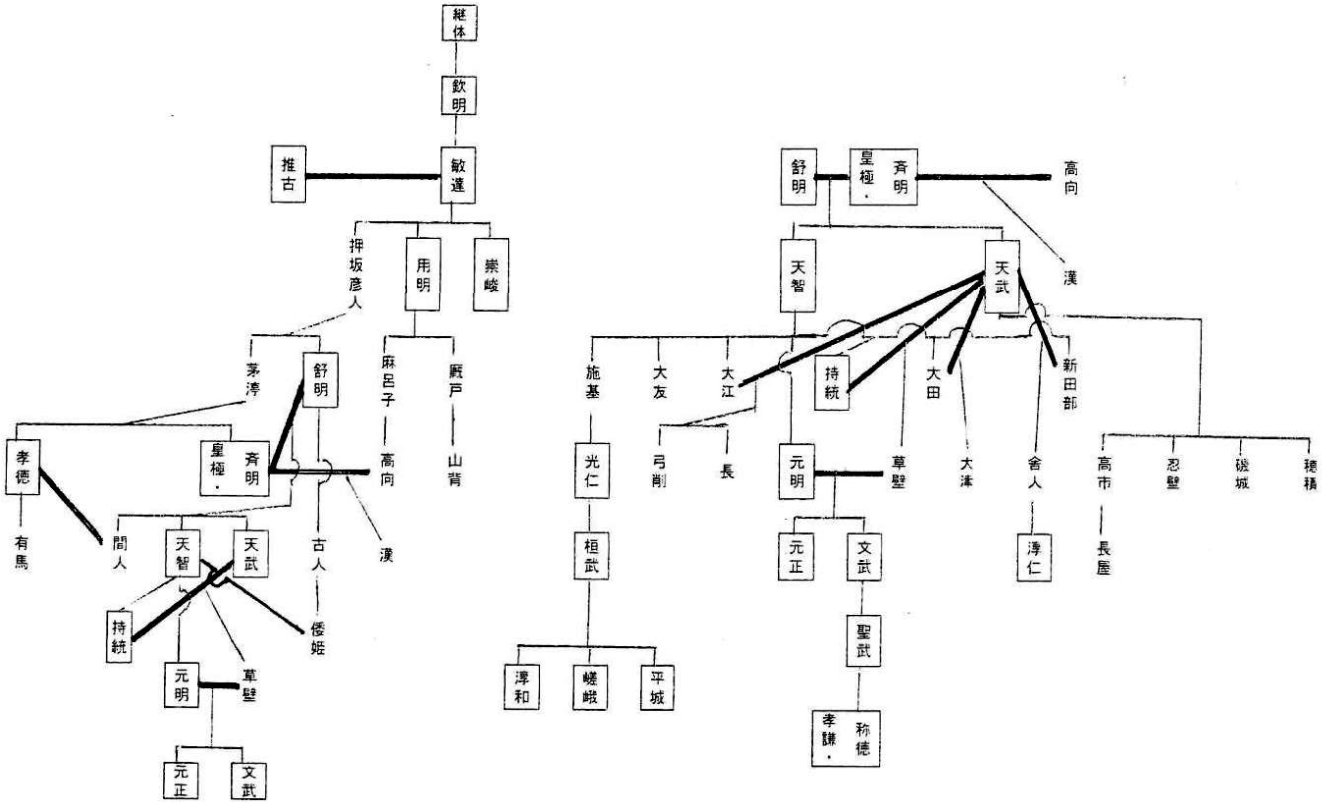
中大兄皇子は、百済の王族と倭国の皇族との間の混血児で、蘇我蝦夷と入鹿討伐の乙巳の変では首謀者ではなく共犯者の一人に過ぎなかった。彼が政治の実権を握っていた皇太子時代の十四年間の治績は、徹底した百済支援策の実行であり、その結末は軍事的敗戦とその後の唐の軍隊の長期逗留を招くなど、亡国の危機招来と膨大な戦費と兵員の損失とで豪族と民衆の彼への信望は地に落ちる。

豪族たちは、この疫病神の中大兄皇子を皇太子から引き摺り下ろして、斉明天皇の長子である漢王子を推戴して天武天皇が六六四年に即位する。この政変には、七年間に及ぶ唐の詰問使と軍隊駐留による監視と威嚇が大きく影響を与えた。

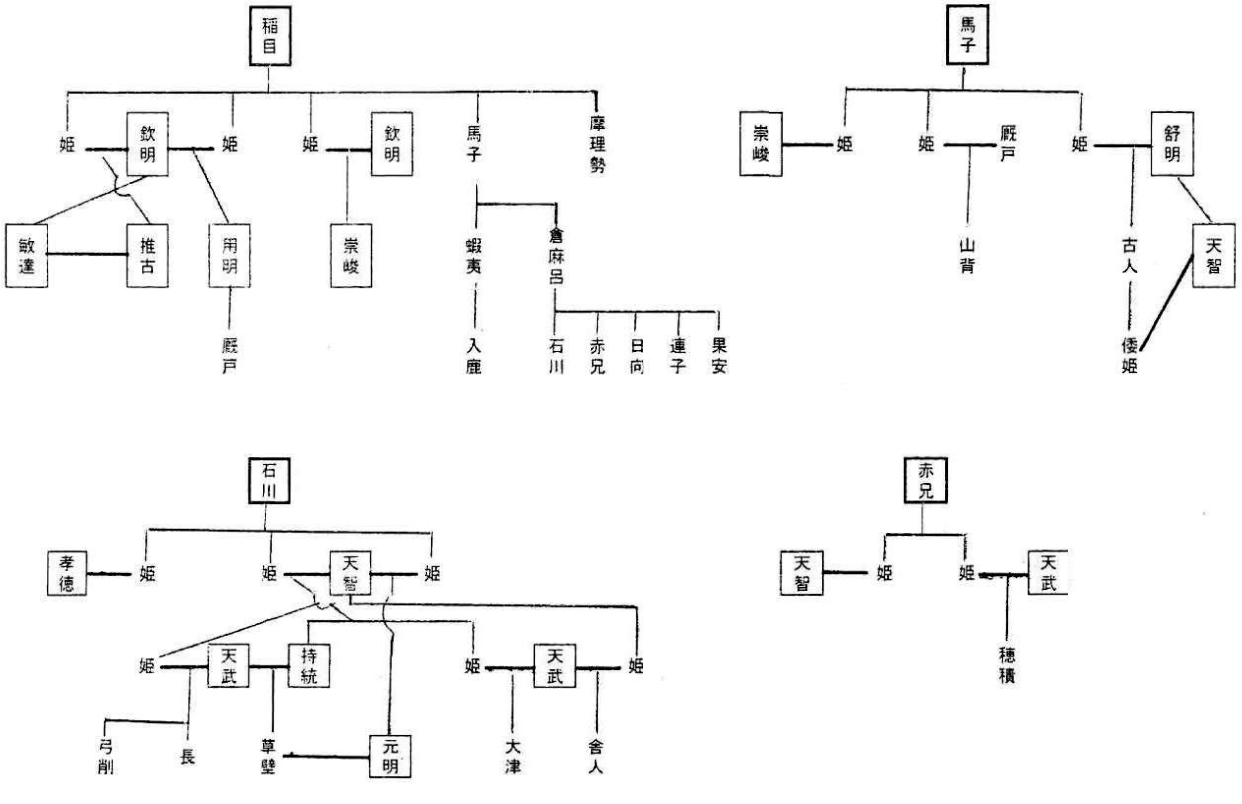
中大兄皇子は、六六七年に飛鳥から近江に脱出して北朝を開くが、彼の死後の南北朝の合戦（壬申の乱）の大友皇子の自刃で天武の南朝の圧勝で終わる。

天智の一連の軍事上の失政は、長年権力を牛耳っていた大豪族の没落を招き、後の天武による班田収授（土地の国有化）を可能とし、後世の奈良時代以降の中央集権制の糸口を創った結果オーライの功労者だった。　終

資料（1）天皇の系図



資料（2）蘇我氏と天皇との婚姻関係



資料（3） 天智の謎の年表

和暦	西洋暦	記録	舒明	皇極・斉明	孝徳	天智	天武
推古 34	626	蘇我馬子死	33才	33才	31才	1才	
推古 36	628	推古 崩御	35才	35才	33才	3才	
舒明 元	629	舒明 即位	36才	36才	34才	4才	
		遣唐使派遣					
舒明 4	632	唐の使節来日	39才	39才	37才	5才	1才？
舒明 11	639	百済宮造営着手	46才	46才	44才	12才	8才？
		百済大寺造営着手					
舒明 13	641	舒明 崩御	48才	48才	46才	14才	10才？
		高句麗の王室で宮廷革命					
皇極 元	642	皇極 即位	49才	49才	47才	17才	13才？
		百済の王室で宮廷革命					
		百済が新羅を攻撃					
皇極 2	643	蝦夷が山背大兄王子一族を殺害	50才	50才	48才	18才	14才？
皇極 3	644	唐が高句麗を攻撃	51才	51才	49才	19才	15才？
皇極 4	645	乙巳の変	52才	52才	50才	20才	16才 ？
孝徳 元	645	古人大兄王子を謀殺、 難波に遷都					
孝徳 4	649	左大臣阿倍倉梯 病死		56才	54才	24才	20才？
		右大臣蘇我石川 謀反嫌疑で殺害					
孝徳 9	654	孝徳 崩御		61才	59才	29才	25才？
斉明 元	655	斉明 重祚		62才		30才	26才？
斉明 6	660	百済 滅亡		67才		35才	31才？
斉明 7	661	百済 再建のために救援		68才		36才	32才？
称制 元		斉明 崩御					
称制 3	663	白村江で倭国軍大敗北				38才	34才？
称制 4	664	唐使節の郭務宗筑紫に来訪				39才	35才？
称制 5	665	唐使節の劉徳高筑紫に来訪				40才	36才？
称制 7	667	近江に遷都				42才	38才？
天智 元	668	天智 即位、高句麗滅亡				43才	39才？
天智 2	669	唐の郭務宗将軍兵2千余名で筑紫に来訪				44才	40才？
天智 4	671	唐の郭務宗将軍兵2千余名で筑紫に再訪				46才	42才？
		天智 崩御					
	672	唐の郭務宗将軍帰国				47才	45才？
天武 元	672	壬申の乱、天武 即位					45才？

資料（4） 七世紀の朝鮮半島関係の年表

612年	隋が高句麗を攻撃し、3回試みるも何れも失敗
618年	隋は滅亡、唐が建国
619年	高句麗は唐に朝貢
	百済と新羅も唐に朝貢
624年	唐は、三国を王として冊封
626年	百済と新羅が唐への朝貢に高句麗が邪魔をすると唐に訴え、高句麗は謝罪する
628年	高句麗は、唐の突厥征服の祝詞と高句麗の領土の境界図を唐に献上
630年	倭国が始めて遣唐使を派遣
640年	高句麗王は皇太子を長安に送って、唐への恭順の姿勢を示す
640年	遣唐使の高向玄理・南淵請安が帰国
642年	長年唐への恭順姿勢を良しとしない泉蓋蘇文は、王以下恭順派の重臣を多数殺害し、
	王の甥を次期王として実権を握る
	そして、唐に対して強硬姿勢をとる
	百済は、新羅の要請に基づき唐が新羅との和睦を百済に指示するが、面従腹背を貫き、
	高句麗と連合して新羅領を犯す
643年	新羅が唐への朝貢に高句麗と百済が邪魔立てし、且つ高句麗と百済が新羅の領土を
	犯すので助力を唐に援軍派遣を要請する。しかし、唐の要請を高句麗は拒否する
	百済の宮廷で、王に逆らう王族と重臣を島流しとする政変が起きる
645年	唐は、新羅と百済に高句麗攻撃の援軍を命じるも、百済は援軍派遣で手薄になった
	新羅領を掠め取る
	唐の大軍が高句麗征伐に乗り出すが、唐の太祖の死去で一旦撤退
645年	倭国で乙巳の変が起き、蘇我蝦夷・入鹿親子が殺害され、皇極天皇から孝徳天皇に変更
646年	遣新羅使として高向玄理を派遣
648年	新羅使として新羅の重鎮の金春秋が高向玄理に連れ立って来訪
	645年～649年の4年間で、来新羅使6回、来高句麗使3回、来百済使2回
	これに対して倭国の遣使は新羅2回、高句麗と百済はゼロ
649年	孝徳天皇の二大重臣が死亡
650年	新羅が唐の制度服装を導入
660年	百済滅亡
661年	斉明天皇崩御
663年	白村江の戦いで倭国軍完敗
668年	高句麗滅亡
670年	新羅が進駐唐軍と戦争開始
671年	天智崩御
	筑紫駐留の唐軍が撤退
675年	唐は半島から撤退して、新羅も唐の冊封を受ける事で朝鮮半島の安定が齎される

小沢昭一の俳句・四千句を読んで

曽根竣作

（一）

小沢昭一（俳号変哲）の『俳句で綴る変哲半生記』（岩波書店）は亡くなった直後に出版され、発売即重版、すでに七刷を越ゆる勢い、正に異例である。亡くなったのは、平成二十四年十二月十日、前立腺癌であった。八十三歳になる。

その口上に、「今までに詠んだ句を集めましたら、およそ四千にもなりました。改めて眺めてみますと、どの句にも『自分』というものがチラチラと出ているように思えます。特に『駄句』にこそ私らしさが現れておりますので、あれこれ選ばず、恥ずかしながら詠んだ句全てを載せさせていただきました」とある。快挙である。

小沢昭一は、好みから言って余り好きな方ではない。恐らく『まんじ』のみんなも多少敬遠気味の人が多いのではなかろうか。

それは、彼が余りに多方面にわたって、活躍して来たからであろう。職業は俳優、それ以外に舞台・ラジオ・映画・テレビでの活躍に加え、放浪芸など民衆芸能の民俗学研究は「小沢学」とも称され、新潮学芸賞、菊池寛賞、朝日賞などに輝き、更に平成六年には紫授褒章受章の栄に輝いている。共著を含め著作一四〇冊、なかでも永六輔・柳家小三治・矢野誠一などとの「東京やなぎ句会」には発会以来四十数年間、月例会皆出席の記録保持者であり、その他いくつもの句会に参加している。

〈新年〉
湯の中のわが手わが足春を待つ
〈春〉
落第や吹かせておけよハーモニカ
〈夏〉
もう余禄どうでもいいぜ法師蟬
〈秋〉
椎の実の降る夜少年倶楽部かな
〈冬〉
寒月やさて行く末の丁と半

新年の句はいかにも春待ちの気分が出ていて、両手両足を伸してじっくり湯に浸っている。若干加齢もその裏にひそませてある。春の句は季語は〝落第〟である。ハーモニカを吹かしたら殆んど玄人はだしの彼である。別に落第したのではなかろう。〝吹かせておけよ〟に心がこもる。夏の句は、ミンミンと鳴いている法師蟬を聞きながら、もう〝余禄〟の分際に入っていることを暗に言う。秋の句は、懐かしい少年倶楽部が椎の実が落ちる夜、手許に入った感じを言ふ。少年倶楽部は或る程度の年齢を経た人でないと分らない。冬の句は、丁は偶数で半は奇数である。著名な長谷川伸の都々逸がある。〈渡る世間は丁目と半目、善いと悪いは一つ置き〉。「そう悪いことばかり続かないさ」と肩を叩かれた、そんな気がする。この句では〝寒月や〟が生きている。俳句は言葉を切る文芸である。切ることによつて理屈を断って「間」を作り、言葉を際立たせる、つまり生かそうとする文芸である。

（二）

小沢昭一は、一九二九年（昭和四年）、東京府豊多摩郡（現・杉並区）に生まれる。幼時に、根岸に近い日暮里に移つたので、後年まで「下谷の根岸生まれ」と信じていた。父親は写真館を経営していたが、あまり流行っていなかった。

小学校では成績がよく、旧制府立一中を受験したものの、面接試験を待っている間に電燈の傘を割ってしまう。不本意ながら旧制麻布中学に入ったが、同級生に加藤武、フランキー堺、仲谷昇がいて、彼らと演劇部を創設している。

教練の教官が元イタリア大使館付武官で、何か国語もでき芸能に詳しかった。この頃から演劇と芸能に熱中し始めて寄席にも随分と通った。

敗戦後、中学に復学して早稲田大学文学部仏文科に進んで、俳優座養成所に通つている。父親が寝込んだので、広告屋、保険外交、社長の鞄持ちなどで家計を支えながら、寄席の研究家である正岡容に弟子入りしている。

俳優座からすいせんされて、渋谷実監督の『勲章』（五四年）で落語好きの学生役を好演。フランキー堺が主演した川島雄三監督の『幕末太陽傳』（五七年）にも貸本屋金造の役で出演して、硬破を演じ分けられる俳優として注目される。

大学時代の友人・今村昌平監督の『エロ事師たちより人類学入門』（六六年）では、主人公の「スブやん」を演

じてキネマ旬報主演男優賞を受賞、以降、しばらく「エロ事師」と呼ばれた。

放浪芸の発掘・収集にも情熱を燃やし、六九年より芸能史を研究し、レコード『日本の放浪芸』全七枚、さらに『又日本の放浪芸』を完成し、「芸能と社会」で放送大学客員教授も務めた。

ラジオ番組「小沢昭一の小沢昭一的こころ」は七三年に始まったが、絶妙の話術で人気を博し二〇一二年（平成二四年）十二月十四日まで続いた。その口上に「食事をしたり、ご不浄にいくのと同じで、ごく自然につづけてきたような気がいたします」と。

この間、俳句に対する執念は凄まじく、「東京やなぎ句会」をはじめとし、五つや六つの句会には休みなく出席して勉強している。

初期の作品を採ると次の様になる。

○スナックに煮凝のあるママの過去（一月）
○終電に春立つあくび深々と（二月）
○ハンカチやリベラリストという教授（六月）
○年寄りの柿くう音やひるさがり（十月）
○B29とふと向く空や冴えかえる（一月）
○夏きざす川の流れの速さかな（五月）
○ひざ曲げて明治の人の昼寝かな（七月）
○冬のもず無風つらぬき去りにけり（十一月）
○岩海苔をかつかつ噛みて余生かな（一月）
○白靴の似合う伯父あり法事かな（七月）
○肌寒く四十路の爪の白さかな（十一月）
○屏風の句読んで読めずに客間かな（十二月）
○青春よさらば西日の部屋さらば（七月）
○紅茶入れてディック・ミネ聴けば春雷（三月）
○鰻重の朱塗りのてりや牡丹雪（一月）

（二）

昭和十年、青森県に生まれ、劇作家、演出家、詩人で名を為した故寺山修司に著名歌として、次の短歌がある。

○マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

おそらく煙草を吸うために船の甲板でマッチを擦る〈われ〉。その光で暗い海にぶあつい霧がかかっているのが見える。まるで映画の一場面のように鮮やかだが、この上の句は、富沢赤黄男の俳句「一本のマッチを擦れば湖は霧」に想を得たといわれる。

寺山修司の面目躍如とするのは下の句の付け方である。――この祖国には外国で戦病死した、特高刑事だった父への思いが重なる。

寺山は、短歌定型にひそむ、自己肯定性を誰よりも強く否定し、近代短歌以来の等身大の〈われ〉からかぎりなく自由に解き放たれた〈われ〉をもって歌ったのである。

甘美な第一歌集「空には本」から、一貫してその作品

は〈われ〉の名を借りた他者の夢を描きつづけている。

○わがカヌーさみしからずや幾たびも他人の夢を川ぎしとして

短歌に凝ったのは、せいぜい五、六年と言はれるが、虚構の〈われ〉は生身の〈われ〉の血肉で満たされるという逆説が寺山の特質であった。今でも多くのファンを持つ所以である。その明るい青春歌を口ずさむ時こそ、私たちは寺山の癒えることのない魂の傷にふれているのではないか。おそらくは想像を絶する孤独が、誰にも分りやすく美しい韻律を支えているように思う。

○大工町寺町米町仏町老母買う町あらずやつばめよ
○売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき
○人生はただ一問の質問にすぎぬと書けば二月のかもめ

時おり俳句より、想を得たこともあるであろう。但し、その下につなげる言葉で、完全に一首を立派に短歌として一本立ちさせたのである。

（四）

『変哲半生記』に良寛さんとの縁が書いてある。それによると小沢家に代々伝っている掛軸がある。

○かすみたつなかきはるひをこともらとてまりつきつつこの日くらしつ

表装にも時代がついていて、良寛直筆にまちがいないと、以前、父が相馬御風さんに鑑定してもらったら、はっきり贋物と言われた代物である。筆づかいが違うらしい。

テレビの「なんでも鑑定団」から声が掛かって出して見たら、やはり贋物と断定されたようだ。

しかし乍ら、同じテレビで出演者の先祖を辿るという番組があり、小沢の係累を遡ってテレビ局が調査してくれた結果、良寛さんが浮かび上ってきたのだ。詳しいことと省略するが、母方の係累からどうも良寛さんと遠い縁続きということが分って、かすかながら血がつながっていると言えば言える状況なのである。

これを知った時は、なんだか嬉しくなり、早速、母親に問い質したら、

「ああ、そうだよ」とカルイ返事である。

「どうして今まで、それを教えてくれなかったの」

「だって、誰が先祖にいたって、たいしたことないもの。それに良寛って、乞食坊主だろ」

「たいしたことない」とは一つの見識であるが、乞食坊主と縁があるとは、私としては大ヨロコビである。

それから、良寛さんの俳句への思慕がつのって来るようになる。良寛の父。以南は、京や江戸にも知られた俳人だった。

○焚くほどは風がもて来る落ち葉かな　良寛

ひとり暮らしていた出雲崎の五合庵に、いまこの碑が

立っている。

○鉄鉢に明日の米あり夕涼　良寛

「鉄鉢にも霰」は、かの山頭火の有名な句であるが、「明日食べる米さえあれば、涼風に夕涼していられる」という悠々感の方が自分好みである。

○夏の夜や蚤を数へて明かしけり　良寛

家ダニを、天眼鏡片手に、夜中じゅう見つけて面白がる。共感しきり。

○われ喚て故郷へ行や夜の雁　良寛

国定忠治の赤城の別れみたい。

○鬼せきと升りて来るや鰯売り　良寛

夕方にはきっと流して来た鰯売りは、越後の里にあったとはおどろきである。

良寛の句の中で、私の最も愛する句は、

○柿もぎのきんたまさむし秋の風　良寛

こだわりのない、まさに自然体の句ではないか。さしずめ、当節ならば、金子兜太先生の句境だと言ったら間ちがいであろうか。

（五）

それでは、小沢変哲の作った中後期の作品を当って見よう。

○夕顔やろじそれぞれの物がたり（一月）

○壇の浦見下ろす丘や椿落つ（一月）

○うとうとと観る小津映画春炬燵（三月）

小津監督の映画、恐らく原節子と笠智衆の出たむかしのなつかしい東京物語か。

○疲労困ぱいのぱいの字を引く秋の暮（十月）

○星霜という言葉あり霜を踏む（十二月）

○打ち水や平次が謎をとく時分（七月）

銭形平次がそろそろ謎をとく頃、打ち水を暑さしのぎに撒いて見る。

○いか干して古き港の廓跡（六月）

いまは寂びれている港のくるわ跡、いかが干してあるところが良い。

○夏帽の笑顔ばかりの偲ばるる（七月）

おそらくすでに鬼籍に入った友人を偲んでいる。

○荒鷲の飛ぶやあれから三十年（十一月）

○初夢に情事悔いある寝覚めかな（十二月）

どこまで、本当か分らない。そのところが面白い。

× × ×

○神武綏靖……暗記も薄れ建国日（二月）

昔は天皇の名前を暗記したものだ。もうその暗記も薄れた頃、建国記念日がやって来る。

○久保万の一幕物の涼しさよ（七月）

三越劇場七十年に寄せてとある。

○春の夜や五高の寮歌うたう酒（二月）

五高は旧制の第五高等学校のこと。〝武夫原頭に草萌えで…〟と唱い始める。生まれは昭和四年といっても

やはり旧制である。

○嘘つきし身にやさしきは秋の空（十月）

○遥かなる次の巳年や初み空（一月）

巳年はへび年のこと。更に十二年先になる。

○まあ言はば騙る稼業やはるの風（三月）

騙る稼業とは自分のことを言うらしい。

○葉桜や旧制高校ありし町（五月）

熊本の五高のことを言っている。

○そうかまたこの上衣かよ冬支度（十月）

○黄昏の芒もつれて米軍機（九月）

○息白く質素を旨と生きし頃（十二月）

○女将来て枇杷を皮むく手ぎわかな（六月）

× × ×

小沢変哲は、「遊び半分」というコトバのあとの半分も、まあ程々、シリアスである。俳句にイノチはかけずに、ただイノチの洗濯をさせて貰っていると言っている。

まったく俳句のおかげで、これも嘘にもイノチのかかっている俳優稼業が続けられたと、今にしてつくづく思うことしきりである。「東京やなぎ句会」に四十数年全皆勤で出た他に、「話の特集句会」では永六輔と一緒であり、「滋遊句会」他にいくつもの「句会」に名を列ねて来ている。

私は、どうも好きになれなかった小沢変哲が、心の何処かで好きになったのは、彼の俳句を読んでからである。

常識家にして細心、熟慮かつ独創的に生き切った彼は、表向きはいかにも、ふざけたような振舞いから脱し切れない態度である。

最後に、彼が亡くなる以前に『天』を頂いた句を照会して、結びとしたい。

鷹羽狩行の選で

○寒釣や同じ顔ぶれ同じ場所（二月）

同じく黒田杏子の『天』に指定された句は

○越後屋を出て馬車の風インバネス（十一月）

インバネスは、冬の外套で、日本ではむかし二重回しのことを言った。

（敬称略）

短歌　三十首

曽根竣作

段平（だんぴら）

夏ちかき由比ヶ浜辺を燦々と光り集めて洋凧（カイト）ふかんす

茫洋と浅葱（あさぎ）うすまり昏れなづむ海坂（うなさか）に泊（は）つ白き巨船は

亡き父のカンカン帽のうす汚れ今にし懐（おも）ふ夏のそよぎに

足ばやに身をかすめゆく人群れの横浜西口けふも喧騒（けんさう）

擦れちがふ人ら透かして時迫るやをら長袖たくし上げたり

新月の斜めに傾きビルの谷模糊たり若きジーンズの群れ

水脈（みを）曳きて白子（しらす）すなどる舟い行くはつ夏の海藍ふかめつつ

フセインの処刑は何であつたのか混迷のイラクに陽は未だ差さず

段平（だんぴら）をぎらりと抜いて自慢せしフセインは遂にあの世に逝きぬ

一国の宰相つかまへ処刑すれど秘密（ひみつ）兵器は見つからぬまま

帰去来

早出（はやで）なる人らを乗せてライナーは東京に迅（はや）しみな黙然（もくねん）と

東京は遠いとほいと予後の身をふかぶかと凭（よ）る朝の車両に

けふ何故か胸を張りつつい行く朝かくべつに良き事もなけれど

雨どひゆ水滴落ちる土のうへ蟇は去年よりみどり色して

いづべより鳥運びしかあら草の中にひともとグラジオラス咲く

靈園に法師蝉のこえ絶え間なし「勇」の納骨つつしみて捧ぐ

何となくお洒落が上手な奴だつたけふもコートの襟立ててゐん

夏つばめ交互に飛び交ふグランドよ日に鮮やかな白線を待つ（高校野球）

美女の規準かなりゆるびて飽食の世を永らふる大正生れ

放浪のいづくか知らぬ落花あり　帰去来田園昏れて

未必の故意

夏更けの机上にじつくり動かざる遊糸か当時の語り部として（遊糸…かげろうのこと）

海だけが光りて高架の橋遠くつばくらめ飛ぶ伸縮自在に

会場出で平山画伯の数頭のラクダに連なる砂ぼこり逐ふ

型古きケイタイ電話そのままに十年過ぎてもなほもていかう

向日葵の一花れいれい位置占めてわが藤椅子に秋は来たりぬ

むらさきの小花びつしり桐たちて斉庭に遠くかすんでゐたり

秋空の星冴え返りしじまあり星ひとつ流れ未必の故意か

いただきに真白き大輪咲きつぎて泰山木は驕奢なるかな

夏帽子似合ふと言ふて別れたる君こそいづくぞ音信もなく

ためらはず流されて行く花いかだ柳絮とぶ川風かんばしも

嘆きの人事部長

三戸岡道夫

（一）フライング

これは今から三、四十年前の物語である。

天光銀行の東山人事部長の席から見える皇居のみどりは、眼に鮮やかで、美しかった。

右手の方向に視線を移すと、そこには銀行協会の二階建ての建物が見えた。その尖塔のような屋根を持った瀟洒な建物は、東京でも数少い明治時代の名残りの建築の一つであったが、この建物も近く取り壊されて、建て変えられることになっていた。

東山人事部長が銀行協会の建物に魅かれるのは、その外観の美しさもさることながら、正面から入ったホールのたたずまいと、その左手に控える会議室であった。広々としたホールは天井が高く、左手に二階へのゆったりした階段があり、ホールから二階にかけて敷きつめられた真紅の絨緞の色彩が、その荘重な空間を華麗なものに仕立てていた。

大会議室は二階にあり、一階のホールの左手には中会議室があった。しかし中会議室といっても、壁や柱には適当な彫刻が施され、最近の機能中心の味気ないビルの会議室とは一味ちがう風格があった。

銀行団を中心とした種々の会議は、ほとんどこの中会議室で行われた。東山も人事部長として長く銀行協会へは出入りしているので、この中会議室にはわが家の奥座敷のような愛着を持っていた。

しかし、そこへはビジネスとして出入りしているわけであるから、そうした個人的感情を別にすれば、必ずしもよい印象だけかあるわけではなかった。銀行協会の仕事というのは、金融行政の個別銀行への徹底と、銀行相互間の利害関係の調整である。

窓越しにそんな銀行協会の外観をなんとなく眼にしていると、東山人事部長は、その中会議室で起ったある事件を、思い出さずにはいられない。それは新入行員の採用に関することだった。

就職協定というのがある。企業が大学生を新規採用するときに、何かルールがないと競争して時期を早め、混乱が起きてしまう。そこで大学生の企業訪問、面接、採用試験、内定の時期などを、企業間で取決めておく協定である。しかし問題は、これはあくまでも企業間の紳士協定であって、これを破ったからといって、特に罰則があるわけではない。

従ってどの企業でも、いい人が欲しいということから、その時期が少しずつ早まる傾向があり、時としてその協定破り、いわゆる「フライング」が起るのである。

二年前、天光銀行はその就職協定のフライングの罰に問われ、東山人事部長は銀行協会の中会議室で、居並ぶ都市銀行の人事部長たちの前で、無念の涙を飲んで頭を下げ、詫びたのである。

協定破りの常連は都市銀行だと言われる。都市銀行がフライングすると、これに負けじと証券会社がフライングし、次に商社、コンピューターメーカーなどがこれに続き、あっという間に経済界全体に拡って、就職協定など、無きに等しくなってしまうのである。

フライングの張本人が銀行だといっても、銀行全体がいっせいにフライングするわけではない。いつもフライングの先頭を切るのは、平安銀行と決っていた。平安銀行が火をつけると、それまで我慢していた他の銀行も、それっとばかりに走り出して、大混乱に陥るのである。そのため新緑の頃になると、どこの銀行の人事部も、平安銀行の動きに全神経をとがらすのであった。

二年前の初夏もそうだった。

その年はやけに暑い夏で、忘れもしない六月二十日だった。給料日だったから、東山ははっきり覚えていた。昼近くに、人事課長の太田川が血相を変えてやってきて、

「平安銀行がフライングしました」

と報告した。

「やはり、やったか」

東山もきゅっと心臓の縮む思いだった。

「じゃ、うちもすぐやるんだな。用意は出来ているか」

「はい、大丈夫です」

自粛はしていても、いざという時のために、事務方ではいつでも出動できるように、準備は常々怠っていなかった。こうして天光銀行でも、直ちにリクルート室で大学生の面接を開始し、採用内定作業に入ったのである。

ところが、それをある銀行から刺されたのである。もちろん刺したのは直接ではない。銀行協会へ密告され、天光銀行は銀行協会から注意を受けたのである。

天光銀行のフライングは直ちに銀行業界内で問題になり、ある日、銀行協会の中会議室で行われた、各銀行の人事部長の集る人事委員会の席上で、東山人事部長は、

「就職協定を破り、申し訳ありませんでした。以後は

決してこのようなことはいたしませんから、お許しください」

と頭を下げて、詫びたのである。詫びたというよりも、詫びさせられたといった方がよかった。無念の思いは、いまだに胸の底に残っていた。というのは、フライングをしたのは天光銀行だけではないからだった。

そもそもフライングのトップを切ったのは、平安銀行であった。だから天光銀行もあわててフライングしたのである。そして他の銀行も、二、三行、フライングしたのは事実であった。それなのになぜ天光銀行だけが俎上にのぼったのか？

天光銀行を刺したのは平安銀行であった。東山はそれを銀行協会のある事務局の人間から聞いて、知っていた。平安銀行は自分が刺される前に、天光銀行を犠牲にして、自分に火の粉がふりかかるのを防いだのである。

銀行協会から注意の呼出しがあった時、東山は、

「私のところがフライングしたのは申し訳ないが、先にフライングしたのは平安銀行ですよ」

と抗議したが、

「そんなことは聞いていない」

と採り上げてくれなかった。平安銀行と銀行協会との間に、どんな裏取引があったか東山は知らないが、結局平安銀行は無傷で、天光銀行だけが槍玉にあがり、その年の銀行フライングの責任を一手に負う形になったのである。

新緑の頃になると、思い出すまいとしても、その時の思いが苦汁のように、東山人事部長の胸によみがえってくる。今年もそろそろ、そのシーズンが近ずいていると思うと、東山はなんとなく気分が落着かなくて、斜め前のデスクに座っている副部長の太田川に、

「今年の学生の動きはどうかな」

と声をかけてみた。太田川は赤ら顔を緊張させて、東山の方を振り向くと、

「今年は協定が守られているせいか、大学生の方も割合い落着いております。リクルート室へ、二、三名訪れてきておりますが、趣旨をよく説明して、帰ってもらっております。一昨年のようなことが起きて、部長にご迷惑をおかけするようなことがあってはいけませんから」

太田川は全身これ忠勤といった、忠犬ハチ公のような人間である。忠勤といっても、権力迎合のイエスマンではない。仕事に忠実なのである。いや仕事というよりも、人事部へ忠実といった方がいいのかもしれない。それだけ、やや視野の広さには欠けるが、人事課長から副部長へ昇格しているから、人事部勤務の経歴は長く、人事部にとって無くてはならない人間であった。

「そうか、それはいいな。でも、油断は禁物だよ。平安銀行はいつ何をやるか、わからない銀行だから。わが銀行が先頭切ってフライングするわけにはいかないが、どこかがやったら、すぐ、うちもやらないとな。うちの銀行は就職戦線には弱いから、抜け目なくやってくれ。なに、俺は銀行協会で頭を下げることぐらい、何とも思っていない。俺のことなど心配しないで、よく警戒体制は固めておいてくれ」

「大丈夫です。情報網はよく張りめぐらしてありますし、それに大学の方も、ゼミの教授などへはよく頼んであります。また、若手行員の中から優秀なのをリクルーターに指名して、それぞれの大学の後輩へ個人的にアプローチするなど、実質的な活動は怠りなくやっております」

（二）坂本竜二という大学生

とりとめなく副部長とそんな話しを交していると、デスクの上の電話器が鳴った。

「はい、東山ですが」

電話は秘書室からだった。

「頭取がお呼びです。すぐいらしてください」

人事部長という職掌柄、頭取からの直接呼び出しは多いが、新緑の頃の呼び出しの見当は大体ついていた。就職依頼である。

（また誰かから、頼まれたな）

東山の頭へは、ぴんと来る。

（変な大学生でなければよいが）

天光銀行ではコネによる人事採用を禁止していた。コネとはコネクション、縁故採用である。

コネを許しておくと、重役とか支店長　それに取引先などからの、縁故採用の申込が後を断たないからである。とくに重要取引先とか、大口預金者などから持ちこまれると、処理に苦慮する。したがってコネを許しておくと、採用する学生の質がどんどん低下して、銀行がクズ人間集団になってしまう危険がある。したがってどこの企業でもコネによる採用を原則として禁止している所が多いのであるが、天光銀行も例外ではない。

それなのに就職シーズンになると、紹介状を持った学生が頻繁に訪れてくるのである。とかく社長とか、大臣とか、大物の紹介者に頼ってくる大学生には、概してろくな者はいない。自信のある学生は、そんな紹介なしに正々堂々と受けにくるからである。とくに大臣とか、国会議員の紹介は、選挙の票がからんでいるから、濫発気味である。中には、紹介状を書いた途端に、学生の名前も忘れてしまう大臣もいるという。そんな紹介状をいちいちまともに対応していたのでは、仕事にならない。だから大臣と大学生の関係、親密さの度合いなどをよく見極めて処理しないと、大変なことになる。頭取からの紹介も、大同小異といっていい。

「何かご用でしょうか」

「うん、ちょっと就職を頼まれてな」
やはり東山の直感は当っていた。
「いや、無理しなくたっていいんだよ」
水間頭取は気軽にそう言うのだが、頭取の言うことである。無理をしないわけにはいかないではないか。毎年、水間頭取の紹介によって受験する大学生は、十名前後いる。中に、一、二名は、紹介に頼らなくても大丈夫な学生もいるが、残り全部を駄目とするわけにもいかない。それで、どうしても頭取の顔を立てなければならない人物は、一、二名、人事部長が人知れぬ苦労をせざるを得ないわけである。
「どのようなご関係の大学生でしょうか」
「郷里の友達の息子でな」
水間頭取の郷里は高知である。瞬間、東山人事部長の頭に、黒潮に鍛えられた、逞ましい若者の姿が浮かんできた。
「すると高知の方で……」
「そうだ。わたしの中学校の時の友達の息子でな。来年、高知大学を卒業するんだ。この前、ちょっと帰った時に、たまたま中学校の同窓会があってな、その時頼まれたのだ。昔の親友だからな、断われないんだよ。なんとか、考えてみてくれんかな」
高知の同窓会へ出れば、都市銀行である天光銀行の頭取ともなれば、一番の出世頭にちがいない。だから、
「おい、水間、おれの息子たのむよ」
と言われれば、
「よし、任せておけ」
と言わざるを得ない。万が一、採用できないとすれば、その友達に対してだけでなく、同窓会のメンバー全員に対して、
「頭取、頭取といったって、大学生一人採用できないのか。腰抜け頭取め」
と面目丸つぶれである。だから絶対断われない人事ということになる。
「名前は何とおっしゃるのですか」
「息子の方は、たしか坂本竜二とか言ったかな」
「勇ましい名前ですね」
「おやじの名前は坂本竜蔵だ」
「坂本竜馬と関係があるのですか」
「いや、知らん。多分、無いだろう。だがそいつの家は、代々、男の子には竜の字をつけている。きっと坂本竜馬のような人間にあやかりたいという、願いなのであろう。そのためかどうかは知らないが、中学校の頃は暴れん坊だったよ。いつも喧嘩をやれば、片方の親玉でな、ガキ大将だった」
「それで頭取がその参謀だったというわけですか」
くだけた雰囲気なので、東山人事部長もちょっと軽口をきいた。

「いや、参謀などということではないがな、まあ、持ちつ持たれつで、仲がよかった」
東山にも少年の頃のそんな友情が、よくわかった。腕っぷしの強い落第生と、腕っぷしの弱い優等生がいて、水と油なのに、二人は奇妙な友情で結ばれている。落第生は腕力で優等生を守り、優等生は学力を提供することによって、そのお返しをする。中学生なりに生み出した、生活の知恵なのであろう。きっと水間頭取と坂本竜蔵との友情も、それに近いものだったのではなかろうか。
「その親父に似て、息子も暴れん坊のようだな。あ、は、は……」
と水間頭取は土佐っ子らしく、豪放に笑った。
高知は人も知る、酒豪の多い地方である。その高知の血を引いて、水間頭取も酒は強かったが、その坂本竜蔵も酒豪であろう。そんな友情で結ばれた二人の男が車座になって、茶碗のように大きな盃をやり取りしている姿を想像すると、この人事採用はなんとでも無理をせねばなるまいという気持に、東山は追いこまれてしまうのだった。
それから一週間ほどすると、昼間、その坂本竜蔵という男から、
「明日、息子を上京させるから、会ってやってくれ」
という電話がかかってきた。電話の声では、先日水間頭取から聞いた暴れん坊の酒豪という感じであったが、しかし喋る調子には、子を想う父親の愛情が漂っていた。
翌日の午後一番に、その坂本竜二という大学生はやってきた。頭取からの紹介である。あまり粗略な扱いも出来ないので、東山が直接会った。
坂本竜二はぬっと天を突く大男という感じだった。身長が百八十センチメートル以上はあるという。肥っていて、プロレスラーの新人というタイプである。しかし座って話しをしてみると、素朴で、素直で、今の若者に共通のやさしい感じである。東山は、なんとなく土佐の鰹船に乗り組む海の荒くれ男を想像していたので、ちょっと期待外れの感じだった。しかし今時は東京でも土佐でも、若者のタイプは同じなんだなと、東山は思った。その体格、風貌からすると、土建会社あたりがふさわしいという感じなのだが、本人は、
「どうしても東京の銀行へ勤めたいのです」
と真剣な表情で言うのだった。たんに父親が頭取と親友なので、親から言われるままにやって来たのではないらしい。
「なぜかね？」
「はい、兄たちが二人とも船乗りになっているので、僕はその反対の仕事をやりたいと思ったのです」
「それなら銀行でなくたって、他にもいろいろあるじゃないかな」

想通りの返事である。

「成績証明書がないのでわからないが、大体のところどの辺かな。中ぐらいかな？」

「いや、もっと下です」

坂本竜二はますます首をちぢめる。

「では、下か」

「いえ、もうちょっと上です」

「じゃ、中の下というところか。それとも下の上？」

「大体そんなところです」

これでは、まともに行ったら完全に駄目である。天光銀行でも、成績は上か、それとも上の下でないと、駄目である。それより下だと、なにか他に特技を持っているとか、人物によほどの魅力がないかぎり、無理である。いくら頭取からの紹介とはいえ、中の下の成績ではどうにもならない。

「では、また連絡しますが、入社試験の方は、一般の学生と同じように手続をして受けてください」

「よろしくお願いします」

坂本竜二は大きな身体を丸めるだけ曲げると、おじぎをして帰っていった。

（やれやれ、とんだものを背負いこんでしまったわい）

という思いにかられたが、しかしまるで純朴な子供のような土佐の若者に、東山はなんとなく好感が持てた。

東山は太田川副部長を呼ぶと、坂本竜二の履歴書を渡して、

「この間、頭取から話のあった学生だよ」

と、面接した印象の概略を説明した。

「弱りましたね」

太田川も困惑の表情を浮かべた。

「うん。でも、なんとかせねばなるまい。何かうまい大義名分を考えないといかんな」

「やはり、また、例の手でいきますか」

「うん、そうだな」

例の手というのは、東山と太田川が考えた大義名分である。いくら頭取や大臣からの紹介とはいえ、成績劣悪では採用することは出来ない。そこで、そのような者を採用する場合には、なにかの口実、いわば大義名分を作るのである。いわば大義名分でカムフラージするのである。

その大義名分として二人が考え出したのが『個性』であった。今は個性の時代である。銀行も昔とちがって、成績優秀な青白きインテリばかりでは駄目である。今は個性の時代、求められるのは学業もさることながら、行動力、営業力、バイタリティ、人間的魅力、豊かな感性、抜群の特技など、個性ある人材も増やしていかなくてはならない——というロジックを組み立て、なんとかしなくてはならないコネの学生を、そうした「個性」という大義名分のおしきせを着せて、救っているのであった。

昨年も会長の瀧川から持ちこまれた大学生を、ピアノの名手という大義名分で入行させた。いま流行の感性という個性に押し込んだのである。ピアノがうまいということと、感性ということとが、必ず一致するかどうかはわからないが、経営陣の方はなんとなく納得してくれた。今度もこの手で行こうというのである。

「すると坂本竜二の個性は、その身体とサッカーですな」

「それしかないか」

「とすると、『バイタリティ』ということにしましょうか。銀行も金融自由化の時代に突入し、ますますバイタリティ溢れる銀行員が必要になってきている。今年の採用の眼玉を、『バイタリティある人間を』ということにしましょう。この網でなら、坂本竜二を救えますよ」

(二) 副頭取のどら息子

するとその週末の土曜日、東山人事部長は副頭取の藤原からゴルフに誘われた。

そのゴルフは三週間前から言われていた。誘いの目的は、東山にはおよそ見当がついていた。息子の就職のことである。メンバーは、人事担当の佐川常務取締役と、それに副頭取お気に入りのある支店長を加えて、四人である。そのメンバーの手配い、ゴルフ場へと手続きと、

ちょっと意地が悪い質問かなと思ったが、そう聞いてみると、

「でも銀行員はホワイトカラーの代表ですから」

少しも信じて疑わぬという眼つきで、そう答えた。普通の大学生なら、大学のゼミで金融論を勉強したので、それを実社会で生かしたいとか、金融は日本経済の中枢にあるので、その中で働いて社会のために尽したいとか、菌の浮くような見え見えのでっち上げを喋るのが普通である。東山は、坂本竜二の飾らない、率直な返事に好感が持てた。

「ずいぶん、いい身体をしているね」

「はい、高校の頃からサッカーをやっていました」

差し出された履歴書を見ると、なるほど特技の欄にサッカーと書いてあった。

（問題は成績だな）

と、東山は思った。しかし、今日はまだ成績証明書は持参していない。就職協定の期限前なので、大学側も成績証明書を発行しないのである。

「学校の成績の方はどんな工合かね」

と東山はさらりと聞いてみた。

「はあ、どうもすみません。サッカーばかりやっていましたので、どうも勉強の方は得意ではありませんでした」

恐縮して太い首をちぢめ、象のような眼を細めた。予

すべて副頭取の方でがっちり仕組んでしまってあったので、断るわけにはいかなかった。

気分の重いゴルフであったが、ゴルフ場に到着すると、気分は一新した。

ゴルフ場の燃え上る緑は、テイグランドに立つと、ヘヤウエイも林も森も、いちめんの新緑で、進めど進めど、その新緑は果しなく、ラフに落ち込んだ球をアイアンで打ち出すと、茂った草がザッと音をたてて、空中に新鮮に散った。

五番ホールが終わり、六番ホールのゆるやかな坂道に来ると、東山は藤原副頭取と並んだ。すると藤原副頭取はその機会を逃さず、つと東山の方へ顔を傾けると、小声で、

「息子のやつ、青空銀行へ入りたいと言うのだ。よろしく頼むよ」

すばやくそう言って、ちらっと東山の顔を見た。

「はあ、なんとかやってみます」

東山も小声でそう答え、商談はそれで終った。あっという間の出来事である。佐川常務も支店長も、前の方を歩いていた。気ずかれた気配いはない。

藤原副頭取の息子というのに東山は逢ったことはないが、人の噂では、赤いスポーツカーなどを乗り廻している、どら息子のようであった。だから学業の方も、おおよその見当はつく。

（青空銀行なんてとても無理だな）

そんな思いが東山の胸をかすめた。しかし今はそんなことを言っている場合ではない。いずれゴルフを終ってからのことである。

この日の東山は気分が重くて、スコアはあまりよくなかった。ところが副頭取の方は、息子の就職の肩の荷が下りたためか好調で、東山はだいぶチョコレートを副頭取に支払った。どら息子の就職の面倒を見る上に、チョコレートまで払うなんて、馬鹿らしい限りだが、

（これも仕事のうちだ、仕方がないか）

帰りの車は、佐川常務と一緒だった。

「今日は調子が出なかったじゃないか」

佐川はちょっと東山の顔をのぞきこむようにして、そう言った。

「いえ、というわけでもありませんが…」

「副頭取から何か言われたんだろう」

「ええ」

「息子のことだな」

さすが佐川常務の勘は鋭い。

「そうです。青空銀行へ入りたいって言うのです」

「青空銀行だって？　あの馬鹿息子が入れる筈がないじゃないか。そんなの頼まれて、大丈夫かい」

「ええ、まあ、なんとかしますから、心配なさらないでください」

どこの銀行でも、出来のよくない息子を持つ重役が、就職で頭を悩ましている。それは重役の子弟を、自分の銀行に就職させることを禁止している銀行が多いからである。天光銀行も同様で、重役と支店長は、自分の息子を天光銀行へ入行させることを禁止している。それを許すと、銀行の中が、重役や支店長のどら息子で埋ってしまうからである。

仕方なく彼等はその就職先を、頼みやすい同業者、すなわち他の銀行へと白羽の矢を立てるのである。そして、その仲介の労をとるのが、どこの銀行でも、秘書役か人事部長ということになるわけである。

幸いなことに、今年、東山人事部長が世話しなくてはならない重役の息子は、副頭取の息子一人である。多い時には、二、三人の時もある。そういう時は大変で、自分の息子でもないのに、東山はあの銀行この銀行へと、頭をぺこぺこ下げて駆けずり廻るのである。

しかしこちらが頼みに行くということは、相手の銀行からも頼まれるということである。相手の銀行の人事部長も、同じように困っているのである。そのため、毎年何人かは他行経由のどら息子を受け入れざるを得ず、それをどうやって人事採用の中へ巧みに潜りこませるか、それが一苦労なのであった。

そのために各銀行の人事部長は互いにライバル同志でありながら、比較的親密な友好関係を結んでいるのである。お互いに、バーター就職がうまくいかないと、困るからである。もし頭取や実力会長の子弟で失敗すれば、それは致命傷で、

（あの人事部長ときたら、わしの息子一人の就職も何とか出来んのか）

と、将来の重役ポストさえ失いかねないのである。が、成功すれば、頭取、会長からのおぼえめでたさは計り知れない。東山人事部長としても必死にならざるを得ないわけである。

こうしたバーター人事をうまくやるために、どの銀行の人事部長も綿密な連絡を取りあっており、それを間違いなくするために、どの人事部長も「あの銀行へは何人」、「あの銀行からは何人」という、克明な実績を手帖に記入していた。いわゆる貸し借りの、星取り表である。

週が明けて、月曜日の朝一番。

秘書室の女子行員が、

「藤原副頭取よりお預りしてまいりました」

差出す封筒をあけてみると、息子の履歴書が出てきた。抜け目のない副頭取だと思った。東山はちらっと見ただけで、履歴書をすぐ封筒に戻した。少ししまりのない、我儘そうな若者の印象が、東山の中に残った。

東山はバーター人事の星取表の手帖を開けて、

（青空銀行ねえ）

飲んでいるが、若葉の頃の木曜会の彼等の神経は、就職協定のフライングと、バーター人事の交渉で、神経が高ぶっていた。

席上、フライングの常習の平安銀行の渋井人事部長は少し敬遠されて、孤立しているように見えた。それを気にしてか、渋井人事部長は自分から立ち上って、周囲へお酌などをしていたが、その度に相手から、

「平安さん、今年はフライング、大丈夫でしょうな」

と冗談にかこつけて、今年のフライングの危険性を渋井部長の表情の中に、読み取ろうとするのであった。

「殺生な。そんなに、いじめないで下さいよ。もう心を改めて、おとなしくしています。昨年だって、従順そのものだったではありませんか」

「昨年おとなしかったから、今年は荒れるということもありますよ」

「いや、いや、ご勘弁を」

互いに様子を探りながら、牽制球を投げあっていた。

二年前、フライングで天光銀行を刺し、東山人事部長を銀行協会の中会議室であやませたのが、この平安銀行だと思うと、東山は渋井部長と話す気になれなかった。もっとも、今の渋井部長は、東山を刺した人事部長とは交代しており、同じ人間ではなかったが、しかし体臭には同じようなものがあり、東山はそれを避けるように、渋井部長が酌に廻ってくる前に、席から立ち上った。東

と溜息をついた。

(青空銀行へ入りたいなんて、身のほど知らずじゃないか。青空銀行は、日本銀行へ入る次に難かしい銀行だ。それを息子が言うままにこっちへ言ってくる副頭取も、親馬鹿いいところだ)

しかし東山の手帳の星取表を見ると、青空銀行へは昨年、一点の貸しがある。だからその枠を使えば交渉できないことはないが、しかしどら息子にも程度がある。果して赤いスポーツカーのどら息子を、青空銀行が受け入れてくれるか、どうか。

となると、もう一行、すべり止め銀行を作っておかないとまずいなと思い、東山は星取り表を丹念に見ながら考えていたが、

(やはり月島君のところへ頼むしかないか)

月島とは、南北銀行の人事部長である。東山とは大学が同じで、同期生である関係から昔から親しく、人事部長になってからも一番面倒をかけあっている間柄であった。

木曜日の夜が、銀行団の人事部長の会である。毎月一回、木曜日の夜開かれるので、木曜会と言っている。都市銀行の人事部長が全員集まる親睦会であるが、彼等にとっては重要な情報交換の場である。

最初のうちは座敷のテーブルの前に座っておとなしく山には狙っている人物があったのである。

東山人事部長は青空銀行の鈴本人事部長の横に座ると、

「どうぞ、一杯」

と酌をして、

「今年は一人お願いしたいんです」

と間髪を入れずに頼みこんだ。

「どうぞ、ご遠慮なく。昨年はわたしの方からお願いしておりますから」

「実は、うちの銀行の藤原副頭取のご子息でしてね」

「それなら問題ないじゃありませんか。引き受けますよ」

「でも、それがちょっとひどいのです」

と東山は概略を説明して、

「そんな工合ですから、とても無理だと思います。それでお願いしたいのは、一度だけ会ってやってほしいのです。わたしも頼まれた以上、何もしないで駄目だというわけにもいきませんので、とにかく一度会っていただいて、それで駄目なら、駄目で構いません」

「でも、それでは東山さんがお困りになるのではありませんか」

「ええ、困りますが、そうでなければ鈴本さんの方がもっと困るでしょう。そんなことをお願いするわけにはいきません」

「わかりました。お会いするだけは、お会いしましょう」

「すみません。これで私の顔も立ちます。滑り止めの方は別になんとか考えますから」

東山がそんな話をしている間に、席はいつしか乱れて、あちこちで差しつ差されつ、ひそひそとバーター人事の密談に花が咲いている。

東山も青空銀行との話はその辺で切り上げると、目ざす南北銀行の月島人事部長の横に移動した。月島は、

「なにか難かしい話をしていたじゃないか」

「うん、実はその件でぜひ頼みたいことがあるんだ」

と東山はいきさつを簡単に話して、

「そんな工合だから、君の銀行で採ってくれないかなあ。頼むよ、この通り」

と東山は両手を合せた。

「まあ、仕方がないさ。君との仲だ。なんとか押し込むよ。うちは青空銀行さんのように、エリートばかりを集めている銀行じゃないから、なんとかするよ」

「すまないね」

「だが、僕の方にも頼みがあるんだ。会長の甥に当る学生だがね。これ、君のところで採用してくれないかなあ」

「わかった」

「ところが、これも、どら息子らしい」

まあまあ平隠な年だといってよかった。

八月二十日は晴天であった。

どの企業の前にも、大学生の行列が続いていた。一般のサラリーマンたちは、半袖のワイシャツとか、ポロシャツなどの、軽快な服装なのに、行列の大学生だけは言い合わせたように紺の背広に身を固めて、炎天下の暑さに耐えているのは、気の毒であった。

天光銀行が予定している採用人数は、四百人である。それに対して学生は三千人以上が押し寄せてきていた。それは学生たちが、大学入試の時と同じように、一人で五社も六社も受けるからであった。

従ってそれを迎える銀行の方も、窓口が一つでは足らなかった。天光銀行でも常設のリクルート室は二部屋であるが、臨時に会議室や応接室を転用して、十部屋ほどのリクルート室を作った。そして人事部のメンバーが総出で、分担を決め、対応に大わらわの日が続いた。

学生の企業訪問の解禁日は八月二十日であるが、採用試験を行い、内定をしてもよいのは十月一日であった。だから企業訪問というのは、学生が企業を訪問して人事部の人間と面接し、会社の内容の説明を受けたり、質問したりという、就職活動の事前活動なのであった。

しかし実際には、人事担当者が一人一人学生に面接して、銀行の内容を説明しながら、よく学生を観察する。そして学生の方も、履歴書、成績証明書持参と、準備おさおさ怠りないから、実際はこの企業訪問が実際の採用面接となるのであった。

面接の一日目が終ると、有望な学生へは電話で、翌日の再面接を通知する。そして再面接には、人事係長、人事課長クラスが面接し、それに合格した学生に、最後に人事部長が面接して、内定の通知を出すのである。

大勢押しかける学生を、そのような慎重な手順を経て内定するわけであるが、しかし学生の方も並行していくつかの会社を訪問しているわけであるから、まごまごしていると人材を他の会社に取られてしまう危険がある。したがって面接から内定までを、二、三日でやってしまわなくては、ならないわけである。

こうした手順に従った訪問が始まると、三日目東山人事部長の面接の日がやってくるのである。しかしそうしたスケジュールに忙殺されながら、東山の頭の隅には、水間頭取から頼まれている高知の大学生、坂本竜二のことがあった。その対策としては、今年の採用方針の一つに『バイタリティある人物』という項目を入れ、

（バイタリティを基準として、二、三名、採用したい）

と経営陣の了解をとりつけておいてあるので、その中でうまく処理出来るはずであった。

次の問題は藤原副頭取のどら息子だった。

先日の人事部長会の翌日、東山人事部長は藤原副頭取へ、

「どらと、どらとで、あいこじゃないか」

「麻雀なら、どらどらで、歓迎だが、就職試験ではどうもねえ」

「まあ、いいじゃありませんか。どらどら人事といきましょう」

こうして人事部長懇親会は九時頃には終った。

東山は帰りの車のシートに身を埋めながら、

（どらを一匹片付けたと思ったら、また、どらが一匹とび込んできた）

と思った。そんな他人の迷惑も知らずに、赤いスポーツカーを乗廻してカッコよがっている若者が、腹立たしいというよりも、東山にはなにか哀れな気がしてきた。

（四）訪問解禁

今年も大学生の企業への訪問解禁日は、八月二十日である。

六月、七月と、東山人事部長は平安銀行のフライングを警戒してすごした。おそらく他の銀行の人事部長も同様であろう。しかし無事に時間は過ぎてゆき、何事もなくほっとした。もちろん見えないところでは、幾分こそこそした動きはあったようであるし、またその程度の裏工作は天光銀行でもやっていた。しかし表沙汰にはならず、一昨年のような大騒動にまで発展しなかったのは、

「昨夜の人事部長の会で、青空銀行の人事部長によく頼んでおきましたから、至急、履歴書を持って会いに行ってください」

と報告した。そこでさっそくどら息子は、青空銀行を訪問した。青空銀行では東山の顔を立てて、直接鈴本人事部長が会ってくれたようである。

もちろん、結果は聞かなくてもわかっていた。いずれかの時点で、南北銀行の方へスイッチしなくてはならない。その時点をいつにするかと迷っている時に、どら息子はもう一度青空銀行から呼び出しを受けたのである。そして若い人事担当者と面接し、簡単なテストと、大学の成績についてのヒヤリングを受けたのである。その結果が、青空銀行の鈴本部長から、東山人事部長のところへ、

「とても、箸にも棒にもかからないよ」

と報告されてきたのである。

「本当に申し訳ありませんでした。ご迷惑をおかけいたしました」

と東山は受話器にむかって平身低頭した。

そしてただちに藤原副頭取室を訪れると、その旨を伝えた。

「うーむ、困ったな」

副頭取も息子から、テストの時の様子は聞いていたようなので、あまり驚きはしなかったが、救いを求めるよ

うな視線を東山に投げかけた。東山はこのタイミングを外してはならないと、

「でも、もし、別の銀行でもよろしければ、至急当ってみますが…」

副頭取の愁眉が開いて、

「そうか、やってくれるか、頼むよ』

「南北銀行ではいかがでしょうか。あそこの人事部長なら、大学が同期で親しくしておりますので、なんとか頼みこめるのではないかと思います」

「南北銀行だって一流銀行だよ。頼むよ、ぜひ…」

ということで、藤原副頭取のどら息子の方は、南北銀行の月島人事部長の方で、なんとかうまく処理してくれているようであった。

こうして秋の気配いが感じられる頃になると、内定者の数もふえ、目標の人数に近づいていった。

天光銀行の目標は四百人である。しかし内定しても、内定辞退が出てくるから、少し余分に採っておかないと危険である。一人の学生がいくつも会社を訪問し、二つも、三つも内定を貰うが、それがいずれ一社に絞られて、他はキャンセルする。それに加えて公務員の採用試験が秋から翌年にかけて行われるので、公務員へ進む学生からも、キャンセルが出る。その目減り分を予想して上乗せしておかないと、目標数を割ってしまうのである。

「今年の掛け目は、どの位にしたらいいでしょうかね」と、太田川副部長が相談に来た。しかし相談されたとしても、東山にも判断できるわけがない。

「わからないな。でも、今年はフライングもなかったし、まあ落着いていたから、案外安定しているかもしれないな」

フライングのある年は、学生の方も心配になり、(どこでもいいから、一つでも多く内定先を取りつけておこう)

と焦るから、キャンセルが多いのである。

「昨年はどうだったかな?」

「最終的に公務員の方へ流れた分も入れますと、三十パーセントは減りましたね」

「じゃ、今年もその程度見ておけば、いいのじゃないかな」

「そうすると、逆算して五百七十人ぐらい内定しておけば大丈夫でしょうか。今の内定が五百五、六十人という線に来ておりますから、そろそろ調整をいたしましょう」

こうして天光銀行は、この年の内定者は五百七十名と決めて、十月一日の就職試験日を迎えたのである。

しかし就職試験といっても、今日集ってくるのは、すべて内定を受けている学生ばかりである。試験といっても、簡単な論文、役員との面接があるだけで、それも形

式的なものであるので、学生の方も落着いていた。

しかし五百七十人の大学生が一時に押しかけてくるのであるから、それを受ける銀行の方は大変である。もちろん個別面接は不可能であるから、十五人ずつ一組にした、集団面接である。それでも四十回近くは面接しなくてはならない。

そこで水間頭取と、藤原副頭取、それに二人の専務取締役をキャップにした四組の面接チームを作り、そこへ取締役や各部の部長、そして人事部のスタッフが参加した。

東山人事部長は事前に、キャップである頭取、副頭取、専務取締役のところへ行って、

「今日は面接といっても、形式だけのものですから、その点をお含みください。全員内定の通知を出している者ばかりですから、面接して、あいつは駄目だと言われても困りますから、その点よろしくお願いいたします」

と、念を押して歩いた。

藤原副頭取の部屋を訪れると、話が終った後、副頭取から

「息子のこと、どうもありがとう。おかげで助ったよ」

「いえ、力およびませんで、ご希望の銀行でなくて申し訳ありませんでした」

「いや、いや、青空銀行だなんて言ったのが、そもそもの間違いじゃったのだ。うちの息子が青空銀行へなど入れるわけがない。南北銀行ぐらいで丁度よいのだ」

「まことに至りませんで、申し訳ありません」

東山人事部長はそう返事をしたものの、その南北銀行だって、丁度いいどころか、南北銀行の月島人事部長が苦心惨憺して押し込んでくれたからこそ、入れたのであった。

(五) 面接の日

四つの面接チームのメンバー構成としては、東山人事部長は当然のことながら水間頭取のチームへ参加し、藤原副頭取のチームへは太田川副部長が、そして専務取締役の班へは二人の課長がそれぞれ付き添った。

頭取チームは、役員会議室を面接会場として使用した。そのため、ただでさえ緊張している学生たちは、役員室の廊下の厚い絨緞をふんで、一段と緊張した。

広い円形テーブルの正面には水間頭取が座り、その両脇に常務取締役、各部の部長が並び、その外側に東山人事部長と人事部のスタッフが並んだ。

各人の前には、面接を受ける学生の一覧表と、ちょっと大袈裟な調査用紙が置かれていた。学生はすでに全員内定されているのだから、いまさら調査とかチェックなど必要ないわけであるが、あまり形だけの面接だと学生たちにわかってしまってはまずい。そこで面接の途中で、

何でもいいから適当に記入して、チェックをしているように見せる工夫であった。

そのため学生たちは、テーブルの向う側から本当に質問され、観察され、一人一人厳重にチェックされているという錯覚に陥って、緊張度はその極に達するのだった。それと同時に、銀行の役員部長たちの「どうせ形だけの面接だから」という、ともすれば緊張の緩みがちな気分を、引締める役目も果しているのであった。

人事担当者の案内に従って、十五人の学生が入ってきた。緊張して、機械で動く人形のようにぎこちない。ほとんど全員がリクルートルックという、紺の背広に赤いネクタイ。個性の時代だというのに、どうした現象なのであろうか。でも、これも彼等の処世術の一つなのであろう。

席に座り、端から一人ずつ簡単な自己紹介が始まる。立ち上ると、ていねいに頭取の方にむかって、

「文政大学の山野孝一でーす。よろしくお願いします」

と最敬礼した。そして控室で事前に人事担当者から指示されていた、簡単な経歴、特技、趣味などを話した後、天光銀行への志願の動機と、入社後の抱負を述べた。受験の動機は、天光銀行は若い者にとって魅力のある銀行であること、大学で金融経済を勉強したものを社会に出て行かせるのは銀行であることなどの、型にはまった説明で、これもリクルート・スピーチである。そして最後はほとんど異口同音に、

「入社後は頑張りますから、よろしくお願いしまーす」

の宣誓であった。

その自己紹介を聞きながら、面接員のペンが時々調査用紙の上に動いた。するとその度に、学生たちの間に見えぬ動揺が起こり、動くペンの方向に視線が動いた。学生たちは人事担当者から、「たとえ内定していても、今日の面接で落ちることもあり得る」と、言われていたからであった。

十五人の自己紹介が終ると、水間頭取はちょっと意地悪な質問を始めた。会場の雰囲気を柔げようと、いたずら半分に学生をからかっているのであるが、質問を受けた方は大変で、ほとんど顔がまっ青になってしまうのだった。

「先ほど君は、銀行の仕事の中で自己実現をしたいと言ったが、仕事の中での自己実現って、何だね」

言われた学生は緊張のあまり、自分がそんなことを言ったかどうか忘れてしまって、茫然としている。そこで人事担当者が、

「慶安大学の斉藤君だったね」

と助け舟を出した。

「はい」

と顔中に困惑の表情が浮かび、

(えっ、自己実現ですか……?)

と金縛りにあったようになって、

「そのう、仕事という場を、自分の心、自分という人間を表現していく場にする、そういうことではないでしょうか」

「難かしいんだな、君の言うことは…。心、心といったって、銀行は修道院や禅寺じゃないんだよ。はっきり言えば、働いて給料を貰うところなんだよ」

「でも、仕事というのは、単に金が目あてだけではいけない。仕事とは自分を生かすものでなくてはならない。とくに新人類はそうでなくてはならないと、ゼミの教授から教わったのです」

「いま新人類という言葉が出たが、新人類って、何が新しいのかね」

「感性だと思います」

「例えば?」

「家庭を大切にします」

「我々だって家庭は大切にするよ。家庭がしっかりしていないと、いい仕事は出来ないからね。その次は…?」

「視野が広いことです」

「広いって、どのように広いのかね」

「いろいろ物を知っています」

「でも、いくら知っていても、雑学では役に立たないよ」

頭取の方は面白半分でやっているのだが、それを受ける学生の方は気の毒である。

東山人事部長はそんな面接に立会いながら、眼の前に並んでいる十五人の学生の、ヘヤスタイルを眺めていた。最近は大学生だというのに、なんとなく髪の形が子供っぽいのである。中学生や高校生のヘヤスタイルが、そのまま延長されているような気がする。そのほとんどが、前に垂らしているか、最中より分けていても、その分れた先が、半分は顔を隠している。

七三にきちんと横分けにしている者もいるには居るが、ほんの二、三名である。ヘヤスタイルにも、リクルート・ルックのようなものがあるのであろうか。もちろん銀行へ入れば、やがては七三の横分けになっていくのであるが、

「そのスピードが遅いので困るのですよ」

と支店長たちがよくこぼしているのを、東山人事部長は耳にしていた。入行当初はまあ仕方がないとしても、二年たっても、三年たっても、前垂れ顔かくしスタイルなので、注意すると、

(プライバシーに口を出すな)

という顔をして、なかなか七三横分け式に移行しないのである。江戸時代でいえば、二十歳過ぎても前髪姿で、元服できないという感じで、言ってみれば乳離れが遅いのであろうか。

そんな面接に立会いながらも、東山人事部長の頭からは、二人の学生のことが離れなかった。

一人は水間頭取の友人の息子、高知の坂本竜二である。もう一人は、藤原副頭取のどら息子を南北銀行に押し込んだ見返りとして、南北銀行の月島人事部長から頼まれているどら息子であった。このどら息子も、南北銀行の会長の甥に当る学生で、東山と月島とが、

（どらとどらとで、どらどら。麻雀なら満貫ですな）

と苦笑した大学生である。

東山人事部長がそんな思いにかられていると、高知の坂本竜二が入ってきた。その巨体を見ると、面接者の間から、

「ほお」

と声が洩れ、

「これがバイタリティ第一号ですな」

常務が隣の部長とささやいた。その声が水間頭取の耳へも聞えているのだが、もちろん頭取は知らん顔をしている。

坂本竜二の自己紹介が終って、質問の時間になったとき、頭取は坂本竜二にむかって、

「君はずいぶん大きいね」

と言った。水間頭取も坂本竜二本人を見るのは今日が初めてであった。

「はい、九十キロあります」

「なにかスポーツをやっているのかね」

「高校の時から、ずっとラグビーをやっています」

「そうか。それではバイタリティの固りだ。銀行へ入ったら、そのバイタリティで頑張ってくれ。ところで、お父さんは元気かね」

それを聞いた東山人事部長は、ひえっと、飛び上らんばかりに驚いた。ここは正式な面接の場である。そんな個人的な話に入ったら、コネをひた隠しにしている東山部長の苦心が水の泡になってしまうではないか。

「あの、父ですか…？」

「そうだ」

「元気で船に乗っています」

東山人事部長は、居並ぶ面接員の顔の表情に、視線を走らせた。しかし彼等は、頭取がたんに一般論として両親のことを聞いているのだと思ったらしく、特別の反応は見られなかった。東山人事部長は一応ほっとしたが、面接が終って学生達が廊下へ退場したときには、東山の全身は冷や汗でびしょ濡れになっていた。

それから二チームほど面接があり、その後の面接に、南北銀行会長の甥という、例のどら息子が入ってきた。東山人事部長の一番の泣きどころである。

内定はうまく通るかと心配していたのだが、それはどうやらうまく滑り込めたようだった。もし内定者を目標の四百人で打ち切っていれば駄目だったのだが、掛け目を三十パーセント見て、五百七十人と多目に内定したので、その尻に喰いつけたというわけだった。

そのどら息子が、事もあろうに水間頭取の前に座ったのである。しかし着席は、順番になっているのだから仕方がない。

（どうか、ぼろを出さないでくれ）

東山部長は祈る気持だった。これはやはり事前に工作して、藤原副頭取の班の方へ廻すべきだったと後悔した。藤原副頭取のどら息子のバーターだということを、副頭取の耳へ入れておけば、うまく処理してくれたであろう。多忙にまぎれて、そこまで気が廻らなかったことが悔まれた。

しかしどら息子といっても、このどら息子は、外見はなかなか立派なのである。身長もかなりあり、容姿端麗。ルックスだけで判断したならば、並んだ十五人の中の二番か三番になるかもしれない。頭取に正面から見られていても物おじしないし、堂々としており、明るい感じの顔の表情がとてもいいのである。

順番に従って端から自己紹介が始まると、東山人事部長は固唾を呑んで見守った。

やがてどら息子の番になった。しかし世慣れていると見えて、そうしたスピーチがうまいのである。淀みもなくいいし、よどみなく喋る内容も要領がいい。

（案外、この大学生、銀行員に向いているんじゃないのかな。銀行員なんて、学校の成績がそんなに良くなくたって、普通であればいいんだ。要は適性の問題なのだ）

なんだかいい方向へ風が吹きはじめそうだなと、東山が思っているところへ、本当にいい風が吹いてきたのである。

「君はいい顎をしているね」

と水間頭取が、どら息子の顔を見て言ったのである。

「はい」

何のことだかわからないが、黙っていてはまずいと、どら息子はとりあえず、はっきりとそう返事した。

「そういう顎は、お金が溜まる顎なんだよ」

水間頭取は占いに凝っているところがある。きわめて合理的、財務的な人間であるが、その内側に一点、そうしたものを隠し持っているのである。なぜ占いなのか。それはよくわからないのだが、占いが好きというよりも、

（人生は百パーセント、科学的、合理的というだけでは成り立たない。一パーセントは人智を越えたものがある）

という人生観から出ているもののようであった。

もちろん、この占いが仕事の中に出ることはない。頭取の頭の中では、占いをめぐっていろいろな葛藤があるのであろうが、それが生の形で仕事に出てくることはない。しかし人事の場合に限って例外的に、それが時たま

出てくるのである。出てくるのは人事異動とか、新規採用の場合である。

占いには、人相占い、手相占い、年令占い、誕生日占い、星座占い、など様々あるが、その人相占いが、このどら息子の上に出たのであろう。

「その顎は銀行員として成功する顎だ。君は学業よりも、顎で合格したな」

場内は爆笑に包まれたが、東山人事部長はとび上らんばかりに驚いた。しかし同時に、ほっと安堵した。

水間頭取は手許の調査用紙の、どら息子の名前の上に大きく二重丸をつけると、東山人事部長の方に廻してよこした。東山の全身から、安心の冷や汗が流れ出た。

しかしこの事をよく考えてみると、

（水間頭取はこのどら息子がバーター人事取引であることを知っていて、わざと顎をほめたのではあるまいか）

と、東山人事部長には思えるのだった。バーター取引のこちら側が藤原副頭取であってみれば、おかしな工合になっては困るだろうという配慮と、自分が持ちこんだ坂本竜二をうまく処理してくれた返礼の意味もこめて、占いを使って、協力してくれたのに違いない。とにかく理由はどうであれ、頭取がオーケーしたのであるから、文句をつける人間は誰もいなかった。

大がかりな役員面接が終ると、採用試験もやっと一段落というわけである。大きな年中行事が一つ、終ったという感じである。あといろいろ細かい手続的なことや、多少の出入りはあろうが、その辺は明日やればよい。

夕方になると久しぶりに肩の荷が降りた気分になり、人事部のメンバーは三三五五つれ立って、夜の街へ飲みに出掛けた。

東山人事部長もその中に混って一緒に飲み、少し遅くなったが家に帰ると、妻の京子が、

「今日は就職面接の日だったんですね。御苦労さまでした」

と、家にも乾杯のビールが用意してあった。

「じゃ、もう一度、乾杯といくか」

東山は妻と一緒にまたビールを一気にのどに流しこみ、しばらく今日の面接会の様子などを話し合っていると、京子が、

「世の中があまりコネだ、コネだと騒ぐものだから、コネがなくても大丈夫な学生まで、コネ探しに走り廻るの、かわいそうね」

などと言った。言われてみれば、たしかにそうである。しかし東山の方も、

（コネだ、コネだと大騒ぎされて一番困るのは、そのコネを持ち込まれる人事部長の方なのだよ）

と、心の中でつぶやいた。コネなどは、本当になくなればいいのだ。しかし人間社会がある限り、コネというものは、なくならないであろう。いや、ひょっとしたら、社会というのはコネのことなのかもしれない。

すると京子が、

「でも、そうかといってあまり世情にうといのも、困ったものだわね」

などと、思案げな顔で言った。

「何かあったのか……？」

「ええ、さっき友達からの電話の中の話でね、その友達の知人の息子さんが、ある会社から内定の通知を受けたのに、それをキャンセルしてしまったので、どこにも就職が決まらなくて、困っているんですって…」

「どうして、そんな事をしたんだい」

「その息子さん、学校の成績もいいので、もっと別のいい会社の方へ入りたかったんですって。自信もあったみたい。しかし一つだけでは不安なので、もう一つ別の会社の方も受けていた。すると、その別の会社の方から先に内定の通知が来てしまったのね。しかし本命の会社の方も、いい線まで行っており、三日後の面接で内定が決まる。それで、どうしようかと迷ってしまったわけね」

「もちろん、その内定はオーケーしておいて、もし第一志望の会社の方が受かったら、それをキャンセルしてしまえばいいじゃないか。簡単なことさ。今時の大学生の常識じゃないか」

「それが、その学生さん、真面目すぎたのね。内定をオーケーしてもらっておいて、後からキャンセルするなんて、いけないと思ったんでしょう。その内定を断ってしまったんですって。すると狙っていた会社の方も駄目になってしまって、茫然自失。あわてて走り廻っているのだが、もう遅いわよねえ」

「かわいそうにな。いまどき、そんな純情な学生もいるんだな。親か友達にでも相談すればよかったのに」

「親には電話で相談したらしいのだが、なにぶん田舎の人なので、そんな事よくわからない。自分の思った通りにやればいいという返事。また友達も少なく、親身になって考えてくれる友達もいなかったみたいね」

「かわいそうに。でも、どぢな学生だなんて、笑ってもいられないな」

「そうよ、真面目な学生が馬鹿を見るような就職戦線なんて、ひどいわよ」

「まったくだ。でも、真面目といってもね、真面目の内容も時代によって変ってくるということも、あるのじゃないかな。今は学生も、ただ勉強だけしていればいいという時代ではなくなってきているからなあ」

翌日、銀行へ出勤すると、いつのまにかお濠端の緑も、夏の濃緑から、秋の黄葉へと移りつつあった。銀杏の並木も黄金色に輝く日が近づいていた。

（終）

お茶と煎茶道について（茶道史余滴）

忠内正之

これまで日本の茶道史について勉強してきたが、その茶道とは抹茶道であり、抹茶の歴史を考えてきた。しかし日本の茶は抹茶ばかりではない。一般的に我々が日常飲んでいるのは広い意味での煎茶である。

ひとくちに言うと、抹茶は葉茶を粉末にして湯水に溶かして飲むが、煎茶は葉茶を急須などに入れて湯を注いで煎じ汁を飲む。

両者とも歴史は古く且つ抹茶道・煎茶道として、点前や仕法が夫々確立されている。

また日本の茶は歴史を経て多種類に加工され、日常飲料用として欠くべからざる存在となっているにも拘わらず抹茶道だけにこだわっていた筆者は不勉強であった。改めて、大切な飲料用のお茶全般と煎茶道について考えてみたい。

一、お茶の種類いろいろ

我々が毎日飲んでいるお茶は、大きく分けると緑茶、烏龍茶、紅茶の三種類になる。これらはすべて同じツバキ科の植物であるお茶の木から摘んだ葉で作られ、その違いは加工の方法による。

お茶はその加工法によって不発酵茶、半発酵茶、発酵茶に分けられる。

「不発酵茶」は、お茶の葉がもつ酸化酵素の働きを止めて加工したもので、その代表が緑茶である。日本茶はここに入る。

「半発酵茶」は、酸化酵素をある程度活用して加工したもので、烏龍茶が代表である。

「発酵茶」は、さらに酸化酵素を最大限に活用したもので、紅茶が代表格である。

同じ緑茶でも発酵の働きを止める方法によって、蒸し製と釜炒り製にわけられる。現在日本で作られる緑茶の大部分は蒸し製であるが、中国式の釜炒り製法が九州地方に伝わり、佐賀、大分両県に残る嬉野製や、熊本、宮崎両県に残る青柳製と呼ばれる釜炒り製の緑茶もある。

一口に緑茶といっても、碾茶、碾茶をひいた抹茶、玉露、被せ茶、煎茶、深蒸し茶、番茶、玉緑茶、さらには煎茶や番茶を焙じた、焙じ茶、玄米をまぜた玄米茶などの加工茶がある。

二、日本茶の種類

お茶の種類

- お茶
  - 不発酵茶（緑茶）
    - 蒸し製（日本式）
      - 碾茶 ― 抹茶
      - 玉露
      - 被せ茶
      - 煎茶
      - 深蒸し茶
      - 番茶 ― 焙じ茶
      - 玄米茶
    - 釜炒り製（中国式）
      - 嬉野製
      - 青柳製
  - 半発酵茶（烏龍茶）
  - 発酵茶（紅茶）

「煎茶」は、日本で生産されるお茶の八割を占めている。ということは、飲まれているお茶の八割が煎茶だということになる。

「煎茶」は新芽を摘んだあと、すぐに一五～一六秒間、高温で蒸し、もんで乾燥させたものである。うま味と香りがあり、産地によってさまざまな特色がある。

「深蒸し茶」は、製法はほぼ煎茶と同じであるが、お茶の葉を蒸気で蒸すときに、煎茶よりも三、四倍多くの時間をかけて蒸して作ったお茶である。色が出やすく、きれいな緑色のお茶になり、甘みは増すが香りは薄くなる。

「玉露」は、お茶の木の新芽が伸び出したころ、よしず棚などで茶園全体をおおい、直射日光が当たらないようにして栽培した葉から作る、高級茶である。

「被せ茶」は、わらや寒冷紗などで茶園をおおって育てた、玉露に次ぐ高級な茶の葉からできるお茶である。一時、熱湯玉露の名前で売り出されたこともあるが、玉露とまぎらわしいため、現在では主に高級煎茶や普通玉露のブレンドに使われているという。

「碾茶」は、抹茶の原料である。玉露と同様に新芽の

ころにおおいをして栽培した葉を蒸すがもまずに乾燥したもの。

その碾茶を茶壺に詰めて夏を涼しい所で越し、秋の口切りのシーズンに茶道の家では、石臼でひいて抹茶にする。

「釜炒り茶」は、日本のお茶の始祖であるといわれる栄西禅師による伝播とは別系統で伝えられたお茶の製法で、生の茶葉を熱した釜で炒り、もみ、乾燥させて作るお茶の総称で、蒸気で蒸す煎茶に対していわれる言葉である。

九州の佐賀、大分両県に伝わる嬉野製と、熊本、宮崎両県に伝わる青柳製との二系統がある。

「玉緑茶」は、お茶の葉を蒸すか炒ったあと、精揉機（葉を細く針状にして乾燥させる機械）を使用せずに、乾燥するとき茶の葉を相互摩擦や圧迫によって丸い形に仕上げた煎茶の総称である。釜炒り製と蒸し製とがある。

「番茶」は、もともと夏ごろに摘む二番摘み、三番摘みの、おそ摘みした「晩茶」を意味していたが、この晩茶の製造法は現在一部に残るのみとなり、一般に売られている番茶は、煎茶の仕上げ工程で選別されたあとの葉を集めた良質な番茶と、一番摘み、二番摘みのあとに茶園の形を整えるため、刈りとった茎や古茶葉、かたい葉などで製造した「刈り番茶」の二つがある。前者は番茶のまま売られ、「川柳」と呼ばれる良質なものもある。後者は焙じ茶などの加工茶の原料にされる。

焙じ茶や玄米茶などを総称して「加工茶」という。

「焙じ茶」は、刈り番茶や茎茶などの出物（玉露や煎茶などの仕上げ工程で出た茎や芽など）を強火で炒って作った、香ばしさが特徴のお茶である。

「玄米茶」は、番茶に炒った玄米をまぜたもので番茶の渋さと、玄米の香ばしさが混ったお茶である。

出物の「茎茶」は、煎茶や玉露の仕上げ工程の中で茎だけを選別したお茶をいい、苦みの効いた、コクのある味わいをもつ。玉露を再製加工して製品にするときにできる、甘みのある高級茎茶を「雁音」と呼んで珍重している。

一方出物だけを集めてふるいにかけた「粉茶」は、すし屋で出される「上がり」によく利用される。青々しい生葉の香りと軽い口当りが特徴とされる。

三、お茶の産地

お茶の原産地はチベット高原説やインドのアッサム説、中国西南方の高山植物説などさまざまである。

植物学上の分類ではツバキ科の常緑灌木に属する。従ってもともと日本にも自生していたのではないかとの説もあるが、定説とはいい難いので一般論に依ることとする。

原産地がいずれにせよ、亜熱帯性植物であったお茶は温暖で降雨量の多い日本が生育に適した植物であった。

日本のお茶は、今から約八百年前の鎌倉時代に、中国留学からの帰り、お茶の種子を持ち帰った栄西禅師（一一四一―一二一五）が、弟子の明恵上人にお茶の種子を分け与えて、中国茶産地に気候風土がよく似た五ヶ所を、国内栽培の最適地として選んだ。

それは山城の宇治（京都府）、大和（奈良県）、伊勢（三重県）、駿河（静岡県）、武蔵（埼玉県）であるが、これらの地方は今の近代農業技術に照らして考えても、茶栽培に適した選定であったといえる。

栄西とは別系統で中国の製茶法が伝わった北九州地方には、嬉野製や青柳製の釜炒り茶がある。

また九州には、明治以後に新興栽培地として生産を開始し、大型機械の導入を行って生産高を上げている薩摩茶（鹿児島）など南九州地方がある。

現在全国各地で作られているお茶の、代表的な地域は、南は鹿児島から、北はお茶の経済的栽培の北限といわれる村上市（新潟県）に至る間二十七ヶ所あり、夫々特徴あるお茶の生産を続けている。

四、お茶の成分と効用

お茶には、主要なビタミンと共に、他の食品では得にくい貴重な成分がたくさん含まれていて、それらが相乗的に働いて、健康増進に大いに力を発揮している。

お茶の渋みは「カテキン」

お茶の特色として渋みがある。渋味を作っているのはカテキンという成分で、従来はタンニンと呼ばれている。カテキンはタンニンの一種である。

お茶の成分の八―一五パーセントを占めており、お湯を注いだときに、一杯の湯呑みにとけ出すカテキンの量は、七〇―一二〇ミリグラムで、これがお茶にほどよい渋みをもたらす。

カテキンは、ポリフェノールの一種で、抗酸化作用、抗菌作用があるという。

お茶に含まれるビタミンA・C・E

お茶にビタミンA・C・Eが豊富に含まれていることは案外知られていない。体の中に入るとビタミンAと同

じ働きをするカロチンが、人参の一〇倍近くも含まれている。カロチンはガンに対して抵抗性が強いと話題になっている。

またビタミンCは特に豊富で、ほうれん草の三倍近くも含まれている。さらに老化防止に効果のあるビタミンEも多く、まさにビタミンのエース級が勢ぞろいしている。

ほかにビタミンB群、ビタミンP・Uなども沢山含まれている。ただし、このビタミンB群とCは水溶性なのでお茶にとけ出しても、ビタミンA（カロチン）やEなどは脂溶性のためにお湯にとけて出ないという。その点抹茶はまる呑みするので有効的である。

お茶の薬効成分

お茶は中国で薬として発見され、利用されてきた。禅宗の栄西禅師によってわが国にもたらされたときのお茶も、禅師が著した「喫茶養生記」にあるように、カフェインの覚醒作用による修行僧の眠け防止とともに、薬としての性格の強い飲みものであった。

その後、嗜好飲料として発展したお茶は、全世界に広まり、水に次いで多く飲まれる飲料として普及していったのである。

中国には「仙薬思想」といわれるものがあり、「本草書」（漢方になる薬草を解説した本）では、

① 飲んで仙人になれる薬を「上薬」
② 飲んで病気を防ぐ薬を「中薬」
③ 病気になって飲む薬を「下薬」

と分類している。①の上薬と③の下薬としては不適当としても、②の中薬として大切にされてきたことは確かである。

お茶はまさに中薬である。どういう病気に効くとか、病気を治すとはいえないが、体によい薬効成分を豊富に含み、病気を防ぐ健康飲料なのである。

五、飲用方法から見た日本茶の歴史

茶樹の原産地は中国西南方からチベット、インド、タイ等にまたがる山間地とされている。ここからお茶の種子が日本に伝わったというのが定説であるが、もともと日本にも自生していたのではないかという説もあって学者も、茶葉研究家もこれといった判断の決め手を欠いている。

ここでは茶の飲用方法の推移から日本茶のルーツと流れを探ってみたい。

① 炙り法

山火事で立ち木が燃えてしまったとき最初に芽を吹くのが「山茶」であり、ヤマチャは生命力の強い植物という。今でも奥深い山中で見つけることができるが、そこはわざわざ人が茶を植えるような場所ではないので、自然に自生していたとも考えられる。

かつて山中で生活していた、山窩の人たちはこのヤマチャの枝を折り取り、焚き火で炙って湯に浸して飲んでいたという。

この飲用方法から、遡れば自生していた日本古来のヤマチャに辿り着くのではないかと思われる。

② 団茶法

持ち運びや保存に便利なように茶の葉を砕き、固めたものが団茶である。この塊をほぐして煮出し、甘葛や生姜で味付けして飲む方法を「団茶法」という。この飲み方がわが国に伝わったのは平安時代初めであった。

近江坂本にある「日本最古茶園」（日吉茶園）は延暦二十四年（八〇五）天台宗開祖最澄が唐から茶の種子を持ち帰り拓いたと伝えられている。

茶が文献に現れるのは弘仁六年（八一五）嵯峨天皇が近江唐崎に行幸されたとき、梵釈寺僧正永忠が茶を献じたという記録が最初である。永忠は遣唐使として唐に渡り、喫茶法を学んで来たと思われる。

唐ではこれより百三十年も前に陸羽が「茶経」を著し、茶の製法とともに喫茶趣味を広めていた。

しかしこの唐風の団茶法は遣唐使の廃止（八九四）によりすたれ、現代の茶につながっていないので日本茶のルーツとはされない。

③ 抹茶法

唐風の団茶法に代わって鎌倉時代初めに渡来したのが、現代に伝えられている宋風の「抹茶法」である。

これは精製された茶の葉を薬研や石臼で細粉化し、茶碗に入れ熱湯を注ぎ茶筅などで撹拌して飲む方法である。

最澄からおよそ四百年後、臨済宗を伝えた栄西禅師は宋から茶種を持ち帰るとともに「喫茶養生記」二巻を著し、茶の栽培法や効能を説いた。

建保二年（一二一四）、鎌倉幕府三代将軍源実朝が深酒が原因で病に伏したとき、この抹茶を献じたところ快癒し実朝は大いに喫茶を礼讃したということである。

この抹茶法は連綿と現在に続き、後世煎茶や玉露製法が考案されるキッカケにもなったことから、日本茶のルーツとされている。

④ 煎茶法

茶葉を急須などに入れ、お湯を注いで煎じ汁を飲む方法を「煎茶法」という。しかし厳密に言えば煎ずるとは、団茶のように煮出すものであり、いわゆる煎茶は淹し茶

として区別されるものである。

さて、抹茶は貴族社会から武家社会へと広まっていったが、所詮は庶民の茶ではなかった。庶民が飲んだ茶は若葉や古葉を残らず摘んで、熱湯でゆがいたあと日干しや風干しした粗末なものであった。

元文二年（一七三八）宇治の茶商永谷宗円は、碾茶製法を応用して「青製煎茶」を考案した。

また幕末には山本嘉兵衛（今の山本山の先祖）が玉露を完成した。それまでになかった美味しさはたちまち評判となり、煎茶は日本茶を代表する茶となった。

⑤ペットボトル緑茶

急須や土瓶などを使って飲む煩雑さを避けて、利便性が重視され近年では手軽なペットボトル緑茶が幅をきかすようになった。

しかし茶が占める原価はごく僅かで、ほとんどがボトリング代と流通コストである。

このため茶のもつ自然の旨味と栄養は急須等で淹れる茶には及ばない。

筆者もおにぎりとペットボトルのお茶で昼食を済ますことがあるので生意気なことは言えないが、単なる水分補給のためではなく、茶を飲む日本の文化をもっと大切にしなければならないと考える。お茶の飲み方がここ迄変化して来たかと歎きたくなる。

六、日本における煎茶道について

煎茶の発展と共に、日本においても茶の湯同様、煎茶道の発生がなされている。

茶の先輩国である中国の宋代では抹茶が盛んとなり、さらに明代になると、煎茶がより中心となった。

明代の文人たちは、香り高い煎茶を喫しつつ、詩をうたい、絵画を語り、美術工芸を愛でるという文人趣味を生み出した。

この文人趣味が、新しい禅宗として江戸時代わが国に渡来した黄檗宗とともに伝えられて発展したのが日本の煎茶の世界である。

（ちなみに、先に栄西が持ち帰ってきた宗派は臨済宗、少し遅れて道元が持ち帰ったのは曹洞宗、江戸中期に隠元隆琦という中国の禅僧が持ち込んだのが黄檗宗と言う。これらを日本の禅宗三派と呼んでいる）。

従来の日本のお茶は抹茶が中心であり、抹茶の湯としての茶道文化であったのが、新しい飲茶法である煎茶と文人趣味は、先進国中国の文化として、人々の間に急速に広まっていった。

伝来当初は、中国の文人趣味の模倣であったのが、次第に日本化され、独自の文化として形成されるようにな

り、茶道文化として発展していった。

文人たちの間に広まった煎茶の世界は、黄檗宗の僧、高遊外売茶翁（一六七五―一七六三）によって一つの方向が示され、売茶翁の精神を中心に発展していった。

（売茶翁は、既存の禅と茶の堕落を鋭く批判したといわれ、我が国煎茶道の始祖として後世に尽大な影響を及ぼした）。

更に、宇治の茶師永谷宗円が新しい煎茶や玉露の製法などを考えだしたこともあって、煎茶の普及が大きく進んだのであった。

日本式の緑茶が生まれ、玉露が開発されると、先行していた抹茶道の影響も受けながら、ある程度の形式礼法が生まれ、新しい茶道としての煎茶道の世界が形成された。

しかし形式礼法といっても形式至上主義の世界ではなく文人たちの好んだ、進歩的且つ自由な世界ということで抹茶道とは一線を画した行き方であった。

江戸時代末頃から明治時代初めにかけて煎茶道は茶の湯をしのいで日本の茶道文化の中心になるほどの勢いであったが、文明開化の波と時代の変化によって一時期衰えた。

しかし好事家の努力によって昭和初期には徐々に復興され、その後第二次大戦で中断されたものの、戦後再び各流派の努力によって普及、発展してきている。

煎茶道にも多くの流派がある。本来形式礼法にこだわらない自由な世界であるべきと思うが、何人かの人が一同に揃って、お茶をふるまったり、ふるまわれる場合、全く無法というわけにはいかない。

煎茶の礼法とは、自由人の遊び事として、文人の間に始まった文人煎茶が、一般に広まっていくにつれて、お茶のいれ方、飲み方など、必要最小の形式が自然に生まれ、やがて合流して流派が成立する過程で形成された形式礼法である。

煎茶道の習得はまず形から入る必要があるといわれる。煎茶をたのしむための常識的な作法だからである。

現在の流派は、江戸末期に生まれた流派をはじめ、昭和の現代に生まれた流派まであり、文人煎茶の流れをくむ流派、形式礼法を尊重する宗匠系の流れをくむ流派などさまざまがある。

茶の湯の三千家に匹敵する程のスケールを持つ流派はないものの、中堅流派は全国各地に数多く存在しており、煎茶道の伝統が営々として守られている。

七、煎茶の歴史に登場した人物

煎茶の歴史に名前を残した人物は数が多い。殊に煎茶

趣味が普及した江戸中期以後、明治大正の時代にかけて文人といわれる人々のほとんどが煎茶にかかわっていたと言っても過言ではない。

中でも特に知名な人を次の通り時代別に列記してみたい。

高遊外売茶翁（一六七五―一七六三）
前述の通り、わが国の文人や知識人に煎茶趣味が流行するきっかけを作った。

聞中浄復（一七三九―一八二九）
黄檗僧で、売茶翁に煎茶を学んだといわれる。京都相国寺の大典顕常に師事した。
詩文に長じ、書、篆刻に秀でていた。

池大雅（一七二三―一七七六）
売茶翁と親交があり、翁から煎茶具を贈られている。南画家として世に知られているが、煎茶をよく愛した一人。

上田秋成（一七三四―一八〇九）
国学者、「雨月物語」の著者。煎茶家としても知られ、煎茶書「清風瑣言」を著し、煎茶普及に大きな影響を及ぼした。

小川可進（一七八六―一八五五）
京都の医師。「後楽堂喫茶弁」の著者で可進流、のちの小川流の祖である。

田能村直入（一八一四―一九〇七）
竹田に師事した南画家。煎茶家としても知られ、文久三年、売茶翁百回忌を期して「青湾茶会」を開き、その図録を残している。

富岡鉄斎（一八三六―一九二四）
画家としても高名で、煎茶家としても知られ、「鉄荘茶譜」という茶書を残している。

むすびとして

緑茶の国内生産は伸びているという。抹茶道も煎茶道も衰退期に入っているのに、緑茶の需要は減っていないのである。

加工食品に囲われる碾茶の需要増加を勘案するとしても、飲料用としてまた嗜好品として緑茶は必要不可欠な存在である。将来共に最もなじみの深い緑茶の中の煎茶をなおざりにする訳にはいかない。味わいぶかい煎茶の中の玉露の味は極めて美味である。

筆者はかつて正式な煎茶席に招かれたことがある。

木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）
大坂の人。多くの文人たちと交流しサロンを形成した。煎茶を好み、みずからも画にすぐれていた。

田能村竹田（一七七七―一八三五）
南画家で、煎茶家としても名高く、煎茶に関する著書を残している。頼山陽と親しく交際していた。

頼山陽（一七八〇―一八三二）
「日本外史」の著作者として知られる頼山陽も煎茶家として高名である。京都鴨川西の家の「山紫水明処」は、山陽が煎茶を楽しんだ書斎である。田能村竹田との交流もよく知られている。

青木木米（一七六七―一八三三）
京焼の著名な陶工であり、画にもすぐれていた。数多くの煎茶器を作り、現在でも多くの名品が伝わり、評価が高い。

花月菴（田中）鶴翁（一七八二―一八四八）
大坂の人、宗匠派煎茶家の初めといわれ、清風流（のち、現在の花月菴流）の祖である。

お点前の説明は省くが、最初は盃ほどの小さな茶碗にほんの一啜り程度の玉露が注がれた。口に含むと芳醇なお茶の香りと甘さが一気にひろがる。まさに天与の美味とも思われた。

二番目では渋みが出るためお菓子をいただいたあと喫したが、ホロ苦い味わいで一段とおいしさが増した。あとを引いてもう一杯を所望したが断わられてしまった。こと味覚だけに限れば抹茶も玉露に及ばないのではないかとさえ思った。

お飾り、道具組、お点前等古式床しい仕振りで、上品で簡素な雰囲気がすっかり気に入った。

煎茶の世界では現在、一〇〇とも二〇〇ともいわれる多数の中小流派があると聞く。これらの宗匠たちが団結して行動することによって、かつての売茶翁や、勤皇倒幕の先鞭をつけた文人たちの気概をもって煎茶の良さをもう一度世に知らしめて欲しいのである。筆者も不勉強だった点を大いに反省し、茶の湯の研究と共に煎茶道の勉強と実践にチャレンジしてみたいと考えている。

終

参考資料
煎茶便利帳　主婦之友社
茶壺に追われて　小山茂樹著　淡交社
別冊太陽「煎茶」　平凡社
角川茶道大事典　角川書店
雑誌目の眼平成二十五年　目の眼
10月号「特集煎茶の風儀」
その他

新聞歌壇を賑わした異形の歌人二人

——米国の囚徒とホームレス

石黒修身

（一）はじめに

本稿で言う新聞歌壇は朝日新聞の読者投稿歌壇である。

新聞歌壇の特徴としては、所謂専門歌人が選者となり、原則として毎週読者の投稿した短歌を選別し、入選作として紙上に発表するものである。単独または複数の選者が夫々に選を入れ時には選が重複（共選）する場合もある。

投稿者は素人の歌人で、入選の確率は数百分の一とも言われ厳選とのことである。

入選作は、社会、人生、その他背景となったテーマを詠んでおり、技巧面は兎も角問題点を的確に抱えている等優れた点を評価したものなのだろう。

筆者も初学の時期に何首か入選した経緯があるが最近は投稿していない。

新聞歌壇の行き方として、その時々の社会的話題に添ったものや、敢えて年少者の作品を採り上げるなど、世相に迎合する向きもあるのではないかと邪推する人も居る。

その辺の議論はさておき本稿で紹介する二人の歌人はその投稿のパターンや作者の人物像も謎めいておりその歌も内容的に異彩を放っている。異色と言う表現ではアクセントが乏しく、まして異端のパターンではない。敢えて異形と呼んだ所以である。

二人の短歌は本来的な和歌の流儀を汲むものではなく、現代短歌の中でも極めて平易で分り易く所謂格式や形態に捉われていない。

寧ろ話し言葉を短歌のリズムに合せるのが精一杯であ

り、短文のストーリーとして受け入れ易い。然しその内容が己の身辺を鋭く、的確に伝えているのが特色であろう。

（二）郷隼人

郷隼人は、米国カリフォルニア州にある「ソルダット」プリズンに収監されている終身刑の囚徒である。

一九八四年から収監された彼の歌人としての原点は一九八八年にロスの日系紙に投稿したのが始まりで、その後選者が朝日歌壇に投稿を勧めたのがスタートと言う。

鹿児島県出身で、若くして渡米、殺人事件を犯し一九八四年から終身刑で服役中、独学で短歌を学び所内から投稿を続け、数多くの作品が朝日歌壇に入選している。

郷隼人は勿論ペンネームであり、日本の関係者で彼の素顔はおろか写真、映像に接した者は居ないだろう。

彼は絵やイラストを描くのが得意で、色鉛筆で肖像、花、鳥、グッピーなど多くの絵を描いている。

話題があと先になったが彼の短歌を集成した「郷隼人歌文集」―幻冬舎刊、には短歌やエッセイの他にこれらの写生などの作品が収められている。

彼は、殺人という罪を犯したと言う。その間の事情は審らかでないが、日本では終身刑はなく、死刑の次の重刑は無期懲役であり、この場合は刑期を早目に終えて釈放されるケースが多いのは周知のことである。米国の場合は「終身」は字義通りであり、出獄と言うことは稀と聞く。そのかわり日本ではあり得ない自由が与えられているらしい。

独房で熱帯魚を飼ったり、散歩して身近かな鳥や花を写生したり、彼のように短歌を作り投稿するなど、独房でのテレビは知らず、外界・ニュースに接する自由もあるらしい。

郷の生い立ちは、先述のように鹿児島出身という以外は詳しく知るべくもないが、日本に残した母を偲んだ歌がある（母の生死は不明）

●老い母が独力で書きし封筒の歪んだ英字に感極まりぬ

●母さんに「直ぐ帰るから待ってて」と告げて渡米し三十年経ちぬ

●「生きていればいつか逢える」と我が出所信ずる母が不憫でならぬ

余聞となるが、当時歌壇の選者であった歌人の故島田修二氏から、カルチャーの場で聞いた話がある。彼のファン達が署名を集めて米国の裁判所に減刑の陳情をしたが、被害者の家族の心情を汲んで容れられなかったとのことである。

彼自身の作歌に絡め詠んだ歌がある。

●一瞬に人を殺めた罪の手とうた詠むペンを持つ手は同じ

●人間性失いがちな獄中に磁針の如き短歌の役目

●味気なき獄中ランチのサンドイッチを食めば恋しいラーメンライス

望郷の歌も多い

●あの山の向うに太平洋がある夕陽の彼方に日本が在る

●我が歌を読みて下さる人々が祖国におわすと想えば温し

●ジャンボ機が真綿を曳いて通り過ぐ西に迎えば乗りてゆきたし

最近の日本人の情報に因んだ歌もある。

●日本人でイチローの試合を視ていないのは僕だけではないだろうか

●「ＩＣＨＩＲＯ―」と囚人仲間に呼ばるればまんざら悪い気はせぬ俺は

この刑務所の囚徒らもテレビによるのかは兎も角イチローを知る機会があるのだろう。

また彼の母からの便りで、若い時の彼がイチローとそっくりで母もイチローと息子を重ね合せている旨が書かれていたと記している。彼の風貌を想像するよすがとなろうか。

郷隼人は今も生存しており、米国加州のソルダットプリズンから朝日歌壇に投稿を続けている。

●段ボール紙を団扇代りに涼をとる百十二度と灼ける獄舎に（十二年七月）

●万葉の（台湾歌壇）を読み直す日本人以上の日本語悲し（十三年七月）

●独房に会話無き身の寂しさよそのつれづれに我歌詠まむ（十三年八月）

監獄の残酷さを伝える歌もある。

●囚人のひとり飛び降り自殺せし夜に「ＦＲＥＥ　ＡＳＡ　ＢＩＲＤ」ビートルズは唱う

●囚人の撲殺されし午後に受くる全裸検査の屈辱感よ

●血塗れの囚徒を担架に乗せ走る静寂の中のガードの鍵の音

●異常なる静けさの中笑う声する刺殺事件の夜

欲望に苦しむ歌もある。

●煩わす「性」への煩悩絶ち難し収監十五年目のいまなお

●蠱惑する女体の如き雛罌粟の蕾に見とれる刑庭の午後

●人間の欲望の多きを改めて思い知らさる服役期間

もうひとつ不確かな情報だが郷にはアメリカで生れの一人娘が居るという。一度も会ったことはないがどんな娘に成長したか、会いたくなることもあるが、彼女のためにも合わない方が良いと語っているそうである。

●十三年会ったことなき我が娘の幸福祈る獄中チャペ

ルに

刑務所には次の警告板が「ＷＡＲＮＩＮＧ」と題し囚徒全員の目に入る場所に掲示されている。

「当施設の敷地内または近くに着陸したいかなる航空機（ヘリコプター、セスナーなども）に向っていく収容者に対し当局のガードは脱獄を阻止するために撃つ」

●「脱獄を試みたら撃つ」という警告板にスズメら憩う

著書一冊あり。彼の短歌を収録し幻冬舎が出版した、郷隼人歌文集「ＬＯＮＥＳＯＭＥ隼人」の印税は彼の犯した罪の償いとして「あしなが育英会」とロスのリトルトーキョーにある「日系ヘルプライン」に寄付すると記している。

（三）ホームレス歌人

新聞歌壇でホームレスを標榜する公田耕一はホームレスなので居所は分らない。氏名はペンネームであろうが実物としての公田に会った人はない。

新聞歌壇において自己を主張し世間に向って語り掛けて居る。俗っぽく言えば透明人間のような存在である。

考えようによっては、そこそこの歌人が覆面で短歌を発表しているのかも知れずその実像は今だに杳として把めていない。

朝日歌壇に投稿された彼の歌は選外を含め三十六首あるが数首挙げる。

●百均の「赤いきつね」と迷いつつ月曜だけ買う朝日新聞

●七分の至福の時間寒き日はコインシャワーを一身に浴ぶ

●親不孝通りと言えど親もなく親にもなれずただ立ち尽す

●「柔かい時計」を持ちて炊き出しのカレーの列に二時間並ぶ

一首目、百円ショップでのインスタントうどん「赤いきつね」を諦めて、歌壇のある月曜日だけ朝日新聞を買うとのことである。

四首目、「柔かい時計」はスペインの画家ダリの代表作（記憶の固執）のモチーフである。

新聞歌壇の入選者は通例ルールとして居住地と氏名を添えるのであるが彼の場合は特例として（ホームレス）となっている。

朝日新聞は紙面でささやかな掲載謝礼を渡したいと居住場所を知らせるように問い掛けたが無駄であったと言う。

●ホームレス歌人の記事を他人事のように読めども涙零しぬ

前半（一）で紹介した郷隼人が同時期に朝日歌壇の常連であったが、こんな歌を寄せている。

●囚人の己が（ホームレス公田）を想いつつ食むＨＯＴＭＥＡＬを

その横に並び公田の歌があった。

●温かき缶コーヒを抱きて寝て覚めれば冷えしコーヒー啜る

アメリカの囚人と日本のホームレス歌人が同じ新聞歌壇で奇しくも繋がった瞬間であったのか。

九年九月七日掲載された次の歌を最後に公田は朝日歌壇から消えた。

●瓢箪の鉢植えを売る店先に軽風立てば瓢箪揺れる

掲示はしなかったが、彼の作品には歌人塚本邦雄に因んだ作品や、シャンソン歌手ジュリエット、グレコを詠んだものもある。関係者によれば「長く短歌を作り続け、教養もあり何らかの事情で〝寿町〟界隈の住民となり自分のことを知られたくない人物」との見方がある。

公田の作品から、彼の生活圏として横浜の〝寿町〟近辺が浮び上ってくる。筆者も永年横浜に住んでいるが、ＪＲ石川町からほど近い東西三百米南北二百米ほどの狭い土地に百軒以上の簡易宿泊所が立ち並び約七千が生活していると言う。近くを通ると一程異様な空気が漂っていると筆者も思う。

住人の就労斡旋などをする機関の担当者によれば、この地区には建設労働者ばかりでなく、例えばフランス語をすらすら話す人、東大を出た人、元教師、絵描き等もう一人の公田は沢山居ると述懐している。

先述の如く公田は遂にその実像を現わすことなく歌壇から消えた。作歌して投稿する意思を失ったか、或いは何らかの事情でそれが出来なくなったかは判らない。

この幻の歌人のその後の出現や、その実像を追おうとする動きもないようだ。幻の歌人は幻のまゝ新聞歌壇から消えたことになる。

この世界ではあり得ないミステリアスな話題を残して。

以上

参考とした図書

郷隼人歌文集　ローンサム・ハヤト
幻冬舎

ホームレス歌人のいた冬　三島喬
東海教育研究所

日本の歌「寮歌」

伊治　哲

はじめに

〝友の憂いに吾は泣き　吾が喜びに友は舞う
人生意気に感じては　たぎる血潮の火と燃えて・・・〟

旧制第一高等学校寮歌「仇浪騒ぐ濁り世の」（明治四〇年）の一節である。

折にふれて、ふとこのような寮歌を口ずさむと、老骨になお熱い思いが甦ってくるのを如何ともなしがたい。二条の白線帽に黒マント、汚れ手拭を腰に、朴歯の下駄を打ち鳴らして寮歌を放吟した、旧制高校生の在りし日の姿が今でも彷彿としてくる。

あえてバンカラを気取った往時の姿が見られなくなってから、来年で丸六四年になる。一高から五高の高校創立が明治一九年（一八八六）、学制改革で旧制の灯が消えたのが昭和二五年（一九五〇）であるから、来年（二〇一四）には旧制六四年の歴史を丸々折り返すことになる。世の移ろいのなんと早いことか。

歳老いてなお青春の夢を追い、思い出の寮歌に声を嗄らした日本寮歌祭も既に幕を閉じ、その後の一部同窓会やクラス会での寮歌高唱も、もはや余燼を残すのみとなった。

たまたま旧制高校の幕引きに立ち会った多くの学友たちも、いまや櫛の歯が欠けるように姿を消していく。その中にあって、未だに寮歌狂いを自負する友人と寮歌を巡って語り合う機会がある。

生涯にわたって、これほど吾人の心を奪いとった寮歌とは一体何ものだったのか。海外には例をみない、一種独特の旋律と郷愁をもった寮歌が生まれた背景とは一体何だったのか・・・。

筆者の手許に、昭和四三年一一月発行の、旧制高校寮歌保存会編「寮歌は生きている」という全七〇〇頁におよぶハードカバーの大冊がある。北海道、京城、台北の三大学予科、学習院高等科を含め、国公私立合わせて三八校の寮歌、応援歌、運動部歌、逍遥歌の六四三曲が、歌詞、楽譜付きで掲載されている。

途中忘れ去られたり、歌集製作の制約から敢えて割愛せざるをえなかった曲もあったであろうから、実際にはそれに倍する数の寮歌が歌われていたといってよい。なにしろ、寮歌は各校に所属する三棟ないし六棟の寮ごとに、そして毎年の記念祭ごとに作られてきたのだから、すべてをこの寮歌集に網羅することは到底不可能で、代表的な名歌に絞って編纂されたものと思われる。

「寮歌は生きている」という、この大冊の頁を繰ってみると、自らの母校の寮歌でありながら、一度も歌わないで見過ごしてきたものがあるかと思えば、共感をもった他高校の寮歌をわがもののように歌い込んでいたものもある。五高の「武夫原頭に草萌えて」、七高の「北辰斜めにさすところ」や八高の「伊吹おろしの雪消えて」などが特に懐かしい。

それぞれに当時の世相や校風を描き出して実に多彩である。なかでも、三大寮歌といわれた一高の「嗚呼玉杯に花うけて」、三高の「紅萌ゆる丘の花」、北海道大学予科の「都ぞ弥生の雲紫に」は、寮歌というより国民歌に近いもので、往時だけではなく、現代においても多くの人に歌い継がれている。

また、加藤登紀子が歌った、三高の「われは湖の子」（琵琶湖周航の歌）は、今やカラオケの定番になっており、寮歌というより一般歌曲といったほうがよい。そういえば、戦後一般にも愛唱された、旅高生宇田博作の「北帰行」は、原曲は旅順高校の寮歌と聞いていたが、この寮歌集には入っていない。〝建大、一高、旅高、追われ・・・〟の歌詞が失意の折のわが身を映しているようで、愛惜の情に涙したものだ。

以下、一高や三高、ならびに筆者の母校、四高を中心にその寮歌の素描を試みる。

寮歌に込められた青春譜

最も多いのは、記念祭賛歌である。年に一度、学校創立記念日や自治寮発足記念日を迎える。この日を期して学年対抗運動会や寮の記念行事を行う。中でも寮祭は寮生にとって一年で一番嬉しいイベントだ。

筆者の思い出を辿る。普段は、毎夜のストームや寮雨、所構わず書きなぐった落書きで荒れ果てた寮舎も、この日ばかりは敷布や毛布で恥部を覆い隠し、寝室をステージに見立てて飾り付けに智恵を絞る。筆者が一年生の折

は、賀川豊彦の「死線を越えて」をもじった「四銭を超えて」のテーマで〝四銭のひもじさを超越する四高生〟を演出した記憶がある。いつもは女人禁制の寮舎に、この日ばかりは知人の女性や女学生を誘い込んでもよいことになっている。寮生の腕の見せ所であった。

寮の賄委員たちは、食堂に「超然喫茶」と名づけた喫茶店を開店した。行きつけの喫茶店のメッチェンに一日奉仕を頼んで、羽織袴の賄委員が給仕の役を担う。ゼンザイ、オシルコ、ケーキ、ココア、ミルクすべて二〇円均一の写真が残っている。

しかし、記念祭のハイライトはなんといっても寮歌祭と街頭ストームであった。全寮委員長が大八車の先頭に屹立して指揮をとり、大太鼓の響きに合わせて寮歌とストームを繰り返しながら、金沢城麓、尾山神社から香林坊を経て校門への大通りを行進する。市民たちは大挙して見物に集まり、市電は一時運行を中止してストームの行方を見守る。寮祭は市民にとっての記念祭でもあったのだ。

この時のために、苦心惨憺の末、新しい記念祭寮歌が生まれるのである。詩や楽に優れた才人の出番なのである。

記念祭に乱舞して三年の青春を謳歌するもの、俗世から超越して真理の探究に夢を託するもの、寮で培われた友との刎頸の交わりを讃えるもの、ハイスクール競技大会や友誼校との対抗戦に出陣する運動部を鼓舞応援するもの、不幸にも遭難して湖底に沈んだ漕艇部の友を悼むもの等々、寮歌は常に青春の賛歌に満ちていた。

寮歌に愛用された語彙

まず一高の寮歌から拾ってみる。

「春」「緑」「光」「闇」「黎明」「若紫」「櫻」「弥生」「芙蓉」「星霜」「星屑」「荊棘」「柏」「橄欖」「狭霧」など自然を賛美するもの、「アムール川」「シベリア」「西黄海」「太平洋」「都」「武蔵野」「筑紫」など地名を主題にしたものなどが多い。

中でも「春」については、「春爛漫」「春甦る」「春の訪れ」「春霞」「春東海」「春尚浅き」など、春の訪れを待ち望む若者の夢が歌い込まれ、渾沌の世相から打って出ようとする青年の清新な息吹が感じられる。

また、「古都千年の夢つつむ」や「西嵐山やかつら川」「加茂の川原の真清水も」「比叡の山の石だたみ」など、京都の地名を随所に引用している。古い都への憧憬もさることながら、恒例の運動競技で鎬を削った一高対三高戦で互にその健闘を称えあった名残であろう。

なお、「柏」と「橄欖」(オリーブ)は一高の校章に擬せられ、柏は武の神、橄欖は文の神を象徴するといわれる。

次に、二高の寮歌集をひもとく。

「天は東北山高く　水清き郷七州の」
「花より花に蜜を吸ふ　蜂のいそしみ吾が励」
「青葉山方古にしげく　広瀬川千歳清し」
「見よそこに天下の絶美　名にしおふ松が浦島」

などに見られるように、東北仙台に相応しく、北の名勝の地名がふんだんに盛り込まれている。これらの描写は、二高卒業生であり、また母校の教授として長く勤務した土井晩翠の流れを汲む詩情を、色濃く映し出している。

因みに、二高はローマ大学を模したとされる「蜂」を校章とした。

寮歌の作詞、作曲

前述したように、寮歌は高校所属の学生寮ごとに、寮の記念祭を期して作詞、作曲された。

例えば、四高には北・中・南の三寮があったが、「北の都に秋たけて」は南寮寮歌として作られ、「緑の杯も偽りの」は中寮の、「尾山悲愁の風更けて」は北寮の寮歌として作られた。

もちろん、詩、曲のほとんどは当時在寮の寮生が手を染めたものである。詩歌、音楽にはおよそ縁遠い青年の作であったが、その詩情の豊かさ、メロディーの力強さはプロを遥かに凌ぐといっても過言ではない。

もちろん、学校によっては在学中に多くの才人が育っていたようで、作詞者、作曲者の中にその名がみられる。

一高では穂積重遠が「都の空に東風吹きて」を、末広巌太郎が「狭霧はれゆくあかつきの」を、二高ではいうまでもなく土井晩翠が「天は東北山高く」「青葉の山に雲昏く」を、六高では出隆が「野辺の小川に花咲かば」などを作詞して、母校の名声をいやがうえにも高からしめている。

作曲では、地縁や母校と関係なく、有名作曲家による寮歌も数多くみられる。信時潔が山口、松江、浦和、東京、広島、成蹊等の各高校寮歌作曲者としてその名がみえるほか、山田耕筰、弘田竜太郎、近衛秀麿も多くの寮歌作曲をてがけている。

変り種では、中曽根康弘が静岡高校の「江流秋に咽ぶ哉」を作詞作曲したり、東京帝大が一高へ、京大浦高会が浦和高校へ寄贈歌を贈っている。

寮歌は先述したように文字どおり寮の歌であって、学校を代表する歌ではない。したがって、この寮歌集に収録された歌はいうまでもなく寮の歌がその大部分を占めている。ただ、一部の高校には校歌が存在しており、その作詞、作曲を著名音楽家に委嘱したと推測されるものもある。

一方で、一部の高校に作者不詳の寮歌がかなり数多く

みられることは、後世からみて深く惜しまれるところである。当事者にしてみれば、あえて名を残すほどのことではないと考えたのかもしれない。いずれにしても、いかにも私事にこだわらない、旧制高校生らしい剛毅な気風を感じとることができる。

寮歌のリズムとメロディー

寮歌は、両手を打って拍子をとりながら、腹の底から蛮声を張り上げて歌う。だから直立不動では歌えない。両足を踏ん張り、胸を張り、両手を肩の高さまで高く上げ、大きく広げたうえで、リズムに合わせて手を打ち鳴らしながら絶叫するのである。胸の前で小さく手を打つ拍手ではない。いわば全身運動の繰り返しである。

そのために、寮歌のリズムは四分の二拍子が多い。上記「寮歌集」から拾うと、一高寮歌では、三七曲中、二〇曲が四分の二拍子、一〇曲が四分の四拍子、七曲が四分の三拍子である。四高では、三三曲中、一七曲が四分の二拍子、一三曲が四分の四拍子、僅かに三曲が四分の三拍子である。全てを網羅することはできないが、各校寮歌を通じてこの傾向が強い。

また、四分の二拍子では、付点八分音符と十六分音符の対を二つ繋げて一小節とする。いわば、ターンタ、ターンタのリズムの繰り返しになっている。

このようにリズムは勇壮な行進曲風なのだが、メロディーはおしなべて憂愁調なのである。多くの曲が短調(短音階、ヨナヌキともいわれる)の五線譜に旋律をのせている。憂いや悲哀を帯びたものが多いのである。勇猛果敢、質実剛健、脱俗超然の歌詞を悲壮感に満ちたメロディーで歌うところに寮歌の特徴がある。もっとも、一高の「アムール川の流血や」「嗚呼玉杯に花うけて」のように、原曲は長調で作られておりながら、歌われていくうちに短調に変ってしまった例もある。

日本人は、本来的に詠嘆調を好むといわれる所以であろう。多くの寮生OBが古い寮歌に魅了されるのも、その荘重、悲哀、感傷を誘う歌詞とメロディーが、往時の思い出と重なって胸を打つからにほかならない。

一説に、短調の曲が特に多いのは、ナンバースクールでは四高、六高、七高で、その中でも四高がずば抜けて多いとする説がある。「絶対矛盾的自己同一」を掲げ、生と死の矛盾に同一性を求めた西田哲学に心酔した四高生の死生観と無縁ではないとみるのは穿ちすぎであろうか。

寮歌の歌詞にみられる古語と漢詩

毎年記念祭ごとに新しい寮歌が生まれたとはいえ、その中の名歌の成立は圧倒的に明治、大正期が多い。例えば、「寮歌集」所載の一高寮歌三七曲のうち、明治一八曲、大正九曲、昭和六曲、不詳三曲で、明治、大正が七割強を占めている。

したがって、歌詞はすべて文語調であり、難解な漢字、漢文が多く用いられている。一高ほか数校の寮歌の中から一瞥してみよう。

濁り世　惰眠　偸安　魑魅魍魎　橄欖　久遠　憧憬
乾坤　繚乱　玲瓏　玉杯　緑酒　美酒　瞬間　星霧
破邪の剣　蕭条　欄干　永劫　久遠　餞別　追憶
三年　饗宴　別離　流転　真理　矜持　曲学阿世
鴻鵠　愉安　昏迷　玉蜻　伝統　思索　・・・

等々、拾い出せば限りがない。その上、詩歌にはつきものの、詩情豊かな独特の読みもある。古文や漢学への素養が極めて深かったと思われる。

同時に、わが国や中国に伝わる著名な故事を題材にしたものも多い。幼くして漢詩や古文に親しんだ往時の青年の学識に驚嘆する。

四高寮歌から故事に因む一節を引用しよう。

〝健児脾肉を嘆せしか・・・〟(寮歌「啻に血を盛る」《南下軍》の一節)――「脾肉の嘆」といわれ、蜀の劉備が馬に乗って戦場に赴くことのない日がつづき、腿の肉が肥え太ったのを嘆いた故事による。三国志にみえる。

〝蛟龍遂に雲を得て・・・〟(寮歌「洛陽寒く黄昏て」の一節)――まだ龍となる前の蛟。水中に潜み雲雨に会して天に上るという。時運に際会しないで志を得ぬ英雄・豪傑をたとえたもの。太平記に「蛟龍は常に深淵の中を保つ」とある。

五高では、〝易水流れ寒うして・・・〟(寮歌「易水流れ寒うして」の一節)がある――燕のため秦の始皇帝を刺そうとした壮士荊軻が、易水(中国河北省)で燕の太子丹と別れるに際し、「風蕭蕭として易水寒し、壮士一たび去ってまた還らず」と詠った故事に因む。

これらはほんの一例にすぎない。さらに細部にわたって漢詩等からの引用を検証すれば、興味がさらに深まるであろう。それにしても、最近の青年から、古文、古語、漢詩、漢文等の素養が失われていくのはいかにも淋しいというほかない。

寮歌が語る校風

一高寮歌のいたるところに「自治」の文字が躍る。いわく

「自ら治む」「自治寮」「自治の本領」「自治共同」「自治の光り」「若しそれ自治に非ずんば」「自治の大船」「理想の自治」「自治の教え」「自治の健男児」「自治の譜」「輝く自治燈」「自治の梅花に」「自治の歌」「自治の曲」

「自治の友」「自治のはえ」「自治の城」・・・

「寮歌集」所載の一高寮歌全三七曲の中に、これだけの「自治」の文字が謳われている。一高は創立当初から全寮制をとり、しかも一貫して寮の「自治」を堅持したといわれる。過去の一時期、政治的には厳しい統制を受けたこともあったのだから、恐らくは〝隠れキリシタン〟にも比する忍従を強いられた経緯もあったと思われる。その中で、寮歌一曲に必ず「自治」の二文字が歌われたのは、正に驚異であると言わざるをえない。

もちろん、時の流れは極めて挑戦的な寮歌も生んだ。日露戦争たけなわの明治三七年に作られた「都の空に東風吹きて」の最終節はこのように歌っている。

〝北風一過浪を捲き　祖国の岸を打たん時
あはれ護国の柏葉旗　其旗のもと我死なん〟

これに対して三高は、その旗印に「自由」を掲げた。関西の関東に対する対抗意識は今でも常に顔を出すが、「自治」に対する「自由」はその象徴であろう。三高寮歌から拾ってみる。

「自由の野辺」「自由の梢」「自由を歌う」「自由の子」「自由の大旗」「自由の烽火（のろし）」「自由の駒に」「自由平和」・・・

とりわけ、「自由の鐘」「自由の理想」「自由の友」「自由の花」「自由の剣」「自由の旗」「学と自由の不羈の城」の七語は寮歌「春、東山の花に酔い」一曲に集中して歌い込まれている。また、寮歌「みよ行人の一群は」では、五番の各節ごとに「自由、自由、自由」と「自由」を三回連呼させている。

余談だが、三高にも一高に酷似した寮歌があることを発見した。「神楽ケ丘の夕まぐれ」の一節である。

〝友の憂に悲しめば　熱き涙の我れに滴る
我が喜びに歌いなば　剣を抜いて友は舞う〟

当時、寮歌の作詞には互に智恵の交換をしていたのではないだろうか。

一高の「自治」といい、三高の「自由」といい、それにつながる東大と京大両雄の個性を象徴しているといってよいでろう。

一高と三高に偏りすぎた。他の高校は一高、三高をまるまる模倣していたわけではない。それぞれに、学校創立の精神、背景にある自然の風土等を凝縮しつつ、独自の校風を創造していった。

わが母校である四高に、寮の伝統形成の経緯を探ってみる。

四高の前身は加賀藩の藩学明倫館にさかのぼる。明治一九年、旧藩主前田家からの基金を中心に、県下官民の

寄付をもって第四高等中学校が設立された。

明治二六年に至って三寮からなる附属学生寮がようやく完成し、第一回五六名が入寮した。論語学而第一の巻頭、子曰「学而時習之不亦説乎」からとって「時習寮」と名づけられ、寮運営は詳細な管理規則の下で室長の共同運営に任された。

明治二九年に至って室長合議による「自治制採用建議書」が校長に提出された。両者協議の末、同年二月、従来の細則をすべて廃止し、七箇条の簡単な新規則の下に、ようやく寮生による完全自治が実現された。

一高の先例が大いに力あったものと思われる。

ところが、明治三九年三月一九日未明、火災が発生、官庁街の中心にあるため、軍隊まで出動して防火に当った結果、寮一棟を焼失しただけで、物的な被害のみにとどめることができた。原因は焚き火の不始末であった。その責任の所在、被災寮生の救済、焼け残ったとはいえほとんど使用に耐えない寮設備の修復等の問題を巡り、寮内は混乱し、閉寮の危機さえ伝えられた。多くの寮生が寮を去るなかで、三八名だけが吾が城を死守することを宣言し、「超然趣意書」なる文書を掲げた。

曰く「混沌たる社会濁流の中にありて、そこから超然脱俗し、礼譲を重んじ、廉恥を励み、志操を固くし、荀も浮薄傲慢の挙動あることなかるべし」とした。高山樗牛の「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」に由来する。以来「超然主義」を寮是として、軽佻浮薄をもっとも賤しいものと教えた。時習寮の正面玄関に掲げられた扁額に「超然」の二文字が鮮やかに踊っていたことを思い出す。

寮歌にも次のように「超然」の二文字が刻み込まれている。

〝超然寮に籠りたる　健児涙の無からむや〟（「夢享楽の美酒に酔い」の一節）

〝瞳は晴に光得て　主義超然は生まれたり〟（「星はまばらに輝きて」の一節）

〝超然一路辿りつつ　おお我が友よ集いして〟（「北海遠く潮凪ぎて」の一節）

〝超然の友叫びにし　理想の海に浪きらん〟（「尾山悲愁の風更けて」の一節）

寮歌異聞

ここで、寮歌とは全く異質な旧陸軍軍歌とのかかわりについてふれておく。ただし、ここでいう「軍歌」とは、広く一般に歌われた、いわゆる「軍国歌謡」ではない。かつての陸軍幼年学校、陸軍士官学校等で軍歌演習や行軍時に歌われた陸軍諸学校固有の校歌、行進歌である。

高校寮歌の場合と同じように、陸幼、陸士ＯＢの中に、今でも〝軍歌狂い〟がいる。一番八行で五番まで続く行

軍歌「血潮と交えし」や、同じく一番六行で八番までの陸士校歌の全歌詞を、すべて記憶だけで歌いきる剛の者が生き残っている。

また、終戦をはさんで軍歌と寮歌双方に接した者は、歌っているうちに、それが高校寮歌だったのか、陸軍軍歌であったのか、区別がつかなくなることも珍しくない。

実はそのくらい寮歌と軍歌には通底したものがある。というよりも、明治の半ば以降、ようやく軍歌らしい軍歌が生まれた頃は、のちの陸軍戸山学校軍楽隊のような組織が未成熟であったためか、中央幼年学校(後の予科士官学校)生徒や教官の作詞に、既に展開期にあった高校、特に一高寮歌の曲を借用して軍歌とした形跡がある。

例えば、軍歌「仰げば嶺々たる市ヶ谷の」は、一高「嗚呼玉杯に花うけて」のメロディーに近い。仙台幼年一三期、西貞治作詞の「山紫に水清き」は一高「紫淡く」の譜であり、相武台百日祭歌「玄海渡れる」は北大予科「都ぞ弥生の雲紫に」の譜をそのまま踏襲している。

面白いのは、〝満朶の櫻か襟の色〟(中幼一〇期・加藤明勝作詞)でよく知られる軍歌「歩兵の本領」(明治四四年)の曲は、栗林宇一作曲の一高寮歌「アムール川の流血や」(明治三四年)のメロディーがそのまま引継がれているだけでなく、大正一一年に池貝鉄工所労組員、大揚勇が作詞した〝聞け、万国の労働者〟で周知の「メーデー歌」の節にまで援用されている。寮歌、軍歌、労働歌に同じメロディーが共用されたのは、一体どのような経緯があったのであろうか。実に不可思議である。

また、軍歌であるからもちろん行進曲風であり、先に述べたターンタ、ターンタの四分の二拍子が主流を占めるのは寮歌と同様である。ところが軍歌であるにもかかわらず、その一部が高校寮歌の節を援用したことにも影響されて、メロディーは寮歌の憂愁調、哀調を帯びているものが多い。陸軍戸山学校軍楽隊の作曲で〝太平洋の波の上〟に始まる陸士校歌でさえ、短調で歌われた。

軍歌本流ではないが、土井晩翠作詞の「星落秋風五丈原」や、真下飛泉作詞の「戦友」なども、士気を鼓舞するというより、悲壮感や哀切感に胸が打たれる。死と背中合わせのなかでの軍歌であれば、勇壮なだけでは敵愾心を奮い立たせることにならなかったのかもしれない。

吾が愛唱の寮歌

最後に、我田引水ながら筆者が最も愛した四高時習寮寮歌を二曲紹介しよう。

一つは、「北の都に秋たけて」である。寮歌愛好家には比較的よく知られた寮歌である。

〝北の都に秋たけて　吾等二十の夢数う
男女の棲む国に　二八に帰るすべもなし
自由の為に死するてふ　主義を愛して死するてふ
男の児の意気地今も尚　石に砕きて砕き得じ〟

他の一つは、逍遥歌「水悠々と流れゆく」である。

〝水悠々と流れゆく　花の野煙る夕間暮れ
まどろむ床に夢さまし　纜ときて舟やれば
擢励の櫂さゆるかな〟

西の空に陽が落ちて、白山連峰の峰々が茜色に染まるころ、この寮歌を高唱しながら、犀川のほとりをそぞろ歩いた若き日の思い出が甦ってくる。消えなんとする遠き青春への挽歌である。

(二〇一三年八月一五日記)

参考図書

「寮歌は生きている」昭和四三年　旧制高校寮歌保存会
「四高八十年」昭和四二年　四高同窓会
「北の都に秋たけて」昭和四七年　財界評論社
「第四高等学校時習寮史」平成一三年　四高同窓会
「戦後四高学生史」平成一三年　勁草書房
「時の曠野」平成一六年　北国新聞社
「旧制高校物語」秦　郁彦著　平成一五年　文芸春秋
「日本唱歌集」堀内敬三・井上武士共著　昭和三三年　岩波書店
「『かなしみ』の哲学」竹内整一著　平成二一年　NHK出版
「防人の歌『雄叫』」「雄叫」編纂委員会　昭和三五年　偕行社
「日本の唱歌(下)」(学生歌・軍歌等)　金田一春彦・安西愛子編　講談社

誕生日が二つある

太田精一

一・出生届け

木本伸一には、誕生日が二つある。四月十六日と五月十六日である。

そのことを知ったのは、終戦の年の昭和二十年十二月、伸一が国民学校三年二学期の最後の日であった。

焼跡に「二間×三間」のバラックを建て、家族そろって移り住んでまだ一週間も経っていない頃である。

「伸一の誕生日は、戸籍上、昭和十一年五月十六日となっている。けれど本当は、四月十六日生まれなの」

母のさきは、伸一の肩に手をかけながら言った。

何故この日に、母が伸一の誕生日のことに触れたのか分からなかった。

だが、その日のことは伸一の心にいつまでも残り、誕生日の来るたびに思い出された。

戦災によって木本家は、何もかも失った。しかし、さきは、これまでにない解放感を味わっていた。

戦争が終わって、恐ろしい空襲もない。夫が戻って来て、小屋が建ち、やっと家族が一つ屋根の下に安心して暮らせるようになったのだ。

さきは、食べる物もなく不便な生活の中にも、新しい時代の息吹と明るい未来を感じていた。

「実はね、お父さんと私は・・・・」

さきは、これまで口を閉ざしていた伸一の出生にまつわる心のわだかまりを伸一に打ち明けようとした。

だが、そのことを語るには、伸一は、余りにも幼過ぎた。さきは、伸一の誕生日についての詳しい話はまだ早いと感じ、口をつぐんでしまったのである。

浜松は、終戦の年の六月十八日の空襲で一面焼け野原となった。焼跡には、焼夷弾の破片が転がっていた。

木本家のあった大工町は、浜松の中央部にあって、壊滅的な被害を受けた。町内の全家屋が焼失し、自分の住んでいた場所さえ特定できないほどであった。

伸一は、戦災後、祖父の巌次郎、弟の強司とともに白羽町の大庭家に疎開した。白羽町は、浜松市の南部、遠州灘の海岸近くにある。浜松市に編入されて日も浅く、農村地帯で、大庭家は母の実家である。

終戦の日の一週間後に、招集されていた父の吉雄が復員して来て、八月末まで家族全員が大庭家の世話になった。

だが、いつまでも母の実家にいるわけにはいかない。

伸一は、空襲の時に避難した栄町の小山をくり抜いて作った穴倉に、巌次郎、吉雄、さき、伸一とその弟の強司の五人で住むことになった。その穴倉は、祖母の実家の杉本家が、百年以上前に物置として作ったものである。

木本家では、ひとまずその穴倉に仮住まいして、バラックを建てる準備をした。そのバラックが、十二月に出来上ったという次第である。

「どうして僕の誕生日が本当に生まれた日と違うの」

母が、途中で口をつぐんでしまったことが気になっていた伸一は、小学校を卒業する年の昭和二十三年三月、誕生日が二つある理由を思い切ってさきに聞いてみた。

「凧揚げ祭りが五月の初めにあるだろう。浜松では、長男が生まれた最初の端午の節句には、初節句と言って、町内挙げてお祝いをすることになっているだに。その時には、畳を新しくし、障子を張り替えて五月人形を飾るずら。お祝をしてくれる町内の衆には、お酒や料理を振る舞うことになっているだに。おじいちゃとおばあちゃが、四月十六日生まれでは、五月の初節句の準備が出来ないと言うもんだから、誕生日を一カ月遅らすことにしただに」

さきの説明を聞いて、伸一はただそれだけの理由ではないことを感じ取っていた。全てを語ることへのためらいがあるように思われたのである。

浜松地方には、江戸時代半ば頃から、嫡男が誕生した場合、端午の節句に大凧を町内の若衆連に揚げてもらう風習がある。凧は、母親の実家から贈られる。その凧には、嫡男の誕生した家の家紋や鶴亀などが描かれている。また、親戚、知人、町内の若衆が凧を送る場合もあった。

凧揚げをしてもらった家では、「凧おろし」といって酒肴を町内の人々に振る舞うのが慣例となっている。この行事は、嫡男の無事成長と出世を祝うために行われていた。

また、浜松の凧揚げの特色は、凧糸を切り合う凧合戦にある。町内ごとに自慢の凧を大空に揚げ、糸と糸とを絡ませ、その摩擦で相手の糸を切り、勝ったほうが勝鬨を上げるのである。

江戸、明治、大正と引き継がれたこの凧合戦は、参加町内も増え、伸一の生まれた昭和十一年には、五十ヵ町を超える浜松の一大行事となっていた。

凧揚げが各町内の誇りをかけ競技化するにつれ、競技場から町内への「引きあげ」も派手になり、底抜け屋台にお囃子連を入れ、笛を吹き、太鼓を叩きながら引きあげてくることが通例になった。この「引き上げ」の時も嫡男が生まれた家では、振る舞い酒を出すことになっている。

底抜け屋台は、長方形に組んだ木の枠に四本柱を立て、その上に凧を屋根代わりに乗せ、軒に提灯を吊るし、枠の周りには造花の菖蒲や藤を飾り付けた仮の屋台である。その中に入って、お囃子連中は歩きながら笛や太鼓を鳴らすのである。

しかし、次第にそれだけではすまなくなった。大正時代に入ると、屋台にますます金をかけるようになり、やがて千鳥破風、唐破風仕立ての本格的な屋台が出現した。照明も電燈やアセチレン燈が使用されるようになって、明るく華やかなものが流行るようになった。

昭和十一年頃には、この屋台も多くの彫刻で飾り立てられた豪華な御殿屋台が、主流を占め、御殿屋台を持たない町内は、肩身の狭い思いをするようになっていたのである。

木本家が大工町にバラックを建てた翌年の昭和二十一年に三男の恒三が生まれた。戦後混乱期の最中で、食べる物がない。恒三は、ひもじくてよく泣いていた。

昭和二十三年になると、浜松も戦災の跡地に家が立ち並び、復興の槌音が高まった。

大工町の焼跡にも元の住民が戻って来て、賑やかな子供の声が聞こえ、活気にあふれていた。

この年の四月一日、校舎が焼失し廃校となって、浜松広沢国民学校に併合されていた元城国民学校が、浜松市立元城小学校として新発足した。

元城小学校の学区であった伸一は、小学六年の四月から同校に転入した。一年間在籍し、昭和二十四年三月、戦後の元城小学校の第一回卒業生となった。

伸一は、その年の四月、中部中学校に入学した。同校は、昭和二十二年、旧市立高等女学校の跡地に創立された新制中学である。伸一の入学する昭和二十四年になってやっと教室も整備され、教育環境も整って来た。

凧揚げ祭りも昭和二十二年に再建された。伸一が、中学二年生になった昭和二十五年には「浜松祭り」として市民挙げての行事となっている。戦前は、男子のみの行事であったが、この時から街ぐるみの行事として女子も加わるようになり、恒例の一大イベントとして昭和三十年代、四十年代にかけて最盛期を迎えるのである。

中部中学の運動場のすぐ下には、軽便鉄道の奥山線が走っていた。奥山線は、遠州鉄道浜松駅から奥山半僧坊のある奥山駅まで全長約二十五キロの短い距離をトロッコ列車のような軽量な機関車が、ラッキョウの形をした煙突から煙を吐きながら走って行く。

元城駅から亀山トンネルにいたるレールは、坂道に敷かれていて、乗客の多い日には極端に速度が落ち、歩く速さで喘ぎながら登る。中部中学の生徒たちは、軽便鉄道の列車の走る音が「借金、借金貧乏」と聞こえる、と揶揄する者も少なくなかった。

後に、この奥山線も途中まで電化され、ディーゼル化されたが、昭和三十九年には全線廃線となり、今では走っていない。

春秋のお彼岸時には、鴨江観音通りに面した大工町の道筋に、露天が並び大いに賑わった。鴨江観音への参詣人は、春秋それぞれ七日間で百万人を超えていた。杉本家でもお彼岸の期間限定で、甘味喫茶店を開業し、臨時収入を得ていた。伸一もこの春秋のお彼岸には、店の手伝いをさせられ、その賑わいの渦中にあった。

昭和二十四年十月十七日、木本家では初めての女の子が生まれ、美子（よしこ）と名付けられた。これを機会に、同家では、本籍地を旅籠町十五番地から大工町十六番地に移している。

美子の誕生は、ともすれば父厳次郎に頼りがちな吉雄に、木本家の家長としての自覚を促す効果があった。また、本籍を移すことによって厳次郎から吉雄へと一家の大黒柱が交替したことを家族全員が確認することにもなったのである。

二、進路

昭和二十六年になった。前年始まった朝鮮戦争が米中の介入によって拡大し、泥沼化の様相を呈して来た。それに伴い日本は、特需を受け、好景気に沸いていた。

講和条約の交渉も話題となっている。戦後の混乱から立ち直り独立を渇望する声も高まりつつあった。実際この年の九月には、サンフランシスコ講和会議による平和条約が締結されている。

巷には、「東京キッド」や「私は街の子」のような都会風の軽快なリズムの歌が流れ、都会への人口流入が始まりつつあった。

伸一は、中学三年になっていた。将来の進路を決めなければならない。就職か進学かを選択する必要に迫られていた。

当時は、居住する地域により、通学できる学校が決められていた。学区制が敷かれていたのである。

中部中学は、浜松市の公立中学であったが、国立の静岡大学教育学部付属中学に次いで進学校として評判が高

かった。そのため、居住地を中部中学の学区内に移して まで入学を希望する生徒が後を絶たない。いわゆる越境入学である。

伸一の住んでいた大工町は、中部中学の学区であったため、自動的に同校に入ることになった。

三年になると進学クラスと就職クラスに分けられる。進学組が五クラス、就職組が二クラスであった。

伸一は、家業のカッチング針製造の仕事に就くよう父の吉雄に勧められていた。朝鮮特需で多忙を極め、家族全員で毎夜遅くまで仕事を続け、猫の手も借りたいほどであった。

「おじいちゃは、お前も知ってのとおり、もともとは飾り職人だ。その腕を生かしてドイツから輸入したコール天を剪る機械の消耗部品、松葉型のカッチング針を日本で初めて作った。今、針は飛ぶように売れ、儲かっている。だから、職人に夜まで働いてもらい、家族全員で取りかかっている。それでも、注文に応じきれない。お前がこの仕事を継いで、もっと大量に作る方法を一緒に考えてくれ。高等学校に行かないで、家で仕事をしてくれ。どうしても行きたいのであれば、夜間にしろ」

吉雄は、カッチング機が今後も増え、その消耗品である針の需要はますます増えると見込んでいた。

ところが、その需要に応じるために、むやみに職人を雇い、技術が盗用されることを恐れていた。盗用した技術で、競争相手となることを懸念していたのだ。

そこで、息子の伸一とともに製造方法の機械化を図り、増大する需要に対応し、独占状態を守り続けようとしたのである。

だが、厳次郎は、伸一の将来については、異なった考えを持っていた。

「お前は、不器用だから職人には向かない。商人になった方がいい。職人はいくら稼いでも多寡が知れている。それに比べ商人は、才覚次第で大金持ちにもなれる。菅原の親戚藤本建材店で商人になる修行をしたらどうだ」

厳次郎は、伸一が「モノづくり」の才能に欠けていることを見抜いていた。

それに、厳次郎は、カッチング針製造に機械を導入し、大量生産することは考えていなかった。特需が終われば、大量生産のための機械を開発する資金に見合うだけの需要が、見込まれないと判断していたようだ。

また、何よりも厳次郎は、根っからの職人で、針の一本一本に精魂を込めて作ることにこだわり続けていたのである。

伸一は、商人になるにしても、高等学校を卒業してからにしようと考えていた。そのため、クラス分けの時提出する書類には、進学志望と記載した。書類には、生年月日を書く欄がある。

彼は、五月十六日生まれと書くことに、ためらいが生じた。母の「本当は、四月十六日に生まれなの」という言葉が、真実を記載していないようで、うしろめたさを感じたのである。

「家の跡を継ぐにせよ、商人になるにせよ、まず高等学校に入ってから決めることにしたい。学校の勉強が、世の中に出てどれだけ役に立つか知らないけれど、決して無駄ではないと思う。家の仕事が忙しいことは、分かっているから出来るだけ手伝うようにするよ」

書類を提出した後で、伸一は、厳次郎と吉雄に進学組に入ることを許してくれるよう懇願した。

「そうまでいうなら仕方がない。高等学校までは、行かせてやろう」

当時の木本家は、経済的な余裕があったので、吉雄もしぶしぶ承諾した。

一学期がまたたく間に過ぎ、夏休みに入る前日、担任の山脇先生が、伸一を職員室に呼んだ。

「木本君、浜松商業高校に進学を希望しているようだが、君は将来何になりたい」

「はい。初めは浜松商業を出て商人になるつもりでした。でも、受験勉強をしているうちに普通高校の浜松北高に入って大学に進み、もっと勉強したいと思うようになりました。卒業したら、社会の動きとかかわりの深い新聞記者か、外国で活躍できるような仕事につきたいと思っています。でも父は家業を継げと言っているのでおそらくそのことを話したら許してくれないと思います」

「そうか。もし北高に志望を変えるのであれば今からでも間に合う。今の君の成績なら受かるだろう。どうしても北高に行きたいならば、親父さんに先生から話してもいい。先生は、君の希望するように動いてやるからな。遠慮なく言いなさい」

「有難うございます。先生からそんな話があったことを父に伝えます」

伸一は、その日の夜、早速吉雄に話した。

「先生が進学のことでお父さんと話をしたいそうだよ。ぼくが北高に行きたいが、父が許してくれそうもない。そう言ったら先生が、君が本当に北高に行きたいのであれば、先生が、お父さんに話してみると言ってくれた」

吉雄は、先生と話したくはなかった。諭されることになるのではないかと怖れたのである。

高等学校への進学には、反対であったが、進学するのであれば、浜商でも北高でも、県立であることに変わりはない。学費もほぼ同じであるので、吉雄にとってはどちらでもよかった。

さきは、伸一の進路については、本人まかせにしていた。だから、できれば本人の希望に沿って、北高への進学をかなえてやりたかった。

「あなた、伸一が北高にしたいと言っているのだからそ

うさせてやろう。そりゃあ、すぐうちの仕事に就いてくれた方が助かるが、伸一もよくよく考えて決めたことずら。私もこれまで以上に遅くまで働くから」

「分かった。伸一、先生には来なくてもいいと言え。北高を志望するならそうしろ。ただ、これだけは言っておく。受かっても学校の休みには、出来るだけ家の仕事を手伝えよ。そりゃ勉強は出来ないより出来た方がいいに決まっているが、仕事もしないで勉強ばかりしていては困る」

伸一は、やっと父の同意を得ることが出来た。

秋の彼岸も終わり、浜松にも涼風の立つ頃であった。鴨江観音通りの賑わいも収まり、落ち着きを取り戻しつつある。

木本家では、彼岸の期間に限って出していた甘味店もカッチングの針の製造に追われて、昨年秋で止めた。それだけに伸一には、その年の彼岸が、いつもより寂しく感じられた。

三、大学への憧れ

充実した高校生活を送った伸一は、昭和三十年三月静岡県立浜松北高等学校を卒業した。その年、父の吉雄の反対を押し切って神戸大学に受験したが、失敗した。それからしばらく家業を継ぐべくカッチングの松葉針の製造販売に携わっていたが、松葉針を機械生産する鉄工所が出現し、次第に注文が減り、生産を縮小せざるを得なくなった。

吉雄は焦った。何とかしなければならない。そこで機械で生産する方法を模索した。土地を売りすべてをかけて機械の開発に当ったのである。

だが、徒労に終わった。

吉雄は、機械での自家生産をあきらめ、秘匿していたノウハウを必要とする工程だけを残し、半製品を外注することにしたのだ。

東京に外注先を見付けた。吉雄は、伸一とともに上京して外注先との商談に当った。まずまずの製品が出来たが、一旦失った市場を回復するまでにはいたらなかった。

事業を続けるうちに借金がかさみ、一年後には住んでいる家まで売る破目となり、長年住み慣れた大工町から船越町の小さな借家に転居した。

厳次郎は、伸一が北高に入学した年の四月に、すでにこの世を去っている。享年八十歳。頑固一徹で、江戸の雰囲気が感じられ、義理、人情に厚く曲がったことの大嫌いな人間であった。

吉雄は、仕事を失い、無気力となり、大工や土工の手伝いなどして糊口をしのぎ、さきは、親戚の織布工場に働きに出た。

伸一は、厳次郎の言葉に従って、商人になろうと決心し、菅原町の親戚、藤本建材店に住み込み店員として働くことになった。しかし、大学進学への思いは断ち切ることが出来なかった。

幸い建材店の主人藤本利右衛門は、進学への理解が深かった。

利右衛門は、伸一の母さきの妹みずえの夫である。したがって伸一にとっては義理の叔父に当る。

また、利右衛門・みずえの夫婦は、従妹同士である。それ故姉であるさきとも利右衛門は、従妹関係にあった。そのため、伸一とも多少の血の繋がりがある。

利右衛門は、長く海軍に在籍していたが義務教育しか受けていなかったので、士官への道は遠く、ずいぶん悔しい思いをした。せめて子供たちには、大学教育を受けさせたいと、かねてから願っていた。

その思いが、義理の甥である伸一に向かった。

「伸ちゃんが大学に行きたいなら、少しは力になってやってもいいぜ。昼間は店の仕事をしてもらって、夜勉強したらいい。住み込みで、それほどたくさん給料は出せないが、何とか受験の費用と入学金ぐらいは貯めることが出来るだら」

伸一は、利右衛門の言葉がうれしかった。半ば諦めかけていた大学進学への道に、希望を見出すことが出来たのである。

昭和三十一年四月、桜も散り、新緑のまばゆい季節となっていた。

建材店は、朝の早い仕事である。六時に起き、六時半に食事を終え、七時には店を開く。客は、土木、左官の請負業者や職人がほとんどで、店が開くのを待って来店するか電話でその日の使うセメント、石灰、煉瓦、壁材などを注文する。

店員たちは、注文を受けたセメントや石灰を指定する建築工事現場に配達することが主な仕事である。配達にはオート三輪を使った。

先輩の店員光ちゃんこと松本光男の運転する助手席に座って、浜松市内だけでなく、入野、舞阪、弁天島から時には塩見坂を越えて豊橋まで配達した。

一袋五十キロのセメントを一日に百袋担ぐこともある。真夏の炎天下では、セメントの粉にまみれた汗が、ランニングシャツと肌の間を這うように流れ、まとわりついた。

光っちゃんは、歌が好きで、オート三輪を運転しながら三橋美智也の「リンゴ村から」春日八郎の「別れの一本杉」などの歌を大きな声で歌っていた。

東京へ大阪へと若者がこぞって都会に出て行く。その若者が故郷を偲んで歌う歌詞とメロディがよほど気に入ったに違いない。光ちゃんは、伸一のいることなど一切構わず、歌の世界に没入していた。

伸一は、週二回、夜七時から英語塾に通った。苦手な英語を克服するためである。先生は、サマセットモームの小説「雨」をテキストに使って、塾生が英語を好きになるような教え方をした。そのおかげで伸一は、英語が苦手科目ではなくなった。

十二月末まで、藤本建材店で働いた伸一は、友人の紹介で、入野にある寺の庫裏を借り、二カ月間受験勉強に専念することにした。この年の受験に失敗すれば、大学進学を断念しなければならない。伸一にとっては、正に背水の陣であった。

日本も国連加盟を認められ、国際社会への復帰を果たした。「もはや戦後ではない」という言葉が流行し、神武景気を迎えた頃であった。

昭和三十二年二月末日、寺を引き払った伸一は、大工町の家に立ち寄り、その日の夜行で仙台に向かった。

東北大学受験のためである。

深夜十二時、家族が寝静まる中、母さきがそっと起き出し、伸一を見送った。

「受かるといいね。お金はあるのかい。仙台は、寒いだろうから風邪をひかないようにね」

さきの吐く息が玄関の明かりに照らされ、白く立ち上っている。

伸一は、さきの温かい視線を背中に受け大工町の家を出た。

伸一が、東北大学合格を知ったのは、吉祥寺の友人の下宿であった。その頃伸一は、友人の下宿先に、仮住いさせてもらい東京にいた。

伸一は父の吉雄から電話で合格の知らせを受けた。反対していたはずの吉雄の声が弾んでいる。合格を密かに願っていたに違いない。

吉雄は、家業を継いで発展させる責任を一人で背負い込むことに耐えかね、息子の伸一を当てにしていた。お坊ちゃん育ちの吉雄は、いつも誰かに頼っていなければ不安で、その対象が伸一であったのだ。

だが、一方では、息子の幸せを願い、希望をかなえてやりたいと思う気持ちもあった。伸一が合格することによって、吉雄の気持ちも吹っ切れたようである。

知らせを受けた伸一は、喜びにあふれ、満面の笑みを浮かべながら井の頭公園に出た。

温かい日差しの中で、桜が咲き始めている。池の水面を走るボートも伸一の目には、いつもよりも軽やかに見えた。

四．足入れ婚

大学を卒業して名古屋の鉄鋼会社中部鋼鈑に就職した。浜松で就職することを願った両親の期待を裏切ることになった。伸一は帰省し、両親の顔を見るたびに、地元で職を求めなかった後ろめたさ感じた。

「よその土地の大学など行ったら、浜松に帰ってくることはない。やはり俺の言うとおりになってしまった。お前に頼るのはもうあきらめた」

そう言った吉雄の淋しげな顔が、浜松のことに触れるたびに、伸一の瞼に浮かんで来る。

昭和三十八年十月、伸一は、東京で結婚した。

相手は、伸一が世話になった菅原町の建材店藤本利右衛門の弟祐司の妻きよの妹美恵である。祐司夫妻は、西宮に住んでいるが、妹の大原美恵の家族は、浜松から東京に転居し、荻窪に住んでいた。

きよの紹介で知り合い、しばらく名古屋と東京の遠距離交際を続けていた。ところが、折よく伸一が、東京に転勤することになり、頻繁に逢う機会が増え、半年後に結婚することになったのである。

結婚に当って、伸一は、生家のルーツを明らかにしようと思い立ち、祖父の代まで遡って戸籍謄本を取り寄せ、調べてみた。子供の頃、母親から聞いていた誕生日にまつわるわだかまりも明らかになるかもしれないという期待もあった。

厳次郎の出生した明治六年から記載されている木本家の戸籍謄本を紐解いているうちに、不自然な点があることに気が付いた。

伸一の誕生日を四月十六日ではなく、五月十六日にした理由は、単に浜松まつりのお祝いを先延しするだけのものではなかったのだ。

戸籍謄本には、伸一の生年月日は昭和十一年五月十六日、本籍において出生とある。

一方、父の木本吉雄と母の大庭さきとの婚姻届は、同年五月十四日に提出されたと記載されている。すると戸籍上は、結婚してわずか二日後に伸一が生まれたことになり、極めて不自然である。

このことから、吉雄とさきは、恋愛関係にあった。しかし、祖父の厳次郎と祖母のきみが結婚を認めずいわゆる「出来ちゃった婚」だったのではないかと伸一は考えてみた。

だが、そうでもないらしい。

そうした艶っぽい話は、彼の両親、親戚はもとより近所の人からも、聞いたことがなかった。

そこで思い当ったのが「足入れ婚」の風習である。

「足入れ婚」は、結婚前に女性が嫁ぐ予定の家に入って生活し、家風に馴染めるか、良く働く女であるか、子供を産めるような健康な体であるかなどを事前にチェックする風習で、主に農村社会で行われていた。

浜松地方にも、昭和の初めにはその風習が一部残っていたと考えられる。

伸一の祖母みちの実家は、江戸時代から続く大工の棟梁の家系で、徳川家康が、浜松の街造りのために、岡崎から連れてきたと伝えられている。

みちは、裕福な杉本家の次女として育ち、格式を重んじる性向がある。息子の吉雄の嫁としてふさわしいかどうか試したかったに違いない。

それでも、みちは、すぐにさきを自分の家に入れなかった。中山町に家を借り、吉雄と一緒に住まわせたのである。吉雄が気に入れば、正式に嫁として仲人を立て貰い受けるつもりであったのであろう。

そのうちに子供が出来てしまった。木本家にとって初孫である。しかも長男が生まれたのだ。入籍もしてない女から生まれた長男を近所の人びとに披露し、祝ってもらうわけには行かない。

そこで一カ月誕生日を遅らせ、正式に入籍してから、嫡出子として届け出ることにしたのだ。したがって戸籍には、五月十六日に本籍に於いて出生、父木本吉雄届出昭和十一年五月十九日受付入籍、同日嫡出子の身分取得と記載されている。

終戦の年の十二月、伸一は、さきが彼の本当の誕生日を告げた時のことを思い出した。

「実はね、お父さんと私は・・・・」

それに次ぐ言葉は、「足入れの夫婦だったのだよ」と言いたかったのではなかろうか。

さきは、白羽町でも評判の美人であった。だが、父の事業失敗で、実家は田畑の大部分を売る破目となり没落した。さきは、高等小学校を出るとすぐ浜松市内の製糸工場に働きに出た。働きながら和裁の教室に通っていた。その教室の大工仕事に来ていた吉雄が、さきを見初めた。

吉雄は、両親に結婚の許可を求めたが、許されなかった。特にみちが反対した。市内の旧家から嫁を迎えるつもりでいたみちにとって、息子の勝手な結婚を素直に許すことは出来なかった。とはいえ、頭から否定すれば、吉雄の反発を買い、取り返しのつかないことになりかねない。

そこで、ひとまず二人を一緒にさせ、しばらく様子を見ようとみちは判断したのであろう。

出生地についても、伸一は、戸籍上の出生地と実際に生まれた場所が異なることに気が付いた。彼は、この時まで出生地は、本籍地の浜松市大工町十六番地であるとばかり思っていた。

だが、戸籍謄本には本籍に於いて出生とあるだけだった。

伸一の生まれた当時の木本家の本籍は、浜松市旅篭町十五番地である。戸籍上、旅篭町で生まれたことになっている。

伸一は、幼い日、冬の陽だまりの中で、母さきと二人

でいた時、さきが、出征中の吉雄のことを思って呟いた何気ない言葉が頭に浮かんで来た。

「お前が生まれた頃は、中山町にいてお父さんが、働きに行く時には、いつも二食弁当にご飯を詰めて持たせた。その頃のお父さんは、私もびっくりするほどよく食べた」

「足入れ婚」とはいえ、吉雄とさきが初めて所帯を持った中山町で、自分は生まれたのだと、伸一は思った。

戸籍上は、旅篭町で生まれたことになっているが、真の出生地は中山町であったに違いない。

戸籍に記載されたことと実際とは、必ずしも一致するわけではない。

戸籍は、あくまでも届人の申立てを忠実に記載し、それを公的機関である役所が追認するだけだ。その追認された記録が、やがて後世に事実として伝えられる。

したがって、届出人の思惑がその中に閉じ込められていることもありうるのだ。そのことが分かっただけでも、戸籍謄本を改めて紐解いてみたことは、意義があった、と伸一は思った。

それ以来伸一は、いつも誕生日が近づくたびに、どちらの日で祝ってよいのか、喜寿を迎えた今日までも迷いが続いている。

(完)

漢詩で遊ぶ『説文解字』研究

新井宏

ある日突然、漢詩を作ってみようと思い立った。平成二十五年六月一日のことである。

数日後に行われる「鯨会」の話題にしようという心積もりであったが、実は古代漢字の研究に新しい切り口を求めていたのである。

そもそも「鯨会」とは、我が畏友、まんじ同人の鯨游海氏が主催する「漢詩の会」である。既に二十年も続いているが、近年では「交流サロン」と化していて実態は「飲み会」に近い。しかし、漢詩の「平仄」すなわち声調（トーン）は、日本語や韓国語にはなく中国語特有のものなので、これを「鯨会」で勉強しない手はない。

日頃、学問体系の中で最も美しいのは「統計学」と「言語学」だと語ってきた。「統計学」については、先日『統計学が最強の学問である』というベストセラーが出て、先を越されてしまったが、「言語学」の方はまだまだチャンスがある。

言語学の研究に、平仄を利用してみたい。それには伏線があった。

『まんじ』第一二八号に鯨游海氏が、中国清末の龔自珍の漢詩を紹介していた。作者の母が段玉裁の娘であるとの目立たぬ注があった。

段玉裁と言えば、漢字学の聖典、後漢の許慎が著した『説文解字』（以下『説文』）について、空理空論を廃し、実証主義的な立場から研究して、大著『説文解字注』、略して『段注』を著した大学者である。その薫陶を受けた龔自珍が清の漢詩の代表格だという。「漢詩」と『説文』の間に何かひらめくものを感じた。

『段注』が完成したのは一八〇七年、刊行されたのは一八一三年である。

ちょうどその頃、我が愛する狩谷棭齋も一八〇八年に『説文新附字考』を纏め、『説文』のデータベースともいうべき『説文検字篇』の編纂に取りかかっていた。清国でも日本でも、朱子学（宋学）への批判から実証による漢学への復古の流れが興っていた。

日本における『説文』研究は、「三絶」と称された三学者、すなわち狩谷棭齋、松崎慊堂、山梨稲川によって、文政～天保の頃には中国とほとんど時間差なく全盛期を迎えていた。『まんじ』一〇七号から一一七号まで十回にわたって連載した「狩谷棭齋讃歌」に「三絶」のことは詳しく書いた。

その中でも特筆すべきは、山梨稲川であった。彼は漢字を「旁」により分類するという独創的な方法によって『説文』を研究し、漢代以前の古音の存在に初めて気付いた人物である。日本には呉音や漢音の他に推古朝の万葉音が残っていたことが研究を利したに違いないが、残念ながら後継者なく、その後あまり注目されることがなかった。

むしろ山梨稲川が有名になったのは「漢詩」の方である。それは中国清末の碩儒、兪曲園が日本人の漢詩を編集して『東瀛詩選』として出版した際に、広瀬旭荘に次いで山梨稲川の詩を六十八首も入れたからである。

『説文』の研究は「漢詩」と密接に絡んでいる。ここでも赤い糸が張られているのを感じた。

古代漢字の研究にあっては、字画や音韻（発音）ばかりでなく、漢字が持つ声調（トーン）すなわち平仄を勉強しなければなるまい。

平仄判定ソフト

まずは手始めに、平仄すなわち「平水韻」の四声（平声＝平、上声＋去声＋入声＝仄）と韻目一〇六韻を判別するパソコンのソフトを開発することにした。

「平水韻」とは、唐代の韻書の「切韻」や「唐韻」を増訂した「広韻」を引継いで十三世紀頃完成した韻書で、「漢詩」の押韻の根拠として現在に至るまで用いられているため、「詩韻」とも言われている。だから、その平仄や韻目（発音）を知らなければ、「平仄に合い韻を踏む」漢詩は作れない。

曲がりなりにも漢字を読める日本人にとっては、韻目を覚える手掛りはあっても、中国漢字の声調を知らないので、平仄については手も足も出ない。だから、これを知識として覚えるか、あるいはその都度、漢和辞典で調べるしかない。これでは煩雑過ぎる。

捜して見ると、既成のパソコンソフトもあるが、ソフトが公開されていないので勝手に改変する事ができない。

幸いなことに、三年ほど前に簡単なソフトを自作したことがある。その当時は、漢詩に重要な「平声」の

み三十韻二千字ほど入力しただけで、平でなければ仄と判定するという乱暴なものであった。しかも、常用漢字と旧漢字が不揃いで「漢詩」の文字列を入力しても誤判定が生じる場合があり、評判が芳しくなかった。

そこでまず常用漢字、旧漢字を問わず、俗字、略字も含めて、一〇六韻を全てパソコンに登録することにした。

有りがたいことに、インターネット上にかなりの平仄表（四声韻目表）が掲載されている。これを借用してパソコンで重複を整理して、登録できたのが一万二千字ほどである。前に比較すれば桁違いの改善である。

かくして、判定精度は飛躍的に向上したが、それでも問題が残った。漢字によっては、両韻と言って、平仄や韻目が複数にまたがっている場合があり、しかもそれが「漢和字典」によってマチマチなのである。要は諸橋轍次の『大漢和辞典』のように、いろいろな「韻書」の記録を全て記載すれば「両韻」が増えるが、普段は使わない場合も多くなり、かえっておかしくなる。どうやら、ほどほどが良さそうである。

そこで、ソフトの中庸性を検証するために、実際の「漢詩」を例題として入れて、誤判定がどの程度生じるか調べて見た。

この場合も、幸いなことに、インターネット上に、『唐詩選』とか、日本の漢詩、朝鮮の漢詩、あるいは夏目漱石や森鴎外、毛沢東らの漢詩などが載っている。自分の興味で集めた「漢詩」も入れると「七言絶句」で百数十首ほどになる。文字数で言えば三千六百字強である。

「七言絶句」の作詩上のルールは簡単である。「二四不同」と「二六対」そして「押韻」である。すなわち、各句の二字目と四字目の平仄は「不同」、二字目と六字目の平仄は「対（同）」、そして起句、承句、結句の句末では同韻を用い「押韻」することである。もちろん、この他に「下三連同韻禁」とか「四孤平禁」などの規制や「挟み平」「通韻」などの救済法もあるが、わずか数行で基本を示せるルールがすばらしい。

集めた「七言絶句」の「ルール違反」を「機械的にチェック」した結果は次の通りである。

唐詩選	四二首　違反三首、挟み平四句。
朝鮮漢詩	一六首　違反なし、挟み平一句。
日本漢詩	三一首　違反一首、挟み平一句。
夏目漱石	一二首　違反なし。
森鴎外	一五首　違反二首、挟み平一句。
毛沢東	一四首　違反五首。

番外の毛沢東を除くと、違反は一一六首中に六首に過ぎないし、挟み平の救済も七句である。「違反」が多いのは『唐詩選』であるが、念のため漢和辞典で再チェックしたが判定に誤りはない。

もちろん「違反」が「間違い」を意味する訳ではない。初心者の場合なら「違反」が即「間違い」とも言えようが、時代を経た漢詩は、むしろ「違反」によって詩の品格を高めているとも聞く。

日本漢詩の違反は服部南郭の著名な「夜墨水を下る」にあった。起句「金龍山畔江月浮」の「畔」は平声でなければならないが、去声一五翰となっている。

また森鴎外に違反の例を二首みるが、そのひとつの「筑波山少女村」の「路人」は、李白の「黄鶴楼送孟浩然之広陵」の「故人」と同じ用法であり、それを学んだものらしい。また、もうひとつは押韻の違反であるが、これは解説者も同じく違反を指摘している。

番外として載せた毛沢東の場合は十四首中五首に違反がある。あるいは現代音による作詩の影響かと疑ったがその傾向は見られない。ついでながら毛沢東の「七絶」には数詞を含むものが十四首中に十二首もあり、どこか「白髪三千丈」の響がある。もっとも、日韓中を問わず、数詞を含む「七絶」を数えて見ると六割を超えているので、余計なお節介かも知れない。

かくして、パソコンソフトの平仄のチェックがほぼ完璧であることを確信できた。

ところで、ここまでチェックしたので、もう少し深入りしてみる。世の中には奇特な人がいて『全唐詩』の七言絶句から七五六首を選び、各種のルール違反をチェックしている（注1）。

結果だけを言えば、「二四不同・二六対」の違反は七五六首の内一一四首あるという。15％の違反率であり、前述した『唐詩選』の名句四十二首中三首の違反などは、むしろ低い率なのである。

それに較べると、日本や朝鮮の漢詩の場合は、違反が七十四首中三首に過ぎず一桁少ない。そこには、声調すなわち平仄を知らないことで、本場の中国に軽蔑されたくないという「後進国意識」が反映されていたのかも知れない。

漢詩習作

もともと本気で漢詩を作ることなど考えていない。しかし、なぜこんなややこしい平仄まで覚えて「漢詩をつくるのか」という素朴な疑問に答えるためには、自作してみるのが近道である。

とにかく、漢字列を放り込めば、ソフトで平仄や押韻が簡単に判別できるのであるから、後は「詩想」次第である。過去の旅行記などから詩題を選んでも良いが、ここは難しく考えずに「盗作」で行くことにする。「懐かしのメロディー」や「歌声喫茶の曲」には心打つ「歌詞」がたくさんある。それを漢文らしく編成し

て、クロスワードパズルのように、位置を変え用字を替え、形式に合うようにしてみる。ルール違反のチェックは熟達者なみのソフトが付いているから安心である。

やってみると、結構面白い。

盗作による「詩想」は習作に香りを添えてくれるし、ルール厳守で、平仄も押韻も合っている。もちろん、「唐詩」などから用字や用法を学ぶ術はないが、新型漢詩とでも強弁すれば、認めてもらえるかも知れない。

形式を合せるだけなら、一時間で一首くらいはできる。十首ほど作って見たものから、若干推敲して例示する。どの程度、原詩(注2)が判るであろうか。四首とも判った方は私と「青春」を共にした方であろう。

遠別不堪高殿登　　檻森葉隠宴遊盛
莫悲我友旅装興　　敷葉倨居照赤明
古今折柳人生習　　眼瞳髪清煌焔火
何日再逢聞雁征　　憩男酌女異邦氓

白銀富士緑江門　　火山麓邑麦蕎香
今泪不帰十二魂　　花木梢雲満緑岡
荒海舟沈哀力尽　　落葉松林清水湧
彷徨何処戻母元　　気高白樺霧濡光

このようにして習作を試みた感想といえば、クロスワードパズルの楽しさである。平仄を教養として知るエリートだけが参加できる「七言絶句の枠に閉じ込めるゲーム」といえば良いだろうか。『唐詩選』などからそっと香りを添えて、詩想を表現できた時には、喝采を呼びたい気持になるのだろう。

だから、多くの『唐詩選』などを諳んじる愛好家にとっては、パソコンソフトなど目障りとの思いもあるかも知れない。誤解もあろうが次に進む。

現代中国人は平仄を知るか

漢字に抑揚を付けて発音する中国人なら、「平仄」を覚えるのに大きな困難はないと思っていた。それに反して、もともと漢字の抑揚とは無縁の日本人が「平仄」をむきになって覚えて、漢詩をつくることなどアナクロニズムだと思っていた。

ところが、そうでもないらしい。

それは、日本の漢字音を朝鮮の漢字音と比較し、更に現代北京語の発音や声調と比較している内に、簡単に気が付いた。

話がかたくなるが、ここで平仄や音韻について、日本や韓国の漢字音と比較しながら簡単に述べる。

既に述べたが、平仄とは、漢字音を唐代の声調(トー

ン)によって大きく二種類に分けたもので、平には平声、仄には上声・去声・入声があり、これらを合せて四声という。しかし、その四声は漢字の韻目(発音)とは無関係にできている。

日本の漢字音で最も多い発音は「コウ」で普通の漢和辞典でも四五〇字ほど載せている。

この内、当用漢字に準ずるものだけでも六〇字ほどあるが、これらを韓国の漢字音と比較してみると次のようになっている。ハングルのローマ字読みは正確ではないが参考に示す。

高…고(KO)、交…교(KYO)、拘…구(KU)、江…강(KAN)、光…광(GAN)、香…향(HYAN)、行…행(HEN)、更…경(KYON)、宏…굉(KYON)、公…공(KON)、興…흥(HUN)、紅…공(KUN)、甲…갑(KAP)、劫…겁(KOP)。

何と日本漢字音では全て「コウ」で済ませているのに、韓国では十四種類の音韻に分けているのである。日本人の発音が如何に単純化しているかよく判るであろう。

このような現象は何も「コウ」だけではない。「コク」を見ても、韓国では六種類に分けている。

克…극(KUK)、刻…각(KAK)、告…고(KO)、国…곡(KOK)、石…석(SOK)、黒…흑(HUK)

以上のローマ字表記を見て判るように、韓国の漢字音は、KAN、KOP、KUK、SOKなど全て、(頭子音+母音+末子音)の閉音節で出来ている。子音が欠けている場合もあるが、それは空子音と理解する。調べてみると中国語の場合も同じである。

音韻学では、頭子音を「声母」、母音+末子音を「韻母」と言って、これを縦と横に配列して「音韻」を示したものを「半切表」と言う。ローマ字やハングルでの表示なら極めて判り易いが、発音記号に「漢字」を用いる中国語の半切はなじみにくい。

それに対して日本の漢字音はコウやコクのように、(頭子音+母音)+(次子音+母音)の二音の開音節となる。もしコウ、カクについて日本式の半切表を作るとすれば、「声母」にコとカ、「韻母」にウとクとなるのであろうか。変な話である。

要は、日本では末子音として許されるのは[n]だけなので、他の子音で終わる閉音節の漢字を受入れる時には、末子音を[n]に替えてしまうか、母音を付けて二音節とせざるを得なかったのである。

調べてみると、日本漢字の二音節目の発音は、イ、ウ、キ、ク、チ、ツの六種類しかない。日本の漢字音には、呉音や漢音、唐音など複数の「読み」があるので、同じ漢字が重複して集計されるが、「読み」を基準に分布を調べると、最も多いのが、ウで27%、次はイで12%、クが8%、ツが6%、キが2%、最も少ないのがチで0.2%である。その他に、一音節の開音節(母音

止め）が24%、末子音ンが21%ある。

ついでに、平水韻の末子音と北京語および日本語の関係を整理してみると表1のようになっている。

さて、ここまで述べると、要するに日本では、漢字の音韻さえも大きく変化させて受入れており、ましてや平仄に関連する声調は全く受入れなかったのであるから、その「読み」から平水韻の韻目や平仄を推測することなど絶望的に思えてくる。

ところがそうでもない事情がある。

唐代の「音韻」と「平仄」は一部で関係していたのである。すなわち、唐代にあって、末尾の子音に、[p]、[k]、[t]を持つ漢字は全て「入声」とされていた。しかしこれら末尾の子音は表1に示すように、現代北京語では全て失われてしまい、「入声」そのものも無くなってしまっている。それが日本漢字ならかなり判る。

表1　平水韻末子音の韓国、北京、日本での変化

平水韻	韓国語 末子音	北京語 末子音	日本語 2音節末
末子音 [ŋ]	[ŋ]	[ŋ]	ウ（イ）
末子音 [p]	[p]	消失	ウ　クツ
末子音 [k]	[g]	消失	キ、チ、ンン
末子音 [t]	[r]	消失	
末子音 [n]	[n]	[n]	
末子音 [m]	[m]	[n]	

末子音 [ŋ] の漢字では、京経境競鏡卿慶敬兄刑など
漢音で「ケイ」、呉音で「キョウ」と発音する場合がある。
ただし日本漢字末音がイとなっていても [ŋ] とは限らない。

言語学の面白さは、世界各地域での発音の変化に「単純化」の法則性があることである。複数の子音が入混じった発音では、どんどん子音が失われて行くし、二重母音や複母音は単母音化する。

たとえて言えば、初期言語の発音は「動物の叫び声」のようなもので、ルビの振りようがないほど多くの子音を含むが、言語が発達すると母音系の単純な音韻の組合せを主体とする比率が高まるのである。

発音の単純さから見ると、世界の言語の中でも、日本語のように一一二音しか音節がない言語がある反面、韓国では漢字音だけでも四五〇音もある。現代中国の漢字音は四〇六音と言うが、おそらく古代中国ではもっと多くの発音があったに違いない。しかも、漢字では音韻と声調を組み合わせると別の意味をもち、別の漢字を必要とするので、その数はすぐに数万にも上る。だから康熙字典に五万字も収録されることになったのである。（ついでに言えば、英語の音節は三千種ほどある）。

そこで気が付いた。

日本で漢語と言えば、政治、経済、社会など二文字の熟語のことである。だから音読で一文字の漢字使うのはとても座り心地が悪い。ところが、中国では、基本的に一字一語であるから、しいて熟語に頼らなくとも良かった。熟語が普及するのは唐代になってからというが、一字一語の原理がまだ唐詩には強く反映されていたのではないか。

習作の時に、平仄とか押韻とか面倒な規制があると、熟語や固有名詞は使いにくいと知った。しかし、漢詩では個々の漢字をばらばらにしてクロスワードパズル的に使っても良いのではないか。これは言語文化の相違だ。

前述のように、日本では漢字を受入れた時に末子音をそのまま残すことは出来なかった。だから母音を付けて、[k]はキとクに、[t]はチとツに変えてしまったのである。ちなみに、キ、ク、チ、ツの第二音節を持つ漢字は例外なく全て「入音」であり仄であり、合計して16%ある。

したがって、この分だけは、日本人なら「入声」すなわち仄と簡単に判る。ましてや、[k]、[t]、[r]の他に[p]までそのまま残している韓国では、なおのこと完全に判る。

ところが本家本元の北京語では、これらの子音を全て消失してしまったために、全く別の声調に変わらざるを得なくなった。そのため、現代の中国人は、平水韻の「平声」や「上声」、「去声」を継承できていても、「入声」が判らなく、その上、それを再配分しているので「平仄」の区別が正確にはできないのである。

表2　平水韻の四声と現代北京語の四声比較

平水韻		現代北京語の平仄と四声						
平仄	四声	平			仄			合計
		隠平	陽平	合計	上声	去声	合計	
平	平声	884	904	1788	55	112	167	1955
仄	上声	40	31	71	603	211	814	885
	去声	88	86	174	104	901	1005	1179
	入声	118	250	368	39	369	408	776
	合計	246	367	613	746	1481	2227	2840
合　計		1130	1271	2401	801	1593	2394	4795

平水韻表は http://www.geocities.jp/aydahn42df5/heisui.html
北京語の平仄と四声は http://www.frelax.com/sc/service/pinyin/
平水韻[平声]が北京音[平声]である確率は91.5%
平水韻[仄声]が北京音[仄声]である確率は78.4%
北京音[平声]が平水韻[平声]である確率74.5%
北京音[仄音]が平水韻[仄音]である確率88.9%
4795字の他に、北京音で両韻を示す182字があるが集計除外

論より証拠である。ここで、現代の北京語の「平仄」と昔の「平水韻」の関係をパソコンで調べてみた。対象とした平水韻表と北京音はいずれもインターネット上に掲載されているソフトを活用した。第2表のようになっている。

平水韻による平声は現代北京語でも92%ほどが隠平または陽平であり、大まかには対応関係が維持されている。しかし逆に、現代の「平声」すなわち隠平か陽平であっても、平水韻の「平声」である確率は75%に過ぎない。これでは、現代中国人も、「平水韻」の表を暗記するか、その都度「平水韻表」で確認しないと「漢詩」は作れない。

参考のために、前述の『唐詩選』四十二首について、現代北京韻の平仄を用いて「二四不同・二六対」を調べたところ、二十六首が違反する結果になっていた。

だから、結論的に言えば、日本人も韓国人も中国人も漢詩の基礎である「平水韻」についての知識など五十歩百歩で、日本人ばかりがアナクロニズムという訳ではないのである。

ハングルと平水韻

韓国語を知ると古い漢字音をかなり正確に残しているように見受ける。それはハングル文字を創出する段階で、第四代の世宗を支えた申叔舟や成三問が、明の翰林学者・音韻学者の黄賛から教えを受けるために、遼東を十三回も往復して学んだことからも判る。外交官・政治家で六代の王に仕えた申叔舟は『四声通考』や『東国正韻』を著した音韻学者でもあった。そのことは『まんじ』七六号の「仮名に着想を得たハングル」でかなり詳しく書いた。

だから、韓国漢字音に基づき、平水韻表を作成して見ると、新しい知見が得られるかも知れない。なによりも魅力的なのは、ハングルでは「韻母」を現す発音が「声母」とは無関係に統一的に示されており、音韻研究には非常に便利なことである。

結果を表3(文末)に示す。同一のハングル「韻母」が平水韻の韻目と大まかには良く対応している様子が分かる。日本漢字音ではとてもこのような具合には行かない。

そしてぜひ知ってほしいのが、同一韻目のハングル韻母が、四声との関係で見ると、全く義理がたく、平音、上音、去音に三分の一ずつに配分されているのである。ここでも同一の発音の漢字が、平仄と無関係なのがわかる。だから、声調を知らない韓国語では、丸暗記しない限り平仄の判定ができるわけがない。

いやいや韓国語に限らない。中国語でも「旁」を同じくする漢字なら基本的には同じ発音を持つ。

例として、「旁」が「方」で[fang]と発音する漢字の四声を調べてみると次のようになっている。

[平] 下平声 七陽 方妨防彷枋舫仿汸鈁
[仄] 上声二十二養 紡彷昉仿昉
[仄] 去声二十三漾 訪舫妨
[仄] 去声二十四敬 枋

これらの漢字について、現代北京音を調べると、[平]から[仄]に変ったものに彷仿、[仄]から[平]に変ったものに妨枋がある。かなり良く平仄を継承しているようであるが、それでも一~二割は変化している。

それにしても、表3は良くできていると自画自賛している。本稿に載せる必要など無いのだが、無理にでも見て頂きたく載せた。だから、これ以上のコメントはしない。

私の『説文』研究

私の言語学研究の目標は、狩谷棭齋の『説文』研究の継承であるが、実際的な当面の興味は、漢字「弓」「氏」「丞」のルーツを探ることである。いずれも「弓」「氏」「不」の下に「一」を添えているが、このような類字は、弓、氏、丞の他には「旦」のみであろう。

たった数文字しかないこれらの漢字が、偶然かも知れないが、我が趣味の研究生活においては大きな意味を持っている。その内容については後ほど述べるとして、『説文』的な解明方法としては、なんと言っても山梨稲川の「旁」の研究に学ばねばなるまい。

山梨稲川は明和八年(一七七一)、静岡県庵原の名主の家に生れた。松崎慊堂と同年で棭斎より四歳年上、荻生徂徠の流れを汲む陰山豊洲に学び、古文辞学から『説文』の研究に入っている。

稲川の研究方法は、漢字の部首のうち、右側に位置する旁により漢字を分類すると言う独創的なもので、漢代以前の古音に気付いた最初の学者である。例えば、台・怡・始などが、『説文』では異なる発音であるが、古音では全て「タイ」であったというのである。

ちなみに、日本漢字音では「タイ」に台胎殆抬紿詒駘佁殆炲珆跆鉛鈶が、「イ」に飴怡詒貽佁珆耛鈶が、「シ」に始佁柂鈶がある。

それでは、「丞」から始めよう。

わが敬愛する鯨游海氏が『論語』巻一為政篇の「君子不器」は「君子丞器」だという「学説」を今から十数年ほど前に出した。

「君子は器にあらず」では解釈が恣意的にならざるを得ず納まりが悪い。それに対して、「君子丞器」説ならば、不の古義に「丞」すなわち「大」の意味があるので、「君子大器」となり、すんなりと理解できる。

もちろん「君子丕器」説は、そんな単純な論拠にばかり依っている訳ではないが、「論語研究」の二千年の定説を覆す貴重な「新説」である。

では、これを漢字学から見てみたらどうなるのであろうか。

まず、不と丕の旁に持つ漢字を全て書き出して見る。こんな時に、パソコン文字ソフトのATOKが抜群に威力を発揮する。『説文』のデータベース作りに苦労した山梨稲川や狩谷棭斎が知ったら、むなしさを感じてしまうと思うが、わずか五千円で手に入る。

ATOKによれば次のようになっている。

不の旁で発音が「ハイ」 杯坏抔伓妦炐紑胚衋阣
(韻目は上平声十灰)

丕の旁で発音が「ハイ」 胚坯岓柸
(韻目は上平声十灰)

不の旁で発音が「ヒ」 伓釨
丕の旁で発音が「ヒ」 丕伾呸蜚坯岓怌抔狉柸貏駓
(韻目は上平声四支)

不の旁で発音が「フ」 不岪紑柎呯
(韻目は下平音十一尤)

漢字音では不は「フ」、不は「ヒ」と異なるが、旁から見ると不にも丕にもハイという発音があるし、ヒという発音もある。韻目は全て「平」である。だから音韻学の成果を待たなくとも、ハイ→ヒの変化やハイ→フの変化はありそうである。

そこで類字の「非」についても調べてみた。

非の旁で発音が「ハイ」 俳排輩徘琲
非の旁で発音が「ヒ」 緋誹非啡婓悱毳淝裶陫騑
非の場合には、「ハイ」と「ヒ」の読みを同時に持つ漢字はないが、内容的には不丕と同じ結果である。

『論語』の時代の春秋後期には、不は「ハイ」と発音していて、これが戦国期に不(フ)と丕(ヒ)に分離して行ったと考えたい。これは鯨游海氏の考察ともほぼ一致している。

続いて、「弖」と「氐」について述べる。

いずれも「テ」と読むが、この中の「弖」は『康熙字典』に記載なく、日本で作られた「国字」とされていた。歴史的には推古朝から使われており、万葉集では、四千五百十四首の中に六百回ほど現れ、かなり多く使われた文字のひとつである。後世になっても助詞の通称に弖爾乎波「テニヲハ」と使ったり、平安時代の蝦夷の首長の名前を阿弖流爲「アテルイ」と表記している。

ところで、この弖の文字が、江田船山古墳の銀象嵌大刀銘文の中に「人名无□弖」と出ているし、埼玉県稲荷山古墳の金象嵌鉄剣にも「……其児名弖已加利獲居……其児名半弖比」と二個所も出ている。

当時の人名にテ音が多かったようであるが、いずれにせよ、両鉄剣の百九十字の中に、弖が三回も現れているのである。

そうなると、古墳時代に既に、弖のような国字があったことになるが、それは極めて疑問である。万葉仮名の中にも、弖を除くと国字はない。

どこで造られた文字か。蓋然性の高いのは当然ながら朝鮮半島である。

そのため、韓国に滞在していた頃、朝鮮半島の金石文や『三国史記』や『三国遺事』に弖が見出せるのではないかと、あれこれと調査したが、何の手掛かりも得られなかった。

ところが平成十五年の年末になって、偶然『広開土王碑文』の拓本集を見ていて、そこに「幹弖利城」と二ヶ所も弖が出ているのを発見した。あれほど調べたのに、どうして見落としていたのであろうか。

理由は簡単であった。通常『広開土王碑文』として活字化されている「釈文」のほとんどが、この部分の弖を弓と判読したり、弖の真字として氏に書き替えていたのである。私はそれに気付かなかった。

さあ、また新発見で心が躍る。やはり、大刀や鉄剣の文字は朝鮮半島経由のものだったのだ。

しかし、こんな簡単なことが今まで見過ごされていたとはやはり思えない。冷却期間を置いて、その間に徹底的に調べてみた。そして、いきなり興奮が醒めてしまった。既に森浩一先生がタッチの差で同じことを述べているではないか(注3)。

このような経過については、史遊会編『歴史のみち草』の「江田船山古墳の銀象眼大刀」に詳しく述べた。ただその時にどうしても解けなかった疑問が「氏」の替わりになぜ「弖」を使ったかである。第一、音韻学から見ても「氏」は「テ」と読めるが「弖」を「テ」と読むことは無理である。ここで再びATOKの出番である。

氏の旁で発音が「テイ」 氐底低抵柢牴砥羝觝詆呧
弤彽低泜
(韻目は上平声八斉)

氏の旁で発音が「チ」 岻胝坻汦底蚔貾越
(韻目は上平声四支)

氏の旁で発音が「シ」 紙砥祗舐舐底坻抵眡秖秖
一方、弖を旁に持つ漢字は少なく、弖の他には躬と杓があるのみであるが、いずれも「キュウ」である。強いて言えば、弟が弖を含み「テイ」の発音を持つが、遠い関係である。

そうこうしている内に、弖の偏で氏の旁を持つ「弤」という漢字に気付いた。「テイ」と読む。この文字を省略して書けば、氏にもなるし弖にもなる。

どうやら、弖のルーツ探しに答えを得た気分である。

おそらく間違いあるまい。

それと共に、「弓」「氏」「不」の下に「一」を添えている意味についても、おぼろげながら判った。「旦」の字を加えて考えると、いずれも「一」が示しているのは「大地」を意味しているのではないか。一字だけでも白川静先生なみの「解字」ができたとするならば幸せである。

追記　中国でも「君子不器」説

不の語義を追いかけている最中に、中国でも「君子不器」説が発表されていたのに気付いた。それは『吉林師範大学学報』に載った胡翼氏の「浅談〝君子不器〟」で、投稿日が二〇〇五年七月である。鯨游海氏がその所論を最終的に纏めて発表したのが史遊会編『歴史に魅せられて』の「君子の器は大きかった」二〇〇五年二月であるから、いずれにしても鯨説の方が早い。

そもそも鯨游海氏の「君子不器」説に初めて接した時に、すばらしい学説であるだけに、中国でも既に出されているのではないかと「危惧」した。『論語』の解釈が直接的な政争となっていた国であるから、そのために迫害された学者もいたのではないかと鯨游海氏に話したこともある。

中国の胡翼論文を一瞥して見た限りでは、鯨游海説の方が深みも厚みもある。いずれ、鯨游海氏から何らかの紹介もあろうかと思う。

かくして本稿は鯨游海氏に始まり鯨游海氏に終わる。

注釈

（注1）　金子眞也「統計学的にみた七言絶句の平仄について」『人文学報（首都大学東京都市教養学部人文・社会系）』一六六（一九八四・三）

（注2）　①島崎藤村「惜別の歌」、②三角錫子「七里ヶ浜哀歌」、③ガイベル「流浪の民」、④《カルメン故郷に帰る》の木下忠司「そばの花咲く」

（注3）　本稿を執筆していた八月初旬、森浩一先生の訃報に接した。二十年以上にわたり、いろいろとお世話になったが、晩年には、いつもご著書をお送り下さった。考古学の世界では「在野的な学者」であり、それだけに考古学ファンには特殊な人気があった。

森先生が私に先行して所説を発表したのは、一般市販本の『関東学をひらく』（二〇〇一）の「稲荷山古墳鉄剣銘」の項である。

表3　韓国漢字音と平水韻の対象表

四声韻目（平仄）		末音が母音							
		아 야	애	어 여	에	오 요	우 유	으	이
		a	ɛ	ɔ		o	u		i
通用Ⅱ	上平④支	12	1				13		60
	上声④紙	13	3	1	4		8		75
	去声④寘	19	2	1	8		14		81
	上平⑤微								30
	上声⑤尾				1				15
	去声⑤未		2	7	1		1		18
	上平⑥魚			30	1	5			
	上声⑥語	2		39		6			
	去声⑥御			30	1	3			
	上平⑦虞	1		1		42	66		
	上声⑦麌	1	1			41	39		1
	去声⑦遇					46	40		5
	上平⑧斉		2	7	14				5
	上声⑧薺			3	13				3
	去声⑧霽	1		9	56				5
	上平⑨佳	5	24		4				7
	上声⑨蟹	2	8						1
	去上⑨泰	1	17		1				11
	去上⑩卦	2	22		5				7
	上平⑩灰		22				2		11
	上声⑩賄		22						12
	去声⑪隊		37		10	1	1		9
通用Ⅳ	下平②蕭					86			1
	上声⑰篠					34	1		
	去声⑱嘯					38	2		
	下平③肴					31	1		
	上声⑱巧					14			
	去声⑲效					16			
	下平④豪					50	1		2
	上声⑲皓					38	2		2
	去声⑳號					31	1		
通用Ⅴ	下平⑤歌	69	2						
	上声⑳哿	24	1						
	去声㉑箇	28	4			1			
	下平⑥麻	69	1			2			
	上声㉑馬	23	1						
	去声㉒禡	28	3						
通用Ⅷ	下平⑪尤					9	92		
	上声㉕有		1			5	59		2
	去声㉖宥	1				3	72		4

四声韻目（平仄）		末子音が鼻音［ŋ］							
		앙 잉	앵	영 영	엥	옹 용	웅 융	웅	잉
		aŋ	ɛŋ	ɔŋ		oŋ	uŋ		iŋ
通用Ⅰ	上平①東					26	17	4	
	上声①董					13		1	
	去声①送					14	5	1	
	上平②冬					30	1		
	上声②腫					12			
	去声②宋					20	1		
	上平③江	6				2			
	上声③講	4				1			
	去声③絳	6				2		1	

四声韻目（平仄）		末子音が鼻音［ŋ］							
		앙 잉	앵	영 영	엥	옹 용	웅 융	웅	잉
		aŋ	ɛŋ	ɔŋ		oŋ	uŋ		iŋ
通用Ⅵ	下平⑦陽	##							
	上声㉒養	59							
	去声㉓漾	66	1						
通用Ⅶ	下平⑧庚	1	24	84			2	1	4
	上声㉓梗		4	32					1
	去声㉔敬		4	22					1
	下平⑨青			58					
	下平⑩蒸	3		1		1	7	50	13
	上声㉔迥			17				3	
	去声㉕徑			17			1	11	1

四声韻目（平仄）		末子音が［n］							
		안 얀	앤	언 연	엔	온 욘	운 윤	은	인
		an	ɛn	ɔn		on	un		in
通用Ⅲ	上平⑪真			1		3	26	4	87
	上声⑪軫			1			9		22
	去声⑫震						13		32
	上平⑫文	1					34	5	1
	上声⑫吻						8	2	
	去声⑬問			1			17	1	
	上平⑬元	2		47		27		2	
	上声⑬阮	14		10		11	2		
	去声⑭願	9		14		7			
	上平⑭寒	78							
	上声⑭旱	34							
	去声⑮翰	61							
	上平⑮刪	43							
	上声⑮潸	16							
	去声⑯諫	18					1		
	下平①先	2		##		1			11
	上声⑯銑	3		55			1		1
	去声⑰霰	7		76					1

四声韻目（平仄）		末子音が［m］							
		암 얌	앰	엄 염	옘	옴 욤	움 윰	음	임
		am	ɛm	ɔm		om	um		im
通用Ⅸ	下平⑫侵	13		1				25	18
	上声㉖寝							3	9
	去声㉗沁	2						4	11
	下平⑬覃	47							
	上声㉗感	17							
	去声㉘勘	18							
	下平⑭鹽			40					
	上声㉘儉	1		19					
	去声㉙豔	1		19					
	下平⑮咸	7		3					
	上声㉙豏	4		3					
	去声㉚陷	5		7					

通用の区分は平水韻の韻目が通韻する範囲でグループ化したもの．
入声の終音については，通用ⅠとⅥとⅦが［k］，通用ⅡとⅢが［r］，通用Ⅸが［p］なので省略した．

政治家の一詩を巡る春蘭と秋菊

――聖徳銀行秘書室第八話――

鯨游海

平成二五年一月二二日火曜日午前八時

東京大手町に聳える聖徳銀行本社の超高層ビル二四階に在る秘書室に、美味しそうなコーヒーの薫りが漂っていた。

眼下のオフィス街は、睡りから未だ完全には醒めきっておらず、車や人の往来はまばらだった。

爽かに晴れた冬の朝である。

聖徳銀行では、毎週火曜日の朝八時から九時迄の一時間を、社員が自から選択した文化活動の時間に充てていた。いわゆる「部活動」の時間である。

十年余前、前頭取の提唱によって始まった制度で「凡そ銀行員たる者は豊かな教養を持つべし」との信条から全行的に組織されたものであった。

俳句、短歌の会、古文を読む会、歌舞伎研究会、考古学勉強会、歴史研究会、詩吟の会、茶華道の会、時事問題研究会、映画を観る会、旅の会等々広範囲な分野のサークルが結成され、それぞれが活発な活動を展開していた。

秘書室関係では、聖徳太平頭取の主宰による漢詩愛好会が結成されていた。

この会は当初十数人の参加者があったのだが、徐々に敬遠され、今では常連メンバー五名の小グループになってしまった。五人とは頭取の太平、秘書役の泉ピン太郎、外為資金室長の沼田美紀、美紀の部下で新入行員の早川香織、それに本店営業部の若いイケメン行員の田宮雅人である。

さて、時計の針が八時を指し例会が始まった。

太平は参加者に一枚のペーパーを配りながらいった。

「この漢詩は、民主党の海江田萬里先生が詠まれたもので、先日の賀詞交換会でお逢いした時に戴いたものじゃ。足下らもご存知の通り、民主党は先の総選挙で大敗北を喫し、野党の自民党が当選者を大巾に増やした。

その為野田前総理は党首を辞し、海江田先生が党首に就かれた。その当時の党幹部としての責任や苦しい心境、再建への決意などを七言絶句、二八文字に籠めて作られたのがこの漢詩じゃ。

ところが、その苦心の作を記者クラブで発表されたのに、翌日どの新聞にも載らなかった。

世間は、掌を返すように敗者には冷めたく『此道今人棄如上』で、誰も負け犬には寄りつかないのかと慨嘆しておったのじゃが、新聞に載らなかった理由はどうもそれだけではないらしいことが判ってきた。

信じ難いことじゃが、最近は漢詩漢文の訓める記者が各メディア共に殆んど居ないらしい。絶滅種となってしまった。

つまり記者自身が理解出来ず珍紛漢紛なものを記事に書ける訳がないじゃろう」

「ははあ、なるほど……」

とピン太郎が相槌を打つと、他の三人もいちように頷ずいた。

「どうも困った風潮じゃ。私は海江田先生のご趣味が漢詩、漢文、ひいては中国古典だということは前から知っておったが、先生の漢詩を実際に拝見する機会はなかった。

今回先生から直接贈られ、初めて拝見した次第じゃ。

それにしても、昨今の政治家は教養がなくていかん。実に歎かわしいことじゃ。

一昔前なら、政治家たる者漢詩の一首ぐらいは皆作ったものじゃ。西郷隆盛は南州という号を持ち、幾つもの名句を詠んだ。渋沢栄一や乃木希典なども巧かった。

私の記憶では戦后に限っても石橋湛山とか宮沢喜一は見事な漢詩を詠まれた。

田中角栄も日中国交回復で訪中された時に、周恩来に贈ろうとして作った詩があった。

尤もこれは規則無視の無茶苦茶な漢詩で、漢詩もどきとして失笑を買ったものじゃったが……。

その詩どうしたかって？　周恩来に贈呈しようとする田中角栄をお付きの者らが、必死で制したという逸話が残っておる。

逆にいうと、お付きの者の中に漢詩の判る男が幸いにもたった一人でも居たということじゃ。結果として日本国が、国際的な大恥をかかなくて済んだのじゃ」

一同は神妙に太平の講話に聴き入っていた。太平は続けた。

「今、現役の政治家や官僚は何千人、何万人といるじゃろう。しかし漢詩の詠める者は何人いるじゃろうか。少なくとも私は海江田先生たったお一人しか知らぬ。

ひょっとして沖縄県の稲嶺知事さんあたりは秘かに詠

んでおられるかもしれんが……」

「海江田先生は、民主党が選挙で大敗したあと、党首に押され火中の栗を拾われました。

政界混頓の中、ましてや年末の多忙な中でも、ちゃんとした一首をものされたとは立派なものでございますね」

とピン太郎が調子を合せた。

「その通りじゃ。今配ったのがその七言絶句じゃ。では一諸に読んでみよう。

特に難かしい言葉もなく判り易い詩じゃ」

無　題　（作・海江田萬里）

臘月扶桑戦鼓鳴
寒天寡助計無成
将軍功盡萬兵斃
粉骨砕身全此生

〈無題〉

臘月の扶桑に　戦鼓鳴り
寒天に助け寡く　計なるなし
将軍功尽き　万兵斃る
粉骨砕身　この生を全うせん

〔口語訳〕

十二月、日本中に太鼓が鳴り響き、選挙戦が始まった。寒空の下で援軍も寡く、作戦は悉く失敗に帰した。党幹部は為す術もなく、多くの党員が落選した。

かくなる上は粉骨砕身して党再建に努め、世の為人の為に私は余生を全うする覚悟である（◎＝押韻）

「起句冒頭の臘月とは十二月。難かしい語はこれだけで、あとは易しい言葉を用いてストレートに詠んでおられる。押韻は鳴、成、生の三字で下平声八庚のグループじゃ。まずまずの出来じゃろう」

「はい。立派な詩と思います。もっともどの程度立派かは初心者の私には判りかねますが、少なくとも漢詩の規則は全てクリアーしているらしいことは私にも判るようになりました」

とピン太郎が応じた。

「うむ。しかし第四句＝結句の『全』が私には気に入らぬ。ここは『完』ではどうじゃ。訓読は『まっとうせん』じゃ」

「全も完も私には同じように思いますが……。両字共に平声の韻で、意味も殆んど変りないと思うのですが。何故全は駄目で完ならよいのでしょうか？」

「うむ。足下ら初心者には理解し難い事情があるのじゃ。その説明は短い時間では不可能じゃ。これについては次の例会で改めて説明することとしよう」

時計は九時三分前となっていた。

一同はうしろ髪を引かれる想いで夫々の職場に散っていった。

平成二五年一月二九日火曜日午前八時

この朝、太平は誰よりも早く部活動の部屋となっている頭取室に現われた。次に現われたのはピン太郎と早川香織、少し遅れて田宮雅人。美紀は開始時刻の八時に遅れまいと廊下をこ趨りに来たので、息をぜいぜいと鳴らすありさまであった。

太平が一同を見廻しながらいった。

「お早う。では始めるとしよう。

前回の例会で、足下らと約束していた海江田先生の漢詩の『全』について、私が何故『全』では駄目で、他の字の『完』がベターと思うかについてじっくりと解説する予定じゃった。

所が、私のいいたいことが巧く説明された一文が、たまたま一昨日の産経新聞に掲載されていたのじゃ。

論者は、漢文学の泰斗の加地伸行教授じゃ。

先ずは、これを読んで欲しい」

といいながらコピーされた紙片を一同に配った。

そこには「和臭ある作品」と題された論考が、加地教授の端正な顔写真と共に載っていた。

「加地伸行先生は漢文学界きっての重鎮で、今は白川静記念東洋文字文化研究所の所長である。

儒教や道教また仏教等東洋思想に通じた漢学者であり、その鋭い筆鋒で斯界に君臨しておられる大学者じゃ」

〈和臭ある作品〉（産経新聞一月二七日朝刊一頁）

……

海江田氏は第四句＝結句の「全此生」を「敗れた党の再生のためにこれからの人生を最大限努力する」といった意味に使っている。

しかし「全此生」（この生を全うす）、即ち「全生」とは、荘子の養生主篇の冒頭にある有名なことばであり、こういう意味だ。

「生命に大切なことは偏ることのない中庸である。中庸のようにすれば、身を安全に保つことが出来（保身）、生体（知覚、感覚、言動など）を無傷に保つことが出来る（全生）」

てっとりばやく言えば、なにかをしたいと肩肘張ったり熱中して入れ揚げたり、せかせかするのではなくて、中庸という自然な在り方を守ってゆけば、長生きできますよというのが「保身・全生」の意味。

ということは、政争といった権力闘争に「粉骨砕身」する在り方とはまったく無縁な話なのである。

漢文の作詩作文において、古典のことばを踏んだり先

人のすぐれた語句に拠るのは、基本的作法。

しかし海江田氏は「全生」を勝手に現代日本語風に理解し、かつ使っている。

そういう和臭のある作品は、人さまの前には出さないもの。無教養をさらすことになるからである。

それをあえてする。その程度の人が果たして一党を率いることができるのか。

それに彼の詩には、戦いに敗れし者の悲しみなど、どこにも見られない。それで将たりうるのか。

現代人と明治人との教養の差は比べものにならないが、日露戦争において乃木希典将軍は二〇三高地占領に成功し勝ちはしたもののそれこそ万兵を失った責めを負いつつ作った詩には、切切とした悲しみが満ちている。

日本漢詩の名作である。

金州城下作　（作・乃木希典）

山川草木轉荒涼
十里風醒新戰場
征馬不前人不語
金州城外立斜陽

〈金州城下の作〉
山川草木　うたた荒涼
十里風なまぐさし　新戦場
征馬すすまず　人かたらず
金州城外　斜陽に立つ

〔口語訳〕
山も川も草も木も枯れ果て、唯々荒涼として涯てしなく拡がっている。（山川草木悉皆成佛の句より引用）
見渡す限りの原野から戦死者の醒い風が吹きつける。
軍馬は疲れはて前進しようとせず、将兵たちも無言だ。
（指揮官たる私は）累々たる戦死者の霊に対して頭を垂れ、悲しみにうちひしがれて夕陽の中に立ち竦んでいる。

「うむ。何とも厳しい一文じゃ。また何とも感動的な乃木将軍の漢詩じゃ。

厳しいけれど見識ある正論じゃ。

学問、芸術を究める為には、この厳しさが不可欠と喝破された。このような文を鋭い筆鋒という。

海江田先生には申し訳ないが、久しぶりに胸のすく論考じゃ」

瞬時、一座は重苦しい沈黙に包まれていた。

美紀がようやく口を開けた。

「私、実は一昨日この一文を産経新聞で読みました。

そして早速荘子の養生主篇の冒頭部分を読んでみたのです。そうしたら昔学生時代に、この部分を苦心しながら解読したことを思い出しました。

〈……吾生也有涯、而知也无涯。以有涯隨无涯、殆已。

……爲善无近名、爲悪无近刑。緣督以爲經、可以保身、可以全生……〉

〔我々の生命は有限であるが、心の働きは無限である。有限の身で無限のことを追い求めるのは危ういことだ。それでいてなおあくせくと心を働かせる者は、身の破滅があるばかりだ。……

善いことに努めれば名誉に近づくであろうし、悪いことに努めれば罰に近づくであろう（名誉も刑罰も身を滅ぼす本である）

（だから）督（中庸）の立場に従って、それを一定の拠り所としていくなら、わが身を安全に保つ（保身）ことが出来、わが生命を安全に長らえる（全生）ことが出来る。……〉

右のように保身や全生とは、消極的に生き永らえるさまで、粉骨砕身する積極的な生き方とは水と油の如く適合しない。

つまり荘子のいう全生は、（やり遂げる）ではなく（辛うじて生き永らえる、何とか無傷に終える）という消極的意味である。

ところが、全を使わず完を使えば、同じ（まっとうす）と読んでも、荘子のことばとは無関係となり、和臭と非難されることもなくなります」

「さすがに沼田君じゃ。私が完なら可とした理由が判ってくれたようじゃ。加地教授の批判も足下らにはよく判ったことと思う。

では今日はここ迄としよう」

この朝の例会は無事終了した。所が春風の吹いた四月、加地教授の一文に対して海江田氏の漢詩を擁護する思わぬ反論が公になった。

平成二五年四月八日火曜日午前八時

一年中で最も待ち遠しい春が来た。「清明の時節雨紛紛」と歌ったのは唐の杜牧。今年の東京の寒さは例年になく厳しく、春が待たれたのであった。

桜満開花粉紛の朝、漢詩愛好会五人のメンバーは一人も欠けることなく、元気な顔を例会の開かれる頭取室に見せていた。

太平が口を開いた。

「今日は、前に論じた加地教授の『和臭ある作品』という産経新聞の評論に対して、異論が公表されたので、その内容について足下らと一諸に考えてみたいのじゃ。

東京のお茶の水駅の近くに湯島聖堂という孔子をまつった所がある。今は漢詩漢文のメッカみたいな所じゃ。

江戸時代、学問の府がおかれたここに本拠をおく全国漢詩連盟というのがある。

ここが発行する会報四月一日号に次の一文が載った。

執筆者は全国漢詩連盟の常務理事で、神奈川県漢詩連盟会長の岡崎満義氏である。

漢詩には造詣の深い文化人じゃが、学者ではない。元来は出版業界におられた財界人じゃ。

漢詩の普及、発展や漢詩人の発掘、育成等事業に腐心しておられる方で、海江田氏の友人、また加地教授とも同期同窓のあいだがらというお人じゃ」

〈加地伸行氏の海江田万里氏漢詩批判について〉

……

海江田さんの詩は「下手な詩である」と決めつけられ、とくに七言絶句の結句「粉骨砕身全此生」がダメ。「全此生」は荘子に使われている言葉だが、その意味を取り違えて使って話にならない、と斬り捨てられているではないか。

私は漢詩作りを始めて十一年の初心者だからか、すんなり理解できた。漢詩の先輩専門家に訊いても「和臭」とはいえず、十分に漢詩として通用する。……

漢詩は数千年にわたる中国の歴史、思想、文学のいわゆる典故が重んじられる。

それでも奥深い典故の森の入口でうろうろしているような初心者なりの受け取り方があってもいいのではないか。……

海江田さんの詩は少なくとも漢詩のルールをきちんと守っている。田中角栄さんの押韻も平仄も滅茶苦茶な詩にくらべれば、文句なくいい詩だと思う。……

「右の如く、岡崎さんは大学者の加地伸行教授の批判に対し、遠慮がちにではあるが堂々と持論を展開された。(正論ではあるが、峻厳過ぎる)と。

そして友人として海江田氏の漢詩に次韻(贈られた詩の韻をその通り踏襲して応酬の詩を作る作法)し次の応酬詩を作って海江田氏に贈られたのじゃ」

酬海江田萬里先生作詩(作・岡崎満義)

扶桑天晦朔風鳴
東北深憂興未成
南海近來多外患
濟民經世恃先生

〈海江田万里先生の作れる詩に酬ゆ〉

扶桑の天晦く　朔風鳴る
東北の深憂　興いまだ成らず
南海近来　外患多し
済民経世は　先生に恃まん

〔口語訳〕

この頃わが日本の空は晦く、北風が吹き荒れている。
東北大震災の憂慮すべき災害の復興は、未だこれから。

一方東北地方以外の西南日本に於いても難問続出だ。

かくなる上は、この国の復興は政治家たる貴兄に頼るしかない。宜しく国民を導いて欲しいものだ。

「更に返す刀で加地教授に対しても、次の漢詩を創って贈られたという」

寄孤劍樓加地伸行先生(作・岡崎満義)

故友自稱孤劍樓
筆鋒太鋭撲時流
此詩有地心情直
請以温言樂應酬

〈孤剣楼加地伸行先生に寄す〉

故友自から称す　孤剣楼と
筆鋒はなはだ鋭く　時流を撲つ
此の詩地あると雖も　心情は直なり
請う　温言もって　応酬を楽しましめん

〔口語訳〕

旧友の加地先生。貴兄は孤剣楼と自から称しておられるが、

その名の通り鋭い剣先き(=筆鋒)を以ってわが国漢詩文ひいては文学の在り方に警鐘を鳴らしておられる。

(さて先生は先に海江田万里氏の詩に厳しい評論をなさいました)

たしかに彼の詩は、ご指摘の欠陥が有ることは有るのですが、詩情は純粋、朴直であります。

故に願わくは温かい言葉で励ましてやって欲しいのです(さもなくば、彼は詩作を止めてしまうでしょう)

「右の通りじゃが、足下らは加地教授と岡崎会長の夫々の持論を通じてどう思うかな」

と太平はようやく長口舌を終えた。

しばし沈黙が続いた。

やおらピン太郎が発言した。

「お二方とも、それぞれにお立場があっての、それを踏まえた上でのご発言だと思います。

加地教授は漢文学という学問の厳しさを訴えたかった。学者としての立場から荘子の典故を見逃す訳にはいかない。また漢詩作品の内容にも理想を求められ、要求する水準も高いのでしょう。

荘子に出てくる語はあく迄典故の意味として解釈し、仮にも現代語による解釈などは論外とされる。だからこそ漢詩の高尚な芸術性が保たれると確信しておられる。

一方の岡崎会長の方は、実務家として減少する漢詩人口に憂慮され、これを如何に増やすかという使命感からも海江田先生に同情された。

いわゆる専門漢詩人以外の人になら、少々の地は大目

に見て温かく許容し、レベルに応じて優しく指導して欲しいといわれる。

初心者たる私としては、やはり岡崎会長の肩を持ちたくなります」

「なるほど。では沼田君の意見はどうじゃな」

と太平は美紀に返答を促がした。

「私は加地教授の厳しさが必要と思います。厳しいが故に、更に勉強し、古典を究め、切磋琢磨して進歩していくのだろうと。

また今回の件では、海江田さんというわが国政界のリーダーの一人だけに、つい厳しい叱咤になったのではと思いますが……」

太平は大きく頷いて締めくくった。

「漢詩という深遠な言語芸術は、数千年の時空を経ていつの世も秋霜烈日の指導で培われてきた。

一方、正規の漢詩を作れる漢詩人口は年々減少し、今や全国で三千人を切ったといわれる。特に若い人の漢詩ばなれも進んでおる。

しかし漢詩はこの地上から消えてしまうには惜しい人類の財宝じゃ。李白や杜甫、白樂天や陶淵明、良寛や旭荘や漱石らの名句名吟を味わえない世代が今後出てくるとすれば誠に不憫じゃ。

岡崎会長さんは漢詩の普及、愛好者の増強に尽力されておる奇特な方じゃ。

つまり私にいわせれば『春蘭秋菊倶に廃すべからず』で、両者共不可欠な評論、即ち倶に廃すべからずじゃ。

さて、実は私も海江田先生に宛て、次韻したエールを作ってみた。これを海江田先生に贈ろうと思うのじゃ」

酬海江田萬里先生作詩（作・聖徳太平）

墨守綸言逐鹿鳴
刀撓矢盡夢難成
天時地利不如和
捲土重來完汝生

〈海江田万里先生の作れる詩に酬ゆ〉

綸言を墨守して　鹿鳴を逐ふも
刀撓れ矢尽きて　夢成り難し
天の時地の利は　和に如かず
捲土重来して　汝が生を完うせよ

〔口語訳〕

前総理が近く解散すると公言したのを律義に守り不利を承知で解散した。為に自民党と政権を争うこととなった。しかし予想通り大敗北を喫し政権維持の夢は吹き飛んでしまった。

天の時があり、地の利があっても、人の和が一番大切。

（これに欠けておったので民主党が大敗したことを踏まえ）捲土重来努力して貴兄の人生を完うして欲しい。

「この詩は禮記、墨子、魏徵、孟子、杜牧らの語を典故として多用しておる。

次回はそれぞれについて、この引用が妥当か否かを論じることとする。

では今朝の例会はこれでお開きとしよう」

時計は九時を指そうとしていた。

窓からは遥かに雪を戴いた世界遺産、富士の霊峰が朝日を浴びて西の地平線に輝やいていた。田宮雅人の心に春陽白雪という四字が浮かんだ。（完）

参考文献

「和臭ある作品」加地伸行・産経新聞一月二七日朝刊一頁。

「加地伸行氏の海江田萬里氏漢詩批判について」岡崎滿義・全漢詩連會報四月一日第四〇号八頁。

「荘子」金谷治訳注・岩波文庫（養生主篇第三）

親友

吉田忠雄

人生の節目に親友がいる。親友とは気の合った身近にいる親しい友人のことでる。私にも折々に親友がいた。しかし、何かの機会にはなれ離れになると、疎遠になった。

現在のわたしの親友は、米田さんと橋爪さんである。少なくとも月に一遍は待ち合わせて一緒に酒を飲み世間話をしている。お互いに酒が飲めるというのも私たちが親友でいられることの条件となっている。

米田さんとの付き合いはかなり長い。米田さんは東大火薬教室の疋田教授のもとに長く勤められていた。わたしは縁あって同じく東大の火薬教室の難波教授のもとに途中からつとめることになった。この二つの教室はともに野球が好きで、疋田研と難波研はよく野球の対抗試合をした。米田さんはキャッチャーで私は外野手であった。どちらの研究室にも東大野球部のレギュラー選手がいた。そんなことで米田さんと私はよく神宮球場に東大野球部の応援に行った。残念ながら、東大野球部は勝ち試合がなかった。しかし、これは実力の差とあきらめて、それほど残念には思わなかった。

米田さんは東大を定年退職すると、火薬協会の事務局長になった。米田さんがそれを引退すると、橋爪さんがその後を引き継いで事務局長になった。私はその仕事には関係ないが、火薬には関係していたので、橋爪さんとも親しくなった。

米田さん、橋爪さんと私は月に一度は浅草の神谷バーで会って飲み会を開いている。私はビールが好きでまず中ジョッキを注文し、橋爪さんもこれに倣い、米田さんは黒ビールの小瓶を注文する。肴はオードブルである。米田さんは、ビールはおなかがいっぱいになると言って、途中から日本酒にきりかえる。この会には時々橋爪さんの連絡で女性が加わることもある。

火薬学会の会合が各地で開かれると、前事務局長と現事務局長の米田さんと橋爪さんはその世話をするためにその会に同行する。私もそれにくっついていく。おかげで全国各地に行くことができる。前回は鹿児島であった。桜島の雄姿と噴火を目のあたりすることができた。

ザ・バードマン
～血染めの極秘指令～

月岡兎平

1、

（ここはどこ？）

汪彗英（おうすいえい）は高校の下校途中、路上でいきなり車に押し込められて、布に染み込んだ薬品をかがされ、気を喪った。

気がつくと、窓一つない湿ったコンクリートの部屋にいた。

歯科医にあるような椅子に手足を拘束され、さるぐつわを噛まされている。

もがいたが、まったく身動きがとれなかった。

（だめよ。無駄に体力を消耗しては。こういう時は冷静になって、体力を維持するの）

両親を早くに喪い、祖父に厳しく育てられたという生い立ちが、十六歳とは思えぬ冷静さを生んでいたのかもしれない。

しばらくして、誰かが階段を下りてくる音がした。

ギィー、と鉄製の扉が開くと、五人の、一見して堅気ではない男たちが入ってきた。

「ホー、こりゃ、なかなかの美少女じゃないか」

リーダー格の男が汪彗英を観察した。細面で色が白く、意志の強さがにじみ出ている目。短く切った髪は、十六歳の清潔感とわずかな艶をにじませていた。

「おい、さるぐつわを外してやれ」

へい、と言うと、人相の悪い小男が、汪彗英の口から手ぬぐいを外した。

げぼっと咳をして、

「あなたたちは何者なの！私を離しなさい！」

とありったけの声で叫んだ。

取り囲んでいた男たちは内心、驚いた。こんな状況に置かれて、わずか十六歳の娘がまともに声を出すとは。

「やかましいッ。あのクソおいぼれに似て、根性が曲がってやがるんじゃねえか」

「おじいさまの悪口は許しません！曲がっているのは、あなたたちの方でしょッ！自分より弱い者を誘拐して、なに格好つけてるのよ！ろくでなしッ」

「んだとぉ」

小男は、汪彗英の右ほほに握りこぶしを思い切りたたきつけた。

「うぶぅ」

唇が切れ、血がしたたった。しかし、周りの誰も止めようとはしない。それからなぜか右頬だけを殴り続けられ、

「そのへんにしとけ」

と、リーダー格の男に止められ、ようやく汪彗英は暴力から解放された。

顔面右側がはれ上がった。

「これで、生意気な口はきけねぇだろう。これからお嬢ちゃんといろいろお遊びをしなくちゃいけねぇから、名前くらいは名乗っておこうか。おれは藤枝組の、藤枝紘一という者だ。女をいたぶって、泣き叫ぶのを見るのが何より好きでねぇ。ほら、あれが見えるかい？」

藤枝は、汪彗英の正面と真横に設置された機械を指差した。

「ビデオカメラだよ。お嬢ちゃんの最初の男になる様子を撮ろうと思っているんだが、その前にね、お嬢ちゃんのおじいさまに、お土産を贈ろうと思って」

藤枝は子分に命じて、銀色のトレーを持ってこさせた。

「お嬢ちゃんも、ヤクザが指を詰めるの、知ってるだろう？あれって、まな板の上に指乗せて、ドスで切るんだけど、痛いんだよ。でも、おれは優しいから、そんな残酷なことはしないよ」

そう言って、トレーの中から、園芸用の断ちバサミを取り出した。

「これ、よく斬れるんだぁ。ちゃんとと消毒もして上げるからね」

「ひぃ」

彗英は、目を見開いて黒い断ちバサミを見つめた。

（まさかっ、本当に斬るの？）。

藤枝は、肘掛の上に革ベルトで固定された彗英の左手を触り、

「お嬢ちゃんはたしか、左ききだったねえ。最初は、左手の小指からいこうか」

藤枝は彗英の、白魚のような指を口に含むと、卑猥な音を立ててなめ尽くした。

「いやッ、やめてッ」

彗英の短い悲鳴を愉しみながら、藤枝は断ちバサミを手にした。

「消毒も済んだし、さあ、ちゃんとカメラを見るんだよ」

そう言ってハサミを少しずつ、少しずつ、小指の第一関節に食い込ませていった。硬いゴムを切るような感触を、藤枝は愉しみながら力を入れる。

そこにいたチンピラ達は、彗英の泣き叫ぶ姿を想像したが、彗英はそれが男たちを愉しませ、祖父を苦しめることになると悟って、唇を血がにじむほど噛みしめながら、声を上げずに耐えた。

藤枝が「うんッ」とハサミを合わせると、カラン、と、銀のトレイに彗英の小指が、第一関節から切り落とされた。

藤枝は、彗英が目を真っ赤にしながらも声を上げなかったことに怒り、第二関節を玩ぶように時間をかけてギリギリ刃を当てながら落とし、それでも耐えた彗英に、わずかに残った小指の根本部分をハンマーで叩きつけた。ぐしゃり、と肉片が飛び散った。

「ひーッ」

吸い込むような小さな悲鳴を上げて、彗英は、気絶した。

「ほぅら、おじいちゃま。これが可愛い孫娘の、左手小指の第一関節」

と言いながら、藤枝がビデオカメラに向かって血まみれの指片をつまみ上げた。

「これが第二関節、そして、これが根本」

今度は、カメラを持ってこさせて、ぐしゃぐしゃになった小指の付け根を映し出した。

「ちゃーんと、化膿止めをしてあげますから、安心して下さい」

藤枝は、ズボンのチャックを開けると、太く醜い男性をしごきだした。そして、白い飛沫が彗英の血みどろの左手にかかると、そのまま包帯を巻き付けた。

「また送リマース。たのしみにまっててくださいねえ、おじいちやま」

藤枝はそう言いながら、気絶している彗英に気付け薬をかがせ、激痛から遠のいていた彗英に再び苦痛を与え続けた。

それでも、彗英は声を上げなかった。

痛みで涙は止まらなかったが、決して声を上げなかった。

彗英は放置された。

男たちがいなくなって、彗英は大声で泣き叫んだ。

2、

スラリと背の高い、一見、エリート商社マンのように見える男が、横浜中華街の老舗・「館海楼」にやってきたのは、師走に入ってすぐの月曜日だった。

観光客相手の店は定休だったが、「館海楼」は地元の人間御用達の店で、間違って入ってくる旅行客たちは、

その異様な店の雰囲気でたいがいが出て行ってしまう。

明りがほとんどなく、暗い店内はいまどき煙草となにかの香草の匂いで充満している。

椅子や机は、いつ拭いたのかわからないほど脂汚れが染みついて、しかも、客はだれも食事などとっておらず、ただ座って煙草やパイプをふかし、静かに話したり居眠りをしている。

いや、老酒と小さなガラスのコップは、どの卓にも置かれていて、時折酒をすする音が店内の提灯を揺らす。

そんな店には不似合いな、紺色の背広を着こなした男が入ってきて、「老酒」と、酒を注文した。

店の誰もが男を無視していたが、しばらくして一人の老人が入店し、男のいる卓に座ると、店内にいた全員が緊張するのがわかった。

「で、なんの用かな」

老人は、さえない薄茶のポロシャツに麻のジャケットを羽織り、同系色のズボンをはいていた。まったくどこからどう見てもただの老人だが、しかし、店の他の者と明らかに違ったのは、ズボンに皺が一つも無く、ジャケットもシャツも真新しいということだ。

「用があるのは、そちらではありませんか、汪建永さん」

汪建永と言われた老人は、目の前の男が堅気の勤め人を装っているが、普通の勤め人でないことはすぐに見破った。

「あなた、名前は？」

「これは申し遅れました。柊驤（ひいらぎ・じょう）と申します」

「私はあなたが、梅津虎四郎の使いだと言うから、こうして会いに来たんだが。つまり、梅津虎四郎が、私に何の用事があるというのか、と尋ねておるんですよ」

言葉は丁寧だが、眼光の鋭さを見れば、老人もまた、ただ者でないことがわかる。

「昨日、お宅に何か送りつけられて来ませんでしたか？」

柊驤がそこまで言った時はじめて、汪建永の顔にほんのわずかな変化があった。

「どうして、それを？」

「梅津虎四郎はいま、ご存知かもしれませんが、国家保安部を率いております。そこには色々な情報が入ります」

国家保安部は、内閣官房直属の組織で、構成人数も構成員も、だれがどんな役職についているかも明らかにされていない。

「梅津さんが、国家保安部に…。そうですか。しかし、存在するかどうかもよくわからないそんな組織を、信用できると思いますか」

「ええ、承知しています。ただ梅津が申しますには、汪建永ならば、梅津の名を出せば必ず信用してくれるはずだ、と」

汪は、普段は中華雑貨の店を経営し、地元の信用組合

の理事長で、周囲からの信望も厚い。
しかし、ただの事業家ではなかった。
汪はかつて、日本最大のヤクザ組織、関西の大衛会が横浜に進出を企てた時、正面から激突し、激烈な殺戮戦を繰り広げた。
汪は、それまで築いてきた政治家とのつながりも利用し、ついに大衛会と手打ちになった。その仲立ちをしたのが、当時民友党の幹部で参議院議員だった梅津虎四郎であった。
梅津は、大衛会の当時の親分だった東藤と戦友で、共に南方で戦った仲であったが、決して大衛会の側に味方せず、逆にその暴挙をいさめ、汪の言い分をほぼ認めた。出身国で差別をしない梅津の姿勢を、汪は高く評価し、手打ちが成立した。
「そうですね。たしかに、梅津さんの言うことなら信用できます」
「よかった。では、こちらから申し上げましょう。昨日、汪建永氏あてに小包が届いた。中身は、お孫さんの身に着けていた何か、でしょうか。そしていま、汪さんは何者かに脅迫されている」
店の中にいる全員が、息を止めた。
柊驪は、彼らが汪の部下たちで、もしいま汪に触れでもすれば、次の瞬間に自分が殺されるほどの殺気を感じた。しかし、汪は表情一つ変えず、柊驪の問いに答えた。
「なるほど。では、お話ししましょう。小包が私宛に届いたのは昨日の夕方四時半を少し回った頃です。中に入っていたのは、孫娘・汪彗英の、小指です」
ガタッ、と誰かが立ちあがろうとした時、汪はサッ、と右手を上げて制した。
「それからビデオと、手紙も入っていました。私に、町を出ていけ、と」
汪は、少し考えてから、
「お前たち、外に出なさい。店には誰も近づけないように」
そう言つて、店の全員を表に出した。
汪が、圧倒的な人徳と影響力でこの町を支配していることは聞いていたが、いまその一端を目にした思いだった。彼らからは、死んでも汪建永を守る、そういう雰囲気を感じ取った。
金や欲望を操作して人を支配するのは、少し修行を積んで、忍耐力さえあれば誰にでもできる。しかし、「この男のためなら死ねる」と思わせるには、もっと違う何かが必要なのだろうと、柊驪は思った。そしてこの男、汪建永には、それがあるのだと。

3、

「彼らがいると、先走らんとも限りませんからな。ま、あとは調べがついているでしょう」
部下たちが店から出ると、汪は姿勢をゆるめた。どうやら、柊驪を信用したようであった。何度も死線を越えてきた者だけが持つ、瞬時に相手を見分ける能力とでも言おうか。
「お孫さんを誘拐したのは、大衛会傘下、志茂田組系藤枝組の、藤枝紘一ですね」
藤枝は「狂犬」と言われ、笑いながら人を殺すと恐れられていたが、そんな情報は、とっくに汪も知っているであろう。大衛会の先陣として何度も横浜で問題を起こしている男である。
「目的は、汪さんを横浜から追い出して、そこに大衛会が乗り込んでくる。しかし、それだけではなさそうです」
汪は黙って柊驪の話を聞いていた。
「横浜を支配するだけなら、失礼だが汪さん、あなたを狙えばいい。簡単なことだ。それに、いくら大衛会が以前の任侠組織とは違って、手段を選ばない暴力団体とはいえ、実質的には引退した汪さんの、家族を狙う意味がわからない。そんなことをすれば、汪さんが命がけで孫娘を救うか、無理なら大衛会本部を吹き飛ばしかねないことくらい、彼らは知っています」
「そうですか」
そこまでわかっているのなら、と前置きして、汪はここ数週間におきた出来事を語った。
最初は、横浜港に上がった死体。
そう珍しいことでもない。
港町には、よくある話である。
ただ、いつもの水死体と違ったのは、それが遊覧船の機関長という、港を知りつくした人物であったことくらいである。
元周明。華僑。五十八歳。
解剖の結果は、「泥酔による水死」。
単なる事故死と断定された。
港で機関長の死体が上がった三日後、今度は「貴豚亭」という、雑誌によく取り上げられる有名な豚まん専門店で、勤めていた男が死亡した。
元資明。華僑。五十五歳。
死因は出血多量。
といっても、誰かに刺されたわけでも、撃たれたわけでもない。肉をミンチにする機械に両腕が挟まっていた。もちろん、両腕の肉は、見事にミンチになっていた。
厳重に鍵のかけられた作業場であったため、本人の不注意ということで、警察はそれ以上調べなかった。
彼は、水死した機関長の弟だった。
そして、先週。一人の女が、中華街から少し離れた海沿いの、倉庫街に近いうらぶれたラブホテルで、ヤクの打ち過ぎで死んでいた。
「柊さん。遊覧船の機関長をしておった元周明は、酒が

飲めません。どうしてその彼が、『泥酔』状態で海に浮かんでいたのか。弟の元資明は、仕入れ専門で、ミンチにする機械のいじり方も知らなかったでしょう。ホテルでヤクの打ち過ぎで死んでいた女は、胡潔といいます。以前高級コールガールだった彼女が、あんな場末のホテルにいるわけがないし、ヤクも、とうの昔にやめている。これは、私が保証します。彼女はこの十年、一度もヤクには手を出していない」

柊は、胡潔が、妻も息子夫婦も失って以後の汪にとって、事実上の伴侶であったことを知っていた。

「つまり、いずれも謀殺だと」

「ええ。柊さん、あなたが言うように、横浜を支配したいのなら、私を殺せばいい。それを、昔の部下や親しい友人、それに私の家族を狙ってくる意味が、今の今までわからなかった」

相手の目的がわからなかったから、目に入れても痛くない、出来すぎた孫娘のむごい拷問ビデオやバラバラになった小指を見ても、すぐに動こうとはしなかったのだろうと、柊は想像がついた。

「しかし、柊さん。あなたが、つまり国家保安部が動いているということは、ただのヤクザの抗争ではない、ということですな」

「そう、考えております」

二人は、しばらく黙ったままだった。

なぜ、汪建永ではなく、その周辺の人間が狙われたのか。大きな何かが、動こうとしている。

「で、私にどうしろと」

汪は柊に要望を問うた。

「横浜で、われわれの前線基地をつくりたいのです。もちろん、資金も人間も必要ございません。人が出入りしても怪しまれない、見通しの悪い場所がいいのですが」

「見通しの良い場所では？」

「敵からの攻撃を想定するなら、見通しの良い場所がベストですが、われわれは攻撃を受けません。われわれの存在が敵に気付かれた時には、すでにわれわれが敵への攻撃態勢に入っていますから」

汪は少し考えてから、「わかりました」と言って、すぐに船宮町の雑居ビルを指定した。

4、

国家保安部調査二課、通称・「バードマン」。鳥のように遥か上空から敵の動きを把握する。素早く、敵に悟られず目標に近づく。そして、確実に仕留める。そこから「バードマン」と呼ばれるようになった。

調査二課は国家保安部の中でも極秘任務を専門とし、その存在は事実上隠されている。オフィスは神谷町の駅を出て、放送博物館に行く手前のビルに入っていた。表

看板は、「行政管理庁神谷分室」。国家保安部の一部署とは、完全にわからないよう偽装されている。

「行政管理庁神谷分室」は、何をしているのかよくわからないが、あまり怪しくないということで掲げた。だが、「管理」という言葉にはほど遠い面々が揃っていた。

「柊、昼、どうする？」

人懐っこい顔をした男が、メニューの束をもってきた。

樋口洋一。武器や食料、必要とあれば違法な薬品も手に入れる、元商社マン。商社マン、というよりも、「あきんど」のような愛嬌のある男だが、商社時代にアフリカの反政府勢力に武器を渡して、一年以上も政府側の牢獄につながれていた。それでも反政府勢力の拠点を喋らなかった猛者であった。

「あ、ボクは、ロコモコがいいです」

調査二課の男性で最も若い赤城秀夫が、ブランド物のジャケットから財布を出して頼んできた。旧大名家の御曹司だが、射撃の腕はオリンピック代表選手に選ばれたほどである。

「お前なあ、たまには自分で行けよ。なんで先輩のおれに行かせるんだ？」

「だって、樋口さんはジャンケンで負けたじゃないですか」

樋口はチッ、と舌打ちすると、

「ワンビット、どうする？」

樋口の問いかけに、ワンビットと呼ばれた塩瀬次郎は返事をしない。

「おい、こら」

樋口がパソコンの画面の前に週刊誌のポルノ写真を広げると、塩瀬は嫌な顔をして、

「チャーハン」

それだけ言うと、再びパソコンに向かった。

一見、ただの技術者に見えるが、元はＣＩＡにいた。緻密な計算とパソコン技術は誰もが認めるが、一度に一つのことしかできない、何かをやっていると、ほかのことは一切耳にも入らないことから、「ワンビット」と呼ばれている。

「お姉ちゃんは、と。あれ？琴美姉ちゃん、どこ行った？」

「さっきクリップがないって、買いに行きましたよ」

赤城秀夫が古庄琴美の行き先を樋口に教えていると、「戻りました」と、地味な事務服を着た眼鏡の女性が入って来た。古庄琴美である。年齢は三十五歳。眼鏡をとれば美人ではないか、と樋口が言ったことがあるが、古庄琴美は決して眼鏡を外そうとしなかった。警察庁から、「事務処理に長けた、身元の確かな人物」として、調査二課に配属されている。

柊驤は、書類をめくりながら、考えていた。午前中、横浜で汪建永が言った、『国家保安部が動いているとい

うことは、ただのヤクザの抗争ではない、ということですな』という言葉。(汪は、なにかに気付いている)

「おい、昼飯前に、ちょっとやろう」

時間は少ないと見ていた。汪建永から預かった小指の肉片は本物だ。おそらく、汪彗英の指がなくなるまでやるつもりだろう。急がなくては。

柊驤は、窓の無い会議室に全員を集めると、まず汪建永に送りつけられた汪彗英の無残なビデオを流した。誰も、軽口を叩かなくなった。

「この子は、汪彗英、十六歳。横浜聖泉女学院の一年生。父母は五歳の時に交通事故で死亡。祖父の汪建永に養育された」

「え、あの汪建永?」

樋口洋一が意外そうに声を上げた。横浜を仕切る華僑のドンは、公安や警察関係で知らぬものはいない。

「彼女の指を切り落としたのは、大衛会志茂田組傘下藤枝組の、籐枝紘一。目的は、汪建永を横浜から追放すること」

「だったら、汪を殺せば済むんじゃないですか?」

赤城秀夫の問いは、この事件の謎であり、本質でもあった。

「汪を殺さない理由は何か。正直、まだわからん。しかし、このところ組員も減って資金源も細くなってきた大衛会が、出血を覚悟で横浜に乗り込むのは、リスクが高すぎる。裏に、力を貸す誰かがいるとみている」

「柊課長、それじゃあ一体、誰が大衛会の裏に付いているんです?」

柊は、大きな世界地図を広げた。

「これを見てくれ。イギリスで半年前、ギャング同士の抗争があった。ロンドンでは完全に旧体制のユダヤ人ギャングが駆逐され、アジア系の新組織がロンドンを掌握した。だが、組織の全容解明はまったく進んでいない。注目すべきは、イギリスではすでに、MI6が動き始めているということだ」

「対外諜報部門ですか?国内のギャング対策に?」

赤城の疑問に、柊はうなずいた。

「ほかにも、移民政策のゆるいドイツ、フランス、あとはスペインやポルトガル、ギリシャなどでも同様の動きがある」

樋口がそれを補足した。

「じつは、アフリカや中東も、東南アジアからも、暴力組織の衝突が報告されている。世界で一斉に暴力団の抗争が勃発するなんて、どう考えても不自然だ。ただし、大きな抗争が起きていない国が二つある」

「どこです?」

赤城の問いに、柊が答えた。

「アメリカと、中国。理由はわからんが、普通に考えれば、このどちらかの国の組織が、あるいは両国の組織が、

関わっていると見るべきだろう」

赤城はしかし、釈然としない顔をしていた。

「汪建永の一件と、どう関係があるんですか?汪はたしかに、横浜では力が残っているが、所詮は引退した老華僑でしょ?仮に大衛会が、中国かアメリカの組織から資金や武器を調達して日本の闇社会を支配する気なら、さっさと汪だけを殺せば済むじゃないですか。東日本には関東連合や久世会みたいな、汪建永よりもはるかにでかい組織があるじゃないですか。そっちをやった方がいいと思うけどなあ」

柊は、「これは推測だが」、と断って、

「汪を生かしておかねばならない理由が、ある。そこに、この世界的な騒動をおさめるヒントがあるように思えてならん」

柊は、塩瀬のパソコンを操作した。そして、スクリーンに汪彗英の写真を写しだした。友人と写っている、美しくもあどけない笑顔が、その場にいる全員の胸に、使命感を沸き立たせた。

「いまは、なぞ解きは後回しだ。彼女の命を救う。調査二課の総力を挙げる。現在受け持っている仕事は止めろ。この分室はいまからしばらく閉鎖する。本当の相手はおそらく、藤枝のようなチンピラではない。汪彗英を保護し、汪建永の信頼を得る。すべては、そこから始める」

柊は最後に、

「本作戦を、『暁』と命名する」

こうして、「作戦名・暁」が発動された。

つづく

目耕録（その十二）

――伊藤礼著『耕せど耕せど　久我山農場物語』（東海大学出版会、二〇一三年）を読む――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（『世説新語』）。

山本鎭雄

私は苺の露地栽培をして、旬の五、六月のごく短期に収穫した。昨秋、黒マルチに二条に定植し、実がなる頃、支柱を立て、キラキラ光る妨鳥テープを張りめぐらした。その効果があってか、カラスに食害されずに済み、しかも例年になく、豊作だった。苺をもぎ、口に入れてほおばると、濃厚な甘さと水分が口に拡がり、わずかな酸味はかえって甘味を倍加させ、大いに旬の苺の醍醐味を満喫した。苺に牛乳と砂糖を入れ、スプーンで食べるのが定番だが、そうすると、自然に成熟した苺を堪能することが出来ない。

誠に残念なことに、成熟した苺は傷みが早い。ポリ袋に詰め、リュックサックに入れて自宅に持ち帰ると、割

旬の苺

クリスマスシーズンになると、スーパーや八百屋で大粒の真っ赤な見映えの良い苺のパックが大量に陳列されている。この時期、各地の苺農家は増大する需要に応じ、ブランドと収益性の高い苺を「特産品」として市場に出荷している。テレビで女子アナウンサーが「この苺は酸味があって美味しい」と言うのを聞いて、私はただただ唖然とした。此の時期の苺は夏場に苗を冷蔵庫などに入れ（以前は涼しい高原地帯に運んだ）、人工的に低温で過ごさせて休眠させ、秋に温室で栽培する。しかも最近はほぼ通年、スーパーなどで高価な苺を見かけるようになった。

れて傷んだ苺も出てきた。ジュースにすれば良かったが、豊作だったので捨ててしまった。やはり最高に美味しいのは畑でもぎたての苺だった。来年の苺の収穫のために、苗（ランナー、走り蔓）を伸ばして、子株や孫株を育てようとした。そのため、苺畑の回りを除草せず、そのままにしておいたら、梅雨が明け、猛暑のなかで雑草が繁茂して、子株や孫株が見えなくなった。熱中症を恐れながら、大粒の汗を流して一草一草根ごと除草したところ、伸びたランナーも一緒に刈り取ってしまった。

来年は、五月の大型連休に孫に存分に食べさせようと思い、黒マルチを敷き、ダンボールで半円形のトンネル状の骨組を作り、その上にフイルムをかけ、苺の促成栽培を考えていた。その計画は草払い機でランナーを切ったため、破綻してしまった。だが、この九月中旬から十月にかけて苺の苗の植え付ける時期、多少高額だが、ホームセンターでポット苗を購入し、大型連休の初夏の陽を浴びながら、孫とともに超新鮮な苺を堪能したい。

胡瓜とナス

今年は空梅雨で、梅雨が明けると、しばらく猛暑が続いた。そのためか、蔓あり胡瓜は豊作だった。胡瓜の生長は早く、毎日のように頻繁に収穫しないと、巨大化する。週一回の収穫のために警棒大に巨大化した。その胡瓜を椀いでプラスチックの籠に入れた。一旦は二箱を小屋に収納したが、黄色く変色したので、畑に穴を掘り、埋めてしまった。巨大化した胡瓜を椀いで、かぶりついた。水々しかったが、皮は厚く、独特の風味と香味に欠けていた。しかも株と蔓は弱くなり、葉は病害虫に侵され、葉と蔓は早くも枯れ出した。そこで、秋の土這胡瓜の種を蒔いたところ、発芽したのでホットしたが、初秋に蔓あり胡瓜とともに枯れてしまった。

五月の連休後半、地元の農協から買ったナスの苗（千両）三株と、私が住む自宅近くのホームセンターで買った米ナスと小布施のナスの苗各一株を植えた。いずれのナスも天候の影響だろうか、例年と比較して、なかなか生長しなかった。周りの畑のナスも同じように生長の状態は悪く、実は小粒だった。株に負担をかけないように、まだ実が小さいうちに早めに収穫することにした。ナスは淡い紫色の花をつけていたので、肥料不足だろうと判断して、根元の回りに化成肥料を追肥し、つけ根から伸びた葉や脇芽、病害虫に侵された葉や枯れた葉を取り除いた。

胡瓜の最初の収穫は早くも六月下旬だったが、ナスの最初の収穫は七月下旬で、昨年よりも二〇日以上も遅い。スーパーの野菜売り場を覗いたら、例年よりも、胡瓜は安値で、ナスは高値で売られていた。産地でも胡瓜は豊作で、ナスは不作だったのであろうか。胡瓜の生産農家

はさぞや豊作貧乏に直面しているのであろうか。ナスは不作のために高値で出荷出来ても、生産量は多くはない。この異常気象のため、胡瓜やナスの生産農家は苦境に立たされているように思われてならない。

生い茂る雑草たち

今年は天候が安定せず、天気予報は当たらない。私の場合、いわゆる「週末農業」ではないが、今年の夏場ほど、週一回、一泊二日（予定）の通いの畑仕事というハンディキャップを実感したことはない。なぜなら、「晴れた日」でも、前日に大雨が降れば、畑は泥濘（ぬかり）、収穫も草取りも思うように出来ない。とくに、天候が不安定な七月上・中旬の二週間ほど、雑草の手取り、草払い機や耕耘機による除草など出来なかった。そのため、雑草は繁茂し、手も付けられない凄まじい惨状になった。

生物学に造詣が深い昭和天皇は「雑草という植物はない」と言われたそうだが、「雲の上人」には世情の苦労が分からないのかも知れない。稲や野菜、花卉や果樹の栽培に勤しむ耕作者にとって、農作物とは異なる草々を「雑草」を称している。炎天下で雑草を手取りすると、多肉質のスベリヒュの茎は太く、地面におおきく広がり、刈り取ってもなかなか枯れない。大きく伸びた茎が円柱形に斜上しているチカラシバは片手では抜けず、小鎌で掘ってやっと刈れた。抜くのに力（チカラ）がいるから、そのように命名されたのだそうだ。チカラシバの根が、先に植えたネギの根に絡みつき、ネギの根も一緒に抜けたのには驚いた。繁殖力の旺盛なメヒシバの茎は地面を這い、茎の節から根を下ろし、地べたに広く生えている。手に絡みつけ、「えいや」と一気に引き抜くことにした。

帰化植物のヒメジョオン（姫女苑）は白い可憐な花を咲かせる。エノコログサは別名をネコジャラシと言い、細い茎の先に長く太目の花穂を出している。以前は雑草に除草剤を散布したが、現在は禁止農薬とされ、田や畑に散布することは禁じられている。小椅子に座り、一草一草根ごと手取りしたが、それでも完璧ではない。この猛暑で取り残した雑草がまた息を吹き返した。草取りの作業はそれで終わりではない。取り除いた草の処理がある。大汗をかいて適当な個所に穴を掘り、そこに埋めたが、枯れずに根付くかも知れない。真夏の畑では胡瓜、ナス、スイカ、とうもろこしなどの嬉しい収穫とは別に、雑草との厳しい闘いだ。

スイカとメロン

五月中旬、緑と黒の縞模様の小玉と黒皮の中玉の二種類のスイカの種を蒔き、さらにプリンスメロンの苗を植えた。スイカは発芽し、蔓も生長したが、メロンは早くも小さな玉をつけ、その下に麦わらを敷いた。剪定せず、ほったらかしにしておいたら、その玉から独特の甘い香

りが漂うようになった。ところが、未熟の小さな玉はすぐに腐ってしまった。この夏もまたメロンの栽培に失敗した。玉が病気に侵されたのかもしれない。周囲の畑でメロンの栽培を見かけない。メロンはこの畑の土壌に合わないのかも知れない。

二種類のスイカはどんどん蔓を伸ばした。摘果せず、ほったらかしにしていたら、いくつか実をつけた。上空のカラスに発見されないように、当座の処置としてスイカの玉の上に枯葉を置いておいたが、綺模様の小玉スイカ五、六個がカラスに食害された。なかには、まだ中身の白い未熟な小玉スイカも食害された。おそらく野鼠の食餌にされたのであろう。そこで、スイカの周りに支柱を立て、キラキラ光る防鳥テープを張り巡らせた。小椅子に座って空を眺めていると、電線に止まり、飛来したカラスは妨鳥テープに反応したらしく、あわてて飛び去って行った。何故か、黒皮の中玉スイカはカラスの被害を受けないで済んだ。

最初、小玉スイカに独特の甘い香りが漂っていたが、割れて二・三個傷んでいた。その後、猛暑が続き、葉が枯れ出したので、葉と蔓を片付けると、意外にも綺模様の小玉スイカ五、六個と黒皮スイカ三個が転がっていた。剪定、着果、摘果もせず、ほったらかしたわりには、まずまずの出来だった。だが、枯れた葉と茎、生えた雑草を処理するのに大汗をかいた。

実生のミニトマト

大玉トマトは雨に当たると、裂果する。そのため、雨よけの簡単なテントでトマトの上部を覆う。私は時間的に余裕がないし、テントが大風や大雨にあうと、壊れそうなので、大玉トマトの栽培を諦めた。例年、裂果しにくいプラム形のミニトマトを栽培してきた。昨年の種が発芽したと思い、移植して生長したが、良く見たらカナムグラというただの雑草だった。生長した実生のミニトマトに支柱を立て、主枝をビニールの紐で縛り、そのままほったらかしにした。確か、種の袋には一代交配（F1）とマークされていたので、まさかミニトマトが生長するとは考えても見なかった。

トマトは連作障害が出やすい野菜だと言われているが、実生のミニトマトの生育は正常で、枯れることもない。整枝をせず、脇芽も摘み取らないで放任した。黄色い花が咲き、赤い実をつけ、やぶのように生い茂ってしまった。そのため、中心部にぶらさがっている赤い実を取り出すのは、厄介だった。実生のミニトマトがどのように生長するのか、あるいは生長しないのか、実験し、観察し、食味してみたかっただけである。

畑仕事にくたびれ、小休憩してミニトマトを口にすると、あまり甘味はなく、皮は硬めだが、乾いた身体には水分の補給になった。この夏はミニトマトの周りにも雑草が茂った。雑草を除草するついでに、邪魔な茎や葉を

取り除くことにした。だが、頭痛の種は雑草と剪定した葉や茎の処理である。「不耕起」や「無除草」（他に「無肥料」、「無農薬」）を四原則とする自然農法の提唱（福岡正信『わら一本の革命』）を実行すれば、面倒な除草や剪定の作業は無用だが、ミニトマトの密生した茎や葉、生い茂った雑草を面前にして達観できるほどの精神的余裕などさらさら起こらない。だが、アンデス山脈の高原地帯原産のトマトが、高温多湿の夏の日本でその威勢の良さにはただただ感心した。ミニトマトを栽培して七回目になるが、剪定作業が如何に大事か、改めて実感した。

家庭「農場」のエッセー集

とくに購入したい新刊書があったので、大型書店めぐりをした。最後の書店でも売り切れだった。その書店で探索したところ、英文学者の伊藤礼の新刊書『耕せど耕せど―久我山農場物語』（二〇一三年、東海大学出版社）が陳列されていたので、早速購入することにした。彼は作家の「伊藤整」の生涯や恋文に関する著書があるので、文芸評論家かと思ったが、伊藤整の次男だった。そして伊藤整が翻訳・出版し、猥褻文書として裁判で争われたロレンスの『チャタレー夫人の恋人』を、のちに伊藤礼もまた翻訳している。さらに鉄砲打ちの体験エッセー集を『狸ビール』（講談社）と題して出版し、講談社エッセー賞を受賞している。

本号でとりあげる『耕せど耕せど』は傘寿に近い伊藤礼翁が自宅の食堂の窓の外の庭、つまり東側三坪半、中側三坪、西側五坪半、あわせて十二坪ほどの庭を「農場」と称して耕作した。その記録とエッセーを「閑人閑話」と題して月刊誌『望星』に二〇一一年六月から一年六か月間、連載し、それらをまとめて改題し、出版した。伊藤翁は自転車に乗り、杉並、練馬、武蔵野などの東京の西部方面にある農家の畑を検分し、自分の「農場」と称する家庭菜園を耕転機で耕し、種を蒔き、苗を植えて収穫した。

晩年の深沢七郎は「関東平野のど真ん中」（埼玉県）の農村で自給用に野菜を多品種少量生産し、「コマギレ栽培」と皮肉られたが、それを自ら認めた。深沢はエルビス・プレスリーが歌った「ラブ・ミー・テンダー」（やさしく愛して）にヒントを得て、自ら購入した畑地三反五畝を「ラブミー農場」と称した。伊藤翁はそれにヒントを得たのであろうか、十二坪ほどの家庭菜園を「農場」と称したのであろう。あまりにも頑是無い。ただ、日本で最小の「農場」かも知れない。

私は本書を読み、初めて知ったことだが、折りたたみ式のエンジンカルチベーター（フレーム付きの動力耕作機）という多機能の農機具である。スコップや鍬で畑を耕すと、足腰が耐えられなくなった伊藤翁は、この農機具をホームセンターで見て、早速購入した。稚気愛すべきことだが、それを使用する以前、翁はこの農機具について知人に盛んに吹聴した。私は耕作用に二馬力の簡単な動力耕耘機を操作してきた。私も鍬で土を掘り返すと、息が上がり、足腰に痛みを覚える。ところが、枯草や雑草が耕耘機のロータリー（回転機）の爪に絡みつき、一時運転を停止し、鋏で切って取り除いてきた。この作業は意外に面倒だ。カルチベーターなら除草用のアタッチメント（機械類の附属品）を取付けて除草すれば、作業はより簡単になるだろう。

ただ、このカルチベーターの動力源はガソリンとガソリンオイルの混合ガソリンだそうだが、私が使用する草払い機の動力源がこの種の混合ガソリンだった。使用の度に金属製の缶から混合ガソリンを注入する。なぜなら、使用後は残った混合ガソリンを石油ストーブ用のポンプでその缶に注入しなければならないからである。しかもエンジンを始動するには、伊藤翁が克明にその手順を書いているように、面倒な準備作業が必要だ。私の場合、草払い機のリコイルスターターの紐を引っ張っても、なかなか始動しない。しかも鋼鉄製の刃先が急速に回転するので、誤って足や手に触れると、大怪我をする。危険極まりない農機具だ。だから、畑に雑草が茂っていても、草払い機を運転するにはいつも躊躇し、小椅子に座り小鎌を使って、手刈りをすることにしている。

奇妙奇特な農場

伊藤翁のわずか十二坪の「農場」では野菜の多品種少量生産だが、ほぼ年間の自給を賄っている。ちなみに、翁は朝起きると、つっかけを履き、パジャマ姿で食堂の窓越しの「農場」に出て、朝食のサラダ用にレタス、チンゲンサイなどの葉っぱを収穫する。パン、ベーコンと玉子焼きに超新鮮野菜を添えて大いに堪能する。周囲をアパートに囲まれた翁の「農場」は、プライベートな空間なので、パジャマ姿を見られても、特別に奇異ではなかろう。

朝、私は畑に行こうと農道を歩いていると、ねむたそうにふらふらと歩いているパジャマ姿の村人に出会った。彼は村ではアルコール中毒と噂されていた。私は「やっぱり、そうだったのか」と確信した。のちに聞いた噂話では、彼は長年「うつ病」で薬を服用しているという。彼は夜勤の職場で仮眠前に同僚とすき焼、寄せ鍋などを食べて飲酒し、それがアルコール中毒につながったのであろうか。あるいは「うつ」で意気消沈した気分を解消するために、飲酒し、それが習慣性になったのであろうか。パジャマ姿とはいえ、住宅地の「農場」で朝食用に葉っぱを収穫する伊藤翁と、山村の農道でふらふらと歩く村人とは実に対称的である。

翁が熱心に栽培したのが、正月のおせち料理に欠かせない球茎の慈姑（くわい）である。慈姑と言えば、「くわいが芽出

した。花咲きゃ、チョン切るぞ」という童謡を思い出す。「芽が出る」「めでたい」として和風おせち料理に欠かせない。私はおせち料理の慈姑は苦くて、美味いと思ったことは一度もない。だが、食通の翁は慈姑こそ上品な食べ物で、「そこはかとない風味、食感、食後感。天地創造の神は人間にクワイを与えてくれたのだ」と絶賛している。慈姑の耕作者は水田か泥田で栽培し、おせち料理の一品として年末に一斉に出荷する。翁は知人を通して慈姑の種イモを入手し、プラスチックの箱二つにそれぞれ七個の種イモを植えた。さらにポリエチレン製の魚箱を貰い、三個の種イモを植えた。十一月上旬、翁は難儀して大玉五十個と小玉五十個の収穫に成功した。

それに自信をつけた翁は、さらに大きな容器四個を購入し、本格的に慈姑を栽培した。生長した蔓を剪定し、さらに水中にはびこる根をスコップでぐるぐると断ち切った。ところが、慈姑の栽培容器の中を視いたら、容器の一つに大量にボウフラが湧いていた。そこで、思案の結果、その容器にメダカを放ち、ボウフラを退治することにした。ボウフラは激減し、ねらいは的中した。容器のボウフラを絶滅させたメダカを網で掬い、別のプラスチックの水槽に放った。そこで分かったことは、最初に放った三十匹に足りないメダカが百匹ぐらいに繁殖していたのである。

「伊藤式農法」の模索

伊藤翁は新聞紙大の一枚に『戦時農場の設計』と題され、副題に「一年中野菜を絶やさず作る計画書」という印刷物を亡父の作家・伊藤整の書斎で発見した。それはアジア太平洋戦争末期の食料難の時期に東京の各家庭の庭先で自給用野菜の栽培を奨励するために作成された。翁は七十年前の十坪の家庭菜園の計画表をつぶさに検討した結果、「これぐらい古い計画書に頼る農耕者は東京都内に十人とはいないだろうと考えるとうれしくなる。……七十年前に立てられた計画を実験するなどというのはロマンチックではないか」と、大いにご満悦である。この計画表に基づいて、多品種少量生産で二十二種類の野菜の種の蒔き時や育て方を「伊藤式農法」と命名したいと言う。

翁が自ら実行した「作付け図」と『戦時農場の設計』を比較した結果、翁自身の播種の日時が三週間ぐらい遅れていた。そのため、キャベツもダイコンも小さく、さらにオクラもなりが遅く、実入りも悪く、栽培結果がおしなべて芳しくないと判断した。そこで、翁は『戦時農場の設計』に基づき、種蒔きの時期を順守したら、よりよい「農場」になるだろうと自らに誓った。私は「伊藤式農法」は総じて失敗するだろうと予想している。なぜなら、七十年前と比較すれば、今日ははるかに温暖化が進み、種蒔きの時期を早めたり、遅らせたりして、調整

する必要があるからだ。現在、出版されている家庭菜園のテキストには、必ず種蒔き、苗の植え付け、収穫の栽培歴が掲載されている。それを順守した方がはるかに賢明だか、それではエッセーの「終章」にならない。

住宅の庭先の家庭菜園の場合、周囲を住宅に囲まれているため、日当たりは良くないし、風通しも良くない。そうした環境で、野菜の出来具合を八百屋の店頭に陳列されているキャベツ、農家の畑のオクラの生り具合と比較して、「芳しくない」と評価しても、ほとんど意味がない。農家は野菜を商品として出荷するために、生産しているのであって、家庭菜園のように自給用の栽培ではない。見栄えの良い野菜が商品として厳選され、八百屋の店頭に陳列されている。ある特定の野菜が不作であれば、直ちに刈り採ってしまう。しかも、キャベツなどが豊作であっても、市場価格と比較して、ダンボール代や運送費などの必要経費がかかり、明らかに採算割れとなれば、その野菜を農用トラクターで踏み潰し、土作りをして次の野菜の作付けに着手する。

私はスーパーに行くと、必ず野菜売り場を見て回る。野菜を買うためではなく、見映えが良い野菜の価格とサイズを見て回る。ある野菜が、例年よりも価格が高いか安いか判断し、この年は不作か、あるいは農作かと推測する。胡瓜やオクラその他の野菜のサイズは一定していて、箱詰めされるか、ケースに入れて陳列されている。おそらく生産農家は野菜のサイズを一定にするために細心の注意を払って収穫する。一定のサイズを超えた野菜は廃棄するか、自家消費する。そのために、少品種大量生産し、サイズを一定にして大量に出荷しなければ、例えば、農協などの規制により流通過程にのらない。ところが、自給用の家庭菜園ならば、野菜のサイズなど、それほど気にすることはない。胡瓜などは毎日もがないと、直ぐに図太い胡瓜に生長する。独特の風味にかけているが、畑でもいで、食塩をかけてかぶりつけば、結構水分の補給になる。

終わりに

伊藤礼は三十年ちかく鉄砲打ちを趣味とした。その行動と観察の記録を『狸ビール』（一九九一年）と題して出版し、さらに東京の西部近辺を自転車で巡察したエッセー集を『こぐこぐ自転車』、『自転車ぎこぎこ』（いずれも未読）と題して出版した。おそらく綿密な観察と克明な記録は父親譲りであろうか。本号で検討した翁の本書『耕せど耕せど』は十年ほど試みた家庭菜園の実践と観察の記録だが、あまりにも当たり前のことを書いたら、読者はその中身を読んでくれないと自覚したのであろうか。お節介なことだが、自宅の近辺を自転車に乗って、生産農家の本格的な畑を検分するよりも、一人あたり一坪半に満たない市民農園の様子を検分した方が、十二坪

ほどの翁の「農場」の野菜作りに大いに参考になるだろう。

武蔵野台地の畑は火山灰の関東ローム層に覆われ、「赤土」の上に黒土が堆積されている。そのためか、大変水はけが良い。私の自宅の近くに江戸期に千川という排水路が開削されている。晴天が続くと、川が枯れ、水がほとんど見かけない。雨が降ると、水がチョチョロと流れる。雨が降り続けたり、大雨が降ると、その後数日は水で溢れる。この自然現象は武蔵野台地が水はけの良い土地だという証拠になるだろう。

野菜作りのガイドブックには、鍬か農機具で畝の両サイドに深目に溝を掘り、高畝にすると書かれている。ところが、水はけの良い武蔵野台地の畑地では、高畝にする必要はない。一般的に、地域には地域の、畑には畑の土壌の特性、あるいは微妙な差異がある。私が山梨で耕す畑やその周囲は、かつて水田として構造改善され、しばらく米作りが行われた。その後、黒土を入れて畑地にした。畑の下層には礫層があって、保水力があるが、水はけが悪い。そのため、畝の両サイドを鍬か農機具で深く堀り返す必要がある。それだけではなく、長根のごぼうの場合、ごぼうの先端部は小さな小石層に根をはり、スコップで土を掘り、先端部の根を引っこ抜くのに大いに苦労した。それ以後、ごぼう作りは諦めて止めた。

誠に残念なことに、伊藤翁は武蔵野台地の一角で家庭園芸に勤しみ、それをエッセー集として出版した。そこでは土壌についての記述が見られなかったので、その点についてあえて記述することにした。その他、気候は所与の前提条件だが、野菜作りは天候や天気という自然条件の影響をもろに受け、その結果が豊作か、不作か、あるいは平年並みかとして如実に判明する。自然条件に左右される野菜作りは、それに左右されないエッセーそのものの執筆とは決定的に異なる。ただ、エッセーは体験や見聞、思索や感想などを筆にまかせて記することだが、読む人に読まれるような文章を書かなければ、処置なしだということを、あらためて伊藤翁の『耕せど耕せど』というエッセー集から学んだ。読ませる文章を書くことは、私には至難の業だと自覚させられた。そのことが本書を閲読した大切な成果だった。

シルバー諸君の力（農業分野編②）

～趣味は自分の為のみにあらず

古屋富雄

「あなたは、胃がんです。」

これが医師から告げられた受診結果でした。

この医師からの一言が生涯を傾ける趣味となる、山野草づくりのきっかけになったそうです。今回は、趣味で始めた山野草をリーズナブルで販売し、地域の活性化の一翼を担っている瀬戸繁氏（66歳）を紹介します。

瀬戸氏は、地元の大手企業に勤務していた45歳の時、アメリカへの出張を命じられました。アメリカには、日本のような社会保険制度がないため、医療費が高くつくとの事で、出張前に健康診断を受ける次第となりました。これまで病気一つした事がなく健康には自信があり、気楽な気持ちで診断に臨みましたが、結果は、冒頭に述べたよう、胃がんと診断されアメリカへ行くどころか、緊急手術を受け、胃の3分の2を取る大手術でした。

幸いにも、順調に回復し、数か月後には、職場復帰が出来ました。

瀬戸氏の心には、この経験以来、**「命拾いをしたから、世の中に何か還元したい。」**と言う気持ちがフツフツと生まれてきました。

山野草づくりが趣味となった経緯については、約30年前に、奥様が庭に植えていたものを見て、自分でも育ててみようと始めたとの事でした。

元々、松やサツキなどの小品盆栽づくりの経験を持っていたため、山野草づくりについてはスムーズに入ることができ、仕上がった山野草は趣味の範囲を超えた玄人はだし的なものばかりです。

平成10年9月は、四季折々に咲く花による地域おこし

「あしがら花紀行」の第一回の「酔芙蓉まつり」への参加が、私と瀬戸氏との最初の出会いになります。

当時、私は、市役所の農政を担当しており、四季折々に咲く花で地域を彩り、都市住民を呼び入れる農業振興策として、「あしがら花紀行」の提案とその実践を行っていました。

最初に仕掛けをしたのは、平成7年11月、市の北部に位置する「千津島の※ほ場整備地区」を対象にしました。

※ほ場整備とは、農作業の効率が図れるよう田畑や農道などを整備する事業のこと

同地区の水田は、二宮金次郎が土手に松を植えた「酒匂川」から水を引き入れ稲を栽培しています。

この酒の匂いのする川「酒匂川」の水に酔って咲く花として物語性がある「酔芙蓉」をメインの花（花木）とする構想を抱いていました。

「酔芙蓉」の名前の由来は、朝、咲いた白い花が、昼には、薄いピンク、夕には、濃いピンクと色を変えるため、まるで人がお酒を飲んで顔の色が変わる様を例え、名づけられたそうです。

そして、ほ場整備で創出された農道約1kmに酔芙蓉を1000本植え、**「日本一の酔芙蓉農道」**を造ることを千津島地区ほ場整備実行委員会に提案し、2年をかけて完成させました。

酔芙蓉の咲く、平成10年9月に第一回の「酔芙蓉まつり」の開催を計画し、都市住民に喜んでもらう地域ならではの農産物の一つとして瀬戸氏の山野草の出店依頼が実行委員会から出されることになりました。

瀬戸氏が売り出す山野草の姿見の素晴らしさに感心させられると同時に、その販売価格のリーズナブルさに驚嘆しました。

都市住民のために出店依頼をしたのですが、ほとんどの山野草は地元の人々が買い求めてしまいました。しかし、山野草のニーズや酔芙蓉の花の力に確かな手ごたえを感じつつ、3日間の祭りは成功裏に終了しました。

その後、瀬戸氏とは、市内各地で開催されることになる「あしがら花紀行」の花まつりに常時、出店してもらう事になり、15年来の付き合いになっています。

瀬戸氏が何故、山野草をリーズナブルな価格で販売するのか、その真髄をお話しします。

瀬戸氏の趣味は山野草づくりと小品盆栽づくりです。

瀬戸氏いわく、「趣味を持つことは、人生を豊かにする時間が持てることであり、趣味に没頭することで精神的な満足度を得ることが出来、日々健康に暮らせる」さらに、「趣味を人のために活かせば、社会への貢献が出来る」とも言っています。

また、リーズナブルの価格設定には、瀬戸氏のアイデアと培った人脈が源泉にあります。

山野草や小品盆栽の入手については、例えば、90歳の方が高齢でこれ以上管理ができない、しかし、枯らしてしまうには忍び難いなど愛着がある品々をリーズナブルに買い入れ、再生して、第三者には、その買い入れ原価で販売しています。（グリーンリサイクルの一つです）

鉢などの容器についても、廃棄物処理業者の方に依頼し、再利用できるものはストックしてもらいコストをかけない手法で入手をしています。（リユースの一つです）

このように、アイデアや人脈を駆使し、原価で販売する。まったくの儲けなしのボランティア活動を15年間続け、今後もやり続けることこそ、趣味を活かした瀬戸繁流の社会貢献、世の中への恩返しと考えます。

「人は皆、生きとし生けるしるしあり、命は一つ、心は永久に」大学時代の教授が残した言葉が、今、瀬戸氏の生きざまとオーバーラップします。

「あなたは、胃がんです。」この医師の一言が**「趣味は自分の為のみにあらず」**を形あるものにした瀬戸氏に心からエールを送ります。

心の花の咲く限り、人が人を思いやる優しい心は、永久に続くものですね。

（司馬雑感　三十三）

「空海の風景」を歩く

山田嘉久

一　「坂の上の雲」のアンチテーゼ

司馬遼太郎は代表作となる「坂の上の雲」の執筆に四年三か月を要した。（昭和四十三年四月二十二日―四十七年八月四日サンケイ新聞連載）。

連載終了時に彼は満四十九歳を迎えている。

彼によるとその前の準備期間が五年ほどあるから彼の四十歳代は殆ど、この代表作に費やされたといっていい。

「あとがき」によれば彼はこの十年間、なるべく人に会わない生活を心掛けたと云う。人に会うことが好きで、周囲の人から「人たらしの司馬遼太郎」といわれていただけに、彼自身、非常な決意が必要であったであろう。

この作品は執筆を終えた昭和四十七年には早くもベストセラーとなるが、興味深いのはこの年のベストセラーに田中角栄著「日本列島改造論」も名を連ねていることである。

両者のその後の違い―後者は著者自身の没落と共に、全く忘れ去られたのに対して、前者は著者の死後も「永遠の歴史小説」として輝きを増していることであろう。

更に驚いたことは、司馬は執筆に疲れた時には空海の事を考えていたという。我ら凡人が疲れた時に空海のことを考えたら、なお疲れが倍加してしまうだろうが、彼は違っていたようだ。

そして「坂の上の雲」の執筆が終わると、すぐに「中央公論」（昭和四十八年一月号）に「空海の風景」を書き出す。それの終わったのが五十年九月号。翌五十一年にはこの年の「日本芸術院賞」（恩賜賞）を受賞して、彼のもう一つの代表作ともなった。

このように「空海の風景」誕生の経緯を見ると、考えようによると「空海の風景」は「坂の上の雲」のアンチテーゼと考えることもできる。

司馬は「坂の上の雲」執筆に当たって四十歳代の十年間、膨大に残る日露戦争史と格闘していた。特に日本海海戦については、ある時点において彼我の軍艦のロケーションがどうなっていたか、一隻、一隻について（たとえ戦況に影響を与えない小艦であっても）克明に調べ尽くした。完璧に史実に忠実な歴史小説を心掛けたためだった。そのためには眠れない夜もあったことを述懐している。

一方、空海については資料そのものが少ない。

「坂の上の雲」の資料作りに疲れたときに、この千二百年前の人物のことを考えることは、彼にとっては一種の贅沢であったであろう。時には「坂の上の雲」と違って、空想に遊ぶことも許された。

「坂の上の雲」執筆に当たって、史実の収集と解析に脳漿をしぼりつくした司馬が、その鬱懐を晴らそうとして、奔放の世界に遊んだのが「空海の風景」であったといえるであろう。

二　「空海の世界」でなく「空海の風景」

〈何分にも遠い過去の人であり、あたりまえのことだが、私はかれを見たことがない。その人物を見たこともないはるかな後世の人間が、あたかも見たようにして書くなどはできそうもないし、結局は、空海が生存した時代の事情、その身辺、その思想などといったものに外光を当ててその起伏を浮かびあがらせ、筆者自身のための風景にしてゆくにつれてあるいは空海という実体に偶会できはしないかと期待した。〉（あとがき）

つまり「過去の人（空海）」を書くにあたって、現代からの「外光」を当てて「筆者自身のための風景」にして行こうとしている。

司馬の得意とした通常の歴史物語的人物評伝では決してない。このあたりが「空海の世界」ではなく、あくまで「空海の風景」と題した由縁であろう。

〈いまさらあらためていうようだが、この稿は小説である。―こうした一文を入れなければならないほど、この小説は小説らしくない。〉

また彼は宗教人空海を書くにあたって、なるべく宗教用語は避けたと云う。それでも宗教知識の乏しい私などには本書はやや難解な司馬作品の一つである。

司馬の説く顕教と密教の違いもよく理解できない。また同じ密教にしても空海以前に存在していた雑密（ぞうみつ）を空海はいかにして体系化したか。また共に唐から持ち帰った最澄の天台密教（台密）と空海の真言密教（真密）の違いはと問われれば私は答える能力も知識もない。

司馬自身も〈密教はわかりづらい〉と云っている。

そのため私ごときが空海そのものを考えることは到底無理なので、せめて「「空海の風景」の風景」として空

海ゆかりの地を巡る紀行文とした。

三　讃岐にて

空海（七七四―八三五）の生誕地は讃岐（香川県）の善通寺といわれている。その善通寺には高さ三十メートルに及ぶ大楠が二本ある。樹齢千二百年以上といわれているので、多分、空海も子供の時分にこの木を見て育ったのであろう。

今では善通寺（七十五番札所）の名所となっている。同道のガイドも「これは空海が子供の頃、登って遊んだ樟です」と説明していた。空海が生まれた時に使われたという井戸や池もあった。

なお、司馬自身も子供のころ、この近くの仁尾（現三豊市）の海に遊びに来て、よく善通寺の亀や鳩と遊んだと云う。

善通寺付近には池が多いが、この事は香川県全体にも云えそうである。

一説によると県全体で一万六千もあるという。日本最小面積の県にして日本最多の溜池を有する讃岐。

〈讃岐には池が多い。〉と司馬も書いている。また、これらの池は〈すでに空海の生まれたころにはこんにちの池のほんどが存在した〉のが実情のようだが、地元の人に言わせれば、これらの溜池は殆どが空海が掘ったと云うことになっている。卑近な「空海信仰」のおかげである。

ただ、その最大の池である「満濃池」はたしかに正真正銘に空海によって平安の時代に修築された。弘仁十二年（八二一）、空海四十八歳の時に満濃池の修築工事の別当となり、およそ三カ月で完成させている。周囲二十一キロに及ぶ池というより湖と呼ぶにふさわしい讃岐平野最大の貯水池となっている。

しかし私にとっては善通寺は空海の大楠や満濃池よりも乃木将軍の方が印象深い。司馬の中編「殉死」の影響であろう。

乃木希典中将は明治三十一年（一八九八）、善通寺町に新設されたばかりの第十一師団の師団長となり、近くの金倉寺に単身赴任していた。この当時、乃木は寺の一室で軍服のまま寝る生活（戦時の暮らし）を続けていた。そこに大晦日の晩、雪の中、静子夫人が突然訪ねて来る。

公私混同も甚だしいと乃木は会おうともしない。止むなく夫人は付近の旅館に引き返すが、副官たちの説得により、ようやく元旦夕になって会ったが、要件は折角、陸軍士官学校に入学しながら軍人生活に馴染まない長男に対する相談だった。

司馬は書く。〈事態の急よりもあくまでも形式の美しさのほうを希典は、その妻に求めた。〉（殉死）

この逸話は乃木が高名になってから、土地の人々によって話題になり、今金倉寺の境内の一隅には「乃木将軍妻返しの松」として碑が建っている。

四　奈良にて

〈讃岐の一地方で一個の知識人が成立してゆくのは容易なことではなかった。しかし空海の場合は、稀有といってもいいが、その条件があった。〉

と書いているように空海はエリート中のエリートたるべき雰囲気のなかで育った。

時の天皇（聖武）に重用され、東大寺の建設に預かった佐伯今毛人（七一九―七九〇）は空海の佐伯氏とは別系統だが、親戚同然の深い付き合いがあった。

また母方の叔父に阿刀大足（生没年不詳）がいる。桓武天皇の息子の伊予親王の家庭教師となった人物である。

このような環境で育った空海は、両親から「貴物」として育てられた神童であった。「この児をしてぜひ中央の高官たらしめねば」という氏族こぞっての願いから、十五歳で讃岐を離れ上京する。

そして叔父の大足家に住み込み、儒教や漢籍などを学んだ三年後に大学の明経科に入学した。（なお、空海が上京する前に平城京から長岡京に遷都しているので、空海が住んだのは長岡京だが、大学はまだ平城京に残っていたと司馬は推察している。）

大学の明経科といえば高級官僚の養成所であり、空海の周囲もそれを期待していたことになる。空海はそこで儒学などを学ぶわけだが、次第に「儒教は世俗の作法にすぎない」との考えに傾き、仏教への関心が深まっていった。

そして一年余で大学をあっさりと止めてしまう。あれだけ讃岐佐伯氏一族の期待を一身に受けていた身をすべて裏切るわけである。

このとき空海がなにを思っていたか、またそれ以降入唐までの七年間は不明だが、彼が二十四歳の時に著した「三教指帰」が参考になると司馬は云う。

この本は空海が十八歳から書き出した戯曲構成の日本最初の思想小説だが、この本で空海は儒教、仏教、道教の三教の優劣を論じ、そのうち仏教を最も優れた教えであるとした。

そして大学中退後、勝手に頭を丸めて「私度僧」に身を落とし各地を放浪する。その間、南都諸宗や密教を学んだと思われる。

なお奈良市内には空海に関係の深い大安寺がある。

大安寺は南都七大寺の一つで、当時は東大寺、興福寺と並ぶ規模を誇っていた。七重の東塔、西塔もあったという。空海が出入りした頃はエキゾチックな雰囲気に満ちていた。

唐の都長安に留学した僧もいれば仏教の本場インドの僧もいた。

〈大安寺の境内に足を踏み入れるじたいが、きらびやかな象徴にみちたインド的世界に入り込むことであったに

違いない。〉

空海は此処で主導的な立場にあった僧、勤操に目を掛けられる。空海は奈良仏教を極め、さらに密教の世界に進む。そして密教の経典である「大日経」を発見するのである。

五　室戸岬にて

「阿国の大瀧の嶽に登り攀じ、土州の室戸の崎に勤念す。谷響きを惜しまず、明星来影す。」（三教指帰）

阿波の大瀧岳は現在の阿南市にある太龍寺山のことである。第二十一番札所の太龍寺がある。西暦七九三年、十九才の空海が悟りを開いた場所で、現在、崖の先端に空海像が立つている

此処で修行中の空海に奇跡が訪れる。

ある朝、天にあった明星（金星）がみるみる洞窟に近づき、洞窟に飛び込んだ。

〈やがてすさまじい衝撃とともに空海の口中に入ってしまった〉

〈この一大衝撃とともに空海の儒教的事実主義はこなごなにくだかれ〉たのである。

のちに、司馬は「宇宙からの帰還」の著者である立花隆と対談した時に、宇宙飛行士が宇宙体験中に「神」を感じた事実は丁度、空海の金星体験と似ていると発言している。（対談「宇宙飛行士と空海」）

また、司馬は、室戸岬における空海の神秘的体験の背景にあった密教の「呪術性」「超能力性」を「孔雀明王」を例に引いて考えている。

〈孔雀は悪食である。体も大きく、そのため多量の蛋白質をとる。毒蛇、毒蜘蛛なども容赦なく食ってしまう。（中略）人間は毒にあたれば死ぬ。しかしながら孔雀は悪食しても死なず、解毒し、咀嚼する。〉

司馬は精神の毒であるブッダ（釈迦）のいう煩悩も孔雀の解毒能力により消滅させることができると解釈した。

この場合の孔雀は孔雀そのものではなく、あくまで形而上された孔雀明王を指す。

このことを書くために司馬はわざわざ動物園にインド孔雀を見に行っている。足で取材するという好奇心旺盛な新聞記者的な発想が司馬文学の骨格になっていることがよくわかる。

現在でも、空海の修行の洞窟「御厨人窟」には観光客も多いが、実際に空海に倣って修行を志す若い僧侶もいるという。

六　渡唐（福州）

延暦二十三年（八〇四）、空海は藤原葛野麻呂を大使とする遣唐使の一行に加わったが、この時代、遣唐使船に乗ることは命懸けだった。

遣唐使は六三〇年に始まり、空海の時が十六回目だったが、当時の日本の造船技術も航海技術も幼稚そのもので、嵐がくればもうお手上げだった。

それにしても今まで室戸岬や山野を十二年間も跋渉していた放浪の私度僧がなぜ渡唐を思いたったのだろうか。

司馬はその動機を空海がある経典を発見したからだと説く。「大日経」と呼ばれる密教の根本経典だった。「大日経」は従来の仏教とは全く異質の新鮮さを持っていた。それまでの経典は実在するブッダ（釈迦）が説法する形式をとるのに対して、「大日経」は歴史上の人物ではない大日如来が直接、悟りの知恵を説く。

インドで七世紀末に成立した大日経はすぐに日本にも伝わってきたが、司馬によれば空海がその重要性に気がつくまで、誰もそれを理解せず諸寺の経蔵に埋没していたという。

強烈な入唐への「動機」を持った空海ではあったが、まず解決すべき難問を抱えていた。一つは遣唐使としての資格―官僧となり更に選抜されねばならない。そのため彼は直前に東大寺で出家得度を受けている。選抜については叔父の阿刀大足（皇太子の個人教授）の力が大きかった。

難問のもう一つは短期間に留学資金を集めることだった。この難問も彼の一族である佐伯一族から捻出されたほかに山岳修行中に深く関わった山の人々からの援助を挙げる学者も多い。

司馬も「街道をゆく」（白河会津のみち）で〈かれ（空海）が袋にずっしりと砂金を詰めて唐に渡った〉ことを指摘している。

渡唐船団には空海の永遠のライバルである最澄も乗っていた。

空海よりは七歳上。空海が「毛人」（蝦夷と呼ばれた東国人捕虜）の系統を引いていたとするならば、最澄は「渡来人」（中国、朝鮮からの移住人）の家系だった。しかし彼は空海と違って一直線に出家し、やがて桓武天皇によって最高の待遇を受ける。桓武天皇もまた、最澄と同じ「渡来人」の家系に属する天皇であった。（このことは現天皇も言明している。）

したがって同じ僧であっても、空海と最澄の待遇には雲泥の差があった。

船団は四隻で構成され、空海は第一船に、最澄は第二船に乗船していたが、大嵐でお互いの船は見えなくなった。もっともこの二隻はかろうじて中国本土に漂着したからまだよかったが、第三船は海没してしまったし、第四船は行方不明になった。

空海の乗った第一船は三十余日の漂流の末、現在の福建省赤岸村に着いた。今、この地には「空海漂着地」と刻まれた碑が建っているという。

しかしすぐには上陸できなかった。約二カ月もかけて福州に廻船させられたものの、船から追い出され、湿砂の上に座らされる羽目になる。

正使の藤原葛野麻呂の書いた漢文の手紙も黙殺された。万策尽きた葛野麻呂は空海に懇請する。

〈空海というのは、奥ゆかしいのか、ずるいのか。(略)葛野麻呂は「どうしようもない。大徳(あなた)は文章の達人だから、私にかわって書いてほしい〉

空海はたちどころに地方長官宛の手紙を書いた。一読した長官は驚き、「長安でも、これだけの詩人はいまい」と舌を巻いたと云う。

その後は手のひらを返したような待遇をうけ、いよいよ目的地の長安に向かうのである。

七　長安へ

ようやく延暦二十三年(八〇四)十二月下旬、空海は念願の西安に着いた。

日本を立ってから半年近くもかかっていた。当時の西安は人口百万以上の国際都市だった。市内にはラクダを連れたキャラバン(商隊)もいたし、露店で踊るペルシャ女もいた。

インド僧からサンクリッド語(古代インド語)を習得した空海は、五か月後に密教の第一人者恵果(七四六―八〇六)を青龍寺に訪ねた。

「我、先ヨリ汝ノ来ルヲ待ツヤ久シ。今日相見ル、大好シ、大好シ」

恵果は即座に密教のすべてを空海に譲ることを決意する。三か月後、すべての密教知識を授けられた空海は「遍照金剛」という号を与えられ、真言密教第八世の法王となったのである。それを待っていたかのように師の恵果は没する。

空海が長安で学んだ密教には二つの体系がある。悟りとはなにかを説く「大日経」系(胎蔵界)、それを実際に会得する方法を説く「金剛頂経」系(金剛界)であった。この二つに密教を統合し完成したのが真言密教第七世恵果であった。

恵果の死後、空海は弟子を代表して石碑に恵果を讃える文を記した。

司馬も西安を訪れている。

「空海の風景」を書き終えた昭和五〇年、「日本作家代表団」(座長井上靖氏)の一員として、西安をはじめ北京、延安、洛陽、上海などを巡った。その時の紀行文が「西安から北京へ」であり、司馬の代表的な紀行文となっている。

その旅行で、西安では唐の面影を残す大雁塔(慈恩寺)や小雁塔(薦福寺)にも登っている。高い所に登ることは苦手な司馬にとっては珍しいことだが、

〈空海が長安を去って千年以上の歳月が経ってしまっているのだというこの当然なことを、しきりに私に思わせた〉

と書いている。

なお、私がこの地を訪ねたのは、当時の小渕首相が初めて西安を訪ねた平成十一年七月だった。私はその時、大雁塔や小雁塔のほか長安城跡、碑林などを回った。大雁塔を登るときには、空海のことよりも、フーフーと云いながら登った司馬のことをしきりに思った。

空海は日本では有数の能筆家として知られているが、長安でも高く評価されている。「五筆和尚」と称された。時の皇帝の求めに応じて五本の筆を両手、両足さらに口にくわえ一気に書き上げたという逸話が残っている。

八　帰国(大宰府)

大同元年(八〇六)秋、空海は大宰府に帰着する。三十三歳だった。

当初の渡唐期間は二十年の予定だったが、実際は二年余だった。このことは空海が渡唐前から密教に関する予備知識を十分に積んでいた結果だったと司馬が推察している。

彼は膨大な密教の典籍、仏像、曼陀羅、法具等の文物をもたらしたといわれる。帰国前後の日本国内ではそれ以前、最澄が唐から持ち帰った密教に関心が集まってい

た。最澄の最大の庇護者である桓武天皇が密教に夢中になっていたからである。

〈最澄を国師であるとして、しかも、旧仏教に長老たちに潅頂を受けさせよ、と命じているのである。〉

最澄と対立関係にあった奈良仏教の長老たちが、いわば最澄の弟子にされてしまったわけである。勅命潅頂が行われたのは平安京郊外の高雄山寺(現在の神護寺)であった。以後、高雄山寺は最澄、空海両者にとって重要な舞台となるが、空海はまだ九州(大宰府の観音寺)に止まり、すぐには上京しない。

この辺り空海の一筋縄ではゆかない曲者ぶりがうかがえる。

〈おそらく筑紫での空海は、都で評判の高くなるのを、待っていたのであろう〉

ようやく、八〇九年春に九州を出た空海は、それでもすぐには京に上らずに和泉国の槇尾山寺に入り、密教の教義を纏める作業に没頭した。

九　上洛(高雄山寺)

満を持して空海は八〇九年七月にようやく京に入る。

この頃、天皇は嵯峨天皇に代わり、朝廷のバックアップも次第に最澄から空海に移っていった。

空海は、最澄と敵対していた奈良の旧仏教勢力からも支持を受けていた。東大寺の別当に任じられたのもこの

頃である。

空海が住いとしたのは前記、最澄のゆかりの深い高雄山寺だった。

〈最澄はよろこんで高雄山寺を空海にゆずる話に同意したにちがいない〉

それぱかりか最澄は空海から潅頂を受けようとしたのである。七年前に奈良仏教の長老たちに潅頂した最澄がである。

そして実際に最澄は、空海から潅頂を受けたが、それは初歩的なものにすぎなかった。空海から最終的には三年かかると云われ、最澄はショックをうける。そして自分の弟子である泰範を空海のもとに修行に出すが、その弟子さえも空海に魅せられてしまい、後に東寺の僧侶になってしまうのである。

舞台となった神護寺には司馬も訪れている。

そこで書かれたのが「密教の誕生と密教美術」(「微光のなかの宇宙」収録)である。その中で日本の密教美術の名作として〈空海が住した京都高雄の神護寺にしずまっている虚空蔵菩薩〉を挙げている。

なお同書には「わが空海」なる随筆もみえる。書かれたのが昭和四十五年であるから、司馬が空海に大分前から関心を持っていたのがわかる。

なお私が神護寺を初めて訪れたのもこの頃で、当時「高雄」なるカラ—テレビがよく売れていたことを思い出す。

一〇　東寺と高野山

弘仁十四年(八二三)、空海は嵯峨天皇から東寺を与えられ、密教の根本道場とした。空海五十歳である。以後、東寺は勅により教王護国寺と号され、五十名の真言宗僧が常任されることになる。

東寺は現在にいたるまで「京都」のシンボルとなっていて、平安京の盛時をそのままに伝える建築物は東寺をおいて他にはない。空海の命日にあたる毎月二十一日には「弘法市」が開かれている。

東寺に入った空海は、以後十年間、境内(現在の御影堂付近)に起居して、みずからの密教を具現化するための構想を練った。その代表的なものが二年後に始まった東寺講堂の建設である。

一千年以上にわたって秘仏として、公開されなかったが、昭和四十年からは一般人でも見ることができるようになった。中央の大日如来像を囲むようにして、周囲には慈母のような表情をたたえた菩薩像、憤怒の明王像が置かれている。それら二十一体の仏像(うち十六体が国宝)は見る人に対して圧倒的な迫力を与えている。

その構成は空海が師恵果から引き継ぎ発展させた「大日経」系密教と「金剛頂経」系密教の統合を初めて表現したものだという。

また空海は「人々に密教を理解させるには、画像による表現がよい」と考え、曼陀羅を書かせた。その現存最古の彩色「胎蔵界曼荼羅」も東寺に残っている。

〈密教の造形上の法則とシステムは、高野山に先んじて東寺において大完成した。〉

また、この頃には、空海は宗教観の違いから最澄との交流を断絶している。

ここに至るまでの空海と最澄との交流—両者の葛藤、確執そして決別の記述はまさに小説家司馬遼太郎の真骨頂であろう。

その東寺建設においては、空海は国家の力を借り、みずからの理想を打ちたてようとしたが、その直後に構想された高野山では逆に国家の力を一切排除して、民間の人々と力を合わせてこれを作り上げようとした。

高野山は和歌山県の北東部、標高千メートル前後の山々に囲まれた山合いに開けた平野である。

高野山の町は大門から続くメインストリートに沿って寺院や商店が並んでいる。人口四千人以上、寺院だけでも百十七もあるという。まさに「山上の宗教都市」にふさわしい。中央部に有名な金剛峯寺があり、ここを中心として下界と遮断された高野山独立国が形成されている。

その高野山を司馬は二十才のころに初めて〈見た〉と書いている。戦時中、兵役に取られる直前、卒業記念に友人数名と吉野付近にハイキングに出かけたが、途中、道に迷って明け方ようやくたどり着いたのが高野山だった。薄靄のなかに忽然と現れた別世界に目を見張ったという。

奥の院には信長、信玄など高名な戦国武将から無名の庶民のものまで二十万基を超える墓石、記念碑などが並んでいるが、最近、その入口に司馬の文学碑が建てられた。彼の随筆「高野山管見」(昭和五十六年)の冒頭の文章である。

〈高野山はいうまでもなく平安初期に空海が開いた〉で始まり〈日本国のさまざまな都鄙のなかで、唯一といえる異郷ではないか〉と結んでいる。

奥の院をさらに進むと弘法大師御廟。承和二年(八三五)三月二十一日、空海死没。享年六十二歳。

〈空海は死んだ。しかし死んだのではなく入定したのだという事実もしくは思想が、高野山にはある〉

空海は今でも、同寺奥の院地下の石室に黙然と座っていると信じられている。

皮膚の色の四方山話

鈴木守

本誌一〇七号から一二一号に連載した『化粧のルーツを訪ねて』を執筆するに当たり、関係しそうな話題を備忘録に拾い集めておいた。今回、本誌一三〇特集号の記事として、備忘録に書き残されている、皮膚色に関する知見を寄せ集めて、『皮膚の色の四方山話』を語ることにしよう。

第一話　肌色と皮膚色

皮膚の色は、肌色あるいは皮膚色と言われている。だから、この二つの単語は同義語といえる。しかし、同義であっても同一とはいえないという蟠りがある。例を挙げると、雑誌『化粧文化』から「肌色の科学的側面について執筆して欲しい」と依頼された時、『肌色の科学的側面』という設定に違和感を覚えた。当時、化粧品会社の研究所に勤務していたので、皮膚の色は〝皮膚色〟であり、〝肌色〟という言葉を生物学的な用語として使用することはなかった。だから、肌色は死語に等しい言葉だったのである。

第一節　肌と皮膚・言葉のイメージ

〝はだいろ〟を辞書でみると、肌色と膚色に表記され、意味は「人間の皮膚の色、やや赤みを帯びた淡黄色」であるが、〝皮膚色〟は辞書類にはない。しかし、専門書は皮膚色の独壇場である。したがって、肌、皮および膚の各文字の字面が醸す雰囲気とか、肌あるいは皮膚の熟語が紡ぐ肌触りを感じることによって、両者の異同を探ることにしたい。

一項　肌、皮、膚の字面

漢字は表音文字と違って、文字自体に意味が籠められているので、肌と皮と膚の字面を見詰めることで意味を体得できないかと考えた。漢和大辞典には、皮膚とは別に〝肌膚〟という単語があったので、肌、皮、膚の解字と意味を探ることにする。

〝皮〟の字体は「頭のついた動物の皮を手で被せる様」であり、皮つきの〝又〟は手を現わしているという。皮の意味は「動物の体の表面に被さった、毛のついたしなやかな皮」である。同じ〝はだ〟でも、〝膚〟は「肉と盧の略体からなり、壺の外側のように身体を外から覆う被膜を象った文字」で、布、敷、普と同系の言葉とされ、〝肌〟は幾、機、吉と同系の言葉で、「肌理細かい肌」を意味している。

用例をみると、〝肌〟は玉肌や雪肌のように、肌が美しい婦人を形容するのに使われ、〝膚〟は、膚が薄いことに因んで、薄っぺらな意見を膚見、浅はかなことを膚浅と称している。同じ〝はだ〟でも待遇が大分違う。この違いは、肌の意味が「肌理細かい肌」とされていることによるのだろう。したがって、〝肌〟は皮膚と同義というよりも、「美しく肌理が整った皮膚」がイメージされる。

〝膚〟は、紫式部が「白く玲瓏たる御膚の…」と記し、杜甫の詩文に「肌理」がみられるので、膚や肌の文字は、古代から使われていたことが窺える。一方、〝皮膚〟は学術用語のニュアンスが強く、西洋医学伝来当初から使われていたのではないか。恐らく、杉田玄白らの『解体新書、一七七四』に皮膚の文字が見受けられるに違いない。

二項　肌・皮膚を含む熟語

次に、肌或いは皮膚を伴う熟語や慣用文節を拾うと、肌については、柔肌、餅肌、鮫肌、敏感肌、肌寒い、肌合い、肌触りなどの熟語が見られ、更に、肌を合わせる、肌を許す、肌を汚す、肌身離さずなどの文節も屡々目にする。一方、皮膚に関わる熟語には、皮膚科学、皮膚病、皮膚炎、皮膚感染、皮膚呼吸、アトピー皮膚などがある。

これらの用例を一見して、皮膚由来の単語は、専門的乃至は学術的色彩が強いことが分かる。一方、肌由来の熟語の中にも、鮫肌や敏感肌のように一見専門用語的な単語もあるが、鮫肌は尋常性魚鱗癬のことで、江戸時代から知られている一般用語である。敏感肌は学術的に定義された言葉ではない。素人の人たちが〝かぶれ易い皮膚〟を、そのように呼称しているに過ぎない。したがって、これらの例を除くと、肌関連の熟語は主観的、且感覚的な事象を表現した言葉が多い。

第二節　皮膚色と肌色の異同

皮膚色と肌色は、「身体を外側から包み込む被包組織

の色味、色合い」という意味において同義である。この言葉の基礎となる皮、膚、肌の各文字、並びに肌及び皮膚という単語もまた、「身体を外側から包む被包」という意味において同義である。

しかし、一項で述べた皮、膚、肌の解字や意味合いは性格を異にする面があり、皮膚がつく熟語は、皮膚科学やアトピー皮膚のように科学的色彩を有する言葉が多く、肌の熟語は柔肌や肌合いのような情趣漂う言葉が目につく。したがって、皮膚と肌、並びに皮膚色と肌色は同義語ではあるが同一とはいえない。特に、二項で示した皮膚由来の熟語と肌関連の熟語を比較すると、前者が専門的乃至は学術的色彩が強いのに対して、後者は主観的で、感覚的な事象を表現した言葉が多く、例えば、「肌を重ねる」という文節はエロティックでさえある。

以上、膚見を並べたてたが、前出、『化粧文化』依頼の「肌色の科学的側面」に違和感を覚えたことは、必ずしも膚浅な戯言ではなかったという結論に達したので、同誌に『皮膚色と化粧品』のタイトルの下で、皮膚色の科学的側面について、一文を投稿した。

第二話　先祖たちの皮膚色

皮膚色の濃淡は日照量の多寡によって生じる皮膚色素量の増減に基づくと考えてきた。その考えは誤りではないが、本誌一二八号で述べたように、コーカソイドの発祥には、カルシウム代謝と関連して、ビタミンD（以下、Dと略）が関与することを知り、先祖の人たちの皮膚色形成の歴史に興味を抱いた。

しかし、石器時代人の皮膚色を直接論及した文献を見ることはなかった。したがって、『先祖たちの皮膚色』について、真っ当な論を展開することは及びもつかないことであるから、人種名の語源を調べたうえで、皮膚色の異なる人種の発祥、早期人類及び人類第一号の皮膚色について見解を述べる。

第一節　人種名の語源

人種名の語源について、和田正平の論文にニグロがあり、コーケージアンの由来は辞書類に認められたが、モンゴリアンの由来を記した書は見当たらなかったので、黄色人種の人種名を何故モンゴリアンとしたかについて考按する。

一項　ニグロ

中世の頃、インド洋交易をしていたペルシャ人たちは東部アフリカの海岸地帯を「ザンジの国」と称し、今もザンジバルの名が残されている。他方、隊商を組んで砂漠を踏破していたアラブ商人は砂漠の南に広がるサバンナ地帯を「スーダン」と呼んでいた。ザンジは黒い皮膚の人びとの意味であり、スーダンは黒い人たちが住む国を指していた。

大航海時代に入ると、ベネチアの航海者カダモスは、大西洋を南下してアフリカ西海岸のセネガル川河口に到達した。彼は「この川の南側には、皮膚が漆黒のニグリが住む」と記録した。このニグリが語源となって、ニグロの名が定着した。彼が見たニグリは黒人種の中でも、色が最も黒いとされているウォロフ族のようである。

二項　コーケージアン

コーケージアンには、コーカサス人と白人の二つの意がある。後者の用例には「白色人種の特徴をコーカサス出身の女性の頭骨を基本に説明したため、この名が与えられた」と広辞林は記載しているが、新英和大辞典には「一七七五年にドイツの人類学者ヨハン・ブルーメンバッハが印欧民族発祥の地がコーカサスであると誤解して、白人にコーケージアンの名称を与えた」と説明している。なお、エンサイクロペディア・アメリカーナにも、ブルーメンバッハの名がみられるので、後者の説を採用する。

三項　モンゴリアン

モンゴリアンの意味も蒙古人と黄色人の二通りがある。何故、蒙古人がイエローの代表に選ばれているのか、その選択理由を示す資料を未だ見たことがないので、蒙古人が黄色人種の代表に選ばれた理由を考えてみた。

モンゴリアンは印欧語による呼称である。欧州人士の目に映るイエローは、馬の背に跨がって東欧を席巻したジンギスカンの姿だったのではなかろうか。それに加えて、マルコポーロが蒙古人の事跡を『東方見聞録一二八九年』に書き残したため、ヨーロッパ社会の人たちのイメージの中に、黄金の国ジパングと共にイエローの代表として蒙古人が定着したに相違ない。斯くして「黄色人種をモンゴリアンと呼称するようになった」と主張するのである。

なお、最近は人種名をネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドと呼称する傾向があるので、今後は新しい傾向に従って呼称する。

第二節　皮膚色の異なる人種の発祥

全世界に拡散した人類は、様々な自然環境下で生活していた。中でも、赤道近くと高緯度の土地では日照量が著しく相違し、皮膚色も異なっていることは衆知のことである。したがって、この節では、各地に拡散した地域ごとの人類の皮膚色を取り扱う。

一項　初期現生人類と出アフリカ

人類史上、最初の現生人類は、二〇万年前頃、黒人の姿でアフリカ・サバンナ地帯に現われた。彼らはアフリカの強烈な日照を防ぐ目的で、メラニン色素を盛んに産生するようになっていた。

一〇万年前以前に、彼らの一部がナイル川に沿って北上し、出アフリカを果たして北緯32～37度のレバントの地に到達した。熱帯圏から温帯圏への北上（緯度差20度以上）により日照量が低下し、皮膚色は黒褐色から茶褐色に褪色した可能性が十分に考えられるので、この褪色を前提に話を進める。

なお、アフリカに残留した子孫としては、現在、南部アフリカにはバンツー系ニグロ族、ホッテントット・ブッシュマン族が住み、北回帰線から赤道に至るアフリカ中央部には、スーダン系ニグロ族やニロト族が居住している。いずれも、ネグロイド種である。

二項　ヨーロッパ進出とコーカソイド

出アフリカを果たした人類は、一〇万年前頃、東西に別れてレバントからユーラシア大陸の各地に拡散した。西進してヨーロッパに現われたグループは、レバントから四千kmのクロマニヨンの地で四万年前頃の化石人骨として発見された。彼らの祖・二〇万年前頃のミトコンドリア・イブはネグロイドだったが、クロマニヨンの人たちはコーカソイドに変貌していた。

この変貌は日照が豊富な熱帯から、日照量が少ないクロマニヨンの地へ移動したことに基づくものであった。ところが、本誌一二八号で述べたように、日照量低減はD合成を低下せしめて佝僂病の発症を促した。このようにヨーロッパ進出の陰には、佝僂病の難に見舞われた人たちが数多くいたであろう。一方、クロマニヨンへ到達した人たちの皮膚は、日照量の減少によって皮膚色素量が減ったため、表皮層の光透過性が亢進して、日照量の不足を補いD合成を可能にする形質を確保し得たのである。結果論的にいえば、彼らは白人化することによってヨーロッパへ拡散できたのであり、逆にD合成不能な佝僂病家系の人たちは淘汰されてしまったのであろう。

三項　オーストラリア進出とアボリジニ

レバントから東漸したグループは、中近東、南アジア、東南アジアへと順次拡散した。このグループの一派は、東インド諸島、ニューギニアを経て南下し、西進組がクロマニヨンに到達した四万年前頃には、オーストラリア南部・南緯35度のウィランド湖畔まで足を延ばしていた。彼らは、ニューギニアやオーストラリア北部のアーネムランドに六万年から四万年前頃の足跡を残したので、確証はないが、遅くても六万年前以前にインドから東インド諸島を通過したことは確実である。

彼らがレバントを出立した時の皮膚色は茶褐色だった可能性が高い。そして、彼らがオーストラリアへ到達する道程は、熱帯・亜熱帯圏だったので、若干の変動はあったにしても、茶褐色系の皮膚色を維持したまま、オーストラリアへ進出したに違いない。その結果、彼らの子孫であるアボリジニの皮膚は茶褐色を呈している。なお、アボリジニとニューギニア原住民を併せてオーストラロイドと称し、黒、黄、白の人種に褐色のオーストラロイドを加えて四種に分類する人もいる。

四項　古モンゴロイドと新モンゴロイド

レバントから東漸したグループの足跡を辿ると、東インド諸島に五～四万年前頃の足跡が散在し、中国には四、三万年前の柳江人や一万八千年前頃の周口店山頂人が知られている。したがって、東漸した人類は六～五万年前頃には、インドシナ半島付近から北進して北緯24度の柳江、北緯40度の周口店へ到達した。このグループを古モンゴロイドといい、皮膚色が黄褐色の中国人、朝鮮人、日本人の祖となった。

この一部がシベリアへ進出し、二万年前頃から始まった氷河期によってバイカル湖周辺の高地に氷河が発達し、古モンゴロイドの一団は極寒の地に閉じ込められて寒地適応した、黄色人種の新モンゴロイドとなった。彼らの子孫は、ツングース族、ウラル・アルタイ系の北方モンゴロイドである。

モンゴロイドと佝僂病に関する説がある訳ではないが、モンゴロイド発祥の陰にコーカソイドと同様の佝僂病発症の悲劇はなかっただろうかが気になった。というのは、古モンゴロイドや新モンゴロイドの皮膚色はネグロイドやアボリジニの黒褐色や茶褐色より淡色系の黄褐色だったと思われるし、モンゴロイドは北極圏にも進出し、コーカソイドよりも高緯度の地域へ拡散していたのであるから、当然、光照射量の不足によりD合成が滞り、カルシウム代謝異常が生じる可能性が十二分にあると考えて当たり前である。

したがって、高緯度地域を生活圏としたモンゴロイドにおいても、コーカソイドと同様、佝僂病家系が淘汰される傍ら、D合成可能な淡色家系の確立があったのではなかろうか。でなければ、極北のベーリンジアを越えて新大陸へ拡散できなかったと思うのである。結論的にいえば、モンゴロイドにもコーカソイドと同様に佝僂病受難の歴史があったが、D合成可能な淡黄色系皮膚色のモンゴロイドとなって、高緯度地域に生活圏を確保できたのである。

小学生の頃の思い出話である。田舎医者だった父に傴僂のことを聞いた。その時、佝僂病という病名を初めて知った。「佝僂病の患者は、表日本より裏日本に多い」という言葉も頭の片隅に残っていた。色気付いた高校生

の頃には「色白の美人は裏日本に多い」という知識も身に付けていた。そして、八十過ぎになってやっと、この二つの知識を結び付ける考えが湧いてきた。

日本にも、かってはコーカソイド同様、佝僂病の難があり、裏日本に多かったという。それとは別に、裏日本には秋田美人に代表されるような色白の美人が多いのである。ということは、日本でも日照が少ない裏日本では、メラニン色素産生量が減少した色白の美人が誕生する反面、D合成が低下してカルシウム代謝異常に基づく業病も認められたのである。但し、現代社会ならば、D強化食で問題は解決する。

第三節　早期人類の皮膚色

現生人類第一号のミトコンドリア・イブは黒人だった。では、人類第一号の皮膚色も黒かったのだろうか。しかし、原人よりも古い時代の人類の皮膚色を云々した資料をみたことがないので、人類第一号を初め、早期人類の皮膚色を巡る著者の経験と見聞を語ることにする。

一項　化粧品のルーツ

サンケア製品開発の際、「我々の先祖の体毛が退化した時、日焼け防止の必要性から、泥を塗り始め、これが化粧品のルーツになったのではないか」という考えが閃いた。ところが、「初期人類の皮膚が黒ければ、日焼け防止は不要だったはず」という考えも湧いてきた。

それとは別に、テレビ番組で「ナミビア・ヒンバ族（黒人種）女性は、日焼け防止に赤い石を潰し油に混ぜて塗る」と放映していた。この放映をみて胸をなで下ろした。我々の先祖が黒人だったとしても、日焼け防止は必要という結論を得たのである。早速、一九八八年の化粧品技術者会で『化粧品ルーツ論』を発表した。だが、初期人類の皮膚色についての疑問は残されたままであった。

二項　チンパンジーの皮膚色

これまた、テレビの恩恵を受けた知識である。テレビ画面にチンパンジー親子が映っていた。母親の顔は黒かったが、子供の顔は白かった。これがヒントになって「母親の毛の下の地肌は黒くないのではないか。だとすると、チンパンジーと同根の御先祖の体は黒くはなかったのでは…」と閃いた。この閃きを確かめるため、図書館で動物図鑑などを調べたが、チンパンジーの地肌の色を知ることはできなかった。また、大学の動物学の教授に尋ねたが、「専門外だから知らないが、動物園の飼育係の人が知っているのではないか」とヒントを与えてくれた。

教授のヒントに従って、横浜野毛山動物園と上野動物園を訪れたが、チンパンジー飼育係の人たちは多忙で会うことができなかった。十数年後、孫のお供で北海道旅行した際、旭山動物園へ行った。チンパンジー舎前に飼育係と思しき女性が立っていた。早速、尋ねると「白くはないけど、顔のように黒くはない。ここには毛を毟る癖のある子がいるので、実物を見たら…」と宣って、子供を抱いているチンパンジーの前へ連れていってくれた。動物園の飼育係の人たちにとって、飼育している動物は全て我が子であり、「あの子、その子」と称している。彼女が指差すあの子の脇腹は黒い毛が薄くなっており、肉色の地肌が覗いていた。

三項　人類第一号の皮膚色は？

十数年間、探し求めてきたチンパンジーの地肌は肉色であった。ということは、人類とチンパンジーの共通の祖先だった大型類人猿の皮膚は肉色だったことを示している。そして、人類の第一歩を踏み出した数百万年前の大大先達、人類第一号はネグロイドではなく、皮膚の色は肉色であることが示唆された。その後、猿人と呼ばれる早期人類の体毛が退化していくに従って、光から身体を防御する目的で皮膚色が濃くなったことは容易に類推できる。しかし、現在14種の猿人が発見されているとはいえ、黒色種であることが同定されている猿人は発掘されていない。

四項　原人の皮膚色は？

八四年にケニア・ツルカナ湖畔で完全に近い全身骨格が発掘された。この骨格の主は一五〇万年前の原人、ホモ・エルガステルの少年で、ツルカナ・ボーイの愛称で呼ばれている。この全身骨格について、諏訪元は「ツルカナ・ボーイは、熱帯の乾燥性気候に適した体型を示しており、現代人的な無毛性と発汗による体温調節機能を既に有していたと思われる」と述べており、彼の「熱帯性気候に適合し無毛性を確保」という言葉は〝皮膚の黒化〟を暗示しているので、当時アフリカで生活していた原人たちの皮膚は黒色だったとみてよかろう。

しかし、原人の時代、一〇〇万年前頃には、一次出アフリカがあり、アジアにはジャワ原人、北京原人が知られ、ヨーロッパではニース近郊のテラ・アマータ、イタリアのイゼルニアなどに原人の影が認められる。ジャワ原人はアフリカと同様の日照条件が考えられるので、黒褐色から茶褐色が想定されるが、高緯度のヨーロッパや北京に拡散したグループでは、前出コーカソイドのように、環境に適応した形質変化があったはずである。クロマニヨン人をモデルにすると、ヨーロッパの原人は白人であり、北京原人は山頂洞人の例に従えば黄色人が想定される。しかし、ユーラシア大陸へ拡散した原人の皮膚色に関する資料はないし、D合成低下に基づく骨格不全

を示す証拠もない。

五項　ホモ・サピエンス種の皮膚色

ホモ・サピエンス種の亜種として、ハイデルベルゲンシス、ネアンデルタレンシス、イダルツ及びサピエンスの4種類が知られている。現生人類はホモ・サピエンス・サピエンスで、亜種サピエンスということになる。

亜種サピエンスの祖型はハイデルベルゲンシスとする説とイダルツであると仮定する説があり、亜種サピエンス第一号のミトコンドリア・イブは黒人だったので、ハイデルベルゲンシスか或いはイダルツのいずれかは黒色種ということになる。だが、ヨーロッパに進出したハイデルベルゲンシスが黒色種であるとは考えにくい。

ネアンデルタレンシスの主たる生息地はヨーロッパであり、二三万年前頃から現れた。この亜種もネグロイド系ではなさそうであるが、彼らの復元像は黒褐色から茶褐色系に描かれている。興味深いのは、ネアンデルタールで発見された化石人骨をドイツの医学・人類学の権威者ウィルヒョウが「佝僂病を患い、額に傷を負い、関節炎で変形した現代人」と結論しているので、ネアンデルタール人第一号は佝僂病患者だったことが窺える。他にもイラク・シャニダール洞窟で発掘された一体は「肘から先がなく、右肩から上腕にかけて強く萎縮し、右脚は関節炎を患っていた」と記されているので、ネアンデルタール人は日照量低下に対する適応が不十分だった印象を抱いた。

以上、人類の第一号から現生人類に至る、数百万年間のヒト科動物の皮膚色について検討した。

人類第一号では、毛の陰に隠れている皮膚は肉色を呈していた。長い猿人の時代が始まると、毛は退化の道を辿り、光防御のため漸次、皮膚が濃色の方向に進み、遅くても初期原人の時代、一五〇万年前には皮膚色は黒化したと想定される。それ以降、アフリカに居住する人類の皮膚色は、黒色乃至黒褐色を維持していた。

一〇〇万年前頃、出アフリカを果たし、日照の少ない高緯度地域に進出した人類の皮膚は褪色の方向に進んだ。比較的低緯度の地域に生活基盤を定めた人類は、茶褐色の皮膚となり、高緯度に拡散したグループは淡い黄褐色乃至白色の皮膚になった。しかし、高緯度へ拡散した一群の人類は、日照程度の低下によりD合成量が減少し、カルシウム代謝不全の佝僂病の苦難を味わった。

一つの仮想であるが、南米インディアンの先祖も黒人だった。彼らは北上して、レバント付近では茶褐色系となり、東アジアを北上して黄色の古モンゴロイドとなり、更に北上して北極圏に近いベーリング海峡を渡る頃は淡い黄色、新大陸を南下するに従って皮膚色が濃くなり、南米に至ると、再び茶褐色系のモンゴロイドに復帰したのではなかろうか。

第三話　皮膚色構成因子

第二話で述べたように、人類は皮膚色の相違によって、ニグロイド、モンゴロイド、コーカソイドに大別されているが、本質的には個人々々の皮膚色も異なっているので、第三話では、皮膚色を構成している因子について話を進め、『皮膚の色の四方山話』の括りとしたい。

一項　皮膚色相違の実際

同じ人種内でも、民族や種族の相違によっても皮膚色は異なる。これらの人種差、民族差、種族差を生じる主たる要因は、皮膚色素メラニン量の多寡に基づいている。更に性や年齢によっても皮膚色の濃淡に差を生じ、個人々々によっても相違する。個人の範囲でも部位による異同があり、生活環境によっても変化する。

部位による皮膚色の相違は顕著である。乳輪、乳頭、肛門周囲などが濃色を呈し、次いで陰嚢、陰唇の色が濃い。逆に、手掌や足底は淡色である。電車の中で見掛けた黒人の手掌は白かった。たまたま、姫路城の石垣を裸足になって登ろうとチャレンジしていたニグロの足底も黒くはなかった。黒人の手掌や足底は典型的な部位差である。一般的にみて、露出部は被覆部よりも色が黒い。性および年齢については、平均値的に女子は男子よりも、若年者は高齢者よりも淡い傾向にある。その他、喜怒哀楽によって顔色が変わる。

これらの色調の濃淡にはメラニン色素の関与が大であるが、色合い色味には、血色素、カロチン、皮膚の厚さ、光散乱現象などが関与しているので、これらの諸因子について解説する。

二項　メラニン色素

諺は「色の白いは七難隠す」と言う。少なくとも我が国においては、色白が好まれ、メラニン色素は敵役を受け持たされている。小麦色の肌がファッションとして流行したことがあり、燦々と輝く太陽は健康と青春のシンボルの如くに扱われていたが、今夏は熱射病が毎日のように新聞紙上を賑わせ、燦々と輝く太陽は悪魔の化身のような存在に変わってしまった。メラニン色素は悪魔の所行のような光の害を遮断して、体を保護する役割を担っているのである。

ところで、小学生の頃、戦時中のことだったから、真夏の暑い日に校庭で朝礼が行われ、日射病で眩暈を経験したことがある。その当時は熱射ではなく日射だった。熱の影響ではなく、光に基づく障害ということである。確かに、光に関係ない日陰者の乳頭、乳暈、陰門、陰茎が何故黒いかという疑問が湧いてくる。それを説明した

文献を見たことはないが、光遮蔽が目的のメラニン色素でないことだけは確実である。では何故か、私見では、摩擦という機械的刺激がメラニン量を増やしているのではないかと思っている。帆立貝の殻を繋ぐ蝶番の色が真っ黒であることがヒントである。

横道の話に逸れ過ぎた。メラニンはアミノ酸の1種チロシンが酵素チロシナーゼの触媒作用によって酸化重合してできた黒褐色の顆粒状色素であり、ユー・メラニンと称している。この色素は表皮細胞の一つメラノサイトで作られ、表皮中の顆粒細胞に送り込まれて、有害な光の深部透入を妨げて皮膚の保護作用の一助としている。ところで、話は変わるが、前出の黒人の手掌と足底が黒く見えなかったのは、手掌と足底の顆粒層が透明層に覆われていることに基づく。

白人の皮膚には、グルタチオンが多く含まれ、チロシンが酸化重合する際、グルタチオンが結合すると、黄色から赤色の低分子のフェオ・メラニンとなり、それ以上の酸化重合がストップする。白人の金髪や栗色の髪はフェオ・メラニンの色である。グルタチオンはグリシン、システイン、グルタミン酸の3種アミノ酸からなるトリペプチドで還元性を有し、肝斑の治療にも使用されている。第二話の白人発祥論との関連で興味が持たれる。

三項　血色素・ヘモグロビン

血色素ヘモグロビンは、呼吸システムの立て役者であり、ポルフィリンと蛋白質から構成され、ポルフィリン骨格の中央に鉄イオンが鎮座している。この鉄イオンが酸素搬入と二酸化炭素排出の役割を担っている。

ポルフィリンのことである。ポルフィリンと聞かれれば、「聞いたことはあるけれど…」と答える人が多い。葉緑素クロロフィルも、この構造体を有し、中心にマグネシウムを配し、二酸化炭素を吸収し酸素を排出する植物体の呼吸を司っている。したがって、生物はポルフィリン骨格の中心に金属イオンを配して、呼吸機能を維持しているのである。他にも昆虫は銅イオンを配したヘモ・シアニンを呼吸機構の主役にしており、脊索動物の海鞘はバナジウムイオンを活性中心としている。

呼吸機構を地球レベルでみると、動物は酸素を取り込んでエネルギーを得、植物は動物の老廃物、二酸化炭素を吸収して、栄養素・炭水化物を生産しているので、生物系全体として動物と植物の相互扶助の関係が成立している。この均衡状態に反逆しているのが、人間であることを思いつつ、広島の原爆犠牲者追悼の画面に目を注いでいる。

広島の話になれば、次は長崎となり、脇道をどんどん進んでしまいそうである。だから、ヘモグロビンに戻って血道を上げることにする。一般に血の色は赤とされているが、この色は酸素と結合した酸化型ヘモグロビンの

色であって、酸素が外れて二酸化炭素と結合した還元型ヘモグロビンは暗青色である。ヘモグロビンが皮膚色形成に参与するのは、血液が表皮直下にある真皮乳頭層の毛細血管網に存在している時である。この毛細血管網内の血液量が増加、且ヘモグロビンが酸化されておれば皮膚色は赤味を呈する。炎症の際、発赤が生じるのは、毛細血管が拡張して血色素量が増加することに基づく。

他方、血管網内の酸素が欠乏して還元型ヘモグロビンが増えれば、チアノーゼに見られるように皮膚は青藍色になる。「顔色を窺う」というのは、血管の拡張・収縮によるヘモグロビン量の増減を窺うのである。

四項　カロチン

カロチンはビタミンAの前躯物質として知られており、脂肪分の多い皮下組織や真皮、角質層に多く、皮膚に黄色々調を与える。皮膚のカロチン量は男子より女子が多く、柑橘類、南瓜、人参などを多食すると、角質層のカロチン量が増え、柑皮症と呼ばれる黄色々調の皮膚疾患を招くことがある。

黄疸に罹ると体が黄色になる。胆汁にはヘモグロビンが分解して生じる黄色々素ビリルビンが含まれている。正常時の胆汁は小腸に分泌され、便となって排泄される。大便の黄色はヘモグロビンの成れの果てである。

五項　皮膚の構造、主として皮膚の厚さ

皮膚の厚さ、特に表皮の厚さが皮膚色と関係する。薄い表皮は厚い表皮よりも光を深層まで透過させ、乳頭層毛細血管網の色が見え易くなるので、赤味が強まる傾向にある。逆に厚い表皮では光透過量が減り、表皮のカロチンによって黄味を帯びるようになる。面の皮が厚いと血管系の色調が見え難いので、付き合い難い手合いである。

六項　皮膚の光散乱現象

光散乱現象は、チンダル現象ともいわれ、皮膚に青味を与える。不透明な媒体を光が通過する際には、媒体中の微粒子によって光散乱が生じる。一般に透明と思われている大気、水、ガラスと雖も、〝完全に透明な媒体〟とは言えないので、光が透過する際、微粒子によって光の散乱が生じる。光散乱に際して長波長の赤色光は透過するが、短波長の青色光は散乱し易い。そのため、皮表から見る場合、散乱された青色光が視野に入り、皮膚が青味を帯びる。したがって、メラニン顆粒が表皮に存在すると褐色、真皮に分布すると青褐色に観察される。

その典型的な疾患に女子顔面黒皮症がある。この疾患では顆粒が真皮に存在するので、青褐色に見えるが、表皮に顆粒が分布する肝斑は濃褐色を呈している。

入墨は顔料を浅く刺入するか、深くするかで、チンダ

ル現象により色調が異なる。浅い場合は顔料の色がそのまま見られるが、深く刺入すると、黒の場合は青系、赤い顔料では紫系の色調を呈する。刺青用に青や紫の顔料は使われていない。

引用文献

藤堂明保他、漢和大辞典、学習研究社、一九九五
鈴木守、皮膚色と化粧品、化粧文化一五号、一九八六
鈴木守、人類の仲間（三）、本誌一二八号、二〇一三
和田正平、アフリカの美肌観、化粧文化一五号、一九八六
広辞林第五版、三省堂、一九七八
新英和大辞典、研究社、一九七一版
エンサイクロペディア・アメリカーナ、一九六四版
ファッキーニ、片山一道訳、人類の起源、同朋舎出版、一九九三
馬場悠男監、人類の起源、集英社、一九九七
今西錦司ら、人類の誕生、河出書房新社、一九九四
河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九
諏訪元、アフリカ文明の曙、新書アフリカ史、講談社現代新書、一九七七
鈴木守、化粧品技術者がみた化粧品のルーツ、日本化粧品技術者会雑誌22巻2号、一九八八
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
斉藤光格ら、総合地歴新地図、帝国書院、一九九五
伊崎正勝、臨床皮膚科学。南山堂、一九七二
簸野倫監、標準皮膚科学、医学書院、一九八三
鈴木守、コスメトロジーの実践、幸書房、一九九四

（完）

飲酒の歴史と飲酒の今日的課題

漆原直子

私達の暮しに、〝お酒〟は必需品である。〝お酒〟の無い生活を想像してみて頂きたい。どうなることか・・・。

「酒は百薬の長」という諺があるように、適量摂取は健康にも良いとされ、人との付き合いの潤滑油でもある。その一方、飲酒運転による事故や、アルコール性肝炎、アルコール依存症等、社会生活の安全性や私達の健康を脅かす側面もある。〝適正飲酒〟を続けていれば、私達の寿命は維持されるが、不適正な摂取をすると、人間関係が破綻し、寿命を縮めることになるのである。先述の「酒は百薬の長」という言葉は、『漢書』に著されている言葉だが、それには続きがあり、「・・・されど万病の元」とされている。私達はお酒とどう向き合えば良いか、「飲酒の歴史」を振り返りながら、一考したい。

人間の歴史を紐解くと、〝お酒〟が歴史を変えたと思われる事件が随処に見られる。例えば、『史記』の『殷本紀』によると、殷の紂王（BC1100年頃　殷の第30代帝）は〝酒池肉林〟にふけり、悪政を行い、周の武王に攻め込まれて国を滅ぼしたとされる。また、『竹書紀年』（西晋の二七九年に現在の河南省にあった魏の襄王の墓を盗掘した際に出土した、大量の文字を記した竹簡）によると、殷の前の時代の夏王朝（BC2600年～BC1600年頃）の桀王は、〝肉山脯林〟（酒池肉林と同義）状態で悪政をしき、商の天乙（その後、湯王として殷王朝を開く）により滅ぼされたとされる。中国には古来より〝黄酒〟という紹興酒や老酒のような穀物などの醸造酒があり、先述の夏の桀王、殷の紂王もこの〝黄酒〟を飲んでいたと思われる。夏の始祖である禹は、酒を飲むことで国を滅ぼす者があるだろうと警鐘を鳴らし

ていた。中国で出土する青銅器には、酒器とされる物が多いそうである。なお、中国河南省のBC7000年新石器時代賈湖（かこ）遺跡から出土した陶器片を分析したところ、米・果実・蜂蜜などで作った醸造酒の成分が検出されたと、2004年に『北京晨報』で報告された。今のところこれが考古学的には最古の酒だとされる。それまではイラン北部のザグロス山脈のハッジ・フィルズ・テペ遺跡から出土した壺の中に、ワインの残滓が確認されており、それが最古の酒とされていた。紀元前3000年代には、シュメールの粘土板にビールのことが記録されており、バビロニアのハンムラビ法典には、ビール売りに関する規定が記されているそうである。ローマ帝国時代のヨーロッパでは、アルプス山脈を境として、その南側地中海方面ではワイン（果実酒）が、北側ではゲルマン人によるビール（穀物酒）が酒造りの主体を成していた。地中海周辺でよく出土するアンフォラの壺はワインを入れるための容器であったとされる。また、角杯やリュトンが地中海のみならずユーラシア大陸の広範囲の地域で数多く出土している。

日本では『古事記』や『日本書紀』に、スサノオノミコトによるヤマタノオロチ退治伝承、ヤマトタケルのクマソ征伐伝承に、酒で相手を酔わせて撃ち取るという共通の構造をもつ物語が記されている。スサノオノミコトが用いた酒は、「八塩折之酒」という足名椎命と手名椎命に作らせた、7回絞った強い酒だという。『日本書紀』の中では、武烈天皇が中国の桀王や紂王と同じような暴君で、酒池肉林状態であったと記されている。ただし『古事記』にはそのような記載はされていない。

考古学的には縄文時代の土器の付着物に、山葡萄を発酵させた物が検出されている。お酒の始まりは、世界共通で果物や穀物などを貯蔵しているうちに自然発酵したことによる。弥生時代に稲作農耕が始まると、米から酒が作られるようになる。初めは米を口に入れて〝噛み噛み〟して、人の唾液によって〝醸し〟たという。これを「口噛み酒」という。特に巫女がその役を担った。デンプン質を口に入れて噛むことで、唾液中のアミラーゼがデンプンを糖化させる。それを吐き出して溜めておくと、野生酵母が糖を発酵させてアルコールが生成する。「醸す」はこの〝噛む〟が語源となっていると言う説があるが、そうではなく、「かびす」という言葉が転訛したという説もある。この方法は、発生地は不明だが、穀物以外のデンプンを含んだ植物を食べていた東南アジアから南太平洋域で、特に、これらの文化圏と米が伝播していったアッサム地方や雲南からの稲作文化が合流するマレーシアなどの東南アジアが、米で造る口噛み酒の発生地とされている。ちなみに「ビール」は、BC3000年頃のシュメールやエジプトが発生地であるが、初期のビールは神に仕える女性達が、小麦から作ったパンを噛んで作った。「チチャ」というインカ帝国の酒も、〝太陽の処女〟がトウモロコシを噛んで作っていた。現代も南米・アジア・アフリカのごく一部で行われおり、各種穀物を口に入れ噛み砕いた後、瓶や甕に吐き出し、集めて発酵を待つのである。

そもそも、原始において酒を飲むという行為は、単に酔うためではなく、神がかり、トランス状態になるためである。現代のお酒から見ればアルコール度は低いが、アルコールの耐性が無い人々が飲めば、充分酔えたであろう。また、原始においては自然の猛威にさらされ、人間の力で制御することは不可能であった。それらは荒ぶる神の為せる技であり、どうしたら鎮まり、人々に害を為さないかは、極めて大事な問題であった。お酒の発見は、荒ぶるものを捕えたり、鎮めたりするために非常に有効な手段となった。自然界の荒ぶる神々を鎮めるために、お酒＝お神酒（オミキ）を供えるのである。

例えば、現代のボルネオ島では、現地の住民は森のオランウータンを捕獲する時、初めは桶に水だけを用意しておき、オランウータンが飲むのを確かめてから、徐々に酒を入れてアルコール濃度を濃くする。オランウータンに徐々に酔いがまわって来て動けなくなった所を、捕獲するそうだ。日本でもスズメを捕まえる時に、酒に浸した米粒をまいて、それを食べたスズメが酔って動けなくなった所を捕まえるという話もある。

しかし、この〝口噛み酒〟は少量しか作れず、神と一体となるための特別な儀礼の時等にしか飲めなかった。奈良時代に中国より〝麹〟が伝来してからは、量産できるようになり、平安京には酒屋のような店もできていたそうである。奈良時代以降は、朝廷での儀式と賜宴（または賜酒とも言う）が、支配体制の序列化の強化の場とされ、酒が大いに利用された。ただし、飢饉や疫病等凶荒の時は、「禁酒令」が布告されている。

万葉集にも酒を歌った歌は多く、大伴旅人は生来の酒好きで、太宰府の長官時代に、「酒を讃むる歌十三首」を歌っている。当人にとっては左遷されたとして、不本意な赴任期間であった。何首か例をあげると、

賢しみと物言ふよりは酒飲みて
　酔ひ泣きするしまさりたるらし

中々に人とあらずは酒壺に
　なりてしかも酒に染みなむ

生まるれば遂にも死ぬるものにあれば
　この世なる間は楽しくをあらな

のように、現代人の気持ちと相通じると思う。

その他『日本後記』や『類聚国史』等には、宮廷人の飲酒行動に関する記録が残され、特に藤原一族の中には、酒癖の悪い者が結構いたようである。この平安時代にはすでに、〝酒呑み〟の事を「上戸」「下戸」という言葉で言い表すようになっていた。それらはそもそも「上戸」「中戸」「下戸」と、家の等級を表すもので、持統天皇の時代には、家族数＝口数の多いのが「上戸」と言われた。一人の人間が酒盃を手にして口にする度会い如何で、「上戸」「下戸」と転用したと考えられるという。宮廷人が酒に溺れる一方で、嵯峨天皇時代（811年）に、〝農人〟への禁酒令を厳しく出している。禁酒令自体は以前からあったが、何度も布告されるのはそれが守られてないという証であり、平安時代初期においては、国司がたるんでいるとして、国司への取り締まりも意味していたという。それは、征夷により国費が浪費され、財政立て直しのためには、調、庸、租の取り立てをしっかり行わねばならない。ハレの日であっても、酒や魚でうつつをぬかして働けなくなっては困るからである。この頃の宮廷御用の酒は、造酒司で造られていたが、店を持つことに特に規制は無かった。平安京を築いたとされる秦氏の一族に、酒屋を営む者が多かったという。また、秦氏は701年に松尾山の磐座が祀られていた地に松尾神社を創建し、平安時代になって大いに栄えたが、これは現代でも酒造業者の信仰を集めている。

「平安時代に台頭してきた武士は、主従の盟約や武士団としての結束を固めるためにも酒を用いたが、宮廷人ほどの大量飲酒はしなかった。保元・平治の乱等を経て、武士が力を持ち、源平の時代になると、酒の為にいつ襲われるかわからない時に、酒に酔ってうつつをぬかしてはいられない。元来酒に強かったということもあるが、酒に呑まれないように警戒し自重傾向にあった。宮廷人に比べて酒の節度を守っていたとされる。私は、貴族社会が武家社会へと変遷した理由の一つは酒だったと思う。」

鎌倉幕府を開いた源頼朝は、自身も酒を飲むが、相手に酒を飲ませ、相手が酔って饒舌になった所で、得たい情報を聞き出すという術に長けていた。いわば、酒を自白剤のようにして用いたとされる。また、新年に鶴岡八幡宮で奉幣の儀礼の後で宴会が催されるのだが、この時に「椀飯」と言って、御家人の方から年々輪番制で献上役を定め、将軍に対し、〝椀飯をささげる〟という言い方で盃酒を数巡まわし飲みするのである。「おうばん振舞」という言葉の語源はここからきている。『吾妻鏡』になると、酒豪や酒癖の悪い執権や御家人の話しが出てくる。武士の政権が確立するにつれ、鎌倉でも「好色家」と称する酒色サービスを売る店ができて繁盛したという。物

流が盛んになって経済が発展してくると、御家人たちが贅沢品を求めて、逆に生活が困窮する者が現れてきた。金貸しも出てきて生活は悪循環していった。北条時頼が執権につくと、鎌倉と鎌倉の守護国中の酒売りを厳しく禁止する「沽酒の禁制」をしいた。このため、鎌倉の酒屋は大恐慌に陥ったという。しかし、それも長くは続かず、鎌倉時代最後の執権北条高時においては、まさに酒乱で、闘犬と田楽好きで、日夜、闘犬を肴にし、田楽法師を呼び入れては酒宴に浸っていたという。徐々に幻覚妄想状態になり、アルコール依存症の末期症状を呈していたようである。とりまきの御家人達は、一緒になって享楽的な生活を送るようになっていたので、それを知った下野の足利尊氏や新田義貞が立ち上がり、京都では後醍醐天皇を中心に〝悪党〟（荘園支配の外部にいる人々、遊行僧や芸能民等漂泊の民、反王権的な人々）勢力を基に、倒幕謀議が進められていた。

だが、後醍醐天皇は真言立川流を奉じるなど、王権としては極めて特異な存在で（その異質性は網野善彦氏の『異形の王権』の中で分析されている。）後醍醐天皇も北条高時と同じように、無礼講の乱痴気騒ぎの酒宴を日夜開いていたとされる。倒幕後は、足利氏が離反して北朝を楯に1338年に室町幕府を樹立し、以後60年にも及ぶ南北朝の動乱を招くことになる。

足利尊氏は征夷大将軍として室町幕府を開くと、初期の鎌倉幕府の武家政治を再興しようとして、「建武式目」を定めた。その中で「群飲佚遊を制せらるべき事」として、ばくちや女色、茶寄合等を禁じた。当時の茶寄合は酒宴を伴い、お茶が本茶かどうかを言い当てる闘茶をして賭けごとも行っていたのである。ところが、その夢は足元から崩れ去って行った。尊氏の嫡男二代将軍義詮は酒色にふけ、側近の佐々木道誉や高師直といったバサラ大名達と共に酒色にふけったという。三代将軍義満は13歳の時から酒宴で醜態をさらすなど、飲酒問題を抱えていた。宮中に出向いて公家との宴会を度々持ち、貴族的な暮しにふけるようになる。1392年に南北朝の統一を果たす一方で、猿楽や世阿弥の能楽を楽しみ支援し、京都の北山に別荘を建設し、鹿苑寺（金閣寺）を建立した。四代将軍義持は、父義満に反発していたので、父が好んだ猿楽等は排除するようにしたが、宮中での酒宴は父同様の有り様であった。さらにその義持の息子の義量は、さらなる大酒飲みであったので、父義持は義量の近臣達の酒を禁じて、禁酒を誓う証文を書かせたほどである。その時の義量は15歳で、近臣の飲酒を禁ずれば、息子も飲酒を自ら控えるだろうと目論んだのである。しかしその甲斐もなく、17歳で父から将軍職を譲られた義量は19歳で早世する。その後父親が再度将軍職に就くが4年後に亡くなる。その義持の遺言で、他に子供がいなかったため、次期将軍は〝籤引き〟で決めるよう言

い残した。石清水八幡宮で籤引きをして、義持の同母弟の青蓮院義円が選ばれ、第6代将軍義教となった。義教は綱紀粛正を目指し、自身も酒は飲むが乱れることは無く、これまでの公武の風紀の乱れを厳しく取り締まって行った。猜疑心が強く独裁的で、意に従わぬ大名や公家を次々に粛清し、恐怖政治をしいたとされる。1439年の結城合戦の祝勝の宴だとして、播磨の守護大名の赤松満祐の家に招かれ、その酒宴の最中に暗殺されてしまった。(嘉吉の変)

室町時代は、このように武家や公家、寺院も同様に相当の酒を消費していたので、酒屋はかなり儲けていた。そして金貸し業も営み、かなりの高利貸になっていた。庶民もそこから金を借りたが、返済ができずに酒屋の焼き打ちをすることもあったという。そのためしばしば徳政令が発令され、さらにまた、その徳政令を求めるための土一揆が頻発するようになった。世の中が不穏になる中、盗賊の横行も流行り、1467年から1473年の間にわたっては、応仁・文明の大乱が起きる。この時の将軍は第8代将軍足利義政で、御台所の日野富子に頭が上がらず、享楽的な酒浸りの生活を送っていた。その息子義尚は、10歳で将軍職に就くが、近江の佐々木氏討伐中の陣営で3年間酒色に溺れた生活を送り、25歳の若さで早世した。その後父が再び将軍職に就くが、中風の再発で間もなく亡くなる。第4代と第5代の義持―義量との間で起きたことと全く同じことが起こったのである。その後の室町幕府の将軍は、15代まで続くが、名ばかりの将軍で形骸化し、地方の守護大名たちが力をつけ下剋上の戦国時代へと突入して行く。

室町時代の説明が長くなったが、武士の時代を作り上げて権力を握った者は、公家社会同様に酒色に溺れ享楽的な生活を送り、自滅の道を歩むという事が、こんなにも代々続いた時代も珍しいのではないか？1336年から1573年まで15代続いた将軍たちの死亡時の年齢の平均をみると、39．5歳である。最年少は第7代義勝で10歳、最高齢は第15代義昭で61歳であった。当時の平均寿命は色々調べてみると、およそ33歳位であるという。将軍職は、まず餓死する恐れは無いし、戦以外で命を落とす危険性は少なかったので、庶民よりは長生きできたのだと思われる。むしろ現代のアルコール依存症に近い病態を持っていたと思われる。

戦国大名に至っても、当然のことながら酒の問題はあった。家法として、大酒の禁制を布いたが、今川義元は陣中で酒盛り中に、織田信長勢の奇襲を受けた。上杉謙信は元来酒飲みで、織田信長との戦を前に出陣の準備をしている時に、厠に行き脳卒中で倒れてしまった。織田信長も酒豪であった。天下統一に近づきつつある時、正月の祝いの宴で、近習だけを集めて出した酒の肴が、討ち取った朝倉義景と浅井久政・長政父子の金泥を塗った首であったという。またはその3人の髑髏に漆を塗って、酒杯にしたという説もある。一方で豊臣秀吉は、酒盛りはしたものの、深酒は嫌ったという。大阪城中の『掟書』とされる『壁書』には、

〃一、酒者随根器、但し大酒御制禁之事〃

と書かれていたそうである。〃根器にしたがえ〃というのは、飲める者は相応に飲み、飲めない者がしいてつきあい酒に酔うな、ということだそうである。これは非常に正しい判断である。徳川家康に至っては、酒については飲むには飲んだが、深酒はせず、しまり屋で、むしろ酒が浪費につながるとして恐れていたようである。それゆえ強固な江戸幕府という幕藩体制を築いたとされる。

天下泰平と言われた江戸時代においては、町人文化が栄え、お酒も庶民に広がり、それが一つの文化になっていった。農村でもハレとケの時は大いに飲んだようである。いずれにせよ、酒は集団で飲むものであった。

女性の飲酒に関しては、記録としては少ないが、戦国時代の公家山科言継が日記『言継御記』の中で、公家出身の覚恩尼の酔いっぷりを書き留めている。

幕末から明治維新にかけては、西郷隆盛、明治天皇、伊藤博文等はかなりの大酒飲みであったという。近代化と共に西洋文化が流入し、洋酒等酒の種類も増えていった。また、それまでは飲酒は、〃酒盛り〃として集団で飲むものであったが、独酌する習慣が広まった。ただ、ここで特筆すべきことは、大正11年に『未成年者飲酒禁止法』が制定されたことである。根本正衆議院議員は先に明治33年に『未成年者喫煙禁止法』を制定させていた。アメリカに渡っていた根本正は、未青年者の心身の健康を守るためには〃たばこと酒〃の規制が必要であるとして、奔走した。酒については明治34年に法案を国会に提出していたのに、「そもそも酒の規制自体なぜ必要か」また「〃未成年者〃を何歳で線引きするのか」が、実に22年間も国会で〃論議〃されたのである。今では当たり前のようになっている認識が、当時は喧々諤々に論争されたのである。当時の議員1人1人の品位が露呈するようなものであった。結局は根本正の頑固さと忍耐強さ、また、当時は20歳で徴兵制があったので20歳からが成人という認識が広まっていたこともあり、20歳未満は未成年者だから禁酒とする法案が可決されたのである。〃飲酒は20歳を過ぎてから〃という規制は、今日でも続いている。

酒造技術も進み、大量生産と流通が進むと手軽に手に入れられるようになった。明治の末には「酒の自販機」が製造された。その現物は地元の久慈酒造が所有していた物で、現在岩手県二戸市の二戸歴史民俗資料館に保存

されており、日本最古の酒の自販機として、国立科学博物館から『重要科学技術資料』に認定されている。昭和の時代高度経済成長と共に、自動販売機の数が急増し、24時間何時でもどこでも、酒を手に入れることができるようになった。酒を自動販売機で売るのは、世界でも日本だけであるという。

こうして歴史を振り返ってみると、先にも述べたが、やはりお酒が歴史を変え、かつまた創ってきたという印象を受ける。現代においては、お酒の問題は一個人のみの問題ではなく、社会問題としてようやく捉えられるようになった。肝臓病や癌等の個人の健康を損なうのみでなく、DV（ドメスティック・バイオレンス）や児童虐待等の家族問題を引き起こし、飲酒運転による交通事故やセクハラ問題等、社会問題化している。新聞記事にも連日のようにアルコールによる事件が掲載されている。近年の自殺者の増加の背景にはアルコール問題も絡んでいる。こうした問題に取り組むために、行政機関や専門の相談機関、アルコール専門の医療機関、断酒会やAA（アルコホリックアノニマス）という自助グループが協力し合っている。これを〝ネットワークセラピー〟という。厚生労働省によれば、アルコール依存症の疑いのある人は440万人で、治療を要する人は80万人いるとされている。WHO（世界保健機関）は、アルコール飲料が関係する疾病による死亡が全世界で4%あると推定しており、2010年に「アルコール有害使用低減の世界戦略」を総会で決議している。アルコール対策の強化を図るべく、今年度は、各国の目標として、飲酒に関する病気の罹患率や1人当たりのアルコールの消費量を、2020年までの7年間に10%減らすという目標値を出した。日本の場合、疑いのある人を44万人、治療の必要な人を8万人減らさなければいけないことになる。1年間にするとそれぞれ約6万人と1万人以上ずつ減らして行くことになる。これは非常に大変なことである。

2009年の国税庁の統計によると、アルコール消費量は年間7億2289万ℓで、成人1人あたり6．92ℓのアルコールを飲んでいることになる。これはビールに換算すると138ℓ、日本酒だと46ℓ、焼酎だと28ℓにあたる。全国で最も消費量が多いのは鹿児島県で成人1人あたり10．0ℓ。次いで、東京都、沖縄県、宮崎県、秋田県と続き、最も消費量が少ないのは奈良県で5．1ℓである。地域的に見ると九州や東北で消費量が多く、関西から関東にかけての本州中央部で消費量が少ない。

日本は歴史的に見ても、アルコールには寛容で、厚生労働省は、健康的な飲酒として「日本酒なら1日2合までで、週2日の休肝日をもうける。」としているが、WHOは、「1日1合までで、飲まなければ飲まない方が

良い」としている。

しかしここ数年で、アルコール対策の法制化を求める動きが、患者や家族、医療従事者は、弁護士や国会議員の間で始まり、『アルコール健康障害対策基本法』の法案を作成し、その制定を求めている。現在その手続きの段階にあり、このWHOの勧告と相まって制定されていく可能性がある。この法案内容は、健康障害対策の計画策定のための法案で、酒の販売を規制するものではない。

その一方で、国は昨年より、国家戦略室（2009年に内閣官房に設置）において、様々な分野の有識者で構成される「ENJOY JAPANESE KOKUSHU（國酒を楽しもう）推進協議会」を立ち上げ、2014年に「ENJOY JAPANESE KOKUSHU（國酒を楽しもう）」プロジェクトを推進すべく、「國酒等の輸出促進プログラムを提言している。端的に言えば、日本酒や焼酎の国産の酒（ビールやワインはこの事業には入っていない）をいかに海外に売り込むかという一大国家事業である。国は、国内のアルコール消費の減量計画及び健康障害対策と海外への販売の促進事業という、二律背反的な事をすることになる。私達一人一人も自らの飲酒行動を省みなければならない。私が思うには、この問題の打開策は『適正飲酒』である。TPOを守り〟ほどほど〟にすることである。沖縄の酒器に泡盛等注いだ時、ある量7～8分位の量を過ぎると、中央部より酒が下に漏れ出して、なみなみといっぱいには注げないという不思議な器がある。沖縄県はアルコールの消費量の多い地域だが、そのような工夫も編み出している。先人の知恵も生かしつつ、現代人として上手に付き合うことである。

【参考文献及びサイト】

- 『酒が語る日本史』　和歌森太郎著　河出書房新社
- 『知っておきたい「酒」の世界史』　宮崎正勝著　角川ソフィア文庫
- 『酒読み　文学と歴史で読むお酒』　ほろよいブックス編集部編　社会評論社
- 『異形の王権』　網野善彦著　平凡社
- 『未成年者飲酒禁止法を作った人　根本正伝』　加藤純二著　銀河書房
- 「亜細亜が好き　徒然なるままに」HP　http://www.geocities.jp/msakurakoji/index.html
- 「国家戦略局HP「ENJOY JAPANESE KOKUSHU（國酒を楽しもう）」プロジェクト　http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/npu/#9
- 「アルコール健康医学協会」HP　http://www.arukenkyo.or.jp/jp/culture/index.html
- ウイキペディア

殉教（一）

鍋屋次郎

一　豹変

天正十五年（一五八七）六月十九日、秀吉は、大友宗麟や有馬純忠を攻撃している島津を薩摩・大隅に押し込めて、博多に凱旋した。

今日の博多湾は波も穏やかで、浜辺の白い砂と松の緑が、夏の太陽の下に、白砂青松そのものの景観を呈している。

博多湾沖には、ポルトガルのフェスタ船（小型武装船）が停泊している。九州平定を終えた秀吉に、カトリック教会準管区長コエリョが薩摩川内で戦勝祝いの挨拶ができなかったので、博多でお祝いの言上と祝い品献上を目的として、長崎からフェスタ船で二日前に到着して、博多湾で秀吉の凱旋を待っていた。

ところが、巳の刻（現在の午前十時半頃）に、その秀吉が前触れもなく、浜辺から船を出してフェスタ船に乗り込んできた。驚いたコエリョは先ずは奥の部屋に案内して葡萄酒等で接待したが、秀吉はフェスタ船を隅々まで見てから、乗船していたバテレン達と親しく歓談を始めた。その話の中で、目下平戸に停泊しているポルトガルの定期航路の船を、博多に回航するように要求したが、コエリョは博多湾は浅瀬が多く、座礁の危険が高いので回航できない旨話して理解を得た。

秀吉が船を下りるときにコエリョは、金色の紐付の、ダマスコ製で黄色のビロードの新しい帽子を献上すると、喜んでそれを被って船を下りた。秀吉は浜辺でコエリョを伴い、博多の街造り計画の役人にキリシタン教会建設用土地として、街中の一等地を与えるように直接指示した。

コエリョ達バテレンはご機嫌の秀吉と別れてフェスタ船内に戻り、これから秀吉の庇護のもとに宣教活動が更に活発にできることを期待して乾杯した。

島津征伐から凱旋した秀吉は、筥崎宮（現福岡市東区箱崎一丁目二十二―四）を陣所として逗留している。

参陣した諸大名の陣所は、筥崎宮から二里以内の寺に分散されていた。高山右近には秀吉警護の任もあることから筥崎宮から程近い寺を割り当てられていた。

その日（天正十五年六月十九日）も申の刻（現在の午後五時頃）を過ぎたころ、寺の境内が騒がしくなり、やがて小姓の一人が右近の所に

「ただ今、関白様からの御使者がお見えになりました」

と伝えた。右近は突然のことで

「何事？」

と思ったが、直ちに上座に使者の席を作り、自分は下座で座布団も使わず畳にひれ伏した。やがて使者が入ってきて、上座の位置に立ったまま

「高山右近殿、関白様の命により、関白様からの命令書をお渡しする」

と言って平伏している右近に書状を渡した。右近は正座のまま

「有難く拝見させていただきます」

と、押し頂いてからやおら読み始めた。

二度、三度と読み返した。右近の小姓二名は部屋の外廊下に控えていた。

暫くして右近は

「ただ今、関白様宛ての返書を認めます。ご使者にはそれを関白様にお届けいただけますか」

「畏まりました。関白様にお届けします」

「では、認める間、しばしお待ちください」

の声と同時に襖を開き、小姓に

「ご使者に茶菓の用意を。それと関白様宛てに返書を認めるから、筆、紙などの用意を次の部屋にいたせ」

と、右近の指示が飛んだ。

右近が秀吉からの命令書に最初に目を通した時、墨痕鮮やかに書かれている文字は理解できるが、意味は咄嗟には理解できなかった。二度、三度と読み返すうちに、意味は理解できたが、「何故？突然このような命令が出されたのか」は理解できなかった。

次室で筆や巻紙が用意された座卓の前に座ってしばし

瞑目した右近は、もう一度、関白の命令書に目を落とした。そこには要約すれば

一、キリシタンの掟は悪魔のものである。
二、右近が有力な兵士、一流の武将を感化してキリシタンを日本国内に弘めた。
三、これは予の大いに好まぬところであり、キリシタンの間には兄弟親子も及ばぬ不思議な親密さがあるから、それらは天下を悩ます恐れがあろう。
四、右近は高槻・明石の人民をキリシタンにし、かつ、同地の社寺を破壊し偶像を焼却したことは堪忍しがたいことである。
五、右近が今後も予に仕えることを望むならば、自らのキリシタン信仰を棄教すべきである。

と記載されている。

右近は秀吉がどのような理由で突然キリシタンを悪者として、自分に棄教することを命じたかは、理解できなかった。今すぐにでも秀吉を訪ねて「何故か」を膝詰めで問いただしたい気持ちで一杯であった。しかし、今それを行うことはできない。

この時、咄嗟ではあるが家族ともどもの死を覚悟した。関白秀吉の命に従わなかった者は軽くて所払い、殆どが切腹を命ぜられていた。

右近は小姓を呼び

「ご使者に、関白様宛ての返書を認めているので、あと半刻ほどお待ち願いたい、とお伝えして、酒肴を差し上げるように」

と命じて返事を書きだした。その要旨は

一、自分は、何時いかなる時も、関白殿下に無礼な振舞いをしたことはない。
二、高槻・明石の人民をキリシタンにしたことは、キリシタンの神に対する自分の手柄である。
三、自分はいかなる代償をもってしても、キリシタン信仰とデウスによる霊魂の救いを捨てる意志はないので、即時、関白殿下に明石六万石の所領を返上する。

と認め花押を押して白紙に包み、使者の前に行き

「大変お待たせ申し上げた。失礼をお許しいただきたい。恐れながら関白様にこれを返書としてお渡し頂きたい」

と渡した。

もう時刻は申の刻を大分過ぎているが、右近は認めた返書の内容について自問自答していた。

自分のデウスに対する信仰は絶対なものであり、キリシタンとして信仰を捨てることはできない。明石六万石を返上することは、自分一身の問題ではなく、家中全体の大きな問題で、路頭に迷う家臣も多く出るであろう。家臣たちに心の内を全て話せば理解してくれるものと確信していた。このことを家臣に伝えるのは、右近の返事に対する秀吉からの仕置きが決まった段階で話すこととして、床についた。しかし家族にどのように伝えるか、父飛騨守、妻、子どもたちの顔が浮かんでは消えていた。家族はいかなることであれ右近に従うことは疑いないが、ここで子どもたちの将来を絶たれることについては無念極まりない。

右近はそのまま考え込んだ。いつ切腹命令が来るのか。その前に重臣たちに話をしておくべきか。明石にいる父飛騨守や妻と子ども達にどのように伝えるべきか、兎に角もう少し秀吉の出方を確認する以外にない、と自分に言い聞かせて冷たくなっている茶を啜った。

眠れないまま横になっていると、酉の刻（現在の午後七時半）近くになって境内から話し声が聞こえ、小姓が廊下から

「バテレンのフロイス様が至急殿にお目にかかりたい、とお越しでございます」

の声に飛び起きた右近は

「この部屋で構わないからすぐお通しするように」

と言い終わるか終らないうちにルイス・フロイスが部屋に入って来た。表情から「ただ事でない」と悟った右近は小姓に

「皆の者は廊下の端に行き、誰一人この部屋に近づけてはならない。よいか」

と命じて、フロイスと向き合った。フロイスは

「今夕未の刻過ぎに関白殿下の使者がコエリョ師の乗船しているフェスタ船にやってきて、関白殿下からの書状を置いて行った。そこに丁度私がいたので、その書状を私が読んでコエリョ師に伝えました」

それを聞いて成り行きに驚いている右近の

「その内容は？」

の問いに、フロイスは次のように説明した・

一、日本は神国である。宣教師は日本国内で邪法を弘めていることは良くない。
二、日本は神国であるにかかわらず、キリシタンが神社仏閣を壊していることは不届きである。罰せられるべきであり、今後は全て秀吉の命に従うことを命ずる。
三、バテレンは全員二十日以内に日本から立ち去れ。
四、商船は商売のためであるから、キリシタンとは別問題である。
五、今後、神と仏の教えを妨害しなければ、日本に来る

ことは自由である
と書かれていたと右近に話した。
それを聞いた右近は
「私の所にも、キリシタンを棄教せよ、という指示がありました。私はそれをお断りしました」
フロイスは驚いた表情で右近を見つめている。少し間をおいて右近は
「関白殿下に何があったのでしょう。キリシタン諸大名の協力の下に島津軍を薩摩に押し込め、その限りでは関白殿下の思い通りになった筈です。さらに、バテレン様たちはコエリョ準管区長自ら戦中の薩摩川内にまで関白殿下を訪ね、その後博多で戦勝ご挨拶も申し上げ、その段階では関白殿下はフェスタ船内では大変ご機嫌であらせられたと聞いています」
フロイスは
「今、コエリョ師は、私を高山様の所に来させると同時に、自ら小西行長様を訪ねています。コエリョ師も私も、何故あのように我々を喜ばせてくれた関白様が、何時間も経たないうちに正反対に変わられたのか全く理解できません。明日になれば関白殿下のお考えも多少は分かるのではないかと思います」

と言った後、
「右近さまへの書状はどなたの筆跡でしたでしょうか」
の問いにハッとした右近は改めて書状を開いて良く見ると、筆跡は施薬院全宗の手であった。
「フロイス師、これは関白殿下の侍医、施薬院全宗の筆跡ですね。キリシタン嫌いの施薬院が絡んでいるのですね。施薬院は関白殿下の外交折衝も行うほど信頼されていますし、噂では九州の戦中で就寝する場所が異なる都度、関白の閨の女性調達も役目になっていたとか、噂が流れております」
フロイス師は秀吉の右近に対する棄教命令が出ている事実と、右近がそれを拒否したことを知って、コエリョ師のいるフェスタ船に戻って行った。
ちょうどその頃、秀吉は筥崎宮の奥まった一室で高山右近の返書を施薬院全宗に読ませて
「右近め、気が狂うたか！　キリシタンの神デウスは儂よりも偉いのか！　この世に生きて儂の命が聞けないとは！」
と怒り狂い
「利休を呼べ！」
と怒声を発していた。

呼びに来た茶坊主の後ろを、あたふたと廊下を駈けるようにやってきて、秀吉の前に平伏する利休に
「利休、右近はそなたの茶の弟子だな。キリシタンをやめよ、という予の命令に、身の程知らずと言うか、キリシタンかぶれというか、こんな返事をよこした。不届き極まりない。明日にでも右近の所に行き、そなたが予の考えを説明して右近を説得せよ。それでも右近が素直に聞き入れないのであれば、バテレン同様直ちに追放だ！」
の怒声に、利休は渡された右近の返書に目を通し
「はっ。明日右近殿の陣屋に赴き、関白様の御意向を伝え説得してまいりましょう」
と立ち上がって部屋を出た。
この時間、右近の陣屋では寺の境内が再びざわついた直後
「殿、小西行長様がお越しになりました」
と廊下から小姓が知らせた。
「このままでよい。この部屋にお通しせよ」
の言葉が終わらないうちに行長が入って来た。右近の前に座ると同時に
「高山殿、お聞きか？　関白がバテレン追放命令を出したことを」
「一刻ほど前、フロイス師が来て教えてくれた。吾輩にもキリシタン信仰を棄教せよ、との指示があった。これが使者の持って来た命令書だ」
と行長に渡した。
さっと目を通した行長は
「それで貴公はどうした？」
「お断りの返書を使いに持たせた。これが下書きだ」
それにさっと目を通した行長は
「驚いた。貴公、これでは関白との喧嘩ではないか。切腹の命令が出るかもわからない。何故、表向きだけでもキリシタンを捨てる形にしなかったのだ。関白もこれから十年も生きることはない。それまでの我慢ではないか」
「ご親切は有難い。しかし吾輩はデウスとの誓いを破ることは命に代えてもできない。家族との誓い、家臣との誓い、領民との誓い、いずれも命に代えがたい誓いだ。貴公の言う表向きだけでもキリシタンを捨てろ、という便法はデウスにも、家臣にも、領民に対しても、できないのだ。
拙者は殺される前に家臣、領民に良く話すつもりだ。もし、追放になれば明石六万石を捨てて、流浪の民となる。デウスの教えにある通り、人は神と富の両方に仕えることはできないのだ」
それを聞いた同じキリシタンである行長には声がなかった。暫く沈黙の後
「筥崎宮には、施薬院全宗、石田三成、千利休等が関白

様のお傍に侍っているようであるが、何も知らなかったことにして、明日関白様にご挨拶方々様子を見て来よう」
と言って帰って行った。

翌日は、夕方になっても関白からの達しは何もなかった。夜になって噂を聞いた蒲生氏郷がやってきた。氏郷は千利休の弟子であり、明日にでも右近説得役として秀吉の命により利休が此処にやってくるかもしれない、と教えてくれた。そして右近に対して
「拙者が関白のところに一緒に行って詫びるから、返書は心得違いをいたしました、と言えないか」
と言われたが、右近はその友情には感謝しながら小西行長に話した自分の譲れない心境を語った。

右近はかねて自身の瞑想と、キリシタの教えを思い起こして自分がこれから何をなすべきかを考える一人静かな時を過ごすために、寺の裏庭に面した小部屋を使っていた。時には茶道具をならべ一人で静かに茶を楽しんでいた。

昼、利休が来たらその部屋で二人だけの時を過ごしたいと思い、茶の支度をした。炉も躙り口も造ることはできないので、躙り口は庭に面した引き戸を二尺くらいしか開けられないように工夫していた。畳の上に置く釜の下には平らな板を置き、その右側に、濃い茶色の布を敷き茶碗、棗、茶杓、茶筅などを並べていた。茶碗はその形が武人らしくどっしりとした半筒形の高麗茶碗を置いた。

部屋の飾りは枯れた細い竹筒の花入れに、名も知らない小さな野の花一本を活けたものと、以前細川忠興から譲られた扇面の書だけであった。

部屋の明かりは、裏庭に面した障子から入ってくる光だけで、室内は昼でも薄暗い。

右近はこの部屋で瞑想の時を過ごしているときに、このようなときがいつの日か来るとは思っていた。そして、絶え間なく戦に参加することも、参加しなければ自分がこの世で生きてゆくことができない必要悪で、仕方がないとも思っていたが、内心できることであれば武士を捨てたいと思ったことがある。

次の日の朝、右近が死か追放を覚悟して父と妻あてに手紙を認めていると、小姓が利休の来訪を知らせた。

出迎えに出て、裏庭を茶室の露地に見立てた奥の小部屋に向かった。

「高山殿、見事なお茶室を作られましたな。この部屋には高山殿が、誰が何と言っても自分の考えは変わらない、と主張される空気が漲っています。この古い竹筒に活けられた野の花の置き方から、花の訴えがこちらに響きます。あの半筒形の高麗茶碗と言い、枯れた細い竹筒の花入れ、右近殿の心に秘めた厳しさが感じられ、究極の美と侘びの世界のあり方を見事に習得なされましたな」
と言ってから畳に座った。右近は
「陣中の仮住まい、師がお越しになられると聞き、あり合せの急造の仮茶室でございます。御褒めに預り恐悦に存じます」
「高山殿、あの扇面の書　辿りつけどいまだ山麓　は高山殿らしい奢りへの戒めですな」
右近が覚悟していた関白の叱責の言葉は出てこなかった。
「高山殿、少し教えていただきたいが、茶の世界とキリシタンの教えとは共通するところはおありか」
「大変難しいご質問でございます。いつも師のお造りになっておられる茶室から教えられることは、人は己が心を飾ってはいけないということです。間違っていたらご教授下さい。師の茶室は簡素を極める中に、簡素ならではの究極の美が感じられます。それは、人間にとっても同じこと、人の心も日常の過ごし方も簡素であるべきと存じます。キリシタンの神デウスは、他者に仕えること、他者の欲するものを与えよと命じています。自分だけが贅沢な暮らしをすることも戒めています。そこに茶の侘びの世界との共通点があるかと存じます」
「なかなか厳しい教えですな。高山殿が高槻で、お父上と共に領民、確か農民の棺を担いだとか有名なお話も伝わっていますが」
「はい、それはキリシタンの神デウスは、金持ちや身分の高い者が、貧乏人や身分の低い人たちを蔑むことも禁じています。むしろその人たちと共に喜び、共に悲しむ生活を要求しています。その一環として、農民の棺を領民と共に担いだわけで、キリシタンの世界では当然のことです」
利休が大きく頷いたのを見て
「お茶を差し上げたいと思いますが、いかがでしょうか」
「はい。この素晴らしい茶室で、遠慮なく頂戴いたしましょう」
と答えた利休に、右近は支度にかかった。

作法通りの静寂な時間が過ぎてから、利休は
「高山殿は、関白様が何故一夜にして貴殿に対するキリシタン棄教令と、バテレン全員の追放令を出されたのかお分かりか」
「はい、その点が全く分かりません。一時は関白様の所にお伺いしてお聞きしようとも思った次第です」
「先ず、この九州平定に大阪をお立ちになるときに、どのような備えをなさったか、をお考えください。関白様不在中に何事か起こす危険のある人物、一向宗の顕如と

足利将軍家を九州に伴われましたな。そこはご存知でしょう。それで、今回の九州平定が終わった段階で、小田原の北条、仙台の伊達対策が待っている」

利休はここまで言って右近を見た。右近は利休の次の言葉を待っている。これから利休が言おうとすることについて、右近が分かっていないことを感じて

「関白様は大阪にお戻りになって、直ぐにも北条攻めに向かわれる。小田原北条家は難攻不落の城を誇っている。加えて伊達が関白様に恭順の意を示すかどうか。伊達の動向次第で長期化する可能性がある」

右近は

「それでどうしてバテレンの国外追放につながるのですか」

「今回の九州平定では、キリシタン大名が、高山殿を筆頭に十字架の旗を翻させて見事な戦いぶりを示された。加えて、キリシタン大名は高山殿を中心に戦闘のときも、後方でのときも、常に協調して同じ行動をとっておられた。

キリシタンの間では親子兄弟よりも結びつきが固いものがあると、関白様の目には映った」

一呼吸おいて

「関白様にはポルトガルの武装船を隅々までご覧になられた。あの武装船はキリシタン布教には不要なものだ。バテレン達には何時でも戦闘できる準備がなされている。それと船内でのコエリョの態度は尊大であった。ということは。キリシタン宣教が進んだ段階で、キリシタン大名に国内で蜂起させて、コエリョ等は海からキリシタン大名を支援すれば、九州平定は可能だ。その間にインドからスペイン・ポルトガルの艦隊を呼び寄せることもできる。そうすれば我が国はスペイン・ポルトガルに占領されるであろう」

その話しに驚いている右近を見つめ

「だから、九州を去るにあたって、そのような危険のあるバテレンを国外に追放して、キリシタン大名の中で最も影響力のある高山殿にキリシタンをやめさせることが必要とお考えになられた。そうすれば、他のキリシタン大名では動きが取れなくなるとお考えのようです」

ひと息ついてから利休は

「関白様が、この利休の説得は関白様の御意向であり、それによっても高山殿が先の返書の考えを変えないのであれば、明石六万石は没収する。行き先が困るだろうから、先に肥後の大名になった佐々成正の与力として仕えることは許す、と仰っていますが、御受けになりますか」

との利休の言葉に、右近は

「ご配慮いただき恐縮です。例え一家が流浪しても、デウスへの信仰は捨てません。佐々成正殿に仕える考えはありません」

と答えてから

「この右近の考えは、返書として認め、関白様にお届けになりますか」

「はい。では一筆、認めて頂きますか」

右近は別室に移り返書を認めて利休に渡した。

この後二人は、茶の湯の師弟に戻り、侘び寂の世界と人間の生き方など、久しぶりにお互いの考えを述べ合った。

利休が筥崎宮にいる秀吉の所に戻ると、利休の帰りが遅いと秀吉はイライラしていた。渡された右近の返書を開くや否や

「馬鹿者！右近は追放だ。追放の命令書を届けよ」

と大声を上げた。

怒鳴り終わって後ろを向いている秀吉を、利休が盗み見るようにチラッと見ると、肩を落として項垂れて、右手のこぶしを額に当てていた。秀吉が利休を右近の所に派遣するのを一日待ったのは、右近が詫びに来ることを期待していたのだと悟った。

近くに侍っていた施薬院宗全は、直ちに別室に下がり、追放命令書を書きあげて秀吉に見せると、包み終えた命令書を自分の従者に右近の所に届けるよう命じた。

暫くして秀吉は利休に

「近こう参れ」

と扇子で利休を招き

「右近はどうして予の気持ちが分からないのだ。並みの扱いであれば一回目の返書で切腹ものだ。更に一日待って茶の湯の師弟関係にあるそなたを差し向け、考え直すように仕向け、その上佐々成正に預けることまで道を開いてやった。それは、時期を見て予の所に戻すということが右近には分からなかったのか」

「はい、関白様。私の説得努力が至らないばかりに、関白様の高山様に対する思いを伝えきれなかったことをお詫びします」

「そなたが悪いのではない。キリシタンにはデウスとかいうキリシタンの神が絶対者で、この世の絶対権力者である予よりも偉いのじゃ。だから、キリシタンを野放しにすると、予の命令にも背く反乱が起こる危険がある。加えてキリシタンの間は親子兄弟よりかたい結びつきと信頼関係があり、それにバテレンの力が加わったときどのようなことが起きるかを考えると、今回のバテレン追放と右近に対するキリシタン棄教命令は仕方がなかったのだ」

と、自分の心の内を述懐した。

右近の陣所では、時刻が子の刻（現在の午後十一時半）になろうとしているときにまた関白からの使者が来たので、右近の所に通した。

右近はその命令書を開き、使者に

「関白様に承知仕った、とお伝えください」

と言って使者を返した。

右近は急造した茶室に籠り、明石城にいる父と妻あてに事の次第を知らせる手紙を書き、また、明石城で留守居役をしている家老安藤勘解由宛てには

「ここに残っている全員を明日明石に戻す。城にある金子は、城明渡に要する費用を除いて、全て予に仕えてくれた者たちに配分せよ。家老にお任せする。あとのことは明日の飛脚で知らせる」

と認めて、一人の重臣に「追放」の経緯を簡単に話した上で飛脚として出発させた。

それから、明石にある教会、明石にいる主なバテレンにも事の次第を手紙に書いて、右近とその家族が明石を離れることを詫びた。

既に外は明るくなり、陣所内は朝食の支度や境内の掃除などが始められていた。

重臣の榊典膳に主な家臣と小姓四名を、右近の部屋に呼び集めさせた。

「このところ、夜になると関白の使者が来て、皆に何事かと心配をかけていると思う。実は関白から予に対してキリシタン信仰を棄教せよ、という命令と、この日本に居るバテレン全員に国外追放の命令が出た」

右近は皆の反応を見てから続けて

「この原因は関白の必要以上の用心深さにある。関白は九州が平定できたので、日本全土平定のためには、これから小田原北条氏征伐に出向き、更にその先の仙台の伊達を臣従させなければならない。その間、関白が大阪を留守にしている間に、キリシタン大名がバテレンと手を組んで蜂起する危険を考えた結果の命令である」

右近は座り直して

「先ず結論から話そう。予は関白の命令を文書で拒絶した。結果は予に対し明石六万石の没収と追放である。予はそれを些かも遺憾に思わぬのみか、己が信仰を表明でき、また、我らの主なるデウスの名誉と栄光のために、多年待ち望んでいた苦しみを味わえる機会が与えられたことを非常に喜んでいる。ただ、この際ただ一つ気がかりなのは汝らのことである。汝らは予と共に関白に仕え、いとも大いなる危険に身命を捧げて予に尽くしてくれた。汝らは戦場において勇気を示し、それによって少なからぬ名声と栄誉を獲得された。予が遺憾に思うのは、今、それに対して報いることができぬことである。だが、予手ずから汝らに恩返しが出来ぬ以上、予はそれを全能なるデウスの強力にして偉大な御手に委ねる外はない。なぜなら、汝らはキリシタンであり、その教えをわきまえていることゆえ、デウスはこの世においては、汝らが目下の迫害のため世俗的な財に事欠くに至らしめても、来世においては現世における労苦の報いとして無限の栄光と財宝を汝らに与え給うことであろう。ここに改めて汝らに乞い、汝らに対する愛情から篤と願いたいのは、爾今、汝らが勇気をもって信仰に踏みとどまり、自ら範を垂れ、良きキリシタンとして生きることであり、予はそれを期待している。事態が今さら改まる気配とてはないことだから、予は心ならずも、汝らが妻子や家族のため、生活の糧と保護を容易に求められるところに赴かれるが良いと言わざるを得ない。予の友人である天下の武将の中には、予に対する好意から、汝らを喜んで召し抱え、自領において汝らにふさわしい封禄を付与してくれる人たちは決して少なくはないと思えるからである」

（注①）

右近はそれらの話を、毅然と、しかも笑みを浮かべながら話していた。聞き終わった榊典膳は涙を流して、

「殿、ただいまの殿のお話し、有り難うございます。我々一同はどこまでも殿のお供を致します。殿と死を共に致します」

の涙ながらの言葉に、全員が右近に向かって

「我らも同じです」

と言いながらひれ伏した。皆、目頭を拭っている。

右近は

「汝ら皆に、今まで予に尽くしてくれたことについて心から礼を言う。これから予がどうするのか、明石城をどうするのか、予の家族をどうするのか、今のところは全く決めていない。今朝、明石に向けて現状を知らせるために、武居頼母を急使として派遣した。全てを決めた段階でここを引き払うことができればと思っている。引き払いの準備だけはすすめてくれ。予の供は多くは必要ない。追って連絡する」

と言って、散会し、朝食をとった。

続く

（注①）中公文庫完訳ルイス・フロイス日本史4
P224～225から一部引用

参考文献
完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
フォレストブックス

茶の湯の心で聖書をよめば　同　右
高山右近　高橋敏夫
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
キリシタン大名高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン千利休　谷　真介　パウロ文庫
利休にたずねよ　山田無庵　河出書房新社
キリシタン史の新発見　山本兼一　文芸文庫
千利休「侘びの創造者」　岸野久・村井早苗　雄山閣
茶　平凡社別冊太陽
茶　利休と今をつなぐ　千　宗屋　同　右
武士道　新渡戸稲造　新潮社
茶の本　岡倉天心　岩波文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　講談社学術文庫
日本史年表　歴史学研究会編　宮帯出版社
日本キリシタン史　海老沢有道　岩波書店
高山右近　塙書房
北国新聞社

千家尊福（せんげたかとみ）伝（一）

最高位より上を求めた少壮宮司

村上邦治

はじめに

「王政復古の大号令」により、天皇を中心とする国家づくりを目指す明治維新政府は、千年以上続いた神仏習合を否定する、神仏分離政策とり、神道を柱とする国民教化に着手した。

「神道は宗教ではなく、国家の祭祀である」ことを明確にして、神社で行われる祭祀は、国民がすすんで参加すべきものとしたのである。その為、明治四年、神社は全て国家管理とし、社格制度による格付けを行う、新たな神社制度を発表した。

この新社格最高位である官幣大社に、列格されながら、

「一層社格を高くして、他の官社の上に置き、天下の神社の統宰たらしめよ」

という、大胆な請願をした出雲大社宮司がいた。

当時まだ二七歳であった、千家尊福である。

一　維新政府の神社改革

慶応三年（一八六七）十月、徳川一五代将軍慶喜は、大政を朝廷に奉還し、源頼朝以来約七百年続いた武門政治は、ここに終了した。当初、新政府は、「神武創業」に戻し、「祭政一致」国家を目標とした。この方針により、神祇官再興など一部実施に移されたものの、諸外国からの信教自由の圧力、国内の経済発展を優先させたい進歩派や仏教宗派の反対にあい、当初の構想は修正を余儀なくされる。しかし、体制の根幹である神祇制度と神社改革は着実に推進させた。

明治四年は、神社にとって、大きな変革の年になった。一月には神社境内を除いて、社有地はすべて国に返納させられた。

五月には、神官は、世襲を禁止され、国が新たに任命することになった。そしてすべての神社は、国家管理に移されたのである。

二　新社格の決定

すべての神社が、国家管理にされるに伴い、各社は新たに社格が決められた。この社格名には、『延喜式』で用いられた呼び名が復活した。官幣社は、全国区の神社及び皇室ゆかりの神社が、国幣社は、その土地に密接なつながりのある神社とされ、それぞれに大、中、小の格が定められ、国から幣帛料が共進された。その下位の神社には、地方官が管轄する諸社（府、県、郷、村各社）がおかれた。

政府の社格決定については、事前に慎重な調査が行われた。明治二年、府、県に対し、各神社の由緒、社伝、奉納の品等を調査、報告を指示している。社格公表後には、昇格の運動が起こることが予想されたからである。出雲大社には、神祇官副知事が二度、旧典や古典の調査に訪れている。

明治四年五月発表時の最高位である官幣大社は、二九社であった。その大半は平安朝の二十二社制神社と、七世紀末の神郡特定神社であった。

二十二社制では、賀茂御祖、賀茂別雷、稲荷、平野、松尾、石清水、春日、石上、大和、大神、龍田、広瀬、丹上川上、住吉、広田、日吉の十六社が列せられた。

神郡特定神社からは、鹿島、安房、香取、日前、国懸、の五社、皇室ゆかりの神社として、熱田、生国魂、出雲、宇佐、大鳥、枚岡の六社が選ばれた。その他では、明治二年天皇が既に行幸した氷川と、伊豆三島の各社であった。

二十二社でありながら、大原野、梅宮、吉田、祇園、北野、貴船の各社は、一段低い官幣中社とされた。国幣中社に格付けの神郡特定神社出雲熊野、宗像は不満の声が高まった。皇室ゆかりの神社では霧島、宮崎、香椎宮、橿原等で、昇格の陳情や運動が起きている。

神祇官では、事前の調査を行い、しかも官幣大社は、厳しく選定したため、神社側からの反発に対して、その説得には自信を持っていたのである。

三　出雲大社昇格の請願

社格公表後の翌年、出雲大社宮司千家尊福は、最高位である官幣大社の社格に異議を唱え、さらに上位を請願した。

請願書において、

「大国主大神は天下を経営し、大事業を修め、国作りの大神とも天下造りし大神と呼ばれる」

「然るに、天祖は忍穂耳尊を天下の王と定め、天日隅宮を造ることで、国譲りを願った」

「大国主大神は慇懃なる申出でを了承されて、自らを幽冥界の大権を執って、冥府の主宰となることにされたのである」

「幽冥の大権を執る上は、神霊人魂すべて大神の統治することになり、諸神社の統宰もまた出雲大社が執ることになる」

「かくして、出雲大社は、他の神社と比すべきではなく、一層社格を高くして官社の上に置き、天下の神社の総宰たらしめることが、大神の職掌に適い、天祖の神勅にも貫通する」

と、神典に基づき、理路整然と主張したのである。

新社格制度では、伊勢神宮はすべての神社の頂点であり、他の神社とは別格とされ、社格は付与されていなかったのである。

尊福の請願は、神典の主旨から、出雲大社を、伊勢神宮と同格の「別格の扱い」にすべきことを、主張したのである。

四　出雲国造千家家の国学導入

神祇省を後継した教務省が、感服した尊福の請願書には、江戸中期から始まった、千家家による国学思想の伝統があった。

江戸中期以降、本居宣長を頂点とする『古事記』の研究は、全国に波及していった。中でも宣長が『古事記伝』を出雲大社に奉献した時、いち早くこれを読み、国学に目覚めたのが、七六代千家国造俊秀の弟俊信であった。

宣長の『古事記伝』に感動した俊信は、宣長の門下になるべく行動を起こした。数年間、手紙でのやり取りが続いたが、寛政七年（一七九五）ついに松坂鈴屋で宣長に会い、その門下に加えられたのである。それ以後も、宣長が亡くなるまで指導を受け続け、高弟の一人と称えられた。

俊信の築いた国学は、千家国造家や弟子の中村守臣、守手父子に継承された。

尊福は、中村守手を師として、本居宣長の国学を、若い時から勉学した。平田篤胤の著作が出版されると、「来世には、大国主大神が支配する幽冥界がある」とする復古神道を、独力で修得している。『記紀』や『出雲国風土記』を始めとして、多くの古典を漁り、篤胤の思想をさらに発展させ、「出雲神道」とも呼ばれる、独自の神道を完成させるに至った。

この思想の大本は

「大国主神は、幽事統治し、皇統守護神である」とするものであった。新たに「皇統守護神」とする思想を加え、これを生涯一貫して実践したのである。

二十歳ごろの自書にたいして、師の守手をして、

「此一論、堂々正々之陣也、誰カ能一矢ヲ加遺スルモノアラン。」

と高く評価した。

また尊福の皇統守護論の主張に対し、

「至極至当、鉄壁不破」

と言わしめている。

神道に対する理解は、はやく師を超え、自らの新しい「出雲神道」を、二十才台の半ばで完成させていたのである。

五　教務省の対応

社格導入にあたり、官幣中社からの昇格運動は、予想していたものの、官幣大社である出雲大社のこの請願には、大いに驚いたことであろう。

しかも、天照大神を祀る伊勢神宮と同格の請願である。用意周到に進めてきた教務省にとっては、とても認めることはできなかった。

教務省は尊福の請願を却下した。しかし、歴史的にも由緒が深く、衆庶の信仰も広域に亘っていたことから、一概に却下もできなかったので、左記論告文を付した。

「大国主大神ハ、大造ノ御功徳有シコト、正史ニ見エタル如シ、然レドモ、皇祖大神ヲ奉崇セル神宮ニ匹シテ、御取扱ハ相成カタシ、」

「国史ヲ按スルニ、大社ヨリ熊野ヲ先トシ、勲位モ一等高シ、此レ古ヨリ自ラ祖孫ノ等差ニ依テ社格定レルカ如シ」

と述べたうえで、国造大神と称奉され、天神の詔により宮制も皇居と等しくして御崇敬も他社とは異なるので、社格決定に際しては、

「熊野神社ヲ以テ国幣中社ニ列シ、大社ヲ以官幣大社ニ列セラレタルナリ。」

と弁じたのである。

尊福の請願論拠を正面から弁ぜず、熊野神社との比較において、出雲大社は官幣大社で充分の社格であると結論づけた論告であった。

尊福は、このときの門前払いともいえる教務省の決定に、反論しないで引き下がった。

しかし、彼の信念は全く揺るがず、なお一層、強固なものとなる。

それが明白になるのは、天下を二分する大論争に発展した神道事務局祭神論争であった。この論争の発端となる尊福の提唱は、この昇格請願文において主張した内容と同じものであったのである。

おわりに

千家尊福は、神道理論家として、また出雲大社宮司として、その後の祭神論争の旗手になり、新しい神道思想の拡大に奔走する。

一方、その後の半生は、埼玉県知事や東京府知事などの行政官として、また、西園寺内閣司法大臣として、政界にも行動の場を拡大する。さらに実業家としても重責を果たしている。

狭い神道界に留まらず、多方面で活躍をした明治の巨人尊福の足跡を、何度かに分けて辿っていきたい。

つづく

（参考文献は最後に記載します）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　まんじ

内田の国の物語り⑤

横山正義

平成二十三年の夏のある日のことでした。

私は介護施設に母を見舞いました。

母は「お前を潰そうと思つたことがあったが、潰さなくてよかつた。こうして、九十七歳になっても見舞いに来てくれるのは嬉しい、ごめんな」というのです。

私は物心がついてからそのようなことはなかったので、気にもしませんでした。母が永眠して、数ヶ月が経つと、なにか気になり、私は野菜づくりも老齢化とともにできなくなり、時間が空き、生まれた所に旅行してみることにしました。父母は静岡県田方郡下狩野村という所で働いていました。

三島から駿豆線に乗りました。昭和十五年当時、日中戦争特需で駅は蒸気機関車の蒸気の破裂音、汽笛が喧しく活況を呈していました。現在、電車となり、あの騒音は過去の物になっていました。

終点、修善寺駅に降り立ち、なつかしさと伴に知った道なみ、狩野川に架かる修善寺橋を渡りかけました。南の天城山に暗雲がかかり、太平洋から湿った風が山肌に冷やされ、雨を降らせています。北の修善寺は、ぶ厚い雲に穴が開いたように、青空になり、強い日差しがそそぎます。

天城の私雨（わたしあめ）、修善寺の私晴（わたしばれ）です。自分の周りだけ、雨が降ったり晴れたりするのです。

「あっ、ここだ」暑い日ざしが肌に感じました。

七十二年前と同じです。私は三歳でした、母方の祖母に抱かれていました。祖母は橋の上で、母の支持を待っていたのです。

私は発熱し、意識を失っていました。しかし母は大きな声で祖母に「医者に連れていけ」と怒鳴り、私はその

剣幕に目をあけました。その記憶が甦ったのです。そして母は職場に戻っていきました。祖母は私を曲がった腰で抱いて、電車で田京という静岡県の田方郡という所の中心地の医者に、入院させたのでした。

私は思い出ともに、狩野川のせせらぎを耳にしながら、修善寺橋を渡りきりました。狩野川は急流なのでせせらぎの音が大きく聞こえます。橋の袂に人物大の数体のお地蔵様がありました。次のような立て札が立っていました。

『横瀬愛童将軍地蔵』

「鬼よりなお残酷たり鎌倉執権時政に孫の頼家将軍を伊豆修善寺の山の家に出家となして押し込めたり、子煩悩なる頼家郷、鎌倉表に残したる愛児のことを夢にみつつ里の童を集めてはいたわりかしづき、かしずきたまいける。童も卿に慕いつつ横瀬の山にお供し、狩野の流れに浮かぶ月を眺めて憂きを晴らしている頃は元久元年の時しも七月中八日すだく虫の音ははたと止む、すわ鎌倉の討手ぞと思うまもなく頼家御裸身のままにくくられて、二十三歳一期となして無残の最期を遂げたまう。如何に武運尽きたとて、二代将軍頼家卿、切り刻まれしお姿、人の見る目も哀れなり。里人はこれを聞き伝え、怒りを呑んで浄財を集め、石の地蔵尊由縁も深き狩野川の月見が丘に安置され、行き交う人の守りにも子供の幸を願うと、叶えて下さる御仏に。」

「嗚呼幾く年の星霜も
将軍地蔵は日本一
横瀬に残る御仏の
功徳の程こそ尊とけれ」

母は迷いながらここまで来て、これを見て、私を育てる決心をしたのでしょう。当時、幼子が赤痢、疫痢で死亡するのが常でした。私が発熱して病院に行ったのは、アイスキャンデイを食べたのが原因らしくて、母からはそれから今後、絶対食べるなと、きつく言われました。母の決心がなければ、私は生きて居られなかったでしょう。

数日前、母は祖母にこんなこと事を言っていました。

「職場の広場で、兵隊さんが訓練をしていたのを見ていると、老兵が訓練を終わり、休憩している時、水道で顔を洗い、帽子を置き、頭に水をかぶると、さっと帽子を横取りされ、老兵は無帽子で訓練にもどり、帽子の紛失を上司に報告すると、管理不行き届きをなじられ鉄拳制裁を受けた、こんな世の中で将来子供の幸はないじゃないか」

母は生きていく厳しさに、子育てに関心を失っていました。

父は病床にあったので、祖母は遠慮がちに

「悪いことばかりじゃないよ」と答えていました。

兄はすでに、昭和十二年上海で戦死していました。十

月の終わり、召集令状が来て十月二十七日づけで「上海に着いた。国のために、がんばる」というはがきを送ってきました。十一月七日には戦死したとの連絡が役場からあり、「名誉の戦死だ。おめでとうございます。」

村長や村人、近所の人から祝福され、国民小学校で慶賀式が行われたが、「残された兄嫁や遺児達の心境は複雑だった、夫が親戚代表で感謝言葉を述べた」と母の弁です。十日ほどの間の事件でした。

母は数年の間に、相次いで、兄、夫、母、兄、弟と失い、新築の借金を抱えた父と二人になってしまいました。

私たちは橋を渡ったところの集落、横瀬という所の山腹に、借家をして住んでいました。今、訪れると、竹薮で草木に覆われていました。七十年の年月を感じます。

当時、借家の眼下の狩野川の河川敷で、サーカスの興行があり、大きなアンプで「♪とんとんとんからりんと隣組、障子を開ければ顔なじみ、廻して頂戴回覧板」とそんな歌詞の呼び込みをしていました。

病床にある父、父方の祖母、母と私が住んでいました。祖母は石仏の観音様を購入し拝む、山野の野草を「薬だ」と煎じて私に飲ませるのが健康管理でした。その祖母が酒屋で電話を借り、母の職場に連絡し、私を曲がった腰で抱え、山腹の借家から急坂を下り、修善寺橋まで歩き、入院させたのだから、異常に気がついたのでしょう。

今尋ねると、小笠郡から伊豆に移り住んで数年で、どうして知識の無い祖母が駿豆線で、修善寺駅から幾つか目の駅、田京の医者を知っていたのか不思議に思います。命を繋ぐとは不思議な縁です。あやうさと強靭さ縄の如しです。

現在、地蔵尊の縁日、八月二十四日には老人クラブによる祭礼が催され、参拝者には家内安全のお札とだんごが、ふるまわれるとのことです。

因みに、母の誕生日は八月二十四日であり、意識を消失したのも、九十九歳の八月二十四日でした。私達家族は昭和十六年三月には小笠郡に移り住みました。

数年の思い出です。

私は横瀬を過ぎ、修善寺から流れる桂川に架かる湯川橋を渡り、小立野に入りました。修善寺は二代将軍源頼家が幽閉され、殺害された場所で、平家追討で副将軍として、大活躍した源範頼が頼朝に謀反の疑いを抱かれ、配流され消息を絶った所でもあります。

桂川のせせらぎの音には頼家、範頼の怨念を溶かし混んでいるので、浸み込んだ狩野川の石は、家の基礎には使うなといいます。災いを招くというのです。ここは以前、下狩野村でした。現在は伊豆の国市の役所や図書館が立ち並んでいます。北狩野村、下狩野村、中狩野村、上狩野村と狩野川川沿の村々でした。

緩やかな坂を登っていくと、本立野に入り、狩野川は大見川と分かれるので川幅を狭めます。釣り人が釣り糸を垂れているのが、目を引きます。

当時、叔父(母の弟)は神奈川県横須賀の連隊におり、休暇になると、狩野川に来て、釣り糸をたれていました。石畳を狩野川に降りていく面影を偲ぶと、七十数年の時間が無くなってしまいます。

狩野川の東岸を見ると、狩野館があったとされる、日向が見えます。この道は百年ほど前、大正七年ごろ、踊り子の跡を追って、川端康成が旅した道です。達磨山に連なる山々の懐を、さらに下田街道を天城峠めざして、緩やかな坂道、歩を進め、日本書紀にも記載の由緒ある、軽野神社を通り過ぎ、中狩野村柿木に着きます。

針葉樹、ヒノキ、スギの森を黒木といいますが、頷けます。

柿木橋を渡ると、後の世に、絵画の狩野派、二宮尊徳などを生んだ狩野氏の山城、狩野城のあるところです。

私の住む菊川市、平尾八幡神社の創建は由緒によれば、柿木の長者の女子に養子をとり、養子粟田信麿によるものだと記されています。柿木長者女子の姉御前、満江がいました。

満江御前一回目の結婚

満江は狩野大介茂光の孫で、親光の女子です。最初の夫は源仲成左衛門尉、伊豆の国の目代を務めた人です。

当時伊豆の国の「守」は源三位頼政です。

頼政は宇治で高倉宮以仁王と平家討伐の戦い(治承四年四月)を起こし、宇治平等院で敗死しました。その子の仲綱が伊豆守に補任したころ、在地勤務の仲綱の乳母の子、源仲成が目代として伊豆に赴任していたのです。

満江は当時十六歳、茂光は特別可愛がっていました。満江は行政に携わり、狩野茂光の上司、仲成と満江は柿木狩野城で見合いをし、結婚して、一男一女をもうけました。夫が四年任期を勤め京都に帰ることになると、祖父茂光は「世は平家の世、源氏の仲成は命の保障がない」と心配し、満江との仲を引き裂いて、仲成のみ帰還させて離婚させてしまいました。

嫡子は信俊、女子は後に二宮太郎朝忠に嫁ぎ、隣村の曽我兄弟は二宮の姉御前と慕っていました。二宮尊徳の先祖です。

満江御前二回目結婚

茂光は本家筋嫡男河津三郎祐泰と満江を二回目の結婚をさせました。満江は二十歳でした。佑泰は優れた武将で将来を感じさせるものがありました。相撲の名手で、現在でも祐泰の得意わざ「かわずがけ」は使われています。

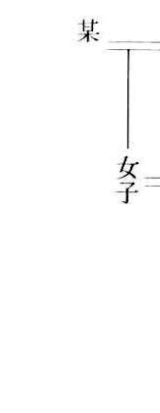
満江は一万丸(十郎祐成)、箱王丸(五郎時致)を生み、律師坊が腹の中にある時のことです。

夫・祐泰は父・河津祐親と工藤祐経との領土をめぐるトラブルの中で、伊豆奥野の狩で、祐経配下の大見小藤太、八幡野三郎に弓で射殺されてしまいました。

原因は複雑な人間関係にあります。工藤家継は久須美の庄（現在の伊東）を先妻の嫡男祐家、（子祐親、孫祐泰）に領地を譲らず、後妻の連れ子の女子との間にできた、祐継、祐経親子に領地を譲ったので、嫡男の子、祐親は譲り受けたのは狭い河津の庄だけ、不満に思い、祐経の領地を奪い、祐親の女子が祐経と結婚していたので、離婚させてしまいました。嫁と領土を奪われ、これに憤慨したのが祐経、祐経は祐親を殺害しようとしたのでしたが、誤って嫡男祐泰を殺してしまったのでした。

工藤氏は藤原南家出身で木工介であったので、工藤を名乗りました。

参考系図一



長男の一万丸（十郎祐成）は五歳、次男箱王丸（五郎時致）三歳でした。満江は自殺しようとしましたが、腹に子があったので思いとどまりました。

「大きくなったら兄弟でこの恨みをはらしておくれ」と満江は子に聞かせました。

満江御前三回目の結婚

その後、満江は舅・祐親の意見に従って、祐親の姉の子曽我祐信のところに嫁ぎました。救いは、大変、夫曽我祐信は優しく、親切であったといいます。

一一九三年五月二十八日源頼朝によって、二十万人参加の大掛かりの富士巻狩がりが行われ、その際、曽我兄弟により、あだ討ちが行われたのです。工藤祐経を殺害後、兄祐成は殺害され、弟時致は頼朝の寝床も、襲い囚われて、斬首されてしまいました。

曽我兄弟の祖父になる祐親が、頼朝に殺害されていたからです。

祐親の女子、祐泰の妹・八重媛（曽我兄弟の叔母）が頼朝の恋人で千鶴丸という子があったが、祐親は取り上げ、松川の上流の「とどき」の淵に沈めてしまい、頼朝と八重姫を分かれさせてしまいました。祐親は京都の平家に勤めたので、平家の仕打ちを恐れたのでした。

この際、曽我兄弟による、十番切りが行われ、掛川の愿小次郎は眉間を割られました。掛川市上内田の内田四郎宗頼が参加して、愿小次郎の横に陣取っていました。いかに激しい戦闘であったか、死者五十余人、負傷した者三百八十人といいます。

満江の子・曽我兄弟は死亡し、頼朝は兄弟の首二つを曽我の満江の所に届けさせました。

曽我兄弟　　昭和十五年当時文部省唱歌

一、富士の裾野の世はふけて、
宴のどよみ静まりぬ。
屋形屋形の灯は消えて、
あやめもわからぬ五月やみ

二、「来たれ時致、今宵こそ、
十八年の恨みをば。」
「いでや兄上、今宵こそ、
ただ一撃に敵をば。」

三、共に松明振りかざし
目指す屋形に討ち入れば、
敵工藤は酔い臥して
前後も知らぬ高いびき

四、「起きよ、祐経、父の仇、
十郎五郎見参」と
枕を職っておどろかし、
起きんとするをはたと斬る

五、仇は報いぬ、今はとて
「出会え出会え」と呼ばわれば、
折りしも小雨降り出でて、
空にも名乗るほととぎす

満江は悲しみのあまりに気を失うほどでした。そして兄弟の時にあだ討ちを期待したことを悔やむのでした。

曽我兄弟は工藤祐経に命を狙われていました。祐経は頼朝に信頼が厚く鎌倉幕府で二番目の地位にあり、祐経の希望に従い由比ガ浜で、兄弟が斬首されるところを武蔵横山党の一族、和田義盛、梶原景時、畠山忠重などの取り計らいで一命をとりとめましたが、曽我兄弟が武士として成長しても、領地は工藤祐経の領地となり、引き継ぐ領地はありません。兄弟を追い詰めたのでしょう。

曽我兄弟の弟は僧籍にあり、律師坊と呼ばれていましたが、曽我兄弟は殺害されたあとで、律師坊は鎌倉幕府から呼び出しを受けたので、自殺してしまいました。

頼朝の襲われたこの事件を、鎌倉頼朝令室・政子に頼朝の弟・副将軍範頼は、兄頼朝が死亡したと伝えました。

この誤報に範頼は頼朝に野心ありと不信を抱かれ、修善寺に幽閉され、消息を絶ちました。満江の最初の男の子、信俊は範頼と常に行動をともにしていたので、殺害されてしまいました。満江は信俊、曽我十郎祐成、曽我五郎時致、律師坊四人の子を失い、二宮の姉御前だけ残りました。

満江御前は尼になって三年目、曽我兄弟の七回忌の正治元年（一一九九）五月二十八日命日に四十九歳で命を断ったといいます。夫の祐信は翌年正治二年七月に後を追うように亡くなりました。

現在六月、伊豆の国、狩野城を尋ねると、狩野塚・狩野家墓地には狩野川の畔、川霧のなかに、青色のアジサイが咲き乱れています。葉に宿る露は満江御前の涙でしょう。あじさい御前です。

柿木には四つ溝柿が群生しています。菊川平尾八幡神社周辺にも数本ですが同じ柿があります。山城狩野城の中腹に柿木神社があります。平尾八幡神社裏山、中腹に柿木神社があり、江戸時代、神主栗田土満により、祭りが行われた祝詞が残っています。地名でも柿木の月見山、花見岡、垣内などと、内田の月岡、山花、垣内と似ている地名があります。

天皇、公家の政治から、武士の政治に移行する軋みの中で生きた女性の悲劇です。

小田原近郊の曽我氏、高田氏、二宮氏は和田の乱で、和田義盛に加担したので、北条氏によって領土を奪われて、乱に参加しなかった狩野氏、茂光の子・狩野行光の子孫がそれを引き継ぎました。

現在、私の住む菊川市内田段平尾では富士山をご神体として、水の神、農業の神に豊作を祈ると同時に、曽我兄弟のあだ討ちが行われた富士山麓を拝して、柿木の姉御前と曽我兄弟の鎮魂のため、精霊供養を住民により毎年、盆に行い回向しています。

富士山浅間菩薩御勤歌

「懺悔　懺悔　六根清浄
御注連に八大金剛童子
刑部の大日　大（棟）竜権現
帰命頂礼　南無浅間　大菩薩
（六根清浄とは眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六つ、これは視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚という五つの感覚器官と、認識し思考する心とにあたり、この汚れもろもろの煩悩を起こさせる源とされ、六つの汚れが除かれ心身ともに清らかになることをいう。）

お勤歌を１０８回唱え、１０８本のたいまつを立て、

供え物をし、柴灯護摩の炊き上げが行われています。

戦前には僧侶の読経が行われていました。

（煩悩百八体とは四苦八苦、（四×九＝三六＋八×九＝七二）＝百八と言うのです。四苦とは「生・老・病・死」で八苦はこれにプラス「愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦」のことです。

愛別離苦とは愛する者と分かれなければならない苦しみ。

怨憎会苦とはにくたらしい者に出会わなくてはならない苦しみ。

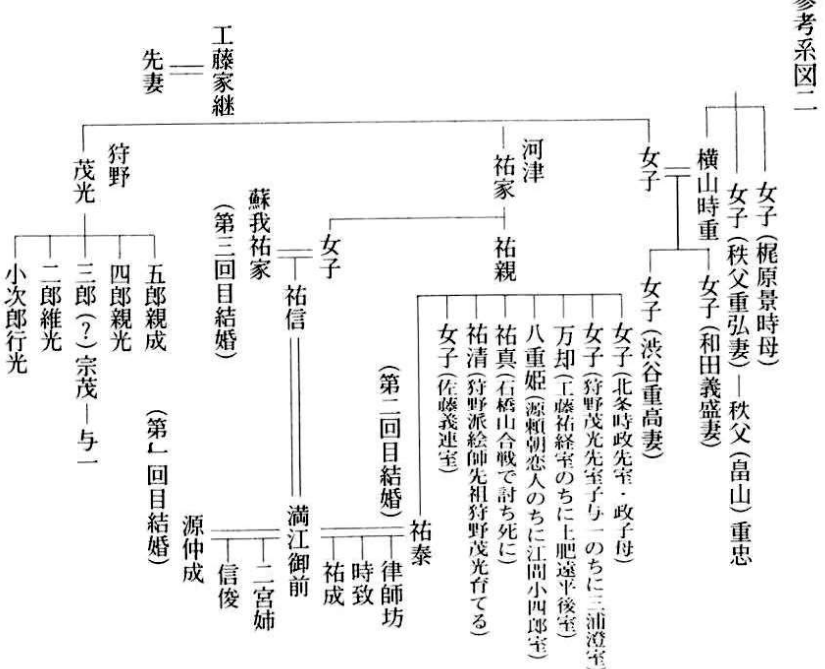
求不会苦とは求めて求めても得られない苦しみ。

五盛陰苦とは感覚や精神面での苦しみ。）

曽我兄弟の苦しみは怨憎会苦でした。

この行事は菊川市市制指定無形文化財第一号です。

参考系図二



「参考文献」
『蘇我物語』『平尾八幡神社由緒』『吾妻鏡』

金銀妖眼（ようがん）

匠　克仁

一、色彩を持たない多崎晶子

多崎晶子は色彩を持たない。生まれつき全身の細胞のメラニン色素が無い。先天性色素欠乏症（アルビノ）である。

晶子の肌は乳白色で、血管が透けてみえる。生まれたときから髪は全部、真白で光り具合で銀色に見える。

メラニン色素はないが、血液は赤い色素を持っているので、眼は淡い赤色をしている。

日本人では二万人に一人くらいの割合でアルビノが生まれると言われる。

晶子も純粋な日本人なのに、白色人種よりも色が白い。輪郭がはっきりと整った顔立ちであり、ハーフか欧米人に間違われることも多い。

日常生活で不自由なのは、日光に弱く、少しでも外にいると、肌や目を痛めてしまう。

特に日常の光でも肌に刺激を感じたり、まぶしく感じたりするので、帽子や日焼け止めや濃いサングラスが欠かせない。

小学生から体育の授業は室内でしか、参加できなかった。スポーツよりも勉強や読書を好んでいた。

多崎晶子は名古屋の高校を卒業して、東京の究美女子大学生物学部に進学した。

自分の姿の影響もあり、分子生物学の道に進み、遺伝子の基礎研究をしたかった。室内で研究する仕事が自分に向いていると考えていた。

独り暮らしをする際に、実家から飼い猫のルビーを連れてきた。

その猫も晶子と同じく色素を持たないアルビノで赤い目をしていた。

白猫には二種類があって、白い色素を持つ白猫と色素を持たない白猫（アルビノ）である。もっとも猫の場合、アルビノの発生率は低いので、白猫のほとんどが白い色素を持っている。

白い色素を持つ白猫は青目が多いが、アルビノの白猫は赤目が多い。

見た感じでは、猫よりも、うさぎのようである。眼の色からルビーと名付けた。

「究美女子大学の近くに、猫を飼う人専用のマンションが有るんですよ」

マンションを探しに両親と大学近くの不動産屋に行って紹介された。

「オーナーが獣医さんで、奥さんもペットの美容室を経営されているのです。二人とも、特に猫が好きで、動物病院と美容室に隣接する所有地に、猫と一緒に住む人向けのマンションを建てたのです」

猫を飼っても良いというのでなく、飼い猫がいないと入居できないという一風かわったマンションである。

シャ・メゾンという名前のマンションである。キャットとマンションの意味のフランス語をつなげた名前である。

マンションはロの字型の一階建てで、オーナーの部屋以外にワンルームが二十四室あった。ロの字の真ん中の空間は、猫用の中庭になっていた。

晶子たちは、オートロックのエントランスを開けてもらい、庭に案内してもらった。

庭には、猫が自由に遊べるように、猫用のタワーが林立していた。中庭へは各部屋から自由に出入できるようにガラス戸と猫専用の小さなドアがある。各部屋の廊下と玄関は建物の外向きに付いていた。

猫の首輪につけたＩＣチップに反応して、上下に開閉する自動ドアである。猫は自分の部屋と庭の間を自由に行き来できるようになっている。

他の部屋のドアに近づいても、ＩＣチップは反応しないので、猫用のドアは開かない。

晶子が訪問したとき、庭には十匹ほど猫が遊んでいた。シャム猫・ペルシャ猫・アメリカンショートヘアー・ロシアンブルー等、珍しい種類の猫が多かった。

オーナー自身が、十匹以上を飼っているとあって、中庭はにぎやかであった。

「たくさんの猫に囲まれて幸せ。ここでいいでしょ」

晶子は父親にねだったが、あまり父親は良い顔をしなかった。

猫好きの晶子にとって、理想的なマンションで、すぐに気に入って入居したいと思った。

高値で売買されている猫が多いので、セキュリティのための監視カメラが数ケ所に置かれていた。

「実質的に女性専用マンションになっています」

男性禁止というわけでなかったが、猫と一緒に住むということから独身女性が多い。さらに究美女子大学が近くなので、半分以上がその学生である。

そのため他の住人も父親か兄弟以外はマンションに招かないらしい。

晶子の父親はセキュリティ面と事実上の男性禁止というのが気に入ったようで、ようやく承諾した。

晶子の部屋は一〇六号室で、両隣とも、今年入学する究美女子大学の新入生が住むことになっていた。

二、虹彩異色症

多崎晶子は引っ越しを終えると、一〇五号室の上川彩子にあいさつに行った。隣が一日早く引っ越しを済ませたと晶子は聞いていた。

このマンションでは猫を抱いて、隣にあいさつするという習慣である。

上川彩子も同じように白猫を抱いてあらわれた。

相手の白猫は、右目が黄色で左目が青色であった。虹彩異色症（オッドアイ）の猫である。

「あっ。金銀妖眼」

晶子は、その白猫を見て思わず口にした。ルビーと相手の猫もあいさつをするように、同時に鳴き声をあげた。

このような虹彩異色症の猫は、黄色を金目、青色を銀目とみて、金銀妖眼と呼ばれている。

「よく知っているわね。さすがにこのマンションに住むだけのことはあるわ」

上川彩子は晶子と同じく新入生であるが、大人びて見えた。なんとなく妖艶な雰囲気をただよわせていた。

初対面で晶子の頭髪から肌まで真白の姿を見て驚いた様子をみせる人が多いが、彩子はそんな素振りをみせなかった。

晶子は初対面のあいさつをすると、彩子を見た。

彩子の瞳は、他の日本人と同じように両目とも黒目に見える。しかし、よく観察すると、右目が茶色で、左目が青みがかった灰色をしていた。

自分が赤い目をしているので、左右の目の色の違いに気付いたのであった。

（彼女もオッドアイなんだ）

左右の虹彩の色が異なるのは、猫に時々見られる。

人間の場合は猫と異なり、虹彩異色症が発生することは少ない。

自身が先天性色素欠乏症であることや猫好きでオッドアイを晶子は知っていることから、彩子の左右の虹彩の違いに気付いた。

目の色を人に指摘されるのは嫌だったので、そのことを晶子は口にすることはしなかった。

彩子は晶子を部屋に招き入れた。

彩子は晶子と同じ究美女子大学の文学部でフィンランド語を学ぶということであった。

彩子は晶子と同じく現役で入学したのであるが、話してみても大人びた雰囲気であった。

「金銀妖眼って名前の通り妖しい感じね。たしか、金目銀目とも言うのでしょう」

晶子は別の呼び名を思い出したので、質問した。

「そうよ。金目銀目よりも、金銀妖眼の方がずっと格好いいわ」

「オッドアイで他の色もあるのかしら」

「緑目青目といって、緑色と青色の組合せもあるけど、少ないわ。金銀妖眼は日本だけでなく、世界中で人気が有るの。タイでは、『白い宝石』と呼んで、瞳は『ダイヤモンドの瞳』と言うのよ」

彩子の猫の名前はデビッドといった。左右の瞳の色が違うイギリスの歌手の名前からつけたそうである。

人間の場合は、先天的な虹彩異色症は少ない。事故等の後天的な理由で、左右の虹彩が異なることがほとんどで、イギリスの歌手も後天的な原因といわれる。

「私もオッドアイなの。私の場合は、先天性でワールデンブルグ症候群って言うのよ」

彩子は隠そうともしないで、平然としていた。

「左の瞳の色が青い灰色だけど、左の視力も右と同じだけあるのよ。ただ、左目はまぶしいのは苦手だけど」

「まぶしいのは私と同じ症状だわ。私は両目だから、もっと不便なのよ。髪もそうだし」

「あなただから言うけど、私も前髪だけ色素がなくて真っ白なの。子供のときから、ずっと染めているのよ。前髪だけ生まれつき白髪っていうのもワールデンブルグ症候群の症状なのよ」

初対面なのに、二人はすぐに打ち解けあって、何も隠さず自分の出生や容姿のことを話した。

三　オスの三毛猫

翌日には、一〇七号室に永池宏実が入居してきた。彩子が晶子の部屋にいるときに、宏実が猫を抱いて、あいさつに来たのである。

三人がそれぞれの飼い猫を膝にのせながら、カーペットに座り込んで話し合った。

永池宏実は芸術学部の新入生で、大阪の出身である。

晶子よりも背が高く、ファッションモデルのようなスタイルをしている。

宏実が飼っているのは、三毛猫であった。このマンションに住む人はペルシャ猫など高価な猫を飼っている人が多い。

その中では拍子抜けするくらい普通の猫に晶子は思った。もっとも晶子のルビーもこのマンションの中では、

目立たない猫である。
三毛猫は右目の周りが黒色、左目の周りが茶色、口の周りが白色と綺麗に三等分になっていた。四本の脚とお腹は真白で、背中が黒と茶でまだらになっていた。
宏実の三毛猫の名前はホームズといった。赤川次郎の小説『三毛猫ホームズ』から借用したものであった。
「実は、オス猫なの」
宏実が言うと、晶子は驚いて、すごいを連発した。
彩子は落ち着いた様子で、何がすごいのかと、不思議そうな顔をした。
「三毛猫も、半分はオスじゃないの」
彩子は三毛猫という種類の猫があって、オスとメスが同じ数だと思っているようであった。
「いいえ。三毛猫の中に、オスは三万匹に一匹しかいないと言われているわ」
宏実が答えると、ホームズが自慢そうに鳴いた。
三毛猫の内、オスはほとんど存在せず、ほとんど全てがメス猫である。小説の中でも三毛猫ホームズはメスであった。
「でも、なぜ三毛猫にオスが珍しいのかしら」
彩子は他の人と同じような疑問を口にした。
「私も上手に説明できないけど、遺伝子の勉強をしている晶子なら、うまく説明できるかしら」
最初の自己紹介で、遺伝子の研究のためにこの大学に入学したと晶子は答えていた。
それで、宏実は晶子に説明役を任せたようであった。
「猫も人と同じで性染色体はXとYがあって、X染色体が二つでメスに、X染色体とY染色体が一つずつでオスになるの」
晶子は彩子に説明した。
「XX型が女性で、XY型が男性になる、というのは学校で習ったわ。たしか、哺乳類は一緒なのね」
「猫の茶色の毛を決める遺伝子は、X染色体にあって、Y染色体にはないの。X染色体の一つに『茶色にする』遺伝子があって、もう一つのX染色体に『茶色にしない』遺伝子があることが三毛猫になる一つの条件なの」
晶子は理解しやすいように、正確さは置いて、簡単に説明をした。
猫の毛の色の遺伝子については、九種類が確認されている。
X染色体に茶毛の遺伝子と、常染色体（性染色体以外）に全身白毛の遺伝子・白のブチ模様の遺伝子・シマ模様（無いと黒毛になる）の遺伝子があり、四つの組合せで三毛猫ができるのである。
茶毛遺伝子の他に、白毛遺伝子が一つも無く、ブチ遺伝子が一つか二つ有り、シマ遺伝子が一つも無いという条件がそろって初めて、黒茶白の三毛猫になる。
これだけでなく、X染色体の不活性化という現象も必

要であるが、省略した。
詳しく話しても、理解してもらうのが難しい。晶子は簡略して説明したのである。
「分かったわ。もともと白毛のところ所に『茶色くしたい』遺伝子と『黒くしたい』遺伝子が喧嘩して、まだらになったのね」
彩子らしい大ざっぱな解釈に晶子は苦笑した。
「大体の考え方は合っているわ。ともかく、三毛猫になるためには、X染色体が二つあることが必要なの。だから、本来なら、X染色体が一つのオス猫には三毛猫はありえないの」
そのように晶子が説明すると。彩子は納得いかないように首をかしげた。
「それなら、この仔はオス猫なのに、なぜ三毛猫なの」
「実は、この仔はX染色体二つとY染色体を一つ持っているの。」
替わって、宏実が説明を引き継いだ。
「XXYなんて、オスでもメスでもない両性具有かもしれないわね。その方が神秘的だわ」
彩子がうっとりしたようにホームズを見た。
本当はX染色体が一つのオス猫でも、茶毛の遺伝子が転座するという現象で三毛猫になる場合もあるが、複雑になるので、これも晶子は省略した。
「そんなに珍しい仔は買ったの」
「違うの。自分で見つけたのよ。ペットショップで百万円の値段で売られているという噂を聞いたことがあるわ。とても買えないわ」
「でも、よく三万匹の一匹を見つけたわね」
「実は、オスの三毛猫は遠くから見ても分かる特徴があるの。オスの三毛猫はとっても脚が長いのよ」
ホームズの脚は、頭と胴体の大きさが同じデビッドやルビーと比べて、三割ほども長かった。
「ホームズだけの個性じゃなくて、オスの三毛猫に共通する特徴なのよ」
宏実はホームズの前脚を交互に振り出した。
「脚を伸ばす遺伝子がXとYの両方の染色体に有るので、性染色体が一本多いオスの三毛猫は脚が長くなるのよ」
晶子が補足で説明した。
「とっても脚の長い赤ちゃんの三毛猫を見つけたの。もしかしてと思って獣医さんに調べてもらったら、オスだったのよ。それがホームズよ」
宏実が説明すると、ホームズは自慢するように鳴いた。
「オスの三毛猫は福猫よ。日本では船乗りの間で船に乗せると沈まないと言い伝えがあるの。南極に昭和基地が出来たときも、わざわざ、オスの三毛猫を連れて行ったのよ」
「金銀妖眼も福猫って言われているわ。福猫が二匹もいるのだから、きっと良い事が有るわ」

彩子が言うと、デビッドも負けないように鳴き声をあげた。

「福猫は三匹よ。アルビノの動物は昔から日本では神の使いとか吉事の前兆って言うでしょう」

今度は、晶子の膝の上のルビーがうなった。自分が福猫でないと言われて、怒っているようであった。

四、アナフィラキシーショック

究美女子大学でも三人はいつも一緒に行動していた。日光が苦手な多崎晶子に気づかって、永池宏実も上川彩子もインドアの生活が多かった。

容姿が普通の人と違っている上に美しいと評判になって、三人でファッション雑誌に載ったこともあった。

三人が一緒に住んでから、最初の一学期が過ぎた。異常気象で例年よりも暑くて、各地で異変が発生していた。

多崎晶子にとって、紫外線カットの完全武装しないといけないので、夏は苦手な季節である。

夏休みの前、晶子の携帯に上川彩子から電話がかかってきた。二人とも最後の試験日であった。

彩子は午前中に試験が終わっていた。晶子の試験を待って、三人で食事しようと誘ったのである。

晶子はマンションに戻る直前であったので、すぐ着くからと答えた。

突然、携帯電話を通して、彩子の叫び声が聞こえた。

「どうしたの」

晶子は心配になって、彩子に呼びかけた。

いつも落ち着いた口調の彩子がパニック状態になっている。ハチが…ハチが…と繰り返して、後が続かない。

彩子がスズメバチに刺されたことを晶子は思い出した。異常気象でスズメバチが大量発生していたので、部屋に入ってきたのだと晶子は考えた。

「わたし、もう一度スズメバチに刺されると、死ぬかもしれないのよ」

世をはかなむような口調で彩子が話したことがある。

スズメバチの毒は、一回目に刺されても、人間の体の中で解毒する抗体ができるため大事に至らない。

ところが、二回目に刺されると、一回目の抗体ができたために、非常に激しいアレルギー反応を起こして、最悪の場合はショック死をすることがある。

人によってアレルギー反応の程度は異なり、また一回目と二回目の間隔が短いとショックは大きくなる。

彩子の場合は、昨年に一回刺されて、体質的にもハチ毒に強いアレルギー反応があると言っていたのである。

それだけに、夏場は彩子も外を出歩くことを好まない。部屋の中で過ごすことが晶子と同じく多かったのである。

続けて晶子が話そうとしたところ、今度はより甲高い叫び声が聞こえた。携帯がぶつかる音と、彩子が倒れる

音がした。その後は何も聞こえなくなった。

何度も晶子は彩子に呼びかけたが、答えは無かった。

晶子は119番通報をしながら、駆け出した。一分も経たないうちに彩子の一〇五号室に着いた。

彩子の部屋のドアを開けようとしたが、鍵が掛かっていた。彩子の名前を呼びながら、ドアを叩いたが、反応が無かった。

「何かあったの」

騒ぎを聞きつけて、一〇七号室から宏実が顔を出した。

宏実は一日早く試験が終わっている。

「彩子が危険なことになっているの」

晶子はドアを叩きながら、答えた。

「危険って」

宏実も靴を履いて出てきた。

「スズメバチよ」

晶子の言葉で、宏実は事態の深刻さにすぐに気付いたようであった。

宏実も彩子がスズメバチに刺されたことを知っている。

「中庭からなら入れるかもしれないわ」

宏実は晶子を自分の部屋に招き入れた。宏実の部屋から二人は中庭に出て、彩子の部屋のガラス戸の前まで行った。

異変を感じて、他の住人も中庭に出て遠巻きに見つめていた。

庭に面したガラス戸も鍵がかかっていた。ガラス戸ごしに彩子が仰向けで倒れているのが見えた。

彩子は眼を見開いたままで、けいれんしていた。右手の甲がはれているのが分かる。

その彩子の両目を心配そうにデビッドが覗いている。

「緊急事態だからガラスを割るわ」

宏実は庭の石を拾うと、クレッセント錠の上のガラスに叩きつけた。手首が入るくらいの穴を開けると、クレッセント錠を回した。

頭で考えるのは晶子が得意とするが、行動は宏実の方が速い。いつも宏実は男性のような行動力がある。

先に宏実が入って、晶子が続いた。開け放たれたガラス戸からスズメバチが出て行った。

「たしかエピペンがある筈だわ」

晶子は叫んだ。

エピペンとはアナフィラキシーショックを抑えるペン型の注射器である。彩子は常にエピペンを持ち歩いている。

宏実は彩子のスカートのポケットを探ると、エピペンを取り出した。

自分で注射する余裕がなかったようであった。

宏実は彩子の右ふとももをむき出しにして、ペンを突き立てた。

彩子は真っ赤な顔をして、息苦しそうであった。アナ

フィラキシーショックで死亡する原因の一つは、舌や呼吸器官が膨張して窒息死するためである。

トカゲの尻尾のように彩子の舌が突き出て踊っていた。宏実は彩子の鼻をつまむと、自分の唇を彩子の唇に押しつけ、人工呼吸をした。三分ほど宏実は人工呼吸を続けていた。

晶子も応急処置を習ったことがあり、彩子の胸元を押さえて、心臓マッサージを行った。

救急車のサイレンが聞こえて、マンションの前に到着したようであった。

救急隊員が彩子を担架に乗せて、救急車へ向って運び出した。宏実が晶子の手を引っ張ると、救急隊員に声をかけた。

「親友なんです。付き添いたいので、私たちも乗せて下さい」

二人は強引に救急車に乗り込んだ。

五、彼？

彩子が運ばれたのは、究美大学キャンパスの隣の大学病院であった。

彩子の兄は、宏実からの電話を聞いて、二時間後に駆け付けた。

兄の上川創は二十二才で、横浜に住んでいる。今年、大学を卒業して、鉄道会社に就職していた。

やはり左右の虹彩の色が異なるようであるが、よほど注意しないと気付かない。それよりも短く刈り込んだ頭髪の前三分の一が白髪で目立った。

両親は幼い頃に事故で亡くしたということであった。彩子の大人びた雰囲気はそれまで苦労をしたからと晶子は思った。

彩子は意識が回復しないので、そのまま入院することになった。

彩子の身の回り品を取りに創がマンションに行った。

入院した彩子のショック症状は、かなり重いものであった。

アナフィラキシーショックで日本人は毎年二十名前後が死亡している。

「妹とつきあっている男がいるんだろうか」

戻った創は二人に場違いな質問を投げかけた。

「彩子には彼氏はいないと思うけど」

晶子が答えた。

「実は、悪気はなかったが、妹の日記が開いたままだったので、見てしまった。日記に『彼』という言葉がでてくる。今日も彼が部屋に来たと書いているので、気になって」

「私もよくお邪魔しますが、彩子の部屋に男性がいたことはありません。マンションに男性はオーナーの獣医さんだけですが、オーナーの部屋は別の玄関があって、私たちのところには入ってきません」

宏実は創をなだめるような言い方をした。

「こんな非常事態に変なことを言って…。彼と言う表現が気になって。固有名詞で書けないような男なのか」

創はまるで、その男性が彩子を殺そうとしたかのように毒々しく吐き出した。

「妹に男を近づけたことは無かったのに。一人暮らしさせたことが間違いだった」

彩子の日記の彼の話を聞いたとき、晶子は不謹慎と思いつつ、ミステリのようだと思った。

日差しを浴びることのできない晶子は、部屋にこもって読書をするのが趣味である。

特にミステリ小説が好きで、日常生活の中の不思議を解決するようなものと、密室トリックのような本格パズルが好きである。

最近は銀行の金庫室での密室殺人の連載小説を読んでいる途中で、かなり興味を持っている。

今回は不幸な事故であり、事件性は無い。創が誤解しているが、男性が密室に忍び込んで、彩子に危害を加えたということはない。

しかし、現場に男性がいたとしたら、晶子の好きなタイプの日常生活のミステリである。

「いつも落ち着いて慎重な彩子が、スズメバチに刺されるなんて」

病室の廊下で宏実がつぶやいた。

「携帯電話で私と話をしていたのも、運が悪かったわ」

「どういうこと」

「彩子はワールデンブルグ症候群っていうのだけど、片方の耳が聞こえないの。彩子は左目が青みの灰色をしているけど、同じ左の耳が聞こえないのよ。それで携帯電話で右耳もふさがっていたので、スズメバチに気付くのに遅れたかもしれないわ」

「耳が悪いのは私も気付いていたけど、それも症候群の一つだったのね」

「金銀妖眼も同じなの。銀目つまり青目の側の耳が聞こえないことが多いのよ。おそらくデビッドも銀目の側の左の耳が聞こえないと思うわ」

遺伝子の話であれば、晶子は得意である。

「もともと両目とも青目の猫の場合には、生まれつき両耳とも聞こえないことも多いのよ。聴覚障害を起こす原因が、青目を作る遺伝子に関係しているからなの」

青目で耳が聞こえないのは、シャム猫には少ないが、ペルシャ猫では多いなど猫の種類でも違っている。

「晶子って本当によく知っているわね。なんか怖いくらいよ」

宏実は晶子の知識に感心するよりも、怖れるような態度をみせた。

六、XとY

晶子と宏実は一度、病院からマンションに戻った。創は病院に残るようであった。

翌朝、晶子と宏実は歩いて、大学病院に向かった。いつも日を浴びるのを避けて、晶子はバスを使う。曇り空なので、宏実に歩いて行こうと晶子が誘ったのであった。

「彩子の日記の『彼』って宏実のことでしょ」

しばらく沈黙が続いていたが、晶子が話しかけた。

「やっぱり、晶子は気づいたのね」

宏実はいたずらが見つかった子供のようであった。

「彩子はワールデンブルグ症候群でしょ。オッドアイで、耳も片方が聞こえないし。だから、同じ特徴を持つ金銀妖眼のデビッドを飼ったと思うの。私もアルビノなので、同じアルビノのルビーを飼い猫に選んだわ」

晶子は言葉を止めて、並んでいる宏実の横顔を見た。

「彩子と私が同じ理由で、飼い猫を選んだのであれば、もしかして宏実も同じ理由で……」

晶子は言いよどんだ。

「いつか晶子には正直に話そうと思っていたの。晶子は遺伝子や染色体のこと専門に勉強しているし、私のことはきっと理解してくれると思っていたから。私はX染色体が複数とY染色体が一本持っているよ」

「クラインフェルター症候群ね」

オスの三毛猫と同じである。

人間の場合は、猫よりも多く、千人に一人の割合で発生すると言われている。

X染色体が二つ持つ場合を女性、X染色体とY染色体を一つずつ持つ場合を男性と定義すると、理屈の上ではクラインフェルター症候群は、どちらにも属さないことになってしまう。

医学的にはY染色体がある場合、男性と判断する。普通であれば、男性として育てられる。

クラインフェルター症候群などを含めて、性染色体や性ホルモンが原因である中間の性（インターセックス）が、百人に一人とも言われている。

「XXY型なのね」

晶子は確認するような口調であった。

「いいえ。XXXXY型なの。性染色体が五つなの」

宏実は指折り数えながらXを四つ言った。晶子は足を止めて、宏実を見た。

（X染色体が四つ、Y染色体が一つ……）

一瞬であるが、晶子の頭は混乱した。性染色体は父母から一つずつなので、二つである。

間違って多く受けとって三つである。確率はかなり低いが、両親とも間違って二つずつ受け取っても四つである。性染色体が五つはありえないと考えたのである。

次の瞬間に、精子や卵子のできる染色体の減数分裂は

二回されることを晶子は思い出した。

母親の二つのX染色体は一回目の分裂で二グループに一本ずつに分かれるが、間違えて二本が同じグループに入る。さらに二倍に増えて、二グループに分かれる。また間違えて四本が同じグループに入る。

その場合、まれだがX染色体が四つの卵子ができる。その卵子とY精子から子供が生まれると、XXXXY型になる。

晶子の中でX染色体のイメージは女性であり、Y染色体のイメージは男性である。

細胞という小部屋の中で二人X（女）がいれば、外でも性は女になる。X（女）とY（男）が一人ずついればY（男）の影響が大きくて、外ではY（男）になる。

しかし、細胞の中にX（女）が四人もいて、Y（男）が一人だけの場合どうなるのだろうか。

宏実の体の中に四人の女性と一人の男性がいるような錯覚を晶子は感じた。

宏実は自分の出生から話し始めた。

出生時には外観から女の子と判断された。それだけ男の子の特徴が小さかったからである。

完全に女の子の体とも違っているので、染色体検査が行われ、クラインフェルター症候群と分かった。

しかも、XXY型でなく、XXXXY型と診断された。

クラインフェルター症候群の中でも、X染色体の数が多いと、それだけ女性らしさが目立ってくる。

女性的な体つきがはっきりしていると、女の子として育てざるを得ない。立って排尿ができないようだと、男性として生活しにくい。

外科手術では、男性化手術の方が女性化手術よりも十倍ほど困難であると言われている。

宏実の両親はかなり悩んだのであったが、戸籍上は女の子として出生届を出した。

宏実自身も精神的には女の子であると思っていたので、いわゆる性同一性障害ということはなかった。

実際に成長してからも、女性らしい特徴が目立った。定期的に女性ホルモンを投与したので、普通の女性よりも、はるかに女性らしくなったのである。

「彩子には話したの」

晶子は思い切って聞いてみた。

「いいえ。でも気付いていたのね。まさか私のこと『彼』って日記に書いていたなんて」

宏実は困惑したような笑みを見せた。

「あなたに好意を持っていたのよ」

彩子は宏実に対して、同性として憧れているというよりも、異性としての恋愛感情を抱いていたかもしれない。それで日記で彼という表現を使ったのであった。

おそらくホームズと一緒のときは、宏実と書いていたのだろうと晶子は考えた。

大人びて勘の鋭い彩子は、宏実の中のY染色体を感覚的に感じ取ったかもしれなかった。

話している内に二人は病室に着いた。ベッドの横に座っていた創が声をかけた。

「彩子が目を覚ましたよ」

晶子と宏実はベッドの彩子のもとに駆けよった。創は仮眠すると言って病室を出て行った。

「良かったわ。一時は助からないかと心配だったの。宏実が懸命に人工呼吸したおかげよ」

晶子の言葉で、倒れたときのように彩子のほほが赤くなった。

病室の光が彩子の瞳にあたった。瞳は茶色と灰色の異なった色で妖しく反射した。

〈参考文献〉
『三毛猫の遺伝学』ローラ・グールド著　翔泳社
『ネコと遺伝学』仁川純一著　コロナ社
『医学大辞典』医学書院
『Waardenburg症候群の1家系』金沢大学十全医学界雑誌
『オスの三毛ネコの謎』『吉日の白ネコ&玉抜きネコのタマ』竹内久美子著

作者は染色体や遺伝子の影響による身体的特徴を人間の個性として尊重したいと考えています。クラインフェルター症候群や、ターナー症候群（性染色体がX一本）、ダウン症候群（21番染色体三本）なども価値ある個性と思っています。この個性に対する偏見を助長するのは、作者の意図ではありません。

（村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』が発表されて、どんなストーリーだろうかと想像して、この小説を書き始めた。

ぼくはタイトルから、主人公は色素欠乏症か色覚異常なのでないかとてっきり思い込んだ。そういう人物を主人公にすると、偏見を助長するという抗議があるのでないか、と読む前から心配した。

もし、そういう人が主人公だったら、どんな小説になるかと思って、書いたのが本作である。主人公を男性から女性にかえて、色々とアレンジしたのである。

村上春樹の新作を読みながらも、妄想していた。主人公の姓に色の文字が入っていないからというのは少し意外であった。ぼくは本を読みながら、勝手に別のストーリーを想像する癖がある。

多崎つくるは、名古屋の高校時代に仲の良い友人が四人いた。友人は男二人と女二人であったが、四人とも色に縁があった。

その四人とは、ロシアの血をひくという碧い目の蒼さん・馬のたてがみのような栗色の茶髪の馬並くん・真っ黒に日焼けしてお歯黒の烏賊墨くん・いつもリストカットして血だらけの乃皿さんである。

青・茶・黒・赤の色彩の中で、身体的特徴に目立った色彩を持たない多崎は自分だけ仲間外れのようで悩んだのである。

多崎は、西暦19蜂4年に蒼の住むフィンランドに巡礼の旅に出た。小説の中は1984年のパラレルワールド（平行世界）であり、太陽が二十個ある世界である。

ついでに隣国のノルウェイの森に行った。まんじの小説が評価されてスウェーデンでノーベル文学賞を受けた。

そこで、ねじまき鳥と一緒に風の歌を聴きながら、ライ麦畑のパン屋を襲撃して、……）

還暦からの考古学（二十八）

二里頭遺跡出土青銅製品の鉛同位体比による原材料供給鉱山からみた当時の中国大陸の様相

中山喬央（たかひろ）

1956年、鄭州洛達廟遺跡を発掘中に、研究者達は文化の様相に若干の特色があることに気付き、これを「洛達廟型」と称えた。

1959年以降、河南省偃師・二里頭遺跡で学術的発掘が継続して行なわれる様になってからは、ここの遺物が一層典型的要素を具備していたので、遺跡の名前をとって、このタイプの文化の名前を二里頭文化と命名した。

（『中国大百科全書・考古学』116頁左段、下から8行目～右段、上から5行目迄。筆者訳）

二里頭遺跡

二里頭文化の標識遺跡である。河南省偃師県二里頭村南に位置し、北に洛河を臨んでいる。

放射性年代によれば二里頭文化の年代はBC1900～

二里頭文化

中国青銅器時代の文化。河南省偃師県二里頭遺跡の名をとって命名した。

年代は凡そ紀元前21世紀から紀元前17世紀までの間である。

主に河南省中部・西部の鄭州付近と、伊・洛・潁・汝の諸河川の流域から、山西省南部の汾水下流一帯に分布する。

現在までに発掘された遺跡は洛陽の東、千溝、煙李、東馬溝と陝県の七里鋪、汝煤山に臨む鄭州洛達廟と山西省夏県の東下馮、翼城感軍等十あまりの地点を含めた百近くとなっている。

この文化の遺物が、最も早く発見されたのは、1952年河南省登封の王村遺跡である。

1500年である。遺跡の面積は3平方K米、二里頭文化の上層には、商代二里岡期（鄭州商代遺跡と同時期）の文化層と漢代の文化層があり、下層には廟底溝二期文化と仰韶文化の堆積がある。ただし二里頭文化以外の遺構と遺物は全てとても少ない。

二里頭文化の遺跡として検出されたものは、宮殿建築の基礎と、工房遺構、一般住居、陶器窯、貯蔵穴、墓等である。

（『中国大百科全書・考古学』118頁左段、14行目～25行目迄。筆者訳）

遺物

二里頭文化の遺物には、青銅器、玉器、陶器、石器、骨角器、貝器があり、青銅器の主なものは工具、兵器、礼器、楽器と装飾品である。

生産工具には、刀、手斧（ちょうな）、鑿（のみ）、釣針等があり、一つの鋳型か、或いは重ね合わせた鋳型を用いて鋳造している。

武器には戈（か）、鉞（まさかり）、鏃（やじり）があり、戈の形式は直援曲内式で、「欄」はなく、曲内の後端に花文の突起があり、精緻に作られている。

祭礼用の器には爵（しょく）と斝（か）の二種類があり、爵の方が数量は多いが器壁は薄く、柳腰で平底である。時期の早いものは無地で柱がなく、時期の下がったものは、小さな柱を持ち、簡単な花文と彫刻した孔が施されている。

二里頭遺跡出土の青銅容器は、現在のところ中国で最も古い青銅器であるが、その多くは鋳型を合わせて鋳造されたもので、器体には鋳型の縫い合わせ痕が残されていて、仕上がりは不良である。

楽器には鈴がある。

装飾品で、トルコ石を象嵌した獣面の銅牌飾りがあるが、作り方は精巧で美しく、熟練した象嵌技術を表現している。

（『中国大百科全書・考古学』118頁右段28行目～38行迄。筆者訳）

時期分類

二里頭文化の遺跡は四期に分けることができる。

第一期の陶器の特徴は、磨いて艶出ししたものと、表面が黒色あるいは茶褐色のものが相対的に多く、文様はタデ科の一年草である藍（あい）をデザインしたものが主で、器形は幅が広く縁どられ、小さな平底で、河南龍山文化の色彩が濃厚である。

第二期の陶器の特徴は、磨いて艶出ししたものと、表面が黒色のもの、および茶褐色のものの割合が更に増える。文様は細縄文が主となり、器形は幅が狭く縁どられるようになり丸底となる。

簋（き）、大口尊等が出現する。

第三期は全盛時代で、様々な遺跡がこの時期に属している。

陶器は灰色の陶器が明らかに増加し、陶質は堅牢となり、器の表面は淡い灰色を呈し、内壁には小さな斑点を持つようになり、文様は粗い縄文が主となる。

器形は縁取りのある丸底で、新しい器種として鬲（れき）等がある。

第四期は、第三期と似ていて、陶器は灰色を呈すものが主であるが、縄文は一層粗野となり、口縁を広げる器が増加し、みやびやかな新しい平底の器が一部に出現する。

（『中国大百科全書・考古学』119頁、左段4行目～14行目迄。筆者訳）

分析青銅製品

『古代東アジア青銅の流通』298頁。

二里頭文化の時期を前2100年～前1550年とし一～Vに分類。

『古代東アジア青銅の流通』300頁～301頁の表2、「二里頭遺跡から出土した銅製品の鉛同位体比」に掲載された62点。

分析結果

番号1、測定番号ZY—530、資料名　残片、時期Ⅱ
鉛同位体比指数17.529・15.448・37.726・0.8813・2.1522

これは212香寄・山東を50%、210鄧家山・甘粛を50%混合したものを96%と205柴河・遼寧を4%混合したものが、17.511・15.514・37.732・0.8866・2.1560となり、相違指数181で一致する。

（以後、番号・測定番号・資料名・時期、鉛同位体比指数を省略する）

2、ZY—534、残片、Ⅱ
18.175・15.567・38.311・0.8565・2.1079

これは214福山黄銅鉱・山東を92%と、205柴河・遼寧を8%混合したものが18.186・15.576・38.292・0.8568・2.1054と相違指数67で完全に一致する。

3、ZY—535、錐?、Ⅱ
18.270・15.604・38.451・0.8541・2.1046

これは214福山黄銅鉱・山東を97%、205柴河・遼寧を3%混合した18.245・15.582・38.447・0.8542・2.1072と相違指数78で完全に一致する。

4、ZY—537、残片、Ⅱ
16.659・15.270・36.920・0.9166・2.2162

これは202錦西・遼寧を89％′ 201青城子・遼寧を11％混合した16.666・15.326・36.866・0.9200・2.2127が相違指数186で一致する。

5′ ZY—538′ 溶渣′ Ⅱ
18.148・15.584・38.343・0.8587・2.1128
これはf42広東仁化凡口中上泥盆紀を97％′ v—121広東仁化凡口獅子嶺鉛亜鉛鉱を3％混合した18.149・15.548・38.340・0.8567・2.1125が相違指数63で完全に一致する。

6′ ZY—541′ 鐸′ Ⅱ
18.270・15.590・38.415・0.8533・2.1026
これは214福山黄銅鉱・山東を96％′ 205柴河・遼寧を4％混合した18.234・15.581・38.416・0.8547・2.1068が相違指数102で一致する。

7′ ZY—545′ 残片′ Ⅱ
17.747・15.502・37.858・0.8735・2.1332
これは201青城子・遼寧を90％′ 205柴河・遼寧を10％混合した17.762・15.584・37.871・0.8775・2.1319が相違指数163で一致する。

8′ ZY—546′ 錐？′ Ⅱ
18.634・15.653・38.561・0.8400・2.0694
これはpb—07広東大宝山多金属鉱を77％′ 1—103雲南会沢麦耳坪cを23％混合した18.602・15.677・38.489・0.8428・2.0693が相違指数157で一致する。

9′ ZY—549′ 刀′ Ⅱ
17.127・15.385・37.171・0.8983・2.1703
これは201青城子・遼寧を48％′ 203不明・遼寧を52％混合したもの91％に′ 205柴河・遼寧を9％加えたものが17.116・15.429・37.169・0.9024・2.1732で′ 相違指数127と一致する。

10′ ZY—552′ 刀′ Ⅱ
18.257・15.573・38.363・0.8530・2.1013
これは214福山黄銅鉱・山東94％に′ 205柴河・遼寧6％混合したものが′ 18.210・15.579・38.354・0.8557・2.1061となり′ 相違指数137で一致する。

11′ ZY—554′ 錐？′ Ⅱ
18.283・15.595・38.433・0.8530・2.1021
これは214福山黄銅鉱・山東97％に′ 205柴河・遼寧3％を混合したものが18.245・15.582・38.447・0.8542・2.1072となり′ 相違指数128で一致する。

12′ ZY—559′ 鈴′ Ⅱ
18.283・15.588・38.414・0.8526・2.1011
これは214福山黄銅鉱・山東96％に′ 205柴河・遼寧4％を混合した18.234・15.581・38.416・0.8547・2.1068が相違指数136で一致する。

13′ ZY—563′ 鑿′ Ⅱ
18.239・15.571・38.347・0.8537・2.1025
これは214福山黄銅鉱・山東を94％′ 205柴河・遼寧を6％混合したものが′ 18.210・15.579・38.354・0.8557・2.1061となり′ 相違指数100で一致する。

14′ ZY—570′ 鈴′ Ⅱ
17.901・15.492・37.904・0.8654・2.1174
これは1—104雲南会沢巧家茂組Z′ 91％と212香嵜・山東9％を混合した17.901・15.464・37.958・0.8640・2.1208が相違指数130で一致する。

15′ ZY—523′ 残片′ Ⅲ
18.271・15.582・38.391・0.8528・2.1012
これは214福山黄銅鉱・山東を95％′ 205柴河・遼寧を5％混合した18.222・15.580・38.385・0.8552・2.1065が相違指数134で一致する。

16′ ZY—542′ 残片′ Ⅲ
16.691・15.276・36.774・0.9152・2.2032
これは202錦西・遼寧を87％′ 201青城子・遼寧を13％混合したもの94％に′ 205柴河・遼寧6％加えた16.716・15.340・36.807・0.9181・2.2028が′ 相違指数155で一致する。

17′ ZY—543′ 残片′ Ⅲ
18.136・15.566・38.300・0.8583・2.1118
これは214福山黄銅鉱・山東92％と′ 205柴河・遼寧8％混合した18.186・15.576・38.292・0.8568・2.1054が′ 相違指数147で一致する。

18′ ZY—547′ 刀′ Ⅲ
18.127・15.544・37.913・0.8575・2.0915
これは1—劉′ 河南桐柏大河区劉山岩87％と′ 銅—2湖南江永銅山嶺鉛亜鉛鉱13％混合したもの56％に215桐柏含黄鉄鉱・河南を44％加えたものを60％とし′ これに程—1安徽青陽五昌廟を40％入れたものが18.137・15.548・37.904・0.8573・2.0898となり′ 相違指数42で完全に一致する。

19′ ZY—548′ 爵′ Ⅲ
17.628・15.417・37.526・0.8746・2.1288

これは孟一4江西九江城門山鉛亜鉛鉱73％と209丹鳳・陝西27％を混合したもの75％に′ 212香岑・山東25％加えたものが17.625・15.380・37.503・0.8731・2.1290となり′ 相違指数80で完全に一致する。

20′ ZY—550′ 刀′ Ⅲ
17.188・15.383・37.427・0.8950・2.1775
これは201青城子・遼寧を54％′ 203不明・遼寧を46％混合したものが′ 17.201・15.446・37.433・0.8990・2.1779で′ 相違指数126となり一致する。

21′ ZY—551′ 刀′ Ⅲ
18.226・15.539・38.256・0.8526・2.0990
これは214福山黄銅鉱・山東を91％′ 205柴河・遼寧を9％混合したもの76％に′ 孟一1安徽・青陽・五昌廟を24％加えたものが18.211・15.590・38.227・0.8563・2.0990で相違指数132と一致する。

22′ ZY—555′ 刀′ Ⅲ
18.272・15.581・38.395・0.8527・2.1013
これは15′ ZY—523′ 残片′ Ⅲと相違指数8で完全に一致している。
214福山黄銅鉱・山東を96％′ 205柴河・遼寧を4％混合した18.234・15.581・38.416・0.8547・2.1068が相違指数134で一致する。

23′ ZY—557′ 錐？′ Ⅲ
18.280・15.611・38.465・0.8540・2.1042
これは214福山黄銅鉱・山東を98％′ 205柴河・遼寧を2％混合した18.257・15.584・38.478・0.8536・2.1075が相違指数100で一致する。

24′ ZY—558′ 残片′ Ⅲ
18.251・15.572・38.354・0.8532・2.1015
これは214福山黄銅鉱・山東94％と′ 205柴河・遼寧を6％混合した18.210・15.579・38.354・0.8557・2.1061が相違指数119で一致する。

25′ ZY—560′ 爵杯′ Ⅲ
16.597・15.278・36.749・0.9205・2.2142
これは202錦西・遼寧を94％′ 201青城子・遼寧を6％混合した16.600・15.310・36.794・0.9225・2.2169が相違指数127で一致する。

26′ ZY—568′ 坩堝渣′ Ⅲ
18.045・15.522・38.147・0.8602・2.1140
これは210 家山・甘粛を98％′ 205柴河・遼寧を2％混合したもの52％に′ v001安徽・黄山嶺を48％加えた18.042・15.522・38.089・0.8604・2.1111が相違指数92で完全に一致する。

27′ ZY—569′ 熔渣′ Ⅲ
18.142・15.562・38.280・0.8578・2.1100
これは214福山黄銅鉱・山東を91％に′ 205柴河・遼寧を9％混合したものが18.174・15.575・38.261・0.8573・2.1051で相違指数118と一致する。

28′ ZY—571′ 鈴′ Ⅲ
18.029・15.530・38.104・0.8614・2.1135
これは210鄧家山・甘粛を98％′ 205柴河・遼寧を2％混合したもの60％に′ v001安徽・黄山嶺を40％加えたものが18.040・15.540・38.101・0.8614・2.1119となり′ 相違指数40で完全に一致する。

29′ ZY—574′ 刀′ Ⅲ
17.398・15.434・37.606・0.8871・2.1615
これは212香岑・山東を62％′ 210鄧家山・甘粛を38％混合したもの94％に′ 205柴河・遼寧を6％加えたものが17.383・15.487・37.596・0.8915・2.1638となり′ 相違指数145で一致する。

30′ ZY—576′ 刀′ Ⅲ
17.772・15.485・37.801・0.8713・2.1270
これは201青城子・遼寧を87％′ 205柴河・遼寧を13％混合したもの93％に′ w047広西大厰巴黎多金属鉱を7％加えたものが17.773・15.565・37.796・0.8760・2.1265と相違指数138で一致する。

31′ ZY—578′ 爵′ Ⅲ
16.280・15.212・36.501・0.9344・2.2421
これはpb—06広東肇慶大降坪を51％′ 206西樵皮・山西を49％混合したものが16.323・15.186・36.473・0.9373・2.2419と相違指数128で一致する。

32′ ZY—522′ 残片′ Ⅳ
16.708・15.289・36.829・0.9151・2.2043
これは202錦西・遼寧を87％′ 201青城子・遼寧を13％混合したものを95％とし′ それに205柴河・遼寧を5％加えたものが16.712・15.339・36.822・0.9183・2.2041で相違指数95と完全に一致する。

33′ ZY—524′ 鏃′ Ⅳ
16.550・15.266・36.713・0.9224・2.2183
これは202錦西・遼寧を99％′ 201青城子・遼寧を1％混合した16.534・15.295・36.722・0.9251・2.2211が相違指数109で一致する。

34′ ZY—525′ 錐′ Ⅳ
18.272・15.584・38.402・0.8529・2.1017
これは214福山黄銅鉱・山東を96%′ 205柴河・遼寧を4%混合したものが18.234・15.581・38.416・0.8547・2.1068と′ 相違指数124で一致する。

35′ ZY—527′ 残片′ Ⅳ
16.618・15.269・36.744・0.9188・2.2111
これは202錦西・遼寧を93%′ 201青城子・遼寧を7%混合したものが16.613・15.313・36.808・0.9220・2.2161で相違指数195となり一致する。

36′ ZY—528′ 圏′ Ⅳ
16.675・15.293・36.735・0.9171・2.2030
これは202錦西・遼寧87%′ 201青城子・遼寧を13%混合したもの94%に′ 205柴河・遼寧を6%加えたものが16.716・15.340・36.807・0.9181・2.2028と′ 相違指数172で一致する。

37′ ZY—529′ 残片′ Ⅳ
16.815・15.307・37.141・0.9103・2.2088
これは202錦西・遼寧を77%′ 201青城子・遼寧を23%混合したもの74%に′ 212香帯・山東を26%加えたものが16.870・15.372・37.142・0.9117・2.2025で相違指数198と一致する。

38′ ZY—531′ 残片′ Ⅳ
16.366・15.217・36.522・0.9298・2.2316
これは202錦西・遼寧を91%′ 206西樵皮・山西を9%混合した16.369・15.273・36.510・0.9338・2.2314が相違指数113で一致する。

39′ ZY—532′ 錐?′ Ⅳ
16.784・15.312・36.916・0.9123・2.1995
これは202錦西・遼寧を80%′ 201青城子・遼寧を20%混合したもの95%に′ 205柴河・遼寧を5%加えたものが16.800・15.358・36.917・0.9149・2.1986となり′ 相違指数98で完全に一致する。

40′ ZY—533′ 鏃′ Ⅳ
16.794・15.298・36.886・0.9109・2.1964
これは202錦西・遼寧を80%′ 201青城子・遼寧を20%混合したもの93%に′ 205柴河・遼寧を7%加えたものが16.806・15.361・36.886・0.9146・2.1960となり′ 相違指数116で一致する。

41′ ZY—536′ 錐′ Ⅳ
18.266・15.586・38.404・0.8533・2.1025
34′ ZY—525′ 錐′ Ⅳと相違指数22で完全に一致している。
これは214福山黄銅鉱・山東96%と205柴河遼寧4%を混合した18.234・15.581・38.416・0.8547・2.1068が相違指数106で一致する。

42′ ZY—539′ 坩堝渣′ Ⅳ
16.722・15.284・36.837・0.9140・2.2029
これは202錦西・遼寧を87%′ 201青城子・遼寧を13%混合したもの94%に′ 205柴河・遼寧を6%加えたものが16.716・15.340・36.807・0.9181・2.2028で′ 相違指数134と一致する。

43′ ZY—540′ 歯′ Ⅳ
18.143・15.569・38.304・0.8581・2.1112
これは214福山・黄銅鉱・山東92%に′ 205柴河・遼寧8%を混合した18.186・15.576・38.292・0.8568・2.1054が′ 相違指数133で一致する。

44′ ZY—544′ 刀′ Ⅳ
16.695・15.278・36.874・0.9151・2.2087
これは202錦西・遼寧87%に′ 201青城子・遼寧13%混合したもの99%に′ 205柴河・遼寧1%加えたものが16.696・15.333・36.880・0.9189・2.2096で′ 相違指数109と一致する。

45′ ZY—553′ 錐?′ Ⅳ
16.555・15.269・36.676・0.9223・2.2154
これは202錦西・遼寧98%に′ 201青城子・遼寧2%混合したものを97%に′ 205柴河・遼寧3%加えた16.563・15.303・36.698・0.9240・2.2158と′ 前者を96%′ 後者を4%とした16.569・15.305・36.685・0.9238・2.2143が共に相違指数85で完全に一致する。

46′ ZY—556′ 残片′ Ⅳ
16.810・15.304・36.864・0.9104・2.1930
これは202錦西・遼寧78%′ 201青城子・遼寧22%混合したもの90%に′ 205柴河・遼寧10%加えたものが16.838・15.369・36.865・0.9134・2.1905と′ 相違指数149で一致する。

47′ ZY—561′ 壁（か）′ Ⅳ
16.246・15.208・36.513・0.9361・2.2475
これはpb—06広東大鼻隆坪52%′ 206西樵皮・山西48%を混合したもの99%に′ 204柴河・遼寧を1%加えたものが′ 16.342・15.188・36.495・0.9363・2.2406と相違指数205で符合する。

48′ ZY—564′ 鈴′ Ⅳ
18.200・15.561・38.298・0.8550・2.1043
これは214福山黄銅鉱・山東を92％′ 205柴河・遼寧を8％混合したものが′ 18.186・15.576・38.292・0.8568・2.1054と′ 相違指数64で完全に一致する。

49′ ZY—566′ 刀′ Ⅳ
16.607・15.277・36.758・0.9199・2.2134
これは202錦西・遼寧を94％′ 201青城子・遼寧を6％混合した16.600・15.310・36.794・0.9225・2.2169が′ 相違指数137で一致する。

50′ ZY—567′ 爵′ Ⅳ
16.778・15.315・36.860・0.9128・2.1969
これは202錦西・遼寧を80％′ 201青城子・遼寧を20％混合したもの93％に′ 205柴河・遼寧を7％加えた16.806・15.361・36.886・0.9146・2.1960と′ 202錦西・遼寧を80％′ 201青城子・遼寧を20％混合したものを92％とし′ これに205柴河・遼寧を8％加えた16.809・15.362・36.870・0.9145・2.1947が共に相違指数127で一致する。

51′ ZY—572′ 爵′ Ⅳ
16.804・15.319・36.934・0.9116・2.1979
これは202錦西・遼寧を80％′ 201青城子・遼寧を20％混合した16.800・15.358・36.917・0.9149・2.1986が相違指数100で一致する。

52′ ZY—573′ 爵′ Ⅳ
16.838・15.307・36.916・0.9091・2.1924
これは202錦西・遼寧を78％′ 201青城子・遼寧を22％混合したもの92％に′ 205柴河遼寧を8％加えた16.833・15.367・36.897・0.9136・2.1931が相違指数136で一致する。

53′ ZY—575′ 爵′ Ⅳ
16.813・15.318・36.829・0.9111・2.1905
これは202錦西・遼寧を80％′ 201青城子・遼寧を20％混合したもの89％に′ 205柴河・遼寧を11％加えた16.818・15.365・36.824・0.9142・2.1907が相違指数90で完全に一致する。

54′ ZY—577′ 爵′ Ⅳ
16.533・15.248・36.657・0.9223・2.2172
これは202錦西・遼寧を99％′ 201青城子・遼寧を1％混合したもの97％に′ 205柴河・遼寧3％加えた16.551・15.300・36.684・0.9245・2.2167が′ 相違指数124で一致する。

55′ ZY—579′ 爵（か）′ Ⅳ
16.581・15.269・36.712・0.9209・2.2141
これは202錦西・遼寧を96％′ 201青城子・遼寧を4％混合したもの97％に′ 205柴河・遼寧3％加えたものが′ 16.590・15.309・36.725・0.9230・2.2142と′ 相違指数84で完全に一致する。

56′ ZY—580′ 盉（か）′ Ⅳ
17.253・15.379・37.280・0.8914・2.1608
これは201青城子・遼寧58％′ 203不明・遼寧42％混合したもの89％に′ 205柴河・遼寧11％を加えたものが′ 17.238・15.459・37.269・0.8977・2.1634と相違指数195で一致する。

57′ ZY—581′ 鈴′ Ⅳ
18.222・15.562・38.308・0.8540・2.1023
これは214福山黄銅鉱・山東を93％′ 205柴河・遼寧を7％混合した18.198・15.577・38.323・0.8562・2.1058が相違指数111で一致する。

58′ ZY—582′ 爵′ Ⅳ
17.097・15.355・37.150・0.8981・2.1729
これは203不明・遼寧を52％′ 201青城子・遼寧を48％混合したもの90％に′ 205柴河・遼寧を10％加えたものが17.116・15.430・37.150・0.9024・2.1721と′ 相違指数145で一致する。

59′ ZY—583′ 爵′ Ⅳ
17.022・15.308・37.036・0.8993・2.1758
これは203不明・遼寧59％′ 201青城子・遼寧41％混合したもの89％に′ 205柴河・遼寧11％加えたものが17.029・15.409・37.035・0.9057・2.1764と相違指数179で一致する。

60′ ZY—520′ 坩堝渣′ Ⅴ
18.063・15.637・38.453・0.8657・2.1288
これは214福山黄銅鉱・山東を51％′ 201青城子・遼寧を49％混合したもの93％に′ 207永豊・陝西を7％加えた18.026・15.585・38.364・0.8647・2.1286が相違指数190で一致する。

61′ ZY—521′ 残片′ Ⅴ
16.808・15.289・36.845・0.9096・2.1921
これは202錦西・遼寧を78％′ 201青城子・遼寧を22％混合したものを90％と89％に205柴河・遼寧を10％と11％それぞれ加えたものが′ 前者は16.838・

15.369・36.865・0.9134・2.1905′後者は16.841・15.370・36.849・0.9133・2.1892と、共に相違指数184で一致する。

62′ZY—526′残片′V

28.378・16.695・38.520・0.5883・1.3574

207/204の28.378′207/206の0.5883′208/206の1.3574の鉛同位体比指数を示す可能性のある鉱石が見当たらず、不明である。

二里頭遺跡と青銅器原材料鉱石供給鉱山所在省一覧　図1

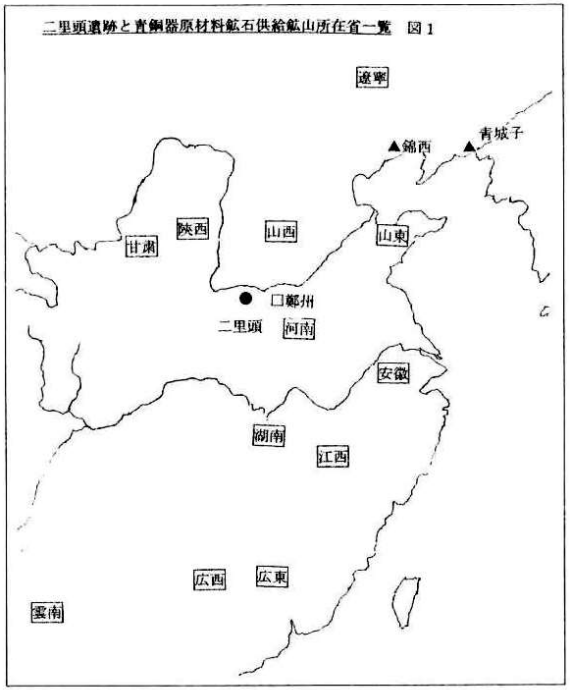


表1、鉱石供給鉱山と鉱石鉛同位体比指数一覧（掲載順）　25試料

試料番号 No	地点 鉱山名・省	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
210	鄧家山・甘粛	18.053	15.630	38.216	0.8658	2.1169
212	香寄・山東	17.002	15.402	37.437	0.9059	2.2019
205	柴河・遼寧	17.094	15.462	35.444	0.9045	2.0735
214	福山黄銅鉱・山東	18.281	15.586	38.540	0.8526	2.1082
202	錦西・遼寧	16.521	15.292	36.708	0.9256	2.2219
201	青城子・遼寧	17.836	15.598	38.141	0.8745	2.1384
f—42	広東仁化凡口中上泥盆紀	18.150	15.549	38.289	0.8567	2.1096
V—121	広東仁化凡口獅子嶺鉛亜鉛鉱	18.120	15.511	39.991	0.8560	2.2070
Pb—07	広東大宝山多金属鉱	18.680	15.730	38.400	0.8421	2.0557
1－103	雲南会沢奕良毛坪	18.340	15.499	38.789	0.8451	2.1150
203	不明・遼寧	16.455	15.267	36.601	0.9278	2.2243
1－104	雲南会沢巧家茂組	17.990	15.470	38.009	0.8599	2.1128
1—劉	河南桐柏大河区劉山岩	18.000	15.480	36.950	0.8600	2.0528
銅—2	湖南江永銅山嶺鉛亜鉛鉱	18.980	15.970	40.389	0.8414	2.1280
215	桐柏含銅黄鉄鉱・河南	17.934	15.534	38.160	0.8662	2.1278
程—1	安徽青陽五昌廟	18.280	15.560	38.160	0.8512	2.0875
孟—4	江西九江城門山鉛亜鉛鉱	17.910	15.320	37.190	0.8554	2.0765
209	丹鳳・陝西	17.622	15.513	38.432	0.8803	2.1809
孟—1	安徽青陽五昌廟	18.330	15.639	38.121	0.8532	2.0797
V001	安徽黄山嶺	18.050	15.409	38.010	0.8537	2.1058
W047	広西大廠巴黎多金属鉱	18.210	15.369	37.870	0.8440	2.0796
206	西楡皮・山西	14.828	15.077	34.508	1.0168	2.3272
Pb—06	広東肇慶大降坪	17.760	15.290	38.360	0.8609	2.1599
204	柴河・遼寧	15.300	15.234	34.915	0.9957	2.2820
207	永豊・陝西	17.533	15.492	38.636	0.8836	2.2036

引用文献：『考古学雑誌』73—2　74頁、第2表、「中国産鉛鉱石の鉛同位体比」

参考文献：『地球化学』1980年9月、216～218頁、「我国顕生代（主要是中生代）鉛亜鉛鉱及其他金属鉱床中方鉛鉱的鉛同位素組成」

表2、時期別原材料供給鉱山一覧

Ⅱ期（12＝遼寧4、山東2、甘粛1、広東3、雲南2）
202 錦西遼寧、201 青城子遼寧、205 柴河遼寧、203 不明遼寧
214 福山黄銅鉱山東、212 香寄山東、210 鄧家山甘粛
f—42 広東仁化凡口中上沢盆紀、v—121 広東仁化凡口獅子嶺、pb—07 広東大宝山多
1—103 雲南会沢奕良毛坪、1—104 雲南会沢巧家茂組

Ⅲ期（18＝遼寧4、山東2、山西1、陝西1、甘粛1、河南2、安徽3、湖南1、江西1、広東1、広西1、）
202 錦西遼寧、201 青城子遼寧、205 柴河遼寧、203 不明遼寧、
214 福山黄銅鉱山東、212 香寄山東、206 西楡皮山西、209 丹鳳陝西、210 鄧家山甘粛、
1－劉　河南桐柏大河区劉山岩、215 桐柏含銅黄鉄鉱河南、
孟—1 安徽青陽五昌廟、v001 安徽黄山嶺、程—1 安徽青陽五昌廟、
銅—2 湖南江永銅山嶺、孟—4 江西九江城門山、pb—06 広東肇慶大降坪、
w047 広西大廠巴黎多、

Ⅳ期（9＝遼寧4、山東2、山西1、陝西1、広東1、）
202 錦西遼寧、201 青城子遼寧、205 柴河遼寧、203 不明遼寧、
212 香寄山東、214 福山黄銅鉱山東、206 西楡皮山西、
207 永豊陝西、pb—06 広東肇慶大降坪、

Ⅴ期（5＝遼寧3、山東1、陝西1）
202 錦西遼寧、201 青城子遼寧、205 柴河遼寧
214 福山黄銅鉱山東、207 永豊陝西、

表3、202 錦西遼寧の鉱石を主として使用している青銅製品一覧　23点

番号	測定番号	資料名	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
4	ZY—537	残片	Ⅱ	202 錦西遼寧 89%、201 青城子遼寧 11%	186
16	ZY—542	残片	Ⅲ	(202×87、201×13) ×94+205×6	155
25	ZY—560	爵杯	Ⅲ	202×94　201×6	127
32	ZY—522	残片	Ⅳ	(202×87、201×13) ×95+205×5	95
33	ZY—524	鏃	Ⅳ	202×99　201×1	109
35	ZY—527	残片	Ⅳ	202×93　201×7	195
36	ZY－528	圏	Ⅳ	(202×87、201×13) ×94+205×6	172
37	ZY—529	残片	Ⅳ	(202×77、201×23) ×74+212×26	198
38	ZY－531	残片	Ⅳ	202×91　206×9	113
39	ZY—532	錐？	Ⅳ	(202×80、201×20) ×95+205×5	98
40	ZY—533	鏃	Ⅳ	(202×80、201×20) ×93+205×7	116
42	ZY—539	坩堝渣	Ⅳ	(202×87、201×13) ×94+205×6	134
44	ZY－544	刀	Ⅳ	(202×87、201×13) ×99+205×1	109
45	ZY－553	錐？	Ⅳ	(202×98、201×2) ×97+205×3 (202×98、201×2) ×96+205×4	85
46	ZY—556	残片	Ⅳ	(202×78　201×22) ×90+205×10	149
49	ZY—566	刀	Ⅳ	202×94、201×6	137
50	ZY—567	爵	Ⅳ	(202×80、201×20) ×93+205×7 (202×80、201×20) ×92+205×8	127
51	ZY—572	爵	Ⅳ	(202×80、201×20) ×95+205×5	100
52	ZY－573	爵	Ⅳ	(202×78、201×22) ×92+205×8	136
53	ZY—575	爵	Ⅳ	(202×80、210×20) ×89+205×11	90
54	ZY—577	爵	Ⅳ	(202×99、201×1) ×97+205×3	124
55	ZY—579	盉	Ⅳ	(202×96、201×4) ×97+205×3	84
61	ZY—521	残片	Ⅴ	(202×78、201×22) ×90+205×10 (202×78、201×22) ×89+205×11	184

表4、214 福山黄銅鉱山東の鉱石を主として使用した青銅製品　20点

番号	測定番号	資料名	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
2	ZY—534	残片	II	214×92、205×8	67
3	ZY—535	錐？	II	214×97、205×3	78
6	ZY—541	鐸	II	214×96、205×4	102
10	ZY—552	刀	II	214×94、205×6	137
11	ZY—554	錐	II	214×97、205×3	128
12	ZY—559	鈴	II	214×96、205×4	136
13	ZY—563	鑿	II	214×94、205×6	100
15	ZY—523	残片	III	214×95、205×5	134
17	ZY—543	残片	III	214×92、205×8	147
21	ZY—551	刀	III	(214×91、205×9) ×76＋孟—1×24	132
22	ZY—555	刀	III	214×96、205×4	134
23	ZY—557	錐	III	214×98、205×2	100
24	ZY—558	残片	III	214×94、205×6	119
27	ZY—569	溶滓	III	214×91、205×9	118
34	ZY—525	錐	IV	214×96、205×4	124
41	ZY—536	錐	IV	214×96、205×4	106
43	ZY—540	歯	IV	214×92、205×8	133
48	ZY—564	鈴	IV	214×92、205×8	64
57	ZY—581	鈴	IV	214×93、205×7	111
60	ZY—520	坩堝滓	V	(214×51、201×49) ×93＋207×7	190

表5、201 青城子遼寧の鉱石を主として使用した青銅製品一覧　4点

番号	測定番号	資料名	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
7	ZY—545	残片	II	201×90、205×10	163
20	ZY—550	刀	III	201×54、203×46	126
30	ZY—576	刀	III	(201×87、205×13) ×93＋w047×7	138
56	ZY—580	斧	IV	(201×58、203×42) ×89＋205×11	195

表6、203 不明遼寧の鉱石を主として使用した青銅製品一覧　3点

番号	測定番号	資料名	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
9	ZY—549	刀	II	(203×52、201×48) ×91＋205×9	127
58	ZY—582	爵	IV	(203×52、201×48) ×90＋205×10	145
59	ZY—583	爵	IV	(203×59、201×41) ×89＋205×11	179

表7、相違指数の確率

●完全に一致（相違指数 0～99）の確率

マキシマム（最大）

20×20×20×20×19＝3,040,000

ミニマム（最少）

1×1×1×1×95＝95

● 一致（相違指数 100~199）の確率

マキシマム（最大）

40×40×40×40×39＝99,840,000

ミニマム（最少）

1×1×1×1×195＝195

● 符合（相違指数 200～299）の確率

マキシマム（最大）

60×60×60×60×59＝764,640,000

ミニマム

1×1×1×1×295＝295

下の桁・・・3×3+4×2=17（分母の小数点以下の桁）

マキシマム

分子、分母を共に6桁（百万）で除すと、分母の小数点以下の桁は11となって1,000億を指し、
分子は符合が764.64、一致が99.84、完全に一致が3.04となる。

ミニマム

分子、分母を共に2桁（百）で除すと、分母の小数点以下の桁は15となって1,000兆を指し、
分子は符合が2.95、一致が1.95、完全に一致が0.95となる。

結論

完全に一致はマキシマムでも1,000億分の3.04、ミニマムでは1,000兆分の0.95、
一致はマキシマムで1,000億分の99.84、ミニマムなら1,000兆分の1.95、
符合でもマキシマム1,000億分の764.64、ミニマムならば1,000兆分の2.95と、何れも天文学的数字の精緻さとなる（以上何れも最大の指数 99, 199, 299 で算出した場合である）。

表8、資料別鉱石使用明細

① 残片　　14点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
1	ZY—530	II	（212 香寄山東 50%+210 鄧家山甘粛 50%）×96%+205 柴河遼寧×4%	181
2	ZY—534	II	214 福山黄銅鉱山東 92%+205 柴河遼寧 8%	67
4	ZY—537	II	202 錦西遼寧 89%+201 青城子遼寧 11%	186
7	ZY—545	II	201 青城子遼寧 90%+205 柴河遼寧 10%	163
15	ZY—523	III	214 福山黄銅鉱山東 95%+205 柴河遼寧 5%	134
16	ZY—542	III	（202 錦西遼寧 87%+201 青城子遼寧 13%）×94%+205 柴河遼寧 6%	155
17	ZY—543	III	214 福山黄銅鉱山東 92%+205 柴河遼寧 8%	147

24	ZY—558	III	214 福山黄銅鉱山東 94%+205 柴河遼寧 6%	119
32	ZY—522	IV	（202 錦西遼寧 87%+201 青城子遼寧 13%）×95%+205 柴河遼寧 5%	95
35	ZY—527	IV	202 錦西遼寧 93%+201 青城子遼寧 7%	195
37	ZY—529	IV	（202 錦西遼寧 77%+201 青城子遼寧 23%）×74%+212 香寄山東 26%	198
38	ZY—531	IV	202 錦西遼寧 91%+206 西楡皮山西 9%	113
46	ZY—556	IV	（202 錦西遼寧 78%+201 青城子遼寧 22%）×90%+205 柴河遼寧 10%	149
61	ZY—521	V	（202 錦西遼寧 78%+201 青城子遼寧 22%）×90・89%+205 柴河遼寧 10・11%	184

② 錐？・錐　　8点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
3	ZY—535？	II	214 福山黄銅鉱山東 97%+205 柴河遼寧 3%	78
8	ZY—546？	II	Pb—07 広東大宝山多金属鉱 77%+1—103 雲南会沢変良毛坪 23%	157
11	ZY—554？	II	214 福山黄銅鉱山東 97%+205 柴河遼寧 3%	128
23	ZY—557？	III	214 福山黄銅鉱山東 98%+205 柴河遼寧 2%	100
34	ZY—525	IV	214 福山黄銅鉱山東 96%+205 柴河遼寧 4%	124
39	ZY—532？	IV	（202 錦西遼寧 80%+201 青城子遼寧 20%）×95%+柴河遼寧 5%	98
41	ZY—536	IV	214 福山黄銅鉱山東 96%+柴河遼寧 4%	106
45	ZY—553？	IV	（202 錦西遼寧 98%+201 青城子遼寧 2%）×97・96%+205 柴河遼寧 3・4%	85

③溶渣　　2点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
5	ZY—538	II	F42 広東仁化凡口中上泥盆紀 97%＋v—121 広東仁化凡口獅子嶺鉛亜鉛鉱 3%	63
27	ZY—569	III	214 福山黄銅鉱山東 91%＋205 柴河遼寧 9%	118

④ 簪　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
6	ZY—541	II	214 福山黄銅鉱山東 96%＋205 柴河遼寧 4%	102

⑤ 刀　　10点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
9	ZY—549	II	(201 青城子遼寧 48%＋203 不明遼寧 52%) ×91%＋205 柴河遼寧 9%	127
10	ZY—552	II	214 福山黄銅鉱山東 94%＋205 柴河遼寧 6%	137
18	ZY—547	III	((1—劉、河南桐柏大河区劉山岩 87%＋銅—2 湖南江永銅山嶺鉛亜鉛鉱 13%) ×56%＋215 桐柏含黄鉄鉱河南 44%)) ×60%＋程—1 安徽青陽五昌廟×40%	42
20	ZY—550	III	201 青城子遼寧 54%＋203 不明遼寧 46%	126
21	ZY—551	III	(214 福山黄銅鉱山東 91%＋205 柴河遼寧 9%) ×76%＋孟—1 安徽青陽五昌廟 24%	132
22	ZY—555	III	214 福山黄銅鉱山東 96%＋205 柴河遼寧 4%	134
29	ZY—574	III	(212 香寄山東 62%＋210 鄧家山甘粛 38%) ×94%＋205 柴河遼寧 6%	145
30	ZY—576	III	(201 青城子遼寧 87%＋205 柴河遼寧 13%) ×93%＋w047 広西大廠巴黎多金属鉱 7%	138
44	ZY—544	IV	(202 錦西遼寧 87%＋201 青城子遼寧 13%) ×99%＋205 柴河遼寧 1%	109
49	ZY—566	IV	202 錦西遼寧 94%＋201 青城子遼寧 6%	137

⑥ 鈴　　5点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
12	ZY—559	II	214 福山黄銅鉱山東 96%＋205 柴河遼寧 4%	136
14	ZY—570	II	1—104 雲南会沢巧家茂組 91%＋212 香寄山東 9%	130
28	ZY—571	III	(210 鄧家山甘粛 98%＋205 柴河遼寧 2%) ×60%＋v001 安徽黄山嶺 40%	40
48	ZY—564	IV	214 福山黄銅鉱山東 92%＋205 柴河遼寧 8%	64
57	ZY—581	IV	214 福山黄銅鉱山東 93%＋205 柴河遼寧 7%	111

⑦鑿　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
13	ZY—563	II	214 福山黄銅鉱山東 94%＋205 柴河遼寧 6%	100

⑧ 爵　　9点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
19	ZY—548	III	(孟—4 江西九江城門山鉛亜鉛鉱 73%＋209 丹鳳陝西 27%) ×75%＋212 香寄山東 25%	80
31	ZY—578	III	Pb—06 広東肇慶大降坪 51%＋206 西楡皮山西 49%	128
50	ZY—567	IV	(202 錦西遼寧 80%＋201 青城子遼寧 20%) ×93・92%＋205 柴河遼寧×7・8%	127
51	ZY—572	IV	202 錦西遼寧 80%＋201 青城子遼寧 20%	100
52	ZY—573	IV	(202 錦西遼寧 78%＋201 青城子遼寧 22%) ×92%＋205 柴河遼寧 8%	136
53	ZY—575	IV	(202 錦西遼寧 80%＋201 青城子遼寧 20%) ×89%＋205 柴河遼寧 11%	90
54	ZY—577	IV	(202 錦西遼寧 99%＋201 青城子遼寧 1%) ×97%＋205 柴河遼寧 3%	124

58	ZY—582	Ⅳ	（203 不明遼寧 52%＋201 青城子遼寧 48%）×90%＋205 柴河遼寧 10%	145
59	ZY—583	Ⅳ	（203 不明遼寧 59%＋201 青城子遼寧 41%）×89%＋205 柴河遼寧 11%	179

⑨ 爵杯　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
25	ZY—560	Ⅲ	202 錦西遼寧 94%＋201 青城子遼寧 6%	127

⑩ 坩堝滓　　3点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
26	ZY—568	Ⅲ	（210 鄧家山甘粛 98%＋205 柴河遼寧 2%）×52%＋v001 安徽黄山嶺 48%	92
42	ZY—539	Ⅳ	（202 錦西遼寧 87%＋201 青城子遼寧 13%）×94%＋205 柴河遼寧 6%	134
60	ZY—520	Ⅴ	（214 福山黄銅鉱山東 51%＋201 青城子遼寧 49%）×93%＋207 永豊陝西 7%	190

⑪ 鏃　　2点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
33	ZY—524	Ⅳ	202 錦西遼寧 99%＋201 青城子遼寧 1%	109
40	ZY—533	Ⅳ	（202 錦西遼寧 80%＋201 青城子遼寧 20%）×93%＋柴河遼寧 7%	116

⑫ 圏　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
36	ZY—528	Ⅳ	（202 錦西遼寧 87%＋201 青城子遼寧 13%）×94%＋205 柴河遼寧 6%	172

⑬ 歯　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数

43	ZY—540	Ⅳ	214 福山黄銅鉱山東 92%＋205 柴河遼寧 8%	133

⑭ 舁（か）　　2点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
47	ZY—561	Ⅳ	（pb—06 広東大壜慶大降坪 52%＋206 西楡皮山西 48%）×99%＋204 柴河遼寧 1%	205
56	ZY—580	Ⅳ	（201 青城子遼寧 58%＋203 不明遼寧 42%）×89%＋205 柴河遼寧 11%	195

⑮ 盉（か）　　1点

番号	測定番号	時期	使用鉱石及び比率	相違指数
55	ZY—579	Ⅳ	（202 錦西遼寧 96%＋201 青城子遼寧 4%）×97%＋205 柴河遼寧 3%	84

まとめ

二里頭遺跡出土青銅製品の原材料供給鉱山は、二里頭遺跡を中心として、中国大陸全土にわたっている（図1）。

62の測定資料のうち、不明のもの1を除く61の青銅製品の供給鉱石は25試料である（表1）。

時期別にみると、Ⅲ期の18がピークで、以下Ⅱ期12、Ⅳ期9、Ⅴ期5と続いており、遼寧省と山東省の2省の鉱山からは一貫して供給されている（表2）。

その中で、202遼寧省・錦西鉱山の鉱石を主として使用している青銅製品は23点と、全体61点の37.7%を占めている。

特に鉱石の比率が相似するものが13点ある。

先ず16—32—36—42—44である。

16—（202×87＋201×13）×94＋205×6

32—（202×87＋201×13）×95＋205×5

36—（202×87＋201×13）×94＋205×6

42—（202×87＋201×13）×94＋205×6

44—（202×87＋201×13）×99＋205×1

次が39—40—50—51—53である。

39—（202×80＋201×20）×95＋205×5

40—（202×80＋201×20）×93＋205×7
50—（202×80＋201×20）×93・92＋205×
7・8
51—（202×80＋201×20）×95＋205×5
53—（202×80＋201×20）×89＋205×11
最後が46—52—61である。
46—（202×78＋201×22）×90＋205×10
52—（202×78＋201×22）×92＋205×8
61—（202×78＋201×22）×90・89＋205×
10・11

なかでも

16と36と42は、何れも202×87＋201×13を94%に205を6%加えたもので、全ての指数が一致している（表3）。

一方214山東省・福山黄銅鉱山の鉱石を主として使用した青銅製品が20点ある。

これらが202遼寧省・錦西鉱山の鉱石を主として使用した青銅製品との主な違いは、前者の大半が3種類の鉱石を使用しているのに対し、こちらは殆どが2種類であることである。そして前者同様に205遼寧省・柴河鉱山の鉱石を併用している点が共通する。

こちらは混合する鉱石が2種類ということもあって、完全に使用鉱石の比率が一致するケースが多く、20点中、14点を占めている。

先ず2—17—43—48である。これは時期別にはⅡ—Ⅲ—Ⅳ—Ⅳと分かれ、214×92＋205×8である。

次が10—13—24である。

これは214×94＋205×6であり時期はⅡ、Ⅱ、Ⅲである。

三番目が6—12—22—34—41で時期はⅡ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅳとなる。

これは214×96＋205×4となる。

最後は3—11である。時期は共にⅡ期で、214×97＋205×3である（表4）。

表5と表6は共に遼寧省産の鉱石であり、この7点を表3の23点に加えると30点となり、総数が61点であるから、約半数に達することとなる。

ここでも表6の9と58は、

9—（203×52＋201×48）×91＋205×9
58—（203×52＋201×48）×90＋205×10

と相似している。

相違指数の確率は、新鉛同位体比理論の中核を形成する考えで、従来の考古学会が採用してきた206で207と208を除した指数を両座標軸として判断するものに比し、零の数が9、すなわち10億倍の精度となり、一方では地

球年代学の分野が採用してきた204で206・207・208を除したものより、零の数が8、すなわち1億倍の精度を誇るものとなった。これにより使用鉱石の比率まで明確に確認することを可能にしたのである（表7）。

表8は資料別に鉱石の使用に特色が見られるか検討したものである。

① 残片は14点あり、時期もⅡ期からⅤ期までに及ぶが、前半の主体は214福山黄銅鉱山東、後半の主体が202錦西遼寧である。

② 錐は8点あり、時期はⅡ～Ⅳ期であるが、主体は福山黄銅鉱山東5、次いで錦西遼寧2で、Ⅱ期に広東省・雲南省の鉱石が使用されたものが1点ある。

③ 溶滓は2点である。Ⅱ期に広東省のものが検出され、Ⅲ期に214福山黄銅鉱山東の鉱石が主として使用されたものがある。

④ 鬻、Ⅱ期に福山黄銅鉱山東の鉱石が主として使用されたものが1点ある。

⑤ 刀、これは武器ではなく工具である。10点あり、Ⅱ期～Ⅳ期にわたる。201青城子遼寧と203不明遼寧をほぼ等分に使用したものが2点、214福山黄銅鉱山東を主として使用したものが3点、河南省と湖南省及び安徽省の鉱石を使用したものが1点、錦西遼寧の鉱石を主として使用したもの2点、212香寄山東の鉱石を主として使用したもの1点及び201青城子遼寧を主に使用し、それに205柴河遼寧と広西自治区の鉱石を一部混合したもの1点と分かれる。

⑥ 鈴、楽器である。5点ありⅡ～Ⅳ期に分かれる。福山黄銅鉱山東が主で、柴河遼寧がサブの組合せが3点、後は雲南省産鉱石が主体のもの1点と、甘粛省と安徽省の鉱石をほぼ等分に混合したもの1点がある。

⑦ 鑿、1点。Ⅱ期、福山黄銅鉱山東が主体である。

⑧ 爵、酒器。9点。Ⅲ期2点、Ⅳ期7点である。Ⅲ期のものは、江西省、陝西省の鉱石に山東省産を加えたもの1点と、広東省と山西省の鉱石をほぼ等分に混合したもの1点であるが、Ⅳ期に入ると、全て遼寧省産鉱石が使用されるようになる。

⑨ 爵杯、1点。Ⅲ期、これにも遼寧省産鉱石が使用されている。

⑩ 坩堝滓、3点。時期はⅢ～Ⅴ期と1点ずつ。Ⅲ期は甘粛省と安徽省の鉱石を主として使用。Ⅳ期は遼寧省産の鉱石のみ使用、Ⅴ期は山東省と遼寧省を主とし、それに陝西省産を加えている。

⑪ 鏃、2点。Ⅳ期、何れも遼寧省産鉱石のみ使用。

⑫ 圏、輪のようなものか。1点。Ⅳ期、遼寧省産鉱石のみ使用。

⑬ 歯、直内戈の「内」端部にある玉戈と似た歯状飾と思われる。1点。Ⅳ期、山東省産鉱石が主体。

⑭ 斝、2点。酒器。Ⅳ期、広東省と山西省産の鉱石をほぼ等分に混合したものと、遼寧省産の鉱石を使用したものとがある。

⑮ 盉、1点。酒器。Ⅳ期、遼寧省産の鉱石のみを混合している。

むすび

今を去る4千年前、中国大陸の黄河流域には、すでに金属文化の萌芽がみられた。

それは交易の中心地となりうる要素を持つ大河の流域で、多数の人口を養い得る肥沃な農業地帯をバックに持つ地点であった。

金属文化は東北方、西方、南方の三方から入り、やがては東北方面から入って来たものが主流を成すようになる。

それは遼寧・山東の鉱石使用に、永年にわたる比率の一貫性があることでも分る。それは鉱山師すなわち高度の技術を持つ青銅工人の誕生を意味する。

そこで発生した文化は、爵・斝・盉という酒器を創り出す一方で、中国民族が異常に好んだ玉製品この時期にはすでに玉刀・玉戈が見られたが、その製作に必須な刀・錐・鑿という工具を生み、それは間違いなく農耕具製作にも画期的な進歩をもたらした。その一方で、武器と思われるものはⅣ期の鏃2点のみであった。

参考・引用文献

姜椿芳『中国大百科全書・考古学』中国大百科全書出版社、1986年8月。

古方他『中国古玉器図典』文物出版社、2006年。

陳毓蔚他「我国顕生代金属鉱床鉛同位素組成特徴及其成因探討」『地球化学』1980年9月。

林巳奈夫『中国古玉器総説』吉川弘文館、1999年。

平尾良光『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂、2001年。

馬淵久夫他「中国産鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2日本考古学会、1987年。

口紅（その十二）

池莉　原作

山本勉　訳

〈登場人物〉

【趙家の人々】

趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）

趙耀虎（趙耀根の弟）

趙耀珍（趙耀根の妹）

趙耀根の母親

【江家の人々】

江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）

江暁鴎（江暁歌の弟）

江暁暢（江暁歌の妹）

沈鳳宜（江暁歌の母親）

江暁歌の父親

田曼（江暁歌の実母）

嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）

寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）

呉文彗（寧岸と結婚）

寧遠（寧岸と呉文彗の息子）

張喜（趙耀根の会社の同僚）

李主任（趙耀根の会社の上司）

張書記（趙耀根の会社の上司）

羅桂香（江暁歌の会社の同僚）

黎美娟（江暁鴎の恋人）

宗漢（江暁歌が作った会社の専務）

唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）

藍雲（宗漢の恋人、ラジオ局のディスクジョッキー）

第二十一章　香港

（一）

江暁歌が乗った飛行機は、遂に香港蒙徳空港に到着した。江暁歌は、今回の旅行のために新しい服を新調したが、かえって田舎ものに見えた。祖父母が空港の出口まで彼女を迎えに来ていた。祖母は、孫娘を抱きしめると、悲喜こもごも涙を流した。

祖父母は、広々とした洋風の家に住んでいて、従順なフィリピンのメイドを雇っていた。香港での彼らの生活レベルは、中級階級より少し上で、慎ましく倹約に心がけ勤勉であった。しかし江暁歌の目から見れば、彼らは楽園にいるかのような生活ぶりだった。

江暁歌の歓迎会が終わると、祖父母は彼女を連れて服を買いに出かけた。祖父は車を運転して、銅鑼湾に出掛けた。香港の町の賑やかさは、江暁歌の目を眩ませた。彼女も数百万人が住む大都市から来たが、光溢れる香港の街角では、彼女は田舎者そのものだった。祖母は、彼女をタイムスクエアーに連れて行き、有無を言わせず彼女のために手当たり次第服を買った。彼女は、祖父の手に握られた香港ドル紙幣が次々と出ていくのを見て、小声で声をかけた。

「おばあちゃん、こんなに沢山の服、私が一生涯着るのに充分なくらいです」

祖母は、

「何が充分よ。足りないわ。女の人のタンスの服は、いつまでたっても足りないものよ。これはエリザベス女王の体験談よ」

と笑って答えた。

江暁歌は、自分のために服を買ってくれる祖母に任せるよりほかなかった。

ぶらぶらとショッピングをしていると、江暁歌はその逸品揃いの服に心を奪われた。

江暁歌は、

「まるで芸術品だわ。おばあちゃん、写真を撮っていいかしら。私はファッションデザイナーだったの。これまでこんな美しいデザインを見たことがないわ」

と言った。祖母は、

「あなたは写真を撮らなくてもいいのよ。あなたが必要なら、彼らは喜んで美しいファッション雑誌をくれるわ」

と言った。

一冊、一冊と美しいファッション雑誌がたまっていった。江暁歌は嬉しさのあまり辺りをキョロキョロと見渡し、否応なしにデザイナーとしてのインスピレーションをかき立てられた。

彼女がデパートから出てくると、外で待っていた祖父は、車に積み込んだファッション雑誌を見てびっくりしてしまった。

「お前はこんなに沢山の雑誌をどうするんだい。香港では、毎日毎日山のように印刷されて、あの手この手で私たちに押しつけてよこすんだよ」

江暁歌は、

「なんて素晴らしいんでしょう」

と返事をした。祖父は、

「でもね、この雑誌は場所を取るし、とっても重たいんだよ」

と言った。祖母は、

「暁歌はファッションデザイナーの仕事をしていたのよ。彼女の創作意欲がかき立てられたからじゃないの」

と言った。祖父は、

「それなら話は別だがな。暁歌、私達はファッション関係の仕事を一緒にやろう。世界中の女性が持っているお金をいただくんだ」

と言った。

女性のタンスの中は永遠にぴったり似合う服はいつも一枚足りない。これはエリザベス女王の体験でもある。江暁歌は、これまで聞いたことのない話を耳にして感動した。これは実際には決して簡単な話ではく、この全く異なった価値観に衝撃を受けた。江暁歌は何度も考え、自分がどうしなければならないのかやっとわかった。

祖母は、

「おじいちゃん、私達の孫娘を見てごらんよ。なんて頭の回転が速いこと。孫娘は才女で大事をなす人よ。お母さん譲りね。これは、神様が私達にくださったご褒美だわ」

と笑って言った。祖父も、

「神様、ありがとう」

と言った。

祖母は江暁歌に新調した服を着させ、その服に似合ったヘアースタイルにした。さらにネックレスをつけさせ、香水を振りかけると、江暁歌はなんと香港美人に様変わりした。祖父母はその美しさに目を瞠った。鏡の中で装いも新たに光り輝いている自分を見て、江暁歌の心の中も強烈な刺激を受けた。

江暁歌は、

「私は、この三十数年の間、まるで無為に日々を送ってきたように思えるわ。私は人間がこのような生活ができることを知らなかったし、私達はこのような生活を創造することすら知らなかったわ」

と感嘆して言った。祖母は、

「暁歌、私達の印象はどうかしら。私達のこと気に入ってくれた？」

江暁歌は、

「当たり前よ。とってもとっても、おじいちゃんやお

ばあちゃんのこと愛しているわ」
と言った。祖父母は、
「私達も、とってもあなたのことを愛しているわ」
と言った。祖父は、
「お前は、神様が私達に授けてくれた最高の贈り物だよ」
と言った。祖母は、
「あなたのおじいちゃんは安心したのよ。おじいちゃんは素晴らしい後継者を持ったわ。あなたはファッションデザイナーが好きなんでしょう。あなたのおじいちゃんも、偶然、衣料関係の商売をしているわ。おじいちゃんが体力も気力も旺盛な内にサポートしてもらって、香港のファッション業界に打って出て、成功の道を歩むのよ」
と言った。江暁歌は、
「おじいちゃん、おばあちゃん、ごめんなさい。いつかは帰りたいんです」
とまどいながら答えた。祖父は、
「なぜなんだい。お前は離婚もしたし、お父さんもなくなったじゃないか。私達も年を取ってしまった。私達には、お前と嘉児が唯一血の繋がった肉親なんだよ」
と言った。江暁歌は、
「私は、中国大陸から離れなければならないと思うと、心が浮き足だってしまって、気持ちが揺れるの。私は香港について知らなすぎるわ。たとえおじいちゃんが私に何もかも一から教えてくれても、私には香港のファッション業界に打って出るなんてできないわ」
と言った。祖母は、
「あなたならできるわ。暁歌、あなたの英語はなかなかよ。香港では、努力さえすれば成功のチャンスはあるわ」
と言った。江暁歌は、
「でも、私の気持ちの中には大陸が存在しているの。自分の考えを急に変えることはできないわ。香港でファッションデザイナーとして生きていくには、私は後発組よ。ここには世界の一流のデザイナーが集まっている。彼らの前では、私は劣等感の塊よ。私は、一気にトップに躍り出る事なんてできないわ。でも、中国大陸でファッションの仕事につけば、第一人者になれるわ。中国大陸のような大きなマーケットなら、大いに自信が持てるの」
と言った。祖父は、
「どうやら、暁歌は頭がいいようだ。筋も通っているしな」
と頷いた。祖母は、
「何の道理があるっていうの。私は年を取ったわ。私は暁歌や嘉児と暮らしたいわ。暁歌がたとえ仕事をしなくても、私達は彼女の面倒を見ることができるじゃないの」
と言った。江暁歌は、
「おばあちゃん、だめなの。私はただ生きていくだけじゃなくて、仕事がしたいのよ」
と言った。祖父は、
「わかったよ。さすがおじいちゃんの孫だけのことはある。私と同様壮大な志があるな」
と言った。江暁歌は、
「それなら家族みんなで合資会社を作ったらどうかしら」
と提案した。祖父は、
「よしよし、でもな暁歌、おじいちゃん達も大富豪じゃないんだから、一から始めなければならないんだよ。お前には、おそらく五十万香港ドルしか投資することができないんだ」
と言った。江暁歌は、
「素晴らしいわ。私にとっては大金よ」
と言った。祖父は、
「でも、商売をするにはこのお金じゃ少なすぎる。お前は経験がないから厄介だ。先ず絶対に慎重でなければならない。それに経験豊富な人にお前を助けてもらわなくてはならない」
と言った。江暁歌は、
「わかったわ。私は、必ずおじいちゃんの言う通りにするわ」
と言って立ち上がると、祖父母を抱きしめた。
「おばあちゃん、これからはちょくちょく香港にくるわ。嘉児も連れてくるわね。それにおじいちゃんとおばあちゃんを中国大陸に案内するわ」
と言った。

（二）

母親は日一日と衰えていった。趙耀根は、気持ちの上では充分いたわっていたが、年老いた母親にどうして親孝行してよいかわからなかった。
趙耀根は、
「お母さん、僕は家政婦を捜してきて、食事を作らせたり、家事をさせたりして、お母さんの世話をするよ」
と言った。母親は、
「それじゃ私はどうしたらいいんだい。まさか家政婦の後ろについて、指を加えていろって言うのかい。それじゃ手持ち無沙汰で益々つまらなくなるよ。それに無駄金を払うんだろう」
と言った。
「なんなら僕が寿大学まで送っていってやるよ」
「もう充分だよ。私に恥をかかせないでおくれ。天秤棒を倒すと一と読めるだろう。私はそれしか字を知らな

いんだ。全く読めないのさ。寿大学は、みんなが一緒にいて楽しいよ。書道を習ったり絵を描いたり、唄を歌ったり踊ったりしているよ。でも、もう結構だよ。お前のお母さんが行くところじゃないよ。お母さんはね、孫を抱きたいのさ」

趙耀根が、嘉児をちらっと見ると、嘉児はこの話題に触れてほしくないと言いたげだった。嘉児は敏感になっていた。

「おばあちゃん、私はおばあちゃんの孫じゃないの？」

趙耀根は、

「そうだよ。でも、お前はもうこんなに大きくなっただろう。だからおばあちゃんは、抱けなくなったんだよ。おばあちゃんは、赤ちゃんを抱きたいんだよ」

と慌てて取り繕った。

「そうなの。わかったわ。でもなぜ、おばちゃんに子供を産ませないの。おばちゃんは、張喜おじさんと結婚したかったんじゃないの」

趙耀根の母親は、

「このおませちゃんは、何でもお見通しなんだね」

と感心して言った。

「おばあちゃん、おばあちゃんは、私のお母さんが香港に出かけて、香港のおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行ったことを知っているの」

母親は、

「香港かい？そこは、イギリスの野郎どもに占領された高層ビルのあるところだろう」

といぶかしげに訊いた。趙耀根は、

「そうだよ。今我が国は対外開放政策を取っていて、暁歌は彼女のおじいちゃんやおばあちゃんに会いに行くことができるのさ」

と言った。

「これはつまり、いきなり出世したって言うことかい」

「そんなことないさ。ただおじいちゃん、おばあちゃんに会いに行っただけさ」

母親は、

「暁歌は、おじいちゃん、おばあちゃんに可愛がられるだろうね。きっと、随分ともてなしてもらったことだろうよ。彼女にも運が向いてきたね」

と言った。

「それは良いことじゃないか」

母親はため息をついた。母親の気持ちは複雑だった。

（二）

趙耀根は、事務デスクの前に座り、署名の必要な契約書にざっと目を通した。

長年努力の甲斐あって、趙耀根の超人ハイテクノロジー企業グループは、既にオフィスビルを持っていた。

オフィスビルには、

『市政府政治協商委員趙耀根は、広範な消費者に敬意を表する』

という横断幕が掲げられていた。毎朝、趙耀根は、会社の玄関で行われている社旗掲揚のセレモニーに参加し、会社の制服を着た従業員と一緒に社歌を歌いながら、自社の社旗が朝日の中をゆっくりと昇っていくのを仰ぎ見ていた。社旗が揚がると、彼は普通オフィスで五十分間執務をこなし、その後彼を乗せたベンツは行方がわからなくなってしまう。従業員達は、趙社長の習慣をわかっていたので、何か用事があると、この五十分の間に彼に指示を仰ぎ報告をするようにしていた。

唐燕影が入ってきて、彼の向かいの椅子に座った。彼は唐燕影が入ってきたのをわかっていたが、わざと顔を上げずに、あたかも契約書に目を通しているような素振りをした。唐燕影は、札束をバーンと彼の目の前に投げつけた。

趙耀根は、

「これは何だ」

と札束を持って、頭をもたげて唐燕影を見た。

「金よ」

「金であることぐらいわかっているよ。僕は、君が何で金をよこしたのかを聞きたいんだ」

唐燕影は、

「これは、あなたの前妻があなたに返したお金よ」

と「前妻」という二文字を強調して言った。

趙耀根は、

「彼女は、香港から帰ってきたのか？彼女は？」

と口から出任せに言った。唐燕影は、

「彼女は帰って来ていないわ。羅桂香に頼んで送り届けたんだわ。彼女は香港に行ったの？あなたはどうして知っているの？」

とやっかんで言った。

「ああ、その・・・嘉児が僕に教えてくれたんだ。このことが君と何の関係があるんだ」

唐燕影は、

「あなたはいつお金を前妻に貸したの。この会社は組合企業よ。もし社長がこそこそむやみにお金を使ったならば、将来どういうことになるか、予断を許さないわ」

と不機嫌に言った。趙耀根は、

「君は今、どうして僕を脅かして楽しんでいるんだ」

と言った。唐燕影は、

「誰が趙社長を脅かす勇気があるっていうの。あるわけないじゃない。私はあなたに忠告してあげただけなのよ」

と言った。趙耀根は、

「僕は、君にとやかく忠告されるには及ばないよ。君は、君がやるべきことをやればいいんだ」

と言った。唐燕影は、

「私は事実上あなたの奥さんよ。私がやるべきことは、他の女との腐れ縁を断ち切ることだわ。それには、あなたが裏切り行為をして、お金をろくでなしの女に貢ぐなんてことをさせないことよ」

と言った。

趙耀根は、お金をデスクに叩きつけると、受話器を取り上げて、

「私が寄付金をするので、貧困児童就学援助プロジェクトに渡すように」

と秘書に言った。

唐燕影は腹が立って仕方がなかった。

唐燕影は、

「いくら金儲けだからといって、頭がいかれているんじゃないかしら。今日は貧困児童就学援助プロジェクトに寄付をし、明日は橋を架け道路を補修し、明後日は老解放区（注27）の建設を支援し、・・・・、どうせ、でしゃばってテレビに出て、政治協商会議委員の名前だけの名声と引き替えをするにすぎないんだから。政治協商会議委員の値段はいくらかしら。それにただの平の委員にすぎないんじゃないの。私には、あなたがしようとしていることがわからないわ」

と言った。

（注27）は、抗日戦争勝利以前に、中国共産党の指導する人民政府が樹立していた地域

「お前に何がわかるって言うんだ」

「そうね。私には何もわからないわ。私は、ちっとも政治的な思考能力がないわ。それに、見識が浅く、ただお金のことをわかっているだけよ。低俗で浅薄で、付ける薬がないのよ」

趙耀根は、

「君は、身の程をわきまえているじゃないか」

と言った。

（四）

江暁歌が、プレートをおおっていた赤いシルクをめくると、『中港合資暁歌服飾有限会社』の十二の燦々と輝く銅色の字が現れた。みんな盛大な拍手をすると、爆竹の音があちこちから起こった。遂に江暁歌の新たなる旅立ちが始まった。

この日は一日中青空に白雲が浮かび、陽光があまねく照らし、江暁歌の心も殊の外伸びやかで、気持ちも良かった。

彼女は、今回はきっと成功できるという予感がした。

彼女は、曾ての職場の作業場を賃借りして、仕事のできる同僚達を招請した。

彼女は更に、江暁鴎に応援を頼み、深圳に出向いて宗漢を探し出してもらい、彼女の会社の社長に就任してもらった。

江暁歌は、服飾業務に熟知している羅桂香を彼女の助手にした。そして今回は強い布陣を敷き、潤沢な資金を持ち、綿密なマーケッティングを行い、充分な技術的な裏付けもし、崇高な経営理念と広い視野を持った。

彼女は用意周到、一歩一歩足場を固めながら着実に仕事をしたので、事業に失敗する心配もなかった。

寧岸と呉文彗は、寧遠を連れて暁歌服飾会社の祝賀パーティに列席した。寧遠は沢山食べ、思いっきり遊んだ。呉文彗も、寧岸に身振り手振りで話をしてとても喜んだ。彼女は江暁歌の苦労が実を結ぶのを夢見ていたからだった。

寧岸は、

「そうさ、暁歌には幸運が巡ってきたのさ。会社は大きくないけれども、自分の会社だ。彼女はそれに、高学歴の経営者の宗漢を味方につけたし、鬼に金棒も同然さ。彼女の潜在的能力は耀根よりも優れていると思うよ。彼女の創業の出発点は、更に崇高だ。その上香港の情報と資金があるし、天の利、地の利、人の輪が全て揃っている。凧は大きく向きを変えて、高く天まで昇りつめていったのさ」

と、かえってやっかんで言った。

呉文彗は、寧岸が嫉妬する気持ちを見抜いていて、身振り手振りで、暁歌に嫉妬しているねと伝えた。

寧岸は、

「そんなことないよ。僕はそんなに気が小さくないよ。心から暁歌を祝福しているんだ。そうでなければ、開業祝賀パーティに来て、食事をするはずないじゃないか。ただね、彼女が香港に行った時も、僕達に挨拶がなかったし、帰ってきて会社を創業した時にも、相談の一つもなかったじゃないか。文彗、彼らは、昔はこんな風じゃなかったよ。何かにつけて、僕の意見を聞くべきだったのに。僕は、彼らより読書家で、深い考えを持っていたんだ。でも今は、世の中が本当に変わってしまったんだ」

と冷笑を浮かべて言った。呉文彗は、

「友達にそんな無理なことを言ってはいけないわ」

と身振り手振りで伝えた。寧岸は、

「もういいよ。わかったよ。僕は、君が暁歌を好きなのはわかるよ。でも、彼女のために弁護する気はさらさらないんだ。僕の気持ちははっきりしている。僕は、会社経営の経験はないが、暫くの間ジーンズを売りさばいたことあるんだ。彼女にちょっと知恵を貸すくらい、余裕綽々だよ。勿論、江暁歌がたとえ力を貸してくれと言っても、僕は手伝うとは限らないよ。今世間では、毎日のように会社が創業されているけれど、逆に倒産する会社もたくさんあり、街頭には名刺が飛び交い、誰もが取締役や社長の肩書きをつけているじゃないか。これは、実際バブルにすぎないんだ。僕のようなインテリは、低

俗な輩のように流行を追うなんてことはできないよ」

と言った。

呉文彗は、笑って、もう寧岸を相手にしなかった。彼女は寧遠の世話をしに行った。寧岸と話をすれば、一晩中でも蕩々とまくし立てることがわかっていた。昔は容易に話をすることはなかったが、聡明な寧岸が一旦口を開くと、目を瞠るような言葉が口をついて出た。しかし今では、回りくどく言う年寄りのように変わってしまった。彼に対処する唯一の方法は、相手にしないことで、そうすることで彼を落ち着かせることができた。

寧岸は案の定、だんだんと物静かな人間になっていった。一人で机の前に座ると、原稿用紙を広げてペンを持ち、目の前の白い壁を見ながら思索に耽った。呉文彗はお茶を淹れて、静かに彼の手元に置いた。彼は、長い間考え込んでいたが、一文字も書くことができなかった。突然彼は、上を向いて長いため息をついたかと思うと、気が狂ったように目の前の原稿用紙を引きちぎった。

(五)

母親は電話をして、趙家の兄弟を家に呼んだ。彼女はテーブルいっぱいの料理を作り、自分の子供や孫を見ながら、テーブルを囲んで思う存分料理を食べ、思いっきり楽しんだ。

「お前達が今日食事を共にしたのは誰だと思う？みんな趙家の人間なんだ。なぜかわかるかい？今日はお前達のお父さんの命日に当たるんだよ。今日は私が特別にこのような場を設けたんだ。娘婿も嫁も誘ってないよ。私達は、食べたいものを食べ、話したいことを話しているんだ。お前達のお父さんは、きっととっても喜んでいるよ」

趙耀根は、

「畜生、親父の命日を忘れていたよ」

と言った。

「そんなことたいしたことじゃないよ。今はみんな忙しいんだ。お前達が、お父さんの命日をしっかり覚えていてくれれば、それでいいんだ。それに、私の言うことを聞いてくれさえすれば、いつでもお前達に電話をして、夫婦で呼びたい時には呼ぶし、今日のように、一人で来てほしい時には、一人で来るように声を掛けるよ。お前達兄弟なら、本音で話がしやすいからね」

趙耀根は、

「今日の料理は最高に美味しかったよ」

と言った。趙耀珍は、

「お母さん、万歳！今日のような集まりは本当に最高だわ。私は実はね、唐燕影に会いたくなくなったの」

と言った。母親は、

「本当に彼女って言ったらありゃしない。耀根はこの女とけりをつけないのかい。唐燕影という女は、始めっから耀根と暮らす女じゃなかったんだよ。お前とこんなに長く暮らしているのに、妊娠もしていないんだよ。きっと病気なんだわ。門外不出の宮廷の秘宝が、今まで効かなかったためしはないよ。この薬を使ったら、ほらね。耀珍は結婚して、わずか二ヶ月で妊娠したじゃないか」

と言った。趙耀珍は、

「お母さんたら、いい加減なこと言わないでちょうだい」

と恥ずかしそうに言った。

趙耀虎は、

「僕は教養がないからあけすけに言うけど、唐燕影さんには、品格なんてないんだ。ダンスホールのママみたいだし、お母さんに親孝行しないし、家にも来やしない」

と言った。母親は、

「来ようが来まいが、どうでもいいことさ。私はね、趙家のために男の子を産んでもらうのを待ち望んでいるのさ。耀根の年を考えると、もうこれ以上待てないよ。耀根の財産は申し分ないのに、何で女運が悪いんだろうね。娶った女はどれもこれもダメじゃないか」

と言った。趙耀珍は、

「お母さん、唐燕影がどうして私の兄嫁と言えるの。そんなことできないわ」

と続けて言った。趙耀虎は、

「兄さん、ちょっと誤算だったね。江暁歌は人柄が素晴らしいよ。みんな彼女のことが好きなんだ。どうして我々趙家と縁がないんだろう」

と言った。趙耀珍は、

「私とはずっと良い関係よ。私が結婚した時に、兄さん以外で一番高価なプレゼントをしてくれたのは暁歌よ。もし私が男だったら、どうしても姉さんのような女の人を手放したくないわ」

と言った。趙耀根は、

「みんなで寄ってたかって僕をつるし上げたいのか」

と言った。趙耀珍は、

「当たり前よ。お母さんが言ったじゃない。今日は趙家の集まりよ。言いたいこと言っていいのよ」

と言った。趙耀虎は、

「僕はみんなに一大ニュースを発表したいんだ。中港合資暁歌服飾有限会社が創業したんだ」

と言った。趙耀珍は、

「えー、姉さんが本当に会社を作ったの？」

と言った。趙耀虎は、

「勿論だとも、暁暢が姉さんの会社に僕を連れて行ってくれたんだ。江暁歌取締役はとっても綺麗で上品だったよ。多くの男達が彼女を取り囲んで、行ったり来たりしていたよ。兄さんがもし見ていたら、きっと後悔して、いきなり壁に頭をぶつけて自殺してしまうだろうよ」

と言った。母親は、
「趙耀虎、馬鹿を言いなさんな」
と言った。趙耀珍は、
「私、とっても嬉しいわ。神様がしっかり、見守っていてくれたのね」
と言った。
趙耀根は苦笑いした。彼は酒をさらさらとほんの少し飲みこんだが、心の中にはいろいろな思いが巡り、酒の味がわからなくなってしまった。

第二十二章　暴落

（一）

大橋服飾工場の縫製作業現場は、今では、暁歌服飾有限会社の心臓部となった。作業現場は、改装されて明るくなっていた。縫製の流れ作業ラインは、全て香港から輸入された真新しい設備だった。管理人の事務所は作業現場に置かれていて、ガラス越しに労働者がラインで作業をしている様子を見ることができた。羅桂香は、生産経理を担当し、終日、ラインを行ったり来たりしていた。
江暁歌の事務所は、さほど大きくなかった。しかし、小綺麗に片付いていて、壁には古い本棚が置かれ、その他はマネキン棚になっていた。江暁歌はデザイナーも兼任し、マネキン達に、新たに提案したものをデザインした。
宗漢の事務所は、会社の中で最も洗練された場所で江暁歌の事務所より大きく、応接室も設え、近代的な事務用品やコンピュータも完備されていた。
宗漢は、ここであらゆる手段を講じて世界各地と連絡を取り、新しい情報を仕入れ、多くの顧客と付き合い、資金を調達し原材料を仕入れていた。江暁歌が宗漢を自分の部下として招聘したことは、言うまでもなく賢明な措置であった。宗漢は聡明で有能な上、熟練しているばかりでなく、これまでの取引の経験の中から、多くの重要な情報資源をもたらした。これはいくらお金を積んでも手に入るものではなかった。
このように、江暁歌は会社の全ての対外的な交渉ごとを宗漢に委ね、江暁歌自身は、デザインと製造に全力投球したので、会社は軌道に乗っていった。

（二）

江暁歌の会社は、趙耀根にとってずっと謎だった。彼はこの謎を説き明かしたかったし、会社の経営メカニズムを知りたかった。それに、かつての妻が今どのように暮らしていて、どんな男達が彼女を取り巻いているのか知りたかった。彼は長い時間ためらっていたが、どうしても好奇心を抑えられなくなり、江暁歌の会社へ行く決心をした。
彼はベンツを暁歌服飾有限会社の正面玄関に横付けした。彼は車の中からしばらく暁歌服飾有限会社の外観を眺めていた。この通りは、彼がよく知っている当時のままだった。彼は曾て自転車に乗ってここまできて、仕事帰りの江暁歌を出迎えたものだった。
彼は、江暁歌が彼の腰にしがみつき、顔を彼の背中にうずめて、黙って彼についてきた在りし日の情景を忘れることができず、懐かしくあの良き日々を振り返った。昔のことを思い起こすと、彼の心は塞いだ。彼は少し年を取ってしまったのか、どうして昔のことを懐かしく思い始めたんだろうかと、いぶかしく思った。
彼の運転手をしている張喜が、
「趙社長、なんなら私が先ず入って行って、様子を見てきましょうか」
と声を掛けた。
「それには及ばないよ。俺が自分で行くよ」
彼は作業現場を通り抜けて、暁歌会社に入っていった。
彼は石畳の小道に沿って、前に向かって歩いて行った。社長室は直ぐに見つかった。社長室の入り口は開いたままになっていて、江暁歌と宗漢が仕事の打ち合わせに没頭している最中で、キーボードを叩く音だけが聞こえていた。趙耀根は社長室に入ると、彼らの後ろに立って、黙って彼らを見ていた。
宗漢は、
「我々が西南西北の全ての地区を押さえたならば、会社はステップアップできる。我々の競争相手は多い。しかし、我々の優位性は南方のいかなる相手より勝っている。彼らには、少なくとも長距離輸送の問題があるが、我々にはその心配はない」
と言って突然話を切り出した。江暁歌は、
「こうして考えてみると、品質は私達の生命線の全てです」
と答えた。宗漢は、
「品質ばかりではない。その他に工期の問題もあるし、販売ネットワークも確立しなければならない。とにかく我々は各方面と盤石な人間関係を築かなければならないんだ。例えば、今晩社長は、東方商業ビルの創業パーティに出席しなければなりません。そして、夏社長のために生花の盛りかごをプレゼントしてください。江社長は必ず化粧をし、ドレスアップして、初対面で社長のことを信頼させ、才能を認めさせ、デザイナーとしての優れた技術を認めさせなければなりません」
と言った。
江暁歌は応対が苦手なので、首を横に振ってため息をついた。
「心配しないでください。藍雲が社長をサポートする

でしょう。午後、彼女が社長を美容院にお連れします。社長はひどく疲れた面持ちで、創業パーティに出かけるかもしれませんが、きっと輝いた顔で会場から出てくることを願っています」

趙耀根は、夢中になって二人の話に聞き入った。この種の経営の話は、まさしく彼の暮らしのひとこまといえた。

僅かに彼らの話を聞いただけで、彼は江暁歌の仕事が軌道に乗ったことを知った。彼は、彼女の未来が計り知れないことがわかり、彼女のために喜んだ。そして同時に、彼女の傍にいて講釈をする貴公子に嫉妬を抱いた。

趙耀根は、

「僕もこのパーティに出席するんだが、僕が君を迎えに行っていいかい」

と話しかけた。

江暁歌と宗漢は、突然話し出した趙耀根に驚いた。江暁歌は私情にとらわれない顔つきをしていた。

趙耀根は、

「ぶしつけな言い方で申し訳なかった」

と言った。宗漢は、

「どういたしまして。趙社長にわざわざお越しいただき、仕事ぶりをご指導いただけることを歓迎しています」

と言った。趙耀根は、

「指導だなんてとんでもない。今後このような機会があれば、教えを請いたいほどだ。でも今日は私用があります。嘉児の母親と二人だけで話をしたいのです」

と言った。宗漢は、

「わかりました。私は席を外します」

と気を回して言った。江暁歌は、

「いいえ、ここはあなたの事務所です。出て行くのは私達の方です」

と口を挟んだ。

彼女は、体の向きを変えて事務所を出た。趙耀根は、江暁歌の後について彼女の事務所に入っていった。

江暁歌は自分のデスクの後ろの椅子に腰掛け、趙耀根は客がいつも座るソファに座った。

このような座り方は、江暁歌に優越感を持たせるものだった。このため、それぞれの心の持ちようにも影響した。

江暁歌が話し出さないうちに、趙耀根は学校からのお便りを取り出して、

「嘉児の学校では一家全員で参加する運動会があって、嘉児は自ら申し込んだんだ。ほら見てごらん、嘉児は素直に育ったので、僕はこの子の気持ちを損ないたくないんだ。だからここまで相談に来たんだ。君はどうしたらいいと思う」

と江暁歌に手渡した。

江暁歌は黙ってこのお便りを読んだ。彼女は、嘉児が

自己主張できる子でないことがよくわかっていたので、趙耀根の意図するところが手に取るようにわかった。彼女は顔色一つ変えずにお便りをデスクの上に置くと、顔を上げて趙耀根をまじまじと見て、

「あなたは、どうすべきだと思っているのですか？」

と問い返した。趙耀根は、

「僕は嘉児の願いを叶えてやりたいんだ。それに、君が嘉児の願いを叶えてあげることを望んでいるよ」

と言った。江暁歌は、

「私は、嘉児が運動会に参加することに賛成です。わかりました。もうお帰り下さって結構です」

と冷笑を浮かべて言った。

江暁歌がことのほかあっさりしていたので、趙耀根はポカンとしてしまい、

「ありがとう」

とつい口をついて出てしまった。

江暁歌は、

「御礼には及びません。私が娘のために運動会を見に行くのですから。趙社長、どうぞお帰り下さい。私は仕事がありますから」

と言った。趙耀根は立ち上がって、

「私は心から君の会社の前途を祝福するよ」

と少し不服そうに言った。江暁歌も、

「ありがとうございます」

と言葉を返した。

趙耀根はまだ言いたかったが、江暁歌のあまりにも自分の意見を拒絶する様子を見て、口をつぐむよりほかなかった。

（二）

趙耀根はベッドに横たわった。彼は、『歴史が毛沢東を選んだ』という本に暫く熱中していた。唐燕影は風呂から上がったばかりで、彼の側に座って足にマニキュアを塗っていた。

唐燕影は趙耀根と話をしたがったが、趙耀根が一向に本から目を離そうとしなかったので、とうとう我慢できなり、

「耀根」

とそっと声をかけた。

趙耀根は聞こえない振りをして、本に没頭していた。

唐燕影は腹に据えかねて、

「耀根」

と趙耀根の手の中の本を奪い取った。

「私と話をしないの？」

趙耀根は、

「君は何をしていたんだ」

とカッとなって言った。唐燕影は、

「私はあなたと話をしたいのよ」
と怒りを抑えきれずに言った。
唐燕影の可哀想な様子を見て、趙耀根は怒りを抑えるよりほかなかった。
「わかった、わかったよ。本を読むのをやめるよ。話をしよう」
「私のこと、いい加減にあしらわないで」
「僕がいつ、君のことをあしらったって言うんだい。まさか、僕が君に楽しみや幸せをもたらさなかったとでも言うのかい」
「昔はあったわ。でも今は、段々と楽しみが少なくなってきたわ。あなたがいつも私に隠し事をしてコソコソやっていることを知っているわ。最近、江暁歌にまた会ったでしょう」
「会ったよ。でも、これは君と関係がないことさ。彼女は嘉児のお母さんだ。僕達は少なくとも、子供のことで相談しなければならないことがあるんだ」
「あなたは、嘉児のお父さんよ。彼女はどうして、自分からあなたを訪ねて相談しないのよ。口実を探すのはやめてよ。私は、前から正々堂々と趙家の玄関をくぐりたかったのよ。良いでしょう。私は天下晴れて、あなたと夫婦になりたいわ。趙耀根という人間の中では、私は永遠に、あぶく銭で養ってもらっている妾に過ぎないじゃない。いつか別れたくなったら、ゴミのように捨てられるんだわ」
「そんなこと君が言うのは間違っているよ。僕たちは恋愛して同棲しているんだ。妾なんかであるもんか」
「今あなたは歴とした大経営者で、大きな力で多くの人の運命を左右しているわ。一人二人の女を捨てるぐらい朝飯前じゃない。私は本当に後悔しているわ。私も最初は自分の会社を持っていたわ。私がもし一生懸命仕事をしたら、ここまで落ちぶれることはなかったわ」
「君は、僕についてある程度は理解すべきだ。言っておくけど、僕は君とまじめに付き合ってきたよ。ここ数年、僕は他のどんな女とも関わっていないよ」
唐燕影は暫く黙っていたが、おとなしくなって言った。
「私達結婚しましょう。結婚したらあなたのために子供を産むわ。約束するわ」
「君は順序を逆にしている。先ず主人の子供も産むんだ。それから結婚だ」
「もし私が男の子を産むことができなかったら、女の子しか産めなかったら、あなたはやっぱり私を捨てるんじゃない」
「君が、僕の母親の門外不出の薬の処方に基づいて薬を飲めば、男の子を産むこと間違いなしさ」
唐燕影は黙っていた。趙耀根は、確実に利益を掴む見通しがつかないと、手を出さない男であることを彼女もわかっていた。

趙耀根はまた本を読み始めた。唐燕影は、突然激しい怒りを爆発させ、マニキュアをつま先で蹴飛ばした。
「趙耀根のバカ」
趙耀根は、顔色一つ変えずに、本を読み続けた。

(四)

羅桂香は不思議に思い、
「ほら見て。嘉児のおばあちゃんじゃないの?」
と江暁歌に言った。
江暁歌は、羅桂香の指さす方に目をやった。すると、趙耀根の母親がアイスキャンデーを売っているのが目に留まった。彼女は昔ながらの格好で、白い前掛けをつけ白い帽子をかぶり、大声を張り上げて大通りを行き交う人々に呼び掛けていた。
江暁歌は心底びっくりして、思わず母親に歩み寄り、彼女に手をかけて尋ねた。
「耀根に何かあったの?」
趙耀根の母親は、声をかけてきたのが江暁歌だったので、びっくりしたが、やっと笑い出して言った。
「暁歌じゃないか」
江暁歌は、
「耀根に何かあったの」
と再び尋ねた。
母親は、何のことだかさっぱり見当がつかなかった。
「何かあっただって?耀根は、今朝も胸を張って会社の玄関で社旗を揚げていたよ」
「それじゃ、お母さんはどうして町に出て来て、キャンディなんか売っているんですか?」
「私一人で家でくさくさしているより、街に出て来て声を上げていた方がすっきりするんだ」
江暁歌は、
「嘉児の世話をしてくれてありがとう」
と言ってばつが悪そうに笑った。
母親もなんと言って良いかわからずに、
「嘉児はよい子だ、よい子だ」
と、ただただ繰り返すだけだった。
彼女はアイスキャンデーを二本掴んで、江暁歌と羅桂香の手の中に押し込み、
「さあ、お食べ、お食べ」
と言った。
江暁歌はアイスキャンデーの袋を取って一口かむと、笑いながら趙耀根の母親にさよならを言った。
彼女達は歩道に沿って暫く歩いていたが、羅桂香が、やっと笑いながら江暁歌をからかった。
「あなたは心の中で最初からあの人のことが気になっているんだわ」
「デタラメ言わないでよ」

「あなた、まだ否定するの。あなたは、耀根の母親がキャンディーを売っているのを見て、びっくりしていたじゃない」
江暁歌は、
「彼は嘉児のお父さんだわ。私は嘉児のために心配したのよ」
と言った。羅桂香は、
「彼も口を開けば、あなたが嘉児の母親だからねと言っているわ。あなた達はいつも、同じことを考えているのね」
と言った。
「羅桂香、あなたはどうかしているわ。元々あなたは、彼のこととっても恨んでいたじゃないの」
羅桂香は、
「元はといえば、私が彼を憎んでいるのは、あなたに原因があるわ。今私が同情しているのも、元はと言えばあなたが原因よ。間違っているかしら」
と言った。
趙耀根も、大通りでキャンディーを売っている母親に気が付いた。
彼は張喜に車を止めさせ、助手席に座っている趙耀虎に声を掛けた。
「母さんがアイスキャンディーを売っているぞ」
趙耀虎も、大声でアイスキャンディを売っている母親を見て、
「何でまたアイスキャンディなんか売っているんだ？恥ずかしくないのか？」
と言った。趙耀根は、
「お前達は母さんの屋台を片付けて、母さんを車に乗せるんだ」
と叫んだ。
趙耀虎と張喜は、その声に応じて車を降り、足早に母親の前まで突き進んだ。彼等は、母親に有無を言わさず、何も説明しないで母親の屋台を片付けた。そして、趙耀虎は母親を抱えて車に引っ張り込んだ。
母親は、
「耀虎、お前は何をするんだ」
と力の限り藻掻いて叫んだ。趙耀虎は、
「兄さんが、お母さんを連れて帰ってから訳を話すって」
と言った。母親はそれを聞くと腹を立て、
「趙耀根の畜生めが、お前は、年老いた母親がお前の面子を潰すのが気に入らないんだろ。お前は車に乗ったまま出てもこないで見ていたのか。私は帰らないよ。誰か助けておくれ、連れて行かれるよ」
とわめいた。
警察がその声を聞きつけ、追いかけてきて厳しく怒鳴

った。
「何をしているんだ。動くな」
趙耀虎は、
「余計なお節介はやめてください。私の母親ですよ」
と言った。母親は、
「バカを言い。わたしゃ、この人の母親なんかじゃないよ」
と意に介さず言った。警官は、
「さあ、私と派出所へ行くんだ」
と手錠を取り出して、趙耀虎に掛けようとした。
母親は、息子が派出所に連れて行かれると聞いて、
「もういいよ。彼は私の息子です」
と慌てて言った。
趙耀根は車から降りてきて、礼儀正しく警官に挨拶をして名刺を渡した。警官を名刺を見ると、態度を軟化させて尋ねた。
「趙社長、いったいこれは何が起こったのですか？」
趙耀根は、
「ちょっとした家族の詰まらないいざこざですよ」
と当たり障りなく言った。
「母さん、帰ろう」
母親は、
「この畜生め。お前は自分は車に乗っていて、弟に私を連れて行かせようとしたね。お母さんがアイスキャンディーを売って何が悪いんだい。働くことは一番名誉なことだよ。お前は、お母さんのやっていることが面目ないと思っているんだろう。ちょっと金を稼いだら、もう働くことを恥ずかしいと思うようになったのかい。私が思うに、お前は父親が埠頭の運搬夫だったことをすっかり忘れちまったんだね。労働者階級は指導者階級だよ。これは毛首席が言った言葉だよ。お前は私より優れていると思っているだろうが、お前は資本家に過ぎないじゃないか」
と悪態をついた。
野次馬は喜劇だとわかると、どっと好意的な笑いを見せた。警官も笑っていた。
趙耀根は、
「何を言われようと、とにかく帰ろう」
と不機嫌そうに言い、
「トランクを開けて、荷物を一切合切車に載せるんだ。帰ろう」
と趙耀虎に言った。
家に帰ってからもずっと、趙耀根と母親は腹を立てたままで、お互いに取り合おうとしなかった。
趙耀珍は、
「もうよしてよ。何があったって言うの。こんなふうにケンカをする価値がどこにあるって言うの。お母さんが街に出掛けてアイスキャンディーを売るのは、何も間

違っていないし、兄さんがお母さんに帰るように言うのも間違っていないわ。兄さんの理由もわかるわよ。お母さんの気持ちも、お年寄りなら誰でもわかることよ。こういう住宅地に住んでいるんだから、とっても寂しいのよ」

と言った。

趙家の母親は、遂に自分を理解してくれる人が見つかったと思って、

「そうだよ。こんな所に住んでいると、気がおかしくなりそうだよ。寂しくって、こんなんで大都会って言えるのかい。アイスキャンディーを売って金を稼ごうなんて考えていないよ。広場にたくさんの人がいて、賑やかな雰囲気の中にいると、一日が瞬く間に過ぎてゆくのさ」

と言った。趙耀根は、

「お母さん、お母さんは昔のお母さんでないことをわかっていますか。あなたの子供は、歴とした政治協商会議委員で、会社の社長なんですよ。身分のある人間なんです。私はお母さんのために、この住宅地にスーパーマーケットを作ります。良いでしょう」

「願ってもないねえ。私のためにショッピングセンターみたいなビルを作ってちょうだい。そして大通りを作り、昔あった老舗を全部移転させておくれ」

趙耀珍は、

「お母さんはまた道理をわきまえないことを言っているね」

と言った。母親は、

「私が道理をわきまえないとでも言うのかい。アイスキャンディーを売る自由さえもなくなってしまったんだよ」

と言った。

趙耀珍は、狂ったように怒鳴った。

「お母さんやお兄さんは、頭がおかしくなったんじゃないの？教えてあげるわ。三ヶ月前、私達の工場は人員を削減されて、私は解雇されたのよ。この家のみんなに楽しく暮らしてもらうために黙っていたけど、彼方此方と働き口を探しているのよ。今私は、環境衛生局で一ヶ月くらい仕事をしているわ。毎日どんな仕事をするかって？道路を掃いたりしているのよ。私達の作業班は田舎者を募集したわ。この御時世、どこの町の人が苦労して働きたいと思っているかしら。そんな人いないわ。汚れてくたくたになって危険も伴うのよ。私が何のために働くかって。決まってるじゃない、自分の食い扶持を確保するためだわ。家の人に面倒を掛けないようにするためよ。私に比べれば、お母さんや兄さんは極楽じゃないかしらね。ケンカなんかしている場合じゃないわ」

趙耀珍は、話をしているうちに涙が溢れてきた。みんなびっくりして、趙耀珍に近寄って慰めた。

趙耀根は、

「張喜、お前が悪いんだぞ」

と言った。

「趙社長、趙耀珍に言うなと言われていたんだ。それに、僕は既に趙社長の浅からぬ恩恵にあずかっています。趙社長は政務が多忙を極めているので、このような些細なことで迷惑を掛けたくないのです。実際、耀珍が働かなくても、僕の給料でも彼女を養うことはできます」

趙家の母親は、

「耀珍はしっかり働いていて気骨もあるよ」

と感心して言った。趙耀珍は、

「私は兄嫁からこのことを学んだのよ。兄嫁は誰よりもついていなくて運が悪いけど、誰よりも強靱だわ」

と言った。

(五)

唐燕影はパックをして、足の爪をハサミで切り揃えていた。趙耀根は相変わらずベッドに横たわって、例の『歴史が毛沢東を選択した』を読んでいる。

「趙耀根、ねえ、趙社長ったら、そんなに取り澄まして本なんか読んで、私に構ってくれないの。バルコニーから飛び降りてやるわよ」

趙耀根は、

「気でも触れたのか」

と本を置いた。唐燕影は、

「今私は、いろんなことを振り返って考えてみたのよ。女は自ら向上し、自立しなければならないと思っているのよ。そうしなければ前途を占うことは難しいわ」

と言った。趙耀根は、

「具体的に言えよ」

とうわの空で返事をした。唐燕影は、

「仕事をしなければならないと思っているわ。私が熟練していて、最も成功する可能性がある事業をしなければならないと思っているの」

と答えた。

「わかった、わかったよ。君の応援をするよ」

「私は劇を上演したいわ」

「劇を上演するって？テレビドラマか何かのかい？」

「そうよ。テレビドラマを撮りたいわ。主演女優を演じたいの。一回の上映で人気を博したいのよ」

趙耀根は、

「可能性はあるのか」

とつまらなさそうに天井を仰いで言った。

「もちろんよ。今ではどんな人も劇を上演しているわ。私のように、俳優養成所で正式な訓練を受けた俳優が上演できないことがあるものですか。私は中国人に、何が本当のテレビドラマか見せたいの」

「僕は君を信じているよ。そして、君に運が巡ってく

ることを祈っているよ。しかし、このことは僕とは何ら関係のないことさ」

「あなた、何とぼけているのよ。今では劇を撮るのにお金がいるのよ。今ちょうどチャンスなの。ある劇で主演女優を探しているのよ。私はプロデューサーと話をしたことがあるわ。私達が彼のスポンサーになれば、主演女優は私のものよ」

「プロデューサー達はどのくらいのお金が必要なんだ」

「たいしたことないわ。20万元から30万元くらいよ」

趙耀根は考え込んでいて、良いとも悪いとも言わなかった。

「私が彼らに電話を掛けて、あなたと話をさせるわ。良いでしょう」

彼女を有無を言わせずに、受話器を持ってダイヤルを回した。電話は直ぐに繋がった。唐燕影は一言二言言葉を交わして、直ぐに受話器を趙耀根に押しつけた。

趙耀根は、

「何するんだ」

と瞑想から目覚めて怒鳴った。

「電話に出てよ。監督自身があなたと話したがっているわ」

趙耀根は嫌気がさして、

「誰が監督と電話で話をしたいって言ったんだ。この畜生めが」

と言って受話器を投げつけた。唐燕影は、

「趙耀根、あなたお金を出すことを承諾したじゃない。自分が言ったことを取り消さないでよね」

とムッとして顔色を変えた。

「僕は人に強要されるのが大嫌いなんだ」

「あの監督も身分のある人よ。あなたは、私に明日どうやって監督と会えって言うのよ。会えるわけないじゃない。私の顔を潰したのよ」

唐燕影は、

「趙耀根、私は汪暁歌がなぜあなたと離婚したのかやっとわかったわ。あなたのような残忍非道な恩知らずには、人の気持ちが全くわからないのよ」

と言って身震いした。趙耀根は、

「やっとわかったかい。わかったならそれでいいさ。僕のような残忍非道な男と一緒にいるのはとても危険だよ。君は望みが高すぎるのさ」

「出て行ってよ」

「出て行けって？」

「そうよ。どこか遠くへ出て行ってほしいのよ」

趙耀根は『歴史は毛沢東を選択した』を鞄に入れて、振り返りもせず出て行った。唐燕影は唖然として、趙耀根がドアの外に消えて行くのを見ていた。唐燕影は恨めしい思いで、そのままベッドにどっと倒れ込んだ。

(十八)

ドアをノックして、スリッパを履いたまま入ってくる趙耀根を見て、母親は趙耀根に何かあったことに気が付いた。

「唐燕影とケンカをしたのかい？唐燕影さんがお前を追い出したのかい？彼女はちょっと変じゃないかい？あの家はお前の家だろう」

趙耀根は腰を下ろすと、煙草をふかしながら、

「小声で話をしてくれよ。みんなが目を覚ますといけないから。僕に一杯熱いお茶を淹れてくれ」

と母親に言った。

母親は、黙々とお茶を飲む息子を見守っていたが、

「耀根、お前はどうして話をしないんだい？」

と我慢できずに尋ねた。

「お母さんは言いたいことを言えばいいのさ。僕はお母さんが話をしているのを聞いているだけで良いんだ」

「わかったよ。それじゃ私が話をするよ。今の社会じゃ、若い女性秘書は誰でも大金持ちの愛人になることを知っているよ。私が街でアイスキャンディーを売っていると、一つまた一つと川柳が聞こえてくるんだ。私は覚えられなかったけれど、みんながそれを読むのを聞いていると、お前のことをあざ笑っているかのようだよ。あの唐燕影はいい女じゃないよ。体中に浮気っぽい臭いがするんだ。男を引っかけるのが一番好きな女なんだ。なぜ男を引っかけるかって？金のためさ。旧社会にはこんな女がいたんだ。最近また増えてきたよ。彼女達は夫とするような相手を選ばないんだ。ふしだらな女さ。彼女はまだ妊娠した兆候がないよ。これは疑うべきだよ。若くて健康な女の子が、どうして何年も子供を妊娠することができないんだい。彼女は病気か、それとも密かに避妊しているかのどちらかだよ。彼女のような人種の女が、安易にお前のために子供なんか産むはずないじゃないか」

趙耀根は、

「わかったよ。もう言わなくていいよ」

と答えた。

「なぜかって？私はお前よりこの女を見抜いているんだよ。こんなに長い間、得体も知れない女を囲って一緒に住んでいて、嘉児だって遅かれ早かれわかるだろうよ。嘉児がいつか、お前を見くびるのを責めないでおくれ」

母親は、

「唐燕影は汪暁歌に遠く及ばないよ。唐燕影の破廉恥なことと言ったらないじゃないか。腹黒いし、お前を裏切った上に、更に金を稼がせているじゃないか。用心するに越したことはないよ。よく考えてご覧よ。嘉児のお母さんの方が断然良いよ。私は昔、嘉児のお母さんに冷酷過ぎたよ」

と続けて言った。
趙耀根は疑いの目で、チラッと母親の方を見た。
「お母さん、何かあったのかい？」
「最近、一度だけ江暁歌と会ったことがあるんだ。街で江暁歌と羅桂香が一緒にいたんだよ。嘉児から暁歌がどんなに綺麗か聞いたことがあるだけで、さして気にも留めなかったけど、今度会ったら本当に綺麗だったよ」
「お母さんは話をしたのかい？」
「江暁歌は、私が嘉児のおばあちゃんだからね、礼儀正しく『お母さん』と声を掛けてくれたよ。私は江暁歌にアイスキャンディーを御馳走してあげたんだ。江暁歌はやっぱり、私を許すことができないみたいだったけど、・・・」
母親は服の裾をまくって涙をぬぐった。
「彼女が許せないのは僕の方だよ。今振り返ってみると、多くのことで、僕は彼女のことを誤解していたんだ。江暁歌は確かに最高に素晴らしい女性だよ。現に今彼女は、素晴らしい仕事をしているんだ。当時どうして、僕は唐燕影に心を迷わされてしまったんだろうか？」
「当時のことはお前のせいじゃないよ。当時、江暁歌には手こずったよ。病弱で痩せていて、それに頑固で言葉がきつくて。それが今じゃ、本当に不思議だよ。女達は年を取れば取るほど若くなっていくんだ。大通りを歩いている女は、みんな18歳のように思えるよ。暁歌もそうだよ。着ているものも綺麗だし、顔は艶々しているし、色白で紅味を帯びているし、上品で淑やかで、どうして三十数歳の女に見えるだろうか。とても見えやしないよ」
母親の話に、趙耀根の心の琴線は震えた。彼は黙っていた。母親も黙ってしまった。彼らは同じ気持ちを心に抱いていたが、口も開かず、相手の気持ちを押し計っていた。しかしどうして良いかわかなかった。
彼らは、江暁歌のことをずっと思っていた。

（七）

新聞で、上海市と深圳市の株式市場の暴落が止まらないというニュースを読んで、江暁歌は大きな災難が降りかかってくるような気がした。彼女には株式市場についての理解があまりなく、興味もなかったが、江暁鴎がずっと株の投機的売買をしていたことを知っていた。彼女は、江暁鴎がおそらく株式市場の暴落に巻き込まれるだろうと予想してはいたが、宗漢が慌てて彼女の事務所に駆け込んできた時、これは面倒なことになると直感した。
彼女は、心の中で既にぶるぶると震えていたが、表面上は冷静を装い、
「暁鴎は株式市場の暴落に巻き込まれたの」
と宗漢に訊ねた。
宗漢は驚きのあまり、不思議そうに訊ねた。

「あなたはどうして知っていたのですか。暁鴎は、あなたにすぐに知らせないようにと私に言ってきたのです」
江暁歌は、
「私には何が起こったのかわかりません。ただの推測に過ぎないのです」
と言った。
「あなたの推測は的中しました。今日、深圳、上海の株式市場は、暴落が止まらず、暴落によって取引所が立ち会いを中止しました。多くの投資家が、あっという間に貧乏人になってしまったのです。飛び降り自殺をした者はが、既に数人もいます」
彼女は、
「まさか暁鴎も飛び降り自殺を・・・」
と顔色を変えて言った。宗漢は、
「安心してください。暁鴎は決して自殺をするようなことはしません。しかし、彼がやったことは小さくないのです。自分の元手がなくなってしまったばかりでなく、広東の会社に数十万元の損失をさせたんです。今、広東の会社は彼を捜し出して金を回収しようとしています。それに、公安にも事件として届けを出しました。私は彼を農村にかくまっているので安全です」
と彼女を慰めた。江暁歌は、
「隠れていることは得策ではないわ」
と落ち着いて言った。宗漢は、
「もし私達が暁鴎の肩代わりをして、広東の会社にお金を返済したなら、広東の友人に仲裁に入ってもらい、この事件を取り下げてもらいます。金銭面で損失さえなければ、広東の会社が暁鴎に難癖をつけるはずがないことを、みんなよくわかっているのです」
と言った。江暁歌は、
「わかりました。それならお金を返済しましょう。私達の会社で流用できるお金はどのくらいありますか？」
「問題はそこなんです。私達にはお金はありません」
江暁歌は、呆然となった。
「何ですって」
「一昨日、私達は、工場の労働者の給料とボーナスを支払ったばかりです。そのほかの資金で生地を購入しました。私達が必要な原料は品薄なので、供給が需要に追いつかず、現金で購入することになっています」
「何店舗かの売掛金の未回収のショッピングセンターがあるんですよね」
「私は催促したのですが、相手は対策を考えて、近日中に解決するように承諾してくれました。しかし急場の役には立ちません」
宗漢は、
「もし私達が原料代を使い込んでしまうと、会社の衣料は期日通りに商品を出荷することができません。私達

が苦労して築き上げた絶大な信用と評判は一夜のうちに失墜し、虎視眈々と機会を窺っている競争相手は、一夜のうちに我々を食い尽くしてしまうかもしれません。あなたは、私がわざと大げさなことを言って、びっくりさせていると思っているのでしょう」

と言った。江暁歌は、

「いいえ、そんなことはありません。実際の状況が更にまずいと言うことはわかっています。なぜなら、今後私達はたとえ資金があったとしても、既に信用と信頼を失ってしまっているのですから、あらゆる人達が、私達を信用しなくなるでしょう。市場は埃を払うが如く、私達を捨て去るでしょう」

と言った。

江暁歌は宗漢を見ていたが、暫く話をすることができなかった。

江暁歌は一時間あまり考え込んでいたが、やっと口を開いた。

「どんなことがあっても暁鴎を救いたいんです。たとえ一文無しになってもいいんです。人ほど大切な財産はありません。勿論、あなたにも羅桂香にも、絶対義理を欠きたくありません。固定資産は全てあなたに差し上げます」

「あなたはそんなふうに言うべきではありません。私もどうしても暁鴎を助けたいのです。私も一文無しになっても構いません」

江暁歌は、

「暁鴎があなたのような友人を持ったことは運が良いと思うわ。暁鴎に電話しても良いかしら」

と感動して言った。宗漢は、

「電話を掛けない方がいいです。私があなたに代わって暁鴎の面倒を見ますから、彼と連絡を取ってはいけません。あなたが彼と連絡を取ることを少なくすればするほど、彼の身は安全なんです」

と言った。

江暁歌は自分の胸にだけしまっておけず、家に帰ると、すぐにこのことを母親に知らせた。

沈鳳宜は、

「暁鴎、暁鴎、お前にもしものことがあったら、お母さんは生きていけないわ」

と泣きじゃくって叫んだ。

江暁暢は逆にむしろ落ち着き払って、他人の不幸を見て喜んでいるかのようであった。

「暁鴎だわ。超人グループの副社長の椅子も蹴って、一日中陰でコソコソ何をしているのかわかりゃしないわ。私は遅かれ早かれ、何か起こると思っていたわ」

江暁歌は彼女の口を塞ぐしかなかった。

「江暁暢、あなたは火に油を注ぐようなことをしないでちょうだい。わかったわね。暁鴎は私達の弟よ。いつ

もあなたに多くの援助をしてきたわ。黎美娟の化粧品や服は、いつだってあなたに自由に使わせていたじゃない。肝心な時に、あなたはどうして、いつも口から出任せ言って喜んでいるの」

「私がどうしてデタラメを言うの。言うわけないわ。良薬は口に苦しって言うじゃない」

沈鳳宜は、

「暁暢、黙りなさい。私はあなたに言うことがあるわ。今はぐだぐだと言うべき時じゃないわ。資金を工面する方法を考えて、暁鴎のために借金を返さなければいけないのよ。あなたがもし絡んでくるのなら、親子の縁を切ったとしても、文句を言えないわよ」

とソファを叩いて言った。

江暁暢はぴっくりして口をつぐみ、おとなしく角の方に座った。

江暁歌は、

「私は既に会社を廃業してお金を持ち出し、暁鴎を救う準備をしています」

と言った。沈鳳宜は、

「暁歌、お前は本当に心根の優しい子だね。でも、お前の会社は潰れてしまうし、お前の将来はどうなるんだい。お前はいつまでもおじいちゃんやおばあちゃんに援助してもらうことはできないんだよ。暁鴎ったら、本当に私達をえらいめに遭わせるんだから」

と言って暁歌の話にあっけにとられ、感激の涙を流した。

江暁暢は、

「このことは趙耀根に知らせるべきだわ。暁鴎は趙耀根と仲がよかったから、手持ちの財産から少し出してもらえば、暁鴎を救うことができるわ」

と言った。江暁歌は、

「自分の家のことは自分で何とかするわ。他人に頼ってどうするって言うの」

と言った。江暁暢は、

「わかったわ。それじゃ、お姉さんは会社を売ってしまえば？　でも、会社を売ったらどうするのかしら？　タクシーの運転手でもするの？　闇で古着の密貿易をやるの？　でなければ、靴磨きでもするか、チラシ配りでもするか、どのみち餓死することはないわ」

と皮肉たっぷりに言った。

江暁暢の話は江暁歌をとても悲しませた。彼女は妹を責めたくなかったし、妹の言っていることはかつて実際に起こったことで、将来また起こりうるかもしれない事実であった。彼女は自分がやはり脆弱すぎて、自分の運命をしっかり掴むことができないことを恨むだけだった。

そんな最中、思いがけず趙耀根がやって来た。

江暁暢が扉を開けると、曾ての姉さんの旦那が立って

いたので、
「趙社長よ」
と小躍りして叫んだ。
沈鳳宜はよろめきながら立ち上がって、両腕を広げて彼を迎えた。趙耀根はすぐに沈鳳宜を支え何度も慰めて言った。
「焦ってはいけません。暁鴎のことはよくわかりました」
沈鳳宜はかつて相手にしなかった昔の娘婿を前にして泣き出した。彼女は自分の息子（暁鴎）のことを思って泣いていたが、とても恥ずかしくて、趙耀根に顔向けができないと思った。
沈鳳宜は、お金や地位のある人に媚びたり、人を見下げたり、目先しか見ず度量が狭く辛辣だったりしてはいけないことが、今になってやっとわかった。彼女は、なりふり構わず趙耀根に泣きついた。
「可哀想に、暁歌は既に会社を売ってしまったけど、お金が集まっていないのよ」
江暁歌は、
「お母さん、そんなふうに言わないで。私には考えがあるわ。宗漢は既に深圳に到着していて、手だてを探りに行っているじゃないですか。ただ少しお金が足りないだけだから、みんなで集めれば何とかなるわ」
と言った。江暁暢は、
「姉さん、姉さんはいつも虚勢を張っているだけじゃない」
とたてついた。
趙耀根は沈鳳宜の手を取って腰掛けて言った。
「少し、話をさせてくれませんか」
沈鳳宜は、
「言い争うのはやめなさい。耀根がどんな話をしてくれるのか聞きましょう」
と、二人の娘を大声で叱りつけた。
「暁鴎の状況は既に全て理解しました。僕は宗漢と、たった今、電話で話をしたところです。株式市場は大きくリスクがありますが、これは彼が事業に失敗したからではありません。僕と暁鴎の関係はみんながわかっています。血を分けた兄弟ではないけれど、血を分けた兄弟以上のものがあります。だから、彼の借金は当然ながら、僕が工面しなければなりません」
江暁歌は、
「ありがとう。でもその必要はないと思うわ」
と言った。江暁暢は、
「姉さんは感情的になってはいけないわ。姉さんと趙社長との恩讐は、あなた方二人だけの問題よ。暁鴎と趙社長は、これまで兄弟という深い絆で結ばれていたのよ」
と言った。沈鳳宜は、
「そうだわ。暁歌、あなたの会社はできるなら廃業しない方が良いんでしょう。あなたは会社を経営するために、これまでありとあらゆる苦難をなめ尽くしてきたんでしょう。それに、あなたは百人の従業員の面倒を見なくてはいけないのよ。もし趙社長の懐具合が本当に良ければ、私達は先ずお金を借りて、将来返していけば良いんじゃないかしら」
と言った。江暁暢は、
「こうしたら良いと思うわ。趙社長にお金を工面してもらえるようにお願いしたいわ」
と言った。
沈鳳宜は、期待して江暁歌を見ていた。
「暁歌、このことをあなたが承諾してくれれば、私はやっと安心できるわ。そうでなければ、私は耀根のお金をもらうことができないわ。昔私はあなたに顔向けできないことをたくさんしてきたわ。私は今あなたに謝りたいの。私も今まで生きてきて、やっと多くのことがわかったの。私達親子は生活を共にして、30年あまりになるわ。実際血を分けた実の親子以上に親子だわ」
江暁歌は、
「お母さん、わかったわ。私達は趙社長からお金を借りることにするわ」
と涙を流しながら言葉を和らげて言った。
趙耀根は、
「わかった。これで問題は解決した。御馳走するから、気晴らしに食事にでも行こう。良いだろう」
とやっとホッとして言った。江暁歌は、
「人を助けることは火を消すことと同じように大切だわ。先ず仕事をしてください。あなたは宗漢の携帯電話の番号を知っています。深圳の状況について、あなたは直接宗漢としっかり連絡を取ってください」
と私情にとらわれずに言った。
趙耀根は仕方なく笑った。
江暁暢は、
「私は、趙社長が日一日と物わかりが良くなっていることに気がついたわ。趙社長は嘉児の実の父親よ。私は嘉児のおばさんよ。この親戚関係はいつまでも変わらず存在するわ。これからも、もっと趙社長のお世話にならなければいけないわ」
と言った。趙耀根は、
「こんなこと、取るに足りないことだよ」
と言った。

（つづく）

編集後記

最近「認知科学」という言葉をよく耳にするようになった。

これは1970年代から特にアメリカで進展したコンピューターを用いて人間の知的な働きをその応用面から分析・解析しようとする学問で、工学・医学・哲学・心理学などの学際的研究領域を示すものである。

すなわち脳の研究は自然科学の中の、物理・化学・数学・生物学など多様な分野に及んでおり、それはそのまま、哲学・心理学・芸術のような人文科学や情報科学、経済学、社会科学などにも大きな影響を与える学際的な学問となり、新しい知識を生み出すための基礎を形成するものとなっている。

そして一定の成果を挙げるためには、志と能力を有する人材集団が必要となる。

ひるがえって、まんじは当初、純文芸誌としてスタートし、其の後、次第に分野がひろがり現在は時代小説、現代小説、伝記、ノンフィクション、短歌、詩、漢詩、エッセイ、論文など多方面にわたる総合誌となっている。

これは言葉を変えれば、まんじ同人は極めて恵まれた環境下にあるということができる。特定の分野のみに従事した人物は、どんなに個人的に優秀であったとしても、あるいは優秀であればこそ、かえって専門バカに陥りやすいものである。よほど自制していないと裸の王様になってしまう。その実例は皆さんもテレビ放映、新聞記事等でよく耳にし目にするところである。

絶えず健全な批判にさらされながら執筆しているまんじ同人にはそのような恐れはない。今後共、お互いに切磋琢磨しながら歩んで行きたい。

（T・N）

まんじ第130号

平成25年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「私の在る処　世界は在る　心の花の咲く限り　光は消えない」

田寺怜華（たでられいか）画